

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

梶木 瑞生

1. 宗教団体と近代アジア

日本とアジアの関係を知るとはどのような行為なのだろうか。これまで近代日本とアジアの関係についての研究は数多くあったが、その大部分は政治や経済を中心としたものであった。従って明らかになったのは軍部や政府あるいは企業などの活動が主であった。しかしもともと日本とアジアの間には、政権や政府に関係なくさまざまな人々の交流があった。軍部や政府の活動に動かされながらも、こうした庶民の交流は軍部や政府の活動とは異質の部分を持っていた。今、この部分を押さえないければ、日本とアジアの交流史の全体像を見たことにはならないだろう。研究の多くは舞台が植民地に限定されていたと言っても良い。しかし植民地だけですべての問題が解決するとは言えない。植民地を越えてさまざまな交流があったことに目を向けなければならないだろう。

幕末の開国以後、多数の庶民がアジアに出かけていったが、その中に数多くの宗教人がいた。宗教人は主として在留邦人に布教したり、在留邦人の生活の世話をするなどその活動は活発であった。それと同時に知識人として彼等はさまざまなアジアの情報を日本にもたらした。その意味で彼等は日本とアジアの交流史の主要な担い手の一人であった。

個人としての宗教人の活動の後を、やがて宗教団体の組織活動が追いかけて行く。海外への組織的な布教活動を真宗系統では開教という（鹿児島や北海道を含む場合もある）。開教は布教活動を推し進めるとともに、布教に関係するさまざまな活動を展開する。それはしばしば軍部や政府の活動と結びつくためにどうしても軍部や政府の活動の影に隠れてしまう。しかしそれはどこまでも民間人の活動なのである。そして宗教団体は個人と政府の間を取り持ちながら、アジアとの交流を進めて行く。

開教は在留邦人への布教活動だけではなかった。一部では原住民向けに布教したり、学校を開いたり、医療機関を開設したり、また文化交流も行なうなど、その活動は多様であり広範であった。個人の活動と団体の活動をない混ぜにしたこの活動は、民間のレベルにおける直接の文化交流と言えるだろう。軍事や経済活動を通じたアジアとの関係だけでなく、近代のアジア各地で行われたこうした民間活動を見ることが、今後のアジアとの交流研究には必要だろう。

2. 「中外日報」紙と真溪涙骨

こうした活動をどのようにしたら把握することができるのであろうか。その一つの手段が著名な宗教紙である「中外日報」を探ることであろう。中外日報は本願寺系の宗教紙で記事の内容は本願寺系のものが多いが、しかし一宗派に限られているわけではなく、仏教の他宗派や神道、キリスト教にも及ぶかなり幅広いものがある。また国内の関係記事だけでなく、記事はアジアやアフリカ、アメリカなど全世界にわたっている。こうした点からも中外日報は日本の宗教団体とアジアの関係を知る上でも有効な資料である。

中外日報は1897年10月1日に、最初は京都で「教学報知」として発刊された。その後の1902年1月15日、第740号より「中外日報」と改題して続刊し、太平洋戦争をくぐり抜けて今日まで、既に25000号を越える発行を見ている。同紙は中外日報社から発行され、社長は日野西光善など数人が勤めたが、同紙の経営の中心は真溪涙骨（またにるいこつ）が担い、1953年に同社が株式会社に切り替わるまで涙骨の活動は続いた。切り替え後も、1956年4月14日の死去の日まで同社と関係が続いている。

涙骨は1869年1月27日、福井県敦賀市の浄土真宗本願寺派の興隆寺に、4人兄弟の長男として生まれた。しかし若い時代のことについては西本願寺立の普通教校に入学したことや博多の万行寺にいたなどの記録はあるが（「第二十五回 涙骨忌」1980.4）、そのほかの経歴や活動については涙骨自身が余り語りたがらなかったようで、はっきりしたことは分かっていない。（「人間 涙骨」1968.4）また本紙を発刊してからの活動についても、広範な人脈があったことは知られているが肝心なところは不明である。

涙骨の履歴ははっきりしないが、本紙を発刊した理由については教学報知に自ら筆を取った記事が幾つかあって、そこから多少の推測ができる。

その記事の中に「通信気脈の杜絶」（1898.7.19）という未完の論説がある。ここで涙骨はまず、「通信は社会に於ける血脈神経なり」と、通信気脈即ちマスコミュニケーションが社会を結び付けて「人の知識思想」を豊かにすることを強調している。しかしそれほど通信気脈が大切であるにもかかわらず、「仏教界に於ける通信気脈の発達せざること今猶殆んど暗黒中の消息に異らざるものあり」と仏教界の状況を憂えている。そして仏教界が「他の長に学び我が短を補ふなどは思ひも寄ら」ないのは、「是れ全く地方に於ける通信気脈の杜絶して自己以外の消息を知ること能はざるの原因に由らずんばあらざるなり」と言う。この仏教界の状況に対してキリスト教発行の新聞を見ると、「満面悉く各地の通信を以て充され而も懇切に率直に飾らず装はず事実の有の儘を報せるものの如し」とであると、各地のキリスト教徒が交流し合う姿を高く評価している。

この「各地の通信を以て充す」ということと、「事実の有の儘を報ずる」という涙骨のことは、それからの中外日報の基本的な方針になっている。まず中外日報の主要な部分は論説と

投書で構成されていた。そのために中央の記事よりも地方の読者の報告、それも小さな記事が紙面を占めることになった。そのために紙面全体の主張はかならずしも統一されているとはいえず、同一の紙面を異なる論調の記事が場所を分けるということも別に珍しくはなかった。このことは一貫性がないというよりは、中外へ持ち込まれる多様な投書の趣旨をそれぞれに生かして行こうとした結果であろうし、もう少し言うならば事実を有りのままにという方針を生かしたからである。

恐らく涙骨は仏教界の状況を憂えたために、キリスト教界に習って仏教徒間の交流を計り、仏教徒のまとまりを生み出すこと、そして暗黒の仏教界を革新することを考えたのであろう。こうして事実を交流させることが仏教界に必要であるという思いが、涙骨に中外日報紙の経営に乗り出させたのである。

3. 開教使とアジア情報

投書が中外の紙面作りに大きな意味を持っていたことは述べた通りである。特派員などを自由に派遣することができないこの時代には、特に国外のニュースを集める点においてこの投書は大きな意味を持っていた。涙骨がどのように投書を集めたのか分からないが、中外だけでなく教学報知の時期にも、初期のころから数多くの国外ニュース、特にアジア関係のニュースが掲載されていた。例えば南中国から「此頃清国福建省福州に日本語学校を創立し…本月初旬より開校したり」(1898.7.19)という便りがあり、シベリアからは「西伯利亞鉄道会議は…沿道各地方に二十三の学校を設け…建立費に二十五万留を支出せり」(1899.6.17)と連絡があり、朝鮮からは「大谷派本願寺釜山別院布教者小谷真了師は…一の貧民学校を設立し…将来有望なる布教の一助となるべし」(1901.1.29)などという記事が教学報知に掲載されている。これらの記事が大部分伝聞型で閉じられていることから考えると、記事は書簡から取られたことが推測できる。もちろん帰国者からの直接の伝聞もあるが、それほど多くの帰国者が中外に立ち寄ることもできないし、またそれだけでは毎号これほどの数のニュースを手に入れることは難しいだろう。やはり書簡がもっとも有効な手段である。

では誰が中外へ書簡を寄せたのだろうか。中外には特に浄土真宗関係のニュースが多いことを考えるならば、ニュースの送り手が真宗の僧侶あるいは信者であることは間違いない。またそれが記事を送るほど活動的で積極的に海外へ出ていった人ということならば、おそらく開教使(布教使)が主力となっていたのではないだろうか。開教使とは海外へ仏教布教に派遣された人々である。アジアへの開教が宗教界の人々に強く意識されたのは、日清戦争後の対韓国開教である。もっともこれは宗教布教というよりも日本の対韓国経営策の一環として着手されたものである。また日露戦争の時には従軍布教師として多数の僧侶が軍隊布教に従事していたが、そうした人々の中に、戦争中あるいは戦後現地人や在留邦人に対して開教に従事する人々が出た。このように開教使は日本の対外政策と密接な関係を持ち、そのために特にアジアの場合は、

対外政策の拡大に伴って開教使の活動区域が広がっていった。彼等の活動区域は、樺太（サハリン）、シベリアから、中国はチベットに至る全土、シンガポールなど東南アジア各地、さらに太平洋の島々、アメリカ大陸など日本人が進出したところすべてに及んでいた。それら各地に広がった人々の書簡が豊かな記事となったのは当然のことであろう。

その布教活動の多くは邦人相手であったが、邦人に混ざって現地人信者もいた。そして開教使の中には邦人だけでなく現地人布教にエネルギーを注ぐ人もいた。どちらにしてもこうした現地の人々や事情に直接接触する場にいただけに、彼等は詳しい現地情報を得ることになったのである。特にアジアにはたくさんの開教使が派遣されていた。その中には真宗本願寺派、大谷派などの真宗系統の開教使が数多くいたから、そうした状態は真宗寺院出身の涙骨にとって情報を得るに大変都合の良いものであったろう。また開教使の側から見るならば、宗教紙であっても世界の隅々まで送られてくる中外日報は、現地の中で孤立しがちであった開教使たちにとり、一つの心の拠り所であったであろう。それだけにまた開教使から中外に情報を送ることは、自分たちと日本との結び付きを強化することにもなった。

情報の内容は、「教況」と呼ばれる現地宗派の状態、布教や信者の問題、寺院の建設など宗教の問題が中心であるのは当然である。しかしそれだけではなく、そこに現地の政治や経済状況の報告や一般的な現地情報も付け加えられていた。その中で特にユニークなのは教育に関するレポートの多いことである。その理由は、布教の手段のひとつとして現地に学校などが設置され、その結果各地に多数の教育機関が作られたからである。日本の場合、教団として資金を集めて教育機関を建てることはあまりなく、多くは個人の力によって建てられていた。従って規模も小さく、種類も大部分は初等教育程度であった。しかし日本の半分公的な機関である満鉄や華北交通が中国に作ったものに比べてみると、その数は遥かに満鉄、華北交通を凌ぎ、建てられた地域も日本の占領地にとどまらず実に広範であった。そしてそれらは布教の成果を誇示することでもあったから、開教使通信の主題にもなったのである。

中外のアジア関連記事の大半は開教使が一人の目で見たと個人的なもので、それは客観的であるよりも主観性の強いところに特色がある。例えば厦門事件(1904.11)は台湾総督府と真宗の開教使が結び付いて起こしたもので、日本軍の中国上陸を画策して自らの寺院に放火し、中国人暴徒が放火したと称したものであった。この事件について中外日報は、事件を画策した開教使側に左袒した報道をするのみであった。厦門周辺には中国側からの情報があり、当時であっても日本人でそうした情報を手に入れることもできたはずである。しかしそうしたものは一切取り上げていない。これは客観的に周辺の情報を集めるという手法を取らずに、ただ事件の最中にいた開教使の情報だけを受入れたからである。

その一方で台湾の霧社事件(1930.10)に対して、総督府発表の報道を鵜呑みにせず「理蕃政策を立直して蕃人を人間並に取扱ふことである」(1931.1.6)という主張を載せる。この場合は、情報を送った開教使が日頃台湾の状況に接していて、総督府の発表を自分の目で確かめようとしていたからである。この場合も中外日報が客観的な報道を心掛けたのではなく、開教使とい

う個人の送り出した情報をそのままに紙面を埋めた結果なのである。それが一方では偏った報道となり、一方では客観的な報道となった。

4. アジアと日本の結びつき

歴史の発生以来、絶える事なく日本とアジアは交流を続けてきた。やがて日本各地にさまざまな政権が作られると、その政権も大陸の政権を目指して使節を派遣し交流するようになる。しかし政権のレベルの交流にも増して、民間のレベルの交流が多かったことには注目しなければならない。江戸時代には鎖国政策が取られたが、しかし交流が制限されたのはヨーロッパ諸国との関係であって、中国や朝鮮などとの交流は相変わらず盛んであった。日本の長い歴史のなかで唯一アジアとの交流が切れた時期は、恐らく太平洋戦争後に日本人の海外渡航が禁止された時だけであつたろう。日本は島国であったが、海で囲まれているということは海によって世界から遮られていることを意味するのではなく、船によって世界と深くつながっていることを意味している。国境によって海が区切られたのではなく、国境があるにもかかわらず人々が来往していたのがアジアの海の意味であろう。

近年「からゆきさん」などアジア渡航の売春婦の研究が盛んである。しかしアジア各地へ出かけて行ったのは売春婦だけではなかった。例えば幕末から明治の初年にロシアのウラジオストークや黒竜江沿岸にはたくさんの売春婦がいたといわれるが、それにも増してたくさんの日本人労働者が、例えばウラジオストークの建設に参加していたり、黒竜江の砂金採取にもかかわっていたのである。中外日報によれば、西本願寺の僧侶谷口常之は1900年からシベリア布教に関与していて、日露戦争までの短い期間に「ウラジオストック」、「ハバロフスク」、「イルクツク」、「ブラコヘセンスク」、「セア」などを布教して回ったという。しかしその布教は「在留法人の布教のみにして未だ外人伝道に手を附けるまでは進んで居ません」というようにすべて日本人相手であった。(1904.3.3 西比利亞に於ける西派布教の一斑)日本人相手であったということは別の言い方をすれば、恐らく幕末からであろう、この広範な地域にはたくさんの日本人が住んでいたことを示している。それに谷口だけでなく、当時このほかに清水松月、阿部妙道などの布教師もいたというから、(1904.3.4 西伯利亞の開教 上)日本の政治権力や軍事力がシベリアに及ぶ以前に、布教対象の数多くの日本の民間人が生活をしていたということがわかる。

ほぼ同じ頃のことであるが、西本願寺への佐々木千重からの書簡によれば、シンガポールにも布教所があり、その布教所も支所ができるほどの教勢を持っていた。またその布教所の教育部の事業として、「教誨の傍ら日々六時間づつ四十餘名の邦人、支那人等の男女の子弟を預り」、「昼夜忙殺する計」であったという。(1901.5.30 馬來半島の教界 続)この場合、布教の対象がすべて日本人ではないが、記事の前後から相当の日本人がいたこと、しかも開教使はじめ日本人は現地に溶け込んだ生活をしていたことがわかる。

このように日本人庶民は北東アジアから東アジア、東南アジア、南アジアと広範に広がっていた。この日本人庶民の広がりには「南進論」、「北進論」といわれる政治的経済的発想に基づくものではなく、有史以前からの、長期にわたってアジアの海に作られてきた交流ルートに乗って、自然に展開していったものであって、例え貧しくとも自らの意思で各地へ出かけた人々であった。

アジアとの結び付きは、軍隊のレベルから民間に至るまで、幾つものレベルを通して行われていた。当然その中には布教者もいた。明治以降の日本の布教者たちは欧米ミッションの活動を知って、日本の宗派も海外で布教活動をすべきであると考えられるようになった。ただそれは純粹に宗派の信条に従って行われたというよりも、先行する日本の軍事的進出に付随して行われることが多かった。その点でいえば、日本の場合は鉄砲の後に数珠や十字架が付いていったのである。

中外日報が活動した時期は、こうした形で日本の宗派がアジア各地へ展開していった時であった。もちろん信仰に従ってアジア布教に出かけた人々も数多くいたことも間違いない。しかしその出かけた先が植民地朝鮮であったり、日本が強引に占領した満洲国であったりというように、当時の宗派の海外布教活動は日本の軍事的進出と無関係では有り得なかった。中外日報から、こうした軍事的活動と密接に結び付いた宗派の活動の姿を細かに読み取ることができる。また初期の中外日報は、アジア各地の宗教を中心とした状況を繰り返し掲載していた。しかし日中戦争が激化する時期には、アジア各地の情報記事が減って、その代わりに紙面を埋めたのはアジア各地で行われた日本の宗派の活動報告であった。このように戦時中の中外日報の紙面は、アジアから日本を読み取る記事よりも、日本を中心としてアジアを見る記事が多くなって行った。

5. 日本の宗教活動とアジア

アジアに出かけて行った民間人の間に宗教者が数多くいたことは、先に例を引いたとおりである。しかし彼等日本の宗教者は、ヨーロッパの宗教者が積極的に現地の住民に布教したのに比べてみると現地住民に布教することは少なく、そのことで内地の関係者からしばしば非難を受けたものである。だが日本の宗教者の活動が在留邦人への布教を中心とするものであったことは、宗教者が中心になって在留邦人の生活をまとめることにもなり、在留邦人の社会の中心として重要な役目を果たしていたとも言える。

もっとも現地人に布教することが全くなかったわけではなく、1890年代の真宗大谷派の韓国開教は、本来の目的はともあれ、韓国人への布教を狙いとするものであった。しかしその後の布教活動全体を見ると、現地人布教活動はほそぼそと展開されたに過ぎなかった。その理由のひとつはアジア開教に限らず海外開教が、多くは僧侶個人の力で展開されていて、宗派が全面的に支援することに積極的であったとはかならずしも言えなかったからである。例えば一部の

宗派では海外開教の重要さを認めて海外開教要員を養成したりしたが、実際には養成人数も少なく、養成そのものも長続きしなかった。また金銭的な側面でも、欧米のミッションのような豊かな援助を得られた場合は少なく、渡航費でさえも片道分しかなかったというように支援が不十分な場合が多かった。

ところが1930年前後から、軍部や政府からの説得や要請を受けると、宗派として積極的に現地人を目標とする布教を始めるようになる。しかもこれは仏教各派だけではなく、キリスト教諸派、神道系諸派、その他多数の日本の宗派が参加し、アジア全域にわたって活動を展開して行った。

こうしてアジア各地に多数の日本の神社、寺院、教会が作られていった。神社は占領地のシンボルとして、満洲や朝鮮などの植民地やそれ以外のアジアの諸都市にも建てられていった。そして満洲や朝鮮、台湾などでは現地人、特に学生に対して神社への参拝が日常的に強制されていった。また寺院や教会へ参拝することを強制しないまでも、寺院や教会は占領地の人々を日本側に引きつけるための宣撫工作の拠点となり、そのために軍事活動と密接な関係を持つものが多くなっていった。その宣撫工作のためには、布教だけでなく現地の人々を引きつけるさまざまな事業、即ち病院や学校、孤児院などが設立された。こうして日本軍の中国大陸進出に従って、次々と各地に布教所とその付設事業が広がっていった。この時作られた付設事業の内、例えば日語学校などの規模は小さいものが多かったが、戦争の拡大に従って規模の大きな一般学校も作られるようになった。その中には中国側の学校や建物を「譲り受けて」設置されるような、まさに日本の軍事力を背景とした学校もあった。また北京に作られた覚生女学校のように、日本の軍部、宗教団体そして中国側の協力によって作られたものもあった。こうして1930年代から日本の敗戦までは、多数の宗派が世界に、特にアジアへ進出したのであった。その中には一農民として中国に渡り、中国人布教に従事した人もいたが、その多くは宗教的な必要から布教に出たというよりは、軍、政府の圧力に合わせて否応なく進出し、宣撫を兼ねた布教に従事したのである。

日本の開教使は現地のことばができないとよく言われた。その反動もあったのだろうか、逆に日本の宗教関係者はしばしば現地人への日本語教育に力を入れる。アジアの各地に作られた布教所も付設施設として日語学校を作ることが多かった。そして、日本語ができるようになると、その子どもたちを日本へ送って日本で教育をしようとした。このことは欧米のミッションの場合も同じであった。またミッションだけではなく、軍部が言語教育に力を入れて多数の学校を設立し、本国のことばを普及するというのも、日本の占領地だけでなく、アメリカの植民地でも見られたものである。その意味で日本の宗教団体は日本独自の道を歩いていたわけではなく、世界の植民地のルールを歩いていたと言うことができる。中外日報を通して、こうした日本と世界の関係も読み取ることができるのである。

6. 中外日報のアジア記事

中外日報のアジア記事はアジア各地に散った開教使や布教使たちの通信に頼っていた。個人的な通信に頼った記事はそれだけ主観的な記事になっていたが、同時に普通では手に入らない大変細かいニュースになったりユニークな視点を作り出していた。一般に国内にあった宗派の本山などは、日本内地の視点だけでものを考えがちであったのに対して、自分の目で現地を見た開教使たちは、しだいにアジアの事実を多様な視点で確認することを身に付けていった。そうした意味で中外日報の紙面は日中戦争が進むに従って、内地からの視点とアジアからの視点が交錯するようになる。例えば1934年2月の中外日報には「本社主催、日本精神に関する座談会」が延々と連載される。その一方で、台湾にいた米沢尚の「台湾統治の危機」といった植民地批判の記事が並んで掲載されている。

中外日報におけるこの二つの論議は、読者の方からすれば矛盾した議論が掲載されていると言うよりも、中外日報という統一された世界に展開された議論であった。言うならば一人の日本人の中にある二つの視点を意味していたのではないだろうか。

中外日報の諸論には海外布教批判もあれば植民地批判もある。しかしその批判は、開教使や布教使として植民地や占領地へ出かけ、直接布教に従事して初めて生まれてきた。開教使であることは植民地支配の片棒を担ぐことであるが、一方で植民地支配の矛盾を知る視点も植民地にいたから生まれてきたのである。片方の視点があって、初めてもう一つの視点が成り立っているとも言えよう。だから二つの視点の一方を批判することは易しいが、今必要なのは批判ではなく、どのような論理で二つの視点が結びついているかを知ることであろう。その意味でも本紙は豊かな内容を持っているのである。

記事目録について

中外日報は、以上に述べたように、日本の宗教とアジアの関係を知るためには大変有効な資料である。ただ、中外日報を使うといってもその中から問題を探るのは簡単ではない。宗教紙である中外日報には多様な宗教関係記事が掲載されていて、アジア関係記事はその中に埋もれていると言ってもよいだろう。だから、さしあたり中外日報からアジア関係記事を取り出すことが必要である。この記事目録はそのために作られたものである。

この記事目録では、中外日報よりアジア関係の記事を選び出して、そのタイトルを時代順に並べた。時代の範囲は創刊より1945年8月までとした。1945年8月の日本の敗戦までとしたのは、差し当たりそれ以前と以後ではアジアとの関係の在り方が異なり始めたと考えたからである。しかし旧来のアジア関係が1945年8月ですべて終了したというのではないということは確認して欲しい。アジアという世界の中で時代区分を設定するならば、区分はもう少し後になる

はずである。

アジアの範囲についてはいろいろと議論のあるところであるが、暫定的に次のようにした。東及び南の限界は、かつて「内南洋」、「外南洋」と言われた範囲までとし、ハワイ諸島やオーストラリアは含まないことにした。西は原則として中央アジア、トルコ、アラビアまでとして、事情によって一部アフリカの記事も採用した。従ってヨーロッパロシアやモスクワ周辺関係の記事は採用していない。

何をアジア関係記事とするかも問題の多いところである。しかしここでは原則としてアジアに関する論議やレポートはできる限り採用した。レポートの一部にアジアに関する議論が含まれているものは採用しないか、全体を取らずに一部だけを採用した。アジアといっても日本だけのものは採用していない。しかし在日朝鮮人に関しては植民地の問題とも絡むのでアジア関係記事として採用した。その他判断に苦しむ場合も多く、一般には編者の主観によって記事の採用不採用を決定したことはお断りしておく。

本稿に使用したものは光楽堂制作のマイクロフィルム版「中外日報」である。同版には収録されていないものや撮影ミスによって判読不可能な部分もあるが、原紙を閲覧できないためにすべてを同版に拠った。誤字脱字や字体、仮名遣い、文章の切れ目などは原紙のままにした。

教学報知 1897.10.1創刊

1897. 11. 1 軍隊布教に就て
 12. 15 支那布教に就て法主に面談を求む
 12. 25 台湾信徒の帰入
 12. 25 内地雑居準備論 小栗憲一
 1898. 1. 5 教家の急務 緒論 閃々處士
 1. 15 教家の急務 本論 閃々處士
 1. 15 日蓮宗の宗教視察
 1. 15 内地雑居準備論 小栗憲一投
 1. 25 教家の急務 本論(続き) 閃々處士
 1. 25 西伯利居住の本邦人
 1. 25 内地雑居準備論(三) 小栗憲一
 2. 5 教家の急務 本論(続き) 閃々處士
 2. 5 支那布教の困難
 2. 5 台湾人の信仰
 2. 15 韓僧の来朝
 2. 15 台湾島の布教
 2. 15 清国の布教
 2. 15 台湾の耶蘇教
 2. 25 朝鮮布教の方針
 2. 25 奥村五百子
 3. 5 仁川の日蓮宗教会所
 3. 15 舟山島と我邦との関係
 3. 25 韓国留学生の現況
 3. 25 大谷派の韓国布教
 3. 25 蕃人来京
 4. 5 台湾に於ける西派の教学
 4. 5 海外宗教の視察 笙川
 4. 5 印度人の入学
 4. 15 支那内地布教
 4. 15 台湾の信徒
 4. 15 遠島僧侶の参詣
 4. 15 清国基督信徒の総数
 4. 23 支那布教に就て
 4. 23 朝鮮人の参列
 4. 23 台湾人の口吟
 4. 25 清韓布教の前途
 4. 29 清国我要求を諾す
 4. 29 海外留学生
 4. 29 朝鮮教信
 5. 1 曹洞宗の台湾布教
 5. 1 清国への要求
 5. 1 奥村五百子
 5. 3 李鴻章の遭難
 5. 9 清国償金
 5. 9 威海衛撤兵の期限
 5. 11 印度王族の来朝
 5. 11 清帝御膳の増費
 5. 11 露国の炭坑発見
 5. 11 王岱修一行の帰台
 5. 13 清国暴徒領事館を焼く
 5. 15 清韓布教の時機
 5. 15 ダンマバラ氏との消息
 5. 15 清国に関する統計

同国に於ける日本主義の新聞雑誌
 同国に於ける日本主義の学序
 同国に関する政社

5. 15 印度の高僧
 5. 15 漢城新報
 5. 17 ラマバイ女史の事業
 5. 21 大谷派の支那布教
 5. 21 亜細亜協会
 5. 21 海外布教と石川舜台
 5. 21 大谷派の支那布教
 5. 21 台湾の遊学女子
 5. 23 支那に於ける女子高等学校新設之計画
 5. 25 外国留学生の増員
 5. 29 海外宗教の視察
 5. 29 開教事務局長
 6. 1 清国宮廷に於ける聖書
 6. 1 英艦の増遣
 6. 1 日本留学生の選抜
 6. 1 亜非利如の基督教伝導
 6. 1 朝鮮僧の専門修行
 6. 5 朝鮮に於ける布教事業
 6. 5 清国学生
 6. 5 台湾に祝典を行はんとす
 6. 5 台湾の司法制度
 6. 9 支那布教私見 山哲
 6. 9 台湾布教使襲撃せらる
 6. 13 支那布教私見 山哲
 6. 13 清国の譲与
 6. 13 台湾の公娼許可
 6. 15 西比利亞鉄道竣成期
 6. 15 本邦留学清国学生
 6. 19 支那布教私見 山哲
 6. 23 支那布教私見 山哲
 6. 23 清帝 西学奨励の上諭
 6. 23 台湾布教の監督
 6. 25 支那布教私見 山哲
 6. 29 韓国に於ける仏教会
 7. 1 西比利亞の学校及び寺院
 7. 3 支那布教私見 山哲
 7. 3 海外出稼の醜業婦
 7. 5 朴泳孝氏
 7. 9 仁川に於ける大谷派
 7. 11 韓地教信
 7. 15 北方蒙氏
 7. 15 北清婦客談
 7. 15 朴泳孝等の帰国
 7. 15 台人の京都談
 7. 19 清国に於ける日本語学校
 7. 21 台湾に狙撃せられし僧
 7. 21 英清語学校
 7. 21 在仁川本邦人戸口数
 7. 21 在元山本邦人戸口数
 7. 23 台湾救老会
 7. 25 清国皇帝の誕辰
 7. 25 清国留学生と仏教徒
 7. 25 清国近事二三

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1898. 7. 25 支那に於ける霧独米
 7. 25 土耳其皇妹奪ひ去らる
 7. 27 北方蒙氏の渡清
 7. 27 上海通信
 7. 29 上海一揆の原因
 7. 29 西伯利鉄道敷設費及付帯企業費
 8. 1 清国大学の組織
 8. 3 満清に溢るる日本を見よの声
 8. 3 海外布教
 8. 5 支那の新活動
 8. 5 張之洞氏の勸学篇
 8. 7 印度人来学の理由
 8. 13 外国人宣教保護に関する上諭
 8. 15 清国の留学生
 8. 15 台南の国語伝習の効果
 8. 17 朝鮮宗教視察
 8. 17 朝鮮布教の困難
 8. 17 印度の仏跡
 8. 19 日宗海外宣教会
 8. 21 海外宗教視察員の帰京
 8. 23 台湾の記 在台北 山哲生
 8. 23 在鎮南浦及平壤本邦人戸口数
 8. 23 在釜山本邦人戸口数
 8. 23 在仁川本邦人戸口数
 8. 25 台北地方生蕃の信仰
 8. 25 台南地方の布教
 8. 27 台湾布教監督長の任命
 9. 3 朝鮮の弥勒寺
 9. 5 二連枝の手箱
 9. 5 支那人伊勢の大廟に泣く
 9. 9 特派答礼使
 9. 9 谷了然氏の渡清
 9. 13 福州の日本学校
 9. 15 クリート島の事変
 9. 19 厦門の仏教
 9. 19 日本人異境に邂逅す
 9. 21 清国布教
 9. 21 暹羅仏教が其社会に於る関係
 9. 27 清国の政変
 8. 29 清兵教練に関する日清交渉
 8. 29 本多庸一氏の渡韓
 9. 19 朝鮮宗教の現況
 10. 1 稲垣辨理公使の暹羅仏教談
 10. 1 在西伯利日本文庫設立計画
 10. 3 稲垣辨理公使の暹羅仏教談(承前)
 10. 5 暹羅仏教の状況
 10. 5 台湾神社の建営
 10. 9 南台日記 在恒春 山哲
 10. 9 グルマバラ氏の書簡
 10. 11 暹羅の仏教
 10. 11 南台日記(続) 在恒春 山哲
 10. 13 大谷派支那留学生
 10. 13 大谷派朝鮮答礼使
 10. 17 支那留学生
 10. 27 グルマバラ氏の大学校
 10. 29 台南に於ける各宗の布教
 11. 3 大谷派の支那布教
 11. 7 西比利亚宗教概見
 11. 11 西比利亚宗教概見
 11. 11 台湾の大谷派信徒
 11. 15 西比利亚宗教概見 (三)
 11. 21 印度僧チャセージ氏
 11. 25 台湾に於ける曹洞宗
 11. 25 台湾に於ける日蓮宗教会堂の新築
 11. 27 厦門に於ける大谷派連枝
 11. 29 西比利亚宗教概見 (四)
 12. 7 台湾の宗教界
 12. 11 印度の断食
 12. 17 支那布教の現況一斑
 12. 19 厦門 福州の我教線と語学校
 12. 21 西派新法主の海外布教
 1899. 1. 7 北京大学と基督教信徒
 1. 19 韓国布教と尹雄烈氏
 1. 19 能淨院の書簡
 1. 21 能淨院の書簡(続)
 1. 27 能淨院の書簡(続)
 1. 29 蕃人伝道
 2. 5 氏布教の実績
 2. 5 澎湖島忠死者紀念碑
 2. 11 台湾土文の教会衆章
 2. 11 清人の俳句
 2. 13 支那に於ける大谷派の学堂
 2. 19 清国に於ける耶蘇教伝道
 2. 25 武田篤初氏よりの来信
 2. 25 奥村五百子
 2. 25 大谷派の支那布教師
 3. 1 本願寺の清国布教
 3. 13 上海に於ける西派新法主
 3. 13 大谷派の千島布教
 3. 13 台湾人の迷信
 4. 3 台北の宗教
 4. 3 アラビバシヤ子来んとす
 4. 9 山東省の開教
 4. 9 日文学堂
 4. 15 竣州事件の事済
 4. 21 色丹土人の教育
 4. 23 海外布教
 4. 27 清国回教徒の乱
 4. 27 江景の騷擾に就て
 4. 27 蒙古の仏像
 4. 27 西藏仏教視察員能美氏の書状
 4. 29 北方心泉師の談話
 4. 29 澎湖島忠死者追悼碑除幕式祭典
 4. 29 杭州本願寺公館内東亜学堂
 5. 7 支那宗教論
 5. 9 清国布教と病院の設立
 5. 9 語学校と布教
 5. 9 海外布教使の精選
 5. 9 支那宗教談と武田篤初師
 5. 13 障州事件に対する石川鑿氏の報告書
 5. 15 薩哈連島と北海道
 5. 17 喇嘛と西本願寺

1899. 5. 19 台湾忠魂祠堂起工式
 5. 21 韓国の宗教視察
 5. 21 厦門の日本人
 5. 23 清国に於ける加特力教
 5. 23 東本願寺清国布教の情况
 5. 23 台北感化保護院の創立
 5. 23 台北の感化院
 5. 25 台中の招魂祭
 5. 27 台湾土人の迷信
 5. 29 支那に於ける基督教の勃興
 5. 29 台湾人の迷信
 5. 29 參謀次長の謝状
 6. 1 韓国の人口
 6. 7 台湾の教育と仏教徒
 6. 9 支那に於ける列強の勢力
 6. 9 蒙古地方の布教約策
 6. 11 台湾の鬼見
 6. 13 韓国木浦開教に対する鄙見 在木浦
 西山覚流
 6. 15 台湾別院敷地購入破約
 6. 15 韓国木浦開教に対する鄙見 在木浦
 西山覚流
 6. 15 台湾の御幣担
 6. 17 西伯利亞鉄道沿線村の学校及び寺院
 6. 21 清国に於ける日本僧侶
 6. 25 海外布教に就ての内訓
 6. 25 福建省に於ける我僧侶
 6. 27 上海基督青年会
 6. 27 露国の東洋学校
 6. 29 清国布教費増加案
 6. 29 西本願寺と釜山
 7. 1 韓国布教一斑
 7. 5 日文学堂と三天竺寺
 7. 7 支那人洋妾の生国
 7. 9 土人と月蝕
 7. 9 土人の頑迷
 7. 11 色丹土人の宗教
 7. 11 支那人犯罪の種類
 7. 13 台中の二秀才
 7. 17 清国留学生
 7. 19 上海の日本医学校
 7. 23 清国湖北自強学堂
 7. 23 韓国布教一斑 在釜山 松原因南
 7. 25 支那学生と西本願寺
 7. 25 韓国布教一斑(統) 在釜山 松原因
 南
 7. 25 台湾通信
 7. 27 南海の醜報
 7. 27 留学清人の二少年
 7. 27 支那人の宗教思想
 8. 1 清国に於ける布教如何
 8. 5 厦門の宗教
 8. 9 清人の入夫願
 8. 15 亞細亞の将来
 8. 25 廣東に於る新旧兩教派の衝突
 8. 27 厦門に於けるの布教
 9. 1 清人の帰属
 9. 3 比律賓群島の伝道
 9. 13 厦門の教況
 9. 17 蘇州道台よりの贈品
 9. 29 印度の魔術師
 9. 29 李峻鎔と大谷法主
 10. 25 印度大菩提会の現況
 11. 7 北清滿洲伝道の進歩
 11. 11 清国教譚 在清国 思月生投
 11. 11 臨濟宗の清国布教
 11. 13 清国教譚(統) 在清国 思月生投
 11. 17 鷄林の教影
 11. 27 天津地方宗教視察報告
 12. 25 清国の秀才泉岳寺の寺畔に泣く
 1900. 3. 3 清国人帰敬式を受く
 4. 1 露西亞寺院を朝鮮に建てんとす
 4. 3 台湾の宗教(一基督教者の談)
 4. 7 台湾の宗教(統)
 4. 13 台湾の宗教
 5. 3 台湾司教の出発
 5. 17 印度巡視僧の帰朝
 5. 17 支那高僧旧跡巡拝日記
 6. 1 台湾寺建立の議
 6. 1 台湾寺建立予算
 6. 11 露国寺院の焚燒
 6. 13 清国の教案
 6. 13 北京廓外の露国寺院
 6. 15 西伯利亞に於ける本願寺の一光
 6. 17 天主教と排外思想
 6. 17 南清の基督教排斥
 6. 17 支那に於ける仏教と天主教
 6. 19 近く隣邦に鑑みよ
 6. 19 北京現状
 6. 19 北京城内の殺害
 6. 21 清国碧雲寺の灯籠
 6. 27 清国の変乱と宗教団隊 「某清国帰客
 談」
 6. 29 海外布教
 6. 29 印度飢饉救済金募集
 6. 29 清国の変乱と宗教団隊(承前)
 6. 29 朝鮮の動搖
 7. 1 錫蘭仏徒の近状
 7. 1 宣教師佐世保に集る
 7. 1 清国の変乱と宗教団隊(承前)
 7. 3 清国の変乱と宗教団隊(承前)
 7. 7 支那宣教師の来朝
 7. 7 ならずや
 7. 7 清国宣教会創立
 7. 7 在清布教師の消息
 7. 7 旭僧正渡天の延期
 7. 7 印度大飢饉の慘状
 7. 9 祖廟破壊を難す(新仏教)記者
 7. 11 印度の大飢饉
 7. 11 印度飢饉救助演説会
 7. 13 暹羅に於ける奉迎式
 7. 15 暹羅に於ける模様

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1900. 7. 17 宣教師虐殺せらる
 7. 17 巨利訪問及文部大臣迎晩餐会
 7. 17 暹王謁見
 7. 19 公使来京
 7. 19 暹羅公使へ贈与
 7. 19 暹羅に於ける奉迎の実況 (続)
 7. 19 牧師婦人の自害
 7. 21 南条博士の暹羅談
 8. 1 印度飢饉救助と基督教徒
 8. 3 暹羅に於ける日本寺
 8. 5 印度飢饉救助金
 8. 5 印度飢民の増加
 8. 11 暹羅仏教の談話
 8. 11 義和団匪の大気炎
 8. 17 暹羅国王よりの御寄贈品
 8. 21 清国事件と基督教
 8. 21 奥村五百子
 9. 1 厦門本願寺焼払に就て
 9. 1 厦門本願寺焼払
 9. 3 厦門本願寺焼払に就て (続)
 9. 3 外国兵の蛮行
 9. 3 仏教と教匪 (日本の仏教家に反省を
 求む)
 9. 5 厦門の暴動に就き
 9. 5 厦門の暴動の原因
 9. 5 厦門説教場
 9. 5 軍隊慰問
 9. 7 暹羅の話
 9. 7 本田文雄氏の談
 9. 7 支那禍変と宗教
 9. 7 支那事変に就て
 9. 9 東本願寺と朝鮮布教
 9. 9 支那事変に就て (続)
 9. 9 伝道と文明
 9. 10 厦門事変に就ての上申
 9. 10 耶蘇教徒の慰問使
 9. 13 暹羅問題の解釈 (一) (同教国民に対
 する相憐)
 9. 13 厦門布教使へ訓示
 9. 15 東本願寺の提議 (上海宗教会議開か
 れんとす)
 9. 15 厦門事件の報告
 9. 15 宣教師等の決議
 9. 17 暹羅問題の解釈 (二)
 9. 17 英国宣教師の支那処分意見
 9. 17 米国宣教師談
 9. 17 韓国民と東本願寺
 9. 21 清国耶蘇教徒の窮状
 9. 21 厦門別院の焼払はれたる原因
 9. 21 神戸在留清国人の見舞上京
 9. 25 広西省貴県の教案
 9. 25 朝鮮行の連枝
 9. 25 暹羅の近信
 9. 25 福建布教顛末概要 本多文雄稿
 9. 27 奉迎使一行の失態
 9. 27 暹羅僧の風儀
 9. 29 奉迎使失態事実の取調
 9. 29 四千余年前の記録発見さる
 10. 1 北京城中避難の教民
 10. 1 膂力の仏教
 10. 1 福建布教顛末概要 (続)
 10. 3 福建布教概要 (続)
 10. 5 暹羅電話 (仏骨奉迎の奇課集)
 10. 7 支那問題に対する日本仏教徒の提議
 10. 7 暹羅電話 (仏骨奉迎の奇談集) 其二
 10. 7 西太后宣教師を殺す
 10. 9 猶薫録
 10. 13 暹羅問題の解釈 (五)
 10. 17 暹羅問題の解釈 (六)
 10. 17 支那と宣教師
 10. 19 支那伝道問題
 10. 19 露西亞哲人の支那論
 10. 19 エスキモー族と菩提会
 10. 19 厦門本願寺焼失事件
 10. 21 清国司教恵日院大勝信師
 10. 21 能浄院師の上京
 10. 21 釜山に於ける東本願寺連枝一行
 10. 21 遺清僧の交代
 11. 5 朝鮮に於ける独立教会
 11. 7 暹羅国への御親書
 11. 9 西比利の本願寺 (其由来)
 11. 11 支那宣教師とブランド氏
 11. 11 北京軍隊布教使
 11. 15 支那に於ける宣教
 11. 15 浄土宗の海外布教
 11. 17 東亜同文会の僧侶招請
 11. 19 仏骨後日の物語
 11. 21 嗚呼大責務
 11. 21 伝道事業と支那問題
 11. 23 清朝の墳墓破壊
 11. 25 喇嘛經典
 11. 27 清帝に答へたる独帝の親書
 11. 29 対清仏教徒の事務所
 11. 29 韓国鎮南浦
 11. 29 台湾協会の仏教談
 12. 3 李鴻章と陳慕久二郎
 12. 7 暹王の仏教図書館設立
 12. 11 新漢学と新仏学
 12. 11 教案賠償
 12. 11 仁川に於ける慈善教育衛生三会
 12. 13 新漢学と新仏学 (続)
 1901. 1. 1 回々教徒の増加
 1. 7 劉坤一氏と仏教徒
 1. 9 天津耶蘇教伝道の悔悟
 1. 11 西藏に於ける日本僧侶の来翰
 1. 11 韓京の一椿事
 1. 11 清国と基督教伝道師の将来
 1. 15 劉坤一氏の贈品
 1. 15 支那のコロンブス
 1. 17 回教徒の暴戻
 1. 17 在津宣教師の不埒
 1. 19 西藏と露国 (西藏法主の使節)

- | | | | |
|-------------|--------------------|-------|--------------|
| 1901. 1. 21 | 東亜仏教会発起人集会 | 7. 15 | 喇嘛教貫と大谷派谷法主 |
| 1. 25 | 東亜仏教会と帝国東洋学会 | 7. 15 | 喇嘛教貫主の一行 |
| 1. 27 | 奥村女史の気炎 | 7. 15 | 北京籠城戦死者の法会 |
| 1. 29 | 暹羅公使と曹洞宗大学林 | 7. 15 | 清国学生東本願寺に来る |
| 1. 29 | 外国伝道会社の損害要償 | 7. 15 | 喇嘛教貫主の米朝に就て |
| 2. 11 | 日露の暗雲 | 7. 16 | 喇嘛教 |
| 2. 13 | 韓国帝室の下賜金 | 7. 18 | 喇嘛教貫と西本願寺 |
| 2. 15 | 台湾布教現況 | 7. 19 | 露国西藏問題を提議す |
| 2. 17 | 東亜仏教会の奉告文 | 7. 19 | 喇嘛教(統) |
| 2. 19 | 東亜仏教会の提要 | 7. 20 | 露国と西藏 |
| 2. 21 | 東亜仏教会の提要(統) | 7. 20 | 喇嘛教貫と西本願寺 |
| 2. 25 | 清国福州の黄檗山 岳南 | 7. 20 | 喇嘛教貫の東上 |
| 2. 27 | 仏教徒の東亜伝道 | 7. 20 | 北京籠城戦死者追弔会 |
| 2. 27 | 清国福州の黄檗山(統) | 7. 20 | 喇嘛教(統) |
| 3. 1 | 講和条件と宣教師意見 | 7. 21 | 露国と西藏 |
| 3. 9 | 露国の通牒 | 7. 21 | 喇嘛教貫の東上 |
| 3. 9 | 基督教国民の虐殺 | 7. 21 | 東亜仏教会と喇嘛貫主 |
| 3. 13 | 清国宣教師の被害 | 7. 21 | 喇嘛教貫と西本願寺 |
| 3. 13 | 宣教師と政府 | 7. 21 | 喇嘛教(統) |
| 3. 17 | 伝道師の死傷数 | 7. 21 | 支那に於ける猶太教 |
| 3. 19 | 支那奇談 | 7. 23 | 阿嘉貫主の米朝 |
| 3. 21 | 台湾の俗 | 7. 23 | ラマ教貫主の大廟参拝 |
| 3. 21 | 朝鮮人の宗教心 | 7. 23 | 喇嘛教貫と縮刷藏経 |
| 3. 23 | 東亜仏教会の事務所移転と同婦人部 | 7. 23 | 喇嘛貫主 |
| 3. 25 | 東亜仏教会の事務拡張 | 7. 23 | 支那に於ける天主教 |
| 3. 25 | 宣教師分捕問題 | 7. 23 | 喇嘛教(統) |
| 4. 7 | 印度人の頭巾 | 7. 23 | 喇嘛教貫主への贈品 |
| 4. 19 | 清国領事本願寺に詣す | 7. 24 | 西藏使節の目的 |
| 4. 19 | 清国人婦敬式を受く | 7. 24 | 喇嘛教の呪文 |
| 4. 20 | 海外布教の好機 | 7. 24 | 基隆説教所 |
| 4. 28 | 清僧の演説 | 7. 25 | 喇嘛教貫主の談話 |
| 5. 3 | 李鴻章外教徒に訴ふ | 7. 25 | 隈伯の喇嘛教貫招待 |
| 5. 10 | 朝鮮の学生 | 7. 26 | 阿嘉貫主の禪師号 |
| 5. 15 | アイヌ土人の葬儀と信仰 | 7. 28 | 喇嘛貫主の問答 |
| 5. 15 | 千島国後島の法況 | 7. 28 | 釜山教況 |
| 5. 16 | 印度研究会 | 7. 29 | 喇嘛貫主と宮内省 |
| 5. 18 | 韓国学生の米京 | 7. 29 | 喇嘛貫主歓迎会彙報 |
| 5. 19 | 鷄林の教界(在京城 鶴谷誠隆) | 7. 29 | 喇嘛教講演会の見合 |
| 5. 20 | 杭州に於ける東本願寺の布教 | 7. 29 | 東京に於ける喇嘛貫主 |
| 5. 23 | 鷄林の教界(統)(在京城 鶴谷誠隆) | 7. 29 | 喇嘛教貫主 |
| 5. 28 | 馬來半島の教況 | 7. 30 | 喇嘛貫主の参内 |
| 5. 30 | 中国に於ける組合教会 | 7. 30 | 暹羅公使 |
| 5. 30 | 馬來半島の教界(統) | 7. 31 | 入蔵者の為に憤を漏らす |
| 6. 8 | 釜山の教況一斑 | 8. 1 | 喇嘛貫主出発の延引 |
| 6. 11 | 千島の蝦夷桜 | 8. 1 | 喇嘛貫主と其礼遇法 |
| 6. 13 | 回々教師の上海着 | 8. 3 | 喇嘛貫主 |
| 6. 13 | 色丹島の近事 | 8. 3 | 阿嘉貫主と藤波一如氏 |
| 6. 21 | 上海回教徒と露新聞 | 8. 5 | 暹羅王の還幸 |
| 6. 24 | 台北別院の新制度 | 8. 6 | 支那の東文学堂 |
| 6. 28 | 奥村円心氏の談話 | 8. 6 | 支那の滬文書院 |
| 7. 3 | 松本白華師 | 8. 6 | 露国に於ける喇嘛教 |
| 7. 4 | 開教地と其取締 | 8. 8 | 印度の習慣寡婦の焚死 |
| 7. 9 | 喇嘛教大僧正来らん | 8. 9 | 台北別院 |
| 7. 10 | 喇嘛僧正 | 8. 12 | 露国と喇嘛教の關係 |
| 7. 13 | 釜山の教況 | 8. 14 | 露国と喇嘛教の關係(統) |
| 7. 14 | 大谷法主と喇嘛貫主 | 8. 18 | 喇嘛教貫主の日本観 |

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1901. 8. 19 喇嘛教貫主の日本観 (承前)
 8. 20 喇嘛教貫主の日本観 (承前)
 8. 21 土耳其の蒙昧
 8. 21 露国新聞と西蔵
 8. 28 土耳其帝と女子教育
 9. 3 上海よりの来翰
 9. 4 阿嘉貫主
 9. 4 千島色古丹島情况 (岸田蘭城氏談話)
 9. 4 北京の仏像
 9. 5 千島色古丹島情况 (続)
 9. 8 阿嘉貫主の礼書
 9. 9 印度ゼーン宗の断食
 9. 11 大谷勝尊師
 9. 20 基督宣教師黄榮良氏
 10. 24 杭州の日文学堂
 10. 26 釜山報知
 10. 26 千五百年前に支那人の米国発見
 10. 29 能久親王御手跡の事
 10. 29 印度の飢民数
 10. 31 台湾の忠魂堂
 11. 3 烏港布教場
 11. 5 土耳其皇帝の印土語奨励
 11. 15 北京報知
 11. 23 浦塩斯徳の教会敷地調査
 11. 26 袁世凱の奇策
 11. 26 支那に於ける基督青年
 11. 26 北京報知 (第三回) 十一月十日発
 11. 26 北京報知 (第四回) 十一月十三日発
 11. 29 北京報知 (第五信)
 12. 6 蒙古に於ける宗教 (東亜研究会に於ける
 島川毅三郎氏の演説中の一項による)
 12. 6 宣教師の略奪 (上)
 12. 8 開城学校と人民の請願
 12. 10 宣教師の奪掠 (下)
 12. 13 北京通信 (第六)
 12. 13 金陵東文学堂の運動会

中外日報

1902. 1. 15 支那人の信仰 (一)
 1. 15 北京の事情 (十月十三日発 休刊中着社)
 1. 15 黒龍語学校の授業開始
 1. 17 北京の事情 (十二月七日発 休刊中着社)
 1. 17 支那人の信仰 (二)
 1. 18 北京の事情 (十二月廿一日発 休刊中着社)
 1. 18 土耳其王歴代の臨終
 1. 20 台湾布教の縮少
 1. 20 朝鮮布教の拡張
 1. 22 清語講習所と兩本願寺
 1. 22 印度国民の神秘と迷信
 1. 23 教案予防につき西太後の訓諭
 1. 23 露領布教の一頓挫
 1. 24 朝鮮の僧兵設置

1. 24 韓兵日本兵を装ふ
 1. 25 台湾の阿片吸食者数
 1. 27 北京の事情 (一月十一日発)
 1. 29 僧尼入城の解禁
 1. 30 台湾神社の怪聞
 2. 2 台北の宗教
 2. 4 木浦に於ける各国教育
 2. 4 支那人の信仰 (三)
 2. 7 支那人の信仰 (四)
 2. 8 平壤に於ける基督教
 2. 10 印度の階級制度と宣教師
 2. 15 北京通信 (一月廿五日発)
 2. 18 西比利亜布教使
 2. 19 北京の大学堂
 2. 20 台湾の基督教
 2. 20 漢城の乞食
 2. 20 韓国内の戸口
 2. 24 釜山の宗教
 2. 27 英仏宣教師謁見
 2. 28 北京特報 (二月十一日発)
 3. 2 朝鮮と大谷派
 3. 2 北京時報 (二月八日発)
 3. 5 露国の満洲布教
 3. 5 日英同盟と支那人
 3. 5 天津の宗教界 (二月廿一日発同地特報)
 3. 7 北京城内の喇嘛寺
 3. 10 厦門の教民問題と西本願寺
 3. 10 厦門の教民問題の視察
 3. 10 清国の学事視察
 3. 10 西派新法主
 3. 12 南清に於ける 本願寺教徒の迫害
 3. 13 南清長泰西本願寺教堂の被害
 3. 25 朝鮮に於ける基督教
 4. 2 暹羅国皇帝の御来遊
 4. 5 魯国と喇嘛教貫主
 4. 7 厦門の教民事件
 4. 9 居留民の宗教 在韓仁川 長雙翼寄
 4. 9 ビルマの僧侶
 4. 13 浦塩斯徳布教師引揚
 4. 13 仁川別院
 4. 14 釜山説教所
 4. 20 韓国の漁夫教誨
 4. 20 大谷派釜山幼稚園
 4. 20 韓国に於ける免囚教誨
 4. 23 厦門の大谷派無我医院
 5. 5 清国基督教の知識普及協会
 5. 7 ダンマバラ氏の日本観
 5. 7 夕氏の齎らせる書面
 5. 7 谷了然氏の外遊
 5. 12 ダンマバラ氏の演説 (続)
 5. 13 北京通信「四月廿九日発」
 5. 13 ダンマバラ氏の演説 (続)
 5. 14 北京通信「四月廿九日発」
 5. 22 ダンマバラ氏
 5. 23 日印協会と達摩波羅氏
 5. 28 達磨波羅氏の講演

1902. 5. 29 印度の迷信
 5. 30 印度仏跡参詣講
 6. 5 海外布教の経過 △谷了然師の談片▽
 6. 10 印度僧ギリ氏
 6. 14 支那人布教の時機
 6. 22 台湾布教使の増派
 6. 24 印度飢民の数
 6. 28 蒙古の喇嘛教貫主
 6. 28 厦門の布教師
 6. 28 吳汝綸氏と西本願寺
 6. 28 印度参詣講と郵船会社
 6. 29 台北に於ける基督教
 6. 29 台湾の新教線
 6. 29 四川教案
 6. 29 長泰の教民事件
 6. 29 清水黙爾氏
 6. 30 台湾に於ける各宗派の布教
 6. 30 南清に於ける宗教
 6. 30 基隆布教所の負債
 7. 2 ダンマバーラ氏の渡米
 7. 7 米国宣教師と朝鮮村落
 7. 7 仏国宣教師と朝鮮人
 7. 13 グ氏と仏陀伽耶寺の訴訟の件
 7. 13 印度教と仏教との研究会
 7. 19 西藏喇嘛教希臘教と露清密約
 7. 23 湖南に於ける仏教僧侶と基督教
 7. 29 北京通信「七月十三日」
 7. 30 蒙古の白人伝道
 7. 30 西派の清国留学生
 7. 30 海外布教会
 8. 3 北京通信員に質す
 8. 4 蒙古に於ける露国宣教師
 8. 4 清国に於ける大谷派の衛生事業
 8. 5 比律寶島の旧教僧侶
 8. 24 暹羅皇太子米遊御見合
 8. 24 南清と台湾布教
 8. 24 西本願寺の清国留学生
 8. 25 布教機関の調査
 9. 2 海外布教会釜山借教場
 9. 3 朝鮮の教民問題
 9. 5 台南の布教教授
 9. 5 支那留學生の仏教研究
 9. 8 日文学堂生徒の来朝
 9. 8 露国の宣教師六十名
 9. 13 暹羅公使
 9. 30 満洲に於ける露国布教方針
 10. 7 日印俱樂部
 10. 15 西本願寺 満洲布教
 10. 15 露国布教と西本願寺
 10. 23 西本願寺釜山別院の工事
 10. 23 北京たより
 10. 24 北京たより
 10. 28 北京だより (十月二十日)
 10. 30 上海別院の布教
 10. 30 ハノイの東洋学会と高派新法主
 10. 30 東亜同文書院第三期生募集
 11. 2 ハバロフスク布教所
 11. 2 はるびんの布教所
 11. 7 釜山の説教所焼失
 11. 7 基隆布教所の負債
 11. 7 岡倉覚三氏の印度談
 11. 10 亜細亞宗教大会
 11. 12 英領香港と西本願寺
 11. 12 印度留學生の激昂
 11. 19 西派朝鮮布教所の類焼と軍隊
 11. 20 上海通信
 12. 3 亜細亞仏教大会に就いて
 12. 10 喇嘛の活仏
 12. 18 上海通信
 12. 19 暹羅皇太子殿下御来京
 1903. 1. 7 暹羅皇太子殿下
 1. 7 比馬拉耶山上の基督教
 1. 8 比馬拉耶山上の基督教(続)
 1. 8 暹羅皇太子殿下
 1. 9 暹羅皇太子殿下の御出発期
 1. 9 暹羅皇太子殿下
 1. 10 大陸巡遊中新法主
 1. 13 浦塩斯徳の布教
 1. 13 満洲布教
 1. 15 西派新法主の帰朝と 日本仏教界の霸
 権移動
 1. 15 上海通信(九日発)
 1. 19 上海務本女塾
 1. 23 滬江漫筆 在上海哲廣
 1. 26 スリナガル近信(一)
 1. 29 滬江漫筆 上海 哲廣
 1. 29 教案議結
 1. 29 上海通信
 1. 30 西藏探検僧河口慧海
 1. 30 釜山方面の外教の勢力
 1. 30 大谷派釜山幼稚園
 1. 30 大谷派の統管日語学校
 2. 2 韓国大邱方面の外教伝道
 2. 2 釜山に於ける日本児育生教育の沿革
 2. 7 移民と布教
 2. 15 清国泉州の教情
 2. 25 台湾仏教会
 2. 27 上海便り
 3. 3 土耳其と仏教
 3. 5 上海通信
 3. 15 韓国に於ける基督教徒間の軋轢
 3. 17 西派法主の印度探検談
 3. 17 上海短信
 3. 19 韓人伝道
 3. 19 上海通信
 3. 27 新嘉坡の開教(一) 熱帯教区の帰客、
 佐々木千重氏談
 3. 28 新嘉坡の開教(二) 熱帯教区の帰客、
 佐々木千重氏談
 3. 30 新嘉坡の開教(三) 熱帯教区の帰客、
 佐々木千重氏談
 3. 30 暹羅の文明

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1903. 4. 2 新嘉坡の開教(四) 熱帯教区の帰客、
佐々木千重氏談
4. 3 印度と宗教
4. 5 西派法主 印度靈地探検記(一)
4. 5 上海通信
4. 7 西派法主 印度靈地探検記(二)
4. 8 印度社会観一斑
4. 8 西派法主 印度靈地探検記(三)
4. 9 西派法主 印度靈地探検記(四)
4. 10 韓国教民事件の着落
4. 12 上海基督教徒の会合
4. 12 清国徐州の基教
4. 12 西派法主 印度靈地探検記(五)
4. 13 宗教雑談数則 天主教宣教師某甲生
4. 15 清国上流者と基督教
4. 15 清国の財政と教案問題
4. 19 暹羅僧侶の狀態
4. 23 暹羅の仏教
4. 23 台湾信徒の来京
4. 25 暹羅僧侶の狀態
5. 3 上海通信
5. 9 無憂王勅令の碑文
5. 12 露清間の危機迫る
5. 18 暹羅人の葬式
5. 19 出蔵後の河口慧海師
5. 23 河口慧海師の入蔵談
5. 24 河口慧海師の入蔵談
5. 24 河口慧海師の現今
5. 24 蒙古喇嘛僧の来朝
5. 24 上海通信
5. 25 河口慧海師の入蔵談
5. 25 入蔵経歴談話会
6. 30 印度に於ける回教徒の増加
6. 2 露国西藏を窺ふ
6. 3 河口慧海師の入蔵談
6. 9 河口慧海師の演説
6. 13 外教者の観たる印度仏教
6. 14 西藏に於ける神秘劇
6. 15 西藏に於ける神秘劇 続
6. 18 西藏の人情習慣
6. 19 西藏の文学
6. 20 上海地方の仏教徒
6. 23 西藏の祝祭日
6. 23 天主教と西藏
6. 25 台湾人の宗教と教育
6. 25 上海通信
6. 28 印度小学校生徒の懲戒法
6. 29 西派法主と河口師
7. 3 暹羅留学生
7. 3 サイアムの国情
7. 3 河口師の再入蔵
7. 3 河口師の境遇
7. 5 印度と日本
7. 9 支那の僧侶
7. 10 清国揚州の教学
7. 12 西比利亞原頭の寒村と寺院
7. 18 河口師携帯品の陳列
7. 20 一年間ラッサ府に在りし 露人の西藏談
7. 27 子パール人河口慧海師を訪ふ
8. 7 大洲台湾布教取締
8. 8 上海通信 通信員報
8. 13 暹羅皇帝在位紀念碑
8. 14 露国探検者の西藏談
8. 20 統計上より見たる台湾の信仰界
8. 27 台湾に於ける西派学生
9. 3 井手氏の支那宗教談
9. 4 井手氏の支那宗教談(二)
9. 5 井手氏の支那宗教談(三)
9. 5 清国に於ける回教
9. 7 井手氏の支那宗教談 四
9. 8 井手氏の支那宗教談 五
9. 18 支那東京の宗教風俗
10. 4 日蓮寺創立願
10. 9 蒙古喇嘛
10. 10 在外国民教育
10. 10 上海通信 十月三日発
10. 24 釜山慈善教社
10. 28 日蓮寺の創立に就て
11. 3 厦門の現況(十月十八日発)
11. 5 上海通信(十月三十日発)
11. 13 北京片信 東六学社にて 吉川満成
11. 15 新嘉坡の開教
11. 23 上海通信(十一月十七日発)
11. 27 殖民伝道 新嘉●駐在太田周教氏談
11. 27 河口慧海師と蔵梵仏典
11. 28 殖民伝道(二) 新嘉坡駐在太田周教氏談
11. 29 支那宣教師殉教紀念館
11. 29 殖民伝道(三) 新嘉坡駐在太田周教氏談
11. 29 南清教学一班 清国泉州在 栗軒生報
11. 30 南清教学一班(下) 清国泉州在 栗軒生報
12. 4 海外に於ける兩本願寺
12. 14 印度の統計一斑
12. 20 在韓国の信徒(福永政次郎よりの手簡)
12. 20 海外布教の全減
12. 22 南清教場の存続意見 本願寺無我堂医院長 全徳岩蔵奇
12. 24 評論 海外布教の全減
12. 24 海外布教の全減
1904. 1. 12 韓国布教の現状(上)
1. 13 韓国布教の現状(下)
1. 23 上海通信
1. 28 上海通信(一月廿三日)
1. 30 基督教支那伝道の歴史
2. 3 浦塩本願寺主管の書面
2. 13 在滿洲の慰問使
2. 13 東洋風雲録 [日露戦争関係情報]
2. 14 仁川捕虜の解放

1904. 2. 14 京城宣教師の義挙
 2. 15 韓国に於ける大谷派の布教僧
 2. 15 馬來半島教信 英領彼南島在 本庄凌雲氏發
 2. 15 在外教師の意気
 2. 15 駐韓露公使の撤退
 2. 17 馬來半島教信(続) 英領彼南島在 本庄凌雲氏發
 2. 17 清語通訳官と大谷派
 2. 17 旅順海戦と列国の注目
 2. 18 上海通信
 2. 19 日露戦争に就て 大谷派講師 吉谷覚詩
 2. 19 旅順再攻撃公報
 2. 20 清国中立の保障
 2. 20 東清鉄道汽船支店の占領
 2. 20 大谷派と軍隊
 2. 22 清・韓
 2. 24 軍隊慰問使
 2. 24 戦報
 2. 24 清・韓方面
 2. 24 杭州日文学堂
 2. 24 敵地の同胞慰問僧
 2. 25 敵軍及び其本国
 2. 25 清・韓方面
 2. 25 西本願寺の烏港布教員
 2. 27 東洋風雲録
 2. 27 沿海情報
 2. 27 敵軍及び其本国
 2. 27 清・韓方面
 2. 27 敵国に於ける仏教情報
 2. 28 東洋風雲録
 2. 28 露領残留教師の書柬
 2. 29 東洋風雲録
 2. 29 敵軍及び其本国
 2. 29 支那人亦た義を知る
 2. 29 上海通信(二月廿三日)
 2. 29 日露戦争と天主教
 3. 2 東洋風雲録
 3. 2 清、韓方面
 3. 2 露国内の異民族
 3. 2 旅順海戦を目撃せし布教師
 3. 3 泰国義納会の設立
 3. 3 西比利亚に於ける 西派布教の一斑 引揚婦朝者谷口常之氏の談
 3. 3 東洋風雲録
 3. 3 清、韓方面
 3. 4 東洋風雲録
 3. 4 清、韓方面
 3. 4 上海通信(二月廿七日發)
 3. 5 韓国近信
 3. 5 東洋風雲録
 3. 5 清、韓方面
 3. 5 泰国義納会に就て
 3. 7 東洋風雲録
 3. 7 清、韓方面
 3. 8 東洋風雲録
 3. 8 清、韓方面
 3. 8 西比利亚の開教(上) 谷口常之
 3. 9 上海通信(三月二日發)
 3. 9 東洋風雲録
 3. 9 清、韓方面
 3. 9 西比利亚の開教(下) 谷口常之
 3. 10 東洋風雲録
 3. 10 清、韓方面
 3. 12 東洋風雲録
 3. 12 清、韓方面
 3. 12 仁川通信(三月四日發)
 3. 13 上海通信(三月四日發)
 3. 13 東洋風雲録
 3. 13 清、韓方面
 3. 14 怪僧浦塩に現はる
 3. 14 東洋風雲録
 3. 15 京城別院の名誉
 3. 15 東洋風雲録
 3. 15 清、韓方面
 3. 15 京城通信(三月六日發)
 3. 17 仁川婦人会の活動
 3. 17 東洋風雲録
 3. 17 釜山通信
 3. 18 東洋風雲録
 3. 18 清、韓方面
 3. 18 回教国民の同情
 3. 18 元山通信
 3. 19 上海通信(三月十二日發)
 3. 19 東洋風雲録
 3. 19 清、韓方面
 3. 20 東洋風雲録
 3. 20 遼陽情報
 3. 20 奉天情報
 3. 20 烏港情報
 3. 20 京城通信(三月十一日發)
 3. 23 東洋風雲録
 3. 23 清韓方面
 3. 24 東洋風雲録
 3. 24 清韓方面
 3. 25 東洋風雲録
 3. 25 清韓方面
 3. 27 東洋風雲録
 3. 27 清韓方面
 3. 27 釜山通信(三月十九日發)
 3. 28 東洋風雲録
 3. 28 清韓方面
 3. 28 在外者の感奮
 3. 29 東洋風雲録
 3. 29 清韓方面
 3. 30 東洋風雲録
 3. 30 清韓方面
 3. 30 韓国巡遊日記(其一)
 4. 2 禪僧の台湾布教
 4. 2 東洋風雲録
 4. 2 上海通信(三月二十五日發)

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1904. 4. 3 東洋風雲録
 4. 3 清韓方面
 4. 5 南清に於ける禪宗
 4. 5 東洋風雲録
 4. 5 清韓方面
 4. 5 台湾に於ける各宗派の教況
 4. 7 東洋風雲録
 4. 7 清韓方面
 4. 8 東洋風雲録
 4. 8 清韓方面
 4. 8 韓国巡遊日記(其二)
 4. 8 支那布教の前途
 4. 9 東洋風雲録
 4. 9 清韓方面 韓兵の従軍出願 東党の蠢動
 4. 10 東洋風雲録
 4. 10 南清布教所の潰裂
 4. 10 台北別院の奉公
 4. 10 台北近信
 4. 10 支那布教の前途(続)
 4. 12 東洋風雲録
 4. 13 釜山通信(四月六日発)
 4. 13 東洋風雲録
 4. 13 清韓情況
 4. 14 東洋風雲録
 4. 15 東洋風雲録
 4. 15 清韓
 4. 17 上海通信(四月八日発)
 4. 17 東洋風雲録
 4. 18 上海開導学校
 4. 18 東洋風雲録
 4. 19 東洋風雲録
 4. 20 東洋風雲録
 4. 20 印度共勵会長の演説
 4. 22 東洋風雲録
 4. 22 印度の賤民我勝利を祈る
 4. 23 東洋風雲録
 4. 24 東洋風雲録
 4. 25 芝罘近信(四月十五日発)
 4. 25 東洋風雲録
 4. 27 東洋風雲録
 4. 28 東洋風雲録
 4. 28 在平壤の伝道師
 4. 29 東洋風雲録
 4. 29 朝鮮通信(上)(四月十三日木浦発)
 4. 30 東洋風雲録
 4. 30 朝鮮通信(下)(木浦発信の続)
 4. 30 京城情報(四月十七日京城発)
 5. 2 上海通信(四月廿五日発)
 5. 2 東洋風雲録
 5. 3 東洋風雲録
 5. 4 東洋風雲録
 5. 5 東洋風雲録
 5. 5 旧領土權太(上)
 5. 7 東洋風雲録
 5. 7 旧領土權太(下)
 5. 8 朝鮮と外教
 5. 8 西派台湾布教の新法
 5. 8 日本の基督教海外伝道
 5. 8 東洋風雲録
 5. 8 台北本願寺別院の独立
 5. 9 台湾に於ける宗教(上)
 5. 9 東洋風雲録
 5. 9 河口慧海師入蔵談
 5. 10 台湾に於ける宗教(中)
 5. 10 東洋風雲録
 5. 10 天台僧の渡清布教
 5. 10 西派の韓国布教開始
 5. 12 兵站病院と別院
 5. 12 韓国報聘大使の来山
 5. 12 朝鮮と大谷派
 5. 12 台湾に於ける宗教(下)
 5. 12 東洋風雲録
 5. 13 東洋風雲録
 5. 13 時局と南清布教 在清国泉州 栗軒生
 5. 13 インド紀聞(一)
 5. 13 暹羅国高等女学校設立
 5. 13 韓国皇帝と日野連枝
 5. 14 釜山の教況
 5. 14 東洋風雲録
 5. 14 インド紀聞(二)
 5. 15 韓国雁信
 5. 15 東洋風雲録
 5. 15 時局と南清布教(下) 在清国泉州 栗軒生
 5. 17 東洋風雲録
 5. 18 東洋風雲録
 5. 18 インド紀聞(三)
 5. 19 東洋風雲録
 5. 20 東洋風雲録
 5. 20 清韓仁の布教
 5. 20 日蓮宗と朝鮮
 5. 20 大谷派内の清・韓語通
 5. 22 東西二派の清韓經營
 5. 22 東洋風雲録
 5. 23 清国に於ける二宗教の衝突
 5. 23 東洋風雲録
 5. 24 東洋風雲録
 5. 25 東洋風雲録
 5. 25 流砂河畔の探検談
 5. 25 大陸探検の零碎
 5. 27 東洋風雲録
 5. 27 渡辺哲乘氏
 5. 28 朝鮮の仏教
 5. 28 東洋風雲録
 5. 28 蒙古王妃と東洋婦人会
 5. 29 東洋風雲録
 5. 30 朝鮮布教と神鞭知常氏
 5. 30 東洋風雲録
 5. 30 朝鮮と大谷派(上)
 6. 2 東洋風雲録
 6. 3 石川舜台師の単独布教

1904. 6. 3 東洋風雲録
 6. 4 東洋風雲録
 6. 5 俘虜信仰慰安会
 6. 5 東洋風雲録
 6. 5 清韓布教の今昔
 6. 5 朝鮮と大谷派 (中)
 6. 7 東洋風雲録
 6. 7 朝鮮と大谷派 (下)
 6. 8 一筆啓上仕候 (五)
 6. 8 東洋風雲録
 6. 9 武田師の一行
 6. 9 東洋風雲録
 6. 10 清韓に於ける各宗合併
 6. 10 東洋風雲録
 6. 10 泉宗布教所
 6. 10 釜山に於ける基督教
 6. 12 東洋風雲録
 6. 13 東洋風雲録
 6. 13 西藏に於ける伝道
 6. 13 武田師一行の巡路
 6. 13 韓仏間宗教取締協議
 6. 14 東洋風雲録
 6. 15 東洋風雲録
 6. 17 東洋風雲録
 6. 17 印度撮影帖
 6. 18 東洋風雲録
 6. 18 朝鮮に於ける日本僧の将来
 6. 18 清韓布教と仏教各派
 6. 19 東洋風雲録
 6. 20 東洋風雲録
 6. 22 東洋風雲録
 6. 23 清国に於ける軍隊布教
 6. 23 東洋風雲録
 6. 24 東洋風雲録
 6. 25 東洋風雲録
 6. 27 東洋風雲録
 6. 28 東洋風雲録
 6. 28 『朝鮮と大谷派』に就て 上海 哲魔
 6. 28 従軍僧の会合
 6. 29 東洋風雲録
 6. 30 東洋風雲録
 6. 30 西本願寺と韓国
 7. 2 東洋風雲録
 7. 3 東洋風雲録
 7. 3 真言宗の軍隊布教
 7. 4 東洋風雲録
 7. 5 清韓経営に対する希望 某博士所談
 7. 5 東洋風雲録
 7. 7 韓国に於ける武田氏一行
 7. 7 谷通訳官の通信
 7. 7 東洋風雲録
 7. 8 東洋風雲録
 7. 9 東洋風雲録
 7. 10 東洋風雲録
 7. 12 東洋風雲録
 7. 13 東洋風雲録
 7. 14 東洋風雲録
 7. 15 東洋風雲録
 7. 15 上海通信
 7. 15 朝鮮開教団の拡張
 7. 17 東洋風雲録
 7. 18 東洋風雲録
 7. 19 東洋風雲録
 7. 20 東洋風雲録
 7. 22 東洋風雲録
 7. 22 大谷派従軍僧某他
 7. 22 佐々木円樹氏
 7. 22 杭州学堂の活動
 7. 22 南清泉州布教所
 7. 22 従軍僧信
 7. 23 東洋風雲録
 7. 24 東洋風雲録
 7. 27 東洋風雲録
 7. 27 朝鮮に於ける基督教徒
 7. 27 湖北の教案 (宣教師殺さる)
 7. 28 東洋風雲録
 7. 29 東洋風雲録
 7. 30 東洋風雲録
 8. 2 東洋風雲録
 8. 3 従軍僧九谷述丸氏の近信
 8. 3 弓波従軍布教師の来信
 8. 3 東洋風雲録
 8. 4 教案に就き支那新聞『中外日報』の論調 上海 哲魔抄訳
 8. 4 支那教案二件
 8. 4 東洋風雲録
 8. 5 武田師一行の近状
 8. 5 教案に就き支那新聞『中外日報』の論調 上海 哲魔抄訳
 8. 5 東洋風雲録
 8. 7 教案に就き支那新聞『中外日報』の論調 上海 哲魔抄訳
 8. 7 谷通訳官の通信
 8. 7 東洋風雲録
 8. 8 東洋風雲録
 8. 9 満洲の奇観一東
 8. 9 東洋風雲録
 8. 10 東洋風雲録
 8. 12 奥村女史の満洲行
 8. 12 東洋風雲録
 8. 13 東洋風雲録
 8. 14 清国仏教徒の覚醒
 8. 14 東洋風雲録
 8. 15 東洋風雲録
 8. 17 東洋風雲録
 8. 18 東洋風雲録
 8. 19 東洋風雲録
 8. 19 戦勝者としての亜細亜
 8. 20 東洋風雲録
 8. 20 白尾通訳官の通信 (満洲の野より吾社の同人に宛てたる)
 8. 22 白尾通訳官の通信 (満洲の野より吾

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1904. 8. 22 社の同人に宛てたる)
 8. 22 東洋風雲録
 8. 22 支那の宗教
 8. 23 白尾通訳官の通信 (満洲の野より吾社の同人に宛てたる)
 8. 23 東洋風雲録
 8. 24 白尾通訳官の通信 (満洲の野より吾社の同人に宛てたる)
 8. 24 東洋風雲録
 8. 25 陣中に於ける三布教使 (大谷派従軍布教使大塚鳳雛師の通信)
 8. 25 東洋風雲録
 8. 25 白尾通訳官の通信 (満洲の野より吾社の同人に宛てたる)
 8. 25 上海通信
 8. 25 上海通信
 8. 25 清国人中出色の奇僧
 8. 27 東洋風雲録
 8. 27 教案頻々
 8. 27 陣中に於ける三布教使 (大谷派従軍布教使大塚鳳雛師の通信)
 8. 27 新占領地に別院を設く
 8. 27 武田師の一行
 8. 28 青泥窪別院と輪番
 8. 28 東洋風雲録
 8. 29 台湾に於ける西派学校
 8. 29 東洋風雲録
 8. 30 東洋風雲録
 8. 30 西派新主と革靴慧海師
 9. 2 東洋風雲録
 9. 2 満洲軍布教使総監督の出発
 9. 3 西藏
 9. 3 大喇嘛の幽居
 9. 3 東洋風雲録
 9. 3 南清新教場
 9. 4 東洋風雲録
 9. 4 釜山通信 (八月九日発)
 9. 5 東洋風雲録
 9. 7 東洋風雲録
 9. 8 東洋風雲録 占領地総督府
 9. 8 台湾に於ける西派最初の寺
 9. 9 湖北教案に就ての要價
 9. 9 東洋風雲録
 9. 10 朝鮮に於ける基督教の活動
 9. 10 東洋風雲録
 9. 12 東洋風雲録
 9. 13 東洋風雲録
 9. 14 東洋風雲録
 9. 15 軍人の支那宗教観
 9. 15 東洋風雲録
 9. 17 東洋風雲録
 9. 17 清国教案彙報
 9. 17 台湾及南清布教場の独立
 9. 18 東洋風雲録
 9. 18 山東の大会堂
 9. 19 東洋風雲録
 9. 20 東洋風雲録
 9. 22 東洋風雲録
 9. 22 僧侶軍人の書翰
 9. 23 評論・戦後経営
 9. 23 東洋風雲録
 9. 23 奥村五百子女史の満洲行
 9. 25 東洋風雲録
 9. 25 台北の戦死者追弔法要
 9. 25 京城基督教青年會
 9. 27 評論・僧侶の移民
 9. 27 武田師一行の帰国と出発
 9. 27 東洋風雲録
 9. 28 東洋風雲録
 9. 28 清韓布教と西派法主の決心
 9. 29 東洋風雲録
 9. 29 川口氏の西藏再行
 9. 29 武田師の一行
 9. 30 東洋風雲録
 10. 2 評論・海と伝道
 10. 2 東洋風雲録
 10. 2 黄金の鐘
 10. 3 比島寺院地代の支払
 10. 3 東洋風雲録
 10. 4 印度仏跡写真帳の贈与
 10. 4 東洋風雲録
 10. 5 東洋風雲録
 10. 7 東洋風雲録
 10. 7 朝鮮情報
 10. 7 武田師等の渡清
 10. 7 清韓布教と集会
 10. 7 遼陽城外の追弔報会
 10. 8 訪問・朝鮮人の霊界 (上)
 10. 8 東洋風雲録
 10. 8 武田師一行の視察行程
 10. 9 訪問・朝鮮人の霊界 (下)
 10. 9 西派の韓国布教と当路者
 10. 9 東洋風雲録
 10. 9 朝鮮に於ける大谷派別院
 10. 10 通信・韓国雜観 (上)
 10. 10 東洋風雲録
 10. 10 朝鮮に於ける大谷派
 10. 10 西本願寺と蒙古帝国
 10. 12 通信・韓国雜観 (下)
 10. 12 東洋風雲録
 10. 13 東洋風雲録
 10. 13 遼陽飛信 (上) 満洲軍総指令部附白尾義夫
 10. 14 訪問・武田師の韓国布教談 (上)
 10. 14 遼陽飛信 (下) 満洲軍総指令部附白尾義夫
 10. 14 東洋風雲録
 10. 15 訪問・武田師の韓国布教談 (下)
 10. 15 河口慧海師の発程
 10. 17 通信・清国教案彙報
 10. 17 東洋風雲録
 10. 17 河口慧海師の再入蔵

- | | | | |
|--------------|-----------------|--------|------------------|
| 1904. 10. 17 | 河口師の後援 | 11. 22 | 東洋風雲録 |
| 10. 19 | 東洋風雲録 | 11. 22 | 清韓方面の動静 |
| 10. 19 | 大日本仏教満洲開教教会 | 11. 23 | 東洋風雲録 |
| 10. 20 | 東洋風雲録 | 11. 23 | 清韓方面の動静 |
| 10. 22 | 東洋風雲録 | 11. 25 | 通信・満洲戦林の教影 (其四) |
| 10. 22 | 南清便り | 11. 25 | 東洋風雲録 |
| 10. 23 | 満・韓の野に八十名 | 11. 25 | 清韓方面の動静 |
| 10. 23 | 東洋風雲録 | 11. 25 | 清国寺院の大谷派帰属 |
| 10. 24 | 東洋風雲録 | 11. 27 | 訪問・帰属僧衣谷師と語る |
| 10. 25 | 東洋風雲録 | 11. 27 | 東洋風雲録 |
| 10. 27 | 東洋風雲録 | 11. 27 | 清韓方面の動静 |
| 10. 27 | 朝鮮に於ける基督教徒 | 11. 27 | 通信・満洲戦林の教影 (其五) |
| 10. 27 | 湖北の教案(宣教師殺さる) | 11. 27 | 遼東の野より一筆啓上 |
| 10. 28 | 東洋風雲録 | 11. 28 | 東洋風雲録 |
| 10. 28 | 報道・満韓の野 | 11. 28 | 清韓方面の動静 |
| 10. 28 | 新占領地の仏教 | 11. 29 | 東洋風雲録 |
| 10. 29 | 東洋風雲録 | 11. 29 | 清韓方面の動静 |
| 10. 29 | 報道・満韓の野 | 11. 30 | 東洋風雲録 |
| 10. 29 | 支那人と墳墓 | 11. 30 | 清韓方面の動静 |
| 10. 30 | 東洋風雲録 | 12. 2 | 東洋風雲録 |
| 10. 30 | 報道・満韓の野 | 12. 2 | 報道・満韓方面の動静 |
| 11. 2 | 東洋風雲録 | 12. 3 | 東洋風雲録 |
| 11. 2 | 報道・満韓方面の動静 | 12. 3 | 報道・満韓方面の動静 |
| 11. 3 | 東洋風雲録 | 12. 3 | 大谷派鑿波清経営 |
| 11. 4 | 東洋風雲録 | 12. 3 | 白尾義夫氏 |
| 11. 5 | 清韓方面の動静 | 12. 4 | 青泥窪兵站病院の追弔会 |
| 11. 5 | 東洋風雲録 | 12. 4 | 東洋風雲録 |
| 11. 7 | 東洋風雲録 | 12. 4 | 清韓方面の動静 |
| 11. 8 | 通信・太田覚眠師の消息 | 12. 4 | 通信・満洲戦林の教影 (其七) |
| 11. 8 | 東洋風雲録 | 12. 5 | 支那開教の起源 |
| 11. 8 | 清韓方面の動静 | 12. 5 | 清韓方面の動静 |
| 11. 9 | 東洋風雲録 | 12. 5 | 東洋風雲録 |
| 11. 9 | 清韓方面の動静 | 12. 5 | 教堂破壊、通訳殺害 |
| 11. 10 | 東洋風雲録 | 12. 7 | 清国教案彙報 |
| 11. 10 | 清韓方面の動静 | 12. 7 | 教堂破壊問題 |
| 11. 12 | 東洋風雲録 | 12. 7 | 東洋風雲録 |
| 11. 12 | 武田師の危篤 | 12. 7 | 清韓方面の動静 |
| 11. 12 | 清韓方面の動静 | 12. 7 | 拳国伝道師の虐殺 |
| 11. 12 | 武田師の重病と満韓経営 | 12. 7 | 通信・満洲戦林の教影 (其八) |
| 11. 13 | 東洋風雲録 | 12. 8 | 通信・満洲戦林の教影 (其九) |
| 11. 13 | 清韓方面の動静 | 12. 8 | 東洋風雲録 |
| 11. 14 | 東洋風雲録 | 12. 8 | 清韓方面の動静 |
| 11. 14 | 清韓方面の動静 | 12. 8 | 教堂破壊に対する本山の方針 |
| 11. 15 | 東洋風雲録 | 12. 9 | 東洋風雲録 |
| 11. 15 | 清韓方面の動静 | 12. 9 | 清韓方面の動静 |
| 11. 17 | 東洋風雲録 | 12. 9 | 通信・満洲戦林の教影 (其十) |
| 11. 17 | 台北別院内軍人優待会の幻灯 | 12. 9 | 沙河来信 |
| 11. 17 | 清韓方面の動静 | 12. 10 | 通信・満洲戦林の教影 (其十一) |
| 11. 18 | 東洋風雲録 | 12. 10 | 東洋風雲録 |
| 11. 19 | 通信・満洲戦林の教影 | 12. 10 | 清韓方面の動静 |
| 11. 19 | 東洋風雲録 | 12. 12 | 支那女学生の宗教研究 |
| 11. 19 | 清韓方面の動静 | 12. 12 | 伊藤氏一行の帰清 |
| 11. 20 | 通信・満洲戦林の教影 (其二) | 12. 12 | 東洋風雲録 |
| 11. 20 | 東洋風雲録 | 12. 12 | 教堂破壊問題(仏耶両教徒の衝突) |
| 11. 20 | 清韓方面の動静 | 12. 12 | 清韓方面の動静 |
| 11. 22 | 通信・満洲戦林の教影 (其三) | 12. 12 | 我領事の嚴談と清国道台の答弁 |

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1904. 12. 13 帰化清僧の失望
 12. 13 東洋風雲録
 12. 13 清国人の迷信
 12. 13 清韓方面の動静
 12. 13 教堂破壊問題 (昨日のつづき)
 12. 14 帰依清僧と露党の狼狽
 12. 14 東洋風雲録
 12. 14 清韓方面の動静
 12. 15 印度留学生の近信
 12. 15 東洋風雲録
 12. 15 清韓方面の動静
 12. 17 東洋風雲録
 12. 17 清韓方面の動静
 12. 18 通信・満洲戦林の教影 (其十二)
 12. 18 東洋風雲録
 12. 19 東洋風雲録
 12. 19 清韓方面の動静
 12. 19 朝鮮国王の迷信
 12. 19 太田覚眠氏の帰山
 12. 19 竹田黙雷師と清僧
 12. 20 太田氏の経歴談
 12. 20 東洋風雲録
 12. 20 清韓方面の動静
 12. 20 太田覚眠氏の帰国
 12. 22 東洋風雲録
 12. 22 清韓方面の動静
 12. 22 太田氏の経歴談 (上)
 12. 22 太田氏の経歴談 (中)
 12. 23 大谷派満洲軍慰問 (一)
 12. 23 東洋風雲録
 12. 23 南海領土の教況
 12. 23 支那蘇學堂の妄状
 12. 23 渡辺哲信氏の渡清
 12. 23 太田覚眠氏の昇級
 12. 24 東洋風雲録
 12. 24 太田氏の経歴談 (下)
 12. 25 大谷派満洲軍慰問 (二)
 12. 25 東洋風雲録
 12. 25 清韓方面の動静
 12. 25 通信・満洲戦林の教影 (其十三)
1905. 1. 1 上海通信
 1. 1 西派帰属の清僧
 1. 1 韓使政府行き風説
 1. 8 光瑞法主の発直諭
 1. 8 満洲軍慰問使の帰山
 1. 8 東洋風雲録
 1. 9 慰問使の報国談話会 (上)
 1. 9 東洋風雲録
 1. 10 慰問使の報国談話会 (中)
 1. 10 東洋風雲録
 1. 10 太田覚眠師
 1. 12 戦争と婦人 遼東戦地に於て 本派従
 軍布教使 小野島法懂奇
 1. 12 慰問使の報国談話会 (下)
 1. 12 東洋風雲録
 1. 13 東洋風雲録
1. 13 清韓方面
 1. 13 両清僧の動静
 1. 14 東洋風雲録
 1. 15 東洋風雲録
 1. 17 東洋風雲録
 1. 18 東洋風雲録
 1. 18 清僧等の鼠賊難 (西本願寺内の出来事)
 1. 19 東洋風雲録
 1. 19 清韓方面
 1. 20 東洋風雲録
 1. 20 清国外務部の照会
 1. 20 青泥窪の忠魂碑
 1. 22 東洋風雲録
 1. 23 太田覚眠氏
 1. 23 東洋風雲録
 1. 23 清韓方面
 1. 24 東洋風雲録
 1. 25 澎湖島の布教所
 1. 25 東洋風雲録
 1. 27 清僧と文中女学校
 1. 27 東洋風雲録
 1. 28 東洋風雲録
 1. 29 東洋風雲録
 1. 30 東洋風雲録
 2. 2 釜山の教況
 2. 2 中国の教界
 2. 2 東洋風雲録
 2. 4 東洋風雲録
 2. 5 青泥窪忠魂堂近況
 2. 5 東洋風雲録
 2. 7 中国の教界
 2. 7 東洋風雲録
 2. 8 東洋風雲録
 2. 9 東洋風雲録
 2. 10 南清教場の悲況
 2. 10 東洋風雲録
 2. 14 東洋風雲録
 2. 15 竹田篤初師逝く
 2. 15 東洋風雲録
 2. 17 東洋風雲録
 2. 18 東洋風雲録
 2. 19 東洋風雲録
 2. 20 東洋風雲録
 2. 20 清国に於ける宗教問題
 2. 22 東洋風雲録
 2. 23 東洋風雲録
 2. 24 東洋風雲録
 2. 27 東洋風雲録
 2. 28 清国に於ける宗教問題
 2. 28 清国皇太后耶蘇教を信ず
 2. 28 韓国浄土宗の布教所
 2. 28 東洋風雲録
 3. 2 東洋風雲録
 3. 3 本願寺の布教を拒む
 3. 3 韓帝の天主教崇奉
 3. 3 東洋風雲録

1905. 3. 4 清韓二国と耶蘇教
 3. 4 満洲雪裡の一老僧
 3. 4 東洋風雲録
 3. 5 東洋風雲録
 3. 7 東洋風雲録
 3. 8 遼陽追吊会の奉告文
 3. 8 東洋風雲録
 3. 9 東洋風雲録
 3. 10 東洋風雲録
 3. 12 台南仏教婦人会
 3. 12 東洋風雲録
 3. 13 訪問・ハリス大僧正
 3. 13 天主教徒暴行事件後聞(一)
 3. 13 東洋風雲録
 3. 14 東洋風雲録
 3. 14 淑徳婦人会の活動 女史清韓語学講習
 所開設趣意書
 3. 15 清国に於ける宗教問題(四)
 3. 15 支那僧と社会制裁
 3. 15 東洋風雲録
 3. 17 河口慧海氏の遭難
 3. 17 東洋風雲録
 3. 18 東洋風雲録
 3. 18 日印通商条約
 3. 19 東洋風雲録
 3. 20 支那僧と本願寺
 3. 20 西派の海外教学費
 3. 20 清僧覚先
 3. 20 台湾布教
 3. 20 上海通信
 3. 20 東洋風雲録
 3. 23 小栗栖香頂師遷化
 3. 23 南清布教の一頓挫
 3. 23 東洋風雲録
 3. 24 韓王と法主
 3. 24 東洋風雲録
 3. 25 東洋風雲録
 3. 27 河口慧海氏の情報
 3. 27 清朝の買取り
 3. 28 韓国開教
 3. 28 東洋風雲録
 3. 29 東洋風雲録
 3. 30 東洋風雲録
 4. 2 浙江開教談(上)
 4. 2 東洋風雲録
 4. 3 浙江開教談(中)
 4. 3 支那新聞記者の捕縛
 4. 3 外務省と清国開教
 4. 3 東洋風雲録
 4. 5 浙江開教談(下)
 4. 5 東洋風雲録
 4. 7 東洋風雲録
 4. 8 奉天付近の追吊法会
 4. 8 韓国行程と大谷派別院
 4. 8 京城別院内の韓人会
 4. 8 京城別院の建築起工
 4. 9 韓国皇帝と仏教
 4. 9 韓国に於ける伊藤明瑞
 4. 9 東洋風雲録
 4. 10 安東県の日進学堂
 4. 10 支那仏教の法難
 4. 10 東洋風雲録
 4. 12 東洋風雲録
 4. 13 南清寺院の史的関係
 4. 14 清国仏教の法難に就いて
 4. 14 東洋風雲録
 4. 15 東洋風雲録
 4. 17 東洋風雲録
 4. 20 韓国大使の来山
 4. 20 韓国大使と東派法主
 4. 20 上海通信
 4. 20 従軍布教使教
 4. 20 東洋風雲録
 4. 22 東洋風雲録
 4. 23 清国天主教士の凶暴(漢文中外日報記)
 4. 24 清国天主教士の凶暴(漢文中外日報記)
 4. 25 浙江省緇素の醒覚
 4. 25 東洋風雲録
 4. 28 東洋風雲録
 4. 29 京城、仁川の宗教(基督教側の報道)
 4. 29 東洋風雲録
 4. 30 鳳凰城に於ける 基督教の活動(上)
 在〇〇〇布教使 某 投
 5. 2 鳳凰城に於ける 基督教の活動(下)
 在〇〇〇布教使 某 投
 5. 2 韓国英親王と東本願寺
 5. 2 東洋風雲録
 5. 3 台湾開教の近況
 5. 3 東洋風雲録
 5. 3 東洋風雲録
 5. 4 東洋風雲録
 5. 5 支那四川教匪蜂起
 5. 5 東洋風雲録
 5. 7 東洋風雲録
 5. 8 東洋風雲録
 5. 9 東洋風雲録
 5. 9 台南信徒の感謝
 5. 10 東洋風雲録
 5. 12 苔香記(一)(戦地通信) 五陵生
 5. 12 東洋風雲録
 5. 13 苔香記(二)(戦地通信) 五陵生
 5. 13 韓国開教と赤松師
 5. 13 東洋風雲録
 5. 14 苔香記(三)(戦地通信) 五陵生
 5. 14 東洋風雲録
 5. 15 東洋風雲録
 5. 17 旅順要塞附布教僧某他
 5. 17 東洋風雲録
 5. 18 東洋風雲録
 5. 19 旅順の招魂祭
 5. 20 開原城内の宗教
 5. 22 東洋風雲録
 5. 23 東洋風雲録

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- | | | | |
|-------------|--------------|-------|--------------------------|
| 1905. 5. 24 | 戦地の教信 | 7. 3 | 清僧大智三覚師 |
| 5. 24 | 東洋風雲録 | 7. 3 | 奉天に於ける本願寺慰問部 |
| 5. 25 | 満洲に於ける外人の伝説 | 7. 3 | 東洋風雲録 |
| 5. 25 | 支那人の覚醒 | 7. 4 | 奉天に於ける本願寺慰問部 |
| 5. 25 | 東洋風雲録 | 7. 4 | 東洋風雲録 |
| 5. 27 | 東洋風雲録 | 7. 5 | 東洋風雲録 |
| 5. 28 | 東洋風雲録 | 7. 7 | 清国聖書の売高 |
| 5. 29 | 印度仏教徒の同情 | 7. 7 | 芝罘の基督教 |
| 5. 29 | 東洋風雲録 | 7. 7 | 東洋風雲録 |
| 5. 30 | 東洋風雲録 | 7. 8 | 東洋風雲録 |
| 6. 2 | 東洋風雲録 | 7. 9 | 韓国基督教便り |
| 6. 3 | 東洋風雲録 | 7. 9 | 東洋風雲録 |
| 6. 4 | 東洋風雲録 | 7. 10 | 東洋風雲録 |
| 6. 5 | 東洋風雲録 | 7. 10 | 京城に於ける仏教伝道 |
| 6. 7 | 東洋風雲録 | 7. 12 | 東洋風雲録 |
| 6. 8 | 東洋風雲録 | 7. 13 | 東洋風雲録 |
| 6. 9 | 台湾協会学校の仏教団体 | 7. 13 | 樺太漁業権と当局 |
| 6. 9 | 東洋風雲録 | 7. 14 | 東洋風雲録 |
| 6. 10 | 達頼喇嘛の帰藏 | 7. 15 | 能海寛氏遂に逝けり 南条文雄 |
| 6. 10 | 東洋風雲録 | 7. 15 | 日本僧の仏教宣布 |
| 6. 10 | 上海通信 在上海 哲魔 | 7. 15 | 東洋風雲録 |
| 6. 12 | 喇嘛の別法 | 7. 17 | 土人の基督教(上) |
| 6. 12 | 東洋風雲録 | 7. 17 | 東洋風雲録 |
| 6. 13 | 東洋風雲録 | 7. 18 | 土人の基督教(下) |
| 6. 14 | 「満洲」と言ふ名義と仏教 | 7. 19 | 蒙古仏教事情 |
| 6. 14 | 香港と仏教 | 7. 20 | 南洋諸島の宗教 |
| 6. 14 | 台北日基教会 | 7. 20 | 東洋風雲録 |
| 6. 14 | 釜山日基説教所 | 7. 22 | 奥村五百子一行の消息 |
| 6. 15 | 東洋風雲録 | 7. 22 | 満洲の蔬菜 |
| 6. 17 | 厦門教信 | 7. 22 | 東洋風雲録 |
| 6. 17 | 東洋風雲録 | 7. 23 | 支那人と宗教心 |
| 6. 18 | 清国布教上人選の注意 | 7. 23 | 東洋風雲録 |
| 6. 18 | 杭州学堂生の進歩 | 7. 24 | 従軍僧岩永法電氏 |
| 6. 19 | 大連倶楽部の近況 | 7. 24 | 東洋風雲録 |
| 6. 19 | 大連に於ける降誕会 | 7. 27 | 西藏探検能海寛氏の事跡(一) |
| 6. 20 | 清国と仏教伝道 | 7. 27 | 東洋風雲録 |
| 6. 20 | 千島に於ける西派 | 7. 28 | 西藏探検能海寛氏の事跡(二) |
| 6. 20 | 東洋風雲録 | 7. 28 | 東洋風雲録 |
| 6. 22 | 湖南の老禪師(上) | 7. 29 | 東洋風雲録 |
| 6. 22 | 達頼喇嘛の消息 | 7. 30 | 東洋風雲録 |
| 6. 22 | 東洋風雲録 | 8. 2 | 西藏探検能海寛氏の事跡(三) |
| 6. 23 | 湖南の老禪師(下) | 8. 2 | 東洋風雲録 |
| 6. 23 | 韓国荒蕪地と基督教 | 8. 3 | 満洲の客窓にて 五月雨の雫 |
| 6. 23 | 東洋風雲録 | 8. 3 | 喇嘛僧談 |
| 6. 24 | 千島の仏教 | 8. 3 | 東洋風雲録 |
| 6. 24 | 京城に於ける岡山孤児院 | 8. 4 | 喇嘛僧談(続) |
| 6. 24 | 東洋風雲録 | 8. 4 | 樺太布教隊 |
| 6. 25 | 東洋風雲録 | 8. 4 | 東洋風雲録 |
| 6. 27 | 東洋風雲録 | 8. 5 | 喇嘛僧談(続) |
| 6. 28 | 蒙古の寺院 | 8. 5 | 東洋風雲録 |
| 6. 28 | 東洋風雲録 | 8. 7 | 喇嘛僧談(続) |
| 6. 28 | 満洲だより(前) | 8. 7 | 達頼喇嘛の召還 |
| 6. 29 | 東洋風雲録 | 8. 7 | 上海通信 |
| 6. 30 | 東洋風雲録 | 8. 7 | 東洋風雲録 |
| 7. 2 | 清国和尚の来遊 | 8. 8 | 中外日報記者各位 在蒙古北都部 升
巴陸龍 |
| 7. 2 | 東洋風雲録 | | |

1905. 8. 8 東洋風雲録
 8. 9 韓国皇室と東本願寺
 8. 9 東洋風雲録
 8.10 雲南喇嘛僧の暴挙
 8.10 東洋風雲録
 8.14 清国基督教発展の機
 8.14 東洋風雲録
 8.15 新法主と韓国
 8.17 東洋風雲録
 8.18 東洋風雲録
 6.18 杭州学堂生の進歩
 8.19 露人布教
 8.19 東洋風雲録
 8.19 満洲軍視察談
 8.20 樺太開教者の心得
 8.20 東洋風雲録
 8.22 西派の樺太布教
 8.22 東洋風雲録
 8.23 奥村女史一行の成績
 8.23 色丹に於ける日露兩教民
 8.23 東洋風雲録
 8.24 能海克氏の訃音に就いて 南条文雄
 8.24 東洋風雲録
 8.24 遼東西方海岸鉄道敷設権消滅
 8.25 大谷派の樺太開教
 8.25 エトロッパに於ける仏教
 8.25 東洋風雲録
 8.27 東洋風雲録
 8.28 旅順布教の状況
 8.28 錫倫島に於ける仏教の紛擾
 8.28 東洋風雲録
 8.29 喇嘛僧雑談
 8.29 清国布教に関する請願
 6.29 清国に於ける寺院保護
 8.29 婦化寺院と我外務省
 8.29 東洋風雲録
 8.30 喇嘛僧雑談(続)
 8.30 南清に於ける仏教徒の迫害
 8.30 東洋風雲録
 8.30 大觀子を論ず(上)
 8.30 韓王の迷信
 8.30 輸出団扇と回教徒
 8.30 韓国の婦人会
 9. 2 喇嘛僧雑談(続)
 9. 2 大觀子を論ず(下)
 9. 2 東洋風雲録
 9. 3 喇嘛僧雑談(続)
 9. 3 東洋風雲録
 9. 4 布教使巡教給數
 9. 4 奉天慰問部概観
 9. 4 喇嘛僧雑談(続)
 9. 4 西派の留学生
 9. 5 清国寺院保護令
 9. 5 支那に於ける舍身居士
 9. 5 東洋風雲録
 9. 7 喇嘛僧雑談(続)
 9. 7 樺太ルイコフ寺院葬式の模様
 9. 8 清韓經營と僧侶の意向
 9. 8 スマンガラ僧正
 9. 8 東洋風雲録
 9. 9 西派營口布教
 9. 9 東洋風雲録
 9.10 東洋風雲録
 9.12 奉天の本派慰問部
 9.12 東洋風雲録
 9.13 鉄嶺に於ける本派軍人慰問部
 9.13 韓民の基督教洗礼
 9.15 東洋風雲録
 9.17 東洋風雲録
 9.18 東洋風雲録
 9.19 支那の仏教伝道
 9.20 東洋風雲録
 9.20 噯喇嘛の掃蕩
 9.22 東印度人の講話
 9.23 韓国と米國
 9.23 南浮智成氏の渡清
 9.23 東洋風雲録
 9.24 東洋風雲録
 9.27 日宗韓国開教談(上) 榮井恵能師
 9.27 安東県の臨濟寺
 9.27 東洋風雲録
 9.28 樺太に於ける西本願寺
 9.28 豊島了寛氏
 9.28 前田徳水氏
 9.28 東洋風雲録
 9.29 寺本婉雅師の入蔵
 9.29 膠州湾!!!青島
 9.29 東洋風雲録
 9.30 日宗韓国開教談(下)
 10. 2 東洋風雲録
 10. 3 東洋風雲録
 10. 3 在外布教師の軋轢に就て
 10. 3 東洋風雲録 樺太通信(一)
 10. 4 回教徒とマセドニア
 10. 5 樺太臨時部開始
 10. 5 韓人と基督教徒
 10. 5 回教徒の動乱
 10. 5 東洋風雲録
 10. 7 樺太布教の困難
 10. 7 慰問実況
 10. 7 東洋風雲録
 10. 8 能海克氏と寺本婉雅氏
 10. 8 支那伝道の障害
 10. 9 寺本氏の西藏探検談
 10. 9 樺太に於ける追弔法会
 10.10 河口慧海氏の入蔵疑問
 10.10 東洋風雲録
 10.12 台北別院の法要
 10.12 東洋風雲録
 10.13 東洋風雲録
 10.14 西本願寺と北京宮廷
 10.14 東洋風雲録

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- | | | | | |
|--------------|-----------------------|------------|-----------------------|---------|
| 1905. 10. 15 | 満洲布教総監 | 11. 30 | 報道・外交方面 | 議了と未了問題 |
| 10. 15 | 東洋風雲録 | 12. 2 | 報道・外交方面 | 護歩と増長 |
| 10. 17 | 東洋風雲録 | 12. 2 | 撤兵と冬營 | |
| 10. 19 | 東洋風雲録 日露講話条約発表 | 12. 3 | 釜山通信 | 特別通信員報 |
| 10. 20 | 東洋風雲録 | 12. 3 | 報道・朝鮮方面 | |
| 10. 22 | 清国に於ける布教経営 | 12. 3 | 報道・軍事方面 | 満洲経営費 |
| 10. 22 | 東洋風雲録 | 12. 4 | 在清教師の苦境 | |
| 10. 23 | 錫蘭島に於ける仏教の復興 | 12. 4 | 台湾に於ける島地老師 | |
| 10. 23 | 北韓露軍の窮態 | 12. 4 | 報道・朝鮮方面 | |
| 10. 23 | 満洲撤兵計画 | 12. 14 | 西藏仏教史の編纂 | |
| 10. 25 | 宣教師の排日運動 | 12. 14 | 報道・軍事方面 | 哈爾濱の動乱 |
| 10. 27 | 韓国開教と基督教の断行 | 12. 14 | 韓国駐屯軍 | |
| 10. 27 | 樺太の僧影 | 12. 14 | 情態回復 | |
| 10. 27 | 西本願寺の清韓布教 | 12. 15 | 遼東の大谷廟所 | |
| 10. 28 | 鎮南浦に於ける仏教 | 12. 18 | 大谷尊由師の凱旋 | |
| 10. 28 | 韓帝の詔勅 (人材登用と義兵鎮撫) | 12. 19 | 開教総監と贊事 | |
| 10. 29 | 韓人間の募金 | 12. 20 | 台湾生蕃人の布教 | |
| 10. 29 | 宣教師の暴行 | 12. 20 | 清国開港場の基督教徒 | |
| 10. 30 | 清国人の婦敬式 | 12. 20 | 鷄冠山陥落紀念大法要 | |
| 11. 2 | 韓国に於ける浄土宗僧侶の乱暴 | 12. 20 | 台北の教誨師 | |
| 11. 3 | 戦地の宗教感 (一) (在満洲、三崎諦観) | 1906. 1. 1 | 西藏法王 | |
| 11. 5 | 戦地の宗教感 (二) (在満洲、三崎諦観) | 1. 1 | 清国布教と我政府 | |
| 11. 5 | 清国の新教案 | 1. 1 | 回教徒の惨殺 | |
| 11. 8 | 菅真海氏 支那布教談 | 1. 1 | 台北別院の納骨所 | |
| 11. 8 | 宣教師の殺害 | 1. 1 | 韓国に於ける天国 | |
| 11. 10 | 大谷派と外務省 | 1. 1 | 西藏僧の印度行 | |
| 11. 10 | 宣教師殺害事件 | 1. 7 | 韓国に於ける基督教 | |
| 11. 12 | 清国布教問題 | 1. 7 | 北京通信 (事故延着) | |
| 11. 12 | 禪僧の満洲伝道 | 1. 7 | 満洲の塵影 | |
| 11. 12 | 二連枝の凱旋 | 1. 8 | 日清協約 | |
| 11. 13 | 日露兩國前線 | 1. 8 | 韓帝来朝の噂 | |
| 11. 14 | 韓国の耶蘇教 (上) | 1. 9 | 西藏喇嘛と英国 倫理 | |
| 11. 14 | 釜山通信 | 1. 9 | 日清協約 (続き) | |
| 11. 15 | 韓国の耶蘇教 (下) | 1. 10 | 東亜開進教育会副会長 片淵琢氏の談 (上) | |
| 11. 15 | 西派の浦港布教開始 | 1. 13 | スマンガラ大僧正 | |
| 11. 15 | 満洲露軍と内乱 | 1. 13 | 釜山の教界 | |
| 11. 17 | グライ、ラマの婦蔵 | 1. 14 | 訪問 支那伝道法の 私見 (上) | |
| 11. 18 | 独立の軍隊布教師 | 1. 14 | 東亜開進教育会副会長 片淵琢氏の談 (下) | |
| 11. 19 | 満洲と自由教会 | 1. 15 | 訪問 支那伝道法の 私見 (中) | |
| 11. 20 | 報道・外交問題 日韓交渉 | 1. 17 | 訪問 支那伝道法の 私見 (下) | |
| 11. 20 | 北京方面 | 1. 18 | 満洲将来の宗教 在満洲 三崎諦観 寄 | |
| 11. 20 | 清朝の反省 | 1. 18 | 信念の友の声 | |
| 11. 22 | 南清布教と各宗 | 1. 18 | 日清協約の秘密条項 | |
| 11. 23 | 南清仏教徒の反駁 | 1. 19 | グライラマ蔵府に入る | |
| 11. 25 | 哥港雁信 (十一月四日發) | 1. 19 | 天道教会の組織 | |
| 11. 25 | 報道・外交問題 韓国總督庁設置 | 1. 20 | 清国の仏壇は神仏混淆 | |
| 11. 25 | 伊藤大使負傷 | 1. 20 | 満洲布教の将来 在満洲 三崎諦観 寄 | |
| 11. 25 | 韓皇来遊説 | 1. 22 | 韓国留学生問題 | |
| 11. 27 | 西派の清韓布教 | 1. 22 | 戦地布教の難易 在満洲 三崎諦観 寄 | |
| 11. 27 | 布教特権の拒絶 | 1. 23 | 韓国元山より 福高六々生 | |
| 11. 27 | 樺太に於ける西本願寺 | 1. 23 | 連枝の韓国永住 | |
| 11. 28 | 報道・外交問題 第三回会見は鉄道問題 | | | |
| 11. 29 | 清国海軍拡張案 | | | |

1906. 1. 23 韓国大使一行
 1. 24 韓国元山より 福高六々生
 1. 27 比律賓売渡説
 1. 28 マニラ市の仏教寺院
 1. 29 哈爾濱と浦塩斯徳(上)
 1. 30 退韓開教使
 1. 30 戦地巡錫談(上) 建仁寺派 関令道 師
 1. 30 哈爾濱と浦塩斯徳(下)
 1. 30 暹羅の新留学生
 2. 2 稲垣公使の暹羅談
 2. 2 北京通信(一月廿日發)
 2. 2 北京の教界
 2. 2 京城の教界
 2. 2 清国布教問題
 2. 3 北京通信(一月廿日發)
 2. 3 遼陽の慰問部近況
 2. 3 四川に教案起らんとす
 2. 4 論壇・韓国宗教談に就て
 2. 4 京城の教界
 2. 4 印度人と日本の基督教
 2. 4 清国の対露提議
 2. 5 露清会議
 2. 5 烏港乱脈
 2. 7 京城の宗教家会合
 2. 7 回教の救世主の出現
 2. 8 肅親王の露国行
 2. 8 露国と肅親王
 2. 8 威海衛還附
 2. 8 金州丸俘虜
 2. 9 印度の珍客
 2. 9 清韓その他に於ける女流教育家
 2. 10 米清関係
 2. 10 蒙古より帰朝の河原女史
 2. 10 広東の強盜
 2. 10 韓国民の天道教帰依
 2. 10 清国人の求法
 2. 13 金州丸俘虜審判
 2. 13 清国動乱の予想
 2. 13 日韓博覧会
 2. 13 韓国樺太の郵便
 2. 13 蒙古王の教育顧問 河原操女史の談
 2. 13 匪徒の宣教師襲撃
 2. 14 支那布教の困難
 2. 14 旅順口土人の恐怖
 2. 15 樺太漁業権の空名
 2. 17 河原女史蒙古談
 2. 17 鴨緑江森林伐採会社
 2. 17 居留邦人数
 2. 19 清国の対露要求
 2. 19 韓国財政の前途(日賀田顧問の談)
 2. 19 韓国統監の兵権
 2. 19 暴徒日語学校を襲ふ
 2. 19 樺太経営同志会の協議
 2. 19 帰還後の金州丸俘虜將校
 2. 19 黒龍江地方の露人
 2. 19 清国留学生の昨今
 2. 19 統監旗制定
 2. 19 北京教信(二月八日發)
 2. 19 清人の警鐘乱打
 2. 20 高山回収運動
 2. 20 南清開教
 2. 22 マカオ売払問題
 2. 22 排外熱予防の忠告
 2. 24 新留学の蒙古女生
 2. 24 馬賊頭領の帰順
 2. 24 蒙古王の新教師
 2. 24 蒙古の話(河原操子談)
 2. 25 慶親王我忠言を謝す
 2. 25 在露邦人の自由
 2. 25 韓国裁判制度
 2. 25 氷雪裡の樺太
 2. 25 満洲兩軍撤退近状
 2. 25 松花黒龍兩江の交通権
 2. 25 支那と米國
 2. 25 露清談判の予備
 2. 25 清国境上の露兵
 2. 25 樺太の露人漁業問題
 2. 25 新民屯奉天鉄道
 2. 25 哥老会動く
 2. 25 宣教師迫害
 2. 25 京城教信
 2. 27 米國清国を危む
 2. 27 露国提案起因
 2. 27 達頼喇嘛の帰藏
 2. 28 韓国長城の暴徒
 2. 28 馬賊の猖獗
 2. 28 婦化人の入營
 2. 28 台南の宗教
 2. 28 韓国に於ける東北救済
 3. 2 雑報 浦塩近況 馬賊の猖獗 南昌暴動別報
 3. 2 マホメット教徒の帰国
 3. 3 雑報 北京宮廷の警戒 南昌の動搖 外務省と東亞同文会 土耳其政府通商条約の申込 樺太将来の難問題
 3. 3 河南の騷擾 日本教師の遭難
 3. 12 雑報 南昌教案
 3. 13 雑報 宣教師の南昌集合 宣教師殺害事件 西太后の敕命 北京仏教会 基督教の満洲伝道 上海に於ける仏督二教
 3. 13 台湾社事財産処分手続
 3. 13 台湾基隆の追吊法会
 3. 14 雑報 群山の教界
 3. 14 雑報 彰化学堂
 3. 14 南昌事件真相
 3. 14 清国湖南の回々教
 3. 15 雑報 朝鮮大邱に於ける天主教
 3. 15 上海の基督教
 3. 15 群山に於ける淨日
 3. 17 雑報 開放地要求

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1906. 3. 17 雑報 布教問題 海外仏徒の義金寄贈
 3. 18 雑報 清国布教と外務省 政教分離問題と清国天主教 清国布教取締の訓令
 3. 18 印度に於ける人種と宗教
 3. 18 釜山の教影 (十三日発)
 3. 18 雑報 南清外教徒の帰還配置
 3. 19 雑報 台湾特別伝道 福建の耶蘇教
 3. 19 京城に於ける忠死者追弔法会
 3. 19 雑報 対外務省運動の合同
 3. 20 雑報 教会堂破壊
 3. 23 論説 清国に於ける文治的経営 及び宗教的施設 (上) 在早稲田大学 岡田耀賢
 3. 23 雑報 仁川仏教各宗連合会 京城婦人会の篤志
 3. 24 論説 清国に於ける文治的経営 及び宗教的施設 (中) 在早稲田大学 岡田耀賢
 3. 24 雑報 教案交渉開始
 3. 25 論説 清国に於ける文治的経営 及び宗教的施設 (下) 在早稲田大学 岡田耀賢
 3. 27 雑報 南昌教案 (北京通信)
 3. 28 雑報 南昌教案 (続) (北京通信)
 3. 28 雑報 北京通信 (三月十七日発) 英仏と教案
 3. 29 浄土開教使と地震
 3. 29 雑報 南昌事件の落着
 3. 30 雑報 在清宣教師の暴戻
 3. 30 清僧陳光明師の骨
 4. 2 釜山の義捐金応募好況
 4. 3 台湾蕃民の迷信
 4. 5 噫、陳光明師
 4. 8 韓国の女活仏
 4. 9 雑報 回教の北滿洲に於ける一斑 雲南の教会襲撃
 4. 9 韓国の女活仏 (続)
 4. 13 韓国に於ける仏教徒の悪行為
 4. 13 雑報 南昌教案交渉
 4. 13 台湾震災義捐大衆托鉢
 4. 14 雑報 教案問題の善後
 4. 15 雑報 英国と達頼喇嘛 南昌教案の行惱 基督教徒の独立
 4. 17 雑報 南昌事件の談判
 4. 17 雑報 清韓布教 本派本願寺の南清開教 本派本願寺の台湾震災見舞 台湾仏教会の震災慰問
 4. 18 雑報 南昌教案処断上論 南昌教案の行惱
 4. 19 雑報 大道社員の滿洲移住 韓人の耶蘇教
 4. 19 北京の別院
 4. 20 北京の志士追悼会
 4. 20 京城に於ける東西僧の和解
 4. 20 樺太の雪 痴山義亮氏
 4. 22 南昌事件の要求
 4. 23 雑報 樺太の宗教家
 4. 23 烏居龍蔵氏の出発
 4. 24 樺太の開教談
 4. 27 雑報 南昌事件、英仏の要求
 4. 28 雑報 南清仏教の盛運 (上) 旅順の基督教慰問部 滿洲の墮落婦人救済
 4. 29 雑報 南清仏教の盛運 (中) 露国と達頼喇嘛
 4. 30 雑報 印度総督と達頼喇嘛
 4. 30 雑報 南清仏教の盛運 (下)
 5. 2 雑報 南昌事件の成行 南昌教案落着 露人宣教師入蔵
 5. 3 支那人布教
 5. 3 雑報 韓人と日本僧侶 韓国と布哇平壤に開教
 5. 4 雑報 京城の誕生会 埃及の回教徒
 5. 5 支那人の帰向続々
 5. 5 雑報 釜山港の布教状態
 5. 5 清韓語学校の設立
 5. 7 雑報 遼陽より 胡風生 營口教信
 5. 7 雑報 南昌教案の非難 清国の教案準備
 5. 7 朝鮮の仏教
 5. 8 朝鮮の仏教
 5. 8 雑報 憫れむべき従軍僧 台北婦人会
 5. 9 雑報 南昌事件の其後
 5. 9 朝鮮の仏教
 5. 10 南昌事件再調査
 5. 10 支那に於ける猶太人
 5. 10 雑報 西藏と英清 教堂燒夷説 露国僧侶の侵入
 5. 10 雑報 西本願寺と内田公使 清韓語学校位置
 5. 12 雑報 印度に於ける河口氏 開教練習所の開所式
 5. 13 雑報 澎湖島の教光 (六日発信) 澎湖島の千人塚
 5. 13 雑報 浦塩斯徳開教
 5. 14 雑報 蒙古の土地密売 色丹の布教 朝鮮僧と穆山禪師
 5. 15 喇嘛送迎兵謝絶
 5. 15 雑報 福州の開教
 5. 17 雑報 暹羅皇族と大仏 南清と滿洲の宗教
 5. 17 山東省の教育と宗教
 5. 20 雑報 西派法主の樺太巡教
 5. 20 浄土宗管長の韓国巡教
 5. 20 雑報 清韓に於ける宗教政策
 5. 20 かきあつめ 清露談判
 5. 22 雑報 清国人の参拝
 5. 23 雑報 教案問題未決
 5. 25 雑報 北京会堂の起工式
 5. 27 教案と日本仏教
 5. 27 曹洞宗と樺太
 5. 27 滿洲会
 5. 28 雑報 南昌事件の現状

1906. 5. 29 雑報 朝鮮たより 南昌教案と袁世凱
平壤に於ける浄土宗 樺太開教の現
状 清国營口の布教 清国人の帰敬式
太田覚眠氏の近状
5. 29 かきあつめ 満洲視察
5. 30 安東県の布教
5. 30 京城別院の敷地
5. 30 満韓婦人問題大会
6. 2 南昌教案談判
6. 2 かきあつめ 韓国警報 洪州城包圍
6. 3 噓嘸の喇嘛
6. 3 雑報 樺太布教所の建築 清国の誕生
会
6. 3 かきあつめ 洪州城占領確報 洪州城
占領別報
6. 4 印度の奇習
6. 4 満韓方面 洪州匪賊の軍状 暴徒蜂起
の影響 領事館閉館 満洲の郵電 樺
太の教育計画
6. 5 雑報 台湾教況一斑
6. 5 満韓方面 洪州城の暴徒鎮定 清兵、
英艦を砲撃す 露国の満洲経営委員会
満洲奉天の大火災 満洲土人の武器
隠匿
6. 5 清満韓方面 日露と朝鮮問題 満洲出
張の用向 土方警部の最後 泰ト不穩
露国の横暴 満洲守備兵舎 馬賊軍
器を奪ふ
6. 7 噓嘸喇嘛
6. 7 開教練習所の近況
6. 8 セーロン島宗教界の混乱
6. 8 新渡戸博士を訪ふ
6. 9 雑報 清廷と達頼喇嘛
6. 10 井上博士印度視察談 清蔭記
6. 12 雑報 教民の衝突 清国開教の方針
6. 13 雑報 支那に於ける教会合同 印度の
シッブ宗 開教用の図書 清韓人の信
条
6. 13 雑報 樺太教況 在哥港 楠溪生報
6. 13 満韓方面 統監の韓廷詰責 統監府鉄
道部員 総領事の昌図行 学生の満洲
視察 大連開放準備 露人と北満洲
伝染病院新設 次長の満洲用向 奉天
開放会議
6. 14 南昌教案行惱
6. 14 東京方面 満洲経営会議
6. 15 寄書 韓開教に就て 機先学堂にて
李容明
6. 15 雑報 營口の仏教婦人会
6. 15 満韓方面 満洲経営三大綱 福島参謀
次長 又も貧民暴挙 元帥一行 賊魁
就縛
6. 17 満韓方面 匪徒来襲 洪州の俘虜韓人
暴徒鎮庄 金升文の罪状自白 満韓
塩業会社創立 長春線の破損 京釜鉄
道買収額
6. 18 雑報 營口より
6. 18 海外方面 大連開放督促
6. 18 満韓方面 豊臣丸沈没 江原道形勢不
穩
6. 19 蒙古語と日本語 (佐々木安五郎氏談
話)
6. 19 満韓方面 海賊の跳梁 韓国乱民と吉
林 鴨緑江伐林業
6. 20 南昌追悼会の抗議
6. 20 満韓方面 韓高官の拘引 京釜京義経
営費 黒龍江鉄道と露国 大連浚渫工
事 恭親王と蒙古
6. 22 雑報 北京通信 達頼密使 喇嘛学堂
西本願寺 在留邦人 寺本婉雅
6. 22 雑報 印度の習俗 暴徒の宣教師襲撃
太田覚眠氏
6. 23 南昌事件落着
6. 23 雑報 京城基督教婦人会
6. 23 雑報 統監と基督教 清国人の教化難
6. 24 安徽教案事件
6. 24 教案別約
6. 24 満韓方面 日韓人の争闘 賊魁と宮内
官 樺太無銭通信 日露協会の景気
6. 25 雑報 支那の基督教
6. 29 雑報 開教練習所の近況
6. 30 南昌事件落着後聞
6. 30 雑報 清国の僧侶排斥 樺太の布教所
7. 2 雑報 教会堂焼棄 蒙古回々教徒の信
念
7. 2 各種方面 学生満韓旅行 (通牒)
7. 3 雑報 韓国天主教徒の暴挙 浙江の暴
動 外蒙古探検者帰る
7. 4 各種方面 露軍の日語奨励 露国の大
騒乱 浦塩の影響
7. 5 各種方面 満洲農事試験場 韓国の警
官傭聘 馬賊と露將校 陰謀派掃蕩策
満洲旅行無免状
7. 7 仏国宣教師土地買収
7. 7 雑報 朝鮮僧曹洞宗大学に入る 太田
覚眠氏
7. 9 雑報 南昌の教案調印 波斯の宗教
旅順の教派 奉天の近況
7. 10 雑報 營口の二宗派 安東県の宗教
大連の教況 義州の仏教
7. 13 雑報 西比利亚の本願寺熱
7. 14 雑報 満洲通信 (上) 満洲利源調査
会員 古川専太郎氏 日本と回々教
南昌知県の死因
7. 15 雑報 満洲通信 (下) 満洲利源調査
会員 古川専太郎氏
7. 17 北京通信 七月六日発 外務部 仏教
学堂 阿嘉活仏 自立教堂 庫倫活仏
錫蘭島の仏教 (基督教徒の観察したる)
7. 17 雑報 張總督と伝道 開教地域の更定
釜山別院の孟蘭盆会
7. 22 雑報 韓国禅僧の富士登山

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1906. 7. 23 雑報 満洲は分割
 7. 25 雑報 基督教徒の清国伝道法 清国の仏基合同 清国基督教徒の合同
 7. 25 雑報 回々教の日本布教 清僧覚先氏の表裏
 7. 27 清廷警告を受く
 7. 30 雑報 釜山本派布教場
 7. 30 韓人と唐辛
 7. 30 各種方面 馬賊公報
 8. 2 雑報 大連より(七月廿三日) 旅順より(七月廿四日) 再び旅順より(七月廿五日)
 8. 2 雑報 朝鮮便り 満洲利源調査会員 古川専太郎氏 上海に教堂を起す
 8. 3 雑報 朝鮮便り(七月廿九日京城発) 満洲利源調査会員 古川専太郎氏
 8. 4 回々教徒の怪気炎
 8. 4 旅順奉天間の汽車中にて
 8. 4 紹介 支那開教の歴史
 8. 4 各種方面 肅親王の警告
 8. 5 紹介 支那開教の歴史
 8. 5 蒙古の礼式(佐々木安五郎氏談話)
 8. 5 雑報 印度を觀たる感(一) 奉天より(七月廿八日)
 8. 7 雑報 印度を觀たる感(二) 牧師 原田助氏 樺太に於ける宗教
 8. 10 雑報 樺太の法主と裏方 樺太の新殿堂 樺太雜信
 8. 12 雑報 寺本婉雅氏の情報 營口より(八月一日) 安東県より(八月四日) 平壤より(八月七日)
 8. 12 雑報 露国の喇嘛懐柔策 京城の宗教家懇話会
 8. 12 各種方面 日清協約討議
 8. 13 東文学社と中島裁之氏
 8. 13 北京教堂工事の故障
 8. 13 各種方面 馬賊討伐
 8. 14 大谷派の京城別院
 8. 17 雑報 大谷派と韓国布教 鎮南浦の布教 營口仏教婦人会 新疆の教案 安徽の匪乱 回々教僧侶の侵掠 北清事変第七回紀念日
 8. 17 雑報 再入韓国平壤府 臨濟宗從軍布教師 旭布嶽(寄)
 8. 17 各種方面 馬賊副首魁の捕縛
 8. 18 雑報 再入韓国平壤府(統) 臨濟宗從軍布教師 旭布嶽(寄)
 8. 22 雑報 樺太近信に曰く
 8. 23 雑報 旅順の追悼会
 8. 24 韓国に於ける米国宣教師
 8. 24 雑報 京城別院の落成 東本願寺は統監府以上
 8. 25 印度博覧会出品勧誘
 8. 25 蒙古語と日本語
 8. 27 雑報 内地布教の抗議 開教練習所
 8. 27 各種方面 清国の立憲計画
 8. 28 雑報 鎮南浦だより 唵囉喇嘛の帰藏 西比利亞布教者の資格
 8. 29 安東県の本願寺
 8. 29 雑報 印度新聞と前太守夫人の死 清国に於ける両本願寺 安東県の基督教
 8. 30 満韓布教の前途
 8. 30 安徽の教案
 8. 30 喇嘛に対する警戒
 8. 30 清国の布教排斥
 8. 30 雑報 朝鮮各地布教現状 清国人の仏教調査
 8. 30 各種方面 北京大改革案
 9. 2 雑報 伊藤賢道氏の退清 退清命令の表面 布教師の退去命令に就て
 9. 2 各種方面 大連開放と露国
 9. 3 伊藤賢道氏の退清
 9. 3 清国僧侶の苦境
 9. 3 退清僧の談
 9. 3 退清命令
 9. 4 布教師の対清と本山の態度
 9. 4 營口仏教婦人会の第二艦隊慰問
 9. 4 紹介 清国仏教問題
 9. 4 雑報 福建布教の影響
 9. 4 雑報 清国の仏教徒
 9. 5 雑報 退清僧の談(完)
 9. 5 各種方面 貝加爾鉄道水害
 9. 7 清僧覚先の入獄
 9. 7 東文学社の近状
 9. 7 雑報 退清僧と帝国領事
 9. 8 清僧の財力は日本僧以上
 9. 8 雑報 土人子弟の教育
 9. 9 杭州法難顛末(一)
 9. 9 韓国平壤の諸宗会堂
 9. 10 杭州法難顛末(二)
 9. 10 雑報 印度南部伝道統計
 9. 12 清遊漫筆(一) 堂屋敷生
 9. 12 雑報 光瑞商人の渡清準備
 9. 13 杭州法難顛末(三)
 9. 13 紹介 清国の仏教問題(上)
 9. 13 清遊漫筆(二) 堂屋敷生
 9. 13 雑報 法主渡清に対する賛否二派 領事の回答 福建の私闘頻々
 9. 14 杭州法難顛末(四)
 9. 14 紹介 清国の仏教問題(下)
 9. 14 雑報 満洲古代の宗教 甲斐寛中氏談
 9. 15 杭州法難顛末(五)
 9. 15 雑報 台湾の教況(一)
 9. 15 雑報 満洲古代の宗教(二) 甲斐寛中氏談
 9. 15 清遊漫筆(三) 堂屋敷生
 9. 17 清遊漫筆(四) 堂屋敷生
 9. 17 雑報 台湾の教況(二)
 9. 17 雑報 北京の小学校
 9. 17 各種方面 博恭王御召艦 満洲問題交渉 賊徒敗走

1906. 9. 18 本派法主の樺太談
 9. 18 雑報 台湾の教況(三)
 9. 18 雑報 本派法主樺太巡經の光景 營口
 仏教婦人会例会
 9. 19 噫嘸喇嘛と露国
 9. 19 雑報 台湾の教況(四)
 9. 20 杭州法難顛末(六)
 9. 20 清人の迷信
 9. 20 雑報 台湾の教況(五)
 9. 20 雑報 法主の清国漫遊 渡清に就いて
 の交渉
 9. 27 雑報 光瑞商人の清国漫遊 銅山鎮事
 件の落着 牛莊仏教育年会
 9. 27 雑報 布教所新設
 9. 28 印度仏教の殘影 大宮孝潤師の談片
 9. 29 雑報 光瑞法主の渡清談 布教に関す
 る道台の方針 韓国公定へ獻経
 9. 29 基督教徒の清国伝道
 9. 30 雑報 清人の頑迷
 10. 2 雑報 福建布教権問題
 10. 2 各種方面 日露と清国態度 台湾富籤
 と内地人 韓公と朴泳孝氏 大連在住
 の日本人
 10. 3 雑報 台湾神社と故児玉子
 10. 3 雑報 京城別院の落成式 清僧の斬罪
 10. 4 亡国の惨影(1) 大宮孝潤師の印度
 談
 10. 4 雑報 韓国は本派
 10. 5 杭州法難顛末(七)
 10. 5 亡国の惨影(2) 大宮孝潤師の印度
 談
 10. 5 雑報 台湾総督府の仏教講話
 10. 5 各種方面 北滿旅行の自由
 10. 8 雑報 滿韓所見
 10. 8 各種方面 北滿の昨今
 10. 9 回教徒の活動
 10. 9 各種方面 樺太の電報料 日印協会総
 会 南滿株千倍余
 10. 10 韓帝連枝を慰問す
 10. 12 雑報 河口氏の梵典搜索事業
 10. 13 雑報 渡清後の本派法主
 10. 15 雑報 營口仏教婦人会の近況 遼陽の
 基督青年会
 10. 15 各種方面 樺太定界員引揚 樺太の越
 年準備
 10. 19 雑報 上海通信
 10. 22 雑報 樺太の宗教界
 10. 22 雑報 營口仏教婦人会
 10. 23 円心雑談(一) 堂屋敷居士
 10. 24 円心雑談(二) 堂屋敷居士
 10. 24 福州鼓山の湧泉寺
 10. 25 雑報 噫嘸喇嘛保護訓令
 10. 25 円心雑談(三) 堂屋敷居士
 10. 28 雑報 又教案
 10. 28 雑報 小西藏に於ける婚姻葬祭
 10. 28 円心雑談(四) 堂屋敷居士
 10. 28 雑報 漢口と上海
 10. 28 福州と老實教師
 10. 29 円心雑談(五) 堂屋敷居士
 雑報 營口仏教婦人会の赤城艦慰問
 牛莊仏教育年会
 10. 30 円心雑談(六) 堂屋敷居士
 11. 2 賊、法主を襲ふ
 11. 2 円心雑談(七) 堂屋敷居士
 11. 5 雑報 大連女子技芸学校
 11. 5 奉天の寺院
 11. 5 円心雑談(八) 堂屋敷居士
 11. 5 雑報 韓国拓殖会社と本派法主
 11. 7 雑報 支那伝道学校
 11. 12 喇嘛王近状
 11. 13 雑報 模範的寄宿舎
 11. 13 雑報 姆長及姆母の滿洲行
 11. 13 回々教徒と印度
 11. 13 雲照律師滿韓巡錫記抄
 11. 14 雑報 清国仏教伝道問題
 11. 15 上海通信(八日發 一邱生)
 11. 19 雑報 韓国の開教式
 11. 19 各種方面 馬賊討伐
 11. 20 外信 西安通信(上) 在西安 渡辺
 哲乘
 11. 22 外信 西安通信(下) 在西安 渡辺
 哲乘
 11. 22 雑報 大連仏教婦人会
 11. 23 大連に於ける基督教
 11. 23 雑報 營口仏教婦人会
 11. 25 雑報 清国教報
 11. 25 雑報 韓国開教式の光景
 11. 27 清国布教問題
 11. 27 大連と宇佐宮教会
 11. 28 台南の仏教界
 11. 30 雑報 回教首長の來朝 韓国に置ける
 南条博士
 11. 30 雑報 韓国と宗教布教
 11. 30 雑報 回教首長等出發
 12. 2 雑報 回々教会主來る
 12. 3 雲照律師の滿韓巡錫談(上)
 12. 3 雑報 滿洲の大殿堂
 12. 4 雲照律師の滿韓巡錫談(下)
 12. 4 雑報 嶺南教民の不穩
 12. 4 厦門の南普陀
 12. 5 雑報 鎮南浦の仏耶
 12. 7 雑報 日本僧侶排斥
 12. 8 雑報 滿洲の基督教
 12. 9 滿洲の仏教(上)
 12. 10 滿洲の仏教(中)
 12. 10 雑報 露西亞学生の新入校
 12. 12 雑報 上海通信(十一月卅日發 一邱)
 12. 13 雑報 滿洲の仏教(下)
 12. 13 台南の基督教界
 12. 13 清国開教問題
 12. 13 雑報 韓皇の勅額 清国開教問題
 12. 14 回教法主の入洛 アガ汗の拝謁

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1906. 12. 17 雑報 回教主の豪遊
 12. 17 雑報 京城別院遷仏会
 12. 17 日置黙仙師の満韓巡錫
 12. 17 台湾の忠魂堂入仏式
 12. 17 大連忠魂碑除幕式
 12. 18 雑報 日本には回教伝道の見込みなし
 12. 20 ベナンの開教事情
 12. 20 印度王の入洛
 12. 22 ベナンの開教事情(続)
 12. 23 韓国の布教者取締
1907. 1. 1 土耳其の僧侶 外務省に哀願す
 1. 1 汕頭積徳学堂
 1. 1 汕頭布教所
 1. 8 雑報 回教国民の覚醒
 1. 12 雑報 中国青年会(清国留学生修養の機関) 南清官憲と田中善立氏
 1. 13 韓国布教経営者
 1. 14 旅順は平和の洗礼を授くる聖地
 1. 15 雑報 支那青年会記念会
 1. 17 雑報 西派法主『印度仏教美術』の翻訳
 1. 20 満洲に於ける基督教の事業
 1. 20 東洋伝道の大勢 神学博士 バードン氏演説
 1. 22 雑報 支那伝道学校
 1. 23 印度遺聞 大宮孝潤師談
 1. 24 韓皇と西本願寺
 1. 27 台南の婦人団体
 1. 28 哈爾濱の開教
 1. 28 厦門の東光教社
 1. 29 在外教師の片信 (在清厦門の武田恵教氏信末の一斑)
 1. 29 西比利亜の仏教
 1. 29 河南に教案起る
 2. 3 南清の説教所
 2. 4 雑報 清国と伝道者
 2. 13 雑報 韓寺と東本願寺
 2. 14 韓人仏教青年会
 2. 14 開教者の資格
 2. 14 開教誌の編纂
 2. 15 雑報 印度回々教徒の活動
 2. 17 雑報 印度言語、宗教及び教育
 2. 18 雑報 韓皇と東本願寺
 2. 18 雑報 支那に於ける基督教の進歩 南清布教其他 印度に於ける留学生
 2. 20 印度式の曼荼羅
 2. 20 韓国龍山本願寺の報恩講
 2. 20 營口教信
 2. 22 統監府へ届出
 2. 23 雑報 南清教観
 2. 25 雑報 北京の基教現況
 2. 28 上海教信
 2. 28 従軍布教師、朝鮮人を欺く
 3. 2 韓国布教監督
 3. 9 雑報 樺太の教界
 3. 12 嘘噺喇嘛
3. 13 雑報 印度回教徒の活動
 3. 14 雑報 嘘噺喇嘛の横暴
 3. 14 雑報 京城の戦死者追悼会
 3. 17 印度王族の無宗教
 3. 18 雑報 日本と印度の特長 韓国耶蘇教徒の流言
 3. 19 雑報 満韓人の宗教 澎湖島戦死者十三回忌 韓国教信
 3. 20 雑報 宣教師殺害事件
 3. 20 印度の官立学校と宗教学校
 3. 25 雑報 營口仏教婦人会近況
 3. 28 布教員募集 台湾台北新起街 本派本願寺別院
 4. 29 濟州島の天主教
 4. 2 雑報 満洲説教所の敷地
 4. 3 樺太通信(五月廿七日発)
 4. 3 故沖禎輔氏の遺骨
 4. 5 營口の彼岸会法要
 4. 5 樺太通信(三月廿七日発)
 4. 7 雑報 台北説教所の開教使
 4. 7 雑報 万国青年大会 清人の基督教青年会
 4. 9 日語学校
 4. 9 韓国開教の服装
 4. 15 西太后と光瑞師
 4. 15 京城の基督教青年会
 4. 15 台北布教所の後任
 4. 15 清国開教
 4. 18 雑報 台湾の禅宗教会堂建築 韓僧金太根氏
 4. 19 雑報 東西南北 樺太の地位 韓人布教 營口仏教婦人会例会 營口牛家屯分遣隊の墓参
 4. 19 雑報 韓人布教 北京に於ける法主 韓国に於けるラッド博士
 4. 20 満洲の釈尊降誕祭
 4. 22 暹羅王独逸に入る
 4. 22 韓国の事情
 4. 22 清韓の宣教師
 4. 23 台南婦人会と追吊会
 4. 24 雑報 土耳其国皇帝の憤慨 耶蘇教徒の圧迫に泣き給ふ カトリック教徒と清国
 4. 24 大隈伯の演説 英雄祭席上に於ける
 4. 24 韓国宗教事情
 4. 24 韓皇と本派本願寺
 4. 27 清国に於ける西派の活動
 4. 27 台湾生蕃の迷信
 4. 27 雑報 暹羅国王の独逸行 宣教師総会
 4. 28 雑報 大連に於ける西派法主
 5. 3 台南の夜学校
 5. 4 印度人の演説
 5. 7 雑報 本派法主旅上の座影
 5. 7 宣教師と統監
 5. 7 法主帰山と其歡迎 細脚踏破千五百里
 5. 8 朝鮮の宗教(一) 鶴谷誠窪(投)

1907. 5. 9 韓国、樺太と神社
 5. 9 清人の墳墓発掘
 5. 9 朝鮮の宗教(二) 鶴谷誠窪(投)
 5.10 清国布教の中心
 5.12 雑報 清帝と法主
 5.12 朝鮮の宗教(三) 鶴谷誠窪(投)
 5.13 外国開教区域
 5.13 雑報 印度騒擾の原因
 5.14 韓国各宗派の管理者
 5.14 清国布教と西派
 5.14 朝鮮の宗教(四) 鶴谷誠窪(投)
 5.17 朝鮮に於ける宣教師の暴状
 5.17 南京東文学堂
 5.17 食人風俗の迷信
 5.18 朝鮮ハガキ 哲魔
 5.18 雑報 清国及び台湾の基督教 韓国に於ける青年大会 支那人学校
 5.19 食人風俗の迷信(下)
 5.19 朝鮮に於けるラッド博士
 5.19 雑報 上海の別院 開導小学校
 5.20 清国漫遊談
 5.20 朝鮮の宗教(五) 鶴谷誠窪(投)
 5.20 韓国布教管理の現況
 5.20 朝鮮ハガキ 哲魔
 5.20 台湾の禅宗教会堂建築
 5.20 蘇東坡と仏印
 5.22 朝鮮の宗教(六) 鶴谷誠窪(投)
 5.23 支那仏教史綱と仏教学概論
 5.23 朝鮮はがき 哲魔
 5.23 満洲会
 5.23 朝鮮の宗教(七) 鶴谷誠窪(投)
 5.24 宣教師問題 愛山生
 5.25 朝鮮はがき 哲魔
 5.27 教会堂破壊
 5.27 南清現下の教勢
 5.27 韓国宣教師論
 5.28 朝鮮の宗教(八) 鶴谷誠窪(投)
 5.28 澄海日本教堂破壊後報
 5.28 朝鮮はがき 哲魔
 5.29 雑報 清国布教問題
 5.29 朝鮮の宗教(九) 鶴谷誠窪(投)
 5.30 雑報 広東の教案
 5.30 朝鮮はがき 哲魔
 5.30 朝鮮の宗教(十) 鶴谷誠窪(投)
 5.30 營口の降誕会及勅語捧読式
 6. 2 東洋伝道の絶望
 6. 2 朝鮮はがき 哲魔
 6. 4 清国杭州の教況
 6. 4 朝鮮はがき 哲魔
 6. 4 朝鮮はがき 哲魔
 6. 4 朝鮮の宗教(十一) 鶴谷誠窪(投)
 6. 5 北京の教界
 6. 7 桃南府の宗教
 6. 7 西太后の仏教趣味
 6. 7 西本願寺南清の教況
 6. 7 対清布教の内容
 6. 7 朝鮮はがき 哲魔
 6. 8 朝鮮はがき 哲魔
 6. 8 雑報 清国布教問題
 6. 9 暹羅国王の称号
 6.10 四川の教会破壊
 6.10 朝鮮はがき 哲魔
 6.12 朝鮮はがき 哲魔
 6.12 寄書 宣言及び決議に就いて(上) 大日本仏教徒大会書記長 米島琢道
 6.13 婦依清僧の苦境
 6.13 局子街の基督教
 6.13 韓国の同和会
 6.13 寄書 宣言及び決議に就いて(下) 大日本仏教徒大会書記長 米島琢道
 6.14 清国布教問題 安藤鐵腸
 6.14 汎南府の教育と宗教
 6.22 韓国の端午(朝鮮ハガキ便り 哲魔)
 6.23 蒙古探検の孤軍より 六月六日夜 甲斐寛中衛
 6.24 清韓布教の今昔
 6.25 印度人の結婚
 6.27 牛莊領事館監獄教誨の美挙
 6.27 朝鮮はがき 哲魔
 6.28 満洲の教育(仏教当局の問題) 安藤鐵腸
 6.28 満洲児童の教育 是も亦基督教の勢力範囲
 6.28 長安発碑記 渡辺折乗氏談
 6.29 宣教師の謁見 朝鮮ハガキ 哲魔
 6.29 移民地布教難
 6.29 樺太の宗教界
 6.30 朝鮮はがき 哲魔
 7. 2 雑報 宣教師家族の引見(朝鮮はがき) 哲魔
 7. 3 韓国民の教化 来朝中のハリス博士の談
 7. 3 南清大派の文書布教
 7. 4 朝鮮はがき 哲魔
 7. 5 台湾本派本願寺教況
 7. 5 朝鮮はがき 哲魔
 7.10 雑報 朝鮮はがき 哲魔
 7.10 上海別院の由来
 7.12 満韓と神道
 7.14 印度人の苦行
 7.15 韓国宣教師の馬脚 朝鮮はがき 哲魔
 7.17 韓国基督教の頓挫 朝鮮はがき 哲魔
 7.22 雑報 韓国基督教徒の暴挙 侍天教の再興 朝鮮はがき 哲魔
 7.24 雑報 朝鮮はがき 哲魔
 7.25 韓皇の迷信
 7.25 女子清韓語学卒業式
 7.27 日本滅亡の祈祷(朝鮮はがき) 哲魔
 7.28 樺太の近況
 7.28 直隸省通信
 7.28 韓国新皇帝の迷信排斥
 7.28 外国宣教師の後援

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1907. 7. 29 シキム国の宗教 (一) 鈴木悌 稿
 7. 29 朝鮮の仏教
 7. 29 天道教民と暴徒
 7. 30 シキム国の宗教 (二) 鈴木悌 稿
 7. 30 教案償金
 7. 30 暴徒は基督教徒
 7. 30 元山別院の計画
 7. 30 説教所増設
 8. 2 シキム国の宗教 (三) 鈴木悌 稿
 8. 2 韓国基督教徒の暴挙 (朝鮮はかき) 哲魔
 8. 3 シキム国の宗教 (四) 鈴木悌 稿
 8. 3 韓国文士の求道三昧
 8. 4 シキム国の宗教 (五) 鈴木悌 稿
 8. 4 雑報 駐韓軍慰問
 8. 5 シキム国の宗教 (六) 鈴木悌 稿
 8. 5 韓賊の刀に斃れし西川孝太郎 (朝鮮はかき) 哲魔
 8. 5 上海日本基督教青年会
 8. 7 シキム国の宗教 (七) 鈴木悌 稿
 8. 8 シキム国の宗教 (八) 鈴木悌 稿
 8. 8 韓国の本願寺水 (朝鮮はかき) 哲魔
 8. 9 東洋に於ける宣教 師の毒 印度ムカルデー
 8. 10 建築は印度が世界第一
 8. 12 朝鮮はかき 哲魔
 8. 14 大陸の姪僧
 8. 14 渡韓日抄 武田露命 一日
 8. 14 露人とラマ教
 8. 14 印度に於けるマホメット大学
 8. 15 渡韓日抄 武田露命 二日
 8. 15 朝鮮の仏教徒 (朝鮮はかき) 哲魔
 8. 17 一進会の意見書
 8. 17 暴徒は基督教徒
 8. 17 宣教師退去を命ぜらる
 8. 17 韓国便り 井上淡星
 8. 18 海外伝道教会
 8. 20 在韓宣教師運動
 8. 22 渡韓日抄 武田露命 三日
 8. 22 上海通信
 8. 22 韓国の基督教徒 (朝鮮はかき) 哲魔
 8. 22 暴徒外人と通ず
 8. 22 寄書 浦塩に於ける太田覚眠
 8. 23 基督教徒の横暴
 8. 23 排日派の魂胆
 8. 24 渡韓日抄 武田露命 四日
 8. 24 韓国の仏教徒 (朝鮮はかき) 哲魔
 8. 25 大連の夏期講習会
 8. 27 中国教界の一疑獄 (一)
 8. 27 渡韓日抄 武田露命 五日
 8. 27 海外伝道教会の内議
 8. 28 中国教界の一疑獄 (二)
 8. 28 満洲の仏耶両教
 8. 29 中国教界の一疑獄 (三)
 8. 29 韓国皇帝へ献品
 8. 29 韓民と基督教 其入教は心理的作用?
 8. 30 中国教界の一疑獄 (四)
 8. 30 渡韓日抄 武田露命 六日
 8. 30 韓国守備隊へ慰問袋
 8. 30 南清艦隊へ慰問袋
 9. 2 韓国と宣教師
 9. 3 樺太に鎧兜の死体
 9. 3 対宣教師方針 宣教師と暴動 漢口の教影
 9. 4 雑報 西太后と彗星 基徒の同志討
 9. 5 樺太教界通信
 9. 7 布教使殴打さる
 9. 7 グルマバーラ居士の書信
 9. 8 印度仏教徒を 助くるの檄に就て
 9. 8 漢口と上海の土地
 9. 8 台南仏教青年会
 9. 12 耶蘇教徒の不遜 (朝鮮はかき) 哲魔
 9. 12 日本僧侶の発展 暹羅に於ける農業の嚆矢
 9. 12 盤谷の西本願寺
 9. 12 平壤に於ける基徒の悪行
 9. 12 日蓮州の布教
 9. 13 寺院の韓国移転
 9. 13 外国宣教師避難
 9. 13 支那仏教会起らんとす
 9. 13 平壤の基督教
 9. 14 西本願寺外国開教
 9. 14 居留民より僧を請ふ
 9. 14 西比利亞の新教場
 9. 14 ハルピン開教所
 9. 14 日本僧の韓国巡回 (朝鮮はかき) 哲魔
 9. 14 北京の日本小学校
 9. 15 馬來回々教の奇習
 9. 17 韓国と東西各宗教 (朝鮮はかき) 哲魔
 9. 19 雑報 海外伝道教会と実行隊
 9. 20 大谷派の韓国開教
 9. 23 清国布教抑制の理由
 9. 23 韓国の屯田伝道
 9. 27 回教国の近状
 9. 27 蒙古の宗教 (一)
 9. 28 英露協約中の仏教徒 安藤鐵腸
 9. 28 蒙古の宗教 (二)
 9. 29 蒙古講習会の創立
 9. 29 蒙古の宗教 (三)
 9. 30 韓国新開教
 10. 2 樺太アイヌの迷信
 10. 3 台東開教
 10. 3 台湾の基督教
 10. 3 漢口の探偵和尚
 10. 4 韓国布教総監部
 10. 4 建仁派開教使の帰山
 10. 5 ヒツチコク博士の韓国観
 10. 5 曹洞宗の満韓布教
 10. 5 朝鮮開教誌
 10. 7 満韓伝道会社

1907. 10. 8 宣教師の保護要求
 10. 12 露領開教談
 10. 12 印度人と禽獸
 10. 12 滞韓漫録 在星州 井上淡星
 10. 13 滞韓漫録 在星州 井上淡星
 10. 14 南清教学の暗流
 10. 17 新義州布教發展
 10. 19 澎湖島説教所
 10. 20 日僧布教嚴禁
 10. 20 朝鮮と三河出身僧 (朝鮮はがき) 哲魔
 10. 20 滞韓漫録 在大邱 井上淡星
 10. 22 鎮南浦の奉迎式 (朝鮮はがき) 哲魔
 10. 22 朝鮮はがき 哲魔
 10. 23 喇嘛教典の印刷
 10. 23 江西の教案
 10. 23 支那基督青年会々館
 10. 24 布教總監の拜謁 (朝鮮はがき) 哲魔
 10. 27 教界奇聞 高麗王朝の道鏡 (上)
 10. 29 雜報 漢口教信 (十月十七日発)
 10. 29 日僧の清国布教
 10. 29 印度の宗教別
 10. 30 雜報 京城の宗教
 10. 30 噠喇喇嘛
 11. 2 清国布教の係争 安藤鐵腸
 11. 2 印度宗教奇習
 11. 3 死する人の活た説教 (朝鮮はがき) 哲魔
 11. 3 カンボチヤの経文
 11. 3 基教排斥の暴動
 11. 3 不埒なる米国宣教師
 11. 3 伝道師の韓国談
 11. 3 大連の救世軍近況
 11. 5 教界奇聞 高麗王朝の道鏡 (下)
 11. 5 撫順の破戒僧
 11. 5 宣教紀念会
 11. 5 上海片信
 11. 7 樺太の西本願寺
 11. 7 樺太の大谷派
 11. 8 樺太開教談
 11. 13 樺太開教談 (一) 芳瀧智導氏談
 11. 14 樺太開教談 (二) 芳瀧智導氏談
 11. 14 台湾の迷信
 11. 15 樺太開教談 (三) 芳瀧智導氏談
 11. 17 樺太開教談 (四) 芳瀧智導氏談
 11. 17 台湾の做生日
 11. 18 樺太開教談 (五) 芳瀧智導氏談
 11. 19 清韓開教縮少問題
 11. 20 樺太開教談 (六) 芳瀧智導氏談
 11. 22 樺太開教談 (七) 芳瀧智導氏談
 11. 22 満洲布教の刷新
 11. 22 朝鮮だより 哲魔
 11. 23 雜報 安東県の教況
 11. 23 日僧渡清拒否
 11. 23 京城青年会上棟式
 11. 28 興化府開教問題
 11. 28 長束事件落着
 11. 28 台湾教信
 12. 3 布教排斥抗議
 12. 4 満韓台湾の教況
 12. 8 清国布教問題に就て
 12. 8 雲南の僧侶生活
 12. 9 雜報 満洲の西本願寺 藤島了穂師談
 12. 9 大連露国寺院引渡
 12. 9 韓国の仏耶伝道 (朝鮮はがき) 哲魔
 12. 9 暹羅教信
 12. 9 韓国屯田伝道
 12. 10 雜報 満洲の西本願寺 藤島了穂師談
 12. 10 韓国僧俗の紛争 (上) 妙香山事件の落着
 12. 12 韓国僧俗の紛争 (中) 妙香山事件の落着
 12. 12 韓国皇室と東本願寺
 12. 12 韓国皇室と光整師
 12. 12 紙面談叢 台北の新興宮
 12. 13 日僧退去問題
 12. 13 韓国皇太子と西本願寺
 12. 13 韓国僧俗の紛争 (下) 妙香山事件の落着
 12. 14 印度留学の今昔 (一)
 12. 14 韓国の寺院管理
 12. 15 印度留学の今昔 (二)
 12. 15 本願寺の日語学校
 12. 16 滞韓漫録 大邱 井上淡星
 12. 17 印度留学の今昔 (三)
 12. 19 印度留学の今昔 (四)
 12. 19 満韓の宗教 (一) 新井石禪師談
 12. 20 印度留学の今昔 (五)
 12. 20 満韓の宗教 (二) 新井石禪師談
 12. 20 湖南の仏教問題
 12. 22 印度留学の今昔 (六)
 12. 22 満韓の宗教 (三) 新井石禪師談
 12. 22 屯田伝道実行隊
 12. 23 印度留学の今昔 (七)
 12. 24 印度留学の今昔 (八)
 12. 24 満韓の宗教 (四) 新井石禪師談
 12. 25 印度留学の今昔 (九)
 12. 27 印度留学の今昔 (十)
 1908. 1. 1 印度留学の今昔 (十一)
 1. 7 印度の曆
 1. 7 宗演師と仏跡回復
 1. 7 南清布教上の訓令
 1. 7 漢口の西本願寺
 1. 8 印度留学の今昔 (十二)
 1. 8 南清に於ける 現下の排本願 寺情況
 1. 8 排日熱と宗教
 1. 9 韓国と大麻
 1. 10 屯田伝道瀾々出発
 1. 14 宗演師の雲水談 (一)
 1. 15 宗演師の雲水談 (二)
 1. 17 在英韓人の暴言
 1. 18 韓国に於ける仏基

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1908. 1. 19 宗演師の雲水談 (三)
 1. 20 宗演師の雲水談 (四)
 1. 20 布教使人選 内務当局の希望
 1. 22 宗演師の雲水談 (五)
 1. 22 入蔵米人携帯仏具
 1. 24 清国伝道と我政府
 1. 25 清国興化府の仏耶兩教
 1. 25 釜山便
 1. 27 清国廈門の耶蘇教
 1. 28 宗演師の雲水談 (六)
 1. 28 暹羅の開教
 1. 29 宗演師の雲水談 (七)
 1. 30 宗演師の雲水談 (八)
 2. 2 宗演師の雲水談 (九)
 2. 2 清国泉州の宗教
 2. 3 宗演師の雲水談 (十)
 2. 4 滿韓台湾視察譚 (一) 「禪」雑誌主筆
 新井石禪
 2. 4 清国武昌の婦人修養者
 2. 5 滿韓台湾視察譚 (二) 「禪」雑誌主筆
 新井石禪
 2. 5 芝罘仏教会
 2. 7 滿韓台湾視察譚 (三) 「禪」雑誌主筆
 新井石禪
 2. 7 台北近信
 2. 8 滿韓台湾視察譚 (四) 「禪」雑誌主筆
 新井石禪
 2. 8 台北近信 (続)
 2. 9 滿韓台湾視察譚 (五) 「禪」雑誌主筆
 新井石禪
 2. 9 新義州近事一斑
 2. 10 滿韓台湾視察譚 (六) 「禪」雑誌主筆
 新井石禪
 2. 10 朝鮮に於ける基督教
 2. 10 在外僧侶の教
 2. 13 滿韓台湾視察譚 (七) 「禪」雑誌主筆
 新井石禪
 2. 13 西比利亚土産
 2. 15 旅順監獄の教誨
 2. 18 回々教徒の争闘
 2. 20 救世軍の大連婦人救済所 (二百六十
 人の婦女 虎穴より救はる)
 2. 20 朝鮮の僧侶
 2. 22 韓国の清秀里 屯田伝道隊の消息
 2. 23 韓国だより
 2. 25 韓国宗教と宣教師
 2. 25 韓国の新貫主
 2. 27 宣教師と軍医
 2. 27 清真南寺 (上) (天津の回教寺院)
 安藤弘
 2. 28 清真南寺 (中) (天津の回教寺院)
 安藤弘
 2. 29 清真南寺 (下) (天津の回教寺院)
 安藤弘
 3. 2 鷄音雁信 (上) 哲魔
 3. 3 鷄音雁信 (下) 哲魔
 3. 3 雜報 滿洲鉄道伝道隊
 3. 5 北清宗教観 安藤弘 (一)
 3. 5 太田師の西比利亚布教
 3. 7 北清宗教観 安藤弘 (二)
 3. 7 滯韓漫録 於潭陽 井上淡星
 3. 8 北清宗教観 安藤弘 (三)
 3. 9 鷄音雁信 哲魔 在韓宣教師の数 宣
 教師迫害 綱島牧師の帰朝
 3. 9 北清宗教観 安藤弘 (四)
 3. 9 韓国福音教会教育事業
 3. 12 清国人の帰敬式
 3. 13 回教徒の寺院
 3. 17 馬山の宗教
 3. 17 清韓漫録 大邱 井上淡星
 3. 18 居留民の寄生虫 布教使は上品の乞食
 3. 19 滯韓漫録 大邱 井上淡星
 3. 20 梅上師の大陸旅行談
 3. 20 宣教師の待遇
 3. 20 暴徒は基督教者
 3. 25 韓国の宣教師
 3. 25 喇嘛寺の焼失
 3. 25 韓国伝道を評す 南水生
 4. 3 韓国の宣教師
 4. 7 西本願寺韓人教会概況
 4. 8 西本願寺韓人教会概況 (続)
 4. 8 印度に於ける宗教と教育の関係
 4. 9 錫倫仏教徒と日本醜業婦
 4. 9 浄土管長韓国巡教
 4. 10 韓国屯田伝道
 4. 12 蒙古の喇嘛寺
 4. 12 上海別院移転式
 4. 14 南滿の僧侶優待
 4. 17 樺太の宗教 在哥港 兎耳生
 4. 18 樺太の宗教 (承前) 在哥港 兎耳生
 4. 18 京城の宗教界
 4. 19 宣教師問題
 4. 19 北京の日本小学校
 4. 25 支那の仏教 在漢口 鐵顔生
 4. 25 回教徒膺懲
 4. 25 漢口通信
 4. 27 韓国屯田伝道
 4. 27 漢口短信
 4. 28 上海別院の入仏式
 4. 30 營口の釈尊降誕会
 4. 30 天涯の一奇僧
 4. 30 營口の本願寺
 4. 30 川口慧海師の書信
 5. 2 印度仏教の残影
 5. 2 知恩院と西本願寺 海外布教
 5. 5 天道教会
 5. 5 兼二浦本願寺と婦人会
 5. 10 北京に入べき喇嘛
 5. 10 国旗と屯田旗
 5. 10 釜山の仏生会
 5. 10 台北の追悼会
 5. 13 回教徒討伐

1908. 5. 13 北京の達頼喇嘛
 5. 14 海外にて初ての神輿渡御
 5. 18 印度は座禪国
 5. 19 西藏法王の近状
 5. 19 漢口小学校長の渡清
 5. 19 樺太孤兒院
 5. 20 台中出獄人保護場
 5. 24 支那の妖怪退治
 5. 24 朝鮮日より 哲魔
 5. 24 上海の日本基督教青年会
 5. 27 韓国教徒の活動
 5. 29 台北の宗教と信徒
 5. 29 清国漢口の暴動 本願寺出張所は無事
 6. 4 日僧の満洲視察
 6. 7 千島の靈原寺
 6. 7 屯田伝道と実業家
 6. 7 斑禪喇嘛上京
 6. 7 清国僧侶の来朝
 6. 8 北京の祖誕会
 6. 8 鎮南浦仏教青年会
 6. 8 樺太各宗教の現況
 6. 13 旧教宣教師迫害
 6. 13 韓国統治の今後
 6. 13 東本願寺韓国開教近況
 6. 13 北韓の日連宗
 6. 14 千島宗教史 乗元速満稿
 6. 14 印度の革新変化
 6. 19 回教寺院の神舞
 6. 19 清国浄土宗の昨今
 6. 25 屯田伝道拡張方法
 6. 25 樺太の西本願寺
 6. 27 波斯の擾乱
 6. 27 米国と西藏
 6. 28 漢口本願寺の近況
 7. 2 支那僧の演説
 7. 3 海外に於ける西本願寺
 7. 4 滞韓漫録 韓国大邱 井上淡星
 7. 7 印度宗教風習
 7. 7 印度趣味の本色
 7. 7 在韓宣教師団
 7. 9 噠喇喇嘛の近状
 7. 9 支那開教視察
 7. 9 大連別院起工式
 7. 9 喇嘛へ三部経
 7. 10 北京雁信
 7. 10 朝鮮の宗教
 7. 12 蒙古の天狗
 7. 13 滞韓漫録 韓国大邱 井上淡星
 7. 13 大連別院の工費
 7. 14 旭日苗師の海外布教
 7. 14 韓国清津の開教
 7. 15 清国と本願寺
 7. 15 開教使の年期契約
 7. 17 噠喇喇嘛の驕暴
 7. 19 滞韓漫録 大邱 井上淡星
 7. 19 韓国の基督教
 7. 19 上海教信
 7. 20 滞韓漫録 大邱 井上淡星
 7. 20 噠喇喇嘛不評判
 7. 20 回々教の視察
 7. 22 露国回教徒の現状(一)(ナインテ
 ンス、センチュリー所載) 梁生訳
 7. 22 雑報 露国々教と蒙古
 7. 22 屯田伝道隊出発
 7. 23 露国回教徒の現状(二)(ナインテ
 ンス、センチュリー所載) 梁生訳
 7. 24 露国回教徒の現状(三)(ナインテ
 ンス、センチュリー所載) 梁生訳
 7. 25 噠喇喇嘛召見
 7. 27 清韓布教組織亦変更
 7. 28 清国と回教徒保護
 7. 28 京城基督教青年会
 7. 29 露国回教徒の現状(四)(ナインテ
 ンス、センチュリー所載) 梁生訳
 7. 29 韓国統治と基督教徒
 7. 30 露国回教徒の現状(五)(ナインテ
 ンス、センチュリー所載) 梁生訳
 8. 2 露国回教徒の現状(六)(ナインテ
 ンス、センチュリー所載) 梁生訳
 8. 2 支那寺建設計画
 8. 3 露国回教徒の現状(七)(ナインテ
 ンス、センチュリー所載) 梁生訳
 8. 4 回々教主の告示
 8. 7 印度結婚奇習
 8. 7 旅順本願寺新築移転
 8. 8 □州府の一日(宗教に以ての見聞)
 在清 鐵顔生
 8. 9 福州の僧侶生活
 8. 9 營口本願寺起工式
 8. 12 滞韓漫録 井上淡星
 8. 13 喇嘛僧の乱行
 8. 13 太田覚眼師の近信
 8. 14 滞韓漫録 井上淡星
 8. 14 渡印日僧の苦学
 8. 14 噠喇接迎準備
 8. 15 旭日苗氏の近状
 8. 18 西本願寺韓国回教近況
 8. 18 噠喇喇嘛入京期
 8. 20 上海の孟蘭盆会
 8. 23 朝鮮村の宗教
 8. 24 韓僧直訴を企つ
 8. 24 上海日宗会堂の新築
 8. 25 蕃地宣教者の遺品
 8. 27 滞韓漫録 沙門淡星
 8. 28 屯田的伝道家の大挙移住 藤永環什
 8. 29 朝鮮通信 哲魔 仏教学校の設立
 9. 2 喇嘛と北京政府
 9. 2 韓国の大派布教
 9. 2 支那寺と建築地
 9. 4 雑報 五台山に於ける喇嘛
 9. 5 南滿教界便り
 9. 5 曹洞宗の満洲開教

1908. 9. 7 樺太の宗教
 9. 8 噠喇喇嘛の消息
 9. 9 喇嘛と西本願寺の協約
 9. 10 朝鮮の藤村操
 9. 12 喇嘛引見中止説
 9. 13 支那の回教徒
 9. 14 回教と剣
 9. 14 回々教民反乱
 9. 19 上海通信 在上海開教使 千部良道 (投)
 9. 20 印度太子と仏教会
 9. 25 印度皇太子殿下歓迎会
 9. 27 シツキム国情
 9. 27 広東のボイコットと漢口の暴動 (其一) 在清 鐵顔生 (投)
 9. 27 雑報 最近の漢口
 9. 29 印度太子と仏教徒
 9. 30 噠喇喇嘛の入京
 10. 2 広東のボイコットと漢口の暴動 (其二) 在清 鐵顔生 (投)
 10. 3 広東のボイコットと漢口の暴動 (其三) 在清 鐵顔生 (投)
 10. 3 嗚呼能海寛氏
 10. 3 噠喇喇嘛の謁見
 10. 5 入蜀途上記 (其一) 在清 鐵顔生
 10. 7 マホメット教の中毒 驚くべき南洋土人の迷信
 10. 7 噠喇喇嘛の謁見延期
 10. 8 入蜀途上記 (其二) 在清 鐵顔生
 10. 8 印度の宗教教育
 10. 9 屯田伝道の倶楽部新設
 10. 10 入蜀途上記 (其三) 在清 鐵顔生
 10. 12 入蜀途上記 (其四) 在清 鐵顔生
 10. 12 噠喇と列国公使
 10. 13 北京の慈善病院 七十の老婆渡清せんとす
 10. 14 喇嘛の溢觴
 10. 14 噠喇喇嘛を弾劾す
 10. 14 噠喇喇嘛訪問
 10. 15 入蜀途上記 (其五) 在清 鐵顔生
 10. 15 哈爾濱の本願寺 (一)
 10. 15 韓国の一椿事
 10. 19 入蜀途上記 (其六) 在清 鐵顔生
 10. 20 韓国の廿八神 哲魔
 10. 20 雑報 成都通信 在清 鐵顔生
 10. 22 噠喇の献品
 10. 22 北京に於ける教勢
 10. 22 驚くべき韓の僧賊談 哲魔 通報 第一回
 10. 23 韓国の廿八神 (続) 哲魔
 10. 23 驚くべき韓の僧賊談 哲魔 通報 第二回
 10. 23 噠喇名代答訪
 10. 24 驚くべき韓の僧賊談 哲魔 通報 第三回
 10. 24 京仁旅六日 (一) 在韓 哲魔
 10. 25 驚くべき韓の僧賊談 哲魔 通報 第四回
 10. 25 京仁旅六日 (二) 在韓 哲魔
 10. 27 韓国通信 哲魔
 10. 27 驚くべき韓の僧賊談 哲魔 通報 第五回
 10. 27 平壤仏教学校
 10. 27 京仁旅六日 (三) 在韓 哲魔
 10. 28 言論 入竺求法の僧侶 (一) 桑原隲蔵
 10. 28 驚くべき韓の僧賊談 哲魔 通報 第六回
 10. 28 波斯人の迷信
 10. 28 京仁旅六日 (四) 在韓 哲魔
 10. 29 言論 入竺求法の僧侶 (二) 桑原隲蔵
 10. 30 言論 入竺求法の僧侶 (三) 桑原隲蔵
 10. 30 驚くべき韓の僧賊談 哲魔 通報 第七回
 11. 2 排日熱の余焰 泉州彰化化学堂の危急
 11. 2 京仁旅六日 (五) 在韓 哲魔
 11. 3 大連の宗教界
 11. 5 京仁旅六日 (六) 在韓 哲魔
 11. 7 京仁旅六日 (七) 在韓 哲魔
 11. 8 喇嘛僧の暴動
 11. 9 畏るべき回教徒
 11. 10 長安碑林 (上) 渡辺鷺江
 11. 12 錫蘭仏教談 (一) 立花俊道
 11. 12 長安碑林 (下) 渡辺鷺江
 11. 14 錫蘭仏教談 (二) 立花俊道
 11. 14 韓国に於ける日蓮宗
 11. 14 京城龍口法難会
 11. 15 錫蘭仏教談 (三) 立花俊道
 11. 15 韓国基督青年会
 11. 17 錫蘭仏教談 (四) 立花俊道
 11. 19 錫蘭仏教談 (五) 立花俊道
 11. 20 海外新潮 □□生 ヒマラヤ山中の苦行者
 11. 22 錫蘭仏教談 (六) 立花俊道
 11. 22 仏像とヘチン博士
 11. 23 錫蘭仏教談 (七) 立花俊道
 11. 23 喇嘛の読経
 11. 23 清国公使館の仏事
 11. 23 上海通信 千部良道 (投)
 11. 25 清国公使館の法要 両宮喪礼参拜式と築地本願寺
 11. 27 喇嘛出発期
 11. 27 大連本願寺
 11. 28 錫蘭仏教談 (八) 立花俊道
 11. 28 清国と羅馬 廿二日東京青年会館にて在留清国人のために 新渡戸博士講演
 11. 30 韓国平壤方面の風俗
 12. 2 錫蘭仏教談 (九) 立花俊道
 12. 2 清国兩陛下追吊大法会
 12. 3 錫蘭仏教談 (十) 立花俊道

1908. 12. 4 雑報 喇嘛教に就て
 12. 7 噻嘸の権限照会
 12. 7 喇嘛の婦蔵
 12. 8 基督教と排日熱
 12. 9 在外醜業婦の罪滅し
 12. 9 韓国に於ける基督教の排日
 12. 10 宜昌の基督教 外国宣教師の眞勢力
 12. 14 雑報 基督教と排日
 12. 15 朝鮮通信 哲魔
 12. 15 韓国天主教主教
 12. 20 印度の市内托鉢
 12. 22 喪中の成都（十一月廿日発） 在清 鐵顔生
 12. 22 喇嘛の保護
 12. 23 泉州府の沿革 附 興化及び永春 在清 泉州 田中城南
 12. 23 噻嘸喇嘛出発
 12. 24 清国基督教大学
 12. 25 韓国社寺財産管理規則
 12. 25 仁川の奥村刀自記念碑
 1909. 1. 1 シャムの新年 安井哲子
 1. 1 馬來半島の祖師忌
 1. 8 石川素童師の台湾宗教談
 1. 10 鳥類と韓人の伝説
 1. 10 支那の俚謔 在清 鐵顔生
 1. 10 印度留学の日蓮僧の消息
 1. 12 清国布教問題 在清 鐵顔生
 1. 18 清国女学生と宗教 目白僧園に研究中
 1. 22 印度王族の入洛
 1. 23 拓殖会社に入りし龍江氏談
 1. 24 清国に於ける医と基督教
 1. 24 印度仏跡参拝会
 1. 24 仏像、印度より来らんとす
 1. 24 三僧の清国漫遊
 1. 30 韓国の日蓮宗
 2. 4 台中の宗教界
 2. 9 哈爾濱通信
 2. 22 韓国宗務院設置に就て
 3. 3 北咸基督教徒の激增
 3. 3 宗教と統監政治
 3. 5 韓国僧侶学校
 3. 7 韓国天理教の激增
 3. 10 京城宣教師の満足
 3. 18 噻嘸喇嘛と露国
 3. 20 韓国布教費の募集
 3. 27 成都基教の活動 在清 鐵顔生
 3. 28 漢口片信
 4. 3 印度より仏像渡来
 4. 3 印度仏教徒の要求
 4. 8 成都零信（三月九日発） 在清 鐵顔生
 4. 10 大連の宗教界
 4. 20 韓国觀光団
 4. 22 喇嘛と清国政府
 4. 23 哈爾濱の釈尊降誕会
 4. 28 韓人の醜聞教校生
 4. 28 海外の宗教騒動
 4. 29 韓国に於ける浄土宗
 4. 29 土国動乱と宗教
 4. 29 日印仏徒の同盟
 4. 29 西藏喇嘛の来学
 4. 29 台湾の教況視察
 4. 30 露国回教主の談
 4. 30 香港の墓地問題
 5. 2 台湾土着人の信仰
 5. 2 大派韓国別院所管区域
 5. 2 基隆の日蓮宗
 5. 3 馬來半島の仏僧
 5. 3 満洲に於ける日蓮宗
 5. 3 韓国の神宮奉齋会
 5. 4 支那の回々教
 5. 5 異域富源の開拓 興派僧侶の西比利亞行
 5. 7 甘露大師と四川茶 在清 鐵顔生
 5. 7 天理教本部員満韓視察
 5. 8 韓国寺院の入式
 5. 9 哈爾濱本願寺巡回布教の開始
 5. 13 厦門に於ける邦人墓地の経営
 5. 14 留学ビルマ僧の居常
 5. 15 馬山教信（五月十一日発）
 5. 17 波斯の宗教風俗
 5. 17 台北仏教会の活動
 5. 18 大連音楽倶楽部の近況
 5. 22 印度より来る仏像
 5. 24 朝鮮通信 哲魔
 5. 25 京城に於ける仏教的寄宿舎を起すべし
 5. 28 蒙古喇嘛の種類
 5. 29 東本願寺韓国新開教
 6. 2 馬山教信（五月廿七日）
 6. 3 京城仏教管見 黒雨白風仙人（授）
 6. 4 満洲の教況
 6. 4 山東省に大学
 6. 5 植民地の宗教
 6. 7 哈爾濱仏教婦人会
 6. 7 北京の降誕会
 6. 10 喇嘛入藏光景 打箭炉にて 鐵顔生
 6. 12 打箭炉零報 在清 鐵顔生
 6. 14 韓国鎮南浦短信
 6. 15 印度請来仏像開扉彙報
 6. 22 マハンタ管長とは何者ぞ 印度南方仏教徒の□
 6. 24 排日と宣教師
 7. 3 台湾四派布教
 7. 4 樺太に於ける西派教況
 7. 5 京城宗教月報
 7. 5 印度行者の苦行
 7. 7 大連の宗教界
 7. 7 韓国及北海道教況視察
 7. 8 思想 韓国に於ける外国宣教師
 7. 9 満韓及び樺太伝道
 7. 9 樺太教界の冷況
 7. 10 哈爾濱本願寺の巡回布教

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1909. 7. 17 韓国馬山教報
 7. 17 台湾だより
 7. 18 韓国と基督教
 7. 24 台湾人迷信の一例
 7. 28 暹羅に於ける日本人会
 8. 3 印度仏跡参拝会計画
 8. 4 京城宗教月報
 8. 7 朝鮮通信 哲魔
 8. 8 亜細亞に於ける天主教徒
 8. 10 韓国日蓮宗便り
 8. 12 韓国日宗教信
 8. 14 清国宗教一面観 (一)
 8. 15 清国宗教一面観 (二)
 8. 15 馬來半島の仏教
 8. 19 清国宗教一面観 (三)
 8. 20 清国南北の仏教 (一) 清国湖南僧学
 堂総教習 水野梅暁
 8. 23 厦門教情
 8. 23 台湾通信 (上)
 8. 24 清国南北の仏教 (二) 清国湖南僧学
 堂総教習 水野梅暁
 8. 25 清国南北の仏教 (三) 清国湖南僧学
 堂総教習 水野梅暁
 8. 25 台湾通信 (中)
 8. 27 清国南北の仏教 (四) 清国湖南僧学
 堂総教習 水野梅暁
 8. 27 台湾通信 (下)
 8. 28 清国南北の仏教 (五) 清国湖南僧学
 堂総教習 水野梅暁
 8. 28 韓の一宗二派
 8. 29 露人の蒙古研究
 8. 29 京城観覽記 (渡韓僧日記)
 8. 30 余が韓人観 韓国密陽 藤永旭南
 9. 2 余は何故清国僧侶の教育に従事せし
 乎 (一) 清国湖南僧学堂総教習 水
 野梅暁
 9. 3 余は何故清国僧侶の教育に従事せし
 乎 (二) 清国湖南僧学堂総教習 水
 野梅暁
 9. 3 西太后改葬期
 9. 3 土耳其の女性
 9. 4 余は何故清国僧侶の教育に従事せし
 乎 (三) 清国湖南僧学堂総教習 水
 野梅暁
 9. 4 西派法主の大陸探検
 9. 4 清韓に寺院創立
 9. 5 余は何故清国僧侶の教育に従事せし
 乎 (四) 清国湖南僧学堂総教習 水
 野梅暁
 9. 7 韓国教々月報 (八月) 黒雨白風仙人
 9. 8 満洲の宗教界
 9. 9 福建宗教事情 (一) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 10 福建宗教事情 (二) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 12 福建宗教事情 (三) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 12 法主探検の準備地
 9. 12 厦門たより
 9. 12 雑報 西派法主の旅程 外遊中止の請
 願 韓国大谷派近況
 9. 13 福建宗教事情 (四) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 13 法主探検の準備地 (承前)
 9. 14 福建宗教事情 (五) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 15 福建宗教事情 (六) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 15 西派法主外遊と各宗派
 9. 17 福建宗教事情 (七) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 17 外遊中止の請願
 9. 18 福建宗教事情 (八) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 19 福建宗教事情 (九) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 20 福建宗教事情 (十) 在清国泉州 城
 南子稿
 9. 20 洞宗の台湾布教
 9. 22 福建宗教事情 (十一) 在清国泉州
 城南子稿
 9. 23 福建宗教事情 (十二) 在清国泉州
 城南子稿
 9. 23 喇嘛懐柔策
 9. 24 局外者の言 韓国と米国伝道
 9. 24 大谷光瑞師の外遊を送る
 9. 27 福建宗教事情 (十三) 在清国泉州
 城南子稿
 9. 27 西派法主の出発
 9. 28 福建宗教事情 (十四) 在清国泉州
 城南子稿
 9. 28 新疆に於ける発掘情報
 9. 28 旅順の宗教界
 9. 29 福建宗教事情 (十五) 在清国泉州
 城南子稿
 9. 29 新疆に於ける発掘情報 (承前)
 10. 5 回教徒の大連合
 10. 8 釜山通信
 10. 9 基督教の三国同盟
 10. 12 支那仏教の恩人
 10. 12 韓米牧師の不和
 10. 13 韓寺転派せんとす
 10. 13 蒙古牛輸入の僧
 10. 15 韓国の基督教 安達謙蔵氏談
 10. 17 蒙古仏教の新発見
 10. 20 韓国宗教瑣談
 10. 22 哈爾濱本願寺の独立
 10. 22 韓国安国寺の上棟式
 10. 23 開城の宗教 黒雨白風仙人
 10. 23 満洲に於ける本派
 10. 24 回々教問題
 10. 24 張家口の露国教会

1909. 10. 30 韓国日宗便り
11. 3 韓国に於ける基督教會
11. 5 韓国宗教月報（十月） 黑白仙人
11. 8 八淵師の台湾談
11. 12 蕃人布教
11. 12 遼陽の宗教
11. 14 平壤會堂開堂式
11. 15 暹羅座禪法
11. 17 韓国の葬式 渡韓僧某氏談
11. 22 朝鮮通信 哲魔
11. 28 印度回教徒感謝
12. 4 韓国教信
12. 7 噠喇喇嘛の欧州訪問
12. 7 巨濟島の會立寺院
12. 9 韓国忠清北道の宗教
12. 10 新疆発掘詳報
12. 10 韓国宗教の片影
12. 10 樺太通信 在樺太 林行精
12. 14 喇嘛密約否定
12. 17 宣教師買収説
12. 19 南清の教情
12. 22 清韓と救世軍
12. 24 李総理刺客は基督教徒
12. 24 噠喇喇嘛の苦情
12. 25 雑報 統監とハリス博士
1910. 1. 1 朝鮮通信 哲魔
1. 7 仏教迫害の惨影
1. 8 朝鮮の安国寺
1. 10 法主と印度政庁
1. 11 天主教民の妄動
1. 12 印度便り
1. 14 韓国伝道會社を設立せよ
1. 14 韓国の天理教
1. 15 宣教師と排日
1. 20 渡韓記（一）
1. 22 新疆探検の青年
1. 24 韓国伝道私議（上）
1. 24 渡韓記（二）
1. 25 韓国伝道私議（下）
1. 26 西比利亞開教
1. 28 露人蒙人を収攬す
1. 28 暹羅内務次官と仏壇
1. 30 蕃地の布教
1. 30 澎湖島だより
2. 1 西比利亞在留民の慈父 太田覚眠の勢望
2. 2 南滿鉄道慰問部便り
2. 4 清国仏教家の渡来 天台紳會長の視察
2. 6 宣教師の僧侶排斥
2. 6 大学殖民館の發展
2. 8 彗星と排日
2. 9 ハルピンの婦人会
2. 10 韓国僧の社会的地位
2. 11 朝鮮通信 在韓 哲魔
2. 13 訪問時談 清国僧界の現況 清国仏教調査員天台宗教育會長 楊箕峙
2. 14 韓国伝道私案 在韓 哲魔
2. 14 在韓基督教の活動
2. 15 韓国伝道私案（続） 在韓 哲魔
2. 16 回教徒の礼拝式
2. 16 上海別院新事業
2. 18 開教上の一困難
2. 19 韓国基督教の大活動
2. 19 韓国独立と基督教
2. 19 太田覚眠氏談（一）
2. 20 太田覚眠氏談（二）
2. 21 太田覚眠氏談（三）
2. 24 蕃民教化の方法
2. 25 達賴喇嘛出奔
2. 25 蒙古探検談
2. 26 日宗清国布教會
2. 28 西藏騒亂の喇嘛
3. 1 韓国布教
3. 2 韓国布教師論 在京城 白衣道人（投）
3. 3 生蕃教化事業（上）
3. 3 東京より 西藏噠喇喇嘛の出奔 西藏侵入の真相
3. 3 韓国宗教現状
3. 3 在韓宣教師一變
3. 4 河口慧海師の近状
3. 5 生蕃教化事業（下）
3. 6 瓜哇島の怪談
3. 6 紅教僧の墮落
3. 6 韓国基教と統監府
3. 7 西藏の仏教を如何にすべき 安藤鐵腸
3. 7 噠喇喇嘛廢位
3. 7 喇嘛復位運動
3. 10 韓国宗教学校取締
3. 10 上海の各教比較
3. 12 朝鮮の開教
3. 12 宣教師と凶漢
3. 12 韓国基督教の排日
3. 13 印度と万国仏教會 明年十月開催に決す
3. 13 浦塩に於ける正教徒
3. 14 宣教師の放逐
3. 14 露領沿海州の布教
3. 15 檀君教
3. 16 韓国の教育と基教
3. 16 韓国基教の活動
3. 17 韓国と曹洞宗 新進布教師の派遣
3. 17 清国營口の涅槃像新調
3. 18 蕃界に向はんとする布教使
3. 19 韓国教界一瞥 在京城 白衣道人（投）
3. 20 韓民聖書を焼く
3. 21 回教徒の一巢窟
3. 21 檀君教の近況
3. 21 釜山総泉寺の授戒式
3. 24 夕氏の来朝
3. 24 法主の喇嘛慰問
3. 26 韓国の天理教
3. 29 韓国為政者と仏耶 白衣道人

- | | | | |
|-------------|----------------------------|-------|----------------------------------|
| 1910. 3. 29 | 韓国基督教徒決議 | 二 | |
| 3. 31 | 韓国為政者と仏耶(統) 白衣道人 | 4. 29 | 韓国觀光団と大谷派 |
| 3. 30 | 支那事情調査の便宜 | 5. 1 | 喇嘛の消息 |
| 4. 2 | 韓国基督教運動 | 5. 1 | 江蘇の暴動 |
| 4. 2 | 天理教の韓国布教方針 | 5. 2 | 生蕃社中の僧侶 |
| 4. 3 | 韓政変動と基督教 | 5. 2 | 統監府と宣教師 |
| 4. 5 | 在浦潮の韓人 | 5. 3 | 韓国視察(統) 在慶尚北道安東郡
柳田吞二 |
| 4. 6 | 宣教師の紀念品 | 5. 3 | 韓国の宗教状態 |
| 4. 6 | 京城基督教勢 | 5. 8 | 西藏の政教分離 |
| 4. 6 | 侍天教徒の紀念会 | 5. 9 | 台湾蕃署寮教況 |
| 4. 7 | 海外の金光教 | 5. 13 | 生蕃布教の近状 |
| 4. 8 | 忠北基督教の衰退 | 5. 14 | 宣教師の集合 |
| 4. 8 | 回教管長の暴行 | 5. 15 | 蕃地布教の近信 |
| 4. 9 | 旅順に於ける追弔会 | 5. 18 | 韓国基督教現勢一斑 |
| 4. 9 | 噠喇喇嘛の消息 | 5. 19 | 韓人の恐怖 |
| 4. 12 | 開教の諸事情 太田覚眠師 談 | 5. 21 | 韓国宗教事情(一) 松宮拙太郎氏談 |
| 4. 12 | 寺本氏の西藏談 | 5. 22 | 支那画を觀る記(上) 阿浮羅生 |
| 4. 12 | 太田師と国民読本 | 5. 22 | 韓国宗教事情(二) 松宮拙太郎氏談 |
| 4. 13 | 韓国に於ける米國基督教 | 5. 23 | 支那画を觀る記(下) 阿浮羅生 |
| 4. 13 | 噠喇喇嘛免訓電 | 5. 23 | パロダ王と稱福寺 |
| 4. 15 | 京城救世軍学校 | 5. 23 | 南清の仏教信者 |
| 4. 15 | 京城に於ける海老名氏 | 5. 23 | 韓国宗教事情(三) 松宮拙太郎氏談 |
| 4. 16 | 韓国基督教の現勢 | 5. 24 | 韓国宗教事情(四) 松宮拙太郎氏談 |
| 4. 17 | 訪問時談 印度雜話 文学博士 松本
文三郎 | 5. 25 | 韓国宗教事情(五) 松宮拙太郎氏談 |
| 4. 17 | 韓国僧侶の奸計 | 5. 26 | 韓国宗教事情(六) 松宮拙太郎氏談 |
| 4. 17 | 噠喇喇嘛と列國 | 5. 28 | 食人種と宗教 |
| 4. 18 | 噠喇喇嘛の前途 | 5. 28 | 印度仏骨奉祀式 |
| 4. 19 | 西藏仏典翻訳 | 5. 29 | 韓国宗教事情(七) 松宮拙太郎氏談 |
| 4. 19 | 能海氏と外交問題 | 5. 30 | 韓国宗教事情(八) 松宮拙太郎氏談 |
| 4. 20 | 西藏事情(一) 寺本婉雅氏談 | 6. 1 | 奉祀されんとする仏骨 島地大等師談 |
| 4. 20 | 喇嘛僧不穩 | 6. 2 | 上海に於ける大谷派法主 |
| 4. 21 | 西藏事情(二) 寺本婉雅氏談 | 6. 5 | 雜報 滅亡に瀕せる韓国仏教 |
| 4. 21 | 基督教の蕃女学校 | 6. 6 | パロダ國王ガイ クワール殿下(上)
文学博士高楠順次郎氏談 |
| 4. 21 | 台湾の宗教情况 | 6. 6 | パロダ王と酬恩社 |
| 4. 22 | 西藏事情(三) 寺本婉雅氏談 | 6. 8 | パロダ國王ガイ クワール殿下(下)
文学博士高楠順次郎氏談 |
| 4. 23 | 旅順參拝紀行(一) 滋野井秀雄 | 6. 9 | 宣教師の増進 |
| 4. 23 | 達頼露國に頼る | 6. 10 | 上海別院の法要 |
| 4. 24 | 旅順參拝紀行(二) 滋野井秀雄 | 6. 13 | 上海の教波 大派法主隨行輿地氏の談 |
| 4. 24 | 韓国通信 慶尚北道安東郡にて 柳田
吞二 | 6. 14 | 西本願寺の新羅発掘物の価値 |
| 4. 24 | 喇嘛に対する恩典 | 6. 15 | 印度の仏教教育 |
| 4. 25 | 旅順參拝紀行(三) 滋野井秀雄 | 6. 16 | 波斯の諸宗教(一) 鈴木悌 |
| 4. 25 | 韓国通信(承前) 慶尚北道安東郡にて
柳田吞二 | 6. 16 | 清國宗教界に活動 せる二偉人(一) |
| 4. 26 | 古梵仏典の腐焼 在印度ベナレス 河
口慧海 | 6. 17 | 波斯の諸宗教(二) 鈴木悌 |
| 4. 26 | 侍天教の梵鐘 | 6. 17 | 清國宗教界に活動 せる二偉人(二) |
| 4. 26 | 旅順參拝紀行(四) 滋野井秀雄 | 6. 17 | 北海道樺太の巡行 |
| 4. 26 | 曹洞宗の台北別院成る | 6. 18 | 波斯の諸宗教(三) 鈴木悌 |
| 4. 26 | 仁川の救護院 | 6. 19 | 波斯の諸宗教(四) 鈴木悌 |
| 4. 26 | 韓国に於ける素童師 | 6. 19 | 印度の奇風俗 |
| 4. 26 | 京城の教界 | 6. 19 | 清國宗教界に活動 せる二偉人(三) |
| 4. 27 | 噠喇喇嘛と英露 | 6. 19 | 西藏の政教分離 |
| 4. 28 | 清國と基督教大学 | 6. 21 | 外人設立学校 |
| 4. 29 | 韓国視察 在慶尚北道安東郡 柳田吞
二 | 6. 21 | 印度王と築地本願寺 |
| | | 6. 22 | 天道教の失敗 |

1910. 6.22 一部韓人の宗教思想
 6.24 支那仏教の恩人 楊文会氏の生死不明
 6.25 訪問時談 朝鮮の音楽(上) 京都大学教授 内藤湖南
 6.25 喇嘛寛典
 6.25 長沙施療部新設
 6.25 同文書院と東西
 6.25 廬山上の諸教連合会館
 6.26 訪問時談 朝鮮の音楽(中) 京都大学教授 内藤湖南
 6.27 訪問時談 朝鮮の音楽(下) 京都大学教授 内藤湖南
 6.28 梵文学の将来 文学士 榊亮三郎氏
 6.28 南清の宗教旅行
 6.29 樺太の宗教界
 6.30 南清の仏教 先日大谷派法主に随行して渡清したる 内記龍舟師談
 6.30 喇嘛教史出版
 7. 1 回教大学設立
 7. 1 印度王の本願寺詣
 7. 2 台湾蕃人の迷信(総督府の調査)
 7. 2 韓国布教と統監
 7. 3 奥村敏子女史
 7. 4 台湾土産
 7. 4 印度トリンガノ王国の風俗
 7. 6 韓国伝道隊 西本願寺の大飛躍
 7. 6 露国の西蔵測量
 7. 6 大連通信
 7. 6 香宿島地黙雷師満洲巡錫日誌(一) 大連 本願寺関東別院(投)
 7. 7 西部講壇 西魏の四面像 京都文化大学講師 文学士 浜田耕作
 7. 7 支那と仏教的施設 大谷嘉兵衛氏の帰朝談
 7. 7 大連の基督教青年会館
 7. 7 香宿島地黙雷師満洲巡錫日誌(二) 大連 本願寺関東別院(投)
 7. 8 在韓宣教師
 7. 9 浄土宗と清韓開教
 7.10 香宿島地黙雷師満洲巡錫日誌(三) 大連 本願寺関東別院(投)
 7.11 香宿島地黙雷師満洲巡錫日誌(四) 大連 本願寺関東別院(投)
 7.12 東派露領布教開始
 7.12 滿韓と天主教の計画
 7.12 香宿島地黙雷師満洲巡錫日誌(五) 大連 本願寺関東別院(投)
 7.13 オットマニ比丘帰国
 7.15 土清宗教条約
 7.15 韓国に於ける宣教師取締
 7.16 海外新潮 印度人の自覚 イ、エ、ワードハウス
 7.17 韓国伝道隊出発
 7.19 統監と宣教師
 7.20 韓国布教の注意
 7.21 オットマン師の帰去
 7.25 満洲と宗教家
 7.25 大連基督教青年会館
 7.26 緬甸人の眼に映ずる日本 緬甸僧オツタマン師談
 7.27 漢口本願寺の教育事業
 7.28 京城開教院の新築
 7.28 鎮南浦に於ける大学生班
 7.30 合邦と伝道
 7.31 旅順教会堂の建築
 8. 1 西蔵擾乱 英国印度政府の出兵
 8. 1 喇嘛彈劾
 8. 3 韓国基督教状況
 8. 3 西蔵騒乱の観測
 8. 3 天道教主の陰謀
 8. 4 支那の古仏像 中村不折氏談
 8. 4 達頼と英国
 8. 5 大連婦人ホーム の設立せし由来
 8. 7 小亜細に於る基督教徒虐殺
 8. 7 喇嘛教徒暴動真相
 8. 7 西蔵騒擾と世論
 8. 7 印度に革命起らんとして
 8. 9 樺太大泊より(東派法主巡錫彙報)
 8.10 喇嘛対英国問題
 8.11 西本願寺韓国伝道隊 隊長日下大痴師の談より
 8.13 喇嘛の復讐如何
 8.16 韓国基督教の大活動
 8.16 北京籠城紀念追悼会
 8.17 スタンプオード学院 清人の仇敵なる大学と寺院
 8.17 北京教会の縁日伝道
 8.19 韓人教会の活動 西本願寺の中学起らん
 8.20 北京基督教青年会
 8.20 韓国より団参
 8.21 アクバル式別院
 8.21 印度に於ける宗教的生活
 8.22 英訳「西蔵事情」内幕
 8.23 ブラオン博士韓国基督教視察談
 8.24 蕃地便り(上) 蕃界布教使円山駐在小岱黙天
 8.25 蕃地便り(中) 蕃界布教使円山駐在小岱黙天
 8.25 合併と韓人伝道
 8.25 朝鮮合併成る
 8.25 滿韓の布教拡張
 8.26 蕃地便り(下) 蕃界布教使円山駐在小岱黙天
 8.28 西本願寺の韓国伝道
 8.28 朝鮮と西本願寺
 8.29 日韓合邦後の仏教
 8.29 合邦瑣言
 8.29 統監の基督教排斥
 8.29 朝鮮宣教師の動作
 8.29 東派韓国布教拡張
 8.30 満洲巡錫所管(上) 島地黙雷師

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1910. 8. 30 朝鮮の宗教将来 斯波宗教局長談
 8. 30 邦人教化の急務
 8. 30 朝鮮学生と基督教
 8. 30 在韓の外人
 8. 31 仏教同志会をして 朝鮮伝道を試みしめよ
 8. 31 清国の仏教雑誌
 8. 31 朝鮮と東本願寺
 8. 31 日韓合併と浄土宗記念伝道隊
 9. 1 国民統一の要素(上) 寺内統監の宗教政策に就て
 9. 1 朝鮮と基督教
 9. 1 達頼喇嘛復位か 清国大臣と協議せんとす
 9. 1 日宗と朝鮮布教
 9. 1 樺太と日蓮宗寺院
 9. 2 国民統一の要素(下) 寺内統監の宗教政策に就て
 9. 2 朝鮮人は日本に 同化し得るか 海老名弾正氏の談
 9. 2 豊太閤の降参状
 9. 2 日韓合併祝賀会
 9. 2 日韓合併大祈祷会
 9. 3 畏るべき韓人の迷信
 9. 3 元山別院建築
 9. 3 西派樺太開教頓挫
 9. 3 合併と大日本仏教青年会
 9. 4 蒙古活仏の勢力
 9. 4 如何にして朝鮮を教育すべきか ▲案じた程でもない 文学博士 三宅雄二郎氏談
 9. 4 朝鮮布教の困難
 9. 4 朝鮮伝道学校設立の議
 9. 4 日本僧の禁錮
 9. 5 朝鮮兩本願寺軋轢
 9. 5 世論紹介 朝鮮と我宗教家
 9. 5 朝鮮基督教の大運動
 9. 5 朝鮮人伝道学校
 9. 6 朝鮮と東本願寺
 9. 6 一進会と侍天教 向後朝鮮半島の教化
 9. 6 外人牧師大会
 9. 6 大連宗教家懇和会
 9. 6 朝鮮牧師の誓言
 9. 6 京城の基督教近況
 9. 7 朝鮮の年中行事
 9. 7 朝鮮と仏教 釈宗浜師談
 9. 7 一進会の将来
 9. 7 旅順の耶蘇教
 9. 7 西藏遠征中止 英国の態度曖昧
 9. 7 樺太の神道
 9. 8 緬甸の仏教事情(一)
 9. 8 東派朝鮮の教況
 9. 8 朝鮮の鬼神教
 9. 8 世論紹介 朝鮮の宣教師
 9. 8 日韓文明の關係(上) 文学博士井上哲次郎氏談
 9. 9 朝鮮の教化と宗教(一) 大内青巒
 9. 9 緬甸の仏教事情(二)
 9. 9 朝鮮の基督教
 9. 9 日韓文明の關係(下) 文学博士井上哲次郎氏談
 9. 9 信教自由の告諭
 9. 9 基督教徒の妄動
 9. 9 朝鮮と宗教局
 9. 9 外人宣教の頓挫
 9. 9 朝鮮国宝決定
 9. 10 聖徳太子と朝鮮併合 加藤咄堂
 9. 10 緬甸の仏教事情(三)
 9. 10 樺太布教の表裏
 9. 10 達頼喇嘛の復位(統報)
 9. 10 朝鮮基督教徒の前途
 9. 11 緬甸の仏教事情(四)
 9. 11 朝鮮の葬儀
 9. 11 世論紹介 素盞鳴尊と朝鮮 文学博士井上頼閑氏談
 9. 11 朝鮮仏教復興の計画
 9. 11 儒教主義は未定
 9. 11 浄土宗朝鮮伝道過現
 9. 11 朝鮮の救世軍
 9. 11 朝鮮の併合と仏教家(一) 東京 木山十彰
 9. 12 朝鮮の教化と宗教(二) 大内青巒
 9. 12 侍天教徒の政治 的活動と其将来(一)
 9. 12 阿弗利加葬式奇習
 9. 12 世論紹介 朝鮮の儒教教育 文学博士井上哲次郎
 9. 12 朝鮮開教の無方針
 9. 12 旭管長と朝鮮 向後の日蓮宗大に振はるん
 9. 12 日韓併合と曹洞宗の論達
 9. 12 日蓮宗と朝鮮布教
 9. 12 朝鮮と正教会の伝道
 9. 12 朝鮮の併合と仏教家(二) 東京 木山十彰
 9. 13 侍天教徒の政治 的活動と其将来(二)
 9. 13 緬甸の仏教事情(五)
 9. 13 曹洞宗の朝鮮布教視察
 9. 13 日韓併合と佐田 白茅翁の功績 田中弘之
 9. 13 朝鮮の併合と仏教家(三) 東京 木山十彰
 9. 14 侍天教徒の政治 的活動と其将来(三)
 9. 14 緬甸の仏教事情(六)
 9. 14 朝鮮布教と仏 教者の覚悟 文学博士三宅雄二郎
 9. 14 京城基督教大挙伝道
 9. 14 朝鮮の併合と仏教家(四) 東京 木山十彰
 9. 15 侍天教徒の政治 的活動と其将来(四)
 9. 15 朝鮮の女子教育 中川女子高等師範学校校長談
 9. 15 朝鮮瑞龍寺と前田家

1910. 9. 16 如何にして朝鮮を 教化すべきか (上)
文学博士 井上哲次郎
9. 16 緬甸の仏教事情 (七)
9. 16 日韓併合の予言
9. 16 朝鮮の併合と仏教家 (五) 東京 木
山十彰
9. 17 如何にして朝鮮を 教化すべきか (下)
文学博士 井上哲次郎
9. 17 朝鮮の教化と宗教 (三) 大内青巒
9. 17 世論紹介 朝鮮の布教
9. 17 宣教師の煩悶
9. 17 韓国併合と曹洞宗管長
9. 17 浄土宗の仁川救護院
9. 17 浄土宗と朝鮮伝道
9. 17 樺太の浄土宗新教会所
9. 18 寺内統監と基督教
9. 18 海外布教の現状
9. 18 宣教師の商業
9. 18 宣教師と風俗
9. 18 朝鮮より 在京城 想濱俗士
9. 19 宣教師と排日
9. 19 耶教徒の減少
9. 19 侍天教と天道教
9. 19 朝鮮基督教青年会
9. 19 韓国併合と天理教
9. 19 オツタマ師の近信
9. 20 朝鮮基督教雑話 小崎弘道氏談
9. 20 朝鮮日宗発展計画
9. 20 支那古代の仏檀
9. 20 朝鮮開教費の増額 集会の進取的態度
9. 23 韓国合邦所感 江原素六氏
9. 24 基督教朝鮮伝道の方法
9. 24 迷信と朝鮮日宗
9. 24 朝鮮寺院の併合
9. 24 蕃情二三 安部道溟
9. 26 支那宗教事情 (一) 白尾義夫師談
9. 26 南清婦客談
9. 26 朝鮮の国宝調査
9. 26 韓国合邦所感 (承前) 江原素六氏
9. 26 朝鮮基督教徒の檄文
9. 26 朝鮮布教会
9. 26 京城大聖教会の発展
9. 27 政府の朝鮮開教 に対する措置を論ず
9. 27 支那宗教事情 (二) 白尾義夫師談
9. 27 所感朝鮮伝道問題 (上) 山路愛山氏
9. 27 朝鮮基督教の実情
9. 27 朝鮮正教会の事業と前途
9. 28 支那宗教事情 (三) 白尾義夫師談
9. 28 所感朝鮮伝道問題 (中) 山路愛山氏
9. 28 東派法主渡鮮説
9. 28 朝鮮基督教伝播の理由
9. 29 海外宣教談 (一) 日蓮宗管長 旭日
苗師
9. 29 支那宗教事情 (四) 白尾義夫師談
9. 29 在鮮信徒の概数
9. 29 所感朝鮮伝道問題 (下) 山路愛山氏
9. 29 日韓併合奉告祭
9. 30 海外宣教談 (二) 日蓮宗管長 旭日
苗師
9. 30 朝鮮の宗教行政
10. 1 朝鮮基督教青年会の連合 朝鮮基督教青
年会総幹事 丹羽清次郎氏談
10. 2 海外宣教談 (三) 日蓮宗管長 旭日
苗師
10. 2 杭州の革命的気運
10. 3 蒙古伝道論 在大連 白眼道人
10. 3 鮮人露国帰化
10. 3 朝鮮僧侶の奮起
10. 3 朝鮮開教特使の派出
10. 3 浄土宗の活動
10. 3 日宗の開教会議
10. 3 京城曹洞別院の入仏式
10. 3 基督教大挙伝道
10. 4 朝鮮の宗教団
10. 4 楊仁会氏死せず
10. 5 朝鮮基督教の排日観 (近角師の朝鮮
巡教談の一)
10. 5 朝鮮の鉄道青年会
10. 6 朝鮮教化と邦語 (近角師の朝鮮巡教
談の二)
10. 6 京城基督教青年会近況
10. 8 朝鮮僧侶の質表捧呈
10. 9 朝鮮に於ける各宗 安部鐵腸
10. 9 移韓すべき蓮永寺
10. 9 清国婦人の大 蔵経出版計画
10. 9 朝鮮開教と信仰 (近角師の朝鮮巡教
談の三)
10. 9 在朝鮮信徒取戻の議 名和淵海師談
10. 10 足利師の帰朝談
10. 11 本派法主の帰朝
10. 11 間島に於ける天主教
10. 12 印度宗教学会
10. 14 朝鮮の宗教事務
10. 16 日鮮の關係と 教化問題 大内青巒
10. 19 清国の蔵経出版 其事業と汪徳淵氏
10. 19 朝鮮にて行商伝道
10. 19 朝鮮と神社建立 歴史並に人情上の調
査必要
10. 19 天主教宣教師会
10. 20 樺太教界談 失敗せし西本願寺の開教
10. 22 京城監獄を觀る 哲魔
10. 22 朝鮮旅行 嶋田東水 (一) 釜山より
10. 24 訪問時談 朝鮮布教雜感 法学博士
文学博士 加藤弘之氏
10. 24 朝鮮旅行 嶋田東水 (二) 京城より
10. 24 朝鮮伝道講演会起る
10. 25 朝鮮人の面相占ひ
10. 26 古日韓の關係 (上) 境野黄洋
10. 26 暹羅国王崩御
10. 27 古日韓の關係 (中) 境野黄洋
10. 28 朝鮮開教の根本方針 鷲尾順敬
10. 28 古日韓の關係 (下) 境野黄洋

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1910. 10. 28 朝鮮同化と東派 (中安代議士の意見書)
10. 28 洞宗と朝鮮の円宗
10. 28 天理教校在学中の朝鮮人
10. 28 暹帝崩御と東派法主
10. 28 朝鮮旅行 嶋田東水 (三) 京城雜信
10. 29 朝鮮の基督教大挙伝道
10. 29 京城日曜学校生徒大会
10. 30 暹羅国王へ弔電
10. 30 朝鮮はがき 哲魔
11. 1 百萬遍朝鮮に 移転せられんか 今期宗会の一議案
11. 2 神道連合朝鮮計画
11. 2 回教会堂の設立
11. 2 朝鮮はがき
11. 3 朝鮮信徒二万の帰依
11. 3 支那女学生監督会 …英国に於ける
11. 5 朝鮮の統治 と危険思想
11. 6 朝鮮人の迷信
11. 6 基督教の朝鮮伝道問題 協營伝道局の設立如何
11. 7 朝鮮旅行 嶋田東水 (四) 京城の仏教
11. 7 印度宗教学会
11. 7 上海の東派支院開設
11. 7 朝鮮觀光団と日蓮宗
11. 8 朝鮮円宗由来
11. 8 朝鮮百万人伝道 と求道記名者
11. 10 朝鮮觀光団と増上寺
11. 11 支那最初の念仏教 (上) 境野黄洋
11. 11 朝鮮旅行 嶋田東水 (五) 覺皇寺の入仏式
11. 11 大連の救世軍発展計画
11. 13 支那最初の念仏教 (下) 境野黄洋
11. 13 朝鮮開教総監人選
11. 14 朝鮮人は斯て実 際的に教化せらる 在朝鮮 哲魔
11. 14 朝鮮貴族団
11. 15 回教徒の勢力
11. 15 朝鮮貴族団
11. 16 大連の暗黒面
11. 16 朝鮮旅行 嶋田東水 (六) 朝鮮仏教に就て
11. 18 朝鮮総督と基督教
11. 18 朝鮮基督教と総監
11. 18 朝鮮はがき 哲魔
11. 19 黙雷禪師渡鮮せんとなす
11. 19 朝鮮旅行 嶋田東水 (七) 廢城を観る
11. 19 朝鮮はがき 哲魔
11. 20 朝鮮旅行 嶋田東水 (八) 大陸的なる平壤
11. 21 大連に於ける各宗の躍起布教
11. 21 蒙古布教
11. 22 朝鮮に伽藍建立 大阪浄土僧の計画
11. 23 西派大連の特別布教
11. 28 朝鮮教況視察談
11. 29 印度の婦人と宗教的感化
12. 1 印度の古書 千里眼 西派 伊藤一郎 (稿)
12. 6 妙心派の朝鮮開教論
12. 7 生蕃布教の方法
12. 7 朝鮮私学校の衰微
12. 8 台湾通信 加藤惠證 (投)
12. 10 朝鮮宗教界雜感
12. 10 烏港の会堂
12. 10 清国安東県に於ける新築木堂
12. 11 台湾通信 加藤惠證 (投)
12. 11 京城の日宗婦人会
12. 12 神道各派朝鮮開教
12. 13 朝鮮基督教の将来
12. 14 朝鮮の開教 元韓国一進会顧問 内田良平氏談
12. 14 南清地方日本僧排斥
12. 15 釜山別院事件 文学士 小笠原秀實
12. 15 鴨綠江から大同江 哲魔
12. 16 南清の仏耶両教
12. 16 朝鮮第一の遺物 華嚴寺の石經華嚴經発見
12. 16 暹羅先皇帝より獻木
12. 16 印度宗教学会
12. 17 鴨綠江から大同江 哲魔
12. 17 海外布教授護会
12. 18 鴨綠江から大同江 哲魔
12. 19 印度の宗教騒動 安藤鐵腸
12. 20 鴨綠江から大同江 哲魔
12. 21 日本の基督教徒の 朝鮮伝道問題
12. 22 釜山別院事件 (小笠原氏の論文に駁す) ケー、ワイ生
12. 24 鴨綠江から大同江 哲魔
12. 26 朝鮮開教と日蓮宗会
12. 26 基督教設立南清大学
12. 27 日宗朝鮮留学生
12. 28 南清に於ける仏耶教情
12. 28 日本語と朝鮮語 諺文に梵語より出たるもの也
12. 28 オ比丘の通信
1911. 1. 1 朝鮮開教と布教使 大隈重信
1. 5 鴨綠江から大同江 哲魔
1. 6 鴨綠江から大同江 哲魔
1. 6 朝鮮布教の趣味 在鮮 鶴水義秀
1. 6 浦塩の仏堂
1. 6 釜山別院輪番定る
1. 7 宣教師と紳士の衝突
1. 7 台湾生蕃 (上) 加藤惠證
1. 8 台湾生蕃 (中) 加藤惠證
1. 9 台湾生蕃 (下) 加藤惠證
1. 10 台湾生蕃の倫道 姦通と殺人に対する制裁
1. 14 西藏の天葬火葬
1. 15 嗚呼亡国の民 牛の為に兩教徒の大血戦

1911. 1. 17 朝鮮の布教制限
 1. 18 鴨緑江から大同江 哲魔
 1. 21 鴨緑江から大同江 哲魔
 1. 23 朝鮮の仏教(一) 妻木直良
 1. 23 達頼喇嘛と印度
 1. 24 朝鮮の仏教(二) 妻木直良
 1. 25 朝鮮の仏教(三) 妻木直良
 2. 3 西派探検隊の近状
 2. 4 清国布教問題
 2. 14 蕃界布教使派遣
 2. 14 朝鮮布教監督者更迭
 2. 14 鮮清留学生と基督教信者
 2. 15 支那史料の探求(上)
 2. 15 総督と朝鮮開教
 2. 15 北野元峯師渡鮮
 2. 16 支那史料の探求(下)
 2. 17 海外新音 支那最初の宗教(上) 『センチュリー、パス』より
 2. 18 海外新音 支那最初の宗教(下) 『センチュリー、パス』より
 2. 20 釜山別院の輪番問題
 2. 21 満洲参詣団
 2. 25 神道と朝鮮布教 各派連合布教の計画
 2. 26 浦塩の教会堂
 2. 26 朝鮮開教費
 3. 5 東派露国の開教
 3. 11 清国の救済事業
 3. 13 朝鮮僧侶の入洛
 3. 15 浄土宗の朝鮮開教状況
 3. 17 日宗の京城日語学校
 3. 17 日蓮宗朝鮮留学生
 3. 18 朝鮮金剛寺建築
 3. 18 朝鮮の団参僧 を訪ふ
 3. 19 法要彙報 朝鮮人得度
 3. 20 朝鮮人得度式
 3. 22 法要彙報 朝鮮窮民救済三千円
 3. 24 東派本願寺彙報 朝鮮僧の先覚者
 3. 25 生蕃人の参詣
 3. 25 上海仏教婦人会
 3. 25 京城基督教青年会近況
 3. 27 渡印僧消息
 3. 27 澎湖島忠死者追弔会
 3. 27 台湾人の招待
 3. 29 総督府と基督教
 4. 1 台湾参客の出発
 4. 5 宣教師迫害さる
 4. 6 上海の団体参詣
 4. 6 生蕃人入京
 4. 7 本日の生蕃
 4. 7 生蕃を觀る
 4. 8 台湾土着の宗旨
 4. 9 総督府と基督教
 4. 9 朝鮮館開設
 4. 9 布教にも干渉
 4. 11 朝鮮僧の得度
 4. 11 上海婦人法話会大会
 4. 11 汪の頌徳表
 4. 11 明日出発朝鮮僧の素情
 4. 13 朝鮮の名僧
 4. 14 支那の仏教現状
 4. 14 朝鮮僧侶参拝
 4. 14 朝鮮僧の嘆徳文
 4. 14 東本の朝鮮僧
 4. 15 朝鮮館の陳列品
 4. 15 来るべき朝鮮参拝団
 4. 15 朝鮮布教の現状 於へ□、朝鮮研究会 幹事 青柳南冥氏談
 4. 15 朝鮮僧侶演説会
 4. 15 朝鮮人の婦敬式
 4. 15 満洲団一行
 4. 16 禪の海外伝道論(上)
 4. 16 満洲の布教
 4. 17 禪の海外伝道論(下)
 4. 17 清国布教一変せん
 4. 17 朝鮮僧の献品式
 4. 18 清国西派布教一変
 4. 20 清国教況
 4. 21 基督教徒排日熱
 4. 21 鮮僧の法名
 4. 22 朝鮮館を觀る
 4. 23 朝鮮団宿舍訪問
 4. 23 朝鮮雑誌嚆矢
 4. 27 朝鮮僧の引張風
 4. 28 朝鮮僧侶学校
 4. 28 鮮僧の得度
 4. 30 醍醐派と海外布教
 5. 1 醍醐派と朝鮮
 5. 3 京城本願寺の鐘
 5. 4 京城本願寺の危機
 5. 6 朝鮮開教費 パザーで得たる利益二千円
 5. 8 浄土宗と台湾開教
 5. 8 曹洞宗と台湾開教
 5. 9 上海信徒の感激
 5. 11 朝鮮の社寺保存
 5. 11 朝鮮教団の一行
 5. 16 印度教徒と戴冠式
 5. 21 台湾の西派教状
 5. 22 生蕃の遠忌観
 5. 25 旅順の森田師
 5. 27 朝鮮鎮南浦だより
 5. 29 朝鮮仏教の初期 妻木直良
 5. 29 旅順に於ける悟由師
 5. 29 朝鮮近信
 5. 31 朝鮮基督教徒の大集合
 6. 1 森田師の帰朝
 6. 2 西本の海外布教
 6. 4 朝鮮伝道に関する宣言
 6. 5 曹洞宗の朝鮮布教規程
 6. 5 西本願寺鮮人歓迎
 6. 6 朝鮮宗教取締の不法 罪人扱せらるる宗教家

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1911. 6. 6 神道の朝鮮開教
 6. 6 入竺僧の帰朝
 6. 6 朝鮮学生寄宿舎
 6. 6 台北別院起工見合
 6. 7 南方仏教の残影
 6. 7 朝鮮布教の拡張
 6. 9 蕃地慰問講演
 6. 11 組合教会朝鮮開教評 附各派合同問題事情
 6. 11 上海所感 柴田法衣店主(投)
 6. 12 清国湖南省湘江流域に於ける基督教(一)
 6. 12 故スマンガラ 僧正の事
 6. 13 組合教会の朝鮮伝道
 6. 14 清国湖南省湘江流域に於ける基督教(二)
 6. 14 朝鮮の基督教信者続々脱宗す
 6. 15 清国湖南省湘江流域に於ける基督教(三)
 6. 15 印度古代の詩歌を出版せんとす
 6. 16 清国湖南省湘江流域に於ける基督教(四)
 6. 17 清国湖南省湘江流域に於ける基督教(五)
 6. 18 清国湖南省湘江流域に於ける基督教(六)
 6. 18 朝鮮寺刹令
 6. 19 清国の寺院、日本 本山の末寺たらんとす
 6. 19 スマンガラ僧 正の訃音を聞いて 今昔の感を記す 小泉了諦(投)
 6. 20 馬山妙国寺新築
 6. 20 スマンガラ僧 正の訃音を聞いて 今昔の感を記す(続) 小泉了諦(投)
 6. 21 南京一瞥 東六 法衣商 柴田正次郎
 6. 21 支那伝道に急須なるは熱心の二字 有吉上海領事の答
 6. 22 入蔵途上の僧(上) 『小木曾松波濤君』
 6. 23 入蔵途上の僧(下) 『小木曾松波濤君』
 6. 26 朝鮮宗教取締
 6. 27 傑僧武田範之師(一)
 6. 27 杭州西湖遊記 柴田法衣店主
 6. 29 清国浄土教の隆勢(上) 在清国長沙府 水野梅曉
 6. 29 傑僧武田範之師(二)
 6. 30 巴利語の読経 ダンマバラ僧正追悼会
 6. 30 寧波巡礼 柴田法衣店主
 6. 30 浄土僧の喇嘛研究
 7. 1 清国浄土教の隆勢(下) 在清国長沙府 水野梅曉
 7. 1 傑僧 武田範之師(三)
 7. 1 康有為の来山
 7. 2 朝鮮神社
 7. 2 傑僧 武田範之師(四)
 7. 2 台湾に於ける梅上連枝
 7. 5 日鮮牧師の歡喜
 7. 9 回教、国を誤る
 7. 9 北京西山夏令会 中国基督教青年会主催
 7. 10 梁氏と日本仏教
 7. 10 台湾に於ける梅上連枝
 7. 12 朝鮮の浄土開山
 7. 12 ス僧正追悼会
 7. 13 スマンガラ 僧正の嘆徳
 7. 15 ス僧正追悼講話(上) 釈興然師
 7. 15 併合後の基督教 海老名彈正氏の談
 7. 16 ス僧正追悼講話(下) 釈興然師
 7. 17 台南追弔会
 7. 17 朝鮮最初の遠忌
 7. 18 旅順教会独立せん
 7. 21 朝鮮の膽取事件
 7. 21 上海の龍谷会館
 7. 22 朝鮮布教の現状及び将来(上) 某朝鮮通談
 7. 22 西派の朝鮮開教
 7. 23 朝鮮布教の現状及び将来(下) 某朝鮮通談
 7. 23 日鮮基督青年会合併難
 7. 25 梅上連枝台湾巡覧記
 7. 27 朝鮮僧侶の復活を図る
 7. 28 緬甸仏教巡見談(上)
 7. 28 台湾盲者の慈父
 7. 28 朝鮮開教の有望
 7. 28 日鮮基督教徒の關係
 7. 29 朝鮮牧師団
 8. 1 亞刺比亞靈跡旅行談(一) 中島裁之氏講演概要
 8. 1 鮮人牧師団
 8. 2 亞刺比亞靈跡旅行談(二) 中島裁之氏講演概要
 8. 2 大連宗教家懇話会
 8. 2 朝鮮牧師団歡迎準備
 8. 3 清国と基督教
 8. 4 亞刺比亞靈跡旅行談(三) 中島裁之氏講演概要
 8. 4 朝鮮宣教師団
 8. 6 亞刺比亞靈跡旅行談(四) 中島裁之氏講演概要
 8. 6 濠州の宗教(一) 六月十日 南阿喜望峯行航中 井上円了
 8. 6 達頼喇嘛の後任
 8. 6 朝鮮寺刹令施行期及 施行規則
 8. 7 亞刺比亞靈跡旅行談(五) 中島裁之氏講演概要
 8. 7 濠州の宗教(二) 六月十日 南阿喜望峯行航中 井上円了
 8. 8 亞刺比亞靈跡旅行談(六) 中島裁之氏講演概要
 8. 8 濠州の宗教(三) 六月十日 南阿喜望峯行航中 井上円了
 8. 9 朝鮮牧師団
 8. 10 西本願寺、朝鮮 に於いて活動せんとす

- | | | |
|-------------|--------------------------------------|---|
| 1911. 8. 11 | 朝鮮牧師団 | を要す 東亜同文会幹事 大原武慶氏
(談) |
| 8. 12 | 四川教信 小木曾善弘師の消息 | |
| 8. 16 | 清国の現状と日本 仏教徒の覚悟 (一)
在東京 水野梅暁 | 10. 20 清国に於ける西 本願寺の活動 |
| 8. 16 | 朝鮮基督教布教 区画の制限 | 10. 21 洞宗の朝鮮開教 費は如何になりしや |
| 8. 18 | 朝鮮教界近状 | 10. 21 洛陽の僧侶漸く 活動を始む 真宗教
団成る |
| 8. 19 | 清国の現状と日本 仏教徒の覚悟 (二)
在東京 水野梅暁 | 10. 21 武子夫人巡回の影響 |
| 8. 19 | 我輩の観たる朝鮮 大洲鐵也師談 | 10. 23 西本願寺南清に 活動せんとす |
| 8. 20 | 清国の現状と日本 仏教徒の覚悟 (三)
在東京 水野梅暁 | 10. 24 支那の変乱 と宗教 (一) 高楠博士
談 |
| 8. 21 | 清国の現状と日本 仏教徒の覚悟 (四)
在東京 水野梅暁 | 10. 24 朝鮮に於ける基督 教の勢力隆々たり
ハリス博士の談 |
| 8. 22 | 朝鮮寺院に対する曹 洞宗計画の蹉跌 | 10. 25 支那擾乱と布教の実 |
| 8. 27 | 大連の宗教界 | 10. 25 支那の変乱 と宗教 (二) 高楠博士
談 |
| 9. 1 | 朝鮮の仏教観 (上) 前西本願寺朝鮮
開教総監 | 10. 26 支那の変乱 と宗教 (三) 高楠博士
談 |
| 9. 2 | 朝鮮の仏教観 (下) 前西本願寺朝鮮
開教総監 | 10. 26 暹羅宗教事情 |
| 9. 7 | 朝鮮開教と四 宗派の失敗 | 10. 27 朝鮮を視て嫌 らぬ諸点 (一) 平松
理英師 (談) |
| 9. 8 | 蒙古と扶男児 | 10. 27 大連別院行惱 |
| 9. 10 | 清国の回々教 | 10. 27 宣教師と秘密結社 |
| 9. 12 | 樺太布教日記 加藤恵証 | 10. 28 朝鮮を視て嫌 らぬ諸点 (二) 平松
理英師 (談) |
| 9. 12 | 京城の醍醐派新寺 | 10. 28 喇嘛僧の巡遊 |
| 9. 14 | 樺太布教日記 加藤恵証 | 10. 28 朝鮮に於ける宗演師 |
| 9. 15 | 遭難宣教師救護 | 10. 28 開教従事者奨励 |
| 9. 19 | 樺太の近教況 | 10. 28 中清の風雲 |
| 9. 20 | 回教徒の奇習 | 10. 28 朝鮮を視て嫌 らぬ諸点 (三) 平松
理英師 (談) |
| 9. 26 | 清僧の覚醒運動 | 10. 29 朝鮮を視て嫌 らぬ諸点 (四) 平松
理英師 (談) |
| 9. 26 | 支那浄土部叢書 | 10. 30 朝鮮を視て嫌 らぬ諸点 (五) 平松
理英師 (談) |
| 9. 26 | 日清仏書の交換 | 10. 31 支那変乱と文 明の趨勢 (上) (於本
社主催宗教講演会) 文学博士 井上
哲次郎氏 |
| 9. 26 | 樺太寺院の廻附 | 10. 31 朝鮮を視て嫌 らぬ諸点 (五) 平松
理英師 (談) |
| 9. 26 | 来れ朝鮮に 朝鮮 周黄生 | 11. 1 支那変乱と文 明の趨勢 (中) (於本
社主催宗教講演会) 文学博士 井上
哲次郎氏 |
| 10. 3 | 伊土開戦と宗教 | 11. 2 支那変乱と文 明の趨勢 (下) (於本
社主催宗教講演会) 文学博士 井上
哲次郎氏 |
| 10. 5 | 土国の基督教は 死せる形式のみ | 11. 3 ゴルドン夫人 景教碑を建つ |
| 10. 5 | 伊土戦争と 宗教問題 海老名弾正氏
談 | 11. 5 朝鮮に於ける釈宗演師 |
| 10. 5 | 回教徒団の活動 | 11. 9 上海まで (一) 来馬琢道 |
| 10. 6 | 清廷と西藏法主 | 11. 9 曹洞宗の海外布教 |
| 10. 6 | 基督教と鮮人伝道 | 11. 11 清国の動乱と西本願寺 |
| 10. 7 | 朝鮮伝道後援会 | 11. 11 楊仁山翁追悼会 |
| 10. 8 | 伊土戦争は果して宗教 的戦争となる
乎 小崎弘道氏 (談) | 11. 12 楊文会氏を憶ふ (上) 南条文雄師 |
| 10. 9 | 伊土戦争は果して宗教 的戦争となる
乎 (続) 小崎弘道氏 (談) | 11. 12 清国革命党中の仏 教学者 譚嗣同と
章炳麟 |
| 10. 10 | 海外伝道の根本問題 忽涓谷快天師
(談) | 11. 12 大連別院の近状 |
| 10. 12 | 洞宗の内地外布教師 | 11. 13 清国時變と西派本願寺 |
| 10. 13 | 楊仁山の大往生 | 11. 14 楊文会氏を憶ふ (下) 南条文雄師 |
| 10. 14 | 浦塩の本願寺 別院敷地問題 | 11. 14 清朝の将来 渡辺哲乘 |
| 10. 15 | 中国に於ける武子夫人 | |
| 10. 16 | 清国革命軍と 回々教徒 黒龍会長
内田良平氏 (談) | |
| 10. 17 | 革命党の将来と回教 徒の活動 水野
梅暁師 (談) | |
| 10. 17 | 清国に於ける回教徒 今後の態度注目 | |

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1911. 11. 14 大連の特別布教
 11. 15 香港より 来馬琢道
 11. 16 雑報 清国布教現状
 11. 16 革命首領と仏教
 11. 16 清国赤十字隊と 西本願寺
 11. 17 支那変乱観 釈元恭師談
 11. 18 清国赤十字隊と西 本願寺の好意
 11. 19 南洋人の日本留学
 11. 20 回々教徒蜂起
 11. 21 清国留学生と西派
 11. 21 回教徒と英帝
 11. 21 支那変乱と曹洞宗
 11. 25 宣教師の斡旋
 11. 25 神道各派連合朝鮮開教
 11. 26 支那変乱と仏教界
 11. 26 仏国宣教師の殺害
 11. 27 長沙府より
 11. 28 鮮人僧侶来る
 11. 29 雑報 基督教朝鮮伝道裏面
 11. 29 上海より
 11. 29 宣教師の殺害
 11. 30 長沙より
 11. 30 清人信徒の寄付
 12. 1 達頼帰藏如何
 12. 1 支那動乱に就きて日本仏教者の奮起を促す (上) 田中舎身
 12. 1 漢口総領事館の謝状
 12. 2 支那動乱に就きて日本仏教者の奮起を促す (下) 田中舎身
 12. 2 支那革命の波乱と我邦
 12. 2 宣教師の引揚
 12. 2 西本願寺対清教策議定
 12. 2 曹洞宗と樺太新寺院
 12. 3 雑報 朝鮮の事情 (上) 釈宗演師
 12. 3 朝鮮に於ける報恩講参り
 12. 3 清語研究生の募集
 12. 4 雑報 印度の志士シバ、バルト、ラール氏と語る
 12. 4 暹羅皇帝戴冠式
 12. 5 雑報 朝鮮の事情 (中) 釈宗演師
 12. 6 雑報 朝鮮の事情 (下) 釈宗演師
 12. 6 奉天の各宗連合
 12. 7 中国基督教青年会の寂寥
 12. 8 回々教の不穩
 12. 9 仏教を本位とせる 暹羅戴冠式 皇帝に水を注ぐ
 12. 10 朝鮮総督府と禪学
 12. 11 朝鮮宗教情勢
 12. 12 上海まで (二) 海南沖にて 来馬琢道
 12. 12 宣教師の避難
 12. 12 北京駐屯隊慰問講演
 12. 14 清国革命と我が教 界の新思想家 (一) 柳橋緑村
 12. 16 海上の法楽 来馬琢道
 12. 17 雑報 香港の二日 (上) 来馬琢道
 12. 17 宣教師避難
 12. 17 清国革命と我が教 界の新思想家 (二) 柳橋緑村
 12. 17 清国慰問布教使
 12. 18 雑報 香港の二日 (下) アナンパ沖にて 来馬琢道
 12. 19 新嘉坡まで 来馬琢道
 12. 19 上海の風俗
 12. 19 漢口より 在清国漢口 井上慈□
 12. 20 新嘉坡 (上) 来馬琢道
 12. 20 清国革命と我が教 界の新思想家 (三) 柳橋緑村
 12. 20 暹羅より
 12. 21 新嘉坡 (下) 来馬琢道
 12. 22 雑報 革命乱余瀝 在長沙 田中哲巖
 12. 22 朝鮮に於ける迷信
 12. 23 雑報 革命乱余瀝 在長沙 田中哲巖
 12. 24 清国動乱と救世軍
 12. 26 上海の大追悼会
 1912. 1. 1 支那革命と宗教 伯爵 大隈重信
 1. 1 支那変乱の我が 思想界に及ぼす影響 文学博士 村上专精
 1. 1 我国体と支那 の革命 大内青巒
 1. 1 支那変乱は我思 想界と全然没交渉なり □学院大学々監 天台道士 杉浦重剛
 1. 1 支那変乱の我 思想界に及ぼす影響 文学博士 近角常観
 1. 1 支那革命と与論 伯爵 板垣退助
 1. 1 支那変乱と我 国に及ぼす影響 文学博士 前田慧雲
 1. 1 支那今後の政 体と日本 (上) 文学博士 井上哲次郎
 1. 3 支那今後の政 体と日本 (下) 文学博士 井上哲次郎
 1. 3 支那変乱と仏 耶両教 法学博士 文学博士 加藤弘之
 1. 3 支那革命と基 督教の発展 (上) 海老名弾正
 1. 3 朝鮮の珍什
 1. 5 支那革命と基 督教の発展 (下) 海老名弾正
 1. 5 支那変乱の我が 思想界に及ぼす影響 佐治実然
 1. 5 支那変乱の我が 思想界に及ぼす影響 文学博士 加藤玄智
 1. 5 南清の近情
 1. 5 長沙だより 十二月十五日 湘上子 (投)
 1. 5 清僧三百怒る
 1. 5 米国宣教師の活動
 1. 5 日蓮宗朝鮮布教拡張
 1. 6 支那の見たる日本 衆議院議員 福本日南
 1. 6 南清慰問僧の復命
 1. 7 支那革命の影響と基督教 小崎弘道

1912. 1. 7 平壤だより 恭
 1. 7 新嘉坡より 3. 3 武漢便り 漢口西本願寺賛事 井上慈
 1. 8 支那変乱の我が 思想界に及ぼす影響 □
 救世軍大佐 山室軍平 3. 4 仏跡だより(一) 来馬琢道
 1.10 支那変乱と平和協会 3. 6 滯暹日記(一) 来馬琢道
 1.11 雑報 朝鮮総督の基教 補助問題 3. 6 仏跡だより(二) 来馬琢道
 1.12 回教徒の非買同盟 3. 7 滯暹日記(二) 来馬琢道
 1.12 慰問袋の発送 3. 7 仏跡だより(三) 来馬琢道
 1.12 橋端超師の行衛略分明す 3. 8 革命的支那統一に就て(二) 釈元
 1.12 南清にある大谷派僧 恭
 1.12 革命乱余瀝 在長沙 鐵顔生 3. 8 滯暹日記(三) 来馬琢道
 1.13 雑報 動乱と日本僧 侶の行動 3. 8 湖南通信 在長沙 田中哲巖
 1.13 スマングラ僧正の寂後 3. 9 革命的支那統一に就て(三) 釈元
 1.14 新嘉坡より 新嘉坡にて 来馬琢道 恭
 1.15 革命争乱中の 上海本願寺 3. 9 滯暹日記(四) 来馬琢道
 1.15 支那今後の運命 在奉天 釈元恭(寄) 3. 9 蒙古活仏の氣勢
 1.17 ボル子オより 西本願寺布教使 岩田 3. 9 宣教師殺害さる
 義照 3.10 上海東本願寺近況
 1.18 長沙より (十二月卅一日) 湘上子 3.13 朝鮮の基督教徒
 (投) 3.17 旅中雑感 来馬琢道
 1.19 上海だより 3.18 朝鮮布教談 曹洞宗朝鮮布教総監 北
 1.21 革命乱余瀝 一月八日長沙にて 田中 野元峯師談
 鐵顔 3.19 満洲は宗教の博覧会なり 在大連 紫
 1.21 西本願寺清国伝道の向後 峯生
 1.21 長沙より (一月八日) 湘上子(投) 3.26 南京の風雲 甲斐寛中
 1.21 本願寺と紅十字 3.26 台湾の東本願寺発展
 1.26 西本願寺の支那布教 3.26 京城開教院慶讃法会
 2. 1 上海海潮寺の大会議 3.27 宣教師の遭難
 2. 2 武漢便り 漢口西本願寺賛事 井上慈 3.29 陰謀宣教師の有罪
 □ 4. 1 米宣教師の悖徳
 2. 2 朝鮮の宣教師(上) 4. 1 雑報 支那人と宗教
 2. 3 朝鮮の宣教師(中) 4. 2 印度だより 来馬琢道
 2. 4 朝鮮の宣教師(下) 4. 2 印度の象祭
 2. 5 革命の氣運(上) 良全(投) 4. 2 喇嘛僧の華頂登嶺
 2. 6 渡暹海上(上) 来馬琢道 4. 5 印度だより 来馬琢道
 2. 6 革命の氣運(下) 良全(投) 4. 6 鮮人仏教高等学院
 2. 7 渡暹海上(下) 来馬琢道 4. 7 対清外交と仏教徒
 2. 7 台湾の東本願寺 4. 7 台湾の本願寺
 2. 8 湄南河上 来馬琢道 4.12 台湾の魔法使ひ
 2.10 中国基督教徒共和協賛会 4.12 雑報 西藏の神聖戦争 活仏変死の報
 2.10 喇嘛の婦蔵 4.13 南半球と仏教 釈尊降誕会演説 文学
 2.15 朝鮮漁夫の蛮行 博士 井上円了
 2.17 朝鮮基督教青年会副会長逮捕 4.16 回教徒四十万の後援
 2.19 外国宣教師の誤解 4.17 支那布教と西派
 2.19 宣教師等の運動 4.17 雑報 黄陽島の暴動
 2.21 寺内朝鮮総督暗殺の大 陰謀と基督教 4.24 暹羅印度土産 日置黙仙師談
 徒(上) 5.25 東洋の新宗教と 西洋の新宗教(上)
 2.22 寺内朝鮮総督暗殺の大 陰謀と基督教 大連に於ける天理教と救世軍 白眼
 徒(中) 道人
 2.23 開教希望者に一言 5.26 東洋の新宗教と 西洋の新宗教(下)
 2.25 寺内朝鮮総督暗殺の大 陰謀と基督教 大連に於ける天理教と救世軍 白眼
 徒(下) 道人
 2.25 朝鮮教徒問題 4.27 朝鮮浄土宗慶讃会
 2.27 喇嘛僧に勸学 4.28 北京の基督教会堂
 2.28 朝鮮基督教の勢力 5. 1 オットマ師家族連れ来朝
 3. 1 革命的支那統一に就て(一) 釈元 5. 2 蒙古活仏の梵妻 外蒙古独立秘史

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1912. 5. 2 朝鮮に於ける大谷派の發展
 5. 2 太田覚眠氏と外務省
 5. 3 暹羅の古仏像 達頼喇嘛より我皇室に献上
 5. 9 在鮮米国教師の誇張
 5. 9 雑報 回教徒の共和反対 鎮海湾の仏教
 5. 10 中華仏教總會の 概文と章程 (上)
 5. 12 中華仏教總會の 概文と章程 (下)
 5. 12 朝鮮円宗近況
 5. 12 京城洞宗の發展
 5. 12 朝鮮組合教會の發展
 5. 13 支那の現勢談
 5. 14 李容九氏危篤 侍天教第三世教主
 5. 15 イスラムの伝道 日本に於けるマホメット教
 5. 16 李王世子の寺院参詣
 5. 17 海外移民と仏教 (上) 文学博士 井上円了
 5. 17 清国宗教視察 (一) 福田閔正
 5. 17 北京の招魂祭
 5. 17 生蕃西本願寺参拝
 5. 18 海外移民と仏教 (下) 文学博士 井上円了
 5. 18 清国宗教視察 (二) 福田閔正
 5. 19 朝鮮成身院入仏式
 5. 20 夕氏来朝せん
 5. 20 台湾總督府の蕃界布教
 5. 22 回教徒の動搖
 5. 22 基督教徒朝鮮視察団
 5. 24 清国大連浄土宗の起工式
 5. 26 京城本願寺の降誕会
 5. 27 故李容九氏の略歴 (上)
 5. 28 故李容九氏の略歴 (下)
 6. 3 李容九氏葬儀日取
 6. 6 台湾蕃地の僧侶
 6. 7 香港本願寺
 6. 7 支那と基督教大学
 6. 7 蕃人布教と討伐隊
 6. 8 朝鮮と宗教
 6. 9 朝鮮開教事情 總督府事務官の談片
 6. 10 朝鮮に於ける女子教育
 6. 11 浄土 朝鮮開教
 6. 11 蒙古探検談
 6. 13 基隆の千人塚
 6. 13 醍醐雜信 朝鮮概況
 6. 14 朝鮮基教問題
 6. 15 朝鮮總督府の対宗教方針一変す 大陸謀事件の影響
 6. 15 注目すべきの二事実 李氏葬儀と鮮人 神道と侍天教
 6. 20 浄土宗の朝鮮開教總監督
 6. 21 西派台湾布教現状 (上)
 6. 21 台北監獄幼年受刑者の教化
 6. 22 真言僧の教田經營
 6. 22 台湾と浄土教會所
 6. 23 浄土宗の清国開教使會
 6. 24 植民政策と宗教
 6. 24 浄土朝鮮開教總監督任命
 6. 25 西派滿洲布教
 6. 25 大連宗教家懇談會
 6. 25 營口の大法會
 6. 28 奥村女史の銅像
 6. 29 朝鮮教開と農場
 7. 3 印度古代女性觀 (上) 文学博士 井上哲次郎
 7. 3 營口教信
 7. 3 浄宗と開城学堂
 7. 4 印度古代女性觀 (下) 文学博士 井上哲次郎氏
 7. 4 西派に圧倒されつつある大谷派の朝鮮開教
 7. 4 洞宗朝鮮布教師任命
 7. 5 支那みやげ
 7. 5 台湾だより
 7. 6 台湾近信
 7. 7 朝鮮と布教者
 7. 9 台湾蕃界布教師會議
 7. 10 朝鮮雜感 (上) 神宮奉贊會長 藤岡好古氏談
 7. 10 生蕃化導法
 7. 11 朝鮮雜感 (下) 神宮奉贊會長 藤岡好古氏談
 7. 13 台湾の新竹寺
 7. 15 朝鮮みやげ 曹洞宗朝鮮布教總監督 北野元峯師談
 7. 15 西本願寺朝鮮開教員一覽
 7. 16 朝鮮の各宗布教 (上) ▲真宗大谷派 ▲真宗本願寺派
 7. 17 朝鮮の各宗布教 (下) ▲曹洞宗 ▲日蓮宗 ▲臨濟宗 ▲真言宗
 7. 19 海外の黒住教
 7. 19 生蕃教化事務會議
 7. 24 京城の御祈祷
 7. 28 釜山の店員慰勞會
 7. 31 台湾住民の祈願
 7. 31 樺太住民の赤誠
 8. 5 趙總督等の奉悼
 8. 5 南京還拜式
 8. 6 日本基督教會台湾特別伝道
 8. 7 朝鮮宣教師の祈祷
 8. 7 台湾の浄土宗
 8. 8 台湾便り
 8. 10 蒙古の天主教
 8. 10 台湾の鉄道布教
 8. 11 鮮人の哀号
 8. 12 妙心派の滿洲布教行惱
 8. 12 京城講習會
 8. 12 朝鮮と洞宗布教所
 8. 12 南洋の蝦蟇仙
 8. 16 朝鮮蔚山開教
 8. 17 朝鮮西派便り

1912. 8. 18 朝鮮疑獄事件
 8. 19 樺太布教拡張計画
 8. 21 京城の講習会
 8. 23 東洋平和の保全と本願寺 鬼窟生
 8. 23 回々教と日本 印度人バラカツラ氏談
 8. 24 東洋平和の保全と本願寺(続) 鬼窟生
 8. 24 台北西派別院の敬弔
 8. 25 京城出張所の建築
 8. 25 東洋平和の保全と本願寺(続) 鬼窟生
 9. 2 三面論説 江戸ッ子の意気と支那人の形式
 9. 6 朝鮮僧の不埒
 9. 19 印度マハント僧正の弔辞
 9. 19 朝鮮の孝子 寺内総督褒状を送と
 9. 21 京城西本願寺の奉悼
 9. 27 支那の孔子拝礼廃止
 9. 27 漢口西派出張所の奉悼
 9. 29 印度經典の和訳
 10. 9 生蕃の本願寺参拝
 10. 14 寺内総督の軍刀奉納
 10. 24 新嘉坡の宗教
 10. 24 朝鮮に於ける西派勢力
 10. 26 朝鮮の国宝を盗む
 10. 29 旅順に於ける宗演師
 10. 30 支那の日本僧招待
 10. 31 鮮人基督教団
 11. 2 満州教界の情勢
 11. 4 慶州仏跡移転問題
 11. 5 旅順に於ける釈宗演禪師
 11. 10 満洲巡教談
 11. 13 満洲と布教 釈宗演師の談
 11. 13 喇嘛となれる日本人
 11. 13 寺内総督と石窟庵
 11. 15 琉球人の宗教
 11. 15 西派の満洲特別布教
 11. 16 曹洞宗議會 ▲京城別院問題 ▲朝鮮布教所敷地問題
 11. 21 朝鮮三布教所開設
 11. 26 京城西派別院の落成
 12. 1 鮮満教況視察雄感 豊山派宗務総長富田教純師談
 12. 1 上海別院内訶
 12. 2 支那の女
 12. 4 上海仏教近状
 12. 7 支那巡拝の帰朝
 12. 8 金玉均遺骸改葬
 12. 9 大連に於ける基督教徒の衝突
 12. 9 清国に於ける天主教
 12. 14 西本願寺より 朝鮮別院講話会
 12. 14 満洲教界近状
 12. 17 朝鮮留学生の牧師
 12. 17 安東の儒者と基督教
 12. 18 朝鮮の天理教
 12. 26 福島都督と大喇嘛
 12. 27 馬來人の風習
 1913. 1. 9 朝鮮の正月 頗る振つた奇習沢山
 1. 9 馬來半島邦人弘済会
 1. 9 朝鮮と組合教会
 1. 12 宣教師襲はる(重慶)
 1. 13 支那の風俗
 1. 15 満洲宗教界の人物(一) 世外隠士
 1. 15 活仏使節の露都着
 1. 16 満洲宗教界の人物(二) 世外隠士
 1. 20 暹国皇帝陛下記念品頒與式
 1. 21 日本と暹羅
 1. 21 平壤の基督教
 1. 22 上海の宗教研究会
 1. 23 寺内総督の寄付
 1. 31 支那人の強盜団
 2. 1 馬尼刺の謝肉祭
 2. 2 活仏の恐悦
 2. 8 義州だより
 2. 9 浦塩本願寺
 2. 11 朝鮮に於ける天理教
 2. 15 鎮江山と釈仏海師
 2. 15 朝鮮の古墳(上)
 2. 16 朝鮮の古墳(下)
 2. 18 大連の新教会
 2. 23 群山便り
 2. 24 蒙古と喇嘛教(上)
 2. 24 中野氏の渡清 ▲支那僧に変装して歴遊
 2. 25 錫蘭の仏法
 2. 25 中野氏の渡清(続)
 2. 26 蒙古と喇嘛教(下) 紫峯
 2. 26 基督教と印度人
 2. 27 朝鮮総督府の提唱
 2. 27 朝鮮の曹洞宗現況
 2. 27 洞宗京城別院の再建
 2. 27 朝鮮円宗の動静
 2. 27 米馬師支那行の日程
 2. 27 印度彫刻の仏画
 2. 28 朝鮮の宗教令
 2. 28 義州仏教婦人会
 3. 2 印度の新聞に出た日本の琉球の記事
 3. 3 義州の西本願寺
 3. 14 奉天の教界
 3. 20 台湾土人の宗教
 3. 24 中国巡教中の木邊上人
 3. 25 蝦夷だより
 3. 27 香港に日本式の寺院建築されんとす
 3. 28 支那僧周予禪
 3. 30 黒龍江岸の日持上人旧跡探検
 3. 31 支那布教権質問
 4. 2 上海より(一) 米馬琢道
 4. 2 支那蘇州城外より
 4. 3 上海より(二) 米馬琢道
 4. 5 台湾土産(上) 釈宗演
 4. 6 南満鉄会社の厚意
 4. 6 台湾土産(下) 釈宗演

1913. 4. 7 杭州より(一) 来馬琢道
 4. 8 杭州より(二) 来馬琢道
 4. 8 曹宗新築京城別院
 4. 9 杭州より(三) 来馬琢道
 4.10 杭州より(四) 来馬琢道
 4.13 支那僧大会 支那仏教の頹廃を慨く
 4.13 蘇州付近より 来馬琢道
 4.14 寧波府行 中野達慧
 4.14 南京より 来馬琢道
 4.15 蘇州より 来馬琢道
 4.17 洞宗開教現状(下) ▲朝鮮 ▲海外
 4.24 再び上海より(二) 来馬琢道
 4.25 寧波より(一) 来馬琢道
 4.25 満洲の教界
 4.26 ダンマバラ師来る
 4.26 上海より(三たび) 来馬琢道
 4.27 支那紀行吟 来馬自慰庵
 4.27 大連の基督教 ウイン博士帰米の送別会
 4.29 日持上人黒龍沿岸旧跡探検
 5. 1 夕師愈々来る
 5. 2 杭州西湖の遊玩 中野達慧
 5. 2 留学生の出發
 5. 4 朝鮮の宗教勢力
 5. 5 泊西湖玉泉寺 中野達慧
 5. 5 印度人と宣教師 テーケイ生
 5. 5 支那の宣教費七十万弗
 5. 6 詣武林靈隱雲林寺 中野達慧
 5. 7 詣雲棲寺 中野達慧
 5. 8 賽昭慶律寺 中野達慧
 5. 8 支那土産 来馬琢道
 5. 9 靈芝崇福律寺
 5.10 餐天童山
 5.11 餐育王山 中野達慧
 5.11 朝鮮基督青年会
 5.12 江蘇省周遊 中野達慧
 5.13 江蘇省周遊 中野達慧
 5.14 詣金山寺 中野達慧
 5.15 到焦山寺 中野達慧
 5.15 支那仏教大会
 5.16 南京途上 中野達慧
 5.16 極東植民地の新教区
 5.18 黒龍沿岸探検僧出發
 5.19 南京途上 中野達慧
 5.25 南京途上 中野達慧
 5.26 詣勅建普徳禪寺 中野達慧
 5.27 下関見物 中野達慧
 5.28 下関見物 中野達慧
 5.29 長江瞥見 中野達慧
 5.30 長江瞥見 中野達慧
 5.31 湖江を遡る 中野達慧
 6. 2 日印協会の近状
 6. 2 朝鮮の仏教衰亡を願て日本の仏教に及ぶ 男爵 目賀田種太郎
 6. 3 旅順における蘭田勸学
 6. 3 湖江を遡る 中野達慧
 6. 4 湖江を遡る 中野達慧
 6. 5 支那人の祈祷懇請
 6. 5 喇嘛僧続々避難す
 6. 5 湖江を遡る 中野達慧
 6. 6 湖江を遡る 中野達慧
 6. 8 オツタマ比丘の帰国
 6. 8 印度展覧会
 6. 8 撫順に於ける蘭田宗恵師
 6.13 蒙古とラマ教
 6.15 支那の典礼通牒
 6.15 黄檗山記行 無舌
 6.16 洛陽行 中野達慧
 6.17 樺太開教の現状
 6.17 民国政府の布教視察
 6.18 朝鮮土産談
 6.19 支那基督墮落
 6.19 満洲に於ける蘭田師
 6.19 見た儘の支那仏教 ▼西本願寺法主の乱暴狼藉を極めたる荒唐の跡▲
 6.22 支那仏教徒の奮起
 6.24 支那仏教復活の時期
 6.24 支那仏教の将来
 6.29 孔子教と基督教 支那民国の政教政治
 6.29 支那仏教徒の覚醒(上) 前仏教大学 校長 蘭田宗恵
 6.30 支那仏教徒の覚醒(中) 前仏教大学 校長 蘭田宗恵
 7. 1 支那仏教徒の覚醒(下) 前仏教大学 校長 蘭田宗恵
 7.13 喇嘛僧の生活状態(一) 白廌生
 7.13 支那の宣教事業
 7.14 喇嘛僧の生活状態(二) 白廌生
 7.15 喇嘛僧の生活状態(三) 白廌生
 7.17 番界布教の中止
 7.27 台湾生番の宗教
 8. 2 椰樹陰下の迷信(一) ▲印度教徒の奇行
 8. 2 支那僧来朝説
 8. 3 椰樹陰下の迷信(二) ▲印度教徒の奇行
 8. 3 八木開教師の殉教
 8. 4 椰樹陰下の迷信(三) ▲印度教徒の奇行
 8. 5 上海の日蓮宗
 8. 6 椰樹陰下の迷信(四) ▲印度教徒の奇行と日本の俗信
 8. 6 南報
 8. 7 南報(下)
 8. 7 裏から観たる朝鮮(上)
 8. 8 裏から観たる朝鮮(下)
 8. 9 喇嘛廟の焼失
 8. 9 満州開教の一部面 浄普日の三宗
 8.10 洞宗台湾別院主新任教
 8.21 朝鮮開教時談(上) 曹洞宗朝鮮布教 総監 北野玄峰
 8.21 朝鮮基教現勢

- | | | | |
|-------|--------|---------------------------------------|------------------------------------|
| 1913. | 8. 21 | 印度に於ける日本売春婦の生活 | 京大 竹郎生 |
| | 8. 22 | 朝鮮開教時談(下) 曹洞宗朝鮮布教
総監 北野玄峰 | 11. 16 朝鮮人布教に苦心せる巖常円氏(下)
京大 竹郎生 |
| | 8. 23 | 洞宗朝鮮開教近況 | 11. 20 朝鮮宗教談 |
| | 8. 24 | 隣邦の基督教界 | 11. 26 感想一二 在リオン 法学士 下間空
教 |
| | 8. 25 | 浄宗朝鮮開教総監病む | 11. 30 台北集注伝道 |
| | 8. 26 | 支那時局談 | 12. 5 冬空の釜山より |
| | 8. 28 | 朝鮮の西派教勢 | 12. 6 洞宗朝鮮布教使長問題 |
| | 8. 28 | 千島アイヌの話 鳥居龍藏 | 12. 10 台湾だより |
| | 8. 29 | 開教師殉教 | 12. 12 上海の土地十万円 |
| | 8. 31 | 宗社党と黄天教 | 12. 14 撫順の本願寺 |
| | 8. 31 | 旅順戦跡懇弔会 | 12. 17 台湾と基督教 |
| | 8. 31 | 慶州の新国宝 | 12. 20 高楠博士の印度視察報告 |
| | 8. 31 | 朝鮮総督の寄付に係る巨材到着 | 12. 21 治蕃布教師引揚事情 |
| | 9. 4 | 亜細亞民族の覚醒 旅順にて ダルマ
バラ氏談 | 12. 23 満鉄総裁更迭と沿線講話 |
| | 9. 5 | 馬來半島より謝状 | 1914. 1. 5 満洲大連明照寺の新年 |
| | 9. 7 | 浄宗開教区教信 ▲樺太 ▲朝鮮 | 1. 7 朝鮮人改宗費 |
| | 9. 7 | 南北氣質の比較 支那所見の一 曹山
釈元恭 | 1. 8 樺太開教々勢 某宗開教師長談 |
| | 9. 8 | 天津宗教 支那所見 曹山 釈元恭 | 1. 8 浦塩の開教 △軍事探偵の嫌疑 太田
覚眠氏談 |
| | 9. 9 | 朝鮮布教現状 最も盛大なは天理教と
天主教 | 1. 9 海外宣教の先駆者日持上人遺跡探検
(一) |
| | 9. 14 | 上海の維摩会 | 1. 10 海外宣教の先駆者日持上人遺跡探検
(二) |
| | 9. 16 | 日支仏教連合会創立 | 1. 11 海外宣教の先駆者日持上人遺跡探検
(三) |
| | 9. 17 | 支那問題と仏教徒 | 1. 11 新疆回教の首領 |
| | 9. 20 | 豊山派の朝鮮開教師募集 | 1. 12 海外宣教の先駆者日持上人遺跡探検
(四) |
| | 9. 22 | 異郷物語 △マレエ半島 △女は賤業
婦 △門戸閉鎖主義 △南陽の宗教 | 1. 12 上海維摩会 |
| | 9. 23 | 対支志士追悼会 | 1. 14 日宗の満洲布教 |
| | 9. 28 | 浄宗朝鮮開教使長決定 | 1. 16 台湾の浄土宗 |
| | 10. 3 | 上海別院の活動 | 1. 17 樺太開教難 |
| | 10. 4 | 朝鮮瞥見 □南駐在開教使 山内□□ | 1. 19 大陸の回教事情 |
| | 10. 6 | 浄宗開教区だより | 1. 21 朝鮮仏教同朋団 |
| | 10. 8 | 漢口通信 神田翠石 | 1. 23 鮮僧の洞大入学 |
| | 10. 10 | 対支経綸の急先鋒 △小栗栖香頂氏の
先見 | 1. 23 台湾開教々勢(二) |
| | 10. 10 | 朝鮮総督府を威嚇せん 日本基督教大
会決議 | 1. 23 朝鮮の本山制 |
| | 10. 14 | 清国大連明照寺 | 1. 24 民族覚醒の危機 茅原華山 |
| | 10. 16 | 朝鮮から仏道修行に来る兄弟僧 | 1. 25 開教地の噂 |
| | 10. 17 | 浄宗開教師 | 1. 27 天理教の上海布教 |
| | 10. 19 | 支那布教権問題 談話会の外務省訪問 | 2. 2 樺太に於ける薩南教(上) 中目広島
高師教授 |
| | 10. 20 | 満鉄沿線の講演 | 2. 6 樺太に於ける薩南教(中) 中目広島
高師教授 |
| | 10. 22 | 沖繩の開教地 | 2. 6 朝鮮基督教勢力 |
| | 10. 24 | 朝鮮西別院の桂公追弔 | 2. 7 支那の信教自由 |
| | 10. 24 | 大連別院 | 2. 7 樺太に於ける薩南教(下) 中目広島
高師教授 |
| | 10. 26 | 都督と幼稚園 | 2. 14 釜山の真言宗 |
| | 10. 27 | 朝鮮開教に努力せよ 柴田宗務局長談 | 2. 17 朝鮮国宝の保護 |
| | 10. 30 | 満鉄の巡回講話 | 2. 17 新疆考古図譜 |
| | 11. 7 | 満洲の小学児童 巖谷小波 | 2. 18 天津短信 |
| | 11. 8 | 印度留学生の昨今 | 2. 22 朝鮮大邱便 |
| | 11. 8 | 台湾の天主教 | 2. 24 朝鮮人の仏道修行 |
| | 11. 10 | アイヌの得度 | |
| | 11. 15 | 台湾だより | |
| | 11. 15 | 朝鮮人布教に苦心せる巖常円氏(上) | |

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1914. 3. 12 連枝の朝鮮巡教
 3. 17 蒙古活仏より日本天皇に上る
 3. 24 露西亜の教育 小西増太郎
 3. 27 朝鮮総督府と基督教
 3. 28 上海に天理布教
 3. 31 朝鮮に禪の授戒 ▲大徳寺管長の渡鮮
 4. 1 英国々教派の朝鮮伝道協議
 4. 6 台湾伝道譲与
 4. 6 上海へ天理教伝道
 4. 20 露国、活仏を殺さんとす
 4. 21 朝人と救世軍
 4. 22 台北監獄死者追弔会
 4. 26 朝鮮の対宗教策一変 △鮮僧優遇せらる
 4. 27 朝鮮の片田舎より
 5. 1 支那開教だより
 5. 7 錫蘭仏教の現状 △ダルマバーラ氏の近信
 5. 20 朝鮮に於ける北魏式芸術 工学博士 関野貞
 5. 24 京城教信
 5. 29 台湾の禪風
 6. 1 露国鮮人伝道問題と神学校
 6. 14 大連の明照寺
 6. 15 大連関東婦人会の奉弔法要
 6. 19 光州監獄教師任命
 6. 20 海老名弾正氏の渡鮮
 6. 25 在支宣教師保護
 6. 25 寺内総督宣教師招待
 7. 2 露西亜の伝説と民謡 相馬御風
 7. 2 西藏及蒙古に於ける仏教の伝播 (上) 古屋諦道
 7. 3 西藏及蒙古に於ける仏教の伝播 (下) 古屋諦道
 7. 4 浄宗の朝鮮開教方針
 7. 7 暹羅の奇人種
 7. 9 朝鮮の宗教活動
 7. 9 海老名氏と道庁
 7. 14 寺内総督の牧師招待
 7. 17 露国の東方教化
 7. 17 海州布教所の新築
 7. 18 上海の宗教界
 7. 18 支那留学生派遣
 7. 19 樺太に大農場 神奈川県訓育院の事業
 7. 20 朝鮮に於ける見性氏
 7. 21 印度の結婚式 純然たる宗教的儀式
 7. 23 朝鮮の教況
 7. 27 釜山の宗教界
 7. 27 朝鮮の同志社会
 8. 1 朝鮮別院の留学生
 8. 8 沖繩の宗教界
 8. 14 朝鮮僧の優遇
 8. 14 平壤監獄教師任命
 8. 15 近代印度に於ける宗教改革運動 (一) 早大教授 内ヶ崎作三郎
 8. 16 近代印度に於ける宗教改革運動 (二) 早大教授 内ヶ崎作三郎
 8. 18 朝鮮の禁酒運動
 8. 18 膠州湾引渡の要求
 8. 18 交付を迫られたる膠州湾
 8. 18 戦後の目的地は支那
 8. 18 近代印度に於ける宗教改革運動 (三) 早大教授 内ヶ崎作三郎
 8. 19 青島海陸兵力
 8. 19 支那革命党と独逸の社会党
 8. 21 我が掌中にある膠州湾
 8. 22 日本は支那の為に膠州湾を引受ける
 8. 23 見よ本日の子正午! 遂に宣戦の宣告?
 8. 23 青島の死守と日本人引揚げ
 8. 23 支那に大暴徒蜂起す
 8. 23 独帝の膠州直接還付説
 8. 23 支那の英仏兵動く
 8. 23 支那に於ける独米関係
 8. 23 膠州湾問題の米国と支那
 8. 24 膠州湾の総督は何人ぞ
 8. 25 膠州湾と奥国軍艦
 8. 25 膠州湾の意地と独逸婦人
 8. 26 支那の戒嚴令
 8. 27 台北別院の建築
 8. 27 京城の夏期説教
 8. 27 膠州湾の動揺
 8. 28 樺太別院入仏式
 8. 29 西比利亞開教
 8. 29 膠州湾封鎖宣言
 8. 29 青島攻撃
 8. 29 支那の諸方面
 8. 31 戦雲余録
 9. 2 膠州湾諸島我が手に帰す
 9. 3 朝鮮大邱教況 △新開都市の典型
 9. 5 植民地と基督教
 9. 5 日本軍上陸の公報
 9. 10 旅順に於ける陸海軍布教
 9. 14 生の復活死の凱歌 従軍布教師を送る
 9. 15 洞宗朝鮮布教現状
 9. 16 安東県まで (一) 天倪生
 9. 17 欧州動乱と支那問題
 9. 17 我が軍占領の即墨と高密
 9. 18 占領要害膠州の地勢
 9. 21 我軍の新上陸地
 9. 22 我軍の捷報
 9. 22 白沙河左帯の占領近し
 9. 23 我軍柳樹台を占む
 9. 23 我攻困軍の前進
 9. 23 青島沖掃海進歩
 9. 24 掃海任務の経過
 9. 26 英軍の青島攻撃参加
 9. 27 我軍の独軍撃退
 9. 27 陸軍飛行隊の勇躍
 9. 29 青島攻囲軍全線動く
 9. 29 続々快報来るべし
 9. 29 宣教師より受くる書
 9. 30 愈々青島に逼る

- | | | |
|-------------|-----------------------------|--|
| 1914. 9. 30 | 日本に援軍要求 | す |
| 9. 30 | 印度へ留学 大谷光演法主の援助 | 11. 7 英国と埃及印度の回教徒 |
| 10. 1 | 青島益々大激戦となる 陸軍省公報 | 11. 8 青島終に落つ |
| 10. 1 | 海と空よりの大攻撃 海軍省公報 | 11. 10 青島陥落と処分問題 |
| 10. 2 | 宣教師の譏誣 | 11. 11 露国の極東通日露を論ず |
| 10. 2 | 樺太通信 | 11. 12 軍国教育と文部省 |
| 10. 2 | 膠州湾大砲撃 | 11. 13 独逸側の新聞と宣教師 |
| 10. 2 | 陸軍飛行隊の爆弾効を奏す | 11. 14 独帝と青島陥落 |
| 10. 3 | 青島大攻撃 | 11. 14 比律賓独立の陰謀 |
| 10. 3 | 我掃海船沈没の経過 | 11. 14 釜山教信 |
| 10. 3 | 我重砲の偉効 | 11. 15 釜山教信 |
| 10. 4 | 我二将校の壮烈 | 11. 15 青島陥落と天理教 |
| 10. 4 | 董家湾外の爆音 掃海船又沈没す | 11. 18 青島入城式 |
| 10. 4 | 山東鉄道占領と支那の誤解 | 11. 27 朝鮮鎮海新潮 |
| 10. 4 | 支那陸軍中の主戦論者 | 11. 28 大谷光瑞氏の大陸行 |
| 10. 5 | 我軍の活躍 | 11. 29 朝鮮開教と篤志者 |
| 10. 5 | 日支の交渉 円満解決説 | 12. 1 光瑞氏は何をするだろう |
| 10. 5 | 支那の憤慨と憂慮 | 12. 1 南部支那基督教大伝道 |
| 10. 6 | 支那は日本に兵力を以つて抵抗すべきや | 12. 2 南支那と基督教(一) 東京基督主事
山本邦之助 |
| 10. 7 | 山東鉄道占領は正当の手續なり | 12. 2 光瑞氏の行動 |
| 10. 7 | 我軍の中立確保 | 12. 2 台湾統治の前途 |
| 10. 7 | 宣教師退去命令 | 12. 3 南支那と基督教(二) 東京基督主事
山本邦之助 |
| 10. 7 | 我軍の活動と山東問題 | 12. 4 光瑞氏消息 |
| 10. 8 | 日軍の認容と独の要求 | 12. 4 光瑞氏と総督 |
| 10. 9 | 哈府布教場の再興 | 12. 5 印度消息 |
| 10. 9 | 安東県まで 天倪 | 12. 6 印度消息(承前) |
| 10. 9 | 我軍益々躍進 | 12. 8 南支那と基督教(三) 東京基督教主事
山本邦之助 |
| 10. 10 | 我軍の砲撃と敵の氣球 | 12. 8 京城に於ける大谷光瑞氏 |
| 10. 11 | 我軍済南に入る 英国将校の日軍批評 | 12. 9 光瑞氏の旅程 |
| 10. 13 | 青島攻囲軍 | 12. 9 安東県より |
| 10. 14 | 青島攻囲軍活動 | 12. 9 光瑞氏大喇嘛に会う |
| 10. 15 | 聖旨伝達 陸軍省公表 | 12. 10 光瑞氏と印度 |
| 10. 15 | 青島攻囲軍 | 12. 10 光瑞氏の大連永住 |
| 10. 16 | 従軍布教と精神教育(上) 陸軍少将
小原正恒氏談 | 12. 13 光瑞氏の行程 |
| 10. 16 | 青島攻囲軍 | 12. 13 安東県より(一) |
| 10. 17 | 従軍布教と精神教育(下) 陸軍少将
小原正恒氏談 | 12. 15 安東県より(二) |
| 10. 19 | 汝敵を愛せよ 支那に於ける英独の宣
教師 | 12. 16 対支問題と国民の自覚 △支那布教問
題 斯波前宗教局長談 |
| 10. 21 | 我が高千穂沈む | 12. 16 朝鮮総督と基督教 |
| 10. 22 | 我南遣隊の活躍 | 12. 16 宣教師と侮辱 |
| 10. 22 | 山東省開教発願 | 12. 18 蒙古大会議 |
| 10. 23 | 活仏の帝号廃止 | 12. 19 朝鮮教況視察(上) 浄土宗庶務課長
窪川旭丈氏 |
| 10. 24 | 極東総督と太田氏 | 12. 19 シヤマン教 巴爾虎の五大寺 |
| 10. 24 | 敵襲撃して退けらる | 12. 19 怪僧の大繁忙 浜口熊嶽近く露西亜に
渡らんとす |
| 10. 24 | 海軍重砲隊の砲撃 | 12. 20 朝鮮教況視察(下) 浄土宗庶務課長
窪川旭丈氏 |
| 10. 29 | 慶尚南道共進会開会式 | 12. 20 安東県より(三) |
| 10. 29 | 我軍の敵砲破壊 | 12. 20 従軍布教報告会 |
| 10. 31 | 朝鮮と宣教師 | 12. 20 東方西漸の氣運 代議士 片桐西次郎
氏 |
| 11. 3 | 悪徒宣教師枚挙に遑なし | 12. 23 ワルデックと日置老僧 |
| 11. 3 | 朝鮮京城教況(上) | |
| 11. 4 | 印度回教徒英国の勝利を祈る | |
| 11. 4 | 朝鮮京城教況(下) | |
| 11. 6 | 印度総督回教徒煽動防止のために布告 | |

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1914. 12. 25 袁總統天に祈る
 12. 25 光瑞氏消息
 12. 27 上海に於ける光瑞氏
 12. 27 上海教界より
 1915. 1. 5 上海付近に於ける光瑞法主
 1. 9 上海だより
 1. 9 朝鮮説教場
 1. 10 支那の危険思想
 1. 10 上海より
 1. 12 光瑞氏船中消息
 1. 15 青島だより
 1. 17 革命後の支那宗教事情 (一)
 1. 19 蒙古会議
 1. 19 上海より
 1. 19 革命後の支那宗教事情 (二)
 1. 20 革命後の支那宗教事情 (三)
 1. 21 支蒙会議終結
 1. 24 西比利亚開教独立
 1. 27 支那布教権問題 解決の好機
 1. 27 眠った為上海迄
 1. 31 上海だより
 2. 3 青島台湾巡錫談 (上) 日置黙仙氏
 2. 3 鮮僧留学生動静
 2. 4 青島台湾巡錫談 (中) 日置黙仙氏
 2. 4 印度仏教界近況 (上) 来馬琢道
 2. 5 青島台湾巡錫談 (下) 日置黙仙氏
 2. 5 印度仏教界近況 (下) 来馬琢道
 2. 5 暹羅皇弟御入洛
 2. 5 奥村五百子女史の追弔会
 2. 5 漢口本願寺より (上)
 2. 6 漢口本願寺より (下)
 2. 6 大連だより
 2. 10 上海教界便り
 2. 10 奥村五百子女史追悼法要
 2. 10 宣教師の鮮人煽動
 2. 17 極寒地の宗教生活 西比利亚修道院の状況
 2. 19 タゴールの哲学 (一) 古田絃二郎
 2. 20 タゴールの哲学 (二) 古田絃二郎
 2. 21 大派海外布教近況
 2. 24 朝鮮新音
 3. 3 膠州通信
 3. 5 タゴール (一) 印度思想の新しいき説
 明者 古田絃二郎
 3. 6 タゴール (二) 印度思想の新しいき説
 明者 古田絃二郎
 3. 6 大谷光瑞氏に新嘉坡永住、南洋布教を
 請願す
 3. 6 蒙古調査
 3. 6 曼茶羅因波斯絵論
 3. 7 タゴール (三) 印度思想の新しいき説
 明者 古田絃二郎
 3. 7 タゴール来る
 3. 7 上海だより
 3. 9 タゴール (四) 印度思想の新しいき説
 明者 古田絃二郎
 3. 10 女宣教師遭難
 3. 12 タゴール (五) 印度思想の新しいき説
 明者 古田絃二郎
 3. 14 タゴール (六) 印度思想の新しいき説
 明者 古田絃二郎
 3. 16 タゴール (七) 印度思想の新しいき説
 明者 古田絃二郎
 3. 17 タゴール (八) 印度思想の新しいき説
 明者 古田絃二郎
 3. 17 宣教師と鮮人大学
 3. 21 日支交渉と仏教伝道
 3. 24 総督の基教排斥?
 3. 25 大谷光瑞氏の仏陀迦耶参拝
 3. 25 支那の正教会
 3. 27 海印寺と寺内総督 (一)
 3. 28 海印寺と寺内総督 (二)
 3. 30 海印寺と寺内総督 (三)
 3. 30 タゴール氏来朝期 △大谷光瑞氏の紹
 介状を携ふ
 4. 1 印度詩人を迎へんとて
 4. 1 鮮人女教師の嚙突
 4. 1 東派南洋教況視察
 4. 2 朝鮮の私学 △宣教師経営の学校減少
 4. 3 朝鮮教育令と宗教の儀式
 4. 7 朝鮮鎮海新潮
 4. 7 釜山通信
 4. 9 仏教布教権問題 日支交渉の一項
 4. 10 最近思想史上に於けるタゴールの地位
 (一) 吉江孤雁
 4. 11 最近思想史上に於けるタゴールの地位
 (二) 吉江孤雁
 4. 13 支那回々教寺院の神牌改正
 4. 13 タゴール氏来朝延期
 4. 13 最近思想史上に於けるタゴールの地位
 (三) 吉江孤雁
 4. 14 最近思想史上に於けるタゴールの地位
 (四) 吉江孤雁
 4. 15 吉林より (一) 藤原閑運
 4. 15 朝鮮所見 (上) 文学博士 村上專精
 氏
 4. 16 在鮮仏教徒に梅ゆ (上) 在京城 太
 田文外
 4. 16 京城仏蘭西京街道の困窮
 4. 16 吉林より (下) 藤原閑運
 4. 16 在鮮宣教師の屈起
 4. 16 朝鮮所見 (中) 文学博士 村上專精
 氏
 4. 17 在鮮仏教徒に梅ゆ (下) 在京城 太
 田文外
 4. 17 朝鮮所見 (下) 文学博士 村上專精
 氏
 4. 18 上海の宗教大会
 4. 22 支那伝道期成計画
 4. 22 支那紙日本仏教を罵る
 4. 23 時事茶談 日置黙仙氏談 ▲支那布教
 権問題

1915. 4. 24 諸家の弘法大師観（上） 文学博士
井上哲次郎
4. 25 諸家の弘法大師観（中） 文学博士
井上哲次郎
4. 27 在支宣教師の妨害決議
4. 27 古い印度と新しい印度（上） 木村龍寛
氏
4. 27 諸家の弘法大師観（下） 文学博士
井上哲次郎氏
4. 28 布教権問題と陸海軍
4. 28 仏教布教権と宣教師
4. 28 布教権問題の行惱 危機間髪を容れず
4. 28 古い印度と新しい印度（下） 木村龍寛
氏
4. 29 一宣教師の觀察
4. 29 朝鮮の古刹炎上
4. 29 新印度絵の復興 アバニンドロ、タゴー
ル氏 小森彦次氏
5. 1 回教国民の現在及将来（上） 長瀬鳳
輔
5. 1 光瑞氏上海に入る
5. 2 回教国民の現在及将来（下） 長瀬鳳
輔
5. 2 蒙古の宗教
5. 4 タゴール根本思想の批判（上） 三浦
陽造氏
5. 4 外務省激励の声 ▲支那布教権獲得
▲仏教徒有志蹴起
5. 5 支那内地布教権と各宗当局者 高島米
峰
5. 6 奮起せよ各宗当局
5. 6 釈尊と印度及日本の文化（上） 文学
博士 高楠順次郎
5. 6 朝鮮釈王寺炎上の詳報
5. 6 支那布教権の起源及現状（上） 水野
梅曉氏談
5. 7 釈尊と印度及日本の文化（中） 文学
博士 高楠順次郎
5. 7 支那布教権の起源及現状（下） 水野
梅曉氏談
5. 8 釈尊と印度及日本の文化（下） 文学
博士 高楠順次郎
5. 8 なぜ支那へ仏教の逆輸入を要するか
島地大等
5. 8 過去の本派支那開教
5. 9 仏教徒の活動純し △新領土と仏教
5. 9 支那布教権と仏教徒の實力 文学博士
沢柳政太郎氏
5. 11 南支開教沿革と希望（上） 元厦門領
事 上野専一氏
5. 12 北京より
5. 12 南支開教沿革と希望（下） 元厦門領
事 上野専一氏
5. 13 印度タントラの研究 増田滋良氏通信
5. 13 光瑞氏上海を發つ
5. 14 布教権問題実行委員会
5. 15 对支布教権問題の善後運動
5. 15 支那問題と日本国民の宗教的自覚 大
阪 松崎恩堂
5. 16 布教権延期は大失敗
5. 16 蒙古人の祈誓文
5. 16 支那陝西省西安府より S 生
5. 16 基督教と朝鮮人 教情漸く一變
5. 16 光瑞氏行程
5. 18 日支親善と宗教家（一） 東京帝国大
学教授 吉野作造
5. 18 東本彙報 青島布教開始
5. 18 支那だより 支那に於ける欧米の宗教
5. 19 日支親善と宗教家（二） 東京帝国大
学教授 吉野作造
5. 19 各派懇話会と布教権問題
5. 19 光瑞氏の上海永住説
5. 19 光瑞氏と浦港本願寺
5. 19 支那湖南省の外国人伝道（一）
5. 20 日支親善と宗教家（三） 東京帝国大
学教授 吉野作造
5. 20 支那湖南省の外国人伝道（二）
5. 21 布教権と当局
5. 21 支那湖南省の外国人伝道（三）
5. 21 日支親善と宗教家（四） 東京帝国大
学教授 吉野作造
5. 22 布教権問題と仏教徒の覚悟（一） 法
学博士 浮田和民
5. 22 東本支那開教の当初 故小栗栖香頂の
苦心
5. 23 布教権問題と仏教徒の覚悟（二） 法
学博士 浮田和民
5. 23 タゴールの神の觀念（上） 文学士
木村大賢
5. 23 政府与党と布教権問題
5. 25 布教権問題と仏教徒の覚悟（三） 法
学博士 浮田和民
5. 25 タゴールの神の觀念（下） 文学士
木村大賢
5. 25 光瑞氏の奉天通過
5. 25 布教権問題関西大会計画
5. 25 布教権問題宣言 仏教徒の態度宣明
5. 26 布教権問題と仏教徒の覚悟（四） 法
学博士 浮田和民
5. 26 布教権問題の善後 釈宗演氏
5. 26 光瑞氏行程
5. 27 過去の布教権問題（一） 渡辺哲信
5. 27 東本と布教権
5. 27 支那湖南省の外国人伝道（四）
5. 28 日印人の宗教的同盟 印度人テイ、ケ
イ、エヌ、ピレー氏談
5. 28 過去の布教権問題（二） 渡辺哲信氏
談
5. 29 对支布教権と神道の不服
5. 29 布教権讓歩事情 △我外交の裏を搔か
る
5. 29 支那布教権の運動 仏教徒の奮起

1915. 5. 30 光瑞氏青島へ
 6. 1 朝鮮鎮海新音
 6. 2 布教権問題と両院
 6. 2 布教権獲得と政策
 6. 3 各宗管長の建白 支那布教権問題
 6. 5 布教権と議員の回答 △大多数賛成
 6. 6 光瑞氏揚州へ
 6. 6 タゴール研究の意義(上) 早大教授
 内ヶ崎作三郎
 6. 6 光瑞氏と支那の青年僧 光瑞氏笑壺に
 入る
 6. 6 布教権建議案 △各党派一致の歩調
 6. 8 支那政府と華嚴大学
 6. 8 政府党と布教権
 6. 8 タゴール研究の意義(下) 早大教授
 内ヶ崎作三郎
 6. 8 支那開教は禪を先驅とすべし
 6. 10 布教権建議案
 6. 11 布教権建議案と議會
 6. 12 布教権問題の二辭見
 6. 12 新仏教徒と支那内地布教権問題 高島
 米峰
 6. 12 大谷光瑞氏近状
 6. 13 印度人の人生観 印度カルカッタ大学
 講師 山上曹源
 6. 13 布教権運動の其後
 6. 13 布教権建議案通過
 6. 16 上海の回教徒
 6. 16 光瑞氏消息
 6. 18 布教権問題に尽力する所以 布教権建
 議案委員長 井手代議士
 6. 22 仏教との外務訪問
 6. 22 台湾浄宗開教
 6. 25 各宗当局外務を訪ふ
 6. 25 在支仏教徒の活動 △奉天だより
 6. 26 光瑞氏の避暑
 6. 26 迷信の強い蒙古人
 6. 27 仏教徒と支那公使 ▲布教権問答
 6. 30 支那僧侶に諮問は精神的排日
 7. 1 台湾忠魂堂創立者懲戒
 7. 1 布教権と東洋思想 (一) 支那思想界
 の危機 渡辺哲信
 7. 2 台湾開教一転機 ▲土人教化の前途
 7. 2 布教権と東洋思想 (二) 支那思想界
 の危機 渡辺哲信
 7. 3 布教権と東洋思想 (三) 支那思想界
 の危機 渡辺哲信
 7. 3 本派支那開教百万円を越ゆ △支那開
 教現状
 7. 7 布教権仏教有志会
 7. 11 印度詩人の「生と現実」を読む(上)
 英国グラスゴー大学 ティー・ダブ
 リュー・スコット
 7. 13 印度詩人の「生と現実」を読む(下)
 英国グラスゴー大学 ティー・ダブ
 リュー・スコット
 7. 14 江部君の「タゴールの思想及び宗教」
 を読む 花園緑人
 7. 17 光瑞氏と金州農場
 7. 27 洞宗支那伝道
 7. 27 露国と西本願寺
 8. 5 朝鮮仏教大講演会
 8. 5 夏の山東省(上) 堀謙徳氏談
 8. 5 朝鮮仏教大講演会
 8. 6 夏の山東省(下) 堀謙徳氏談
 8. 8 朝鮮始政と基督教
 8. 10 支那仏大設立
 8. 12 上海の戦勝祈祷
 8. 12 土人布教二十年
 8. 14 台北各宗共和会 △土人教化と共同財
 源
 8. 20 露国軍隊と宗教
 8. 21 支那の宗教界
 8. 24 支那の仏教旧跡
 8. 24 朝鮮の社寺規則
 8. 25 朝鮮の社寺規則に就て
 8. 26 印度の宗教争闘
 8. 28 單身中央亜細亞に向ふ
 9. 2 東本願寺吉林開教 奉安式の盛況
 9. 9 光瑞氏の怪焰支那仏教を罵倒す 支那
 官憲の疑惑
 9. 10 朝鮮共進会と基督教
 9. 10 能海寛氏は依然不明
 9. 16 宣教師百四十名、支那に入る
 9. 18 支那に浄土教の盛なる所以
 9. 19 総督と宣教師
 9. 21 西藏の珍材料 慧海氏愈よ東上
 9. 21 印度宗教界の重鎮 ▲来朝中のラジャ
 プツ、ライ氏
 9. 28 満鮮布教
 9. 28 印度へ留学
 9. 29 浩々洞の印度研究 △金子氏華嚴経を
 講ず
 9. 30 大連別院入仏式
 10. 1 タゴール氏の表彰
 10. 1 蘭領印度の宗教事情 農商務書記官
 長満欽司
 10. 10 印度教より仏教へ ショルツチヨン、
 ダーシ氏談
 10. 12 印度展覧会
 10. 13 西藏将来品展覧会 河口慧海氏の貢献
 10. 13 京城教界だより
 10. 15 光瑞氏の近況 龍島祐天氏談
 10. 16 日印仏教徒の交驛 河口氏ダース氏欵
 迎招待会
 10. 19 朝鮮に宗教大学を創立せんとす
 10. 20 日印交驛講演会
 10. 20 河口慧海氏の事業
 10. 22 支那開教施功会 △小栗栖香頂氏追平
 法要 △布教権問題報告演説会
 10. 22 印度名士来る
 10. 23 印度の梵語界 豊山大学留学生増田慈

- 良氏より
1915. 10. 27 对支教権問題の呼号 小栗栖香頂氏の旧事を偲びつつ
10. 27 西藏の宗教 河口慧海
10. 28 朝鮮と各宗派
10. 28 台南の警官追弔
10. 28 朝鮮と宗教大学
10. 30 日本仏教徒の使命 日置黙仙
10. 31 浩々洞の印度展覧会
11. 2 香港より(上) GT生
11. 2 亜細亜文明と印度思想(上) 印度ラージバット、ライ
11. 2 南金修養会
11. 2 奉天に於ける木津氏
11. 3 亜細亜文明と印度思想(下)
11. 6 香港より(下) GT生
11. 9 朝鮮教会条例と寺院 日蓮宗朝鮮布教総監 杉田日布氏
11. 12 露国より帰て 太田覚眠
11. 19 朝鮮寺院改革
11. 21 上海別院近況
11. 30 釜山教界より
12. 16 北鮮布教現勢
12. 18 洞宗朝鮮布教と寺号
12. 28 鮮人の浄宗伝道
1916. 1. 1 大神宮と朝鮮 浄土宗開教使長 道重信教
1. 5 奉天の遺骨紛失事件 主任布教使の失態
1. 7 台湾の臨濟宗
1. 11 各宗共同の朝鮮開拓案
1. 13 袁政府特使と布教権問題
1. 13 台湾宗教事情 外人耶蘇教徒の努力
1. 23 印度通信 在カルカッタ市日蓮宗留学生 岡教遠
1. 29 支那回教徒一挙北京に向ふ
2. 1 光演氏と留学生
2. 13 台湾同化頓挫
2. 22 印度仏教界の恩人タ氏の舎弟逝く
2. 22 光瑞氏と護謨園
2. 23 洞宗朝鮮布教視察
2. 24 積徳院印度行
3. 3 シベリア開教一班(一) 東山病院より 太田覚眠
3. 4 シベリア開教一班(二) 東山病院より 太田覚眠
3. 8 シベリア開教一班(三) 東山病院より 太田覚眠
3. 9 言論 近時二則 ▲支那の革命
3. 10 支那動乱の現状及び将来 水野梅曉氏談
3. 10 布教権問題 実行委員会決議
3. 18 日支高僧苦心の跡 古代求法者の旅行状態
3. 19 シベリア草分の開教使太田覚眠氏の三行楽
3. 21 平壤の基教界
3. 29 朝鮮総督府と曹洞寺院
3. 31 金玉均氏法要
4. 6 寺内総督と大須賀氏 総督府内ビリケン同士の組合
4. 13 台北の基督教
4. 23 高麗大覚國師の事跡
4. 23 朝鮮寺院条例の欠陥
4. 25 洞宗満鮮布教視察
4. 28 朝鮮仏教の競争 真宗と禪宗
5. 2 台湾仏教青年会
5. 6 タゴール愈来る
5. 10 タゴール氏の来朝
5. 13 印度雜信 在印度 岡教遠
5. 13 元山の釈尊会
5. 20 近く来朝のタゴール氏
5. 21 台湾宗教事情
5. 21 タゴールとの共鳴(一) 文学博士 福来友吉
5. 23 大連の大谷派 沙河口に布教所新設
5. 24 東亜同文書院
5. 27 タ氏歓迎準備
5. 28 タゴールとの共鳴(二) 文学博士 福来友吉
5. 28 印度の瑜伽法 早大講師 武田豊四郎
5. 30 タゴール氏を迎ふ
5. 30 タゴールとの共鳴(三) 文学博士 福来友吉
5. 31 日置管長支那巡錫中止
5. 31 タゴールとの共鳴(四) 文学博士 福来友吉
6. 1 タゴールとの共鳴(五) 文学博士 福来友吉
6. 2 教界時言(一) 石川舜台 ▲序 ▲五個の要項 ▲五項の分斎
6. 2 京都に於けるタゴール氏の歓迎
6. 3 教界時言(二) 石川舜台 ▲支那に対する宗教者の任務 ▲我国に対する支那人の誤解
6. 3 印度とタゴールの思想 一 長谷部隆諦
6. 3 東京に於けるタ氏歓迎会の決定
6. 3 タゴール氏の講演を聞く
6. 4 教界時言(三) 石川舜台 ▲日本文武の力 ▲支那の商工と原料 ▲日支提携と我宗教家 ▲現代に於ける衆生救済の大義
6. 4 印度とタゴールの思想 二 長谷部隆諦
6. 4 タゴール氏恩栄に接せん
6. 6 タゴール氏を迎ふ
6. 6 日印協会現況
6. 7 印度とタゴールの思想 三 長谷部隆諦
6. 7 浄宗朝鮮開教消息
6. 8 印度とタゴールの思想 四 長谷部隆

1916. 6. 11 諸
 教界時言(四) 石川舜台 ▲英米諸
 国の暴戻と仏教
 6. 11 支那の形勢と布教権問題
 6. 13 京城金光教
 6. 14 満鮮視察談 前田文学博士談
 6. 16 日印の詩趣 東叡山に満つ(上) タ
 翁歓迎招宴
 6. 17 日印の詩趣 東叡山に満つ(下) タ
 翁歓迎招宴
 6. 18 大谷光瑞氏の近況
 6. 18 支那の将来と布教権問題
 6. 18 詩聖曰く 歓迎の動機如何
 6. 20 布教権問題と運動
 6. 21 亡国の歌を聞きつつ=印度仏教を探る=
 桐谷洗麟氏の談
 6. 21 支那時局の将来と布教権問題
 6. 22 教界時言(五) 石川舜台
 6. 22 印度研究会
 6. 23 教界時言(六) 石川舜台
 6. 25 詩聖タゴールと売春婦
 6. 27 タゴールより密厳尊者へ(上) 文学
 博士 谷本富
 6. 28 タゴールより密厳尊者へ(中) 文学
 博士 谷本富
 6. 28 土国回教徒の反乱 其前途と戦局影響
 如何
 6. 29 タゴールより密厳尊者へ(下) 文学
 博士 谷本富
 6. 29 満洲警務省と曹洞宗
 6. 29 肅親王と金剛經
 7. 1 樺太浄宗大挙伝道
 7. 2 中外演壇 支那の現状及び将来 石川
 半山
 7. 5 朝鮮仏教視察
 7. 6 夕翁に対する世評と仏教徒
 7. 6 教界時言(七) 石川舜台
 7. 7 夕翁の思想に対する世の非難
 7. 7 教界時言(八) 石川舜台
 7. 11 林公使と我が布教権問題
 7. 11 蒙古王の日本僧招待
 7. 13 論壇 日露新協約の成立所感
 7. 13 日支親善問題と宗教家(上) 法学博
 士 寺尾亨
 7. 14 日支親善問題と宗教家(下) 法学博
 士 寺尾亨
 7. 15 教界時言(九) 石川舜台
 7. 16 教界時言(十) 石川舜台
 7. 18 教界時言(十一) 石川舜台
 7. 19 総持寺と夕翁
 7. 21 樺太の僧侶
 7. 22 支那の憲法起草と国教問題
 7. 25 鮮人会堂建設
 7. 25 中外演壇 印度仏教史概観 東洋大学
 教授 境野黄洋
 7. 25 水野梅曉氏渡支
 7. 28 タゴール翁との対座(上) 花園緑人
 7. 29 タゴール翁との対座(中) 花園緑人
 7. 30 浄宗朝鮮布教独立
 7. 30 タゴール翁との対座(下) 花園緑人
 7. 30 谷大教授の朝鮮談
 7. 30 支那伝道所感(上) 在支那 水野梅
 曉
 8. 1 支那伝道所感(中) 在支那 水野梅
 曉
 8. 2 朝鮮総督府の宗教行政
 8. 2 支那伝道所感(下) 在支那 水野梅
 曉
 8. 3 中外演壇 朝鮮の宗教(上) 大谷大
 大学教授 河野法雲
 8. 4 中外演壇 朝鮮の宗教(中) 大谷大
 大学教授 河野法雲
 8. 5 中外演壇 朝鮮の宗教(下) 大谷大
 大学教授 河野法雲
 8. 5 樺太教況
 8. 6 在外基信徒の仏教伝道妨害
 8. 9 朝鮮基督教活動
 8. 11 師の遺骨を奉じ 遠くビルマより帰朝
 す(上)
 8. 11 樺太大挙伝道
 8. 12 納骨器の遺文
 8. 12 師の遺骨を奉じ 遠くビルマより帰朝
 す(下)
 8. 12 朝鮮鎮海新潮
 8. 16 支那仏教史概論 東洋大学教授 境野
 黄洋
 8. 18 陸軍中佐の非同化論 鮮人驅逐を叫ぶ
 8. 20 鄭家屯事件と仏教徒
 8. 22 満鉄と墓地給与
 8. 23 旅順の法要
 8. 25 日露新協約と仏教徒の態度(二) 北
 条了応
 8. 26 日露新協約と仏教徒の態度(三) 北
 条了応
 8. 27 台湾伝道と同志社 日本人伝道の新氣
 運
 8. 27 朝鮮及び満洲協伝
 8. 29 吾国の植民政策と仏教(上) 八淵蟠
 龍
 8. 30 吾国の植民政策と仏教(中) 八淵蟠
 龍
 8. 31 吾国の植民政策と仏教(下) 八淵蟠
 龍
 8. 31 目覚ましい女の伝道 台湾の天理教
 (上)
 9. 2 洞僧蒙古に入る
 9. 2 目覚ましい女の伝道 台湾の天理教(下)
 9. 2 満洲開教現状 各宗発展の兆あり 浄
 土宗開教師 大野黙堂氏
 9. 6 満洲仏教団の壮挙
 9. 7 朝鮮協同伝道
 9. 7 支那の風土に憧るる 服部春陽氏

1916. 9. 10 南清開教師
 9. 10 京城無門会
 9. 20 支那基督教徒の運動 政教分離請願
 9. 21 支那信教問題と康有為
 9. 22 弓波氏と満鮮婦人会
 9. 22 感泣久しき露人の観音供養
 9. 23 喇嘛僧の勢力
 9. 23 蒙古開発と喇嘛日本仏教提携 久内氏
 満蒙視察談
 9. 23 朝鮮黄檗法輪山
 9. 27 朝鮮許可寺院
 9. 27 朝鮮洞宗布教講習会
 9. 28 朝鮮の侍天教(上)
 9. 29 朝鮮の侍天教(下)
 9. 29 侍天教主 金演局氏と語る 西本願寺
 執行 名和淵海
 10. 1 天理教を訪ふた侍天教主
 10. 3 樺太の七里氏
 10. 4 長州人と朝鮮人の血
 10. 7 台湾宗教の現状 仏教は葬儀の為に
 あるのみ
 10. 15 浄宗朝鮮開教区会
 10. 15 浄宗朝鮮大挙伝道
 10. 15 青島の円了博士
 10. 17 朝鮮土民と耳
 10. 19 山東省の天主教
 10. 20 浦潮本願寺の建築工事
 10. 25 毒語(上) 東山失名隠士 清僧
 10. 26 毒語(下) 東山失名隠士 支那の国
 教
 10. 31 朝鮮各宗教信徒数
 11. 5 印度布教師と武田教授の印度哲学談
 11. 8 鎮南学寮開寮
 11. 11 朝鮮新総督の宗教方針
 11. 12 台湾本島人僧侶養成 鎮南学寮開寮式
 11. 12 日本国体と儒教(上) 文学博士 白
 鳥庫吉
 11. 14 日本国体と儒教(下) 文学博士 白
 鳥庫吉
 11. 19 樺太に護国団
 11. 23 印度大学へ仏典寄贈
 11. 25 タイ湾の曹洞宗 仏教中学林と観音禪
 堂
 11. 29 支那に活動せる光瑞氏 傍観子
 12. 1 朝鮮に於ける曹洞宗布教研究会 忽滑
 谷快天氏の巡教
 12. 5 康安総監秋期巡教
 12. 6 支那仏教復興と思想問題
 12. 12 蒙古西藏探検 マツク、ガバーン氏の
 事業
 12. 12 大連関東別院より
 12. 14 基督教朝鮮伝道
 12. 19 支那福建省より 足利栄含氏近信
 12. 20 浦塩開教小史 西伯利開教主任 太田
 覚眠
 12. 26 朝鮮仏教一斑 文学博士 前田聰瑞
1917. 1. 5 蒙古の宗教 三島海雲氏視察談
 1. 7 印度大学寄贈仏籍
 1. 16 朝鮮基督教の形勢
 1. 17 河口慧海氏とシャクンタラーの翻訳
 (上) 大谷大学教授 泉芳傑
 1. 17 異郷の空へ
 1. 18 河口慧海氏とシャクンタラーの翻訳
 (中) 大谷大学教授 泉芳傑
 1. 19 河口慧海氏とシャクンタラーの翻訳
 (下) 大谷大学教授 泉法傑
 1. 20 浄宗台湾開教区腐敗
 1. 25 東派法主朝鮮巡教
 1. 28 台湾宗教制度調査 総督府の方針
 1. 28 偉人吾が師(一) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 1. 30 偉人吾が師(二) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 1. 31 偉人吾が師(三) 印度ビベカーナン
 グ術 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 2. 1 偉人吾が師(四) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 2. 2 タゴール再遊
 2. 2 偉人吾が師(五) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 2. 3 朝鮮の僧院より
 2. 3 偉人吾が師(六) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 2. 4 生蕃教化の為に後半生を抛んとする
 赤松照範氏の壮挙
 2. 4 偉人吾が師(七) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 2. 6 京都仏教徒の夕翁歓迎
 2. 6 入蔵僧追悼会
 2. 6 偉人吾が師(八) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 2. 6 七百年目で印度仏寺の建立 日置禪師
 を通じて日本仏教徒に後援依頼
 2. 7 仏教徒は何か故に亡国の一遺民を歓迎
 するや
 2. 7 偉人吾が師(九) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 2. 8 洞宗の台湾人
 2. 8 タゴール翁に饒す
 2. 8 偉人吾が師(十) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛訳
 2. 8 タゴールと蘭田学良
 2. 9 偉人吾が師(十一) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛
 訳
 2. 10 タゴール翁と小林ドクトル
 2. 10 偉人吾が師(十二) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛
 訳
 2. 11 偉人吾が師(十三) 印度ビベカーナン
 グ述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛
 訳

1917. 2. 13 偉人吾が師(十四) 印度ビベカーナ
ング述 日蓮宗印度留学生 木村龍寛
訳
2. 14 台湾視察所感 文学博士加藤玄智氏談
2. 15 台湾視察所感(続) 文学博士加藤玄
智氏談
2. 17 支那の基督青年
2. 18 公主嶺開教談(上) 田村円純氏談
2. 20 公主嶺開教談(下) 田村円純氏談
2. 23 ダース氏逝く
2. 24 愚劣なる支那の国教問題 桑原文学博
士談
3. 2 撫順炭鉱大葬儀
3. 6 台湾宗教事情(上) 古社寺保存会委
員 荻野伸三郎氏談
3. 7 台湾宗教事情(下) 古社寺保存会委
員 荻野伸三郎氏談
3. 10 朝鮮黄檗寺 建立の計画
3. 14 支那趣味の集まり
3. 17 南国巡礼 強頂令(第一信)
3. 21 南国巡礼 強頂令(第二信)(第三
信)(第四信)
3. 23 支那の日本仏教排斥
3. 24 黄檗の鮮人小僧
3. 28 南国巡礼 強頂令(第五信)(第六
信)
3. 31 南国巡礼 強頂令(第七信)
4. 6 南国巡礼 強頂令(第八信)(第九
信)
4. 6 支那婦人の黄檗観
4. 8 南国巡礼 強頂令(第十信)(第十
一信)
4. 10 日印仏徒交歓
4. 10 梵式讚仏式次
4. 11 南国巡礼 強頂令(第十二信)(第
十三信)
4. 12 南国巡礼 強頂令(第十四信)(第
十五信)(第十六信)(第十七信)
4. 13 釜山の降誕会
4. 13 南国巡礼 強頂令(第十八信)(第
十九信)(第二十信)
4. 14 南国巡礼 強頂令(第二十一信)
(第二十二信)(第二十三信)(第二
十四信)
4. 18 大派法主 鮮満巡教
4. 19 朝鮮と大谷派遠く三百年の関係 光演
法主の鮮満巡錫
4. 19 馬來半島に大神宮
4. 20 画家の観たる光瑞上人 上海で面会し
て来た井口華秋氏談
4. 21 素通せし支那教界 下間空教
4. 22 辨榮老師朝鮮巡教
4. 22 釜山の記念講演
4. 22 朝鮮の五重会
4. 22 釜山智恩寺御忌
4. 24 印度宗教大観 早大教授武田豊四郎
4. 25 支那で大立回り 危かりし下間氏
4. 28 釜山より
5. 1 京城より 南山本願寺より 夜濤生
5. 2 西藏より帰った 青木文教氏談
5. 3 朝鮮に於ける句仏上人
5. 3 台湾仏教中学林
5. 3 西藏より帰った(続) 青木文教氏談
5. 4 大連に於ける光演法主
5. 4 支那の信教自由
5. 8 海外宗教事情
5. 8 台宗伝道発会式
5. 8 朝鮮と浄土宗 内地仏徒の接触
5. 9 留学せる鮮僧の告白
5. 9 日支親善と仏教徒 寺内内閣の方針
袈裟衣の気分 光瑞氏の動作に平なら
ず
5. 10 句仏上人満鮮巡錫吟
5. 12 新興のバハイ教の運動と其世界的勢力
(上) 井上大雲
5. 12 句仏上人の満鮮巡錫吟
5. 13 新興のバハイ教の運動と其世界的勢力
(中) 井上大雲
5. 15 新興のバハイ教の運動と其世界的勢力
(下) 井上大雲
5. 15 大連教信 関東別院より
5. 16 京城別院布教拡張
5. 18 風流の旅 鮮満巡錫余談
5. 22 印度の宗教改革者 羽溪了諦
5. 24 西本願寺の南洋開教 藤本周憲氏パラ
オ島に向ふ
5. 25 満鮮開教の改良点
5. 25 祖廟参拝の台湾禅僧
5. 25 台湾寺院の去就
5. 25 台湾僧の感想談
5. 26 台湾僧より
5. 27 台湾僧の大演説
5. 30 台湾開教は今
6. 2 支那布教権問題善後 駐支某前大官
6. 2 印度芸術と恋愛 早大教授 武田豊四
郎
6. 2 台僧の買物と見物と詩作
6. 2 台湾民政長官宗教を説く
6. 2 台南の降誕会
6. 3 朝鮮の布教
6. 3 朝鮮旅行(一) 大谷大学教授 船橋
水哉
6. 5 朝鮮旅行(二) 大谷大学教授 船橋
水哉
6. 6 朝鮮旅行(三) 大谷大学教授 船橋
水哉
6. 7 日宗の南鮮巡教
6. 7 朝鮮旅行(四) 大谷大学教授 船橋
水哉
6. 8 支那に同志社 大学の先身を作る伝道
6. 8 台湾僧動静
6. 12 ニール婦人朝鮮に行かん

1917. 6. 15 台湾僧東京見物
 6. 17 満鮮巡教所感(上) 鮮人布教は絶望
 句仏上人談
 6. 19 関東別院だより
 6. 20 満鮮巡教所感(下) 布教は先づ財源
 6. 21 満鮮視察所感 村上文学博士談
 6. 21 大谷派と大連(上) 無月給の開教使
 6. 23 満鮮視察所感 村上文学博士談
 6. 23 大谷派と大連(下) 無月給の開教使
 6. 23 侮辱された鮮僧 暗涙を吞んで語る
 6. 23 李王殿下と知恩院
 6. 24 李王殿下奉迎と各宗僧侶
 6. 24 近時雑感 黎元洪
 6. 26 李王へ和讃
 6. 26 近時雑感 李王殿下を迎送し奉る 我
 宗教家の鮮民観 鮮僧の光演氏 対す
 る憤慨
 6. 27 三教授の渡清
 6. 29 日支親善と布教権問題 对支民間有志
 談
 6. 29 日藏仏教同盟(上) 大谷光瑞氏の事
 業
 6. 30 印度より 在カルカッタ市 木村龍寛
 6. 30 台湾僧動静
 6. 30 浄僧の南洋布教
 6. 30 日藏仏教同盟(下) 大谷光瑞氏の事
 業
 7. 3 台湾僧に与ふ 文部大臣岡田良平
 7. 3 台湾僧入院
 7. 6 台湾僧帰台
 7. 7 印度へ日本仏教教会創立を望む
 7. 10 南洋渡航日記 六月二十一日道中にて
 藤木開教使
 7. 11 朝鮮の仏光寺
 7. 14 浄土宗の蒙古布教
 7. 15 西藏将来大藏経の疑義
 7. 17 喇嘛教研究
 7. 18 西藏大藏経の行衛 文学博士榊亮三郎
 氏談
 7. 19 西藏大藏経行衛不明問題
 7. 19 支那基督教伝道の半面
 7. 20 問題の大藏経 積徳院 大谷尊由氏談
 7. 21 アブダルバーハーの言行(一) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 7. 22 アブダルバーハーの言行(二) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 7. 24 益々錯綜せる西藏経問題
 7. 25 西藏大藏経問題 青木氏の自緝自縛
 河口慧海氏談
 7. 25 公開状 青木文教氏に与ふ 河口慧海
 7. 26 アマル子ルより 在印度アマルネル哲
 学院 増田滋良
 7. 27 アブダルバーハーの言行(三) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 7. 27 河口慧海君に与ふ 青木文教
 7. 27 日印親善のため桜井義肇し渡印
 7. 28 アブダルバーハーの言行(四) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 7. 29 印度ダーズリンより 在印度 岡教達
 7. 29 支那仏跡視察
 8. 1 アブダルバーハーの言行(五) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 8. 1 西藏大藏経問題の真相 青木文教
 8. 2 西藏大藏経と東京帝国大学 文学博士
 高楠順次郎氏談
 8. 2 アブダルバーハーの言行(六) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 8. 3 アブダルバーハーの言行(七) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 8. 4 法王の親書に非ず 河口慧海氏の否認
 8. 5 上海より(上) 稲葉円成
 8. 5 アブダルバーハーの言行(八) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 8. 7 西藏大藏経と東京帝国大学 文学博士
 榊亮三郎
 8. 7 藏語研究現状
 8. 7 西藏大藏経問題
 8. 7 喇嘛法主から吾が皇室へ奉獻の金銅仏
 の行衛
 8. 7 青木氏の発表せる法王の親書に就いて
 河口慧海
 8. 7 親書は偽造だと河口慧海氏言明す
 8. 8 上海より(下) 稲葉円成
 8. 10 西藏藏経問題と交詢社 二氏の対決幹
 旋
 8. 12 榊文学博士にて呈す 河口慧海
 8. 12 アブダルバーハーの言行(九) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 8. 14 室内部に対する河口氏の不満
 8. 14 アブダルバーハーの言行(十) (バハ
 イ運動の中心人物) 井上大雲
 8. 15 印度まで(一) 木村龍寛
 8. 16 印度まで(二) 木村龍寛
 8. 16 所謂親翰は全然偽物なり—榊文学博士
 の断定について— 河口慧海
 8. 17 印度まで(三) 木村龍寛
 8. 18 朝鮮仏教事情
 8. 18 直隸省の臨濟祖塔を参拝した釈仏海氏
 8. 18 印度まで(四) 木村龍寛
 8. 19 直隸省の臨濟祖塔を参拝した釈仏海氏
 8. 19 印度まで(五) 木村龍寛
 8. 21 大連教信 関東別院より
 8. 21 印度まで(六) 木村龍寛
 8. 22 西藏大藏経問題所感(上) 京都帝国
 大学講師 寺本婉雅
 8. 22 朝鮮鎮海より
 8. 22 印度まで(七) 木村龍寛
 8. 23 西藏大藏経問題所感(下) 京都帝国
 大学講師 寺本婉雅
 8. 23 南洋より
 8. 23 印度まで(八) 木村龍寛
 8. 24 初旅の支那 青島の巻 井上淡星

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1917. 8. 25 支那雑感
 8. 25 印度まで(九) 木村龍寛
 8. 28 西藏藏経問題のその後
 8. 28 印度まで(十) 木村龍寛
 8. 28 藏経授受の事実 河口慧海
 8. 29 西藏政府で演ぜられた一大事件とは何
 乎
 8. 29 西藏大藏経と榊氏の論文
 8. 29 印度まで(十一) 木村龍寛
 8. 30 天津より
 8. 30 印度まで(十二) 木村龍寛
 9. 2 朝鮮僧侶団
 9. 4 支那行脚(稲葉円成)
 9. 4 榊は根本を誤る
 9. 4 来朝した朝鮮僧
 9. 5 支那行脚
 9. 5 揚子江船中より
 9. 5 光瑞氏と藏経問題
 9. 6 支那行脚(稲葉円成)
 9. 6 近々入洛の鮮僧団
 9. 6 青木文教大連に向ふ
 9. 7 支那行脚(稲葉円成)
 9. 7 東上中の鮮僧団
 9. 8 法王の呆れ顔
 9. 8 支那行脚(稲葉円成)
 9. 8 河口氏に注言
 9. 9 支那行脚(稲葉円成)
 9. 9 鮮僧団招待 素童禪師のお給仕
 9. 9 鮮僧、伊勢大廟へ
 9. 11 北京より(上)(星)
 9. 11 入藏中の多田氏
 9. 11 鮮僧歓迎会
 9. 11 鮮僧と宗教学林
 9. 12 北京より(下)(淡星)
 9. 12 北京より(羽溪了諦)
 9. 12 朝鮮僧入洛
 9. 13 鮮僧を歓迎す
 9. 13 鮮僧団一行
 9. 14 釜山の堀尾貫主
 9. 14 榊博士文字を造る(一) 博士は他を
 誣告する人なり 河口慧海
 9. 15 鮮僧学校慈善事業視察
 9. 15 榊博士文字を造る(二) 榊博士は他
 を誣告する人なり 河口慧海
 9. 15 曹洞両本山の鮮僧寄贈
 9. 15 京都の鮮僧歓迎
 9. 16 支那から帰って(住田智見)
 9. 16 榊博士文字を造る(三) 博士は他を
 9. 18 満鮮の巡遊 脇谷 謙 一、大連滞在
 (上)
 9. 18 鮮僧の御陵参拝
 9. 18 浄宗満洲開教紛擾
 9. 18 各宗連合会と鮮僧
 9. 18 鮮僧の学校視察
 9. 18 自治に富る鮮僧
 9. 19 鮮僧歓迎会
 9. 19 満鮮の巡遊 脇谷 謙 二、大連滞在
 (下)
 9. 20 朝鮮布教観
 9. 21 満鮮の巡遊 脇谷 謙 三、旅順の二
 日(上)
 9. 21 能山朝鮮布教
 9. 22 満洲布教観
 9. 23 朝鮮神道動揺
 9. 23 北鮮各宗の不和 融和会の解散
 9. 24 満鮮の巡遊 脇谷 謙 四、旅順の二
 日
 9. 24 鮮僧一行と大阪
 9. 26 洞宗開教地現況
 9. 26 満鮮の巡遊 脇谷 謙 五、營口から
 遼陽まで
 9. 27 満鮮の巡遊 脇谷 謙 六、撫順から
 奉天まで(上)
 9. 28 亜細亜文庫
 9. 28 満鮮の巡遊 脇谷 謙 六、撫順から
 奉天まで(下)
 9. 29 満鮮の巡遊 脇谷 謙
 9. 30 満洲布教観
 10. 3 満鮮の巡遊 脇谷 謙 八、鉄嶺から
 本溪湖まで
 10. 6 支那視察講演会
 10. 6 満鮮の巡遊 脇谷 謙
 10. 6 北支那の布教観
 10. 6 満鮮の巡遊 脇谷 謙 十、平壤から
 釜山まで
 10. 10 日大出身の海外熱
 10. 10 基督教の売国行為
 10. 11 満鮮の巡遊 脇谷 謙
 10. 12 琉球の宗教 腐肉を洗って骨を祠る
 10. 14 朝鮮総督府と浄宗 寺と財団との関係
 10. 16 支那政局の推移(上) 水野梅曉氏談
 10. 17 満鮮所感 脇谷 謙
 10. 17 印度より 木村龍寛
 10. 17 朝鮮金光教
 10. 17 支那政局の推移(下) 水野梅曉氏談
 10. 20 朝鮮元山仏教日曜学校
 10. 20 海外布教上の根本問題(上)
 10. 21 タゴールの日本観(上)
 10. 21 海外布教上の根本問題(中)
 10. 23 タゴールの日本観(中)
 10. 23 海外布教上の根本問題(下)
 10. 24 台北感化院
 10. 24 タゴールの日本観(下)
 10. 27 マニラ開教
 10. 28 台湾仏教青年会
 10. 28 朝鮮僧の苦学
 10. 28 支那仏教の現状(上) 大谷大学 上
 杉文秀氏談
 10. 30 支那仏教の現状(下) 大谷大学 上
 杉文秀氏談
 10. 31 支那の金光教
 11. 2 南清布教と病院

1917. 11. 2 満洲の禪宗布教
 11. 3 法華經の韓訳
 11. 8 大道社の解散
 11. 9 朝鮮神宮建設? 大蔵省議決の説
 11. 18 喇嘛法主奉獻仏像問題
 11. 20 緬甸の仏教徒
 11. 20 支那巡錫談
 11. 21 大連教信
 11. 25 支那問題と仏教徒(常設機関を設けよ)
 11. 25 満鮮開教と浄土宗
 11. 27 支那行脚見聞談(一) 釈宗演氏
 11. 27 蘭領印度土人の親日熱 南洋婦客談
 11. 29 支那行脚見聞談(二) 釈宗演氏
 11. 30 支那行脚見聞談(三) 釈宗演氏
 12. 2 支那行脚見聞談(四) 釈宗演氏
 12. 4 台湾の仏教
 12. 11 西藏大蔵経問題
 12. 13 京城の臘八と開山忌
 12. 16 朝鮮仏教復活尚早
 12. 16 日支親善の徹底 釈管長の帰朝談
 12. 19 占領地の西本願寺
 12. 21 浦潮婦客談
 12. 25 印度の教育(上) 印度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 12. 26 印度の教育(下) 印度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 12. 28 印度僧と入道の動機 印度カルカッタ大学講師 木村龍寛
1918. 1. 1 長江沿岸漫遊 前田文学博士(談)
 1. 5 鮮人伝道拡張
 1. 9 間宮管長代理渡台
 1. 11 東洋文化の中心と仏教徒
 1. 12 台中の正月
 1. 16 支那人の住職排斥 文部省へ陳情
 1. 18 支那人と朝鮮人
 1. 18 植民的人物 大谷光瑞氏の計画
 1. 19 アジャンタの壁画模写
 1. 20 留学鮮僧客死
 1. 24 南方仏教研究
 1. 30 浦潮の開教
 2. 1 南洋開教中止
 2. 1 在支宣教師の戦争成金
 2. 2 京城妙心寺詰布教師
 2. 5 日支仏教徒不親善の原因
 2. 5 西藏珍蝶寄贈 河口氏の将来に係る
 2. 6 南洋農林工業会社
 2. 13 蒙古一帯喇嘛の奮起
 2. 20 台北宿泊所
 2. 24 浄宗鮮人布教成功
 2. 24 浄宗台湾新布教所
 2. 27 日蒙仏教連絡の嚆矢 福田閃正氏の努力
 3. 1 台湾禪宗布教
 3. 2 朝鮮鎮海港より
 3. 7 日支僧侶の交歓 支那知名仏教徒来朝 歓迎計画
3. 12 儒教と支那国民思想(上) 文学博士 服部宇之吉
 3. 13 東洋諸民族の精神的結合
 3. 13 台中所見 台中にて 阪野良全
 3. 14 東洋諸民族の精神的結合(下)
 3. 15 台中所見(続) 台中にて 阪野良全
 3. 16 儒教と支那国民思想(下) 文学博士 服部宇之吉
 3. 16 台中所見(続) 台中にて 阪野良全
 3. 17 喇嘛僧の渡来
 3. 21 大谷派の樺太布教
 3. 21 喇嘛来朝 日蒙仏教協会発会
 3. 21 上海に於ける日本人
 3. 23 日支親善の精神的基礎
 3. 24 南満洲より 医学士 八賀益造
 3. 26 蒙古仏教と西藏仏教 河口慧海氏談
 3. 26 日蒙仏教懇親会
 3. 27 喇嘛觀光団員
 3. 28 日蒙仏教協会会則
 3. 29 南洋土人の宗教
 3. 30 日蒙仏教協会趣旨発表
 4. 2 ジャタカ物語二人の上人(上) カルマー原著 光岡蒼村訳補
 4. 3 ジャタカ物語二人の上人(中) カルマー原著 光岡蒼村訳補
 4. 5 喇嘛觀光団
 4. 5 植民地の布教が急務 石川素童氏談
 4. 6 喇嘛僧団の渡来
 4. 6 神戸の蒙古僧
 4. 6 日蒙仏教協会日本支部会則
 4. 6 蒙古仏教事情(上) 前代議士 佐々木照山
 4. 7 東京に於ける喇嘛団
 4. 7 蒙古仏教事情(下) 前代議士 佐々木照山
 4. 9 喇嘛僧歓迎
 4. 9 東京駅頭喇嘛団
 4. 9 日蒙仏教協会成立
 4. 10 日蒙仏教連合発会式
 4. 10 駐滿軍隊の慰問
 4. 11 喇嘛僧歓迎会
 4. 11 喇嘛僧歓迎雜聞
 4. 12 喇嘛一行歓迎会
 4. 13 東京便
 4. 14 喇嘛僧歓迎
 4. 16 王支那領事の奨励
 4. 16 総持寺の喇嘛歓迎
 4. 16 ジャタカ物語二人の上人(下) カルマー原著 光岡蒼村訳補
 4. 17 民国公使喇嘛招待
 4. 18 喇嘛僧を迎ふ
 4. 18 光演法主と喇嘛僧
 4. 19 大連に妙心出張所
 4. 19 日蒙仏教徒懇親会
 4. 19 喇嘛一行と大阪
 4. 20 岡氏印度留学延長

1918. 4. 20 喇嘛僧へ記念品
 4. 21 喇嘛僧観光団解散式と金子氏
 4. 21 京城に記念禅堂
 4. 24 開教使引揚
 4. 24 喇嘛一行と大阪
 4. 24 喇嘛僧の勤行
 4. 24 錫蘭仏教の現状（上） 在印度甲谷陀
 日蓮宗留学生 岡教達
 4. 25 鮮人仏教青年会
 4. 25 京城婦人巡拝
 4. 25 錫蘭仏教の現状（下） 在印度甲谷陀
 日蓮宗留学生 岡教達 三宝の崇拜
 4. 26 駐滿軍の慰問
 4. 26 今日、日本を出立する喇嘛僧一行
 4. 27 台湾洞宗近状
 4. 27 淨宗台湾教区暗闘
 4. 28 堺の喇嘛歓迎会
 5. 1 日支黄檗の交通 高津黄檗前管長談
 5. 3 満鮮教況視察
 5. 7 喇嘛解散式
 5. 9 奉天大喇嘛逝く
 5. 14 生蕃婦人のお念仏
 5. 15 印度王族の入洛
 5. 15 監禁僧侶釈放交渉
 5. 16 日華青年協会
 5. 16 満鮮教況視察
 5. 18 支那留学生と基教
 5. 18 浦塩教況報告
 5. 22 鮮僧教育難 妙心寺京都出張所長文学
 士 後藤瑞巖
 5. 23 生蕃日蓮像に驚く
 5. 26 喇嘛談渡日反響
 5. 28 朝鮮鎮海新緑
 5. 29 パラライカ
 5. 31 漢口教状
 6. 12 台湾より 阪野良全
 6. 14 新嘉坡洞宗布教所
 6. 16 青島と宗派関係
 6. 18 大連教信
 6. 19 鎮南学林寄宿舎建設
 6. 21 豊山派の朝鮮開教
 6. 21 鎮江山の額と聯
 6. 25 仏大生の独力開教
 6. 26 鎮海招魂祭
 6. 26 満鮮仏教管見
 6. 27 軍隊布教使観 大谷宝潤
 6. 28 印度に仏教寺院の新築 千年目に復活
 の兆候を顕はした
 6. 28 緬甸寺院着靴問題
 6. 29 西本開教の前途（上）
 6. 30 西本開教の前途（下）
 6. 30 妙心大連別院着工
 7. 4 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 西本願寺は？（一）
 7. 5 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 西本願寺は？（二）
 7. 6 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 西本願寺は？（三）
 7. 7 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 西本願寺は？（四）
 7. 9 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 西本願寺は？（五）
 7. 9 釜山に於ける井上円了氏
 7. 9 無銭で東蒙古
 7. 12 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 東本願寺は？（一）
 7. 12 満鮮開教協議会
 7. 13 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 東本願寺は？（二）
 7. 14 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 東本願寺は？（三）
 7. 14 満鮮開教決議
 7. 18 ▲うでの世の中▼ 満鮮並支那布教
 東本願寺は？（四）
 7. 21 鮮人伝道後援会
 7. 25 上海の日語学校
 7. 28 台湾僧籍編入
 8. 1 満鮮巡遊はがき通信（其二） 仏大講
 師団
 8. 2 満鮮巡遊はがき通信（其三）
 8. 3 満鮮巡遊はがき通信（其四）
 8. 4 支那ボーイ養成
 8. 6 谷了然氏逝く
 8. 6 満鮮巡遊はがき通信（其五）
 8. 7 満鮮巡遊はがき通信（其六）
 8. 8 救世軍の出兵
 8. 8 満鮮巡遊はがき通信（其七）
 8. 10 満鮮巡遊はがき通信（其八）
 8. 11 苦熱の下から（上） 阪野良全
 8. 11 満鮮巡遊はがき通信（其九）
 8. 13 南清問答行脚 関清拙
 8. 13 満鮮巡遊はがき通信（其十） 仏大講
 師団
 8. 13 満鮮巡遊だより（一）
 8. 14 樺太通信
 8. 14 満鮮巡遊はがき通信（其十一） 仏大
 講師団
 8. 15 南清問答行脚（続） 関清拙
 8. 15 満鮮巡遊はがき通信（其十二） 仏大
 講師団
 8. 16 南清問答行脚（続） 関清拙
 8. 16 西派従軍僧
 8. 16 満鮮巡遊はがき通信（其十三） 仏大
 講師団
 8. 17 日蒙仏教連合の進歩
 8. 17 満鮮巡遊はがき通信（其十四） 仏大
 講師団
 8. 18 満鮮巡遊はがき通信（其十五） 仏大
 講師団
 8. 20 満鮮巡遊はがき通信（其十六） 仏大
 講師団
 8. 21 満鮮巡遊はがき通信（其十七） 仏大

- | | | | | |
|-------|--------|--|------------|---------------------------|
| 1918. | 8. 22 | 講師団 | 10. 17 | 支那時局と 布教権問題 |
| | 8. 22 | ブリアート 僧侶の避難 | 10. 17 | 満洲より(二) 農学士 八賀益造 |
| | 8. 28 | 満鮮巡遊はがき通信(其十八) 森川智徳 | 10. 19 | 満洲より(三) 農学士 八賀益造 |
| | 8. 28 | 印度マイソール共進会 | 10. 23 | 満洲より(四) 農学士 八賀益造 |
| | 8. 28 | 満鮮巡遊だより(二) | 10. 23 | 宣教師放逐さる 南洋で排日扇動 |
| | 8. 29 | 満鮮巡遊だより(三) | 10. 23 | 朝鮮鎮海新雁 |
| | 8. 30 | 印度政庁から備聘 家庭教師と養蚕備夫 | 10. 24 | 各派従軍僧の陳情 |
| | 8. 30 | 満鮮巡遊だより(四) | 10. 25 | 太田覚眠氏一行の消息 |
| | 8. 31 | 満鮮巡遊だより(五) | 10. 26 | 開教院梵鐘鑄式 |
| | 9. 3 | 支那留學生の出發 | 10. 29 | 朝鮮日宗布教統一 朝鮮護国寺宗門引継 |
| | 9. 4 | 満鮮巡遊だより(六) | 11. 3 | 上海通信 |
| | 9. 6 | 満鮮巡遊だより(七) | 11. 5 | 台湾土人の信仰の対象(一) 阪野良全 |
| | 9. 8 | 満鮮巡遊だより(八) | 11. 5 | 洞派慰問使派遣 |
| | 9. 10 | 満鮮巡遊だより(九) | 11. 7 | 台湾仏教中学 補助費問題 |
| | 9. 10 | 西伯利亞の曠原より 道元浄見 | 11. 7 | 京城の浄宗開教院 |
| | 9. 11 | 支那知名僧來朝準備 | 11. 8 | 暹羅から東京へ(一) 河内市 立花俊道 |
| | 9. 12 | 台湾見聞(上) 阪埜良全 | 11. 9 | 暹羅から東京へ(二) 河内市 立花俊道 |
| | 9. 13 | 台湾見聞(二) 阪埜良全 | 11. 10 | 暹羅から東京へ(三) 河内市 立花俊道 |
| | 9. 14 | 台湾見聞(三) 阪埜良全 | 11. 12 | 暹羅から東京へ(四) 河内市 立花俊道 |
| | 9. 14 | 釜山各開教員の慰問 | 11. 13 | 暹羅から東京へ(五) 河内市 立花俊道 |
| | 9. 14 | サイベリア出兵慰問 | 11. 22 | 浦塩より(一) 軍指令部附 従軍布教監督 太田覚眠 |
| | 9. 15 | 台湾見聞(四) 阪埜良全 | 11. 26 | 浦塩より(二) 軍指令部附 従軍布教監督 太田覚眠 |
| | 9. 15 | 満鮮巡遊だより(九) | 11. 28 | 大谷派慰問使 |
| | 9. 17 | 朝鮮仏教通史 文学博士 谷本富 | 11. 28 | 浦塩より(三) 軍指令部附 従軍布教監督 太田覚眠 |
| | 9. 18 | 台湾見聞(五) 阪埜良全 | 11. 29 | 浦塩より(四) 軍指令部附 従軍布教監督 太田覚眠 |
| | 9. 18 | 京城の梵鐘鑄造 | 11. 30 | 蕃界通信(一) 阪野良全 |
| | 9. 21 | 基教日本軍慰問使 | 12. 1 | 朝鮮宗教近状 |
| | 9. 26 | シベリアの戦場から | 12. 3 | 蕃界通信(二) 阪野良全 |
| | 9. 28 | 朝鮮開教 廣安眞隨氏談 | 12. 4 | 浦塩より(四) 軍指令部附 従軍布教監督 太田覚眠 |
| | 10. 1 | 西派と西比利亞 | 12. 5 | 蕃界通信(三) 阪野良全 |
| | 10. 3 | 安東だより | 12. 6 | 慰問使一行 |
| | 10. 4 | 従軍布教統一策 | 12. 7 | 僧侶の鮮語習熟 |
| | 10. 8 | 印度のピン チラポール 動物養老院に就て(一) 東京動物愛護会席上 桜井義肇氏談 | 12. 8 | 浦塩の本派慰問 |
| | 10. 8 | 南洋の宗教 不敏な仏教各派 | 12. 8 | 浦塩より(五) 軍指令部附 従軍布教監督 太田覚眠 |
| | 10. 9 | 印度のピン チラポール 動物養老院に就て(二) 東京動物愛護会席上 桜井義肇氏談 | 12. 10 | 開教院梵鐘成る |
| | 10. 9 | アチャンター壁画 模写展 | 12. 10 | 朝鮮教育者見学団 |
| | 10. 9 | 鮮僧の希望 朝鮮白羊山 金永充 | 12. 11 | 浦塩の尊山氏 |
| | 10. 9 | 鮮僧各山見学 | 12. 12 | 浦塩より(六) 軍指令部附 従軍布教監督 太田覚眠 |
| | 10. 10 | 印度のピン チラポール 動物養老院に就て(三) 東京動物愛護会席上 桜井義肇氏談 | 12. 15 | 尊山氏一行 |
| | 10. 11 | 印度のピン チラポール 動物養老院に就て(四) 東京動物愛護会席上 桜井義肇氏談 | 12. 24 | 釜山より |
| | 10. 11 | 伝道株式会社計画 | 1919. 1. 1 | 西比利亞兵士 と日本仏教徒 |
| | 10. 12 | 台湾各宗事情(一) 阪野良全 | 1. 7 | 厦門より |
| | 10. 13 | 台湾各宗事情(二) 阪野良全 | | |
| | 10. 16 | 満洲より(一) 農学士 八賀益造 | | |
| | 10. 16 | 遭難せる光洋丸行衛 | | |
| | 10. 16 | 台湾各宗事情(三) 阪野良全 | | |

1919. 1. 8 渡日支那仏教団の歓迎
 1. 14 南洋開教
 1. 15 ヘリヨソフカより 西伯利駐屯一軍人
 (投)
 1. 16 漢口の教会堂
 1. 16 台湾の奇習
 1. 16 ヘリヨソフカより (下) 西伯利駐屯
 一軍人 (投)
 1. 17 南印度より
 1. 18 朝鮮三十本山
 1. 18 黄檗山の台湾資料
 1. 18 -▲印度短信▽-第一一 泉芳璟
 1. 19 -▲印度短信▽-第二信一 泉芳璟
 1. 23 -▲印度短信▽-第三信一 泉芳璟
 1. 24 慰問使の雲隠れ
 1. 25 -▲印度短信▽-第四信一 泉芳璟
 1. 26 -▲印度短信▽-第五信一 泉芳璟
 1. 28 従軍布教使の醜態
 1. 30 -▲印度短信▽-第六信一 泉芳璟
 1. 31 -▲印度短信▽-第七信一 泉芳璟
 1. 31 西野禪師満州巡化
 2. 1 従軍布教使評
 2. 2 浄土宗管長代理の 慰問使出発
 2. 4 -▲印度短信▽-第八信一 泉芳璟
 2. 5 ラマ僧の日本熱
 2. 6 浦塩孤児の救済
 2. 7 -▲印度短信▽-第九信一 泉芳璟
 2. 8 -▲印度短信▽-第十信一 泉芳璟
 2. 9 -▲印度短信▽-第十一信一 泉芳璟
 2. 11 -▲印度短信▽-第十二信一 泉芳璟
 2. 13 -▲印度短信▽-第十三信一 泉芳璟
 2. 16 -▲印度短信▽-第十三信一 泉芳璟
 2. 18 -▲印度短信▽-第十五信一 泉芳璟
 2. 19 -▲印度短信▽-第十六信一 泉芳璟
 2. 20 管長代理李王家敬弔
 2. 20 -▲印度短信▽-第十七信一 泉芳璟
 2. 20 上海短信
 2. 21 -▲印度短信▽-第十八信一 泉芳璟
 2. 22 排日宣教師
 2. 22 西比利亚時談
 2. 23 満州各宗不調和
 2. 23 -▲印度短信▽-第十九信一 泉芳璟
 2. 25 -▲印度短信▽-第二十信一 泉芳璟
 2. 26 -▲印度短信▽-第二一信一 泉芳璟
 2. 27 -▲印度短信▽-第二二信一 泉芳璟
 2. 28 顕本派の朝鮮開教
 2. 28 南清だより
 3. 2 李太王殿下 の国葬
 3. 2 -▲印度短信▽-第二三信一 泉芳璟
 3. 5 朝鮮の大騒擾 と基督教の扇動
 3. 5 -▲印度短信▽-第二五信一 泉芳璟
 3. 6 -▲印度短信▽-第二六信一 泉芳璟
 3. 7 -▲印度短信▽-第二七信一 泉芳璟
 3. 8 従軍布教使評 北満武士より
 3. 8 -▲印度短信▽-第二八信一 泉芳璟
 3. 11 言論 朝鮮の騒擾と 基督教
 3. 11 宣教師は国外退去か
 3. 12 支那仏教觀光団
 3. 12 -▲印度短信▽-第二九信一 泉芳璟
 3. 14 縦横談義 支僧欲 迎議案
 3. 14 -▲印度短信▽-第三〇信一 泉芳璟
 3. 16 渡印の為天紅画会組織
 3. 16 台中より
 3. 18 朝鮮事件の教訓
 3. 18 南洋と仏教
 3. 18 暹羅皇弟殿下 と浅草本願寺
 3. 18 李太王奉悼法会
 3. 20 言論 内鮮融和と 教家の努力
 3. 21 支那僧欲待
 3. 22 朝鮮開教所感 =全鮮見学旅行の途に
 て= 小笠原生
 3. 25 朝鮮開教所感 (二) =全鮮見学旅行
 の途にて= 小笠原生
 3. 26 朝鮮開教所感 (三) =全鮮見学旅行
 の途にて= 小笠原生
 3. 27 朝鮮開教所感 (四) =全鮮見学旅行
 の途にて= 小笠原生
 3. 28 亜細亞連盟の建設 仏国文学博士 ポー
 ル、リシャール
 3. 28 支那僧のお宿は妙心寺
 3. 28 -▲印度短信▽-第三一信一 泉芳璟
 3. 29 喇嘛僧団
 3. 30 印度趣味会
 3. 30 新秋の印度講演
 4. 1 李太王殿奉悼法会
 4. 1 朝鮮在来仏教と教化
 4. 1 朝鮮布教所
 4. 2 千代田女学校 朝鮮女学生
 4. 2 朝鮮留学生と基教
 4. 2 台湾僧東上
 4. 2 朝鮮智山派寺院公称
 4. 3 喇嘛僧欲迎
 4. 3 支那僧渡日 団の来着期
 4. 3 東派海外伝道
 4. 5 喇嘛僧団着
 4. 6 朝鮮仏教留学生帰国
 4. 8 喇嘛一行東京日程
 4. 8 朝鮮教化意見書起草
 4. 8 台湾寺院と内地布教師
 4. 8 鎮南学林長
 4. 8 台湾と妙心寺
 4. 10 朝鮮同胞に告ぐ 文学博士子爵 末松
 謙澄
 4. 10 喇嘛一行
 4. 10 少年連合団の 喇嘛欲迎
 4. 10 印度芸術の華 アジャンター岩窟内の
 壁画模写博物館に着す
 4. 11 台湾宗教視察印象 (上) 天軸接三
 4. 12 喇嘛、支那留学生を激励す
 4. 12 喇嘛僧欲迎会
 4. 13 米国宣教師団の秘密会議
 4. 13 東京に於ける喇嘛一行

1919. 4. 15 朝鮮時局と統治方針 総督府前某大官談
4. 15 朝鮮に於ける布教師の危難
4. 15 新井石禪満州巡錫
4. 16 喇嘛団と大阪
4. 16 朝鮮騒擾 と仏教記者団
4. 16 喇嘛僧懇親会
4. 17 朝鮮花片
4. 18 西伯利軍慰問一行歓迎
4. 18 印度貴官と高楠博士
4. 19 台湾開教師の土語研究
4. 20 喇嘛僧のお話
4. 20 喇嘛団と大阪
4. 22 言論 朝鮮統治の 根本方針
4. 22 西伯利軍慰問所感 岡本前執綱談
4. 22 印度婦人の観光感
4. 22 内鮮仏教提携
4. 22 満洲仏教団
4. 23 朝鮮教化の将来 前曹洞宗朝鮮開教総監 北野元峰老師談
4. 23 満洲に於ける本派と 各宗の不和
4. 23 開教院梵鐘撞初式
4. 23 信濃の印度講演会
4. 23 喇嘛と兩本願寺
4. 24 豊富なる朝鮮開教資金 高瀬、富田二氏の美 拳と浄土宗侶の活躍
4. 24 喇嘛と大阪
4. 24 喇嘛と顯孝庵
4. 24 舍身居士の渡蒙
4. 24 台湾宗教視察印象(下) 天軸接三
4. 25 朝鮮民心の帰向と其善導(一) 中村飛去来
4. 25 鮮人新と浄宗 教会を護衛?
4. 25 シャム一行参拝
4. 26 朝鮮民心の帰向と其善導(二) 中村飛去来
4. 26 米國宣教師の 犯人隠匿と裏面に光る騒擾扇動の事実
4. 27 朝鮮民心の帰向と其善導(三) 中村飛去来
4. 29 再び日本国民に告ぐ(上) 人種問題に就て 仏國文学士 ポール、リシャルル氏
4. 29 朝鮮民心の帰向と其善導(四) 中村飛去来
4. 29 印度教徒と 回々教徒の握手
4. 29 三度の大迫害 侮辱の復讐を叫ぶ
4. 30 再び日本国民に告ぐ(下) 人種問題に就て 仏國文学士 ポール、リシャルル氏
4. 30 西比利を後に(上) 松原至文
4. 30 浦塩の幡隨院
5. 1 朝鮮に於ける教育事業 國語普及学館長 国井泉氏談
5. 1 朝鮮輪番会議
5. 2 言論 朝鮮時局と宗教界
5. 2 朝鮮事件对基督教徒の態度 両者の誤解を釋かん 靈南坂教会 小崎弘道
5. 2 更に基督教徒の密謀 新に仮政府を樹立す
5. 2 喇嘛僧と支那官憲 札木蘇喇嘛拘禁
5. 2 朝鮮教化問題講演
5. 3 西比利を後に(下) 松原至文
5. 7 何故に朝鮮を攪乱するか 真宗中学々長 川崎顯了
5. 7 鮮人收容の日校
5. 7 蒙古王來朝
5. 7 洞宗管長代理満鮮巡錫
5. 8 朝鮮事件对基督教徒の態度 善後策の要諦(一) 日本メソヂスト教会監督 平岩愼保
5. 8 朝鮮僧侶の対騒擾
5. 9 消極的海外布教
5. 9 青島開教所
5. 10 朝鮮事件对基督教徒の態度 善後策の要諦(二) 日本メソヂスト教会監督 平岩愼保
5. 10 朝鮮問題と新仏教徒
5. 11 日露小国民の親善 浦湖本願寺少年会
5. 11 章公使と日本仏教
5. 13 朝鮮事件对基督教徒の態度 善後策の要諦(三) 日本メソヂスト教会監督 平岩愼保
5. 14 台湾の教勢
5. 15 釜山両教徒に警告す —(朝鮮動乱に就て)— 新仏教徒同志会
5. 15 朝鮮のために氣を吐く
5. 17 日蒙提携に就て(上) 田中舍身
5. 17 台僧の覚悟 盧覚浄氏談
5. 17 舍身居士愈々入蒙
5. 17 歳蒙仏教の連合機関
5. 17 東洋伝道事業視察
5. 17 入浴せる台僧
5. 18 朝鮮総督府の覚醒と仏徒の用意(上)
5. 18 露國少年 に与ふる日本感化の二面
5. 20 朝鮮総督府の覚醒と仏徒の用意(下)
5. 20 日蒙提携に就て(中) 田中舍身
5. 21 擾乱を彼方にみつつ(上) 永原農林専門学校助教授 君泰重
5. 22 擾乱を彼方にみつつ(下) 永原農林専門学校助教授 君泰重
5. 22 京城の輪番会
5. 22 元山円光寺上棟式
5. 23 日蒙提携に就て(下) 田中舍身
5. 24 朝鮮布教は個人に限る 法主主義の別院は許さぬ
5. 25 朝鮮騒擾と宗教 慶尚南道にて 小笠原秀昱
5. 25 開教記念に袈裟
5. 28 朝鮮騒擾と宗教(二) 慶尚南道にて 小笠原秀昱
5. 30 朝鮮の伝道師 同盟辞職

1919. 5. 31 蒙僧の排日参加 が事実ならば面冠り
 5. 31 全蒙中に唯一人の日僧
 6. 1 説話文学の源流 東京帝国大学教授文学博士 高楠順次郎
 6. 1 夕翁再来？
 6. 1 夕翁再来？
 6. 1 朝鮮基教激減
 6. 4 西藏問題と排日
 6. 5 朝鮮基督教の「鐘」問題
 6. 7 台湾開教拡張
 6. 8 大谷派の鮮僧養成
 6. 10 中華仏教統一運動
 6. 10 北京の仏教界 蒙古喇嘛の排日
 6. 10 排日熱と支那高僧渡日団
 6. 10 朝鮮教化研究起る
 6. 10 仏青朝鮮夏期講習
 6. 13 台湾宗教事情 西本願寺執行 弓波瑞明
 6. 13 朝鮮問題善後と基教
 6. 13 支那排日と宣教師
 6. 14 朝鮮仏教徒活動
 6. 15 朝鮮救済と仏徒の覚悟（一） 京城国語普及学館長 国井泉
 6. 17 朝鮮救済と仏徒の覚悟（二） 京城国語普及学館長 国井泉
 6. 17 男子島の宗教 甲板上の婦人望見が五十銭
 6. 17 朝鮮教化研究会
 6. 18 大連明如上人法要
 6. 19 朝鮮救済と仏徒の覚悟（三） 京城国語普及学館長 国井泉
 6. 19 東京より 朝鮮教化 日韓併合
 6. 22 印度芸術探検
 6. 22 于闐国史の翻訳 西藏学者寺本氏の事業
 6. 24 仏教朝鮮協会成る
 6. 25 西伯利の宗教界
 6. 25 仏教朝鮮協会事業要目
 6. 25 仏教朝鮮協会と各宗
 6. 25 在日民国基督教教育年会
 6. 27 在日朝鮮基督教教育年会
 6. 29 朝鮮に於ける天理教
 7. 3 朝鮮釜山教界
 7. 3 朝鮮協会と両本願寺
 7. 4 基督教徒の観たる鮮人陰謀
 7. 4 回々教経典 新に編纂出版さる
 7. 4 北京仏教宣講所
 7. 4 台湾総督府の宗教調査
 7. 5 仏教海外宣伝に先ちて 西原亀三氏（談）
 7. 7 海外布教館 日本の海外発展
 7. 8 印度仏教の歴史的体系 橘文学士十五年の苦辛
 7. 9 スタアル博士の朝鮮 仏教研究に因みて（上） 橋川正
 7. 11 スタアル博士の朝鮮 仏教研究に因みて（下） 橋川正
 7. 12 墳墓の地は朝鮮 訣別会の終った時 石川舜台翁は語る
 7. 13 如何なるか世界の人物 舜台当年の経綸（一） 声涙共に下る追懐談
 7. 13 海印三昧に炳現 せし大正仏教 石川舜台
 7. 15 タゴール翁の憤慨
 7. 15 台湾僧見学
 7. 16 仏教界を一身に背負って起ちし 舜台当年の経綸（二） 今尚ほ灸所をそらす巧妙さ
 7. 17 仏教朝鮮協会
 7. 19 朝鮮教界近状
 7. 20 浄宗朝鮮開教の進展
 7. 23 満鮮巡錫談 新井石禪氏談
 7. 23 曹洞朝鮮布教総監
 7. 24 南洋の前門へ
 7. 24 中国の旅から
 7. 26 言論 朝鮮騒動と基督教 文学博士 谷本富
 7. 26 海の外
 7. 27 国井氏帰鮮
 7. 30 露国最近事情 本派本願寺西伯利開教総監 太田覚眠氏
 8. 1~9. 3 停刊
 9. 6 京城に人事相談所 鮮人教化の第一歩として
 9. 6 大派鮮人教化
 9. 7 齊藤新総督の 冷かなる一語 「仏教が鮮人教化に夫ほどの 効果がありませんかいナー」
 9. 11 新総督の冷語をかみしめて 梅原真隆
 9. 13 新領土の巨木を 大貨車で東福寺へ
 9. 16 回基両教徒蜂起 西部西比利亜の回教旗
 9. 19 支那古代黄金の梵鐘
 9. 26 朝鮮開教打撃
 9. 26 朝鮮日曜学校
 9. 27 朝鮮開教者へ
 10. 3 原主相現代僧侶の無教育を誨へて 「支那開教は前途遼遠だ！！」
 10. 4 印度を去らんとして（上） 印度カルカッタにて 泉芳環
 10. 4 在外鮮人の民族的発達
 10. 4 朝鮮宣教師大会
 10. 5 印度を去らんとして（中） 印度カルカッタにて 泉芳環
 10. 5 日本語講師として
 10. 7 印度を去らんとして（下） 印度カルカッタにて 泉芳環
 10. 8 仏教朝鮮協会
 10. 9 大谷派の朝鮮特派布教
 10. 15 朝鮮に基教大学
 10. 15 真言宗従軍僧を 西伯利へ派遣す
 10. 17 印度古経の鑑定

1919. 10. 19 宣教師と国際
10. 21 浄土宗の將に着手せんとする 朝鮮教化の新事業
10. 21 高楠博と印度仏教
10. 21 西伯亜に日宗新寺院
10. 22 五里霧中の儘に葬られたる 西藏大蔵経問題 今が解決には絶好の時機
10. 23 朝鮮学生懇談会 ▲新仏教同志会主催
10. 25 東福寺の台湾木材
10. 25 鮮人漸く帰化
10. 25 浄宗朝鮮開教区長人選 光瑞氏河口氏の訪問に應ぜず
10. 26 好機会を逸せし 西藏大蔵経問題
10. 30 光瑞氏に木箱の受取を 河口氏更に書面にて交渉
10. 31 河口の遺方が氣に食はぬ 委任者の人格を尊重す れば直接面会は出来ぬ
11. 2 大谷光瑞氏の大獅子吼 代表的国士の面影を發揮す
11. 7 ▼朝鮮人の要求に應じて▽ 精神的差別撤廃 ▼大に新日本主義の高唱▽ 禅機縦横明石総督 宗演門下第一の居士
11. 14 満鮮所見(上) 河崎顕了
11. 15 満鮮所見(中) 河崎顕了
11. 16 満鮮所見(下) 河崎顕了
11. 19 内蒙唯一の日本僧 お医者様で全蒙視察
11. 25 ▲米国議会に於ける▽ ▲朝鮮事件の宗教化▽
11. 25 朝鮮総監宣教師招宴
11. 25 支那三十函巻展観
12. 2 盛に暗中飛躍に熱狂せる 宣教師の排日運動
12. 2 于闐国仏教史に就て 京都帝国大学講師 寺本婉雅
12. 11 班禅喇嘛に帰順
12. 11 扇動事実発表
12. 17 宣教師公けに朝鮮に 魔の手を延ばし来らんとす
12. 20 禍根を掃蕩せずんば遂に 朝鮮不逞基督教徒や奈何? 日本人基督教徒は起て!
12. 23 仏教濟世軍の西伯利慰問計画
1920. 1. 9 海外開教の批判
1. 13 西伯利亞出征軍と 従軍布教師
1. 14 上海に於ける宣教師大会 宛然國際的の懺悔 オートルマンス博士の親日
1. 15 宣教師引揚
1. 16 南洋統治と人種問題 日本の提議は冒險なり 先づ宣伝せよとベッドレー氏説く
1. 23 西伯利慰問協議
1. 25 東京在住鮮人相談所計画
1. 28 仏専跡地に 鮮人寄宿舎計画
1. 28 西伯利と西本願寺
1. 29 東亜の回教
2. 1 朝鮮教化講習会
2. 1 台北の基督青年
2. 3 朝鮮宗教政策 当局の同仁振り
2. 5 西伯利慰問団 愈々組織さる
2. 8 朝鮮宗教の現状 仏耶二教の比較考察
2. 13 鮮人伝道のため百万円 高瀬氏の提供と 浄土宗の奮起
2. 21 我邦の南洋統治と宗教 全島人口三分の一は基督教 異人種教化の先駆者組合教会
2. 21 印度近信(上) カルカッタ大学教授 木村龍寛
2. 21 福州の遣唐使研究
2. 22 印度近信(下) カルカッタ大学教授 木村龍寛
2. 25 土耳其漸亡と 回教の運命
2. 27 南洋に於ける 単独布教
2. 27 基督教會同盟大会 日支親善を講ぜん
3. 2 南洋宗教と保護の理由 柴田宗教局長談
3. 2 鮮人同化の経典
3. 2 仏教各団体シベリア慰問
3. 3 台湾台宗の發展
3. 4 二十万人の鮮人信徒を有する 朝鮮基督教の現状 その同情面と悲観面 大勢に衰微あり
3. 4 総督府 官憲招待会
3. 5 印度民族の勃興 回教と印度教共力して 英國を衝かんとす 松本博士の齎せる印度の現状
3. 9 「印度舞踏」
3. 10 弘法大師福州 上陸に就き 長谷部隆諦
3. 11 朝鮮仏教近状
3. 13 印度帰客談
3. 13 南洋宣教師の人選
3. 14 上海より 藤波大圓
3. 16 全印回教徒會議終に 殉教的精神を閃かす 宗教信念の國際的発動
3. 16 朝鮮東西本願寺の握手 東西連合で横田局長歓迎 並に教務研究と囚人追弔
3. 16 支那女学生八名 同志社へ
3. 16 光瑞氏の 露国經營説
3. 19 シベリヤ慰問品発送
3. 21 山東の宗教(一) 菊田宣暢
3. 21 鮮人の根本教化と 京城大会館建築 東本願寺經營
3. 21 在印木村龍寛氏の近著
3. 23 タゴール博士の近状
3. 24 山東の宗教(二) 菊田宣暢
3. 24 朝鮮の現状及び将来 基督教徒の勢力は 總督府以上
3. 26 山東の宗教(三) 菊田宣暢
3. 27 山東の宗教(四) 菊田宣暢
3. 27 支那基督大会 英米支の精神的結合
3. 28 山東の宗教(五) 菊田宣暢

1920. 3. 30 朝鮮教化講習開始
3. 31 日支親善の策興と 役にたため邦人宗教家 支那人に悪感化を与えつつある 仏教家 外国にまで耻を曝す僧侶
3. 31 蒙古通信
4. 2 大本教の 台湾観 地勢上最も憂慮に堪へず
4. 3 東洋大学の 新大計画 京城に分校
4. 3 支那基教 青年大会の目的 学生釈放運動
4. 6 支那僧の来朝 福田宏一氏同伴
4. 6 台湾仏教中学林の近況
4. 7 鮮人説教所 を建つ
4. 7 支那基青大会 基教の世界的使命
4. 9 布教に便宜を得た 朝鮮の基教
4. 9 研究すべき 印度の山間 風俗と人種
4. 11 印度の地理的考察 同情すべき仏教徒の苦衷
4. 13 蒙古活仏より 仏像二軀 日本軍に贈り来る
4. 14 印度趣味の展開
4. 14 朝鮮慈濟院
4. 15 朝鮮開教と松原氏
4. 17 回教統一運動
4. 17 上海教界の近況
4. 18 漢口布教所定礎式 大谷光瑞氏植を打つ
4. 18 医学上から 日支の握手
4. 20 大谷光瑞氏の帰朝と 西藏大蔵経問題 国王、光瑞、慧海各氏を 探る 青木文教の態度 精舎氏に解決を促す
4. 22 日本に仇せんとする支那の 基督教徒の扇動 を慨する日本の基督教徒
4. 22 朝鮮布教規則の改正 秩序紊乱に備ふる 停止禁止の設定
4. 23 朝鮮布教規則の改正 秩序紊乱に備ふる 停止禁止の設定
4. 27 百山貫首朝鮮巡教日程
4. 28 本派の従軍布教使
4. 29 回教主として 土国前皇帝 君府に残留 連合各国意見一致
4. 29 支那僧帰国
5. 2 印度仏徒を泣かせた 光瑞氏の商売気
5. 2 現代支那 仏教界の機運
5. 4 日支の仏教連盟
5. 6 支那名僧の渡日団と 統蔵経の批判 (上) 中野達慧
5. 7 印度を魂の宿とせる 欧州の二学者
5. 8 支那名僧の渡日団と 統蔵経の批判 (中) 中野達慧
5. 8 幼稚なる吾植民政策と 新しき宗教者の進路
5. 8 大谷派 海外通信
5. 9 支那名僧の渡日団と 統蔵経の批判 (下) 中野達慧
5. 9 西伯利軍隊慰問成績
5. 11 上海雑談 在上海 南歆生
5. 13 朝鮮基教財団設定許可
5. 14 蒙古より (上) 熊谷直民
5. 15 上海より (上) 藤波 圓
5. 15 蒙古より (下) 熊谷直民
5. 15 宣教師の苦衷 排日軍と戦ふ
5. 16 上海より (中) 藤波 圓
5. 18 上海より (下) 藤波 圓
5. 19 満洲戦跡にて 追弔法要
5. 19 大極教徒 皇帝の諡号を請願す
5. 21 大学は世界主義 小中学は軍国主義 国民教育の不統一 は日支親善の最大禍根だ
5. 21 プリヤート活仏より 寄贈の仏像
5. 25 回教徒の宣言
5. 25 印度の現状と 基督教徒の活動
5. 26 鮮人教化は 先づ児童から始む
5. 27 支那の開教 と支那人氣質
5. 27 妙心満洲開教師排斥
5. 29 真言従軍布教師召還 法務当局の態度
6. 1 台湾の宗教
6. 1 朝鮮協会常務会
6. 4 日本基督教会同盟の 朝鮮事件其他の問題 に対する宣言発表
6. 4 妙心派と朝鮮寺刹
6. 5 印度政庁ダッド氏 基督教を圧倒 して欲しいと語る
6. 6 満鮮に飛躍の真言宗 和田山階派管長 朝鮮永住
6. 9 青島教会の現状 仏教と基督教 光瑞氏の住居
6. 10 印度教と回教徒の握手
6. 11 回教徒運動の主力
6. 15 仏跡地印度暫見談 新帰朝者 泉芳環
6. 15 北京大学に 宗教講座新設
6. 15 西藏研究の進展 西藏文字を造版せんとする大谷大学
6. 18 印度の仏教徒
6. 19 西藏研究の曙光
6. 20 米国の新要求 支那の宣教師殺害
6. 23 上海雑談 在上海 南歆生
6. 26 朝鮮巫堂を神道に 宮地鐘次郎氏一派の運動
6. 26 日鮮仏教提携反対 =鮮人学生の運動=
6. 26 匿名特志者の 尼港追悼
6. 26 浅草寺の追悼法会
6. 27 中外即事 犬死にはではない
6. 27 浄宗尼港追悼訓示
6. 27 沼津尼港追悼会
6. 29 東京各宗連合 尼港遭難追悼大法要 無慮一万人と註せらる
6. 29 各地尼港追悼会
6. 30 尼港弔問 (第一回通信) 仏教各宗弔問団
6. 30 台湾の宗教現勢 先住民の宗教心
7. 1 台湾総督府の 宗教研究

1920. 7. 1 京都公会堂に於ける 軍人講演会主催
 尼港追弔祭
 7. 2 朝鮮寺院と 妙心派
 7. 2 台湾総督府の 大本教禁止
 7. 6 尼港殉難講演会
 7. 7 中外即事 聖地パレストイン
 7. 7 尼港避難者 無料宿泊所に来る
 7. 8 尼港の追悼会は 講演を先にせよ
 7. 8 活仏殺害さる
 7. 8 仏專満鮮伝道
 7. 9 日華仏教の連鎖 藤波大圓氏広東に聘
 さる
 7. 9 尼港追悼 講演と将校
 7. 9 樺太各宗追悼会
 7. 11 北部沿海から 祖国を顧みて (一)
 7. 11 儒教と朝鮮教化
 7. 11 尼港殉難追弔
 7. 13 北部沿海から 祖国を顧みて (二)
 7. 14 尼港に於ける 招魂祭追弔会
 7. 15 尼港へつく迄 (上) 弔問使 小林雨
 峰
 7. 15 蒙古歳経散逸防止
 7. 16 尼港へつく迄 (中) 弔問使 小林雨
 峰
 7. 17 尼港へつく迄 (下) 弔問使 小林雨
 峰
 7. 18 金剛山巡礼記(1) 神溪寺へ 都路華
 香
 7. 20 金剛山巡礼記(2) 神溪寺より 九龍
 瀑へ 都路華香
 7. 21 金剛山巡礼記(3) 九龍瀑より 万物
 相へ 都路華香
 7. 21 尼港に於ける日輪法甌氏
 7. 22 金剛山巡礼記(4) 朝鮮中期の芸術と
 長安寺 都路華香
 7. 23 金剛山巡礼記(5) 長安寺住僧との
 禅問答 都路華香
 7. 24 金剛山巡礼記(6) 長安寺の一泊 鮮
 僧の行持 都路華香
 7. 24 尼港へつくまで 亜港の半日 小林雨
 峰
 7. 24 妙心台湾僧養成機関
 7. 24 三十万円の 尼港殉難碑 早稲田大学
 勧誘隊
 7. 24 日宗主権尼港追悼会
 7. 25 金剛山巡礼記(7) 汗一斗して 摩訶
 衍庵へ 都路華香
 7. 25 尼港へつくまで 亜港の半日 (承前)
 小林雨峰
 7. 27 大派京城別院と齊藤総督
 7. 27 日蓮尼港追悼会
 7. 28 金剛山巡礼記(8) 摩訶衍庵より 内
 霧在嶺へ 都路華香
 7. 29 金剛山巡礼記(9) 楡岾寺及び 其附
 近 都路華香
 7. 30 金剛山巡礼記10 朝鮮仏教の権輿 都
 路華香
 7. 30 浄宗朝鮮新計画蹉跌か 行違ひの寄付
 金百万円
 8. 1 金剛山巡礼記11 青龍峯を右に 開殘
 嶺へ 都路華香
 8. 3 金剛山巡礼記12 新金剛の風光 都路
 華香
 8. 3 巴里語翻譯梵本 をエリオット博士か
 ら光壽会へ
 8. 4 浄宗朝鮮開教の整理期来る 当局の大
 体方針
 8. 5 尼港の巷より (一) 小林雨峰
 8. 6 尼港の巷より (二) 小林雨峰
 8. 6 朝鮮神道布教 各派活躍せん
 8. 7 尼港の巷より (三) 小林雨峰
 8. 7 印度仏教の志士 日本人は教育宗教に
 無関心 なりとて日置貫主へ慰ふ
 8. 8 光瑞氏の南洋開拓 大阪実業家連によっ
 て 一千萬圓の投資か
 8. 8 朝鮮布教は先づ内地人から 覚醒しつ
 つある鮮人 中島観秀氏談
 8. 10 戦跡に佇みて (一) 小林雨峰
 8. 11 戦跡に佇みて (二) 小林雨峰
 8. 12 戦跡に佇みて (三) 小林雨峰
 8. 13 戦跡に佇みて (四) 小林雨峰
 8. 15 尼港事件に毒されし 朝鮮学生より
 8. 21 函館に帰るまで (上) 小林雨峰
 8. 22 函館に帰るまで (中) 小林雨峰
 8. 24 日本基青西伯利慰問費
 8. 25 函館に帰るまで (下) 小林雨峰
 9. 3 満洲開教の一艇案 (上) 文学博士
 椎尾辨匡
 9. 4 満洲開教の一艇案 (下) 文学博士
 椎尾辨匡
 9. 8 朝鮮と基督教
 9. 14 河口慧海氏の 西蔵語の研究所と近業
 9. 14 河口慧海氏の 西蔵語の研究所と近業
 9. 19 総督府大谷派の為に 鮮人教化費を計
 上す
 9. 19 支那仏教の一面
 9. 23 世界日曜学校大会に 支那、朝鮮側の
 不参
 9. 23 最後を飾る 尼港追弔会 西本願寺主
 催
 9. 25 北京の名僧の朝 (一) 賀川豊彦
 9. 26 北京の名僧の朝 (二) 賀川豊彦
 9. 28 北京の名僧の朝 (三) 賀川豊彦
 9. 29 北京の名僧の朝 (四) 賀川豊彦
 9. 29 支那、西伯利亞の 東西真宗教勢
 10. 3 注目すべき朝鮮在住の 米宣教師
 10. 6 西本願寺の新予算に上る 海外布教局
 と 社会課の新設
 10. 6 京阪在住鮮人六万の教化 之が衝に当
 らんとする 朝鮮駐在開教使
 10. 7 妙心派の計画せる 朝鮮卅本山帰属失
 敗 海印寺李晦光の暗中飛躍

1920. 10. 8 台湾の土人宗教に就て 仏教家の猛省を促す 台湾総督府宗教課長 丸井圭三郎氏談
10. 10 東方文化研究の宝庫 大谷大学の有となる ヘルンレー蔵書一千冊
10. 10 梵蔵出版事業
10. 12 印度美術研究家歓迎会
10. 13 大派支那開教の 廓清氣運
10. 14 浄宗朝鮮社会課
10. 14 同文書院と宗派
10. 16 中外即事 サハラ留学
10. 16 南洋カラバン島に 大派布教所設置
10. 16 珈琲と香水 大谷光瑞氏の事業
10. 16 私生活費に 排日材料競売
10. 17 現代支那と 孔子教の運命
10. 17 西伯利亞人の宗教性 基督を捨てて後の寂しさに 日本人の宗教に興味を抱く
10. 19 米人が印度へ 梵語研究に
10. 22 河口氏土蔵の中で 西藏大蔵経が かう騒ぐ
10. 24 印度仏教再興の曙光 ダルマパーラ氏の発願
10. 27 全鮮内地人会
10. 28 益々迷宮に入れる 西藏蔵経問題再煇 寧ろ青木側の訴訟を歓迎すと 河口慧海氏は言ふ
10. 28 高麗版の復刻蔵経発見 大蔵会に出陳さるべき珍品二種
10. 28 排日と基督教
10. 29 河崎顕了氏の 支那教勢視察
11. 4 救ひを求むる間島人 米宣教師跳躍
11. 9 印度大菩提会々堂開院式 外務省を経て日本仏教へ参列交渉
11. 9 某国協会堂を 秘密結社の本部に 朝鮮の排日思想の宣伝
11. 16 大派台湾別院新設
11. 17 米国は盛んに 宣教師を東洋に
11. 18 印度文化講演会
11. 18 台湾布教感想 天台宗教学部長 長沢徳玄
11. 20 鮮人教化事業 と基督教の活動
11. 20 南清開教事情 大派開教使 谷了悟氏談
11. 21 朝鮮の文化政策と宗教 名のみの各宗派の開教
11. 21 印度吉祥寺へ 日本蔵経の寄贈 仏教連合会より
11. 23 天台開教発展策
11. 27 サガレン州視察講演会
12. 1 朝鮮に雄飛する真言宗 高野派の予算計上
12. 2 内地鮮人教化 東洋観念の鼓吹
12. 3 印度吉祥法王寺へ 浄宗より祝辞
12. 12 鮮人教化のため 和光教園創立
12. 14 海外布教の門出を送る (上) 大谷派 本願寺教学部 武内了温
12. 14 基督教徒の朝鮮独立論 排日思想の根底深し
12. 14 東亜同文書院 無我会創立
12. 15 「日鮮仏教新聞」発刊
12. 17 西本願寺の 南洋開教の近状
12. 18 海外布教の門出を送る (中) 大谷派 本願寺教学部 武内了温
12. 21 日蒙仏徒提携難 日蒙協会の打撃
12. 22 対鮮教化運動の障害 妙心寺の野心
12. 24 朝鮮に野心なし 妙心寺執事長弁明
12. 24 日本の富豪に救はれた 巴利語仏典出版
12. 24 大派上海別院解決 多年の懸案悉く調停
12. 25 鮮僧教養方針
1921. 1. 6 仏跡行脚の 印象と希望 (上) 融通念仏宗布教師 杉崎大愚
1. 7 仏跡行脚の 印象と希望 (下) 融通念仏宗布教師 杉崎大愚
1. 9 満州仏教救済談
1. 12 仏教朝鮮協会 本年度の計画
1. 12 仏教朝鮮協会総会
1. 13 洞宗朝鮮布教総監辞任
1. 13 同文書院無我会
1. 14 朝鮮に大学
1. 15 印度自治と両教の離合 理想に趨る印度人の病弊
1. 16 殖民開拓先駆 朝鮮教化の問題
1. 19 支那仏教の 現状を視て 東京帝大講師 常磐大定氏談
1. 21 回教徒の亜細亞同盟 日本指導の下に 民族結合
1. 21 京城の仏教会館
1. 26 朝鮮布教総監 中村頼宗氏に決定
1. 27 西伯利ブリア ート族の宗教 東京帝大講師 鳥居龍蔵氏談
1. 27 総督府の 活動写真宣伝
2. 18 尼僧奮闘して 朝鮮に教会所設置 更に婦人教化
2. 18 黄檗禪堂の緊張 鮮人の叢参夜参
2. 18 河口慧海氏僧籍返上
2. 20 新興回教徒 大亜細亞主義を齎す
2. 27 対鮮問題と仏教家 今泉隆宣
3. 1 米国牧師の排斥 全鮮から放逐
3. 1 僧籍を脱して 仏教宣揚会 を起した 河口氏
3. 2 スマトラ教況
3. 3 朝鮮に於ける大谷派の 社会事業と打合せ 総督府や道、府庁から出席
3. 9 朝鮮教化と妙心派
3. 9 支那見学に行く人
3. 13 支那史跡踏査 常磐博士の招来品
3. 16 天台宗布教を 朝鮮から懇望
3. 17 尼港惨虐の一周忌
3. 27 洞宗朝鮮別院近況

1921. 3. 30 奉天仏教会堂計画
4. 1 大乘仏教研究のため 伝教崇拜の独人登山
4. 3 扶桑教怪聞 朝鮮教化の利用か
4. 8 パレスチンに於ける 人種及宗教の衝突(上)
4. 9 パレスチンに於ける 人種及宗教の衝突(下)
4. 10 北京大学と基督教
4. 13 仏教主義の 在鮮人観光団
4. 14 いよいよ陣容を整へた 東洋仏教連盟教会 東洋各国の名士を賛助として
4. 17 支那長春に 浄宗公会堂
4. 17 浄宗開教発展
4. 20 鮮満宗教視察
4. 21 朝鮮布教管理変更認可
4. 22 不穩の間島へ 開教使派遣
4. 23 朝鮮文化展覧会
4. 24 大派の台湾布教
4. 24 真言の朝鮮入り 六十日間の巡教視察
4. 24 マニラの本願寺 公認さる
4. 28 日鮮融和を図る うら若き 鮮人神学生
4. 29 朝鮮仏教学生教養難 他の留学生から圧迫で
4. 30 大連と浦塩の 幼稚園近況
5. 4 大派海外布教実績
5. 6 印度と朝鮮(上) 岡教達
5. 7 印度と朝鮮(下) 岡教達
5. 7 裏南洋の宗教近状 西班牙から二十名の宣教師来る
5. 13 朝鮮基督教信徒数
5. 13 入蒙僧侶帰る
5. 19 制定せられた 樺太社寺規則
5. 20 真言宗代表の 朝鮮巡教
5. 22 上海に於ける 光瑞の邸宅
5. 22 独僧、暹羅入国を 拒まれて再び来朝 渡辺ドクトルに身を寄す
5. 24 支那仏教の 美術展覧会
5. 28 統計表上の 朝鮮の宗派別
6. 1 朝鮮文化講演
6. 8 谷大の満鮮旅行
6. 14 満洲蘇家屯に 仏教公開堂
6. 15 支那朝鮮の 宗教視察
6. 16 仏書を以て 日支親善を計る
6. 16 支那で振はぬ仏教 カトリックの大勢力と 布教権獲得の緊要
6. 22 在日朝鮮仏教 青年会の伝道
6. 24 支那仏教の現状(上) を論じて宗教の本旨に及ぶ 京大教授法学博士 仁保亀松
6. 24 谷大の満鮮視察
6. 25 支那仏教の現状(下) を論じて宗教の本旨に及ぶ 京大教授法学博士 仁保亀松
7. 2 本派支那開教現勢
7. 5 朝鮮の英字新聞に現れた 向上会館の新運動
7. 17 日本を撞るる 印度仏教徒
7. 19 朝鮮との親和
7. 29 上海所見(上) 河崎顕了
7. 30 上海所見(下) 河崎顕了
7. 30 アタール氏追悼講演
8. 4 蒙古協会設立
8. 6 支那歴遊談
8. 9 奉天城内見聞(上) 和田轟一
8. 10 奉天城内見聞(中) 和田轟一
8. 11 奉天城内見聞(下) 和田轟一
8. 13 印度趣味の喚起 関精拙氏の国際仏教観
8. 13 常磐博士支那行 啓明会から六千円提供
8. 14 朝鮮に於ける教化事業現象(一) 半島を圧する基督教の勢力
8. 16 朝鮮に於ける教化事業現象(二) 半島を圧する基督教の勢力
8. 16 独立活躍期の 朝鮮寺院
8. 17 朝鮮に於ける教化事業現象(三) 半島を圧する基督教の勢力
8. 18 上海より
8. 19 大連に専門道場
8. 20 浄土宗の開宗記念に 開教使連盟の創立
8. 23 支那全土に於ける 英米宣教師の熱心 =支那婦客談=
8. 23 北清遊記(一) 河崎顕了
8. 24 北清遊記(二) 河崎顕了
8. 25 タゴールの 文化連盟企図 独逸学者と接近
8. 25 東洋大学の朝鮮分校案 朝鮮朝野の賛成で近く実現
8. 25 北清遊記(三) 河崎顕了
8. 26 上海より
8. 26 北清遊記(四) 河崎顕了
8. 30 北清遊記(第二)(一) 河崎顕了
8. 31 満鮮巡り 理学博士 近重物庵
8. 31 北清遊記(第二)(二) 河崎顕了
8. 31 北清遊記(第三) 河崎顕了
9. 2 北清遊記(第三) 河崎顕了
9. 3 北清遊記(第三) 河崎顕了
9. 4 北清遊記(第四) 河崎顕了
9. 6 朝鮮各宗の 至徳会運動
9. 7 北清遊記(第四) 河崎顕了
9. 10 北清遊記(第五) 河崎顕了
9. 11 米春北京で 基督教青年大会
9. 13 上海から(一) 眞下飛泉
9. 13 常磐博士の第二回 支那仏跡調査
9. 13 北清遊記(第五) 河崎顕了
9. 14 仏教国際連盟の鍵 支那の仏教研究を高めよ 日本仏教徒奮起の好時期
9. 14 上海から(二) 眞下飛泉
9. 15 山東省を中心とする 支那文化の研究

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 所 歴下書院の開設
1921. 9. 15 上海から (三) 眞下飛泉
9. 15 北清遊記 (第五) 河崎頼と
9. 16 上海から (四) 眞下飛泉
9. 16 朝鮮調査報告
9. 17 上海から (五) 眞下飛泉
9. 17 大邱への車中から (第一信) - (仏専満鮮旅行団だより) - 文学士 前田 聰瑞
9. 18 妙心寺派の 台湾教化現状
9. 21 支那印度の文化啓発と 我国民の無自覚
9. 21 中国仏教徒社会事業大会 来十月岡山市に開かれん
9. 21 鮮人教員が 谷大へ入学 教育から教化への生涯
9. 22 仏教学者を叫合して 日支親善の交換教授 河崎頼と氏の奔走
9. 22 浄宗印度留学生
9. 22 慶州の月 (上) (第二信) - (仏専満鮮旅行団だより) - 文学士 前田 聰瑞
9. 22 日宗朝鮮布教調査
9. 22 朝鮮宗教の实情 吉川属努力の結晶
9. 23 日支親善と仏教
9. 28 台湾の天台宗
9. 30 中国仏教徒社会事業 大会に就て
10. 1 慶州の月 (下) (第二信) - (仏専満鮮旅行団だより) - 文学士 前田 聰瑞
10. 5 間島の宗教と 鮮人思想の暗流
10. 5 台湾住民観光団
10. 5 朝鮮民族美術館
10. 6 仏骨に附随した 暹羅奇附の大森林 授受は未決立消の姿 中村日暹寺貫首 渡暹
10. 13 南洋婦談 光瑞氏の事業
10. 14 浄宗朝鮮社会課
10. 14 同文書院と宗派
10. 15 詩人タゴールに歌はれたる 新印度建設者 ガンデイの人格
10. 15 浄宗支那開教便り
10. 15 台湾の太子奉賛会
10. 19 貧弱なる 鮮満寺院
10. 25 蕃地に身を投じて 生蕃人に伝道 西本願寺開教使
10. 29 戦死者の霊を弔ひ 満鮮西伯利を巡錫 禅僧の単身旅行
11. 2 浄宗開教連盟協議 五十万円以上の伝道 会社を組織するの議
11. 2 天津別院法要
11. 5 最近に於ける 支那の変局 畢竟政争にすぎない から無干渉が大切だ
11. 6 最近に於ける 支那の変局 畢竟政争にすぎない から無干渉が大切だ
11. 10 光瑞氏の逆転
11. 11 光瑞氏の言明
11. 11 支那の本願寺別院 独立の真相
11. 11 タゴール翁の 日本学生優遇
11. 16 開教連盟成立
11. 25 漸く成立を告げた 浄宗開教連盟
11. 30 浄宗開教連盟役員
12. 8 暹羅王室の寄贈書籍
12. 9 天台台湾布教拡張
12. 9 支那行脚の 日記から (上) 村上素道
12. 10 支那行脚の 日記から (下) 村上素道
12. 14 对支国民 有志大会
12. 16 生蕃人の 埋葬法改革
12. 24 暹羅版阿含の翻訳
12. 25 在鮮曹洞宗教団が 百万円の財団を組織し 総監と宗務とから独立を企つ
12. 27 大連会議に仏教徒 は何故目を灑がぬか 支那布教権問題に 失敗して居る日本仏教徒
12. 28 暹羅皇帝の御結婚と 日本仏教徒の表慶 中村日暹寺貫主渡暹
12. 28 支那行脚日記 (上) 村上素道
1922. 1. 8 支那行脚日記 (中) 村上素道
1. 12 東洋基督教徒連盟成らん 世界の宗教界に東洋の勢力扶植
1. 15 裏南洋の宗教 日本僧は小林某
1. 21 中等教育に於て支那 語教授の必要を論ず (一) 元同志社教授 牧野信
1. 22 中等教育に於て支那 語教授の必要を論ず (二) 元同志社教授 牧野信
1. 24 中等教育に於て支那 語教授の必要を論ず (三) 元同志社教授 牧野信
1. 24 朝鮮職業婦人救済会 金朴春婦人の義挙
1. 25 中等教育に於て支那 語教授の必要を論ず (四) 元同志社教授 牧野信
1. 25 支那基督教徒から 日本基督教徒招待 東洋基督教連盟促進
1. 25 来年北京郊外で開かるる 世界基督教青年大会
1. 26 大亜細亜主義と回々教 サラセン民族の将来
1. 26 我国基督教徒の 東洋的自覚
1. 27 内外伝道協会計画 本山講の剰余で
1. 31 基教東洋連盟は尚早 支那からの招待は考へもの
2. 3 シンガポールより
2. 4 五ヶ国語対照の 仏教辞典の発刊 米人牧師多年辛苦の結晶
2. 18 大派朝鮮教化の拡大
2. 28 我国基督教徒の議しつつある 東洋基督教連盟と 国際的大旅館建設
2. 28 印度より 木村龍克氏近信
3. 9 朝鮮に幼稚園を 奥村敏子女史の奔走
3. 17 支那に於ける曹洞宗著名寺院 宗教的

1922. 3. 24 気分の復興を望む 常磐文学博士談
支那の世界基教 学生同盟大会 吉野、賀川両氏出席
3. 26 基教学生世界大会に反対し 北京で非宗教同盟
3. 30 在東京朝鮮学生 宗教運動
3. 31 北京の基教学生大会と 反基督教運動熾烈
4. 2 鮮人にかかる 不法な圧迫
4. 7 世界基督教学生大会 いよいよ四日から開かれた
4. 8 支那全土に蔓り行く 宗教排斥の大同盟
4. 9 民衆の諒解は如何 民族の友情に基調した 金朴春氏夫妻の事業
4. 9 支那仏教の新旧運動 注目すべき新仏教の大勢力
4. 13 画家連の支那行
4. 16 印度より(1) 来馬琢道
4. 20 印度より(2) 来馬琢道
4. 21 印度より(3) 来馬琢道
4. 23 朝鮮教化と各宗 水野総監との会同
4. 23 印度より(4) 来馬琢道
4. 25 印度より(5) 来馬琢道
4. 26 印度より(6) 来馬琢道
4. 28 印度より(7) 来馬琢道
4. 29 支那反基運動に現はれた 支那人宗教心理
5. 2 朝鮮人労働共済会長 金公海の除名は正当か不当か(上) 無名の鮮人
5. 2 李王殿下の御帰鮮と 大型教会
5. 3 朝鮮人労働共済会長 金公海の除名は正当か不当か(中) 無名の鮮人
5. 3 内鮮融和のため 鮮人を女中に
5. 4 既成宗教を排斥した 支那労働大会への提案
5. 4 朝鮮人労働共済会長 金公海の除名は正当か不当か(下) 無名の鮮人
5. 7 朝鮮より
5. 11 在鮮有志の奔走で 仏教振興会起る
5. 13 朝鮮より
5. 13 朝鮮漫筆
5. 13 印度より(8) 来馬琢道
5. 14 支那に於ける米国の 精神的領域
5. 17 鮮人のために泣く 柳宗悦氏 第一印象=鬼劍生
5. 17 警視庁内鮮係員と 仏教徒の対話
5. 18 北鮮宗教分布状態
5. 18 朝鮮より
5. 18 間島の仏教主義運動
5. 18 朝鮮片々
5. 19 朝鮮片々
5. 20 朝鮮片々
5. 23 東洋の新研究 常磐博士の熱心
5. 23 朝鮮片々
5. 24 極東大学学生入浴
5. 25 鮮人労働慰安会
5. 26 内鮮人の取締
5. 26 印度より(9) 来馬琢道
5. 30 支那より帰って
6. 18 日印の国志集って アタールを弔ふ
6. 20 「朝鮮文化の研究」出版
6. 20 秋野曹大前学長 支那巡錫
6. 22 錫蘭島の日(一) 園頼三
6. 24 錫蘭島の日(二) 園頼三
6. 24 朝鮮より
6. 25 錫蘭島の日(三) 園頼三
6. 27 錫蘭島の日(四) 園頼三
6. 28 錫蘭島の日(五) 園頼三
6. 29 錫蘭島の日(六) 園頼三
6. 29 朝鮮教況
6. 29 朝鮮片々
6. 30 朝鮮仏教協調するか 三十本山住持会議と学務局長の調停
7. 2 朝鮮より
7. 4 朝鮮教況
7. 4 朝鮮片々
7. 5 朝鮮仏教の 連合布教
7. 5 朝鮮教況
7. 9 朝鮮より
7. 9 朝鮮片々
7. 11 朝鮮の二基中 学の休学騒ぎ 培材校と崇實中学 紛糾混乱其極に達す
7. 11 朝鮮本山の計画
7. 11 間島龍井より 上野生
7. 13 朝鮮より
7. 15 潜流の如く蔓延しつつある 支那の非宗教運動
7. 19 朝鮮の三十本山連合に 反対運動が起る
7. 19 朝鮮片々
7. 21 馬半島に於ける 最初法華道場
7. 21 落慶式を挙げた 上海本因寺別院
7. 21 朝鮮片々
7. 21 満州より
7. 22 朝鮮の仏教問題 朝鮮総督府学務局長談
7. 23 政務総監の 宣教師招待
7. 23 朝鮮片々
7. 25 朝鮮に来てだんまり 込んだ鈴木文治氏
7. 25 營口より
7. 26 朝鮮人の覚醒 迷信打破の申合せ
7. 26 朝鮮より
7. 26 朝鮮片々
7. 27 朝鮮の基督教(上) 南山生
7. 27 印度人ジャーナリスト氏 大谷大学訪問 博士号を得たいため
7. 28 朝鮮の基督教(中) 南山生
7. 28 朝鮮より
7. 29 朝鮮の基督教(下) 南山生
7. 30 一方面委員の壮挙 鮮人問題の研究

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1922. 8. 2 支那密教復興運動 有力なる十一面会
の人々と 日本真言宗の扶助
8. 10 支那に於ける日 本の政策を論じて
宗教問題に及ぶ 一 支那牛荘にて
寺西恵然
8. 10 朝鮮より
8. 10 朝鮮片々
8. 13 支那に於ける日 本の政策を論じて
宗教問題に及ぶ 二 支那牛荘にて
寺西恵然
8. 11 朝鮮より
8. 11 京城より
8. 13 支那に於ける日 本の政策を論じて
宗教問題に及ぶ 三 支那牛荘にて
寺西恵然
8. 13 有吉朝鮮政務総監の 信仰に対する感
懐 一 基督教徒歓迎会席上—
8. 13 朝鮮の前途 平壤 高橋鷹蔵
8. 15 渡鮮した 宣教師の一人
8. 16 高野に於ける 支那僧二人
8. 19 漸く落成せる 漢口本願寺
8. 23 奉天より
8. 25 朝鮮仏教三十本山の経営の 東光高等
普通学校認可
8. 25 朝鮮片々
8. 26 朝鮮基督教学生連盟 学校攻撃をなすべ
く結束
8. 29 朝鮮宗教の合同 仏教を除いた基督教其
他
8. 29 樺太本派教況
8. 30 群居勢を有つた 鮮人とその将来
8. 31 極東の宗教的 確執に就て
9. 2 海印寺僧侶告訴さる
9. 9 暹羅帝御来朝中止? 中村日暹寺貫主
渡邉せん
9. 9 朝鮮より
9. 13 朝鮮統治を罵倒す メソヂスト宣教師
9. 13 秋野孝道氏の 支那祖跡順礼
9. 16 開教所感
9. 19 朝鮮の宗教界
9. 20 朝鮮片々
9. 24 日華仏教会
9. 26 開教連盟成立
9. 27 近東戦乱と 宗教的戦争 回教対基
教の反目
9. 27 朝鮮より
9. 27 朝鮮片々
9. 29 支那仏跡巡礼 常磐大定博士の出発
9. 30 支那仏跡巡礼 (続) 常磐大定博士の
出発
10. 4 鎮南学林廃校
10. 5 全東半球に蟄居潜在せる 回教徒の奮
起か
10. 6 剣とコーランの歴史 回教徒の奮起か
(二)
10. 7 土其耳帝国の盛衰 回教徒の奮起か
(三)
10. 7 大派海外布教近況
10. 8 全教徒連盟の提唱 回教徒の奮起か
(四)
10. 10 朝鮮人教役者の養成機関 京城神学院
10. 10 樺太の記念伝道
10. 13 刻下の情勢に鑑み 大いに回教を紹介
せん と志士田中逸平氏語る
10. 13 仏連支那視察団
10. 14 寸刻も放っておけぬ 鮮人失業者問題
仏連評議員会の決議に囑望 金公海
氏談
10. 17 支那人と宗教
10. 19 支那史跡研究に關して 一問題おこし
つつある 田中逸平氏と常磐大定博士
10. 19 支那に蔓りだした 迷信結社「紅燈教」
10. 26 支那祖跡の順拝 高橋竹述
10. 27 境野黄洋氏の 朝鮮伝道
10. 28 一宣教師と 土其耳民
10. 31 朝鮮より
11. 2 朝鮮片々
11. 8 朝鮮より
11. 9 支那史跡研究で問題中の 田中氏と常
磐博士
11. 9 仏典の西藏訳 寺本教授等の偉業
11. 10 支那にも回教徒の 覚醒運動起る
11. 11 天鐘迂人は 支那ゴロか
11. 15 朝鮮人協助会 発会式と慰安会
11. 16 朝鮮問題を如 何にすべきか
11. 28 印度観光の僧侶 と実業家
11. 30 著者寺本婉雅氏に「西藏語文法」の
絶版を要求す (一) 河口慧海氏述
12. 1 上海から続 蔵経の刊行
12. 3 殖民政策と宗教 誤られた宗教家の態
度 京大教授 山本博士述
12. 3 印度革命運動は決して宗 教に避難し
たのでは無い 早大教授 武田豊四郎
氏談
12. 3 仏教朝鮮協会と 有吉総監の接見
12. 5 鮮人労働組合成る
12. 9 鮮人と官憲
12. 10 大阪仏教和衷会が 鮮語学校を開設す
る
12. 13 朝鮮より
12. 15 朝鮮片々
12. 16 朝鮮片々
12. 20 印度観光団
12. 21 浦塩に於ける醜業婦の解放 を論じて
婦人有志や婦人団体及び 全国宗教家
の奮起を熱望す (上) 高島米峰氏述
12. 22 浦塩に於ける醜業婦の解放 を論じて
婦人有志や婦人団体及び 全国宗教家
の奮起を熱望す (下) 高島米峰氏述
12. 23 国際外交の舞台裏 羅馬使節交換の真
目的は 南洋統治のためか
12. 23 亞細亞の諸宗教と信徒

1922. 12. 26 印度視察団旅程
 12. 28 常磐博士の帰朝
1923. 1. 1 羅馬法王庁との公使交換は 絶対に対外交関係のみ - 但し旧教徒の勢力の増大を認めて - (外務当局談) 南洋統治上の関係
 1. 12 浦塩赤色政府の 財産税と所得税
 1. 17 大谷光瑞氏の 御影堂参拝と 上海観光団計画
 1. 18 支那の律宗運動 楊州に鑑真大和上の建碑
 1. 19 印度へ 塩入亮忠
 1. 20 朝鮮仏教連合会議
 1. 21 印度へ 塩入亮忠
 1. 21 朝鮮仏教の覚醒(上) 三十本山連合中央教務院 設立教育布教の実現
 1. 21 本願寺海外布教
 1. 23 朝鮮仏教の覚醒(下) 三十本山連合中央教務院 設立教育布教の実現
 1. 24 印度行の 船中から
 1. 26 太田覚眠氏より
 1. 30 一日も棄ておけぬ鮮人問題 (志士仁人の蹴起を促す)
 1. 30 米国の旧教徒団体 上海方面巡礼 横浜に寄泊す
 2. 6 使節が交換されるれば 朝鮮が第二の愛蘭 松岡代議士談
 2. 8 鮮人愛重の途
 2. 9 内鮮相愛に関 する私議一二
 2. 10 回教宣伝者 田中逸平氏
 2. 10 敗露避難民の為に 学校と礼拝堂を建つ 朝鮮仏教徒の義挙
 2. 13 朝鮮より(上)
 2. 13 印度への旅 (第一信 香港への船中より) 塩入亮忠
 2. 14 朝鮮より(中)
 2. 15 印度への旅 (第一信 新嘉波への船中より) 塩入亮忠
 2. 16 朝鮮より(下)
 2. 16 光寿会主催 上海観光団
 2. 17 印度への旅 (第一信 コロンボへの船中より) 塩入亮忠
 2. 27 印度への旅 (第三信 コロンボへの船中より) 塩入亮忠
 2. 27 印度留学生の来信
 2. 28 印度への旅 (第三信 コロンボへの船中より) 塩入亮忠
 3. 2 彼南より(上) 森裕遠
 3. 3 彼南より(下) 森裕遠
 3. 6 新世界の建設を 宗教的団結を叫ぶ プラタプ氏本日の獅子吼
 3. 6 プラタプ氏 本社を来訪
 3. 7 両本願寺を参観した プラタプ氏の感想
 3. 8 意外な盛会を極めた プ氏の大講演会 『新世界建設と宗教的団結』
3. 8 プラタプ氏と 西藏入国
 3. 13 鮮人囚徒と宗教
 3. 13 朝鮮史の編纂と 是に対する反感
 3. 14 京城基督者が 露国避難民慰問
 3. 16 岐阜県下にて 鮮人教育
 3. 16 西藏行の志望
 3. 17 鮮人と宿泊所 (差別は悲し)
 3. 17 神を如実に体 験する印度人 スンダール シングの紹介
 3. 18 新嘉坡まで (水葬の説経) 森祐遠 =第三信=
 3. 22 朝鮮宗教法案
 3. 22 朝鮮より
 3. 25 日支外交と 支那基督教徒の運動
 3. 28 支那布教権を獲得せよ(上) 鷺尾順敬
 3. 29 支那布教権を獲得せよ(中) 鷺尾順敬
 3. 30 支那布教権を獲得せよ(下) 鷺尾順敬
 4. 1 日本を慕ふ 印度人
 4. 3 海城湯崗娘廟の復興 日支宗教の堅き握手
 4. 10 全人類の為に 日本仏教徒に告ぐ =全宗教の提携運動=(一) プラタプ
 4. 12 全人類の為に 日本仏教徒に告ぐ =全宗教の提携運動=(二) プラタプ
 4. 12 支那に手を張る 基教と其学校
 4. 13 朝鮮に於ける内地人の 基教伝道は絶望だ
 4. 14 全人類の為に 日本仏教徒に告ぐ =全宗教の提携運動=(三) プラタプ
 4. 14 大阪基督教会の 鮮人招待会
 4. 15 印度の美術(一) 文学博士 松本文三郎氏述
 4. 22 鮮人基督者の代表と 京都基教々役者と会合
 4. 24 印度の美術(二) 文学博士 松本文三郎氏述
 4. 27 鮮人を愛せよ
 4. 27 印度の美術(三) 文学博士 松本文三郎氏述
 4. 28 印度の美術(四) 文学博士 松本文三郎氏述
 4. 28 朝鮮人の魂を操縦する 組合協会の暴戻ぶり
 4. 29 支那文化の過程から見た 国家としての支那(一) 丹羽正義
 5. 2 支那文化の過程から見た 国家としての支那(二) 丹羽正義
 5. 3 朝鮮学生の曉鐘 南波登発著
 5. 4 支那文化の過程から見た 国家としての支那(三) 丹羽正義

1923. 5. 4 上海に献金云々は 事実無根 前田執行談
5. 4 支那の各方面から 注目をされてゐる 仏連の 支那観光団
5. 5 支那文化の過程から見た 国家としての 支那(四) 丹羽正義
5. 5 鮮人宿舎建設 大阪府社会課で
5. 6 支那文化の過程から見た 国家としての 支那(五) 丹羽正義
5. 8 支那文化の過程から見た 国家としての 支那(六) 丹羽正義
5. 9 日支仏教提携 を計る支那漢 口仏教青年会
- 5.10 高野山の 鮮人仏教会
- 5.11 新刊紹介 印度仏教文学史 エム・ウインテルニッツ教授著 文学士 中野義照 大仏衛 共訳 文学博士 高楠順次郎校注
- 5.15 労農政策の徹底した シベリアの宗教事情 某帰朝者談
- 5.15 緬甸将来釈 尊像奉安式
- 5.18 海外仏教宣伝協会の設立(上) 高楠順次郎
- 5.19 海外仏教宣伝協会の設立(下) 高楠順次郎
- 5.22 「鮮人合宿所 は無用である」
- 5.25 中京鮮人相愛会
- 5.27 支那回教徒の憤激
6. 2 支那人の宗教 文学博士 谷本富 一
6. 3 支那人の宗教 文学博士 谷本富 二
6. 5 支那人の宗教 文学博士 谷本富 三
6. 5 鮮人に関する 不注意な論議 同化や融和の語は 既に反感を招く
6. 8 南洋に於ける 旧教の勢力 甚だ振はない現状
- 6.12 満鮮支那観光 仏教連合会の準備
- 6.13 広東宗教事情 外務省発表
- 6.15 朝鮮宗教界の紛乱 政務総監の調停を一蹴した 基督教の米鮮宣教師の紛擾 法廷に醜態を曝け出した朝鮮仏教
- 6.16 支那人の宗教 文学博士 谷本富 四
- 6.17 支那人の宗教 文学博士 谷本富 五
- 6.19 支那人の宗教 文学博士 谷本富 六
- 6.19 朝鮮基督教会記念式
- 6.20 対立的熟語 の除かれる迄 似而非なる 社会事業家 鮮人に対する新聞記事
- 6.20 支那内学院設立計画 僧侶以外の居士の熱心
- 6.21 西藏仏教の現状と 招来せる大蔵経 多田等観氏帰来談
- 6.21 殖民地伝道と 日本聖公会
- 6.21 仏教朝鮮協会 授産所開設
- 6.22 覚醒の烽火を揚げんとする 世界仏教徒の連盟 支那衷心仏教徒の飛躍
- 6.23 朝鮮会衆教会 資金募集難
- 6.27 景教碑と切支丹墓碑(1) 文学博士 浜田青陵
- 6.27 布教権問題から見た支那の 宗教事情 一 前司法大臣 の仏教研究
- 6.28 景教碑と切支丹墓碑(2) 文学博士 浜田青陵
- 6.28 布教権問題から見た支那の 宗教事情 二 布教権問題 削除の裏面
- 6.29 景教碑と切支丹墓碑(3) 文学博士 浜田青陵
- 6.29 サイパン島より
- 6.29 布教権問題から見た支那の 宗教事情 三 支那僧多白痴
- 6.30 東方仏徒の反省
- 6.30 景教碑と切支丹墓碑(4) 文学博士 浜田青陵
- 6.30 布教権問題から見た支那の 宗教事情 四 ローマンカソ リックの教民
7. 1 景教碑と切支丹墓碑(5) 文学博士 浜田青陵
7. 5 龍大柔道部の 満鮮遠征
7. 8 故能海寛君 遭難の真相 支那雲南省 クーソン族の惨殺 寺本婉雅
- 7.10 増上寺新法主 朝鮮の教化を論ず
- 7.10 支那廬山の世界仏教徒講習会と日本 仏教連合会 代表者派遣に決す
- 7.10 故能海寛君 遭難の真相 支那雲南省 クーソン族の惨殺 寺本婉雅
- 7.10 清楚であった 内鮮協会発式
- 7.11 故能海寛君 遭難の真相 支那雲南省 クーソン族の惨殺 寺本婉雅
- 7.11 文部省の補助で 支那を視察
- 7.12 鮮人問題の前途
- 7.12 龍谷大学の 支那研究生決定
- 7.13 大阪基督と 鮮人問題
- 7.14 大阪の鮮人児童 教育調査
- 7.17 玩具と民族精神=信仰(上) 文学博士 黒田源治述
- 7.18 玩具と民族精神=信仰(下) 文学博士 黒田源治述
- 7.18 仏教海外伝道協議
- 7.20 日支仏教交歓計画 人選を注意せよ
- 7.20 仏立講の 海外伝道計画
- 7.21 大阪の鮮童教育調査
- 7.22 朝鮮基督教界の二大派に 合同の輿論濃厚となる
- 7.22 在阪鮮人教育調査
- 7.24 世界仏教講習会には 在支僧が出席
- 7.24 樺太本派教況
- 7.27 鮮童共学制 速かに断行せよ
- 7.27 釜山の共生会
- 7.27 朝鮮人は 何故渡来するか 何故怠惰性か 何故無智なのか 生活を共にせよ -(上)-
- 7.28 朝鮮人は 何故渡来するか 何故怠惰性か 何故無智なのか 生活を共にせよ

- よ -(中)-
1923. 7. 29 朝鮮人は 何故渡来するか 何故怠惰性か 何故無智なのか 生活を共にせよ -(下)-
8. 1 日本に於ける大陸系統の芸術 石仏龕の研究発見(上) 宗教大学教授 小野玄妙氏述
8. 2 日本に於ける大陸系統の芸術 石仏龕の研究発見(中) 宗教大学教授 小野玄妙氏述
8. 3 日本に於ける大陸系統の芸術 石仏龕の研究発見(下) 宗教大学教授 小野玄妙氏述
8. 9 満鮮の旅(一) 朝倉暁瑞 大連入り
8. 10 満鮮の旅(二) 朝倉暁瑞 初講演
8. 11 朝鮮青年演芸会
8. 11 長谷川真徹氏の 鮮人救済計画
8. 11 満鮮の旅(三) 朝倉暁瑞 学校参観 家庭訪問
8. 12 満鮮の旅(四) 朝倉暁瑞 撫順、奉天、安東入り
8. 14 満鮮の旅(五) 朝倉暁瑞
8. 15 満鮮の旅(六) 朝倉暁瑞
8. 16 支那全土に寺院を 建立し盡くさんと回教徒が激しい運動
8. 16 満鮮の旅(七) 朝倉暁瑞 してやらる
8. 17 浦塩の太田覚眠氏 労農露国に於ける 信教自由獲得を叫ぶ
8. 19 外延的に勢力を持った 満鮮の矯風会 (事業の前途は遠慮)
8. 23 日支仏教家の接近(上) (仏連渡支団に寄す) 北京にて 加地哲定
8. 23 朝鮮で流行する 仏前結婚式
8. 24 日支仏教家の接近(中) (仏連渡支団に寄す) 北京にて 加地哲定
8. 25 日支仏教家の接近(下) (仏連渡支団に寄す) 北京にて 加地哲定
8. 26 仏連支那旅行不況
9. 2 村上博士の 朝鮮巡回伝道
9. 5 印度仏跡礼拝団 郵船が第二回の催し
9. 7 朝鮮問題 と日本宗教家
9. 11 震災救恤袋報 朝鮮に於ける 仏教徒の蹴起
9. 11 京城における 村上博士の講演
9. 22 罹災少年保護 鮮人愛撫の宣伝
9. 22 岐阜仏徒の鮮人救護 (無料宿泊所と失業救済)
10. 5 喇嘛僧の日本留学 -教養を日本仏教連合会に-
10. 9 喇嘛僧の引受は 各宗派の特志にまつ
10. 24 職を賭して鮮人教育に盡す 大阪済美第四高橋校長 頑迷な区当局の抗議
10. 25 職を賭して鮮人教育に盡す 大阪済美第四高橋校長(続き) 頑迷な区当局の抗議
10. 25 回教徒の運動から 宗教的インターナショナル運動に及ぶ 寺本婉雅氏談
10. 27 鮮人遭難追悼会
10. 28 鮮人教育の成績 大阪市済美第四 夜学校の実際
10. 28 鮮人慰安会 東京における本願寺
11. 2 鮮人同胞の遭難者を弔す 椎尾辨匡博士の弔辞
11. 8 鮮人追悼の誤解を解くために 遭難地点で巡礼回向
11. 8 印度の志士 両本願寺を訪問
11. 9 桃水で名ある 洛南仏国寺に 鮮人僧の住職
11. 10 本門仏立講の 内鮮融合運動
11. 10 支那の世界紅卍字教が 大本教と提携し 何事か画策を急ぐ
11. 10 朝鮮事情宣伝に 教育、宗教家は無能か
11. 15 大阪に出来る 内鮮融和協会
11. 15 鮮人救済の 演芸大会
11. 16 支那仏教界に 偉人現る (一) 谷大教授 稲葉圓成氏談
11. 17 支那仏教界に 偉人現る (二) 谷大教授 稲葉圓成氏談
11. 18 内鮮問題と教家
11. 18 支那仏教界に 偉人現る (三) 谷大教授 稲葉圓成氏談
11. 18 朝鮮開教総長に 斯波随性氏
11. 20 朝鮮の人に真の 宗教心を植付けたい (上) 内鮮仏教徒の覚醒と奮起とを望む 朝鮮総督府警務局長 丸山鶴吉
11. 20 支那仏教界に 偉人現る (四) 谷大教授 稲葉圓成氏談
11. 21 朝鮮の人に真の 宗教心を植付けたい (下) 内鮮仏教徒の覚醒と奮起とを望む 朝鮮総督府警務局長 丸山鶴吉
11. 22 西藏の経文金剛般若経 西藏国宝の一部ならんとの説
11. 22 虐殺鮮人の骨はどうした 在留鮮人の深い慨嘆
11. 22 朝鮮職業婦人夜学校
11. 28 民国高僧連の 歓迎会経緯 大阪仏教団理事連怒る
11. 30 東京の支那僧歓迎会 上野寛永寺書院で
12. 1 大谷光瑞氏三十万円で 満州本願寺創設の噂
12. 1 審人開教に 総督府の認可
12. 2 朝鮮近情
12. 5 日支仏教徒の交歓 握手の契機熟す
12. 6 日支親善と仏教
12. 6 學術探検隊を アフガニスタンに送るの議(上) 井上朔郎
12. 6 民国人が連合して 横浜居留地に寺院建立 日本に於ける支那人の宗教
12. 6 内鮮融和と 完了の施設 先づ彼等自

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 身を立たしめよ
1923. 12. 6 密教の教義を 支那へ逆輸入 高野山
留学生の帰国
12. 6 民国代表日程
12. 7 學術探検隊を アフガニスタンに送る
の議 (中) 井上朔郎
12. 7 支那黄檗再建
12. 7 内鮮融和に当る 鮮僧金鼎堂氏が 京
都市の囑託
12. 8 學術探検隊を アフガニスタンに送る
の議 (下) 井上朔郎
12. 9 大派朝鮮青年会近情
12. 18 在留鮮人の移動 (大阪の一例)
12. 19 之も大谷派の新事業として 朝鮮の山
林経営 鉦山事業と是非何れぞ
12. 19 蒙古学生の 日本留学生
12. 20 上海の仏教団体 青年教徒の武者振
12. 21 支那仏徒へ謝辞 (仏教連合会から)
12. 27 民国宗教代表の 調査意見開陳
12. 28 理蕃開教者 佐藤顕孝氏出立
1924. 1. 5 内鮮倶楽部の計画から 朝鮮文化研究
所の設置 鮮僧金鼎堂氏の計画
1. 5 上海で日本密教の宣揚 支那の密教熱
に動かされた権田雷斧氏
1. 10 海外布教政策論 在北京 加地哲定
1. 11 来る三月に開院する 世界紅卍字教神
戸道院 と渡支する出口王仁三郎氏
1. 11 大本教が暗々裡にすすむる 普天教と
の提携運動 情報を齎らして帰綾した
松村真住氏
1. 19 支那回教徒覚醒運動 日本に布教計画
を策す光社と寺院の建設
1. 22 根張り強く巣喰つてゐる 支那の非基
督教運動 と排外思想の醸成
1. 25 支那渡日僧から 仏書寄贈
1. 26 内地に高まりつつある 朝鮮文化の研
究熱
1. 29 印度古典に顕はれたる結婚 泉芳璟
1. 31 復興の新時代を迎へた 印度の仏教
(一) 井上朔郎
2. 1 復興の新時代を迎へた 印度の仏教
(二) 井上朔郎
2. 1 滿蒙蔵版の蔵經に就て 在北京 加地
哲定
2. 2 復興の新時代を迎へた 印度の仏教
(三) 井上朔郎
2. 3 印度学の使命 (上) 谷大教授 泉芳
璟
2. 3 復興の新時代を迎へた 印度の仏教
(四) 井上朔郎
2. 5 復興の新時代を迎へた 印度の仏教
(五) 井上朔郎
2. 6 復興の新時代を迎へた 印度の仏教
(六) 井上朔郎
2. 6 印度学の使命 (中) 谷大教授 泉芳
璟
2. 7 印度学の使命 (下) 谷大教授 泉芳
璟
2. 7 朝鮮より
2. 9 日支親善の第一歩 (上) 出口王仁三
郎
2. 9 撫順施療病院 大谷派布教所の事業
2. 10 日支親善の第一歩 (下) 出口王仁三
郎
2. 10 朝鮮蔵經刊行企画 李、鄭二氏同時に
企画
2. 10 回教の話 (一) (回教徒の覚醒するま
で) 河瀬蘇北
2. 13 回教の話 (二) (回教徒の覚醒するま
で) 河瀬蘇北
2. 14 鮮僧豊山派寺院の住職となる 嚴弘尊
氏が東京府下で
2. 14 上海に布教所 本門仏立講の海外布教
2. 15 回教の話 (三) (回教徒の覚醒する
まで) 河瀬蘇北
2. 16 回教の話 (四) (回教徒の覚醒する
まで) 河瀬蘇北
2. 17 北京に建設する 人文研究所
2. 17 印度の女性 (一) 泉芳璟
2. 17 帰朝者に印せる日本 (一) 長谷川良
信
2. 19 帰朝者に印せる日本 (二) 長谷川良
信
2. 19 回教の話 (五) (回教徒の覚醒する
まで) 河瀬蘇北
2. 19 農村救済と 海外移民の要件
2. 20 帰朝者に印せる日本 (三) 長谷川良
信
2. 20 回教の話 (六) (回教徒の覚醒する
まで) 河瀬蘇北
2. 21 印度の女性 (二) 泉芳璟
2. 21 回教の話 (七) (回教徒の覚醒する
まで) 河瀬蘇北
2. 22 印度の女性 (三) 泉芳璟
2. 22 回教の話 (八) (回教徒の覚醒する
まで) 河瀬蘇北
2. 23 印度の女性 (四) 泉芳璟
2. 24 朝鮮宗教現状 総督府の発表
2. 26 回教の話 九、回教改革運動 河瀬蘇
北
2. 26 印度回教徒騒乱
2. 26 朝鮮に起った同盟会 (運動の理想は
宗教的民族結合)
2. 26 「朝鮮仏教興隆運動は 一種の水平運
動である」 朝鮮仏教大会一行は語る
2. 26 ガバーン氏の情報
2. 27 官憲の暴行から 在阪鮮人の大同団結
(内鮮融和の前途程遠し)
2. 27 台湾の神社規則
2. 28 支那に於ける基教事情 (仏教徒は營
利事業を起せ)
2. 29 回教の話(10) 復古革新の二運動 (上)

- 河瀬蘇北
1924. 2. 29 仏教研究希望の 支那滞在の米人が
宗教学者を訪問
2. 29 鮮人懇談会 李元錫氏の仏教講演
3. 1 回教の話(11) 復古革新の二運動(下)
河瀬蘇北
3. 1 内鮮融和促進演説会の 開催を政府に
要求する (大阪戎橋の鮮人殴打事件
の結末)
3. 1 西本願寺が 台北に布教拡張
3. 2 回教の話(12) 汎イスラムズム (上)
河瀬蘇北
3. 4 回教の話(13) 汎イスラムズム (下)
河瀬蘇北
3. 4 内鮮教化の要諦 (仏教は朝鮮固有の
唯一宗教である) 朝鮮仏教大会副会
長 季元錫氏談
3. 4 朝鮮の法式制定
3. 5 回教の話(14) 汎イスラムの成績 河
瀬蘇北
3. 6 回教の話(15) 回教革新の方向 河瀬
蘇北
3. 6 回教主の 国外追放
3. 7 回教教変の報を手にして (日本の宗
教家の考ふ可き事) 上 河瀬蘇北
3. 8 回教教変の報を手にして (日本の宗
教家の考ふ可き事) 下 河瀬蘇北
3. 9 ウバニシャット全訳の完成 (一) 文
学士 中野義照
3. 9 創造の精神 (一) (タゴール氏の芸術
観) 長谷部隆諦
3. 11 支那道院が 伯林に支部を
3. 12 ウバニシャット全訳の完成 (二) 文
学士 中野義照
3. 14 創造の精神 (二) (タゴール氏の芸術
観) 長谷部隆諦
3. 14 ウバニシャット全訳の完成 (三) 文
学士 中野義照
3. 15 創造の精神 (三) (タゴール氏の芸術
観) 長谷部隆諦
3. 15 ケマル・パシヤの 宗教排斥策
3. 16 ウバニシャット全訳の完成 (四) 文
学士 中野義照
3. 18 阿富汗特使 プ氏の消息
3. 18 ウバニシャット全訳の完成 (五) 文
学士 中野義照
3. 19 ウバニシャット全訳の完成 (六) 文
学士 中野義照
3. 20 愈具体化されて来た 内鮮仏教徒の提
携 十年計画で五百の鮮人布教師
3. 20 ウバニシャット全訳の完成 (七) 文
学士 中野義照
3. 21 朝鮮と仏教
3. 23 ウバニシャット全訳の完成 (八) 文
学士 中野義照
3. 28 印度の宗教芸術談
3. 28 鮮人夜学校修了式
3. 29 高野山に三ヶ年を過す 喇嘛僧十五名
の来朝
4. 1 日本喇嘛僧入洛
4. 3 蒙古文化の先駆者 留学喇嘛僧の使命
4. 3 入洛中の喇嘛僧一行
4. 5 朝鮮人取締に関し 当局の反省を促す
崔善鳴氏の東上
4. 5 千年間宗教的につながれた 蒙古人の
日本礼讃
4. 6 印度の宗教、学術、政治 在カルカッ
タ 木村龍寛
4. 6 喇嘛僧東京着
4. 8 留学喇嘛僧 四日午前東京駅着
4. 9 朝鮮より
4. 10 関西朝鮮人連盟委員 糺弾書を提出
4. 10 「如来の使者」を迎へんとする 支那
仏教徒の歓喜 国禁の密教再興
4. 11 喇嘛留學生 各省を歴訪
4. 13 国際的運動ともいふべき 海外殖民研
究団起る 同志社の学生が発起
4. 13 朝鮮片々
4. 15 上海に於ける 基教同盟大会 列国も
大会の成行を注目
4. 16 日支印三大国民の提携 詩聖タゴール
氏の来遊
4. 16 大連に創設の 学芸大学
4. 19 台湾で優勢な 長老教会 名実伴はぬ
会衆教会
4. 20 大阪児童愛護定期運動と 国際的愛護
会を青島に
4. 22 蒙古全土に勢力を扶殖して 勞農露西
亜と接触せんとする 活仏と提携する
大本 我が国知名の政治家も関係
4. 25 支那慮山世界仏教大会に 高楠博士と
佐伯管長を派遣?
4. 25 蒙古留學僧 各宗教叢刊宛
4. 27 攻学熱の高い 大阪鮮人夜学校
4. 27 七里恒順師と 朝鮮の教科書
5. 11 日印学界連絡の為に カルカッタ大学
教授 木村龍寛氏談
5. 11 米国の排日法案と 朝鮮の基督信徒
5. 15 カルカッタ大学より 京大に書籍寄贈
5. 16 タゴール翁 愈よ六月来朝
5. 17 目下開催裡にある 支那基督教連盟大
会 協議事項の内容
5. 17 蒙僧と補助金
5. 17 佐伯定胤氏の 満鮮旅行
5. 17 朝鮮仏教大会 副会長総務東上
5. 21 朝鮮仏教大会の運動 陣容漸く調うて
活動期に入る
5. 21 朝鮮より
5. 22 朝鮮片々
5. 23 珍らしくも同志社大学に 亜細亞民族
提携の運動起る 先づ日支親善の日華
教会生まる

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1924. 5. 23 同志社で タ翁の講演を 海外殖民研究団が交渉
5. 24 大連市に湧出した 聖徳街太子待ち その講演に又夢殿が建つ
5. 24 満鮮に於ける 佐伯法隆貫首 惠慈法師が還つたと喜ばる
5. 25 三百年間埋れてゐた 公教村の復興を計る ピーロース宣教師 (上)
5. 25 共進会の観がある 問島の宗教状態
5. 25 編めの哈爾賓 藤岡了淳
5. 27 三百年間埋れてゐた 公教村の復興を計る ピーロース宣教師 (下)
5. 27 南洋の原始神 道と宗教研究
5. 28 タ翁の東洋旅行と使命 特に日本来朝に就いて 桜井義肇氏談
5. 28 タゴール翁の 問題小説 ゴーラの邦訳成らん
5. 28 黄燮管長渡支後援会
5. 28 満鮮は松浦百英 氏に変更さる
5. 29 支那で崇った 詩聖タゴール
5. 31 朝鮮より
5. 31 盧山に於ける 仏教徒大会に就て (上) 漢口にて 清原實全
6. 1 蒙古学僧の教養は 下手をすると飛んだ失敗をする 寺本婉雅氏談
6. 1 喇嘛僧の行方 遠からず各宗に配置
6. 1 支那基督教界の諸問題 再び来朝した ウイッテ博士談
6. 3 日支印連合で タ翁歓迎会
6. 3 盧山に於ける 仏教徒大会に就て (下) 漢口にて 清原實全
6. 5 宗教詩人としての タゴール (上) 金子白夢
6. 5 タ翁招待に 谷大の奔走
6. 5 大阪内鮮協和会発式
6. 6 宗教詩人としての タゴール (中) 金子白夢
6. 7 宗教詩人としての タゴール (下) 金子白夢
6. 7 タ翁の旅程
6. 8 印度の明珠 タゴオル翁 (上) 福永勇賢
6. 10 盧山仏教大会に 木村博士出席 權田氏にも出席方交渉
6. 11 仏連、谷、龍岡大学連合で タ翁歓迎を
6. 11 佐伯定胤氏帰山
6. 12 最近土耳其に於ける 親日熱
6. 12 同志社でも タ翁講演か
6. 14 印度の明珠 タゴオル翁 (下) 福永勇賢
6. 15 印度の川 文芸保護に 就いての提議 (一) 井上朔郎
6. 15 タ翁入洛
6. 17 詩聖タゴール
6. 17 哲人タゴールよ (上) 長谷部隆諦
6. 17 東京に於ける タ翁の歓迎会
6. 17 在洛中のタ翁
6. 18 哲人タゴールよ (下) 長谷部隆諦
6. 18 日本国民に期待をかけて タゴール翁の講演要旨
6. 18 「女性は蓮華の如くあれ！」 女専に於けるタゴール翁の講演
6. 18 中外日報を 手にしたタ翁 「オオ愛すべき新聞！」
6. 19 或筋の手が動いてか 蒙古学僧突如帰国
6. 20 朝鮮仏教の興隆
6. 20 古代朝鮮の文化 文学博士 松本文三郎
6. 20 朝鮮と考古学 文学博士 浜田耕作
6. 20 現代朝鮮仏教の大観 (上) 教務院、仏教大会、其他の教勢 神谷宗一
6. 20 朝鮮仏教興隆の曙光 「争闘は革新の声也」
6. 20 仏教を羅麗の盛時に (朝鮮一僧の告白と決心)
6. 20 松竹キネマの新しい試み 日鮮融和劇
6. 20 朝鮮禅学院
6. 20 朝鮮の 僧侶と役人へ 京都仏教護国団長 大西良慶
6. 20 朝鮮の名物 大藏經と梵鐘 龍谷大学教授 禿氏裕祥
6. 20 蒙古僧の帰国と 仏連への非難
6. 20 渡鮮管長の教化と 観光団組織の希望
6. 20 朝鮮教況
6. 20 朝鮮片々
6. 20 朝鮮号を賛す 中外出版株式会社々々長 土岐儀
6. 20 朝鮮を一巡して 法隆寺貫首 佐伯定胤
6. 20 京城向上会館の 事業及び将来 (上) 向上会館主幹 青森徳英
6. 21 タゴール翁 車中談 (上) 宇津木二秀
6. 21 喇嘛僧一行の 帰国事情
6. 22 タゴール翁 車中談 (下) 宇津木二秀
6. 24 京城向上会館の事業及び将来 (下) 向上会館主幹 青森徳英
6. 28 朝鮮と考古学 文学博士 浜田耕作
6. 28 汕頭より (上) 小林雨峰
6. 28 京都女専を訪れて 日支親善を叫んだ 広東学生赴日団
6. 29 佐伯、木村両氏の 支那漫遊旅程
7. 1 日印学界の交渉拓けん 明二日関係者の会合で決定
7. 1 日華学術界の親和に 相互研究機関の設立 大谷大学の新しい東洋研究
7. 1 横田氏の台湾入り
7. 1 汕頭より (中) 小林雨峰
7. 2 台南布教所寄宿舎

1924. 7. 2 汕頭より(下) 小林雨峰
 7. 3 西本樺太教区講習
 7. 12 カルカッタ大学と 日本仏教諸大学の
 連絡のため木村教授から 仏教連合
 会へ陳情
 7. 13 台湾教況
 7. 13 朝鮮と基督教
 7. 13 シベリア布教の先駆者 日持上人の記
 念堂 を樺太阿幸港に建立
 7. 13 支那唯一の阿闍梨 明年来朝すべく準備
 7. 19 盧山を下りて(一) (慧遠の墓に詣づ
 るの記) 大屋徳城
 7. 19 印度に於ける 仏教再興の偉勲者(一)
 -サー、アシウトーシユ博士- 印
 度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 7. 20 盧山を下りて(二) (慧遠の墓に詣づ
 るの記) 大屋徳城
 7. 20 印度に於ける 仏教再興の偉勲者(二)
 -サー、アシウトーシユ博士- 印
 度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 7. 23 内鮮融和と 大阪府市
 7. 23 盧山を下りて(三) (慧遠の墓に詣づ
 るの記) 大屋徳城
 7. 24 印度に於ける 仏教再興の偉勲者(三)
 -サー、アシウトーシユ博士- 印
 度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 7. 24 主計監が得度して 間島に開教
 7. 24 盧山を下りて(四) (慧遠の墓に詣づ
 るの記) 大屋徳城
 7. 25 印度に於ける 仏教再興の偉勲者(四)
 -サー、アシウトーシユ博士- 印
 度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 7. 25 大阪内鮮協和会近情
 7. 26 印度に於ける 仏教再興の偉勲者(五)
 -サー、アシウトーシユ博士- 印
 度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 7. 26 日支親善の上に好結果 を齎らした密
 教徒の渡支
 7. 26 佐伯木村両代表 天津歓迎会
 7. 27 支那の仏教研究熱と 期待さるる 両国
 仏教徒の接触 小林正盛氏の帰朝談
 7. 27 印度に於ける 仏教再興の偉勲者(六)
 -サー、アシウトーシユ博士- 印
 度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 7. 29 印度に於ける 仏教再興の偉勲者(七)
 -サー、アシウトーシユ博士- 印
 度カルカッタ大学講師 木村龍寛
 7. 29 龍樹と龍猛と別人説 密教流伝に大影
 響を 与へる新龍樹の発見
 8. 1 京城より
 8. 3 北京と上海の 両研究所 日本仏教徒
 の期待
 8. 5 佐伯貫主木村博士 渡支反響
 8. 5 朝鮮の旅から
 8. 7 鮮人保護少年激増 と大阪少年審判所
 8. 8 木津無庵氏の 滿蒙移民に就て 在滿
 三宅生
 8. 9 日支仏教徒の握手 佐伯貫主木村博士
 一行の成功
 8. 9 支那の大水害救助と 日華仏教徒の運
 動
 8. 9 新羅の古都より(上)
 8. 10 虐殺鮮人の追悼 を盛んにせよ
 8. 10 新羅の古都より(下)
 8. 12 民族無色種同 盟会設立さる
 8. 12 日支仏教提携と 布教権問題
 8. 12 釜山より
 8. 12 朝鮮に於ける 龍大の教員資格
 8. 13 釜山瞥見
 8. 15 支那水害救済に 寛乎たる仏連
 8. 16 日支親和と仏教
 8. 21 亜細亜意識と 産業振興から 日支親
 善の 第一歩を印する 大商会の支那
 語講習
 8. 21 大谷大学へ来る アジアンタの壁画
 8. 21 大阪救世軍が 鮮人に日語教授
 8. 22 来阪鮮人の激増 と共同宿泊所
 8. 22 東北台北別院の 全島布教所計画
 8. 24 朝鮮雜記 梅原真隆
 8. 24 日支親善と本邦禪林の新傾向 祖跡巡
 礼から支那研究
 8. 27 朝鮮衡平社に就いて(上) 喜田貞吉
 氏(談)
 8. 28 朝鮮衡平社に就いて(下) 喜田貞吉
 氏(談)
 8. 28 朝鮮の日校宣伝
 8. 29 想起せよ一年前の大震災 芝増上寺で
 挙行する 罹災鮮人追悼
 8. 31 朝鮮雜記(二) 梅原真隆
 8. 31 内鮮融和と宗教家 宗教は民族意識を
 超越し得るか
 8. 31 常磐博士の渡支 第四回目の仏跡調査
 9. 2 支那政府に交渉して 滿蒙文蔵経出版
 9. 4 朝鮮雜記 梅原真隆
 9. 4 大阪仏教団の 民国僧歡迎準備
 9. 5 朝鮮雜記(四) 梅原真隆
 9. 5 京城に太子堂を建立し 大乘主義で内
 鮮融和を
 9. 6 京浜震災追悼会に 支那僧来朝の事情
 一行は僧侶三分台僧一分
 9. 6 水野梅曉氏 支那専門の雜誌計画
 9. 7 日本学界に初めて発表される 支那泥
 像の研究 (漢、唐の宗教研究に新しい
 資料)
 9. 7 仏教の日華提携は 将来を祝福されて
 居る 法相宗管長 佐伯定胤氏談
 9. 7 隠れたる学究徒により 印度仏教史地
 図なる 著者は洞宗所屬の一雲水
 9. 9 来朝中の支那僧こそ 支那仏教の代表
 者だ と五島朝太郎氏の紹介
 9. 11 東京に於ける 支那僧歡迎会

1924. 9. 11 大谷登留氏の 朝鮮人保護事業
 9. 12 日支親善の第一は 仏教徒の提携に限る 汕頭領事から外務省へ報告
 9. 12 渡日支那僧一行
 9. 12 朝鮮管理教会の 南北合併問題
 9. 16 朝鮮雑記 (五) 梅原真隆
 9. 16 日印学術交渉 と木村氏の奔走
 9. 16 民国僧一行の 震災追悼法要 並に仏連の歓迎会
 9. 17 日支の仏教徒
 9. 17 朝鮮雑記 (六) 梅原真隆
 9. 17 印度回教徒動乱
 9. 18 大本教の 海外宣伝部
 9. 18 台北に於ける 青年教家活動
 9. 21 朝鮮雑記 (七) 梅原真隆
 9. 21 帰った筈の支那僧が 神戸で終日の法楽 法式は全然黄檗のそれと同じ
 9. 21 最早姑息の手段を許さぬ 在阪鮮人の窮状
 9. 25 朝鮮の教化
 9. 26 支那潮安県 灌頂修行に就て 権田雷斧
 9. 26 谷大のアジアンタ壁画 模写した井上利正氏談
 9. 28 張作霖の皇天祈願と 国王の超宗教的 信念 趣味ある狩野博士の談
 9. 28 渡来朝鮮同胞に 暖かき眠りを与へよ (上)
 9. 30 支那布教権問題に 新しい希望と念願
 9. 30 渡来朝鮮同胞に 暖かき眠りを与へよ (下)
 9. 30 朝鮮仏教大会懇談会
 9. 30 阿部恵水氏 支那視察
 9. 30 日蓮宗の蒙古留学生
 10. 3 樺太の宗教事情 洞宗教学部長 佐川玄勢氏
 10. 5 朝鮮仏教大会 内鮮懇談会
 10. 12 支那仏教徒の折角の芳志を 東京市がすげなく断る 苦心の大梵鐘が宙に迷ふ
 10. 12 下岡政務総監と 仏教朝鮮大会
 10. 15 支那仏教徒寄贈の梵鐘は 『市では永久に吊らぬ』 対外的に面倒な問題起るか
 10. 15 ハルビン名物の 露国寺院恐慌
 10. 17 支那奉直戦で 宣教師大弱り
 10. 17 佐伯僧正木村博士慰勞会
 10. 19 支那寄贈の梵鐘拒絶を 仏連で問題とする
 10. 19 益々増える 鮮人労働者 漸次窮迫の度高まる
 10. 19 朝鮮仏教大会の 財団企図経過
 10. 20 支那のバハイ教 紅卍字教と誤り伝えられた 新宗教的運動の「道院」に就いて
 10. 23 阿部恵水氏と張作霖氏
 10. 25 洞宗京城別院 新築移転の計画
 10. 25 バハイ教の概要 (中)
 10. 25 木村講師の送別会
 詩人の宗教 (一) (タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
 10. 26 バハイ教の概要 (下ノ一)
 10. 28 日支の仏教徒
 10. 28 バハイ教の概要 (下ノ二)
 10. 29 生死の幔幕(1) (印度神話) シエンキエウイチ作 高田集蔵訳
 詩人の宗教 (二) (タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
 10. 30 生死の幔幕(2) (印度神話) シエンキエウイチ作 高田集蔵訳
 10. 31 生死の幔幕(3) (印度神話) シエンキエウイチ作 高田集蔵訳
 10. 31 支那と蓮如を 新しく観させる 今年の京都大藏会
 10. 31 青島に慈覚大師 の記念碑建設
 10. 31 台北別院報恩講
 10. 31 朝鮮人保護少年 宿泊所で保護することに決定
 10. 31 印度仏教の再興者 ザー・アシュトール シュ逝く
 10. 31 支那動乱と仏心 寺本婉雅氏曰く
 10. 31 日印学界連絡のため カ大学へ日本仏教書寄贈
 10. 31 宗教局で開かれた 朝鮮仏教 の後援協議
 10. 31 木村龍寛氏の 渡印送別会
 11. 2 生死の幔幕(4) (印度神話) シエンキエウイチ作 高田集蔵訳
 11. 2 詩人の宗教 (三) (タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
 11. 4 印度の教主 (一) 鈴木大拙
 11. 4 詩人の宗教 (四) (タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
 11. 4 支那仏教徒寄贈梵鐘 を東京市拒絶は訛傳(?)
 11. 5 印度の教主 (二) 鈴木大拙
 11. 5 詩人の宗教 (五) (タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
 11. 6 印度の教主 (三) 鈴木大拙
 11. 6 詩人の宗教 (六) (タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
 11. 7 印度の教主 (四) 鈴木大拙
 11. 7 詩人の宗教 (七) (タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
 11. 7 回教の話 (上) 回教行者 公文直治 郎氏談
 11. 8 印度の教主 (五) 鈴木大拙
 11. 8 詩人の宗教 (八) (タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
 11. 8 回教の話 (中) 回教行者 公文直治 郎氏談
 11. 9 二人龍樹説の誤謬 一、二、 龍谷大

- 学教授 羽濑了諦
1924. 11. 9 未だ疑問が充分にある 支那寄贈梵鐘問題 —井上東京公園課長の言明—
11. 9 内鮮融和の機関 京都協助会成立
11. 9 回教の話(下) 回教行者 公文直治 郎氏談
11. 9 表面頓挫の形にある 印度スワラジ運動
11. 9 大連より 阿部恵水
11. 9 アジャンタ壁画の 展覧と講演
11. 11 五千三百万の被圧迫者を 救済した印度のガンジー
11. 11 二人龍樹説の誤謬 三、四、 龍谷大学教授 羽濑了諦
11. 12 二人龍樹説の誤謬 五 龍谷大学教授 羽濑了諦
11. 12 朝鮮学生の 寄宿舎計画
11. 13 二人龍樹説の誤謬 六 龍谷大学教授 羽濑了諦
11. 13 「国家の為」「東洋の為」と言ふ、日支親善と宗教家
11. 14 二人龍樹説の誤謬 七 龍谷大学教授 羽濑了諦
11. 14 詩人の宗教(八)(タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
11. 14 京城帝大の 法文学部
11. 14 回教徒の漸減と 民族運動
11. 14 龍樹問題について 井上右近
11. 15 二人龍樹説の誤謬 八 龍谷大学教授 羽濑了諦
11. 15 詩人の宗教(十)(タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
11. 15 失業鮮人救済 融和会の奔走
11. 15 第十回大藏会出陳の 宋版藏經の措工及天竺図(上) 藤堂祐範
11. 16 詩人の宗教(十一)(タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
11. 16 緬甸独立運動の火の手は 先づ仏教の僧団から(十月八日 ランゲーン発特報)
11. 16 第十回大藏会出陳の 宋版藏經の措工及天竺図(下) 藤堂祐範
11. 18 詩人の宗教(十二)(タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
11. 18 緬甸独立運動の火の手は 先づ仏教の僧団から(承前)(十月八日 ランゲーン発特報)
11. 18 印度回教徒の 戦勝祈禱式
11. 19 詩人の宗教(十三)(タゴオル翁の説) 長谷部隆諦
11. 19 支那仏教徒の興隆は 排外思想の反映(上)(附、支那仏教界の大立物太虚氏の紹介)
11. 20 支那仏教の視察
11. 20 印度史譚羅摩乗の梗概(一) 長谷部隆諦
11. 20 支那仏教徒の興隆は 排外思想の反映(下)(附、支那仏教界の大立物太虚氏の紹介)
11. 21 朝鮮の教化者
11. 21 印度史譚羅摩乗の梗概(二) 長谷部隆諦
11. 22 東亜仏教大会の経費を 政府と実業家に要求せよ 某政治家談
11. 22 印度史譚羅摩乗の梗概(三) 長谷部隆諦
11. 23 東亜仏教大会の内容 割り込み運動屋の警戒
11. 23 印度史譚羅摩乗の梗概(四) 長谷部隆諦
11. 25 印度史譚羅摩乗の梗概(五) 長谷部隆諦
11. 26 内鮮親善に努力 を決議した全国教育大会
11. 26 印度史譚羅摩乗の梗概(六) 長谷部隆諦
11. 27 極東の国絵てを耶蘇へ 旧教の「極東改宗の祈禱会」
11. 27 印度史譚羅摩乗の梗概(七) 長谷部隆諦
11. 28 東亜仏教大会と 朝鮮仏大会後援決る(仏連幹事総会第一日)
11. 28 在京仏教朝鮮学生 凡て三十名その一割は苦学生
11. 28 印度史譚羅摩乗の梗概(八) 長谷部隆諦
11. 28 龍樹龍猛 研究家に対して 井上右近
11. 28 コブラとモングスの恋 ガンジーの断食苦行より 真の協同成るまで(上) 櫻井義肇氏談
11. 29 印度史譚羅摩乗の梗概(九) 長谷部隆諦
11. 29 コブラとモングスの恋 ガンジーの断食苦行より 真の協同成るまで(中) 櫻井義肇氏談
11. 29 在京鮮人労働者の思想(仏教朝鮮協会の調査に依る)
11. 30 龍樹の梵名に就て(上) 文学博士 萩原雲來
11. 30 印度史譚羅摩乗の梗概(十) 長谷部隆諦
11. 30 コブラとモングスの恋 ガンジーの断食苦行より 真の協同成るまで(下) 櫻井義肇氏談
12. 2 印度史譚羅摩乗の梗概(十一) 長谷部隆諦
12. 2 ガンジー断食前後より 十二月国民議前会へ(上) 櫻井義肇氏談
12. 2 龍樹の梵名に就て(下) 文学博士 萩原雲來
12. 2 タゴール翁病む
12. 3 ぼつぼつ前景気がついた 東亜仏教大

- 会 改暦早々招待状を発送
1924. 12. 3 印度史譚羅摩乗の梗概 (十二) 長谷部隆諦
12. 3 ガンヂー断食前後より 十二月国民議前会へ (下) 櫻井義肇氏談
12. 4 新龍樹伝の研究に就て (一) 大谷大学教授 寺本婉雅
12. 4 印度史譚羅摩乗の梗概 (十三) 長谷部隆諦
12. 4 所謂スワラヂ党に就て (一) (ガンヂイズムの分派)
12. 5 新龍樹伝の研究に就て (二) 大谷大学教授 寺本婉雅
12. 5 満鮮地方の金石文 (上) 船橋水哉
12. 5 満鮮拓本展観
12. 5 印度史譚羅摩乗の梗概 (十四) 長谷部隆諦
12. 5 所謂スワラヂ党に就て (二) (ガンヂイズムの分派)
12. 6 新龍樹伝の研究に就て (三) 大谷大学教授 寺本婉雅
12. 6 満鮮地方の金石文 (下) 船橋水哉
12. 6 印度史譚羅摩乗の梗概 (十五) 長谷部隆諦
12. 6 所謂スワラヂ党に就て (三) (ガンヂイズムの分派)
12. 7 新龍樹伝の研究に就て (四) 大谷大学教授 寺本婉雅
12. 7 印度史譚羅摩乗の梗概 (十六) 長谷部隆諦
12. 7 所謂スワラヂ党に就て (四) (ガンヂイズムの分派)
12. 9 新龍樹伝の研究に就て (五) 大谷大学教授 寺本婉雅
12. 9 印度史譚羅摩乗の梗概 (十七) 長谷部隆諦
12. 9 所謂スワラヂ党に就て (五) (ガンヂイズムの分派)
12. 10 印度史譚羅摩乗の梗概 (十八) 長谷部隆諦
12. 10 所謂スワラヂ党に就て (六) (ガンヂイズムの分派)
12. 10 内鮮融和は 民衆の努力次第
12. 11 新龍樹伝の研究に就て (六) 大谷大学教授 寺本婉雅
12. 11 満鮮地方の塔 船橋水哉
12. 11 印度史譚羅摩乗の梗概 (十九) 長谷部隆諦
12. 12 新龍樹伝の研究に就て (七) 大谷大学教授 寺本婉雅
12. 12 印度史譚羅摩乗の梗概 (二十) 長谷部隆諦
12. 13 新龍樹伝の研究に就て (八) 大谷大学教授 寺本婉雅
12. 13 印度史譚羅摩乗の梗概 (廿一) 長谷部隆諦
12. 13 内鮮協和会の 木津協同宿泊所
12. 14 対支教育施設 欧米諸国と我国 の施設の相違
12. 14 印度史譚羅摩乗の梗概 (廿二) 長谷部隆諦
12. 16 印度史譚羅摩乗の梗概 (廿三) 長谷部隆諦
12. 16 印度回教徒を中心に (上) - 土耳其革命に就て -
12. 17 印度史譚羅摩乗の梗概 (廿四) 長谷部隆諦
12. 17 朝鮮仏教大会に望む 下岡政務総監の演説
12. 17 感謝と希望に燃えた 朝鮮仏教大会の集り
12. 18 再び龍樹に就て (上) 文学博士 萩原雲来
12. 18 印度史譚「羅摩乗の冒険」(廿五) 長谷部隆諦
12. 18 印度回教徒を中心に (中) - 土耳其革命に就て -
12. 19 再び龍樹に就て (下) 文学博士 萩原雲来
12. 19 短所を裸出した 開教区の仏教寺院 浄宗支那教区長語る
12. 19 印度史譚「羅摩乗の冒険」(廿六) 長谷部隆諦
12. 19 印度回教徒を中心に (下) - 土耳其革命に就て -
12. 20 印度史譚「羅摩乗の冒険」(廿七) 長谷部隆諦
12. 21 印度史譚「羅摩の冒険」(廿八) 長谷部隆諦
12. 21 回教徒中心で 欧州の国際的注意を惹起した モロッコ問題
12. 23 印度史譚「羅摩の冒険」(廿九) 長谷部隆諦
12. 24 印度史譚「羅摩の冒険」(三十) 長谷部隆諦
12. 24 朝鮮に本能寺別院
12. 27 東亜仏教大会と 印度方面の交渉
1925. 1. 1 真如法親王の記念碑を 新嘉坡に建てるの議 文学博士 新村出
1. 6 法親王の記念碑建設に 寄付金を募集せよ
1. 8 新龍樹伝研究の批評に就て (一) 寺本婉雅
1. 9 新龍樹伝研究の批評に就て (三) 寺本婉雅
1. 9 回教国との交誼は 日本人の思想に変化を与へん
1. 9 朝鮮基督教徒の 一斉独立宣言
1. 10 新龍樹伝研究の批評に就て (四) 寺本婉雅
1. 10 真如法親王の建碑は 英国の軍国主義 に対しても 重大な意義を有す

1925. 1. 11 紅卍字の近況
1. 11 大本と紅卍字とは 遂に提携の可能な
きか?
1. 11 世論漸く起る 真如法親王建碑問題
—宮内省—仏連—最近史—
1. 11 共食共倒の朝鮮人 哀話に満ちた彼等
の新年
1. 11 タゴール翁 再び来朝 四月東北大学
の招聘で
1. 11 新龍樹伝研究の批評に就て (五) 寺
本婉雅
1. 11 南洋の旅から 小谷光子
1. 13 真如法親王建碑問題 宮内省は何して
いる? —具体案の作成を熟望さる—
1. 13 世界情勢はますます 日印の提携親善
を要求 新陣容を張る日印協会
1. 13 朝鮮間島に 無名の義人
1. 13 日本密教徒の親たる 龍樹菩薩伝 (1)
大山公淳
1. 14 真如法親王の 海外建碑に就て 高野
山 宮崎忍海
1. 14 日本密教徒の親たる 龍樹菩薩伝 (2)
大山公淳
1. 15 真如法親王建碑問題 その具体案は如
何
1. 15 朝鮮の三十一本山より 東亜仏教大会
に参加希望
1. 15 日本密教徒の親たる 龍樹菩薩伝 (3)
大山公淳
1. 16 真如法親王建碑問題 国民に徹底せし
めよ
1. 16 真如親王の記念事業につきて 文学博
士 新村出
1. 16 六百万の普天教徒が 内鮮融和運動
1. 16 「羅越国」の位置如何 (真如法親王の
建碑問題について) 長谷部隆諦
1. 16 日本密教徒の親たる 龍樹菩薩伝 (4)
大山公淳
1. 17 壮気苦節の求法者 真如法親王 (一)
1. 17 密教研究で支那仏教の缺を補ひ 上海
に仏教復興運動
1. 17 日本密教徒の親たる 龍樹菩薩伝 (5)
大山公淳
1. 18 壮気苦節の求法者 真如法親王 (二)
1. 18 真如法親王建碑問題 国際的交渉は可
能 跡部法学博士談
1. 18 鑑真の記念碑 と唐招提寺住職の渡支
龍樹問題につき 寺本君の妄を辯ず
(一) 文学博士 萩原雲来
1. 20 壮気苦節の求法者 真如法親王 (三)
1. 20 年齢わづか二十四歳にして 支那仏教
界の第一線に起つ 精進主義の顕蔭芳
志を訪れて (上)
1. 20 不逞鮮人が 宗教利用の宣伝
1. 20 真如法親王建碑問題 実働の中心と仏
教徒
1. 20 華鮮人学生労働者の慰安会
1. 21 龍樹問題につき 寺本君の妄を辯ず
(二) 文学博士 萩原雲来
1. 21 壮気苦節の求法者 真如法親王
1. 21 千載の今と昔を語る 支那仏教と天平
仏教 支那仏教の特色を語る 唐招提
寺 北川智海氏
1. 21 年齢わづか二十四歳にして 支那仏教
界の第一線に起つ 精進主義の顕蔭芳
志を訪れて (下)
1. 21 神戸の仏教児童協会が 東亜児童大会
を開く —二月中旬淡馬聚楽館で—
1. 22 龍樹問題につき 寺本君の妄を辯ず
(三) 文学博士 萩原雲来
1. 22 真如法親王建碑問題 英華先づ立つ可
し 宗教局長 下村壽一氏談
1. 23 龍樹問題につき 寺本君の妄を辯ず
(四) 文学博士 萩原雲来
1. 23 第一回の国際仏教大会を記念に 本邦
唯一の訳経者 靈仙三蔵毒殺地に建碑
せよ
1. 23 日露条約 愈々成立調印
1. 23 日露協約調印と教界
1. 23 辜鴻銘に寄す (一) 岡田播陽
1. 24 支那政治の目に映じた 宗教熱の二方
面の原因
1. 24 朝鮮普天教と大本教 ここにも亦握手
が成立したと
1. 24 朝鮮人の伊勢団参
1. 25 日露交渉の成立と 西伯利の布教 太
田覚眠
1. 25 十数年前達頼喇嘛と共に 三蔵遺跡の
探索 寺本教授の懐旧談
1. 25 ボンベイから 仏跡巡礼の一(1) 成瀬
賢秀
1. 25 辜鴻銘に寄す (二) 岡田播陽
1. 27 ボンベイから 仏跡巡礼の一(2) 成瀬
賢秀
1. 28 ボンベイから 仏跡巡礼の一(3) 成瀬
賢秀
1. 28 日露交渉の成立と 西伯利の布教 (二)
太田覚眠
1. 28 辜鴻銘に寄す (三) 岡田播陽
1. 28 台北より
1. 29 ボンベイから 仏跡巡礼の一(4) 成瀬
賢秀
1. 29 日露交渉の成立と 西伯利の布教 (三)
太田覚眠
1. 29 台湾の独立運動と その反対運動 文
化協会と公益会
1. 29 海外泉報 エチプト回教徒の覚醒
1. 29 真如法親王記念碑と 新嘉坡に就ての
考察 宮崎忍海
1. 29 辜鴻銘に寄す (四) 岡田播陽
1. 30 辜鴻銘に寄す (五) 岡田播陽
1. 31 東六高倉会館に 鮮人夜学校設置か

1925. 1. 31 辜鴻銘に寄す (六) 岡田播陽
2. 1 真如法親王建碑問題 漸く實際運動を
其プランは黒板博士が考案中
2. 3 漢訳藏経による 仏伝紀日の疑問と
西藏仏教の所伝
2. 4 真如法親王建碑問題 各方面に中心人
物を作れと、黒板文学博士談
2. 4 宗教排斥の トルコ政府 ギリシャ僧
正を追放す
2. 5 朝鮮三十一本山へ対し 仏連より正式
に回答
2. 6 東洋文化の融合を旗印に 日華中心の
趣味の集ひ
2. 8 上海の仏教学会日華親善の為に 間宮
氏を会長に推戴
2. 8 日華仏教徒の連絡機関は黄檗に限る
民国僧侶のホテルに黄檗山を開放せよ
2. 10 大司教追放を中心に 土希国交愈々混
沌 猶太教徒も怒る
2. 13 土、希問題に対して注意すべき 印度
回教徒の態度 一予想される英国の政
策一
2. 13 内鮮融和運動 大同団の活動
2. 13 真如親王建碑問題について 長谷部隆
諦
2. 14 日本の対支親善運動は 何故に効果な
きか (上) この鐵門は宗教家より外
に開く者はない 東亜同文書院の大津
院長は斯く語る
2. 14 土希国交は世界の平 和上と宗教の大
問題
2. 14 回教国の大連盟 回教徒大会に提案
2. 14 百万円の予算をもって 天理教外国語
学校の経営
2. 15 国際仏教大会の前景 東渡西來諸祖
の事跡表彰や 東西大蔵会、京都の支
那の集りなど
2. 15 大西良慶氏と 朝鮮仏教界
2. 15 環爾氏の上海行
2. 17 朝鮮布教策は? 朝鮮人になり切った
嚴氏
2. 17 日本の対支親善運動は 何故に効果な
きか (下) この鐵門は宗教家より外
に開く者はない 東亜同文書院の大津
院長は斯く語る
2. 18 鮮語を習って 外人教師の伝道
2. 18 東亜仏教大会 各部組織漸く成る
2. 19 亞弗利加宣教師の死
2. 19 西藏仏教を研究する 支那仏教徒の新
計画
2. 19 京城仏青発会式
2. 20 海外通信 南亞弗利加の計画
2. 22 仏跡巡礼 (其二) 成瀬賢秀
2. 22 海外通信 印度の基督教連盟
2. 22 恐れられた団結も破れて 回教徒の分
散現状
2. 25 仏跡巡礼 (其二) 成瀬賢秀
2. 25 朝鮮人の善いところ 悪いところ (上)
支那間島にて 上野興仁
2. 26 仏跡巡礼 (其二) 成瀬賢秀
2. 26 支那の土地買得問題に絡る経緯 百
五十万円の約手行衛
2. 26 朝鮮人の善いところ 悪いところ (中)
支那間島にて 上野興仁
2. 26 全支那に漲り渡る 排基督教大同盟運動
東亜仏教大会と支部
2. 26 朝鮮の普天教に就て (附、日鮮融和
の主旨は他と異なる)
2. 27 支那の土地買得問題に絡る経緯 百
五十万円の約手行衛 (下)
2. 27 朝鮮人の善いところ 悪いところ (下)
支那間島にて 上野興仁
2. 27 「回教徒は最早分散せず」 英国政策の
尻割れ
3. 1 印度其他を招待せぬ訳 東亜仏教大会
に就て 仏連の一幹部は語る
3. 1 朝鮮同盟の失業慰安の爲め 慈善大講
演会
3. 3 支那に於ける猛烈なる 反基督教運動に
就て (上) 在神戸 鮑振青
3. 4 支那に於ける猛烈なる 反基督教運動に
就て (中) 在神戸 鮑振青
3. 5 支那に於ける猛烈なる 反基督教運動に
就て (下) 在神戸 鮑振青
3. 5 大徳寺派管長を招いて 上海に日華僧
園の開堂
3. 5 鮮人女性の叫び 二千年來の旧慣打破
を叫ぶ 鮮人女性の同友会
3. 6 中華北京に來遊中の 西藏パンチェン
喇嘛を 東亜仏教大会に招待せよ と
某西藏仏教通は斯く語る
3. 7 支那布教権問題の絶望と 東亜仏大会
の注意点
3. 7 オンリー・ ルンビンデー 一仏跡巡
礼記の一節一 成瀬賢秀
3. 8 オンリー・ ルンビンデー 一仏跡巡
礼記の一節一 成瀬賢秀
3. 10 オンリー・ ルンビンデー 一仏跡巡
礼記の一節一 成瀬賢秀
3. 10 第六回セイロン 仏教徒大会の模様
3. 13 支那に於ける 反基督教運動 (一)
河瀬蘇北
3. 13 仏教研究熱の旺盛な 支那南京の内学
院
3. 14 支那に於ける 反基督教運動 (二)
河瀬蘇北
3. 14 鮮人青年の「離婚同盟会」
3. 15 支那に於ける 反基督教運動 (三)
河瀬蘇北
3. 15 老支那を物語る 真言の時局問題 委
員会は今度で決了
3. 15 海外雜報 支那基督教信徒の演説

1925. 3. 15 朝鮮仏教大会の 留学生来らず
 3. 15 光瑞氏の帰朝は 四月下旬になる
 3. 17 支那に於ける 反基督教運動(四)
 河瀬蘇北
 3. 17 日増に延び行く 中国の天理教
 3. 17 西本シベリア 開教の再興
 3. 17 外交方面にも注目された 班禪喇嘛の
 北京入り
 3. 17 北京の大覚精舎で 著述部を新設 諸
 資料の蒐集を企つ
 3. 18 支那に於ける 反基督教運動(五)
 河瀬蘇北
 3. 18 神戸仏教児童協会主催の 東亜児童大
 会近づく
 3. 18 班禪喇嘛北京入りの経緯(上) 世界
 外交界に興味ある問題
 3. 19 支那に於ける 反基督教運動(六)
 河瀬蘇北
 3. 19 班禪喇嘛北京入りの経緯(中) 世界
 外交界に興味ある問題
 3. 19 日支親善や内鮮融和の為に 良通訳官
 採用の急要
 3. 20 支那に於ける 反基督教運動(七)
 河瀬蘇北
 3. 20 班禪喇嘛北京入りの経緯(下) 世界
 外交界に興味ある問題
 3. 20 支那仏教連合会設立運動 それと共に
 仏教徒の社会的活動
 3. 21 日露協商細則中の 宗教に関する事項
 西本願寺より外務省へ交渉
 3. 24 尾行付の 台湾視察 社会事業と社会
 主義の間違ひ
 3. 25 海外に注意を向け出した 支那仏教徒
 の将来
 3. 26 天理外語学校 陣容ほぼなる 授業は
 四月十五日前後から
 3. 26 海外雑報 印度の奴隸制度
 3. 27 暖かい春の半日を歡樂に融け込んだ
 東亜の少国民 神戸仏教徒が国際的に
 働きかけた第一次の成績 願くば年
 中行事としてほしいと 中華民国人の
 希望
 3. 28 宣教師の赤化運動と 朝鮮独立の大陰
 謀 資金五十万弗の用意ありと號す
 3. 28 東亜自動大会に於ける 日華兩國の交
 歓詞
 3. 29 ダージリン(仏跡巡礼の旅から) 成
 瀬賢秀
 3. 29 神戸の仏教徒に期待される 東亜民族
 の連盟運動と 仏教会館建設熱 各宗
 当局側も歓迎してゐる
 3. 31 年五万割以上の 金利になった土地
 現在の状態はどうか ▽…鮮人と内地
 人…△
 4. 1 真如親王埋骨の地に就て(上) 山階
 派管長 和田大圓
 4. 1 南洋から(二月四日夜九時半) 小谷
 光子
 4. 2 真如親王埋骨の地に就て(下) 山階
 派管長 和田大圓
 4. 8 日露協商宗教 事項近く協定 露国査
 証官の来朝
 4. 8 台湾より
 4. 10 日華学生協会
 4. 11 神戸朝鮮労働同 盟会組織成る
 4. 15 宗教伝道に ハルピンは有望
 4. 16 大本教宣伝の 支那時文翻訳
 4. 16 芸術界に紹介する 支那大洞石仏
 4. 16 世界宗教連盟の前提に 亜細亜宗教
 連盟の計画
 4. 18 西藏學術界の權威デルケ版蔵経 四千
 余巻我国に到来 グライラマより遥々
 多田氏へ 欧米これを蔵する国未だ無
 し
 4. 19 海外雑報 アッシリヤ 將軍の演説
 4. 19 支那仏教の統一運動 支那仏教の第一
 者太虚氏の主張と運動
 4. 19 伊太利が好きになった タゴールの近
 状
 4. 19 大同石仏大觀に就て 中井宗太郎
 4. 21 中国の名勝 三段峽に大仏 を建立し
 ようとの計画
 4. 22 台湾に綜合大学 その予算一千万円
 4. 22 仏教朝鮮協会 理事会協議事項
 4. 22 台北市の感化院 西本願寺の事業
 4. 22 大谷光瑞 明二十三日神戸着
 4. 22 尊山氏の朝鮮巡回 六月中旬より約一
 ケ月
 4. 23 西藏々経に就いて 多田等観氏談
 4. 24 西藏々経に就いて 多田等観氏談
 4. 24 ハルピンの近況
 4. 25 西藏々経に就いて 多田等観氏談
 4. 26 西藏々経に就いて 多田等観氏談
 4. 29 支那からはるばる 密教伝授をうけに
 来る 来月西下の權田雷斧氏を慕うて
 4. 29 印度夜話 輪廻(一) 渋川繁磨
 4. 30 青島紡績罷業 事件に当面し 一部仏
 教徒に
 4. 30 在東京朝鮮仏教學生が 朝鮮曆で釈尊
 降誕会を
 4. 30 印度夜話 輪廻(二) 渋川繁磨
 4. 30 陣容の整うた 仏教朝鮮協会
 4. 30 支那全土に行はるる 釈尊降誕会 =
 今日が陰曆八日=
 5. 1 セオソヒー印度本部で 創立五十年記
 念大会 来十二月各国から集つて
 5. 2 朝鮮仏教大会の新留学生運動 財団を
 設定して學生を三種別に
 5. 3 印度夜話 輪廻(三) 渋川繁磨
 5. 6 日本仏教徒の母国再興 朝鮮全土を仏
 教化 する日が来たと李元錫氏語る
 5. 7 印度の仏陀祭

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1925. 5. 7 支那僧孫法師來錫
 5. 7 印度夜話 輪廻(四) 渋川繁麿
 5. 10 食人国の宗教と社会生活 南洋旅行に就き□□字野教授談
 5. 10 印度夜話 輪廻(五) 渋川繁麿
 5. 13 北京より帰りて(上) 河口慧海氏語る
 5. 14 北京より帰りて(下) 河口慧海氏語る
 5. 14 印度夜話 輪廻(六) 渋川繁麿
 5. 15 西藏班禅喇嘛の來朝は 到てい実現すまい(ラッサ政府の過酷なる収税)
 5. 15 プラタップ氏 再び來朝するか
 5. 16 銀婚奉祝と 朝鮮仏教學生
 5. 17 海外思潮 ザイオン大学
 5. 17 印度夜話 輪廻(七) 渋川繁麿
 5. 20 支那上海の靈智学会と 日本のセオソヒスト提携
 5. 20 全く國際的な セオソヒ大会
 5. 20 水野梅曉氏の渡支 大藏經の宣伝もやる
 5. 20 東本映画班朝鮮巡回
 5. 21 中央アジアの 古代壁画模写
 5. 21 本部を北京に移転して 全支那仏教連合の運動
 5. 21 海外思潮 南部亞弗利加 連合宣教運動
 5. 21 住宅周旋に專注する 大阪内鮮相助会
 5. 23 チーホン大僧正の遺言(上) 哈爾濱 東本願寺 藤澤宏澄
 5. 24 組織的になって行く 支那の非基督教大同盟
 5. 26 朝鮮仏教談の 留學生入京
 5. 27 支那仏教徒から寄贈の 梵鐘いよいよ来る
 5. 27 東亞仏教大会準備
 5. 28 上海の東亞僧園 日華仏教徒の提携から 更に印度仏教徒の握手
 5. 28 来月下旬上海から 留學僧十名來朝
 5. 28 実質的な傾向を有する 東亞仏教徒大会
 5. 28 支那仏教史跡 第一巻が出た
 5. 28 北陸山中深く身を秘して 西藏藏經を翻訳 文典の事業も完成
 5. 28 チーホン大僧正の遺言(下) 哈爾濱 東本願寺 藤澤宏澄
 5. 30 東亞仏教徒大会の経緯と 日本仏徒への希望
 5. 31 印度ガンダーラの彫刻(上) 文学博士 浜田青陵
 6. 2 パラオに布教所(帝國南洋庁が応援)
 6. 4 印度ガンダーラの彫刻(下) 文学博士 浜田青陵
 6. 4 上海の排外暴動が及ぼす 東亞仏教大会への影響 日本側がしきりに心配し出した
 6. 4 真如法親王の陵墓説に対し 宮内省と京都府が動く 問題になってゐる円墳形の小山に古い塔婆
 6. 4 北野越山貫主の 満洲巡錫日程
 6. 5 安心してよからう 支那の排外運動と 今秋の東亞仏教大会
 6. 6 その日の座談会(二) 支那學生の憂國心と 其の理想 文学博士 矢野仁一
 6. 6 南洋統治領内の 産業と開教事業
 6. 7 大阪内鮮協和会彙報
 6. 7 日本組合協会 朝鮮伝道記念日
 6. 7 朝鮮海印寺經版の研究(一)(補版と雑版に就て) 大屋徳城
 6. 9 プ氏の入洛
 6. 10 西本願寺から 上海へ慰問
 6. 11 亞富汗國王特使 プ氏と語る
 6. 11 朝鮮海印寺經版の研究(二)(補版と雑版に就て) 大屋徳城
 6. 13 上海の暴動が祟って 途方に暮れてゐる水野氏 梵鐘も氣遣はれる…と仏連幹部
 6. 14 上海事件と日本仏教徒(一大反省を要す)
 6. 14 動亂の真ッ最中の 上海から帰って來た 松江萬壽寺 勝平大喜氏の入洛談
 6. 14 朝鮮海印寺經版の研究(三)(補版と雑版に就て) 大屋徳城
 6. 16 上海の暴動も知らぬ氣に 東亞僧園の事業進む 修道方法も經濟組織も内地の僧堂式
 6. 16 支那の雲水を連れて 十字街頭にたつ 大徳の管長
 6. 16 氣遣はれる 水野氏の安否 梵鐘はやはり來ない
 6. 17 宗教の上から東京仏女青と 朝鮮婦人との握手を(各地に出来る女青の支部)
 6. 18 今度は北京の弘恩寺から 名譽顧問に推戴 益々支那にもてる大徳管長
 6. 18 「可驚この誤謬を如何に見る」と 中華西藏學者の詰問 西藏文法再度問題となる
 6. 18 朝鮮海印寺經版の研究(四)(補版と雑版に就て) 大屋徳城
 6. 19 揚げ足とりと見られて居る 支那の西藏文典非難
 6. 20 洞宗の朝鮮開教
 6. 20 朝鮮視察の 黄燮宗一行 新任師家も渡鮮
 6. 21 今度は支那の西藏學者に 寺本氏から一本參る
 6. 21 朝鮮海印寺經版の研究(五)(補版と雑版に就て) 大屋徳城
 6. 23 中華仏連設立運動と 東亞仏教大会及び 所謂排外運動の近況

1925. 6.23 支那暴動と 基督教々育
 6.25 朝鮮海印寺経版の研究(六) (補版と雑版に就て) 大屋徳城
 6.28 大阪府下の 鮮人来還実勢
 6.28 支那仏教史跡調査の困難(上) 大塩毒山
 6.30 支那問題に 日本労働組合評議会声明書
 7. 1 支那古薬林に拜塔して 黄檗宗管長一行帰る 北京の排外運動は猛烈だった
 7. 2 支那仏教史跡調査の困難(下) 大塩毒山
 7. 5 朝鮮仏教界の醜状 =通度寺の住持問題 海印寺の財物素乱=
 7. 5 ジャガタラの獄門首 小谷光子
 7. 5 数字の上から見た 在阪朝鮮人の生活相
 7. 7 マハトマ・ガンジーが 釈尊降誕会を司宰 詐偽と虚妄とを脱して愛と 真実との黎明期を迎へん
 7. 8 支那雲水の先発隊 突然学生団に遮らる 近く大阪と黄檗に寄って入洛?
 7. 9 景教碑を建てた ゴ夫人生前の研究 =達磨大師は基督の聖トマス=(基督教から見たゴルドン夫人)
 7. 9 数字の上から見た 在阪朝鮮人の生活相(承前)
 7.10 なぜ米国家宗教家を招かぬと 東亜仏教大会への注文 シャーウッド女史より
 7.10 支那雲水来る 七日神戸入港の春洋丸で
 7.10 支那問題講演
 7.11 支那の排外運動(上) (その根柢をなす思想) 法学博士 末廣重雄
 7.11 中華仏教徒との 打合せも了えて 梅曉氏近く帰東
 7.12 支那の排外運動(中) (その根柢をなす思想) 法学博士 末廣重雄
 7.12 海外に四つの 開教監督部 東本願寺の新企画
 7.14 支那の排外運動(下) (その根柢をなす思想) 法学博士 末廣重雄
 7.14 西本台湾教区の 教学財団設立
 7.15 シャム皇族の 西本願寺参拝
 7.17 上海問題と日本仏教徒 その態度を遺憾とされる
 7.19 支那服を着て 支那語学生の行商
 7.19 大なる期待と満足を以て 支那仏教徒に迎えられた 東亜仏教大会 水野梅曉氏帰来談
 7.19 失業鮮人の一傾向と 大阪内鮮協和会
 7.19 支那仏教徒寄贈の 追悼大梵鐘 暴動の止み次第發送
 7.21 「日本の教徒は愛と正義の為に 支那を援助されたし」 留美中国学生連合会代表語る
 7.23 支那僧を招待 教徒仏護団で
 7.23 支那に於ける宗教史跡(上) 伊藤忠太博士談
 7.24 支那に於ける宗教史跡(下) 伊藤忠太博士談
 7.26 『惨苦に没る朝鮮同胞を救へ』 東都の仏教徒起つ 教界に先鞭を着けた三団体
 7.26 その日の座談会 ジャガタラ 文書その他 濱田博士の土産談
 7.27 お手のものの書画を どっさり抱え込む 支那仏教徒の乗気 講演の原稿も送って来る
 7.27 朝鮮の大水害に 教徒仏護も起つ
 7.29 上海事件と基督教 民国人の国民的自覚
 7.29 東亜仏教大会 支那僧見学日程
 7.29 在支班禅喇嘛 五臺山へ避暑
 8. 1 之はとんだ間違ひ 鮮僧巖さんが 大学の教授になる等と
 8. 1 中華仏教連合会簡章
 8. 1 疑問視されてゐる 支那嘉魚県 知事の書簡 内容は仏教図書寄贈の交渉
 8. 6 正教会と天主教会が ハルビンで合同運動 二派に別れて大騒動
 8. 6 洋行し度いのも山々だが 隣邦の支那へ行き度い と一道重緑山氏の気の多さ
 8. 6 朝鮮人問題に関し 大計画を立てる 神仏信順会
 8. 7 支那問題講演 教徒仏護仏連主催
 8. 8 早くも東亜仏教大会へ 出席を申込んで来た 北京内学院の尹氏
 8. 9 支那仏教徒遠来の労を慰すべく 日支仏教関係の古書画展
 8. 9 日華印協会の映画 純益は朝鮮水害援助費に
 8. 9 西藏内乱 英国の策か 喇嘛教国独立運動 は今に始めぬこと
 8. 9 教徒仏護団と 鮮僧見学団
 8.13 朝鮮本山の 住持職 問題は普選から制限選への逆転
 8.13 『全く宗教的な 内鮮融和』 朝鮮仏教団の京都 奈良仏教巡礼団
 8.14 日支仏教徒提携の為に「東亜の合掌」創刊
 8.14 仁和寺門跡が 支那僧の追悼
 8.15 勝手の違った支那仏教 僧尼八十万、宗名を異にする八宗
 8.15 在印ペルシャ教 徒の本国に於ける復興運動 十四名の委員 本土に向け出発
 8.15 非常に成績のいい 東京仏教徒の 朝鮮水害義捐
 8.16 東京の常任幹事が専任で 東亜仏教大会の準備 支那から出席申込既に十数

- | | |
|---|---|
| 名 | 研究者の出現— 藤井草宣 |
| 1925. 8. 16 大阪に出来た 朝鮮人自治会 | 9. 18 朝鮮仏教団の 朝鮮水害救助 |
| 8. 16 朝鮮侍天教を 上帝教と改む 各宗へ
通告し来る | 9. 18 朝鮮仏教団宣伝 |
| 8. 16 最近支那に於ける 反基督教感情の原因
ホドツキン博士声明 | 9. 19 真如法親王の殉教地に 記念碑樹立は
可能なり 藤井草宣 |
| 8. 19 鮮満に於ける 基督教連盟の運動 | 9. 19 仏教朝鮮協合理事会 |
| 8. 20 朝鮮仏教団の 見学順序決定 京都仏
護団理事会 | 9. 19 支那仏教徒の好む 南禪の境致、建物
宗務本所は尚考慮中 |
| 8. 20 鮮人の生活と一 灯園生活の近似 黙
禪 | 9. 20 東亜仏教大会 地方日程略定 |
| 8. 21 タゴール翁の モスコー行き | 9. 20 東亜大会と神戸 |
| 8. 22 木村龍寛氏の帰朝と 日印学術提携 | 9. 20 民族の心に 触るる道（下） 一回教
研究者の出現— 藤井草宣 |
| 8. 23 南印度に著るしき 仏教復興運動 ガ
ンヂーの遊説か直接の原因か | 9. 23 近くその二を印成する 「支那仏教史
跡」 |
| 8. 25 東西仏教大会に出席する 中華僧俗の
人々 | 9. 27 世界的仏教運動の発生を 使命として
組織された アジヤ仏教伝道会 阿育
王の精神を継承して ビルマ・マンダ
レー市に |
| 8. 27 支那仏教に近似する 日本仏教の新傾
向 | 9. 30 日支留学生の訓練の為に 京都にも東
亜僧園 之が経営には勝平大喜氏を |
| 8. 27 『印度人はまったく 日本を誤解して
ゐた』と 日本仏徒の活動に驚く | 9. 30 組合教会派の 南洋伝道努力 政府は
六千円補助増額 |
| 8. 30 朝鮮京城に民衆的な 宗教市街を作る
計画 観音と聖徳太子を本尊として | 9. 30 叡山横川の二僧正が 支那天台に拜塔 |
| 8. 30 朝鮮と仏教 | 10. 1 印光法師が大總統に起つたら 支那は
必ず安定する と云ふ話のやうな話 |
| 8. 30 東亜仏教大会を 政府も協力する | 10. 1 支那にも教会の 児童教育問題 |
| 8. 30 朝鮮仏教団事業 本年の概況 | 10. 1 東亜大会と太虚氏 超宗派的運動と超
国家 的団結の必要を力説 |
| 8. 31 南満に於ける 洞宗の教勢 | 10. 1 東亜仏教大会へ出席する 支那各省代
表の人々 その申込が正式に来た |
| 8. 31 支那問題講演 | 10. 1 東亜大会と仏教 徒社事研究会 |
| 9. 5 大派海外開教 監督の物色難 | 10. 1 南満朝鮮と 一灯園一行 |
| 9. 6 朝鮮夫人の自覚（上） 附、朝鮮に於
ける日本仏教 高津正道 | 10. 1 支那天台の拜塔に 叡山学院教授派遣
一行の為に京都の送別会 |
| 9. 6 印度ボンベイ市に 大菩提会組織さる
光輝ある仏教を現在の印度に 復活
せしめよとバ教授の高潮 | 10. 2 東亜仏教大会出席の 支那八省代表の
人物 |
| 9. 6 ダルマパーラ 氏今秋来朝か | 10. 4 陣容全く成れる 東亜仏教大会 |
| 9. 8 朝鮮夫人の自覚（中） 附、朝鮮に於
ける日本仏教 高津正道 | 10. 4 支那僧とベ博士 |
| 9. 8 十余年の苦心漸く酬ひられ 巴利仏教
辞典完成 高楠、長井両博士によりて | 10. 4 東京市長へ引渡した 支那寄贈の梵鐘
被服廠跡の盛大なる授受式 |
| 9. 8 東亜仏教大会に対する 民国政府の誠
意 | 10. 4 朝鮮人を踏み倒して備ふ内地人 |
| 9. 9 喇嘛僧も来る | 10. 4 海外布教を盛んにせよ（布教師が殖
民の先達となれ） 京都帝大教授 藤
井健治郎氏談 |
| 9. 9 朝鮮夫人の自覚（下） 附、朝鮮に於
ける日本仏教 高津正道 | 10. 8 東亜大会に述ぶおき太虚氏の 「東亜
仏教徒大会に告ぐ」 |
| 9. 9 東亜僧園の近状 向出氏入洛 | 10. 8 内地の失業者 に排斥された 失業朝
鮮人（同情どころか仇敵視される） |
| 9. 9 北鮮長老派總會 | 10. 8 仏教研究の為に 日支交換教授の派遣
を 大会教義研究部で決議 |
| 9. 10 朝鮮神宮 | 10. 9 朝鮮の新宗教 知我教 内地へも最近
盛んに手を延す |
| 9. 13 「基督を冒瀆する者」 在印宣教師の急
所を突く 聖雄ガンジーの獅子吼 | 10. 10 西蔵語文典完成さる 川口慧海氏多年
苦心のもの |
| 9. 13 三大宗教の発祥地 パレステナ見学団 | 10. 11 朝鮮漢江大洪 水の跡より発見された
三大遺跡 |
| 9. 13 モヒ中毒に悩む 朝鮮同胞 | |
| 9. 15 支那僧一流どころ来朝 日支両国政府
の国際的後援 東亜仏教大会の準備進
む | |
| 9. 17 東亜大会と京都 | |
| 9. 17 民族の心に 触るる道（上） 一回教 | |

1925. 10. 11 渡来鮮人と水害
10. 13 日本仏教徒から 支那観光団を組織か
10. 13 大阪各団体の 支那僧歓迎協定
10. 14 仏教少年連合団の 東亜大会歓迎
10. 16 京城の宗教街計画進歩 総督府の許可をまつのみ 聖徳太子を本尊に
10. 17 近代支那仏教の常識 を養ふに水野氏の近業
10. 17 桜の国の少年少女が 牡丹の国の天使と握手 ◇…これは東亜の仏教児童大会
10. 17 支那当代一流の三居士 以下十数名を引連れて 太虚法師大会へ出席 王氏が出席せば大成功
10. 20 東亜大会近づく
10. 22 支那僧から 師事する権田氏へ
10. 27 東亜仏教大会に就て (上) 南天園 中島裁之
10. 27 反儒教思想に就いて (一) 浦川源吾
10. 27 殆んど顔触れの変った 支那の東亜大会出席者 王一亭、太虚法師等来る
10. 27 東亜大会教育事業部として 仏教学科の完成を付議 其他の重要案件委員長の手に山積
10. 28 反儒教思想に就いて (二) 浦川源吾
10. 28 東亜仏教大会に就て (中) 南天園 中島裁之
10. 28 支那僧の留学難 気候風土と生活状態の変化のため 多くは短命に終るといふ
10. 28 国内動乱のため 支那僧出発区々
10. 28 京都少年団と 支那僧歓迎
10. 28 日支国民の仏教的意識開発の為 マン字隊を組織せよ ◇…と寺本谷大教授の提案
10. 28 支那仏教と 兩本願寺の文書宣伝
10. 29 東亜仏教大会
10. 29 東亜仏教大会に際して (上) (支那僧待遇上の注意点) 村上素道
10. 29 東亜大会の効果を疑ふ。識者の越えは斯う云ふ。
10. 29 東亜大会副会長は 道階法師か
10. 29 文部省主催 支那仏徒歓迎
10. 29 東亜仏教大会に就て (下) 南天園 中島裁之
10. 30 反儒教思想に就いて (三) 浦川源吾
10. 30 東亜仏教大会に際して (下) (支那僧待遇上の注意点) 村上素道
10. 30 善隣諸家を迎へ 日支親善の根本義を論ず (上) 岡野増次郎
10. 30 支那来賓僧侶 本日神戸入港
10. 30 両国仏教徒の提携方策 を講じて帰る 二留学僧 岡野氏も支那時局に関係を絶つ
10. 31 反儒教思想に就いて (四) 浦川源吾
10. 31 東亜大会に望む 妙心教学部長 後藤 棧道
10. 31 善隣諸家を迎へ 日支親善の根本義を論ず (下) 岡野増次郎
10. 31 朝鮮が飢える 起て内地の宗教者よ!
10. 31 大阪支那僧歓迎 仏教団が単独でやる
10. 31 支那僧来る 三十日神戸から東上
11. 3 日本仏徒五千名の万歳声裡に 中華仏徒無事入京
11. 3 増上寺に於ける 支那代表
11. 3 千五百名の参集を得て 東亜仏教大会開かる 盛大であった一日の発会式
11. 3 東亜大会の 開催を祝して 文部大臣 岡田良平
11. 4 反儒教思想に就いて (五) 浦川源吾
11. 4 東亜仏教大会 多数の研究発表で賑ふ 一日の午後の教義研究部会
11. 5 東亜仏教大会 教義研究部会状況
11. 5 支那代表講演
11. 5 反儒教思想に就いて (六) 浦川源吾
11. 5 西藏に入った プラタップ氏
11. 6 東亜仏教大会 大体成功して終る 東亜仏教との欧米伝道には 宗派を越え国を超越せよ ◇…と太虚法師の獅子吼 東亜の各国に 仏徒社事連盟 莊嚴なりし 閉会式
11. 7 東亜気分
11. 7 支那の青年僧侶を刺激している 太虚氏の日本仏教観 日本仏教は密を内心としてゐる
11. 7 仏教大会 次回の開催地 今後の交渉にまつ外ない
11. 7 支那僧京都市日程
11. 7 大会終了後に於ける 支那仏教徒
11. 8 受難の朝鮮(1) 在朝鮮 稲光黎民
11. 8 内地布教家の 台湾布教に就て 東亜仏教大会にて 立正大学生 彭蓬聯
11. 8 内鮮融和の為に 彼我少青年の読本編纂 民族読本 朝鮮読本
11. 8 藏経の展観
11. 8 名古屋に於ける 支那僧一行
11. 10 清浄居士を中心にした 日文学術談話会 教義研究部特別会議の観を呈す
11. 10 名古屋と福井の 支那僧一行
11. 10 支那僧と京都
11. 11 支那僧入洛 数千の出迎へ
11. 12 基督教徒から見た 東亜大会の欧州伝道
11. 12 どう各国使臣の眼に 東亜大会が映じたか 独逸大使の失望
11. 12 又々熱をたかめ出した 支那の反基督教運動 一基督教者の声明
11. 12 内地の葬式仏教の域を脱して 台湾に台湾人の仏教を 東亜大会に出席した一行の抱負

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1925. 11. 12 支那僧一行は 進歩派に属する 民
11. 12 南都を訪うた 支那僧一行 12. 10 宗教家の居ない 朝鮮 (下) 稲光黎民
11. 12 受難の朝鮮(2) 在朝鮮 稲光黎民
11. 13 最近日支仏教の傾向 (上) 京都帝大教授 内藤湖南 12. 10 朝鮮人の仏教を朝鮮人に —その運動の第一歩に立った—
11. 13 論難三時間余に亘る 日華仏教学者の教義研究会 十一日夜突然南禅寺で開催 12. 10 朝鮮に於ける 考古学上の調査の回顧 (3) 京大囑託 梅原末治
11. 13 東亜仏教大会 東華園物語 12. 12 臨大生支那団体と連絡 仏化新青年会設立 十八日新京極で発会式
11. 13 日華仏教の相違八項 太虚久々にて長講舌を振ふ 京都の歓迎会盛況を極む 12. 13 朝鮮に於ける 考古学上の調査の回顧 (4) 京大囑託 梅原末治
11. 13 支那代表の為に 南禅の晩餐会 12. 16 ロシア展覧会と 浦潮本願寺 (太田覚眠氏の活動)
11. 14 最近日支仏教の傾向 (下) 京都帝大教授 内藤湖南 12. 16 東亜大会支那代表の 日本宗教界観
11. 14 支那に学者を派遣研究して 善導大師大法要を嚴修 浄土宗本山会議の決議 12. 17 朝鮮に於ける 考古学上の調査の回顧 (5) 京大囑託 梅原末治
11. 14 北支那の 仏教流行 12. 19 支那北京に崛起せる 仏化新青年会とは何ぞや (上)
11. 15 内鮮沖和会 鮮僧の発起で設立 12. 20 朝鮮に於ける 考古学上の調査の回顧 (6) 京大囑託 梅原末治
11. 15 日支協同研究の—具体化 燧煌発掘経の書写を快諾 =高楠博士から徐氏へ依頼の=
11. 15 東亜大会の跡 不平苦情の巻 12. 20 南京より廬山へ (上) 成瀬賢雄
11. 15 受難の朝鮮(3) 在朝鮮 稲光黎民 12. 22 支那北京に崛起せる 仏化新青年会とは何ぞや (中)
11. 17 意義ある端緒 12. 24 朝鮮に於ける 考古学上の調査の回顧 (7) 京大囑託 梅原末治
11. 17 支那仏教芸術の遺跡 (上) その保存策は急を要す 京都帝大 濱田青稜 12. 24 南京より廬山へ (下) 成瀬賢雄
11. 18 楽友会館に於ける 日支の唯識研究 12. 24 各人種と各宗教信者を集め 印度でセオソヒー大会開催
11. 18 支那仏教芸術の遺跡 (中) その保存策は急を要す 京都帝大 濱田青稜 12. 24 支那北京に崛起せる 仏化新青年会とは何ぞや (下)
11. 19 東亜大会の影響 12. 25 外務省の招待会
11. 19 支那仏教芸術の遺跡 (下) その保存策は急を要す 京都帝大 濱田青稜 12. 25 東亜大会慰労会
11. 19 日支融合の実際を知るには 「長崎を覗ねばならぬ」 福濟寺住職の躍動 12. 25 朝鮮仏教団近況
11. 19 支那來賓僧中の 留日求法者 12. 26 支那仏教視察団組織 学研十名、各宗重役十名 仏教連合会主催に決定
11. 19 東亜大会の跡 嵐の後の南善の巻 12. 26 エルサレム世界大会へ 日本基督教の態度
11. 19 受難の朝鮮(4) 在朝鮮 稲光黎民
11. 20 東亜大会の跡 近畿観光の巻 1926. 1. 1 回教と人種問題 文学博士 赤松智城
11. 21 大阪に於ける 支那僧一行 1. 5 日華仏教徒の聯結に就て 水野梅暁
11. 21 東亜仏教大会に出席せる 中華代表団 釈太虚等 日本仏教同胞に留別するの文 1. 6 東亜大会の記録
11. 22 支那僧大阪日程統報 1. 7 支那に勃興しつつある 仏教主義の社会事業
11. 22 受難の朝鮮(5) 在朝鮮 稲光黎民 1. 8 印光法師が計画せる 南京慈幼院の壮观 支那に勃興しつつある 仏教主義の社会事業
11. 25 東亜大会の次回は北京 来十七年に開くと支那側で決る 1. 10 在阪鮮人の 分布状況
11. 29 朝鮮同胞横死者慰霊の為め 東京に朝鮮寺が出来る 1. 12 朝鮮美術史研究家に望む (上) 柳宗悦
12. 3 朝鮮に於ける 考古学上の調査の回顧 (1) 京大囑託 梅原末治 1. 13 朝鮮美術史研究家に望む (中) 柳宗悦
12. 3 内鮮問題 1. 14 朝鮮美術史研究家に望む (下) 柳宗悦
12. 4 全イスラム主義の崩壊 (上) 1. 16 南洋土人に布教せよ (教へるままに信ずる彼等)
12. 5 全イスラム主義の崩壊 (下) 1. 17 日本人を諒解させたい 濠洲へ日本牧師を
12. 6 朝鮮に於ける 考古学上の調査の回顧 (2) 京大囑託 梅原末治
12. 9 宗教家の居ない 朝鮮 (上) 稲光黎

1926. 1. 21 仏教より見たる朝鮮問題（一） 文学
博士 椎尾辨匡
1. 21 『東方仏教』に 関する懇談会
1. 22 仏教より見たる朝鮮問題（二） 文学
博士 椎尾辨匡
1. 23 仏教より見たる朝鮮問題（三） 文学
博士 椎尾辨匡
1. 24 仏教より見たる朝鮮問題（四） 文学
博士 椎尾辨匡
1. 26 蒙古僧大巴林王妹を伴ひ 再び来朝する
か 仏教的に依り東亜連盟をとく
鈴江少佐の内外蒙踏査
1. 27 仏教より見たる朝鮮問題（五） 文学
博士 椎尾辨匡
1. 28 仏教より見たる朝鮮問題（六） 文学
博士 椎尾辨匡
1. 28 東北大学に於ける 西藏仏教の研究
1. 29 大阪百花村の 南清旅行団募集
1. 31 朝鮮問題の問題（上） 横江龍三
2. 2 朝鮮問題の問題（中） 横江龍三
2. 3 朝鮮問題の問題（下） 横江龍三
2. 4 東亜大会経費
2. 14 白露の將軍セミヨノフ 日本仏教徒の
援助を求む = 仏連幹事とセ將軍突然
の会見 =
2. 17 セミヨノフ將軍の提議と 仏教連合会
の態度 未だ暗中模索で將軍の手 翰
が来ねば真剣にならぬ
2. 18 内鮮問題の種々相
2. 19 『亜細亜の光』に歌詞を求めて 新し
き仏教音楽生る ◇…仏陀降誕の日に
之を放送し 各国の仏徒総てに紹介
2. 20 傲慢な支那僧
2. 21 ガンヂーの新運動たる 国民自覚の三
大綱領 昨年十二月からの転回策
2. 21 印度タゴールの大学より 高楠博士を
招聘し来る 一但し二つの理由で謝絶
す
2. 23 蒙古僧が満鉄に伝へた 日本仏教徒へ
の交歓
2. 25 支那に於ける真基督教と其影響（一）
台湾総督府囑託 在福建省 大内正
雄
2. 25 セ將軍の仏連交渉問題（セ將軍は露、
蒙の混血児）
2. 28 支那に於ける真基督教と其影響（二）
台湾総督府囑託 在福建省 大内正
雄
2. 28 太虚法師を先頭に支那仏教徒が 教育
改造の運動 東亜仏教徒に飛徹す
3. 2 大阪府内鮮協和会の 満鮮視察団
3. 5 支那僧の日本 仏教研究熱 を充すべ
く支那全土に 密教の大宣伝 真言宗
徒の大奮発
3. 5 辜鴻銘氏 ヤングイーストに 毎号執
筆
3. 5 東亜少国民の握手 神戸の国際児童大
会
3. 6 セ將軍の申出は外務省に 交渉して態
度を決める
3. 9 支那に於ける真基督教と其影響（三）
台湾総督府囑託 在福建省 大内正
雄
3. 11 全亜仏化教育社組織さる（上） 水野
梅曉
3. 11 朝鮮仏教学生
3. 12 全亜仏化教育社組織さる（中） 水野
梅曉
3. 13 支那に於ける真基督教と其影響（四）
台湾総督府囑託 在福建省 大内正
雄
3. 13 セ將軍の日本仏教徒との 提携は好ま
ぬと 外務省の大体意見
3. 13 全亜仏化教育社組織さる（下） 水野
梅曉
3. 14 支那僧の為に開設する 我国最初の仏
学院 収容学生の詮衡中
3. 16 暹羅皇帝から ヤングイーストへ援助
助
3. 18 鮮僧内地見学 日程決定
3. 21 支那留学生を 日宗青年に募る
3. 24 セイロンに帰る 二逸逸僧
3. 24 西本台湾教区廃止
3. 25 亜細亜思想の世界宣伝に 辜鴻銘、ベ
ツォルド ヤングイースト同人の提携
3. 25 「鮮人自身も自覚せよ」 同胞のために
語る安鐘哲氏
3. 25 谷大図書目録第二期事業として 西藏々
書の目録
3. 31 鮮人最密集地帯 大阪鶴橋署 管内の
近情
4. 1 怪しげなセ將軍の策動 日本の各宗教
団体に 外蒙問題を売り込む
4. 2 郵船とトーマスクックが 印度仏跡観
光団を組織 出帆は本年の暮
4. 3 始政三十年の事跡からみた 台湾の神
社と宗教
4. 3 セ將軍の日本仏徒への提言は 宗教の
合同運動（暗に労働ロンヤを非難）
4. 6 ガンヂーの国民自覚運動直後に 回印
両教徒の大争闘
4. 8 セ將軍と仏連 交渉は南禅に依頼
4. 9 全亜仏化運動と仏連 劉氏の運動好感
でむかへらる
4. 9 鮮僧一行入洛
4. 11 東亜大会紀要
4. 11 朝鮮仏教団退洛
4. 11 東亜仏教大会 映画公開
4. 13 全亜仏化教育社 運動の劉氏入洛 仏
連出張所で幹事と会見
4. 15 支那仏教徒の革命的に 改変した日本
真宗観 谷、龍岡大学に留学生殺到？

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1926. 4. 16 内地仏教は永遠の大策として朝鮮の
居士仏教を作振せよ 留学生のギブアップ
解決法として
4. 17 太虚が南洋と欧州へ 仏化教育の宣伝
に
4. 17 本派開教監督部会議
4. 20 京城に方面委員制度 朝鮮総督府 李
覚鍾氏談
4. 21 常磐博士 朝鮮帝大に転任
4. 21 朝鮮留学生の 待遇方法協議
4. 21 大阪府に必要な 鮮人方面委員
4. 22 本年初めて京城で大規模な 内鮮合同
の花祭り 南鮮一斉に挙行される
4. 24 一向はかどらぬ セミヨノフの 蒙古
宗教政策
4. 24 支那道俗二十二名列名する 国際宗教
記念碑 金石文となる東亜大会
4. 25 北京に落ついた フィッシャー博士
期待さるる東洋美術の新研究
4. 27 印度に大波乱を起した ガンヂーの
自叙伝
4. 27 回印教徒の争闘
5. 1 東方仏教協会 発会記念講演会
5. 2 帝国外交の理想と 当局の無理想(上)
(満蒙に於ける帝国の特殊利益) 京
都帝大教授 矢野仁一
5. 2 曇鸞の遺跡や血涙の 房山石経など隋
唐の 仏教文化を物語る史跡 異邦の
仏徒齊しく渴仰讃嘆
5. 4 帝国外交の理想と 当局の無理想(中)
(満蒙に於ける帝国の特殊利益) 京
都帝大教授 矢野仁一
5. 4 堺市にできる 朝鮮人夜学校
5. 4 教学関係の代 表者を中心に 支那仏
教 一視察団を組織する
5. 5 帝国外交の理想と 当局の無理想(下)
(満蒙に於ける帝国の特殊利益) 京
都帝大教授 矢野仁一
5. 5 神仏信順会の 朝鮮人無料 宿泊所建
設
5. 5 朝鮮人職工の 生活状態
5. 6 英訳法然を讃うる 詩聖タゴール と
デービット
5. 7 各国語教典伝記を翻訳 天理教が海外
宣伝の為に
5. 7 鮮人生活の 個別的調査 内鮮融合の
為に
5. 9 古印度仏教思想の 新断層 井上右近
5. 12 願愷之雜記 上 伊勢専一郎
5. 13 李王の追悼法要 縁山でこの二十六日
に
5. 13 支那仏教の視察団 ◇…は今秋十月一
日東京出発
5. 13 全亜仏化運動 いよいよ実動開始
5. 13 『マハヤーナ』 極東の精神的結合(一)
東京駐在独逸大使 ソルフ
5. 14 『マハヤーナ』 極東の精神的結合(二)
東京駐在独逸大使 ソルフ
5. 14 天空から 故李王に敬弔 十五日の仏
教内鮮敬愛会発会式
5. 15 『マハヤーナ』 極東の精神的結合(三)
東京駐在独逸大使 ソルフ
5. 16 『マハヤーナ』 極東の精神的結合(四)
東京駐在独逸大使 ソルフ
5. 16 願愷之雜記 中 伊勢専一郎
5. 18 炎熱に灼くる印度を巡る うら若き日
本尼僧の 消息と視察記(上)
5. 18 『マハヤーナ』 極東の精神的結合(五)
東京駐在独逸大使 ソルフ
5. 18 朝鮮仏教団の 花祭中止 李王殿下薨
去のため
5. 19 炎熱に灼くる印度を巡る うら若き日
本尼僧の 消息と視察記(下)
5. 19 『マハヤーナ』 極東の精神的結合(六)
東京駐在独逸大使 ソルフ
5. 19 刻々に急を告げる 朝鮮人雇用 条件
の改善
5. 23 願愷之雜記 下 伊勢専一郎
5. 26 支那教育界の反基と 大学教授連の決
議
5. 26 高砂族教化講演会 基教の生蕃伝道の
壮挙
5. 27 内鮮融和の 正道社の叫び 新聞朝鮮
時論発行
5. 27 南洋に於ける同朋の 生活状態を紹介
せんとする中島氏
5. 27 印度に於ける大学の増設と カルカッ
タ大学(一) 印度カルカッタ大学研
究室 木村龍寛
5. 28 印度に於ける大学の増設と カルカッ
タ大学(二) 印度カルカッタ大学研
究室 木村龍寛
5. 28 日本仏教徒と 全亜仏化教育社
5. 29 李王奉悼法要 仏連本部主催
5. 30 印度に於ける大学の増設と カルカッ
タ大学(三) 印度カルカッタ大学研
究室 木村龍寛
5. 30 支那にをける大衆的な最初の 釈尊降
誕会の盛況(日本の花祭にならって)
6. 1 印度に於ける大学の増設と カルカッ
タ大学(四) 印度カルカッタ大学研
究室 木村龍寛
6. 2 印度に於ける大学の増設と カルカッ
タ大学(五) 印度カルカッタ大学研
究室 木村龍寛
6. 2 全亜仏化教育 社創立大会
6. 4 印度に於ける大学の増設と カルカッ
タ大学(六) 印度カルカッタ大学研
究室 木村龍寛
6. 5 今秋東京で開かれる 汎太平洋学術大
会
6. 5 印度に於ける大学の増設と カルカッ

1926. 6. 8 夕大学(七) 印度カルカッタ大学研究室 木村龍寛
 来二十日の組合教会 朝鮮伝道記念日 献金を悉く朝鮮へ
6. 9 日宗支那布教 北京に会堂設置計画
6. 9 支那密教研究会創立 民国数百年來禁止のそれが 復興を目標にして
6. 11 印度に於ける大学の増設と カルカッタ大学(八) 印度カルカッタ大学研究室 木村龍寛
6. 11 京都市在住朝鮮人の還拜式 協会が斡旋
6. 12 念仏の中婆さんが一家を畳んで はるばる南洋の地へ 女子の海外発展のために
6. 13 自ら救はんとする 西藏を救へ日本仏教徒 カンダセにて 人類の僕 マヘンドラ・プラタップ
6. 13 印度に於ける大学の増設と カルカッタ大学(九) 印度カルカッタ大学研究室 木村龍寛
6. 13 印度に復興し行く仏教 サルナスに仏堂建立
6. 15 印度に於ける大学の増設と カルカッタ大学(十) 印度カルカッタ大学研究室 木村龍寛
6. 16 印度に於ける大学の増設と カルカッタ大学(十一) 印度カルカッタ大学研究室 木村龍寛
6. 18 南洋庁統治下の 宗教事情
6. 22 日鮮融和運動の本質と表現(上) 在京城 稲光黎民
6. 23 印度の賓客も迎へて ヤング、イースト社例会
6. 23 平凡な集會にも苦しむ 在阪鮮人基督教徒 説教にさへ正服巡査が臨検
6. 24 日鮮融和運動の本質と表現(下) 在京城 稲光黎民
6. 24 生蕃伝道曙光見ゆ 聖公会の井上伊之助氏の活動
6. 25 朝鮮の問題
6. 25 支那政界の大立者孫傳芳氏を推し 全亞仏化教育社の活動
6. 26 印度の実状
6. 26 蒙古仏教に閃光 鈴江氏の蒙文心経日本語訳
6. 27 洞宗兩大本山の 海外布教
7. 6 支那濟南で開かるる 全国基督教學生大会 に日本からも六七名出席
7. 7 朝鮮仏教団の 支部設置運動 本年度で全鮮重要都市を完了す
7. 10 朝鮮苦學生が 無縁墓地掃除
7. 11 東亞仏教大会
7. 13 印度國民運動の元首 ガンデーも参加
7. 13 在京の朝鮮同胞が 無縁墓に連日の奉仕 ◇…仏鮮の肝入りで全市一斉に
7. 14 暴状を極むる 鮮人相互団体と 緩漫な取締
7. 15 在阪鮮人基督教徒と 各派教役者
7. 17 在阪鮮人基督教信者の為 赤沢ランバズ女学院長の奔走 ある点まで諒解を得た
7. 21 河崎頼了氏の 朝鮮支那布教
7. 23 支那仏教視察 団とその人選
7. 24 庫裡を開放して鮮人教育 檀徒の反対を受けつつ決行
7. 25 本朝伝來の 梵藏古写経(上) 立正大学教授 岡教達
7. 27 亞細亞民族大会
7. 27 本朝伝來の 梵藏古写経(下) 立正大学教授 岡教達
7. 28 良き指導者を要する 支那仏教徒の現状 -野口日主氏の帰來談-
7. 28 生蕃伝道と基督教 内部の事情と諸種の考察
7. 29 現代意識より見る 東洋古典の研究 -孝経の研究- 金子白夢 一
7. 29 伝道と支那視察 基督教學生連盟の事情
7. 30 現代意識より見る 東洋古典の研究 -孝経の研究- 金子白夢 二
8. 1 現代意識より見る 東洋古典の研究 -孝経の研究- 金子白夢 三
8. 1 支那の時局をヨソに 呉佩孚氏 修養を励む
8. 1 南洋群島の 現況フ井ルム
8. 1 支那島
8. 3 現代意識より見る 東洋古典の研究 -孝経の研究- 金子白夢 四
8. 4 基督主義による鮮人教化事業 大阪「愛の園」の運動
8. 4 沢村助教授の 印度仏教芸術
8. 5 再び亞民大会へ
8. 5 印度の旅より
8. 5 全亞仏化教育社と 間宮英宗氏
8. 6 亞細亞民族連盟 内藤湖南博士の評
8. 6 龍大の岡教授 支那視察
8. 8 大阪内鮮協和会 朝鮮人住宅竣工
8. 10 アジア民族会 議一行と大本
8. 11 天理教管長の支那旅行と 海外布教研究
8. 12 印度の旅より 孟買より錫 崙の僧院へ
8. 12 亞細亞民族大会の意義(上) -「中外」社説の非を一言す- 藤井草宣
8. 13 支那の反基督教と 基督教者の運動
8. 13 ハルビン地方の宗教事情
8. 13 亞細亞民族大会の意義(下) -「中外」社説の非を一言す- 藤井草宣
8. 15 藤井草宣氏の 非を一言す
8. 15 支那の排基督教運動は 愛國運動の変形
8. 15 京大支那視察団より

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1926. 8. 17 蒙古人に 嫌はれる日本人 よく理解する露人
8. 17 朝鮮宗教界現状
8. 17 京大支那視察団 (第二信)
8. 18 京大支那視察団 (第三信) 十四日午後四時— (第四信) 十四日午後六時—
8. 18 間宮英宗氏一行の 支那漫遊所見 仏連の觀光団は十月に限る
8. 19 仏教は印度で再興できるかと 日本青年仏教徒に 印度から返答を求めて来た
8. 19 京大支那視察団 (第五信)
8. 22 京大支那視察団
8. 24 京大支那視察団
8. 25 京大支那視察団
8. 26 京大支那視察団
8. 27 京大支那視察団
8. 29 京大支那視察団
8. 31 日支宗教家交歓 太虚法師と日本仏教団
8. 31 兩本願寺と知恩院に対し 大阪仏徒社事同盟会から 殖民事業で懇談の要求
8. 31 蕃人の学生は 平安中学校に収容
9. 2 軍国主義の桎梏より 世界人類を救へ…と ガンデー他七十名の人道戦士が排徴兵の宣言を発表
9. 2 支那仏教觀光に際し 朝鮮仏徒を忘れるな 日程変更を要求する尾関管長
9. 3 京大支那視察団
9. 3 満州の貝塚発掘 瑞典皇太子御見学
9. 3 印度仏跡の 大図譜出づ
9. 11 戦乱の支那を救ふのは 仏教徒の責任だ—と 全国仏教停戦和平会設立
9. 12 支那旅行と旅費
9. 15 仏連支那仏教視察団の 決定した日程と人員
9. 15 京大支那視察団
9. 15 大派釜山別院の 開教五十年記念
9. 16 京大支那視察団
9. 17 京大支那視察団
9. 18 大がかりな 台湾僧侶の講習 妙心管長親化代理を派遣
9. 18 京大支那視察団
9. 19 京大支那視察団
9. 21 天理教本部の 満鮮布教方針
9. 21 京大支那視察団
9. 22 京大支那視察団
9. 24 智山大学の 満鮮旅行団
9. 24 在大阪鮮人モ ヒ患者と当局
9. 26 東亜仏教大会 紀要観光さる
9. 26 新嘉坡から 松宮石丈
9. 26 支那視察団の 打合せ会と出発
10. 3 鮮人基教者に対する 不当な干渉を悲しむ朴冽瑞氏
10. 3 関西に於ける 朝鮮基督教 信者の現勢
10. 3 駅頭を埋めた見送人 支那觀光団の一行出発 (支那仏教徒の熱誠歓迎)
10. 3 大阪仏教社事同盟会の 本願寺及び知恩院訪問 殖民事業の問題をもたらして
10. 3 支那觀光団雜観
10. 7 朝鮮寸言 (上) 在京城 稻光黎民
10. 7 民国の動乱と仏教 戒律なき日本仏教が不可解 ◇…だと亡命民国志士語る 市内某所に夏氏を訪ふ記
10. 7 佐伯法隆寺貫主の忠言が 支那官民へ大反響 仏教史跡保存のため
10. 8 渡支仏教団より 朝鮮の一日
10. 9 支那觀光団
10. 9 支那仏教への影響如何 日支仏教交歓に対する杞憂
10. 9 渡支仏教団より
10. 10 朝鮮寸言 (下) 在京城 稻光黎民
10. 10 西蔵のダライ喇嘛法主から 先帝に献上した金銅仏 外務省で何時しか紛失 ◇…既に他に搬出されて行衛不明…?
10. 12 新しい出版物 西蔵仏教及 び英蔵関係 水野梅曉著
10. 14 渡支仏教団より
10. 16 渡支仏教団より
10. 19 渡支仏教団より
10. 20 渡支仏教団より
10. 21 東亜仏教大会の総決算 (全国的且つ各宗的な好参考)
10. 23 渡支仏教団より
10. 24 鮮人教化は仏徒の使命 一第一は食を考へること 寺院は鮮人に開放せよ—
10. 24 新しい出版物 東亜仏教大会記要 日本仏教連合会編纂
10. 24 洞宗々会を前に 海外教学刷新 ◇…の運動で人事往來激し
10. 27 大阪府内鮮協和会 鮮人住宅近情
10. 27 東を恋ふる 揚子江 上海にて 前田聽瑞
10. 27 西本願寺の シベリヤ布教復活 太田覚眠氏が浦塩に行く
10. 28 意外な効果を収めて居る 日本の支那仏教視察団 外交と宗教の接点が了解さる
10. 28 朝鮮仏教協会が 同朋園女子部設置
10. 30 「外国語学校史の新時期」天理外語の新校舎成る
11. 2 けふ帰朝する 支那視察団
11. 2 現代意識より見たる 東洋古典の研究 —易の哲学— 金子白夢
11. 2 渡支仏教団より
11. 4 大乘仏教の印度再興 其可能性をサルチュ氏に答ふ (その一) 日本青年仏教徒 岡教達
11. 4 歓待攻めに疲れた—と 支那視察団一行帰る

1926. 11. 4 渡支仏教団より
 11. 5 仏教は所謂国民的でない サルチュ氏に答ふ(その二) 高橋久福
 11. 5 班禪喇嘛の来朝は 恐らく実現しまい 白普仁等に会った視察団の談
 11. 5 支那視察談の 帰朝歓迎会 記要の編纂
 11. 7 印度教よりの開放 サルチュ・ブラサード氏に答ふ(その三) 梅田瑞巖
 11. 9 印度教よりの開放 サルチュ・ブラサード氏に答ふ(その四) 梅田瑞巖
 11.10 西本願寺が 各宗支那視 察団を招待
 11.12 金は出す、迷惑はかけぬから 寺院を鮮人に開放せよ -朝鮮仏教会の決意-
 11.12 上海小景(上) 前田聽瑞
 11.12 要求書提出 で当惑の朝鮮に於ける ブース大将
 11.13 上海小景(下) 前田聽瑞
 11.13 現代意識より見たる 東洋古典の研究 -易の哲学- 金子白夢
 11.16 現代意識より見たる 東洋古典の研究 -易の哲学- 金子白夢
 11.16 支那観光の 臨濟歓迎会 宗内空前の盛観
 11.16 「支那満鮮の宗教」 二十日夜山口会館で
 11.17 現代意識より見たる 東洋古典の研究 -易の哲学- 金子白夢
 11.18 京城の太子街着々進む 太子の日鮮関係が興味ある連続
 11.18 朝鮮仏教漫談 大西良慶氏
 11.19 支那満鮮講演 午後一時から開会
 11.21 世界宗教事情 朝鮮の救世軍騒ぎ
 11.21 朝鮮の思想界
 11.23 内鮮融和と寺院
 11.28 支那天台山の 魚山を発見 梅谷門主の発表
 11.28 中央亜細亜発見 古画摹本展観
 11.28 日本学生基督教者による 日支親善の運動起る (日華基督教学生友誼会成立)
 11.28 香港の半日(上) -(十月二十三日)- 前田聽瑞
 12. 2 大阪、百花村の 支那玩具展
 12. 2 中亜古画 模本展覧見
 12. 2 香港の半日(中) -(十月二十三日)- 前田聽瑞
 12. 3 中華民国仏教の一大エポック 仏教宣伝と世界教育大会 =中華仏化教育社幹事会に於いて決定=
 12. 3 太田覚眠氏 波瀾を経て漸く入露
 12. 3 中亜古画 模本展覧見(承前)
 12. 4 小春日和を船出した 印度仏跡参拝団 感激にみちた間宮英宗氏
 12. 5 捨鉢に進路をとる 朝鮮苦学生
 12. 5 朝鮮同胞慰安 仏教朝鮮協会の歳末運動
 12. 5 香港の半日(下) -(十月二十三日)- 前田聽瑞
 12.11 捨兒も収容する 大連の大慈院
 12.11 満洲シベリヤ地方に於ける 百五十万朝鮮同朋の 救済運動起きるか
 12.11 日本に於ける初めての 回教々会設置
 12.11 上海浄土宗教会所
 12.15 仏教朝鮮教会が 東京市長に建言(方面委員採用に関して)
 12.23 ビナン往来 前田聽瑞
 12.25 大谷派の 台湾伝道
 1927. 1. 1 朝鮮僧侶の妻帯肉食 近く寺法を改正して公許か
 1. 6 寺産没収と革命是認 旧臘支那仏教界に起った二大問題 湖南僧侶の国民大会加入 千余の支那僧の革命運動是認 支那僧侶財産の危険 国民政府の寺有財産没収令
 1. 9 労農ロシヤの命令で 浦塩本願寺の安聴け気遣はる
 1. 9 朝鮮仏教団が十三道に支部
 1. 9 カンデイ行 -(仏牙寺詣で)- 前田聽瑞(上)
 1.13 大谷光瑞氏から 支那問題を聴くか 西本近畿布研発会式
 1.13 カンデイ行 -(仏牙寺詣で)- 前田聽瑞(下)
 1.19 露西亞の僧侶追放令に対し 浦塩本願寺は抵触せぬ =居住券制度に依りて= 朝鮮全土に亘る 大派の諒闊布教
 1.20 浦塩本願寺が 民衆から発砲され 会堂を破損 布教員は皆無事
 1.21 回々教徒と酒精
 1.26 上海の釈尊成道会 日本仏教家招待方法の設備
 1.27 名もない洞門の尼僧が 上海に観音堂を建立 -総領事館もこれを認可-
 1.27 教内の枢要人物を三百名すくって 支那の宗教視察団を組織 -支那布教に発展せんとする天理教の大計画-
 1.29 浦塩本願寺の所有権は 露政府に委ねる外ない その方が結局布教上に得策
 2. 2 支那僧初めての 工場布教
 2. 2 樺太の西岸に 西本願寺農場
 2. 2 大派朝鮮伝道日割
 2. 3 相愛美談 朝鮮苦学生から 女中さんへ真心こめた贈物
 2. 5 朝鮮仏教団留学生が 僧籍編入を忌避 それでは困ると仏連の抗議
 2. 7 東京仏連の朝鮮仏教学生 僧籍問題は誤解 京都側は了解して居る
 2.24 全支那仏教徒革命同盟 革命の巻を行く支那仏教徒
 2.24 支那天台学僧 近く来朝するか
 2.24 ダージリン紀行(上) 間宮英宗
 2.27 ダージリン紀行(下) 間宮英宗

1927. 3. 1 近く朝鮮京城に於て 内鮮仏教大会を
開催か ◇…朝鮮仏教団が之を幹旋
3. 6 内鮮仏教大会は 来る昭和四年に開催
◇…内地の各宗管長全部を招く
3. 9 印度観光団帰る 九日正午神戸着
- 3.11 台湾人二名得度
- 3.17 支那新聞を賑はした 上海知恩院の建
設 善導大師遠忌記念事業
- 3.19 「朝鮮半島仏教未曾有の計画」 全鮮仏
教大会に就き 前田朝鮮仏教団副団長
談る
- 3.23 上海に初めて呱呱の声をあげた 日本
仏教青年会 会長に小笠原輪番を挙げ
る
- 3.25 プラタップ氏より(モスコイ発) 日
本仏教徒を激励 =支那の現状をかへ
り見よと=
- 3.27 印度大陸管見(一) 画家 秦如晨
- 3.31 印度大陸管見(二) 画家 秦如晨
4. 2 南京騒乱避難者と 上海西本願寺
4. 3 一歳の戦禍から人間を救へ! 哀曲
『南京王』を聴く(上)
4. 3 英領ナタール政府が 仏教会堂を建設
する(釈迦協会が母胎となつて)
4. 3 印度大陸管見(三) 画家 秦如晨
4. 3 印度洋の颶風 曉鳥敏
4. 5 一歳の戦禍から人間を救へ! 哀曲
『南京王』を聴く(下)
4. 5 南京事件 で大乗会起つ
4. 5 朝鮮仏教団派遣の 内地留学生来る
4. 7 台湾の妙心寺
後藤棲道氏の 台湾教勢視察
護国寺の普山式
大仙巖の入仏式
4. 7 印度大陸管見(四) 画家 秦如晨
4. 7 支那と亜米利加
4. 9 天理教支那視察団 来る五月末出発か
- 4.10 内鮮融和の 実現に進む 京城龍谷女
校
- 4.10 青島より
- 4.10 印度大陸管見(五) 画家 秦如晨
- 4.14 南支動乱と新聞
- 4.14 支那動乱中心人物の歴々を 総括した
新仏教運動 軍隊仏化宣伝団組織なる
- 4.14 支那の動乱と 西本願寺の対策 出兵
の際は直に従 軍布教に着手する
- 4.17 南錫の小島に小島を友とせる チロカ、
バツボ両比丘の近状
- 4.17 動乱中の 上海から
- 4.17 上海に観音堂を設立する 仏化宣講所
の簡章
- 4.17 印度大陸管見(六) 画家 秦如晨
- 4.19 支那雍和宮の 番兵と宝物 青陵瑣談
- 4.19 仏陀伽耶寺院還付法案 印度立法議會
に提出さる
- 4.20 上海本願寺は今後 活躍の余地がある
- 報告に來た=原田布教使談
- 4.20 印度子ボール国王が 殺生禁断の法令
を出す
- 4.20 クシナガラの 涅槃塔再建
- 4.21 印度仏教徒の機関雜誌 「仏教徒印度」
を紹介す
- 4.21 印度大陸管見(七) 画家 秦如晨
- 4.22 教陣網を張る 朝鮮仏教団
- 4.23 西本海外布教 事情講演
- 4.24 南支動乱と基督教 =楽観派の観測=
生蕃の「戒名」と「葬儀」 ◇-仏壇
の注文が多くなる◇
- 4.24 支那動乱と西本
- 4.26 天理教の鮮満視察団 いよいよ来月二
十七日出発(支那視察は動乱のため
中止)
- 4.28 暹羅国宝の釈尊像来る 静岡県下で各
宗連合の奉迎法要
- 4.28 天下の珍宝と云はれる 支那の仏像
四体福岡に現る
- 4.28 常磐博士また 支那仏跡踏査 教授会
で決し愈々十日出発
5. 1 朝鮮の奇僧崔基南氏 二十九日龍谷大
学で講演した
5. 1 哈爾濱の 第一印象 盛一英
5. 5 遠大の抱負をもって支那仏教徒が 南
洋仏教連合会を組織
5. 6 東京浄宗豊島組寺院有志の 満鮮視察
団
5. 8 動乱の支那を濟ふべく 武漢仏化新青
青年会の活動
5. 8 在支二十年の基教牧師が 南京に寺院
を建立(仏教と基教の契合を実証し
て) 開山ライヘルト(艾香徳) 来朝
- 5.10 大派南支開教の報告 光暢法主に大内
開教使から
- 5.10 同車して西下した 三大東洋学者 レ
ヴィ・胡適・高楠三博士
- 5.12 仏教と史学とへ進んでゐる 新人胡適
氏の人物 水野梅曉氏談
- 5.15 階級的意識を備へて來た 支那農民運
動の現情
- 5.15 朝鮮京城に 仏寺建立か
- 5.17 大阪基教青年会社会部 移殖民相談部
開設
- 5.19 京城教信
- 5.19 鮮仏団全鮮支部 発会式挙行
- 5.21 京城に基督教 青年会館を建つ 三十
万円の建築費
- 5.21 浄土宗北豊宣揚会の 満鮮旅行
- 5.22 海外移殖民の現状 新制の移住組合法
は無 産階級には難くない
- 5.22 鮮陣と神社信仰 一水の信仰一神宮の
守護 近畿神職会旅行団帰來談
- 5.22 支那の農民運動でも 宗教宣教師を排
斥

1927. 5. 26 支那に於ける一 基督教の将来
5. 26 天理教の鮮満視察団 いよいよ明二十七日夜出発 一行五十名内外で行程廿二日間
5. 31 班禪喇嘛会见記(上) 奉天黄寺にて 藤井草宣
6. 1 班禪喇嘛会见記(中) 奉天黄寺にて 藤井草宣
6. 3 班禪喇嘛会见記(下) 奉天黄寺にて 藤井草宣
6. 4 大連市外星ヶ浦に 前執政段祺瑞氏を訪ふ(上) 大連にて 藤井草宣
6. 5 大連市外星ヶ浦に 前執政段祺瑞氏を訪ふ(中) 大連にて 藤井草宣
6. 5 臨濟妙心寺派の 開教状況
6. 7 大連市外星ヶ浦に 前執政段祺瑞氏を訪ふ(下) 大連にて 藤井草宣
6. 8 哈爾濱から 盛一英
6. 9 各宗委托の朝 鮮学生茶話会
6. 9 街頭雑感 隣国の右派 高津正道
6. 12 第二回アジア民族会議 今年は十一月北京にて開催
6. 12 内地仏教各宗永年の懸案 鮮人仏化可能の端緒 朝鮮仏教団の支部完成と共に
6. 12 エルサレム 宣教会議討議問題 仏基提携問題
6. 16 頗る好成績を 示して居る 朝鮮布教学生
6. 17 京城通信
6. 25 北京に勃興せる 三時学会を観る(一) 三時学会に宿りて 草宣生
6. 25 行き悩める 朝鮮の宗教
6. 25 東寺大学生の 鮮満伝道旅行
6. 26 北京に勃興せる 三時学会を観る(二) 三時学会に宿りて 草宣生
6. 28 北京に勃興せる 三時学会を観る(三) 三時学会に宿りて 草宣生
6. 30 北京に勃興せる 三時学会を観る(四) 三時学会に宿りて 草宣生
7. 1 新しい出版物 支那仏教史講話 上巻 境野黄洋著
7. 2 エルサレム への協議問題 各地基教界を 緊張せしむ
7. 2 「宣教師問題も出る 太平洋問題調査会」
7. 2 京城教信
7. 3 京城仏教慈 濟院を観る 一禿堂一
7. 3 大阪に於ける 基教連盟の エルサレム 会議打合せ 念に念を入れる 提出議題
7. 3 エルサレム 会議に 外務省の 眼光る 原因は何んでもない 誤解から
7. 3 支那革命と 宣教師問題 (教会の 独立は未だし)
7. 3 朝鮮釜山に 仏教会館を 建てる 仏教団の計画
7. 6 来年海外布教に従事する 若人達の 見学団 天理外語学生の 海外宗教視察
7. 6 上海西本願寺 七万円の 敷地
7. 7 日支両国の 提携を 宗教家の 握手から 始める 大本教の 計画漸次進む
7. 7 エルサレム 議題と 同志社 委員会
7. 10 鉄網の上海に 勇躍せる 太虚法師の 一派(一) 藤井草宣
7. 12 日支に亘って 善導大師の 二十五霊場 華頂布教師会 委員会
7. 12 鉄網の上海に 勇躍せる 太虚法師の 一派(二) 藤井草宣
7. 12 八十一才の 儉伽前智山 老管長 鮮満旅行に 出かける
7. 13 異郷に 労働する 朝鮮同胞 楸安 長崎 県下伊那水田で
7. 13 鉄網の上海に 勇躍せる 太虚法師の 一派(三) 藤井草宣
7. 13 浄宗支那 開教区会
7. 14 印度の大乗 仏教 ◇…研究に 木村博士 精進
7. 14 鉄網の上海に 勇躍せる 太虚法師の 一派(四) 藤井草宣
7. 15 古代印度の 僧衣 帝大教授 文学博士 松本文三郎 一
7. 15 鉄網の上海に 勇躍せる 太虚法師の 一派(五) 藤井草宣
7. 16 古代印度の 僧衣 帝大教授 文学博士 松本文三郎 二
7. 16 増山龍大教授の シャム行き 来月四日 神戸発
7. 17 古代印度の 僧衣 帝大教授 文学博士 松本文三郎 三
7. 17 朝鮮人に 倣って モヒ注射 をする 内地人が 殖へた 中には コカイン をやるもの さへある
7. 19 古代印度の 僧衣 帝大教授 文学博士 松本文三郎 四
7. 19 仏教朝鮮 協会で 朝鮮人 分布 大地図 作成
7. 20 古代印度の 僧衣 帝大教授 文学博士 松本文三郎 五
7. 20 三道を残した 鮮仏団支部 全鮮仏教大会 は十月に 決定
7. 20 殺害されても… 帝国主義の 犠牲 再び 支那革命と 宣教師問題 注目すべき 清水氏の 文献
7. 22 東寺大学 満 鮮旅行 通信
7. 24 東寺大学 満 鮮旅行 通信
7. 26 仏教発祥の 地 印度に 於て キリスト教 大会
7. 27 人類文化に 対する 東洋諸宗教の 貢献(上) 組合教会 理事 海老沢 亮
7. 27 日本政府 今次の 出兵に 対し 中華 仏徒より 意見 開陳
7. 27 エルサレム への 代員 派遣に 就て

1927. 7. 28 人類文化に対する 東洋諸宗教の貢献
(中) 組合教会理事 海老沢亮
7. 28 渡辺海旭氏の 支那時局観
7. 28 青島の半日(上) 船中にて 草宣生
7. 29 人類文化に対する 東洋諸宗教の貢献
(下) 組合教会理事 海老沢亮
7. 30 支那仏教研究の新方向(上)
常磐、関野両博士共著「支那仏教史
跡」完成に当りて 文学士 幸村法輪
7. 30 朝鮮成興郡に 寺院建設計画 西本開
教々務所で
7. 30 東寺大学満 鮮旅行通信
7. 31 支那仏教研究の新方向(中)
常磐、関野両博士共著「支那仏教史
跡」完成に当りて 文学士 幸村法輪
7. 31 無産政党で絶対多数を占める 在阪朝
鮮人有権者
7. 31 浦塩市在住の 邦人で結んだ 西本紫
雲講
7. 31 青島の半日(下) 船中にて 草宣生
7. 31 朝鮮雑記 =或る文化政治の横顔=
森島黎民
8. 2 支那仏教研究の新方向(下)
8. 2 エルサレム議題調査大阪委員から 市
内教育関係者に 四ヶ条の質問
8. 2 浄宗樺太開教資談-近く基本金募集
8. 3 『異邦人』『異教徒』等の言葉を除去
すべく(エルサレム会議に提出の議)
大阪基督教界で計画
8. 4 朝鮮雑記 =或る文化政治の横顔=
森島黎民
8. 5 登山気分が濃厚であった 朝鮮の共生
会の 結衆とその将来
8. 7 朝鮮雑記 =或る文化政治の横顔=
森島黎民
8. 9 光暢法主 朝鮮巡教
8. 10 大派朝鮮開教 五十年記念 ◇…と国
境軍の慰問
8. 10 満鮮支那古賢の跡へ =釜山にて(第
一信) = 大谷大学鮮満支那見学団
8. 11 日本に善導霊場より 支那遺跡に建塔
8. 11 海外に発展する 村雲婦人会
8. 12 谷大鮮満北 支見学団(第二信)
8. 14 仏連へ来た出兵非難の通告は 朝鮮独
立党員の仕業?.
8. 14 朝鮮の共生結衆(一) 橘乃公
8. 16 全鮮に亘りて大派の 開教五十周年記
念伝道
8. 17 朝鮮僻陋地の 学校慰問
8. 18 仏派朝鮮の 新布教場
8. 20 印度の聖業に対する 日本仏教徒の冷
淡
8. 26 光暢法主の 朝鮮巡回日程
8. 27 西本映画班の 台湾巡回
8. 28 寛永九年に日本の武士が カンボチャ
の仏跡へ参拝 ◇…印度の祇園精舎と
間違えて 遼塚麗水氏此の遺跡を発見
8. 30 光暢法主の 朝鮮巡教は 御芽出度で
延期か
9. 1 光暢法主の 朝鮮巡教は 明秋に 延
期
9. 2 支那基督教の将来 列強の干渉が支那
を壊す
9. 2 デーリング大司教の 印度帰任
9. 2 奉天より北京に 大谷大学鮮満支那見
学団 穂積龍瑞
9. 4 大本教の王仁三郎氏が 再度蒙古入を
する 今秋十月に出掛るといふ、北京
の章嘉喇嘛を足がかかりとし内蒙に勢
力を張る
9. 7 善導聖忌と日支親善(上) 江藤激英
9. 7 暹羅先帝の記念に パリ語聖典の寄贈
9. 7 間島の越山 別院の発展 -樋口主任
の奮闘-
9. 7 支那、天童浄祖禅師の 今年は七百回
忌に当る -越山では十七日山内限の
法要
9. 8 善導聖忌と日支親善(中) 江藤激英
9. 9 善導聖忌と日支親善(下) 江藤激英
9. 9 蓮花生菩薩の研究者 駐支フランス領
事 館のト博士が来朝
9. 9 エルサレム宣教会議で 東京教職者懇
談
9. 14 大派間島の 鮮人少年少女会
9. 14 齊藤総督の帰朝を待って 朝鮮仏教大
会期日決定
9. 15 支那の基督教化運動は 経済、社会方
面に迄進む ◇…併し実行は困難だ
9. 15 満蒙奇観 箕田覚念居士
9. 17 平和記念の為め 満州の野に 日蓮建
像
9. 18 「支那政府が青島に 国営で捨児を収
容 宮崎小八郎氏の土産話」
9. 18 善導忌大遠忌法要には 支那からも参
拜団 日本からも巡拝団を送る
9. 18 今後のシベリア 開教は如何 太田覚
眠氏の後継者が必要
9. 20 谷大見学団の 五台山行 稲葉教授談
9. 20 仏教朝鮮協会 関西支部設置
9. 23 赤松智城氏の 京城行き
9. 24 朝鮮少年専門の 保護所がほしい 大
阪少審での熱望
9. 24 大谷派朝鮮開教五十年 法要と記念の
諸事業
9. 24 国境慰問の旅(一) 恵山鎮より新艺
坡鎮まで 藤波大圓
9. 24 天理教の海外宣伝 二十周年大祭にプ
ランを発表
9. 28 国境慰問の旅(二) 恵山鎮より新艺
坡鎮まで 藤波大圓
9. 29 モヒ毒征伐 ◇…をやりたいと仏鮮の
希望

1927. 9. 29 日露国民の 社交機関 浦塩本願寺から 日露協会へ提議
9. 29 朝鮮同胞を まごつかせぬため 東京駅へ指導係
9. 29 国境慰問の旅(三) 恵山鎮より新艺坡鎮まで 藤波大圓
9. 30 国境慰問の旅(四) 恵山鎮より新艺坡鎮まで 藤波大圓
10. 1 外遊雑記(一) 曉烏敏
10. 1 国境慰問の旅(五) 恵山鎮より新艺坡鎮まで 藤波大圓
10. 1 王仁三郎氏の 蒙古入中止 七ヶ年間の事件中の整理で
10. 2 エルサレム大会 ◇…と日本連盟への非難
10. 2 浄土宗が支那に 逆伝道するの有利
10. 2 いよいよ本物になった 善導遺跡参拝団 日支親善の髓と喜ぶ
10. 2 小林正盛氏の 朝鮮視察
10. 2 豊山留学生の 祖山拜塔
10. 4 外遊雑記(二) 曉烏敏
10. 4 仏教朝鮮協会のモヒ征伐は 大阪では不賛成
10. 4 日緬仏教徒の提携 ◇…を主唱する緬甸僧 京都浄土宗で大に歓迎する
10. 5 支那を偲ぶ集ひ 向出東亞函主を迎へて
10. 6 朝鮮視察 団を募集
10. 6 中央仏教護国団へ 朝鮮協会も 合体か
10. 6 ビルマ比丘と語る 保阪旭静(授)
10. 7 支那仏教視察 紀行近く上梓
10. 7 セイロン便り 浄土宗留学生 松本徳明
10. 8 シャム皇帝からの仏像は 皇太子時代来遊の際の お約束をはたすため
10. 9 エルサレム宣教会議に就て 日本基督教連盟幹事 宮崎小八郎
10. 9 日本を去る ビルマ僧
10. 9 豊山最初の 朝鮮布教場 鎮海布教場の発展
10. 11 支那の広東大学が 宗教其他の文献調査 東大史料編纂で調査に着手
10. 12 暹羅国王より遥々寄納の 仏像を迎へる日本仏徒 本月末の奉迎式後梵王山上に
10. 13 中華民国に於ける 経済関係の基督教化
10. 16 台湾の本派 婦人会奨励
10. 19 シャム仏像 奉迎会
10. 19 宮沢法主が先頭に 支那善導遺跡 巡拝団に参加希望
10. 20 現実的效果を疑はれる エルサレム会議
10. 20 近く入洛する プラタップ氏
10. 25 プ氏入洛 直に日本を発して 東亞民族大会へ
10. 26 朝鮮仏教大会の開催 ◇…は昭和四年と略定る
10. 27 印度に在る 木村龍寛 氏の著書
10. 27 本派台北別 院建築募財 二十五万円
10. 28 羽溪了諦氏著『西域之仏教』の改題増補出版
10. 29 エルサレム会議は 世界的に行詰った 宣教師の局面展開策 やはり効果は乏しからう
10. 30 朝鮮仏教団 支部発会式
11. 1 大谷光瑞氏の 北京行き
11. 3 暹羅仏像奉迎 式次決定
11. 5 南洋から
11. 8 仏像奉迎の実況写真を 暹羅皇帝に献上する
11. 8 後藤子等の招きで 蒙古カラチン王来る 高鍋日宗司監が出迎え
11. 10 梵王山日蓮寺に於ける 暹羅仏奉送の盛観 =名古屋市空前の群衆=
11. 10 暹羅雜記 龍谷大学教授 増山顕珠
11. 11 仏像奉迎映画試写
11. 13 暹羅雜記 龍谷大学教授 増山顕珠
11. 15 清蒙政策
11. 15 マハーバーラタ梗概(一) 駒沢大学々 監 山上曹源
11. 16 朝鮮人問題
11. 16 マハーバーラタ梗概(二) 駒沢大学々 監 山上曹源
11. 16 第二回亞細亞 民族会議より
11. 17 マハーバーラタ梗概(三) 駒沢大学々 監 山上曹源
11. 17 全朝鮮仏教大会は 来年の運びには行かぬ
11. 17 光瑞、尊由両氏の 北京行き 一骨董買入れの為か
11. 17 計画が一つも狂はず 完備した鮮仏団 第二期事業の為め東京で大会合
11. 18 マハーバーラタ梗概(四) 駒沢大学々 監 山上曹源
11. 19 マハーバーラタ梗概(五) 駒沢大学々 監 山上曹源
11. 20 国境慰問の旅(六) 藤波大圓
11. 20 仏教朝鮮協会大阪支部が 朝鮮人少年の保護をやる
11. 20 イエス使徒聖トマの 印度宣教の証
11. 20 『わが国辱シ ンガポール』 守屋女史講演会
11. 20 曹洞宗新任 海外布教使
11. 22 国境慰問の旅(七) 藤波大圓
11. 23 国境慰問の旅(八) 藤波大圓
11. 27 暹羅雜記 龍谷大学教授 増山顕珠
11. 27 五台山の印画
11. 27 国境慰問の旅(九) 藤波大圓
11. 30 国境慰問の旅(十) 藤波大圓
11. 30 左藤義詮氏の 回教研究

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1927. 12. 1 国境慰問の旅 (十一) 藤波大圓
 12. 1 基教学生同盟からも エルサレムへ費用の募金運動
 12. 4 朝鮮仏教団の 各宗幹部招待
 12. 4 哈爾濱便り
 12. 4 国境慰問の旅 (十二) 藤波大圓
 12. 8 西藏仏教の権威 河口慧海 氏講演会 高楠博士らの発 起で組織される
 12. 8 暹羅雜記 龍谷大学教授 増山顕珠
 12. 10 国境慰問の旅 (十三) 藤波大圓
 12. 11 海外宗教事情 ガンधीの皮肉
 12. 11 国境慰問の旅 (十四) 藤波大圓
 12. 11 暹羅雜記 龍谷大学教授 増山顕珠
 12. 13 エルサレム会議に対し 鈴木大拙、石塚龍学の両氏 仏教信仰の声明書 ケ子スサーンダース氏の 仏耶両教徒間融和運動
 12. 15 日支親善のくさび —善導讚仰会の歓喜 官民に亘って大歓迎
 12. 15 国境慰問の旅 (十五) 藤波大圓
 12. 17 海外宗教事情 国民革命治下の仏教徒
 12. 17 支那の石 仏画展覧
 12. 17 朝鮮總督府寺 刹令一部改正
 12. 17 京城教信
 12. 18 暹羅雜記 龍谷大学教授 増山顕珠
 12. 18 朝鮮仏教大会は 昭和四年に延期
 12. 24 現代の支那仏教について 劉公使と語る (上) 友松圓諦
 12. 25 現代の支那仏教について 劉公使と語る (下) 友松圓諦
 12. 25 南洋アカリツ宗教と 土人に仏教を教るまで (上) パラオ布教所駐在 武村義昌
 12. 27 南洋アカリツ宗教と 土人に仏教を教るまで (下) パラオ布教所駐在 武村義昌
 12. 28 在滿朝鮮人問題 三浦参玄洞
 12. 28 喇嘛寺を学校に改む 外蒙古に於ける露国の活躍
 1928. 1. 5 今年の世界宗教大会と 支那国民運動と宗教界
 1. 6 蒙古に起った 新しい宗教団体
 1. 8 露国文壇の近頃 —ハルピンだより—
 1. 12 大阪に於ける エルサレム会議 提案調査委員報告
 1. 12 南洋雜記 新嘉坡 經谷孝道
 1. 14 支那留学生の 実情調査
 1. 15 南洋雜記 (二) 新嘉坡 經谷孝道
 1. 18 南洋雜記 (三) 新嘉坡 經谷孝道
 1. 19 海外宗教事情 宗教学の権威印度に
 1. 19 南洋雜記 (四) 新嘉坡 經谷孝道
 1. 20 南洋雜記 (五) 新嘉坡 經谷孝道
 1. 20 博多灣頭に竣成した 蒙古大供養塔 落慶法要には喇嘛が遥々参拝
 1. 21 南洋雜記 (六) 新嘉坡 經谷孝道
 1. 22 暹羅答礼使 盛な見送り
 1. 22 南洋雜記 (七) 新嘉坡 經谷孝道
 1. 24 暹羅国皇帝陛下へ奉った 仏教連合会の上表文
 1. 24 南洋雜記 (八) 新嘉坡 經谷孝道
 1. 26 大阪に於ける エルサレム会議 調査報告 [続]
 2. 1 支那の正月より 滿州開原本願寺出張所 長谷川隆英
 2. 2 仏教に対する ガンधीの態度 (上) ヤングイースト社 佐野甚之助
 2. 2 支那禪の完成者六祖伝 を伝教大師が将来した 三階教以来の興聖寺の発見
 2. 3 仏教に対する ガンधीの態度 (中) ヤングイースト社 佐野甚之助
 2. 4 仏教に対する ガンधीの態度 (下) ヤングイースト社 佐野甚之助
 2. 4 朝鮮基督教者の 奇怪な行動 在滿鮮人 圧迫に就て
 2. 5 ハルピンで行はれた クレスチーニエ祭
 2. 7 香港の經谷君へ (一) 上原芳太郎
 2. 8 香港の經谷君へ (二) 上原芳太郎
 2. 9 香港の經谷君へ (三) 上原芳太郎
 2. 10 香港の經谷君へ (四) 上原芳太郎
 2. 11 本願寺派台湾 開教使会議 —協議事項—
 2. 11 香港の經谷君へ (五) 上原芳太郎
 2. 14 支那の孝治主義 (一) 文学博士 桑原隲蔵氏
 2. 15 支那の孝治主義 (二) 文学博士 桑原隲蔵氏
 2. 16 支那の孝治主義 (三) 文学博士 桑原隲蔵氏
 2. 17 支那の孝治主義 (四) 文学博士 桑原隲蔵氏
 2. 18 支那の孝治主義 (五) 文学博士 桑原隲蔵氏
 2. 19 台北の花祭 大谷派が当番
 2. 20 トルコ見聞 (上) 二十日出逸暁
 2. 20 暹羅の珍しい古仏像 —東大文学部に寄贈さる—
 2. 22 トルコ見聞 (中) 二十日出逸暁
 2. 23 トルコ見聞 (下) 二十日出逸暁
 2. 24 京都基育主催で 支那見学旅行
 2. 26 中華の居士、谷正明氏 日本仏教の研究
 3. 1 台湾本島人の 教師を養成
 3. 3 遥かに朝鮮の一角にて 『中外日報』を読みつつ (一) 朝鮮、咸南の国境 恵山鎮にて 曹洞宗布教所 内藤義山
 3. 4 遥かに朝鮮の一角にて 『中外日報』を読みつつ (二) 朝鮮、咸南の国境 恵山鎮にて 曹洞宗布教所 内藤義山
 3. 4 中華僧志願の來朝
 3. 6 遥かに朝鮮の一角にて 『中外日報』を読みつつ (三) 朝鮮、咸南の国境

1928. 3. 7 恵山鎮にて 曹洞宗布教所 内藤義山
大派朝鮮の 普通学校
3. 7 遥かに朝鮮の一角にて 『中外日報』
を読みつつ (四) 朝鮮、咸南の国境
恵山鎮にて 曹洞宗布教所 内藤義山
3. 8 印度の自由と宗教の統合 人類の僕
エム、プラタッパ
3. 8 上海の東亜僧園に 日語学校を設置
—日支仏教と接近の爲め—
3. 8 青島日紡の 入仏式
3. 8 博多に來た ラマ僧一行
3. 8 一般から閑却されてゐる 問島の殖民
的価値
3. 8 遥かに朝鮮の一角にて 『中外日報』
を読みつつ (五) 朝鮮、咸南の国境
恵山鎮にて 曹洞宗布教所 内藤義山
3. 9 遥かに朝鮮の一角にて 『中外日報』
を読みつつ (六) 朝鮮、咸南の国境
恵山鎮にて 曹洞宗布教所 内藤義山
3. 10 遥かに朝鮮の一角にて 『中外日報』
を読みつつ (七) 朝鮮、咸南の国境
恵山鎮にて 曹洞宗布教所 内藤義山
3. 11 浄土宗開教事業 樺太に七教会所
3. 11 大派僧侶の 上海見学計画
3. 11 蒙古軍供養塔除幕式に カラチン王遂
に來らず
3. 11 台湾本島人の 僧侶養成と 台北仏教学
院
3. 11 遥かに朝鮮の一角にて 『中外日報』
を読みつつ (八) 朝鮮、咸南の国境
恵山鎮にて 曹洞宗布教所 内藤義山
3. 15 蒙古軍供養塔 を廻ぐる噂そのまま
3. 15 エルサレム會議に 支那代表から 国
交問題を
3. 17 古代波斯文化と仏教(1) 羽溪了諦
3. 18 古代波斯文化と仏教(2) 羽溪了諦
3. 18 太田覚眠氏の 露国定住資格 と所得
税に関する抗議
3. 18 浦塩市に日 本居留民の 忠魂碑建設
3. 20 古代波斯文化と仏教(3) 羽溪了諦
3. 20 上海に新設された 天理教の伝道庁
3. 21 古代波斯文化と仏教(4) 羽溪了諦
3. 23 古代波斯文化と仏教(5) 羽溪了諦
3. 23 印度より(上) 長谷部隆諦
3. 24 古代波斯文化と仏教(6) 羽溪了諦
3. 24 印度より(中) 長谷部隆諦
3. 25 古代波斯文化と仏教(7) 羽溪了諦
3. 25 雑誌「仏教徒印度」から 全印度仏教
大会の提議
3. 25 セイロン 仏教徒の 馬來半島伝道
3. 25 朝鮮仏教団の 本年度留学生
3. 27 印度より(下) 長谷部隆諦
3. 27 暹羅國 の繁栄
3. 27 朝鮮僧侶の 觀光団來阪 中央教務
院主催
3. 27 亜細亞問 題講演会
3. 28 大派の鮮 人留学生
3. 29 香港より
3. 29 いやいよ幕を開けた エルサレム會議
3. 30 阿片と博奕と(上) ハルビン 豊島
欽爾
3. 31 阿片と博奕と(下) ハルビン 豊島
欽爾
3. 31 内地の仏教事情視察の目的で 朝鮮本
山住職の一行 ◇…二十余名東京に入
る
4. 5 朝鮮人モヒ患者問題 際限がないとて
放っておけるか? 大阪に於る悲惨な
現情
4. 5 暹羅の皇帝より賜った 日本仏教徒へ
の勅語
4. 7 エルサレム會議に於て 人種問題に関
し 朝鮮代表日本代表を反駁す
4. 8 朝鮮人モヒ患者問題(承前) 際限が
ないとて放っておけるか? 大阪に於
る悲惨な現情
4. 11 朝鮮僧と 東本願寺
4. 12 印度仏跡 幻灯写真 ◇…と講演の夕
4. 12 人種の偏見除去を決議して エルサレ
ム會議終る
4. 12 仏鮮留学生 ◇…の担当宗派決定
4. 13 亜細亞意識を高調 ◇…したプラタッ
プ氏講演会
4. 14 釜山より 花祭り
4. 15 河南に於ける 仏回兩教 徒の訌争
4. 15 花まつりの夕べの会衆が アフガニス
タ ン王に感謝状
4. 15 仏鮮と仏教会の 合同愈よ実現 先づ
復興の整理に力を注ぐ
4. 15 京城教信
4. 15 義州幼稚園
4. 15 本派朝鮮長 承浦出張所
4. 17 仏教朝鮮協会の紛擾は 一種の労働争
議 —死守する決心の横井主事—
4. 18 蒙古留学生 大本教で養成 —既に十
人の貴族子弟來朝—
4. 19 濟州島共済組合の 簡易住宅建設
4. 22 善導大師に与へし 景教の感化
4. 22 「善導大師に与へし景教(基 督教)
の感化」に就いて(一) 外村吉之介
4. 24 馬賊と六〇六(上) ハルビン 豊島
欽爾
4. 24 「善導大師に与へし景教(基 督教)
の感化」に就いて(二) 外村吉之介
4. 25 馬賊と六〇六(中) ハルビン 豊島
欽爾
4. 25 仏教信仰を通じて 兩國の親善に資す
る ◇…暹羅皇帝の御希望
4. 25 暹羅答禮使 一行歸朝す
4. 25 「善導大師に与へし景教(基 督教)
の感化」に就いて(三) 外村吉之介
4. 25 大邱教信

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1928. 4. 25 台北西本別院 地鎮式
 4. 25 大派朝鮮 の諸会合
 4. 26 馬賊と六〇六 (下) ハルピン 豊島
 欽爾
 4. 26 「善導大師と与へし景教 (基 督教)
 の感化」に就いて (四) 外村吉之介
 4. 28 日支親善と 善導奉讃 会の景気
 4. 29 済州島共済組合の組織と 一般朝鮮人
 の問題
 5. 3 帝国社会教化団主催 シヤム国答礼使
 一行 帰朝講演会
 5. 6 人口の問題と国際上の正義 (上) 中
 川新吾
 5. 8 権田正大総長の 朝鮮仏教視察
 5. 10 本派米開教使養成所の 海外事情研究
 を拡充
 5. 10 山東出兵と各宗派の慰問
 5. 11 山東出兵と各宗派の慰問
 5. 12 山東出兵と各宗派の慰問
 5. 12 仏連、支那の時局に鑑みて 布教権獲
 得運動に立つ 時局の進展は極力注意
 5. 13 善導大師と景教 (道旒氏の謬論を破す)
 佐々木功成 一
 5. 13 殖民地における小作争議 八千の荷衣
 島民苦衷を 日農組合に訴ふ
 5. 13 山東出兵と各宗派
 5. 13 基督教青年会同盟の 海外事業の充実
 5. 13 朝鮮三十一本山連合の 仏教専修学校
 開設
 5. 13 人口の問題と国際上の正義 (中) 中
 川新吾
 5. 15 善導大師と景教 (道旒氏の謬論を破す)
 佐々木功成 三
 5. 15 山東出兵と各宗派
 5. 15 支那布教権獲得運動は 火事泥式で不
 可 仏連幹部の間に反対意見
 5. 15 京城の花祭 五月廿六日、陰曆四月八
 日
 5. 16 浄土宗従軍 布教使派遣
 5. 17 善導大師と景教 (道旒氏の謬論を破す)
 佐々木功成 四
 5. 17 善導大師と景教 (道旒氏の謬論を破す)
 佐々木功成 五
 5. 17 支那布教権獲得に就ては 研究に止め
 て運動せぬ 排日思想の醸成を懼れ…
 5. 17 人口の問題と国際上の正義 (下) 中
 川新吾
 5. 20 支那の天童山上に 道元の記念建碑
 ◇…を為せと学究から進言
 5. 22 大阪本化聖教団 済南事件犠 牲者追
 弔会
 5. 22 支那南北両軍に対し 喇嘛が和平勧告
 5. 22 山東出兵に対し 日宗の慰問
 5. 22 本派シベリヤ開教総長 太田覚眠氏の
 後継者を物色
 5. 23 浄土教と景教問題 カトリックから反
 対 鈴木某氏が「声」で発表
 5. 24 済南事件と 在支天理教
 5. 24 梅谷座主の灌頂に 支那留学生 十二
 名入壇 信仰上の日支親善の歓談
 5. 24 公教で発表した セイロンの 宗教勢
 力
 5. 24 大派朝鮮の開教使転任
 5. 25 同志社で 支那問題 の獅子吼 一 日
 本人をどう見てゐるか
 5. 25 大派天津たより
 5. 27 密教研究の 中華民人 醍醐で事相研
 究
 5. 27 素破しい回教徒の覚醒 (上) ーア
 マジャ運動の展開ー
 5. 27 旅順より
 5. 29 素晴らしい回教徒の覚醒 (中) ーア
 マジャ運動の展開ー
 5. 29 大連より
 5. 29 済南婦人会の活動
 5. 29 済南の追弔会
 5. 30 素晴らしい回教徒の覚醒 (下) ーア
 マジャ運動の展開ー
 5. 30 安東県より
 5. 31 赤い坊さん浅野研真氏が上海大学から
 招かれる
 5. 31 平壤から
 6. 2 京城教信
 6. 2 開教の先達「日持」を偲ぶ
 6. 3 北京本願寺の慰問状況
 6. 5 日本基督教徒は挙って 出兵撤退に尽
 力 されたしと支那教徒の依頼
 6. 6 善導遺跡参拝団 支那動乱で延期にな
 る
 6. 8 遼の国の夏より (上) ハルピン豊島
 欽爾
 6. 8 青島より
 6. 9 遼の国の夏より (下) ハルピン豊島
 欽爾
 6. 10 京城から
 6. 12 印度現時の仏教 (上) 長谷部隆諦
 6. 13 印度現時の仏教 (中) 長谷部隆諦
 6. 14 印度現時の仏教 (下) 長谷部隆諦
 6. 14 朝鮮仏教将来の爲めに仏専開校期待さ
 る
 6. 19 立大が創立二十五周年に当たり建学精
 神を世界に宣伝 太平洋上に二十五箇
 を流函
 6. 20 世界宣教大会のメッセージ基督教の
 使命
 6. 23 シンガポールで南洋仏教協会創設
 6. 29 朝鮮仏教団布教学生会
 6. 29 智大の鮮満伝道団
 7. 1 海外布教埃たた記 (一) 手島近侍
 7. 4 台中の不祥事件につき朝鮮統治に三省
 を要求 三浦参玄洞 (上)
 7. 5 白井成充教授の朝鮮人形寄贈

1928. 7. 5 海外布教埃たた記(二) 手島近侍 城
7. 5 本派支那開教主任會議復活する 8. 9 滿蒙奇觀(二) 箕田覚念
7. 5 森本瑞明氏の南洋巡遊 8. 9 仏専講演部の朝鮮伝道旅行
7. 5 台中の不祥事件につき朝鮮統治に三省を要求 三浦参玄洞(中) 8. 9 曉島敏氏の朝鮮九州行 旅行日程
7. 6 台中の不祥事件につき朝鮮統治に三省を要求 三浦参玄洞(下) 8. 9 日本基青から支那基青へ
7. 8 ソヴェート治下に於る宗教団体の活躍 プハーリンも之を認む 8. 10 ビルマに於ける素晴らしいカトリックの発展
7. 8 朝鮮仏教徒大会 七日総委員会で決定 8. 10 本社を訪れた緬甸の怪僧ウ・オツタマ 気炎を吐いて昔を偲ぶ
7. 8 海外布教埃たた記(三) 手島近侍 8. 12 苦悶の支那仏教徒 北平で三百余僧の大会 社会事業で応急策
7. 8 本派支那各地駐在は無資格者を除く 8. 12 滿蒙奇觀(三) 箕田覚念
7. 11 智大学生鮮滿伝道旅行 8. 15 全仏教徒大会に鮮僧も列席
7. 12 宣統廃帝を仰いで 日支仏教徒が提携し 内蒙開拓運動 8. 16 澎湃たる支那の排外思想に 前途を悲観される ミッションスクール
7. 12 海外布教埃たた記(四) 手島近侍 8. 17 支那名利に大正藏経を寄贈する福田宏一氏の計画すすむ
7. 15 海外布教埃たた記(五) 手島近侍 8. 17 南洋土人三十三間堂拝観
7. 15 京城教信 8. 18 甘粛省の回教徒反乱
7. 15 宣統廃帝を仰いで 日支仏教徒が提携し 内蒙開拓運動(承前) 8. 19 台密研究の中華学生
7. 19 天台宗では唯一の朝鮮布教所 8. 21 新義真言豊山が京城に一字建立か=場合に依って臨宗を召集=
7. 29 藤井草宣氏送別会 「支那の革命完成と仏教の将来」に就いての談話交換 8. 22 国際親善基督教世界連盟の 日本から支那への手紙
7. 31 ビルマの活仏 日本へ亡命 8. 30 露西亜管見 谷汲山 市川円常
7. 31 支那の革命完成と仏教の将来 8. 31 森本瑞明氏の南洋観光団更にシヤムに廻る
8. 1 森本瑞明氏等一行の 南洋観光団 更にシヤムを廻るか 9. 2 智大滿鮮伝道隊の出発
8. 1 「青島より」(上) 9. 2 外遊偶感 浅野研真
8. 2 印度カシュミールより(一) 富田智城 9. 7 樺太通信
8. 2 印度カシュミールより(二) 富田智城 9. 8 朝鮮半島唯一の『朝鮮仏教』誌 経営者変更
8. 2 「青島より」(下) 9. 9 国民軍と旗
8. 2 最緊要にして閉却されし日支仏教徒の握手(上) 藤井草宣 9. 9 曹洞宗の朝鮮布教監理 五十嵐氏辞任
8. 2 印度カシュミールより(三) 富田智城 9. 9 曹洞宗海外布教師出発
8. 2 仏述、支那国民政府へ寺院財産没収の不当を力説し仏教徒へは警告を発する 9. 9 大派朝鮮監督部 国境慰問使発出
8. 3 中華仏教の現態(上) 数字に表れた各省の実勢 9. 9 京城に於ける曉島氏の講演
8. 3 印度カシュミールより(四) 富田智城 9. 9 上海より
8. 4 最緊要にして閉却されし日支仏教徒の握手(下) 藤井草宣 9. 12 滿鮮旅行便り 智山大学伝道団より
8. 5 中華仏教の現態(下) 数字に表れた各宗の開教師 9. 13 救世軍小隊を台湾に創設
8. 5 新しき内蒙の文化 露国医師最近の報告 9. 13 滿鮮旅行便り 智山大学伝道団より
8. 5 滿蒙奇觀(一) 箕田覚念 9. 14 滿鮮旅行便り 智山大学伝道団より
8. 5 樺太の旅から 9. 15 滿鮮旅行便り 智山大学伝道団より
8. 7 日本国際親善基督教 世界連盟と日支交誼 9. 15 朝鮮浄土宗開教事業現状
8. 8 支那全国の土地処分? 反対の仏徒大会 9. 16 朝鮮京城に於ける豊山の新寺建立
8. 9 印度カシュミールより(五) 富田智 9. 19 滿鮮旅行便り 智山大学伝道団
9. 20 南方支那国民党要人 尹氏の密教研究
9. 20 滿鮮旅行便り 智山大学伝道団
9. 22 滿鮮旅行便り 智山大学伝道団
9. 22 洞宗朝鮮布教監理の更迭に就て 信徒総代より抗議
9. 23 ヤングチャイナナーの排孔運動 真溪龍三
9. 23 滿鮮旅行便り 智山大学伝道団
9. 23 昔は支那政界の大立物 陸徴詳氏が白国の修道院で ミサの聖火に無限の情

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1928. 9. 25 懐を遺る
阿片鉄砲如來(上) 胡蕃生
9. 26 浄土宗朝鮮開教区 西鮮組主任會議
9. 26 日本仏教研究の爲 印度人ソホン・シン氏來る
9. 26 満鮮旅行便り 智山大学伝道団
9. 26 阿片鉄砲如來(中) 胡蕃生
9. 27 本派台北別院を『台湾別院』と改称する
9. 27 満鮮旅行便り 智山大学伝道団
9. 27 朝鮮浄土宗寺院に幼稚園新設が盛ん
9. 27 阿片鉄砲如來(下) 胡蕃生
9. 28 満鮮旅行便り 智山大学伝道団
9. 29 阿育王の刻文発見—カルカッタ大学講師の 木村龍寛氏から通知—
9. 29 満鮮旅行便り 智山大学伝道団
9. 29 排孔運動を読んで(真溪龍三先生へ)
9. 30 成功した天理教の支那伝道
10. 2 京城西本教信
10. 3 中華民国の名士 鄭孝胥氏の來社
10. 5 善導大師に因縁の深い 青島に善導寺を建立 青島浄土宗の遠忌記念事業
10. 7 支那に於ける旧教の現勢
10. 7 最近国民政府が発した外国宣教会財産取得假法規
10. 11 長春より
10. 21 妙心派の朝鮮開教 五島瑞巖監督の報告
10. 21 本願寺派の台湾仏教学院 島人三十八名を入所
10. 21 危殆に瀕しつつある 支那の孔子教
10. 23 韓世昌 礼讚
10. 25 半島仏教有史以来の計画たる 朝鮮仏教の大交響楽
10. 27 日本教徒と提携を希望する 中華の基督教徒 今後は交通を頻繁にする
10. 30 本派教線拡張調査会台湾朝鮮にも及ぶ
10. 31 大派の朝鮮開教資源と 寺院制度の採用—教場主任、信徒の代表者會議—
11. 1 マニラの香気(一) 林敬一
11. 3 マニラの香気(二) 林敬一
11. 10 大派朝鮮の御大礼奉祝
11. 10 マニラの香気(三) 林敬一
11. 18 回教徒の義憤で 公教修院課税を免がる
11. 19 仏教と社会事業九団体が カバフト開発事業を 将来は国家的対外政策へ進出
11. 19 全国一斉万歳に トルコ大使驚く 日本国民には自我がない
11. 23 マニラの香気(四) 林敬一
11. 23 本派の新予算に現はれんとする 海外伝道部
12. 2 支那に浄土教義宣伝の爲め —「善導大師と日本」出版—
12. 2 マニラの香気(五) 林敬一
12. 4 マニラの香気(六) 林敬一
12. 6 バタビア博物館長から仏教児童博物館へ寄贈
12. 6 朝鮮の全国基督教共同伝道旺盛
12. 9 支那で絶無の珍書が東福寺で発見される 上海商務印書館長の喜び
12. 20 世界学術界の驚異たる南満碧流河畔の「貔子窩」の研究
12. 23 在米朝鮮人は極度に日本人を嫌ふ 世界日校大会の韓国旗 掲揚問題とは別だが
12. 23 支那基督教界の現状 支那基連代表の発表
12. 27 支那基督教界の現状(承前) 支那基連代表の発表
12. 28 朝鮮で発見されたといふ『龍龕手鏡』に就て 松本文三郎博士談
1929. 1. 10 今秋十月の朝鮮仏教大会と仏護団
1. 11 準備着々と成る朝鮮仏教大会—委員規程とこれが顔触れ—
1. 13 画期的な改革決議をした全鮮仏教大会
1. 13 仏教青年同志会の 日支問題討議
1. 17 思ひ切つて非科学的な布教方針に改めた 朝鮮天道教新派
1. 17 二階建になる京城西別院
1. 18 朝鮮仏教
1. 20 日支外交の革命(1) 山田忠正(愛の強震著者)
1. 20 行き詰つた朝鮮学務当局の内鮮共学問題
1. 20 朝鮮師範学制変更
1. 20 鮮僧で内地に住職した 第一の人金鼎堂氏 高泉禪師全集発行の大業
1. 22 日支外交の革命(2) 山田忠正(愛の強震著者)
1. 26 日支外交の革命(3) 山田忠正(愛の強震著者)
1. 27 支那人らしい 面白い信仰の流行…今や信者が十数万…
1. 29 日支外交の革命(4) 山田忠正(愛の強震著者)
1. 30 日支外交の革命(5) 山田忠正(愛の強震著者)
1. 30 学会を驚倒せしむる 朝鮮初版経発見さる —文献あつても実物なきものを 東寺から小野教授に依り—
1. 30 今秋に決定した 大派朝鮮の 光暢法主夫妻巡教
1. 31 日支外交の革命(6) 山田忠正(愛の強震著者)
2. 5 支那で悪書 取締を請願
2. 7 朝鮮初版経発見の記事に就いて 禿氏祐祥
2. 17 日支兩國基督教徒 リーダースの会合を支那の基連から提案
2. 27. 中亜仏教の思想的特徴(1) 羽溪了

1929. 2. 28 全鮮一万余のモヒ患者を剷絶すべく
総督府の新計画
2. 28 中亜仏教の思想的特徴(2) 羽湊了
諦
3. 1 中亜仏教の思想的特徴(3) 羽湊了
諦
3. 2 中亜仏教の思想的特徴(4) 羽湊了
諦
3. 3 中亜仏教の思想的特徴(5) 羽湊了
諦
3. 5 中亜仏教の思想的特徴(6) 羽湊了
諦
3. 6 中亜仏教の思想的特徴(7) 羽湊了
諦
3. 7 今年初めて留学生が帰る 朝鮮仏教団
3. 7 中亜仏教の思想的特徴(8) 羽湊了
諦
3. 8 南支の仏教史跡めぐり(一) 佐藤泰
舜(駒大教授、文学博士)
3. 9 南支の仏教史跡めぐり(二) 佐藤泰
舜(駒大教授、文学博士)
3. 10 南支の仏教史跡めぐり(三) 佐藤泰
舜(駒大教授、文学博士)
3. 12 南支の仏教史跡めぐり(四) 佐藤泰
舜(駒大教授、文学博士)
3. 13 南支の仏教史跡めぐり(五) 佐藤泰
舜(駒大教授、文学博士)
3. 21 朝鮮民族解放運動と 教務院の關係
3. 23 日本仏教見学記(一) 朝鮮沙里院
金連声
3. 24 日本仏教見学記(二) 朝鮮沙里院
金連声
3. 26 日本仏教見学記(三) 朝鮮沙里院
金連声
3. 27 朝鮮仏教団の内地留学生
3. 27 朝鮮初雕版に就て
3. 28 開教地の統制ができぬ 東西兩派の海
外伝道
3. 29 詩聖タゴール カナダへ出発
3. 29 朝鮮仏教団支部の巡講 講師は藤波大
円氏
3. 31 台北市の花まつり 一日より八日まで
4. 2 朝鮮仏教教務院の陰謀云々は 一部の
憶測邪推 李宗教課長の声明
4. 3 朝鮮普天教の内訌 教主の罷免を総督
府に嘆願
4. 3 国民政府から在滿朝鮮人学校に 閉鎖
命令
4. 3 京城通信
4. 10 続日本仏教見学記(一) 朝鮮沙里院
金連声
4. 11 指を斬って瀕死の母を救ふた朝鮮の孝
子
4. 11 続日本仏教見学記(二) 朝鮮沙里院
金連声
4. 11 朝鮮に於ける学生の 同盟休校激増
無為無能の半島教育当局者
4. 12 続日本仏教見学記(三) 朝鮮沙里院
金連声
4. 12 妙心神月管長の朝鮮親化
4. 13 続日本仏教見学記(四) 朝鮮沙里院
金連声
4. 14 朝鮮の私設墓地問題 近く道知事會議
で決定を見ん
4. 16 池上政務総監の死で 一頓挫した朝鮮
の初等教育
4. 18 木村氏の将来した印度仏教史關係幻灯
版
4. 18 発掘から提示された印度学の世界的諸
問題(上) 木村龍寛氏談
4. 18 さらにス博士からバリ仏教の用具を
児童博物館に寄贈
4. 18 朝鮮小作慣行調査 異なった奇習もあ
る
4. 21 発掘から提示された印度学の世界的諸
問題(下) 木村龍寛氏談
4. 23 印度人と子供 六十三銭?(上) 柳
原場
4. 23 印度人と子供 六十三銭?(下) 柳
原場
4. 27 海外事情 蒙古の公爵
4. 28 日本の三品市場に影響した 印度宗教
騒動
4. 28 最近の宗教学術界 パーリ阿含經典の
翻訳 高楠博士功績記念会の画期的聖
業
4. 28 京城洞宗別院の大法要
4. 28 滿洲八景と細野南岳氏
5. 1 大虚氏の 神戸寄港
5. 1 支那鎮江より
5. 4 妙心寺派の 朝鮮教勢
5. 10 タゴール翁が日本で講演行脚
5. 10 単称日蓮宗の滿洲教況視察
5. 10 政治的意味を含ませぬため 増上寺で
タゴール翁歓迎会 一會衆二千名を超
へむ
5. 16 大派光暢法主の朝鮮親教期日
5. 18 大派のパラオ教信
5. 18 印度代表としての ビルマのオツタマ
氏
5. 19 支那連盟の年會に 日本から訪問
5. 19 光暢法主朝鮮巡教決定
5. 21 ハルビンより
5. 24 京城の花祭
5. 24 物になった土耳其の桑畑 光瑞氏の土
耳其行き
5. 25 京城教信
5. 26 めっきり熾烈になった 支那の廢娼運
動 北平も近く公娼廢止か
5. 26 馮軍の西路を断ち 回教徒軍益々活躍
5. 31 タゴール翁東京に病む

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1929. 6. 7 曹洞宗の朝鮮布教 鈴木天山氏特派
 6. 7 日本仏教徒に依ってア国紛擾を教へと
 プ氏がモスコから
 6. 8 浦塩本願寺外廓成る
 6. 12 最近の宗教学術界 梵巴仏典の邦訳—
 長井博士と平等羽咋の近業—
 6. 12 駒大の児童研究会の 台湾全土巡回
 6. 13 日華親善の大業 支那黄檗山流失の慘
 を救ふ 日本黄檗の奮起
 6. 13 多数の専門家集る 南支仏教史跡展
 6. 13 アツタナガラ悲話(上) 井上義宏
 6. 16 アツタナガラ悲話(中) 井上義宏
 6. 16 教会の因循に激して起った 朝鮮の若
 き基督教徒 基督信友会の創立計画
 けふ、組合教会の 朝鮮伝道記念日
 6. 19 朝鮮巡講雑感(一) 藤波大円
 6. 20 朝鮮巡講雑感(二) 藤波大円
 6. 20 内鮮融和の基礎 大阪鶴橋隣保館幼稚
 園の成績
 6. 20 生蕃の創世神話(一)
 6. 20 アツタナガラ悲話(下) 井上義宏
 6. 20 支那長安の高祖遺跡に 記念塔建設を
 決議 した智山布教師大会
 6. 20 日支親善と基教青年会
 6. 25 朝鮮寺刹令改正 七月一日より実施さ
 れる
 6. 26 国民的な運動にする 支那黄檗復興事
 業 愈々具体的に運動開始
 6. 27 モヒ国営準備成る
 6. 29 建設期に於ける青年的使命を総題に
 全支那基青大会 国民政府工商部長を
 準備委員長として着々準備中
 6. 30 京専鮮満伝道旅行
 6. 30 光瑞氏の出立 来月三日に延ぶ
 7. 4 朝鮮巡講雑感(三) 藤波大円
 7. 4 大連に居士団 出生せしむ—笠木良明
 氏等の発起—
 7. 4 支那黄檗復興のため 三段構の運動方
 針
 7. 7 朝鮮巡講雑感(四) 藤波大円
 7. 11 朝鮮巡講雑感(五) 藤波大円
 7. 14 支那寺院の美風(上) 乙部吞海
 7. 17 京都専門学校 満鮮旅行だより(一)
 7. 18 支那寺院の美風(下) 乙部吞海
 7. 18 京都専門学校 満鮮旅行だより(二)
 7. 20 朝鮮の社会運動
 7. 21 京都専門学校 満鮮旅行だより(三)
 7. 26 京都専門学校 満鮮旅行だより(四)
 7. 28 支那仏典は殆ど未整理である 塚本善
 隆氏婦朝談
 7. 29 朝鮮仏教大会準備 全道と本部活気付
 く
 7. 30 国際キャンプ 沙、支両国学生の来阪
 7. 31 日本に亡命中の露人回教徒
 7. 31 京都専門学校 満鮮旅行だより(五)
 8. 1 烈日の街頭を歩んで 朝鮮統治の将来
 を思ふ
 8. 1 支那黄檗復興は天王殿建築—日本黄檗
 の運動—
 8. 4 烈日の街頭を歩んで 朝鮮統治の将来
 を思ふ(下)
 8. 7 日支親善の大旗の下に 黄檗内外の運
 動始まる
 8. 7 本派青島別院の上棟式
 8. 7 京専満鮮旅行だより
 8. 8 樺太から
 8. 11 朝鮮と仏教
 8. 11 国際連盟阿片調査委員の極東視察
 8. 11 仏領安南で史的記念物に 指定された
 邦人の墓 —故国に向って三百年前の
 繁栄を語る—
 8. 13 朝鮮仏教大会 議案提出期
 8. 15 京城神社祭神決定
 8. 16 樺太漫記
 8. 17 樺太漫記
 8. 18 樺太漫記
 8. 23 朝鮮仏教大会期日決定—十月十一日—
 8. 27 賑やかな南京寺の施鬼會
 8. 28 ア、ユ両族が 聖都エルサレムで衝突
 その原因は何か
 8. 29 東支鉄道とネストル僧正
 8. 31 最近支那に於ける 宗教界の展望(一)
 孔子祭の廃止、回教徒の反乱、中国
 仏教会の組織等— 軽部秀治
 8. 31 支那古黄檗より感謝し来る 二万円も
 出せば、日本の何十倍の仕事となると
 9. 1 最近支那に於ける 宗教界の展望(二)
 孔子祭の廃止、回教徒の反乱、中国
 仏教会の組織等— 軽部秀治
 9. 3 最近支那に於ける 宗教界の展望(三)
 孔子祭の廃止、回教徒の反乱、中国
 仏教会の組織等— 軽部秀治
 9. 4 朝鮮仏教大会 次第決る
 9. 4 最近支那に於ける 宗教界の展望(四)
 孔子祭の廃止、回教徒の反乱、中国
 仏教会の組織等— 軽部秀治
 9. 5 朝鮮より
 9. 5 最近支那に於ける 宗教界の展望(五)
 孔子祭の廃止、回教徒の反乱、中国
 仏教会の組織等— 軽部秀治
 9. 8 朝鮮瞥見
 9. 10 最近支那に於ける 宗教界の展望(六)
 孔子祭の廃止、回教徒の反乱、中国
 仏教会の組織等— 軽部秀治
 9. 10 朝鮮瞥見
 9. 10 大阪YMCAに海外協会設定
 9. 11 朝鮮瞥見
 9. 12 朝鮮瞥見
 9. 13 朝鮮瞥見
 9. 13 支那古黄檗復興運動 大阪と開教地へ
 9. 14 安東県へ
 9. 15 朝鮮京城で基督教日校大会開催

1929. 9. 15 安東県へ
 9. 15 合同から合同への 朝鮮各無産団体
 9. 17 朝鮮仏教大会には成る可く多数出席……
 仏教幹事会の決議
 9. 18 大谷光暢法主夫妻 朝鮮総督訪問
 9. 19 海外事情 東支鉄道問題と左翼
 9. 21 開教使は永住せよ 光暢法主の朝鮮巡
 教所感
 9. 22 光暢法主の朝鮮巡教は予想以上の収穫
 9. 26 朝鮮大会行きに関西だけは団体とする
 10. 1 満洲に浄宗青年連盟生れむ
 10. 2 聖樹を切られて 全仏教徒の汚辱 印
 度仏教徒の憤激
 10. 4 本島人を住職に 初めて任命した妙心
 寺
 10. 4 朝鮮仏教大会の 法要順序決る 第二
 日十月十二日訓練院に於いて行ふ朝鮮
 殉難横死霊並無縁亡霊の為の
 10. 6 朝鮮労働者に帰国勧告は考えもの
 10. 8 朝鮮開教私見(1) 大派宣伝課主任
 竹中慧照
 10. 8 朝鮮開教私見(2) 大派宣伝課主任
 竹中慧照
 10. 8 釜山より
 10. 9 朝鮮仏教大会への希望 椎尾辨匡
 10. 9 朝鮮開教私見(3) 大派宣伝課主任
 竹中慧照
 10. 10 支那へ贈る大正大藏経 福田氏の大奔
 走
 10. 10 朝鮮開教私見(4) 大派宣伝課主任
 竹中慧照
 10. 11 全鮮真言宗信徒大会 開教以来の歴史
 的盛況
 10. 13 朝鮮仏教大会に先だつて 曹洞宗布教
 師大会
 10. 13 山崎精華氏の童話全集「印度篇」
 10. 13 故溪内氏の閩歴と人為 友人安藤正純
 氏の弔文
 10. 15 内鮮の仏徒五百余名参加の下に 朝鮮
 仏教大会の幕開く - 中国代表も遥々
 来鮮参加 -
 10. 15 朝鮮仏教の興隆を決議 意見、希望等
 の開陳に賑はふ
 10. 15 金光教の全鮮大会
 10. 17 台湾土蕃と神社問題一壊される土蕃の
 宗教 -
 10. 17 朝鮮全土に於ける 殉難横死無縁の霊
 を弔ふ、半島空前の盛儀!
 10. 17 近き将来に於いて支那で 東亜仏教大
 会を開催 して欲しいと大会から要求
 10. 22 朝鮮に故伊藤公記念の為の寺建立?
 児玉総監の肝入りで
 10. 23 天理教の全鮮大会
 10. 24 蒙古王から西藏一切経 が来る高野山
 大学
 10. 25 旅中雑記 乙部香海
 10. 25 台湾人の本派教師養成打撃
 10. 27 阿育王(上) 医学博士 青雲洞作
 10. 29 大阪で行はれた支那扶乱の実験
 10. 30 朝鮮仏教の真価 が日本に知られてゐ
 ない 妙心寺派二執事の談
 10. 31 阿育王(下) 医学博士 青雲洞作
 11. 1 紅茶を啜り乍ら 朝鮮仏教興隆を語る
 朝鮮の児玉政務総監
 11. 2 黄檗宗最初の朝鮮開教寺院が出来る
 11. 5 朝鮮仏教大会私言 河村道器
 11. 8 面白く発展して行く 満洲の在理教
 11. 9 大谷光暢法主が鮮僧を激励
 11. 10 土耳其政府は 米国の宗教を歓迎
 11. 15 朝鮮の普天教が 大本教と合同の噂
 12. 1 神戸善福寺に建った ビルマ式仏教会
 館
 12. 3 朝鮮仏教大会私見(上) 内蒙古茂林
 瘠 吉田無堂
 12. 4 朝鮮仏教大会私見(中) 内蒙古茂林
 瘠 吉田無堂
 12. 5 バリ島の仏教僧侶の用具 ス博士から
 児童博物館に
 12. 5 朝鮮仏教大会私見(下) 内蒙古茂林
 瘠 吉田無堂
 12. 5 北支那天津より 在天津 瀕辺淳信
 12. 7 超政治的宗教の日支親善事業として
 日本外務省も動き出した 古黄檗復興
 運動
 12. 8 全印度仏教大会 第二回が開かれる
 12. 8 朝鮮思想大系『李朝仏教』成る 高
 橋博士近著
 12. 12 『李朝仏教』を讀みて(一) 石井教道
 12. 15 『李朝仏教』を讀みて(二) 石井教道
 12. 19 宗門大学出身者の 海外進出熱
 12. 19 王仁三郎氏の支那受難
 12. 19 南洋のバリで現に使用される法衣と仏
 具 仏教児童博物館に寄贈
 12. 19 『李朝仏教』を讀みて(三) 石井教道
 12. 22 『李朝仏教』を讀みて(四) 石井教道
 12. 25 『李朝仏教』を讀みて(五) 石井教道
 1930. 1. 7 満洲方面でも 神社問題起る
 1. 12 支那黄檗復興運動
 1. 26 朝鮮人帰国
 1. 26 台頭し来れる 印度の大衆(1) 高
 津正道
 1. 28 台頭し来れる 印度の大衆(2) 高
 津正道
 1. 29 台頭し来れる 印度の大衆(3) 高
 津正道
 1. 30 台頭し来れる 印度の大衆(4) 高
 津正道
 2. 2 台頭し来れる 印度の大衆(5) 高
 津正道
 2. 6 大戦後最初の中亜探検隊 橋川正
 2. 7 台湾を見てから 藤沙堂
 2. 16 大谷大学生の満蒙旅行計画

1930. 2. 18 印度聖地、鹿野苑に 仏教大学の建設
ダンマ・パーラ氏の発願
2. 19 大派の移植民調査
2. 19 朝鮮の珍訴訟 イエスと弘法大師
2. 20 朝鮮基督教界に 外鮮人の反目高まる
2. 20 印度の一富豪が 仏教叢書の刊行 各国印度学者の総動員で
2. 20 朝鮮最初の小作官会議
3. 2 支那カトリック大学の発展
3. 9 日蒙の宗教的交渉で 日本ラマ僧の吉田氏の運動
3. 23 京城通信
3. 28 福建大学に於ける 興味ある質問と解答
3. 30 坊さんの霊と……印度人の守護霊 浅野氏の心霊の話しを聞く
4. 1 日本仏教連盟に対する 印度仏教徒の希望(上) 立正大学教授 カルカタ大学教授 木村龍寛
4. 2 日本仏教連盟に対する 印度仏教徒の希望(下) 立正大学教授 カルカタ大学教授 木村龍寛
4. 6 印度政庁よりの問合せと 西本願寺の回答—国家宗教団体との関係等—
4. 6 中日両国の学者のために北平に 開設された図書館
4. 6 これでも人間の生活か 朝鮮慶北道の飢饉
4. 12 印度独立運動(上) 大英国を悩ますガンジー 高津正道
4. 13 印度独立運動(中) 大英国を悩ますガンジー 高津正道
4. 15 印度独立運動(下) 大英国を悩ますガンジー 高津正道
4. 23 朝鮮京城に唯一の 仏教専門学校設置
4. 27 盛大を予想される 大邸の花祭
4. 27 更生しつつある印度(一) ラス・ビハリ・ボース
4. 29 更生しつつある印度(二) ラス・ビハリ・ボース
5. 1 印度婦人教会主催 明年一月ラホールで開く 全亜細亞婦人大会
5. 1 更生しつつある印度(三) ラス・ビハリ・ボース
5. 3 更生しつつある印度(四) ラス・ビハリ・ボース
5. 4 更生しつつある印度(五) ラス・ビハリ・ボース
5. 5 朝鮮学生給費の廃止
5. 5 朝鮮に於ける教育熱 の勃興と就学難
5. 6 更生しつつある印度(六) ラス・ビハリ・ボース
5. 16 亜細亞仏教徒に訴ふ(上) 英国大菩提会 副会長 B. L. フロートン
5. 17 亜細亞仏教徒に訴ふ(中) 英国大菩提会 副会長 B. L. フロートン
5. 18 亜細亞仏教徒に訴ふ(下) 英国大菩提会 副会長 B. L. フロートン
5. 29 御嶽を好餌に一湖南に大詐欺発覚 北村管長辞職に關係か?
5. 29 ホイットマンと東洋(一) 幡谷正雄
5. 29 ホイットマンと東洋(二) 幡谷正雄
5. 30 ホイットマンと東洋(三) 幡谷正雄
5. 31 ホイットマンと東洋(四) 幡谷正雄
6. 5 大派映画班の朝鮮宣伝
6. 7 中華の新思想胡適と語る(上) 九大教授 佐野勝也
6. 8 中華の新思想胡適と語る(下) 九大教授 佐野勝也
6. 8 闘争するガンジー(一) 大木雄三
6. 10 闘争するガンジー(二) 大木雄三
6. 11 闘争するガンジー(三) 大木雄三
6. 12 曹洞宗布教師に朝鮮人を任命 海外布教に一時期を画すか
6. 13 闘争するガンジー(四) 大木雄三
6. 17 印度独立運動と宗教 福永渙
6. 18 ビルマを救へ と日大仏青会起つ
6. 19 印度独立運動と宗教 福永渙
6. 19 ビルマの震災と日印協会
6. 20 印度独立運動と宗教 福永渙
6. 22 朝鮮全土に仏教を 振興させようと生まれた 朝鮮仏教普及会 —先づ一般家庭に仏壇を—
6. 22 安東県に於ける 基督教日校児童と神社参拜問題
6. 28 釜山夏期大学講座
6. 29 朝鮮の仏教は朝鮮人の手で—と 奮起した朝鮮仏教普及会 李元錫氏の大活動
7. 3 境野黄洋氏著『支那仏教史講話』文学博士望月信亨
7. 26 中華南京政府の 宗教学校弾圧 南支教会学校側の対策
7. 29 同一教徒の立場から 印度ビルマ災民を救へ 仏連—が近く実働に—
7. 30 朝鮮を観てから 藤等影
8. 5 台湾の旅から 梅原真隆
8. 7 支那共産党の現勢
8. 17 南京政府の宗教教育禁止令と 新教側の対抗策
8. 22 愈々完成近き 印度知名人名辞典 二十年來の苦心で……赤沼智善氏が
8. 23 東北帝大に先んじて…西藏大藏經研究の 基礎的目録成る 谷大椋部文鏡氏が 仏教学会に一大貢献
8. 24 滿鮮教界の印象
8. 26 滿鉄政治と宗教
8. 28 樺太開教二十五年 記念大法要を機し 大派教線の拡張成らん
8. 28 日本に出来た 亡命露人協会
8. 28 西山三派のビルマ義援金
9. 4 支那国民政府の手 宗教圧迫を緩めず

1930. 9. 6 朝鮮人として聞くに耐えない問題二つ (上) 李迷鳥
9. 7 大派秋の大伝道を開始 東西両道を繋ぐ 北鮮方面の大伝道 権藤・稲葉両氏が
9. 7 台湾各地の秋の大伝道 本明龍貫氏を特派
9. 7 セメヨノフ將軍等 極東宗教連盟組織 共産的宗教否定と闘争
9. 7 朝鮮人として聞くに耐えない問題二つ (下) 李迷鳥
- 9.12 今秋印度で—東洋学大会開かる 日本の学者にも参加を希望
- 9.16 大谷大学図書館で 西蔵秘宝の公開 法主寄贈のナルタン版=西蔵蔵經の公開を兼ねて
- 9.16 基督教団の中を 全鮮六十八校に 藤波大円氏の巡講
- 9.21 朝鮮にできた純學術雑誌『春丘学叢』
- 9.24 木村博士著『印度哲学・仏教思想史』 立正大学教授 山本快龍
10. 4 ソヴェート子弟の校舎にするとて 哈爾濱本願寺明渡要求
10. 8 大乘仏教精神よる観たる 滿鮮西蔵経略の秘録 如何にして坊間に出たか?
10. 9 朝鮮の教化問題 学校に宗教教育をウソと入れる
10. 9 南洋所見 問宮英宗
- 10.12 日本人の西蔵研究に関する 凡ゆる文献の総目録 既に谷大図書館で脱稿
- 10.12 教授と学生の手で 各国語伝道書の刊行 天理教伝道部と外国語学校
- 10.17 精神的寂寥に悩む邦人 南洋群島開教は有望 序では思想普導をやらぬと種村大派特派使談
- 10.19 万里長城居庸関石壁銘 西蔵医学解剖図等 種々の婦朝資料に賑ふ 谷大の西蔵展けふで終わる
- 10.23 帝大史学科の朝鮮の旅から
- 10.23 東西文化の接触点の 新嘉坡に發展する本派の経谷氏
- 10.28 ガンジーと恐怖(上) 現代印度を動かす二つの力 福永渙
- 10.29 ガンジーと恐怖(中) 現代印度を動かす二つの力 福永渙
- 10.30 ガンジーと恐怖(下) 現代印度を動かす二つの力 福永渙
- 10.31 日、支、蒙、西、古代版画展
11. 2 大和民族と生蕃とは 同一神族に属する 言語学者北里蘭氏の話
11. 6 朝鮮情趣 [旅行逆説] 小谷徳水
11. 6 台湾暴動事件 死者弔意と義捐金 仏教大会で即行
11. 7 仏教の亜細亞運動と 印度仏跡参拝案 東京で世界大会も開催
11. 8 満州里の弁当 (外遊逆叙)
11. 8 「アジアの嵐」を観る
11. 9 アフリカの宗教 大阪府立貿易館のアフリカ国情展より
- 11.14 京城教信
- 11.15 朝鮮に於ける 仏書連盟
- 11.20 古義真言宗の 台湾布教伝道 明年一月中旬より
- 11.20 本年中に朝鮮鷄籠山に 朝鮮統一の聖廟者が出現? 日韓併合以来の信仰だが ◆年末迄に現れねばどうする◆
- 11.23 動乱の支那に於けるカトリック教勢
- 11.27 「トウルクシブ」を観る
- 11.29 支那黄葉復興運動 日、華財界不況の打撃
- 11.29 コロンボより 藤井東洋男
12. 2 印度仏教徒現状(上) グムマパーラ氏より
12. 3 印度仏教徒現状(下) グムマパーラ氏より
- 12.11 土耳其の回教に就て 新婦朝者日土協会理事 山田寅次郎氏談
- 12.21 支那料理 お精進の燗鶏汁 ターキーチー
- 12.28 泉芳瑛氏著「印度漫談」を読む 壘昇美
1931. 1. 6 人道より見たる霧社事件(上) 中井玄道
1. 7 人道より見たる霧社事件(下) 中井玄道
- 1.11 教務部等の新設と 海外伝道部の重要視 天理教序職制規程快晴と態度
- 1.12 印度固有な詞辞典愈々全部完成
- 1.13 亡命露人に設けた 回教小学校 羅沙売りさんの汗の結晶で
- 1.14 五大陸に於けるバハイ運動の發展(上)
- 1.15 大谷派開教鳥瞰図 伸び行く海外教勢
- 1.15 朝鮮に断然唯一の 女子高等専門学校を本派別院が創設する
- 1.15 天理教五七年祭と 陸橋百年記念の海外伝道に驀進
- 1.15 浄土宗の開教瞥見 —沿革と現勢—
- 1.15 五大陸に於けるバハイ運動の發展(中)
- 1.15 北海・樺太へ 大派教線拡る…台湾は復興の道程…
- 1.15 大派殉難開教使物語 犠牲になった大派の人々 明治初期の流血事件
- 1.16 五大陸に於けるバハイ運動の發展(下) 紐育記者 マルサ・エル・ルート氏
- 1.22 朝鮮、満洲、布哇、米国に及ぶ 福荷大神の勢力圏 人物養成、貧民救済にも活動
- 1.23 内鮮融和の使節 東京の女学生から全鮮の女学生に送られる雛人形
- 1.23 クリスマスの当日 浦塩に於ける宗教撲滅運動
2. 1 京城各宗僧侶の仏教懇談会

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1931. 2. 1 宗教的食味を繞りて 支那の精進料理
か 黄檗の普茶か どちらがうまいか
の問題
2. 1 支那の功德林 仏壇に礼拝しなければ
飯を食はせない料理屋
2. 3 天理教海外伝道に就いて (一) 中西喜
代造
2. 4 天理教海外伝道に就いて (二) 中西喜
代造
2. 7 神戸親和会で 印度事情を聴く
2. 7 天理教海外伝道に就いて (三) 中西喜
代造
2. 9 グロ百パーセントの 朝鮮白々教事件
美人を生き埋めにした教主
2. 11 アラビア語の原典から コーラン經の
和訳 井上博士の勧めでクルワン僧正
が
2. 19 友邦仏教国暹羅 皇帝の御治療 は是
非日本で一と
2. 28 朝鮮人問題とは何 (上) 栗山耕三
3. 1 朝鮮人問題とは何 (中) 栗山耕三
3. 2 朝鮮人問題とは何 (下) 栗山耕三
3. 2 浦塩の幽霊 神秘嫌いの赤露の騒ぎ
3. 5 ミス印度 再婚を許されぬ 印度の女
性 一三四才の寡婦もある一
3. 8 印度文明史を揺す ヒンズー河畔の発
掘物 一近くロンドンで出版一
3. 11 亜細亜を研究せよ ベルシャ・アラビ
ヤ各国でも日本研究を初めて居る 橋
川教授帰朝談
3. 16 大派が開拓する 朝鮮布教 開教監督
部の計画
3. 19 最近印度から出た 仏教研究上の収穫
シャストリ氏の密教とローウ氏の大
事の研究
3. 20 朝鮮仏教青年総同盟 いよいよ創立大
会
3. 21 写真出版を見る 印度仏跡の発掘物
木村龍寛氏が蒐集した仏像仏跡の資料
五百点
3. 21 女とラマ僧の国 ユートピア西藏 寺
本婉雅氏に聴く
3. 26 シャムから貰って来た『お釈迦様の骨』
の持つナンセンス
3. 27 仏教に因縁の深い 暹羅皇帝歓迎 一
東京の花祭り連合会で一
3. 29 全印度仏教徒会議 主事ダルマチャリ
氏の通信
3. 29 单身鮮人伝道に躍進する 若きクリス
チャンの信仰
3. 31 間島の共匪
4. 1 暹羅皇帝御来朝と 在京仏教徒の奉迎
両陛下花祭りに臨御 各宗管長御機
嫌を奉伺
4. 1 回教に就いて (一) 文学博士 井上
哲次郎
4. 2 回教に就いて (二) 文学博士 井上
哲次郎
4. 3 回教に就いて (三) 文学博士 井上
哲次郎
4. 5 回教に就いて (四) 文学博士 井上
哲次郎
4. 6 東京花祭り大会 暹羅皇帝奉迎式 臨
御焼香は五分間 一ラジオで中継放送一
4. 7 シャム皇帝陛下九月再び御来朝
4. 8 シャム両陛下に白象誕生仏と合掌人形
献上 神戸仏連より
4. 11 集まる者十万 日比谷の花祭り 感激
裡の暹羅皇帝奉迎式
4. 12 山田長政の守本尊が 暹羅から静岡へ
シャム皇帝から御下賜
4. 15 回教に就いて補正 井上哲次郎
4. 19 南洋サイパンの花祭り
4. 19 印度便り 野口日主
4. 22 新築地「アジアの嵐」を観て
4. 23 ぶっくれびゅう『支那に於ける仏教と
儒教道教』文学博士 境野黄洋
4. 24 プロレタリア劇団『新築地』と観衆
「アジアの嵐の演技について」 真谷明
子
4. 25 支那は打倒迷信運動で 今でも寺は毀
たれる 僧侶は平気で見てゐる
4. 29 赤沼師の「印度仏教固有名詞辞典」に
就いて 文学博士 松本文三郎
5. 3 大本と支那紅卍字会との関係 北村隆
光
5. 10 農村進出に転じた 朝鮮の基督教 民
族運動から経済力涵養へ
5. 10 支那仏教界動揺す 廟産興学問題の再
燃と 仏教整頓(改革)運動白熱
5. 12 ザヴェリオの遺骸を一般に顕示する
本年十二月印度のゴアで
5. 12 支那仏教界動揺す 第三回全支仏教代
表大会一上海に於て開會一
5. 16 上海西本願寺の落成式 大谷尊由氏を
迎へて 十七、八、九三日間
5. 21 日本委任統治 南洋群島のカ教
5. 23 法規を整備して 植民地の神社を優遇
敬神思想普及のため 一拓務省で目
下調査中一
5. 23 支那で五カ年計画の 大規模の特別伝
道 目標は基督者の倍加と 各方面に
わたる基督教化
5. 24 国民会議代表に 全支仏寺の惨状を訴
へ 太虚法師飛檄す
5. 24 東洋に於ける 外国伝道は失敗でない
ガイ博士一行に絡る誤報を転載した
某紙の記事は与太
5. 25 漸次発展する 樺太のカトリック 露
領教会は破壊
5. 25 中国統一政策には 仏教を重視せよと
太虚代表の檄文

1931. 5. 30 学界の稀品 敦煌出土の版本法華經
=龍大図書館で入手=
6. 3 農村伝道の範とすべき ヒリッピン
の教会 バ農村調査委員の談
6. 4 印度の神と国津神の握手
6. 5 暁烏氏の北支並に朝鮮旅行
6. 7 四十周年記念を迎える 曹洞の朝鮮開
教 範之和尚の渡韓から 現在に至る
開教の回顧
6. 14 満鮮の旅 暁烏敏
6. 17 目覚むる支那の仏教界 北平仏教の新
傾向(上)
6. 18 目覚むる支那の仏教界 北平仏教の新
傾向(中)
6. 18 満鮮の旅 暁烏敏
6. 20 旅情片々 足利浄円 (一) 西へ西へ
6. 20 満鮮の旅 暁烏敏
6. 21 旅情片々 足利浄円 (二) 乱舞する
もの
6. 21 北方支那基督教の農村伝道に就いての
報告
6. 21 満鮮の旅 暁烏敏
6. 22 南京で発見された 印度高僧の古塔
銘文は日本沙門の筆
6. 22 旅情片々 足利浄円 (三) 頭と脚の
国
6. 22 満鮮の旅 暁烏敏
6. 22 支那に於ける基督教の反撃(上) 葵
イツ子
6. 23 旅情片々 足利浄円 (四) 墓の国
6. 23 支那に於ける基督教の反撃(下) 葵
イツ子
6. 24 旅情片々 足利浄円 (五) 筋道
5. 24 「鮮支巡礼行」中楊州の記事に関し
常磐博士の為に釈明す(上) 大屋徳
城
6. 25 南京古塔の新発見を慶ぶ 一日本禅僧
中興の事一 新村出
6. 25 旅情片々 足利浄円 (六) 支那人の
考
6. 25 「鮮支巡礼行」中楊州の記事に関し
常磐博士の為に釈明す(下) 大屋徳
城
6. 25 目覚むる支那の仏教界 北平仏教の新
傾向(下)
6. 25 満鮮の旅 暁烏敏
6. 26 旅情片々 足利浄円 (七) 女傑
6. 27 旅情片々 足利浄円 (八) 新興支那
の思想
6. 28 旅情片々 足利浄円 (九) 支那の仏
教
6. 28 広東の夏 加藤正和
6. 30 南京古塔の新発見を慶ぶ 釈清潭
7. 1 西域学の発展(1) 諏訪義讓
7. 2 東大印哲研究室へ 暹羅から大蔵經を
寄贈
7. 2 満鮮の旅 暁烏敏
7. 2 西域学の発展(2) 諏訪義讓
7. 3 曹洞朝鮮開教記念大会延期
7. 3 立正大学講演部 満鮮地方宣伝
7. 4 西域学の発展(3) 諏訪義讓
7. 3 満鮮の旅 暁烏敏
7. 4 西域学の発展(4) 諏訪義讓
7. 5 満鮮の旅 暁烏敏
7. 7 台湾と「中外」
7. 9 満鮮の旅 暁烏敏
7. 10 朝鮮晋州の仏立講布教所 二十六日開
延式挙行
7. 10 満鮮の旅 暁烏敏
7. 11 大本が南洋ボナベに 一大理想郷の建
設 全島を大本村に…海外進出
7. 11 満鮮の旅 暁烏敏
7. 12 南洋片々 乙部吞海
7. 12 暹羅皇帝御寄贈の三蔵に就いて 文学
博士 長井真琴
7. 14 仏跡参拝団 明年組織する
7. 15 満鮮の旅 暁烏敏
7. 15 バハイ教と世界平和(上) 在東京
ミス・アレキサンダー(宗教平和会議
日本委員 桜井匡訳)
7. 15 毒徒然 紅卍教 釈瓢斎
7. 15 バハイ教と世界平和(中) 在東京
ミス・アレキサンダー(宗教平和会議
日本委員 桜井匡訳)
7. 16 インド人排斥のビルマ 思想家宗教家
が運動
7. 16 立正大学生 満鮮地方へ 伝道旅行決
定
7. 16 仏跡最初の復興建築 ムルガンダクチ
精舎の落成 今秋入仏式に一各国仏教
徒を招待
7. 16 御殿場の基背 夏期学校は 満鮮、中
華からも 宛然エルサレム会議
7. 17 バハイ教と世界平和(下) 在東京
ミス・アレキサンダー(宗教平和会議
日本委員 桜井匡訳)
7. 19 満鮮の旅 暁烏敏
7. 22 支那訳された日本仏教家の著述(上)
上海 藤井草宣
7. 22 毒徒然 北平僧状 釈瓢斎
7. 23 朝鮮人暴動について 李迷鳥
7. 23 朝鮮の古義派
7. 23 満鮮の旅 暁烏敏
7. 23 支那訳された日本仏教家の著述(中)
上海 藤井草宣
7. 24 支那訳された日本仏教家の著述(下)
上海 藤井草宣
7. 24 朝鮮木浦より 武田雷雄
7. 25 中国貴州省の宗教法案
7. 26 朝鮮カトリック邦人教区準備
7. 26 支那の新興宗教 道院は如何にして
今日の発達を来したか

1931. 7. 31 満鮮の旅 暁鳥敏
8. 1 大本、人類愛善会の斡旋で 鮮・支人の融和なる一金沢に於ける衝突事件—
8. 1 満鮮の旅 暁鳥敏
8. 2 外蒙古に於ける 反ラマ運動現勢(上)
8. 2 満鮮の旅 暁鳥敏
8. 6 外蒙古に於ける 反ラマ運動現勢(下)
8. 6 満鮮の旅 暁鳥敏
8. 9 毒つれづれ 狂堂先生 釈瓢斎
8. 9 満鮮の旅 暁鳥敏
8. 12 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(一)
8. 13 印度国民運動に於ける 宗教的要素と反宗教的要素 — 福永渙
8. 13 支那に於けるカトリック排撃運動
8. 14 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(二) 廟産興学運動—の教育経費政策の建議(イ) 中華民国中央大学教授邵爽秋
8. 14 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(三) 廟産興学運動—の教育経費政策の建議(ロ) 中華民国中央大学教授邵爽秋
8. 14 印度国民運動に於ける 宗教的要素と反宗教的要素 二 福永渙
8. 15 印度国民運動に於ける 宗教的要素と反宗教的要素 三 福永渙
8. 15 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(四) 廟産興学運動—の教育経費政策の建議(ハ) 中華民国中央大学教授邵爽秋
8. 16 バハイ教の委員会組織運動 望月百合子
8. 16 夏のナンセンス・宗教反宗教 映画に現れた 南洋の宗教
8. 16 興正派最初の朝鮮開教根源地出来る
8. 16 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(五) 廟産興学運動—の教育経費政策の建議(ニ) 中華民国中央大学教授邵爽秋
8. 18 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(六) 邵爽秋の廟産興学運動に対する修正(上) 釈太虚
8. 19 支那に日本の布教権なき理由に依て天理教の布教禁止 杭州に於ける条約違反問題
8. 19 彼の本願 境野黄洋氏(七) 先づ支那、日本の仏教史を完成したい 出来ればマルキシズムの研究も
8. 19 大本出口総裁補 奉天駐在 九月中に出発
8. 19 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(七) 邵爽秋の廟産興学運動に対する修正(下) 釈太虚
8. 19 支那紅卍字会の巡視要壇一行 更生祝をかねて 大本訪問
8. 20 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(八) 中国仏学会の請願及び内政部頒布の「神祠存廢標準」(イ)
8. 21 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(九) 中国仏学会の請願及び内政部頒布の「神祠存廢標準」(ロ)
8. 22 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(十) 中国仏学会の請願及び内政部頒布の「神祠存廢標準」(ハ)
8. 23 最近の支那に於ける 宗教迫害運動(十一) 中国仏学会の請願及び内政部頒布の「神祠存廢標準」(ニ)
8. 25 支那の布教禁止は 天理にとって打撃だが 本部は重要視してゐない
8. 25 大派台湾開教部の蕃人教化 非常な意気込みの伝道隊一行
8. 25 天理中山伝道部長 満鮮地方出張
8. 26 大本、人類愛善会が 鉄嶺に満州本部を 紅卍字会と提携して
8. 27 浦塩に出来る 太田覚眼氏の胸像
8. 27 広東夜話 芳流生
8. 28 万国基督教青年会が 民国大水災義金募集
8. 29 大邱刑務所に教誨用拡声電話の新設
8. 30 隣邦支那の水害に仏連、義捐金を募る
9. 1 問題を屢々起すことは 布教権獲得の解決へ —米国にも将来起らう— (天理教の支那布教権問題)
9. 2 支那水害に対する仏教徒の義金募集 —仏護、仏連が市の後援で—
9. 2 仏教の海外進出 仲慶秀
9. 3 草案の中国憲法 信教自由で論争
9. 5 新嘉坡より 経谷孝道
9. 6 暹羅の仏教(一) 岡本春岳
9. 6 広東夜話(承前) 芳流生
9. 8 暹羅の仏教(二) 岡本春岳
9. 9 暹羅の仏教(三) 岡本春岳
9. 10 広東夜話(完) 芳流生
9. 10 暹羅の仏教(四) 岡本春岳
9. 11 暹羅の仏教(五) 岡本春岳
9. 12 全仏教徒の名で支那水害救済 事業行はれるか?
9. 12 暹羅の仏教(六) 岡本春岳
9. 13 暹羅の仏教(七) 岡本春岳
9. 15 暹羅国皇帝 日暹寺親拝 当日の奉送迎
9. 15 遙かに友邦中華民国の 水難歿死の霊を追弔 仏連の追弔会増上寺に於て執行
9. 15 暹羅の仏教(八) 岡本春岳
9. 16 紅卍字と愛善会 長江水害見舞募集
9. 16 蕃界宗教事情瞥見(一) 古野清人
9. 17 祖国を去るに当って(上) 江原亮勇
9. 17 蕃界宗教事情瞥見(二) 古野清人
9. 17 満蒙問題遭難者追悼会 大阪仏教開館で

1931. 9. 18 蕃界宗教事情瞥見(三) 古野清人
 9. 18 仏連幹部、名古屋で 暹羅皇帝奉迎
 9. 18 祖国を去るに当って(下) 江原亮勇
 9. 19 蕃界宗教事情瞥見(四) 古野清人
 9. 20 暹羅皇帝陛下 日本御滞在期
 9. 20 本派と日支軍衝突事件 関東別院に電命
 9. 20 中華の新教育方針と 宗教立学校の問題
 9. 20 蕃界宗教事情瞥見(五) 古野清人
 9. 22 日支軍衝突と大谷派の実動 飛行便で軍人名号
 9. 22 ハルビン、吉林無事 大派愁眉を開く 間島は今後危険?
 9. 22 本派関係の 満洲各地情報 続々と打電し来る
 9. 26 暹羅皇帝御入洛と京都仏教各派 奉送迎等の注意
 9. 26 奉天以北管下に 万一の処置を電命 内外に慰問の徹底を期す 大谷派の実動進む
 9. 26 古義真言の 日支時局対策
 9. 27 仏蘭西が印度支那に 小乗大学を建設 - 露無神同盟の皮肉 -
 9. 27 蒙古青年党の 活仏奪取劇 南京政府の走狗だと
 9. 27 中華民国の千字運動
 9. 27 印度大菩提会の手になる 大寺院いよいよ落成 十一月中旬、盛大なる開館式
 9. 27 日支衝突事件に対する 世界宗教平和会議 日本委員会の態度
 9. 29 仏教各派代表の奉迎裡に シャム皇帝御入洛 仏連代表等に握手を賜ふ
 9. 29 賀川氏の教会で 日支平和維持の祈祷会
 10. 1 義捐の拒絶
 10. 1 日支の関係
 10. 1 世界人類の平和を 宗教で実現せよ 中華留日YMCAの談
 10. 2 長春でも満洲事変戦死者追悼会 感謝される大派の活躍 栗田慰問使第三報
 10. 2 中和国の建設至難 大本情報係 吉野花月
 10. 4 満洲事変追悼 児童大会順序
 10. 4 満洲事変慰問使しての 私のメモ 奉天にて 栗田恵成
 10. 7 日支事変と本派 津村開教総長渡支
 10. 8 太平洋会議は取り止め - 満洲事変で日本人とは合作せず -
 10. 9 国民人が求道に来る 香落溪の招提寺別院
 10. 9 大阪浄宗布教団の 満洲戦死者法要
 10. 11 学会に誇るべき二つの 敦煌出土古写本を 同時に龍大でも入手
 10. 11 日華仏教徒が連合して 奉天の窮民に
 起つ 本派関東別院の運動
 10. 11 日支事変と本派
 10. 11 蒙古独立運動抬頭で 活仏の身辺危険
 10. 13 基督教青年会の手で 中国の誤解を解くか
 10. 15 大派朝鮮別院本堂 創立二十五周年記念 功労者表彰を兼ねて来る 二十五日盛大に法要執行
 10. 15 鄭家屯慰問行(上) 四平街在勤 鈴木隆誠
 10. 16 日本基督教徒が熱誠平和の為の祈り 日支教徒の電文類々
 10. 16 極東ロシアの反宗教運動熾烈
 10. 16 日支問題に関し組合基督教会が 声明書を出す 十三日の総会で決議
 10. 16 創立二十五周年法要記念事業として 京城別院沿革史の出版 大派開教監督部の計画
 10. 16 満洲事変慰問を終りて(上) 大谷派朝鮮開教監督 栗田恵成
 10. 17 満洲事変慰問を終りて(下) 大谷派朝鮮開教監督 栗田恵成
 10. 17 日支問題に対する 仏教徒の対策
 10. 17 鄭家屯慰問行(下) 四平街在勤 鈴木隆誠
 10. 21 海外伝道協会を 創立せんとする基督教
 10. 22 日支衝突事件を顧みて「仏教徒は自責せよ」の運動 水野梅曉氏等の提起
 10. 22 日本軍に救護されて思想転換の機会に 触れた 満洲の友人から 金達琪
 10. 22 ラマと賽銭 巡錫地の疲弊
 10. 23 ビルマ来朝僧の 短冊頒布会
 10. 24 大阪上中の 満鮮事情展覧
 10. 24 ビルマの反乱と 仏教僧侶の和平運動
 10. 25 時局問題 日本基督青年から中国基督青年に送られたメッセージ - 日本ワキズメンクラブ日華関係委員代表奈良傳氏発 -
 10. 27 奉天のカトリックが連盟理事会に 日本への駐兵を要求す
 10. 27 黒龍会の内田良平氏 全支親日のため活躍 道院庇護を政府に建白
 10. 27 大学生の軍事思想 満蒙問題に対する 答案から見た
 10. 28 救国同志会 満蒙視察団
 10. 30 大派台湾別院 庫裏、開館工事進む
 10. 30 満蒙の感星大本が 鉄嶺に別院新設 仮事務所を奉天本部に設置
 10. 30 紅卍字会を中心に 満蒙の独立自治会 本門法華の満洲慰問
 10. 30 釜山大願寺 女子講習会終る
 11. 1 インドの怪傑ガンジーの 無所有主義の生活
 11. 1 二諦相依の教旨により 国論統一に奮励せよ 大谷派本山満蒙問題で 全国

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 百万門末に論達す
 1931. 11. 1 在満鮮人の現状を訴ふ 金達琪
 11. 1 紅卍字と愛善会
 11. 3 大本の満洲活動 いよいよ本筋に入り
 て 出口宇知磨氏急遽出張
 11. 5 満洲事変と日支両国の基督教団体の平
 和的解決への祈り
 11. 5 国難来と時局講演会 愛善新聞主催に
 て
 11. 5 築地本願寺社会部 満洲へ慰問袋
 11. 6 満洲事変の根源は スパイ宣教師に在
 り 日高林之助
 11. 6 満洲に於けるカトリックの活躍
 11. 8 急転歩めまぐるし 廻れ、右へ、右へ
 (上) - 蹂躪じられた宗教- 福見涙
 草
 11. 8 中国の密教再建と 大辞典の反響
 11. 8 満蒙戦死追悼 一柳教学部長を迎へて
 11. 8 蕃地青年の読書欲 蕃童は話を聞いた
 がる - 木下大派台湾開教監督談
 11. 10 急転歩めまぐるし 廻れ、右へ、右へ
 (下) - 蹂躪じられた宗教- 福見涙
 草
 11. 11 日本梵文学界の現状を見て 松岡文夫
 11. 11 隠岐島の浄土宗が 満蒙戦死追悼
 11. 11 浄宗会が決議した 満洲事変の対策
 霊場問題で華頂惱む
 11. 12 国威宣揚祈禱会
 11. 12 醍醐派修験聖宝会 満洲事変追悼会
 11. 12 日蓮主義の旗の下に 朝鮮仏教普及会
 生る
 11. 12 大派婦法名古屋支部 慰問袋五千個を
 満洲の駐屯軍に贈る
 11. 13 本派で第二段の慰問使慰問袋 満蒙大
 慰問の計画
 11. 13 朝鮮開館設立計画 最高幹部会議で否
 決さる - がっかりしてゐる関係者-
 11. 13 日支共存共栄を宣明 東洋平和の確保
 は日本の任務であると満鉄会起つ
 11. 13 排日教育の根絶運動 帝国教育会を通
 して盛んに
 11. 14 大本の満蒙宣伝愈々本格的となる
 11. 14 満蒙事変に対する 古義真言宗の活動
 在満真言宗会議 霊牌堂特設
 11. 14 蕃界巡回伝道 木下氏の報告講演 大
 派法主・裏方臨聴
 11. 15 急に龍大スカウト団員を 満蒙に派す
 学校と本山の応援
 11. 15 嫩江激戦の戦死者更に四名 何れも大
 派門徒
 11. 15 仏教済世会が 満洲に慰問使
 11. 15 太田覚眼氏 来る二十日に帰朝
 11. 15 我が国の踏むべき途 (一) 元大阪朝
 日新聞記者 中平亮
 11. 17 我が国の踏むべき途 (二) 元大阪朝
 日新聞記者 中平亮
 11. 17 赤露革命記念日に 支那官憲の宗教圧
 迫
 11. 17 慰問使帰る 渡辺円流氏使命を果して
 11. 18 我が国の踏むべき途 (三) 元大阪朝
 日新聞記者 中平亮
 11. 18 満蒙問題に 龍大の奮起 スカウト団
 の運動
 11. 18 金光健児母国の満洲軍慰問使
 11. 19 満蒙問題の旗幟を掲げ て全国民に呼
 びかける 大本の宣伝使、信者総動員
 満洲神社愈々建立?
 11. 19 我が国の踏むべき途 (四) 元大阪朝
 日新聞記者 中平亮
 11. 19 支那と教団
 11. 19 曹洞、閩宗を総動員し 出征軍恤兵金
 を募る - 満洲に特派慰問使出向-
 11. 20 我が国の踏むべき途 (五) 元大阪朝
 日新聞記者 中平亮
 11. 20 臨濟黄檗各僧堂が連合して 満洲出征
 兵慰問募金託鉢団 大挙、京洛の巷を
 練る
 11. 20 高野山の国威発揚大祈禱会 御守札と
 慰問金寄贈
 11. 20 満洲事変をめぐりて 各宗教の動き
 11. 21 派遣軍慰問で本派女子仏青の街頭運動
 11. 21 軍人名号三千 満蒙出征軍に
 11. 22 回々教民族と連盟して 無神論運動に
 対戦する 西伯利亚人類愛善会の報告
 11. 22 有意義な決議を見て 教化関係者大会
 終る - 今後専ら諸決議を實踐に-
 11. 22 日支事変に対する基督教連盟総会の宣言
 11. 22 日本基督教組合教会へ 中華基督教徒の
 対時局メッセージ
 11. 25 本派全教団の婦人に対し 本部総裁か
 ら懇諭 - 満蒙事件で本格的に動く-
 11. 25 街頭出動 千五百人 本派の恤兵運動
 11. 25 神戸日校連盟の鮮童救济運動
 11. 25 満蒙の寒冷に就て回顧 加来幻堂
 11. 25 日本仏教徒に寄する書 中華民國僧大
 虚法師 同信同教徒に呼びかく
 11. 25 満洲に真宗婦人会 大谷派満洲開教部
 で 近く創立の計画
 11. 26 本派の満蒙慰問運動と 婦人の国論統
 一運動 垂示発表から全教団の動きな
 る
 11. 27 日支紛争論 (一) 井篔節三
 11. 27 婦人に満蒙概念を注入し 恤兵金募集
 に活動 婦人中心の時局講演会も開催
 大派婦人法和会起つ
 11. 27 大谷派本山 満蒙皇軍に更に軍人名号
 11. 27 満洲戦病死者追弔会と 武運長久を亀
 山帝前で 赤井管長けふ満洲へ出発
 11. 27 天台宗の満洲慰問使 昨日神戸出帆
 11. 28 日支紛争論 (二) 井篔節三
 11. 28 満洲の地に於ける 慰問使の活躍に就
 て 浄宗満洲回教区長語る

1931. 11. 29 日支紛争論(三) 井篔節三
 11. 29 満蒙問題に於ける 日本民族の正義(上) 渡辺麻吉
 11. 29 白象国暹羅を語る(1) 在米 経谷孝道
 11. 29 在奉天、日華仏教連合会 の第二回窮民救済運動(零下三十度の酷寒に飢ゆるもの)
 11. 29 群山朝鮮寺院が 大派に所属願 開教監督部で考慮中
 12. 1 日支紛争論(四) 井篔節三
 12. 1 満蒙問題に於ける 日本民族の正義(中) 渡辺麻吉
 12. 1 全国教務所に動員指令—大派の国論統一運動 戦病死傷者弔慰にも活躍
 12. 1 満蒙事変で 大派門徒の戦死者五十七名
 12. 1 満洲皇軍慰問に 各派競うて立つ — 慰問品はあり余っている
 12. 2 満洲事変と大谷派
 12. 2 満蒙問題に於ける 日本民族の正義(下) 渡辺麻吉
 12. 2 日支紛争論(五) 井篔節三
 12. 3 白象国暹羅を語る(2) 在米 経谷孝道
 12. 3 奉天喇嘛教徒の 戦没日本将士慰霊大会 各宗団体も挙って参列
 12. 3 日蓮正宗の 満洲戦士慰問 — 第二回として全国的に募集—
 12. 3 国威宣揚の為 日宗大国持会
 12. 3 単称日蓮宗の満洲慰問使
 12. 3 大宮御所の慰問品を寄託された 本派 満蒙慰問運動
 12. 3 日支紛争論(六) 井篔節三
 12. 4 満蒙に関する時局ポスター
 12. 5 白象国暹羅を語る(3) 在米 経谷孝道
 12. 5 満洲軍慰問の国性芸術の会
 12. 6 満洲事変戦死者と曹洞宗の取扱
 12. 6 南洋にも悟りの会 曹洞宗布教所主催
 12. 9 満洲事変と中華留日YMCA 「決して排日運動はやらぬ」
 12. 12 満洲軍慰問金 募集の『義士会』 名古屋大派林高寺で
 12. 13 海外植民地の産業調査や伝道に 基教海外伝道教会創立
 12. 13 齊々哈爾慰問記(一) 哈爾賓 月輪孝雄
 12. 15 国体の精華 国難の打開 高見範雄
 12. 16 全米支那人の 排日と分裂
 12. 16 台湾蕃 人と本島人に食ひ入る 本派台湾布教
 12. 17 戦傷病兵を慰問して 田中義信
 12. 17 齊々哈爾慰問記(二) 哈爾賓 月輪孝雄
 12. 18 大派慰問使活躍 西田北支監督…天津へ 興地上海輪番…長江へ
 12. 19 時局に因し、上海のY. M. クラブから大阪の同クラブへ 漸く回答が来た
 12. 19 満蒙新興宗教 観音信仰たる「在理會」と 大本との提携
 12. 19 満蒙恤兵金 大谷婦人法話会の献金
 12. 19 太田覚眠氏の帰朝慰勞会
 12. 20 北京大学胡適氏将来の 敦煌出土楞伽師資記 — 倫敦本、巴里本の校訂排印— 北大教授金九経氏の近業 と谷大鈴木大拙氏の解説—
 12. 20 冬至節と印度の「マカラ、サン克蘭テイ」祭(上) 岡本春岳
 12. 20 齊々哈爾慰問記(三) 哈爾賓 月輪孝雄
 12. 23 仏国土建設運動 奉天城内自治指導部 笠木良明
 12. 24 冬至節と印度の「マカラ、サン克蘭テイ」祭(下) 岡本春岳
 12. 27 満洲事変傷病者に 花を贈って慰問 歓迎された大覚寺の慰問
 12. 27 東京大学大谷児童協会の 満洲慰問
 12. 28 満洲雑感 大谷健児団満蒙慰問使 杉村成仁
 12. 28 支那の排日に対して 干支迷信排除の提唱
 12. 28 齊々哈爾慰問記(四) 哈爾賓 月輪孝雄
 12. 28 常磐大定博士の近業 — 支那仏教史跡記念号 S. M生
 12. 28 山本一清博士と 支那人の床屋
 1932. 1. 1 満蒙事変根元記(1) 伊藤痴遊
 1. 1 駐滿軍武運長久祈願祭 伏見稲荷神社にて
 1. 5 太虚法師台鑒(一) 北京本願寺 光岡貞雄
 1. 5 満蒙事変根元記(2) 伊藤痴遊
 1. 5 本願寺派と満洲事変 錦州城頭に日章旗翻るまで
 1. 6 満蒙事変根元記(3) 伊藤痴遊
 1. 6 多く支那側も見舞ったと 浄土宗慰問使は語る — 無事に帰朝して…
 1. 6 太虚法師台鑒(二) 北京本願寺 光岡貞雄
 1. 6 満洲より 東京大派児童協会代表
 1. 7 満蒙事変根元記(4) 伊藤痴遊
 1. 7 太虚法師台鑒(三) 北京本願寺 光岡貞雄
 1. 8 満蒙事変根元記(5) 伊藤痴遊
 1. 8 支那馬匪賊の暴戾に 苦しめられる司教司祭
 1. 8 カトリック宣教師の 満蒙事変観 クラウス博士の放送
 1. 8 太虚法師台鑒(四) 北京本願寺 光岡貞雄
 1. 8 従軍布教手記(第一信) 本派本願寺

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1932. 1. 9 従軍布教使第一班 光岡慈昭
 1. 9 満蒙事変根元記(6) 伊藤痴遊
 1. 9 満蒙問題の真の解決は 満蒙連合の拓殖会社 …の創設はありと大本の提唱…
 1. 9 従軍布教手記(第二信) 本派本願寺
 1. 9 従軍布教使第一班 光岡慈昭
 1. 10 朝鮮の新年 鮮人に聴いた話を中心として 京城 館義賢
 1. 10 満蒙事変根元記(7) 伊藤痴遊
 1. 10 全印度の恐怖時代 反英運動愈よ激化
 1. 10 満蒙をかけ巡りて(上) 洮南にて 名越隆成
 1. 10 太虚法師台鑿(五) 北京本願寺 光岡貞雄
 1. 12 満蒙事変根元記(8) 伊藤痴遊
 1. 12 本派の婦人会代表 更に満洲軍慰問使を派せん
 1. 12 満蒙をかけ巡りて(下) 洮南にて 名越隆成
 1. 13 満蒙事変根元記(9) 伊藤痴遊
 1. 14 満蒙事変根元記(10) 伊藤痴遊
 1. 15 満蒙事変根元記(11) 伊藤痴遊
 1. 15 錦州城其他をフィルムにして帰った 浅草本願寺の慰問使 一名は発病して帰らず
 1. 15 京都仏教倶楽部で 満洲を語る夕
 1. 16 満蒙事変根元記(12) 伊藤痴遊
 1. 16 メダン本願寺基礎なる
 1. 17 満蒙事変根元記(13) 伊藤痴遊
 1. 17 天理教の満洲進発 松村氏出張
 1. 17 満鉄厭戦の耕地に 日本村の 新建設
 1. 17 趙奉天市長の大本入り
 1. 19 満蒙事変根元記(14) 伊藤痴遊
 1. 20 満蒙事変根元記(15) 伊藤痴遊
 1. 20 ガンジーの処置に関し 印度総督へ建白 人類愛善会が最初の意思表示
 1. 21 満蒙事変根元記(16) 伊藤痴遊
 1. 22 満蒙事変根元記(17) 伊藤痴遊
 1. 23 満蒙事変根元記(18) 伊藤痴遊
 1. 24 満蒙事変根元記(19) 伊藤痴遊
 1. 24 日蓮宗徒 遭難事件 本願寺に無関係
 1. 26 満蒙事変根元記(20) 伊藤痴遊
 1. 26 印度の大殿堂壁画 桐谷画伯に決まる
 1. 26 全国に放送される 浅草本願寺の 満洲事変死者追弔法会
 1. 27 支那天台史跡調査 台宗教学部で
 1. 27 満蒙事変根元記(21) 伊藤痴遊
 1. 28 満蒙事変根元記(22) 伊藤痴遊
 1. 29 満蒙事変根元記(23) 伊藤痴遊
 1. 30 仏教と戦争(一) 古川確悟
 1. 30 騙術・武力・実力(上) 一日支問題について 上海より帰航の日 藤井草宣
 1. 30 満蒙事変根元記(24) 伊藤痴遊
 1. 31 仏教と戦争(二) 古川確悟
 1. 31 騙術・武力・実力(中) 一日支問題について 上海より帰航の日 藤井草宣
 1. 31 上海事件と西本願寺 光瑞氏の 大童運動
 1. 31 西本上海別院 砲撃さる
 1. 31 満蒙事変根元記(25) 伊藤痴遊
 2. 2 騙術・武力・実力(下) 一日支問題について 上海より帰航の日 藤井草宣
 2. 2 上海事件で奮起した大阪全日蓮教徒
 2. 2 仏教と戦争(三) 古川確悟
 2. 2 満蒙事変根元記(26) 伊藤痴遊
 2. 3 上海事件に憤激した 大阪本化聖教団 並に大阪仏教社起つ 中国仏教徒に所見を求め各大臣に打電
 2. 3 支那事変と西本関係
 2. 3 上海事件と曹洞 慰問使を派遣す
 2. 3 本願寺本山の 上海事件殉難 者追悼法要
 2. 3 上海事変戦死者と 大谷派の追弔
 2. 3 満蒙事変根元記(27) 伊藤痴遊
 2. 4 大谷派の満蒙対策具体化 布教総監部特設されん 一先づ第一段の施設に着手
 2. 4 仏教と戦争(三) 古川確悟
 2. 4 朝鮮に於ける書堂の激減 とその生徒数に見る珍現象
 2. 4 満蒙事変根元記(28) 伊藤痴遊
 2. 4 S A D Uの地から(上) コロンボにて 江原亮勇
 2. 4 六朝仏に添えて 藤井草宣
 2. 4 日支事変と本派 其活動方面整備す
 2. 4 台湾第一の建物 本派別院 完成して五月に挙式
 2. 4 印度、印度、印度!! ラス・ビハリ・ボース
 2. 4 英国治下の印度の窮状
 2. 4 仏教と戦争(四) 古川確悟
 2. 5 西本上海別院の砲撃は 国際公法無視と抗議 一西本願寺と日支事件一
 2. 5 上海事変と大派 弾雨を冒して全員一避難民の救済に努む 消息断絶三日で氣遣はれた 上海別院より漸く着電
 2. 5 印度、印度、印度!! (二) ラス・ビハリ・ボース
 2. 5 満蒙事変根元記(29) 伊藤痴遊
 2. 6 内鮮人共通の信仰により 精神的融和を囑望 ◇齊藤朝鮮総督が 観音の霊場開発を申入れ
 2. 6 改纂さるる小学地理書 一特に満蒙方面に関し一
 2. 6 満蒙事変根元記(30) 伊藤痴遊
 2. 7 天理教の 上海慰問使 近く出発の予定
 2. 7 大派が上海へ 慰問使派遣
 2. 7 印度、印度、印度!! (三) ラス・

1932. 2. 7 ビハリ・ボース
 兵火相踵ぐ混乱 の巷に伸び行く 支那共産党の現状
2. 7 上海事変と大派佐世保別院の活動 塩沢司令官より謝状
2. 7 S A D Uの地から(中) コロンボにて 江原亮勇
2. 7 満蒙事変根元記(31) 伊藤痴遊
2. 9 印度、印度、印度!!(四) ラス・ビハリ・ボース
2. 9 上海の邦人を救へ…と 東京YMCAが発起の救済運動
2. 9 上海を引上げた 同文書院 長崎で開校
2. 9 大谷派ハルピン教務所無事 畠山從軍慰問使 からの着電で愁眉を開く
2. 9 満蒙事変根元記(32) 伊藤痴遊
- 2.10 印度、印度、印度!!(五) ラス・ビハリ・ボース
- 2.10 満蒙事変根元記(33) 伊藤痴遊
- 2.11 印度、印度、印度!!(六) ラス・ビハリ・ボース
- 2.11 日支事変と本派 戦地に入る布教使
- 2.11 日支事変と大谷派 神戸、長崎両教区の活動
- 2.11 山口宮司の進退問題で 台湾全島神職動揺 政治問題化して紛糾
- 2.11 大派慰問使による 満洲事変実況映画 近く封切り
- 2.11 S A D Uの地から(下) コロンボにて 江原亮勇
- 2.11 満蒙事変根元記(34) 伊藤痴遊
- 2.13 古川確悟氏の「仏教と戦争」を評す(上) 新興仏教青年同盟 妹尾義郎
- 2.13 外務省や公使館等に 抗議や了解を得る 一本派と日支事変一
- 2.13 浄土宗青年教徒が アジア問題討議 明十四日家政高女で
- 2.13 宋版大藏經影印出版 動乱の上海から 計画発表 一流石に大陸的である一
- 2.13 満蒙事変根元記(35) 伊藤痴遊
- 2.14 此際日支仏教徒提携し 和平運動を誘発せよ(上) 藤井草宣
- 2.14 アフガニスタン革命一回教匠迫とその反動
- 2.14 日支事変と西本願寺
- 2.14 大連及奉天の婦人会連合会より 本派側脱退
- 2.14 上海の状況 光瑞氏別院に帰る
- 2.14 古川確悟氏の「仏教と戦争」を評す(下) 新興仏教青年同盟 妹尾義郎
- 2.14 続、白象国暹羅を語る(1) 経谷孝道
- 2.14 満蒙事変根元記(36) 伊藤痴遊
- 2.14 母国婦人の満蒙認識喚起に 在満婦人を代表し本 派本願寺婦人会から …
- 三女史交々語る…
- 2.14 台湾の土になるまでと 妙心新監督 台湾仏教を日本化に
- 2.14 一宗一派に偏せず 仏教徒として起つ 上海事変に際して 長崎仏教会の申合わせ
- 2.16 此際日支仏教徒提携し 和平運動を誘発せよ(中) 藤井草宣
- 2.16 危く助かった特派 上海事変の諸情報 日支事変と本派
- 2.16 長崎仏教会、全市托鉢 上海事変で連日奮闘 大々的慰問の実を挙げる
- 2.16 満蒙事変根元記(37) 伊藤痴遊
- 2.17 此際日支仏教徒提携し 和平運動を誘発せよ(下) 藤井草宣
- 2.18 続、白象国暹羅を語る(2) 経谷孝道
- 2.18 満洲の新天地に開けた 青年の就職のこと
- 2.19 蘇州在留邦人も 上海東本願寺に引揚げ 別院、不眠不休の活動
- 2.19 日支事変と本派 その後の状況
- 2.20 「上海に物資を送れ」 光瑞氏婦りて西本願寺教団内外に大運動
- 2.20 その後のYM倶楽部 日支問題に関する
- 2.20 セイロンの仏教創立記念日 三月十二、三日頃開かれん 日・印仏教徒の握手を要望
- 2.20 新独立国の創建と共に 日宗満蒙に教線の拡張 ◇…近く調査委員を派し 独立教区に昇格の方針
- 2.21 妹尾義郎氏に答ふ(上) 古川確悟
- 2.21 政府へも交渉して 物資の急速運送 本派と日支事変
- 2.21 満洲に人類愛善堂 外廊は加茂様式に
- 2.21 時局の平和的解決に動く 日本基督教諸団体
- 2.21 満蒙新国家成立宣言を 地理教科書に編纂 図書館の計画
- 2.21 醍醐派から 更に満洲へ
- 2.21 続、白象国暹羅を語る(3) 経谷孝道
- 2.23 妹尾義郎氏に答ふ(中) 古川確悟
- 2.23 動乱の上海から(上) 浜本まし枝
- 2.23 満洲慰問映画 加藤教信氏の功績
- 2.24 妹尾義郎氏に答ふ(下) 古川確悟
- 2.24 慰問品五十梱上海急送 大谷派特派慰問使が携行
- 2.24 動乱の上海から(下) 浜本まし枝
- 2.25 臨濟各派僧堂が再び挙って 上海慰問金募集托鉢 南禅管長が光瑞氏に逢って
- 2.25 凶作地救済に 托鉢行脚 日支事変慰問にも
- 2.25 山口県本派の 上海飢饉救済

1932. 2. 25 『満蒙新国家と教界』を語る 東京仏教倶楽部主催で
2. 25 統、白象国暹羅を語る(4) 経谷孝道
2. 26 満蒙への鴻圖樹立『住職の師弟相統は創立の根本義に反す』…日宗道友会決議…
2. 26 茲は建設の国 萌え出す平和の報 鳳凰城に日校新設
2. 26 統、白象国暹羅を語る(5) 経谷孝道
2. 27 大満洲と宗教
2. 27 癩撲滅運動を一 朝鮮にも及ばせ 激化した釜山の現状
2. 27 三十万の日曜学校児童に 新満蒙国の知識啓発 =西本願寺日校課の計画=
2. 28 統、白象国暹羅を語る(6) 経谷孝道
2. 28 満蒙博覧会へ『大本館』参加
2. 28 布教戦線の展望 チリチリの退却ぶり
2. 28 日支事変と宗教家の行動 一般の注文は従前より 著しく変つてゐる
3. 1 豊山宗会 満蒙の教線拡張 と伝道費増額(二十七日)
3. 1 満洲に回教徒連盟結成? 並に世界回教徒大会の計画
3. 3 新満洲国のポスター 児童博物館に展観
3. 3 統、白象国暹羅を語る(7) 経谷孝道
3. 3 満洲国建設まで(上) -宗教関係を説く- 王中將顧問 吉田無堂氏
3. 4 新満洲国への関心
3. 4 大谷派満蒙開教監督部を 首都長春に移す =臨時出張所は奉天= 宮谷氏任命と共に発令
3. 4 新『満洲国』創建と共に 禪風の一大恢復 曹洞の保坂部長の方図
3. 4 根本正邦氏 上海に従軍す
3. 4 特派布教使と一派 代表慰問使を急派 西本願寺と上海事変
3. 4 満洲国建設まで(下) -宗教関係を説く- 王中將顧問 吉田無堂氏
3. 4 大谷派高岡寺院の恤兵品募集
3. 5 満洲国開教
3. 5 長春を中心に仏立講の 満蒙弘通移民計画
3. 5 上海慰問 真言宗の活動
3. 6 支那に於る宗教の研究 -日本宗教協会の企て-
3. 6 満蒙への躍進 女はまだ…
3. 6 愛善会の上海特派
3. 6 満洲建国と回教徒 -クルパンガリー氏談-
3. 8 スエダゴン仏社物語(上) ビルマ僧 ビヤイ・ウ井スタ
3. 8 朝鮮人問題解決 の鍵を握るか? 大阪府の朝鮮人生活調査
3. 8 殉国戦病没将士に対し 僧侶の公式葬祭は不可 一神職が従軍請願に 意見書を提出す
3. 8 上海避難民の語る 大谷派別院の奮闘 ◇…全く軍人以上だと…
3. 8 京都市の失業対策と満蒙移民調査
3. 9 スエダゴン仏社物語(中) ビルマ僧 ビヤイ・ウ井スタ
3. 9 上海外人の誤解を解く YMCAの慰問使
3. 9 事変の上海より 豊原青雲
3. 9 浄土宗宗会第一日 戦死者追弔法要やら 常任委員の選定やら
3. 9 傷病兵の枕頭に 花束その他の贈物 光暢法主夫妻の慰問 …朝倉課長は先遣に…
3. 9 全国一斉に大追弔会 古義真言と上海事変
3. 10 スエダゴン仏社物語(下) ビルマ僧 ビヤイ・ウ井スタ
3. 10 セイロンの島から(上) 印度に於ける日支事変の影響 コロンボにて 江原亮勇
3. 10 満蒙に活躍を計画する 日本基督教青年連盟
3. 10 上海事変余聞 上海東本願寺にて 藤谷仙龍
3. 10 満洲史談(上)
3. 10 三勇士の母堂たち入洛
3. 10 朝鮮人のカトリック信者を 専門に司牧 ベルトラン氏来る
3. 11 大乘相應の地=満洲国 新国家建設の巨歩
3. 11 新満洲国の宗教行政
3. 11 六百余の遺族を迎へ 全国の賓客を招じて 西本の大追弔会盛大
3. 11 肉弾三勇士弔訪記(上) 池田堅正
3. 11 諺文創製最初の 朝鮮訳蔵経版 発見されて刊行
3. 11 満洲国建国式と古義真言の祝電
3. 11 臨濟各派の 上海慰問使 妙心派に委託か?
3. 11 浄土宗宗会(第三日) 満洲教線拡張論に賑ふ、国策と東洋の平和を 重んじ宗派を超越せよと 渡辺執綱の大喝
3. 11 法要延修の大谷派… 日支事変に全力集中
3. 12 同朋が満洲国を埋骨の地として永住する為に 満洲神社を創建せよ -旅順で奉建会を組織-
3. 12 日支事変と興正派
3. 12 聖護院門跡の 軍事慰問会 二千五百円を寄託
3. 12 大津仏連有志が 県下戦死者 弔慰料

- 寄贈
1932. 3.12 釜山共生園の 記念講堂新築計画
- 3.12 肉弾三勇士弔訪記(下) 池田堅正
- 3.13 浄土宗宗会第四日 此日も満洲伝道問題 一午後から日程に入る一
- 3.13 支那はどうなる(上) 高群逸枝
- 3.13 セイロンの島から(下) 印度に於ける日支事変の影響 コロンボにて 江原亮勇
- 3.13 満洲史談(中)
- 3.13 事変が、青少年の上に 如何に影響したか
- 3.13 満蒙博の大本記念講演 けふから…大阪分院で
- 3.13 東京市外富ヶ谷に 回教学校を見る
- 3.13 上海雑信(上)
- 3.15 日蓮宗会(第三日) 日支戦没将士の追悼と 柴田総監の演説
- 3.15 新国家に飛躍を期する曹洞が 新たに満蒙教会創立 近く発起人会で正式決定
- 3.15 戦死者の霊は臨時大祭で合祀 四月廿五日より四日間 靖国神社の臨時大祭
- 3.15 本圀寺の戦死者追悼会
- 3.15 日支事変の戦没者追悼
- 3.15 戦没勇士追悼 日蓮宗東京修法師会
- 3.15 上海雑信(下)
- 3.15 天理教理生会が 北滿に『理生村』を 八百家族の移民を計画
- 3.15 追弔飛行も行はるか? 故中村少佐、殉難記者遺族等の参拝を迎ふ 大派の殉国戦病死者追弔法要
- 3.15 大谷派婦人法話会 慰問袋発送
- 3.15 近く慰問袋二万個を すでに大半 本山に到着
- 3.15 大派の慰問激動に 植松司令官の感状
- 3.15 支那はどうなる(中) 高群逸枝
- 3.16 上海雑信
- 3.16 上海統後の 婦人の心境 …虹口婦人…
- 3.16 臨黄各派の上海慰問使 妙心派管長に委託
- 3.16 大派の追弔法要 空には東本願寺を中心に 陸軍機の五色の散華 地には六百の…小学生徒の肉線で「弔」の奉悼大文字を描く
- 3.16 支那はどうなる(下) 高群逸枝
- 3.17 満洲史談(下)
- 3.17 日滿相互の文化的接触 各文化団体が競って視察見学
- 3.17 東洋平和の大使命を説く 光暢法主の親教 堂々たる裏方の法話
- 3.17 大覚寺本山上で 日支事変殉難者大追悼法会
- 3.17 古義派管長の傷病兵慰問
- 3.17 天理教の傷病兵慰問
- 3.17 日支事変戦病死者 追悼大法会
- 3.17 建仁寺本山の 大追弔会
- 3.17 満蒙に志を伸べんとするもの 満蒙人への開教は 施業と芝居が第一
- 3.17 教員の就職地獄と満蒙 彼地進出は目下絶望
- 3.17 満洲国家 と日米問題で 意見交換会 日本宗教協会主催
- 3.17 経済鎖国主義と東亜モンロー
- 3.18 事変と宗教家(上) 高津正道
- 3.19 鮮人僧侶を起用して 在満鮮人に布教 ◇…其他曹洞満蒙協会の抱負 近く調査員を同地に派遣せん
- 3.20 上海雑信
- 3.20 事変と宗教家(下) 高津正道
- 3.23 大派と満洲国 満洲国の開拓は北海道の開拓と全く異ふ 出発前宮谷法含氏談る
- 3.23 満洲を偲ぶ 粉雪と烈風の中に 嚴肅に殉国者を弔ふ 涙新たな肩衣姿の遺族 東本願寺の追弔大法要
- 3.23 満洲国宗教利権獲得の 潜行運動が始まる 抜けかけの功名を目ざして
- 3.23 文部省が満蒙映画作製
- 3.23 上海通信
- 3.24 東洋に醒めよ 中平亮
- 3.24 満洲会館設立の議 福田宏一
- 3.24 観音信仰の下に経営さるる 大連の無料宿泊所
- 3.25 共存共栄の原理 日支宗教家よ考えよ! 一塹壕の中に芽む新興支那精神一
- 3.27 上海窮民へ 大本から二千弗 紅卍字会を経て
- 3.29 南洋の花祭 曹洞宗布教所主任
- 3.30 南洋庁本派本願寺へ 布教所設置を認可
4. 1 東洋文化伝統の復興(上) 伊福部隆輝
4. 1 愈よ近く組織を見る 曹洞の満蒙協会 三十日発起人総会を開いて決定
4. 1 恐るべき支那の統制 本派上海特派八雲氏の便り
4. 1 事変の生んだ奇縁 …京城で同じ日に二つ… 月輪ハルピン在勤を繞って
4. 1 「国際平和の途は武力外にあり」と 先づ自国の政策を告白して 日本在留アメリカ宣教師団 日支時局問題に重大な声明書発表
4. 2 東洋文化伝統の復興(下) 伊福部隆輝
4. 2 満洲開教
4. 3 曹洞満蒙協会 ▽=の会則及び役員の顔触決し ▽-愈よ四月一日から実動へ!
4. 3 朝鮮の天道教(上) 李北滿
4. 3 光暢法主夫妻三たび 傷病兵慰問の旅へ 来る十七日より三日間 東京、横

1932. 4. 3 須賀巡回
 4. 3 大谷派日校連盟から 小山乙若丸氏
 朝鮮童話巡回 児童協会主催で
 4. 3 満蒙博 四月十五日から五月二十九日
 迄 岡崎講演で盛大に
 4. 5 朝鮮の天道教(中) 李北満
 4. 5 求道者がいきり立ち 布教者が悩む傾
 向 大派朝鮮開教団先づ醒め 布教方
 針を建て直す
 4. 5 大派長浜別院の 戦病死者追弔法要
 4. 5 『満洲国』が 我教育家を招いて 教
 育の根本改革 一日本語を第二外語に一
 4. 6 朝鮮の天道教(下) 李北満
 4. 6 信界異象 以外! 発見されたる 十九
 路軍の新宗教 これが彼等を強くさせ
 た
 4. 6 蕃人説法の道霧社蕃の本派 佐藤氏の
 話
 4. 6 大派の上海慰問品 第二回六千袋を
 来る七日長崎丸で
 4. 7 大阪大倫寺の日支事変追弔講演
 4. 7 事変と宗教 支那軍の再生信仰
 4. 9 満洲国執政宣言雑感(上) 於長春
 笠置良明
 4. 10 満洲国執政宣言雑感(下) 於長春
 笠置良明
 4. 12 仏立講大阪清風寺が 満洲で硝子工業
 を計画 有望視されるその将来
 4. 13 大阪仏教少年団の 全東洋こども花祭
 印度暹羅支那代表参拝
 4. 13 満洲国を覗いて 長春にて 三村日謙
 4. 15 英提督の娘スレードが 聖雄ガンジー
 の侍女となるまで
 4. 15 単なる集団移民は不可 日本移民の根
 本方策 宗教、教育、医術の三要件
 宗教家の奮起を熱望 植民政策の山本
 美越乃博士談
 4. 16 上海を中心の 国際的診療隊出発 西
 本願寺仏教婦人会の主動
 4. 17 印度の国富 印度志士 ラス・ビハリ・
 ボース
 4. 17 日露役後からやっあってゐる 本派の満洲
 布教政策 津村開教総長談
 4. 17 満洲人の好く 色と形
 4. 20 日滿仏教協会を設立 ▽して両者戮力
 一致して ▽普済の大道を擁護せん
 超派別的に秩序ある活動へ
 4. 20 満洲開發の基礎準備 文部省では調査
 委員会を設置
 4. 20 移住者のために 満蒙学校 創設さる
 4. 21 異郷の空で進退兩難は陥る 憐れな満
 洲移民の群れ ◇…渡満を思い止まら
 してくれと 若本曹洞監理からの情報
 4. 21 全国神社仏閣にお願ひ 支那の日本小
 学児童に 歴史参考品を送れ 青島滄
 口日本小学校から
 4. 22 満蒙進出の第一歩として 大派、齊々
 哈爾に布教所設置 宮谷監督全満蒙
 視察
 4. 22 大本海外宣伝部が エス語を満洲に普
 及 近く宣伝員も渡満する
 4. 22 『我邦の態度を内外に闡明し 日華間
 の紛争を速に解決せよ』 日本基督教
 連盟の進言
 4. 22 經典に現れた 印度の自然 深浦氏帰
 朝談
 4. 23 東亜風雲録 内閣の人々(二十五)
 伊藤痴遊
 4. 24 東亜風雲録 内閣の人々(二十六)
 伊藤痴遊
 4. 24 西本願寺が満洲の現地に 大追弔法会
 を修行 大谷尊由氏自ら出馬し 教陣
 発展のために活動
 4. 26 東亜風雲録 内閣の人々(二十七)
 伊藤痴遊
 4. 26 京城仏教徒懇談会の 教化振興の实行
 4. 26 満洲追弔会に 光瑞氏も 出席するか
 4. 26 京城あかつき会の 釈尊伝絵寄贈の壮
 挙 全鮮二千三百の初等学校へ
 4. 26 帝国社会教化団 満洲居留民 慰問に
 出発
 4. 26 満洲文化の 開発に 拓殖大学が 分
 校設置か
 4. 27 支那寺院経済問題(上) 一支出費に
 就いて一 奥村良秀
 4. 27 東亜風雲録 内閣の人々(二十八)
 伊藤痴遊
 4. 27 印度の青年 ナイル君に 聞く会
 大阪百花村で
 4. 27 上海のアメリカ牧師 来朝して巡歴
 非常に慎重な態度で 十年後の上海を
 心痛
 4. 29 支那寺院経済問題(中) 一支出費に
 就いて一 奥村良秀
 4. 29 東亜風雲録 内閣の人々(二十九)
 伊藤痴遊
 4. 29 案外な神道と基教 上海に使いして帰っ
 た 西本願寺八雲円成氏
 4. 29 布教使を集団移民と共に 随伴派遣す
 る 浄土宗の満蒙対策
 5. 1 満洲開教
 5. 1 支那寺院経済問題(下) 一支出費に
 就いて一 奥村良秀
 5. 1 東亜風雲録 内閣の分裂(一) 伊藤
 痴遊
 5. 3 東亜風雲録 内閣の分裂(二) 伊藤
 痴遊
 5. 3 日滿仏教連合会が 国際連盟調査委員
 長に ステートメント手交
 5. 3 西藏大蔵経甘殊爾 勸同目録完成す
 谷大、核部氏の世界的貢献 シルバン・
 ルビー博士功績を讃美

1932. 5. 4 東亜風雲録 内閣の分裂 (三) 伊藤
痴遊
5. 5 東亜風雲録 内閣の分裂 (四) 伊藤
痴遊
5. 6 東亜風雲録 内閣の分裂 (五) 伊藤
痴遊
5. 7 東亜風雲録 内閣の分裂 (六) 伊藤
痴遊
5. 7 谷大から渡辺、旭岡君が 選ばれて満
蒙学校へ 末寺子弟の海外発展に着眼
5. 8 東亜風雲録 内閣の分裂 (七) 伊藤
痴遊
5. 10 東亜風雲録 内閣の分裂 (八) 伊藤
痴遊
5. 11 東亜風雲録 内閣の分裂 (九) 伊藤
痴遊
5. 11 西鮮の一隅から 中島昌隆
5. 11 大谷派朝鮮開教団が 鮮陣布教進出を
決議 私塾開設、鮮童教養等々 根本
案を樹て意気旺ん
5. 12 東亜風雲録 内閣の分裂 (一〇) 伊
藤痴遊
5. 12 児童博物館に 満洲土俗玩具を 大派
満蒙監督宮谷氏が
5. 12 笠木良明氏に 聴くの会 十三日大阪
百花村で
5. 12 池田澄達氏著 初等西蔵語読本 杉本
義男
5. 13 東亜風雲録 内閣の分裂 (一一) 伊
藤痴遊
5. 13 満洲や上海事件の真相を 大本がS語
で各国へ 支那エスパンチストの
狡猾な逆宣伝に對抗して
5. 14 東亜風雲録 内閣の分裂 (一二) 伊
藤痴遊
5. 14 『満洲の日本児童達は 宗教童話に飢
えてる』 満鮮童話巡回から帰った
大派の小山乙若丸氏談
5. 15 東亜風雲録 内閣の分裂 (一三) 伊
藤痴遊
5. 15 鮮人布教所、鮮人青年講習所等を新設
し 朝鮮仏教渡日記念日制定 -大派
朝鮮開教団の答申内容-
5. 15 大派と満蒙開教熱 開教資金献金相次
ぐ 八十老僧三百円寄付
5. 15 市内寺院から 満蒙視察計画 近く宮
谷氏に聴く会
5. 15 拓務省等と意見を交換し 宮谷監督ら
帰る
5. 17 東亜風雲録 内閣の分裂 (一四) 伊
藤痴遊
5. 17 新満洲国の 新教陣 を練って赴いた
本派河村開教総長
5. 17 満洲統治と指導員 -笠木氏の談片-
5. 18 東亜風雲録 内閣の分裂 (一五) 伊
藤痴遊
5. 18 満洲国溥儀執政に 王道政治の根本精
神に『太子十七憲法』を 光暢法主
から進言 宮谷満蒙監督が謁見して
鄭孝胥総理も太子尊崇
5. 20 東亜風雲録 其後の朝鮮 (一) 伊藤
痴遊
5. 21 東亜風雲録 其後の朝鮮 (二) 伊藤
痴遊
5. 21 『満蒙新布教所開設は 速急に実施出
来ぬ 現在ではチチハル、錦州が第一
着』 大派宮谷満蒙開教監督談
5. 21 本派満洲 開教本部を 奉天に設置
5. 22 東亜風雲録 其後の朝鮮 (三) 伊藤
痴遊
5. 22 太子の十七条憲法は 溥儀氏先刻御承
知 幼少の時から教はってると
5. 24 東亜風雲録 其後の朝鮮 (四) 伊藤
痴遊
5. 24 満洲国の心臓に触れ 大派の満蒙特派
使 武田氏、廿日奉天発帰る
5. 25 ポンペイに入る (上) 江原亮勇
5. 25 朝鮮の釈尊の降誕祝賀会
5. 25 大本の満洲博 華々しく開催せんとす
5. 25 満鮮日記 (上) 小山乙若丸
5. 26 ポンペイに入る (下) 江原亮勇
5. 26 渡辺円流氏の 上海慰問
5. 26 満鮮日記 (中) 小山乙若丸
5. 27 日満文化の提携と 振興等を議する
全国連合教員大会 月末三日間金沢市
で
5. 27 本派で唯一の 裏南洋に 説教所設立
テニアン島に
5. 27 曹洞宗満蒙協会の調査委員近く渡満
常務役員の顔触れ決る
5. 27 満鮮日記 (下) 小山乙若丸
5. 29 新満洲国と独逸主義 文学博士 谷本
富 一
5. 31 新満洲国と独逸主義 文学博士 谷本
富 二
5. 31 土地、風俗、人情に精通 せしむべく
新京で 開教使の養成 大派の満蒙開
教進出
6. 1 新満洲国と独逸主義 文学博士 谷本
富 三
6. 1 東亜風雲録 其後の朝鮮 (五) 伊藤
痴遊
6. 1 文部省社教局が 満蒙撮影隊を派遣
6. 3 曹洞宗満洲視察員 八日東京発 約一
か月実情調査
6. 3 日満軍士の英霊を祀る 護国寺を建立
趙欣伯氏から建議
6. 3 東亜風雲録 其後の朝鮮 (七) 伊藤
痴遊
6. 4 東亜風雲録 其後の朝鮮 (八) 伊藤
痴遊
6. 4 新満洲国と独逸主義 文学博士 谷本

- 富
1932. 6. 4 朝鮮同胞の信仰は 観音さま中心 布教も朝鮮同胞があたる 京城に生まれる観音堂
6. 5 日、満、鮮の可愛い六人が 満洲国の少女使節 東京では仏教少年少女連盟も之を歓迎する会
6. 5 東亜風雲録 其後の朝鮮 (九) 伊藤痴遊
6. 7 ある支那基督教徒の 戦争に就ての祈り (チャイニースレコーダー)
6. 7 青年教化と教育政党化排撃に 八百の教育団体断然起つ 注目さるる今日からの連合大会 日滿教育提携の具体案
6. 7 「偽らざる慰問使真理を 謙虚に告白する」 十九路軍の強い理由 -大派藤谷仙龍氏談-
6. 7 東亜風雲録 京城の兵変 (一) 伊藤痴遊
6. 8 付属地仏教ではね? 満洲国建設と仏教徒
6. 8 龍大生の満洲視察団
6. 8 王道の意義とその 社会的根拠について 松村謙
6. 8 東亜風雲録 京城の兵変 (二) 伊藤痴遊
6. 9 支那に行はれたる 仏教社会事業 (上) 小笠原宣秀
6. 9 東亜風雲録 京城の兵変 (三) 伊藤痴遊
6. 10 日本即満洲国・満洲国即日本 聖なる大乘道のなかに 渾然匂ひ綻ぶ満洲国 解放=融合調和の美しき色彩
6. 10 妙心寺にて 満洲事情講演
6. 10 支那に行はれたる 仏教社会事業 (下) 小笠原宣秀
6. 10 東亜風雲録 京城の兵変 (四) 伊藤痴遊
6. 11 満蒙開教が重要議題 教区会・学階兩条例も改正 総予算額は百廿四万円 大派宗議会けふ開会
6. 11 東亜風雲録 京城の兵変 (五) 伊藤痴遊
6. 12 印度の宗教衝突と英国 所謂回印教徒事件につき
6. 12 齊藤首相の念願になった 内鮮融和の親世音像 朝鮮曹沃寺に安置
6. 15 臨黄宗務当局 上海を聴く 臨黄合議所で
6. 16 高遠なる宗教的信念を基調とし 善隣の友好中外の平和を目標に 教化振興会の満蒙開発 -京都で講習会を開催-
6. 16 支那の王道 日本の皇道 千家尊建
6. 17 大連より
6. 18 東亜風雲録 京城の兵変 (六) 伊藤痴遊
6. 19 東亜風雲録 京城の兵変 (七) 伊藤痴遊
6. 21 大派宗議会の新国家建設犠牲者 大追悼会 来る二十六日奉天で
6. 21 西本願寺の満洲国に於る 活動愈よ本舞台 大谷尊由氏けふ渡満
6. 21 東亜風雲録 京城の兵変 (八) 伊藤痴遊
6. 22 満蒙開発とその開教 (上) 五十嵐賢隆
6. 22 大派宗議会 [二十日午後] 開教費問題沸騰 剰余処分論も出る 質問相続く本会議
6. 22 大派開教の歴史に鑑み 満蒙開教に警告 宮谷監督の説明
6. 22 二十一日 内部崩壊の本山に 満蒙進出は早計稲葉道意氏の熱論
6. 22 現在は 満洲人への布教は 危険が伴ふ困難 ◇…先づ特殊の布教使養成が急務と 豊山の中村部長の報告
6. 23 大派宗議会 (廿二日) 開教課の特設と 連令式更改建議 直達問題で難色あり
6. 23 東亜風雲録 京城の兵変 (九) 伊藤痴遊
6. 23 満蒙開発とその開教 (下) 五十嵐賢隆
6. 24 一切の社会的欠陥を除去せよ…と 満洲国社会事業協会創立 半官半民的の組織で
6. 24 東亜風雲録 京城の兵変 (一〇) 伊藤痴遊
6. 24 西本願寺漢口開教使 原田君の死を悼む □□別院 田中哲巖
6. 24 大谷派の満蒙開教進出 吉林、錦州既に往く きのふ橋開教使出発
6. 25 満洲国少女使節を迎へて 東京仏教徒の歓迎準備 -その歓迎方法の具体案-
6. 25 大派宗議会 (廿三日) 各建議案可決 満蒙回教万全を期す 常任委員会設置建議
6. 25 東亜風雲録 京城の兵変 (一一) 伊藤痴遊
6. 25 龍大生の手で 仏教の海外紹介 英、独、仏、支那等へ
6. 26 大派宗議会 (廿四日) 布教権確立で質問 布教条例改正、芳原議員建議案可決さる
6. 26 東亜風雲録 京城の兵変 (一二) 伊藤痴遊
6. 26 満洲国少女使節を迎へ 日滿交驛講演会 大谷派本山の主催で =二十八日山内白書院に於て=
6. 28 宗教、人類の異同を問はず 日蒙親善の基調とならん 大本愛善会、喇嘛教と提携

1932. 6. 28 児童教化部は 鮮満お伽旅行 讚仏歌普及に努力
 6. 28 龍大の学生等の 満洲見学 旅行決る
 6. 28 近江愛国革正会の 朝鮮人無料夜学校開設
 6. 28 満洲国少女使節にキモノを贈る 大谷婦人法話会が
 6. 28 東亜風雲録 京城の兵変 (一三) 伊藤痴遊
 6. 28 講習会、追悼法要を兼ねた 曹洞宗朝鮮布教師大会
 6. 29 東亜風雲録 京城の兵変 (一四) 伊藤痴遊
 6. 30 満洲国使節の『三大使命』 団長 于静遠
 6. 30 建国最初の民間使節 満洲国証人を叫ぶ 東本願寺の歴史的光景
 6. 30 東亜風雲録 京城の兵変 (一五) 伊藤痴遊
- 9858号(1932. 6. 30)~9999(1932. 12. 17?)号まで欠号
12. 20 日滿仏教提携の 大理想に燃えて 句仏氏来春渡満か 本山では健康を憂慮
 12. 20 朝鮮青林教の大動揺 幹部悉く逮捕さる
 12. 22 東洋に楽土建現の為 宗祖の精神に還り 驟然渡満を決行す 句仏氏の壮挙に対し 大谷家で支援を望む
 12. 23 炯眼可畏 百十余年前の 満蒙経略大論 佐藤信淵の『混同秘策』
 12. 24 出軍の順次を示し 渡海の法に及ぶ 仮皇居は南京に 信淵の「混同秘策」より
 12. 25 内鮮融和と日滿親善を目し 東亜仏教協和会生る 日比谷公会堂で華々しく発会
 12. 25 先づ執政府で 溥儀執政と懇談 渡満の句仏氏
 12. 27 『粟少の国に相食む 日本仏教徒の眼光狭し』 達磨や隠元に学べ 『満洲開教』の名に恥ぢよ! 句仏氏初めて抱負を語る
 12. 28 『満洲に骨を埋めずー 埋骨は世界の真中で』 死しても唯一人の友あり 溥儀執政と打合す 句仏氏初めて抱負を語る (承前)
1933. 1. 1 屯田僧の行衛 藤井草宜
 1. 1 対支文化事業部が 満洲国の図書 館建設を援助
 1. 1 満洲問題は何処へ往く 辻円証
 1. 5 大同学院募 集学生詮衡
 1. 7 肅親王の令孫 洛東の寓居で 支那語教授
 1. 8 月に吼ゆ(1) 新嘉坡 経谷孝道
 1. 8 大派で断然トップの 満洲国留学僧
1. 10 月に吼ゆ(2) 新嘉坡 経谷孝道
 1. 10 考古学的にも深い関係をもつ 台湾生蕃の土俗品 京大國史陳列室を賑はす
 1. 11 月に吼ゆ(3) 新嘉坡 経谷孝道
 1. 11 日滿教育文化協会 十二日東京で 創立発人會
 1. 11 鮮人給仕の悲願ー 生命を本願寺に捧ぐと 血書の請願書を ◇大谷派本願寺へ!
 1. 12 月に吼ゆ(4) 新嘉坡 経谷孝道
 1. 12 仏教の海外紹介論文等 ー龍大近信一
 1. 13 月に吼ゆ(5) 新嘉坡 経谷孝道
 1. 14 月に吼ゆ(6) 新嘉坡 経谷孝道
 1. 14 龍大生で満洲建国創建事業に志すもの 続々と現れ注目さる
 1. 15 月に吼ゆ(7) 新嘉坡 経谷孝道
 1. 15 すべての手続きを了して 日滿仏教提携促進 世界大同仏教会の飛躍
 1. 15 日滿鮮人が一堂に会し 時局に就て懇談 東亜仏教協和会の主催
 1. 17 極東を護る人々に(上) 江原亮勇
 1. 17 近日発会する 日滿教育文化協会 水野鍊太郎氏を会長に 綱領決る
 1. 18 極東を護る人々に(下) 江原亮勇
 1. 21 印度梵教徒の宗教生活(一) 岡本春岳
 1. 22 印度梵教徒の宗教生活(二) 岡本春岳
 1. 22 満洲開教三十年史の 根本から批判研究 西本、津村開教総長談
 1. 23 印度梵教徒の宗教生活(三) 岡本春岳
 1. 24 満洲開教等を力説 大谷執行長の施政方針演説
 1. 24 満洲のクラブ運動 協和会の文化活動機関
 1. 25 印度梵教徒の宗教生活(四) 岡本春岳
 1. 26 印度梵教徒の宗教生活(五) 岡本春岳
 1. 26 約五万円の予算を投じ 日宗、満蒙に進出 ◇布教師量を増加して 日滿学校、施業施療を始む
 1. 27 マンチウリ事変のー 山崎領事に会ふ記 宮谷法含
 1. 28 印度梵教徒の宗教生活(六) 岡本春岳
 1. 28 日滿鮮時局ー 懇談会に臨みて
 1. 29 印度梵教徒の宗教生活(七) 岡本春岳
 1. 31 印度梵教徒の宗教生活(八) 岡本春岳
 1. 31 西六集会 新教線拡張案 満洲国の独立問題

1933. 2. 1 北滿の奥地佳木斯の 孤独の武装移民団に 温い慰問の一番乗り 大派、月輪開教使が 屯墾生活を共にして
2. 1 印度梵教徒の宗教生活 (九) 岡本春岳
2. 1 仏教徒を基調とした アジヤ連盟たれ 前順天時報社長 渡辺哲信氏談
2. 3 吉林軍をも慰問 屯墾隊の歓喜 大派、月輪開教使手記
2. 3 国民教育に対する 新しい仏教運動 京城「あかつき会」の運動
2. 4 大アジア主義は 我精神文化を基調 満洲国側の方針決定
2. 5 国禁の書「鄭鑑録」を巡る 朝鮮の類似宗教 (一) 兎川寛二
2. 7 国禁の書「鄭鑑録」を巡る 朝鮮の類似宗教 (二) 兎川寛二
2. 8 米国ミッション の東洋伝道 調査報告書発表 全日本基督教徒の関心と調査
2. 8 国禁の書「鄭鑑録」を巡る 朝鮮の類似宗教 (三) 兎川寛二
2. 9 国禁の書「鄭鑑録」を巡る 朝鮮の類似宗教 (四) 兎川寛二
2. 9 満洲国開拓開教の 有為の人材を養成 大派満洲拓事講習所 規程愈々発示さる
2. 10 揣摩さるる米国ミッション平信徒団の 東洋伝道調査報告書の内容 教外の者にも多大の興味がある
2. 10 国禁の書「鄭鑑録」を巡る 朝鮮の類似宗教 (五) 兎川寛二
2. 10 満洲大靈廟 の建設促進 西岡大元氏 出発す
2. 11 朝鮮カトリックの恩人 ミューテル区長
2. 11 国禁の書「鄭鑑録」を巡る 朝鮮の類似宗教 (六) 兎川寛二
2. 11 屯田僧を師るる者… 満身これ胆の人 = 金沢市外で農耕し多 数の青年を指導した = 大派伊藤勇氏と語る
2. 15 大派満洲陣 満洲建国記念日 (三月九日) に 拓事、開所されん 屯田僧は三月三日出発 = 沙包屯開拓の黎明 = 満洲国の宗教行政は? 語って語られぬ方針 トッテモ忙しい西山さん
2. 19 仏教東漸の源泉を探る 支那祖跡参拝団 全日本有力仏教者の 賛成を得て 計画成る
2. 21 満洲に創建する「大阪」の主動者の一人 本派の谷間領誠氏 …曰く、移民は信念…と
2. 22 印度の排英親日 前印度総領事 酒匂秀一氏談
2. 23 鄭氏追弔会 大派、宮谷監督導師で 支那寺院般若寺で …来る二十六日…
2. 24 或る南蛮僧に関して 故壺月海旭師を懐ふ (上) 加藤朝鳥
2. 25 浄宗の満洲開教策 葬業者の移植たる勿れ一 宗会に提案の最重要事項
2. 25 京城雑信 伊東忠
2. 25 或る南蛮僧に関して 故壺月海旭師を懐ふ (中) 加藤朝鳥
2. 26 或る南蛮僧に関して 故壺月海旭師を懐ふ (下) 加藤朝鳥
3. 1 コロンバイル事件 犠牲者の 大供養会
3. 3 大派満洲屯田僧の壮观 『埋骨堂期墳墓地 東洋に理想郷を建設せよ』 …感激深き親形式…
3. 3 日満児童の交馳 更に材料を多数あつむ 西本願寺伝灯法要準備彙報
3. 4 屯田僧を送る
3. 4 宗教に国境あり 井上右近
3. 4 大派満洲開拓陣第一線 さらば屯田僧!! 殉教の悲願雄々しく 勇躍、満洲の荒野へ 大、駅頭の歴史的光景
3. 4 東洋労働会議 俄然時を得て設立の提唱 しかしそれは階級的 本筋のものではない
3. 4 非常時の陰に隠れた 朝鮮の左翼運動 全鮮に蔓延の兆で警戒
3. 4 満洲の布教所へ 提灯を贈る妙心寺
3. 5 伝灯法要宣伝使を 満洲国にも特派 西本願寺伝灯法要準備彙報
3. 5 建国と開教
3. 5 神戸埠頭を埋めた 熱烈! 数百の欲送 感激の怒濤に涙ぐむ 大派の屯田僧 満洲へ!
3. 7 支那の新聞から (一)
3. 8 日宗布教師長尾氏の 海外巡教
3. 9 支那の新聞から (二)
3. 9 神式と仏式をもって 上海の大追悼会 三月三日停戦日をトして
3. 10 伝灯奉告会を期し 日支事變大追弔会 西本願寺伝灯法要準備彙報
3. 10 浄土宗会 宗門行政根本草正叫ばれ 論戦また論戦 緊張の場面二三を見せる 満蒙開教の抱負は如何
3. 12 観音信仰を中心に 日満人の融合 笠木良明氏の発願
3. 12 支那の新聞から (三)
3. 14 三陸惨害と教界の動き 子弟は満洲に在り 天災の三陸を救へ 本派本願寺から全国に飛檄
3. 14 日満仏教提携の為 釈尊降誕会の日に 句仏氏愈々渡満 溥儀執政と会見
3. 14 宗門教育体系の確立後 仏専の移転を行へ 満洲開教問題も相当賑やか
3. 14 支那の新聞から (四)
3. 15 満蒙の宗 教統一に 皇道大本進出
3. 16 満洲より帰りて (上) 医学博士 松

1933. 3. 16 浦有志太郎
 3. 16 満洲の馬賊(上) 旅順 光岡蒼村
 3. 16 近く布かるる 朝鮮神社令
 3. 16 支那の新聞から(五)
 3. 17 満洲より帰りにて(下) 医学博士 松浦有志太郎
 3. 17 内地に一足お先に 朝鮮小作令 ◇…草案なる
 3. 17 アフガニスタン仏国考古探検隊の報告「仏教考古学」アツカン氏が日本で出版
 3. 17 支那の新聞から(六)
 3. 18 支那の新聞から(七)
 3. 18 青年喇嘛僧の 日本留学 十五日ブラタツプに伴はれて来朝
 3. 19 本場の高粱粟 で調理される 満洲民衆食試食会
 3. 19 満洲の馬賊(下) 旅順 光岡蒼村
 3. 21 ハルピン郊外に 商租地契約 天理青年会の満洲移民
 3. 21 満洲蘇家屯に 妙心の布教所
 3. 23 印度仏教界の現状 野生司画伯の 滯印通信から(上)
 3. 23 満洲国布教と 加特力の苦難 匪族の跳梁甚しく
 3. 23 満洲国軍への慰問袋募集
 3. 23 支那に於ける新基督教文学運動
 3. 24 印度仏教界の現状 野生司画伯の 滯印通信から(下)
 3. 24 支那の新聞から(九)
 3. 25 支那の新聞から(十)
 3. 26 いよいよ着いた! 屯田僧労働日誌 不平無く糞車を曳く 聖(ひじり)の丘に大喜び
 3. 26 満洲に建つ智山の寺院 ◇…慰問と視察を兼ねて 御嶽宗務長近く渡満か
 3. 26 支那の新聞から(十一)
 3. 29 屯田僧労働日誌 宗家・分家十一家族それぞれ土地を分配
 3. 30 開城に生れる 内鮮共育の幼稚園
 3. 30 南支の港から(上) 福州にて 江原亮勇
 3. 31 南支の港から(下) 福州にて 江原亮勇
 3. 31 シャムへの感謝 を日本の仏教徒は忘れてゐる
 4. 2 支那の新聞から(十二)
 4. 2 支那の新聞から(十三)
 4. 6 日支事変の大退却会 興正寺本山で
 4. 6 支那の新聞から(十四)
 4. 7 『生涯不還』の鉄則で 満洲国の人柱たらん 選ばれた決死の健児ら 本社に告別の辞を寄す
 4. 8 旅行中の画家の見た 満洲建国と其前後
 4. 8 「満洲を法の温みで」 屯田僧通信
 4. 9 医者になって朝鮮へ 医療施設の充実と 迷信打破の為に 内地の宗教家に望む
 4. 9 大派戦病死者追弔 けふ、殉国将士を弔ふ 千五百の遺族を迎へ 追弔大法要勸修
 4. 11 支那の新聞から(十五)
 4. 12 支那の新聞から(十六)
 4. 12 メッセージ 日支問題を中心として 国際ワキズから 米國新大統領に
 4. 13 支那の新聞から(十七)
 4. 14 満洲国と本願寺 日本留學生の事業 ◇…鄭総理の祝詞
 4. 14 台湾と布哇(一) 台湾に於て 甲斐静也
 4. 15 台湾と布哇(二) 台湾に於て 甲斐静也
 4. 16 菩薩道の実践(上) [大亜細亞誌の発刊に就て] 笠木良明
 4. 16 支那の新聞から(十八)
 4. 18 菩薩道の実践(下) [大亜細亞誌の発刊に就て] 笠木良明
 4. 18 ネパール敢行(一) 椋泉杜民
 4. 18 台湾と布哇(三) 台湾に於て 甲斐静也
 4. 18 満洲国団参と大懇談会
 4. 19 台湾と布哇(四) 台湾に於て 甲斐静也
 4. 19 満洲国開発の 留學生募集 光瑞氏も出発
 4. 19 人類愛善会の 満洲語講習
 4. 19 ネパール敢行(二) 椋泉杜民
 4. 20 ネパール敢行(三) 椋泉杜民
 4. 20 日滿の空を結びつける 飛行場開設を 天理教本部が計画
 4. 20 『光は東方』よりの実現に 大亜細亞建設協会創立 今日盛大な祝賀会
 4. 21 天台宗の満鮮開教視察 加藤、武藤両部長 来月下旬出発
 4. 21 ネパール敢行(四) 椋泉杜民
 4. 25 支那の新聞から(十九)
 4. 26 日本文化の真髓を知らしめる 対外文化事業部 一外務省に近く設置一 奉天の万寿寺に出来た 曹洞宗満蒙協会研究生 ◇…第一回研究生として 櫻村、前川氏等を派遣
 4. 26 支那の新聞から(二十)
 4. 27 支那の新聞から(二十一)
 4. 29 北滿の宗教を統一して 王道文化を拡充 ホロンバイルで宗教団体代表会議 霧社たより 谷本梨庵
 4. 29 支那の新聞から(二十二)
 5. 1 旧条約御破算時代と一 植民地分け換への熱求(一) 富士辰馬
 5. 1 ガンジー派の志士サハイ氏に 今日印度を聴く 明後三日、京都仏教倶楽

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 部主催
1933. 5. 1 日印仏教徒により 東亞連盟 結成促進
5. 2 旧条約御破算時代と一 植民地分け換への熱求(二) 富士辰馬
5. 2 満洲国の天理農村 既耕地七割を占む 肥沃な大農場 橋本正治氏の調査帰来談
5. 3 旧条約御破算時代と一 植民地分け換への熱求(三) 富士辰馬
5. 3 満洲から襲ふカラッ風に 西六政変の序曲? -ス波氏満洲へ抜かれん-
5. 3 往かう!! 聴かう!! 「今日の印度」を 今夕・七時半から
5. 3 支那の新聞から(二十三)
5. 4 旧条約御破算時代と一 植民地分け換への熱求(四) 富士辰馬
5. 4 大谷派能登教学財団が 滿蒙視察員派遣 =近く三名を厳選=
5. 4 御嶽宗務長の 渡滿送別会
5. 4 ジャガタラの 日蘭関係資料や マホメット教に 征服された仏跡
5. 4 支那の新聞から(二十四)
5. 5 斯波隨性氏の 開教総長は 決定的 津村氏と入れかへ
5. 5 東洋モンロー主義を掲げて 日本仏教徒の外交進出 ポース、ブラタッフ氏らを迎へて 京都日印協会誕生せん
5. 5 金光教祖大祭で 満洲巡教
5. 6 わが東洋主義への 一つの序論(一) 伊福部隆輝
5. 6 京都日印協会 創立準備会 明後八日 第一回を
5. 7 わが東洋主義への 一つの序論(二) 伊福部隆輝
5. 7 台湾より申上候(上) 在台北 米沢玄尚
5. 7 ダムマパーラ追憶 B. M. プロートン氏談(上)
5. 9 わが東洋主義への 一つの序論(三) 伊福部隆輝
5. 9 台湾より申上候(下) 在台北 米沢玄尚
5. 9 京城の花祭
5. 9 シャムの親日貴族が 日本の神を祀る 宗教を通じて日暹親善
5. 9 台湾より歸りて 谷本梨庵
5. 9 ダムマパーラ追憶 B. M. プロートン氏談(下)
5. 10 わが東洋主義への 一つの序論(四) 伊福部隆輝
5. 10 最近十年間に於ける 日印関係の推移(上) 今後の十年を待望す 小林義道氏談
5. 11 曹洞宗の朝鮮布教監理 高階瑞仙氏 辞表提出 実行は不可能
5. 11 忠勇なる 傷ける兵士を 曹洞宗慰問 軍人布教使黒田氏派遣
5. 11 禅林寺派近藤氏の 満鮮布教
5. 11 最近十年間に於ける 日印関係の推移(中) 今後の十年を待望す 小林義道氏談
5. 11 日印通商条約の破棄と 印棉不買は共に反対と ガンヂ協会の声明
5. 12 最近十年間に於ける 日印関係の推移(下) 今後の十年を待望す 小林義道氏談
5. 12 台湾僧を養成する 妙心派の専修道場 台北に=本島人は本島で-
5. 13 西本、津村支那開教総長 遂に辞表を出す 後任理事長問題を生ず
5. 14 亜細亜の復興(一) A. M. サハイ
5. 16 亜細亜の復興(二) A. M. サハイ
5. 16 比叡山中学へ無料 満鮮人学生を收容 当局より満洲国へ提案せん 三年制に高中よりも照会
5. 16 支那の新聞から(二十五)
5. 17 亜細亜の復興(三) A. M. サハイ
5. 17 暹羅のデ氏 西本願寺教団 と学制を研究
5. 18 亜細亜の復興(四) A. M. サハイ
5. 18 満洲国産業建設の 学徒動員運動 各宗教大学生も行く
5. 18 京都日印協会 創立委員会 来二十二日開催
5. 19 宗教的指導による 満洲農業移民を待望 光瑞氏の商工移民主義を排す
5. 19 ハイラルに一 事業会社を企画す 皇道大本の第二次工作
5. 20 国際の港上海から(上) 江原亮勇
5. 20 新京より
5. 21 国際の港上海から(下) 江原亮勇
5. 21 上海雜観(上) 伊藤栄蔵
5. 23 上海雜観(下) 伊藤栄蔵
5. 23 支那の新聞から(二十六)
5. 24 支那の新聞から(二十七)
5. 25 印度問題の手引(上)
5. 26 怨親平等の =塔婆= 向出哲堂氏の 満洲慰問
5. 26 印度問題の手引(下)
5. 27 天台宗の満洲開教 新京郊外に十萬坪 満洲国の割譲通達来る
5. 28 屯田僧、留学生は 何れも元氣旺盛だ コロンバイルの宗教連合会では大寺院建立 大派宮谷満洲監督談
5. 28 光瑞氏も教務所に滞在 本派の満洲 津村氏帰朝
5. 30 印度古代の政治(一) 岡本春岳
5. 30 京城若草観音 奉賛会設立
5. 31 印度古代の政治(二) 岡本春岳
6. 1 印度古代の政治(三) 岡本春岳
6. 1 露満国境佳木斯に 大派開教線伸ぶ? 三二二

- 孤立の武装移民村—
1933. 6. 2 印度古代の政治(四) 岡本春岳
 6. 3 印度古代の政治(五) 岡本春岳
 6. 3 ちょいと覗いた印度(一) 榎泉杜民
 印度人の悪い習慣
 6. 3 満洲国で もてた和尚
 6. 3 南洋を聞く夕 …けふ東京仏俱で…
 6. 4 印度古代の政治(六) 岡本春岳
 6. 4 ちょいと覗いた印度(二) 榎泉杜民
 女
 6. 6 植民地土民の教化 とその根本問題
 (上) 在台北 米沢玄尚
 6. 6 印度古代の政治(七) 岡本春岳
 6. 6 朝鮮の音楽会 東亜仏教協和会の催
 6. 6 タゴールと仏画
 6. 6 南洋伝道の志を抱いて 帰国の途につ
 いた 天理青年エラケツ君
 6. 7 植民地土民の教化 とその根本問題
 (中) 在台北 米沢玄尚
 6. 7 印度古代の政治(八) 岡本春岳
 6. 7 ベナレス仏堂の壁画に 野生司画伯の
 奮励 石崎光瑠画伯の土産話
 6. 7 社事、教化事業団体へ 低資で土地売
 譲 新京の都市計画方針 豊山は五千
 坪を購入し 満洲別院を創設する
 6. 7 ハルビンで天台寺を発見 台宗満鮮視
 察一行より
 6. 7 ちょいと覗いた印度(三) 榎泉杜民
 サンタル人
 6. 7 出口王仁三郎 氏の書画類が 満洲国
 へ 抜目ない支那商人 本部では搬出
 防止策
 6. 8 植民地土民の教化 とその根本問題
 (下) 在台北 米沢玄尚
 6. 8 天理教伝道庁 新京に移転 市の中心
 地帯 五千坪を買収
 6. 8 ちょいと覗いた印度(四) 榎泉杜民
 宗教 日本の商品
 6. 8 皇道大本雑記
 6. 9 印度古代の政治(九) 岡本春岳
 6. 9 新京に曹洞宗両本山別院 建築の計画
 進む ◇…日満寺敷地購入其他で 満
 蒙協会の理事会
 6. 9 満洲開教の草分 押野ハルビン駐在
 移動否定運動
 6. 9 ハルビンの天理農村 すでに測量を終
 る 工作には一々軍隊が護衛 橋本参
 事の帰朝談
 6. 11 日満の新教育会議 今夏大連で開催
 6. 11 朝鮮人の増加と 大阪市の救護対策問
 題
 6. 11 世界基教学生連盟の ジャバで 太平
 洋協議会 菅教授も講演に出席
 6. 11 故小村侯を 満洲国の守護神に 生地
 沃肥町民の熱望
 6. 13 印度古代の政治(十) 岡本春岳
 6. 14 まだ見ぬ隣国の 同志に告ぐ(上)
 6. 14 印度覗きに対する疑問 千家尊建
 6. 14 満洲に於て日本天台と 支那天台との
 提携 学生、教師の交換もする 和光
 主講今秋来朝せん
 6. 14 満洲国の教況視察 本派の会衆たちが
 団体組織で行く
 6. 15 まだ見ぬ隣国の 同志に告ぐ(下) …
 [先つ日、中華民国人数名の小集にて
 語れる] … 高田集蔵
 6. 15 南洋土人の宗教的様相(一) 竹下源
 之介
 6. 15 日満学生協会 福田宏一氏等尽力
 6. 15 皇道大本雑記
 6. 16 印度古代の政治(十一) 岡本春岳
 6. 16 南洋土人の宗教的様相(二) 竹下源
 之介
 6. 16 神社と拓殖事業は不可分 日本民族の
 海外発展 の特色は神社の奉斎 小笠
 原氏『海外の神社』を著し 在留同胞
 の注意を喚起
 6. 17 印度古代の政治(十二) 岡本春岳
 6. 17 南洋土人の宗教的様相(三) 竹下源
 之介
 6. 17 満洲人への教化はまづ 祭典主の法要
 で(上) 満洲語を知った布教使に
 日本語講習をさせて優遇せよ
 6. 18 南洋土人の宗教的様相(四) 竹下源
 之介
 6. 18 満洲人への教化はまづ 祭典主の法要
 で(下) 満洲語を知った布教使に
 日本語講習をさせて優遇せよ
 6. 20 本派会衆の満 鮮旅行団決る
 6. 21 大派宗議会(第九日午後) 『屯田僧は
 健在なり』 宮谷満洲監督の説明
 6. 24 僧侶の白衣と 朝鮮の白丁(上) 齊
 東野人
 6. 24 近世支那僧の行持生活(一) 藤井草
 宣
 6. 25 僧侶の白衣と 朝鮮の白丁(中) 齊
 東野人
 6. 25 満洲大派教線 クロッキー
 6. 27 僧侶の白衣と 朝鮮の白丁(下) 齊
 東野人
 6. 29 近世支那僧の行持生活(二) 藤井草
 宣
 6. 29 屯田僧に以上あり? 善後策のため
 伊藤勇主事本山へ
 6. 29 皇道大本雑記
 6. 29 広範囲に亘り 朝鮮布教 使を異動
 人材主義の曹洞宗
 6. 30 近世支那僧の行持生活(三) 藤井草
 宣
 6. 30 七百万の親日宗団 満洲で活躍 聖道
 理善会代表者上京
 6. 30 第二回アジア教育大会 本年高野山で

- 開会？
1933. 7. 1 近世支那僧の行持生活（四） 藤井草宣
7. 1 旅情片々（一） 足利浄円 人をたづねて
7. 1 新京に林立の各派別院 豊山別院計画進む
7. 2 台湾使行漫筆（一） 杉山元治郎
7. 2 旅情片々（二） 足利浄円 頭はれて居る人 と隠れたる人
7. 2 民族運動台頭で 南印度のカトリック伝道難
7. 4 台湾使行漫筆（二） 杉山元治郎
7. 4 旅情片々（三） 足利浄円 白衣の本場
7. 5 曹洞宗朝鮮 布教師異動 …人材主義に立脚して…
7. 5 台湾使行漫筆（三） 杉山元治郎
7. 5 旅情片々（四） 足利浄円 求むるもの 与へるもの
7. 6 台湾使行漫筆（四） 杉山元治郎
7. 6 旅情片々（五） 足利浄円 大馬鹿小馬鹿
7. 6 アジアの諸問題に 基教は如何にのぞむべきか Y M C A 極東大会の開催
7. 7 軍部等の後援で代表一行来る 満洲国に隠然力をなす家理教 増上寺で秘伝を公開 宗教的には幼稚だが実践力熾烈
7. 7 台湾使行漫筆（五） 杉山元治郎
7. 13 三島一平翁 北満に新 寺を建立
7. 14 英国品をボイコットせよ！ ガンジ協会の提唱
7. 14 満洲国宗教団 在理一行入洛 皇道大本々部訪問
7. 14 夥しき満洲 への家出人 生活と貞操の 危機を物語る
7. 16 「日本人は満洲人の 総てを理解せよ」 在理教代表者祖憲庭氏談
7. 16 日支事変戦没 将士の魂祭り 大東京魂祭会—
7. 16 満鮮紀行 茂手木不生
7. 18 在理教の名士 社を訪れる
7. 19 浄土宗信仰を中心に 鏡泊学園愈々開く 一行二百五十名増上寺の 樹下部長に引率され近く渡満
7. 19 日印関係（上） 樺泉杜民
7. 20 プラタップさんの得意
7. 20 京都府教育会の 満洲視察団
7. 20 日印関係（中） 樺泉杜民
7. 21 朝鮮に於る思想犯を中心に 民族性の問題（上） 伊東恵
7. 21 「印棉の不買は 結局日本の損失 日本の誠意を示すが緊要」 エー・エム・サハイ氏談
7. 21 日印関係（下） 樺泉杜民
7. 22 朝鮮に於る思想犯を中心に 民族性の問題（下） 伊東恵
7. 22 旅情片々（六） 足利浄円 朝鮮人の民族意識
7. 23 旅情片々（七） 足利浄円 漢民族（上）
7. 23 満鮮の教況を見て帰った 本派会衆団語る —鄭総理の王道論も紹介—
7. 25 旅情片々（八） 足利浄円 漢民族（下）
7. 29 満洲事変記念日 大阪城東練兵場で 神仏式慰霊祭
8. 1 満洲の本願寺教況 大別院建立 枉子裏方巡錫 斯波開教総長帰来談 軍部後援の大追弔会 光瑞氏の採用学生配属 医学、農産等に 蒙古新開発ソビエト近くも啓く 別院の土地を得 支那僧養成 満洲語と布教使
8. 1 朝鮮にも保存法施行 国宝史跡名勝を 法律で保護
8. 2 満洲国の人柱と… 消えゆく青年の魂 虎狼住む地の屯墾隊 大派・月輪氏の北満便り（上）
8. 2 クシナガラに 記念塔建設 高見代議士の念願
8. 2 将来王道楽土の理想を 祖国に逆輸入せん ハイラルの宗教連合会の確立に活動しつつある 大派齊々哈爾の輪泉氏
8. 3 オール・ハルビン・ボーイ・スカウト・リーグ 王道主義で躍進 大派・月輪氏の北満便り（下）
8. 3 鏡泊学園の健児ら けふ愈渡満す 教化より行軍七日間 鏡泊湖畔へ一路進発
8. 6 満洲語で満洲人を基督教化する 満洲伝道会の設立
8. 8 日宗満蒙開教の本拠— 新京に六千坪余購入 全国閩宗寺院を糾合して新たに 満蒙協会を組織せん
8. 8 上海で暗殺された 玉観彬居士を想ふ（上） 藤井草宣
8. 9 京都府教育会の 満蒙視察員 一来る十五日出発—
8. 9 満蒙学徒研究団から（通信） 谷大の田原・豊満両君
8. 9 上海で暗殺された 玉観彬居士を想ふ（下） 藤井草宣
8. 10 印度に於ける 宗教の発達（一） 在神戸 A・M・サハイ
8. 10 出口王仁三郎氏 台湾巡笏 幹部八名と共に 約一ヶ月の予定で
8. 11 印度に於ける 宗教の発達（二） 在神戸 A・M・サハイ
8. 11 天理教の満洲移民は 租借地引渡で一頓挫 教内に反対意見高し

1933. 8. 12 印度に於ける 宗教の発達 (三) 在
神戸 A・M・サハイ
8. 13 印度に於ける 宗教の発達 (四) 在
神戸 A・M・サハイ
8. 15 印度に於ける 宗教の発達 (五) 在
神戸 A・M・サハイ
8. 15 孟蘭盆会と『マハーラヤ・アマワスヤー』
祭 (一) 岡本春岳
8. 15 全滿の在理教を 連合組織に改正 今
後の活躍を期待する
8. 15 数千年の歴史を誇る 古代文化を保存
する 朝鮮最初の法令
8. 16 孟蘭盆会と『マハーラヤ・アマワスヤー』
祭 (二) 岡本春岳
8. 16 西本願寺の— 大満洲教陣プラン 雨
の六甲で中枢部の会合
8. 17 孟蘭盆会と『マハーラヤ・アマワスヤー』
祭 (三) 岡本春岳
8. 17 日滿親善の障害は 日本人の優越感 —
未墾の北滿沃野で—
8. 18 孟蘭盆会と『マハーラヤ・アマワスヤー』
祭 (四) 岡本春岳
8. 18 上官教会が 満洲移民計画 通遼に百
町歩を得て
8. 18 印度旅行記 (一) 榎泉杜民
8. 19 印度旅行記 (二) 榎泉杜民
8. 20 印度旅行記 (三) 榎泉杜民 カシミ
ール
8. 22 印度旅行記 (四) 榎泉杜民 シリナ
ガル
8. 22 奉天で急逝した 奇僧向出哲堂物語
(一) 藤井草宣弔
8. 23 思想家・宗教家の名士で「極東平和
の会」創立する 上海の反戦大会を支持
して 明後日創立大会開かる
8. 23 海外布教の先駆 日持上人の遺志を継
承して 日蓮宗満洲開教協賛会 闍宗
縮素を動員して 滿蒙開教に拍車をか
ける
8. 23 印度旅行記 (五) 榎泉杜民 グルマ
グル
8. 23 物を聴く 満洲移民は牧畜など 大組
織農業へ —武装移民は一時的—
8. 24 奉天で急逝した 奇僧向出哲堂物語
(二) 藤井草宣弔
8. 25 奉天で急逝した 奇僧向出哲堂物語
(三) 藤井草宣弔
8. 25 全国神職会の満洲国視察
8. 26 平塚府博物館の開館と 韓代墓地の発
掘調査
8. 26 奉天西本願寺 入仏落慶式 武田連枝
渡滿
8. 26 朝鮮にも 債務調停法 実施の計画
8. 26 首都新京大道街に 大派満洲別院建立
近く起工に着手されん
8. 26 奉天で急逝した 奇僧向出哲堂物語
(四) 藤井草宣弔
8. 27 朝鮮神宮御鎮座滿十年 官民合同で奉
賛会
8. 29 印度旅行記 (六) 榎泉杜民
8. 29 日滿船說法 福田宏一
8. 29 朝鮮で賛美歌を 差押へるか 不穩句
の発見で
8. 29 混乱裡に結成された 極東平和の友の
会 反戦会議反対のビラ撒布さる
8. 29 一座法要で 満洲事變の追弔会 西本
願寺にて
8. 29 満洲事變の日 金沢西別院の追弔会
8. 30 仏、独、英に於る 敦煌文書の調査
(上) —三千六百余通の—
8. 30 満洲紅十字会 人類愛善会と提携 更
に国際的連合成るか
8. 30 印度旅行記 (七) 榎泉杜民
8. 31 朝鮮人ナザレン教会 設立不許可 担
当布教使が排日思想抱持で
8. 31 印度旅行記 (八) 榎泉杜民
8. 31 仏、独、英に於る 敦煌文書の調査
(下) —三千六百余通の—
9. 1 回り来る日支事變の 二周年、曹洞宗
から けふ、闍宗へ論達
9. 1 来十八日 満洲事變の日 大追弔会と
飛錫 西本枉子裏方の声明書
9. 1 印度旅行記 (九) 榎泉杜民 カイバ
ラ峠
9. 2 印度旅行記 (十) 榎泉杜民 ラホ
ール
9. 2 もっとも要望さるるは 日本仏教の満
洲化 最近満洲国の宗教事情
9. 2 好成绩の 大阪内鮮協和会 朝鮮人モ
ヒ患者の治療
9. 3 学生禁酒使節 —満洲国へ—
9. 3 一千のヤコビ ット教徒を直ちに 加
特力に入信さす
9. 3 知恩院初め各本山で 満洲事變追弔法
会
9. 3 満洲事變記念日に 慰霊祭執行 昭和
青年会が 岡崎公会堂で
9. 5 印度旅行記 (十一) 榎泉杜民 アム
リッサー
9. 6 西本願寺と満洲事變 二周年の法要
本山と満洲と別院で
9. 6 千五百年以前の 支那の石神像 —神
戸で発見—
9. 6 印度旅行記 (十二) 榎泉杜民 デリー
9. 7 西本願寺の堀氏— 第一回入蒙の成果
=前田執行長宛私信=
9. 7 盛んに催す浄宗の 満洲事變追弔会
京都全市にわたって
9. 7 村雲門跡は 法要と講演
9. 7 日宗京都の追悼法要 十七日光山で
9. 7 曹洞宗の台 湾布教管理 烏田越山單
頭を起用

1933. 9. 7 印度旅行記(十三) 樗泉杜民 アグラ
9. 7 宗教から見た支那の飲食 福田宏一
9. 7 血の滲む苦闘の移民に 形式的布教は恥晒し 満洲の奥地、佳木斯に働く 大派高橋開教使手記
9. 7 満洲国人口 約四千万人
9. 8 満洲事変二周年 妙満寺では 法要と講演 余興に琵琶 本能寺は彼岸中日に 仏立講では 終日唱題会 日扇法難会と共に 醍醐寺の追悼法要 記念日に当たって 在滿布教師を表彰 臨濟各派の記念日布告 連盟脱退の詔書と共に
9. 8 府教育会満洲視察団帰る 非常時はこれから 一移民の失敗も経過一
9. 8 大阪三越の印度展覧会
9. 8 匪族の銃声を聞きつつ 開教の準備 北滿寧安に赴任の 大派・石崎開教使
9. 8 大派浅井氏実写 台湾生蕃映画 仏教倶楽部主催 児童博物館で公開
9. 8 満洲国の教育を見て帰った 原、榎原教諭等
9. 9 印度宗教 人口統計 三一年度国勢調査
9. 10 印度旅行記(十四) 樗泉杜民
9. 10 けふ満洲へ発つ 大谷壬子裏方 五十万婦人を代表し 婦人会の声明書
9. 10 満鮮基督教伝道一 教線拡張は多難
9. 12 佳木斯とはどんな処か?(A) 奥山中に斧響き 伐採班が独立 大丘陵に跨る小隊 大派・月輪氏の騎馬視察
9. 12 全満洲国の 宗教統計
9. 12 印度旅行記(十五) 樗泉杜民 フアテプールシクリ
9. 14 匪族さへ平定すれば 満洲は理想の楽土 一日本よりも健康地一
9. 14 佳木斯とはどんな処か?(B) 今後は畜産農業を 加味して行く方針 味噌醬油、製粉、製油、製靴 鍛工、木工等々自給自足
9. 15 支那人の更生力 福田宏一
9. 15 佳木斯とはどんな処か?(C) 戦死の屯墾隊員は 丘上に神と祭らる 氣象観測所もある 大派・月輪氏の観察記
9. 16 来十八日 各州は記念の催し 法要に講演に 日支事変第二周年
9. 17 満洲から帰って(上) 満洲産業建設学徒研究団谷大代表 田原至誠
9. 17 仏連幹事会 満支布教権その他重要事項協議
9. 17 来十八日 各州は記念の催し 法要に講演に 日支事変第二周年
9. 17 満洲国人が競って 日本の神様を祭祀 人類愛善会の西村保男氏婦朝談
9. 17 奉天空前の盛儀として 西本願寺落慶 両日にわたり法要=群参
9. 17 佳木斯とはどんな処か?(完) 家族招致問題は 秋の実りを見て 天然資源も相当豊富 大派・月輪氏の観察記
9. 19 学園雑誌
9. 19 慶州仏国寺の 舍利塔復原 廿日慶賛 供養会
9. 20 満洲から帰って(下) 満洲産業建設学徒研究団谷大代表 田原至誠
9. 21 満洲国・仏・道・喇三教 日本宗教視察団 十五日來朝、主要都市で日滿宗教大会開催
9. 21 日本と蘭領印度との一致点
9. 21 朝鮮基督教の 革新運動熾烈 朝鮮は朝鮮人の手で
9. 21 東京日宗の 満洲事変二 周年大法要
9. 21 大阪日宗寺院 日支事変満 二周年法要
9. 21 大阪仏教団 日支事変満 二周年法要
9. 21 学園雑誌
9. 22 この人を見よ! 黙々十三年の苦闘酬ひられ 山東淄川に一大法城建立 支那人から師父の如く仰がれる 曹洞宗の山下黙応氏
9. 22 道教は 全満寺廟の統一 満洲国宗教家視察 団の五十嵐氏の話
9. 26 マニラの蔵書家が 日本の外交官に贈った 南蛮珍籍
9. 26 弔問・慰問・歓迎 満洲国飛錫の壬子婦人 =好印象を与ふ=
9. 26 北平から ウオレン
9. 27 日本留学生の眼に映じた 印度の宗教事情 曹洞宗当局に寄せた 興味ある松永駒大教授最近の報告
9. 27 支那の善書 福田宏一
9. 28 来るべき亜細亜の危機に備ふる 日支青年の個人的提携を提唱す 藤井草宣
9. 28 日本留学生の眼に映じた 印度の宗教事情(承前) 曹洞宗当局に寄せた 興味ある松永駒大教授最近の報告
9. 28 朝鮮に入った 満洲国訪問を終り 大谷壬子夫人
9. 29 日本留学生の眼に映じた 印度の宗教事情(承前) 曹洞宗当局に寄せた 興味ある松永駒大教授最近の報告
9. 29 全国神職会満 洲視察派遣員 執政に謁見 唐櫃形手筈を献上
9. 30 満洲布教の前に 栗山耕三
10. 1 蒙古人の 仏教会堂へ 仏連から仏具本尊を送る
10. 3 現代支那宗教批判(上) 一中国之宗教改革と救国事業一 国民政府委員 戴天仇

1933. 10. 3 満洲を見て… 皇軍の医大な力ー
一大偉観の別院 西本・八尋慈薫氏婦
来談
10. 3 留学生の支那人家庭に於る 努力に
感服 屯田僧問題について簡単に批評
するは軽忽 大派満洲開教監督談
10. 4 日印協会
10. 4 現代支那宗教批判(中) ー中国之宗
教改革と救国事業ー 国民政府委員
戴天仇
10. 4 廿五万円かけて 上海神社創建さる
居留民一同大喜び
10. 4 ガンチ翁とタゴール詩聖の祝電 京都
日印協会の発会式 広田外相、下村宗
教局長の祝辞
10. 5 現代支那宗教批判(下) ー中国之宗
教改革と救国事業ー 国民政府委員
戴天仇
10. 5 “印度の現情” 刊行
10. 5 京都日印協会発会彙報 副会長・理事
等決定 頭山翁より自署の祝辞
10. 5 印度の解放こそ 真の世界平和を将来
アール・ビー・ボース氏
10. 6 ブロック経済より 見たる日印関係
(一) 谷口吉彦博士講演
10. 7 ブロック経済より 見たる日印関係
(二) 谷口吉彦博士講演
10. 7 大邸における 大谷壬子夫人
10. 8 藤井草宣氏に呈す 村上素道
10. 8 満洲国三教代表 日本宗教視察団 小
学生の旅行の様に来上
10. 8 ブロック経済より 見たる日印関係
(三) 谷口吉彦博士講演
10. 10 晴れの東京入りした 満洲国宗教代表
東京駅頭に日満親善風景
10. 10 全神満洲視察 派遣一行帰朝 鄭総理
にも会見 ◇…額賀宮司談
10. 11 ブロック経済より 見たる日印関係
(四) 谷口吉彦博士講演
10. 11 交驩講演会 東京の帝大仏背に於て
日満宗教家が 日本の長井、常磐博士
と 満洲の三教代表者出演!
10. 12 新京と新寺
10. 13 金光教祖大祭第三日 異色ある満鮮の
団参 教祖帰幽の日で信徒殺到 下村
宗教局長等も参列
10. 13 老軀を敢へて、再び 河口慧海氏西藏
へ 豊山留学生に決った… 橋本光宝
氏を伴って
10. 13 インド・タイムスの記事 ラル君の京
見物
10. 13 大会後記 福音新報の再興は 全基
教の機関に ー満洲教線の近況ー
10. 14 日支青年の個々の結合に就いて 村上
素道師に答ふ 藤井草宣
10. 14 日満両国宗教家の 精神的契合を力説
し 交驩講演会熾ん 興味深きその夜
の集り
10. 14 植民地の興隆気分が 神社の発展に影
響 財政的にも豊た 額賀宮司の視察
談(上)
10. 15 印度理解は 親しくインドへ 印度視
察団を 小林義道氏が発企
10. 15 将来満洲に行く神職は 活動力旺盛な
もの 工夫の余地ある建築様式 額賀
宮司の視察談(中)
10. 15 小栗州栖香頂 北京護法論
10. 15 天理青年会総会と 満洲移民頓挫問題
10. 17 支那を救ふ道 鷹尾全映
10. 17 歓迎せぬに疲れた 満洲宗教家一行入
洛
10. 17 満仏教夫人の提携 満鮮巡錫を終りて
大谷壬子裏方談
10. 17 蘇聯 東方政策の真相(一) [陸軍省
調査班発表]
10. 17 砂塔を築く如き 信徒の移動に悩む
往時の面影なき青島
10. 17 新京の面目一新 日支関係も好転と
メーソン氏の談片 名古屋では県が歓
迎 駅頭、少女使節代表の見送
10. 19 朝鮮の寺を巡るー 荒廃の李朝史庫
潭陽の石灯籠
10. 19 京都に於ける 満洲三教代表 祭日
には本山等参拝 昨は登叙延暦寺一泊
数十万の満洲国人が 愛善会の門標掲
出 試みに一万五千枚発送
10. 19 蘇聯 東方政策の真相(二) [陸軍省
調査班発表]
10. 19 早く… 植民地の神社制度を 実現し
て貰いたい 各地に神社建設の計画
額賀宮司の視察談(下)
10. 19 プラタップ氏の 日本巡講計画 旅費
滞在費で招に応ずる ー日印協会
で斡旋ー
10. 20 朝鮮人保護に疾駆する 珍し 移動隣
保車 大阪府内鮮協和会の試み
10. 20 蘇聯 東方政策の真相(三) [陸軍省
調査班発表]
10. 21 支那、満洲僧侶のため 奉天に仏教中
学を設けよ 藤井草宣
10. 21 満洲三教代表 大阪へ二十三日
10. 21 蘇聯 東方政策の真相(四) [陸軍省
調査班発表]
10. 24 蘇聯 東方政策の真相(五) [陸軍省
調査班発表]
10. 25 現代美術の国宝的粹を集め 朝鮮李王
職主催展
10. 25 蘭領印度から和蘭へ 生蕃言語の起源
を究ね 大派・浅井教授が向ふ、この
種の留学の嚆矢
10. 25 ガンジー支持者 レスター女史近く来
朝 英国社会事業の権威

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1933. 10. 25 蘇聯 東方政策の真相(六) [陸軍省調査班発表]
10. 26 西本願寺 満洲国人最初の 住職が出来る 満洲朝陽西本願寺主任に
10. 26 大阪に於る 満蒙宗教使節 四天王寺に於る 仏教団の歓迎会
10. 26 渡満兵へ軍人 名号の下附と 壮行の辞 大派東北教務所が
10. 27 満洲産建学徒団が 京大満蒙研究会設立 各学部共同研究として
10. 27 皇道大本雑誌
10. 28 天理教の移民に就いて 橋本正治
10. 29 近時流行の『アジアに帰れ』は 明治大帝の五ヶ条の 御誓文に反す 新渡戸博士の最後の講述
10. 31 天台宗が十万円で 満洲開教局新設 今次宗会に提案する
11. 1 天理のムッソリーニと 移民問題
11. 1 世界宗教大会に出席した 印度シング王を招いて 日本宗教協会の例会
11. 2 エム・プラタップ氏等の『大亜細亜義勇軍』 中野正剛氏等が最高執行委員
11. 2 日満文化協会創立 清朝実録、四庫全書の出版など
11. 3 満洲開教局設定や 職制改正等 木下総務の施政方針演説(上)
11. 3 東方文化学院 京都研究所の 開所三周年記念 公開講演会
11. 5 広州西湖の付近に 禅浄一味の道場ゴザート氏も参加
11. 7 京都日印協会の インド展覧会 今日から大丸で
11. 7 満洲熱河で活躍する 蓮門の井上義澄氏 坂西将軍もその熱意に感心
11. 7 紅卍教大動揺 亀井君の霊術
11. 9 印度展を見る
11. 9 大派屯田僧問題立直し 奉天に拓事講習所を移し 独力農事に従事 日本国民高等学校と提携 明々春愈々北満開拓の途へ
11. 9 越山後董問題 朝鮮の鈴木天山氏 立候補を表明す 斯くて箭は弦を離る! 海を越えての吉報に歓声揚る
11. 10 天台宗会 満洲開教局の 関係五議案通過 開教予算は原案可決
11. 12 本派朝鮮より
11. 14 古義の満洲国開教 先づ人物を送り出す 来年度も大学出を五名
11. 14 宗教国際委員の 東洋委員として 印度ネパールの王子 メッセージを発表
11. 14 印度雑誌(上) 杜民
11. 15 印度雑誌(中) 杜民
11. 16 栄えある 印度の連盟代表 をも加へて一 基連総会開く 五十余年を神に捧げた イエスの使徒へ感謝祝福
11. 17 『西域伝』について(上) 『西域記』の旧名としての… 板橋倫行
11. 17 汎太平洋仏青大会に 印度仏教徒を招請 緒方宗博氏の渡印
11. 18 『西域伝』について(中) 『西域記』の旧名としての… 板橋倫行
11. 18 大阪津村別院 日支事変大追弔会
11. 18 蒙古喇嘛の真宗化 両者提携で喇嘛に大革命 斯波從性氏談
11. 19 『西域伝』について(下) 『西域記』の旧名としての… 板橋倫行
11. 19 印度雑誌(下) 杜民
11. 21 レスター女史支那に向ふ
11. 21 熱河承德に一 大派教線の躍進 既に布教所設置さる
11. 21 対支文化研究の大殿堂 東方文化学院落成 全東洋学者を集めて開所式
11. 22 改善さるる 朝鮮書堂 道参与会議で決議
11. 23 高級すぎて 朝鮮語訳「法然上人」… 本場に向かぬ 訳文刊行に苦慮
11. 23 外人宣教師団が 本国に対して 満洲国承認を懇懇
11. 25 この人を見よ! 全私財を抛ちて 单身熱河の開教へ! 日満人を糾合して… 既に男女スカウトを設置 大谷派の若きパイオニア
11. 26 朝鮮群山の華道講演会 二十九日、府庁で
11. 28 古義当局の 満支実地調査 高橋部長が来春 早々に渡満
12. 1 智山派の 満洲開教 更に中里氏渡満す
12. 2 古義宗会後記に意義あり 附、満洲開教問題につき 真言宗満洲開教監督菅野経禪
12. 2 中平亮氏の… 『大亜細亜主義』を読む
12. 3 開教第一線の新人(上) 北支に井上・南支に神田 藤井草宣
12. 3 朝鮮仏教の教会所 内地設立不認可問題 大阪府では内鮮融和上一 大問題として本省と交渉
12. 6 江田俊雄氏の「朝鮮仏教史」◇… 研究に補助費
12. 7 本島人の教化問題と 台湾統治の清算 [一] 台光社主 米沢尚
12. 7 開教第一線の新人(下) 北支に井上・南支に神田 藤井草宣
12. 7 承德・赤峰・兆南等 満洲奥地に教線伸ぶ 本尊を背負って大派の 若き開拓者は行く
12. 7 東洋諸国の中堅、会して 民族更生と精神作興の 亜細亜民族青年大会 … 十六日、日比谷公会堂で…
12. 8 本島人の教化問題と 台湾統治の清算

- [二] 台光社主 米沢尚
1933. 12. 8 これは耳よりナ 二百万円ボンと 満洲へでも放出せ 西本願寺歳末の綺譚
12. 8 あかつき会が 全鮮小学校に 仏教聖画を 更に内地で普及
12. 9 台湾人、支那人の 開教に着手した 神田恵雲氏の労苦 大派間野氏の帰朝談
12. 9 本島人の教化問題と 台湾統治の清算
- [三] 台光社主 米沢尚
12. 10 本島人の教化問題と 台湾統治の清算
- [四] 台光社主 米沢尚
12. 14 雌伏の一年を終へて 一大飛躍を企図する 曹洞宗の満蒙協会
12. 15 台湾雑記 間野敬重 (マハヤナ協会)
12. 16 天台宗が満洲国 開教師並に 留学生募集
12. 17 新駐支教皇 使節任命
12. 19 東洋民族の若人 団結と更生 を誓ふ 精神作興青年大会
12. 19 ラル君の手紙 印度に帰着して
12. 19 真綿壹千袋 大阪婦人法話会が 駐満将士へ
12. 20 国土田中逸平君の西南 亜細亜に行くを送る (上) 小林雨峰
12. 21 国土田中逸平君の西南 亜細亜に行くを送る (下) 小林雨峰
12. 21 神仏基三教合同の 中外満蒙視察団 ◇…を作れと池田大佐の提案
12. 21 達頼喇嘛 十七日逝く
12. 21 満洲国の青年僧を 天台宗が五名招聘 叡山で教育交換 特使、武藤舜広氏談
12. 22 宣教師宅を解放し 労働者の至恩夜学校や 鮮童日曜学校 =国語研究会など=
12. 22 達頼喇嘛の死を悼む 礼讃厚き学者 西蔵に擾乱起らん 日蔵密約を企てた志士 谷大・寺本教授懐旧談
12. 22 内地鮮人児童教化に 積極策を採れ! 宗教教育家も立て-
12. 22 懸賞で アジア青年男女から 宗教論文募集 ニューヨークの新歴史協会で
12. 22 日満提携の捷徑は宗教 鄭満洲国総理談
12. 23 達頼喇嘛は… 一服盛られた? 英国の野心通りにならぬ 谷大・寺本教授懐旧談 (続)
1934. 1. 1 日満提携の捷徑第一步- 輝かしき新春五日 満洲僧、哈爾濱を出発 叡山で温かき国際教育
1. 1 南方巡礼記 雲水 河野宗寛 緒方宗博
1. 7 仏教の海外進出
1. 11 満洲建設学徒団 満蒙問題大講演会 十三日市公会堂で
1. 14 印度旅行記 (三ノ上) 榎泉杜民
1. 16 天台宗の 留学満洲僧 廿日頃米朝
1. 16 印度旅行記 (三ノ下) 榎泉杜民
1. 17 朝鮮仏教大阪布教所開設問題 大阪府の積極的好意 ◇…近く公文書で本省に上申手続
1. 20 清朝以来の長夢を破り 蒙古ラマは斯く自覚す 正しき蒙古人、正しきラマたれ 本派本願寺との提携は 全くこの自覚運動が動機
1. 20 出口王仁三郎氏入蒙 十周年記念祭 殉難者慰霊祭等 満洲では愛善工作拡大
1. 20 朝鮮仏教々々所 設立は不可能だ 法規を語る大阪府社寺課長
1. 21 満洲産建学徒団が 至誠会を創立 -京大満蒙研究会-
1. 21 満洲国文化当局の 礼教に基く… 文化再建運動 三月十一日に
1. 23 米系朝鮮基督教 宗教教育機関 ◇…の経営難をどうする
1. 23 満洲国、建国第三の新春に 王道楽土、帝政施かる
1. 23 南方巡礼記 (二) 雲水 河野宗寛 緒方宗博
1. 24 満洲国は朗かデス 帝政満洲国と 本派本願寺の対満政策 斯波総長帰山して語る
1. 25 大阪市郊外に朝鮮人の 日鮮寺建立の計画 新寺建立でもなく非合法的でもない
1. 25 天台留学の 満洲僧 けふ午後叡山へ 武藤部長ら 神戸まで赴く
1. 26 南方生命線に起る 澎湃たる愛善運動 宇城昭曜氏の帰米談
1. 26 学院の 天台専修院別科を廃止し 内容を刷新向上 満洲語も開講予定 三十日、理事会に提案
1. 26 満洲天台留学僧 元氣に米朝 直に叡山宿舎に入る
1. 27 支那仏教研究の展開 (上) 塚本善隆氏著「唐中期の浄土教」を読み 道端良秀
1. 27 叡山入りの満洲留学僧 坂本の小学生が全校で歓迎
1. 27 二十年振りて 救世軍マップ中將 -近く米朝-
1. 28 支那仏教研究の展開 (下) 塚本善隆氏著「唐中期の浄土教」を読み 道端良秀
1. 28 満洲国三千万民衆の 精神界に光明と安心を 仏の慈悲によって与へよ 留学僧に-天台梅谷座主の訓示
1. 28 救世軍マップ中將の 日本に於る聖戦 愈よ二月二十六日米朝
1. 28 印度旅行記 (四ノ上) 榎泉杜民

1934. 1. 30 支那文化と基督教(一) 高田集蔵訳
 1. 30 移植民の精神的指導家養成 海外布教
 学院の設立計画 東京高等拓殖校内に
 四月開院
 1. 30 愛善運動を高調 最近の蒙古事情を語
 る 蒙古王代理 李松年氏
 1. 30 移民部の指導で 天理村を建設 三年
 内に完成の計画
 1. 30 支那文化と基督教(二) 高田集蔵訳
 1. 30 印度旅行記(四ノ中) 樅泉杜民
 2. 1 印度旅行記(四ノ下) 樅泉杜民
 2. 3 考古学の高き 価値をもつ 関東庁博
 物館 一光瑞氏の印度式建築一
 2. 3 支那文化と基督教(三) 高田集蔵訳
 2. 4 満洲国語大蔵経 水野氏の発見
 2. 4 生蕃・熟蕃と 本島人の布教 本派台
 湾別院の落成で 総督府まで動かして
 運動
 2. 4 間島・朝鮮に 大派教線伸ぶ 朝陽川
 と上三峰
 2. 4 満洲に根強い ラマ教と 仏教家の援
 助 一日満民族融合の契機一
 2. 6 開教地の百科全書 海外布教学院愈よ
 創設 各宗派の積極的援助で =四月
 十日開校の準備成る=
 2. 7 支那文化と基督教(四) 高田集蔵訳
 2. 8 支那文化と基督教(五) 高田集蔵訳
 2. 11 台湾統治の危機(上) 政商混同の弊
 愈よ其極に達す 在台北 米沢尚
 2. 13 惟神の道と 日本精神 日本人は好戦
 国民に非ず 本社主催、日本精神に
 関する座談会
 2. 13 満洲における智山派の 基本道場建設
 計画進む 智尊の学制は当分現状維持
 とし 教学審議会無事に終了
 2. 13 曹前外交総長を院長に 日華密教学院
 開かる 在満開教師会議も開催 古義
 務、高橋部長帰る
 2. 14 チラリ、片鱗を見せた 日本精神と仏
 教『惟神の道』は神道独占か? 本
 社主催、日本精神に関する座談会
 (承前)
 2. 14 支那文化と基督教(六) 高田集蔵訳
 2. 14 満洲では…各宗派とも、いまだ 移民
 宗教を出ぬ 古義、高橋部長帰る(承
 前)
 2. 15 特に『日本精神』と 選び称さるる所
 以は? 本社主催、日本精神に関する
 座談会(承前)
 2. 15 台湾統治の危機(下) 政商混同の弊
 愈よ其極に達す 在台北 米沢尚
 2. 15 愈よ提出された 新京の大別院と龍大
 図書館建築を中心の 明如上人法要
 案
 2. 16 実際的の必要に迫られて 叫び出され
 た「日本精神」 本社主催、日本精
 神に関する座談会(承前)
 2. 16 大根は苦味し 情気返る 屯田僧
 2. 16 西本集會 教線拡張費案上提
 2. 17 日本人の性情と 日本精神との関係
 本社主催、日本精神に関する座談会
 (承前)
 2. 17 無鉄砲にやって来る 南洋開教志願者
 ◇…には悩まされる 大派、武村開
 教使談
 2. 17 東本願寺当局が愈よ 満洲国監獄布教
 に進出 司法部当局の認可を得て 各
 重要都市に新教線布設 大乘仏教精神
 の救ひ
 2. 18 海外渡航者への みちしるべ 京都府
 社会課が 夜間移植民相談所を開設
 2. 20 日本国民の性情の発露と 惟神の道の
 交際 本社主催、日本精神に関する座
 談会(承前)
 2. 20 京城あかつき会作製 教育聖画 ひじ
 りのみあと 盛大な披露の集まり
 2. 20 日満親善の前途如何? =天野子爵の
 スケート靴に秘められてゐた秘密=
 2. 21 日本精神と宗教 霊的直覚力が重大役
 割を演ず 本社主催、日本精神に関す
 る座談会(承前)
 2. 21 台湾一の大西本願寺 落慶式及び記念
 運動とし ての開教方針根本改正
 2. 21 満洲 将来に悔を残さぬため 開教課
 を特設せよ 満洲人伝道に際して 大
 派開教使員の要望
 2. 22 本地垂迹説と 日本精神との交渉 本
 社主催、日本精神に関する座談会(承
 前)
 2. 22 全印仏教徒大会への招請 来る三月末
 に開催
 2. 22 汎太平洋仏青大会に 支那代表の欠席
 一藤井草宣氏勸説に渡航か一
 2. 22 溥儀皇帝に =竹刻心経= を竹内氏
 が献上
 2. 22 南洋に本願寺 の手を延ばせと運動
 西本近く具体案作製
 2. 23 ネパールに於ける摩耶夫人の生れし古
 後趾 デーバダーハ(Devadaha)の新
 発見
 2. 24 満洲間島の開教 朝鮮本派教陣北進
 2. 24 満洲国皇帝御即位の 御祝いに西本願
 寺より 慶賀使記念奉獻
 2. 24 新京を中心として全満 イスラム教と
 の大結成
 2. 25 台湾に澎湃たる 神社建立の機運
 2. 25 汎太平洋會議に 支那側の出席希望多
 し
 2. 25 新京の大別院建立 満洲開教の新計画
 ◇…をみやげに勇み帰任した 西本
 の斯波随性満洲開教総長
 2. 28 智山宗会の結果 満洲国開教の施設

1934. 2. 28 満洲国新皇帝へ 賀表捧呈 大乘会代表 公 使を訪問して
3. 1 印度大震災につき 日本仏教徒に訴ふ 小林義道
3. 1 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 二人の仏蘭西加特力僧 衛藤利夫 一、暗黒時代の満洲
3. 2 満洲留学僧 比叡山参拝 と京都見物
3. 2 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 二人の仏蘭西加特力僧 衛藤利夫 二、二つの手紙
3. 2 満洲国への祝電
3. 3 印度大震災の救援
3. 3 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 二人の仏蘭西加特力僧 衛藤利夫 三、地名の推定難
3. 3 印度の大震災に 義援金の募集 内務省が全国に通達
3. 4 印度大震災救援金募集
3. 4 大派の満洲開教に 施業事業を付設 売薬業者の援助を受けて
3. 4 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 二人の仏蘭西加特力僧 衛藤利夫 四、加特力教の満洲伝道
3. 4 仏跡壊滅 仏教徒として座視できぬ 印度大震災の惨害 救援運動を開始す
3. 4 関東大震災に数倍する 印度大震災について エ・エム・サハイ氏談
3. 6 支那軍に没収され 将に蹂躪されんとした 大派の漳州教堂 厦門領事館の努力で 漸く危難を免る
3. 6 朝鮮天女も美々しく 三日、盛大に行はれた 日鮮寺落慶式
3. 6 シャム国にみなぎる 皇道宣布の熱 同国要人が皇道大本に 神式による祖霊復活を希望
3. 6 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 一 阿什河
3. 6 布哇から、満洲から 大法会に団参 朝鮮、台湾、支那からも
3. 7 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 二 苦難の旅
3. 7 満洲帝国へ 宗会から賀表
3. 8 ヤップ島の伝説とその信仰 (一) 竹下源之介
3. 8 とらぬ狸の皮算用 年計七万円の香貸返し 釜山社会事業協会の 資金獲得の名案
3. 8 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 三 三姓の町
3. 9 ヤップ島の伝説とその信仰 (一) 竹下源之介
3. 9 印度震災救援金 寄付金第一回発表
3. 9 開港都市らしく 全亜細亜民族合同の花まつり晩餐会 神戸仏青团創立発表会
3. 9 印度震災救援金募集 神戸仏教連合会が 全会員を動員して 市民によびかく まづ理事が各十円宛醸出
3. 9 朝鮮青年を 理髮師に 内鮮協和会の試み
3. 9 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 四 貪官汚吏
3. 10 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 五 釣魚の秘密
3. 11 印度大震災救援金募集
3. 11 印度罹災救援等に就いて 仏護で協議
3. 11 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 六 役人の出現
3. 13 ヤップ島の伝説とその信仰 (三) 竹下源之介
3. 13 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 七 役人の略奪
3. 13 愚衆・識者・満洲帝国 藤井草宣
3. 14 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 八 黒龍江へ
3. 15 教主釈尊を生める 印度への報恩 救援運動に熱をあげよ
3. 16 カルカッタ三宅総領事から 外務省への公報 ◇…は印度大震災を斯く語る
3. 16 全世界に呼びかけて 印度仏教徒の蹶起
3. 16 印度大震災救援金 浄土宗会から拠金 台宗京都教区会からも 寄付金第三回発表
3. 16 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 九 凶悪の流人
3. 17 義金の雨をふらせ 印度の罹災者へ
3. 17 印度震災地救援金 阪神光明会の蹶起 寄付金第四回発表
3. 17 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 十 魚皮族
3. 17 一九三六年度の 万国聖体大会 マニラで開催
3. 18 世界文明に於ける アジアの地位 (上) ラス・ビハリ・ボース
3. 18 印度震災地救援金 勸業債券利札や 大津寺院の結束拠金 寄付金第五回発表
3. 18 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 十一 魔除けの法
3. 18 更に満人小学校語 学院等を私費設立 大派熱河本願寺 米月満人健児団来朝
3. 18 熱河健児より「満洲読本」其他 新法主に贈る
3. 20 世界文明に於ける アジアの地位 (下) ラス・ビハリ・ボース
3. 20 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 十二 皇帝の食料
3. 21 印度震災の救援に 日印協会、仏連、仏護、仏青、仏俱等 帝都の諸団体も

- 起つ
1934. 3. 21 日本朝野の同情現はれず 印度各地に漸く怨嗟の声 印度在邦邦人よりの電報
3. 21 印度震災地救援金 遠く朝鮮・満洲や雲水の托鉢信施 寄付金第六回発表
3. 21 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 十三 乾魚と防寒
3. 23 『真先に起つた 仏教徒に感謝する 印度救援に起てよ』 エ・エム・サハイ氏の熱望
3. 23 印度震災地救援金 日校生 が一錢づつ 加行僧二百六十四名も 寄付金第七回発表
3. 23 八十余年前の 黒龍江探検 寶神父の手紙 衛藤利夫 十四 旅行の仕方
3. 24 印度と函館へー 京都花祭連盟少年部が 児童一錢擲金の計画
3. 24 印度震災の義援金募集に 東京の 女学校連盟起つ 仏青連盟と共同で「音楽と映画の夕べ」を開く
3. 25 日滿を結ぶ 仏様の修好特使 新潟の故藤井界雄氏 苦心政策の乾漆仏を満洲国へ献上 ◇…の計画すすむ
3. 25 印度震災地救援金 寄付金第八回発表
3. 25 印度大震災救援金募集
3. 25 満洲国総理鄭孝胥氏を迎ふ
3. 25 満洲国人の日本観光団 人類愛善会の計画
3. 27 ヤップ島の伝説とその信仰 (四) 竹下源之介
3. 27 群衆の歓呼に迎へられ 鄭特使晴れの来朝
3. 27 ガンジー翁の偉大さを語る レスター女子の書簡 民衆は翁を神の様に迎へる
3. 28 聖雄ガンジーの震災救援 遊説班内の24時間 (上) ミュリエル・レスター
3. 28 全印度の仏教徒から 震災の救援方を日本仏教徒に 依頼された緒方宗博氏
3. 28 台湾で 仏青連盟組織 柴田理事長遙々西下す 中華厦門方面とも連絡
3. 28 仏連・全連が共同発起で 満洲使館歓迎会 文化を通じて日滿両国の交驩
3. 29 聖雄ガンジーの震災救援 遊説班内の24時間 (下) ミュリエル・レスター
3. 29 京都の印度震災の救援に 各僧堂が動く? -各派合議所も会議-
3. 29 印度震災地救援金 同教民を救へ! 英国に乗せられるなど激励 寄付金第九回発表
3. 29 満洲国帝政実施 祝電への答礼
3. 29 印度代表 汎太平洋仏青大会に 出席きまる
3. 29 日の本の皇子に奉る 揚子江の鯉魚人
- 形 日支交驩のもとに謹作 西本願寺奉獻運動で
3. 29 台湾における妙心寺派
3. 30 満洲に拡大する 人類愛善運動 井上司領等帰米談
3. 30 ダージリンに於ける 西藏大乘仏教の復興 英人ラダナラ將軍により
3. 30 大派熱河布教所の 熱河健児・少年赤十字代表児童粒よりの優秀揃ひ
3. 30 今春開始する 支那基督教化運動 蒙古、西藏に及ぶ
3. 31 印度と函館の救援- 臨濟黄檗の態度決定し 各僧堂も一齊托鉢?
3. 31 天津の大本 天津日本祖界 皇道大本 天津分院 平木隆二郎
4. 1 小学校令改正や 不動産取得税撤廃 印度の義援金募集など 京都仏護団の提案
4. 1 印度震災救援金 寄付金第十回発表
4. 3 ガンジーの手紙に就て
4. 3 大聖釈尊の 聖跡印度を救へ 義捐金を闍宗に募る 秦洞宗管長末派緇徒に告諭す
4. 3 四天王寺における 印度大震災惨死者追悼法会 一日厳肅に執行さる
4. 3 皇軍への感謝 国華日 四月五日全国一齊に 昭和坤生会の活躍
4. 3 満洲国鄭総理に(上) 若き一医学徒の立場から 東海山人
4. 5 華北名人書画展の開催
4. 5 印度震災に対する 日本人の冷淡さ -各府県の義金の僅少-
4. 5 満洲国鄭総理に(下) 若き一医学徒の立場から 東海山人
4. 5 印度思想の影響深き 奈良朝時代のわが国民思想
4. 5 サハイ氏の放送 今日OKから
4. 6 満洲国特使の一行を迎へて 熾んなる日滿の交驩 文化を通じて両国の親善へ! 春雨煙る日一堂に会して懇談
4. 7 来る二十三日創立発会する 国際仏教協会 先づ海外留学生を募集する 藤井氏から一万円を寄贈
4. 7 印度震災救援金 寄付金第十一回発表
4. 8 大隈侯の印度震災放送 京都三団体主催、本社扱の 救援金は四地末日締切
4. 10 八十余年前の黒龍江探検 袁神父を捜索 衛藤利夫
4. 10 印度函館の罹災救援の 音楽舞踏会 全連の催しに東京市も後援
4. 10 鄭総理の入洛
4. 11 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手紙 衛藤利夫 一、シザンの王国へ
4. 11 支那の宗教使節 密教篤信者の王揖唐氏 十八日頃入洛、座談会開かれん
4. 11 鄭満洲国総理、桃山御陵参拜 十一、

- 二両日市内観光
1934. 4. 11 浄土宗都同慶会が 義捐袋を配布して
募集 印度震災救援金 寄付金第十二
回発表
4. 12 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手
紙 衛藤利夫 二、一種の共和国
4. 12 両本願寺と鄭総理
4. 12 満洲国皇帝親書聯 東福寺大本堂を飾
る
4. 13 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手
紙 衛藤利夫 三、同行者の恐怖
4. 14 支那における弘法大師（1） 小林正
盛
4. 14 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手
紙 衛藤利夫 四、天の子の軍隊
4. 14 懐しや！ 七年ぶりに＝ 詩人宰相思
い出の本社へ 蘭花薫る処、歛笑湧く
面目躍如たり感懐の一詩 涙骨社主
と一問一答
4. 14 満洲国の宗教行政 全て自由であり
平等である
4. 14 印度救援に起て 濁江空虛
4. 15 支那における弘法大師（2） 小林正
盛
4. 15 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手
紙 衛藤利夫 五、使者還る
4. 15 熱河健児ら上洛！ 日本の治安維持の
完全さにびっくり 登坂団長以下本
社訪問
4. 17 支那における弘法大師（3） 小林正
盛
4. 17 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手
紙 衛藤利夫 六、寶神父惨殺の事情
4. 17 印度大震災を一版に知らせるため 大
阪全仏教徒総動員 ◇…の托鉢行列を
計画する大阪仏教社
4. 17 新度震災救援金 寄付金第十三回発表
4. 18 支那における弘法大師（4） 小林正
盛
4. 18 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手
紙 衛藤利夫 七、山野逃避行
4. 18 北支の宗教使節－ 王揖唐氏来朝 来
る二十五日入洛 本社主催の歓迎座談
会に
4. 19 支那における弘法大師（5） 小林正
盛
4. 19 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手
紙 衛藤利夫 八、露人の探検
4. 19 全印度の仏教徒から 印度大震災救援
を 全世界の仏教徒に訴ふ
4. 19 印度救援－ 大阪仏教徒大会 二十日
四天王寺で
4. 19 鈴木大拙氏の支那仏跡見学
4. 19 満洲天台宗の 如光法師 明二十日神
戸入洛
4. 19 印度各地旅行中の 平等通昭氏 五月
帰国する
4. 20 支那における弘法大師（6） 小林正
盛
4. 20 八十余年前の黒龍江探検 袁神父の手
紙 衛藤利夫 九、樺太と大陸
4. 21 支那における弘法大師（7） 小林正
盛
4. 21 八十余年前の黒龍江探検 加特力僧の
跡を弔ふ 衛藤利夫 一、奉天城外の
教会
4. 21 胡適、印光、太虚ら 支那諸高僧と交
驩「文化的日支同盟」の意気で 谷
大、鈴木博士の一行
4. 22 八十余年前の黒龍江探検 加特力僧の
跡を弔ふ 衛藤利夫 二、部室文明へ
の抗議
4. 22 印度を救援せよ－と 大阪仏教徒大会
愈よ全市の托鉢に着手
4. 22 バナナを売って 神社建立 但し台湾
の蕃社で
4. 22 大満洲帝国天台宗 仏教答礼参観団
弘教の力をかりたい 如光法師メッセ
ージ発表
4. 22 満洲国を独立教区で… 声明書を発表
ガツベ司教、謝外相訪問
4. 22 喇嘛活仏来朝せん 更に深く蒙古に入
る 西本願寺の堀賢雄氏
4. 22 満洲より 高野へ
4. 24 タゴールを語る（一） 印度志士 ラ
ス・ビハリ・ボース
4. 24 支那における基督教大学
4. 24 来朝した 王揖唐氏 昨二十三日高野
山へ 港を預かる旧知、泉氏と『瘦
せましたね』『肥えましたね』
4. 25 タゴールを語る（二） 印度志士 ラ
ス・ビハリ・ボース
4. 25 印度震災救援金募集 浄土宗京都教区
が告諭して募集 まつ三百円を寄託
－善光寺大本願等も－
4. 25 盛大だった全連主催 兩館・印度救援
音楽と舞踏の会
4. 25 満洲天台僧ら 叡山当局と 会見答礼
す
4. 25 印度仏教史講話
4. 26 タゴールを語る（三） 印度志士 ラ
ス・ビハリ・ボース
4. 26 印度震災救援金 寄付金第十四回発表
4. 26 大亜細亜建設を目標に 蒙古人を教育
田中隆乘氏談
4. 26 高野山に於る 王揖唐氏 法要に参列
し段会 長の慶讃文を代読
4. 26 東京に於る 王氏歓迎
4. 26 合祀英霊千六百八十八柱 靖国神社臨
時大祭 きふ奉告祭、招魂式
4. 27 タゴールを語る（四） 印度志士 ラ
ス・ビハリ・ボース

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1934. 4. 27 印度震災救援金 募集の三主催団体が愈よ実働に着手 三十日には仏教関係学校会
4. 27 山口県都濃郡仏教団の 仏誕記念と印度救援
4. 29 一人一銭の結合力に因って 大連に太子館建設
4. 29 タゴールを語る (五) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
4. 29 海外宗教情報 近く来朝すると… グット氏のたより
4. 29 伏見仏教青年会や 婦人会でも義捐袋を 印度震災救援金 寄付金第十五回発表 寄付金受付を五月末迄延期
5. 1 タゴールを語る (六) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
5. 1 印度震災救援金 ◇…寄付金第十六回発表
5. 1 満洲国と宗教 帰朝中の文教部総務司長 西山政猪氏を訪ふ
5. 1 「日支は同血同色」 王揖唐氏宗教的親善を強調 東京の交驛会盛ん
5. 1 熱河健児団 大阪市見学
5. 2 タゴールを語る (七) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
5. 2 海外宗教事情 回教徒の聖服 インドに帰る
5. 2 京都各宗学校で 印度震災救援 金拠出法協議
5. 2 すわらじ劇園が 二ヶ月に亘り 満洲各地で折演
5. 3 珍しい光明氏の 声明書発表 本島人に国語教育 を説く大谷妊子裏方
5. 3 大阪市と印度救援 仏教徒と実業家団体と がうまく協力する?
5. 3 在上海日本仏教僧の マハヤーナ会生る 一大同団結して活躍一
5. 3 満洲国の文教行政 信教は自由主義にたつ 西山氏歓迎会席上で語る
5. 4 支那の高僧 道階和尚の入寂 藤井草宣
5. 4 支那満鮮は土造の文化 満洲国の国籍問題 大学を置かぬ満洲
5. 5 仏教史上に於ける 朝鮮と日本の交渉 大正大学宗教学研究室 金孝敬 二
5. 5 海外宗教事情 印度婦人の手に依る 国際平和運動
5. 5 印度救援の決定と 汎太平洋会議の応援 全国仏教大会の総会 各部会案の全部を承認
5. 5 印度人ジー・ビー・コタク氏より 震災救援の哀願 「速なる救恤を信頼する」
5. 5 大連の花祭り
5. 6 仏教史上に於ける 朝鮮と日本の交渉 大正大学宗教学研究室 金孝敬 三
5. 6 支那仏教徒招待に就いて (上) 藤井草宣
5. 6 仏陀とガンジーとを語る エルバート・トーマス氏
5. 6 印度震災救援金 全国仏教大会や 女学生や店員等からも ◇…寄付金第十七回発表、
5. 6 日鮮寺青年団 汎太平洋仏青 にも代表者参加
5. 8 仏教史上に於ける 朝鮮と日本の交渉 大正大学宗教学研究室 金孝敬 四
5. 8 支那仏教徒招待に就いて (下) 藤井草宣
5. 8 西本願寺の応援で 神戸に…鮮僧六人を有し 素晴らしい教縁を持つ 朝鮮人のみの寺
5. 8 台湾基督教青年会復活
5. 9 印度のテロ化
5. 9 仏教史上に於ける 朝鮮と日本の交渉 大正大学宗教学研究室 金孝敬 五
5. 9 印度大乘仏教中心思想史 一宇井伯寿述一
5. 10 仏教史上に於ける 朝鮮と日本の交渉 大正大学宗教学研究室 金孝敬 六
5. 10 思想犯激増で 朝鮮保護事 業界の統一 研究会と協会を設立
5. 10 印度震災救援金 大谷派朝鮮開教団や 福井廿八講等より ◇…寄付金第十八回発表
5. 10 盛気楼の町…魚津で 印度震災救援托鉢 去月下旬各宗和親会で
5. 11 満洲事変を境に 社会運動の転換 特に目立つ学生の愛国運動
5. 12 メッカ巡礼の 田中逸平氏 一十七日帰朝一
5. 12 印度救济義捐金は 五万十万では恥しい 京都各宗学校から義捐
5. 15 貧困朝鮮女児に 初等教育施設 天理婦人会朝鮮出張所が
5. 17 廿二ヶ村を巡講して 印度震災義金募集 山口県都濃郡仏教団で
5. 17 印度震災救援金募集 天台宗が宗報号外で 住職及び壇信徒に告示 公募前すでに八百数十円集る
5. 18 カルカッタより ミュリエル・レスター 釈尊を忘れぬ日本国民の 印度救援に對して プ委員長から感謝の手紙
5. 18 今年も印度で盛大に 全印仏教大会行はる
5. 19 熱河省の奥地から 施業布教に着手 大谷派満洲開教監督
5. 19 中華画家の 本社訪問
5. 20 北平雑感 一支那をかう見る一 京大教授 牧健二 一
5. 20 京城仏誕奉賛記念会の 大がかりな奉祝大会 昨、今両日特に盛大に

1934. 5. 20 熱河赤峰の宗教事情 仏教再興の任重
大 北条(月)開教使手記(上)
5. 22 北平雑感 一支那をかう見る一 京大
教授 牧健二 二
5. 22 印度震災救援金 三叉の団杖につ
健児帽の中へ淨財 日蓮宗京と八本
山等より 寄付金第十九回発表
5. 22 熱河赤峰の宗教事情 仏教再興の任重
大 北条(月)開教使手記(下)
5. 23 北平雑感 一支那をかう見る一 京大
教授 牧健二 三
5. 23 いよいよ大阪仏教徒の 印度救済街頭
デモ 一来る二十六、七日両日決行一
5. 23 東方の光、復活の機運…と ニコラス・
ジョージ氏の語る 西藏仏教の研究
5. 23 宗教的提携によって 日支親善の計画
一元國務總理、陸徵章氏 と平山政
十氏が一
5. 23 回教徒と白人の抗争 三十年を俟たず
して一大事 日本よ回教徒を理解せよ
5. 24 北平雑感 一支那をかう見る一 京大
教授 牧健二 四
5. 24 浄宗共生会が 満洲旅行団 朝鮮金剛
山で結衆
5. 25 北平雑感 一支那をかう見る一 京大
教授 牧健二 五
5. 25 台湾蕃族に観る 死の観念(一) 立
正大学心理学研究室 及川真学
5. 25 汎太平洋仏教への 支那代表の出席
◇…は相当な数に上る模様
5. 25 雲南に対する英仏の活躍(一) 陸軍
省軍事調査部
5. 26 北平雑感 一支那をかう見る一 京大
教授 牧健二 六
5. 26 台湾蕃族に観る 死の観念(二) 立
正大学心理学研究室 及川真学
5. 26 福井市の花祭りで 印度義金募集さる
婦人会から本社に寄託
5. 26 満洲国神社 奉仕養成等 評議員が建
議提出
5. 26 文化の解明 による日滿親善へと 東
亜民族文化協会が 全学会を動員して
日滿文化講座開設
5. 27 台湾蕃族に観る 死の観念(三) 立
正大学心理学研究室 及川真学
5. 27 中米サルヴァドルの 満洲国承認は
ワチカン聖庁の力
5. 27 雲南に対する英仏の活躍(二) 陸軍
省軍事調査部
5. 29 満洲熱河から
5. 29 朝鮮總督府管内では 寺院住職等にも
課税 本五月より改正施行と決定
5. 29 両日も好晴に恵まれて大成功を取めた
大阪仏教徒の 印度救援街頭デモ
5. 30 仏教女性も一斉に起って 印度震災の
救援 東都仏教主義女学校 連盟十四
校の大活躍
5. 30 印度救援に政府所有の古米を 神戸商
工会議所の 岡見潤吉氏奔走
5. 30 立正大学の印度救援
5. 30 流石は首都新京! 新興の気燃えて活
氣横溢 商租契約の話を進めて 智山
の遺溝使節ら帰る
5. 31 印度震災救恤金 日印協会等で 現在
僅か四万円「更に最後の馬力をかけ
る!」と 同協合理事副島氏の意気込
み
5. 13 出口日出磨氏の 満洲巡教
6. 1 満洲国産建学団 京大は三十名募集
6. 1 今夏の汎太平洋仏背大会へ 印度カル
カッタのスワミイ殿下が遙々御参加
6. 1 南洋代表 遙々五名参加
6. 1 神戸に於る朝鮮人の寺 西本公認を急
ぐ
6. 2 雲南に対する英仏の活躍(三) 陸軍
省軍事調査部
6. 2 台湾蕃族に観る 死の観念(四) 立
正大学心理学研究室 及川真学
6. 2 日支親善は密教から 蔣支那公使、高
野で語る
6. 3 震災印度に 新たなる危険 七、八月
の豪雨期に直面して 小作農民の 集
团的撤退策
6. 5 雲南に対する英仏の活躍(四) 陸軍
省軍事調査部 仏国
6. 5 天童山再登記(上) 藤井草宣
6. 5 鄭総理と 日滿仏教提携を約し 西本
願寺千葉執行帰り 新対滿教線布陣
6. 7 天童山再登記(中) 藤井草宣
6. 8 満洲移民の為 多摩河畔に一大農場建
設 東京府の依託により 上宮教会・
救世軍と共に起つ
6. 8 朝鮮基督教界に 改革の運動起る 伝
統教理への叛逆
6. 8 小崎弘道氏の 南洋宗教 事情調査
一十九日出帆一
6. 8 天童山再登記(下) 藤井草宣
6. 9 天童より阿育王へ来り 圓瑛法師に会
す(上) 藤井草宣
6. 9 全国植民地等三万の 小学校へ天台宗
から贈る 伝教大師伝成る 一小学国
史登載を機に一
6. 10 印度震災救援金 寄託金第二十回発表
6. 10 近頃珍らしく十数ヶ所の 布教所を満
洲に 西本教線拡張会で決る
6. 12 南京より 藤井草宣
6. 13 印度震災義 捐金募集に 講演行脚
印度大菩薩会主事
6. 13 高野山大学の 満洲伝道団
6. 13 天童より阿育王へ来り 圓瑛法師に会
す(下) 藤井草宣
6. 14 天台宗の印度震災救援金 九百余円を

- 本社に寄託 一引続き月末まで募集中—
1934. 6. 14 蔵・蒙・漢三 訳の珍籍 龍大図書館に入る
6. 14 王兆銘院長と会見す 藤井草宣
6. 15 『東洋こそが惱める人類に 平和の音信を送り得る』—ガンジーのメッセージに対する涙骨の返書—
6. 15 十八日来朝の シャム代表
6. 16 太虚法師を問う 藤井草宣
6. 17 印度震災に寄せた 日本全国民の同情 たった、これだけ! =総額・内訳はこの通り=
6. 19 私の満洲人観 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
6. 19 巫女の盛んな 硫黄島その他 大正元年に初めて 真宗が入る
6. 19 中山管長の 台湾視察 昨十八日神戸出帆
6. 19 大阪朝鮮人住宅問題解決の 曙光を見出す?
6. 20 汎太平洋仏青大会に 支那遂に不参加 中国仏教總會で出席否決
6. 21 海外事情調査に 天理外語 生の進出 満・鮮・支・南洋へ
6. 21 印度震災へ『仏の子供』も同情 駒大日曜学園生徒が
6. 23 天台宗務庁募集の印度震災救援金 ◇…寄託金(続) 第一回発表
6. 24 汎太平洋仏青大会に対して 上海の全支代表大会に於て 不参加に決す(詳報) 常惺法師 參觀团组织を主張す
6. 26 天理農村 工事も進歩して 今秋移民を送る 深谷満洲伝道庁長談
6. 26 再び上海に戻りて 藤井草宣
6. 26 大派屯田僧の 将来を協議 =きのふ伊藤主事帰山=
6. 27 大蔵大臣の許可を得て 印度救援金第一回発送 直ちに送金手続きを終る
6. 27 支那仏教をかう見る 中村戒仙氏談
6. 28 スワラジ劇園 満洲で大成功
6. 28 『善知識は誰かと言へば まあ印光でせうなア』 支那仏教は衰へてゐぬ 鈴木大拙博士の行脚談
6. 28 豊山満洲別院 建設準備 教学部長の帰朝で 懇談協議
6. 29 支・英・エス・邦文の 四ヶ語人に紹介の 西本仏青運動 汎太仏青大会を記念に
7. 1 大谷派が積極的に 南洋開教に躍進 教線拡張の前提として 開教使を増員派遣
7. 3 駒沢大学生の 満鮮お伽行脚
7. 4 汎太仏青大会 支那の不参加に対し 中国仏教会へ 再び正式参加を促す [全連本部最後のつとめとして]
7. 5 駒大日校の 印度義捐金 本社に寄託する
7. 5 西本願寺の問題 開教地の世襲相続は台湾に於ても不可 ◇…と決り、画期的の 刷新運動を起す
7. 6 汎太仏青大会彙報 総国寺本山と 満洲仏青代表 ヒンズーのバラモン来る
7. 7 汎太仏青大会彙報 印度大菩提会長ワ氏 再び本部へ誠意の打電 二大念願の達成を期す □…仏陀伽耶の奪還と 国際仏教大学の建設…□ 法輪は軋る…か 朝鮮代表 ◇…も亦個人出席
7. 7 夏の集まり 満洲から台湾 全国に活動の龍大生等夏の陣
7. 8 鮮人開教上画期的な 朝鮮人僧俗大会 鷄林八道より続々馳参す 大派朝鮮開教監督部主催
7. 8 京都各宗学校連合会の 印度震災救援金 金一千余円 本社に寄託さる
7. 10 汎太仏青大会彙報 満洲国代表 仏青一行
7. 10 印度震災救援金 締切後式千円を突破 ◇…寄託金(続) 第二回発表
7. 14 汎太仏青大会彙報 汎太仏青不参加の 中国仏教会決議破らる 僧俗六名の代表出席
7. 15 朝倉委員長敬迎辞に 満洲団長の挨拶
7. 15 相国寺に於ける 満洲代表 一殊勝な朝の読経
7. 15 汎太仏青大会彙報 何故中国仏教会は 仏青大会に反対したか 帰朝した藤井交渉員語る
7. 17 大亜親善と仏教 中華民国 阮紫陽
7. 17 大阪仏教各宗団体募集の 印度震災義金本社に寄託 天台宗から第二回分寄託
7. 17 印度震災救援金 合せて約七千円に垂とす ◇…寄託金第三回発表
7. 17 上海、厦門、台湾の 汎太仏青出席者を迎へて 大阪の河上座談会
7. 18 白人の無稽な優越感(上) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
7. 18 フィリピンに於る 基督教諸会派の 合同氣運濃厚
7. 18 けふ開会式を挙ぐる 汎太平洋仏教育年大会 賑々しく入京の満洲国代表 メッセージの第一声
7. 19 白人の無稽な優越感(中) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
7. 19 汎太平洋仏青会議の 組織を変更せよ =太虚法師の評論=
7. 20 汎太仏青大会第一日後報 中華民国出席者 メッセージ 印度代表ヴァリシンハ氏
7. 21 白人の無稽な優越感(下) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
7. 22 汎太仏青 印度代表のスワミ氏 敢然!

- 起って力強く叫ぶ 聖地仏陀伽耶の奪還！ 南洋代表初め熱狂的支持
1934. 7.22 シャム代表ら 日本仏教徒に感謝 仏舎利殿建設計画に対して
- 7.22 中華民国代表出席問題 普く照す法の光で解消 蒋介石氏・太虚法師と会谈 汎太仏青大会の一収穫
- 7.24 汎太平洋の仏青運動に 一新紀元を画すべき 仏青大会東京部会終る 次回は満洲で ◇…如光氏ら提案
- 7.24 スワミ氏と法親王
- 7.25 錫蘭の仏教徒は 仏教議會をもつ 主席代表アベスングラ氏談
- 7.25 印度震災義金募集の 本社の挙に感激 団扇太鼓を鳴らし題目を 唱へるガンジー一派 仏青大会出席の奥津忠男氏談
- 7.25 蝗の如くに 一万二千七百四十九キロの 満洲の旅を終へて
- 7.26 汎太仏青余聞 ヒンズー教徒の 差別待遇 朗かに解消
- 7.31 印度震災救援金 寄託金(続) 第四回発表 取扱は本日を以て打切
- 7.31 ガンジー氏秘書より 日本国民に与ふる書 本紙を通じて発表を寄託
- 7.31 サハイ氏に物を訊く会 大阪水曜会
8. 1 法華正法を— 支那へ逆輸入 日持上人の事
8. 1 セイロンは印度とは別 日本人の認識を噴く セイロン仏青代表
8. 2 満洲国県旗参事官の 誓願文書朗読(上) 笠木良明
8. 2 遂に発表されなかった ヒンドウのメッセージ 『有識者だけでも読んでくれ』
8. 2 チャムス武装移民談の 状況報告 巡回講演 高橋開教使が
8. 2 救世軍本部から 南鮮地方 水害義捐
8. 2 満洲移民の将来— 人の和と勤勉第一 大阪地方職業紹介事務局長 遊佐敏彦氏談
8. 3 満洲国県旗参事官の 誓願文書朗読(下) 笠木良明
8. 3 玉川の丘に展く 日滿親善の樂園 美はし！ 彼此青年の睦み 雄々し！ 彼等留学生の姿！
8. 4 民度の低い 満洲農村の教育には 小さな『塾』が適応
8. 4 最原始民族の樺太アイヌに 仏教女青を作るまで 本派の山本蓮生氏談
8. 4 仏青大会出席の 南洋島民青年が 全部日本名に改名 純真溢るる『お挨拶』
8. 4 両国親善は 文化外交から 日支文壇人が驍談
8. 4 大派開教史上稀有の 鮮・満人を相手に 社会事業中心 問島の天児昊氏 更に日滿犠牲者の菩提堂建設
8. 5 印度震災救援金 寄託金(続) 第六回発表
8. 5 浄土宗務所が 樺太教勢視察
8. 5 西派台湾移動傍観(上) 大谷派回教使 出雲路康哉
8. 5 大派月輪ハルピン開教使の 献身的行動への感激から 『社会館』建設 「兵士ホーム」は八月開館
8. 7 ハワイの翼轍を踏まぬよう 今から「第二世」を警戒する 満洲学生郷土連盟
8. 7 康德皇帝に 拜謁の光榮 天理農村は順調に進展 満洲から帰った中山管長談
8. 7 「満洲国の伝道は満洲人の手で」 大連基青総主事 稲葉好延氏談
8. 7 西派台湾移動傍観(下) 大谷派開教使 出雲路康哉
8. 9 渡満に胸躍る 「新農民の姿！」 上宮教会の移民訓練所參觀記(上)
8. 9 皇道大本 満洲通信 万国道德会と愛善会の提携
- 8.10 渡満に胸躍る 「新農民の姿！」 上宮教会の移民訓練所參觀記(下)
- 8.11 満洲文化は 先づ寺院の復興から！ 五百万円の費用・十ヶ年の歳月で 熱河ラマ寺院の修復 伊東忠太博士 調査旅行から帰る
- 8.12 斯界の權威 伊東忠太博士に 宗教建築観を訊く 「寺院建築は変化してよい 神社建築は斯じて然らず」
- 8.12 満洲国文教部の予算 その文化的施設 各部の文化機関を統管
- 8.12 満洲建国の王道主義は 仏教主義 その将来と使命
- 8.12 天理教満洲伝道庁 新京移転に決定 来春の解体を待ちて着工
- 8.12 光暢法主の 関東州巡錫 今秋十月実現されん
- 8.14 満洲建国秘史を聴く会 大阪社事水曜会
- 8.14 満洲に於ける 社会事業の現状 大連では渡満内地人の 救済に全力を集中
- 8.15 印度震災救援金 横浜仏教各宗同盟会から本社に寄託 寄託金(続) 第七回発表
- 8.16 朝鮮総督府の レブラ患者一掃 ◇…の二十年計画成る
- 8.16 天勲總長の 満洲行 二十七日京都発
- 8.17 内鮮民族開化の聖跡？に 素盞鳴尊を奉祀する 曾戸茂利神社建設 道会一致で建設案通過 八坂神社から有力資料を
- 8.18 来朝中のバリシンハー氏ら 印度に仏教大学建設運動 九月の始業時を待つて 各方面に援助を求む

1934. 8. 18 光暢法主、智子婁方の 満洲行
 8. 18 「支那仏教史跡」大拙博士によって
 近く英訳完成
 8. 19 満洲人は熱心に 宗教を求めてゐる
 魅力を持つ愛善運動 出口日出磨氏婦
 朝談
 8. 19 天理教が台湾に 伝道庁を設置 本島
 人教化に光明
 8. 19 大派開教使、出雲路康哉氏の 西派台
 湾移動の傍観を論ず(上)
 8. 19 ガンチイズムの修正 無抵抗主義より
 行動主義へ 印度国民運動の転向
 8. 19 満洲国の国民精神 為政者に思想統一
 の 対策など思ひもよらず 鳳山仏教
 文化研究会代表 浄土宗開教使 村瀬
 義海
 8. 21 朝鮮同胞の開教の基礎成る 大派鮮人
 僧侶養成所 規程いよいよ發布さる
 注目すべき今後の展開
 8. 21 大派開教使、出雲路康哉氏の 西派台
 湾移動の傍観を論ず(下) 鳳山仏教
 文化研究会代表 浄土宗開教使 村瀬
 義海
 8. 22 支那の新生活運動と汎太仏青 第三回
 開催地問題 福田宏一
 8. 22 仏青大会後に勃然たる 日支融合への
 気運 全連有志・中華代表等発起で
 日華仏研会創立を急ぐ
 8. 22 愛知仏教会 満洲国訪問と慰問
 8. 24 志士ボース氏等を援け 印度民族を中
 心に 大亜細亞教会結成 明日、松本
 楼で発会式
 8. 24 印度救援へ 日印教会の奔走で 遅れ
 馳せながら 東京市が五千円 ◇…を
 内諾、九月の市会で決定
 8. 24 内鮮融和に 天理教が全力を 朝鮮同
 胞への教化 管理所の画期的飛躍
 8. 24 近づく満洲事変三周年 陸軍省から神、
 仏、基三教へ 追悼時局再認識 ◇…
 の行事・催し等の依頼通牒
 8. 24 満洲国に年、すくなくも 三、四百万
 人を送れ 日本の積極的支援を希望
 康德帝令甥憲原氏談
 8. 25 書齋漫談 二十五年振りの 朝鮮平壤
 の旅 小西重直博士は語る
 8. 25 皇道発揚、宗教革新も期して けふ発
 会の 大亜細亞独立協会 会長以下陣
 容成る
 8. 25 世界連盟倶楽部が蹴起して 極東平和
 への実践運動 北鉄議渡交渉の坐礁を
 憂へて 先づ、満両国政府へ訴願
 蒙古に展開する プ氏の運動
 8. 25 閩宗僧俗に呼びかける 智山の満蒙協
 会 半官半民的に今秋創立
 8. 26 手に汗を握って聴く 満洲国の種々相
 農業移民の将来如何
 8. 26 独力で診療所を開設 医療しつつ開教
 代診先生の再開教使 大派吉林省の
 異彩
 8. 26 本派台鮮駐在移動
 8. 28 印度震災救援義金 領収、礼状来る
 8. 28 満洲人布教使の 養成機関を設置 各
 宗派に率先して 天理教満洲伝道庁が
 8. 29 興味ある訴願を提起した 印度のスワ
 ミ氏(上) その語る所とプロフィール
 印度へ一万人の布教使を送れ -布
 教使学校の設立-
 8. 29 天理の北平人布教 青年に日本研究熱
 旺盛で 天理教会へ来る者が多い
 8. 29 仏跡奪還運動に就いて 日本仏教徒の
 援助を求む バリ、シンハ氏、仏連訪
 問
 8. 29 京都仏護団の 満洲事変の追 悼記念
 講演
 8. 30 興味ある訴願を提起した 印度のスワ
 ミ氏(上) その語る所とプロフィール
 ブッデイズムは不可 ブッダ・ダル
 マと言へ
 8. 30 高野山大学 満鮮大伝道団 明日出発、
 二十七日間 和田性海団長抱負を語る
 8. 30 東洋伝来の宗教に還れ 朝鮮にも仏教
 復興 キリスト教も革新運動
 8. 30 東洋民族が参集して 禁酒の円卓会議
 9. 1 満洲国で社会施設 金光教本部で立案
 中 遠からず実現する
 9. 1 東本願寺の 満洲事変三周年大法要
 9. 2 教派を超えて禁酒に盟ふ 印度のスワ
 ミ氏も出席して 東洋禁酒連盟成る
 9. 2 藤村古義管長代理の 満鮮五十ヶ所親
 教 明三日夜西下、二ヶ月間
 9. 4 東西両都に期せずして 仏教的日華融
 合運動 同一名義を機縁に合同か
 9. 4 京都古義各山から 満洲出動皇軍部隊
 へ ラジオ十台を贈る
 9. 5 満鮮から帰って 東京にて 宮崎みね
 を
 9. 5 中華、国民政府の 孔子生誕記念弁法
 9. 5 藤村門跡出発 満洲巡教の途へ
 9. 6 満洲国が 三千八百冊に上る “清朝
 実録” の大出版
 9. 6 どうかと思はれる 満人僧養成問題
 =花田龍大学長婦洛談=
 9. 7 金參千八百八拾八円參拾壹錢也 印度震
 災への義援金 第二回送金完了
 9. 8 安東県臨濟寺で発見された トルコ玉
 や犬養氏等の 亜細亞經綸連判状 寒
 山寺南岳氏、當時を偲び語る
 9. 8 ローマ教皇庁いよいよ 宗教上満洲国
 を承認 カトリック代表正式に文書手
 交
 9. 12 日宗管長二十年振の 朝鮮親教決る

- 来る十月十日から旬日
1934. 9. 13 土耳其の無字運動 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
9. 13 印度仏徒の叫び 実現の緒につく 聖地奪還、仏大建設 バリシンハ氏に希望を聞く 帝都有力者の相談会
9. 13 満洲事変三周年 記念大講演会 ◇…十八日高倉開館で
9. 14 妙心寺派の新京開教 漸く其第一歩を確立 -満洲巡錫の天岫総長が-
9. 15 内鮮仏教の 融合に努力 曹洞伊東泰邦氏の功績
9. 15 十八日 満洲事変第三周年記念 各派の法要と講演
9. 16 満洲事変法要 大阪真宗青年会
9. 16 印度仏教徒の翹望漸く叶日 印度仏教復興後援会生る 聖地奪還、ペナレス国際仏大等 日印協会内に陣容成る
9. 18 小学校一年から四ヶ国語 まだ国定教科書のない 満洲の教育
9. 18 印度人には「日本は不思議な国」
9. 18 新刊紹介 朝鮮神宮年報
9. 19 印度仏教復興後援会生る
9. 19 朝鮮基督教連合公議会 第十一回総会
9. 19 鮮人教育は澆刺として 内地人は之に及ばず 国内教育にも反省の要
9. 19 華頂開館を事務所として 日華仏教研究会着手 趣旨大綱と第一回会員の発表
9. 19 満洲事変茲に三周年 日比谷の大会堂を埋め尽くした 日蓮宗の記念大会
9. 19 西本願寺に於る 一座法要
9. 19 興正寺の法要
9. 19 仏光寺の法要
9. 19 東本願寺の追悼法要
9. 19 京都日蓮宗の 追悼法要と講演会
9. 20 敦煌ものに匹敵する 支那西域発掘品 新婦朝出口常順氏の出品 京都大蔵会の準備なる
9. 20 印度の貧乏と英国 (一) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
9. 20 バリシンハ氏のバリー語レコード頒布
9. 21 印度の貧乏と英国 (二) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
9. 21 支那から来朝の教育視察団
9. 21 愛善の本義に則り 眞の内鮮融和に努力 朝鮮同胞の修行者激増 注目すべき田中省三氏の今後
9. 23 印度の貧乏と英国 (三) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
9. 24 印度の貧乏と英国 (四) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
9. 24 ミナト神戸における 日印親善の集ひ (一)
9. 26 鄭総理より慰電
9. 26 華東基督教教育会の 日本教育考察団 来る 一行十六名あす上京
9. 26 ミナト神戸における 日印親善の集ひ (二)
9. 27 ミナト神戸における 日印親善の集ひ (完)
9. 28 曹洞釜山の 大授戒会伊東泰邦氏の 晋山
9. 29 大谷光瑞氏始め 西本願寺に 厄介をかけた…と 天岫総長の土産話
9. 29 新京に別院 敷地を 購入 風害復旧費と共に 妙心派参事会の議案
9. 30 于闐及び支那仏教の 公伝は 大月氏王丘就却の 護法的熱意に基く
10. 2 匪賊の危険を冒して チヤムズの 皇軍を慰問 民間最初の 決死行 大派の 大河内・石川両氏
10. 2 黒龍江便り 河上溪生
10. 4 バリシンハ氏 愈よ 婦錫
10. 4 満洲基督教 教員 日本視察団 来る 京都連盟で 大歓迎
10. 9 満洲開教と 其将来 (上) 赤峰 東本願寺 開教使 北条月照
10. 10 大派 光暢法主・智子 裏方 満洲 皇帝に 賜謁 満洲 巡錫 日程 決す 阿部 総長も 随行 渡満
10. 11 内鮮 融和の 実を 挙げた 高麗 王若光を 祀る 荒廢の 神社 奉賛 運動 齊藤 前首相等が 発起して
10. 11 天台宗の 満洲 留学生 一愈よ 出発-
10. 12 満洲 国上下を 感銘 せしめられた 秩父 宮殿下の 御恭謙
10. 13 「委任 統治の 南洋 諸島に 於る 宗教 事情」(一) =小崎 道雄氏の 語る =
10. 13 いよいよ 満洲 国と 教皇 庁との 修交 密 謝 外交部 大臣から 正式 回答 公文書
10. 13 日満 カトリックの 親善
10. 14 「委任 統治の 南洋 諸島に 於る 宗教 事情」(二) =小崎 道雄氏の 語る =
10. 16 荒び 行く 北満の 野に 偉人 来れ!
10. 17 満洲 開教と 其将来 (下) 赤峰 東本願寺 開教使 北条 月照
10. 17 読書 界 満鮮 百話 山本 勉編著
10. 20 隣邦の 罹災 兒童へと 満洲 人の 兒童の 義金 訪日 兒童が 中心となり 大派 熱河 健児・赤十字 団が
10. 21 出動 将士の 郷土に 一 熱河 省奥地 と 外蒙古の 実情を 報告 大派 登坂 開教使
10. 21 皇道 大本 雜記 南洋 ボナベに 陸稲 栽培 満洲 最北の 愛善 会員
10. 23 光瑞 氏の 霹靂 一下で 本派 満洲 教団 紛擾が 斯波 総長、辞職 して 来る
10. 23 長江 及び 英領 海峡に 活動の 大派 長江 開教 監督部 明々 年開教 六十年 記念式 先づ 開教史の 編纂に 着手
10. 23 在満 日本 承認は 概ね 道徳的 頽廢 前

- 線将士を慰めるものは鮮人同胞の誠意
1934. 10. 23 京都日印協会の講演会
10. 24 満洲国の情勢から新計画を樹立する
始めて「問題」に触れた 西本願寺
当局の声明
10. 24 「委任統治の南洋諸島に於る 宗教事情」(三) =小崎道雄氏の語る=
10. 24 支那仏教学は伸びる 塚本善隆氏土産話
10. 25 匪賊に対する 安全保障を誓ふ 黒龍王と愛善会の握手
10. 25 朝鮮神宮賛歌 一般から募集
10. 26 ボンベイで二十六日から 注目さるる
印度国民会議 一在東京、ボース氏の
声援電報一
10. 26 満洲国史編修 朝鮮修史官の 稲葉岩
吉博士が
10. 27 大派光暢法主・智子裏方 けふ満洲巡
回へ 阿部総長以下を従へて
10. 28 康德皇帝に拝謁し 宏談を翼賛し奉る
昨朝満支巡化出発直前 大派光暢法
主は語る
10. 28 鄭国務総理から 満洲仏教統一を希望
菱刈全権からは叱られた 川崎英照
氏婦朝談
10. 28 セイロン仏青の 暴風被害見舞
10. 28 クリットン氏 満鮮の旅行
10. 30 ビハール救援委員長より 救援に対す
る感謝の書 A. M. サハイ氏あて
10. 30 大派光暢法主・智子裏方 けふ康德皇
帝に拝謁 日満官民歓呼裡に入京
10. 30 問題に悩む大阪府の 内鮮融和大綱決
す(上)
10. 31 汎太仏青大会後に セイロンで起つた
紛紜 一ニッサンカ氏の書簡一
10. 31 問題に悩む大阪府の 内鮮融和大綱決
す(下)
10. 31 光暢法主の 新京入り 軍官民各宗
婦人に挨拶
10. 31 印度国民会議 エ・エム・サハ イ氏
の同志等 帰印の挨拶
11. 2 錦州布教所の 発展と 満洲・洮安県に
大派布教所
11. 3 大派朝鮮牧島 開教廿五周年 五日か
ら記念法要
11. 3 異彩! 成道の聖日 帝国ホテルで
印度の精進料理
11. 6 印度復興後援会 堂々の陣容整ふ 近
く最初の発起人会
11. 6 鈴木大拙博士の『支那仏教印象記』
(上) 藤井草宣
11. 6 印度志士 ボース氏 の入洛を待ちて
11. 8 妙心派台湾の 新計画 本島人僧侶と
寺院制
11. 9 ビハール救援会より 第二回救援金の
領収書
11. 9 満洲開教費 は徴収二ヶ年延期 一八
日本会議上提一
11. 9 鈴木大拙博士の『支那仏教印象記』
(下) 藤井草宣
11. 11 日本人に解って欲しい 『ナゼ英が讓
歩するのか』 入洛のボース氏は語る
(上)
11. 11 印度に壁画揮毫中の 野生司画伯を後
援 国際文化振興会が
11. 13 東京の日華仏教会 大阪部会組織懇
談 好村主事下阪、各方面歴訪
11. 13 南禅寺派の 満洲進出
11. 13 天理教伝道庁 愈よ新京に移転 等分
羽衣待ちの飯庁舎で執務
11. 13 満洲国参議一行 保津に清遊 人類愛
善会の案内で
11. 13 ラマ廟と 糞の供物
11. 14 大派満洲安東布教所が 朝鮮同胞開教
のために 鮮人の手で納骨塔建立 開
教三十周年を記念して
11. 14 大派比律賓に 布教所増設 ダバオに
伽藍建築中
11. 15 印度志士ボース氏 天恩郷で講演 王
仁三郎氏等と懇談
11. 15 川崎随行布教使 満洲帝都訪問 報告
大講演会
11. 16 十年振りに満洲を訪ね 国威の輝に打
たれた 之を機縁に満洲開教に拍車
大派阿部宗務総長談
11. 16 内鮮融和の根本策として 大阪府が拵
へた 協和信用購買利用組合
11. 16 来月中旬句比島で 極東三国 教育大会
帝教から二代表派遣
11. 17 満洲国の王道主義は カトリック教と
一致 謝外交総長の演説
11. 21 仏青大会の海外反響 南洋島民間に
俄然仏教熱台頭 カソリックの牙城崩
れるか! =島民代表から純情の私信=
熱河承德と喇嘛寺(上) 在承德 登
坂溪雲
11. 22 海外宗教の動き 支那は基督教を要求
するか?
11. 23 大派の屯田僧は 粒が揃ひ過ぎて 停
頓したのだ 実際の仕事はこれからだ
太田外世雄氏将来を語る
11. 25 熱河承德と喇嘛寺(中) 在承德 登
坂溪雲
11. 25 七十二の高齢で 單身渡満する 墨照
玄氏 彼の土と化す決意で
11. 28 妙心派の 開教制度 高林案を基礎に
に研究
11. 28 酒、女、民族意識 長尾半平氏 満洲
観察談
11. 29 大派光暢法主の 満支巡化の収穫
「忠霊を偲ぶ」「北支瞥見」の二映画

1934. 11. 27 上海で活躍中の 大派映画班 陸戦隊と銀幕 慰問をトップに
11. 27 熱河承德と喇嘛寺(下) 在承德 登坂溪雲
12. 1 日本大檀越夫妻の 満洲国巡化 ◇実は大谷光暢法主一行◇
12. 1 支那古代の 天文学の歴史や 揚子江の研究など 上海自然科学研究所長に内定の新城博士
12. 5 土地開墾に 南洋へ進出 愛善会員が
12. 7 印度論理学 方法論上の 一問題 五十嵐智昭
12. 15 大いに進歩した 日華仏教研究会 会則も大体決定
12. 18 満洲国の教線拡張は 積極的に行へ 宮坂結宗氏当局へ期待
12. 19 大連の支那街で トランク泥棒と活劇 ヒゲの巡監長の武勇伝 [大派法主満支巡化挿話]
12. 21 日本仏教の良き友 インドの富豪より 風害仏徒に救援金
12. 22 在満日本人官吏に 聖観音画像を回向 信念堅持と生活依憑に
12. 22 印度のお金 感謝は満腔一だが どう分配する? 西本願寺で首をヒネクル
12. 24 鮮内は… 愛善運動に 燃えてゐる 宗教合同見事に完成 出口日出麿氏、車中談
12. 24 ベルシア詩人 ファイルダウシー千年祭
12. 25 各宗は、満洲国布 教の根本策として ラマ青年を養へ 小林義道
12. 25 治安は維持され 移民は元気だ 督務部の移民会議で称賛 深谷徳郎氏の天理農村漫談
12. 25 琉球開教の恩人 田原法馨氏を偲びて(上) 菊池亮
12. 27 儒教未だ支 那に滅びず
12. 27 琉球開教の恩人 田原法馨氏を偲びて(下) 菊池亮
1935. 1. 1 愈々陽春の五月発会する 日華仏教学会 先づ好村代表渡支して 要人を歴訪—準備の満全を期す
1. 1 印度人の寄付金 寄付者の意思とお国と宗教と教育と 全てピタリ合った 処分法 西本願寺で斯く決る—
1. 6 大派浅草別院再建と 新京別院建設 今春三月より本工事に着手
1. 6 最近の西蔵事情 ここにも日本商品 人口は百万位 教育程度は極めて低い
1. 8 宗教を主題とする 朝鮮参与官会議 統治上の一大画期 として大に注目される
1. 9 印度国民運動 A. M. サハイ
1. 9 印度基督教 国民宣教師協会の宣言 危機に瀕して三十年の功績を語る
1. 9 日宗開教師養成へと 立正大学に満鮮科新設
1. 9 日支仏徒の融合への 二新機関遂に對立 その成行注目される
1. 10 印度国民運動(2) A. M. サハイ
1. 10 愛善運動と 相呼応して 全滿に神聖運動勃興
1. 10 支那青島の 西本の発展 大本堂と庫裏新築
1. 11 印度国民運動(3) A. M. サハイ
1. 12 印度国民運動(4) A. M. サハイ
1. 13 印度国民運動(5) A. M. サハイ
1. 13 内鮮一如の 宗教運動を展開 来る十五日から参与官會議
1. 15 印度国民運動(6) A. M. サハイ
1. 15 会則綱領等成り 日華仏教研究会 東京で創立總會を挙行
1. 15 開教五ケ年で 別院建立迄運ぶ 興正派朝鮮の活動
1. 16 朝鮮文化史上に於ける 仏教の地位(一) 正大研究室 金孝敬
1. 17 朝鮮文化史上に於ける 仏教の地位(二) 正大研究室 金孝敬
1. 17 日蓮宗で愈よ決意した 満洲開教司監部の建設 取敢へず明年度予算に 新規に一万円計上
1. 17 立大で編成した 新設「満鮮科」案 二千四百円の予算で
1. 18 朝鮮文化史上に於ける 仏教の地位(三) 正大研究室 金孝敬
1. 18 朝鮮総督府の 宗教精神運動 近く懇談会を開催
1. 19 日華仏教研究会 会長役員等決定 支那公使、外務省も後援
1. 19 朝鮮文化史上に於ける 仏教の地位(四) 正大研究室 金孝敬
1. 20 朝鮮文化史上に於ける 仏教の地位(五) 正大研究室 金孝敬
1. 22 日華仏教研究会と 蔣公使の努力にて 中日仏教研究会設立
1. 22 日華仏教の連絡に 会心の二機関 日華仏教学会 発起人の一人 藤井草宣
1. 23 満洲皇軍の 慰問も協議
1. 24 議会の問題にするか 北平在留邦人取締 清水安三氏の運動
1. 24 亜細亜復興運動に 満洲政府認識不足…と 印度志士 ナイル氏慨く
1. 26 光瑞氏と別院の努力で 大連に女学園 創立 事務科設置や、校外教育の新方法 天長節に開校式
1. 26 李朝五百年來の 排仏思想を殲滅 朝鮮総督府が乗り出し 仏教復興を内地宗団と鮮僧に依頼
1. 29 日華仏教研究会 関西側役員凡て決定 会則も全部承認
2. 2 内鮮仏教界の 代表者と懇談 順次各派代表も招待 当局、愈よ宗教復旧に

1935. 2. 5 乗り出す
開教は内地のみで 駄目じゃないか…
四日目で本会議 本派定期集会
2. 6 熱河で発見された 日持承認の足跡
居士將軍のあひだに 銅像建設の計画
2. 8 西蔵語活字字母を 龍大で新鑄 斯学会に貢献
2. 8 賛仏歌を通じて 恩や感謝の觀念の全くない 南洋土人の児童教化へ… 大派岡田開教使は語る
2. 9 私の満洲僧素描(1) 日本天台宗満洲留学生 広岡純道
2. 10 私の満洲僧素描(2) 日本天台宗満洲留学生 広岡純道
2. 13 “喇嘛僧教化は 先づ青少年から” 本派の「蒙古僧」といはれる 石橋岱城氏の新事業
2. 13 満・鮮・台 三開教地方の 新鉄道布教運動 西本願寺で着手
2. 13 私の満洲僧素描(3) 日本天台宗満洲留学生 広岡純道
2. 14 新嘉坡本願寺 本堂建立運動
2. 14 私の満洲僧素描(4) 日本天台宗満洲留学生 広岡純道
2. 14 印度仏教復興の 実行方法を協議 けふ、印度復興講演会が
2. 15 満洲国皇帝の 御親臨を仰ぐべく 東京花祭会の 必死の奔走 レコードに、踊の振付に 準備着々進む
2. 16 印度仏教復興後援 漸くその緒につく 仏青連盟と協力して
2. 17 大派朝鮮の新開教線 鮮人のみの教会と 満浦線への教線拡張
2. 20 大アジア民族の団結へと 日満各地に 拡充され行く 極東トルコ族の文化運動 ▽…イデル・ウラル文化協会のグバイドラ支部長は語る
2. 20 トルコと日本 国際交歓 駒大の児童大会で 美しい情景展開
2. 21 印度とは何か(上) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
2. 22 ハルピンで 全世界 ファシスト大会 メーデーに
2. 22 米布その他 本派開教地 留学生と懇談をする会
2. 26 印度とは何か(下) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
2. 28 「移民即宗教」の大旗を立て 間島の資源開発に出発 柳生道場の招聘を断り けふ満洲入りの池田大佐
2. 28 大東山布教所実現に 鮮僧の大派帰属要望 ▽…が漸次旺んとなる 内鮮協力の結晶
2. 28 基督教の満洲伝道会 組織成る
3. 1 満洲靈廟建設奇談 礼状の一部に 天照山日光寺を起工 廟を中心に日満蒙の各寺を鼎立させる
3. 1 西岡氏に対して 意外な暴露 “仕事は進んでゐない”と 満洲から帰朝の某氏談
3. 2 国境都市の風景 樺太断片 出雲路宏
3. 3 長くも明治大帝 御下賜の勅語奉戴 西本の日露戦役三十年記念 大規模な追弔会
3. 3 蒙古僧の 留学計画 天台宗で 引うける?
3. 5 日華仏教研究会 大阪支部結成 協議会
3. 7 日支経済提携と 新人の活躍 藤井草宣
3. 7 日華仏教会の 好村代表渡支 十二日長崎発
3. 7 独身主義の人格者 国士としての王龍恵氏 天岫接三和尚の懐旧談
3. 7 朝鮮民族の 心田開発に 三十二本寺会合
3. 7 今日の問題 北鉄交渉成立後の 日サ関係
3. 8 聖徳太子と日支両先覚 福田宏一
3. 8 中国仏教年鑑 編纂に着手 多方面の期待多大
3. 8 仏教はヒンツーの一派 日本は自国と同宗の 国として親しみを感ず 印度水産大臣は語る
3. 8 金光各支部長等連署の 文相への陳情書内容 北米・関東州等も加盟
3. 10 けふ日露戦役卅周年記念の催 第四師団長宮殿下 親しく御参拜 四天王寺の日露 戦没者追悼法会
3. 10 基教海外 伝道協会 本年度の 伝道方針
3. 12 中華民国を訪れるに際して 日本仏教徒に告ぐ 日華仏教会準備委員 好村春輝 釈墨禪
3. 14 印度人の眼で見る 日本の秘密 チャマン・ラル
3. 15 各宗管長、門跡の 康徳皇帝奉迎送金閣寺門前なら差支なし
3. 16 朝鮮開教草分の資料や 小早川画伯苦心のチオラマ 大派現如法要記念展
3. 16 大亜細亜建設社の慰霊祭執行
3. 17 支那燕京大学から 同大へ交換教授 =親日家の徐宝謙氏=
3. 17 日露戦役三十周年記念 慰霊彈奏 …満洲大連忠霊塔に於て— 聖徳会顧問 江頭法統
3. 20 仏教主義の内鮮興助会、近く 公認説教所設立 全国に及ぼす 鮮人教化運動
3. 21 大谷光瑞氏の 満洲経済開発一くさり 気炎万丈を聴く
3. 23 秦徐服来朝記(上) 一瀬歳雄

1935. 3. 23 シャム国に揚る 愛善運動熱 支部会堂の新築
3. 24 満洲国皇帝陛下へ 本派本願寺の“献上品” 緋絨飾りの大鑑
3. 24 満洲撫順に 日本人天主教会 四月に改築完成
3. 26 伏見宮殿下の台臨を仰ぎ 孔子祭 稀有の盛儀 日・満・支の代表参列
3. 27 故光宝法主に宛てた 達頼ラマの親書 仏教永住の方法につき提携 大派現如上人展の一律観
3. 27 秦徐服来朝記(中) 一瀬歳雄
3. 28 開会中の印度立法議會へ 聖地、仏陀伽耶管理案提出さる
「明日討議の筈」とわが講演会へ報告 タゴール翁初め名士が支持
3. 28 全世界を通じ 1935年3月24日 “仏陀伽耶デー” 決行 日本に求めた声援、間に合はず
3. 28 台湾教界の裏 出雲路康哉
3. 29 「大韓阿弥陀本願寺」の 勅額と皇帝の御祝辞 貴重資料続々 到る 現如法要記念展彙報
3. 29 支那へ 普導大師を 逆輸出の話
3. 29 満洲国皇帝御來訪を機に 東方文化の学的宣揚 関係二大会が儒教復興へ拍車
3. 29 印度のニュース トリピタカ(三蔵)の ベンガル語訳本刊行に 一退職技師が一万円寄付
3. 30 満洲国皇帝の 奉送迎に 仏教各宗派代表の参列 仏連、各派へ通告
4. 5 青年の手で 日印の親善 日印青年協会の創立
4. 6 蒙古活仏 きふ奉天集合 七日大連出帆
4. 7 満蒙の天地に秘められた 燦然たる東方文化の紹介 …期待される東方文化学院 等の初の研究発表展望…
4. 7 大連より
4. 9 満洲国皇帝へ 各宗派代表 御機嫌奉伺
4. 10 秦徐服来朝記(下) 一瀬歳雄
4. 11 満洲国皇帝に… 献上の東京 花祭映画出来 連合会が奉迎の誠意を表して
4. 11 真言曼陀羅を 満洲皇帝に献上 五島信教氏の篤行
4. 11 満洲国皇帝の 御帰路御安泰祈念 日蓮宗務が
4. 14 日華仏教研究交換に 林彦明、大西良慶氏等渡支 上海に支部を設置し活躍せん
4. 16 満洲国皇帝陛下 古都に御安着 あす平安神宮御成 天平裂の図案を模した 写真帳を献上
4. 17 朝鮮総督府の教化方針たる 全道心田 開発布教に 大西良慶氏が三ヶ年巡錫 震災印度の一 復興に精進する 国際義勇隊一万五千
4. 18 日支親善の波に乗って よきスタートを切った 日華仏教会の組織 太虚法師と好村氏の打合せ
4. 18 日運国交の進展に鑑み 第三回汎太仏背大会は 是非シャムで開け 名古屋連盟が率先提議
4. 18 全日本仏背の 満洲布教を語る
4. 20 日支親善は仏教から! 各団体の活躍 目覚まし
中日密教研究会が天津に 百二十万円の“平和塔”を建立 近く東京で宣言 決議
4. 20 日華仏教研究会 大阪支部の素晴らしい 景気 抛金三千円を突破せん
4. 21 留日満洲司法官 築地別院参拝 司法保護問題で 日滿提携に触れん
4. 23 印度カトリックの 教化運動新計画 五十年記念として
4. 24 大派満洲開教の新進路 青少年教化に着手 野間指導囑託を迎へ 安東で全満開教使の講習会
4. 25 海を超えて(一) 町田トシコ 一上海へ
4. 26 支那組合派 教会大会 六月初旬北平で
4. 26 満洲所見 旅行途上奉天で 星涛生
4. 26 台湾救援の報続々 到る 本派の義捐運動 第一回の現地慰問報告
4. 26 飄然来朝する 印度僧ナーラダ
4. 26 河南の龍泉寺へ 蒙古の歡喜天 活仏が開眼供養
4. 27 仏教を見直した 満洲人 都甲文雄氏談
4. 27 中華厦門の東本教堂に 日語専門研究所 常愷法師等と提携して 支那の留学僧を養成
4. 27 海を超えて(二) 町田トシコ 一上海着
4. 27 芝原総長現地到着 本格的運動整ふ 本派と台湾震災
4. 27 比島独立を前に 若き学徒の…日本視察 本派山ノ内氏が東道役で
4. 28 台湾大震災に 曹洞の義捐金募集 伊藤管長闍宗に告諭す
4. 28 支那の仏教寺院は 近年頓に勃興の気味 支那の仏教行脚から帰った好村春輝氏談
4. 28 日本キリスト教連盟から 米・支両国へ…親善使節派遣
4. 28 海を超えて(三) 町田トシコ 一上海所見
5. 1 東亜の親善を強調して 吾国最初の儒道大会 日、満、支の代表一堂に

- 「仁」の一字に合流！
1935. 5. 1 儒道大会席上で 支那代表の苦しい態度 満洲国との同列忌避から
5. 1 台湾震災義金募集
5. 1 台湾震災と各宗 本派在研生、四日間に 千二百余円を得
5. 1 海を超えて(四) 町田トシコ ーダンスホールー
5. 2 在鮮外人宣教師と平南道知事が懇談 思想的に注目さる
5. 2 東亜各国の情緒豊かに 孔子祭壮麗に終る 儒道大会第三日詳報
5. 2 海を超えて(五) 町田トシコ ー強力球と犬の競争ー
5. 3 ヒリッピン独立の 気分を漲らして 学生視察団入洛 団長山ノ内氏は語る
5. 3 海を超えて(六) 町田トシコ ーなつかしいノゾキー
5. 3 キリストは印度に旅行した チャーチワードの興味ある研究 イエス臨終の言葉に新解釈現はる
5. 3 ゴダード翁 帰米の途へ
5. 4 叡山へ留学の 喇嘛青年僧 三名決定して 近く来朝
5. 4 台北基督の 震災救援運動
5. 4 ヒリッピン学生団と 交歓会 西本願寺が
5. 5 遥々セイロンから 優秀な学究僧二人 仏教国日本に驚れて けふ、安洋丸で神戸へ
5. 7 満洲国政府の正式留学生 蒙古喇嘛僧七名高野へ ラマ教革新の 熱望認めらる
5. 7 日宗日特派総本山蓮永寺 愈よ満洲に移転か 十四日、檀家有志と協議 成行き頗る 注目さる
5. 7 国際平和祈禱に関し 全世界基督教が 日本基督教連盟に通帳
5. 7 日華仏研 渡支前の協議会
5. 9 台湾の大震災で YMCAの活動 『託児所開設など』
5. 9 東亜聖跡巡拝 団の組織計画 今秋第一回募集 亜細亜学苑が
5. 10 印度の青年運動の 指導者はYMCA ラホア市基督主事ナサー氏談
5. 10 『観察記』をものして 支那仏教の興隆に資したい 来朝第一に湊川神社参拝 大醒法師は語る
5. 10 満洲より(一) 町田トシコ
5. 11 台湾震災横 死者追悼会 曹洞東京第一 宗務所主催
5. 11 満洲より(二) 町田トシコ ー大連へー
5. 11 衰へつつも残る 亜細亜北方文化の 朝鮮の巫俗の話(B) 京大民族学会で 赤松智城博士の発表
5. 11 北米、布哇その他 海外にも布教使派遣 文書伝道部の創設等、本派 布教部本年度計画案
5. 12 光瑞氏発願の… 大連高女愈よ創設 来る二十一日開校 将来の発展を期待
5. 12 日華仏教研究会の 訪華旅程殆んど決定 駐支各領事館に 太子尊像を寄贈
5. 12 衰へつつも残る 亜細亜北方文化の 朝鮮の巫俗の話(B) 京大民族学会で 赤松智城博士の発表
5. 12 満洲より(三) 町田トシコ 血染のリング
5. 14 衰へつつも残る 亜細亜北方文化の 朝鮮の巫俗の話(C) 京大民族学会で 赤松智城博士の発表
5. 14 満洲より(四) 町田トシコ
5. 15 日本在留の青年学徒が 印度学生協会 結成 けふ、東京の事務所で発表
5. 15 満洲より(五) 町田トシコ ー博物館とダンスホールー
5. 16 日暹親善へ拍車 両国語の習得 研究機関の設置 講師や学生を派遣交換 『関西日暹文化協会』初協議
5. 16 日華仏徒の 提携を懇談 大醒法師を囲み
5. 16 日本最初のファイフイ教会
5. 17 日宗多年の懸案、満洲の 開教司監部 着工 今秋管長親教まで 第一期工事を竣工
5. 17 台湾震災被害 状況を報告 大派両開 教使帰山 今後の慰問方法を講究
5. 17 満洲より(六) 町田トシコ ー流線型の汽車ー
5. 17 支那の坊さんは 日本の坊さん達から 学ぶべきものありや 大阪某新聞社 某部長談
5. 17 注目される回教の 新興と新陣容の形成 欧州再軍備を繞る 回教国トルコの氣勢
5. 18 赤色こまやかなる 蒙古人への精神運動 佐藤氏の蒙文釈尊伝の編纂 近く上梓、十万部を蒙古へ配布
5. 18 学界未紹介の 支那系経典調査 常磐博士入洛す 最初の収穫を智山で
5. 18 東本訪問の 大醒法師 昔の支那留学僧 一柳参務 等と欽談
5. 18 満洲より(七) 町田トシコ ー万丈の黄塵ー
5. 18 日華儒道家の提携は 両国親善に有意義 儒道大会に出席の帰途 中国代表 引率者豊田神尚氏談
5. 19 印度の学僧 ナーラダ長老 プロフィール
5. 19 満洲より(八) 町田トシコ ー撫順よりー
5. 21 吾国最初の回教寺院 建設に教徒の献

- 身 タートル学校と合一し 更に弘教に邁進!
1935. 5. 21 満洲の皇軍傷病兵の 慰問に渡満 福井本派日校代表 五百通の慰問状を預り
5. 21 満洲特産工業会社創立 愛善会金井氏の研鑽に基き
5. 21 オーソリチーをもった 宗教運動が望ましい 笠木良明氏談 思想対策のない満洲
5. 22 満洲より(九) 町田トシコ - 新京にて
5. 23 東洋人と科学、哲学(一) ラス・ビハリ・ボース
5. 23 満洲より(十) 町田トシコ - 奉天北陵参拝-
5. 24 東洋人と科学、哲学(二) ラス・ビハリ・ボース
5. 24 日・印・支三国仏教徒の 国際親善の集ひ 外来の諸名僧知識を 仏青、仏連等が歓迎 六月一日、電通開館で
5. 24 印度の二学僧 初の講演 - 立正大学で-
5. 24 満洲より(十一) 町田トシコ 捨子院とエロ仏
5. 25 東洋人と科学、哲学(三) ラス・ビハリ・ボース
5. 25 ナーラダ氏の講演会場 感激の一駒 “日本の仏教学界に真の 人格者がゐない”と 通訳木村氏の通棒
5. 25 回教国南洋 回教の伝来・イマムの權威 交易には度外視できぬ勢力 元大阪外語教授 瀬川亀氏談
5. 26 東洋人と科学、哲学(四) ラス・ビハリ・ボース
5. 26 印度国民運動の首領 D. Nシン氏 夫妻来朝
5. 28 東洋人と科学、哲学(五) ラス・ビハリ・ボース
5. 28 仏舎利が取り持つ 日・暹・米の交歓 シャム皇帝より賜る 仏骨奉迎に 本派増山顕珠氏出発
5. 28 シャム少年団が 像を進上 日本少年団に
5. 28 天台留学の 喇嘛僧ら けふ寂山着
5. 29 東洋人と科学、哲学(六) ラス・ビハリ・ボース
5. 29 トルコの新宗教法令- 儀式外の法服着用は法度! 愈よ適用・その功罪注目さる
5. 30 東洋人と科学、哲学(七) ラス・ビハリ・ボース
5. 30 印度のシン氏 を囲む茶話会 京都日印教会が
5. 30 日華仏研大阪の 渡華送別会
5. 31 真実に法を求める 出家志望者を募る
- 中華・嶺東仏学院の 研究内容一斑
6. 1 東洋人と科学、哲学(八) ラス・ビハリ・ボース
6. 1 朝鮮仏教復興の具体策 今後、継続研究会で樹立 第一回懇談会で大綱決る
6. 4 索倫路の 愛善戦線 画期的成功
6. 4 全鮮主席布教使会並に 刑務教誨主任会 本派朝鮮開教教務所で開催
6. 4 印・支の握手までとりもち 三国仏教親善の契り 劇的シーンを添へて 感激に湧きかへる 国際交歓 三国提携を強調 日本と支那とは 唇齒輔車の間柄
6. 5 中日密教研究会が 愈よ日本側の陣容統制 「平和塔」建設への準備工作に 今月中旬、東京で全体会議
6. 5 支那留學生の 学寮建設 高野山東京別院内に
6. 6 印度の仏教復興策 錫倫の仏教学者ラフラ氏の主張 日本仏教こそは 印度へ弘教の全条件を具備 今後の仏教の宣伝には 特有の強調が肝要 印度への伝道には 純然たる布教使と 農工業指導者が必要
6. 7 熱河省で未曾有の 大宗教会議を開く グロ・曼茶羅を携へ 大派・野間氏帰る
6. 7 名所見物以上に、融和 親善の実を挙ぐ 満鮮就学旅行を終へて 平安女学院 早川喜二郎氏談
6. 8 台湾未曾有の人気 総督府のお役人が 下足番 お茶子から大人袋 すわらじ劇団物語
6. 9 満洲国内と北鮮に 未曾有の大教線 合せて十三ヶ所の出張所設置 西本願寺の計画決定
6. 11 セイロンのナラ グ比丘を迎へて 藤田義亮
6. 12 熱河赤峰より(上) 北条月照 = 開教懺悔=
6. 13 熱河赤峰より(中) 北条月照 = 開教懺悔=
6. 13 訪華日誌(1) 禿氏裕祥
6. 14 マハトマ・ガンジーの 守勢抵抗(上) 在東京 ソホン・シン
6. 14 訪華日誌(2) 禿氏裕祥
6. 14 世界仏教徒の 結合統一を強調 ナハラダ比丘の熱論
6. 14 回教主 マホメットの 降誕祭
6. 14 熱河赤峰より(下) 北条月照 = 開教懺悔=
6. 15 マハトマ・ガンジーの 守勢抵抗(下) 在東京 ソホン・シン
6. 16 悲壮な朝鮮青年 出家の旅立 法衣姿を郷人に排斥され 再び内地で学業に

- 志す
1935. 6. 19 木辺派法主の 樺太北海巡教
6. 19 愛善運動の 仏領印度支那進出
6. 20 満洲国境警備の 皇軍を頼む 本派の新計画
6. 21 訪華日誌(3) 禿氏裕祥
6. 22 嗤ふべき錯誤 出過ぎた全日本仏青連盟 満洲国への仏教復興宣言
6. 22 印度人は果たしてその 自由を取返し得るか(上) 在東京 印度志士 ソホン・シン
6. 23 印度人は果たしてその 自由を取返し得るか(中) 在東京 印度志士 ソホン・シン
6. 23 印度革命 殉難者の 慰霊祭 今秋増上寺で
6. 23 今度はジャバから 日本仏教輸入の交渉 世界の日本研究の波に うまく乗った日本仏教 西本願寺に珍客来訪
6. 25 印度人は果たしてその 自由を取返し得るか(下) 在東京 印度志士 ソホン・シン
6. 25 中華を歴訪して 禿氏教授帰朝
6. 25 大派宗議会(第十二日) 屯田僧解散の 真相を掲げて 老野生(無所属) 議員起つ 悲壮な面持ちで 屯田僧の実情を披露
6. 26 訪華日誌(4) 禿氏裕祥
6. 26 熱気の奔騰、百二十度! 画筆進まず、この苦難 野菜の私底に天然痘の流行 涅槃像完成の野生司画伯の訴へ
6. 27 満洲国に四十日間 仏の子慰問の旅 福井仏教日校代表の 細江道子さんら 帰る
6. 28 訪華日誌(5) 禿氏裕祥
6. 29 超人種超宗教的に 日・暹・米三国を 釈尊仏骨で結ぶ 仏骨奉安の本派 増山総長帰朝す
6. 30 訪華旅行を終りて 禿氏裕祥
6. 30 日・支関係学生一致で 日華密教青年会創立 けふ東京高野別院で発会
7. 2 聊か熱を失った 朝鮮仏教復興懇談会 形式的会談に終る
7. 3 日支親善は密教から 日華密教青年会 華々しく発会
7. 5 満洲の宗教を語る(一) 多摩川労働 移民訓練所長 高木武三郎
7. 6 満洲の宗教を語る(二) 多摩川労働 移民訓練所長 高木武三郎
7. 6 日華仏教研究会 支那旅行記 吉祥真雄
7. 6 朝鮮神道十三派教師が 神道連盟を組織 心田開発運動に邁進
7. 7 満洲の宗教を語る(三) 多摩川労働 移民訓練所長 高木武三郎
7. 9 満洲の宗教を語る(四) 多摩川労働 移民訓練所長 高木武三郎
7. 9 清浦伯を会長に 東亜密教協会発動
7. 10 大谷派鮮人教化の画期的進展 盛んな 鮮人僧俗大会「報恩日」の設定、婦人会結 成、勤行作法統一を申合す
7. 11 各団体の集まり 鄭孝胥氏も講師に 満鮮各地に開設の一灯園の夏期大学
7. 11 一切の陣容整った 日華仏教学界 けふ電通開館で発会
7. 12 日華仏教研究会 支那旅行記(承前) 吉祥真雄 一戒厳令下の北平一
7. 13 日華仏教研究会 支那旅行記(承前) 吉祥真雄
7. 14 諸民族に劣ることなき 印度人の政治能力(上) ラス・ビハリ・ボース
7. 14 例のナーラダ長老から 日本の仏教徒へ抗議書 小乗仏教でふ、侮蔑的言辭を廃せと
7. 14 日華仏教学界 華々しく発会 規約、役員等決定し 愈よ本格的事業開始
7. 16 諸民族に劣ることなき 印度人の政治能力(下) ラス・ビハリ・ボース
7. 16 アジア問題を中心に 皇道宣布に邁進 愈よ本来の使命に向ふ 昭和神聖会の今後
7. 16 『印度仏跡を 観る』を読む 福田正夫
7. 17 回教芸術の宣伝等(一) 駒大教授 大久保幸次
7. 17 南洋の愛善 運動躍進
7. 18 回教芸術の宣伝等(二) 駒大教授 大久保幸次
7. 18 印度と世界平和(上) ソホン・シン
7. 18 日暹親善朗話 同地愛善会本部に敷地 献納 シャム式の第一回館を建築
7. 19 回教芸術の宣伝等(三) 駒大教授 大久保幸次
7. 19 印度と世界平和(下) ソホン・シン
7. 19 盟邦満洲国の仏教 復興を促す進言書 謝大使と会見・進達 十七日仏青から
7. 20 回教芸術の宣伝等(四) 駒大教授 大久保幸次
7. 20 日宗が管長代理を派し 支那の教線視察 柴田一能氏八月下旬出発
7. 21 東亜密教協会の 会長を清浦伯固辞 二次交渉に委員等腐心
7. 21 印度教徒の反対運動で 仏陀伽耶管理 法案遂に撤回 両教徒示談で追って解決を理由に ワリアシンハ氏の報告 聖地買収も 結局立ち消えか? 実地調査の結果は 以外! 期待に反すと
7. 23 セイロンにおける マラリア猖獗の惨! 死者十万を突破す
7. 24 朝鮮ニュース
7. 26 半島空前と云はれる 朝鮮刑務教誨師

- 異動 首藤氏の退職に伴ひ
1935. 7. 27 長安青龍寺問題復活 支那僧範成法師により 解決への鍵、古碑発見 更に一大論戦展開か
7. 27 支那仏教は日本仏教に 何も求めて居らぬ 伝へたい三勇士の遺跡 大西良慶氏婦朝談
7. 31 蒙古・西藏の天地に永住 東亜仏教連盟の聖業 滿蒙三年、入蔵準備を急ぐ 谷大寺本教授の同志加藤氏
8. 1 昭和十年訪華団批判(上) - 禿氏・林・大西諸羅漢に呈す - 藤井草宣
8. 2 満洲農業移民問題 = 緑陰漫語 = 杉山元治郎
8. 2 昭和十年訪華団批判(下) - 禿氏・林・大西諸羅漢に呈す - 藤井草宣
8. 3 嗚呼ガンジ - 猶健在也 井上右近
8. 3 ルンビニー復興保存に ネパール王の燦たる業績
8. 3 京都女専「講演と音楽」の 巡礼日記 [1] 吾国榮譽の尊称を贈れ…と ワアリンハ氏から切望
8. 4 “七十余年振りて友を 印度に得”と喜ぶ 律宗管長北川智海氏 印度僧ラフラ氏談
8. 4 京都女専「講演と音楽」の 巡礼日記 [2]
8. 6 南洋開教区独立と 本派開教監督区の統制法規発令さる
8. 6 京都女専「講演と音楽」の 巡礼日記 [3]
8. 7 エチオピア基・回教、国難来て 皇帝に融和協力を宣誓 伊・エ紛争で宗教界緊張 コプト派を国教とする 唯一の国エチオピア エ国の宗教事情を語る 駒大教授 大久保幸次氏
8. 7 京都女専「講演と音楽」の 巡礼日記 [4]
8. 8 満洲国開催を決定づけた 一部報道に当惑 汎太仏青次期開催地問題で 大村理事長語る
8. 9 訪華団批判を讀みて(上) 井上隆森
8. 9 京都女専「講演と音楽」の 巡礼日記 [5]
8. 10 訪華団批判を讀みて(中) 井上隆森
8. 10 大派満洲拓講の 伊藤主事 京都駐在に任命
8. 10 京都女専「講演と音楽」の 巡礼日記 [6]
8. 11 訪華団批判を讀みて(下) 井上隆森
8. 11 欧州政局と回教復興 トルコ国新興の氣勢に 意気を復活の回教徒 クルハンガリー僧正を訪ふ
8. 11 極東最初の試み 聖書コーラン刊行 注目さるる回教徒と 日本民族の精神的接近
8. 13 亜細亞民族發展の為に 左に聖書右に劍の絶えざる努力
回教の回復はアジアに於て期待
クルバングリ一僧正は語る(承前)
8. 13 王道を説いて倦まぬ 鄭前総理の熱誠
=我親のみを親とせず= 天香さんは語る(A) 満洲土産話
8. 15 三派鼎立の在日回教徒 各々の反目注目さる 三者各様の言分を聞く
8. 15 「急がぬ王道」 一日を生き延びる為 住民の馬賊化 天香さんは語る(B) 満洲土産話
8. 16 實際生活には役立つため 上品な王道学 心から折れる方法を考慮 天香さんは語る(完) 満洲土産話
8. 16 満洲国人に伸びる神道 渤海国から来た神道装束 満洲国人は軽侮したがる 現実的な教義は理解し易い 満鮮視察を終へて千家尊建氏は語る
8. 16 ジャワへ贈る仏教は 真宗がよからう アピンハ氏のジャワ談
8. 17 朝鮮仏教会の 設立認可ならず 鮮僧、転宗して出直す
8. 17 笑はせる満洲の… 脱税いろいろ 一灯園実業座談会から
8. 17 更に新布教 所を開設 大派富城開教使 ダバオに赴任
8. 17 この現状を何と観る? 日本仏教徒による ラマ教の改革指導こそ 内蒙救済の急務 善隣協会野副金次郎氏談
8. 18 輝く! 日宗の満洲開教 今秋、初の管長親教に当り 満洲皇帝に宗書捧呈 各地に一大布教陣展開
8. 18 アフリカ救世軍 結婚の司式権獲得
8. 20 ゴダード翁の 伝道年報 幽境に修道の礎を置く
8. 20 野山大学生の満鮮伝道 一来二十四日出発一
8. 21 京城よさらば! 京都女専「巡礼日記」補遺
8. 21 十月八日 神保管長親修で 日宗満洲開教司監部の開堂式と国樹会 ◇全滿布教師大会も開く◇
8. 22 今春、訪日、西本に参詣した 活仏・阿氏非難さる 進歩派なるが故にか?
8. 22 民心より官心作興だ 朝鮮の変化が目につく 五島瑞巖氏の土産話
8. 23 朝鮮よさらば! (上) 京都女専「巡礼日記」補遺
8. 24 朝鮮よさらば! (下) 京都女専「巡礼日記」補遺
8. 24 班禪喇嘛が 西藏に帰る? 達頼急死して
8. 27 全米基督教徒に漲る エチオピア擁護運動 急先鋒はプレスビテリアン
8. 29 班禪喇嘛の帰蔵問題を繞る 支那の勢

- 力挽回るか 親支ラマと支那側の猛
運動 善隣協会村田孜郎氏談
1935. 8. 29 支那仏教余聞
8. 31 サイパン東本願寺に 今秋・忠魂碑を
建立 東郷中条等の発起で
8. 31 要改善地区の 満洲移民問題や 女子
青年の研究会など 近畿融和研究会
9. 1 満洲瞥見概録 大村桂嶺
9. 1 光瑞氏の計画、通遼の 満洲農場不可
能か 鮮農たちの反対で
9. 1 支那の張煦氏 歓迎座談会 日華仏教
学会で
9. 1 満洲国開催は 時期尚早が有力 汎太
仏青次期開催地で 帰朝した大村理事
長語る
9. 3 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 金剛山
神溪寺
9. 3 満洲国とエチオピア 千家尊建
9. 3 汎太仏青は何処へ行く? 大村理事長
視察談 革新の気漲る満洲仏教 妻帯
青年僧の出現 国家観念の著しい強調
汎太仏青次回開催は 満人一致の要
望 だが、満洲の現在では これが決
定は不可能
9. 3 基教満洲伝道会 新たに医療運動計画
近く具体化せん
9. 4 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 毘盧峰
越え
9. 5 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 摩訶衍
と表訓寺
9. 5 エチオピアの宗教 一 酒肉を断ちて
国難克服を神に祈る その宗教は何?
9. 6 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 金剛山
長安寺
9. 6 エチオピアの宗教 二 アフリカ最初
の基教信奉 その期間千六百年 エ国
特有のキリスト教
9. 7 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 法起菩
薩の国土
9. 7 エチオピアの宗教 三 如何なる迫害
攻撃にも よく堪へて来た 本来のエ
国陣には転宗はない
9. 8 エチオピアの宗教 四 僧侶は徒食し
尊敬を受ける 而も兵役は免除
9. 10 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 平壤永
明寺
9. 10 満洲国都新京に開く 日宗開教陣の蘭
菊美 皇帝拜謁、法要、講演等々 管
長親教の万般決る
9. 10 エチオピアの宗教 五 裁判官を牛耳
る僧侶 全信者の永い断食行
9. 11 エチオピア旅行の思出話 (1) 京大
助教授 小牧実繁
9. 11 エチオピアの宗教 六 国内統一と重
荷外交 裏面に動く国教
9. 12 エチオピア旅行の思出話 (2) 京大
助教授 小牧実繁
9. 13 エチオピア旅行の思出話 (3) 京大
助教授 小牧実繁
9. 13 半島の総鎮守 朝鮮神宮鎮座十周年
盛大な奉祝大祭挙行
9. 14 エチオピア旅行の思出話 (4) 京大
助教授 小牧実繁
9. 14 仏教に特別保護法なきや 西本・満洲
国と交渉 新京別院収益税で
9. 14 現皇帝は教育の 徹底に御邁進 エチ
オピアの教育
9. 15 エチオピア旅行の思出話 (5) 京大
助教授 小牧実繁
9. 15 南方仏教の聖跡並に 産業映画作製を
計画 十二万円の巨費で お馴染の熊
谷国造氏が
9. 15 南洋回教徒一億人の コーランを大阪
で 為替関係で印刷所を移す
9. 17 エチオピア旅行の思出話 (6) 京大
助教授 小牧実繁
9. 18 朝鮮天主教が… 開教百五十周年 十
月中旬平壤で祝典
9. 18 日華仏教研究会 訪華報告講演会 あ
ず華頂会館で
9. 19 汎太仏青次回開催地で 大村理事長シャ
ム公使と会見 早速シャム本国に照会
公使は極力自国開催を説く
9. 19 満洲天理中学 留学予備科開校 申込
定員の三倍を突破 既に大拡張の計画
9. 20 仏教の世界伝道 (一) は日本の責任
である 在京都ヘルマン・アビンハ
ヒンツォー・仏教両教徒の 共同官吏に
帰着す 彼等の提案を仏教徒遂に承認
聖地仏陀伽耶問題解決
9. 20 台湾始政四十年記念 全島社会事業大
会 十一月十二、三両日台北で
9. 20 吉祥真雄氏の 支那旅行談 京都専門
で
9. 21 仏教の世界伝道 (二) は日本の責任
である 在京都ヘルマン・アビンハ
9. 21 日宗神保管長の 満洲皇帝拜謁 愈々
確定す
9. 21 今秋・台北に開催の 全島仏教徒大会
一千名の出席者 着々準備を進む
9. 21 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 新羅の
旧都 栢栗寺
9. 22 仏教の世界伝道 (三) は日本の責任
である 在京都ヘルマン・アビンハ
9. 24 仏教の世界伝道 (四) は日本の責任
である 在京都ヘルマン・アビンハ
9. 24 世界危機に関する座談会 7 満洲事変
に於る日本と 伊太利のエ国攻略
9. 24 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 芬皇寺
の古塔
9. 26 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 仏国寺
の一夜

1935. 9. 27 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 慶州博物館にて
9. 29 日宗神保管長 満洲親教に出発 東京駅頭盛んな見送り 満洲国皇帝拝謁変更
9. 29 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 百済の旧都
10. 1 世界危機に関する座談会12 回々教のエ国に於ける地位
10. 1 朝鮮の仏跡を訪ねて 岩見護 扶蘇山阜崗寺
10. 1 西本、新様式の 海外門徒肩衣決る名も「式章」と改め
10. 1 世界危機に関する座談会13 回教徒としてエ国を 救援する事は無からう
10. 2 大村・柴田氏の 満支視察談 仏青・日華学会で
10. 3 世界危機に関する座談会14 教義の展開がないマホメット教
10. 3 朝鮮同胞五十名が 先亡追悼の法会 土居、菊入両氏の肝煎で 始政二十五年の一日に
10. 4 世界危機に関する座談会15 エチオピアの実力 まことにお話にならぬ貧弱さ
10. 4 帝国の南方 政策拝聴 近頃有意義の五宗派懇談会
10. 4 鮮人子供会 けふ、宝樹寺で
10. 5 支那仏教界の危機来る(上) -大醒法師決起す- 藤井草宣-
10. 6 支那仏教界の危機来る(下) -大醒法師決起す- 藤井草宣-
10. 8 大村・柴田氏等の 満・支視察談 座談会の賑ひ
10. 9 クルバンガリ氏 初の満洲行 王道治下の 回教徒視察
10. 9 朝鮮の仏跡を訪ねて 石見護 開城の半日
10. 10 東亞南方諸国代表を招き 民族親善交歓の集ひ 専修大学南洋研究会が 躍進日本の南方政策に貢献
10. 10 我国義侠の士から エ国へ激励打電 “神は正義に幸すべし 堅忍不拔奮闘されよ”
10. 10 朝鮮の仏跡を訪ねて 石見護 永遠の童女
10. 11 イエ回戦に就き 人類同胞の霊に慰ふ 尾家天益
10. 11 サハイ氏慰安会
10. 12 世界危機に関する座談会21 英吉利の印度征服と 伊太利のエ国侵略
10. 12 印度独立の 犠牲者慰霊祭 ポース頭山翁等発起で 二十日、増上寺で執行
10. 13 世界危機に関する座談会22 エ国が苦しい以上に 伊はもっと苦しんでゐる
10. 15 伊、エ問題に於る 有色民族の立場 (上) ラス・ビハリ・ボース
10. 15 世界危機に関する座談会23 日本の満洲活動 は国民的活動として当然
10. 15 鎮座十周年記念祭 朝鮮神宮の盛儀 今日、閑院・梨本両宮殿下御参拜
10. 15 全群島を圍繞する 南洋の愛善運動 ジャボール島では二千名の 島民が運動に参加
10. 16 伊、エ問題に於る 有色民族の立場 (下) ラス・ビハリ・ボース
10. 16 大連、旅順に 布教して 田村澄善
10. 17 世界危機に関する座談会25 伊太利のエ国侵入には 正しい名分がない
10. 17 東洋平和の建設と 民族独立の雄叫び 人類愛に充ちた 東亞南方民族交歓の集ひ
10. 17 南洋に女学 校を創設 浄土宗が委託経営
10. 17 神保日蓮宗管長 満洲親教の旅から(1)
10. 19 内鮮融和と仏教(上) (朝鮮施政二十五年に際して) 東亞仏教協和会副会長 李元錫
10. 19 世界危機に関する座談会26 座談会掉尾の論戦 (日本と伊太利の立場に就いて)
10. 19 神保日蓮宗管長 満洲親教の旅から(2)
10. 20 内鮮融和と仏教(中) (朝鮮施政二十五年に際して) 東亞仏教協和会副会長 李元錫
10. 22 内鮮融和と仏教(下) (朝鮮施政二十五年に際して) 東亞仏教協和会副会長 李元錫
10. 22 日宗台湾の 記念布教 始政四十年で
10. 24 印度独立運動 犠牲者慰霊祭 京都でも十一月中旬
10. 24 台博と相呼応して 西本願寺法要 全プログラム決定 未曾有の盛況を予想
10. 24 五族協和を力説 満洲親化の旅を終へ 神保日宗管長車中談
10. 24 パーリ大般涅槃經に就いて 長井真琴 (東京帝大教授)
10. 26 タゴールの靈魂觀 島影盟
10. 26 各部会が堂々たる大会 重要諸案一斉に協議 全国社会事業大会第二日 日滿職業照会連絡で 議論沸騰 第三部会
10. 30 関東庁より 土地私下げ 光瑞発願の大連高女敷地
10. 31 皇帝御下賜の一大寺域に 日僧発願の満洲靈廟 百万円の予算で工事進む 日滿蒙の文化の交流に資す
10. 31 満洲靈廟建立の 趣旨宣布に來朝 日滿蒙僧侶三十余名
10. 31 大連の聖徳会に 市長より感謝状 発

- 願者江頭氏の感激
 1935. 10. 31 神保日宗管長の一行の 新京と哈爾濱行
11. 1 遼陽より
 11. 3 床し！鮮人同胞の集ひ 尽忠報国を誓ふ 仏教報国敬信会発会式
 11. 3 江藤氏南洋へ 浄宗の…女学校創設で
 11. 5 印度の現状と アタルの死（上） 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 11. 6 印度の現状と アタルの死（中） 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 11. 6 汎太仏青次期 開催地をシヤムへ 外務省を通じて 全連更に交渉開始
 11. 6 台湾全島未 曾有の盛儀 尊由氏を迎えて 西本別院の法要
 11. 7 印度の現状と アタルの死（下） 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 11. 7 伝道百五十年を迎へた 朝鮮カトリックの現勢 心田開発の一機関
 11. 8 印度独立志士 犠牲者慰霊祭 十七日五後七時から 洛東知恩院大殿で
 11. 9 世界宗教大会を 満洲で開催せよ 来朝する日満蒙僧の準備で 先発滞在中の満洲僧の気炎
 11. 12 全島の代表者… 一千余名参集 各種大会中の異色 台湾仏教大会開かる
 11. 13 島人・邦人の二機関創設 浄宗の南洋女学校 隣接の教会所有地 新たに五千坪購入
 11. 13 日満支仏教徒の和合に 華音でお経を習ふ =満洲僧を聘し震東居士林が=セイロンの 安国論英訳 …若き二学徒…
 11. 14 未開人種を滅亡する 西洋文明の恩沢？（一） ラス・ビハリ・ボース
 11. 14 問題の朝鮮… 仏教教会所が 次第に増加 大阪府警察当局が 取締の弁法を設ける
 11. 14 満洲国の成育と “日本神道” 菅沼啓道会長 ◇…の意見書
 11. 14 神保管長満洲親教記念に 日僧、感激の献金一万円！ 日頃の蓄財を布教資金へ 本山妙国寺貫首長亮静氏の篤行
 11. 15 未開人種を滅亡する 西洋文明の恩沢？（二） ラス・ビハリ・ボース
 11. 15 内地僧侶として稀有の 鮮人葬儀を執行 愛児の死に起ち上つた 大派安武氏の悲願
 11. 16 未開人種を滅亡する 西洋文明の恩沢？（三） ラス・ビハリ・ボース
 11. 16 裏南洋の テニアンに教線拡大 西本更に力を注ぐ
 11. 17 未開人種を滅亡する 西洋文明の恩沢？（四） ラス・ビハリ・ボース
 11. 17 けふ、秋酣の知恩院で 印度独立犠牲者慰霊祭 感激の在留印度人
11. 19 印度独立旗も高く 華頂大殿は感激に渦巻く 感無量！ボース氏の祭文 犠牲志士慰霊祭の盛況
 11. 19 柴田一能氏が会長となり 日華仏教会愈よ実働！ 会則役員等の陣容成り 日語学院経営初め其他事業開始
 11. 19 中国仏教界の 復興に乗り出す 味得、体得の仏法を堅持し 愈よ談玄法師等帰国
 11. 20 印度独立運動犠牲志士 慰霊祭を終りて
 11. 22 満洲国僧侶の法式と 黄葉言行法式を比較 震東居士林の珍しい試み
 11. 26 転換期に臨める 台湾仏教の現状（一） 藤井草宣
 11. 27 転換期に臨める 台湾仏教の現状（二） 藤井草宣
 11. 27 朝鮮半島基督教者の 神社への認識是正 神道との混同誤解に依る 神社不参拝の原因免除
 11. 27 冀東防共自治委員長 殷さんは仏立信者 信仰も支那人ばなれ
 11. 28 転換期に臨める 台湾仏教の現状（三） 藤井草宣
 11. 28 日本僧邵元禪師の 撰井書の碑を発掘 山東省濟南靈巖寺で
 11. 29 陶庵公と湖南先生（1） 安藤徳器
 11. 29 満洲国に於る 基督教迫害へ同情 全日基督教代表を派遣
 11. 30 陶庵公と湖南先生（2） 安藤徳器
 11. 30 有力後援財団を組織し 民族布教四海婦妙へ邁進 日宗海外布教に新動力！
 11. 30 邵元の碑の発見で… 松本博士助かる
 12. 1 陶庵公と湖南先生（3） 安藤徳器
 12. 1 日蓮門下各派を一丸とする 海外布教財団の新設 僧俗懇談会で=実現に決す
 12. 3 エチオピア問題と 有色人種の運命 ラス・ビハリ・ボース
 12. 3 陶庵公と湖南先生（4） 安藤徳器
 12. 3 伝戒幫助に赴いた 中華の仏教二法師が 奇怪！台湾で獄死！ 中国仏教界で問題視
 12. 4 陶庵公と湖南先生（5） 安藤徳器
 12. 5 陶庵公と湖南先生（6） 安藤徳器
 12. 6 陶庵公と湖南先生（7） 安藤徳器
 12. 6 道社・府社・邑社制設置 京城・龍頭両神社を 新に国幣社に昇格か 朝鮮総督府の神社法規整備
 12. 7 印度の眞の姿は？ ラス・ビハリ・ボース
 12. 7 陶庵公と湖南先生（8） 安藤徳器
 12. 7 十年間空文化の一 開教地布教法改正 奥村部長の映画伝道案等 曹洞宗会への提出議案（完）
 12. 8 陶庵公と湖南先生（9） 安藤徳器

1935. 12. 10 陶庵公と湖南先生 (10) 安藤徳器
 12. 10 朝鮮施政二十五年記念 政・教界人の懇談 “内鮮融和は仏教から”
 12. 10 江藤教学部長 南洋行 十二日横浜解纜
 12. 10 日本仏教の 海外普及本 第一輯「日蓮読本」
 12. 10 北満のカラーボタン ハルビン情緒 経谷孝道
 12. 10 印度寺院の紛乱 在東京ソホン・シン
 12. 10 印度に釈尊の壁画を描く 野生司画伯 後援会 オツタマ比丘と 伊藤次郎左衛門氏
 12. 11 陶庵公と湖南先生 (11) 安藤徳器
 12. 12 陶庵公と湖南先生 (12) 安藤徳器
 12. 13 陶庵公と湖南先生 (13) 安藤徳器
 12. 13 朝鮮施政二十五 年記念講演会
 12. 14 陶庵公と湖南先生 (14) 安藤徳器
 12. 14 大谷光瑞氏 南洋初等巡回
 12. 15 陶庵公と湖南先生 (15) 安藤徳器
 12. 17 日華仏教上の一奇譚 (上) 広東にて 藤井草宣
 12. 17 陶庵公と湖南先生 (16) 安藤徳器
 12. 18 日華仏教上の一奇譚 (中) 広東にて 藤井草宣
 12. 18 陶庵公と湖南先生 (17) 安藤徳器
 12. 19 日華仏教奇譚 (下) 広東にて 藤井草宣
 12. 19 大谷宝潤氏の 満洲視察談 東京大谷派社事協会で
 12. 20 開教地布教法 特別委員に付託
 12. 20 汎太仏青第三回大会に 暹羅、国庫補助を決す 事実上、開催地問題解決
 12. 21 故伊藤祐晃師の『日露従軍日記』(一) 白崎巖成
 12. 21 中岡良一 満洲を追はる 妄想育苗に入る
 12. 22 回教徒の… “ラマザンの月” 三十日の断食、廿六日で満行 - 厳格な特異の行事-
 12. 22 故伊藤祐晃師の『日露従軍日記』(二) 白崎巖成
 12. 24 故伊藤祐晃師の『日露従軍日記』(三) 白崎巖成
 12. 27 故伊藤祐晃師の『日露従軍日記』(四) 白崎巖成
 12. 28 “満洲は朗かです” 堀本派満洲開教総長談
 12. 28 江藤浄宗教学部長帰る 南洋調査の旅から
 12. 28 マニラに開催の 万国カトリック聖体大会へ 日本出席準備委員会
 1936. 1. 1 樺太風景 出雲路無味
 1. 8 日蓮仏教親善の集ひ 来朝のルアン内相を 全日本仏青等で歓迎
 1. 9 サイパン島の勝地に浄宗南洋寺建立
 江藤教学部長の報告に感激して… ボン!と投げ出す三千円
 1. 9 満洲出征皇軍に 不断的慰問運動 西本山立六中等学生が 二月を最初に開始
 1. 11 汎太仏青次期開催を繞り 見物の日退問のかけ引き 吾か持参金付で決着か? 乗気の外務省等焦燥
 1. 12 大派宗務員が抛金 在満皇軍に慰問袋 全国各教区にも指令か
 1. 12 日蓮親善に 国訳一切経を シャムに寄贈 大東出版社の岩野真雄氏
 1. 12 暹羅内相の 敬迎会中止
 1. 14 福州に友を弔ふ 藤井草宣
 1. 14 鎮南浦より 加藤新平
 1. 16 黄檗行前記 (上) 藤井草宣
 1. 17 黄檗行前記 (中) 藤井草宣
 1. 17 極東トルコ民族の回教運動 依然、対立意識濃厚に 教界内部の拮抗 文化協会対東京回教団
 1. 18 黄檗行前記 (下) 藤井草宣
 1. 19 北満克山からS・O・S 酷寒・病魔・匪賊と戦ふ 在満同胞を支援せよ 本紙を通じて国民に訴ふ 血で綴られたこの書信
 1. 19 日華兩國交換 講座開催の計画 日華仏教研究会が
 1. 23 エチオピアは疲れた 駐英公使、英国国民に訴ふ
 1. 24 朝鮮普天教代表者が 仏立講へ入講申込 本部では快諾に躊躇
 1. 25 信者三億六百万 印度方面への超飛躍 (上) クルバンガリー
 1. 26 将来の中心地は? 伊・エ戦争の結果 危ぶまれる埃及説 (中) クルバンガリー
 1. 26 神戸で印度 志士追悼会
 1. 28 日本と回教との精神的 融和への歩み 事実を知る世界回教徒 (下) クルバンガリー
 1. 30 動く回教圏 (一) - 現代的更生を繞って- 小林元
 1. 31 動く回教圏 (二) - 現代的更生を繞って- 小林元
 1. 31 満洲農村の打開に 奉天省の実験村 一灯園の托鉢下座の 精神を加味して
 2. 1 動く回教圏 (三) - 現代的更生を繞って- 小林元
 2. 2 動く回教圏 (四) - 現代的更生を繞って- 小林元
 2. 4 動く回教圏 (五) - 現代的更生を繞って- 小林元
 2. 5 日本文化を会得せしめ 日蓮親善の強化へ 名古屋の日蓮協会の招聘で 近く来朝のシャム留学生
 2. 7 動く回教圏 (六) - 現代的更生を繞って-

- てー 小林元
1936. 2. 8 動く回教圏(七) —現代の更生を繞ってー 小林元
2. 9 動く回教圏(八) —現代の更生を繞ってー 小林元
2. 11 “ラマ僧の信仰と 統治確認さる” 石橋岱城氏婦朝談
2. 13 資金調達に絵の行商 涙をそそる苦難の歩み 印度新仏寺壁画 遂に仏伝のみに止む 野生司画伯より断念の報
2. 13 満洲霊廟、日・月両光殿 愈よ六月迄に竣工 日満兩國僧侶を養成 立正卒業生も応募
2. 14 わが北満移民の “心の統制” 如何? 大派東京宗務の新テーマ あす移民団長等と懇談
2. 14 喇嘛の指導改善策一擲 遂に妥協協調策を採用 行く処迄行ったラマ僧の墮落 重要視するに足らぬと断定
2. 14 更に百霊廟に診療所 徳王府に小学校を開設 内蒙の文化開発に 躍進する善隣協会
2. 15 宗団人に必要な 満蒙への認識 曹洞宗満蒙協会が 近く視察団を組織
2. 15 朝鮮西別院が 愈大本堂建築 女学校完成で門信徒が 先づ要求を持ち出す
2. 16 船中で覚えた 日本語で巧みな挨拶 シャムの親善留学使節 元気で名古屋入り
2. 18 印度の一梵語学者から 我が留学生の派遣を希望 先づ候補者の一人に 正大研究室の瀧照道君
2. 18 青島に東亜 禪林の開設
2. 19 海外に発つ人・帰った人 仏教・文化兩使節の話題 上海の基督教青年会が 日華学生親善開館建設 仏教徒は刺激されねばならぬ 仏教使節藤井草宣氏婦朝談
2. 19 北満移民は 前途有望 大派の招待会で 団長等 世評を訂正
2. 22 “吠陀”の世界的学者 ラッグ・ピール氏の横顔 末永駒大教授の談
2. 23 ラトビア僧引見記(上) 上海にて藤井草宣
2. 25 ラトビア僧引見記(中) 上海にて藤井草宣
2. 26 ラトビア僧引見記(下) 上海にて藤井草宣
2. 26 満洲国の開教方策 新京に開教本部設置
2. 27 智山宗会 満蒙の開教 方策その他各部長より説明 —第一日午後—
2. 28 満洲開教借入金で 俄然! 議事停滞 協賛権を無視した…と 幹事より善処を希望
2. 29 問題の智山満洲 開教費事後承諾は 果して協賛権無視か —過る宗会速記録から—
2. 29 智山宗会 満洲開教費借入金問題で 当局、議員側全く背理す 特選議員の斡旋も無効? 夜に入るも打開成らず
3. 1 満洲開教費問題 急転直下解決 非常時局に鑑みて 議員当局共に善処す 智山宗会
3. 3 神社人異色鑑 砲煙彈雨の中を潜った 日露役従軍通訳官 露国国立極東大学に留学 建部神社 大神正道宮司
3. 3 波乱の智山宗会閉づ 満洲開教法撤回問題の借入承諾案は 警告を發して承認
3. 4 神社人異色鑑 露兵三名を斬って 血糊の除れぬ愛刀 一時郷里では露探扱ひ 建部神社 大神正道宮司(B)
3. 6 教界に待望久しき 日満仏教協会愈よ誕生 大谷宝潤氏の畢生の大業 近く堂々名乗り出でん
3. 6 支那の天童山に “道元”の木像奉安 高祖の同情を偲んで 高階瑞仙氏の発願
3. 7 寄席風景よろしく 浄宗の鎌倉出張宗会 第五日から再び東京で 満洲開教問題で 三井議員質問の先陣 大した質疑もなく 鎌倉宗会早仕舞ひ
3. 7 岩井浄宗管長 満鮮親教
3. 8 独逸のユダヤ人 出家のためセイロンへ
3. 19 日本の警官に 見せたいエロ建築 あはよくばネパール入り 気まぐれな独り旅 印度仏跡巡礼 [天沼博士の通信]
3. 21 南洋初等の布教に 妍を競ふ先進二大宗派 片や浄土宗・片や大谷派 彼地への一段の認識が急務 躍進日本の海の生命線
3. 21 北満の戦死僧 柳本新君
3. 21 日満仏教協会 愈よ創立準備総会 廿三日、電通開館で
3. 24 彼岸の中日は— パハイ教徒の元日 アグネス・B・アレキサンダー
3. 24 日本へ速かに 宣戦布告せよ 北平新聞記者協会の決議
3. 25 日満仏教協会 四月早々に発会 創立準備会で協議
3. 27 新設の“日満仏協”と 各宗派の満洲開教問題 今後、相当の問題にならう あすの懇談会注目さる
3. 28 近代印度の名士 故シング氏の記念堂 世界各国の知己に 建設費の拠金を希望
3. 28 鮮人に多い モヒ患者 不良医者の影響にもよる

1936. 3. 29 京城龍谷高女の 新入生と卒業生
 3. 31 台中市仏教 連合会発会
 3. 31 日滿仏協会 創立準備 慎重を極む
 4. 1 蒙古から日本観光団 留学生等続々来朝 対蒙文化事業に躍進を示す 普隣協会の斡旋で
 4. 1 朝鮮禪宗の 本堂建立 グロ事件の主人公が申請
 4. 1 大醒法師の日本仏教視察記を読む(1) 石崎達二
 4. 2 南洋の今昔を語る(上) 小林信隆
 4. 2 大醒法師の日本仏教視察記を読む(2) 石崎達二
 4. 2 インチキ療法は 満洲が本場 福民仏教会長検挙さる
 4. 3 満洲国から 欣然・参加の申込み 世界大同仏教会の幹部が 全連(仏青)総会へ
 4. 3 半島人の 教育指導 簡易学校増設
 4. 3 慶州より
 4. 3 大醒法師の日本仏教視察記を読む(3) 石崎達二
 4. 5 大醒法師の日本仏教視察記を読む(4) 石崎達二
 4. 5 日滿仏教協会 愈よ十日創立総会
 4. 7 孔子廟参拝に 反対した基督教中学 遂に閉鎖を命ぜらる 満洲国の宗教対策の片鱗
 4. 7 木門仏立講の 第十六回講政会議 当初より緊張の色濃厚 満洲開道庁 設立案可決 予・決算も通過 -第二日-
 4. 7 南洋の今昔を語る(下) 小林信隆
 4. 8 反滿抗日のカ教布教使 二名捕はる
 4. 8 けふ台中州仏連発会式
 4. 9 聖雄ガンジー(上) 在京都 ウインバン・トマス
 4. 9 大派・神田氏が引率して 支那青年留学僧二名来朝 日華仏協で日英文を学び 谷大と正大で仏教研究
 4. 10 聖雄ガンジー(中) 在京都 ウインバン・トマス
 4. 11 聖雄ガンジー(下) 在京都 ウインバン・トマス
 4. 11 皇帝を僭称する 満洲国白羊教 幹部三名逮捕さる
 4. 12 日滿仏教協会の 発会創立総会盛ん 激励、鞭撻、期待等 祝辞オンパレード
 4. 12 京都日印協会 印度国民会 議に祝電
 4. 14 日滿仏協の人選に 浜田氏が反対 但し全連は笑殺
 4. 14 基督の出世地… パレスチナ危機 聖地基督教の弱勢に乗じ 回教の進出を見る
 4. 16 満洲国の治外法権撤 廃は在滿仏教界に 如何影響するか(上) 半谷範成
 4. 16 印度の自治は困難 植物学者ミッター氏に 印度の宗教情勢を聞く
 4. 17 満洲国の治外法権撤 廃は在滿仏教界に 如何影響するか(下) 半谷範成
 4. 17 中華青年 留学僧歓迎 日華仏教の集ひ
 4. 18 満洲の保健確立に 各地に体育館施設 北村直躬博士満洲医大へ
 4. 19 満洲に飛躍する 金光教の拡大 更に監理所を設置
 4. 22 “朝鮮の宗教 事情について” 西本より諮問
 4. 24 現今の世界に於る 東洋人の地位(一) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 4. 24 喇嘛教改革に対する満洲国蒙政部の方針 新巴爾虎左翼旗公署 酒井二郎氏
 4. 25 現今の世界に於る 東洋人の地位(二) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 4. 25 インド回教の有力者ア-ガ汗 回、印回教徒の融和を力説 但、目的達成は前途遙遠か
 4. 25 在留同胞に心の慰安 青年実業家がマニラに 独力で仏青運動
 4. 25 閩南布教所に日滿語学園 西本が開設
 4. 26 現今の世界に於る 東洋人の地位(三) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 4. 26 一足お先きに 基督教青年会館 卅万円で奉天に建設
 4. 26 蒋委員長通令 廟宇不許駐軍 中華の寺廟保護
 4. 26 パレスチナで 回教徒と衝突 実現を夢まれる ユダヤ人の祖国再建
 4. 28 グバオ・グラフ
 4. 28 キリスト教伝道戦線 飛躍への準備
 4. 28 “帰国後、仏青を 組織しますよ” 第六回仏青総会で 満洲国の二僧語る
 4. 28 現今の世界に於る 東洋人の地位(四) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 4. 29 班禅喇嘛の 入藏は絶望? -英国の陰謀政策で-
 4. 29 スリナガル市に 仏教寺院建立
 4. 29 在滿基督教開教使の ニュース・スパイ
 4. 29 新米親日の渦巻く 比島から観光団来朝 山内本派布教使を団長に マニラ仏青の日本紹介運動
 5. 1 現今の世界に於る 東洋人の地位(五) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 5. 2 現今の世界に於る 東洋人の地位(六) 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
 5. 2 猶太人対回教徒の紛争 益々拡大の模様 遂に全パレスチナに波及
 5. 3 全日本仏青から 二代日仏教使節派遣 汎太仏青次期開催地決定で 仏舍利奉迎以来の快事 親善弥増す シャム国へ
 5. 3 日蓮寺の秘仏 バンコックへ渡る 両

1936. 5. 3 国親善に拍車
 愈よ実働に入る 日滿仏教協会 大谷
 会長、中旬に渡滿
5. 5 東滿洲に築く 臨濟宗の基 入葉山江
 嶽寺の 盛大な入寺式
5. 6 禪僧の見た台湾 伊勢大廟遙拝所 設
 立の必要など 樓梧宝嶽氏帰る
5. 6 新京の曹洞 兩本山別院 建設委員会
 組織
5. 6 日滿仏協の 理事任命
5. 7 聖雄ガンジー健在！ 神秘の国ネパ
 ル入り 天沼博士の土産話
5. 7 大派朝鮮開教の功労者 栗田開教監督
 辞任 輪番、監督分置説再燃
5. 8 エ国潰ゆ
5. 8 印度文化会議
5. 8 聖徳太子の精神を 海外にまで拡充
 四天王寺が滿蒙會館を企画 近く陸軍、
 外務、拓務各省と交渉
5. 8 禪による日滿融和 軍部方面の支援を
 得て 東方会近く発会
5. 8 支那仏跡参 拜団帰る
5. 9 空の謎 電離層を探る 京大研究団一
 行 北滿国境へ出発
5. 9 石徑を縫ふ十一里 支那天台山参拜
 武装軍警に衛られて 大森亮順氏談
5. 10 内蒙に稀有の“白魔”の猛威 家畜
 は同類相食み 蒙族は餓死線上を彷徨
 “三十万民衆を救へ”と 善隣協会
 等救援に躍つ
5. 10 愈よ月末来朝の 蒙古留学生十名 二
 人の喇嘛僧がある！ 仏教大学へ入学
 か？
5. 10 聖地仏陀伽耶へ 聖塔建立を計画 全
 国居士へ檄！ 十三日京都で協議会
5. 10 事変以来初の 日支親善教育使節 け
 ふから富山に開催の 全国小学教員会
 へ出席
5. 10 朝鮮に輝く 白井氏の浄業
5. 12 印度に初めて生れた 仏教青年連盟
5. 12 滿洲人の崔居士 東本願寺で得度 信
 正院連枝にお弟子入り
5. 13 “中日仏教徒は相互に 紙上の言論に
 注意せよ” 無畏比丘が熱々の忠告
 柴田氏の觀察記問題となる
5. 13 教育統制遂に 台湾にまで延ぶ 淡水
 中学等、州移讓か 長老派の態度注目
5. 13 曹洞兩本山所有 基隆の土地名義を
 台北中学校へ移讓
5. 13 内鮮融和の障害 ◇…となる漢字(上)
 スギヤマ・ノブゾ
5. 14 朝鮮の特殊宗教事情に鑑み 留意すべ
 き点如何 本山当局の諮問に答申 西
 本朝鮮刑務教誨師会同
5. 14 内鮮融和の障害 ◇…となる漢字(中)
 スギヤマ・ノブゾ
5. 15 東洋人の文明と 西洋人の手(一)
 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
5. 15 日華仏教徒の親善は まづ生活様式の
 一致 仏徒より儒教に転向の 梁瀬溟
 氏は語る
5. 15 内鮮融和の障害 ◇…となる漢字(下)
 スギヤマ・ノブゾ
5. 15 シャム公使を招聘 仏都・長野を紹介
 善光寺の御開帳を機に
5. 16 日本仏教を視る(1) 沙門 大醒
5. 16 東洋人の文明と 西洋人の手(二)
 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
5. 17 日本仏教を視る(2) 沙門 大醒
5. 17 東洋人の文明と 西洋人の手(三)
 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
5. 19 日本仏教を視る(3) 沙門 大醒
5. 19 東洋人の文明と 西洋人の手(四)
 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
5. 19 岩井浄土宗管長 滿洲親教日程決まる
5. 20 東洋人の文明と 西洋人の手(五)
 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
5. 20 最悪の結果に至るも ダバオを確守せ
 せん 大派保木氏の近況
5. 20 日滿交歓会 Y M C A学生会員が
5. 21 日本仏教を視る(4) 沙門 大醒
5. 21 東洋人の文明と 西洋人の手(六)
 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
5. 22 日本仏教を視る(5) 沙門 大醒
5. 22 在滿将士のため 總持寺で大般若会
 護符一万枚を携行 今井総務が軍隊慰
 問
5. 22 新京別院建 設委員会 清水氏等も渡
 滿
5. 22 神社参拝に 不謹慎な言動 台湾本島
 人訓導 譴責処分に附する
5. 22 新京長春寺へ 本尊仏下附
5. 23 日本仏教を視る(6) 沙門 大醒
5. 23 國際文化親善の 佳話・相寄る魂 山
 田長政を担いで 日暹親善の共同工作
 第二世の指導機関設置と 日滿支親善
 に精進 婦人平和協会大会
5. 23 淡水中学の移讓 難関に達着 注目さ
 るる今後
5. 23 滿洲開教情報(1) 半谷範成
5. 23 日滿仏協会 初の理事会
5. 26 日本仏教を視る(8) 沙門 大醒
5. 26 孔子と音楽 —雅楽から— 川島静哉
5. 26 滿洲開教情報(2) 半谷範成
5. 26 内鮮融和充実へ 大師協会支部設置
 金隆昌氏が大阪に
5. 27 日本仏教を視る(9) 沙門 大醒
5. 27 滿洲開教情報(3) 半谷範成
5. 27 支那の視察談を聴く 日華仏教会へ
5. 28 日本仏教を視る(10) 沙門 大醒
5. 28 シャム国へ 古仏旅立つ 鎌倉中期の
 名作

1936. 5. 28 カルカッタ市に 開いたわが作品展
在印度 野生司香雲
5. 28 満洲開教情報 (4) 半谷範成
5. 29 日本仏教を視る(11) 沙門 大醒
5. 29 満洲開教情報 (5) 半谷範成
5. 30 日本仏教を視る(12) 沙門 大醒
5. 30 中国仏教会改組問題で 全中華仏教界
の混乱 断然漁夫の利を占める 太虚
法師一派の“仏学会”
5. 30 新京衛戍病院へ 知恩院から慰問袋
鮮満親教を機会に
5. 30 台湾に異彩を放つ 妙心派の社会事業
仏教慈愛院の活躍
5. 30 市内随一の鮮人セツルメント 児童収
容所を 寺院に求める
5. 30 日華仏研年報発刊
6. 2 抗争月余に亘る パレスチナの種族闘
争 焦点する世界の基督教徒
6. 2 日華仏教徒の提携に 政治的意味を断
乎排撃 華僧監禁の台湾事件で 中国
仏教紙の憤慨的論調
6. 2 南洋ダバオに建つ 曹洞の南海禪寺十
時大円氏の苦心報いらる
6. 2 巫女を利用して 寄付金募集の奸計
日満人の信仰篤き 大連龍華宮を背景
に
6. 2 16ミリで支 那仏教を偲ぶ
6. 2 満洲開教情報 (6) 半谷範成
6. 6 パレスチナの種族闘争に アメリカに
本部を有する 猶太の秘密結社 ザイ
オンの活動
6. 7 印度ハリチャン族の 寺院出入問題
6. 7 満洲開教情報 (7) 半谷範成
6. 7 聖地仏陀伽耶管理法案 印度立法議會
で採択 マウング博士一任となる 愈
九月の全体会議で審議 印度仏教徒に
喜色漲ぶ
6. 9 小乗仏教を求めて 支那僧侶一行渡印
す 仏教による印・支の接触復活!
6. 9 満洲開教情報 (8) 半谷範成
6. 9 支那でも生産 教育の提唱
6. 10 問題の淡水中学 再び邦人教師三名辞
職 事実上、休校となる 長老会の態
度に注目
6. 10 内蒙救済金募集 善隣協会で着手
6. 11 満洲開教情報 (9) 半谷範成
6. 11 奉天で満洲 長老派教会大会 日本基
教連盟代表出席 両者のタイアップ成
る?
6. 11 印度人の見た 東亜の仏教(1) ラー
フラ・サーンクリトヤヤ
6. 12 日華仏教関係に 政治的背景なし(上)
日華仏教会常務理事 藤井草宣
6. 12 上陸第一歩! 大連神社に参拝 岩井
浄宗管長大連安着
6. 12 マドラス図書館協会 のネオ・プラン
6. 12 各国植民地教育関係者の 第二世教育
協議会 我国代表二名決定す
6. 12 パレスチナの 宗教的習慣
6. 12 満洲開教情報 (10) 半谷範成
6. 13 日華仏教関係に 政治的背景なし(中)
日華仏教会常務理事 藤井草宣
6. 13 日蓮親善に拍車 彼地仏背から全連へ
うれしいプレゼント
6. 13 満洲開教情報 (11) 半谷範成
6. 13 日宗朝鮮護国寺 開教司監部と分置
打続く紛擾禍に鑑み 宗務当局の方針
決る
6. 13 浦塩本願寺の 引揚説は信じられぬ
本派守野部長声明
6. 14 印度人の見た 東亜の仏教(2) ラー
フラ・サーンクリトヤヤ
6. 14 日華仏教関係に 政治的背景なし(下)
日華仏教会常務理事 藤井草宣
6. 14 渡滿巡錫に際して 思ひ出る事ども
浄土宗管長 岩井智海
6. 14 浄土宗に於ける 満洲開教の過去及現
在 浄土宗教学部長 江藤潭英
6. 14 今後の満洲の開教事業 随行長 細井
照道
6. 14 満洲開教情報 (12) 半谷範成
6. 14 印度の珍客に 国際情景展開! 教育
家、画家等來社
6. 14 三十年の歴史をもつ浄土宗満洲開教
殉国の聖地に捧げる 浄土宗大法要
全満開教使総動員で執行
6. 14 献上 満洲国皇帝陛下に 四季の華頂
山額面 軍司令官へ華頂聚寶
6. 14 江藤部長の 満洲視察
6. 14 満洲国に於る 浄土宗寺院 教会所現
状
6. 14 新築の 長春寺 本尊仏 遷座法要
6. 14 開教と人 奈弥陀草
6. 14 西本願寺の 日満語学院 生徒七十余
名
6. 16 印度人の見た 東亜の仏教(3) ラー
フラ・サーンクリトヤヤ
6. 16 人種、宗教、言語と 自治との関係
(上) 印度志士 ラス・ビハリ・ポー
ス
6. 16 九大内に 亜細亜文化研究所
6. 16 躍進日本と国民信念(上) 矢吹慶輝
6. 17 印度人の見た 東亜の仏教(4) ラー
フラ・サーンクリトヤヤ
6. 17 シャム留学生を 顧みぬは仏教徒の恥
辱 仏教精神の家庭寮を建設 花村・
山田両女史奔走
6. 17 躍進日本と国民信念(下) 矢吹慶輝
6. 18 人種、宗教、言語と 自治との関係
(下) 印度志士 ラス・ビハリ・ポー
ス
6. 19 博物館と興福寺 日本仏教を視る(13)

1936. 6. 19 沙門 大醒
 愈よ日華仏教会と 研究会の合同実
 現 両者の相互了解成る
6. 20 感激の法隆寺参拝 日本仏教を視る
 (14) 沙門 大醒
6. 20 支那湖北省地方の 寺院に大恐慌！
 “寺院財産の六割を巻上げ 教育事業
 に流用する”と
6. 20 釜山知恩寺四十 周年記念法要
6. 21 印度人の見た 東亜の仏教(5) ラー
 フラ・サーンクリトヤヤ
6. 21 感激の法隆寺参拝 日本仏教を視る
 (15) 沙門 大醒
6. 21 満支の仏教は 精神も形もない 後藤
 樓道氏の観察談
6. 21 新京護国寺 大法戒師 武藤舜広氏出
 発
6. 23 佐伯僧正との夜話 日本仏教を視る
 (16) 沙門 大醒
6. 23 思想犯保護観察法 台湾にも適用か
 近く具体案発表 注目さるるその成果
6. 23 満洲開教に就いて(上) 北満 今泉
 定順
6. 23 岩井管長親しく 護国の英霊を弔ふ
 新京忠霊塔、群参で埋る 浄宗の大法
 要盛儀
6. 24 性相学聖典編集部参観 日本仏教を視
 る(17) 沙門 大醒
6. 24 岩井浄宗管長 皇帝陛下に拝謁 華頂
 山四季の額面御嘉納
6. 24 暹羅への“仏教使節” 愈よ来月中旬
 出発 汎太仏青大会開催で “資産金”
 の皮算用
6. 24 再びサイパン開教へ 南洋開教の草分
 大派、小林信隆氏
6. 25 高野山・三日記(A) 日本仏教を視
 る(18) 沙門 大醒
6. 25 世界大同仏教会と提携 日満間の新大
 乗運動へ 愈来月上旬 渡満する 日
 満仏教協会の一行
6. 25 全浄土宗を挙げて 無上の光栄に感激
 優渥なる御下間に 岩井管長謹んで
 奉答
 岩井管長ら 傷病兵慰問
 管長の獅子吼
 長春寺の本 尊開眼法要
6. 25 西本、満洲開教 三十周年法要 明年
 六月執行を 主任大会で決定
6. 26 高野山・三日記(B) 日本仏教を視
 る(19) 沙門 大醒
6. 26 満洲開教に就いて(下) (チチハル発
 第一信) 北満 今泉定順
6. 26 印度とセイロン に頒布された 聖書
 教
6. 26 満洲より
6. 27 高野山・三日記(C) 日本仏教を視
 る(20) 沙門 大醒
6. 27 満洲国留学僧を 比叡山に訪ねて(上)
 日満仏教協会主任 藤井晋
6. 27 夏空に描く日満支親善 献木に結ぶ
 孔子廟の楡・楷を 湯島聖堂に移植
 基督教徒の提携 奉天の長老会大会に
 吾が連盟、代表者派遣
6. 27 満洲国武官 知恩院参拝
6. 28 高野山・三日記(D) 日本仏教を視
 る(21) 沙門 大醒
6. 28 満洲国の宗教統制と 奉天警察庁の調
 査(上) チチハル 今泉定順
6. 28 日華仏教両学会の 合同に難色か 関
 西側の意見は時期尚早
6. 28 時代の要求で 台北仏教女青生る 盛
 会だった発会式
6. 28 満洲国留学僧を 比叡山に訪ねて(下)
 日満仏教協会主任 藤井晋
6. 28 日・印相互の親睦に “印度交友会”
 生る 三十日夜、初の会合
6. 30 高野山・三日記(E) 日本仏教を視
 る(22) 沙門 大醒
6. 30 満洲国の宗教統制と 奉天警察庁の調
 査(下) チチハル 今泉定順
6. 30 皇帝陛下に拝謁し 別院敷地購入も契
 約 曹洞の今井総務 満洲視察から帰
 る
 仏教による 日満提携力説 謝介石氏
7. 1 高野山・三日記(F) 日本仏教を視
 る(23) 沙門 大醒
7. 1 満洲を終へて けふから朝鮮へ 岩井
 浄土宗管長
7. 2 高野山・三日記(G) 日本仏教を視
 る(24) 沙門 大醒
7. 2 フアンドフォルノ アリランの譚
7. 3 高野山・三日記(H) 日本仏教を視
 る(25) 沙門 大醒
7. 3 一都市一教会を目標に 金光教、満洲
 国に大展開 満洲布教管理所の陣営整
 ふ
7. 3 各宗合同、満洲人への 仏教の進出が
 急務 細井照道氏の感想
7. 3 大谷派南洋 開教線拡張 新人を起用
7. 4 高野山・三日記(I) 日本仏教を視
 る(26) 沙門 大醒
7. 4 満洲より
7. 5 日、印の四氏を招き 文化外交座談会
 東方文化連盟が
7. 7 高野山・三日記(J) 日本仏教を視
 る(27) 沙門 大醒
7. 8 密教を探りて(上) 日本仏教を視る
 (28) 沙門 大醒
7. 8 満蒙視察談
7. 9 密教を探りて(下) 日本仏教を視る
 (29) 沙門 大醒
7. 9 満鮮より 江藤生

1936. 7.10 最後に諸学叢參觀 日本仏教を視る (30) 沙門 大醒
- 7.10 搾らるる印度 (上) 光栄なる悲惨 “わが印度帝国” 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
- 7.10 満鮮視察の土産話 今後の開教は 満人を中心に 江藤浄宗教学部長談 “僧寶と共に國寶となれ” 満洲道俗に勸説 般若寺授戒会に出席の 武藤舜応氏帰来談
- 7.10 印度の四大仏跡に 大灯笼を寄進建立 二万円二ヶ年計画で 大正十年の参詣者達が
- 7.11 さらば高野よ！ 日本仏教を視る(31) 沙門 大醒
- 7.11 搾らるる印度 (下) 光栄なる悲惨 “わが印度帝国” 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
- 7.11 日満宗教化団体懇談会の 感想と希望 (上) 浄土宗開教使 今泉定順
- 7.12 再び大阪見学 日本仏教を視る(32) 沙門 大醒
- 7.12 日満宗教化団体懇談会の 感想と希望 (下) 浄土宗開教使 今泉定順
- 7.12 東洋文化は 世界の至宝 印度名士、渡印学徒の 盛大な歓迎会 東方文化連盟主催
- 7.14 再び大阪見学 日本仏教を視る(33) 沙門 大醒
- 7.14 五台山大仏光寺大殿に就いて (1) 諸先学の御教示を仰ぐ 杉山信三
- 7.14 満洲より
- 7.15 再び大阪見学 日本仏教を視る(34) 沙門 大醒
- 7.15 五台山大仏光寺大殿に就いて (2) 諸先学の御教示を仰ぐ 杉山信三
- 7.15 黎明の聖徳へ 離宮とラマ廟を訪ねて 北満 今泉定順
- 7.16 京都各山巡拝 日本仏教を視る(35) 沙門 大醒
- 7.16 五台山大仏光寺大殿に就いて (3) 諸先学の御教示を仰ぐ 杉山信三
- 7.16 黎明の聖徳へ (二) 離宮とラマ廟を訪ねて
- 7.16 朝鮮のドンメル群
- 7.17 京都各山巡拝 日本仏教を視る(36) 沙門 大醒
- 7.17 五台山大仏光寺大殿に就いて (4) 諸先学の御教示を仰ぐ 杉山信三
- 7.17 国民政府が 中国仏教会を改造 会則草案を民訓部内示
- 7.17 黎明の聖徳へ (三) 離宮とラマ廟を訪ねて
- 7.18 遊歴の感想怎麼樣 日本仏教を視る (37) 沙門 大醒
- 7.18 五台山大仏光寺大殿に就いて (5) 諸先学の御教示を仰ぐ 杉山信三
- 7.18 くすぶる日支問題
- 7.19 遊歴の感想怎麼樣 日本仏教を視る (38) 沙門 大醒
- 7.19 秦永平寺貫主が 樺太へ初の巡錫 施政三十年記念を機に
- 7.19 岩井管長 明後日帰山
- 7.21 遊歴の感想怎麼樣 日本仏教を視る (39) 沙門 大醒
- 7.21 日蓮親善朗話 かんも僧正に 贈る・秘蔵の仏像 駐日蓮羅公使から
- 7.21 西蔵仏典の刊行を待つ 林国之助
- 7.21 パレスチナ宗教民族紛争の 逮捕者千五百名に上る
- 7.22 清潔清浄の妙心寺 日本仏教を視る (40) 沙門 大醒
- 7.22 満鮮の旅から 岩井管長無事帰る 二ヶ月間に亘る親教の感想
- 7.22 宗教国策の使命を帯び 太田覚眠氏の入蒙 明二十三日、神戸出帆
- 7.23 清潔清浄の妙心寺 日本仏教を視る (41) 沙門 大醒
- 7.23 仁川少年刑務 所新設さる 初代教誨師は 大派・伊東恵氏
- 7.23 パレスチナ紛争 熾烈に再燃す
- 7.23 京城あかつき会 の「あさおき会」
- 7.23 世界的社会事業施設 満洲奉天同善堂の話 一五十七年の歴史をもつ
- 7.24 清潔清浄の妙心寺 日本仏教を視る (42) 沙門 大醒
- 7.24 反宗軍に對峙して 東蒙の教化戦線へ 太田覚眠翁出發
- 7.24 移民招致に尽した 大城孝蔵氏の追弔 ダバオ本願寺で
- 7.24 ソ連の北満開拓 北鉄三十年間の秘庫 北満、ロシア文献資料
- 7.24 世界的社会事業施設 満洲奉天同善堂の話 一五十七年の歴史をもつ
- 7.25 浄土宗総本山知恩院 日本仏教を視る (43) 沙門 大醒
- 7.25 世界的社会事業施設 満洲奉天同善堂の話 一五十七年の歴史をもつ
- 7.25 満訳仏典の急要
- 7.25 浄土宗総本山知恩院 日本仏教を視る (44) 沙門 大醒
- 7.26 世界的社会事業施設 満洲奉天同善堂の話 一五十七年の歴史をもつ
- 7.28 東西本願寺を歴訪 日本仏教を視る (45) 沙門 大醒
- 7.29 東西本願寺を歴訪 日本仏教を視る (46) 沙門 大醒
- 7.29 日本研究に來朝の イスラム教宣教師 教へを説くセディークイ氏
- 7.29 日華仏教研究会の 訪支日程決定す 南方支那を中心に
- 7.30 京都全市の遊覧 日本仏教を視る (47)

1936. 7. 31 沙門 大醒 京都市の遊覧 日本仏教を視る(48)
 沙門 大醒
7. 31 基督教の日満ブロック 確立されるか
 メソ教会の積極的工作
7. 31 回教の世界史的鳥瞰書 “現代回教圖”
 近く刊行さる
7. 31 台湾神社後任宮司 白羽の矢は何処へ
 権宮司制も論議さる
7. 31 朝鮮語トーカー 「洪吉童伝」上映禁
 止 半島文化のために反対運動
8. 1 叡山に古今を偲ぶ 日本仏教を視る
 (49) 沙門 大醒
8. 1 大谷理事長等 愈よ十一日渡滿 汎太
 仏青次期開催地で 再度満洲国を口説く
8. 1 夏の集まり 釜山仏教日校 青年部の
 野営
8. 2 支那と日本のやり方 一皇国の名に
 適しき 事をやれ一
8. 2 叡山に古今を偲ぶ 日本仏教を視る
 (50) 沙門 大醒
8. 2 朝鮮の社寺法規改正 近く発令されん
 独特の政情を活かす
8. 4 叡山に古今を偲ぶ 日本仏教を視る
 (51) 沙門 大醒
8. 4 サイパン丸 船中にて 堀川龍音
8. 4 第三日 日満社事大会 九月新京に開
 催
8. 5 叡山に古今を偲ぶ 日本仏教を視る
 (52) 沙門 大醒
8. 5 隣邦満洲国は果して 宗教統制を行ふ
 か 風当たり強き某々教団
8. 5 赤匪に悩む喇嘛 西康の喇嘛自衛団
 共産軍と対峙激戦中
8. 5 日華仏教研で 年報発刊さる 五百頁
 の堂々たるもの
8. 5 信仰に基き 過去の路線に沿ひ 文芸
 に従事して 民族の自由を戦ひとる =
 中国文芸工作者宣言 =
8. 5 南無妙法蓮華經 七万遍の曼陀羅 一
 青年が日印親善のためガンジー氏
 に贈る一
8. 5 朝昼夕に響く教会の鐘 サイパン港の
 第一印象(上) 堀川龍音
8. 6 支那三代文化の基本 三種制度は新時
 代の精神に合致してゐる 江亢虎氏
 中国文化の復興
8. 6 叡山に古今を偲ぶ 日本仏教を視る
 (53) 沙門 大醒
8. 6 自転車で飛び回る 開教使さんと施餓
 鬼 サイパン港の第一印象(下) 堀
 川龍音
8. 7 叡山に古今を偲ぶ 日本仏教を視る
 (54) 沙門 大醒
8. 7 瀬戸内海の孤島を 日支親善の平和郷
 に 寺院を建立、高僧を招聘
8. 7 実情調査のため 比島に行く高橋氏
 天理教の花嫁注文対策
8. 7 支那文化は「一成不變」ならず 欧米
 文化を受け入れ 今や第三期の文化完成
 江亢虎氏 中国文化の復興
8. 7 南洋から帰った作家評論家
8. 7 四月以来の犠牲者 死者三百を算す
 パレスチナの紛争
8. 8 龐大完備の永平寺 日本仏教を視る
 (55) 沙門 大醒
8. 8 中国仏教会 上海市分会 役員改選
 王氏理事に
8. 8 国語学校、日校の 増設が望ましい
 台湾布教に関し 西本慎藤開教総長談
8. 8 日満社事大会 プログラム決定
8. 9 龐大完備の永平寺 日本仏教を視る
 (56) 沙門 大醒
8. 9 日印文化提携に 梵語学者の美挙 我
 が留学僧の生活費負担
8. 9 北滿の荒野に闘ふ 農業移民を慰む
 上宮教会の運動
8. 9 日本と満洲 同一時刻に改定 来年一
 月より
8. 11 東京の支那留学僧 日本仏教を視る
 (57) 沙門 大醒
8. 11 中国青年僧へも 軍事訓練を施す 仏
 教会、殺戒の故を説き 救護隊編成を
 政府へ陳情
8. 11 日満語学院 卒業式挙行
8. 11 朝鮮大型山麓 古墳発掘陣
8. 11 日満社事大会への 我国の議案詮衡
 内務、中央、全連で共同審議
8. 12 ラマ葛根廟の法要 参拝者雲集、盛大
 を極む
8. 12 在阪半島人の為 納骨堂建設を企つ
 内鮮協和会と協力して
8. 12 淡水中学事件 円満解決す 遂に州移
 譲に決定
8. 12 正式招待状 到着後審議 日満社事大
 会 我国の議案選定
8. 12 朝鮮に延びる 黄檗宗の教線
8. 13 東京の支那留学僧 日本仏教を視る
 (58) 沙門 大醒
8. 13 シャーマン祭り 樺太奥地に現存
8. 13 朝鮮開教四十年記念に 知恩寺で共生
 開館建設 共生青年会の飛躍
8. 13 朝鮮神社制度確立 多年の懸案解決
 五勅令公布さる 諸社へも饗幣料奉納
 質から量への開教 近く台湾駐在異動
 西本願寺の南・北教線
8. 13 新興満洲国に 仏青・婦人会生る 大
 谷氏等一行を迎へ 新京で盛大な発表
 式
8. 13 大谷氏一行 勇躍渡滿
8. 13 入蒙直前の 太田覚眠氏を …新京に

- 訪ねて… 半谷範成 (上)
1936. 8. 14 日本国史と仏教 日本仏教を視る (59) 沙門 大醒
8. 14 東亜仏協 で 信仰座談 鮮人同胞の教化
8. 14 入蒙直前の 太田覚眠氏を …新京に訪ねて… 半谷範成 (下)
8. 14 北海道樺太 講演旅行 (1) 龍谷大学講演部 藤利生
8. 15 日本僧の戒律問題 日本仏教を視る (60) 沙門 大醒
8. 15 “日華仏教会”の 看板 寺院の立退を救ふ 上海清涼寺の訴訟事件
8. 15 満洲留学生 募集 大派教学課
8. 15 大宅壯一氏の見た ダバオ公論の星氏と わが涙骨社主
8. 15 蒙古葛根廟梵通寺に 滋野氏を訪ふ記 一雨に濡れ傘一つで入室
8. 15 北海道樺太 講演旅行 (2) 龍谷大学講演部 藤利生
8. 16 東京仏教の横顔 日本仏教を視る (61) 沙門 大醒
8. 16 イスラエルの民の 子孫が民族国家を建設すべく躍進
8. 16 北海道樺太 講演旅行 (3) 龍谷大学講演部 藤利生
8. 16 大派南越布教団の 夏講と公開講演 木津・山辺氏ら出講
8. 18 東京仏教の横顔 日本仏教を視る (62) 沙門 大醒
8. 18 北海道樺太 全仏青大会 防空展会場内で戦 没将士の追悼法要 大派旭川別院で
8. 18 満洲に延びる 妙心寺派の教線 基礎を固めた新京別院
8. 18 北海道樺太 講演旅行 (4) 龍谷大学講演部 藤利生
8. 19 東京仏教の横顔 日本仏教を視る (63) 沙門 大醒
8. 19 日支親善 “亜細亜賛歌”の レコードを御嘉納 献上者は上海在住の老教師
8. 19 北海道樺太 講演旅行 (5) 龍谷大学講演部 藤利生
8. 19 満洲国の宗教統制 順調に進展する? 新秋を期して動く各省の運動 各宗派とも静観の態度
8. 20 大正大学を参観 日本仏教を視る (64) 沙門 大醒
8. 20 マイクを通じて 国歌の普及運動 満洲国の国歌週間
8. 20 日満社事大会 東京代表決定
8. 20 満洲事変記念日に 戦病没者の慰霊祭 各宗合同の講演会等 奉天省の宗教工作
8. 21 大正大学を参観 日本仏教を視る (65) 沙門 大醒
8. 21 各宗当局等に呼びかけ 鮮人教化団体の結成を促す まづ教化道場の建設計画 東亜仏教協和会が
8. 21 仏教精神で内鮮融和 鮮人同胞の信仰座談会
8. 21 奥地深く巡歴し 在満将士を慰問 藤巻宮司ら一行十名が 淡川神社氏子青年団の壮挙
8. 22 大正大学を参観 日本仏教を視る (66) 沙門 大醒
8. 22 “シャム”紹介の 国際芸術と講演 曹洞宗向上会の催し
8. 22 次期汎太仏青大会は 満洲国に開催 日満代表協議会で決定
8. 22 北海道樺太旅行記 龍谷大学講演部 森下敏行 (一)
8. 23 尚武的仏教 日本仏教を視る (67) 沙門 大醒
8. 23 神風漫談 館神社局長と語る (上) 虎村生
8. 23 明春、カルカッタで 世界万教大会開催 ラマキシナ教徒が
8. 23 浦塩本願寺 戸泉氏釈放
8. 23 満洲開教寺院の届に 領事館の目光る デタラメな檀信徒数
8. 23 北海道樺太旅行記 龍谷大学講演部 森下敏行 (二)
8. 23 問題の淡水中学 更生のスタートへ 州に移譲し財団組織
8. 23 全道の水害救済に 朝鮮社事協会起津
8. 25 尚武的仏教 日本仏教を視る (68) 沙門 大醒
8. 25 満洲移民
8. 25 神風漫談 館神社局長と語る (中) 虎村生
8. 25 中国仏教人名辞典成る 鎮江竹林仏学院振華法師の 編纂で年内に出版の予定
8. 25 満洲国の宗教統制に 奉天省の積極運動 各省に率先して
8. 25 名古屋市にできた 在留鮮人教化事業 まづインテリの訓練へ
8. 25 印度留学の山本智教氏 昨日出帆
8. 25 近く渡満する 館神社局長
8. 25 北海道樺太旅行記 龍谷大学講演部 森下敏行 (三)
8. 26 川越喜多院 日本仏教を視る (69) 沙門 大醒
8. 26 神風漫談 館神社局長と語る (下) 虎村生
8. 26 朝鮮民社の 供進神社 指定さる
8. 26 台湾講演旅行記 (一) 上杉記
8. 26 鮮人の生活 改善対策
8. 27 福田氏の支那料理店 “福園” 愈よ開業 本場のライスカレーも食はず

1936. 8. 27 台湾講演旅行記 (二) 上杉記
 8. 27 岩野喜久代女史 日滿社事大会出席
 8. 27 台北教会の 建設募金進む 近く着工
 8. 28 孔子廟聖堂 日本仏教を視る(70) 沙門 大醒
 8. 28 中国僧侶にも 国選権認めらる 仏教会の陳情容れらる
 8. 28 神社局長の 渡滿延期 九月一日出発
 8. 28 台湾講演旅行記 (三) 上杉記
 8. 28 日滿社事大会 浄宗の出席者
 8. 28 一切鮮語を禁じ 桃山御陵で修養 内鮮協和会の試み
 8. 29 東方文化学院の威容 日本仏教を視る(71) 沙門 大醒
 8. 29 滿洲回教徒の幹部養成に 奉天回教師範校設立
 8. 29 滿洲国皇帝陛下が 御祖先追念の祭祀 中元節に奉天東北 二陵へ專員を欽派
 8. 29 台湾講演旅行記 (四) 上杉記
 8. 29 滿洲国移民の為に 医療の拡充が必要 日滿社事大会に提案か
 8. 30 東方文化学院の威容 日本仏教を視る(72) 沙門 大醒
 8. 30 朝鮮同胞教化
 8. 30 天理のダバオ花嫁問題 結局、不可能か? 手続がとてども煩瑣だ 大派ダバオ某開教使談
 8. 30 新計画のため 滿鮮視察の旅に 西本願寺、前田執行長
 8. 30 滿洲国第一軍 孟蘭盆会執行
 8. 30 滿洲監督の後任 朝倉大阪所長が有力
 8. 30 朝鮮への特信 へ見舞状 知恩院から
 8. 30 台湾講演旅行記 (五) 上杉記
 8. 30 新生活運動 民国の更生運動としての 齊藤惣一
 8. 30 白系露人経営の 各学校を統制 王道教育実施 学年制、教科書等を改正 ハルビン市の方針決る
 9. 1 矢吹博士と語る 日本仏教を視る(73) 沙門 大醒
 9. 1 南鮮暴風雨禍の 被害報告一番槍 大派牧島、池田開教使談
 9. 1 テニアン島の奥地 チューロに教会所 西本の南洋教線拡張
 9. 1 五族融和を目的に 京城と新京に 鮮滿拓殖会社設立 注目すべき移民解決策
 9. 1 日支事変五周年で 曹洞宗務の論達 戦病死者の追悼会厳修
 9. 1 “海の生命線” 南洋へ 日宗布教陣の強化 新に布教監督を設置
 9. 2 大正大学の講演 日本仏教を視る(74) 沙門 大醒
 9. 2 印度の高僧千古 の珍籍発見
 9. 2 大派の北海道 樺太特派巡回 青壮年教化へ
 9. 2 奉天省の貧困救済 いよいよ積極化 新に職業紹介にも進出
 9. 2 行ってまゐります 一滿鮮支の旅へ一 特派員 高橋重蔵
 9. 2 滿洲開教監督 愈々決定す 滿蒙開教に活を入るべく 巨材、藤岡氏起つ 快刀乱麻を断つ利れ者 大派教学部の英断
 9. 2 大陸政策の研究者で 無欲恬淡な禅僧型 ◇…宗門某消息通談
 9. 2 村雲尼公が 滿洲巡教 事変戦跡で追弔
 9. 2 吉林省日宗 布教所本堂 落成式挙行
 9. 3 高楠博士を訪ふ 日本仏教を視る(75) 沙門 大醒
 9. 3 中国回教代表から 滿洲教徒へ不穏な通知 全滿的に散布された形跡
 9. 3 西本願寺の 朝鮮災害見舞
 9. 3 学生巡回班の問題 一滿洲の旅にて一 (上) 内田憲堂
 9. 3 大派滿洲別院造営で 新監督に引出物 宮谷前監督の朗誦 藤岡氏は十日頃渡滿
 9. 4 湖南の名勝を巡る 日本仏教を視る(76) 沙門 大醒
 9. 4 蒙古は招く ラマ教の指導者出でよ 興安西省林西県にて 北条月照
 9. 4 滿鮮視察の途に 日滿社事大会出席の 高橋特派員ら出発 京都駅頭の見送り賑ふ
 9. 4 滿洲事変の 戦病死者慰霊祭 軍部、各宗に法要執行依頼 浄宗では全国へ通牒
 9. 4 大山元帥の遺品展や アチヤンタ窟壁画展 滿洲国関東州施政 三十周年祝賀会
 9. 4 朝鮮僧侶十四名の 内地仏教視察団 慶尚北道知事主催で 来十一日、大阪を振出しに
 9. 4 朝鮮滿洲 講演旅行つれづれに (一) 龍大 中西専羅
 9. 4 学生巡回班の問題 一滿洲の旅にて一 (下) 内田憲堂
 9. 4 宗教団体法制定 滿洲国が一足お先に 明春教育令と共に発令施行 関東軍からも委員を選出して 各部連合の宗教委員会設立
 9. 4 寺産及び吸入を 厳重に取締る 違反者には住持職を罷免 奉天省が寺廟管理立法制定
 9. 4 各宗教代表 座談会 奉天市公署主催
 9. 5 明治神宮に参拝 日本仏教を視る(77) 沙門 大醒
 9. 5 滿支に行く人帰る人 帰朝第一声! 浅野研真氏帰る 汎太仏青次期開催地

- は 大体満洲国に決定 主催団体に問題は今後各宗の布教使は駄目
淡川藤巻宮司ら 皇軍慰問の壮途にあず、神戸を出帆
1936. 9. 5 満洲事変の 獄霊法要 知恩院で修行
9. 5 中国では唯一の 仏教図書館建設 上海に二万余円で
9. 5 四川仏学院 新設さる 有名になった成都武聖街に
9. 5 朝鮮満洲 講演旅行つれづれに (二) 龍大 中西專躍
9. 5 支那の男女同権
9. 5 満洲移民事業には 宗教家の率先参与が急務 大谷派 藤岡新満洲開教監督の抱負
9. 6 東本願寺独壇場(?)の ダバオ開教 線異状 当局の同地認識を要望
9. 6 秦永平寺貫首 初の樺太巡錫 効果百パー - 平沢前布教総監談 -
9. 6 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (三) 龍大 中西專躍
9. 8 満洲国の 健全な補導育成に 何を寄与すべきか 仏教の使命に就いて意見交換 軍部と仏教徒の懇談会
9. 8 満洲国の小乗的仏教を 大乘的への純化 我が仏教徒の新使命 …内…容…概…説…
9. 8 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (四) 龍大 中西專躍
9. 8 満鮮スケッチ(1) 本社特派員 高橋重蔵
9. 9 廬山・杭州中心の 支那浄土教の調査 中華仏教研究会の 大派・春日氏の实地研究
9. 9 日支事変で 智山の通牒
9. 9 前田執行長の 満鮮視察日程
9. 9 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (五) 龍大 中西專躍
9. 9 朝鮮短信
9. 10 日華仏研親善仏教使節 十三日訪華の途へ “長安まで長驅したい”と 一行の春日礼智氏語る
9. 10 満鮮スケッチ(2) 本社特派員 高橋重蔵
9. 10 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (六) 龍大 中西專躍
9. 10 中国仏教会本年度大会 十月、南京毘廬寺で開催 会則改定政府案で議論沸騰か
9. 11 仏、道、回、喇嘛総動員で 宗教ラジオ講演 奉天市公署の試み
9. 11 牡丹溝中心の移民に 捨身の青年僧を! その踏出しを確立したい 大派藤岡満洲開教監督談
9. 11 大派新満洲駐 在に月輪(兄)氏 兄弟揃って 北満開教
9. 11 一高に新設する 支那留学生 に特設予科
9. 11 支那学研究で 仏・支に留学 谷大・名如教授
9. 12 拡充される国際仏教網 更に“日暹仏教協会”結成 十月、名古屋で発会式 挙行 “仏教協会氾濫時代”
9. 12 満鮮スケッチ(3) 本社特派員 高橋重蔵
9. 12 在京半島労働者の慰問 南鮮風潮へ
9. 12 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (七) - 鴨緑江を越える - 龍大 中西專躍
9. 12 日満社事大会 華々しく開かる 議案は各委員会付託
9. 13 満洲国イスラム総会から 同国教胞に警告書 中国政治不関与問題で
9. 13 満鮮スケッチ(4) 本社特派員 高橋重蔵
9. 13 各学校に仏教専科 増設を政府に陳情 中国仏教会から
9. 13 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (八) - ショウトル街 - 龍大 中西專躍
9. 13 社会事業を通じて 日満不可分関係強化 日満社事大会に於ける 呂民政部大正式辞
9. 15 東亜仏協会の内鮮融和運動 先づ曹洞朝鮮教会設立 十八日、第一回発起委員会
9. 15 重大使命を帯びて 第二回訪華団出発 十三日、一路上海へ
9. 15 孔子の木孫 おめでた
9. 15 仏像奉納二題
ビルマの実業家が 京阪の名刹へ 仏教国相互の親善と理解に 善光寺雲上殿に 運羅伝来の仏像 二十一日、奉安法要
9. 15 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (九) - 曠野の大路 - 龍大 中西專躍
9. 15 西藏の班禪喇嘛から 教書(メッセージ)を發せん 第七回仏青総会へ 期待される国際色
9. 16 年中行事として 印度仏跡巡拝団を組織 国際仏教協会等の計画進む 各方面から実現を期待
9. 16 大派藤岡満洲監督昨夜渡満 大阪駅頭の欲送
9. 16 前田執行長の 渡満日程決る
9. 16 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (十) - 宗教情勢(上) - 龍大 中西專躍
9. 17 支那人の心理学 於青島 メーソン 四
9. 17 あす満洲事変記念日 谷大の追悼・講演 大派鹿兒島別 院の追悼法要 ここはお国の会の追悼 頂妙寺の追悼

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1936. 9. 17 朝鮮僧一行 妙心寺見学
 9. 17 半島出身の労働者に 日本語や常識教育 床し現場監督等の心根
 9. 17 朝鮮満洲 講演旅行つれづれ (十一)
 -宗教情勢(下)- 龍大 中西專 躍
 9. 17 日満社事連盟 遂に結成さる 九月十二日、新京大会で
 9. 17 日満社事家提携し 社事報国に献身 第三回日満社事大会 力強い宣言と決議
 9. 17 カルカッタ大学の 仏教学者 ダッド 教授来朝 関係団体で歓迎準備
 9. 18 支那人の心理学 於青島 メーソン 五
 9. 18 満鮮スケッチ(5) 本社特派員 高橋重蔵
 9. 18 けふ満洲事変記念日 多彩な記念の催 熊本の記念祭 国威発揚祈願 兵庫 県神道 各教連合会 本山頂妙寺 追悼法要 西本の法要 知恩院の 追悼会 厳肅に修行 大谷国防研の 事変記念講演 大谷和洋裁女 追悼と講演
 9. 18 殉国日満英霊を合祀 新京に建国廟建立 百四十万円近く着工
 9. 18 南洋ナヤラン カノア布教所 盛大な入仏法要
 9. 18 朝鮮刑務所の 西本関係異動
 9. 18 平間寿本氏 一昨日渡満
 9. 18 満洲より
 9. 18 蔵梵対照翻訳名義大集 “西蔵語索引” 成る 谷大西尾教授の労作
 9. 19 支那人の心理学 於青島 メーソン 六
 9. 19 南朝鮮総督に (一) 光山百川
 9. 19 満鮮スケッチ(6) 本社特派員 高橋重蔵
 9. 19 日本娘に乱暴して? 印度僧取調べらる 昨日、太秦署で対決
 9. 19 大派台北別 院再建成る 盛大な落慶法要準備
 9. 19 全国の遺族参列し 満洲事変慰霊法要 護国寺本堂の盛儀 石川県下の各 宗合同追弔会 曹洞東京寺 院の追悼会 智積院法要、西本、樺太別院 仁峨では 十九日 西念寺では追悼会
 9. 19 震災、風水害、朝鮮水害法要 建仁寺で
 9. 19 野生司香雪画伯の 壁画「釈迦一代記」 ◇…の御札に印度古文献を 帝国図書館に寄贈
 9. 19 渡印の湯沢龍 岳氏送別会
 9. 20 支那人の心理学 於青島 メーソン 七
 9. 20 満鮮スケッチ(7) 本社特派員 高橋重蔵
 9. 20 南朝鮮総督に (二) 光山百川
 9. 20 大派新満洲駐在 月輪氏辞退 檀家の 猛反対で
 9. 20 一粒種の愛嬢の骨を 首に懸けて任地へ 朝鮮開教に捨身を誓ふ 大派上野 朝鮮開教監督
 9. 20 仏教徒の恥 容疑濃厚の 印度僧に非難
 9. 20 満洲より
 9. 22 満鮮スケッチ(8) 本社特派員 高橋重蔵
 9. 22 皇軍の英霊を弔し “満洲仏教を語る” 想ひ出新たの記念日に
 9. 22 満洲事変 追弔会 西本鹿兒島別院
 9. 22 ブース大将 印度に転戦
 9. 23 満鮮スケッチ(9) 本社特派員 高橋重蔵
 9. 25 満鮮スケッチ(10) 本社特派員 高橋重蔵
 9. 25 第三回汎太平洋仏教大会の 満洲国開催は時期尚早(上) チチハル 半谷範成
 9. 25 満洲事変殉国 戦病死者追悼法要 けふ、東本願寺で法主親修
 9. 25 新興満洲国 文教部の英断 初等教育補助機関に 全国的に私塾を振興
 9. 25 全満洲挙げて 中秋祀孔
 9. 25 村雲日浄尼 公満洲親教
 9. 25 西本朝鮮義信
 9. 26 満鮮スケッチ(11) 本社特派員 高橋重蔵
 9. 26 南朝鮮総督に (三) 光山百川
 9. 26 第三回汎太平洋仏教大会の 満洲国開催は時期尚早(下) チチハル 半谷範成
 9. 26 北平柏林寺 清龍藏經印刷 林国民政府主席の発願
 9. 26 全鮮曹洞宗 布教師大会 元山法秀寺で 盛大に挙行
 9. 26 太田覚眼氏 無事着蒙
 9. 27 満鮮スケッチ(12) 本社特派員 高橋重蔵
 9. 27 南朝鮮総督に (四) 光山百川
 9. 27 旧校舎を改造し 朝鮮同胞アパート
 9. 27 班禅喇嘛一行愈よ掃蔵の途に 南京政府、礼を厚くして送る
 9. 27 西藏入りのラーフラ氏 貴重な梵本を発見 因明珠註・瑜伽師地論
 9. 27 抗日テロで物情騒然たる 上海に仏化運動 市仏学会が大童になって 映画館でも上映前を利用して
 9. 27 各蕃社に 国語講習所 今月中に何れも開講
 9. 27 西山誓願寺の 日満国運祈願
 9. 27 丙子訪華録(上) 杭州にて 春日礼

- | | |
|---|---|
| <p>智</p> <p>1936. 9. 27 日華仏教研究会 訪華団遂に帰国か
—一行無事との入電—</p> <p>9. 27 故国へのお土産 南方仏教の 戒律生活紹介 壁画完成の野生司画伯 愈よ
来月末帰朝</p> <p>9. 29 抗日戦線に中国僧の参加 太虚、円瑛
両氏等提携し 熾烈極る抗日運動暴露
示された実証の数々 仏教徒を啞然た
らしむ 全支にバラ撒いた小冊子、激
越な言辞で煽る排日 まことに遺憾だ
冷静に対策考究が必要 浅野研真氏
語る</p> <p>9. 29 満鮮スケッチ(13) 本社特派員 高橋
重蔵</p> <p>9. 29 丙子訪華録(下) 杭州にて 春日礼
智</p> <p>9. 30 中華僧の運動</p> <p>9. 30 般若窟精神に依り 五族融和に邁進を
誓ふ 新京妙心寺別院、隆々たる発展
大橋外交次長の熱烈な支持</p> <p>9. 30 大派朝鮮教誨師異動 新進組の起用目
立つ</p> <p>9. 30 現代日本人は支那を 正しく認識して
ゐるか 支那研究の権威原勝氏中心に
京都基背の現代支那講座</p> <p>9. 30 新興満洲国の 文化国策愈よ固し 大
連に社会教育委員生まる</p> <p>10. 1 南支巡礼記(一) 日華仏教研究会員
春日礼智</p> <p>10. 1 満鮮スケッチ(14) 本社特派員 高橋
重蔵</p> <p>10. 1 在満勇士へ 心から慰問 猿江善隣館
が</p> <p>10. 1 印度学研究 会梵文講座</p> <p>10. 2 満鮮スケッチ(15) 本社特派員 高橋
重蔵</p> <p>10. 2 抗日中国僧</p> <p>10. 2 汎太仏青大会と 満洲・支那(上)
—久保田、半谷両兄に— 藤井草宣</p> <p>10. 2 半島仏青团をトップに 報国会の白衣
軍 きのふ東本願寺で 真摯な第一回
総会</p> <p>10. 2 匪賊に巢窟提供など 意外不埒な満洲
寺院 当局対策に腐心</p> <p>10. 3 満鮮スケッチ(16) 本社特派員 高橋
重蔵</p> <p>10. 3 中国僧の排日参加で 善後策を講ず
あす緊急理事会開く 日華仏教学会</p> <p>10. 3 決定促進のため 浅野主事再度渡満
汎太仏青次期開催地で</p> <p>10. 3 南支巡礼記(二) 日華仏教研究会員
春日礼智</p> <p>10. 4 汎太仏青大会と 満洲・支那(下)
—久保田、半谷両兄に— 藤井草宣</p> <p>10. 4 満鮮スケッチ(17) 本社特派員 高橋</p> | <p>重蔵</p> <p>10. 4 佳記斯移民地に 純日本式本堂建立
日満両国人の喜捨で 大派吉田開教使
の活動</p> <p>10. 4 日出高女の 慰問隊出発 慰問袋二千
携行</p> <p>10. 4 台湾の日本語 普及運動の積極化 公
用には必ず国語使用 高雄市の申合せ</p> <p>10. 6 ハルビンの各宗 満鮮スケッチ(18)
本社特派員 高橋重蔵</p> <p>10. 6 大乘仏教発祥の道場 那爛陀寺の復興
近く中国僧により実現</p> <p>10. 6 僅かに目立つ 紅卍字教の施設 満洲
の社事はこれから 秦隆真氏視察談</p> <p>10. 6 訪華の使命果し 大西団長帰る 一行
より一足先に</p> <p>10. 7 近く新寺建立の 錦州浄土寺 田中主
任の 苦心を聴く</p> <p>10. 7 中運の仏教的提携 中国仏教徒から暹
羅へ 影印宋版藏経贈呈 暹羅巴利文
藏経を返礼</p> <p>10. 8 同善堂の創始者 満鮮スケッチ(19)
本社特派員 高橋重蔵</p> <p>10. 8 中国僧の抗日参加は 大勢に順応か
最近帰朝の某氏語る</p> <p>10. 9 支那は果して 統一されるか? (1)
J. W. T. メーソン</p> <p>10. 9 満洲国の大本教? 紅卍字会を見る
満鮮スケッチ(20) 本社特派員 高橋
重蔵</p> <p>10. 9 中国僧侶の兵役義務 一般人同様に課
す 中央政府、全国へ通達</p> <p>10. 9 日満社事の連絡提携 満洲から十名研
究生来朝 内務省で三ヶ月間の講習</p> <p>10. 10 支那は果して 統一されるか? (2)
J. W. T. メーソン</p> <p>10. 10 浄祖・両祖の三像を 支那天童山に奉
納 愈よ募財運動を開始 道元鑽仰会
主催</p> <p>10. 10 印度仏跡の 旅に上る 余田義雄氏来
社</p> <p>10. 10 日宗朝鮮開教司監に 黒田恵海氏を任
命 依然護国寺住職を兼ね その分置
は到底不可能</p> <p>10. 10 裏南洋パラオに西本教線</p> <p>10. 10 南洋神社 創建に着手 パラオの一角
に</p> <p>10. 11 支那は果して 統一されるか? (3)
J. W. T. メーソン</p> <p>10. 11 一灯園と天理教 満鮮スケッチ(21)
本社特派員 高橋重蔵</p> <p>10. 11 北海、樺太を实地踏査し アイヌ民族
と地名の研究 八旬に亘って資料を蒐集
=谷大國語学の亀田教授=</p> <p>10. 13 無尽の鉞量 満鮮スケッチ(22) 本社
特派員 高橋重蔵</p> |
|---|---|

1936. 10. 13 頭山翁揮毫の法名抱き 酷寒の武装移民地へ 大派佳木斯の本多開教使
10. 13 汎太平洋博覧学を兼ね 滿蒙支各国仏青来朝 事実上の汎太仏青大会の盛観を予想さる 明年の全日本仏青大会
10. 13 新京を中心に 満洲の教線大開発 本派前田執行長婦来談
10. 13 南支巡礼記(三) 日華仏教研究会員 春日礼智
10. 14 支那は果して 統一されるか? (4) J. W. T. メーソン
10. 14 秘境=熱河 満鮮スケッチ(23) 本社特派員 高橋重蔵
10. 14 台北市に国民 精神研究所生る 明年より事業開始
10. 15 支那は果して 統一されるか? (5) J. W. T. メーソン
10. 15 秘境=熱河 満鮮スケッチ(24) 本社特派員 高橋重蔵
10. 15 太虚法師に果して 抗日的策動ありや(上) 在日中国僧 釈墨禪
10. 15 鮮人教化の一助にもと 助産婦志願の二女性 竜田・井垣の日本名も新しく 大派妊産婦相談所に入る
10. 15 冀察政府未委員長が四書数万部を精印 各旅館の机上に配置
10. 15 中国仏教会 代表大会 上海に開催
10. 16 秘境=熱河 満鮮スケッチ(25) 本社特派員 高橋重蔵
10. 16 太虚法師に果して 抗日的策動ありや(中) 在日中国僧 釈墨禪
10. 17 秘境=熱河 満鮮スケッチ(26) 本社特派員 高橋重蔵
10. 17 太虚法師に果して 抗日的策動ありや(下) 在日中国僧 釈墨禪
10. 17 蒋介石先生誕生慶祝 中国仏教団体が満洲伝道に 積極的に乗出す 明春より直に実行 組合教会青年会
10. 17 南支巡礼記(四) 日華仏教研究会員 春日礼智
10. 20 比島へ大乘仏教宣布 中国人が大乗信願寺建立 仏学研究所は勿論、慈児院や 精進会提唱館の設備もある
10. 20 日支問題とインテリ 末広重雄氏談
10. 20 満洲国留学生 浪速中等学校へ
10. 21 山海関を越えて 満鮮スケッチ(27)
10. 21 朝鮮仏教青年会を組織 東亜仏教協和会
10. 22 冀東政府殷朝刊発企で 北支仏教復興運動起る 冀東仏教連合会を組織
10. 22 南支巡礼記(五) 日華仏教研究会員 春日礼智
10. 22 満洲伝道に 愈よ乗出す 組合教会青年連盟
10. 23 ペーピンに入る 満鮮スケッチ(28)
10. 23 半才余に亘る エルサレムの紛争 英、徹底的解決に乗出す
10. 23 南支巡礼記(六) 日華仏教研究会員 春日礼智
10. 24 ああ友邦中華よ 満鮮スケッチ(29)
10. 24 何故宣教大会を 支那に開くか “日支印の教会使命達成の為” ベトン氏 重大声明
10. 25 台湾彰化寺の 素晴らしい活躍
10. 25 南支巡礼記(七) 日華仏教研究会員 春日礼智
10. 25 天津から大連へ 満鮮スケッチ(30)
10. 27 東洋に誇る大埠頭 満鮮スケッチ(31)
10. 27 世界紅卍字総会が 新京に総会開館建設 諸種の社事施設完備
10. 27 大壁画の偉観を添へて 印度鹿苑新寺の年祭 十一月下旬、盛大に挙行 故ダンマバーラ記念塔成る
10. 28 満洲国でも類 似宗教取締
10. 28 満洲人の宗教 顕本法華州布教師 松岡乾丈氏は語る
10. 29 クリーの会社 満鮮スケッチ(32)
10. 29 大派台北別院再建 全島を挙げて 盛大な落成法要 法主代理、宝誠連枝参向 台湾全島に 教書披露
10. 29 厦門と洛陽へ 大蔵経寄贈
10. 29 鮮人アパート具体化 旧校舍二棟購入 二十家族を収容 大派、金松氏の運動進む
10. 30 印度農民の貧困 ラス・ビハリ・ボース
10. 30 梵語研究者への福音 梵和大辞典の編纂 愈よ明日から店開きの 荻原博士の大事業
10. 30 南支巡礼記(八) 日華仏教研究会員 春日礼智
10. 30 露満国境 第一線守護神 黒河神社の御霊代 先づ領事館に仮奉安
10. 31 旅順の戦跡 満鮮スケッチ(33)
10. 31 満洲、朝陽県天主教会に 軍器の大量密蔵発覚 満人信者三万の大教会
10. 31 満洲国民政部社会科が 主要都市に婦女教化団 向隅而泣之不幸婦女の絶滅名称を改め 組織内容を改革 満洲国社会教化の 主力団体、道德会
10. 31 佳木斯東本 願寺竣成 柳本通訳の慰霊祭
10. 31 在満宗教の肅正に “宗教学校”の設立 満洲中等学校長会に提出
10. 31 明春インドで 世界基督教青年大会 我々国からも十四氏出席
10. 31 曹洞宗会 第五日 日支の時局を再検討せよ 上野議員力説す
11. 1 大連神社に詣つ 満鮮スケッチ(34)
11. 1 南支巡礼記(九) 日華仏教研究会員 春日礼智

1936. 11. 1 熱河省凌南県に行く 新京西本願寺
光岡滋昭 (上)
11. 1 二十五、六才の“学童” 蕃人子弟を
養成 西本願寺の台湾新教化方策 榎
藤台湾開教総長談
11. 1 半島人二百 桃陵に熱願
11. 3 南支巡礼記 (十) 日華仏教研究会員
春日礼智
11. 3 熱河省凌南県に行く 新京西本願寺
光岡滋昭 (下)
11. 3 樺太・シベリア・満洲 三十三年間開
教苦闘史 樺太東西開眼をゆく 二百
八十里徒歩の旅 (一) 日蓮宗 花木
即忠氏
11. 3 帝国の躍進策に同調 “昏迷蒙古”と
の文化親善 活躍の善隣協会の医療班
明年愈よ寧夏省に進出
11. 5 満洲開教の 立替 西本内局、現地
重役と協議
11. 5 大派台北別院 要次第決定
11. 5 樺太・シベリア・満洲 三十三年間開
教苦闘史 樺太東西開眼をゆく 二百
八十里徒歩の旅 (二) 日蓮宗 花木
即忠氏
11. 5 奉天救世軍が 窮民暖房を施設 市公
署から補助
11. 6 奉天、ひとのみち会館 アパートに変
る 近く全面的に刷新か
11. 6 南方生命線に 伸びゆく浄土宗 南洋
寺の落成で 膨大な教化網を画策
11. 6 留日中国僧 浄徳氏帰国
11. 6 中国仏教会が全国的に 仏教災区救護
団を組織 壮年僧には赤十字訓練を施
す
11. 6 西本満洲 開教会議
11. 6 大連仏教各宗 派連合懇談会
11. 6 南支巡礼記 (11) 日華仏教研究会員
春日礼智
11. 6 樺太・シベリア・満洲 三十三年間開
教苦闘史 樺太東西開眼をゆく 二百
八十里徒歩の旅 (三) 日蓮宗 花木
即忠氏
11. 6 満洲国に旅して (一) 岩野喜久代
11. 7 南支巡礼記 (12) 日華仏教研究会員
春日礼智
11. 7 満洲国に旅して (二) 岩野喜久代
11. 7 蘭秋の烏城下で 第七回全国仏教大会
愈よけふ、華々しく開幕 日支関係
好転へ 教団人の活躍要望 その他時
節柄注目すべき 提出議案の内容
11. 7 満洲式コロニーを建て 被救護者に移
民訓練 弘済会廿五年記念事業
11. 8 南支巡礼記 (13) 日華仏教研究会員
春日礼智
11. 10 中華民国仏 教徒の覚醒
11. 10 ハルビンで 不良私塾狩り 共産、三
民主義一掃
11. 10 建国精神徹底のため 満洲回教徒の平
和境 新京郊外に建設
11. 10 満洲国人に 愈よ開教を始む 西本か
ら専任布教使派遣 大同仏教總會と握
手
11. 10 南支巡礼記 (14) 日華仏教研究会員
春日礼智
11. 10 満洲国に旅して (三) 岩野喜久代
11. 11 満洲の基督教 =満鮮スケッチ=(35)
11. 11 三百万円を投じ 台湾神社大造営 愈
よ明春より着工 角南内務技師、近く
渡島
11. 11 夕バオ教線に立ちて (上) 重藤廓亮
11. 11 満洲国に旅して (四) 岩野喜久代
11. 11 満洲の漢方医界 西医圧迫で奮起
11. 12 信如法親王の記念碑は ジョホールが
適当 羅越国問題の再検討 広島文理
大学杉本直次郎教授談
11. 12 夕バオ教線に立ちて (中) 重藤廓亮
11. 12 北支を探索 (1) - 南支巡礼の旅につ
いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
11. 12 満洲国に旅して (五) 岩野喜久代
11. 13 総工費十万円の 朝鮮別院完成近し
黄檗宗布教戦線振ふ
11. 13 夕バオ教線に立ちて (下) 重藤廓亮
11. 13 北支を探索 (2) - 南支巡礼の旅につ
いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
11. 13 満洲国に旅して (六) 岩野喜久代
11. 13 日華仏教研 第二回報告 大阪で開催
11. 14 植民地と神社
11. 14 満洲移民への悲観論は 嗤ふべき机上
の空論だ “この生々しき現実を見よ!”
と 大派佳木斯、本多氏の巨弾
11. 14 印度仏跡猷灯会 積極的募金に着手
11. 14 北支を探索 (3) - 南支巡礼の旅につ
いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
11. 14 満洲国に旅して (七) 岩野喜久代
11. 15 チチハル西本願 寺落成と遷仏式
11. 15 南満洲撫順で 開教記念法要 天地山
妙心寺で
11. 15 パハーウラの誕生日 在東京 アグネ
ス・B・アレキサンダー
11. 17 満洲国に旅して (八) 岩野喜久代
11. 17 神道精神による 拓殖事業の計画 華
北大学の買収等 東亜民族文化協会
11. 19 満洲国教化団体に 龍江省から警告
宗教改革の第一歩?
11. 19 望月日宗管長らと 隔意なき意見交換
満洲開教等の方針につき 靈廟建設
の西岡大元氏
11. 19 満洲基督教 連盟創立 十二月一日総
会
11. 19 向寒の満洲に 救世軍の前進
11. 19 龍江省仏教 会長選挙
11. 19 布哇からも参加 余すは印度だけ 盛

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 況が予想される 全日本仏青連盟総会
 1936. 11. 19 満洲国に旅して (九) 岩野喜久代
 11. 20 北支を探る(4) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 11. 20 満洲国に旅して (一〇) 岩野喜久代
 11. 21 支那仏教史家の 奮起を熱望す (一)
 能令実円
 11. 21 北支を探る(5) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 11. 21 満洲国に旅して (一一) 岩野喜久代
 11. 21 最北滿移民村を訪ね 熱河省辺陲を巡
 察 大派、藤岡満洲開教監督
 11. 22 支那仏教史家の 奮起を熱望す (二)
 能令実円
 11. 22 禅宗独自の立場で 日支関係の好転に
 資す 明年開校する“東亜禪林”
 11. 25 支那仏教史家の 奮起を熱望す (三)
 能令実円
 11. 25 馬來のバトバハアに 本格的の開教
 西本願寺の入仏式
 11. 25 満洲最長寿の老僧 再び齒が生えた
 哈爾濱駅頭冬の朗景
 11. 25 中国仏教会第八回大会 党部代表も臨
 席して指導 円瑛、王一亭氏等を主席
 団に
 11. 25 満洲国新教育令 愈よ明春公布 旧政
 権時代の自由主義的教育方針を道徳教
 育中心に
 11. 25 北支を探る(6) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 11. 25 満洲国に旅して (一二) 岩野喜久代
 11. 26 支那仏教史家の 奮起を熱望す (四)
 能令実円
 11. 26 北支を探る(7) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 11. 26 満洲国に旅して (一三) 岩野喜久代
 11. 27 綏遠事件の直接原因 傅作義の大喇嘛
 虐殺から 内蒙義軍が奮起 滿場一致
 で 綏遠將士へ謝電 中国仏教会全国
 代表大会
 11. 27 満洲靈廟の西岡氏 大阪で大募金計画
 日滿戦没軍人慰靈や 日滿僧の大挙
 托鉢
 11. 27 西本満洲開教本部 愈新京に移転す
 11. 27 曹洞満洲布教 総監部主事に 井上道
 友氏起用
 11. 27 北支を探る(8) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 11. 27 満洲国に旅して (一四) 岩野喜久代
 11. 28 支那仏教史家の 奮起を熱望す (五)
 能令実円
 11. 28 印度壁画の大成者 野生司画伯歓迎会
 関係団体が共催 来月十二日、上野
 精養軒で
 11. 28 北支を探る(9) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 11. 28 満洲国に旅して (一五) 岩野喜久代
 11. 28 満洲国小学校に 日人教師配置 教育
 刷新六ヶ年計画
 11. 29 マホメットと日本(上) 教徒の対日
 関心熾盛 本多沛亭
 11. 29 北支を探る(10) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 11. 29 満洲国に旅して (一六) 岩野喜久代
 12. 1 マホメットと日本(下) 教徒の対日
 関心熾盛 本多沛亭
 12. 1 北支を探る(11) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 12. 1 満洲国に旅して (一七) 岩野喜久代
 12. 2 南鮮華嚴寺に詣でて (上) 橋爪観秀
 12. 3 北支を探る(12) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 12. 3 西藏仏教 伝米攻 立花秀孝氏
 12. 3 大派、赤峰布教所で 在留邦人に 満
 洲語を
 12. 3 訪問華報告
 12. 3 南鮮華嚴寺に詣でて (中) 橋爪観秀
 12. 4 南鮮華嚴寺に詣でて (下) 橋爪観秀
 12. 4 中国仏教徒の 救済運動猛烈 全国的
 に護国 息災法会執行 義捐金募集
 12. 4 翁の愛観が 蒙人の薬に 太田覚眠氏
 の悲壯な活躍
 12. 4 武田範之和尚の躍る 日韓合併の全貌
 伊東痴遊氏が執筆 中野東英氏の念
 願叶ふ
 12. 4 故段祺瑞氏の 追悼会執行 高野と帝
 都で
 12. 5 朔風に乗る満・台の話題
 満洲国の宗教 調査の旅から帰る
 山崎精華氏談
 内台融和のため 本島人教化の急務
 幼児教化実施の台南本願寺 大派福
 業副議長視察談
 バイブル中心に 朝鮮基督教の新運動
 信者一万を突破 第一公議會を開く
 12. 5 満洲国に旅して (一九) 岩野喜久代
 12. 5 北支を探る(13) -南支巡礼の旅につ
 いで- 中華仏教研究会員 春日礼智
 12. 5 左翼犯罪者監視に 中国に反省院施設
 世界は思想犯に悩む
 12. 6 一氷雪を衝いて- 酷寒馬上行脚 寄
 生的存在を恥辱とし 満洲土民の宗教
 工作へ 大派ハルピン月輪開教使が
 北滿奥地慰問慰靈施業行脚
 12. 6 会員の冥霊を祀る 奉天に協和塔建設
 -満洲国の協和運動基本-
 12. 6 全日本仏青からも 暹羅仏青へメッセー
 チ 朝日訪暹機に託し
 12. 6 統々新築の浄 宗朝鮮開教区
 12. 6 中国蒙蔵委員会 辺疆宗教領袖等を招
 集
 12. 8 顔中にツララを垂し 本尊を背に施業

- 行 宗教的には寂寥の地 大派月輪氏
第一信
1936. 12. 8 皇軍症候は馬、楯で 部落救済 宣撫
に活躍 討伐だけが仕事ではない
12. 9 ヶット博士歓迎会
12. 9 匪偽軍に告ぐ 醒めよ同胞達 急ぎ中
国軍隊に帰れ 内蒙、綏遠両軍の戦ひ
で 蒋介石の“兵に告ぐ”
12. 9 中国災区救護団総部 団長に円瑛法師
常務理事会で決議
12. 9 朝鮮別院完成 更に満洲へ 延びる黄
檠宗
12. 9 台北浄宗別 院完成近し
12. 9 南京・杭州・蘇州方面へ 大派松本氏
慰問行脚 呉鉄城氏と歓談
12. 9 満洲国文教部が 国民生活改善への調
査 民衆信仰から葬祭等に至る迄
12. 9 駒大にも愈よ明春から “満洲科”を
創設 土民の開教師を速成 曹洞宗の
満洲開教躍進
12. 9 浄宗樺太開教監督 勝部清憲氏に決る
12. 9 日満合併で 満洲図書会社設立 教科
書の印刷統制
12. 9 朝鮮仏青等 の仏教講演
12. 10 大亜細亜協会 京都支部の結成 あす、
発会式挙行
12. 10 匪族出沒の哈喇河子に 唯一人の日本
青年 米を作って孤軍奮闘 大派月輪
開教使 (第二信)
12. 10 日華の国交憂慮の際 彼此仏徒神前の
快報 福田氏生前の努力遂に報はれ
厦門南普陀寺で藏經贈受式
12. 10 満鮮、米布開教従事者 養成機関の拡
大 西本布研、改組か
12. 10 脱兎の如く慌しく来朝 直ぐ帰るダッ
ト博士 けふ、歓迎会開く 国際仏教
協会で
12. 11 友愛と平和をもとめて 阿育王を思念
す 在東京 ラス・ビハリ・ボース
12. 11 満洲人間にも 神式行事流行る 神社
で国旗掲揚式や神前結婚式を挙行
12. 11 満人子弟に開放した 大連高女に好感
西本全滿布教使 川瀬真証氏帰る
12. 11 日華仏教学会 今夜、理事会開く 後
任主事の詮衡を中心に
12. 12 盟邦満洲国に基督教連合会生る 十一団
体代表集り 去一日、歴史的創立總會
満洲学術調査の旅 (二) - “北支を
探る”につづく- 春日礼智
12. 12 国際仏教協会の ダット博士歓迎
12. 12 日華仏教学会 藤井草宣氏により 豊
橋へ移転か きのふ理事会で協議
12. 13 娯楽機関は殆ど絶無 北滿奥地の寂し
さ 月遅れの雑誌が貴重品 大派月輪
氏第三信
12. 13 廃毀の運命に 遭遇した朝鮮寺院 将
米朝鮮進出に考慮 黄檠、四海部長談
12. 13 明年第三回訪華団組織 南北に別れて
視察 日華仏研、明年度事業
12. 13 満洲学術調査の旅 (二) 春日礼智
12. 15 対支外交 釈瓢斎
12. 15 血を吐く苦闘談 壁画完成を讀ふ、野
生司画伯貴重歓迎会
12. 15 印度と仏教を語る
12. 15 満洲学術調査の旅 (三) 春日礼智
12. 15 学究的機関の 特色發揮に努む 反省
的申合せをなす 日華仏教学会理事会
12. 16 歩み寄るアーリヤ教と仏教 印度各所
に仏教寺院建立 献身的に働く米沢領
事と 大金持ピラル氏の努力
12. 16 上山善治氏 満洲国視察
12. 17 龍大に満語科 新設等建言 西本当局
と 都甲氏懇談
12. 17 皇軍慰問 の為渡満
12. 18 蒋介石と張学良 (上) 武田雷雄
12. 18 朝鮮基督教中 央協会堂設立
12. 18 浄那の時局問題で 日華密教青年会が
昨夜、懇談会開く
12. 18 満洲国開教の 根本案の基礎づけ 第
三次の会見を遂げた 西本当局と都甲
氏
12. 19 蒋介石と張学良 (下) 武田雷雄
12. 19 成道の日 日本仏徒の神前メッセー
ジは 両国の幸福な友好増進 大谷光照
法主に宛てた シャム首相のメッセー
ジ
12. 19 新婦朝の大久保氏に 聴くトルコの宗
教事情 宗教問題研究会が
12. 20 従来の対蒙政策に 多分の反省を促す
政策の根幹をなす喇嘛教 新に慎重
考究する 示唆に富む 喇嘛教政策論
吉井芳純氏語る
12. 20 動乱支那の 今後を語る 日華密教青
年会
12. 20 満洲国の 孔道尊崇 各県文廟 修理
を急ぐ
12. 20 北平仏教会 “微妙声” 創刊
12. 22 東洋民族の団結は お互いの理解が緊
要と “回教文化研” 誕生 外務省文化
事業部援助の下に 近く発会式を挙ぐ
事變の功で 表彰状下附 上海西別院
に
12. 22 印度の大乗仏教学者 ダット教授の視
察 きのふ、谷大・龍大に
12. 23 大阪在住半島出身者の団体が 自発的
に大麻拜受 各宗庁に 神棚を設けて
奉斎
12. 23 西藏文書の要求 出版製作苦解消に
活字印刷の研究 各方面から期待さる
12. 24 社会事情を調査 使節を再検討 京城
府の新計画
12. 24 汎太仏青満洲開催には オルグの派遣

- が必要 半年位準備を指導せよ 苦心の対滿仏教工作
1936. 12. 24 共産党排撃 新京在住の白露人のデモ
12. 24 支那から 学者招聘 牛津大学が
12. 25 トンダ迷惑 浦塩本願寺 戸泉氏受難
12. 25 遂に出来上った 満洲国刑法典 明年一月四日公布 三月一日より施行
12. 27 満洲国 児童の向学心旺盛で 小学校の入学難 奉天では六年計画で緩和
12. 27 中国仏学会・太虚法師 蒋介石氏の安全祈禱を電請 全国仏教緇素同仁に盛儀を極めた 段祺瑞氏追悼会 許駐日大使等参列
12. 27 許駐日大使の 懇ろな感謝状
12. 27 京城最初のノシ餅運動 西本願寺別院で
12. 27 台湾、琉球の 宗教事情視察 来馬琢道氏
12. 27 結成発会急ぐ “東亜密教協会” 中日密教研究会 日本側援助機関
12. 27 全滿教職者 理想の象徴 大教育塔建設
12. 28 海外派遣艦隊へ 明春、慰問使派遣 臨黄各派が慰問状 動乱続く上海で接心会
12. 28 南洋島民の教化は まづ教育から 島民住宅を塾風に改造 内日式学園創立
1937. 1. 6 朝鮮同胞教化の爲め 内地仏教家の奮起を望む(上) 李元錫
1. 6 新興国トルコを中心に 欧州最近の宗教情勢 大久保幸次氏帰朝談 東洋の文化圏の 西半分占める回教 その世界的動向への 正しい認識が重要 大乘仏教の精華を 伝えることの急務 トルコの仏教復興
1. 6 朝鮮同胞教化の爲め 内地仏教家の奮起を望む(下) 李元錫
1. 7 天津に西本別院 建設までやる 無から生じた教線 桑野淳城氏談
1. 7 帝国の“南進論”に拍車 真如法親王の顕彰運動再燃 盤谷に建碑・具体化に期待
1. 7 炬辺雑談 明石染人 一、画家の近著
1. 7 牧場経営を捨てて 南洋開教の途へ 大派越前の旭賢雄氏
1. 7 孔子の誕生日が 間違っている 新城博士が誤謬を指摘 孔子様の末裔 徳成氏の結婚
1. 8 炬辺雑談 明石染人 二、北滿国境線を画く
1. 8 布利秋氏に聴く(1) 女装の話 滿ソ国境探検談 中外クラブ座談会
1. 8 鮮人同胞の ため奮闘 東亜博愛会 若松兎三郎氏
1. 9 「台湾仏化」発行
1. 9 布利秋氏に聴く(2) 女装の話 滿ソ国境探検談 中外クラブ座談会
1. 9 支那へは誰を派遣? 日華仏教研 目下詮衡中
1. 9 東滿武装 移民開教へ 主義清算の大派佐々木氏
1. 10 回教徒と提携して 牧羊場を経営 多角農業のサンプルを示す 大派滿洲間島布教所 自ら範を示して 副業として奨励 天児開教使は語る
1. 10 在滿皇軍の 武運長久祈念 立正高女 布利秋氏に聴く(3) 女装の話 滿ソ国境探検談 中外クラブ座談会
1. 12 滿洲研究の 留学生派遣 西本願寺で計画
1. 12 布利秋氏に聴く(4) 女装の話 滿ソ国境探検談 中外クラブ座談会
1. 13 布利秋氏に聴く(5) 女装の話 滿ソ国境探検談 中外クラブ座談会
1. 14 神聖冒瀆罪には 滿洲国は嚴罰主義 祖先崇拜重視の新刑法
1. 14 日本仏教徒の 海外発展の先駆 東本上海別院六十年史 五月、上海で法主親修記念法要
1. 15 支那仏教の言論機関は説く 支那仏教徒は敵か味方か 仏教的には怨親平等の信念だが 国民的立場から別に文句あり
1. 16 新生の日本回教文化協会 堂々の陣容 確立す 注目すべき事業内容
1. 16 滯印生活漫描 角度を変えた日本観 入浴した野生司画伯
1. 16 滿洲皇帝訪日宣詔記念 最初の大美術展 日滿文化協会の主催で
1. 20 デイゴス小学校では 児童の七割が混血児 グバオ各校巡回中の 大派、保木開教使談
1. 20 印度交友会 ム画伯歓迎
1. 21 日本美術研究に 印度のカ教授 二月上旬来朝
1. 21 滿洲国の鄭前総理が 王道研究院を設立 邸宅と私財十万円投出す
1. 21 駒大に開く滿洲語科 六ヶ月の短期養成 講師も間に合ふ
1. 22 ハルビン大谷会館 見事に昨冬竣工
1. 23 中国仏教会災区救護団 一百の青年僧に軍事訓練 終了後は緩遠へ送り出す
1. 23 タゴール翁の 回想の月など二三 野生司香雲画伯談片
1. 24 阿片問題で 政府に陳情運動 中国仏教会が
1. 26 滿洲国に活躍する 人物養成の新計画 西本願寺で実施
1. 26 イスラムに於ける アフマディヤ運動 アブデュル・カディール・ニヤーズ

1937. 1. 26 五族融和に 実績挙る 新京に見る
臨濟禪の興隆
1. 27 明年の汎太仏青大会は 満洲国開催に
決定す 連盟初の全国理事会
1. 27 会の更生を図る 日華仏教学会理事会
1. 27 行け、満洲へ！ 彼地で飛躍の学生を
龍大で募集公示
1. 27 社説 仏教と満洲移民 を読みて(上)
北満水豊鎮、第一次彌栄移民団 本
多賢純
1. 28 台湾彰化便り
1. 28 日清文化協会が 大清歴朝実録完成
更に古典出版
1. 28 第三回日華仏研 訪華団の顔触れ大半
決る 今夏、交換使節実現か
1. 28 光照法主の外護で 支那仏教史学会生
れん 新鋭学徒の純鑽鐵機関 最初の
準備委員会開く
1. 28 満洲宗教事情と 日校健児団の資料
谷大で月輪開教使が発表
1. 28 本紙を満洲留 学生の慰問に 台宗伝
道部
1. 28 印度のム画伯 歓迎会盛ん
1. 28 日華親善殿が 静岡の名所に
1. 28 大谷光瑞氏 渡台延ぶ
1. 29 日支の外交停頓を外に 両国民の心に
結ぶ親善 永田氏初め朝野の名士発起
で 故段祺瑞氏の追悼会を営む
1. 29 サイパン・ガラパン街に “大谷学院”
創設 土人子弟を收容教育
1. 30 台湾本島人への 各宗の布教は困難
台湾、琉球を視察した 米馬塚道氏の
土産話
1. 30 斑禪喇嘛に 一等勲章 辺境教化の功
で 国民政府から
1. 31 満洲開教区へ 新教会設立 浄土宗会
に提出
1. 31 移民宿泊使節を 大派当局に陳情 佳
木斯の吉田開教使
1. 31 印度の文化使節 “日印文化協会” 生
みの親 ナグ教授愈よ来朝
1. 31 満洲国の首都新京では 街頭死者年に
千名 首都の景観を害すると 市公署
が処理に努力
2. 2 開教使の被選挙権 一外務省令の改廃
を要望— 浅野研真
2. 2 李教主ら 本山で得度
2. 2 支那では尼さんにも 軍事訓練を実施
浙江省で尼衆訓練班組織
2. 2 満洲開教に巨大な一線 移民中心の開
教使養成か “屯田僧”に怒りて秘策
を練る 大派、藤岡満洲開教監督談
2. 2 台北西本通信
2. 3 支那貧民救済に 寒夜托鉢行脚 天津
仏教連合会
2. 3 帝都の教線拡張と 海外布教教育に努
力
2. 4 中国僧の抗日問題 中国仏教徒にのみ
その非を責めるな 香港通一法師の
主張
2. 4 『中国人不打中国人』 抜記帳
2. 5 親日か親華か 台湾で拘束された支那
僧 厦門に帰日実情報告
2. 5 満蒙僧六十余名が 満洲霊廟建立の托
鉢 三月上旬米阪・日下準備中
2. 6 けふ本島人が 大派で得度 林火生君
2. 6 清真寺協和 会を組織 満洲国回教徒
2. 7 支那仏教研究の学徒が 「支那仏教史
学会」を結成 研究雑誌、四月に発刊
光照法主も同人として参加
2. 7 対支開教戦線に異常 外務省の「寺院
教会取締規則」 特殊事情の考慮なし
2. 9 鮮人散在地域に 矯風会新たに生まる
注目すべき新方針
2. 9 満洲僧も交って 叡中生本社見学
2. 9 全国仏教徒連合して “中国仏徒護国
和平会” 結成 班禪喇嘛、太虚法師を
導師に 王一亭氏を名誉理事長に
2. 10 民族教化に 満語を修得 新京妙心別
院
2. 10 波上独語 気の毒な エチオピア(上)
大島天恩
2. 11 中国仏教徒団結
2. 11 印度・那爛陀寺の 復興勸募運動 朱
慶燭、王一亭氏等の発起
2. 11 満洲国齊々哈爾で 反無神論示威運動
ソ連の反宗大会に対し
2. 11 日宗満洲開教司監部の 建設案蒔直し
経王寺側移転を拒む
2. 13 印度の文化(上) 一人類の指導者と
しての印度 人—世界に於ける印度の
地位 印度志士 ラス・ビハリ・ポー
ス
2. 13 基督者の 花嫁を媒介 救世軍が 満
洲移民へ
2. 13 波上独語 気の毒な エチオピア(下)
大島天恩
2. 14 印度の文化(下) 一人類の指導者と
しての印度 人—世界に於ける印度の
地位 印度志士 ラス・ビハリ・ポー
ス
2. 14 イスラムの観たる十字架(上) A・
Q・ニヤーズ
2. 14 必須科目として 回教講座を開設 日
本大学宗教科
2. 14 北平柏林寺の 清刻大蔵経 林主席発
起で再び印刷
2. 16 イスラムの観たる十字架(中) A・
Q・ニヤーズ
2. 16 満洲建国五周年記念日 三月一日から
各種行事 建国精神作興週間執行
2. 16 満人青年開教の 挺身隊を養成 天理

- 教滿洲伝道庁が 奉天に天理学院設立
1937. 2. 16 日本大学に 拓殖科新設
2. 16 朝鮮教会 設立運動 西本と懇談
2. 17 イスラムの観たる十字架 (下) A・Q・ニヤーズ
2. 17 萩原梵語辞典 第一期の事業完成 今夏中に第一分冊出版
2. 17 台湾の仏教系 唯一の中学 台北中学の発展
2. 17 印度の哲学者 ジャ氏来朝
2. 17 朝鮮仁川から 藤村氏再選の概
2. 18 南洋異風景 サイパン 日野律 一
2. 18 汎太仏青大会記念 満蒙人に贈る仏教 既刊「仏教聖典」の漢訳と 日滿蒙対訳の「釈尊伝」出版 各方面に期待さる
2. 18 全鮮に誇る使節 本年度完成の土幕民移植事業 京城和光教団の躍進
2. 19 武田範之和尚に就いて (1) 祥雲晩成
2. 19 南洋異風景 サイパン 日野律 二
2. 19 マニラ聖体大会を語る 日本代表は会議の花形 古屋司祭の土産話
2. 19 在鮮大教団の 転向相次ぐ! 朝鮮元玄教の転向 拝天教と兜率思想の結合 大派に帰属を申出る 西本教師認検定委員 現在の所許さぬ 先づ教義を理解せしむ 上野開教監督は語る
2. 19 東亜禪林の 申込み超過
2. 20 黒河省より
2. 20 南洋異風景 サイパン 日野律 三
2. 20 武田範之和尚に就いて (2) 祥雲晩成
2. 20 満洲移民の国策に応じ 天理村完成に邁進 鉄道を新設、産業開発に資す 来年、第三次移民入植
2. 20 朝鮮開教初の 鮮人仏前結婚 扶餘東本願寺
2. 21 南洋異風景 サイパン 日野律 四
2. 21 武田範之和尚に就いて (3) 祥雲晩成
2. 21 渡満開教使らに 満洲教育を施す 西本願寺で開設
2. 23 武田範之和尚に就いて (4) 祥雲晩成
2. 24 印・羅・支諸国に 文化使節を派遣 東方文化連盟で決議
2. 24 日蓮親善に拍車 四月より東京外語に シャム語講座新設
2. 24 満洲人牧師を養成 満洲伝道を計画 基教連盟の満洲教会
2. 25 ブローカーの手に踊るな 南洋ダウァオに進む 六千余の花嫁問題に就いて 日本の姉妹達に警告す
2. 25 日華基教連盟の交歓 交誼増進のメツ
- セージ
2. 26 李象龍とは どんな人か? 朝鮮水雲教主
2. 27 武田範之和尚に就いて (5) 祥雲晩成
2. 27 支那心道法師 日本へ留学
2. 27 支那太虚法師 無錫で静養中
2. 28 孟喬大剛先生 高田集蔵 (1)
2. 28 武田範之和尚に就いて (6) 祥雲晩成
2. 28 廟行鎮に三勇士の 英霊を弔ふ (上) 上海別院 太田孝輝
3. 2 孟喬大剛先生 高田集蔵 (2)
3. 2 武田範之和尚に就いて (7) 祥雲晩成
3. 2 孟喬大剛先生 高田集蔵 (2)
3. 2 廟行鎮に三勇士の 英霊を弔ふ (中) 上海別院 太田孝輝
3. 2 大阪で喇嘛僧の“跳舞” 日、滿、蒙三国僧侶合同で 亜細亜興隆祈禱会営む
3. 3 武田範之和尚に就いて (8) 祥雲晩成
3. 3 孟喬大剛先生 高田集蔵 (3)
3. 3 世界的大著に適はしき 超豪華版「新西域記」 経典・美術・工芸等學術の 綜合宝庫として刊行
3. 3 廟行鎮に三勇士の 英霊を弔ふ (下) 上海別院 太田孝輝
3. 4 孟喬大剛先生 高田集蔵 (4)
3. 4 武田範之和尚に就いて (9) 祥雲晩成
3. 4 祟ったバイブルの聖句 満洲、プレスビテリアン教会 突如、礼拝中止を命ぜらる
3. 4 日、印、支三国提携して 亜細亜問題研究会 今月末、神戸で発起人会
3. 4 中国物故要 人の追悼会
3. 5 武田範之和尚に就いて (10) 祥雲晩成
3. 5 亜細亜興隆法会に 大阪仏教団の参列
3. 6 武田範之和尚に就いて (11) 祥雲晩成
3. 6 日露戦役慰霊大法要厳修
3. 6 日滿蒙僧の 固き握手 滿蒙僧一行きのふ来阪
3. 6 東亜文明の黎明期に齎す 彩文土器発掘
3. 6 宗教専門学校設立や 日滿宗教留学生交換など 愈々満洲国奉天市公署が 宗団統制指導方針を樹立
3. 6 今度は満人少年を 留学せしめる 西本願寺の対滿策
3. 6 梵語学は近く印度 学界を制覇せん ハワイアン吉上氏帰朝
3. 6 蒙古の文化開発に 同地の回教を研究

- 善隣協会で具体案考究
1937. 3. 7 外交国策をどうする(6) 法学博士 蘆田均
3. 7 国際仏教徒の手で 世界平和へ第一歩 上海の日、米、中、印代表協議 近く「仏徒平和会議」結成
3. 7 国を捨てて宗教を求める 白系露人の熱烈さ 反宗教排撃講演会に出席の大派佳木斯、吉田氏語る
3. 7 亜細亞への 認識深む 満洲事業講習
3. 7 東亜天文協会 けふ臨時総会
3. 9 外交国策をどうする(7) 法学博士 蘆田均
3. 9 武田範之和尚に就て(12) 祥雲晩成
3. 9 亜細亞興隆祈祷会に 大阪仏教団参加を拒絶 国際情勢と教義上の見地から 単に殉国慰霊祭にのみ参加
3. 9 国語不解者には 過怠料を課す 台南州新化郡の 国語普及徹底運動
3. 9 科学 日本の精巧誇る プラタリウム見学など 東亜天文協会総会
3. 9 部隊葬に新例 故東少佐未亡人の申請で 仏式で厳かに執行
3. 9 ハッキリせぬ 台湾神宮宮司 内定の秋岡氏 再び拒絶す
- 3.10 外交国策をどうする(8) 法学博士 蘆田均
- 3.10 武田範之和尚に就て(13) 祥雲晩成
- 3.10 けふ日露戦 役追悼法要
- 3.10 満洲国東辺復興工作に 宗教各派代表活動 講演会開催、宣撫に努力
- 3.10 島民に 国民精神の涵養 台湾神社の御造営 百万円で外苑施設
- 3.10 彼我文化の研究に 日印文化協会創設か 関係者で奇々準備を進む
- 3.11 外交国策をどうする(9) 法学博士 蘆田均
- 3.11 法要に織りなす 非常時風景 日露戦役卅三回忌法要
- 3.11 政治上より見たる トルコの回教 駐土特命全権大使 徳川家正氏談
- 3.11 武田範之和尚に就いて 祥雲晩成師に呈す 福岡 草野 江上秀静
- 3.12 外交国策をどうする(10) 法学博士 蘆田均
- 3.12 亜細亞興隆と大阪仏教団
- 3.12 満洲国奉天省が 思想工作に全力 建国精神の本義徹底
- 3.12 官民合同で 釜山の花まつり 新しい試みも加へて 極めて盛況を予想
- 3.12 帰属問題愈よ実現 朝鮮水雲教々主ら 最高幹部の徳度式 十六日、東本願寺で行はる 今夜、一行晴れの上洛
- 3.12 台湾神宮々司 愈よ決定す 近く発令さる
- 3.12 朝鮮開教史上の異彩 大派金貞黙氏の偉業! 鮮人の帰依者数千 “新生学校” 設立と 十六出張所を擁す
- 3.12 蒙古喇嘛僧 跳鬼の伝説
- 3.13 外交国策をどうする(11) -日ソ相関ふか- 法学博士 蘆田均
- 3.13 台湾MTL の予防週間
- 3.13 朝鮮・水雲教が 仏教一本に帰す迄 本部に講習会も開催 大派本山から近く本尊下附
- 3.13 南洋に進展する 大谷派の開教 サイパン布教所本堂再建と ロタ島布教所新築
- 3.13 満洲国協和会主催で 日滿宗教代表懇談会 協和会と宗教団共同工作
- 3.13 歌集半島の村を読む 町田トシコ
- 3.13 鮮人釈放者の 対策をどうする? 大阪保護観察所が 一般事業家に質問
- 3.14 外交国策をどうする(12) -日ソ相関ふか- 法学博士 蘆田均
- 3.14 水雲教の大派帰属 ◇…とその将来性(一) 池浦南洋
- 3.14 日本仏教の偉大さに驚く わしの長寿は山中で 万難万苦を重ねたお蔭 水雲教・李教主と語る
- 3.14 満洲国佳木斯に 曹洞宗布教所建設 川瀬県参事の支持
- 3.14 日華基督教親善の 我が施設代表決る 一行は四月末出発 今秋、彼地使節団来朝
- 3.14 授業は龍大内で 訓練は山科別院 西本、満洲語学院は 愈よ四月五日開院
- 3.16 外交国策をどうする(13) -極東とロシア- 法学博士 蘆田均
- 3.16 水雲教の大派帰属 ◇…とその将来性(二) 池浦南洋
- 3.16 満洲国新京でも 各宗教代表懇談会 協和会中央本部主催
- 3.16 ハルビン極楽寺 如光氏から書信
- 3.17 外交国策をどうする(14) -極東とロシア- 法学博士 蘆田均
- 3.17 水雲教の大派帰属 ◇…とその将来性(二) 池浦南洋
- 3.17 李旧教主の 得度感激談
- 3.17 東方文化連盟 創立五周年 記念大講演会
- 3.17 満洲大同仏教会と 提携指導等を協議 西本の全満主任会議
- 3.17 満洲国の邦人子弟 教育に光明 天理教婦人会が新京に “ひのもと幼稚園” 開設
- 3.18 水雲教の大派帰属 ◇…とその将来性(四) 池浦南洋
- 3.18 蒙古の少年、今度は 西本願寺に留学 近く、ハイラルから
- 3.18 東方文化連盟 創立五周年 京都講演会

1937. 3. 18 史実を通じて 内鮮一如へ 国体明徴の徹底化で 半島の教科書改定
3. 19 半島民族の王座 天道教(一) 金孝敬
3. 19 水雲教の大派帰属 ◇…とその将来性(五) 池浦南洋
3. 19 満洲僧ら登壇
3. 19 満洲国の上丁 仲春孔子祭
3. 19 龍大の二留学生と 満洲語学院生決る 満洲国の開拓者
3. 19 支那文化研究に 学生の交敬使節 東大支那学科学学生十三名 明後日、神戸出帆
3. 19 蒙古の宗教 風俗展覧会
3. 20 半島民族の王座 天道教(二) 金孝敬
3. 20 聖地パレスチナへ 巡礼の途に上る 彼地に唯一の日本人藤田氏 アレキサンダー女史談
3. 20 李旧教主を絶対的に 崇拜する在阪信徒 大派、牧一岳氏談
3. 20 内鮮融和への関心 将来、公然と三十万半島出身 大阪府民へ布教可能
3. 21 半島民族の王座 天道教(三) 金孝敬
3. 21 上山氏愈よ 満洲視察へ
3. 23 半島民族の王座 天道教(四) 金孝敬
3. 23 印度と世界文明 印度志士 ラス・ビハリ・ボース
3. 23 奉天に朝鮮 寺院を建立 満洲国協会の斡旋で
3. 23 汎太仏青次回開催地 満洲国と正式決定 全日本仏青連盟の 全国理事会で議決
3. 23 東方文化連盟創立 五周年記念午餐会 昨日、京都ホテルで 夜は記念講演会
3. 23 支那仏教史学会 “支那仏教”の全学徒を糾合して愈よ成立 四月から研究誌発行
3. 24 半島民族の王座 天道教(五) 金孝敬
3. 24 チョウネ版西藏一切經 我国最初のお目見え 喇嘛王、四年前の約束果し 河口博士に送り届く 国外不出の貴重書
3. 25 半島民族の王座 天道教(六) 金孝敬
3. 25 目算外れの 満洲霊廟建設運動 近く満蒙僧を帰国せしむ 寄付行為氾濫の大阪
3. 25 満洲僧らの 比叡参拝団
3. 25 龍大の学士さんたち “満洲”をノックアウト 本山等で小首を傾ける
3. 25 名古屋で開催の 全日本仏青連盟大会
- プログラム決定す
満洲国開催を 正式に通牒
3. 25 白系露人の 宗教調査など 更生の意気に燃える ハルビン仏教青年学会
3. 25 汎太仏教大会満洲国開催 絶対反対論(1) 在満洲 半谷範成
3. 25 満洲語学院の 協議と異動
3. 26 全支に住職再教育施す 三民主義を規則で訓練 中国仏教会が寺廟住持 訓練規則を設け近く実施
3. 26 汎太仏教大会満洲国開催 絶対反対論(2) 在満洲 半谷範成
3. 26 半島人に授ける 日の丸五百本! 送還旅費も見積った 京都府協和会予算
3. 27 暹羅仏青に贈る 親善のメッセージ 訪暹少年団一行に託し 全日本仏青から
3. 27 サイパン東本願寺 改築実現近し 南洋唯一の大伽藍
3. 27 映画“カルマ”封切 日印親善の集ひ 国際芸術礼讃会
3. 27 在満将士武運 長久祈願祭 建部神社で
3. 27 満洲開教に警告 流れ込み僧防止 野心家は排せよ
3. 27 隣邦中華民国の 日本への希望(上) 中央通迅社東京特派員 陳博生氏の説く
3. 28 面目一新した 満洲大同仏教会 明如上人の面目がたつ 西本入野氏の近況報告
3. 28 日校少年団の 記念運動決る 満人団体も来訪 西本願寺法主慶事覚報
3. 28 隣邦中華民国の 日本への希望(下)
3. 28 満洲基督教牧師が 日本視察に来朝 四月一日、奉天出発
3. 31 日本内地化の 台湾東海岸 山本輝之氏土産話
3. 31 次期汎太仏青 満洲国開催に異議 慎重熟議の上、態度表明 宗教公論社主幹部会
3. 31 西藏、中国両 政府の連絡 緊密化計る
4. 1 同大神学学生 台湾伝道へ
4. 1 日華親善殿に瑞頭を寄進
4. 1 義州より(一) 杉山信三
4. 2 巴利三蔵のヒンディ訳 第四部成る
4. 2 義州より(二) 杉山信三
4. 2 浄土宗 南支へ教線拡張 福州に教会設置 主任に勝田円誠氏任命
4. 2 台湾神社宮司 その他異動 漸く決定す
4. 2 朝鮮仏教の振興方法等 三十一本山住持会 総督府に開催協議
4. 2 本派朝鮮教会 けふ発会式
4. 2 第一回全国 内鮮大会 大阪開催に内

- 定
1937. 4. 3 義州より(三) 杉山信三
4. 3 慣習の殻を脱ぐ 京城の花まつり 十周年と指導的立場から
4. 3 東亜民族文化協会 祭政一致の講演会 井上博士のパンフレットも配布
4. 3 海外布教を強調 予算案無事可決 仏立講政会議—第二日—
4. 6 義州より(四) 杉山信三
4. 6 畿内一千の神職集ひ 惟神の大道闡明を誓ふ 大楠公の英霊鎮る神戸市で 海外布教を強調 予算案無事可決—第二日—
4. 6 西本の満語 学院開院式
4. 7 無一物から出発して 満洲一の大別院を 刻苦慘澹二十八年 大派新田輪番引退
4. 7 波羅門教僧 ジャ氏来社
4. 7 毎日、天御中主神に 五度礼拝を捧ぐ 大日本イスラム教運動 有賀文八郎氏の献身的伝道
4. 9 新京高野山別院 敷地五千七百坪決定 南嶺郊外の公園地に
4. 9 新京で極東反宗排撃大会 東京で全世界大会を開催
4. 9 満洲基教教師団
4. 10 半島人仏徒も加はり 兩中大行進 中央公会堂の式典盛大
4. 11 満洲僧から 仏像等奇進 比叡山法要
4. 11 日支官民合同で 美し・大蔵経授経式 日本寄贈の大正大蔵経を 南普陀寺に納む
4. 11 支那誓堂山石窟 調査の婦朝文献 学会待望裡に近く発表 東方文化学院京都研究所
4. 13 天主教朝鮮伝道悲史(一) 金孝敬
4. 13 台湾民風是 正に乗出す 臨濟宗の宗教革正
4. 13 南洋ロタに 教会所竣成 島民教化に 浄宗の活躍
4. 13 上海の花祭(上) 太田孝輝
4. 13 東亜博愛会 会員大会
4. 14 天主教朝鮮伝道悲史(二) 金孝敬
4. 14 ガンデイの衣鉢 を継いだジャワ ハルラル・ネール(1) クリシュナラル・シュリドハラニ
4. 14 高野山大塔落慶法会に 北支仏教界の要人参列? 米朝を伝えられる三氏
4. 14 秦陸軍中将与 半島の少年 皇学館入学生
4. 14 山辺習学氏 満支巡講
4. 14 ポナベ島に 初の開教陣 日宗の躍進
4. 14 比叡山法要 満洲の団参 けふ神戸へ
4. 14 上海の花祭(下) 太田孝輝
4. 14 汎太仏青満洲国開催 全連の横車は 連盟の自殺的行為 宗教問題研究会が 更に態度を決定
4. 15 悉曇字記の文 を説明して大島伸太郎氏の謬を正す(上) 文学博士 萩原雲来
4. 15 天主教朝鮮伝道悲史(三) 金孝敬
4. 15 ガンデイの衣鉢 を継いだジャワ ハルラル・ネール(2) クリシュナラル・シュリドハラニ
4. 15 新京の大派 満洲別院 一日、上棟式
4. 15 軍属祭官設置問題 満洲神職会で 実現促進を決議 近く軍の意向打診
4. 15 日滿文教協会の誕生(上) 四湖山秀暢
4. 15 満洲伝道に 献金参加 組合教会青連
4. 16 悉曇字記の文 を説明して大島伸太郎氏の謬を正す(下) 文学博士 萩原雲来
4. 16 天主教朝鮮伝道悲史(四) 金孝敬
4. 16 ガンデイの衣鉢 を継いだジャワ ハルラル・ネール(3) クリシュナラル・シュリドハラニ
4. 16 日印親善の 芸術の集ひ 国際芸術礼讃会
4. 16 日滿文教協会の誕生(下) 四湖山秀暢
4. 16 在滿基教教師 十四名入洛
4. 16 胡適氏の説く 支那の国体明徴 仏教渡来前の純支那思想 ハーバード大学で講演
4. 17 ガンデイの衣鉢 を継いだジャワ ハルラル・ネール(4) クリシュナラル・シュリドハラニ
4. 17 半島人の骨格 を弱くするモノ 唐辛子 京城帝大の申博士の 優れた研究
4. 17 鮮語で正信偈 先生は上野開教監督 旧水雲教本部視察の 大派宗議、間野氏談
4. 18 ガンデイの衣鉢 を継いだジャワ ハルラル・ネール(5) クリシュナラル・シュリドハラニ
4. 18 完成を急ぐ 台北浄宗別院 全島に偉容誇る
4. 18 大連の花まつり
4. 20 ガンデイの衣鉢 を継いだジャワ ハルラル・ネール(6) クリシュナラル・シュリドハラニ
4. 20 “軍事画即宗教画”の 新境地開拓に 精進 満蒙再認識の“追憶展”を 近く満洲でも開きたい 小早川秋声画伯談
4. 20 満洲国の宗教 事情を語る 文教部学務局 林英信氏
4. 20 満洲国に 建国大学
4. 20 半島同胞第二世の 未就学児童へ福音 夜学開設、普通教育施す 福井日出善隣館

1937. 4. 20 奉天花まつり
4. 21 ガンデイの衣鉢 を継いだジャワ ハルラル・ネール(7) クリシュナラル・シュリドハラニ
4. 21 平等通昭氏近著「印度文学読本」(一) 徳永茅生
4. 21 支那仏跡視察 七月中旬出発
4. 21 満洲大同仏教 総会代表来朝 光照法主の 慶事奉祝に
4. 21 朝鮮仏教青年会委員会
4. 21 仏教と満洲(一) 遼陽城内 念仏堂 藤井晋
4. 21 イスラム教の日本聖典 香蘭経の翻訳 成る 有賀文八郎翁の苦心
4. 22 平等通昭氏近著「印度文学読本」(二) 徳永茅生
4. 22 我国最初の 暹日辞典の編纂 活字がないので一苦勞 近く語彙の蒐集終る
4. 22 満洲イスラム総会
4. 22 軍属祭官設置問題 満洲神職会では植田閔東軍司令官に建議 近く具体運動に着手
4. 22 仏教と満洲(二) 遼陽城内 念仏堂 藤井晋
4. 22 満洲王道教の 最高学府設立 鄭前總理の王道学院 愈五月二日開校式
4. 22 日暹芸術使節 歓迎演奏会
4. 23 海の彼方南洋に 初めて響く鐘の音 午後九時・島民の祈り 躍進、浄宗の南洋開教
4. 23 汎太仏青満洲国開催問題 満洲国仏教界の 現勢力では開催不能 未だ決定の通告なし 如光法師、率直に語る
4. 23 満洲国から 仏教視察 仏青大会出席
4. 23 明年支那杭州で 世界宣教大会開く 基教戦線の拡大強化
4. 23 西田天香氏 南洋へ出発
4. 24 大連明照寺の 本堂竣成近し
4. 24 満人への開教は 地下運動的に 外形的整備に努める 他宗教の真似はせぬ 松山布教管理所長談 金光教の満洲開教三十周年
4. 24 満洲布教に行くなら 移民の第一線へ立て 都市集中をやめ、地方分散へ 上山善治氏視察談
4. 24 飽く迄汎太仏青満洲 国開催の初志に邁進
4. 24 明春、シンガポールで 先史考古学大会 我国からも初の代表派遣 各国学者注目の的
4. 24 縁り深き日暹寺に 五月一日発会式を挙行 “日暹仏教協会” 結成
4. 24 友邦シャム 日本視察団
4. 24 ハルピン白系露人達 日本仏教徒の承認求む 更に全日本仏青 連盟大会で語る “打倒反宗教運動”
4. 25 支配力の源泉 ポース(天来)
4. 25 平等通昭氏近著「印度文学読本」(三) 徳永茅生
4. 25 神社界有志の主唱で 満洲鮮人部落に神社建立 総督府外事課で近く着工
4. 25 満洲居士団 結縁館灌頂うく
4. 25 仏教と満洲(三) 遼陽城内 念仏堂 藤井晋
4. 27 満洲布教考
4. 27 けふ中日を迎える 比叡山開創一千百五十年 記念大法要の盛儀 満洲僧参拝
4. 27 移民開教使養成機関等 満洲四ヶ所に本部設置 開教監督部が指導統制 大派満洲開教陣の刷新
4. 27 印度鹿野苑に 中華寺建立
4. 28 平等通昭氏近著「印度文学読本」(四) 徳永茅生
4. 28 日支修好使節 中華基督教全国 大会へ出発
4. 28 仏教と満洲(四) 遼陽城内 念仏堂 藤井晋
4. 28 印度デー
4. 29 梅谷座主から 満洲別院へ 仏具を寄進
5. 1 王道楽土の礎石に 新京般若寺に寄進 大蔵経 故福田宏一氏の発願
5. 2 俄然、シャム国への 誘導論台頭す 好村・パンチョン両氏の折衝 汎太仏青次期開催
5. 2 仏教と満洲(五) 遼陽城内 念仏堂 藤井晋
5. 2 半島同胞教化の 道場と住宅竣工 四日“報国邑”開場式 伏見の仏教報国会
5. 4 宗教を通じて一端を知る 蒋介石の社会政策 中国メソ年会で演説
5. 4 縁りの殿堂に 日暹仏教協会誕生 華々しき発会式
5. 5 新婚の婦人とともに 満農に身を投ず 堀善亮氏の日満融合運動
5. 5 内鮮協議会や 職員の養成に努む 輔成会の新事業
5. 5 全国最初の 内鮮協和事業講習 大阪社事開館で
5. 5 満洲僧一行 本社訪問
5. 6 広東の生地獄 -レプラ患者虐殺事件について- 栗山耕三
5. 6 忘れられたる重大問題 鮮・台に於る 神社問題
5. 6 日印交換学生ス嬢 きのふ叡山で灌頂 更に台密を研究
5. 6 世界教育会議に 支那側参加
5. 6 曹洞、満洲布教法 新に制定発布 直に総監部を新京へ 噂に上る後任総監
5. 6 西本台湾総長 小笠原氏就任

1937. 5. 7 奥満洲の蒙古青年に 西本の学校に入
学
5. 7 支那国民政府外交部が 僧侶の外遊に
制限 “国家の対面汚す者が多い”と
5. 8 “満洲国がまだ支那領” 改訂なしに
七年間 新英和大辞典の失態
5. 8 遼陽県下を一斉巡回 日本仏教宣揚運
動 仏青大会出席の満洲僧等 感激を
胸に昨日帰滿
5. 8 台州満鮮祝 察団日程
5. 9 華北基督教教育 協会視察団 けふ東本
参拝
5. 9 満洲国新学制 改正令を公布 東方道
徳を徳育の基本 日本語も国語の一種
として教授
5. 9 満洲王道学院 教授顔触決定
5. 11 銃を笏に代へて 北満の野に奉仕 赤
誠に部隊長等感激 梨樹鎮八幡宮建立
武装神職感激談
5. 11 旧劇を上演し民衆を教化 鉄道は臨時
列車増発 北満極楽寺浴仏会
5. 11 シンガポールの日本娘 (1) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 11 日印協会本 年度総会
5. 12 世界人口の趨勢 (上) 印度志士 ポー
ス (天来)
5. 12 血達磨の怪支那人が 大派青島別院に
侵入 放火・暴行の不祥事件
5. 12 カナカ族 初の仏教傳 大谷派南洋
開教の収穫
5. 12 日宗伝道株式会社 創立総会開く 取
締役社長は宇都宮氏
5. 12 シンガポールの日本娘 (2) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 13 世界人口の趨勢 (下) 印度志士 ポー
ス (天来)
5. 13 シンガポールの日本娘 (3) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 13 半島人受刑者 の教誨問題 乙亥会協
議会
5. 14 南冥悲史の人 真如法親王 (上) ◇
未刊著作 “日本南海史” 中より◇ 南
条蘆夫
5. 14 上海菩提会が 成道日を四月十五日に
改正 記念節制定を政府に陳情 華北
居士林は反対
5. 14 光照法主の 満洲行き 鹿兒島、大連
の 西別院の法要
5. 14 印度音楽の 研究披露 仏音協会が
5. 14 シンガポールの日本娘 (4) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 15 シンガポールの日本娘 (5) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 15 南冥悲史の人 真如法親王 (中) ◇
未刊著作 “日本南海史” 中より◇ 南
条蘆夫
5. 15 満洲大同仏 教会を語る 入野契則氏
5. 15 今秋満洲へ 愍靈使派遣 名古屋市仏
教会
5. 16 南冥悲史の人 真如法親王 (下) ◇
未刊著作 “日本南海史” 中より◇ 南
条蘆夫
5. 16 大派朝鮮開教団総会 先づ朝鮮神宮に
参拝 開教振作に関し討議
5. 16 前二回の実績に鑑み 第三回訪華団を
組織 秋に大西、神林二氏を派遣 日
華仏教研究会
5. 16 シンガポールの日本娘 (6) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 18 蒋介石氏、その 信仰を語る (上)
在洛 ウインバン・トマス
5. 18 印度志士ボース氏の 青年亜細亜の勝
利 服部如夷
5. 18 大邱・平壤両神 社国幣小社に
5. 18 京城、興正寺本山 出張所の落慶入仏
式 招魂堂建設も計画
5. 18 ジナラジヤタサ氏が けふ谷大で特別
講演 “仏陀時代より現代 に至る仏
教” を説く
5. 18 支那は何を考へ 何を行ふ? 世界平
和のキー中華
5. 18 半島人を首班とする 国人教区の出現
画期的なカソリックの伝道
5. 18 シンガポールの日本娘 (7) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 19 蒋介石氏、その 信仰を語る (下)
在洛 ウインバン・トマス
5. 19 淨宗満洲開教区に 堂々・異彩を放つ
大連明照寺近く完成
5. 19 シンガポールの日本娘 (8) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 20 満蒙派遣皇軍の 武運長久祈祷
5. 20 各宗協賛の形で 日華親善に尽す 青
島 “東亜禪林” 開く
5. 20 シンガポールの日本娘 (9) 古川利
隆作 富士川洋画
5. 20 山東省風井学校へ 曹洞宗務の助成
山下氏、涙の奮闘
5. 20 本派朝鮮協会 千住支部結成
5. 21 大派満洲開教人事刷新 古森藤永氏も
勇退 後任は本明龍貫氏
5. 21 古義布教部長 を満洲へ派遣 廿六日
神戸出帆
5. 21 仏教文化による 日印の提携を強調
来朝中の印度実業家と 我が仏教徒の
交歓
5. 23 華道教授を一助に 独力十七年の結実
台宗京城布教所仮堂 米月六日、入
仏供養会
5. 23 百年の大計のもとに 東亜密教協会の
結成 今秋正式に名乗り挙ぐ 純粋な
密教復興運動

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1937. 5. 23 満支図書館行脚 図書館の指導員に
大学教授級を置き 渡辺幸三氏帰来談
5. 25 北平訪書偶感(上) 主として仏典に
就いて 渡辺幸三
5. 25 大西良慶氏の朝鮮巡錫
5. 25 飄々乎として 満洲から帰る 森本瑞
明翁
5. 26 サンスクリット 研究と其恩沢(上)
印度志士 ポース(天来)
5. 26 北平訪書偶感(中) 主として仏典に
就いて 渡辺幸三
5. 26 印度教徒と仏教徒の 精神的結合を訴
ふ、コック同伴の大名旅行で ダンダ
ニヤ氏一行本社を訪ふ
5. 26 支那仏教徒の英皇帝慶祝会
5. 26 支那仏教史学会 初の発表講演 廿九
日、龍大図書館で
5. 26 露満を繋ぐ羅網に 大谷派の基礎成る
元町通の中心街に
5. 26 日本仏教徒に告ぐ ロクナツ ダンダ
ニヤ
5. 27 サンスクリット 研究と其恩沢(下)
印度志士 ポース(天来)
5. 27 北平訪書偶感(下) 主として仏典に
就いて 渡辺幸三
5. 27 日本仏教徒に告ぐ(承前) ロクナツ
ダンダニヤ
5. 28 日本仏教徒に告ぐ(承前) ロクナツ
ダンダニヤ
5. 28 日支兩國の國際關係を 宗教の立場か
ら懇談 中国要人の日本觀を打診し
基督教連盟の修好親善使節歸る 蔣氏
の倫理運動 着々効を奏す 旅装のま
ま語る 海老沢氏の土産話
5. 28 満洲国婦人界に 革新を暗示 西本留
学生を入れ 家庭工藝伝習所
5. 28 真摯な托鉢姿に 内外人、跪いて感激
“東洋の聖者来る”と反響甚大 南
洋巡回中の天香さん一行
5. 28 大谷派満洲 別院建立 年末迄に竣工
5. 28 旅順に關東州 総鎮守の神社
5. 28 天台臨宗けふ開会 別院落慶で満洲
開教局にも
5. 29 日本仏教徒に告ぐ(承前) ロクナツ
ダンダニヤ
5. 29 南船北馬の光暢法主 あす四国巡化へ
六月の宗議會を終へ 北海・樺太地
方へ長驅
5. 29 海外神社には 大國魂神を合祀 土着
民をも信仰せしめよ 神社人の意見略々
一致
5. 30 満洲国学生 見学団結成
5. 30 大泊西別院 の降誕会
6. 1 大谷光照伯も列席 大いに氣を吐く
支那仏教史研究会
6. 2 全鮮布教使 等の会同 西本朝鮮開教
区
6. 2 胡適氏ら來朝
6. 2 神道の起源は大陸か プラタップの
“愛の宗教”を語る 井口寅次氏を訪
ねて
6. 3 中国の抗日
6. 3 仏教による真実の 日支提携を力説
内地の人達の中国觀が 中国人に通じ
てゐない 陳弓礼氏は語る
6. 3 満洲開教卅 年の藤永氏 天満別院輪
番へ
6. 3 藤井草宣氏 近く渡支
6. 4 南洋よ何処へ行く(上) 在サイパン
島 日野律
6. 4 仏陀伽耶の聖域 仏教徒の管理を離る
憤激のビルマ仏教徒 印度政府に抗
議
6. 4 若き血による理解 今夏マニラで開く
汎太國際青年會議
6. 4 印度交友會
6. 5 ビルマ仏教風景 南条蘆夫 國亡びて
金塔燦たり
6. 5 南洋よ何処へ行く(下) 在サイパン
島 日野律
6. 5 民族解放を自覚し 回教國相互間に同
盟締結 今年のメッカ大祭賑ふ
6. 6 ビルマ仏教風景 南条蘆夫 仏教の渡
来
6. 6 クシナガラの聖土(上) =フェドル
チアツク氏の音信= 柴山慶
6. 6 満洲四ヶ所に 基教日校部會新設 三
年後には地方大會
6. 8 南条蘆夫氏の「南冥悲史の人 真如法
親王」を読む(一) 広島文理科大学
助教授杉本直治郎
6. 8 西本海外研 究員決る 月輪、鷲山兩
氏
6. 8 ラーフラ萩原兩氏のコンビで 世界的
梵本の公刊 今月中に着手の予定
6. 8 三十余年かかって 漸く軌道に乗る
“支那仏家人命辭典”刊行 高楠博士
の苦心
6. 8 海外雄飛の 日本青年僧 五名を募集
6. 8 ビルマ仏教風景 南条蘆夫 沙弥の式
6. 8 クシナガラの聖土(中) =フェドル
チアツク氏の音信= 柴山慶
6. 8 海外雄飛の 日本青年僧 五名を募集
6. 9 南条蘆夫氏の「南冥悲史の人 真如法
親王」を読む(二) 広島文理科大学
助教授杉本直治郎
6. 9 軍艦“知床”で 学徒・南洋視察へ
大量二百名を送る
6. 9 中国青年僧二 人日本へ留学
6. 10 クシナガラの聖土(下) =フェドル
チアツク氏の音信= 柴山慶
6. 10 南条蘆夫氏の「南冥悲史の人 真如法

- 親王」を読む(三) 広島文理科大学
助教授杉本直治郎
1937. 6. 10 満鮮開教三十年 奉天の草分時代を
語る 藤永彰隆氏
6. 10 不可抗力の日支親善 根本的障害は？
胡適氏の見た排日問題
6. 11 南条蘆夫氏の「南冥悲史の人 真如法
親王」を読む(四) 広島文理科大学
助教授杉本直治郎
6. 11 満洲天理村 軽便鉄道 廿日頃完成
6. 11 芳訓出の満洲移民は 農村出と折合ぬ
大阪基青小倉氏視察談
6. 11 満蒙開拓訓練所に 大派、留学生派遣
将来移民指導に当らす
6. 11 北支・満洲へ 開教使増員
6. 11 今秋の仏教大会 朝鮮、別府が有力
仏連の常務幹事会
6. 11 飛躍の光明会 満洲に光明村建設
6. 11 クシナガラの聖土(承前) =フェド
ルチアツク氏の音信= 柴山慶
6. 12 南条蘆夫氏の「南冥悲史の人 真如法
親王」を読む(五) 広島文理科大学
助教授杉本直治郎
6. 12 考古学会総動員で 東亜民族発祥 ◇…
の地を探りに満洲奥地へ
6. 12 訪満天台参 観団から(一)
6. 12 “大いにやりたい” 汎太仏青満洲開
催に自信 ハリキル大谷理事長
6. 12 世界教育会議 比島不参加
6. 13 南条蘆夫氏の「南冥悲史の人 真如法
親王」を読む(六) 広島文理科大学
助教授杉本直治郎
6. 13 回教民族から先輩と仰がれる 日本は
もっと彼等を研究せよ 日本回教徒の
内部軋轢は残念だ
6. 14 南条蘆夫氏の「南冥悲史の人 真如法
親王」を読む(七) 広島文理科大学
助教授杉本直治郎
6. 15 旅順に百万円を投じ 関東州立神社の
創設 神社局角南技師帰京
6. 15 訪満天台参 観団から(二)
6. 15 満蒙人に贈る 新大乘仏教の紹介 満
蒙対訳の“釈尊一代記” 愈脱稿・印
刷に着手
6. 16 訪満天台参 観団から(三)
6. 16 これは珍しい 平和愛好民族 西比利
亜ブリアット族
6. 16 曹洞樺太の 天岡氏辞任
6. 17 訪満天台参 観団から(四)
6. 17 釜山ひとのみち教会所 曹洞宗で引受
ける 修養道場として更生 公共的方
面に開放
6. 17 全鮮に特別の 仏教講演を 西本の試
み
6. 18 仏教語の影響を受けた 支那景教聖典
漢訳 佐伯氏の研究成る “世尊布施
論第三”
6. 18 訪満天台参 観団から(五)
6. 19 訪満天台参 観団から(六)
6. 20 訪満天台参 観団から(七)
6. 20 除夜の鐘が聴けると 上海居留民の喜
び 東本願寺別院に 民会の総意で梵
鐘寄進 日本寺院唯一の鐘
6. 20 海外開教戦士や 尼僧に新登竜門 教
会所主任も腕次第 古義の教師検定法
改正
6. 20 樺太の旅(上) 寛潮風
6. 22 訪満天台参 観団から(八)
6. 22 治外法権撤廃後の 満洲国の神社問題
満洲神職会で対策審議 当局の態度
注目さる
6. 22 樺太の旅(中) 寛潮風
6. 23 北米・支那に於る基督教 農村伝道事
業(上) ウインバン・トマス
6. 23 樺太の旅(下) 寛潮風
6. 23 訪満天台参 観団から(九)
6. 24 北米・支那に於る基督教 農村伝道事
業(下) ウインバン・トマス
6. 24 日満天台の提携強化 居士の進歩に驚
く 台宗満鮮視察団選る
6. 24 訪満天台参 観団から(十)
6. 24 印度学研究会
6. 24 日滿文教協 会組織さる
6. 25 女教員連合会 支那旅行団 今夏休暇
を利用し
6. 25 訪満天台参 観団から(十一)
6. 26 樺太の一 難易二道 寛潮風
6. 26 訪満天台参 観団から(十二)
6. 26 台中州東勢 神社創立
6. 26 中国を覗む者 竹隣
6. 26 新日本主義基督教を叫び 朝鮮に無教派
運動起る 内地に与へる影響多大？
6. 27 訪満天台参 観団から(十三)
6. 27 さながら日本喇嘛！ 蒙古を牛車で独
歩 医療施薬の青年僧 葛根廟に永住
の決意
6. 27 仏教研究の外人に “解脱”の要諦闡
明 カルカッタ大学より 解脱道論の
英訳刊行 新進仏教学徒 感激の精進
6. 29 訪満天台参 観団から(十四)
6. 29 静岡日華親善殿の夕
6. 30 訪満天台参 観団から(十五)
6. 30 印度の花祭に参加して(上) 在ボン
ベイ 余田義雄
6. 30 タゴール大学 中国図書館成る 往時
の精神文化交通の 殷盛を両国間に再
現 支那朝野を挙げて賛助
6. 30 陸軍省から表彰 満洲事変従軍 大派
開教使
7. 1 益買の在留邦人は 仏教に飢ゑてゐる
光照氏に菩提樹を贈る 新帰朝の余
田嘉雄氏談

1937. 7. 1 五族協和の精神に立ち 蒙古青年の大
道場 “復興蒙古”の指導者養成に
全人格主義で当る佐藤富江氏 蒙古学
院が 支援を要請
7. 1 仏陀伽耶の聖域問題 錫蘭でも仏教徒
大会 議会の問題にも発展
7. 4 宗教的に純真な 半島人同胞の求霊
転居したら先づ教会を捜す
7. 4 国家祭祀と神社行政で 神社制度調査
会出直す 試案を中心に六日総会開く
外地神社行政に関する 徹底的統制
を要望 朝鮮四社の国幣列格を機に
神調会でも対策研究
7. 4 印度の花祭に参加して(下) 在ボン
ベイ 余田義雄
7. 4 訪満天台参 観団から(十六)
7. 4 光暢法主更に遠く 北海道樺太に長駈
廟塔に開拓の偉業を偲ぶ 巡化愈終
りに近づく
7. 6 南洋を見直せ 西田天香氏ら帰洛 托
鉢16000キロ
7. 7 ガンジー翁に 弥栄の本義教ふ 日本
来朝工作進めらる
7. 8 古義宗議総選挙 無投票区(七区) 決
定 他は十五席を廿六名で争奪 開教
地は定員の三倍 開教監督二名 任地
で立候補
7. 8 蕃人教化に 新方策を 西本小笠原
新総長巡視
7. 9 満洲神宮御創建地は 旅順に決定す
近く建設に着手
7. 10 神社参拝問題から 半島教育事業全廃
朝鮮ミッション会の企て
7. 10 人格ゆかし 満洲行の薄田 秋吉両氏
絶賛
7. 11 更に藏経二部を 中国寺院に贈る 福
田氏の遺業、実を結ぶ 日華仏研訪華
団が持参
7. 11 どうやらハケ口整ふ 満洲国に活躍の
青年 西本の満語学院生
7. 13 朝鮮ミッションの決意
7. 13 朝鮮仏教協会設立 内鮮教徒の握手
会長に有賀殖銀頭取
7. 13 中国仏教会 新生活運動 実施に協力
7. 13 印度大菩提会が、仏教高等専門学校
サルナス地方に設立
7. 14 北支事変で緊張の教界
大派、各宗派に率先し 北支皇軍慰
問使特派 藤岡了淳、藤井草宣両氏
けふ、急遽北支へ
北支と満洲の 総陣営に電命発す
北支問題で西本願寺 極度に緊張を呈
す
準戦時体形 整備に参加 臨黄合議
所
日支の風雲に備へ 仏教報国の実を
- 挙げよ 仏連から希望通牒
全満の開教 使を動員 従軍布教
浄土宗務所 緊急会議 全国に通牒
7. 14 釜山西本別院 の宗教講座
7. 14 内鮮融和の指導者に 内地人の転向者
を起用 神奈川県の画期的試み
7. 14 朝鮮協会 名古屋支部
7. 15 政府の対支方針支持
仏徒の覚悟表明 明和会声明を発す
曹洞の論達
時局の認識と 本分果遂促す 日蓮
宗務当局
対支政策遂行 に協力求む 文部省、
神仏 基管長と会同
7. 16 内鮮融和と 転向者
7. 16 北満移民慰問布教 牡丹溝等地に飛
ぶ 大派岩見護氏の壮挙
7. 16 布教研究所長や 朝鮮開教総長等決る
西本大モノの異動
7. 16 五教派神道連合会 緊急幹部会を開催
北支事変の対策協議 北支事変で
西本の訓示
7. 16 将士には利剣 名号を贈る 深草派請
願寺
7. 16 大派北平駐在を 従軍布教使に
7. 16 “成唯識論”講 義支那訳刊行 芝峰
法師が
7. 17 新京の西本別 院が三建築
7. 17 文明とは何ぞや(1) 印度志士 ポー
ス(天来)
7. 17 南洋土人の 宗教教化は難事 だが興
味は多い パラオの高島芳信氏談
7. 17 挙国、国民の情熱は燃る
真に非常時を自覚し どっしりと本
分を尽せ
宗教、社会教育団体代表者ら 文部
首脳部と懇談競技会速く 国威宣揚
文相招待に漏れた 教派神道連合会
の不满 独自の立場で銃後の支援
教界第一線の 情報係を勤む 軍部
その他と連絡をとり 明和会活発に動
く
臨時緊急院 議を開く 日蓮宗務
各宗派協力して 精神国防に努力
仏教側代表対策協議
7. 17 暗雲の北支へ
7. 17 三名の特使 皇軍慰問 神習教の対策
神道家の態 度を協議 けふ神職有志
7. 17 下鴨神社の国威 宣揚折願祭 けふ執
行
7. 18 文明とは何ぞや(2) 印度志士 ポー
ス(天来)
7. 18 北支事変
7. 18 宗教家の“銃後の守り”は
北支事変語
「日本を倒さねば」と 支那インテ

- リの暴言 支那通の塚本善隆氏に聞く
 日華仏教の使命は あくまでも教育
 事業
 1937. 7. 18 樺太所感 寛潮風
 7. 18 北支の風雲急全国民の熱情奔騰
 西本願寺、大谷連枝を あす現地に
 特派 全教団ハリキル
 北支の応急 西本布教班
 7. 18 事変現地から 報国第一報来る 浄土
 宗の今村特使活躍 宗務所更に対策協
 議
 7. 18 樺太とよはら 寛潮風
 7. 20 文明とは何ぞや (3) 印度志士 ポー
 ス (天来)
 7. 20 本願寺網の 組織化する 満洲と北支
 第二次布教 使集結す
 各教区の活躍 満洲、福岡、福井等
 7. 21 文明とは何ぞや (4) 印度志士 ポー
 ス (天来)
 7. 21 一日一人 満洲で共産党 退治をやる
 よ 秋吉威郎氏
 7. 21 表面、平等互惠を装ひ 裏面に深刻な
 抗日 十九日、陸軍省発表 北支事変
 資料
 7. 21 急迫の北支・固き銃後の護
 開教使員から 従軍嘆願の電報 満
 支開教使出動時期 藤岡開教監督に一
 任
 日宗の活躍
 7. 22 南洋開教に 新方策 西本願寺先づ
 南洋庁に交渉
 7. 22 日支遂に砲火を交へ 愛国の情熱奔騰
 す 正義日本銃後の護りは固し
 一騎当千の精鋭を 皇軍慰問に派遣
 銃後の任務達成に 懸命、周到の日
 宗
 7. 23 慰問のトップを切り 最前線で活躍
 大派、天津の首藤氏ら 婦法会員は禪
 を贈る
 7. 23 谷大の北支 時局講演会
 7. 23 朝鮮に満洲に 報国運動愈よ目覚し
 西本願寺教団
 新卒業生は 全部渡満 満洲語学院
 7. 24 天津へ入る (上) 関東軍囑託 (於天
 津) 光岡慈昭
 7. 24 泉氏苦心の 暹日辞典近く完成 八月
 中で整理完了
 7. 24 奉天婦人会 献金運動
 7. 25 天津へ入る (下) 関東軍囑託 (於天
 津) 光岡慈昭
 7. 25 我が明和会の活動に 中国仏教界の衝
 動 日本同様全国仏教徒を集め 対日
 仏教護国団結成
 7. 27 比類のすくない 印度の憲法 (上)
 印度志士 ポース (天来)
 7. 27 満洲国に於ける共産運動 (1) 特に
 満洲赤化戦術の点描 絳谷孝道
 7. 27 悲壮! 殉教の決意固く 従軍嘆願の鮮
 血文字 “骨を砕けても” の恩徳賛!
 大派満洲開教使続々蹴起
 7. 28 比類のすくない 印度の憲法 (下)
 印度志士 ポース (天来)
 7. 28 満洲国に於ける共産運動 (2) 特に
 満洲赤化戦術の点描 絳谷孝道
 7. 28 中国仏教徒の 反省促す声明近く発表
 明和会本部の時局対策
 7. 29 基督教青年会同盟が 時局に対し決議
 軍隊慰問、委員会一人
 7. 29 朝鮮教会 半島同胞の献金
 7. 29 石井大佐に北 支状況を聴く 仏連出
 張所
 7. 29 全満二万五千の 仏徒に西本の訓告
 大同仏教会のレコード
 北支那の第一 線に活躍 大谷連枝
 豊台訪問
 7. 29 中村前教学部長を 管長代理で特派
 浄土宗の慰問使派遣
 妙心の活躍
 7. 29 従軍布教使 として出発 藤井留学生
 7. 29 豊台の第一線を突破して 禍乱の北平
 一番乗り記 (A) 藤井草宣
 7. 29 仏陀伽耶の聖地を 仏教徒の管理へ
 ガンジー翁の獅子吼
 7. 29 満洲凶門の 西本活動
 7. 29 ミッション廃棄の 朝鮮三校を引継か
 七十万円で特志者が
 7. 29 太虚法師の和平将来希望に 日本仏教
 徒の真意闡明 更に抗日運動の啓蒙を
 切望 きふ、仏連で競技会開く
 北支に送る 災区救護隊 中国仏教
 会が
 7. 29 大派、藤岡芋科師ら 北平に籠城か
 事態の急迫化に伴ひ
 時局を超越 研究に励む 北平留学
 生
 7. 29 京城西別院より
 7. 30 豊台の第一線を突破して 禍乱の北平
 一番乗り記 (B) 藤井草宣
 7. 30 シナの兵隊さん “丘八爺” を語る
 都甲文雄氏の漫談
 7. 30 笛吹けど踊らず? 汎太仏青の満洲国
 開催 悲観説濃厚となる
 7. 30 中国仏教徒に反省促す 皇国日本の真
 意を徹見 全支仏徒の菩薩行を念願
 “明和会” から勧告文を伝達
 7. 30 日本全仏教徒並に 軍民の公鑑を請ふ
 仏連宛の太虚法師の全文
 7. 30 仏連本部の 回答全文
 7. 30 大派、現地実動本部を 天津別院内に
 特設 通訳と慰問に捨身奉公 輸送と
 蒐集は大連別院 体系的実動へ 銃後
 愈多端!

- 駐屯軍から 従軍僧任命 首藤輪番
ら三氏
藤井氏は籠城 藤岡氏大連へ
従軍布教使 前線に活躍 西本の増
加
1937. 7. 31 日支仏徒交渉
7. 31 豊台の第一線を突破して 禍乱の北平
一番乗り記 (C) 藤井草宣
7. 31 不埒な支那兵、国民は大切 仏徒はこ
れを見逃すな 飽く迄大乘的に乗り出
せ 大阪商大教授 奥平定世氏は語る
日支と仏徒
7. 31 南京虫と寝て 念仏の教を説く 北
鮮巡化の李元教主 正信偈の鮮語合誦
7. 31 百三十余の公認神社に 各々社格を決
定 神職資格の再検討に着手 樺太庁
の神社制度確立
7. 31 愈よ満洲へ 西本満語学院 卒業式挙
行
8. 1 北支の旅の土産話を聞く 日本人と話
をすると 袋叩きにされる 山辺習学
氏談
8. 1 日本最初の従軍布教 思出話を聞く
大砲の上に乗って 唇を裂き乍ら獅子
吼 浄土宗総長 祝い智海氏談
8. 1 朝鮮扶余より
8. 3 満洲国に於ける共産運動 (3) 特に
満洲赤化戦術の点描 経谷孝道
8. 3 殉国将士の 現地慰霊 青年神職を
派遣に決す
8. 3 皇軍将兵の 慰問を通牒
8. 3 志村牧師 北支慰問
8. 3 消息を絶つ? 北平入りの大谷氏 西
本願寺の事変彙報
8. 3 魂と魂の結合による 仏教外交の確立
が急務 明和会の対支仏徒声明不評
仏教者の時局方策批判座談会
8. 4 満洲国に於ける共産運動 (4) 特に
満洲赤化戦術の点描 経谷孝道
8. 4 青海哈西巴地方で 転世達頼発見か
なほ慎重に協議
8. 4 日支同慶昇平に 普陀山で祈祷 上海
世界和平会仏教組
8. 5 満洲国に於ける共産運動 (5) 特に
満洲赤化戦術の点描 経谷孝道
8. 5 一時危険に瀕した 大派天津別院無事
四名従軍、二名死守
8. 6 満洲国に於ける共産運動 (6) 特に
満洲赤化戦術の点描 経谷孝道
8. 6 蒋介石に対して 抗日の非を勧告せよ
基督者に課せられた使命
8. 6 満洲語学院生 満洲に出発
8. 7 死の街を訪ひ 大谷連枝感激を受く
西本願寺各地の運動
8. 7 宗教と教育で 華々しい論戦 漸く峠
を越した 世界教育会議 第四日
- 北支事変の 真相説明 世界の疑心
一掃
8. 8 新戦場の月かげに 勇士の霊を弔ふ
従軍僧 石黒英俊 (手記) =大谷派
天津別院在勤=
8. 8 世界教育代表に強き反響 事変を繞る
正義日本の 立場を堂々と論証 ハー
マン・ジョルダン委員会で 藤沢親雄
氏の熱弁
8. 8 自ら銃を執り 天津市街戦に参加 二
十九日夜から朝まで 西本四布教使の
活躍
8. 8 更に従軍僧七名を 大派、前線に急派
布教使二十三名に上る
8. 8 グバオ邦人教育の苦心 女子教育機関
をと念願
8. 8 支那居士仏教の 正しい認識深める
東京府仏青連盟が 近く講習会開く
8. 10 蒋介石と日本基督者 一抗日の非韓國
の問題一 三浦参玄洞
8. 10 日支兩國代表の交歓 オックスフォ
ード、グループ 運動極東指導者会で
動乱の北支に 美はしい集ひ
8. 10 大派の二青年留学生 南苑の激戦に参
加 絵像を胸に月輪氏ら出発 従軍僧
の決死行
8. 10 大谷特派連枝無事 北平より天津に入
る 西本願寺の活動
漢口の白石氏 消息をたつ
8. 10 西本台湾本島人の 目覚しい皇軍慰問
8. 10 金光教臨時 議会招集 事変に対処
通州で犠牲者 慰霊祭執行
8. 10 人類陶冶の最高峰 第七回世界教育会
議終る 日本を再認識した外国代表
教育による 東西両洋融和への理想樹
立
支那の不法 教育会議へ 抗日文書
支那民族の特異性 (1) -北支事変
を顧みて- 於新京 光岡慈照
8. 11 仏教による日支 民族の提携誓ふ 南
支の老女学校長
8. 11 支那人の宣撫工作に 皇軍と共に結ぶ
露営の夢 宗教家の奉仕する新天地
西本願寺と南北支の情報
急迫の済南 最後まで頑張る 落知
西本願寺主任
8. 11 これぞ精神報国 本島人教化事業に
台湾臨済宗の活躍
8. 12 支那民族の特異性 (2) -北支事変
を顧みて- 於新京 光岡慈照
8. 12 更に南、中支へ 対策を練る 西本願
寺の情報
落知済南主任 青島に避難
8. 12 宗教団体に率先 上海特派慰問使急派
大派の迅速な慰問運動
8. 12 日本美術に魅了 フィリッピン大学に

- 日本美術講座新設 講師を物色
 1937. 8. 13 新国際主義の開眼へ 日本文化中央連盟の結成に因む(上) 三浦参玄洞
 8. 13 支那民族の特異性(3) - 北支事変を顧みて - 於新京 光岡慈照
 8. 13 通州事件の犠牲者 両将校の合同葬 東本天津別院で執行
 大山大尉らの合同葬 上海別院で
 8. 13 半島同胞の仏教報国会 皇軍慰問に蹴起 汗と膏の赤誠献金
 8. 14 新国際主義の開眼へ 日本文化中央連盟の結成に因む(下) 三浦参玄洞
 8. 14 支那民族の特異性(4) 於新京 光岡慈照
 8. 14 内地仏教が口だけの 鮮人教化に献身 興正派京城布教所 寺号公称決定す
 8. 14 上海の日本仏教団は 宿舎給養部を分担 最悪に備へてハリキル
 済南、緬川両 布教所在動 最後迄頑張る
 8. 14 邦人避難者を抱へ 不安状態に対処 大派青島別院の活動
 8. 14 大谷照乘連枝 更に山海関を訪ふ、天津で大慰霊祭 西本願寺の運動
 8. 15 武装移民地を中心に 北満心田開発に着手 大派、根本方針を確立 岩見氏各移民地を馳騁
 8. 15 支那民族の特異性(5) 於新京 光岡慈照
 8. 15 大谷照乘法主自ら 戦場に皇軍を稿ふ 西本願寺の赤誠愈よ熾烈 教団未曾有の壮挙
 法主の戦地稿軍は 全くレコード 流石は軍人法主
 西本各地の稿軍運動
 8. 15 北平両大学 南遷存続説
 8. 15 上海の世界仏教居士林 第六回林員大会 理監事の改選行はる
 8. 17 南支情勢の悪化で 避難者収容に待機 大派台湾開教監督部
 8. 17 “戦地はひき受けた” 軍部も関係者も大歓迎 光照法主稿軍の決定迄 法主の従軍は 今回を嚆矢とする 日露戦役と北支事変
 8. 17 北平籠城より 天津入りまで 西本願寺特派慰問使 大谷照乘氏の活躍
 8. 17 東洋諸民族に開放の 建国大学申込み 殺到 その将来に幾多の期待
 8. 18 大派“前線従軍部隊” 悉く従軍僧に任命さる 首藤氏は指令部付となる 総勢二十四名に上らん
 8. 18 北平の藤井氏 重要任務に活躍
 8. 18 浄宗名越氏 従軍許可 現地に派遣
 8. 18 法主稿軍行で 各地の赤誠奔騰 西本願寺教団活躍
 天津に於ける 大谷特派連枝 慰問に忙殺
 8. 18 友邦皇軍の神聖 威力を信頼せよ 満洲イスラム協会が諭告
 8. 19 “我等の本尊様”と 離れるのは嫌だ 漢口より二千の避難民と歸る 西本願寺 白石願照氏 死の旅を語る
 8. 19 少年三万人 愈よ満洲へ移民 今秋期して実施
 8. 19 門末を代表し 皇軍にお礼の旅 けふの出発を前に 光照法主のステートメント
 8. 19 “中国民衆に告ぐ” 懸賞論文を募る 満洲国弘報協会が
 8. 19 憤起の妙心寺 第一線に決死隊を派遣 天岫総長悲憤の談
 8. 19 邦人二百人を 収容する 青島妙心寺別院
 8. 20 大谷光照法主 歴史的鹿島立ち 駅頭はまさに感激の渦 きのふ、北支第一線へ
 8. 20 更に北南支へ 従軍布教使陣
 8. 20 戦雲渦巻く上海 避難民収容に活躍 大派上海別院第一線
 8. 20 半島に於る“土幕民”の 集团的移住 整理を終る 私立学校令の大谷学校を建設 大派朝鮮開教の画期的事業
 8. 20 ○○路の峻険越え 皇軍慰問に長駆 大派従軍布教別動隊
 8. 21 芝罘東本願寺 大連に引揚げ
 8. 21 大派朝鮮開教 監督部の活躍
 8. 21 敵機に襲撃された 上海西本願寺別院 弾丸雨飛中の活躍
 8. 21 白石願照氏 再び上海へ
 8. 21 中千救世軍 本營の活動
 8. 22 壮烈! 慰問陣の花と散った 故伊東正何氏の事ども 盟友立花大亀氏に尋く
 8. 22 潘川東本願寺も引揚げ
 8. 22 大谷派青島 別院の動き
 8. 22 敵機の空襲 爆弾に見舞はる 上海の各宗派別院
 8. 22 日宗慰問使の 動静判明す 従軍僧十名
 8. 22 上海方面の稿軍 慰問に連枝特派 西本願寺の対策
 8. 22 弾丸雨飛の中に活躍 大派両留学僧
 8. 24 事変後の平和工作を 目標の現代支那研究 支那語の普及が急務だ 同志社、森川政雄氏談
 8. 24 稿軍行を迎へ 大連市の感激! 初の玄海も平安 大谷光照法主
 8. 24 中国仏学会 太虚氏飛檄
 8. 24 奉天市にも 隣保委員会 我国方面委員 制度に則り
 8. 24 事変の重大意義を痛感 敢然道義の根本解決に起つ 神道界の巨頭草津耕次郎翁 單身蔭麾下某參謀と会見か

1937. 8. 24 駐屯諸外国軍も慰問 我が正義認識に
努む 東本願寺戦時体制成り 上海に
宣暢院連枝特派?
決死奉公の覚悟で行く 宣暢院連
枝談
深奥特派慰問 使各方面慰問
8. 24 妙心寺派が北支戦線へ 従軍慰問使
8. 24 布教使のお掃除 西本福沢氏 北平
日記
8. 24 西本各地の 赤誠運動
8. 24 各宗派に率先 軍事救護義金 大派平
壤布教所
8. 24 内地慰問部と連絡保ち 台湾教会の活
動 全台湾基督教奉仕会結成
8. 25 北支従軍布教使便り(1) 某部隊副
官部 藤井晋
8. 25 半島に愛国運動高揚 全鮮の学童を動
員 来る六日愛国日執行
8. 25 淄川を脱出 本山に現地報告 大派加
藤豊生氏
8. 25 青島別院 死守の決意 西田輪番が
8. 25 引揚邦人に 宿舎開放 慰問に活躍
8. 25 ビルマ仏青会長 ニヨウ氏夫妻 再度
来朝
8. 25 ガンジー翁の 愛弟子ト氏 一灯園見
学
8. 25 大派、戦時体制固し! 上海戦線の背
後運動 外国駐留軍と握手 大谷登韶
連枝等新人群が向ふ 法主代理上海派
遣決定
相当長期に亘る 上海から北支へ
洋行帰りの大谷連枝
8. 25 大谷光照法主 北支騎軍行プロ 更に
満洲国を訪ふ
大谷連枝代 理竺氏帰還
西本各地の 赤誠たえず
8. 25 北平から
8. 26 北支従軍布教使便り(2) 某部隊副
官部 藤井晋
8. 26 血の汚れもそのまま 負傷兵の着替へ
不足 戦乱の上海〇〇病院に奉仕 西
川鈴子さんの実見談
8. 26 上海各宗の被害 - 戦火の巷に活躍-
東本願寺別院の情報
8. 26 支那留学生の 処置に感謝 我が文部
省へ
8. 26 全支に活躍 西本願寺の情報
敵弾の被害 上海 青島に頑張る
済南 泰然自若! 青島
8. 26 事変拡大に伴ひ 諸種の対策樹立 日
宗院議で協議 第一線騎軍使に 管代
派遣
8. 27 新興イランの 建設者リザ・シア(1)
印度志士 ポース(天来)
8. 27 北支従軍布教使便り(3) 某部隊副
官部 藤井晋
8. 27 半島同胞仏 教徒の献金
8. 27 眠れる英霊を弔ひ 白衣の勇士を訪ふ
大谷光照法主の動静 本多随行長の
通信
法主導師で 追弔会執行 天津民団
主催で
8. 27 戦雲渦巻く現地へ ここにも管代派遣
曹洞宗皇軍を搞ぶ
8. 27 人の嫌ふ汚物の処理 邦人から感謝の
的 戦乱の上海に光る 天理教ひのみ
しん
8. 28 新興イランの 建設者リザ・シア(2)
印度志士 ポース(天来)
8. 28 仏都長野に 日暹親善の歓び 駐日暹
羅公使ラクサ氏 善光寺に仏像寄進
8. 28 戦乱の上海に 健気、尼僧頑張る 騎
軍に懸命な努力
8. 28 対岸各地引揚民を 別院本堂に収容
荷物運搬等にも奉仕 台北東本願寺の
活躍
8. 28 厦門の神田氏 遂に引揚げ
8. 28 大谷光照法主 香月司令官を慰問 天
津に於ける動静
8. 29 新興イランの 建設者リザ・シア(3)
印度志士 ポース(天来)
8. 29 日清役を想ひ出して(上) 上原芳太
郎
8. 29 大派従軍記(一) 長城を越えて
8. 29 木下輪番ら 北平慰問
8. 29 ニヨー夫妻 歓迎茶話会
8. 29 我が教育者の拠金で “訪日宣統記念
塔” 新京に建国精神強調
8. 29 秘仏本尊を胸に懸け 戦火の上海へ決
死の騎軍行 国民外交の決意も固し
大派管長代理、昨夜出発
8. 29 大谷光照法主 昨日北平へ
8. 29 上海の第一 線を搞ぶ
8. 31 支那民間思想の瞥見(何故に支那人は
惨忍性なるか) 光岡慈昭(一)
8. 31 満洲国に慶 祝の瑞気 国都建設 記
念式典
8. 31 戦火の上海へ! 大派法主代理騎軍行
左藤義詮氏(第一信)
8. 31 決死行の成功を熱願 けふ! 上海上陸
“軍国の母”の家を弔問 東本法主
代理、長崎出帆
上海騎軍行に 薬品大量寄進 武田
長兵衛氏が
上海騎軍行の メッセージ
8. 31 北平大使館に入る 大追弔会や慰問
北支で本格的な 騎軍の光照法主
北平大使館で 大追弔法要
特派連枝より 随行が先へ 上海に
特使
トラックを上 海西別院に
9. 1 支那民間思想の瞥見(何故に支那人

- は惨忍性なるか) 光岡慈昭 (二)
1937. 9. 1 涙ぐまし、半島婦人の “金かんざし”
 献納運動 各宗の英霊弔慰 京城通信
9. 1 大谷派、引揚民慰問活動 上海、漢口
 の避難民を 各寺院に収容慰問
 その一 長崎の各団体を動員
 その二 引揚民慰問隊 直ちに組織
 台北別院
9. 1 台湾全島に 特命布教 浄宗台北別院
9. 1 友邦満洲国 宗教団体も起つ
 新京宗教団体 皇軍に感謝文
 錦州宗教 団体大会
 奉天市道教 義金募集
9. 1 妙心慰問使 今日出発
9. 2 陣中日記より (一) 「日の丸」の光
 栄 ○○部隊 岩倉彰宣
9. 2 支那民間思想の瞥見 (何故に支那人
 は惨忍性なるか) 光岡慈昭 (三)
9. 2 戦火の上海語る 激戦の最高潮に上陸
 砲弾下に活躍した 大派深奥慰問使
 報告談
9. 2 台宗、都築慰問使ら 愈よ国境長城線
 へ 薬品を携行して出発
9. 2 杉本哲郎画伯 渡印送別会
9. 2 布教網確立に 更に多量の従軍僧 西
 本願寺の対陣策
9. 2 大派法主代理一行 無事上海に上陸
 現地各方面歓呼裡に 直に慰問活動開
 始
9. 3 陣中日記より (二) 再び満洲に来て
 ○○部隊 岩倉彰宣
9. 3 支那民間思想の瞥見 (何故に支那人
 は惨忍性なるか) 光岡慈昭 (四)
9. 3 銃砲声を聞くよりも 胸に応へる悲壯
 感 一切を放棄して母国へ! 青島引
 揚げを語る 大派青島別院 西田輪番
 帰る
 上海と青島の 現地事情講演会 内
 地帰還の深奥、西田両氏
9. 3 上海領事館に 大日章旗贈る
9. 3 戦線地区に 従軍布教使を訪ふ、大学
 教授連事変調査委員会 小松日大教授
 ら帰る
9. 3 奉天宗教団体 連合時局大会
9. 3 満洲喇嘛教寺 院も皇軍慰問 義金募
 集
9. 3 全神の慰問使 派遣等見合せ
9. 3 日華仏教研 究会の見舞 在支仏教団
 体に
9. 3 駐支英大使の 負傷に見舞 日本基
 教連盟
9. 3 本島人に国語 講習会開設 台北浄宗
 別院 内台融和の楔
9. 3 北支の犒軍を終へ 昨日満洲に出発
 西本願寺光照法主
9. 4 北満の武装移民談に 布教使を大量送
 れ 僧侶も亦労働せよ 大派岩見氏の
 移民視察談
9. 4 東北満洲を巡る 第一信 一武装移民
 地を中心に一 岩見護
9. 4 上海へ天理教 本部慰問使 けふ出発
9. 4 従軍僧三名 許可さる
9. 4 光照法主は まだ北平に 予定狂ひが
 ち
9. 5 抗日戦線に躍る 支那要人の戸籍調べ
9. 5 陸海軍傷病兵 慰問の旅に出づ 手製
 の糊帯
9. 5 駐支英大使負傷事件で トップ切る民
 間外交 英国国民の公正な与論を喚起
 対支国際動向研究会起つ
9. 5 漸く活動 状況判明 日宗従軍僧
9. 5 砲弾下に活動の 上海東本願寺別院日
 誌 敵正規兵の墓も弔ふ
9. 5 日清戦役を想ひ出して (中) 上原芳
 太郎
9. 5 支那事変 大野玄泰
9. 5 蒙古喇嘛法会と 怪奇跳舞の物語 外
 蒙赤峰寺にて 生駒雄堂
9. 5 謎の国・支 那の全貌 室伏高信著
9. 5 杉本哲郎画伯 渡印送別会賑ふ、僧堂
 生活の画僧が随員
9. 5 光照法主 愈よ満洲へ
9. 5 最後迄頑張る 香港の西本願寺
9. 7 死線突破の犒軍行談 恩讐の彼方、大
 乗一味の世界 大谷連枝四十余日目に
 帰る
9. 7 日出高女の 現地犒軍行 計画進む
9. 7 蒙古方面唯一の従軍僧 大派滋野氏戦
 線へ 事変終息後も在蒙し 蒙古民族
 の福祉に捨身
9. 7 徹底的宗教統制へ “宗教研究会” 結
 成 文教部の宗教政策
9. 7 満洲国開催は 既定方針で進む 時局
 対策委員会設置 全連全国常務理事会
 汎太仏青
9. 7 北満各地へ 慰問行開始 光照法主
9. 7 大派天津別院 現地の活動
9. 8 東北満洲を巡る 一武装移民地を中心
 に一 岩見護 第二信 第三信
9. 8 近く英国大使を見舞ふ、末広氏自らハ
 ンドルを把り 戦火の国際都市に活躍
 大派管長代理 大谷登留連枝
 管代のメッセージ 上海各方面へ発
 す
9. 8 最悪の場合は 慰問品を海中へ 無事
 搬入のうれしさ! 大派法主代理上海
 犒軍行
9. 8 半島信徒の激増 各地で信徒講習会
 大派朝鮮開教監督部
 第一回卒業生 六名巣立つ 朝鮮僧
 侶養成所
9. 8 北支現地に入る 大谷光照法主の 一

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 現地第一報—
泥濘の中に この苦悶 西本北支情
報
1937. 9. 9 東北満洲を巡る —武装移民地を中心
に— 岩見護 第四信 第五信
9. 9 戦火の上海より —在滬各宗の活躍—
東本願寺慰問使 左藤義詮
9. 9 支那兵三百余の 屍体に読経回向 行
方不明を伝えられた 上海の西本願寺
脇坂氏
9. 9 法衣に銃を執り 敵を斬りまくる 遺
棄死体に合掌回向 豪僧灘上氏の武勇
伝
9. 9 印度仏跡巡拝 遂に延期さる
9. 9 “秋風や卒塔婆も 血の香新らしき”
—岡部宗城氏の通信—
9. 9 大谷光照法主 ハルピン安着
9. 9 皇軍の武運 長久祈願 日満蒙の宗教
家 時局大会举行
9. 9 駐支英大使 負傷を見舞ふ 国際仏教
協会
9. 10 東北満洲を巡る —武装移民地を中心
に— 岩見護 第六信 第七信 第八
信
9. 10 在満回教徒 皇軍に感謝
9. 10 半島に初めて 曹洞の専門僧堂 釜山、
総泉寺に開く
9. 10 赤心こめて 傷病兵の看護に ひのき
しん報国団 甲斐々々しく北支へ
9. 10 支那留学生全滅で 悲鳴あげる各大学
開校不能もある
9. 10 智子裏方も随員 白衣の勇士も涙！
感激に終始した慰問行 古賀随行長の
感激談
9. 11 戦火の巷から 上海に使用して 末広愛
邦 第一信
9. 11 東北満洲を巡る —武装移民地を中心
に— 岩見護 第九信 第十信
9. 11 北支の西部戦線に 法主と戦争問答
北平行国際列車中に 犒軍行の 大谷光
照氏を訪ふ
9. 11 老躯に鞭打ち前線へ 皇軍将士感謝の
旅 黄槩、関管長犒軍行
9. 11 朝鮮教会常 務委員会
9. 11 西本北平にも 犒軍本部増設
9. 11 基督教青年同盟も起つ 全国基督教青年
会を一九に 時局特別事業部を開設
支那窮民にも 救済の手延ばす 経
験に徴し實際的慰問
先づ上海に 慰問使派遣
儀礼を避け 適正な現地慰問 基教
連盟皇軍慰問事業部 今後の方針協議
9. 12 戦火の巷から 上海に使用して 末広愛
邦 第二信
9. 12 大義を明鑑せよ(1) 勅語を拝し民
国に寄せて 東福義雄
9. 12 回教独立国土建設野望 支那事変を契
機とするか 漢回五馬連盟の待機
9. 12 執拗な抗日教育 足利浄門氏談
9. 12 オマール雑録(一) 沛亭生
9. 12 日清役を想ひ出して(下) 上原芳太
郎
9. 12 黄浦江に流れる 無数の支那兵 土左
衛門 支那街は諸所に火災 —上海便
りの一節—
9. 12 飛行機で慰問行 北満で活動の 大谷
光照法主
9. 12 大派管代一行 けふ上海出発 十四日
夜帰山
9. 12 大阪猪飼野で 朝鮮人教化
9. 12 共産党排撃で 回教徒起つ?
9. 12 満洲仏教の夕
9. 12 残兵出沒の地 豪雨を衝いて行く
—光照法主犒軍行第二報—
9. 12 抗日戦線に躍る 支那要人の戸籍調べ
(二)
9. 14 大義を明鑑せよ(2) 勅語を拝し民
国に寄せて 東福義雄
9. 14 戦線から 佐々木義人
9. 14 友邦暹羅、我が軍に感謝 日本の安泰
と戦勝祈り 御守りの仏像献納 同国
最初の従軍記者も派遣 田村駐暹武官
の感激
9. 14 緊張せる香港 戦時と台風と避難 西
本願寺の活動
9. 14 秋風を衝き 奉天から飛行機で帰る
犒軍行の全プロを終り 光照法主十六
日大阪着
9. 14 日本人の犠牲的精神は 実大乘仏教
の影響だ 支那の坊さん口惜しげに通
論
9. 14 大派、北支、上海に犒軍急派 為郷議
長等三氏を 北支戦線に派遣 今十四
日夜勇躍出発
9. 14 上海第三次 犒軍派遣
9. 14 支那仏教研究に 捧げる一石 日華仏
研年報発刊 法舫氏も交る豪華版
9. 15 山岳戦を語る(上) —戦線から・2—
藤井晋
9. 15 大義を明鑑せよ(3) 勅語を拝し民
国に寄せて 東福義雄
9. 15 北鮮で犒軍の 二つの異色調
9. 15 淋し、されど美はし ラ博士を偲ぶ
記念事業 国際文化振興会が 奨学資
金を創設 支那盲弾の犠牲
9. 15 全天台を代表 青木総務満支へ
9. 15 残留民保護や 兵隊さんの代筆 上海
日本人基青の奉仕
9. 15 基隆で香港の 避難者救援
9. 15 駒沢大学で 満洲布教僧養成 新秋、
満洲語講座開く
9. 15 満洲国皇帝陛下 法主に真宗を御下問

- 張総理、支那仏教是正を強調 大谷
光照法主満洲行
1937. 9. 15 けふ帰る 光照法主
9. 16 山岳戦を語る (下) -戦線から・2-
藤井晋
9. 16 大義を明鑑せよ (4) 勅語を拝し民
国に寄せて 東福義雄
9. 16 従軍記者も乗込まぬ 呉淞へ一番駈け
黙々と砲弾の破片を掃く 天理教徒
の姿に学べ! 大谷登留連枝談
9. 16 在日回教徒 皇軍へ献金
9. 16 英本国議会上に提されるか 聖地仏
陀伽耶の所管争ひ
9. 17 大義を明鑑せよ (5) 勅語を拝し民
国に寄せて 東福義雄
9. 17 伝單数百枚を 全支上空より撒布 葦
津翁の腹心兩代表渡支 国民外交の頂
角行く 道義国家の建設強調
北支事変の使命
9. 17 新聞の標題は支那勝 内容は日本の勝利
尻尾を出した支那電信局 今は支
那を相手にせぬ 北米の支那事変観
9. 17 曹洞の成田 従軍僧帰る 再び上海へ
9. 17 冷気漸く 北支に迫る 西本北支近信
従軍布教の 本陣北平へ 北平西本
願寺に火葬場設置
9. 18 大義を明鑑せよ (6) 勅語を拝し民
国に寄せて 東福義雄
9. 18 光照法主の稿軍行 秋風截つて完成
阿弥陀堂、真影堂に報告 ステートメ
ント発表
陽焼けした顔に 皇軍の劳苦談る
記者団とインタビュー
9. 18 管長代理ら 上海に慰問
9. 19 支那人士に徹す 一支那事変の真意義
を闡明す- 弁護士 藤田玖平
9. 19 オマール雑録 (二) 沛亭生 回教徒
と芸術
9. 19 “軍人を教へる” 布教使は駄目 法
主稿軍随行座談会 (1)
9. 19 平津方面支那人の 宣撫工作に乗出す
支那通の天兒氏も来援 天津東本願
寺の背後運動
済南の尾家氏 北支に急派
9. 19 北支開教権を拡大 政府の意図に協力
せよ 岡田幹事、仏連に進言?
9. 19 豊太閤大明征伐と 支那事変の精神
別格官幣社豊国神社主典 高山貴
9. 21 日支問題 根本的解決の鍵 (上) 末
広重雄
9. 21 金光教慰問使 再び北支へ
9. 21 上海への従軍 慰問の布教使
9. 21 軍人法主の理解度 無警告親教 法主
稿軍随行座談会 (2)
9. 21 本派朝鮮教会
9. 22 日支問題 根本的解決の鍵 (中) 末
- 広重雄
9. 22 ○○部隊付 従軍僧日記
9. 22 支那兵の強いのは 抗日教育の影響
ポイントのある教育を熱望 皇軍の勇
猛に唯々感嘆 上海時局委員会 榎野
救済部長談
9. 22 従軍布教使の 真の姿はこれだ 法主
稿軍随行座談会 (3)
9. 23 日支問題 根本的解決の鍵 (下) 末
広重雄
9. 23 先づ歓迎に 巨弾十五、六発 支那陣
地に迷ひこみ 危ふく死をまぬがる
西本、上海慰問使帰る 聞・富永氏
9. 23 明朝北支建設は 先づ仏教から 日本、
華北兩仏教徒の提携 中日仏教会結
成
9. 23 支那青年に 仏青運動始む 西本願寺
の三上氏 北平で宣撫工作
9. 23 内鮮融和の為 王仁神社建立
9. 23 北支慰問使 けふ伊勢神宮参拝 精神
作興に備へて パンフレット発行 金
光本部
9. 25 「戦ひ」(1) 上海戦線に使用して 富
永昭雄
9. 25 各派従軍僧縦横の活躍
支那民衆に説く 皇国日本の正義
北支各戦線の宣撫工作
軍で喜ばれる従軍僧通訳陣 駐屯軍
から 従軍僧任命 大派宗議トリオ
所謂布教より 捨身の奉仕 山嶽地
にこの活動
従軍布教使にもこの役目
上海を中心に 西本布教陣の強化
小笠原氏を上海に急派
9. 25 基教関係者を招き 宗教懇談会を開く
外来宗教の旺盛に鑑み 満洲国吉林
省で
9. 26 渡印の旅から 杉本哲郎
9. 26 「戦ひ」(2) 上海戦線に使用して 富
永昭雄
9. 26 オマール雑録 (三) 沛亭生 コーラ
ンと劍
9. 26 日清戦争を思出して (追加) 上原芳
太郎
9. 26 上海より 左藤義詮
9. 26 恩威ならび行ふ、宣撫工作に進出 先
づ隣邦窮民に米穀医薬施与 東亜窮民
救恤会の結成
9. 26 海外の皇軍慰問相次ぐ
カミシモ抜き 上海慰問座談会
大谷登留連枝等が出席 今後の統制を
説く
9. 26 慕標なき戦場へ 塔婆三千贈る 上海
知恩院別院へ
9. 26 半島同胞の赤誠 釜山共生団の教化
9. 26 抗日戦線に躍る 支那要人の戸籍調べ

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- (三)
1937. 9. 26 支那事変を契機に 北平仏教の飛躍
中日仏教学会成立す
9. 26 秋風蕭々死の都！通州（二）－従軍日記の一節から－ 東本願寺従軍布教使 三角貫思
9. 28 支那太虚大師へ 在米 千崎如幻
9. 28 「戦ひ」（3）上海戦線に使用して 富永昭雄
9. 28 明朗支那建設への民衆運動 二百余种に上る 支那各宗団を統率 動乱渦中の宗教工作
9. 28 戦後の新支那建設に 布教、開教の根本策確立 「支那布教総監部」を新設 西本、前田徳水氏起つ 上海部主任 小笠原氏 “建設者” 前田 千葉執行長談
9. 28 基青同盟が在支 民団教会と連絡 支那良民に福祉事業
9. 29 東亜窮民救 恤会の結成
9. 29 「戦ひ」（4）上海戦線に使用して 富永昭雄
9. 29 北平の文化建設 現状はどう？ 消息待つ学界人
9. 29 軍宣撫班と協力 永久的施設を進む 日語学校・幼稚園等も計画 大派宣撫班の活躍 公安総局も後援 宣撫工作は 先づ日語教授から 天理教崇文教会の企て
9. 29 老軀を掲げて 精神報国の第一線に起つ 鈴木曹洞宗管長の 犒軍巡錫プロ決定
9. 29 感激的 天理教婦人会 北支で活躍
9. 29 宣撫工作に つとめたい 前田徳水氏談
9. 30 両国仏教徒団結
9. 30 一日一人 支那を望みて 久富保一氏
9. 30 出動将兵現地慰問は 当分遠慮されたし 内務省各府県に通牒発す 各宗教団体にも影響
9. 30 本社の皇軍慰問使 あす一斉に南北支に出発 創刊四十一年を意義づける 記念日当日の行事決定
9. 30 戦線に描き出す 従軍僧ユーモア集 “偽ラマ僧は日本語がうまい”
9. 30 私設社会事業連盟が 北支社事委員会を組織 明朗北支建設の文化運動に 先づ戦後の社会事業樹立
10. 1 東亜窮民救恤会 早くも成算成る 当路より 三千万円支出の内意 朝野挙げて期待
10. 1 オマール雑録（四） 沛亭生 回教と印度
10. 1 秋風省蕭々死の都！（三）－従軍日記の一節から－ 東本願寺従軍布教使 三角貫思
10. 1 「慰問行」（上）（戦ひ「統編」） 富永昭雄
10. 1 弾丸のしづく 久富保一
10. 1 対支文化工作の眼目 先づ 根本的親日気運を造れ 教団の行動は民族を尊べ
10. 2 宣撫工作
10. 2 ヒンドゥーは 仏教をかう見る（上） 在印度ラホール 山本智教
10. 2 爆弾の箱に乗って 大同一番乗り 敢行 山岳追撃戦に驚嘆！ 大派千部従軍僧活躍
10. 3 戦禍の上海へ 高橋本社特派員出発 知恩院慰問使と共に
10. 3 北支も北満も 宣撫工作が第一 魂と魂の結合が 皇軍の功を完全に する 人野氏談
10. 3 明朗北支の文化建設に 日支学徒の提携 湯北京大学総長快諾
10. 5 ヒンドゥーは 仏教をかう見る（中） 在印度ラホール 山本智教
10. 5 東亜文化史上の宝庫 北平文化を護れ 満鉄や日満文化協会動く 斯学の權威を派遣
10. 5 錦州浄土寺 美事竣成
10. 5 上海丸から 高橋特派員
10. 5 朝鮮仏教振興に 中堅僧が内地巡歴 非常時克服を祈願 朝鮮智山派の寺 院布教所の赤誠
10. 6 ヒンドゥーは 仏教をかう見る（下） 在印度ラホール 山本智教
10. 6 印度国民会議派 組閣承諾の経緯（一） 印度志士 エ・エム・サハイ
10. 6 武力的解決と相俟ち 文化的工作の急務 満支関係各団体代表者と 具体運動を協議 事変対策
10. 6 宗教団体の 現地工作 宗問研が 座談会開催
10. 6 タオル一万本携行 天津に皇軍慰問 汎太仏青対満折衝兼ね 昨日、大谷理事長急行
10. 6 砲煙弾雨の中に毅然 英霊弔ふ従軍僧 ○○部隊将兵も驚嘆 村上独潭氏の活躍
10. 6 居留民から聴く 天理教への感謝 上海丸にて 高橋特派員
10. 7 印度国民会議派 組閣承諾の経緯（二） 印度志士 エ・エム・サハイ
10. 7 天津、保定に “憩ひの家” 開設 皇軍将士の労苦を犒ふ 日本基督教連盟慰問部
10. 7 事変戦没者と 二兆館の追悼 南洋初の盛儀
10. 7 日宗の皇軍慰問使上海へ
10. 7 江南の花と散った 三つの若い英魂 谷大出身の青年住職

- 1937.10. 8 印度国民会議派 組閣承諾の経緯(三)
印度志士 エ・エム・サハイ
10. 8 半島人も開教地同胞も 日の丸の旗の下に 西本、バッチ運動の反映 国民意識は強し
10. 8 南支沿岸封鎖の 軍艦〇〇から 通訳兼従軍僧の 神田恵雲氏活躍
10. 8 上海両本願寺 輪番等帰朝
10. 8 トラック帯同 第一線慰問 天理教第二回
10. 9 印度国民会議派 組閣承諾の経緯(四)
印度志士 エ・エム・サハイ
10. 9 崇高な靖国の神の前に 布教などは要らぬ 従軍工作・宣撫工作・文化工作等 期待薄き宗教の現地工作 宗教問題研究会座談会
10. 9 宣撫工作の 新方針着手 前田西本総監 現地に到着
10. 9 張家口に於て 各宗教代表と懇談 大派慰問宣撫班一行 愈よ保定へ
10. 9 パラオ東本願寺 岡田氏辞任 後任は川島氏
10. 9 全国宗教家 代表者会議 満洲国民政部
10. 9 戦場こそ真の人生 宗教は天主教が最大 追撃戦の陣中から 岩倉〇隊長の便り
10. 9 薬品・手拭各一万に 氷砂糖を携へて 台宗慰問使、十一日出帆 昨日、嶺山で祈願祭
- 10.10 印度国民会議派 組閣承諾の経緯(五)
印度志士 エ・エム・サハイ
- 10.10 オマール雑録(五) 沛亭生 回教と印度(続)
- 10.10 蒙古平原を 越えて大同へ 千部良知
- 10.10 「慰問行」(下) (戦ひ「続編」) 富永昭雄
- 10.10 灯火管制の船内 呉淞沖に仮泊 好奇と戦慄への 衝動高く胸打つ 五日呉淞で 高橋特派員
- 10.10 印度国民会議派の 反日運動停止要望 在京印度志士ボース氏ら ガンデイ氏に警告電報
- 10.10 シャム秘仏 善光寺入山
- 10.10 サイパン本願寺 事変戦没者法要
- 10.10 北支に向ふ 角田特派員
- 10.10 弾丸のしづく 久富保一
- 10.10 秋風蕭々死の都! 通州(四) - 従軍日記の一節から - 東本願寺従軍布教使 三角貫思
- 10.10 漢文教科書に見ゆる 支那人の残虐性 三
- 10.10 明朗北支の文化建設工作 河北大学を中心に 東亜民族文化協会動く 小笠原省三氏、近く渡支
- 10.10 万全の努力を誓ふ 委員を挙げ近く実働へ 日本文化中央連盟 関係各団体と懇談
- 10.12 印度国民会議派 組閣承諾の経緯(六)
印度志士 エ・エム・サハイ
- 10.12 礼拝用のテントに僧侶 宗教的な各国少年団 ヒットラー少年団と交歓 世界少年団大会土産話
- 10.12 ドカーンと一発 巨砲火蓋を切る 早くも空襲の洗礼 さあ、愈よ上海上陸だ 高橋特派員
- 10.12 北満の一隅より
- 10.12 北支に向ふ 角田特派員
- 10.12 滅尽日本得安然! 保定農大教室に躍る 抗日学生の狂奔振り 大派、月輪氏の蒐集資料
- 10.12 太子の御精神に則り 先づ一服の葉を贈れ 明朗北支の再建目指し 水野梅曉氏抱負を語る 仏教徒に望む
- 10.12 現地の修葺を基礎に 国魂を祭祀 鎮守社の観念を植ゑつける 沢田国大教授提唱
- 10.13 次の肉弾(上) 曉烏敏
- 10.13 印度国民会議派 組閣承諾の経緯(七)
印度志士 エ・エム・サハイ
- 10.13 “日本が支那と戦ふは 東洋平和確立の聖戦” デマ爆撃の金髪佳人 ストラミジヨリー嬢
- 10.13 支那民衆への宣撫 協和運動に一端緒 さらに長駆、德州へ! 大派北支慰問宣撫班
- 10.13 北支に向ふ 角田特派員
- 10.13 対支文化開発 実行委員決定す
- 10.14 次の肉弾(下) 曉烏敏
- 10.14 我が海の生命線 南洋の開教を聴く 仏作って魂入れず 退嬰的な開教使 大梵鐘初めて響く 十一月中旬撞初式 サイパン島の感激
- 10.14 上海の名物 袈裟がけの運チャン 目覚しい活躍語る 西本別院伊東輪番談
- 10.14 北支に向ふ 角田特派員
- 10.14 佐藤曹洞樺太 総監辞任か 布教使問に 反対の声
- 10.15 支那事変から見た 日本と日本人の態度(上) ストラミジヨリー
- 10.15 戦禍の上海戦線に拾ふ、偉大的僧侶 槍林彈雨の中に働く 支那にも従軍僧 高橋特派員 従軍布教使へ 第一線の希望 切々・部下を思ふ、部隊長の弔辞に ホロリ 砲煙彈雨の中に追悼会
- 10.15 雨・雨・また雨 待機の上海に砲声股々 高橋特派員
- 10.15 支那女学生三百名が 滄州第一線で戦ふ 大派、尾家従軍僧の便り
- 10.15 旅順戦跡を訪ね 堡壘内の苦戦偲ぶ 愈よあすは天津へ 角田特派員

- 1937.10.15 天津より
- 10.15 北支布教の 確立工作 西本支那布教
総監部実働へ
- 10.15 哈爾濱極楽寺から 北支宣撫工作のため
日満僧三名を従軍
- 10.16 支那事変から見た 日本と日本人の態度
(下) ストラミジヨリー
- 10.16 北支戦線を往く -第一信- 張家口
から大同へ 兵站〇部にて 藤岡了淳
- 10.16 平等一如、皇軍の崇高さ 俘虜を葬ひ、
法話 敵味方を感激せしめた 美し・
柱松部隊長
- 10.16 満洲国民政部が 宗教調査行ふ、全滿
に調査班派遣 第一次は齊々哈爾中心
に
- 10.16 大連を去り 北支に向ふ、港外で籠城
一昼夜 角田特派員
- 10.16 半島婦人同胞の 仏教報国婦人会
- 10.17 支那事変と英国(上) 印度革命志士
ボース、天来
- 10.17 弾丸のしづく 久富保一
- 10.17 欺瞞詩人? 馮玉祥 彼が近作の「郷
居紀事詩」 川戸懐郎
- 10.17 オマール雑録(六) 沛亭生
- 10.17 亜細亜維新を認識せよ 日支要人の仏
教復興熱 戦後工作の国民的覚悟は?
大派慰問宣撫班メッセージ
- 10.17 急テンボの近代戦 従軍布教の再認識
通州犠牲者の遺骨奉じ 西本、清水
俊海氏帰る
- 10.17 明日の明朗支那建設を目指す 大亜細
亜協会の使命を見よ 下中彌三郎氏に
聞くその活躍振り
- 10.17 保定にて 清水州一
- 10.17 秋風蕭々死の都! 通州(五) -従軍
日記の一節から- 東本願寺従軍布教
使 三角貫忠
- 10.17 支那事変への 声明と申合せ 両国信
徒の親交計る 組合教会五十三回總會
- 10.19 支那事変と英国(下) 印度革命志士
ボース、天来
- 10.19 弾丸雨飛の戦場で奇跡・同僚と邂逅
“江南の花と深く散ります” 安藤本
社員の覚悟
- 10.19 急転直下の爆発で残念 外交に献身的
努力 上海岡本総領事談
- 10.19 泥濘に喘ぎつつ 楊行鎮の第一線へ
本紙を貪り読む兵士 安藤本社員との
奇遇 上海にて 高橋特派員
- 10.19 宣撫工作と相俟つ 寺院建立の策動を
止めよ 高田派慰問使帰朝談
- 10.19 日本回教文化教会 改名・陣容建直し
なほ実力に疑問符 今後の動きを注
視
- 10.19 日本の諸事業紹介に アラビヤ語の雑
誌発行 対外事業の第一着手
- 10.20 上海戦線の異色を拾ふ 法衣の袖をま
くしあげ 胸高く光る赤十字の戦士
兵隊の慕ふ “避病院のおばさん”
上海観音堂の中村全明尼
- 10.20 曾ての“赤”の闘士 北支へ皇軍の慰
問 先づ東京班の出発 感慨無量・事
変佳話
- 10.20 草に寝ね、土に臥す 血のにじむ報国
行 何処までも徒歩主義 日宗の清水
行守氏
- 10.20 満洲国開催は 無期延期と決定 但し
準備は続ける 汎太仏青
- 10.20 無言の凱旋 勇士を送る 上海西別院
- 10.20 浄土宗開教 副使上海へ
- 10.20 中日仏教会復活と共に 大谷派、北京
別院を創建 北支開教と宣撫に新展開
既に仮入仏式を挙行
- 10.21 一千万円の資金で 戦後の文化工作開
発 東亜文教国策委員会成る 混沌の
支那匡教
- 10.21 日本基督連盟 更に二氏派遣
- 10.21 実地職場で習得の 知識を満洲に活用
中条洋大学長秘書近く渡満 諸会社、
工場と交渉
- 10.21 日本仏教徒は 釈迦の弟子ではない
支那信徒、世界に飛檄 列国干渉へ一
役
- 10.21 地獄のサタも金次第 支那軍のお守り
デス
- 10.21 “北京の三上”に お寺を寄進 広安
門事件の桜井中佐 宗教のとり持つ美
談
- 10.21 一本の煙草に心をこめ 野戦病院を見
舞ふ、月明に味ふ江南の秋 従軍僧座
談会開く 上海にて 高橋特派員
- 10.21 “海の護りは固い” 支那軍殲滅の巨
砲 長谷川司令官を訪ふ 高橋特派員
発
- 10.21 全亜細亜に舞台求め 皇国の理想を実
践に示せ 遺憾ながら見当外れの 我
が宗教界の対支活動 金鷄学院安岡正
篤氏談
- 10.21 北支への第一歩 さあ塘沽上陸だ 国
際列車待つ車站風景 角田特派員
- 10.22 天津に入る 桑野淳城氏の奮闘 角田
特派員
- 10.23 印度の旅より 杉本哲郎 香港
- 10.23 悟り切った塹壕の兵士 斃れた愛馬へ
回向 秋漸く深い江南の戦場で 第一
線従軍僧座談会
- 10.23 兵隊さんの喜びは 昼の上の憩ひ!
入浴、ラジオ、新聞も設備 天津東別
院“軍人ホーム”
- 10.23 “おお! 中外日報” 読者と固き握手
郷土の勇士達との奇遇 戦場に傾く
夕陽が赤い 上海にて 高橋特派員

1937. 10. 23 野心的研究著作 龍大、明石恵達教授の“西藏語文典綱要”成る
10. 23 総督府の皇民化運動 公葬慰霊祭の神式執行命令 全島的に一大センセーション 台湾各宗仏教徒一斉に反対 公葬執行へ意見書
10. 23 廃墟に帰した南開大学 爆撃の跡を見る 天津軍指令部訪問 角田特派員
10. 24 印度の旅より 杉本哲郎 怪飛行機
10. 24 秋風簾々死の都！通州（六）－従軍日記の一節から－ 東本願寺従軍布教使 三角貫思
10. 24 欺瞞詩人？ 馮玉祥 彼が近作の「郷居紀事詩」…中… 川戸懐郎
10. 24 猛烈な市街戦 敵の逆襲で砲声股々 秋冷頓に加り 冬仕度
10. 24 傷病兵の手紙の代筆や 理髮の奉仕 ホテルを管理する 上海基青の活躍
10. 24 北京中心街に 大派別院出現
10. 24 基教の“憩ひの家” 天理の“ひのきしん” 新設の浄土宗天津寺 角田特派員
10. 24 古義宗会 朝鮮は除外 開教総長設置案 -第八日-
10. 24 国際危局と支那事変 九国条約会議は 開催価値を何処に置くか 只支那を強がらせるだけ？ 国際戦線に 微動する宗教の役割 容共支那はどうなる 和平か長期対立か
10. 24 紅茶の後 -大連紳士の問答覚え書- 特派員 角田素江
10. 24 弾丸のしづく 久富保一
10. 24 読書界 支那は生存 し得るか
10. 26 日本の国際正義に基き 亜細亜問題解決へ 新に“青年亜細亜連盟”結成 国際運動に乗出す
10. 26 全滿各都市一斉に 排共国民運動起す 宣伝機関を総動員 民衆の関心を喚起
10. 26 大派北京別院 初代輪番決る 藤岡了淳氏任命
10. 26 北支開教監督 部北京に移転
10. 26 友邦シャムに 仏教国民使節派遣 “正義日本”を闡明
10. 27 上海戦線から
10. 27 仁川で全国 支所長会議
10. 27 応募者実に75倍 来春開校を前に教授の詮衡 建国大学の礎石決る
10. 27 大陸文化工作 座談会 仏教記者連盟 けふ、亜細亜民族解放へ 頭山翁初め 各民族代表集り 青年亜細亜連盟結成 武人画伯も袈裟懸けて 戦場に英霊を弔ふ 全支戦線彩管行語る 小早川秋声画伯
10. 28 故伊藤正伺氏 受難の跡を弔ふ 神月
10. 28 老師筆の扁額 不思議な因縁思ふ 上海にて 高橋特派員
10. 28 支那事変と海外仏教徒 与論は日本に不利 “仏徒として断じて許されぬ” 激越な辞句で毒づく
10. 28 満洲における開教使を増加 西本全滿主任会議
10. 28 大派朝鮮開教団 時局挺身隊結成 宣誓の上総合的活動 清州仏教愛国 処女団結成
10. 28 中央仏教学院 開教研究会
10. 29 中華国民を覚醒せしむべき 日本仏教の使命 権尾辨匡
10. 29 世界と中華宗教団体に 帝国の正義宣揚されん 全日本仏教徒の名により 明和会、各宗管長に提議か
10. 29 息つく暇なく 追撃砲の落下だ！ 月光びえる壘壕に 悠々、勇士の高肝 上海にて 高橋特派員
10. 29 カ教徒の日本支持に呼応 回教徒も蹴起せん 東京回教団既に我が立場を支那回教徒に闡明
10. 29 前田総監自身 従軍布教使となる 愈よ本格的に動く 西本願寺新支那運動 支那事変に対し 海外者の認識匡正促す 全国大学教授連盟 米国記者を招待
10. 30 献堂式に皇軍へ捧ぐミサ 奉天にカトリック 日本人教会堂成る
10. 30 亜細亜の解放叫ぶ 宣言、決議を英大使に手交 青年亜細亜会議
10. 30 地下室に弾道避け 戦慄の一時間 冒険、暗夜の市街に 危く死線を越ゆ 上海にて 高橋特派員
10. 31 印度の旅より 杉本哲郎 シンガポール（上）
10. 31 簾々秋風死の都！通州（七）－従軍日記の一節から－ 東本願寺従軍布教使 三角貫思
10. 31 戦争と仏教（上） 五百井浪雄
10. 31 北支新政権の目標確立に 先づ新学府を設立 文化工作開発の計画を練る 東亜文教国策委員会
10. 31 北支の宣撫工作 軍部より激賞さる 西本願寺の活動
10. 31 欺瞞詩人？ 馮玉祥 彼が近作の「郷居紀事詩」…下… 川戸懐郎
10. 31 上海よ 町田トシコ
10. 31 情けの華は満洲に 本庄大将と江頭法絃氏
10. 31 “日滿合作は 教育の基礎から” 満洲里に西本の 日語学園を設立
11. 2 印度の旅より 杉本哲郎 シンガポール（中）
11. 2 事変発端の地に 激戦の跡を偲ぶ 偶然聴き得た秘話 今宵は豊台泊りだ

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 角田特派員
1937. 11. 2 日蒙兩軍進撃で 弥や増す親善 最初の日蒙軍追弔会 莫力廟の西本願寺
11. 2 北滿全移民村に 東本願寺の新展開 更に第五、六、七移民開村へ 今後の動向注視
11. 2 宣撫工作に献げる一石 中国仏教徒に 声明書送る 更に北支へは大西氏を派遣 日華仏教研究会の事変対策
11. 2 曹洞宗会 -第六日(三十日)- 戦後の文化的 工作の用意ありや 用語で議場喧騒
11. 3 印度の旅より 杉本哲郎 シンガポール(下)
11. 3 在京半島同胞有志が 国威宣揚の行進 桃山御陵、東本願寺参拝 明治節
11. 3 風なほ腥い 保定の新戦場 「日本軍場之靈位」に黙祷 往時を偲ぶ城内の結構 廿日保定にて 角田特派員発
11. 3 日本を中心に アジア民族団結の雄叫び 亜細亜民族青年代表大会
11. 3 台湾仏教団の神式公葬反対に 全国神職会より一矢 “仏式こそ多数決の強制だ” 機関誌を通じ意思表示
11. 3 国家創造過程の宗教の型を示す 満洲大同仏教会が 初めて聖典出版
11. 5 露天の陣中風呂に 嬉し、野趣を満喫 遺骨の入れ替へを奉仕 廿三日石家荘にて 角田特派員
長駟石家荘へ 一番乗りの三上氏訪問
11. 5 印度の対日ボイコット続行 在留印度人の軋轢 A. M. サハイ氏の一文 崇る 老猶英国の奸策
11. 5 北支を中心に アジアの文化工作検討 東京仏教記者連盟の 大陸文化工作座談会
11. 5 紊乱北支の匡教 あす東京軍人会館で 文化施設講演会
11. 6 印度の旅より 杉本哲郎 印度洋(上)
11. 6 児童の楽書や 劇に織り込む排日 徹底した抗日排日指導 角田特派員
11. 6 呻吟の傷病兵に まんが似顔の慰問 「涙がこぼれて仕方がない」 台宗慰問使落合氏談
11. 6 浄土宗が上海に慰問使 管長代理に本山法主を派遣 宗務所、本山側と協議進む
11. 6 大派兩従軍僧 直ちに前線へ 慰問使も安着
11. 6 村井氏北支へ
11. 6 日支文化提 携を懇談 大学教授連盟 幹部を派遣
11. 7 印度の旅より 杉本哲郎 印度洋(下)
11. 7 北支平和後に望む …満洲移民政策の失敗を顧みて… 東本願寺宣撫班長
- 天児昊
11. 7 北支の戦線に聴く 既成教団改革の声 “管長は絹衣錦繡を脱ぎ 麻の衣に還る要あり” 某従軍僧の真剣な懇へ
11. 7 教育機関を通じ 支那のデマー掃 同志社大学からも 米国へ使節派遣
11. 7 敗残兵の襲撃に 連夜不眠の警備 無蓋車に乗って 娘子関方面に向ふ 井陘県にて 角田特派員
11. 7 石家荘にて歌へる 梶原重道
11. 7 神社の設定等 例外を保留 満洲国治廃条約締結
11. 7 日滿小学児童 学芸親善交歓
11. 9 印度の旅より 杉本哲郎 コロンボ(下)
11. 9 満洲国皇帝陛下が 御批註の孝経頒布 全滿中小学校に対して
11. 9 娘子関一名処女関 空爆でも齒がたたぬ 砲声山々に響く 井口県にて 角田特派員
11. 9 日印親善の促進には 互に協調して当れ サハイ氏の態度は終始一貫 関西日印協会小林義道氏語る
11. 9 “移植民の宗教政策” 浅野氏の所論 注目さる 人口問題全国協議会
11. 10 東亜平定の大理想に燃えて 今ぞ・国民戦線結成へ(上) - 明朗新支那建設の大使命を遂行せよ- 弁護士 藤田玖平
11. 10 印度の旅より 杉本哲郎 ケラニヤテンブル
11. 10 台湾の公葬神式問題 高田曹洞総監の陳情 仏連に於て善処す
11. 10 共産軍のピラ撒き 敗残兵三万の行方 井口県にて 角田特派員
11. 10 神社既設団体の 対外活動無能 神祇思想実践団体を新設 十七日、第二回準備会
11. 11 東亜平定の大理想に燃えて 今ぞ・国民戦線結成へ(下) - 明朗新支那建設の大使命を遂行せよ- 弁護士 藤田玖平
11. 11 遂に娘子関陥落 尊き犠牲者にただ一言 “すみません、有難う!” 井口県にて 角田特派員
11. 12 支那とモハメット教(上) 金孝敬
11. 12 僅か数日後に見る 保定の見事な復興 日華三教連合会結成さる 微笑ましい街の平和風景 更に北京へ 角田特派員
11. 12 日滿蒙を宗教で結ぶ 禪を携へて入蒙 妙心派山本氏 徳王に招かる
11. 12 通州事件邦人の分骨奉安 高野山に 北支の文化工作 外務軍部方面の具体案 四項目に亘り決定
11. 13 支那とモハメット教(中) 金孝敬

1937. 11. 13 支那布教権獲得問題 事変後の日支折衝期し 一挙解決に当れ 各宗教派一致団結して 政府当局を鞭撻せよ
11. 13 破損甚だしい 蘆溝橋を渡る 愈よ北京に入る 角田特派員
11. 13 おしるご接待 石家荘に進出・好評の“救世軍報国茶屋”
11. 13 満洲里神社 竣工奉祝祭
11. 13 満洲国濱江省全学生の 支那学生に告ぐる書 楽土満洲国の現状を力説し 大亜細亜主義の必要を強調
11. 13 蒙古人留学生の ドンドツク君中心に 蒙語研究会開設
11. 13 “華北人の華北”建設 指導を如何にすべきか 下中弥三郎氏談
11. 13 内鮮仏徒の団結固り 至誠奉公を誓ふ 時局重大に蹴起した 中鮮地方内鮮仏教徒大会
11. 13 各宗僧侶に 支那語教授 大西良慶氏 発願
11. 13 明年日本で開く 基督世界二大会議 印度開催に変更か
11. 13 京都YMCA 支那語講習会
11. 13 ペン光ル 東洋人による 東洋の建設
11. 14 支那とモバメット教(下) 金孝敬
11. 14 海拔三千尺の高地に 素的!生魚屋開業 日本品には不自由せぬ 八達嶺越えて察哈爾省へ 張家口にて 角田特派員
11. 14 伝道目標を 北支へ集中 日本基督教会
11. 16 朔北の戦場より 遥かに盛儀を偲ぶ 北支に勇戦中の 瀨古口禰宜陣中通信
11. 16 砂塵の大同府 女子供も手榴弾投げた 山西戦線の特異性 大同にて 角田特派員
11. 16 全国神職会が 現地で慰霊祭 十二日 天津商業講堂で
11. 16 訪暹国民使節 の壮途を祝す
11. 16 宗派的偏見を排除 儒仏道三教連合に 成功 閔帝廟に本部を建設 東本願寺の華北工作
11. 17 支那と列国
11. 17 雲崗の石仏拝見 遺憾、蒙古入りを断念 角田特派員
11. 17 北支の各重要地に 一齐に出張所を開設 宣撫工作に先づ施業事業 西本、全門末に呼びかく
11. 17 滿邦協和の信念を表し 皇国の正義を 中外に宣明 重大宣言、決議を満場一致可決 仏教各派管長重役時局懇談会 赤魔を撃滅せん! ソ連の不当圧迫に 内地在住半島同胞起つ
11. 17 留日満洲学 生会を組織 開館も新築
11. 17 店頭“正札付き” 市場にもこの統制 文化の宝庫北京を 救ったわが功績
11. 18 北京の大学を今後 如何に建設するか 全部閉鎖された国立大学 大学生の 大多数は戦死
11. 18 大阪にあがる 亜細亜民族の叫び 各国代表参加して あす、中央公会堂で
11. 18 ペン光る 在留印度人よ 一致団結せよ
11. 19 最も慎重を要する 支那布教権獲得問題 渡辺哲信
11. 19 宗派を超えて 浄宗からも寄付 西本の北支宣撫工作 薬品募集の好反響
11. 19 これはまた奇縁 全神代表と同席 一北京を発つた列車の中一 角田特派員
11. 19 問題の台湾で 神仏両式葬執行 軍公葬の模範示す
11. 19 大連物部守屋 千三百五十年祭 高山、賀茂氏等が建碑
11. 20 北支と我国との経済合作の 重点を何処に置くべきか(1) (北支経済の展望) 鐘紡社長 津田信吾
11. 20 戦塵を外に何んと 古名画の模写に専念! 北京古物陳列所国画研究所 “東亜書画協会”を結成 北京にて 角田特派員
11. 20 徳州の尼僧、従軍僧に 本尊尊還を哀訴 蒋介石偶像打破の犠牲
11. 20 上海西本の復 旧は案外容易
11. 20 張総理入洛 と西本願寺
11. 20 関係廿八団体と協力 統一に乗り出す 先づ 支那文化団体に 声明書 日本文化中央連盟 対支文化工作 同文同種民族の 文化発揚にあり 対支文化工作の根本精神 伊賀連盟常勤理事談
11. 20 連盟機関誌 “文化日本” 出づ
11. 20 中国仏教徒に贈る 声明書と共に施業 日華仏教研幹部会
11. 20 波瀾万疊の公葬問題 台北市神仏両式 採用 軍人公葬のトップ切る
11. 20 “内鮮一如は真宗から” 鮮人信徒合宿訓練 大派成興の真宗講習会
11. 21 北支と我国との経済合作の 重点を何処に置くべきか(2) (北支経済の展望) 鐘紡社長 津田信吾
11. 21 オマール雑感(九) 沛亭生 メッカ巡礼
11. 21 日本仏教の 真髄を中国に贈る 各宗概論の刊行計画 日華仏教研で着手か
11. 21 上海と北支へ 醍醐寺慰問使
11. 21 仏光寺が満洲へ 慰問使派遣
11. 21 西本が北京に 日語学校開設
11. 21 宣撫工作の新生面 東洋平和百年の大系を 臨黄合議所で協議か 牧野幹事長の計画

1937. 11. 21 思想転向者の 北支皇軍慰問使 報国講演会
11. 21 露よ、支那から手を 引いて呉れ 東洋は明朗となる！ 中辻吐雲
11. 21 オリエンタリズムの確立
11. 21 北支当面の 思想的対策について 高都持雪潮
11. 21 平漢戦線を征く(上) 保定にて 月輪孝雄
11. 21 宗教関係学校に 支那語課を設けよ 「まづ親しみ」への導火線 田中智学氏の提唱
11. 23 北支と我国との経済合作の 重点を何処に置くべきか(3) (北支経済の展望) 鐘紡社長 津田信吾
11. 23 支那事変に対する 正き認識(一) 古川確悟
11. 23 更に上海方面の 陸海皇軍慰問行 西本願寺光照法主
11. 23 徳王に贈る 日蒙親善の書 “卿等の祖先は日本人だ” 鞍馬山の信楽貫主一派を代表して 陸海軍への献金 斉藤智山派管長 犒軍に寧日なし
11. 25 北支と我国との経済合作の 重点を何処に置くべきか(4) (北支経済の展望) 鐘紡社長 津田信吾
11. 25 支那事変に対する 正き認識(二) 古川確悟
11. 25 今次支那事変の発生と 英国の伝統的政策(上) 印度革命志士 ポース、ラスビハリ
11. 25 為政者への反抗心を 巧に日本へ向ける 野外劇で民衆に呼びかく 徹底せる排日教育 大連にて 角田特派員
11. 25 孫文銅像を撤去 日支戦没勇士供養塔 近く北京中央公園に建立 藤井草宣氏の活動
11. 25 浄土宗の皇軍 慰問使陣容決る 宗務所から江藤部長随行 六日、上海丸で発つ
11. 25 仏教の名の下に 益々親善友好を 日本仏教を代表して 暹羅へメッセージ シャムの水兵さん 知恩院で異国のお勤め さすかは仏教国
11. 25 支那の左翼的文献は 英蘇よりも日本物を翻訳 日本の左翼文献を取縮れ 安達大阪観察所長語る
11. 25 “民族自覚に邁進せよ” 支那紙の大々的報道 思想転向者の皇軍慰問
11. 25 “アジア文化を語る会”
11. 25 黄大仙寺に 布教所設置 上海の日宗清水従軍僧
11. 26 今次支那事変の発生と 英国の伝統的政策(中) 印度革命志士 ポース、ラスビハリ
11. 26 北支と我国との経済合作の 重点を何処に置くべきか(5) (北支経済の展望) 鐘紡社長 津田信吾
11. 26 支那事変に対する 正き認識(三) 古川確悟
11. 26 大都市の風格・天津 一再び数々の奇遇一 角田特派員
11. 26 保定・石家荘に 大派軍人ホーム 大慰霊祭執行
11. 26 崑山猛追撃 戦に参加
11. 26 蒙疆回教徒が 防共運動に起つ 同地方回教徒大会開催
11. 26 香月部隊の 合同慰霊祭 石家荘で挙行
11. 26 清水安三氏の 北京籠城談 京都YMCA
11. 26 滿支語教授機関 教育機構の検討 西本願寺三大会議 先づ龍商会議から
11. 26 “北支文化”工作に 政府愈よ本腰内務省、正式に事務官派遣 積極的活動に注目
11. 26 本願寺日語学校 愈よ北京に開設 先づ三十名を募集
11. 27 今次支那事変の発生と 英国の伝統的政策(下) 印度革命志士 ポース、ラスビハリ
11. 27 北支と我国との経済合作の 重点を何処に置くべきか(5) (北支経済の展望) 鐘紡社長 津田信吾
11. 27 印度独立目指し ヒンズー教徒の武装 軍官学校設立運動起す
11. 27 訪暹仏教使 節壮行会
11. 27 天津よさらば 一愈よ帰国の途へー 角田特派員
11. 27 光照法主の 出発時間決る
11. 27 平和工作第一線の戦士 宣撫班裏面の活動 北支の広汎な文化工作
11. 28 北支と我国との経済合作の 重点を何処に置くべきか(7) (北支経済の展望) 鐘紡社長 津田信吾
11. 28 支那事変に対する 正き認識(四) 古川確悟
11. 28 平漢戦線を征く(下) 保定にて 月輪孝雄
11. 28 “馬は駄目です” 文字通り慰問行脚 出発前に光照法主談
11. 28 諸英霊を弔ふ 骨粉の仏像建立 上海の知恩院別院で計画
11. 28 更に金光教 上海へ慰問
11. 28 訪暹仏教使節 更に一名参加
11. 28 支那農民唯一の慰安 開廟復興が急務 容共、排日の転向には 心の中心を造ること
11. 28 日華三教連合会を指導 三民共産主義 撲滅運動 貴氏を会長に陣容成る 東本願寺、実働に入る
11. 28 教団発展の基礎 滿支語学校を創建

- 西本龍商会議終る
 新回教の企て 教学審議會始まる
1937. 11. 28 仏教を民国の 国教とせよ (上) 郭維麟
11. 30 北支と我国との経済合作の 重点を何処に置くべきか (8) (北支経済の展望) 鐘紡社長 津田信吾
11. 30 “防共聖戦”の真意義 - 宗教に課せられたるもの - 浅野研真 一、カンタ僧正 の場合
11. 30 支那事変に対する 正き認識 (五) 古川確悟
11. 30 明朗北支建設の前進工作 太子救世の聖旨を体し 日本仏教徒が贈る 支那民族へ暖き真心
 悲田会を創立 先づ一服の薬餌を 水野梅曉氏各宗を説く
 全仏教婦人起ち 東洋平和籌備会設立 近く救恤第一班派遣
11. 30 暈の上の一夜を! 一線兵の軍人宿舍 東本上海別院の施設
11. 30 光照法主一行 上海へ出発
11. 30 木辺管長の奔走で 台湾公葬問題好転せん 大谷拓相善処を約束す 仏式に依る非難の三因
11. 30 支那開教の 根本的大方針 文書、留学、派遣等々 西本願寺教審会
11. 30 北支情勢と宗教 宣布状況を聞く ペン光る会の盛況
11. 30 大派諏訪教授 北京へ留学 派内留学生の 指導に当る
12. 1 事変および事変後に処する道 (上) 馬田行啓
12. 1 “防共聖戦”の真意義 - 宗教に課せられたるもの - 浅野研真 二、ローマ法王 の場合
12. 1 赤化路線断絶を叫んで 蒙疆回教徒大会開催 代表者五千名が結集して
12. 1 石家荘に二万五千坪 別院日語学校に加へて 公園建設を計画 高=野=山
12. 1 北支に浄宗の開教進出 十名の開教使派遣 監督に福田圃正氏を起用か
12. 1 ・事・変・対・策・ 日支両国民の精神的物質的提携こそ 我等の望むところ 对支文化工作協議会声明
12. 1 満洲国奉天省では 寺院財産保護のため 街村公所管理に移す
12. 1 ラトビア僧 “防共聖戦” 参加と献金
12. 1 文化工作に支那学者が一臂の力
12. 2 事変および事変後に処する道 (中) 馬田行啓
12. 2 “防共聖戦”の真意義 - 宗教に課せられたるもの - 浅野研真 三、東亜宗教政策の重点
12. 2 北支児童の頭に映じた 時局並に日本
- 軍 懸賞文に現れた一二例
12. 2 日支外交略年譜を編み 聖戦の真義を闡明 木津無庵翁の近業
12. 2 北京文化の大研究機関 ひろく老碩学を招聘して 北京古学院設立さる
12. 2 日支要人懇談 東亜文教国策 = 文部省で=
12. 2 和平来一の北支は 教育の革新から 小池定雄氏が引率して 教育界の代表者来朝
12. 3 事変および事変後に処する道 (下) 馬田行啓
12. 3 北支各線十二要地に 軍人ホーム開設 軍が家屋提供、設備補助 大派、北支一帯に開教網
12. 3 南京方面猛追戦の一閃 将兵と従軍僧座談会 思はず念仏が出た話 [上]
12. 3 宣撫工作の薬 北支で大歓迎 西本第二回発送
12. 3 支那事変は道義 世界実現の契機 満洲国に愛国運動起る 協和会首都本部を中心に
12. 4 津田信吾氏の 北支経営論を読む (上) 久富保一
12. 4 馬の仏性は如何? 宗教談に華が咲く 将兵と従軍僧座談会 [下]
12. 4 満洲支那開教の確立 浄土宗でまづ人材養成
12. 4 ここ数日中に 第一回留学生派遣 日支文化の戦士養成 西本願寺より北京へ
12. 4 満支皇軍将士に贈る 香春氏の大西郷劇 独立座劇団一行が 来春早々戦線行脚
12. 4 我等は“日本の信仰の友” 国民会議の反日決議に無関係 ヒンゾー教徒叫ぶ
12. 4 人類共同の敵たる 共産党を排撃せよ 中国仏徒は我が誠意を知れ 日華仏教研究会の声明書
12. 5 大乘の見地に立つ 北支開発が急務! 至急、第一人物を送れ 花井氏曹洞宗当局に陳述
12. 5 津田信吾氏の 北支経営論を読む (中) 久富保一
12. 5 仏教を民国の 国教とせよ (中) 郭維麟
12. 5 北支特輯
 明朗華北建設の 礎石は積みれゆく 誠に敏達なる宣撫班の働き 靖郷隊の負主 桜井中佐 名譽の負傷を綴る 陣中日記五日間 - (一) - 灯火管制下の 陣中句会 東本願寺 上海別院で 駱駝のゐた 東本願寺

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 太原城頭に 部隊長と語る (上)
板垣兵団従軍僧 岡部重礼
〇〇警備隊にて 寺島礼三
死線を越えて太原行 (上) 一、石
家荘より井陘へ 小原法忍
保定入場当時の たつた一人の日本
人 野間ハルさん 通訳で活躍
雲崗石仏寺の 印象記 -素江-
支那事変陣中双六 皇軍及家族に贈
る 金光教の杉村利雄氏
北支戦線の花 靖郷隊に従うて 三
上 聰
馬は動かす 雨は降り出す -従軍
の一節- 東本願寺従軍布教使 丘琢
淳
1937. 12. 5 酷寒を衝いて 祈る武運長久百日 各
神社に参拝者の奔流 大連市民銃後の
熱誠
12. 5 戦地で追悼会 出発に際してメッセ
ジ 桑田管代慰問使あす出発
12. 7 津田信吾氏の 北支経営論を読む
(下) 久富保一
12. 7 浄宗南洋寺の 鐘楼落成式
12. 7 杉本哲郎画伯 愈よアジヤンタに籠る
明春一月まで滞在
12. 7 朝鮮神宮の御鎮座十周年 記念事業完
成
12. 7 物のわかった人 死んだ西藏の活仏班
禪ラマ 河口慧海氏の追憶
12. 7 愈よ北支に のべる慈母の手 全仏教
婦人東洋平和籌備会
12. 7 五台山の聖地を冒して 共産軍三万が
侵入 軍絶賛の太原東本願寺 福島少
将の航空特報
12. 8 戦跡と巡礼 絵と文 小早川秋声
12. 8 “印度の実 情を聞く” ボース氏招
き 龍大講演部が
12. 9 官僚臭に反対 对支文化工作の真の実
働体近く結成
12. 9 南京陥落の 歴史的祝賀 府下各神社
戦捷奉告会
12. 9 上海方面から 蘇州、無錫へ 光照法
主一行
12. 9 命令で全僧侶将士が 英霊に朝夕勤行
〇〇部隊の原隊に於て 最も注目す
べき一動向
12. 9 北支の新文化 建設大綱定む
12. 10 海外神社の再検討 事変に直面、当事
者の 批判的となる 信念問題
12. 10 天使終焉の地 皇軍の手で発見 支那
カ教徒の感謝
12. 10 戦後の支那 仏教教育 仏教読本編
纂
12. 10 けふ南京 攻略祝賀 大派契義事務局
12. 11 南京城門初め 占領地へ “鎮緝” 伊
勢神宮より頒布 神威洽く隣邦を覆ふ
12. 11 台湾でも珍らしい 本島人のみの精
神総動員講演会
12. 11 組合教会の 北支開拓決定 八千円募
金
12. 11 “日本熱” 最高潮に 卅名招生に二百
六十余 北京日語学苑開く
12. 11 石家荘本願寺 日語学苑陣容
12. 11 宗門の戦後対策 中心に報告書作成
臨時事変部も陣容整備 浄宗調査課
12. 11 北支慰問 視察談を聴く
12. 11 東亜視察会 北支仏教の 史跡視察
12. 12 パレスタインに於る 英帝国主義 (上)
印度革命志士 ボース、ラスビハリ
12. 12 皇軍の使命に就て (上) 楠秀岑
12. 12 仏教を民国の 国教とせよ (下) 郭
維麟
12. 12 オマール雑録 (十) 沛亭生
12. 12 藤田玖平氏 けさ北支へ
12. 12 日宗報国義会 北支開教使養成
12. 12 北支を描く
戦線随想 [日本詩壇 豚] 同人
寺尾道元
静かな 北京点描 -素江-
風の難行軍を続けて 蘇州、無錫に
一番乗り (一) 東本願寺従軍僧 諏
訪部窓人
穢土の感傷 勝山和郎
名誉の負傷を綴る 陣中日記五日間
-(二)-
太原城頭に 部隊長と語る (下)
板垣兵団従軍僧 岡部重礼
支那事変に教団の処すべき途 吉水
霊家
画信 東本願寺従軍僧 石黒英俊
支那人相手の伝道 十年間に三百人
の信者 北京天理教会 佐藤軍記の
苦心
芸者の鑑札を返して 銃後の奉仕
-地蔵尊の信仰厚く-
北支戦塵抄 -素江-
12. 12 国都南京遂に陥落! 祝祷法要、街頭
行進 ETC 溢れる各種団体の祝賀
12. 12 愈よ南京訪問 けふ句容へ、〇〇で追
悼会 光照法主の犒軍行拡大
12. 12 満洲にならひ 北支にも “光の家”
一灯園の宣撫工作
12. 12 満洲行花嫁ヤーイ 白粉塗の嫌ひな方
を募る 新郎はハリキリ青年
12. 12 太原城頭の 大慰霊祭
12. 14 皇軍の使命に就て (中) 楠秀岑
12. 14 パレスタインに於る 英帝国主義 (下)
印度革命志士 ボース、ラスビハリ
12. 14 比律賓群島同胞の悩み 生き別れの悲
劇を救ふ 特異な女学校を設立 タバ
オ東本願寺で実現 旭主任談
12. 14 汎太仏青満洲国 開催の可能性説 無

- 気力の全連どう出る？ 蜂屋理事の非公開報告
1937. 12. 14 大正大学の支 那問題講座
12. 15 皇軍の使命に就て (下) 楠秀岑
12. 15 光照法主 愈よ南京へ 廿二日頃帰朝
12. 15 床し・上海東別院に 陸戦隊の記念移植 大山大尉戦死地点の檜
12. 15 京城仏俱の 総会と成道会
12. 15 宗教界の対支文化工作 先づ布教権獲得を解決せよ 近く期成同盟結成か？
12. 15 対支開教問題 懇談会開く 廿三日、日比谷“松本楼”で 東京支社主催
12. 15 西本の第一回北支留学生 五名決定 第二期来春
12. 15 名実ともに 東洋の大学へ 洋大の積極的満支進出
12. 16 漢民族はどこまでも 堯舜の理想実現へ 近く政府委員として渡支する 鹿子木貝信博士の熱論 最後は彼らの 宗教問題で
12. 16 おお停よ！ 北支慰問使福地氏が 陣中に父子一夜を明す
12. 16 民国“臨時政府”成立す 十四日、北京居仁堂で歴史的挙式
12. 16 現地の支那 人宣撫には教家の協力が大いに必要
12. 16 神習教管長等一行 皇軍の慰問を終へて帰る 加藤氏初の神道従軍教師に採用
12. 17 英国の章魚的把握(1) 印度は英国の為に戦ふ可からず 印度国民委員会 会長 エ・エム・サハイ
12. 17 半島人教師が 正義日本強調
12. 17 王道文化運動の一翼 満洲文芸協会設立 新満洲文学の中央機関
12. 17 新京忠霊塔慰霊祭
12. 17 諏訪谷大教授 北京留学出発
12. 17 吾が宗教教団に於る 対支開教方策の樹立 各宗団管長重役招き 支社主催・対支開教懇談会
12. 17 東京と北京に本部 明春、発会式 対支文化工作機関 “東亜文化教会” 設置
12. 17 支那語講習 支那宣撫の 仏徒養成に北支へ伸びる 天理の触手 布教陣かたむ
12. 17 留学生派遣、交歓など 多面多彩に拡大発展 戦死者の追悼、物故者慰霊祭 国際仏教教会本年度総会
12. 18 英国の章魚的把握(2) 印度は英国の為に戦ふ可からず 印度国民委員会 会長 エ・エム・サハイ
12. 18 アジヤンター壁画の模写 州当局より許可さる =カルカッタ富豪ビルラ氏(印度人)から資金の援助を受く= 印度ドユ
- リア、東洋 綿花バンガローにて 杉本哲郎
12. 18 軍の威厳を汚す 創作的現地報告 某宗従軍僧の舌禍
12. 18 皇軍と居留民の歎び 上海に響く除夜の鐘！ 松本(文)博士、高野山に籠り 東本願寺の歴史的撰文完成 けふ晴れの船出！
12. 18 観音大士と対談 偈を囁さる 中華民國臨時政府委員 江北京市長の霊夢
12. 18 上海知恩院別院 院で追悼会 桑田管代一行 更に蘇州へ
12. 18 一層教家の 奮起活動を望む 南京陥落に際し 松尾宗教局長談
12. 18 本島人僧侶総動員で 本島人のみの精神作興 開教にも新方策を樹立
12. 18 輸軍費に 寄付決議
12. 19 英国の章魚的把握(3) 印度は英国の為に戦ふ可からず 印度国民委員会 会長 エ・エム・サハイ
12. 19 一日一人 支那通の支那観 後藤朝太郎
12. 19 オマール雑録(十一) 沛亭生 波羅門後日物語(下)
12. 19 北支戦塵抄 - 素江 -
12. 19 北支方面に 第一回配薬 江北京市長 西本に感謝
12. 19 北支皇軍慰問中の 見聞を陣中双六に 大谷瑩潤連枝が 出征家族の子供に贈る
12. 19 新京の蒙古学校 講堂(校舎)の建築に 台宗一万円寄付
12. 19 戦没将士の 英霊を護持 間島従軍僧も 南京入城式に参列
12. 19 戦雲漠々 日蓮宗従軍僧 結城瑞光(一) 上海
12. 19 支那事変に 教団の処すべき途 吉水 霊家
12. 19 名譽の負傷を綴る 陣中日記五日間 - (三) - 梶原重道
12. 21 英国の章魚的把握(4) 印度は英国の為に戦ふ可からず 印度国民委員会 会長 エ・エム・サハイ
12. 21 歳晩記 - 行動宗教の半ヶ年 - (上)
12. 21 さながら密教政府 中華民國臨時政府 要人 喜ぶ中日密教研究会
12. 21 “大地”への愛着利用 支那民衆の心に喰入る 大地への尊敬説く金光教 割合容易に理解される？
12. 21 西欧諸国から 東洋工作へ急転 国際文化振興会の方針
12. 22 英国の章魚的把握(5) 印度は英国の為に戦ふ可からず 印度国民委員会 会長 エ・エム・サハイ
12. 22 歳晩記 - 行動宗教の半ヶ年 - (下)

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1937. 12. 22 犒軍行の 光照法主 愈よ二十二日
帰朝の途に
12. 22 老輪番奮起 支那語講習 大派南浮氏
12. 22 大派の宣撫工作に 宣撫映画班特設
映写に撮影に画期的進心 主任加藤氏
壮図につく
12. 22 台湾の教会にも 反英的傾向の表れ
向上する本島人教育
12. 23 英国の章魚的把握(6) 印度は英国
の為に戦ふ可からず 印度国民委員会
会長 エ・エム・サハイ
12. 23 歳晩記 - 北支開発前途 -
12. 23 寒山寺も虎邱塔も 支那軍に蹂躪 魔
城! 馬小屋同然 仏教寺院の惨禍語る
つぶさに嘗る この辛酸 南禅寺派前
山氏
12. 23 戦場の皇軍 数珠を望む 上海西別院
で頒布
12. 23 京大浜田総長 台湾視察旅行
12. 23 台湾彰化通信
12. 24 英国の章魚的把握(7) 印度は英国
の為に戦ふ可からず 印度国民委員会
会長 エ・エム・サハイ
12. 24 カナカ青年に 仏青訓練
12. 24 南洋殉職者の 追悼大法会 パラオ東
本願寺
12. 24 赤い国の“寺院” 日本仏教史に記録
して終る 戸泉主任漸く帰朝 浦塩本
願寺
12. 25 亜細亜と回教徒(上) ショウ翁の回
教観その他 須田正継
12. 25 北支並に中支満洲に 大谷光暢法主酷
寒犒軍行 国策翼賛、宣撫工作に重点
一月十三日壮図に就く
12. 25 中華臨時政府訪問 東亜興隆の為に
支那民衆提携を徹底 関根総長談
12. 25 淵江禅林寺管長 一月上海北支へ
12. 25 宗教諸般の対支工作案 多面多画的に
論議 対支開教問題懇談会 東京支社
主催
12. 25 北支へのびる触手 天理教河原町大教
会 北支出張所設置
12. 25 大乘仏教に依り 国策に適應 成功の
施業・日語学苑 更に宣撫読本頒布
12. 27 亜細亜と回教徒(下) ショウ翁の回
教観その他 須田正継
12. 27 曹洞宗の山下從軍僧 仏教日語学院創
設 永慶能法和尚の切なる希望 軍部
も賛成激励
能法和尚の歎喜 日本曹洞の大師
来って吾を扶く
12. 27 支那の名勝杭州に 何んと50米の大仏
建立 日支戦没将士の冥福祈る 奥村
代議士令息の発願
12. 27 血なほ腥き 南京に唯一法主 朝香宮
殿下に拜謁 大谷光照法主帰山
- 軍のよろこびは 大したもの 随行
の後藤執行語る
12. 27 各宗仏教団 上海で慰靈祭 神式と同
時刻
12. 27 魔城の上海を 背負ふ蘇錫文 醍醐派
從軍僧談
12. 27 大同、綏遠に 西本出張所
12. 27 北支河北省に 塘沽東本願寺 石黒主
任活躍
12. 27 全印度教大 会へ打電 ポース氏
12. 27 本願寺、化して ソ連の赤き兵營 無
茶な官憲・デマの徹底 戸泉賢龍氏談
る
12. 28 新京、大連、天津 北京を馳驅して
北京ホテルにて 藤田玖平
12. 28 浄土宗中の 從軍僧語る
12. 28 理事長の言明に反し 滿支開催説具体
化 全日本仏青理事会 次期汎太仏青
大会
12. 28 打倒英国決議 在京国家主義 印度人
協議
12. 28 西本の北支 留学生出発
12. 28 中国臨時政府要人に 高岡総裁から祝
電 中日密教研究会本支部
「成吉思汗と亜 細亞民族」贈る
12. 28 保定の軍人 ホーム繁盛
1938. 1. 1 対支文化工作に就て 大倉邦彦
1. 1 仏教徒の北支工作 各州はの鼎立を避
けよ 日華仏教研究会 林彦明
1. 1 お尋ね
一、いはゆる対支文化工作に つい
て宗教者に必至づけられた役割
二、事変後に処すべき宗教家 の態
度(対内的と対外的)(国内的と国外
的)
三、わが国策の線に沿うて防 共の
用意(特に思想的)を うけたまはり
たし
1. 1 対支文化工作に於る 宗教家の任務
(第一問に答へて) 杉本直次郎
1. 1 対支文化工作と我が神祇思想 国学院
大学学長 文学博士 河野省三
1. 1 対支文化問題と仏教 文学博士 常磐
大定
同事精神に立ちて 同事を為せ
内地に於ける準備工作
彼地に於ける第一の工作
彼地に於ける第二の工作
支那国民の長所たる 平和性と徹底
性
1. 5 躍動する新支那(上) 北支の現状を
現場に観て 支那国民戦線代表 藤田
玖平
1. 5 西田天香氏を国民使節に派遣? 一部
実業家の希望
1. 5 浄宗更に北支犒軍 管代椎尾博士派遣

- 七日飛行機で出発
1938. 1. 5 戦傷兵慰問に 積極的活動促す 関天
竜管長ら提唱 各派懇談会で協議
1. 5 暹羅との国民外交 仏教徒が先驅せよ
珍らしい国民皆僧主義 仏教使節淺
野研真氏談
1. 5 北支開教根本策 樹立に研究協議会
浄土宗が椎尾氏らの 任務完了を待ち
開く
1. 5 陣容すべて成り 活躍の西本願寺 北
支最前線の石家荘
1. 5 北支開教出張所 日語学校も設置 金
光教の意気込み
1. 6 躍動する新支那(中) 北支の現状を
現場に観て 支那国民戦線代表 藤田
玖平
1. 6 台湾の魔仏毀釈 議会の問題化せん
釈迦観音等信仰すべからず 本島人へ
の信教弾圧
1. 6 対支開教問題懇談会 第一回研究座談
会(1) 本社東京支社主催
1. 6 台湾に仏青網 旧臘「仏化」幹部会で
申合 近く連盟結成準備会
1. 7 躍動する新支那(下) 北支の現状を
現場に観て 支那国民戦線代表 藤田
玖平
1. 7 印度の旅から 杉本哲郎 孟買上陸
(上)
1. 7 従軍僧観を一変させた 輝く登坂担架
部隊 日蒙学校建設に私財を抛つ 秋
声画伯征旅の秘材語る
1. 7 東洋の平和確立に 日印一致の歩み
在阪神印度人が協議会
1. 7 盗まれた権利 基督教の支那布教権
—渡辺哲信氏の歴史談— 対支開教問
題懇談会(2)
1. 8 印度の旅から 杉本哲郎 孟買上陸
(上)
1. 8 教学界の対支仏教工作 新春と共に活
発 東亜文教関係者初の協議会
1. 8 文教上の問題を 独自の立場から検討
宗教問題研究会を中心に “新支那
文教委員会” 設置
1. 8 北京官立大学の一を 仏教総合大学と
して開校 日本印度学界巨頭の一団
北京新政府等に要望伝ふ
1. 8 邦人遺骨百六十帰る 赤い国の宗教圧
迫 レコード盛んに製造
1. 8 南支避難民に 古着を贈る計画 カ教
婦人会が
1. 8 盗まれた権利 基督教の支那布教権
—渡辺哲信氏の歴史談— 対支開教問
題懇談会(3)
1. 9 印度の旅から 杉本哲郎 アジャンター
行
1. 9 オマール雑録(十二) 沛亭生 アラ
ビアの文部大臣
1. 9 人間といふより恰も 悟り切った大知
識 深い西藏人の宗教経験 絵画研究
の持論に訂正 トウツチ博士 西藏探
検土産話
1. 9 菅野経禪氏 南京に向ふ
1. 9 北支民衆の教育基本は 仏教思想より
ない 教学界巨匠らの文化工作 北支
新政府への陳情要旨
1. 9 名譽の負傷を綴る 陣中日記五日間
(四) 梶原重道
1. 9 南京入城式 に列して
1. 9 北支戦塵抄 一素江一
1. 9 先づ何よりも 実力ある仕事をせよ
安藤正純氏の強調 対支開教問題懇談
会(4)
1. 11 印度の旅から 杉本哲郎 ジャルガオ
ン(上)
1. 11 防共と友邦提携 新政権絶対支持の
二省回教徒代表
1. 11 日本カ教徒を代表 田口司祭再び北支
へ あす飛行機で出発
1. 11 緬川復興に 大派加藤氏急行
1. 11 “布教”が印象づける 權益獲得の誤
解 活眼を開いて進め 対支開教問題
懇談会(5)
1. 12 北支工作と仏教 —諸学者に呈す—
1. 12 印度の旅から 杉本哲郎 ジャルガオ
ン(下)
1. 12 “支那に大触手を” 中外日報の発展
を期待して 明石染人
1. 12 大陸神社創建運動具体化
護王会長奥田少将等 北京に東洋神
社の創建 神社局等の意向を質す
北京に神社大造営 御下賜金を基に
百万円で 保定にも創建計画
1. 12 “仏教文化”の海外普及 非常時色を
盛って懸案の 華頂興学済世会愈誕生
1. 12 妙心寺派の 従軍僧帰山
1. 12 神殿新築成り 活躍に移る 天理上海
伝道処
1. 12 印度の独立 運動を語る ポース氏の
京都講演
1. 12 北支民衆の救済に 社事使節の樹立
中央社事協会 政府へ建議
1. 12 新支那精神文化 礎石を目ざす 西本
第一回留学生北京着
1. 12 北支征旅九十日の 決死彩管行を聴く
小早川秋声画伯に 17日、東洋亭で・
ベン光る会
1. 12 今後の支那は 経済開発が中心 同時
に精神工作が必要 対支開教問題懇談
会(6)
1. 13 我が各宗教団体の 北支への宗教政策
根本的誤謬を指摘
北支に適合の新しい 総合的宗教の

- 樹立 東亜民族文化協会工作始む
 “真の日本を識る為に！” 祭祀の
 研究に没頭 北支知日派の周作人氏
 支那仏教寺院を 向ふ20年間賃借
 日宗の文化工作本拠
 日支仏教徒提携 北支の社会救済事
 業 名刹五台山と西本願寺
1938. 1. 13 西本上海別院へ 侍従武官御差遣 皇
 軍英霊に懇ろに参拝
1. 13 西藏班禪喇嘛法王 満中息追悼法会
 中日密教研究会の 静岡県支部主催で
 中日密研と 新政府要人 支部代表
 で訪問
1. 13 対支国策翼賛に 光暢法主けふ壯図へ
 中国仏教界に喚びかく
 中国要人に贈る三部經典
 稿軍行に 一万円献金
 北支に於ける 大派新布教所
 微力、国策の一端に 日支宗教的提
 携を 光暢法主、抱負を語る
1. 13 権利問題を忘れ 先づ実質を取れ
 対支開教問題懇談会 (7)
1. 14 印度の旅から 杉本哲郎 アジヤンター
 ケープ (上)
1. 14 対支工作の大成期し 仏教の統合運動
 近く具体化を期待
1. 14 “海外神社” 研究と 神職養成機関設
 立運動 大陸神社創建に呼应 全神当
 局の提唱
1. 14 上海戦線土産話 真島如亀雄氏談
1. 14 大派天満別院 支那語講習会
1. 14 東天問題も論議 臨黄合議信念総会
 従軍布教使の報国
1. 14 権利として 条約に明記せよ 日支宗
 教家の提携が肝要 対支開教問題懇談
 会 (8)
1. 14 雪の駅頭埋める 旺んな数百の歓送
 酷寒行に相応しい首途 光暢法主一行
 出発す
1. 15 印度の旅から 杉本哲郎 アジヤンター
 ケープ (下)
1. 15 “英文仏教綱要” 暹羅で好評を博す
 シャム語に翻訳して頒布
1. 15 余韻娟々の鐘声に 聴き惚れる将兵
 野戦聖典でお経の講習 山西省太原の
 朗話
1. 15 日本基督同盟 上海に憩の家
1. 15 中華民国戦禍 罹災民救済会 カ教婦
 人会が設立
1. 15 二十一ヶ条の連想は やめて貰ひたい
 対支開教問題懇談会 (9)
1. 16 “海外神社” の創建問題
1. 16 対支開教と仏教総合大学 高島米峰
1. 16 印度の旅から 杉本哲郎 古城
1. 16 オマール雑録 (十三) 沛亭生
1. 16 お尋ね
- 一、いはゆる対支文化工作に つい
 て宗教者に必至づけられた役割
- 二、事変後に処すべき宗教家 の態
 度 (対内的と対外的) (国内的と国外
 的)
- 三、わが国策の線に沿うて防 共の
 用意 (特に思想的) を うけたまはり
 たし
1. 16 満支慰問のため 智子裏方も壮図へ
 近く其実現を見ん 随行長は阿部内事
 顧問か
1. 16 新支那は真宗相応の地 前田徳水氏談
1. 18 印度の旅から 杉本哲郎 エレファン
 タ島 (上)
1. 18 新支那への 献策 大谷光照法主 前
 田氏を稿ふ
1. 19 新支那の建設 - 帝国政府の声明 -
1. 19 印度の旅から 杉本哲郎 エレファン
 タ島 (下)
1. 19 台湾の土俗神燒却問題
 魔仏毀釈と同視は 根本的にいけな
 い 皇民化運動は当然
1. 20 東亜経綸の指導原理 (1) 藤沢親雄
1. 20 日本は支那の道教を 如何に消化した
 か 金孝敬 (一)
1. 21 東亜経綸の指導原理 (2) 藤沢親雄
 二、典型的犠牲下の支那
1. 21 日本は支那の道教を 如何に消化した
 か 金孝敬 (二)
1. 21 現状維持の怯懦を排し 吾等自ら難局
 打開に邁進 北支立法に対する希望
 藤田玖平氏談
1. 21 北京市内には 北京神社の分祠創建
 大使館構内に神宮選擇所 北支の神社
 創建と造営
1. 21 老軀引上げ 北支慰問
1. 22 東亜経綸の指導原理 (3) 藤沢親雄
 三、マルキシズムの動向
1. 22 日本は支那の道教を 如何に消化した
 か 金孝敬 (三)
1. 22 盛儀を極めた 班禪ラマ追悼会 追悼
 余光三千部印施 中日密研静岡支部
1. 22 青島西本願寺 本堂庫裏無事
1. 23 東亜経綸の指導原理 (4) 藤沢親雄
 四、日本国内の思想的転換
1. 23 日本は支那の道教を 如何に消化した
 か 金孝敬 (四)
1. 23 私は真の平和の曙光を觀た 浦東の大
 同政府治下で 皆帽子を取って挨拶し
 合ふ街 従軍布教使 茂平木亮戒
1. 23 宣撫策として実に評判のいい 石家莊
 本派本願寺の 日曜講座
1. 23 戦線に枕して 涌田常一
1. 23 名譽の負傷を綴る 陣中日記五日間
 (六) 梶原重道
1. 23 戦禍の杭州に 日華提携の炬火 日華

1938. 1. 23 仏教研の支部設立
 日本仏教徒の名で 贈る暖き“菜”
 戦禍と極寒の北京へ 六万五千個発送
 江朝宗氏から 早くも感謝
1. 23 太子精神に則り 北支に医療機関 四
 天王寺当局が計画
1. 23 白崎従軍僧に 感謝状授与
1. 25 東亜経綸の指導原理(5) 藤沢親雄
 B東亜連盟の 基礎的論理 一、東亜
 は運命 的共同体(上)
1. 25 日本は支那の道教を 如何に消化した
 か 金孝敬 (五)
1. 25 戦没勇士の遺族を 戦地から御見舞
 感激の某將軍、従軍僧派遣 最初の涙
 ぐましい朗景 第一線と銃後結ぶ
1. 25 北支へ相国寺 管代慰問使
1. 26 東亜経綸の指導原理(6) 藤沢親雄
 一、東亜は運命 的共同体(下)
1. 26 浦塩の街は軍人氾濫 流行の先端行く
 自転車 お手のものの宣伝戦 戸泉賢
 龍氏の土産話 最近の赤いロシア
1. 26 軍部の神祇思想研究と 対外宣揚運動
 を協議 けふ、神代文化研究同人会
1. 26 川崎大師満 洲別院建設
1. 26 単なる布教問題より 先づ宗教的情操
 対支開教問題懇談会(18)
1. 26 対支伝道の 新陣容結成 東亜伝道会
1. 27 東亜経綸の指導原理(7) 藤沢親雄
 二、武力行使の 思想的真義(上)
1. 27 関天龍管長ら 愈よ北支慰問へ 二月
 十四日神戸出帆
1. 27 上海で初めて 従軍僧の講話
1. 27 南洋土民学校に 神宮遥拝碑建立 徳
 重氏の念願近づく
1. 27 在京印度人の印 度独立運動記念
1. 27 近代の意味の布教 文化的使節の経営
 対支開教問題懇談会
1. 28 東亜経綸の指導原理(8) 藤沢親雄
 二、武力行使の 思想的真義(下)
1. 28 宣撫工作と 回教に努力せよ 各議案
 委員付託 知恩院門末会第一日午後
1. 28 政府当局をして 理解せしめよ 対支
 開教問題懇談会(20)
1. 29 東亜経綸の指導原理(9) 藤沢親雄
 三、盟主日本の必然的使命(上)
1. 29 智子裏方を歓迎し 日華仏教婦人大会
 支那婦人五百参加せん 記念に腕輪
 念珠を贈る
1. 29 蒋介石西本願寺に崇る 非常時笑へぬ
 ナンセンス 飛んだ安心弄り
1. 29 大派青島別院 略奪の跡惨澹 建物は無事
1. 29 曹洞の青木 氏青島へ
1. 29 山西省大同に「日華仏連会」
1. 29 仏教を打って一丸とし 総合的な力を
 示せ 対支開教問題懇談会(21)
1. 30 東亜経綸の指導原理(10) 藤沢親雄
 三、盟主日本の必然的使命(下)
1. 30 支那で用うる經典 稲垣伊之助
1. 30 新しい支那の顔 輝ける眼ざしを見よ
1. 30 従軍僧の現在と将来 ○○部隊付従軍
 布教使 鷹川恵正
1. 30 支那戦線を語る 一本の彩管で 各部
 隊を感激させた 小早川画伯を囲む夕
1. 30 感激の和歌一首を残し 智子裏方けふ
 中・北支へ 皇后宮職の御贈品も携行
 日華仏教婦人提携を企図 “御国の
 ため聊か 報国の勤めを” 大谷智子
 裏方と語る
1. 30 全日本教会連合で 皇軍慰問事業行ふ
 基督教連盟とYMCA
1. 30 徳州永慶寺設立の 仏教日語学院開く
 日支の要人参列して 盛んな開校典
 礼
1. 30 けふ知恩院で 北支開教協議
1. 30 大黄河の歴史的渡河と 濟南城攻略戦
 に参加して 浄土宗総本山特派従軍布
 教使 名越隆成
1. 30 名誉の負傷を綴る 陣中日記五日間
 (七) 梶原重道
1. 30 支那紙に現はれた抗戦の無益
1. 30 東亜経綸の指導原理(10) 藤沢親
 雄
1. 30 支那で用うる經典 稲垣伊之助
1. 30 新しい支那の顔 輝ける眼ざしを見よ
1. 30 支那戦線を語る 一本の彩管で 各部
 隊を感激させた 小早川画伯を囲む夕
1. 30 従軍僧の現在と将来 ○○部隊付従軍
 布教使 鷹川恵正
1. 30 感激の和歌一首を残し 智子裏方けふ
 中・北支へ 皇后宮職の御贈品も携
 行 日華仏教婦人提携を企図
 裏方一行の 渡支日程
1. 30 全日本教会連合で 皇軍慰問事業行ふ
 基督教連盟とYMCA
1. 30 徳州永慶寺設立の 仏教日語学院開く
 日支の要人参列して 盛んな開校典
 礼
1. 30 けふ知恩院で 北支開教協議
1. 30 大黄河の歴史的渡河と濟南城攻略戦に
 参加して 浄土宗総本山 特派布教使
 名越隆成
1. 30 名誉の負傷を綴る 陣中日記五日間
 (七) 梶原重道
1. 30 支那紙に現はれた抗戦の無益
1. 30 日支文化提携 会議速記録
1. 30 宗派我をすてて 連盟を鞏くせよ 対
 支開教問題懇談会(22)
2. 1 東亜経綸の指導原理(11) 藤沢親
 雄
2. 1 潘毓桂氏感激して 龍藏一切経百函贈
 る 日華要人ら二百名集ひ 光暢法主

- 親修慰靈法要
1938. 2. 1 “画龍点睛”の慰問 智子裏方ら先づ
中支へ 小早川画伯の隠れた努力
2. 1 三月中旬を期して北支・南支で慰靈祭
全国神職会、準備に着手
2. 1 満蒙開拓青少 年義勇軍募集
2. 1 対外神社問題 研究の重要性 全神理
事会で具体化
2. 1 志願者殺到 厳選の上派遣 浄宗北支
開教
2. 1 教線拡充特に 主力を北支へ動員 来
宗会に提案の 日蓮宗の生命案
2. 1 青年教徒を 進出させよ 対支開教問
題懇談会 (23)
2. 2 東亜経綸の指導原理 (1 2) 藤沢 親
雄
2. 2 英帝国主義の 伝統的外交と アジヤ
の解放(1) 印度革命志士 ポース
2. 2 支那人の面子を超越 頗る有望視せる
官学、公立が不可能ならば 私学、
私立として開設
2. 2 先づ何よりも 窮民に業を与へよ 対
支国策の指導精神 椎尾氏日本教学確
立を力説
2. 2 日本人たる歎び 天竜寺派軍僧 村
上独潭氏語る
2. 2 ラマ僧招致に 小林義道氏入蒙 知恩
院宣撫工作の一助 ラマの留学僧同伴、
廿日出発
2. 2 対支皇道 宣布方策 神社界有志 協
議会開く
2. 2 協和会指導の下に ハルビン宗教連盟
結成 三十余民族の各宗教を融合 全
宗団の非常時動員
2. 2 日本の使節を 印度に派遣せよ 印度
国民日本委員長声明
2. 3 印度の旅から 杉本哲郎 バアシと
沈黙の塔
2. 3 英帝国主義の 伝統的外交と アジヤ
の解放(2) 印度革命志士 ポース
2. 3 北支へ送る 愛国給仕 軍の依頼で
天理教から
2. 3 両本願寺上海別院に 護国の英靈弔ふ
上海神社に正式参拝 智子裏方の皇軍
慰問行
2. 3 仏教徒早まるな 仏教諸工作は宗派的
で 出先当路者を刺激 戦乱直後の事
態收拾が先決 対支仏教工作尚早の理
由
2. 3 日華提携は あくまで仏教を基調に
湯臨時政府委員長談
2. 4 印度の旅から 杉本哲郎 カネリーケー
プ
2. 4 英帝国主義の 伝統的外交と アジヤ
の解放(3) 印度革命志士 ポース
2. 4 一日一人 “内鮮融和” を語る 枇
杷の葉療法の 浅野聖聖氏
2. 4 カラチン王が作らせた 600年前の
蒙古語大般若経 埋蔵保存された一部
帝都へ 近く展観して世に紹介
2. 4 古跡保存に留意 満洲国政府、同法を
改正 熱河ラマ廟等を国宝指定
2. 4 寿司詰めの軍用列車 光暢法主元氣旺
盛 支那兵の屍体に黙礼 熱河承德で
慰靈法要 法主稿軍行 第三輯
2. 4 智子裏方、飛行機で きのふ南京に向
ふ ○○で朝香宮殿下御訪問
2. 4 現地の実情に基き 支那国民に声明書
七日、仏連幹事会開き 椎尾博士の
帰朝報告
2. 4 北、中、南支に 澆刺開教陣固め 日
宗現地レポ
2. 4 対支仏教工作で 第二回懇談会開く
東都中堅仏教徒が
2. 4 支那より印度へ 開催地を変更 世界
宣教大会
2. 5 印度の旅から 杉本哲郎 水曜会と日
本人協会
2. 5 英帝国主義の 伝統的外交と アジヤ
の解放(4) 印度革命志士 ポース
2. 5 「高野山」から初めて 婦人の皇軍慰
問使 愛媛の山岡八重子夫人 廿二日
出発、北支中支へ
2. 5 売上げ全部を 皇軍慰問に ボンベイ
日本人協会で 杉本哲郎画伯作品展
2. 6 印度の旅から 杉本哲郎 タジマハル
ホテル
2. 6 仏教宗派の合同(1) 生田得雄
2. 6 戦死をしたら 同郷の誼みて万事を
大黄河の歴史的渡河 (二)
2. 6 素破ツ！空襲 光暢法主地下室へ避難
緊張した石家荘の一夜
満支稿軍の光暢法主 中支慰問日程
岩倉隊長の航空報
2. 6 瀋江禅林寺管長 北支皇軍慰問へ 愈
よ十四日出発
2. 6 鳥瞰図と絵巻で 戦跡の記念作成 吉
田初三郎画伯の従軍
2. 6 衆院予算総会 対支文化工作に 仏教
徒を動員せよ 加藤代議士の質問に
各閣僚賛意を表明
2. 6 支那文化への悲哀 上海派遣軍○○部
隊 曾我裕章
2. 6 剣を笏に代へ 銃を取って将兵を祓ふ
感激！輸送船上の銃剣祭典 浅野部
隊末安隊 久保少尉
2. 6 名誉の負傷を綴る 陣中日記五日間
(七) 梶原重道
2. 8 智子裏方を迎へて 上海時局婦人会結
成 感激裡に使命を果し 更に青島皇
軍慰問へ
2. 9 ラマ僧招致に 小林義道氏入蒙 きの

- ふ熱河丸で出発
1938. 2. 9 歴代各版大蔵経 満洲国で一斉調査
帰朝蔵経の埋蔵予想
2. 9 満支に移民運動等 珍らしい内容盛る
西本願寺予算案 けふ当直勘定会
2. 9 北支開教対策や 時局活動費中心に
浄宗予算十三万円程度増額
2. 9 智子裏方ら 北支に入る
2. 9 保定西門城 壁上に建つ 戦没者供養
塔
2. 9 冀東政府 要人参列 東本で追悼会
2. 9 感激の支那民 青島は朗か
2. 11 香港に“真言”が結ぶ 美しい日支親
善風景 黎氏の一週忌に豊山派 加藤
前管長ら近く渡香
2. 11 寺内最高指揮官 光暢法主を訪問 太
原の大恩靈祭に 将兵念珠を腕に参拜
2. 11 愈よ思想局実現 支那事変関係や移民
奨励等 西本の予算案全貌
2. 11 新支那の皇図翼賛 西本支那布教総監
規程
2. 11 世界人類に貢献すべき 日支両国共同
の任務実行 対支文化工作協議会が
決定した正式声明内容
2. 13 “中日仏教婦女大会” 支那要人の待
受け運動 兩國戦死者追悼会も勤修
智子裏方の活動期待さる
2. 13 光暢法主満洲入り 新京神社・忠霊塔
参拝 北支騎軍行終る
2. 13 国境なき奉祝 神戸アジア民族晩餐会
2. 13 中支戦線に 大塔婆 現地で法要 本
門仏立講
2. 13 皇軍歓迎の旗振る中を 濟南入城式に
参列 大黄河の歴史的渡河 浄土宗総
本山 特派布教使名越隆成
2. 13 支那事変と 秘密結社の活動 はしが
き X Y Z
2. 13 施薬は支那民に 平和の弾丸となる
西本宣撫工作着々成功
2. 13 満支語や英語を 布教使に叩き込む
西本布研の新方針
2. 15 印度精神の種々相 溢れる精神と徹底
性 ボース、ラスビハリ
2. 15 禪淨合作の慰問 関天龍、淵江禪林管
長ら きのふ北支へ出発
2. 15 新疆五馬連盟遂に蹴起か 開教民族の
防共と宗教擁護 延々四千里の支那辺
境の風雲急
2. 15 中国開教総連合会 北京懷仁堂で結成
2. 15 支部設置と 施薬に就て 日華仏研幹
事会
2. 16 哈爾濱別院で 慰霊大法要 光暢法主
2. 16 防共を目的とした 民間警察軍の組織
国民戦線軍結成の要
2. 16 “四海婦妙”に立脚 全力注ぐ支那開
教 超多額予算や座談会等々 ハリキ
- ル日蓮宗
2. 16 台湾の皇民統一策と 臨濟宗の仏教護
持運動 皇化と仏化の競争
2. 17 印度の旅から 杉本哲郎 シネマと劇
2. 17 北京開都一千年祝ふ 皇軍感謝慰問団
全国各代表と共に 十九日東京駅出
発
2. 17 支那語講習会
2. 17 中・北支皇軍慰問から 九州傷病兵慰
問 智子裏方、予定を延長
2. 17 北支の明朗化建設に 雄々しく中国婦
人の活躍 社事進出に重大な役割 牧
賢一氏の現地報告
2. 17 東亜文教会(仮称) 日本側発会式
会長に近衛首相推戴
2. 17 対支文化工作初 の常務委員会
2. 17 満洲の天理村 産業組合を結成 今後
の開発に期待
2. 17 大陸青年会 問題等議す YM総主事
会
2. 18 長谷川司令官殿父が 親心こめた田舎
餅 光暢法主上海行に託す
2. 18 奉天の慰霊法要と 光暢法主の親教
きのふ全満に放送
2. 18 全満夫人に 喚びかく 大谷智子裏方
2. 18 裏方通州慰問
2. 18 芝罘東本 願寺復興
2. 18 “日支親善は 仏教から” 東福寺慰
問使 高橋氏帰来談
2. 19 印度の旅から 杉本哲郎 デワリー
2. 19 今こそチャンス 印度国民よ起て 全
印度国民会議大会に ボース氏の激励
電報 印度憲法危機問題
2. 19 青島の仏学舎に 日本仏教を説く 浄
土宗善導寺と 支那堪山寺握手
2. 19 対支文化工作
究極の目的は一つ 対支文化工作協
議会の 東亜文教会日本側合流勤む
支那側に送る メッセージ決定 東
亜文教会日本側発起人 けふ、第一回
実行委員会
2. 19 北京華北大学を 十万円で購入 大東
文化協会が
2. 19 南洋開教に 西本願寺の根本策 光瑞、
尊由両氏も近く南洋へ 岩佐氏上山し
て協議
2. 19 西本集会 前田氏に聴く 支那現地の
事情 本会議なしで練りあぐ 一第四
日(十八日)一
2. 20 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 孟買出発
2. 20 印度問題と支那事変 印度革命志士
ボース、ラスビハリ
英国の伝統政策と 日本及び支那
2. 20 「朝禪暮淨」の 台湾仏教 妙心布教
監督 高林玄宝氏は語る

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1938. 2. 20 宣撫隨筆 杭州特務機関員 東本願寺
布教使 秦龍勝
2. 20 仏徒の宣撫工作 参加問題を協議 八
木沼現地宣撫班長招き 対支仏教協議
会が
2. 20 蒙古僧教育に 満洲国全幅の支持 留
学生の人選引受く小林義道氏國務院訪
問
2. 20 皇軍の仁愛に感謝 支那民衆の献納品
倉林部隊が勇士菩提の為 大派高田
別院と浄興寺へ
2. 20 天台宗でも 北支に開教 水尾寂暎氏
を 北京に派遣
2. 20 支那語講習
2. 20 大亜細亜主義に 印度を振向かせよ
先づ防共思想を
2. 20 砲声を聞かぬば 飯が味ない此頃 大
黄河の歴史的渡河(続) 浄土宗総本
山 特派従軍布教使 名越隆成
2. 20 支那事変と 秘密結社の活動 二 X
Y Z
2. 20 待機中の各部隊 戦死者慰霊祭に列し
て 織田敏雄
2. 20 朝鮮青年団 定期総会
2. 22 闘争と解放 -印度国民会議派に-
2. 22 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 ゲストハウス
2. 22 明朝五色旗の下で 中日仏教婦女会結
成 北京に仏教女学校設立 智子裏方・
阿部随行長の祝辞
2. 22 西本集会 -第五日(十九日)-
支那人の布 教は可能だ
2. 22 濟南日語学校に 無償献身的活動
2. 22 曹洞管長代理 台湾皇軍慰問
2. 23 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 ワンサブゼクト
2. 23 同姓のボース氏語る 猛将印度国民会
議議長 日本のボース氏
2. 23 杭州方面紅卍字会の 収容所近く解散
宣撫班の努力奏効
2. 23 恒に合唱したい気持 支那要人と歓談
光暢法主・智子裏方語る
2. 23 西本集会 -第八日(二十三日)-
開教論頻り
朝鮮寺院の 世襲問題
支那宣撫用に 新教団を作れ
2. 23 北支騎軍の 禪浄両管長 天津に到着
2. 24 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 アジャンター(上)
2. 24 靈肉を掲げて 北支文明化 クリスチャ
ンが北支へ 大挙移民計画協議
2. 24 漢文教師に 支那語を
2. 24 支那仏教会の 監督に依頼 田中清純
氏
2. 24 光暢法主染筆 日章旗先頭に 新戦場
に前進
2. 24 日本と提携印度を救へ 独連日本本部
回教徒ブロック強化の 民族的宗教運
動 全滿二百万教徒動く 防共日滿支
の提携
2. 24 今集会の中心案 支那事変費上程 西
本集会 -第九日(二十三日)- 宣
撫工作は国策順応
2. 24 南洋開教は 特別にやる
2. 25 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 アジャンター(下)
2. 26 蒋介石、各将領に命じ 在支カ教宣
教師を弾圧 背後に共産党反宗動く
2. 26 印度教と回教の 闘争を巧に利用
英国の対印政策 印度独立運動は 何
処へ行く?
2. 26 印度最近の 情勢等を聴く
2. 26 遼代の古建物 義州白塔修築 満洲国
民生部
2. 26 “宣撫”工作とは? 八木沼宣撫班長
に聴く
2. 26 仏教宣撫員 養成問題など協議 対支
仏教協議会
2. 27 印度と共産主義(上) 印度志士 ボー
ス
2. 27 青嶋室 騎軍行(二) 無文侍者誌
2. 27 臨濟寺復興は 支那伝道の具体化だ
2. 27 餅の香のする雑煮汁 血ぬらずして泰
安城へ 大黄河の歴史的渡河(続)
浄土宗総本山特派従軍布教使 名越隆
成
2. 27 日本がアジヤの柱
2. 27 早春、蒙古の話題乗せて ラマ教徒が
信頼しうるもの 日本以外にない 西
蔵に熾烈の排英思想 小林義道氏帰朝
談
2. 27 日華婦人の文化工作に 女性最初の輝
く功績! 仏教を通じ東洋平和へ 智
子裏方雄々しく語る
2. 27 北京知恩院別院で 日蒙青年同志会結
成喇嘛寺で日本語教授
2. 27 蒙古僧の熱狂的歓迎阿部随行長と一問
一答
2. 27 光暢法主の 中支騎軍 きふ蘇州へ
2. 27 日独支協力で “景教”の探検 内蒙
に科学のメス
2. 27 曹洞の慰問使 今井総務発つ 盛んな
見送り
2. 27 妙心寺派の 支那開教政策 来宗会に
予算審議
2. 27 地球全皮面の大沸騰 ここ世界一週間の
出来事
極東日本の力を 印度国民はどう見
る もっと大局から進め!
蒋介石に贈る歌
支那笑話
印度民族は どこまで立上るか

1938. 2. 27 支那事変と秘密結社の活動 XYZ
三 紅槍会
3. 1 印度と共産主義(中) 印度志士 ポース
3. 1 青嶋室 犒軍行(三) 無文侍者誌
3. 1 潘天津市長を団長に 中国仏教婦人会(大官婦人) 米朝 智子 裏方への答礼の為 陽春四月、東本願寺へ
3. 1 事変対策で 全国管事会 西本願寺
3. 2 印度と共産主義(下) 印度志士 ポース
3. 2 青嶋室 犒軍行(四) 無文侍者誌
3. 2 現地にまざまざ見た わが大乘仏教精神 日本将兵の“尊く強い”わけ 阿部恵水老しみじみ語る
3. 2 宣撫工作に重大寄与 中国人少年団を結成 太原東本願寺の新運動
3. 2 光暢法主 中支犒軍行
3. 2 印度僧欲迎会
3. 2 日独伊滿親善 兒童大会プロ
3. 2 印度国民会議派の決議は 国民の総意ではない 日貨排斥と印度革命
3. 3 “支那人伝道 計画の愚”
3. 3 求法南進の一大先驅 真如法親王の奉賛(上) 浅野研真 一 二
3. 3 ラマ僧を全部還俗させ 兵隊に仕立てる 蒙古新政権内一部の意見 小林義道氏のラマ僧救済論
3. 3 反国民党運動 西藏で熾烈化 党麾下支那人に退蔵命令
3. 3 世界各国の援助得て 梵本資料総目録を出版 印度マドラス大学
3. 3 奉天で孔道 市民大会
3. 3 仏教徒よボンヤリすな 三教連合に協力せよ 新興中国は孔子教を中心? 紅卍字会の勢力を見よ! 天兒吳氏語る
3. 3 予算案、事変費総て可決 西本願寺集會終る -最終日- 海外移民や 満洲の刑務教誨事業
3. 4 求法南進の一大先驅 真如法親王の奉賛(下) 浅野研真 三
3. 4 光暢法主上海で 戦没者大追悼会
3. 4 新東亞建設策に添ひ ラマ僧教養の具体案 近く発表、教界に働きかく 満洲、北支当局支援の下に
3. 4 世の次男坊よ 支那、満洲に行け 西本願寺で運動 全国管事会で付議
3. 5 北京街頭で 示威行進 中国回教総連
3. 5 事変を機に台湾に 靖国神社創建せよ 実情に鑑み現地の要望熾烈 近く具体運動に着手
3. 5 “対支文化工作には 先づ各宗は手を握れ” 現地の出先軍部その他 各方面一致して希望
3. 5 文部省の後援で 仏教宣撫員養成 機
3. 5 関近く設置か
3. 5 滿支現地指導 者の短期養成 日本文化協会
3. 5 曹洞宗慰問 使十日出発 北支方面へ
3. 5 最初の全体会議 けふ対支仏教協議会
3. 6 英国の印度政策を衝く 日本に諸君よ 印度の実情をよく聞いて 下さいと呼びかけるサハイ氏 英国の離間政策 印度に宗教の闘争はない 次は思想を利用して 日貨ボイコットは事實はやらない 日本は次の英国以上だとのデマ
3. 6 日滿支親善は 太子信仰から 大連聖徳会葛井氏談
3. 6 満洲国でも 公娼廃止 浜江省近く断行
3. 6 杭州宣撫余録 杭州特務機関 東本願寺布教使 秦龍勝
3. 6 北支だより カフエー一日五百円 西村正典
3. 6 「建国廟」御祭神問題で 満洲国へ意見書提出決る 海外神社問題研究の喫緊
3. 8 天津にカ教大学 大衆病院の設立 日本カ教徒の支援で 新興支那の躍進動く
3. 8 京城の花まつり
3. 8 日本仏教の海外宣揚 仏教著作刊行記念会盛況 追悼展観もゆかし
3. 8 朝香宮殿下の御仁慈に 全山挙げて感泣 上海別院の御奉公に対し お使ひ頂いた西本願寺の光栄
3. 8 対支開教は各派提携 国策翼賛の立場から 野上浄宗執綱の施政方針
3. 9 青嶋室 犒軍行(五) 無文侍者誌
3. 9 宣撫官に 二人パス 龍大から
3. 9 山田突鳳氏 朝鮮に派遣 曹洞管長代理
3. 9 けふ、光暢法主が 現地報国の第一声 東本願寺で公開
3. 9 北滿の“上宮村”に 力強い赤ん坊の泣声今春と共に希望漲る 第七期生近く渡滿
3. 9 浄宗台北別院 本堂落成法要 神居氏を特派
3. 9 満洲と九州 両大会決議
3. 10 対支文化工作の根本義
3. 10 埃及皇帝の御慶事 回教精神に燃える 埃及青年 須田正継
3. 10 青嶋室 犒軍行(六) 無文侍者誌
3. 10 公開の現地慰問講演で 光暢法主重大意図語る 盛んな歓呼裡にきのふ帰山 仏徒の任務の 重大さを痛感 光暢法主所信を披露
3. 10 四月から 小学一年生 留学のラマ僧
3. 10 妙心寺従軍僧 再び中支へ

1938. 3. 10 待望の北支新政権に 開く宗教活躍の
新部門 注目すべき動向
3. 10 対支文化工作 と仏教座談会
3. 10 北支で活躍中の 関天竜寺派管長 二
十日帰朝の予定
3. 10 日語学院と満人救済 大同仏教会 盛
んに活動
3. 11 北満回教徒 反共に敢然起つ 支那回
教徒とも提携し所期の目的達成に邁進
3. 11 北支は 若き学徒の目に どう映じた
か「日中満協会」皇軍慰問の 龍大
代表土橋秀高君帰朝談
3. 11 “通日辞典”に代る 会話読本の刊行
仏教による日遼親善志す 泉学州氏
の事業
3. 11 宗門出身の 北支宣撫官
3. 11 戦禍の青島に 日語講習所創設 先生
は日支仲良く 崂山、善導両寺の握手
3. 11 北支から 満洲に入る 湘江禅林管長
十五日帰洛
3. 11 実現の可能性なき国民会議派の決議
印度人多数は日本支持 真の排英運動
は国会派より 他の革命派が実権握る
3. 11 満洲国建国廟 建設具体化す 政府創
設協議会開く
3. 11 支那方面に 六ヶ所の開教所 各宗派
と提携し 対支文化に貢献
3. 12 印度の旅 アジャンターの生活 杉本
哲郎
3. 12 北京市内 カード階級に 恵む仏の慈
悲 日支仏徒の救済運動
3. 12 戦跡を弔うて そぞろに暗涙 曹洞慰
問の一行
3. 12 叡山中学の 満僧留学生 更に五名卒
業
3. 12 天理教北支の開教陣を拡大強化 通州
に伝道所設置 青年教師送る河原町大
教会
3. 12 浄宗北支に 開教使派遣
3. 12 満洲国開教陣 人事の整備成る 西本
前田総監再度渡支
3. 12 北支宣撫工作に 仏教主義看護婦養成
所 在阪洞宗青年の発起
3. 12 現地の情勢基礎に 対支方策協議 曹
洞事変局参与会
3. 13 皇軍の 文化保護
3. 13 印度の旅 アジャンターの生活 杉本
哲郎
3. 13 開教服に輪袈裟で “支那の刺繍” 説
く 本紙記事が縁で 広義布教で気を
吐く
3. 13 約六割に達す 本島人の大麻拝受
3. 13 西真也旗省からも ラマ僧派遣の申込
み ラマ僧に響く日蒙親善 各方面か
ら知恩院へ照会
3. 13 支那事変と秘密結社の活動 X Y Z
- 四 道院・紅卍字会(一)
3. 15 印度の旅 アジャンターの生活 杉本
哲郎
3. 15 仏教各宗立学校に 支那語科を設置せ
よ 在上海 結城瑞光
3. 15 事変を契機として 支那カ教の躍進
ウィーンのカ教新聞に見る 明朗化を
喜ぶ支那宣教師
3. 15 謬まれるガンジー翁に 正義日本の立
場を説く 日本山妙法寺藤井行勝氏
十年振りに廿四日帰朝
3. 15 ウカウカすると「打和尚だ」支那陣
の真宗理解に 洋々たる天地啓く
3. 15 お伽噺も出さうな 北鮮の奥地巡回
十六ミリと紙芝居担いで 大派池浦開
教使
3. 15 支那臨時政府に 敬意を表明 青海代
表阿活仏 王委員長と歓談
3. 16 朝鮮最初の 曹洞選仏道場 愈よ四月
より開く
3. 16 輸送将士を泣かす 統後国民の力強さ
 濟南入城の感激語る 大派・渡部從
軍僧
3. 16 満洲の寺院で 施薬療病使節 法会期
間中
3. 16 印度友の会
3. 16 支那経済制覇目指す 国際猶太思想排
撃へ 京都明和会も決起せん 来月十
日東本で講演会
3. 16 専ら半島人中心 天理教朝鮮布教管理
所 教化方針の転換
3. 17 北京、上海、南京で 全神の 現地祈
願慰霊祭 廿三日理事会で正式決定
3. 17 芸術を通じての 日華文化工作に寄与
 北京の画壇人と手を握り 小早川秋
声画伯再渡支
3. 17 助手台に乗った “管長さん” アン
ペラの上で寝た一夜 淵上禅林管長の
土産話
3. 17 南洋移民徒労堂訓練 企画院等の支
援得て 輔成会具体化に努力
3. 17 北支開教使を 誓願寺で募集
3. 18 印度の旅 アジャンターの生活 杉本
哲郎
3. 18 北京高山野山の 風神廟修築 神田代議
士ら奔走
3. 18 “燃える信仰 血闘の覚悟” 日支提
携で味な事言ふ 日中満協会皇軍慰問
 宗教関係学生慰問
3. 18 満洲に培ふ村の 育ての親は語る 奉
天実験村、鈴木寿氏
3. 18 宣伝抜きで 語学校を現地に設置 金
光教の対支文化事業
3. 18 濟南知恩院 別院開設 日語学校も創
設さる
3. 18 日本仏徒の決起促し 膨大な日華親善

- 教化対策 森脇孝之氏、我国要人に建議
1938. 3. 18 臨済学院の美断 支那語を新学期から
3. 18 鴛淵・野上両教授 満洲へ研究旅行
3. 19 印度の旅 アジャンターの生活 杉本哲郎
3. 19 英人の支配を脱し 日本人自主に改組 朝鮮救世軍の転回
3. 19 神国日本への感激から 北満移民団で 尊き捨身行 再び法衣を着る佐々木悠氏 赤の尖鋭分子転向
3. 19 セイロン島の シギリア壁画模写 在印の杉本哲郎画伯
3. 19 大派、北支開教陣刷新 近く断行されん 経済的・人事的に注目さる 藤岡満支開教監督等上洛
3. 19 浄土州支那回教の 根本策樹立 最高統制機関組織され 事変事務連絡委員会
3. 19 天理教が太原 に日語学校
3. 19 深草派唯一の 海外布教所 パラオ島に 愈よ建設
3. 20 「いい人」を待 つ満洲国
3. 20 朝鮮基督教徒に挙る 国民意識の高潮 鄭牧師の「欧米の親友に告ぐ」 海外の反響素嗜し
3. 20 満蒙教化の 覚悟雄々しく 留中留学生けふ帰国
3. 20 内台人一緒 に燃燼法要 羅東教会所支那事変と秘密結社の活動 X Y Z
3. 20 杭州の紅卍字会は 特務機関の一部門化 然し物資の不足に悩む 大派関係両機関員の活躍
3. 20 満洲国の国旗掲揚日 日滿の差別なく 勵行 両国の緊密化実践に
3. 20 新民学院卒業生 帝都の歓迎会 けふ、上野精養軒で
3. 20 春の読書界 「インドの叫び」
3. 23 ビルマの投げた親日話題二つ 親英思想を蹴散らし 日本と固い握手 留学生派遣を計画 日本仏教研究所に ビルマから来朝二つの学士号を持つム氏
3. 23 香港の宗教視察と 皇軍将兵慰問の旅 終へ 加藤精神氏一行帰る 東亜永遠の 平和確立の秋 全仏教徒の奮起に俟つ 仏教使節としての感想談
3. 23 満洲国の最高学府 建国大学開校 五民族学生百五十名合格
3. 23 映画になる孔子 天津教育文化振興会が 日支両国から脚本募集
3. 24 真如法親王の御遺 徳奉贊の企に就て (1) 杉本直治郎
3. 24 戦没将士の骨仏安置 杭州に新靈地 廃仏毀釈の梵鐘も蘇る 日語学校は超満員
3. 24 対支文化工作は 根気強く気長に！ 今井潤宗管代ら 皇軍慰問から帰る僧服が喜ばれてネ 坊サンの醜争を皮肉られた 水尾氏の北支土産話
3. 25 真如法親王の御遺 徳奉贊の企に就て (2) 杉本直治郎
3. 25 戦場の土を 故国へ 満支騎軍行脚 仲居祖門会主
3. 25 陸の荒鷲大内氏 徐州で戦死 谷中配属符校
3. 25 事変後の国策に即応 愈よ満蒙支に教線開拓 北支に布教所設置、中南支に 宣撫師、満蒙に開教師を養成 ハリキル日蓮宗 外観は寺・内は兵營 兵器弾薬が一パイ 山西山岳戦を終へた 岩倉隊長の陣中便り
3. 25 今夏北京で 東洋全回教徒会議 在日回教徒立つ
3. 25 北支への関心 華語講座開設 天理教河原町 修養部の計画
3. 25 時節柄特に「中華版」編集 我が国各宗教を紹介 “宗教公論” 五月号
3. 26 真如法親王の御遺 徳奉贊の企に就て (3) 杉本直治郎
3. 26 印度国民運動の 現在と将来 (上) 印度青年志士 デス・バンディ
3. 26 大派学事新に北支へ進出 陳女史が巨額の私財投出す 出雲路校長北支へ急行 智子裏方巡錫の際 陳女史が寄進阿部氏の隠れた功勞
3. 26 台宗の対支事業 満洲同様留学僧交歓 武藤内局初局議
3. 26 北支知恩院別 院輪番等赴任
3. 26 台湾本島人の 廟の改善に呼応 齋友、道士等を網羅し 仏教団体結成運動 これだけは別？ 開教地寺院の住職 相続性不可に一石
3. 26 北支二百万の 信徒動員 明朗支那の建設へ協力 羅馬教皇庁の指令
3. 27 真如法親王の御遺 徳奉贊の企に就て (4) 杉本直治郎
3. 27 北・支・騎・軍・行・記 奥村洞麟
3. 27 印度国民運動の 現在と将来 (中) 印度青年志士 デス・バンディ
3. 27 支那医学と 仏教の影響 藤田良仙
3. 27 最初の東京回教礼拝堂 愈よ堂々たる 偉容出現 世界各国の教徒代表參列 教祖誕生日に暗れの竣功式
3. 27 初めて出版される 全邦訳のコーラン 在留回教徒の努力で
3. 27 世界史に輝く暗れの 南京入城を描く 鹿子木画伯一代の苦心傾倒 けふ南京へ実地視察の旅

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1938. 3. 27 社事による日滿提携 兩國統制団体で連盟組織 厚生省の斡旋、五月結成式
3. 27 救世軍の 報国茶屋 濟南で奉仕
3. 29 支那語学習に因みて 高田集蔵 一
3. 29 印度国民運動の 現在と将来(下) 印度青年志士 デス・バンデイ
3. 29 皇太后陛下より 有難き御言葉を賜る 南京入場因政策に邁進 感激の鹿子木画伯出発
3. 29 遙々渡洋の 皇軍慰問使 北米本派教団 支那に特派
3. 29 滿洲国前國務總理 鄭孝胥氏逝く
3. 29 “物言はぬ戦士”に 捧ぐ可憐な赤誠 日独伊滿兒童交歓 軍用動物慰靈祭
3. 29 有為の宗侶選び 宣撫員布教使を養成 仏連・文部省後援で
3. 29 西田天香氏 滿洲北支へ托鉢 四月下旬実現?
3. 30 支那語学習に因みて 高田集蔵 二
3. 30 支那の国家 組織とその検討(上) 新京 光岡慈昭
3. 30 北支文化工作に拍車 宗教報国目指し 天理の人材派遣計画
3. 30 新支那建設には 先づ「人物」を 西本留学生全部決る
3. 30 台湾本島人の 徹底的皇民化運動 全島に護国團結成し 西本開教にエボック
3. 31 中支新政府 の成立
3. 31 支那語学習に因みて 高田集蔵 三
3. 31 支那の国家 組織とその検討(中) 新京 光岡慈昭
3. 31 印度獨立運動語る 所謂志士は利口すぎる 帰朝した藤井行勝氏
3. 31 錦州回教徒 排共大会挙行 宣言決議を可決
3. 31 題目唱へて 怨親平等の回向 清野氏 全支に慰靈行脚
3. 31 滿洲人の神社崇敬 日増しに旺盛 奉天市に崇敬会設置
3. 31 レコードに収めた 印度の古典音楽 升氏が近く楽壇へ発表
3. 31 宣撫教化師 中支に派遣 日宗の教線 拡張
3. 31 日華仏教研究会が 使節を北・中支に派遣 四月下旬頃実現されん 大西良慶、神林礼堂両氏
3. 31 関天竜管長 あす帰朝
3. 31 滿支に耕適地求め 視察員派遣 京都府親和会が 地区民中移住計画に
3. 31 臨時教皇巡 察使を任命 カ教が北支新 事態善処に
3. 31 田中清純氏 梁首席に祝電
3. 31 率直に説く 全支犒軍行 阿部氏等に 物を聴く会
3. 31 「朝鮮の宗教 と享祀一覽」
4. 1 支那語学習に因みて 高田集蔵 四
4. 1 支那の国家 組織とその検討(下) 新京 光岡慈昭
4. 1 皇軍戦跡に 桜を植ゑる 仏派の奇僧
4. 1 カ教徒に呼びかけ 皇軍支持に成功 宣化の日本後援布告文
4. 2 支那語学習に因みて 高田集蔵 五
4. 2 抗日支那文化陣の逃亡 陝西、漢口、香港の三方面から 喪家の狗となり徒らな遠吠
4. 2 宗教団体代表者会同 支那の欧米 依存主義を是正 日本 宗教の積極的進出を 対支開教問題の 意見
4. 2 辺疆回教徒一千万 獨立政府樹立の機 運 反蔣熱益々激化
4. 2 代表けふ渡滿 折衝の成否予断許さず 汎太仏青滿洲国開催
4. 3 孝胥先生 足利浄円
4. 3 中華民國維新政府成立に際し 湖州自治会の要人と語る 宮崎宮主典 田村 伍長の便り
4. 3 蒙古事情調査の為に 小林知恩院庶務 部長 再度入蒙 ラマ僧を招致して帰る
4. 3 世の冷飯達! 滿蒙に雄飛せよ 大阪 基青、二三男会組織
4. 3 北支少年代表迎へ 日支親善キャンプ
4. 3 滿洲国文展
4. 3 揮毫二百枚に及び 摺仏で海陸供養 犒軍帰來の関精拙氏
4. 3 従軍者の齎せる 支那事変展
4. 5 台湾本島人教師 養成機関近く実現 教勢の実情に応じ 天理教伝道庁の計 画
4. 5 北支布教と 金と人物
4. 5 印度の最窮乏地の 更生指導員に對し て 仏教主義教育を 初転法輪の聖地 で
4. 5 世界紅卍字会滿洲總會 新京に漢医施 診所と 西医外科施療所を設立
4. 5 滿洲国の治外法権撤廢で 在滿日本寺 院も同国の監督下に 之に鑑み寺廟条 例改正要望
4. 5 全国神職会主催の 北京、南京大祭典 当局は有馬宮司の出張希望
4. 5 吉林回教徒 排共大会 決議文を河北 新政府に提出
4. 5 滿支布教陣に 学識の士を 前田徳水 氏 本山と交渉
4. 5 宣撫工作に協力 上海・太倉の「懇 の家」 支那信者に愛の手
4. 6 回々教を語る(1) 五十嵐賢隆
4. 6 孝胥先生 足利浄円
4. 6 蘇州河付近の 敵死体を葬る 工部、 紅卍字、仏教の活躍 妙心、丸山氏支

1938. 4. 6 那僧指導
北京・海会寺に 貧兒院設立 北支名士を發起人に 王揖唐氏等を董事に推す
4. 6 大派北支人事難確 工作面、再検討か 今後の動向注目さる
4. 6 大派への答礼行 北支大官婦人団の訪日 陳女史嚴父死去で延期
4. 6 時局を受けて 海外留学中止 西本学事関係諸会
4. 6 英霊に折り 仏跡巡礼 伊藤治郎左衛門氏 中南支へ
4. 7 回々教を語る(2) 五十嵐賢隆
4. 7 ビルマの奥地パカンに 一万余の寺塔 拝す 小松原国乗
4. 7 かくて仏教完し 戒律のため痛論 「立正護国論」を 支那僧、居士二頒つ 北側律宗管長
4. 7 暹、印順歴の 小松原国乗氏 明八日 婦名
4. 7 “支那で働く人”を求む 最近の上海、台湾を語る 西本、小笠原彰真氏婦朝 台湾人教育
4. 7 本島人相手の 伝道を切望 台湾の皇 民化運動語る 飯沼台北帝大教授
4. 7 折伏説示の意義深く 毘沙門天像贈る 北支政権の誕生を祝し 西村貞盛派 管長、鮮満支へ
4. 7 学園の五族融和 更に中華、満洲両国 少年 東山中学に入学
4. 7 中島部隊長慕火 第一中今会生る 会 員各自の国民的修養
4. 7 臨濟日満支 提携懇談
4. 7 明朗北支将来の 指導者目ざす 崇貞 学院生 日本留学
4. 7 成田昌信氏を 北京に派遣 浄土宗留 学生
4. 8 回々教を語る(3) 五十嵐賢隆
4. 8 我ら兄弟は血を献げ 欲び、死んで行 くのだ！ 石家荘西本願寺に見る 日 支親善の尊き朗景 支那仏教復興に
4. 8 全満洲青年を動員 満洲建国廟建立 七月、労働服務運動挙行
4. 8 天理教愈よ北支進出 布教大綱決定の ために 山沢海外伝道部長現地視察
4. 8 皇典講究所が 海外神社問題解決に 調査方針決めて研究
4. 8 各国人をも招待し 全世界に宣言文を 発表 日支合併の「東亜文教会」 愈 四五月上旬発会式挙行
4. 8 北支の宗教運動は 回教問題が第一 尾崎亘氏の帰來談
4. 9 回々教を語る(4) 五十嵐賢隆
4. 9 満人のみの仏徒で 崇仏会を結成 満 洲開原本願寺で
4. 10 日支要人に訴ふ(上) 鷹尾全瑛
4. 10 戦場だより ○○地にて 浦田常一
4. 10 仏塔栄に国飢ゆ 仏教王国ビルマ、印 度は復興 小松原国乗氏の仏跡巡礼談
4. 10 内鮮融和へ 朗かなスタート イース ターを契機に 朝鮮基督団の提携
4. 10 北支人事に関連して 大派閥根内局重 大決意か 或ひは機構改革に着手し 重大時局に邁進せん
4. 10 回教観
4. 10 愈々回教連合軍決起し 反共の烽火を 挙げる新疆省
4. 10 一流学者を総動員 日本仏教紹介号編 集 日華仏研の親善計画
4. 12 内蒙古の景教遺跡 東西文化交渉史並 に 民族興亡史解明へ 日独支合同愈 よ調査 新しい重要 資料提供を革新 江上 波夫氏談
4. 12 小林義道氏 再び蒙古へ 約一ヶ月間 の日程決る
4. 12 従軍神職の派遣 統後活動の強調を決 議 中州九県神職大会
4. 13 “支那仏教徒は悩む” 杭州靈隱寺の 行義は叫ぶ 日本に留学生を派遣した い 杜多氏談
4. 13 鄭孝符全集編纂 王道学に不拔の指示 年未迄に上梓の予定
4. 13 北支の宣撫工作に 生長の家も一役 ◇…外国宗教家は危険一と
4. 14 日華仏教提携 ◇…に努力した江戸千 太郎氏 の護法的功績 好村春基
4. 14 日滿蒙親善の楔に 東亜大聖堂建設 外蒙の活仏招致のため 谷天祥氏の決 死的蒙古行
4. 14 半島女性の熱誠 宣鮮向上女子学校 中南北支 宣撫救護費を献納
4. 14 上海知恩院別院へ 日語の先生30名 第一回を宗務所で人選
4. 14 北支を中心に 大派海外開教異動 き のふ第一次異動発表
4. 15 日華仏教提携 ◇…に努力した江戸千 太郎氏 の護法的功績 好村春基
4. 15 先づ人を作れ 慰問使はよこせ！ 日 本大乘仏教を忘るな 桑野淳城氏談
4. 15 愈よけふ開く 浄宗布教講習所 対支 開教の人材養成兼ぬ 入所生十一名決 る
4. 15 組合教会が 北支進出計画 中堅牧師 を動員
4. 15 深草派の 中国開教
4. 15 関展龍管長の 皇軍慰問報国
4. 15 ヒリッピン から観光団
4. 15 浄宗台北別院 本堂完成す 入仏慶讃 会
4. 16 “海外神社の創建は 民衆信仰に立脚 せよ” 稲荷神社の新支那進出 先づ

1938. 4. 16 北支に講社支部設置
 時局の中心北京に 日支人を驚かす
 北京西本願寺で 花まつりの朗景
4. 16 文化と民族性に喰ひ込め 貧弱な仏教
 の開教現状 覚生女学校開設に活動の
 出雲路善尊氏よりの近信
4. 17 鄭氏追悼会 大阪福園で
4. 17 弥栄会の曾根氏 従軍神職で渡支 武
 神の神号を持参 各部隊庁室に鎮祭
4. 17 北京覚生高女は 今秋九月に開校 出
 雲路校長と交替し 今夜北島氏渡支
4. 17 デパート中心に 北支進出計る 連合
 婦人会が後援 天津組合教会の方針
4. 17 出征半年を綴る 松岡善毅
4. 17 朝鮮軍慰問使 山田管長代理巡錫記
 大内素俊
4. 17 満洲開教は 出直してかかれ 活力を
 息吹く前田総長 西本全満協議会
 満洲開教の 根本改正
 大連高女は 本山立の誇り 存続を
 強調
4. 17 日支要人に訴ふ(下) 鷹尾全珠
4. 17 回教国独立近し
4. 17 韃靼
4. 19 日華女性提携し 東亜和平に魁せん
 宣言、決議を可決した 大派婦人会幹
 部協議会
4. 19 海外神社問題 研究愈よ具体化 吉田
 茂氏を委員長に準備会 海外神社祀官
 の養成も考慮
4. 19 北支人事に関連 財団理事会開く 大
 派今後の動向に注目
4. 19 西田天香氏 北支へ出発 来る廿二日
4. 19 海外派遣休止 西本研究生審査
4. 20 大派ダバオ開教異動 今井氏処分に反
 対 在留信徒団から嘆願書 代表上原
 氏本山上に陳情
 “信徒は邦人の過半数 寺の存続の
 為め” ◇…上原仁太郎氏談
4. 20 台湾本島人のみの 西本願寺のお寺
 四十余年の宿願達成
4. 21 皇軍戦跡の土を採り 奉安殿御床下に
 鎮む 満支の慰問行を終へて 中井護
 国勤王会主帰る
4. 21 通州殉難者 納骨供養会
4. 22 全満からラ マ僧選抜 知恩院へ引継
 ぐ
4. 22 曇鸞・善導両大師の 靈跡保存に特請
 太原東本願寺の 了世和尚の歎び
4. 22 北支開教を重視し 津田教学部長が転
 出 後任に宮宮々大学長学監決定 新
 学監に高浜氏を抜擢
 □教学課長は 朝鮮開教監督 開教
 陣も動く
4. 22 海外神社問題研究会 三十日、準備会
 開く
4. 22 北支視察団代表 徐氏天理で講演
4. 22 日本へ行きたい 徳王と藤沢氏懇談
4. 22 新蒙古と結ばれた 宗教的握手 故雲
 王の公葬は 西本願寺式で執行
4. 23 目指すは宣撫工作 仏教各派の統制視
 察 支那仏教視察団浜田氏 出発を前
 に決意を語る
4. 23 現代支那文 日本仏教読本 “宗教公
 論” 特集刊行
4. 23 西田天香氏 けふ北支へ
4. 23 中支宣撫工作に 勇士・体験を進言
 西本願寺へ戦場通信
4. 23 北支第一線の充実と 一派施設の確立
 津田参務の決起に対し 大派当局、
 所信披露
4. 23 弥栄村、天理村等 移住地事情を視察
 中央融事協会派遣日程
4. 23 文部省宗教局が 小関事務官派遣 北
 支に常在せしめる 初の重要人事注目
 開教監督陣 異動予想
4. 23 朝鮮学生の 寄宿舎設置
4. 24 日華仏教徒総動員で 久々に釈尊降誕
 記念祭 寺院の改修、名僧優遇等 晋
 北自治政府 仏教復興計画注目さる
4. 24 日支の仏子 融け合ふ
4. 24 皇軍慰問記 浄土宗総本山特派慰問使
 福栄部隊付 名越隆成
4. 24 満洲と移民地開教 中外を通じ宗団人
 に訴ふ、佳木斯にて 吉田智信
4. 24 出征半才を綴る 松岡善毅
4. 26 対支文化工作の諸問題 寺島隆太郎
 恩の押売りから 却つて怨みを買ふ
 三百万の財源をもつ 外務省文化事
 業部よ 何処へゆく?
4. 26 朝鮮基督教の 皇道化運動 朱牧師内
 地の事情調査
4. 26 神祀思想による 対支文化工作 海外
 神社問題の研究と共に 中心機関設置
 論起る
4. 26 ダバオ開教人事 大派の処置は不当
 ダバオ公論の星氏談
4. 28 対支文化工作の諸問題 寺島隆太郎
 北支に於る「新民会」と「東亜文
 教会」戒慎すべき独善的態度
4. 28 仏教徒よ、断乎反駁しろ セイロン独
 立で国民会議派 日本に不埒な言辞弄
 す
4. 28 絶対に日本ビイキの アラビアに関心
 を持て 雨露を全然知らぬ民族 “あ
 らびあを聞く” 夕べ 中外読者倶楽部
4. 28 南洋独逸宣教団が 組合教会へ国防献
 金 宗教に結ぶ日独親善
4. 28 満洲の一部も参加 全鮮開教使会議
 西本願寺で
4. 28 古義満洲開 教師総会 明日から新京
 で

1938. 4. 28 台北中学校長 に木村雄山氏
4. 29 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 ナルパタ河
5. 1 日支経済提携の根本要素は 精神工作
を其精髓とするにある (上) 安藤代
議士、議会に叫ぶ
5. 1 北支より
5. 1 アラビア雑話 細川将氏の談話から
5. 1 回教徒の防共旗幟燦然 東亜の和平確
立に 重大な役割演ず「支那西北角」
に起った 五馬反荷運動愈よ顕著
5. 1 “開教民族との 提携は語学から”
アラビア、トルコ語講習会 イスラム
文化協会が
5. 1 芸術を通じ日支親善 “中日芸術協会”
成る 江朝宗氏等十一氏発起 小早川
秋声画伯の歎び
5. 1 学界未踏の地に 下す解剖のメス 大
陸古代文化遺跡の 考古学的調査へ
5. 1 聖公会十九総会終わる
自給と財団組織 満洲と北支へ進出
時局に対する決議
5. 1 支那名流婦 人の訪日団 十二日北京
出発
5. 1 痛快至極! デマ粉碎の旅 ヒリッピ
ン視察団入洛 山之内団長語る
5. 3 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 壁画の村
5. 3 門外不出の支那婦人 破天荒の盛挙!
大派へ答礼の訪日婦人 軍部外務方
面でも注目
5. 3 「海外神社問題研究会」準備会で規約
決り近く発会式 祀官の養成訓育をも
期す
5. 3 英人官吏任命で ガンジー氏支持 印
度独立連盟の決議
5. 4 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 孟買へ
5. 4 時局と神社問題で 熱烈な意見吐露
圧倒的盛會裡に十時終る 神社問題研
究座談会 東京支社主催
5. 4 非家庭的な欠陥救ふ、中国子女教育の
改革 覚生財団理事長に余市長 東本
願寺の教育大綱成る
5. 4 日宗支那開 教戦線レポ
5. 5 海外神社創建の急務 外地にも招魂社
時局と神社問題に白熱的論戦 東京
支社主催座談会盛況
5. 5 北支の神社対策 海外神社問題研究会
が 七日、第一回協議会
5. 5 宣撫の言葉が 支那人は大嫌ひ 大派
水尾氏の上海便り
5. 5 宗門総動員と支那 現地施設で評定
経費問題で相当難色か 大派、戦時体
制を急ぐ 時局宗務審議会
5. 5 新京ビル街中心に 緑化地帯の計画
- 別院竣工を記念して 大派満洲監督部
が大植樹
5. 5 大派全満開 教団会議
5. 6 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 ハイデラバード
5. 6 内蒙に伸ぶ 文化の触手 小学教員送
る
5. 6 高野山でも 太原に別院
5. 6 ラマ僧を帯同 十三日頃帰山 小林義
道氏
5. 6 日華親善殿で交歓 北支名流婦人団一
行と 中日密教研究会静岡支部
5. 6 モリモリと新支那は 誕生しつつあり
漸く落着きを取り戻す 関哲雄氏は
語る
5. 6 留学生や 特別任務 西本と支那
5. 7 神仙憧憬に現れたる 支那国民性(1)
金孝敬
5. 7 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 サア・ハイドリー卿 (上)
5. 7 皇民化運動奏効し 蕃人の針供養塔
埔里大師教会に建立
5. 7 満洲国全体に見る 熾烈な宗教的躍動
小笠原氏の見聞録
5. 7 あす、上海で 日支婦人の交歓 大同
市政府要人婦人と 天理教婦人会員が
5. 8 神仙憧憬に現れたる 支那国民性(2)
金孝敬
5. 8 再び戦線より ○○陣中より 小早川
秋声
5. 8 北京の初夏 北京 藤井草宣
5. 8 日支経済提携の根本要素は 精神工作
を其精髓とするにある (下) 安藤代
議士、議会に叫ぶ
5. 8 紅十字会開拓に成功 杭州難民整理殆
ど終る 日本人の積極進出を援助 特
務機関・秦龍勝氏談
5. 8 従軍僧より一躍 一県の宣撫班長に
大派、藤井晋氏就任 仏教各宗派通じ
て最初
5. 8 蘇州の名刹で けふ、合同慰霊祭 谷
天祥氏の努力で 日華仏教会を組織
5. 8 全文の緑化図る “支那全土に植樹せ
よ” 名古屋仏青 全連大会に提案
5. 10 神仙憧憬に現れたる 支那国民性(3)
金孝敬
5. 10 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 サア・ハイドリー卿 (下)
5. 10 懸案の対支神社問題 基本要項決定す
細目を成案、関係官庁に送付 「海
外神社研」代表近く渡支
5. 10 上海の都市計画と 上海神社の整備
中島課長等派遣団渡支
5. 10 全日本仏徒の 社事を 対外的に示す
総連盟の趣意書 十五日、築地で結
成式挙行

1938. 5. 11 神仙憧憬に現れたる 支那国民性(4)
金孝敬
5. 11 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 ハイデラバードミウチアム
5. 11 朝鮮で寺領一千石 黄檗の新寺建立
地主信者の発願寄付
5. 11 北支婦人 訪日団
5. 11 全日本仏青連盟総会閉つ 五部会及び
委員会報告 -第二日- 支那へ全連
の啓蒙運動 第二部会
5. 12 神仙憧憬に現れたる 支那国民性(5)
金孝敬
5. 12 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 3度目のアジャンター入り
5. 12 日本のラマ教の 建設が急務 十八名
の留学生引具し 小林義道氏帰る
5. 12 東本を振り出に 北支婦人訪日団 滯
洛三日、東京のプロ
5. 12 東京の日華 婦人交歓
5. 12 東洋は東洋人の手で 欧米依存主義を
清算 日滿支三国プロテスタント 代
表者ら北京で懇談会
5. 12 半島40万の基督者 皇国臣民の誓ひ固
し 朝鮮基督教連合会
5. 13 神仙憧憬に現れたる 支那国民性(6)
金孝敬
5. 13 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 官設宿舎
5. 13 仏教国ビルマから 愈々留学生来朝
日本紹介のオ氏の一文 俄然、反響を
呼ぶ
5. 13 済南に実業学校 更に四年制小学校
知恩院教会所新設
5. 13 先づ日本語 来朝のラマ僧
5. 13 中央融事協 会特派員 牡丹江へ
5. 13 対支開教問題や宗門の時局対策 豊山
派の高等講習
5. 13 印度独立連盟 日本々部大会
5. 13 宣撫教化事業 視察に渡支 見山知恩
院 教務部長
5. 14 神仙憧憬に現れたる 支那国民性(7)
金孝敬
5. 14 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 壁画マドババニー
5. 14 アラーの神に祈る防共 近東各国祝賀
使節迎へ 回教礼拝堂落慶の歓び
けふ、歓迎園遊会 「大日本回教協
会」主催
“各自心の中に この殿堂を築け”
小笠原氏の祝辞
5. 14 日運会話 便覧完成 両国親善に拍車
泉氏の努力
5. 15 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 模写に着手
5. 15 全国民の生活基調 神祇思想の討究
「時局と神社問題」座談会 海外神社
問題
5. 15 北支新政権大官婦人連 けふ憧れの京
都へ 帝都にも描く歴史的盛観 歓呼
に沸く東本願寺 大会プロ
日華婦人親善大会 あす、全国中継放
送 大派婦人連盟主催 大谷真美会で
録音撮影 山辺氏夫人 活花を奉
仕
大きな希望抱き 智子裏方へ感謝 藩
団長夫妻天津で語る
5. 15 全回教民族 代表歓迎会
5. 15 内蒙に骨埋む覚悟で ラマ教の開拓に
三年後知恩院が青年僧送る 早くも
志願者殺到
5. 15 小早川秋声画伯 訪日団と帰洛
5. 15 中日親善婦人 大阪のプロ
5. 15 北・中文に亘る 日宗の開教陣 充実
発展を遂ぐ
5. 15 満洲大同仏教会 初の花まつり 日・
満両国親善に拍車
5. 15 増える青年移民 拓務省が国立訓練所
を 関西に一ヶ所増設
5. 15 平安高女生の 満鮮就学旅行
5. 17 氏神の鎮祭なき淋しさ 海外発展に支
障 海外神社の総論説く高階氏 支社
主催時局と神社問題座談会(2)
5. 17 日華婦人親善大会開く 有史以来の盛
挙! 日章旗と五色旗の下に 東本願
寺の絵巻
潘市長令息の発声で 東洋永和万歳!
世界無比の日本 家庭婦人を学びた
い ◇…潘団長のメッセーヂ
5. 17 北支の将来に鑑み 日華大乘仏教連盟
済南で盛大な結盟式
5. 18 日華婦人交歓
5. 18 心から寛いだ訪日団 日華歌謡を歌ふ
東本願寺での親善風景 明けゆく北
支!
5. 18 支那婦人初の 傷病兵慰問 桃山御陵
参拝
5. 18 支那窮民の 救援に起つ 白国協会
連盟
5. 18 「ようおいでヤス」名園に集ふ日支婦
人 清水寺での交歓
5. 18 中国新民 仏青結成
5. 19 海外の神社は内地の 延長ではいかぬ
御祭神問題が最も重要 “時局と神
社問題”座談会
5. 19 愈々南京と蘇州に 西本願寺を建設
軍隊の休憩所や日語学校等 広義の宣
撫工作にも資す
5. 19 けふ、帝都で 日華婦人交歓大会 陸
海軍病院も慰問
5. 19 留学生を具し 福田寺総長帰任 古義
満洲開教へ
5. 20 古代印度の教育(上) ボース、ラス

1938. 5. 20 ビハリ
 5. 20 西田天香氏ら 北京で大もて
 5. 20 西本支那通信
 5. 21 徐州攻略成る
 5. 21 古代印度の教育(下) ポース、ラス
 ビハリ
 5. 21 友あり遠方より来る また楽しからず
 や 帝都の日華婦人交歓
 親善の契り固し 豪華な歓迎晩餐会
 5. 21 日蓮州管代 馬場氏渡支 皇軍慰問に
 5. 21 末藤上海身延 別院主任出発
 5. 21 上野朝鮮監督の転任で 旧水雲教が起
 つ 氏の赴任は極めて困難 大派海
 外開教陣難航 如何に打開するか
 5. 21 日本文化紹介の 写真アルバム刊行
 国際文化振興会
 5. 22 “時局と神社問題”座談会 海外神社
 の本質 神道を日本的に解釈するな
 余りに小さ過ぎる
 5. 22 殉国の英霊弔ふ 徐州の大慰霊祭 仏
 式は東西本願寺で 神式は上海神社神
 職
 5. 22 徐州陥落 奉告祭
 5. 22 支那回教徒の 倒蔣防共運動
 5. 22 雄々し・中国青年 中国復興建設青年
 隊結成 済南に名越氏の努力
 5. 22 神社の海外進出 招魂社制度の確立強
 調 社司社掌懇談会
 5. 22 外か?内か? 飛躍に備ふ金光教 教
 学方針一転機に直面 地方教会問題が
 将来の悩み
 5. 22 内鮮融和の 教化伝道陣布く 友松園
 諦氏朝鮮へ
 5. 24 “時局と神社問題”座談会 敵の戦死
 者も祀る これぞ惟神の道 神社建設
 の根本
 5. 24 大派北支開教監督に 宮谷前参務決定
 朝鮮、上海開教監督も内定
 5. 24 第三次移民団で 開拓者二世教育
 今後は新坊守と共同戦線 大派・五反
 田氏語る
 5. 24 伊藤総持寺貫首 初の鮮満巡錫 満洲
 国皇帝へ謁見
 5. 25 徐州陥落に際し 末寺教会に通牒 大
 派、奨義で宗門総動員
 5. 25 我が大陸政策の成否 アジア回教徒を
 如何するかで決る 世界回教運動の
 審議機関 総連合会を東京に作れ
 5. 25 山東省一带に躍進譜 文化事業部其他
 を特設 中国人の就職斡旋 済南東本
 願寺
 5. 25 朝鮮開教監督は 上野興仁氏留任 大
 派の開教陣立直し
 5. 25 “宗門の為に” 宮谷北支監督談
 5. 25 大派の蓄音器 寄贈に感謝状 鈴木部
 隊長
 5. 25 群島最初の 代表出席 刑務教誨師講
 習
 5. 26 反共運動転回に 回教青年団結成 華
 北連合総部が訓練所開設 幹部の猛訓
 練始む
 5. 26 現地騎軍行の産物 “東洋平和の黎明”
 光暢法主の記録映画成る
 5. 26 満洲道徳会 一灯園訪問
 5. 26 惟神道で外人を感化 世界平和を建設
 海外、日本両神社の区別 “時局と
 神社問題”座談会
 5. 26 駐支要人へ 曹洞管長感謝
 5. 26 日宗支那開教 快調を続く
 5. 27 “時局と神社問題”座談会 神職の海
 外進出や 神社の形式移植等が 海外
 神社の意でない
 5. 27 白衣の勇士達に マッサージ奉仕 李
 王妃殿下の御感畏し 盲少年の赤誠!
 5. 27 徳王と語る 北、中支の皇軍慰問 北
 米仏教代表 三上弘之氏の通信
 5. 27 天津日教会内に バラック建て
 「慰の家」も長期対戦
 5. 27 徐州の戦死者 追弔会営む
 5. 27 事変に活躍の転向者が 中国共産党の
 誤謬指摘 “民族精神に立ち還れ”と
 大阪保護観察所へ書面
 5. 27 長江開教監督は 北支監督当分兼務か
 大派鮮満支開教陣人事 曲りなりに
 一段落
 5. 27 国策線に沿ひ 愈よ「拓殖科」新設
 洋大、立案に着手
 5. 28 対回教策 について
 5. 28 印度友の会 宗教座談会
 5. 28 華北婦人団 盛り場漫歩 在阪の一行
 5. 28 転戦半才余 村井従軍僧の 現地報告
 講演
 5. 28 大派青島別院輪番に 芳原政範氏起用
 仁川輪番に増田園歴氏
 5. 28 稲荷講社の 支那進出
 5. 29 衆生済度は網より釣 台湾巡講所感
 今川園勝
 5. 29 北支奔馬 建長寺派慰問使梶浦逸外
 5. 29 東洋維新の先駆 青少年義勇軍訓練所
 を訪ふ、石原芳正
 5. 29 張満洲国司法大臣が 敬神の範を示す
 神武天皇を御祭神とする 神社を郷
 里撫順県に建立
 5. 29 蒙古ラマ僧の 学生教育を聴く 中外
 読者倶楽部の夕
 5. 29 一灯園精神との 一致に感激 今後提
 携を約す 満洲国道徳会
 5. 29 高僧招いて 支那僧を指導 山西の太
 原西本願寺
 5. 29 日語学苑卒業 生に精神教育
 5. 29 天理教の太原 日語学校強化
 5. 29 東亜仏教会結成 □県城内石仏寺中心

- に 日華僧侶の大同団結 貧困児童教育にも進出 大派の企画成る
 日支戦没者 追弔会 石仏寺中心に
 1938. 5. 29 浦塩本願寺の 閉鎖される迄
 5. 29 日本留学中の 支那学生が 世界の認識是正
 5. 29 戦線朗便 北支より 中支より 満洲より
 5. 29 海外事情講習会 六月六日から五日間開催 東洋協会主催の下に
 5. 31 差当り満洲神社の 奉祀は時の問題 さて、祀官を如何にするか “時局と神社問題” 座談会
 5. 31 運営意の如くならず 遂に解消に決定 「対支仏教協議会」
 5. 31 浜田本悠氏の 北支騎軍談
 5. 31 多元に過ぎる 現地の宗教政策 目下の悩みはこれだ 浜田氏の蒙支視察談
 5. 31 外国資金を排し 平壤神学校改組 内地資金と内地人指導
 5. 31 お寺から街頭へ！ 支那語講習会 旧湖北陸軍学堂教官の 大派南浮輪番活躍
 5. 31 今次支那事変と宗教団体 事変の新段階に処して 更に時局対策をなせ 文部省、宗教団体に方針指示
 国精総動員に対し 教団の組織内容刷新 所属教師の指導督励 通牒内容の要旨
 宗教団体の 時局活動督励 地方朝刊に宗教局通牒
 6. 1 印度の旅から アジャンターの生活 杉本哲郎 アジャンター画家
 6. 1 祀官養成の必要 中島氏の理由中心に “時局と神社問題” 座談会
 6. 1 防共の大旗の下 「東亜回教大会」 今秋開催、計画進む
 6. 1 対ラマ、回教工作に 我が専門学者招聘 蒙疆自治政府の 宗教対策具体化
 6. 1 ラマ僧招致に 各宗派乗出すか 京都仏連、護国団で 歓迎協議会開催
 6. 1 日満親善に輝く 故郷総理の墓地を無償提供 奉天高野山の井上氏
 6. 2 “時局と神社問題” 座談会 拓務当局に告ぐ 海外神社問題等に対して もっと熱意を注げ
 6. 2 支那事変を拝啓に 全島の各宗派結束 台湾仏教連合会成る
 6. 2 上海で初めて 仏教講話を放送 中支方面に皇軍慰問の 馬田日宗管代一行
 6. 2 天津と北京で 「全神」の慰霊祭 齋主その他決る
 6. 2 日支基督教有力者 平和工作を懇談 対支伝道方針近く決定
 6. 2 事変の新段階に鑑み 時局連合協議会 各宗派の教学部長を動員 七日、文部省会議室で開く
 6. 2 宗教報国の 固き握手に 朝鮮長老会代表ら 内地の兄弟訪問
 6. 2 海外神社問題研が 諸問題の根本方針決定 八日、各関係者と協議
 6. 2 大派宗議会条例 開教条例等改正 今次宗議会に提出
 6. 2 天台宗でも 開教規定制定
 6. 3 満洲国の建国廟と 招魂社との関係 満洲神社創建当時の事情 “時局と神社問題” 座談会
 6. 3 太原の治安回復 経済開発完成へ 邦人二千人を突破 福島少尉の陣中便り
 6. 3 海外神社の 祀官養成 講究所、実行予算に計上 三ヶ月に十人程教育
 6. 4 印度の旅から アジャンターの生活 杉本哲郎 ジャパンアーティスト
 6. 4 満洲国監獄に 西本より本尊交付 将来の監獄教誨に 重大ポイント示す
 6. 4 伊藤総持寺貫首 満鮮巡錫の途へ 東京駅頭を圧して 多数僧俗の歓送
 6. 4 大派天満別院内に 大東学院を創立 速成支那語講座 “藤永輪番の語学報国”
 6. 4 満洲女学生らの 日本へのあこがれ 教育の力の偉大さ 平安女学校生の就学旅行談
 6. 4 印度を中心に 東亜問題語る
 6. 5 “時局と神社問題” 座談会 招魂社の一県一社と その社格の問題 冷静な判断が必要
 6. 5 占頃面積
 6. 5 中支戦線で歓迎 自転車修繕奉仕隊 実意の籠った慰問袋 永尾慰問使帰る
 6. 5 日本一移民村訪問の 阮満洲国駐日大使 地方農民と午餐、歓談 大派玉蓮寺の協力感謝
 本願寺村建設へ 大使の訪問を受けた白木沢大専氏談
 6. 5 愈よ乗り出す 我が大乘仏教経典の世界化 西本翻訳課会議
 6. 5 カ教を通じ 日蒙支の融和 防共標を掛けて 蒙古婦人の意気
 6. 5 中支戦線慰問記 長野県従軍神職 曾根朝起
 6. 7 “時局と神社問題” 座談会 従軍祭官の問題 公けの名称として認めぬ では、何をするのか
 6. 7 東洋平和の人柱祀る 一大寺院の創建 日露役爆破行の勇士、禅林派 大島与吉翁の発願
 6. 7 杉本哲郎画伯 来る十日帰洛 両壁面の模写携へ
 6. 7 満洲国の 喇嘛教復興策 寺有財産や 経営法調査
 6. 7 北京を中心に北支に 診療班と刺繍工

- 場 満洲方面振作の大計画 前田支那
開教総監談
1938. 6. 8 “時局と神社問題” 座談会 陣中にお
祀りしつつ 宣撫工作を行ふ 従軍祭
官の一つの仕事
6. 8 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 ナームダ
6. 8 大陸文化開発に 京大の精鋭進撃 目
下各部が人選中
6. 8 ミンタル女学院 愈よ開院式挙行 岩
永領事等の祝辞
6. 8 満洲での差別観念は “日本人だ” の
一語にK. O 地区民移住地視察から
阪口真道氏の報告
6. 8 更に上海にも 東亜仏教会設立 日華
の仏教提携
6. 8 国策に基く“保護”の確立 輔成会が
時局即応対策協議会組織 南洋移民
問題研究
6. 8 好村春基氏 勇躍北支へ
6. 8 朝鮮基督教の刷新 先づ外人宣教師の
勢力範囲を脱すべし
6. 8 知恩院天津別院 日語学校開設
6. 9 戦没者の英霊奉祀と 靖国神社祭典と
の関係 従軍祭官の任務で論戦 “時
局と神社問題” 座談会
6. 9 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 古城の月
6. 9 時局の前途重且大の砌 東亜将来の慶
福に資せ 浄宗管長が一宗に諭示
6. 9 国家を挙げての 新支那育成時代だ
互いに協調和合して進め 兩本願寺の
提携
6. 9 満洲移民に 積極的に乗出す 調査団
帰り具体案練る 中央融和事業協会
6. 10 “時局と神社問題” 座談会 神社と宗
教の提携 時間切迫・一先づ閉会
6. 10 海外神社問題で 関係者会議 研究会
の原案大体承認
6. 10 変な信仰対象除き 立派な御祭神祀れ
海外神社の研究が逆に 内地神社に
課題与ふ
6. 10 戦時体制下の緊張裡に 大谷派宗議会
けふ招集 正副議長問題注目さる
戦時即応的予算案 総額百五十四万
円 中北支開教に重点
6. 11 お土産に壁画模写 濃厚な印度の排日
語る 帰朝した杉本画伯
6. 11 汎太仏青満洲国開催 今年は遂にお流
れ 九日、新京市協和会館の 関係者
会議で決定
6. 11 在満支の本邦 神社と氏子数 外務省
の調査完了
6. 12 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 感覚以上の感覚
6. 12 北京の邦人 営業調べ
6. 12 満支皇軍に届いた 北米仏徒の誠意
十万同胞を代表して慰問行 三上特派
使感激の帰朝談
6. 12 仏教を通じた 日支親善を強調 豊山
派管長のメッセージ 現地回向団が
彼地要人、仏徒に贈る
6. 12 海外神社問題
6. 12 満洲に皇典講究所 分所設置を計る
高階理事渡満して工作 神祇思想の宣
揚機関
6. 12 満洲回教徒は 日本軍に献金 小林不
二男氏談
6. 12 徐州陥落に寄す 浄土宗総本山特派○
部隊付従軍布教使 名越隆成
6. 12 宗教家は軍人以上の精神力が要求され
ている 北支山東省にて 勝山和郎
6. 14 第三回汎太仏青の流会
6. 14 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 南京陥落
6. 14 因脈を授与 半島人の法悦 朝鮮巡錫
の伊東貫首
6. 14 辺疆民族に 及ぼす対回教策 善隣協
会が先づ 調査研究機関設く
6. 14 馬田日宗管代 きのふ帰京 中支犒軍
から
6. 14 今年度の主眼を 特に大陸開教へ 中
央布教講習会に示す 日宗の布教方針
大派宗議会 開教発展の統一を図る 布
教条例を改革 宗議会上に上程さる
6. 15 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 昭和十三年一月一日
6. 15 杉本画伯 帰朝歓迎会
6. 15 北支文化建設の一翼 清水安三氏の事
業 補強施設の募金
6. 15 教学部長 渡満中止 曹洞宗制調会
委員の意見で
6. 15 鈴木管長の 樺太巡錫も
6. 15 大阪に生れる ボロボドウル研究会
十七日三笠屋で発会
6. 15 大派宗議会 大派の最大欠陥は 人の
和を欠くこと 支那開教を見直せ！
山名義芳議員の巨弾 一第三日午後一
6. 16 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 スチューデント・オブ・ア
ジャンターアート
6. 16 日本の実力に 英を屈服せしめよ 東
洋平和の確立には 日印支の提携不可
欠
6. 16 豊山派北支 回向団出発
6. 16 仏連、仏護団 ラマ僧歓迎会
6. 16 日語学校北支進出 今後は文部省で統
制 現地軍部は許可せぬ
6. 16 皇軍慰問満支視察に 宗議会議員団派
遣 全会一致建議案可決 一第五日一
6. 16 日本同盟への 復帰を申込む 内鮮一
帯の気運濃厚化 朝鮮基督教青年連合

- 会
1938. 6. 17 満洲庶民生活一斑(上) 新京 光岡
慈昭
6. 18 対支工作の 正念場
6. 18 満洲庶民生活一斑(中) 新京 光岡
慈昭
6. 18 印度の旅から アジャンターの生活
杉本哲郎 チイバーテイ
6. 18 曾ては赤の鬮士が 時局活動に積極参
加 大陸進出や国精運動など協議 時
局対応全国委員会
6. 18 杉本画伯模写の 印度古代壁画 京都
恩賜博物館に
6. 18 皇軍の慰問 禅風の挙揚に活躍 伊東
総持寺貫首 南朝鮮総督と歓談
6. 19 満洲庶民生活一斑(下) 新京 光岡
慈昭
6. 19 ボロブドウル研究会の発会
6. 19 日華仏教研究会
6. 21 支那事変と 英国の動き(上) ポー
ス・ラスビハリ
6. 21 満支出先の協調を 両本願寺で懇談
具体的協定ならん 昨夜第二次会同
6. 21 臨時黄檗合議所会議 時局対策の催数々
臨濟從軍僧会議も開く
6. 22 支那事変と 英国の動き(下) ポー
ス・ラスビハリ
6. 22 満蒙支で協力の 連合論達を公布 東、
西本願寺が
6. 22 印度壁画模写 博物館に到着
6. 22 蒙疆50万カ教徒 我が宣撫版に感謝
防共に尽力を乞ふ 張視察団長語る
6. 23 北京で合同慰霊祭 全神派遣神職団が
奉仕
6. 23 殉国勇士に “慰霊献茶” お茶で日
華婦人親善へ 山辺京子夫人単身渡支
6. 23 法主稿軍映画等 愈よ街頭で公開 東
本願寺の新しい試み 皇軍慰問映画・
音楽会
6. 23 遂に立消えの 運命を辿るか さて結
末をどうする 国際仏教通報局
6. 24 北支仏教の中心人物 夏蓮居老居士(1)
北京にて 柴田玄鳳
6. 24 “宗教家は満洲で 何もしとらん”
大谷拓相に叱られた 前田徳水氏語る
6. 25 北支仏教の中心人物 夏蓮居老居士(2)
北京にて 柴田玄鳳
6. 25 創設七周年記念「支那室」を特設
大陸進出の陣容成る 宗教問題研究会
6. 25 日本仏教読本 中華版を刊行 先づ日
蓮宗
6. 26 本紙を通じて 支那仏教徒から 日本
仏徒に告ぐ
6. 26 北支稿軍行雑感(一) 米本孝巖
6. 26 北支仏教の中心人物 夏蓮居老居士(3)
北京にて 柴田玄鳳
6. 26 討匪行より帰りて 弔亡友 ○○県
宣撫班長 藤井晋
6. 26 支那開教の新動向で 希望意見旺ん
宗門総動員と事務局の拡張 大派時局
審議答申注目さる
6. 28 北支仏教の中心人物 夏蓮居老居士(4)
北京にて 柴田玄鳳
6. 28 弔亡友後記 ○○県宣撫班長 藤井晋
6. 28 大派宗門総動員と 支那開教の根本成
る 各宗派共同宣言協定も可 宗派的
偏見を排す
支那開教計画案
6. 28 西本満支 首脳更迭
6. 29 徐州陥落の跡に妙音を弾じ 一篇の詩
を献じつ 護国の忠魂を訪ねて(上)
大連聖徳会 江頭法紘
6. 29 特に東亜大陸に於る 教化宣撫工作に
協調 全教界に一大ショック 両本願
寺が連合論達発示
6. 29 胎動の新支那へ 進展の財源捻出 従
来の開教地自給案 曹洞宗制調会へ
6. 29 満支の情勢に即応 首脳部の異動 西
本願寺、きのふ発表
6. 29 高遠な仏教より 支那の俗間信仰を
宗教的宣撫工作語る 弁護士 藤田玖
平氏
6. 30 ヌーボー精神との接触面 一バ女史の
「支那事変観」評一 一 一灯園 玉
井冬至
6. 30 徐州陥落の跡に妙音を弾じ 一篇の詩
を献じつ 護国の忠魂を訪ねて(下)
大連聖徳会 江頭法紘
6. 30 ヌーボー精神との接触面 一バ女史の
「支那事変観」評一 二 一灯園 玉
井冬至
6. 30 日支事変の解決策 東洋永遠の平和目
指す
教育勅語奉戴道義国家の建設 大日
本運動通じ全国に呼号 葦津翁の提唱
注目
6. 30 事変発端の地に 西本願寺が寺を創設
6. 30 南京に浄宗 教会所創設
6. 30 智山新京別院 建設委員依頼
6. 30 支那へは同行二人 ハリキッた連枝総
監 大谷照乘氏語る
6. 30 半島人基青に 内地人名誉理事 内鮮
教会の提携強化
7. 1 ヌーボー精神との接触面 一バ女史の
「支那事変観」評一 三
7. 1 ソ満国境の軍隊と 移民地慰問伝道
大派、慰問使を特派
7. 1 大陸進出の前奏曲 大学教授陣を指揮
在阪転向者の思想指導
7. 2 ヌーボー精神との接触面 一バ女史の
「支那事変観」評一 四
7. 2 皇軍の文化保護 太原の孔子廟は 一

1938. 7. 2 個中隊で護る 大派岡崎氏の犒軍談
 7. 2 妙心宣撫費 勸募期延す 九月中まで
 7. 3 北支犒軍行雑感(二) 米本孝巖
 7. 3 東洋平和と回教民族 小林不二男
 7. 3 曹洞宗樺太 別院慶弔会
 7. 3 国策順応の赤誠 「本願寺学生義勇軍」
 を 内原訓練所に委託許可 乗り出す
 移民運動
 7. 5 荒魂の一面に和魂の精神こそ 宣撫工
 作の根本 神仏基三教の代表者が 宣
 撫班の苦心語る
 7. 5 内蒙古豊鎮に 日華滿蒙万霊塔を建立
 塔下に般若心経埋藏 國際的儀式で
 地鎮祭
 7. 5 皇帝陛下より 優渥なる御下問 滿洲
 国訪問の伊東総持貫首 遙々感話を寄
 す
 7. 5 台湾本島人の 尼僧留学生 誓願寺で
 研究
 7. 5 満人児童に 施す情操教育 新京大同
 仏教総会が 星期日曜学校を開設
 7. 5 印度マドラスで 國際基督教大会 今
 冬十二月開催
 7. 6 我が支那事変観(上) 一事変一周年
 を迎へて— エ・エム・サハイ
 7. 6 内地の保母求む 勇躍大陸に進出する
 新日本女性はるませんか
 7. 7 事変一周年
 7. 7 支那事変一周年に際し 教界諸大徳に
 言す 高島米峰
 7. 7 我が支那事変観(下) 一事変一周年
 を迎へて— エ・エム・サハイ
 7. 7 中支開教監督も包含 相当広範囲の異
 動 大派、今明日中に発表
 7. 7 南支開教の基は 厦門か台湾から 今
 後は文化事業に努力 復興東本願寺へ
 邁進
 7. 7 全一仏教の大陸工作 指導的母体結成
 を期待 新に「東亜仏教文化協会」
 僧侶有志で創立されん
 7. 7 内地教会より 徹底した皇国化 行事
 に表はれた 半島基教会の種々相
 7. 9 新支那の建設をみる 於北京 寺島隆
 太郎(1) 支那の日本化(上)
 7. 9 支那五億の同胞に告ぐ「誠」を以て
 日支神結せよ「団体信仰運動」の主
 宰者 山口海軍少佐の贈る宣言 “皇
 道宣揚と 世界紅卍字会”
 7. 9 回教知識普及に 日本最初の講習会
 十五日から五日間 日本青年会館で
 7. 9 皇軍慰問かね 北支へ青年仏徒派遣
 全日本仏青連盟総会の 決議案実行へ
 7. 10 新支那の建設をみる 於北京 寺島隆
 太郎(2) 支那の日本化(下)
 7. 10 西本願寺の水禍救護運動 ラマ僧も教
 援に 知恩院の慰問対策
 7. 10 愈よ地に着く 妙心の宣撫工作 済南
 に開教所新設
 7. 10 藤岡滿洲開教監督 遂に辞表を提出
 当局の態度に非難
 7. 10 講究所滿洲 分所設置で 高階理事滿
 神 幹部と協議
 7. 10 夢窓国師問題と 支那事変誤信問題
 最後は真価である 龍木逸蔵
 7. 11 新支那の建設をみる 於北京 寺島隆
 太郎(3) 思想と教育の動き 思想界
 新民会教化部長 宋介談
 7. 12 大派滿洲開教監督 後任銓衡困難
 7. 12 鮮滿初の巡錫終へ 伊藤総持貫首
 メッセージ発表
 7. 13 新支那の建設をみる 於北京 寺島隆
 太郎(4) 教育界 師範大学総長 王
 謨
 7. 13 北米第二世が 鮮滿北支の見学 今夏
 休暇を利用して 日米ホーム学生
 7. 13 “今回の訪滿は精神 融和に大きな力”
 代表問題は追及せぬ 伊藤総持貫首
 に代って語る 伊東泰邦氏
 7. 13 東亜政策で要路へ進言 大谷光瑞氏
 7. 14 支那革命不絶の思想根拠(一) 金孝
 敬
 7. 14 新支那の建設をみる 於北京 寺島隆
 太郎(5) 文学と演劇 文学界 錢稻
 孫談
 7. 14 滿洲と台湾へ 西本特派講師
 7. 14 皇学館学生ら 海外神社視察
 7. 15 支那革命不絶の思想根拠(二) 金孝
 敬
 7. 15 新支那の建設をみる 於北京 寺島隆
 太郎(6) 演劇と民情 村上知行談
 7. 15 “支那に骨埋む” 古川妙心管代報告
 に帰朝 再び現地へ引返す
 7. 15 肉食妻帯目指し 支那仏教界に改革の
 声 南普陀寺が近く宣言
 7. 15 難産を重ねた 大派滿洲開教監督 木
 下輪番が兼任
 7. 15 大邱別院輪番 安田氏辞任
 7. 15 西本朝鮮別院 夏季大学講座 仏教勝
 友会主催
 7. 16 支那革命不絶の思想根拠(三) 金孝
 敬
 7. 16 支那仏教史跡踏査 小笠原宣秀、塚本
 善隆両氏
 7. 16 露滿人も獻金 皇軍慰問一銭献金 西
 本奉天仏育の活躍
 7. 17 支那革命不絶の思想根拠(四) 金孝
 敬
 7. 17 異色! 亜細亜の宗教を聴く
 ビルマ仏教寺院は 一の娯楽場であ
 る 付近に死骸が累々と横はる
 ビルマ独立の志士 オツタマ教授の
 消息 本社へ著述を寄す

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 人を食ったやうな 支那仏像の昏
下劣極まるその作品 臨濟支那行き僧
の座談会
融通性に富んだ 北支喇嘛を語る
喇嘛僧 海福泉氏談
支那基督教教師の親日論
1938. 7. 17 天津の各宗教団体が 教化連盟を組織
内地に先んじ結束を固む 聖戦一周
年記念日
7. 19 支那革命不絶の 思想根拠 (五) 金
孝敬
7. 19 八月、居留民団法制定後 北京神社創
建具体化 全神理事らの工作奏効 高
階全神代表の報国
7. 19 北京本願寺 お盆の法要
7. 19 寺族達も挙つて 支那語を勉強 妙滿
寺本山で開講
7. 19 工費二百万円の 建国廟殆ど完成 御
祭神は天照大神と五族忠霊 祭祀形式
など未定
7. 19 支那要人も 一様に玉串奉奠 夜の瑠
璃場で日本語教授 福島宮司の現地感
想
7. 20 支那革命不絶の 思想根拠 (六) 金
孝敬
7. 20 特別宣撫工作従事に 大量の壮年僧派
遣 西本願寺直に人選へ
7. 20 妙心寺宣撫 工作協議 古川氏中心に
日本語も鮮かに 研鑽の功成り帰国
高野山招致のラマ僧
7. 20 基連婦人委員部が 北京に医療機関
十月竣工の予定
7. 20 御祭神は天照皇大神 我が神社そのま
まを創建 海外神社問題研の結論と
北支現地の意見全く対立
7. 20 神社創建と並び 神祇中心の対支工作
現地に指導機関設置要望
7. 21 支那革命不絶の 思想根拠 (七) 金
孝敬
7. 21 大陸に於る宣撫教化 刷新を要望さる
柴田北支総監の帰洛で 浄土宗更に
対策を考究
7. 21 日華婦人多数参列し 殉国勇士慰霊献
茶 山辺京子夫人活躍
7. 21 北満の地に 仏・道二教の提携 道教
徒の生活改善奏効 日宗開教使の奮闘
7. 21 日宗北支開 教監督更迭
7. 21 厦門に西本願寺 新方面の分野啓く
7. 21 内地に先鞭つく 全鮮転向者連盟の組
織化 あす、京城で大会
7. 22 海外神社と 祭神の問題
7. 22 日本精神文化の粹 仏教の海外宣揚
在留外人への仏教講座開設等 国際仏
教協会の企て
7. 22 信州善光寺に 仏舍利を奉安 シャム
国法親王の賜り物 日暹親善愈よ濃か
7. 22 満洲拓殖の 訓練司事決る 西本の長
納氏突如起用
7. 23 “一灯園は何人も必要” 北支、満洲
の旅から帰った 西田天香さんの感想
談
7. 23 児童の作品が縁で 日支親善に拍車
中国臨時政府中日弁事処 日宗関係者
と懇談
7. 23 “日本民族の信仰を 現実に示せ”
海外神社問題に関し 矢野上賀茂宮司
の意見
7. 23 妙心の対支 宣撫具体化 北京に開教
本部を置く
7. 24 新=興=ト=ル=コ ポース、ラスビ
ハリ
7. 24 北支の布教問題(1) 常光浩然
7. 24 日暹親善の仏舍利 けふ、善光寺で御
供養 厳肅、晴れの伝達式
7. 24 全鮮転向者 連盟の誕生
7. 26 北支の布教問題(2) 常光浩然
7. 26 新=興=ト=ル=コ ポース、ラスビ
ハリ
7. 26 日華・童心交歓 日本の教育の反映
児童作品、東本へ 満洲宣撫官の朗誦
7. 26 支那救民運動に 刺繍工場を開始 徹
底的日支融合 三上諦聴氏帰来談
7. 26 新=興=ト=ル=コ ポース、ラスビ
ハリ
7. 26 妙心の開教法規 緊急教令で発布 か
くて総監の任命へ
7. 26 副島宮司帰朝 報国会盛況
7. 26 転向者の大陸進出 八木沼宣撫班長を
中心に 関係者が懇談会
7. 26 北支の布教問題(3) 常光浩然
7. 27 北京神社創建 準備会組織さる 現地
関係者協議会で「海外神社研」の工
作奏効
7. 27 部落更生と戦時経済 満洲移住を強調
京都府の大陸進出方策
7. 28 北支の布教問題(4) 常光浩然
7. 28 樺太日ソ国 境線を視る 天岡大器
7. 29 民心安定した 青島で仏教講座 曹洞
の高階氏渡支 犒軍と禅風宣揚
7. 29 けふ通州で 合同追弔会
7. 29 宣撫工作に内地 宗教界の応援俟つ
神仏基三教指導者を動員 宣撫班感謝
激励会
7. 29 旅日華僑の願ひ 仏教による日支提携
強調 東亜夫人協会の懇談
7. 30 石家荘に愈よ 本願寺建築 将来は別
院に
7. 31 フランク・アルナウの『長城』 鈴木
英
7. 31 大同石仏と善導大師 (上) 井上隆森
7. 31 太原の營庭に 神殿を建立 神宮大麻
奉斎

1938. 7.31 大谷派三森 中支監督 五日上海へ
 7.31 日支の童心結ぶ:「中日児童教育協会」
 設立に尽力誓ふ
8. 2 一千万支那民衆を救へ 関口野薔薇
 8. 2 氣をよくした一灯園 園指導の満洲農
 村実験村が 唯一の模範村と太鼓判
 8. 2 ラマ僧留学生 各寺院で分宿 實際生
 活指導
 8. 2 アジャンター壁画 模写も特別陳列
 八月の恩賜京都博物館
 8. 3 全支の浄土教徒で 東亜浄宗会の結成
 信仰中心の教化で行く 柴田浄宗教
 監談
 8. 3 浄土宗現地 開教協議会 柴田氏中心
 に
 8. 3 厚和に政府認可の 蒙古少年学校 西
 本願寺が創設
 8. 3 ウスリー江岸 虎林より 山名義芳
 8. 4 入唐求法巡礼記中の 支那語に就いて
 (1) 牛場真玄
 8. 4 北支災民の救済も 為替管理で意の如
 くならず 満洲国紅卍字会が方法議す
 8. 4 北支視察の体験から 大派、開教方針
 を確立 宮谷監督、当局と協議
 8. 4 樺太西別院 仏教講習 教学諮問会
 8. 5 中支に於る 現地祭典 軍部と折衝
 具体案定む
 8. 5 入唐求法巡礼記中の 支那語に就いて
 (2) 牛場真玄
 8. 5 世界紅卍字会の… 非合理的なるもの
 三石神社社掌
 8. 5 支那に於る宗教政策の 大綱方針案提
 示 各宗派の統一的活動促す 馬場行
 啓氏文部省に進言
 防共線を強化し 白人の東亜支配防
 げ 対支宗教政策の大綱方針
 8. 6 入唐求法巡礼記中の 支那語に就いて
 (3) 牛場真玄
 8. 6 女子宣撫班員 中村豊子さん 敵隊長
 に皇道を説き 徐州戦線の花と散る
 信仰報国の赤誠に燃ゆ 烈々・大和撫
 子の意気
 8. 6 支那青年僧を厳選 杭州で仏教講習
 修了者は各社事機関へ進出 特務機関
 部で目下実施中
 8. 6 浄宗の開教人事 問題は教監の権限
 支那開教制度確立が急務 命令系統の
 一元化を要望
 8. 6 宗教による対支文化工作 官民協力適
 進誓ふ 文部省の対支布教協議会
 8. 6 既に派遣の布教陣は? 更めて推薦状
 下附申請を要す 出先での連絡は
 小関派遣員が当る
 8. 6 法律化された朝鮮の神道 因習打破が
 第一 土着民合祀は神道を誤る 吉田
 朝鮮権宮司喝破
8. 6 活動の全貌示す 浄宗の事変報告書
 島野氏入洛、近く完成
 8. 7 入唐求法巡礼記中の 支那語に就いて
 (4) 牛場真玄
 8. 7 満支飄蕩 (一) 角野達堂
 8. 7 裁縫・家事の 学習希望なく 支那家
 庭の欠陥暴露 覚生女学校の入試施行
 出雲路谷中校長談
 8. 7 対支開教戦線の統制 先づ今秋布教講
 習会開く 仏連主催 各派に団結の熱
 意
 8. 7 街の天使も通学 蒙古政府後任の 厚
 和の学校談る 藤谷道威氏
 8. 7 新支那創立に 仏教儒教の役割絶大
 桜井中佐に「物を聴く」
 8. 7 中支の各宗団結束 大同宗教連盟生る
 仲よく宣撫教化へ
 8. 7 大同石仏と善導大師 (中) 井上隆森
 8. 9 入唐求法巡礼記中の 支那語に就いて
 (5) 牛場真玄
 8. 9 湖州宣撫教化に -エポック画す
 8. 9 転向者の大陸進出 更新会農園に訓練
 所設置 藤井觀察所保護司渡満
 8. 9 満洲国新京と奉天に 同時に別院誕生
 西本願寺発展への新体勢
 8. 9 理屈はやめて 勝れた宣撫員の養成へ
 宗教家の協力懇請 宣撫班感謝激励
 の会
 8. 10 入唐求法巡礼記中の 支那語に就いて
 (6) 牛場真玄
 8. 10 渡台雑信 高島米峰 高砂丸より
 8. 10 支那土民への 社会救済が主 布教宣
 布は従 全て特務機関の指示受く 支
 那開教に注意
 8. 10 浄宗の事変活動全貌 各種の統計完成
 す 時局講演、祈願会六万回
 8. 10 南京は四派が 統制下に活動 南京西
 本願寺の 広橋静恵氏談
 8. 10 サハイ氏 渡満支
 8. 11 思想転向者群 の大陸進出
 8. 11 入唐求法巡礼記中の 支那語に就いて
 (7) 牛場真玄
 8. 11 渡台雑信 高島米峰 高砂丸より
 8. 11 満洲北支の 仏教遺跡を調査 文部省
 より派遣の 京大教授 羽浜了諦氏
 8. 11 宣撫教化効あり「中国青年建設隊」
 徐州で大いに活躍 浄宗名越従軍僧語
 る
 8. 11 東亜文教協会 愈よ廿九日発会式挙行
 日支文化の新紀元
 8. 11 浄土宗従軍僧 六氏共に帰国 現地事
 情報告 再び戦線へ
 8. 11 西本願寺の 開教使異動
 8. 11 樺太原住民族 の宗教風俗調査
 8. 12 支那開教に 関する通牒
 8. 12 回教との提携図る 本門法華妙蓮寺の

- 皇軍慰問団 入蒙の計画進む
1938. 8. 12 蒙疆の鎮め 張家口神社 明春起工
8. 12 関東神宮御創 建に台湾槍
8. 12 北支に向ふ 塚本善隆氏 来る廿日出発
8. 12 曹洞桑港寺 磯部峰仙氏 皇軍慰問使に
8. 12 近来稀な西本 台湾人事異動
8. 13 満洲仏教の研究 機関として見た 満鉄大連図書館 岸田覚明 一
8. 13 張鼓峰方面に 西本の慰問 前田総長特派
8. 13 日満蒙支殉国者供養塔建設 洛北鞍馬山に 今十三日発表
8. 13 特務部を中心に 中支の宗教対策 近く根本方針確立されん 日支共存共栄の理想実現へ
8. 13 中文宗教大同 連盟大綱案成る
8. 13 東亜和平建設に献身 留学僧大量養成の機関 東本願寺が北京に建設 指導に当る藤井草宣氏
8. 14 満洲仏教の研究 機関として見た 満鉄大連図書館 岸田覚明 二
8. 14 北支那教界の権威 夏蓮居老居士 柴田玄鳳
8. 14 満支飄蕩 (二) 角野達堂
8. 14 北支便り 或日の日記から 北支〇〇部隊 古森正夫
8. 14 熱河省承德で 満人教員再教育
8. 14 北中支に設置の 曹洞布教総監部 主任に派内、成田氏ら任命
8. 16 台湾皇民化運動 千余の仏像を焼く 日本仏教化も奏効
8. 16 中文宗教大同 連盟の計画
8. 16 抗日教育の徹底に驚く 余程の忍耐が必要 中支視察の境舜英氏談
8. 16 千葉開教使 に帰国命令 曹洞指令す 仏教による 親善運動 東亜精神振興同盟会生る
8. 17 満洲仏教の研究 機関として見た 満鉄大連図書館 岸田覚明 三
8. 18 海外神社に就て (上) 神社人並に神社当局に寄す 正西寺善雄
8. 18 渡台雑信 高島米峰 高砂丸より
8. 18 稲荷講社の 大陸進出具体化 準備工作に朝鮮視察 行弘氏今明日帰社
8. 19 海外神社に就て (下) 神社人並に神社当局に寄す 正西寺善雄
8. 19 渡台雑信 高島米峰 草山より
8. 19 満洲仏教の研究 機関として見た 満鉄大連図書館 岸田覚明 四
8. 19 山西文化保護に 大派関係軍民の活動 砲弾雨下に愛馬傷く 岩倉隊長の現地報告
8. 19 奈良東大寺が ラマ僧招待
8. 19 旧慣の寺廟を整理廃合 迷信打破に努
- 力 台南市が支那式信仰一掃 宗教の皇化運動へ
8. 19 胡氏日本仏教を持帰る 新京で仏教運動
8. 19 北京覚生女学校 予算六万円計上かけふ、出雲路氏再渡支 東本願寺 中支実行予算 同時に審議
8. 20 半島に於ける 敬神観念の啓培 吉田貞治 一
8. 20 渡台雑信 高島米峰 草山より
8. 20 半島同胞家庭に 柵棚設置を励行 国体観念の把握へと 京都府協和会懇談事項
8. 20 戦果収集と日本仏教徒 中文に支那難民施療所 蘇州・南京・杭州・鎮江に開設 東本願寺別院の計画具体化
8. 20 北京覚生女学校の 新職員等決定 女性では浜岡節枝さん 大派の教育方針注目
8. 20 人材難の妙心開教 経験だけでは駄目
8. 20 商工都市に 支那語普及
8. 20 大陸進出の社事団体 三上名古屋衆善館長 慰霊と視察に渡支
8. 21 半島に於ける 敬神観念の啓培 吉田貞治 二
8. 21 渡台雑信 高島米峰 草山より
8. 21 北支教界の権威 夏蓮居老居士 柴田玄鳳
8. 21 一般及び本島人の 皇民教化に即応 西本願寺の台湾開教発展 蕃人への新教化網 本島人への 新教化完成 未曾有の 教化網開設 全島的に 寺廟調査
8. 21 東亜文教の 確立に参加 古希越えた松本博士 けふ、北京へ向ふ
8. 21 赤色ルートの死活線 その去就が重要視される 新疆省の回教徒
8. 21 西本朝鮮の 開教使異動
8. 21 今後の開教方針と 事変活動を協議 浄土宗務、知恩院打合せ きのふ、開催さる
8. 21 大派北京補番 堅田氏起用
8. 21 独生への覚悟を養へ 〇〇病院を訪ねて 今井副官と語る 大園恒明
8. 21 満支飄蕩 (三) 角野達堂
8. 21 戦線の慰より 北支派遣隊中 涌田常一
8. 23 半島に於ける 敬神観念の啓培 吉田貞治 三 四
8. 23 兵隊さんも 校長さんも生徒 石家荘西本願寺の 華語講習会盛況
8. 23 海軍青今上陸 一周年記念法要
8. 23 本島人の皇民化 運動を協議 調査会を設置して研究 台北州仏教会總會
8. 23 台湾皇民化運動の余波 旧慣寺廟覚醒

1938. 8. 24 半島に於ける 敬神觀念の啓培 吉田貞治 五
8. 24 居留民団正式に結成 北京神社創建愈よ具体化 北支神宮への昇格に努力 貢院跡一万坪の神域決る
8. 24 張鼓峰の現地で 戦没勇士慰靈祭 北鮮では傷病将士を慰問 大派慰問使一行国境へ
8. 24 恐るべき 紅卍字の勢力 満人に不適当な解脱の教 妻帯僧の教化は到底駄目 逸見氏、高大で熱演
8. 24 開教師の再教育 豪華な支那開教講習 仏連、文部省後援で開く 当代一流の權威招き
8. 24 大連聖ヶ丘に 宗教的學生祭 詩吟で意気を昂ぶらす
8. 24 府が満洲移民 視察団を派遣
8. 24 満洲皇帝に 大師像献上 金剛峰寺から
8. 24 現地外人宣教師と 軍との連絡図る 基連の教職奉仕団
8. 25 台湾本島人の教化問題
8. 25 半島に於ける 敬神觀念の啓培 吉田貞治 六
8. 25 満洲建国廟御祭神問題 将来神社界に重大化? 小笠原氏の視察談
8. 25 北京神社創建で 祀官養成具体化す 「海外神社研」近く対策協議
8. 25 満洲最大の 仏教建築 大派別院竣工
8. 25 婦朝初の作品 描く“アジヤの婦人” 杉本画伯の貴き報告
8. 25 雲崗石仏寺の 発掘を語る 水野清一氏
8. 25 日本僧侶の協力望む 支那仏教寺院の復興 抗日太虚法師は目下英国に 從軍僧村上独潭氏婦朝談
8. 25 日支文化の 提携に一役 本紙連載、大醒法師の「日本仏教視察記」出版
8. 26 蒙疆自治連盟の宗祀に 成吉斯汗神祠 創建 彼我要人ら計画進む
8. 26 六十八歳で 支那語勉強 妙満寺講習 あす終了式
8. 26 ソ満国境へ 移民地から慰問
8. 26 東寧軍病院で 本尊を安置 東本が下附
8. 26 釜山西別院の 黎明修養講座
8. 26 石家荘の合 同慰靈祭
8. 27 留学生派遣 その他協議 西本の対支策
8. 27 アメリカ宗教団体の 蔣政権へ借款説 我基督教各派否定す
8. 27 神祇を中心とする 文化工作担当の人材養成 海外神社の奉仕者養成機関 皇典講究所で設置と決定
8. 28 米宗教団体 と対支融資
8. 28 滿支飄蕩 (四) 角野達堂
8. 28 クロバトキンの印象 日露役と張鼓峰事件 ロシア怖るるに足らず 池田大佐ソ連を語る
8. 28 親日中国建設隊と協力 明朗徐州の再建目指す 東本願寺の社会施設 日本小学校・日語学校も設置
8. 28 大陸に歛執る 若人に花嫁探し “部落繁栄と内助の功” 移民地花嫁の便り
8. 28 北中支に拡充 日宗の大陸開教陣 活躍振りはこれだ
8. 28 読書界 少年満洲誌本 長与善郎氏著
8. 30 渡台雑信 高島米峰 ブヌン族の青年
8. 30 徳王の来朝求め 蒙古へ向ける知恩院の活動 厚和に出張所設置計画
8. 30 我国では 前代未聞 禿氏氏も激賞 蒙古芸術品展
8. 30 張鼓峰事件突発と共に 大派間島開教陣活躍 從軍慰問と寺院解放
8. 30 海外神社には 純粹な内地様式を 政策的妥協は不可 副島宮司の意見
8. 31 愚民政策不可
8. 31 渡台雑信 高島米峰 台北帝大見学
8. 31 唯一の僧として 彈丸雨飛に立つ 応源高谷、雄基寺田両氏 上野大派慰問使報告
8. 31 満人青少年教化の 日滿仏教徳育学校 満人僧侶と協力、近く創設 大谷派高山開教使の計画
8. 31 満人のみの 仏教の集ひ 大同仏教会に 西本が本尊を
8. 31 妙心の臨時開教規則 愈よあす発布 極めて平凡なもの
8. 31 回教事情調査に 専門家初の派遣 回教圖考究所小林氏ら 北支、蒙疆、満洲へ
9. 1 渡台雑信 高島米峰 鷲と鳥その他
9. 1 メソ信徒の重鎮 日支平和工作に献身 一家を纏めて渡支
9. 1 淨宗北支の 開教方針 幼児保育中心に
9. 2 渡台雑信 高島米峰 台湾の宗教政策
9. 2 軍指導の下に現地へ 大挙、僧侶軍の出動 平和工作に永住せしめよ 今こそ感謝報恩行・具現の秋
9. 2 別院を開放 宿泊所を設置 渡支邦人の便宜図る 大同の淨宗井上主任
9. 2 漢口攻略前に 武運長久祈願 住吉大社で
9. 2 福知山教会 日高牧師 北支に献身
9. 2 皇軍慰問に 仏教使節を派遣 東亜仏教協和会が 臨時總會を開く
9. 2 支那問題特別講座 藤田元春氏を講師に 京都府教育会が開講
9. 2 朝鮮両青年会 完全に合流
9. 2 西本の満洲 開教強化

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1938. 9. 3 渡台雑信 高島米峰 阿片と水彩画
 9. 3 支那開教に就て 西山三派重役会
 9. 3 村上独潭氏の 従軍一年後援 国歌協
 会奉仕
 9. 3 東洋平和の根本国策 愈よ本格的開始
 西本願寺が五ヶ年計画で 満蒙義勇
 軍幹部訓練開始
 9. 4 新民工作と 留日青年會
 9. 4 渡台雑信 高島米峰 台北卒業
 9. 4 滿支飄蕩 (五) 角野達堂
 9. 4 テマ・日本の敗残兵 これで辛くも士
 気を繋ぐ -和波豊一中將談-
 9. 4 犒軍行に 随行して 光岡良雄
 9. 4 留学生に先立ち 花嫁さん来朝 神戸、
 小林義道氏のもとで 日本の教養受く
 9. 4 北滿各地の 皇軍慰問 前田西開教総
 長
 9. 6 無期限の大業 (附、海外の神社建立
 問題) 陸軍省新聞班陸軍歩兵中佐
 大久保弘一
 9. 6 渡台雑信 高島米峰 台中台南より
 9. 6 稻荷講社の大陸 進出愈本格化 近く
 鈴木本部長渡支 要路と折衝の予定
 9. 6 復興の上海に 更生の支那婦人 ミシ
 ン教習所開設 天理上海時局委員会の
 試み
 9. 6 武漢三鎮 陥落祈願祭 けふ白峰宮で
 9. 6 申込殺到 西本の満蒙義 勇軍訓練生
 9. 6 渡台雑信 高島米峰 台中台南より
 9. 6 中日兩國の協力で 文化集団を形成
 全世界に改革運動 人文、自然兩科学
 部会決議 東亞文化協議会
 9. 6 北中支の文教視察に 安藤正純氏十四
 日出発
 9. 7 西本と義軍 訓練の開設
 9. 7 渡台雑信 高島米峰 高雄より
 9. 7 滿洲国が人文科学の 国立研究機関を
 設置 近く官制公布、明年度より
 「人文学研究院」を確立
 9. 7 回教との提携志す 本門法華妙蓮寺皇
 軍慰問団 いよいよ入蒙す
 9. 7 滿洲国に 鉄眼版蔵経 納蔵終る
 9. 7 支那開教講習会に 大派聴講生を派遣
 終了後開教吏員に採用
 9. 7 関天竜管長 北京に駐錫 彼岸頃帰洛
 9. 7 村上独潭氏の 現地帰還延期
 9. 7 半島同胞が傷痍軍人 療養所に注ぐ熱
 誠 京都府協和会の 講習会と勤勞奉
 仕
 9. 8 渡台雑信 高島米峰 再び高砂丸より
 9. 8 神職界に示唆とふ 勇士の公葬神式論
 に 烈々たる警告送る 現地の○○部
 隊長
 9. 8 小早川秋声画伯の 横浜東本願寺壁画
 成る 近く北支に空の旅
 9. 8 大学教授連盟 結成を希望 支那の教
 授に
 9. 8 支那学僧頼曇氏招き 日華仏教の交換
 近く日本にも来朝せん 南京大派保
 木從軍僧通信
 9. 8 西本派遣の 北支留学生 二人決定す
 9. 8 日基、北京に 教会設置 初代牧師村
 上氏
 9. 9 行程四十日間 満蒙支への犒軍 並に
 精密な視察試む 安藤正純氏目的語る
 政治産業中心に 精神工作を視察
 日滿支の精神的結合へ
 9. 9 青島の 曹洞布教所 寺号を公称す
 “祥嶽山曹谿寺”
 9. 9 占領地域内に在る 外国宣教師の勢力
 今後の宣撫工作に これを如何に指
 導するか
 9. 9 支那の居士達と 親善を結ぶ 大阪浄
 青の居士林 柴田教監の斡旋で提携
 9. 9 一灯園の 滿支進出
 9. 9 厦門商密学校跡に 東本願寺を復興
 妙釈寺で日華仏教連絡
 9. 9 日滿蒙を一丸に 新に「仏青總連盟」
 結成準備を開始
 9.10 現地○○部隊長の警告 果然、神社界
 に衝動 神職葬儀の可否を究明せよ
 神社局の行政的裁断痛望
 9.10 北支大同の華嚴寺に 日本僧宿泊禁止
 の貼札 某々從軍僧の非行遺憾視さる
 今後への戒慎資料
 9.10 留学ラマ僧の 教授課目決定
 9.11 紅卍字會と卍示
 9.11 軍の指導を受けて 皮革業者大陸に進
 出 蒙疆皮革株式会社を起す 同地方
 軍の自給自足図る
 9.11 精神国策樹立の急務 日支親善は彼我
 宗教の 連鎖により初めて全し 東亞
 仏教協和会
 9.11 映画と講演で 満蒙移民初の慰問伝道
 日蓮宗が率先敢行
 9.11 “勇まし・若武者” 仏光寺有教新法
 主と 応召前のインタビュー
 9.11 蒙疆方面民衆に 贈る「仏教使節」
 蒙・漢対照「釈尊聖伝」 遂に堂々出
 版さる
 9.11 わが黄檗、一宗を挙げ 対支方策の樹
 立 寺岡内局・慎重の構へ
 9.11 傷兵保護の 精神汲む 日宗開教使
 9.11 中支の宗教 事情視察へ 日宗の三氏
 慰問使許可
 9.11 滿支飄蕩 (六) 角野達堂
 9.11 北京発刊「新民報」を読みつつ (上)
 懐邱生
 9.11 時局と支那問題中心に 府神の異色講
 習 来る廿二日より三日間
 9.13 滿洲国における 布教進出問題につき
 (一) 常光浩然

1938. 9. 13 大東文化同志会創設 仏教を楔に対支策 先づ百万円で師範学林経営 隠元の芳躅黄檗宗に顕現
9. 13 日本宗教連盟成る 上海の戦後工作に神仏基三教の提携
9. 13 北滿は既に 朔風すさむ 前田徳水氏報告
9. 13 先づ東京に第一声 “精神報国運動” 正しき信仰で精神力養ひ東亜の建設に邁進せよ! 運動趣旨・プロ決る
9. 13 日滿支の 仏教大会 実現困難?
9. 13 現地部隊長警告の反響 神職の自肅自戒 研究が先だ 禰宜等の向上機関施設 京阪神有志神職申合せ
9. 13 祀官養成問題で “海外神社研” 協議会 十五日内務省で開催
9. 14 滿洲国布教進出につき (二) 常光浩然
9. 15 滿洲国布教進出につき (三) 常光浩然
9. 14 北京覚生高女 十七日開校式
9. 14 寝食を共にし 支那僧を教育 大派南京布教所
9. 14 支那事変 従軍画展 陸軍省後援 南海高島屋で
9. 16 滿洲国布教進出につき (四) 常光浩然
9. 16 戦座治る徐州に 早くも法輪旗翻る 祥嶽山正法禪寺
9. 16 青年支那僧 憧れの日本へ
9. 16 日宗北支の 日語学校 続々開校
9. 17 亜細亞に於ける 歐羅巴の侵略主義と支那事変の意義 (上) 印度志士 ボース、ラスビハリ
9. 17 滿洲国布教進出につき (五) 常光浩然
9. 17 部隊長初め一齊に 靈前に修証義読む 中南支の戦跡を巡って 曹洞第二陣 慰問使帰る
9. 17 半島人家族の 内地入り許可 家族制度の美風養成
9. 18 御祭神問題も 既定方針で進む 関係官庁代表会し 海外神社研今後の方針協議
9. 18 亜細亞に於ける 歐羅巴の侵略主義と支那事変の意義 (下) 印度志士 ボース、ラスビハリ
9. 18 滿支飄蕩 (七) 角野達堂
9. 18 仏舍利を贈献した 仏青代表排日運動を指導 錫倫代表ニツサンカ氏
9. 18 各部落に “愛護村” 軍民協力治安維持 犠牲村長を僧侶軍人が追弔 後方部隊から東本へ快報
9. 18 邦人小学校と 交換提携 山本模範学校
9. 18 濟南東本願寺文化部 日語学生三百名を社会へ 日華両語で聖句伝道に努む 児童舞蹈会で皇軍慰問
9. 18 出雲路谷中校長 北京覚生高女学監へ 後任は幸村法輪氏 きのふ正式発表
9. 18 覚生女開校式 名譽校長祝電
9. 18 北京発刊「新民報」を読みつつ (下) 懷邱生
9. 20 報国托鉢に刺激され 新站東本願寺起つ 單身托鉢行脚十四日
9. 20 東洋永遠の平和は日本の指導で 防共の堅陣確立にある 蒙古の李將軍、本紙を通じ 日本仏教界に要望を披瀝 本門法華妙蓮寺 皇軍慰問団消息
9. 20 東本の蘇州施療院 十月一日開院か 軍特務部が積極援助
9. 20 西本支那開教機関 南北の連絡成る 事変勃発以来初めて 大谷・小笠原両氏の握手
9. 20 繁昌する 軍人休憩所 婦人会の奉仕で 上海知恩院別院
9. 20 コーラン全訳成り 開教研究雑誌増加 外務省も頗る熱心
9. 20 滿蒙開拓義勇軍 府出身者激励会
9. 20 宣撫班希望 者はないか 保護觀察隊 第二次募集
9. 20 時局下若人の 大陸進出は? 天理教各学校卒業生の調査 五割の高率示す 十二、三年生
9. 21 宣撫班の任務 (上) (北支宣撫班員第三次内地募集について) 北支宣撫班教化係主任 好村春基
9. 21 戦場に祈る兵の尊い姿! 公葬をいがみ合ふ勿れ 宗教本来の姿を国策に ○○部隊胤沢社掌現地報告
9. 21 朝鮮西別院 讚仏会中心に 経国運動実施
9. 21 村上独潭氏に 従軍談を聴く 中外読者倶楽部
9. 22 宣撫班の任務 (下) (北支宣撫班員第三次内地募集について) 北支宣撫班教化係主任 好村春基
9. 22 支那仏教徒に贈る 日本仏教紹介論文集 施葉三万個も発送 日華仏教研究会
9. 22 吾が大陸国策に順応の 仏教各派協力の対支教化 「対支教化事業委員会」設置 原案成る・近く具体化へ 仏連との関係絶つ 出先軍部の意見 参酌 注目される立案の経緯 支部設置その他を協議
9. 23 妙心寺派から 中支宣撫班員派遣
9. 23 せめて神前に果物でも 英靈に捧ぐ・戦友の友情 戦地から送る神饌料!
9. 23 印度の一隅から わが大乗仏教聴く 牛津大学生失うた父が 西本翻訳課に

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 申出る
1938. 9. 23 東洋大学分校 北京に設置せん 新設
見る「大陸科」の 實際的薰陶のため
9. 23 御最新問題再燃 近く斯界の与論を纏
め 満洲国当局へ建議 建国廟
9. 24 北京発刊「新民報」を読みつつ (下)
懐邱生
9. 24 新興蒙疆民衆へ “正義日本” を鼓吹
カ教蒙疆訪問団出発
9. 24 涙流し感激語る 中外読者倶楽部の
村上従軍僧を囲む夕
9. 24 奉天西本願寺 彼岸会バザー
9. 24 西本の支那 開教講習者
9. 27 海越えて 呼び合ふ童心 女生徒も宣
撫に一役
9. 27 憲兵射殺事件直後 国境最前線虎林へ
部隊に本派・仏派出身兵 大派・徳
永開教使談
9. 27 西本願寺が 全国に指令 “宣撫班具
に 応募せよ”
9. 27 台湾仏教系唯一の 台北中学認定さる
近く維持財団組織
9. 27 印度仏僧を優待しては？
9. 28 宗教的政策からも 承德廟修繕の急
復興途上の朝鮮仏教 羽溪博士談
9. 28 蒙古青年へ 嫁ぐ大和乙女 小林義道
氏の尽力で 日蒙親善に拍車
9. 28 覚生女学校 晴の開校式
9. 28 皇軍慰問使派遣 全国私大連合会が
けふ正式に決定
9. 29 支那から見た 日本及日本人 (上)
新京 光岡慈昭
9. 29 南支方面の 人心に落着き与ふ 香港
と厦門の西本願寺
9. 29 南支窮民医療の 志村氏ら病む 一行
過半数倒る
9. 23 各省から權威を派遣 生彩放つ・収穫
を期待 申込者も二百五十名突破
“支那開教講習会” 本極り
9. 29 婦人矯風会の 三女史満支視察
9. 29 第三回汎太仏青大会 北京開催説提示
か 新支那理解のため
9. 29 日本僧の蒙古留学 新局面を展開 内
蒙要人と知恩院当局会見
9. 29 保険衛生に努め 敬神思想の普及 日
宗北・中支開教陣営に 光る・天津立
正日語学園
9. 30 明日の日本と使命への感激 佐藤彰三
9. 30 将来、宗教工作等の 専門宣撫班が必要
現在も必要だが人が無い 北支宣
撫班藤井晋氏談
9. 30 張鼓峰事件の華 忠霊追弔法要 声涙
共に降る現地報告 咸興東本願寺で執
行
9. 30 日満支青年仏徒の 防共会議開く 全
連常務理事会議案
9. 30 移民実習団の 学生報告講演
9. 30 仏光寺派が 初めて支那開教 篤信者
の特招で
9. 30 仏派満鮮 教況視察
9. 30 新支那への用意に 青年仏教学者派遣
西本願寺が北京方面へ 既に人選を
開始
9. 30 海外神社の 祀官養成問題 外人研究
員の意見注目
9. 30 ボース氏講演
9. 30 真理運動宣布に 大陸行脚の旅 友松
円諦氏プラン作成
10. 1 支那から見た 日本及日本人 (中)
新京 光岡慈昭
10. 1 注文取りして能率増進 発展する刺繍
の授工所 昼休みに仏教聖歌の練習
支那に於ける西本の活躍 藤沢実善氏
談
10. 1 銃後婦人の心意気！ 夫君応召で帰る
代表に 女人代表が万歳の嵐 満洲国
防婦人の驚き
10. 1 満洲国々々防 婦人会代表
10. 1 対支教化工作で 京都明和会態度決定
精神報告講演でも協議
10. 1 大同団結した 石家荘の各宗寺院 日
本宗教団を結成 難民救済に乗り出す
10. 1 漢口陥落近く 西本願寺待機
10. 1 特別講座も開設 駒大満洲語講座を
支那語講座と改称
10. 1 全鮮高野山 の祈願週間
10. 2 支那から見た 日本及日本人 (下)
新京 光岡慈昭
10. 2 慰問視察 北満の旅 (上) 大連 前
田徳水
10. 2 嬉々たり！日華女学生 北京覚生女学
校風景 他校から転校生が続出 本願
寺臭は一寸ご遠慮
10. 2 曹洞宗に委託の 留日支那僧愈よ来朝
一行五名、九日に入京
10. 2 前線将兵と聖典 求めては居るが 語
句の難解に閉口 ○○攻略部隊将校の
要望
10. 2 天理教支那大陸 伝道の大綱成る 直
轄教会より伝道班派遣 大天理の主力
を傾注
10. 2 現地の実情は各宗の 提携協力が焦眉
の急務 きのふ、今井理事長の力説
支那開教講習会愈よ始る
10. 2 台湾に於ける本 願寺派教線の 進展
に関して 台湾 紫水生
10. 2 満支飄蕩 (八) 角野達堂
10. 2 読書界 日華仏教研 究会年報 日本
仏教研究
10. 2 ビルマと日本 仏教の提携図る ムネ
イング氏来朝
10. 4 慰問視察 北満の旅 (中) 大連 前

一一一
一一二
一一三

- 田徳水
1938. 10. 4 植民地、外地の 教員養成問題 海外
 祀官も同機関で 外務、文部両省で研
 究進む
10. 4 “日満支青年仏教徒の 防共協議会は
 結構だ” 来年度大会は京阪で開催
 全日本仏青連常務理事会
10. 4 “海外神社研”の 拡大強化論起る
10. 4 満洲移民村に 巡回講演の旅 西田天
 香氏
10. 4 支那人相手の 布教主義を見切る 北
 京、天津に語学校建設 金光教が計画
 対支仏教文化 運動に就て 日華仏研
 幹部会
10. 5 慰問視察 北満の旅(下) 大連 前
 田徳水
10. 5 蘇州難民 救療開始 東本願寺
10. 5 日満支親善と世界 平和の促進図る
 我が国民間有識者により 世界紅卍字
 会后援
10. 5 支那の工場に 日支融和の働きかけ
 基本的仕事をせよ 安藤龍英氏談
10. 6 作戦の不利を忍び 山西文化を保護
 皇道宣布の正しい態度! 福島少尉の
 現地便り
10. 6 中秋名月の夜 日満華親善懇話会 八
 日、大阪に開く
10. 6 “天文月見の夕”に 第四次皇軍慰問
 東都仏教主義女学校 =近頃出色の
 権二つ=
10. 6 華僑の不正 ダバオの恐日 重藤亮
 氏談
10. 7 戦座(一) 小笠原義雄
10. 7 布教使や慰問 使は寄来すな 特務部
 員の進言
10. 8 外蒙二注ぐソ連の魔手 熾烈なラマ教
 への圧迫 仏像、経文は焼却され ラ
 マ僧の還俗者続出
10. 8 内蒙派遣使節 高野登山
10. 8 平壤基教親睦会 内地教会を訪問 内
 鮮教会と親善提携
10. 8 宣撫事業、大陸建設に 都市青年は劣
 る? 前回の宣撫班員募集結果に鑑み
 第三次は専ら地方青年採用
10. 8 明春訪華団派遣 更に会員有志で視察
 団組織 日華仏教研究会
10. 8 ソ満国境に 新教線開かる 西本願寺
 を開設
10. 8 覚生女学校と 難民診療院 東本願寺
 二大事業の発展を企図
10. 8 出色の出来栄え 中華文「日蓮読本」
 初版五千部刊行
10. 9 ○○艦に御遷座の 漢口神社御祭神
 陥落と同時に更めて鎮斎 歴史的入城
 の祭典執行
10. 9 満支飄蕩(九) 角野達堂
10. 9 支那文化の王座 四庫全書の再刊 廿
 二年間、予算二百万円で
10. 11 民族的にも教徒的にも 画期的重大会
 議? 日下埃及カイロで開催中の 回
 教民族大会(アラビヤ連合大会)
10. 11 アラビヤ語版「日本」誌の反響
 “これこそ歪められざる 躍進日本の
 真姿”と好評
10. 11 “明日に語る” 印度有志も加り 日
 満華親善懇話会盛況
10. 11 留日支那僧 元気で入京
10. 12 日支要人と会見 北京より啓上 安藤
 正純
10. 12 対満鮮支開教方針確立で 大派が調査
 視察員派遣 鈴木会計部長、関山教学
 課長 けふ突如、現地に出発
10. 12 正義日本の立場闡明 世界的反響のヤ
 ング・イースト
 ヒンズー教徒の印度人 宗教に関する
 質問提出 “精神日本”の重点を衝く
 国際仏教教会の答案注目
10. 12 英印の仏教誌 日本攻撃を中止 第三
 者の容喙を戒む
10. 13 日支要人と会見 北京より啓上 安藤
 正純
10. 13 東方文化連盟 サハイ氏に聴く
10. 13 更に北アメリカで デマ粉碎の大任
 日満支の任務終へ 三上弘之氏婦米
10. 13 信用できぬ支那社会に 信用できる唯
 一の団体 維持会員の半以上占めて活
 躍 彼等と心から提携せよ 紅卍字会
10. 13 支那難民救済の 志村氏ら一旦帰朝
 第二診療班の組織
10. 13 西田天香氏 今朝満洲へ 二ヶ月の予
 定
10. 13 満支研究報告 羽溪、小笠原両氏
10. 14 戦座(二) 小笠原義雄
10. 14 暴風に破壊された 香港仏租界金光教
 会所 本部、仏国に損害賠償請求
10. 14 政治的仲介分離 東亜伝道会は協力
 日基大会の重要問題
10. 14 現地の慰問使が 従軍僧となる 懇望
 された「葉隠仏青」代表
10. 14 日華仏研の 日華仏教事情 月刊誌刊
 行
10. 15 戦座(三) 小笠原義雄
10. 15 “漢口陥落を控へ 愈よ奉公の赤誠披
 瀝” 南豊山派管長一宗に訓示
10. 15 忠魂・殉教の三兄弟の 誓の寺に同情
 集る 大派有志の弔慰運動
10. 15 “教家一統”の 感謝の誠意披瀝 宣
 撫聖業激励の会 宗教問題研主催
10. 15 “日本仏教徒の 一段の奮起望む”
 松井大将を中心に 仏連主催の懇談会
10. 15 喇嘛教は 自給自足が必要 道路を開
 拓して歓迎 山崎義晴氏視察談

1938. 10. 15 安藤正純氏あす帰京
 10. 15 山東模範学院 父兄会の決議
 10. 16 戦塵(四) 小笠原義雄
 10. 16 ミナト神戸に 印度教寺院創る ポース氏の提唱で
 10. 16 漢口陥落目指す 皇軍慰問袋一万個 日宗臨時国義会で募集
 10. 16 日宗東京の 漢口陥落祈禱 日時変更
 10. 16 我愛読者のスピーチを綴る頁 支那を弱めるために 仏教を入れたといふ書 谷本富博士の獅子吼
 10. 16 滿支飄蕩(十) 角野達堂
 10. 16 滿ノ国境へ 三角貫思
 10. 19 北支見聞記 龍大講師 小笠原宣秀 一、北京
 10. 20 蒙疆三政権の来訪で 徳王にメッセージ 留学ラマ僧が贈る
 10. 20 全滿一斉に開始した 銃後強調運動週間 滿鮮囚人に対しても 天児氏等喚びかく
 10. 20 滿洲赤十字社に 総括される社事 成績あげる紅卍字会 牧野同志社総長談
 10. 21 北支見聞記 龍大講師 小笠原宣秀 二、保定
 10. 21 北支から滿洲へ 蒙疆より啓上(上) 安藤正純
 10. 21 来朝した徳王へ 歓迎文と記念品 日本の仏教徒から贈る
 10. 21 サハイ氏放送
 10. 21 対支開教の現状と 今後の企画調査 勸告的意見を発表 各宗派に説明回答 依頼 松井大將
 10. 21 安藤正純氏の 支那視察談
 10. 21 大谷照乘連枝 北支に活動
 10. 22 北支から滿洲へ 蒙疆より啓上(中) 安藤正純
 10. 22 北支見聞記 龍大講師 小笠原宣秀 三、張家口
 10. 22 支那事変と 印度問題を語る 中外読者倶楽部の夜 サハイ氏の熱弁
 10. 22 神宮大麻を 支那へ頒布 北京に神部署 嘱託を置く
 10. 23 北支から滿洲へ 蒙疆より啓上(下) 安藤正純
 10. 23 戦塵(五) 小笠原義雄
 10. 23 宣撫事業を語る 林田宣撫班長輔佐官 成績良き宗教家出身 転向者は断然 優秀 寒心の至り・内地の国民教育 従事者の意気地なし! 中、南支の成績は 北支より悪い 後藤朝太郎氏の観察
 10. 23 滿洲○病院に 本尊を下附 西本願寺から
 10. 23 パラオ寺創建 十二月入仏式 西山深草派の 南洋教線拡張
 10. 23 支那兒童に 贈る玩具と絵本 淨宗各種兒童教化 機関を動員して
 10. 23 広東陥落奉告祭 府下全神社で執行
 10. 23 大派台北別院 改革を要望
 10. 25 滿洲国に於ける 宗教政策の現段階(上) 新京 光岡慈昭
 10. 25 北支から滿洲へ 熱河より啓上 安藤正純
 10. 25 北支見聞記 龍大講師 小笠原宣秀 四、大同
 10. 25 支那人を侮辱する 文句を一切厳禁 子供の雑誌を統制
 10. 25 中山天理管長の 皇軍慰問行内定す 目下、当局と交渉中
 10. 25 有終の美納め 対支講習終る 感謝決議と国防献金
 10. 25 安藤正純氏 歓迎会 非常な盛況
 10. 25 軍属その他 大陸に進出 京都YMの 支那語科
 10. 25 対支院の創設控へ 支那に於る神社問題で 神社局が意見書提出
 10. 25 曹洞宗会 広東陥落の報に 祝杯を挙ぐ 皇軍將兵に感謝の決議 今井総務の施政演説 一第二日一 曹洞宗会に於る 今井総務の演説
 10. 25 一層の躍進へ 滿洲開教を約す 西本全滿主任会議
 10. 25 馬田日宗管代 滿洲から北支へ 国精総動員運動の 講習会に獅子吼
 10. 26 滿洲枢要都視察 哈爾濱より啓上(上) 安藤正純
 10. 26 滿洲国に於ける 宗教政策の現段階(下) 新京 光岡慈昭
 10. 26 北支見聞記 龍大講師 小笠原宣秀 五、承德、其他
 10. 26 対支工作や「釈迦」問題協議 徳王に歓迎文と香炉贈る 仏連本部理事会
 10. 27 滿洲枢要都視察 哈爾濱より啓上(下) 安藤正純
 10. 27 祝漢口陥落 一億赤子の 参拝に沸く 社頭 公表待ち全国神社で 漢口陥落奉告祭
 10. 27 慶尚北道から 内地仏教視察団 崔氏を団長に一行十名入洛
 10. 27 勇士の家を開設 貧童教育に着手 淨宗石家荘出張所
 10. 27 妙心北支開教 中間報告会
 10. 27 基督教者の大陸に 対する使命を主題 基督教同関西地方総会
 10. 27 馬田日宗管代 北支に活躍
 10. 27 半島各地の 教化巡講 友松円諦氏
 10. 28 漢口陥つ!
 10. 28 北鮮と玄海灘とより 汽車と汽船との 中より啓上 安藤正純
 10. 28 「言霊」の力を和し 東洋平和の悪魔 蒋介石を追払へ 大連聖徳太子堂の 祈願祭

1938. 10. 28 龍大で支那 時文講習
 10. 29 北鮮と玄海灘とより 汽車と汽船との
 中より啓上 安藤正純
 10. 29 武漢陥落の公報に 沸る歓喜の垣塙
 祝電に法要に万歳の風 長期建設の決
 意固し
 新支那建設 陣に備へよ 訓告を發
 す
 10. 29 満洲建国廟御祭神問題 与論反映、大
 詰へ「海外神社研」も対策協議
 10. 29 明朗北支のトップ 保定神社創建成る
 神職ら神璽奉戴して帰る 明治節に
 奉告祭
 10. 29 各層を対象に 文化工作の新展開 北・
 中支に亘つて 藤井静宣氏抱負を実現
 10. 30 文学部隊の一員として 一海軍従軍の
 感想一 吉川英治
 10. 30 宗教学大会発表 朝鮮に於ける引 路
 王菩薩に就て 金孝敬
 10. 30 徳王知恩院を訪ふ 一山歡迎準備に着
 手 日蒙親善に拍車
 10. 30 武漢陥落に 世紀の歎び
 10. 30 思想転向者が 蒙疆政府教育局へ 受
 刑一復学者の嚆矢 京大の鷲谷氏就任
 10. 30 全支教線 巡視終る
 10. 30 神宮大麻奉斎と 日本文化の宣布 北
 京「国風会」結成 北京神社創建具体
 化
 10. 30 戦塵(六) 小笠原義雄
 10. 30 武漢陥落と其後につき 教派神道教師
 に覚悟促す 興味ある吉野少将の講演
 10. 30 本島人代表に 白衣白袴の禊講習 一
 郡一社主義で町村に末社 台湾の皇民
 化運動
 10. 30 台湾本島人 参宮団 台北仏教会主催
 国際仏教躍進へ 幾多の收穫 皇軍戦
 線視察で 感謝されたブッシュ氏
 10. 30 約五十日の予定で 北中南支皇軍慰問
 中山天理管長来月出発
 11. 1 先づ与へよ 一支那開教の三原則一
 曹洞宗北支布 教総監部主任 花井嶺
 松
 11. 1 中支唯一の民間治療機関 大派の蘇州
 難民診療院 軍特務部第四班として活
 躍 更に第五、第六班開設せん
 診療班長は 古森博士 九医外科部
 長
 11. 1 喇嘛教問題で 重要会談を 華頂衆宝
 や記念品贈る 徳王迎ふ知恩院
 徳王一行と 西本願寺
 11. 1 漢口陥落祝祈 の採灯大護摩 浅草の
 会が
 11. 1 蒙古開教に ついて懇談 日宗当局
 11. 1 台北州仏教会の 神宮参拝団 きのふ
 入洛、本社参観
 11. 1 妙心開教方針進歩 北中支両総鑑初顔
 合で 古川氏直に北支へ
 11. 1 東福寺でも 開教方策 北中支に
 11. 1 「龍谷支那語 講習所」開設 釜山西
 別院
 11. 2 葉 武漢陥落後 宣撫に愈よ必要 西
 本久々で大量送る
 11. 2 徳王との会見を機に 外地布教の転換
 日宗、蒙疆地方に専念
 11. 2 天津神社 大造營
 11. 2 馬田日宗管代
 11. 3 “日蒙親善の歌” 静岡、田中清純氏
 から 徳王一行に贈る
 11. 3 徳王に歓迎 文を手交 真言宗五派
 11. 3 実社会に接触なき 中国僧の一大転向
 東亜の新体制に即応 日華仏連結成
 へ 南京仏連
 11. 3 台湾本島人 参宮団帰台 けふ京都発
 臨濟宗で台湾 臨濟僧招待会
 11. 3 南京の素描 軍人・苦力・自動車の氾
 濫 鷄明寺に二空氏を訪ふ 安藤慶爾
 氏手記
 11. 5 徳王の訓示に 感激のラマ僧 “国に
 役立つ人になれ” 知恩院のひと時
 国と共に生く 喇嘛教を望む
 徳王奈良へ
 宿舎で欲談 西本願寺が 記念品贈
 る
 信楽鞍馬貫首 徳王らと交歓
 11. 5 日光殿完成 西岡氏発願 の満洲靈廟
 近く身延の釈迦像安置
 11. 5 武漢並に広東方面へ 大谷瑩潤連枝法
 主代理を派遣 長期建設への新使命!
 東本願寺を現地に建設
 11. 5 転向者の大陸進出 組織的に陣容整備
 司法省も北支に工作始む
 11. 5 蒙古と南支に 西本願寺開設
 11. 6 満支飄蕩(11) 角野達堂
 11. 6 精神作興週間に 大陸経営講演会 大
 阪府市共同主催 長期建設
 11. 6 武漢の地に 聖徳太子神宮を創立せよ
 高橋常雄
 11. 8 蒙疆の各地で 有為の人材切望 “開
 教使を送れ”と 馬田日宗管代現地で
 活躍
 11. 8 移民地の殉教精神 北支のハリキリに
 感動 東本願寺代表帰る
 11. 8 大陸の宗教経営が 立案の第一目標
 回教等にも新しく適用 緊急提出の理
 山 宗団法
 11. 9 中山天理管長 皇軍現地慰問 一週間
 延期
 11. 9 今事変勃発以来 初の大合同樹靈祭
 各宗従軍僧総出動 北京宮城内で執行
 11. 9 大遣骨奉安殿 北京西本願寺内に 愈
 よ建設着工中
 11. 9 大谷瑩潤連枝 十三、四日頃現地へ

- 南支開教監督部 近く開設の運び
1938. 11. 9 湯浅博士の 支那観の批判検討 世界
 基教大会へ出発控へ 京都YM支那研
 究会
11. 9 戦火に焼失の漢口神社 再建と御鎮齊
 期す 神職東上、関係者と協議
11. 9 東本両代表の 開教地視察談
11. 10 “対支宣撫工作に 基教を採用せよ”
 京都YMCAの末包総主事 特務機
 関長に献策
11. 10 東洋的な新しき 基教を樹立せん 末
 包総主事談
11. 10 印度世界大会に 基教芸術も参加 音
 楽は全代表が合唱
11. 11 長期建設に備ふ 新支那の思想社事基
 本調査 西本の北畠氏急派
11. 11 包頭の西北に 日持上人の遺跡? 滿
 蒙開教に努力の 日宗に投げる興味
11. 11 サイパン島の 娘が神前に献花 青柳
 氏の教化実結ぶ 日本人への憧れ
11. 11 半島の不良少年専門 修養道場を建設
 教護事業に新機軸
11. 11 東亜仏教 協和会
11. 11 台湾本島人が 深草派に僧籍編入 既
 に三十名に及ぶ
11. 11 北京に於ける 内地仏教社事 西本財
 団経営か
11. 12 神武天皇尊像を安置し 張滿洲法相が
 神社創建 檀原神宮の神札も奉受
11. 12 北支戦線の 合同慰霊祭 盛大に挙行
11. 12 浄宗北京別院 日華学校愈々開校 幼
 稚園は明春から
11. 12 愈々看板上る 妙心寺北京別院 藤井
 草宣氏が保証人
11. 13 新支那建設の責に 宗教運動の振興を
 内ヶ崎次官の熱望
11. 13 機会と自由あらば 日本訪問を考慮
 ボース氏の勧誘に タゴール翁の返事
11. 13 仏教徒として 是非是正せよ 台湾代
 表仏連を歴訪 太子十七憲法問題
11. 13 亜細亜の新秩序建設に 新に東亜開教
 局を設置 宗我を一掃して国策線へ
 台宗海外対策に大飛躍
 広く人材 をもとむ
11. 15 本堂は焼失 会館庫裏大破 漢口西本
 願寺の 被害初めて判明
11. 15 蒙疆の新文化建設に 教化指導部隊派
 遣 宗教界関係者も参加
11. 16 王一堂氏逝く
 日本理解の 惜しい人 足利浄円氏
 談
 支那第一の 仏教徒 徳富蘇峰翁談
 蒋介石も心服 藤井静宣氏談
11. 16 厦門・香港・広東から 漢口慰問慰霊
 の旅 大谷瑩潤氏らけふ出発
11. 16 滿支の布教方策 智山派視察情勢を聴
 く
11. 17 信徒十万を有する 念仏者・呉佩孚氏
 元老級愛国の士を糾合し 抗日陣營
 に反省促す
11. 17 戦火にさすらふ 支那の孤児を養ふ
 大阪の社会事業団体 結束して起つ
11. 17 大谷瑩潤氏 昨日出発
11. 17 蘇州では各宗合同事業 一宗派単独行
 動は認めぬ 浄土、日蓮、本派団結
11. 17 宗教と神社問題 大陸政策等 宗調特
 別委員会の内容
11. 17 西本新京別院 光岡輪番辞任
11. 17 名称を改め 軍属祭官設置へ邁進 海
 外神社問題研究会
11. 17 東亜の平和に 心的基礎を確立 南京
 日華仏教連合会 規約決定愈々実働へ
11. 18 感激の遺灰で 皇軍大納骨堂 北京西
 本願寺に竣工迫る
11. 18 全滿鮮人農村に 神社奉斎の熱望 祭
 神祭祀様式打合せに 拓政省尹少佐来
 朝
11. 18 北支豊台の 西本入仏式
11. 18 日本仏教の大陸 進出に貢献 馬田日
 宗管代の 蒙疆北支視察談
11. 18 半島人の犯罪少年 九割以上が飲酒、
 喫煙癖 禁酒同盟、当局へ陳情
11. 19 “東亜共同体制” 確立へ 我が外交官
 制度の 悪弊を除去せよ 通訳付き外
 交官などに政治の 動きや民衆の気持
 ちは解らぬ 対支那人教育問題
11. 19 滿洲国の宗教対策は? 近く滿洲人仏
 連結成されん 各宗本山の再認識要望
11. 19 小早川秋声画伯 三たび従軍 彩管報
 国へ
11. 19 ペン光る 支那事変と印度人
11. 20 私の眼に映じた南京僧侶 知恩院南京
 別院 織田教雄
11. 20 揚子江沿岸地区の 多数カ教信者宣撫
 仏教徒の手に委ねてよいか カ教徒
 の進出要望 新東亜の建設
11. 20 国都新京の偉観 大派滿洲別院竣工
 近く仮移転して 報恩講を厳修
11. 20 雲崗石仏の写真展 足場を組んで苦心
 の撮影 東方文化研の学術講演
11. 22 新支那建設に 我れ等も参画! 中文
 の神仏基三教が進んで 大同連盟を結
 成
11. 22 開山聖人前に 東亜永遠の和平強調
 滿洲国青年将校と 西本青年僧懇談
11. 22 台北で大追悼会 台湾別院参拝と傷病
 兵慰問 東本法主代理大谷連枝
11. 23 綏遠に観る東、西 回教圏の接点
 だが北支、蒙時の教徒は沈滞 小林元
 氏調査収獲
11. 23 小頼な! 宋美齡 宗教誌通じ日本の立
 場誹謗 我宗教団体よ起て

1938. 11. 23 敵兵の埋葬弔慰 上海仏教団で実施
 仏連の対支宣撫工作
11. 23 興亜の精神の下に 宗派的劣悪根情を
 排除 中支宗教大同連盟 小笠原委員
 長談
11. 23 大陸の宗教的経営は 結局実力あるも
 の 伝へらるる現地某方面の意向 宣
 撫工作の仕事は大きく
11. 23 安藤正純氏の 満支視察談 あす東本
 で
11. 25 中支宗教大同連盟結成と 仏徒の認識
 是正を聴く 予決算何れも無修正可決
 仏連第廿九回評議員会
11. 26 支那の愛国 の士に与ふ
11. 26 新東亜建設の文化工作 儒教・仏教の
 精神に依れ 現地の教権争奪を止めよ
 安藤氏各宗は管長に提唱
11. 26 大派ダバオ問題解決 今井香巖氏に再
 任命 信徒代表上原氏婦比
11. 26 大谷連枝 広東入り
11. 26 現地軍当局は何故 仏教の進出を望む
 か 支那民衆をキャッチした 基督教
 の社事教育機関
11. 27 文化工作上の一問題 蘆谷蘆村
11. 27 台湾に於ける 皇民化について 紫水
 生
11. 27 済南知恩院別院 入仏慶讃会
11. 27 新東亜の文化建設へ 洋大が傍系の研
 究機関設立「学志会」「東洋学会」等
 を綜合 年内にも具体化か？
11. 27 各宗派とも横に連絡 開教使の旅費補
 助 保険掛金等も負担 台宗海外開教
 協会
11. 27 文教的に観た 北支と蒙疆 支那民衆
 の包擁性に学べ 馬田行啓氏語る
11. 29 国策の線に沿ひ 回教の研究 外務省
 後援で埃及へ留学 浄宗の後藤信巖氏
 大派大谷法主代理 愈よ南支前線へ
 空路、暗れの広東入り
11. 29 支那視察団組織さる 日華仏研総会
11. 29 支那民衆の福利増進に 民間有力別動
 隊 中日両国の各種団体を包含 “中
 国福民協会” 結成
11. 29 内外相呼応して 新支那建設の大業へ
 結成近き日本宗連 昨、三教委員協
 議
11. 29 連絡機関を 東京に設置せん 中支宗
 教大同連盟 内地への働きかけ
11. 29 初の“国際成道会” 在留外人に対し
 釈尊成覚の意義高調
11. 30 東亜再建と 人格の活動
11. 30 北支民衆救済に 仏教利生会誕生 本
 格的楽土建設へ 意気高らかに燃ゆ
11. 30 日宗も広東へ 慰問使派遣
11. 30 蒙疆厚和方 面の開拓へ 開教使任命
11. 30 蘇州仏教各派の 統制案成る 日華仏
 教団の結成要望
11. 30 老軀を提げて 寺本氏愈よ渡満 ラマ
 教改普指導に活躍
11. 30 台湾の皇民化運動語る 江藤激英氏
11. 30 智山派の 満支開教
11. 30 青年外交協会に 民族研究を進言 外
 交方針の前提に
11. 30 新支那の指導 精神を聴く
12. 1 開教陣を 刷新か 大派教学部
12. 1 外人の目に映じた 尊き宗教工作の偉
 業 河田軍属僧の宣撫が縁で ハミル
 トン氏ら日宗研究 “再建支那” の
 精神的如実相
12. 1 北京の一灯縁 平和工作に本腰か 天
 香氏の帰洛は中旬
12. 1 中支大同連 盟協議会 けふ仏連で
12. 1 皇民化の一翼に 寺廟の連絡鳴る 浄
 宗台湾開教区 更に具体的進出
12. 1 石家荘に 禅苑開く 慈雲山観音寺
12. 2 新東亜の創建 学徒の使命遂行 第一
 線に働く人材養成に「大陸研究会」
 結成
12. 2 慶大有志が「雄飛会」 近く結成
12. 2 敗残兵の放火で 大谷連枝等活躍す
 戦傷の某将軍見舞ふ、大派法主代理慰
 問現地報告
12. 3 統制案により 事業計画成る 江蘇仏
 教連合会
12. 3 対支宗教工作で 神仏基三教の打合せ
 八日、文部省で開催
12. 3 満洲建国大学 副総長に就任 作田莊
 一博士
12. 4 石家荘の知恩学園設立まで(上) 浄
 土宗北支教監 柴田玄鳳
12. 4 「征きて死なば」 伊藤榮蔵
12. 4 新疆回教徒 各地に蜂起
12. 4 中支に於ける宗教政策方針 現地から
 軍務局へ通達 移牒受けた文部では来
 る八日 三教会議開く
 中支大同連 盟の結成に 仏教側挙つ
 て 参加協力
 三教代表者 会議を前に 仏教側打
 合
12. 6 大陸研究会 の結成
12. 6 中学を廃止しても 宣撫事業の徹底へ
 一頓挫は当局の制限の為 妙心宗会一
 第三日一
 対支問題に対し 臨濟宗各派をリー
 ドするか 第四日(五日)
12. 7 東寧県知事等の要望 国境に僧侶送れ!
 時局と朝鮮婦人の至誠 吉田黄雲氏
 の慰問談
12. 7 これこそ天下一品 兵隊さんたちが
 湖州に日校開く
12. 7 仇に報ゆるの恩 残唐の跡通州に一灯
 園が 無怨堂と半勞半学の塾建設

1938. 12. 7 広東中心に南支へ 高田台湾総監を派遣 曹洞宗が支那仏教徒との 精神的交流を計る
12. 7 支那僧も加へ 禪の長期講習
12. 7 徐州東本願寺 入仏式旺ん
12. 7 奉天仏青
12. 7 西本満洲開教陣 全面的に異動
12. 7 興亜長期建設に 対応する根本布教方針 西本布教調査会決る
12. 7 泥だらけになって 自ら示す“皇道”精神 北支にひたむきの活躍 目覚し・転向者の宣撫
12. 7 東洋大学校友 満洲支部結成
12. 8 仏徒よ須らく 大陸社会事業 に進出せよ (上) 川上賢叟
12. 8 悪化の一路を辿る 暹羅の対日感情 日本仏徒の対暹再認識要す 親日否定の暹羅外務省
12. 8 東本満洲別院 仮入仏式 引続き報恩講
12. 8 黄檗各派合同の 支那開教機関設置 噴願書を各派へ
12. 8 防共の外郭 回教国の実情を聴く 東方文化連七周年総会
12. 9 新興満支に仏教各宗は 何を為す可きか (上) 金孝敬
12. 9 仏徒よ須らく 大陸社会事業 に進出せよ (下) 川上賢叟
12. 9 大同に描く親善風景 支那語で民衆に説く 正信偈の連続講義 東本の服部信道開教使
12. 9 64歳の小林氏 一家挙り大陸移住 開教戦線に意気壮! きのみ、長崎出帆
12. 9 寺本婉雅氏 今朝社図へ
12. 9 守備隊将兵へ 西本雑誌慰問
12. 9 醍醐派満洲別院 大連櫻花台に新建 遷仏会執行さる
12. 9 長期建設に対応 組合教会の計画変更 北支三教会と恤兵慰問 可急的に二万円募集
12. 9 北支三教会の現状 人的資源の確保により 一路、復興の途へ
12. 9 厚和に浄宗 出張所新設
12. 9 東亜の現実知るには 一層朝鮮を認識せよ 内鮮仏教の連絡が必要 半島の青年僧は語る
12. 9 中支宗教大道連盟に 教派神道挙って参加 現地代表に天理教 上海伝道庁長就任
12. 10 新興満支に仏教各宗は 何を為す可きか (中) 金孝敬
12. 10 郡下の寺廟閉鎖 一布教所に統一 浄宗台湾開教区が管理
12. 10 南京陥落 一周年記念 法要や講演 京都妙満寺
12. 10 東亜共同体建設の国策に添ひ 中支の宗教工作に邁進せよ 文部省の三教代表者協議会
- 欧米依存の宗教は 日本の宗教へ是正
- 支那民衆の教化 宣撫を第一義に 中支宗教大同盟
12. 10 京都YMCA 支那語講習会
12. 10 中国の青年インテリと 東亜共同体で意見交換
12. 11 石家荘の知恩学園設立まで (下) 浄土宗北支教監 柴田玄風
12. 11 迫るXマスに 蒙疆のお友達へ贈り物 カ教婦人東亜親善会
12. 11 陣容を一新 済南知恩院の 山東共生院
12. 11 中南支に要望 基督教伝道者 宣撫を第一、伝道第二
12. 11 厦門に日語講習所 天理児玉氏の努力
12. 11 開教陣営の強化 布哇監督に興地葆晃氏 上海主事に稲浦氏任用 大派の開教人事
12. 11 “中支宗連”中心に 各宗派代表の協議 近く現地委員ら決定
12. 11 広東より 西本願寺従軍僧 財部哲心
12. 13 中支宗教工作 と代表者会議
12. 13 新興満支に仏教各宗は 何を為す可きか (下) 金孝敬
12. 13 現地軍特務部将校、宣撫班長ら と在京三教関係者の作戦評議
- 支那の心が欲しい 大陸の文化工作に一教団 予算の半分位費せ
12. 13 遭難を気遣はれた 古林寺の仁性法師 中日仏教連盟組織に奔走 南京西本願寺も協力
12. 13 小早川秋声 画伯蒙疆へ
12. 13 半島同胞が 遺家族の稲刈奉仕 例月研究会も開催 石原宣隆氏の努力
12. 13 満洲奥地移民の 科学的体質調査へ 京大正路教授ら渡満
12. 14 中国人インテリの 語る事変の将来 今事変はアジアの内乱
12. 14 難民救済に 美しい国際風景 印度人の施米を 上海西本願寺で配給
12. 14 朝鮮咸興仏教各宗が 支那民衆宣撫資金托鉢 新東亜建設に新運動
12. 14 宣撫工作で宗教界へ 積極的に働きかけた
- 軍が作ったエポック 内地の宗教界はこの事実を知れ 小笠原中支宗教連盟委員長談
- 支那仏教を活せ 日本仏教進出せよ 中支宗教大同連盟の 仏教側企画草案成る
12. 14 宗団の連盟結成と共に 中支社事団体連盟を組織 菅野中佐、社事家代表と懇談

1938. 12. 14 整備拡充の 日宗支那開教陣 北支方面は教会所予定地の 全部に主任開教使配置完了
12. 15 “支那の心が 欲しい”
12. 15 “大陸認識の布教使や 国体主義を開頭せよ” 西本願寺の時局対応 布教調査会の答申
12. 15 新東亜創建に参画 紅卍字会講演会成る
12. 15 当局との諒解成り 北京へ孤児を引とりに 来春、在阪社事団渡支
12. 15 漢口神社御神体の還御 組立社殿を携行して 米光神職近く帰任
12. 15 増田卍山氏 満洲布教に
12. 16 印度最近の対日動向 ポース・ラスビハリ
12. 16 北京神社創建具体化 居留民会長小菅博士上京 関係諸権威と意見の交換 来春より着工
12. 16 まづ、僧一千人を送って 軍隊式訓練を実施せよ 日華仏教研究会改組問題で 大西良慶氏、林幹事長と会見
12. 17 印度最近の対日動向 ポース・ラスビハリ
12. 17 晋北大同に 博物館を開設 蒙疆文化を蒐集
12. 17 御供米奇進 奉告祭 大連聖徳太子殿
12. 17 日華仏研会長を 大西良慶氏受諾 一月十四日役員会招集 今後の新方針懇談
12. 17 先づ大陸に進出 非常時下の宗門 華園興正派総務の演説
12. 18 日華仏教研究 研究会に与ふ
12. 18 印度最近の対日動向 ポース・ラスビハリ
12. 18 支那に活路を拓かん とする宗教界に与ふ 医学博士 駒井一雄
12. 18 現地で南殿下に拝謁 御慰問品を献上 漢口で慰霊祭厳修 東本大谷連枝の中支慰問
12. 18 大連明照寺 印度式偉容成る 吉武浄宗監督の努力
12. 18 満人教化を根本的に 北京では支那人の医者や看護婦使用 前田西本満洲開教総長談
12. 20 印度最近の対日動向 ポース・ラスビハリ
12. 20 仏教徒の本格的 新東亜建設参加 文部省が仏連と協議
12. 20 事変最初の 陸軍省囑託 従軍歌人出発
12. 20 聖壇に礼拝中心物 納骨棚も設備する 洛陽基教会の改造
12. 20 大陸の神社問題 海外神社協会から 興亜院へ意見書提案
12. 21 東亜を結ぶ 動議的紐帯
12. 21 上海英字誌は伝ふ 変転する国際政局を外に 昂る各外人の東洋研究熱 支那再建へ 文化面の動き澆涸
12. 21 “音楽隊長”が陣中 題目と念仏の優劣論 桑木部隊日宗従軍僧便り
12. 21 保衛団を指揮して 匪団撃退一番乗り 田中宣撫班員(大派)の勇戦
12. 21 満洲国の神社制度 確立期し調査会設置 明年度から外務省東亜局に
12. 21 草摺古義総務 ラマとの提携で渡支 上局会は来春に延期
12. 21 満洲移民の 諸問題を協議 日本社事研究会
12. 21 日本基督者が贈る「誠」 衰れな在留支那人を慰む スラムに咲く国際佳話
12. 22 北支の日支仏教提携 政治的重要性持つ 北京に「世界仏教連合会」 文部仏教代表協議会出決る
12. 22 対支問題は総て 仏連中心に進む 曹洞宗態度を闡明
12. 22 奉天市長 鄭禹 けふ退洛
12. 22 国策の一 満洲移民慰問 前田徳水氏進策
12. 22 小、中学校の 日語教授には 南京仏教団 があたる
12. 22 天親・曇鸞を説き “真宗的”に説明 支那民衆相手に仏教会 大派・加藤豊正氏が開教
12. 23 支那孤児は 悲田院に収容 財団邦人組織で養育 余すは外務省との交渉のみ
12. 24 病床に結ぶ日満親善 旧誼に篤き鄭禹氏帰国の途 涙骨社主を訪ふ 父“領事”を 有馬に偲び 今日別府へ 娘を日本の家庭で 薫育して欲しい 本当の日満親善に 仲並夫人の希望
12. 24 内鮮一体の発祥地に 官幣大社扶餘神社創建 南朝鮮総督の提唱で 明年度より着手
12. 24 全印ヒンズー教徒 第20回年次大会 二十六日から三日間開催 その成果期待される
12. 24 暹羅は依然 親日的 浅野研真氏談
12. 24 渡支視察者の 御相談に乗ります 北京に華北事情案内所
12. 24 日華仏教研究会の 新職員決定す 幹事長は林彦明氏
12. 24 明春渡支 皇軍慰問 山神融念管長
12. 25 民族生活と宗教生活(上)(支那視察の旅から帰って) 関口野喬薇
12. 25 具体的実働議す 世界紅卍字会講演 けふ、初の理事会
12. 25 支那僧、俗の 帰順や宗教的宣撫 バイアス湾上陸軍参加の 和治正夫氏談
12. 25 龍大義勇軍 きのふ結成 内原訓練所

- で受訓
1938. 12. 27 南京特信(上) 事変下の蘇州・南京に支那僧の消息を探る 藤井草宣
12. 27 民族生活と宗教生活(下) (支那視察の旅から帰って) 関口野薔薇
12. 27 戦線の思想問題 調査の旅から飄然帰る 西本願寺の北島教真氏談
12. 27 大谷登潤連枝 今朝帰山決定
12. 27 谷天祥氏 或は生存か 太原東本願寺井上従軍僧談
12. 27 印度教と仏教の提携で 人類救済に慕進を期す 全印ヒンズー教徒年次大会に 吾が国際仏教協会の祝電
12. 27 印度の対日情勢 反共親日のヒンズー教徒と 提携促進の必要
12. 27 北支那宣撫に 気を吐く 西本願寺が支那人小学校
12. 27 一路広東へ 日宗の南支 皇軍慰問
12. 27 天津、青島、上海に 医療機関設置決る 金光が支那向教師養成
12. 28 南京特信(下) 事変下の蘇州・南京に支那僧の消息を探る 藤井草宣
12. 28 中華民国は二分され 末永く戦ふであらう 西部へ渡る支那インテリ
12. 28 厦門の支那僧も 肉食妻帯を實踐 有力者に帰敬式を行ふ
12. 28 新東亜 軍と仏教徒一致協力 創設の大業翼賛 町尻軍務局長と仏教各派代表の懇談会とか
軍務当局への要望
皇国仏教の 使命に活動を期待 町尻軍務局長挨拶
1939. 1. 1 東洋の道徳を維持せば 反共の目的は達成 顔回に擬せられた涙骨社主 王首席参議等本社訪問
王氏ら筆を執り『知行合一』と王陽明の語を記す
1. 1 光暢法主 と会見 東本願寺訪問
1. 1 大陸仏教工作 文学博士 常磐大定
1. 5 紅卍字講演会 規約(案)成る
1. 5 我仏教との提携を前に 臨時政府肝煎で仏教同願会 支那仏教の大道団結成る
1. 6 蒙疆に新年を迎えて 晋北大同武廟 知恩院大同別院主任 井上隆森
1. 6 絵本や玩具と共に 文房具も贈る 臨時政府弁事処も後援 浄宗児童協会動く
1. 6 支那大陸に於る 仏教各派のルート 断然多い東本願寺 日華仏教研の調査
1. 6 満洲の分村移民 聖戦の後追って行く 日本人に「誠」の必要 西田天香氏の帰来談
1. 6 西山深草派の 台湾開教進出
1. 6 南洋の開教語る 帰朝した日宗深沢氏
1. 7 日支一体の基礎は何か? (世界紅卍字会を正しく理解せよ) 山口和光
1. 7 大社教を通じて 日支の信仰的握手 劉氏、千家管長へ手紙 上海・大社の輝く親善ルート
1. 7 秋声画伯の彩管が 熱河幼稚園を生む 登坂主任との名コンビで 東本願寺に園舎新築
1. 7 皇民化で 法式改善 妙心の台湾開教
1. 7 古川老師を訪ねて 仏教治國を語る 王臨時政府内政部総長
1. 7 日華仏教研 役員協議会
1. 7 日蒙仏教研研究会 張家口高野山の 飯野俊宣氏が設立
1. 8 新東亜の建設と 日本仏教徒の役割(上) 馬田行啓
1. 8 大連に關東 保護觀察所 転向者の大陸 進出に応じ
1. 8 抗日意識の深い 支那YMCA対策 長期の努力で彼等を指導 末包敏夫氏談
1. 8 本年度の大事業に 先づ臨潢滿支開教本部を 合議所機構改革の第一
1. 8 ニヶ所の連 絡寺廟成る 浄土宗台湾 竹東教会所
1. 8 満洲道教の話 道教の三名山 五十嵐賢隆
1. 8 回教漫筆 於白厚秘市 小村不二男
1. 8 読書界 アジア民族 の中心思想 高楠順次郎博士述 第二世の滿 鮮見学記
1. 8 滿蒙両民族 教育に精進 熱河の北条氏
1. 8 各宗合同の開教使 養成機関設置 三ヶ月ミッチリ訓育
1. 8 興亜の理想 実現に技術的参加 基教医学生らが 新に連盟を結成
1. 8 “平和と親善は 我々仏徒の手で” 広東に南支仏教協会 近く結成の運び
- 1.10 新東亜の建設と 日本仏教徒の役割(下) 馬田行啓
- 1.10 新春と共に積極的に 金光教の大陸進出 青年教師で宣撫班を結成 来る廿三日頃渡支
- 1.10 岡岡師団長 知恩院参拝 ラマ僧に訓示
- 1.10 対支開教費に 匿名の寄付相次ぐ 浄宗開教陣活発 宗会にも増額を提案
- 1.10 快速部隊に従軍 彈雨下に奮闘! 武昌に東本願寺 大派保木従軍僧談
- 1.10 大派海外開教 監督協議会 開教の躍進企る
- 1.10 回教の神秘 断食三十日 小村不二男
(1) 三億餘の回教徒一斉に 西方メッカに向ひ礼拝 黄昏る厚和の一清真寺に 断食開始を告げる第一声!
- 1.10 天台の蒙古僧 第三回留学 月末頃来

- 朝
1939. 1. 11 頑夢さめぬ 支那基督教徒
1. 11 印度は何處へ? (上) 在日本印度国民会委員長 エ・エム・サハイ
1. 11 我ら何を為すべき乎 (上) 一長期建設と宗教— 三浦参玄洞
1. 11 支那に奉斎の 神社様式の基本 北京神社創建に就て「海外神協」の具体案成る
1. 11 回教の神秘 断食三十日(2) 小林不二男 『ラマザン』とは? 俗務より離れ己が身を三省し 過去の罪の一切を清める月
1. 11 対蒙古開教使の 養成所を現地に 昨日、古義上局会
1. 11 世界的連絡が悩み 日本基督教の支那進出策に 打開困難な障害
1. 12 我ら何を為すべき乎 (下) 一長期建設と宗教— 三浦参玄洞
1. 12 印度は何處へ? (下) 在日本印度国民会委員長 エ・エム・サハイ
1. 12 ラマ教改善案纏め 満洲国政府に上申 寺本婉雅教授の近況
1. 12 新春皇軍慰問行 浄土宗が南支に管代派遣 田村智学氏二月初旬出発
1. 12 支那を中心の 所謂興亜方策 集会に提案
1. 12 中支軍方面の 諮問事項を協議 「宗教問題研」の初会合
1. 12 日華合弁の 出版会社
1. 12 回教の神秘 断食三十日(3) 小林不二男 秋霜烈日仮借せぬ戒律 我が開教研究上注目すべき 破戒とこれが償罪の除外例
1. 13 小国民の興亜魂涵養 全国的に児童週間の実施 帝都の計画要綱決る
1. 13 半島同胞の 仏教報国会
1. 13 広東支那僧 西本に帰順
1. 13 支那開教区確立 教学部を離れ監督設置か 浄宗開教区も刷新
1. 13 回教の神秘 断食三十日(4) 小林不二男
1. 13 支那児童に 贈る慰問書画 全市児童の作品三千点 成安女子学院が 日支児童交歓
1. 13 小早川秋声 画伯帰還
1. 14 印度教徒は叫ぶ 印度教は日本古来の神道と 共に歩む仏教と握手せよ
1. 14 関係学者を動員して 南伝大藏經の仏訳 カンボジヤの首都プ市で 女史大事業開始
1. 14 回教の神秘 断食三十日 小林不二男(5)
1. 15 興亜魂涵養 の児童週間
1. 15 新春に奏でる 北・中・南各支開教戦線に 澆刺・日宗の進軍譜
1. 15 東亜再建の国策に沿ひ 釈放者移民の農業訓練 輔成会の農民道場三月開く
1. 15 全印印度教は動く「教徒国民会議派」結成し 政治的進出試みん 宗教を通じて 汎アジア連盟結成 全印ヒンズー教徒 年次大会に提案
1. 15 全議員を派遣 大陸を認識さす 古義当局の計画
1. 15 興亜の建設は 支那児童少年から 西本日校少年団研究協議
1. 15 形はつかめても 魂は掴めぬ 外人宣教より邦人の手で 支那基督教と提携の可能性語る
1. 17 新モットー“則天行地”を 日支の指標に 当路者間に台頭す
1. 17 論議の焦点 現地宗団相互の摩擦問題 中支の宗教工作議す
1. 17 我が身は我身ならず 滅私奉公を誓ふ 金光教宣撫班一行来社 愈よ十九日本部出発
1. 17 国策移民の奨励と 布教地区の設置等 戦時下の緊張裡に 大派全国所長会開く
1. 17 従軍僧交替 を軍と交渉 西本の新例
1. 17 基督教の支那進出問題 伝道は政治とは別に 数十年先に望み 日基は先づ日本人伝道から
1. 18 シンガポールで 気を吐いた賀川氏 幾多の話題乗せて マドラス会議出席者帰る
1. 18 京撫沿線各部落に 愛郷村を建設 支那民衆から賛辞捧ぐ 大派大河内中尉の活躍
1. 18 早くも厦門に 女学校の経営 広東に大寺廟開始 西本願寺の活動
1. 18 強力な信念による 宗教工作が急務 支那基督教の根底は 欧米宣教師の経済力 金光教福田氏の現地感想
1. 19 興亜仏教の理念(上) 椎尾辨匡
1. 19 更に西部蒙古ラマ調査へ 徳王と重要協議 満洲国では勅建寺建立か 寺本教授、ラマ改革案進む
1. 19 共匪に拉致された 谷天祥氏の行蹟顕彰 清原実全氏の奔走
1. 19 日本の徹底的勝利で 新東亜の建設へ 日支両国の提携を切望 各国仏教徒が決議 鹿野苑の初転法輪寺 盛大な建立七年祭
1. 19 日比学生会議代表 比律實事情講演 東亜共同体建設に沿ひ
1. 19 大陸の宣撫工作は 終身働く覚悟が必要 軍は宗教の動静も監視 中部防衛指令部 大賀少佐
1. 19 国策に即応 全真言の結束 ラマ教と密教の提携因り 鎮護国家の実を致す

1939. 1. 19 開封に西本 願寺開創 留学生も活動
 1. 19 中支方面に 妙心派飛躍
 1. 19 中支宗教大同 連盟の組織 最終審議
 会
 1. 19 宗門社会事業の 大陸進出を協議 第
 三回仏教社事懇談会
 1. 20 興亜仏教の理念(中) 椎尾辨匡
 1. 20 厦門の女学校を 西本願寺に譲渡 別
 荘地の豪華な校舎 僑南家政女学校
 1. 20 大陸教化の礎石に 青少年五十名を
 高野山が今春派遣
 1. 20 支那カトリック教区に 日本人新婦一
 人もなし 分裂の大陸カ教のため 日
 本教徒の蹴起を要望
 1. 20 後藤瑞巖氏 上海で活躍
 1. 20 診療所の 開設計画 救世軍報国茶屋
 1. 20 興亜新秩序の建設と 大派開教の根本
 方策討議 医療・授産方面にも重点
 けふ、海外開教監督会議
 1. 20 興亜国策に沿ひ 先づ陣容の拡充 西
 本支那布教本部を 北支と中南に両分
 1. 20 中支宗連の 常任は内地から 軍部、
 仏連へ希望
 1. 21 興亜仏教の理念(下) 椎尾辨匡
 1. 21 戦地より帰りにて 宗教界に呼掛く(1)
 金光教北米連合会長 福田美亮
 1. 21 聖戦下国策に順応し 一切の『宗我』
 廃す 東西両本願寺の握手! 満支対
 策で懇談
 1. 21 美事キャッチした 貴州X P S Aの怪
 伝波 萩市に舞込んだ支那のデマ放送
 中津江住吉社司の殊勲
 1. 21 色彩で蒙古を表現 実相を紹介したい
 蒙疆地帯から帰った 小早川秋声画
 伯の土産話
 1. 21 興亜の新段階に即応 浄宗が僧侶の根
 本的再教育 仏尊、正大卒業者は修養
 道場へ 東西布教講習所は廃止
 1. 21 金剛不壊の信念より 画期的国策を扶
 翼せよ 全海外開教監督に対し 光暢
 法主の重大訓諭
 1. 21 移民教化方策 に就ても討究 盛られ
 た内容
 1. 21 排日・恐日のアメリカ 支那のデマは
 誰も信用せぬ 西本羅府別院 鷲岡正
 雄氏婦朝談
 1. 21 大陸目指す 学徒のこの意気! ポケッ
 トマネー出し合ひ 時局研究に邁進
 東京外語生が 科外講座開設
 1. 21 大陸の産業開発と 青年層への希望
 甲斐静也
 1. 21 天津農民道場を解放し 青年仏教徒を
 待つ
 1. 21 戦地より帰りにて 宗教界に呼掛く(2)
 金光教北米連合会長 福田美亮
 1. 22 検討された比律賓 軍事的足場以外米
 も持余し 民族文化を持たぬ 日比学
 生会議代表
 1. 22 日伊親善音楽会 北支セツルメント事
 業の為 日本基教婦人矯風会
 1. 22 興亜の礎石を築く 技術員の養成へ
 その名も『日満高等工学校』 立命
 館の時局対応教育
 1. 22 異教徒の島民から 永代無償土地使用
 権 多年の難問題解決 サイパン本願
 寺面目一新
 1. 22 支那児童に贈る 美麗な“親善葉”
 1. 22 中支宗教大同連盟 総裁に近衛公爵を
 大谷光瑞氏が推薦
 1. 22 海外人事刷新断行 人材養成帰還も設
 置 大派海外開教会議
 鮮・台・布開教地に 相続講を実施
 国策移民 教化方策 第二日の協議
 1. 22 太原西本願寺 日語学校盛況
 1. 22 興和の新秩序 建設に学的参加 正大
 に大陸研究会創設 今夏調査団派遣
 1. 24 戦地より帰りにて 宗教界に呼掛く(3)
 金光教北米連合会長 福田美亮
 1. 24 社会事業を主に 興亜建設に邁進 会
 期延長と慎重討議 大派、海外開教監
 督会議
 1. 24 転向者六万の 大陸進出へ 統制中央
 委員会組織 全国観察所長会議で
 1. 24 日蒙古 開教監督 高鍋氏任命
 1. 24 亜細亜大陸こそは 大和民族の故郷
 満洲北支は神代の我が版図 契丹文字
 古文獻判明
 1. 24 戦没皇軍に捧ぐ 印度教徒の感謝 国
 際都市神戸で法要 日印親善の楔
 1. 24 皇軍慰問の 管代を派遣 東福寺派が
 1. 25 戦地より帰りにて 宗教界に呼掛く(4)
 金光教北米連合会長 福田美亮
 1. 25 世界の恐怖パルチザン 虐殺より早く
 も二十周年 被害邦人の遺骨を捧じ
 西本願寺で記念法要厳修
 1. 25 日本古典芸術を 比律賓大学で講演
 立教大学根岸教授が
 1. 25 更生中支の宗教活動に 初の指導原理
 与ふ 軍諮問「中支宗教大同連」の
 組織に関する最終審議会
 中支宗教大同連の組織 及び活動に
 関する要綱
 1. 25 興亜建設の開教策 宗是として押進む
 追加予算に果して 如何に反映する
 か 大派海外開教監督会議終る
 1. 25 華南日華仏協成り 宣撫工作に協力
 南支日華仏徒の提携 防共反蔣に乗り
 出す
 1. 25 女学校にも大陸科目 近く慰問書画を
 もって 瀬尾成安女学院長渡支
 1. 25 北京知恩院の 幼稚園開く
 1. 26 上海の英字誌は伝ふ 皇軍の戦果百パー

- セント 民衆は日本軍の下に朗か 山西省の平和恢復
1939. 1. 26 馬を愛せよ 全国寺院を動員して 支那事変軍馬祭
1. 26 第二次移民団が 千振本願寺建設 代表、東本願寺訪問
1. 26 東亜再建第三の春を迎へ、同朋賢台の御健全を祈る 北京覚生女子中学校 出雲路善尊 釜田広文 秦純乗
1. 27 興亜建設を色彩で 小国民に認識さす 国策移民も蒙騷現状も 東本願寺の画劇報国
1. 27 根本的改革を要する 現状のラマ教団 全蒙に生垣を樹立することが 満蒙をリードする皇道精神 寺本婉雅氏の報国
1. 27 大同仏教会の総会 日満一心の親和
1. 27 宗団法特別委員会 対支宗教的活動に 積極的援助を考慮 慣習伝統尊重が 妥当 荒本文相が貴院で言明
1. 28 遺骨に語る(1) 佐藤彰三
1. 28 英蘇排撃を決議 印度独立運動記念日に 在京印度人が
1. 28 全文に先がけ 北京に矯風会生る 日華婦人の握手
1. 28 蘇州療病院中心に 臨時追加予算十萬円 会計常務員会で承認 臨時議会も 招集か 大派国策移民 にも乗り出す
1. 28 大陸進出に目覚し 転向宗教家の活躍 “それは不屈の精神から” 大阪保護観察所談
1. 29 開教師養成所開設をききて …各宗当局に要望す… 池田亨侃
1. 29 大西良慶氏 を推薦す 中支宗大連 常任理事
1. 29 あれよ、あの歌 支那児童が唱ふ、“日の丸” 広東の明け暮れ
1. 29 お東のバット献納 廿七万四千四百個 智子裏方も廃品処分 前線皇軍将兵に贈る
1. 29 遺骨に語る(2) 佐藤彰三
1. 29 曹洞の嶽尾米尚氏 朝鮮より満洲国に 転出 後任は宮崎の長田氏か
1. 29 北京、上海に観察所 将来は大陸の防共枢軸 世界に冠たる我が方針
1. 29 興亜新秩序 建設の思想講座 全日本真理運動本部が 仁寿講堂で開催
1. 29 宣撫班感謝 激励座談会
1. 29 国際仏教学生 連盟の発表会
1. 31 新支那への期待 - スペインの覆轍を戒む
1. 31 遺骨に語る(3) 佐藤彰三
1. 31 阮滿洲国大使も賛助 五色園の忠霊塔 建設計画 経営者が私財提供
1. 31 西本溝、支、米 布等駐在異動
1. 31 軍は仏教徒の 活動を熱望す 活動する日蓮宗 西本願寺徒軍僧 黒田秀道氏談
2. 1 遺骨に語る(4) 佐藤彰三
2. 1 新東亜建設促進に 社会人の徹底的再教育 成人教育協会近く生まる
2. 1 台湾西本願寺
2. 2 遺骨に語る(5) 佐藤彰三
2. 2 転向者の大陸進出 先づ昭徳会中心に 近く現地に調査員派遣
2. 2 広東における 日支仏徒の握手 愈よ五日結成式
2. 2 蘇州日語学校 三波開教使 授業を分担
2. 2 仏連の対支文化 工作機関設置進む 名称「興和仏教連合会」か
2. 2 アジア各民族が 建国祭を詩ぐ 日、支、印の代表三名が 榎原神宮神符奉戴
2. 2 漢民族・支那 文化の存亡如何 未完成のテーマ
2. 2 割合に不惜身命的 大精神に欠ける 宗教家の宣撫戦士 第四回宣撫班感謝 激励会
2. 3 けふ、開催の 大派参院会議 新東亜への開教方針等 決定した諮問事項
2. 3 五百年目に巡る 基督教の大改革 今、東洋の精神により 新たに生れる時が来た 基督教の日本化問題
2. 3 北京だより(1) 好村春基
2. 3 “新大陸の土に” 希望に燃ゆる戦士 維新政府の教員募集 仏教界から志願続出
2. 4 大派、二大法要を機に 興亜建設に拍車
支那仏教徒も遙々団参 表忠殿建設に勤勞奉仕 記念事業の 全貌発表 大陸開拓思想普及 移民地開教使を総動員 現如法要の記念事業 二大法要の 前奏曲 仏教日支民 興亜会結成
2. 4 外人宣教師も 宣撫に利用中 陸相、星一氏に答ふ
2. 4 古義の滿洲北支 開教線分離拡充 菅野前監督ら運動
2. 4 京阪神の学生で 東亜学生連盟組織 大阪学士会で決定
2. 4 北京だより(2) 好村春基
2. 4 蒙古の治政には、ただ 宗教の理解が先決 寺本谷大教授の帰朝談
2. 5 皇祖祖宗の尊牌と 滿支先王祖神の靈牌奉祀 東洋諸民族の精神的融合に 大乘法華会発表
2. 5 焦土抗日は否定するが 日和見の支那インテリ 上海穩健派分子の動向 打診した加田博士談る

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1939. 2. 5 皇国内外の国策に即応 仏教も真摯な
国家奉公 長期特別講習会その他 明
和会本年度事業決る
2. 5 島民の信仰に 不安なきやう 台湾の
寺廟整理で 総督府文教局長通牒
2. 5 興亜仏教会創立に 曹洞反対を表明す
きのふ、仏連理事会に 正式意見書
を提出
2. 5 中支宗教大同連の 仏教側の常任理事
福田剛正氏に決定
2. 5 北京だより(3) 好村春基
2. 5 支那基督教を如何(上) -クリスチャ
ン・センチュリー 誌の所論について-
三浦三玄洞
2. 7 支那基督教を如何(下) -クリスチャ
ン・センチュリー 誌の所論について-
三浦三玄洞
2. 7 北京だより(4) 好村春基
2. 7 学者のゐない支那僧侶 収入がなく米
が買へぬ 若き支那僧はかく語る 知
恩院南京別院の座談会
2. 7 大陸南洋への 学的視野拡大 京大に
探検 地理学会
2. 7 大日本皇国建国祭 亜細亞民族奉祝会
慶式次第決定す
2. 7 児童の世界にも 興亜振作の運動 日
支関係を反映した 西本願寺日校計画
現地將兵への 慰問函書を求む 第一
回に大歓迎を受けた 西本願寺北支総
監部
2. 8 北京だより(5) 好村春基
2. 8 新鋭医療部隊派遣 日華語講習所も開
設 救世軍の報国茶屋
2. 8 朝鮮仏教青年 会連盟結成 京城各校
中心に
2. 8 草摺古義総務 施政方針演説(上)
2. 9 文化工作と 人の問題
2. 9 北京だより(6) 好村春基
2. 9 日華仏研の 支那視察団
2. 9 神社問題に未だ 無理解な外人宣教師
朝鮮神学校の動向
2. 9 東亜建設の根本は 人材傑出よりない
専修道場実施について 後藤瑞巖氏
語る
2. 9 北支開教や 御修法問題で質問 古義
宗会第二日 -七日午後-
現地布教師団 の摩擦は遺憾 根本
的に陣 容を建直せ
2. 9 軍属祭官制定や 戦場の祭祀奉仕
「海外神社協会」が 興亜院へ意見書
- 2.10 北京だより(7) 好村春基
- 2.10 手に手に“日の丸”と“五色旗”か
ざし 日華親善交歓児童大会 盛況を
予想さる
- 2.10 武漢三鎮方面へ 曹洞の慰問使 宗会
代表で
- 2.10 興亜再建と 浄土教徒
- 2.10 厦門東西本願寺協力 社会事業に乗出
す “大乘仏教”を中心に 支那仏教
寺院も包含
- 2.10 北支開教失政問題 当局から秘密会要
求 古義宗会 -第三日午後-
- 2.10 技術職工救済から 興亜建設の闘士養
成 西本、藤沢実善氏談
- 2.10 戦陣より 白井真保
- 2.10 草摺古義総務 施政方針演説(中)
- 2.11 興亜の紀元節
- 2.11 北京だより(8) 好村春基
- 2.11 フランスと汪兆銘
- 2.11 憶々斯波総長 全州西本願寺 北野旭
尖
- 2.11 満洲別院の建立と 多数の宣撫員を!
智山宗制審議會開く
- 2.11 在洛華僑団の 仏教興亜会 廿三日東
本で結成決定
- 2.11 草摺古義総務 施政方針演説(下)
- 2.14 北京だより(9) 好村春基
- 2.14 日本の紀元は亜細亞 新秩序の紀元だ
大亞細亞諸民族が一同に 熱狂の建
国奉祝会
- 2.14 晋北大同仏教 学院を創設 日支一九
の晋北 仏教連合会着手
- 2.14 西山光明寺 皇軍慰問使 北、中支へ
派遣
- 2.14 日本僧のラマ 廟入りを歓迎
- 2.14 興亜の緊張見せて 大派四代表会議
全国から百余名招集 けふ東本願寺で
開催
- 2.14 滿支開教の 質問戦酣となる 古義宗
会 第八日
- 2.14 厦門に深草派 教会所を創設 黄開教
使渡支
- 2.14 興亜教学確立へ 文部省葛西氏中心に
きのふ、座談会
- 2.14 支那居士つれ けふ一班掃朝
- 2.15 海外神社には 必ず国魂神を 根本方
針協議
- 2.15 捕虜も興亜建設 西本願寺へ新に課せ
られた 中支の奉公事業
- 2.15 張家口にも 神社創建 三月から着工
- 2.15 中支宗教大同連盟 愈よ三月下旬結成
式
- 2.15 曹洞宗の提議は 教界の協力を妨ぐ
その見解の是正求む 「興亜仏教会」
問題
- 2.16 北京だより(10) 好村春基
- 2.16 児童に働きかける三ツ 日支文化融合
の先駆 “いろは歌”を額にして 全
国小学校、寺院等へ
- 2.16 台湾在来宗教の自覚で 大乘仏道協会
生る 東本願寺の誘導奏効 皇民化運
動の一翼!

1939. 2. 16 新東亜の実情に即し 有為の青年宣撫僧養成 新義智山派の発案に基づき 各宗派合同して設立か
2. 16 “蒙古は密教で” 宣撫と教化に 協和会から招請
2. 16 興亜教学の中心は 君臣の道の復活にあり 支那は日本の指導を受けて古の王道に還れ! 葛西文部省教学官の所論
2. 16 中文宗教大同連盟 日本側神道部長人選 畑金光専掌を推薦
2. 17 再び農民道場に就て 甲斐静也
2. 17 貴衆兩院その他に 果敢な回教公認運動『大日本回教協会』から 宗団法の修正運動起る
2. 17 五宗派が共同して 興亜指導員養成 来る二十日具体案を決定 曹洞宗不参加を表明
2. 17 日・支共同で 大々的に“軍馬祭” 对支仏教工作の一事業に 各方面へ呼びかく
2. 17 大谷派の一信徒が 新考案軌道自転車の献納 これも資源愛護
2. 17 外人宣教師追放か 国籍ある外人のみに宣教許可 維新政府の方針
2. 17 興亜建設 への一翼 西本の対支 宗門の統合
2. 17 支那の孤児米阪 四天王寺悲田院に修養 ミッチリ仕込む
2. 18 北京だより(11) 好村春基
2. 18 大陸への開教師達に 鍼灸と漢方医学伝授 高野山大師協会主催で 各宗派にも公開
2. 18 在洛全華僑が結束 興亜建設に乗出す 本部を東本願寺に設置 全国華僑に呼びかく
2. 18 支那女学生へ 日本の人形を 親善使節、北京へ
2. 18 転向者に 華語講習
2. 18 豊田従軍僧 現地実況談
2. 18 有難い天皇の御統治を 支那にもお裾分け 東亜の新秩序建設に対する 一億国民の心構へ
2. 18 回教公認運動 仏連の対策
2. 18 開教使の身分保証 支那蒙疆の長期宣撫へ 古義、根本方針樹立
2. 19 北京だより(12) 好村春基
2. 19 私が若し議員ならば (古義真言宗会議員諸師に望む) 釈天声 蒙疆方面開教費
2. 19 “戦争も生活だ” 戦線全体が大きな家庭 支那人を愛する兵隊さん これは従軍記者の “建設支那縦横談”
2. 19 我が歴史に脈打つ命! 正義、博愛、尚武の国日本 大陸経営こそ国民の責務だ 大阪の徳富蘇峰翁講演会
2. 19 興亜建設に邁進 西本宗会 開会以来四日目漸く 執行長執務方針演説 - 第四日(十八日)-
2. 19 開教総長更迭に 将来深甚の考慮 草摺総務の答弁 最終日の古義宗会
2. 19 仏連対支機関 設置小委員会
2. 21 大陸開教と 人物の問題
2. 21 北京だより(12) 好村春基
2. 21 薔薇物語 (其の一) ペルシアの花 藤沢孝夫 一
2. 21 東亜宗教連盟会議 上海に開催せん 全支、満、台を包含する 連盟結成機運促す
2. 21 中文宗教大同連盟 愈よ発会式決る 廿七日アスターハウスで 総裁、副総裁決定す
2. 21 連盟発展に 支持約す 宗教問題研
2. 21 専任布教総監派し 曹洞の長期建設 小笠原彰真氏らに 現地の情勢を聴取
2. 21 抗日拠点香港から 支那留学僧招く 豊山派の仏教提携計画
2. 21 隣邦の孤児守る 孤児愛護会に呼応 北京万国道徳会起つ
2. 21 郁芳浄宗管長に 蒙古仏教史贈る
2. 21 東亜親善会が 蒙疆児童慰問
2. 21 新学長を迎へ どう処置する? 先の龍大は腐ってる 支那で働く人 を講習せよ
2. 21 天理の支那派遣員 総数三百名突破 時局委員会の調査
2. 21 初版五千部 愈よ本決り 日本神道誌 本 中華文刊行
2. 21 大派北満移民 村開教使募集 愛宗の土来れ
2. 21 大陸進出目指す 谷大の興亜研究会 四月、発会式を挙行
2. 21 印度交友会
2. 21 武昌東本願寺 幼稚園を開設
2. 22 東亜の振興と 日本の仏教 中根環堂 一
2. 22 北京だより(13) 好村春基
2. 22 薔薇物語 (其の一) ペルシアの花 藤沢孝夫 二
2. 22 高楠博士の近著『アジア民族の中心思想』を讀みて(上) 加藤精神
2. 22 食人種開拓に成功 ライニシ伝道協会が世界に発表 海外宣教以来の大事業
2. 22 無告戦士の獄霊に “馬の坂西” 將軍感激 大掛りとなって来る 日支軍馬祭の運動
2. 23 東亜の振興と 日本の仏教 中根環堂 二
2. 23 北京だより(14) 好村春基
2. 23 薔薇物語 (其の一) ペルシアの花 藤沢孝夫 三
2. 23 高楠博士の近著『アジア民族の中心

1939. 2. 23 思想』を讀みて(下) 加藤精神
 愛國熱に沸く 半島同胞神宮参拝の感激 集団勤勞で神社に防空壕
2. 23 近江聖人の里から 出現の“北京聖人”
 清水安三氏のことども 外務省で伝記出版
2. 23 東亜共同体の 結成と宗教界
2. 23 愈よ五月開設の 興亜指導員養成所
 五宗派が主体となり 各宗派へ参加勧誘
2. 23 豊山派興亜議會 愈よ明日から開幕
 予算総額十五万三千円
2. 24 東亜の振興と 日本の仏教 中根環堂
 三
2. 24 薔薇物語 (其の一) ペルシアの花
 藤沢孝夫 四
2. 24 仏陀の大精神を根基に 不惜身命・興
 亜の建設へ 歴史的な華僑の帰敬式
 仏教興亜会創立の宣言・決議
2. 24 孤軍北滿に頑張る 曹洞の布教使夫妻
 移民村小学校教師に
2. 24 金光教中支 派遣班活躍
2. 24 復活し得ぬ 教会は整理 上海印度人
 教会復興出 日印協会に救ひ求む
2. 24 大陸献身の青年養成 自動車、馬術、
 武道の三校新設 立命館非常訓練部
2. 24 大陸開教師 及び留學生 台宗で募集
2. 24 全国的に人材を選び 大陸に駐在員を
 設置 全国基育主事会で決定 YMC
 Aの東亜勢力
2. 24 国策移民奨励 各地で獅子吼 大派教
 学部
2. 24 二人の支那保姆も 孤児と一緒に来阪
 第二班廿五日神戸入港
2. 25 東亜の振興と 日本の仏教 中根環堂
 四
2. 25 薔薇物語 (其の一) ペルシアの花
 藤沢孝夫 五
2. 25 八紘一字の下に カ教徒も参加 北支
 に新民少年団結成 日本少年団が指導
2. 25 近江以外に出ぬ 伝道方針を修正 近
 江兄弟社の北京伝道
2. 26 東亜の振興と 日本の仏教 中根環堂
 五
2. 26 薔薇物語 (其の一) ペルシアの花
 藤沢孝夫 六
2. 26 英字新聞に惑ふ 内外の外人宣教師
 支那の勢力を過当評価
2. 26 滿蒙支人のみに 開く特殊学院 高野
 山の国策事業
2. 26 亡き有志への思慕と 心の糧を求めて
 仏門に帰依した牧将軍 中支那の戦
 跡弔問へ
2. 26 興亜建設の基礎工作 北京党生日華語
 学校 女子総合学園も計画
2. 26 蒐集された 絵本と玩具 近く支那へ
2. 26 山口光円氏 大陸慰問へ
2. 26 赤魔の罪惡を闡明し 蔣に容共の非促
 す 中国回教總會の宣言
2. 26 西本集会 内地の朝 鮮人教化
2. 26 我晋北仏教学院 創設について 井上
 戀西
2. 26 大谷派臨時議會開幕 時局即応の11万
 円 蘇州療院に4万円 けふ、開会式
 挙行
2. 28 薔薇物語 (其の一) ペルシアの花
 藤沢孝夫 七
2. 28 内鮮融和の楔 故妻櫻画伯の未完成絶
 筆 李王家が御買上げ “妓生の家”
2. 28 大派為郷教学部長等を中支方面に派遣
 蘇州療院を中心に
2. 28 豊山宗会 -第二日- 大陸進出と僧
 侶等の再教育
2. 28 盛大な歓迎に 支那の孤児喜ぶ 興味
 ある話題は? 人身売買で孤児がない
2. 28 西本集会 -第十三日(二十七日)-
 三上人法要案や 支那事案上程
3. 1 薔薇物語 (其の一) ペルシアの花
 藤沢孝夫 八
3. 1 支那仏教再興に 腕を組む日支青年僧
 本原青島知恩院 主任へ弟子入り
3. 1 力強くスクラム組んで 興亜の大業翼
 賛を誓ふ 怒濤の如き歓呼拍手裡に
 東西兩派議員懇親会終る
3. 1 東亜建設へ人材を 京大文化科学研究
 所と「東亜経済」の講座開設 新学
 年控へ陣容強化
3. 1 西本集会 大陸問題や宿題の “羅府
 問題”で論議 -第十三日午後-
3. 1 大衆への仏教 理解運動に懸命 印度
 國際仏教大學協會が 連続公開講演会
3. 1 ラマ僧を婿養子に 西蔵仏教を研究
 仏蘭西の女流仏教研究者
3. 2 長期建設の第一歩 曉烏敏
3. 2 性急は宣撫に禁物 支那の知識層は基
 教的 事業知るのみ 太倉施療班長の
 支那人の報国
3. 2 原随円博士に聴く 南洋の土産話 十
 日、中外読者倶楽部で
3. 2 新設立命館 日滿高工校
3. 3 抗日の頑夢なほ醒めず『十願抗敵団』
 結成 支那仏教徒の提唱
3. 3 興亜の理念把握へ 帝国更新会思想部
 の 思想問題講習会
3. 3 北支戦死皇軍の 全英靈奉安所 北京
 西別院に建設さる 盛大な落成式挙行
3. 4 新支那の創造へ『中支宗教大同連盟』
 発会す 南支へも進出する
3. 4 布教権は日支間の 文化協定とせよ
 宗教問題研究所の 中支軍当局への答
 申
3. 5 対支機関の設置 当分保留と決す 仏

1939. 3. 5 連の理事、監事会 里見氏の間報報告
海外神社協会が 祀官養成所開設 四月第一回生募集
3. 7 中支端見(上) 田村敏陽
3. 7 日支両南禅寺結ぶ
3. 7 日華親善 児童大会
3. 7 西本会衆達の 北中支視察団 十名派遣決る
3. 7 大派の輪番異動 北海・樺太が中心 横浜は当然兼任
3. 7 施薬と華日書出版 妙心派が宣撫に新工作 古川総監中甸渡支
3. 8 中支宗連の前 途を見守る
3. 8 中支端見(下) 田村敏陽
3. 8 北京に日本文化宣揚 副島石清水宮司を会長に 神宮大麻奉斎会結成
3. 8 感化院の少年達も 大陸の捨石に 真剣な叫びあがる
3. 8 仏派初の支 那進出成功 本山の大馬力
3. 8 大陸国策の見地より 回教公認運動熾烈 愛国陣営十団体より 当局に要望書提出
3. 8 蒙疆支への開教 方針樹立のため 今明両日、古義協議会
3. 8 喇嘛僧の指導方針 知恩院訓育報告発表 目下、実地研究を中心
3. 9 日本回教徒生活 活を映画に
3. 9 海南島へも 曹洞の高田 管長代理
3. 9 英国の支配から逃れ 日本仏教徒の指導求む ビルマから留学生三百名 日緬仏教協会が選抜
3. 9 従軍僧を中心に 興亜の春を描く 東本願寺のポスターに 秋声画伯の力作成る
3. 9 妙心支那開教 人員激増策
3. 9 建設興亜新秩序 為我人之責務
3. 9 梵語学界に齊す重要レポ 西藏仏教探検のラーフラ氏 仏教の史的文献学的収獲
3. 10 印度に於る仏教復活のため 印度教徒の活動(上) ポース、ラスビハリ
3. 10 興亜的精神の指導に 百万円の学寮建設 支那留学生と日本学生収容 椎尾辨匡博士らの発起
3. 10 興亜調花まつり 紙芝居「満蒙開拓」童話に軍事美談も
3. 10 七十二歳の 興亜戦士 松田道子女史 天津で教鞭とる
3. 10 支那人の宗教心は強い 日本人の布教等駄目だ テロの上海より帰阪した 金光教三宅歳雄氏語る
3. 10 日宗初の支那 開教監督会議
3. 10 京大の満蒙研 東亜研と改称
3. 10 印度に於る仏教復活のため 印度教徒の活動(下) ポース、ラスビハリ
3. 10 日華語学校の経営(上) 知恩院日華語 学校教務主任 成田昌信
3. 11 宣撫班を語る(上) 農民の魂に献ぐる愛! 第〇〇宣撫班長 藤井晋
3. 11 シベリヤ戦没将士と 尼港事件殉難者を悼む あす、西本願寺で追弔法要
3. 11 朝鮮教会の発展 千名を越える集会 内鮮一体強化
3. 11 京城に開く 組合信徒大会
3. 12 宣撫班を語る(下) 農民の魂に献ぐる愛! 第〇〇宣撫班長 藤井晋
3. 12 日華語学校の経営(中) 知恩院日華語 学校教務主任 成田昌信
3. 12 台湾本派本 願寺事務所刷 新について 紫水生
3. 12 すわらじ小劇団が 僻遠の皇軍慰問 一灯園の山田隆弥氏ら
3. 12 歴史なく明日もない 南洋群島生活の異色 一考要する仏教の宣布 原随円博士の土産話を聴く
3. 12 医者と坊さん合作? 大陸へ僧医宣撫官 千葉医大の名プラン出づ 東西本願寺の話
3. 12 開教使養成機関等 東西本願寺合作進む 第一回懇談会終る
3. 12 日宗開教師に 最初の満洲僧
3. 12 蒙疆支那の長期建設に 宗務機構改正を断行 恒久的に「一局」を設置 十四年に二十八万円計上
3. 12 古義、蒙疆開教で 臨時宗会招集? 新総監は草摺氏説
3. 12 興亜精神の 獲得と昂揚に 信行振作と宗僧再教育 浄土宗会第五日 支那開教確立に 調査団を派遣
3. 12 海外神社祀官 養成規定成る 葦津宮司を主任に開設 外務省で最後の打合せ
3. 12 支那人教化は 先づ物を与へよ 日宗初の支那開教会議
3. 14 北京だより(15) 好村春基
3. 14 日華語学校の経営(下) 知恩院日華語 学校教務主任 成田昌信
3. 14 王參議から社主へ “男兒立志”の揮毫 武昌方面に活躍した 大派宮部正氏帰る
3. 14 支那音の正信偈 勤行は大受け 服部信道従軍僧談 大同の宗教 宣撫に好適
3. 14 大陸への重大関心 谷大、興亜研究室を開設 斯方面の学徒を動員
3. 14 陛下の御尊影を拝し 支那学童一斉に脱帽 宣撫行に見る “日本の感激” 金光教中支派遣班の報告
3. 14 興亜渡海和上 支那から求む 北京に鑑真会
3. 15 北京だより(16) 好村春基

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1939. 3. 15 戦場は勿論、銃後に 絶対必要の宗教
中華牧師と会見後の感想 クリスマ
ン少尉の便り
3. 15 “支那人教化は 支那仏僧の手で”
日本への留学生来朝 大派、曹洞、日
宗へ委託
3. 15 龍大も新学期から 新東亜学課す 足
利新学長の計画
3. 15 華文“禅学読本” 宗教研で編纂
3. 15 内海岩屋寺の 宋版大藏経 国宝に指
定
3. 15 暹羅の日本 文化研究熱
3. 15 支那再建と 神社問題 東亜民族文化
協会の研究会
3. 16 女性も大陸へ 京都女専から二名 満
洲国の先生に
3. 16 東本願寺の国策移民運動 内地よりの
分村移住は 寺院も共に移転せしむ
移民地開教使を帰還職員 全国九十
ヶ所で大奨励網
3. 16 各移民村開教使の 座談会を開く け
ふ、東本願寺で
3. 16 大陸布教等 台宗教学商 議会に諮問
3. 16 余りにも矛盾 今なほ日本聖公会外に
独立する朝鮮聖公会
3. 16 日本青年に敬意 世界基督連盟の夕氏
日支青年比較 基督鮮満部会
3. 17 北京だより(17) 好村春基
3. 17 海外仏教との 親善運動に乗出す 華
頂興学済世会
3. 17 朝鮮古瓦壇の 体系的図譜 本邦最初
の出版
3. 17 支那近代寺院を 民衆教化機関に
「蜀商公所」の名称のまま 手に入れ
た日蓮宗
3. 17 拓土指導者 階級養成機関 神都に神
道教学館建設 横浜純真学園経営
3. 17 韓氏を慰め 励ます会
3. 17 “印度の独立運動は 経済運動によれ”
賀川氏、ガ翁に進言
3. 17 ラマの兵役騒ぎ 太田覚眠氏を囑託に
ラマの調査と善導命ず
3. 17 支那開教予算 無修正で可決 日蓮宗
会最終日
3. 17 日支両国の握手に 邪魔な外人宣教師
一応退いて貰いたい
3. 17 外人宣教師と 軍との連絡に努力 大
阪基青安村氏語る
3. 18 ビルマ留学 生の来朝
3. 18 北京だより(18) 好村春基
3. 18 待望の龍蔵一切経 きのふ、東本願寺
へ 大師堂六字の間に安置 藩天津市
長も近く参拝
3. 18 大陸無料相談所 上海・南京にも増設
仏立講の対外施設
3. 18 カ教部隊長 宣撫功績記念 蒙疆二ヶ
所に徳政碑建設
3. 18 中南支部は 急速に任命せん 西本の
支那両総監
3. 18 大派移民村開教使 拓務省当局と会見
満拓・移住協会側とも懇談 けふか
ら、一斉活動
率直に語る 移民村実相
3. 18 清水安三氏 京都で講演
3. 18 世界回教民族の現勢 -(外務省情報
部)- 一 二
3. 18 回教公認を決議 けふ、愛国国体が発
起 緊急有志大会開く
3. 19 北京だより(19) 好村春基
3. 19 武漢及び江南地方 第一線の騎軍へ
一宗を代表して 曹洞宗会の四氏
3. 19 ビルマ留学生来朝で 日緬支結ぶ朗話
會て受けた恩義をそのまま 在留一
支那人奉仕を申出る
3. 19 大派の支那留学僧 専修学院へ収容
杭州の心光・究典両君 きのふ、両堂
参拝
3. 19 日支仲よく ひなまつり 張店日華幼
稚園
3. 19 石家荘に西本 願寺の仏婦会
3. 19 開国以来最初の 支那女学生の訪日
東本願寺の法要参拝 北京党生女子中
学校
3. 19 済南に日華仏教会 不日成立発会され
ん
3. 19 台湾に於ける皇民化運動 本島人寺廟
整理の实情 紫水生
3. 19 反蔣、防共を標榜し 回教徒、辺境に
蹴起 赤色ルートを脅かす
3. 19 世界回教民族の現勢 -(外務省情報
部)- 三
3. 21 東亜新秩序に 関する諸論
3. 21 入蒙、喇嘛廟に入り 興亜建設の基本
を学ぶ 西本願寺よりの留学生決る
満洲国協和会と合同で
3. 21 在満各宗派の団結 満洲仏教総会 近
く正式結成を見ん
3. 21 支那開教を 現地に見る 浄土宗内の
一般からも 調査員五月派遣
3. 21 サハイ氏著“印度”で 在留印度人達
の団結 その出版記念会を期して
3. 21 満拓移住協会等と 拓務省が懇談 井
口、常磐両博士も出馬 大派移民奨励
運動旺ん
3. 21 現下国際情勢から 回教追加は当然
両院有志ら決議 宗団法
3. 21 世界回教民族の現勢 -(外務省情報
部)- 四
3. 23 感激の的! 田添宣撫官 民族的恩讐
を超えて 仏手教育宣撫の華 少年問
諜を死の断罪から救ひ 父となって暖
い小学教育

1939. 3. 23 印度人は水母だ 神を知らされなかった為 本能生活に墮してゐる 賀川豊彦氏は語る
3. 23 仏教徒よりなる 北支経済視察団 浄土教と密教の人々と連絡親和を希望
3. 23 華南仏教協会飛躍 広州更生法要で糾合
3. 23 上海と南京に 中国児童保育処 天理教の活動
3. 23 最近の新京 新京西本願寺 姫宮輪番語る
3. 23 アジアの光 講座放送
3. 23 可憐な親善絵巻 仏教童話連盟の 日華児童大会和か
3. 24 草鞋竹杖姿で 中北支の戦跡弔ふ 智山の倉持宗務長ら
3. 24 事変現地を背景に 考古学記録映画 大山柏博士が主に “学術日本” の進出語る
3. 24 烈々火を吐く信念 日本文化の発揚は大陸のみ 東亜新秩序に何が必要か 北京の聖者に聴く
3. 24 大和法隆寺下附の 太子像中心に 晋北仏教学院創設
3. 24 懸案の宗教団体法 目出度成立を告ぐきのふ、衆院本会議 回教取扱に対し 文相、所信を披瀝 最終委員会の経過 回教の公認を アラビア宗教相キブシ氏 小山衆院議長に要望
3. 24 興亜指導員 養成所協議
3. 24 北京、上海で 東亜仏教徒大会 事変戦没者慰霊祭など 明和会の対支工作事業
3. 25 印度人は世界一の貧乏 然かも社事は寥々 見るべきアシラム運動
3. 25 支那女学生ら 光泉林で一泊
3. 25 日華婦人交歓や 軍事功労者の表彰 大派の法要行事大綱
3. 25 宗教団体法成立に聴く 危機を孕んだ回教問題 所謂表面的には政治的解決 安藤宗団法委員長語る
3. 25 支那僧の訓育所 南京に西本願寺が仏学院創設
3. 25 大派満洲開 教紀要なる
3. 25 大同石仏寺を ハイキングコースに
3. 25 支那再建と 神社問題 東亜民族文化協会の研究会
3. 26 宣撫工作と 長期建設
3. 26 北支経済視察団 増上寺で交歓 京都は十六日開く
3. 26 印度の 禁酒運動
3. 26 興亜促進運動を 目標に全教団立つ 現地と銃後など五陣立の 西本特別布教陣
3. 26 愈よ陽春の候 南京に結成大会 日華
- 仏連の準備進む 各方面で注目さる
3. 26 西本厦門の 僑南家政女 愈よ正式認可
3. 26 小林誠氏に 中支事情聴く 東京の宗教連盟
3. 26 大陸建設の 戦士養成 洋大拓殖科 開設決る
3. 26 中支の社事 状況を聴く 二五会例会
3. 26 興亜に備へて 生長の家が大阪に 新東亜教化部創設
3. 28 故郷総理の遺志を継ぎ 「願学農荘」 創設 けふ、一周忌を機会に 奉天郊外で入園誓式
3. 28 興亜の人柱に！ うら若い尼さん 曹洞の平岩真浄さん
3. 28 二代三代の祈りで 求道の太田氏渡支
3. 28 太原神社鎮座祭 神武天皇祭当日執行
3. 28 陳さんが団長 日本文化に憧れて支那女学生の歴史的訪日団 覚生高女の日程決る
3. 28 満洲移住に注ぐ 京都府親和会計画
3. 28 南洋ボナベ 教会所落成
3. 28 翻訳時代を脱せぬ 支那の基教 東洋化には日本基督者の 刺戟を俟つ要あり
3. 29 支那文化史跡の荒廃に 常磐博士の興亜的労作 故関野博士の功績も顕彰し 現存遺跡遺物防護に努む
3. 29 日華宗教交歓二つ 北京覚生女学生ら 東本願寺に描く豪華版
3. 29 満洲、支那兩事変 七勇士の胸像 遊就館に奉納
3. 29 宣撫班と映画 金光教中支 派遣班報告
3. 30 北京の下真ン中に 女子職業学校を建設へのスタート西本願寺が開設
3. 30 興亜色漲る 京大卒業生
3. 30 “大法西漸” へ猛進 日宗の支那蒙古開教
3. 30 現如の偉業偲び 大派が興亜開教展 奥村五百子の薙刀も登場 出陣目録も既に決定
3. 30 拓相も出講 国策移民講演
3. 30 東亜開教局總監に 落合氏を抜擢 天台宗の新大陸政策
3. 30 開教總監の人氣撤廃 古義開教小委員会
3. 30 日本ビルマ協 会文化部設置
3. 31 海南島其他占拠地の 日本に関する事共(上) 高楠順次郎
3. 31 興亜再建の教育 問題に就いて(一) 出雲路善尊
3. 31 興亜国策へ邁進 大派の門末時局大会 ◇…と全国青少年大会 法要を力強く彩る
3. 31 支那料理困んで 華僑信徒と交歓 京

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1939. 3. 31 都花まつり連盟 降誕慶祝晩餐会
 愈よ決定された 興亜開教使養成所
 両本願寺合同主催
3. 31 皇民化運動への一翼 本島人僧侶を集
 め 西山深草派の講習会
3. 31 大陸建設に注ぐ各教団の実力 宗教問
 題研究所の調査 貴重な資料として期
 待
3. 31 京大東亜経済学講 座に満人初の講師
3. 31 移民奨励の反響! 郡上村先遣隊員が
 東本願寺から壮図へ
3. 31 政府の補助三万円 海外神社問題その
 他に使用 皇典講究所理事会
4. 1 海南島其他占拠地の 日本に関する事
 共(中) 高楠順次郎
4. 1 興亜再建の教育 問題に就いて(二)
 出雲路善尊
4. 1 領事館から本省 直接の所管へ 対支
 神社行政を拡大
4. 1 内鮮融和の実を 中央協和会を設立
4. 1 北支の文化調査で 寺塔分布図を完成
 最初の企図を終へて 諏訪谷大助教
 授中支へ
4. 1 大阪に於ける 印度救援の会
4. 1 ナザレン教会 天津教会開設
4. 2 海南島其他占拠地の 日本に関する事
 共(下) 高楠順次郎
4. 2 回教徒の“犠牲祭” 蒙疆厚和回教青
 年学校に於いて 小林不二男
4. 2 興亜再建の教育 問題に就いて(三)
 出雲路善尊
4. 2 夜の北京 清心作 淡星訳
4. 2 “興亜促進”の国是に 全教団の総動
 員 現地と銃後に亘る大スケール 西
 本願寺の赤誠
4. 2 興亜文教の指針に 華文「禅学読本」
 刊行 内容顔触等決る
4. 2 台湾本島児童に 盡忠の精神涵養 各
 校に大楠公像を建設
4. 2 日滿蒙連鎖に緊要の ラマ教改善問題
 ◇…に関する加藤頼正氏の通信
4. 2 大陸の辺境新疆から 天山の峻歩む三
 年 容共蔣政権の魔手逃れ 回教徒十
 三名来朝
4. 2 浄宗支那開教調査団 五月上旬二班に
 分け出発 江藤、木村両部長参加
4. 2 北支は芝原氏 西本人事異動
4. 2 タゴール翁と 日本映画の夕
4. 5 興亜再建の教育 問題に就いて(四)
 出雲路善尊
4. 5 仏門に帰依した牧少将 興亜仏徒会組
 織 会長に松井石根將軍推戴 先づ中
 支に陣没者回向の旅
4. 5 春雨煙る芝増上寺に 日支の宗教交歓
 訪日経済使節歓迎会盛ん
4. 5 大陸進出の 女子養成 崇貞学園
4. 5 宗教家も加り 打開運動か ダバオ港
 閉鎖
4. 5 大陸進出等協る 日本組合基督教会が
 内鮮信徒大会開く
4. 6 興亜再建の教育 問題に就いて(五)
 出雲路善尊
4. 6 日支呼应して 軍馬の冥福祈る 各地
 の軍馬祭盛況
4. 6 日滿蒙全仏教徒を一丸 “満洲国仏教
 總會”組織 寺廟取締規則即応の団体
 来月下旬創立発会に至らん 建国精
 神翼賛の仏教実現
4. 6 満僧の素質向上に 合同訓練所を創設
 入満日本僧も先づ合宿
4. 6 イ国宗教大 臣近く帰国
4. 7 半島同胞への 神宮大麻頒布会 豊国
 神社で執行
4. 7 華僑との晩餐 会都合で中止
4. 7 興亜再建の教育 問題に就いて(六)
 出雲路善尊
4. 7 上海より 来馬琢道
4. 7 全東亜の主と東京に 愈よ『道院』開
 設 世界紅卍字会に対する吾が国 朝
 野の認識を濃化 東亜共同体の 精神
 的結合
4. 7 防共の一役買ひ 近く多量に教師送る
 大將は支那民衆 “生長の家”の大
 陸進出
4. 7 覚生訪日女 学生の大阪日程
4. 7 興亜色描く親善図絵 東本願寺の大法
 要に 満鮮台僧侶の団参
4. 7 京城花まつり 第十二回奉讃会
4. 7 伝統を持たぬ 五族文化建設の地
 “仏教に力あれば昌えん” 長納円信
 氏談 興味ある話題
4. 7 日基の大陸伝道 教育事業との並行
 着々準備進む
4. 7 大陸開教等で 台宗全体会議
4. 8 戦禍のあとに孤児を護れ! 山西仏教
 總會が孤児院経営 日本仏教徒の援助
 求む
4. 8 “日本人”の自覚へ 内地の神社仏閣
 参拝 朝鮮婦人の訪日団
4. 8 海を渡る玩具 在支教会所を通じ一万
 円 浄宗児童協会が贈る
4. 8 鄭氏令孫の 結ぶ国際愛
4. 8 山岳戦の艱難克服 将士の士気を振起
 宮脇部隊長から感謝状 保木從軍僧
 の榮譽
4. 8 愈よ近く結成の 北支同願会 “信念
 ある人よ・行け” 大谷照乘氏談
4. 8 大派の国策移民運動 全国巡回・画期
 的成功 石川・富山では分村計画進む
 移民志願者も続出す
4. 8 北京覚生高女 訪日視察日程 いよいよ本決り

1939. 4. 8 救世軍診療所 濟南に開設 支那民衆相手
4. 8 半島同胞の赤誠 軍病院や出征 遺家族の個別訪問 石原、梅津両氏の努力
4. 9 戦線だより 北支派遣○○部隊 ○○隊本部
4. 9 大陸に於る仏教団体 “僧侶放逐論” 台頭 成績落第の現地報告
4. 9 二十年に亘り 支那民謡の蒐集 二万余種に及ぶ 啓明会の補助で調査翻訳
4. 9 けふ、いよいよ蓋開け！ 二大法要の意義づけ 興亜開教軍馬感謝展 東本願寺が世に問ふ
4. 9 日印関係悪化を憂慮 根本的調整と打開へ 日印協会に対策協議 昨夜初の打合会開く
4. 9 龍蔵一切経寄進の 潘天津市長ら 光暢法主夫妻と歓談 満蒙支各市長と共に
4. 9 立命館助教授ら 大陸へ転出
4. 9 小学校で日語教授 施療事業の効果百パー 金光の北支宣撫班員
4. 9 今井曹洞総務 管代で渡台 台中祝賀会に
4. 9 大阪真青の支 那語講習開講
4. 11 南京玄武 湖心より 来馬珠道
4. 11 満洲国のため気を吐く 鄭禹氏奉天市長を囲む 円山の桜花も興亜調！ 本社主催・歓迎座談会
4. 11 これは珍らしい 日本仏教徒がお客で 印度教徒が花まつり
4. 11 天津仏立寺 廿八日開筵式
4. 11 感激的放送 北京の陳女史
4. 11 東京の歓迎 プロ決る 訪日の北京 篤生女学生
4. 11 映画班を主に 現地皇軍を慰問 日宗が北支蒙疆方面へ
4. 12 今事変を背景に 西本願寺本島人僧侶起つ 台湾本島人の布教統制や 本島仏教僧並に道士の教化
4. 12 こども興亜調 西本布研新研究生決る
4. 12 西本願寺開教 使養成所協議
4. 12 蒙古開教に献身 日宗に帰依の蒙古青年 立正大学に留学
4. 13 タゴール詩聖の迷夢 遂に覚めてヨネ野口氏を 国際大学顧問に推薦
4. 13 京都心臓街の行進絵巻！ 戦没軍用動物の追弔！ けふから現如上人法要 東本願寺に描く興亜色
鮮満から 遺族参拝 -第二日-
4. 13 東本願寺が南京に 女子技芸学院創設 支那婦人に職能教授 東亜文化研も発会
4. 13 民国人の布教は可能だ 張家口西本願寺で立証 宣撫工作の反応
4. 13 浄土宗支那 現地派遣団 人選決定す
4. 13 立正大学に近く 大陸研究部設置 「布教講座」の再出発
4. 13 日ソ開戦問題に就いて聴く
4. 14 事変下、骨の髄まで 日本精神植まつく 先づ五校に特別教室を新設 移民県広島島の試み 在外邦人の 二世教育
4. 14 遠く蒙疆でも 軍馬慰霊祭
4. 14 大陸の市長や 経済使節団 知恩院で交歓
4. 14 魂と魂結ぶ親善 日華仏教婦人の交歓大会 東本願寺に興亜絵巻展ぐ
4. 14 東亜の美德現はす 日本婦人の偉大性 陳女史きのふ放送
4. 14 日満支提携誓ふ 大陸各市長ら光暢法主と交歓
4. 14 興亜大業の翼賛 蔣政権壊滅・大陸経営・国力増強 首相三大目標宣明 国精総動員 強化講演会 平沼首相演説内容
4. 14 全支基連の 援蔣決議を粉碎 日校大会より牧師派遣
4. 15 正しき日本理解 民衆運動に躍進の仏教 文化交歓が特に必要 ビルマを語る 金子蘭貞領事
4. 15 興亜大業翼賛期し 青少年大会旺ん 大派全国青少年連盟結成 現如上人法要第二日
4. 15 “皇軍に感謝し 神の教へに従へ” 北支、蒙疆の信徒に カ教神父は叫ぶ
4. 15 北支慰問に あず出発 日宗加藤部長
4. 16 鄭禹氏を囲み 満洲の少彦名命 故鄭総理と“太夷宮” ハリケリ市長さんを迎へ 花を貰てつつ歓迎座談会
4. 16 東邦文化学院内に「回教圏研究所」設立 現地の研究を主に 研究員派遣 東洋史の権威白鳥博士が
4. 16 事変後占領地内から 最初のメツカ巡礼 英ソ仏へ回教徒の反抗
4. 16 大連太子殿 扁額奉戴式
4. 16 大陸各地に 施業事業 日宗の工作
4. 16 陳女史の感謝 と挨拶の会
4. 16 ラマ僧の訓育方針が 廟改善に役立つ 訓育状況を各省旅公署に送り 知恩院面目施す
4. 16 日華提携に貢献 新生厦門の社事機関 「共栄会」の活躍
4. 16 鮮満の伝道権を 日本聖公会に移管せよ 英米聖公会の態度注目
4. 18 我が居留民の 精神的安定へ パラオに南洋神社 今秋十月盛大な鎮座祭
4. 18 朝鮮僧侶も 体験を説く 開教使懇談会
4. 18 驚異的飛躍の 曹洞宗台北中学 官民一千余名招き 栄えの祝賀式挙ぐ
4. 18 朝鮮婦人矯風会を合併 今後日本の手

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1939. 4. 18 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
- で支持 大陸進出の具体案を決議 日本基督教婦人矯風会大会
 興亜指導員養成所 開設の準備進歩す
 ◇…所長に松井大将交渉 講座予定表も成る
 日華仏教研訪華団 支那僧との提携を目的に 来る廿六日出発
 覚生女学生 再び参拝 夜は都踊観覧
 北支総監部 贅事その他 西本人事異動
 興亜青年運動確立に 東洋精神研究会設立 武藤貞一氏を迎へて 指導原理を協議
 東本願寺の興亜 二大法要けふ満座 西本願寺役員代表参拝 光暢法主親教
 樺太仏教団 代表の犒軍
 日支親善は 少女の手で
 あすから日比学生会議 比島学生けふ東京着
 基督教医学生の 大陸医療工作 将来性を囑望さる
 大アジア連の 興亜講演 非常な盛況
 支那基督教徒 啓蒙運動
 柳川玄徹氏が 樺太開教監督に 異色の人事など 西本第二次異動
 今度は北支から 東本願寺へ留学生 大谷専修学院で研学 宣撫班員劉國泰君
 天津の忠霊 納骨堂竣工
 日華仏連南京總會 廿四日、維新路国民大会堂で 逐次、各地方に支部設置
 大派新中南支監督に 竹津海軍主計中佐 異色ある海外開教人事
 開拓民村に 禁酒村建設 小塩氏渡満
 ラマ僧満洲 国軍に応募
 台宗所屬の 宣撫官出発
 暫行宗教法制定で 外人宣教師関心 澆刺、組合教会の進出 高橋新京教会 牧師の報告
 “甘露の法雨” 支那語訳完成 生長の家 大陸教化部
 上海より 上海知恩院別院にて 大村桂巖
 その後の支那僧や 居士の消息は？ 近く出発する日華仏教研の 渡支により判明か
 天津仏教各宗連合の 興亜祭大成功 支那仏教徒と提携
 きふ、東本願寺で 日華女学生交歓大会 歓迎と感謝の歌も床し 両女学生の 舞踏親善
 大陸各地の視察と 皇道精神宣布の旅 今泉定助翁の一行
 農業移民団 再び渡満 杉山代議士引率
 北支経済開発語る 中外読者倶楽部例会
 会
 覚生女学生 きふの帰国
 日本精神を大陸へ 北京金光学院 近く開校式の運び 先づ九十名収容
 仏教を通じて日蒙親善 興亜再建に協力して起つ 「日蒙仏教親和会」を組織
 朝鮮で組合教会 全国信徒大会 プログラム決る
 建設途上の新支那へ 再び高橋本社員を派遣 中外日報社
 日蒙回教徒握手 東京で歓迎会
 サハイ著 “印度” 読後感 戸田黎仙
 台湾に於ける 寺廟整理一端 紫水生
 予言者出現に集ふ 信者たちの質問宛ら 蘇峰翁を囲むの夜 名古屋中外倶楽部の催
 皇室中心主義で 回教も開教し得よう
 北京だより 好村春基
 東宮大佐の追憶(上) 宮谷法含
 皇道精神を鼓吹した 『協和国語読本』 内地在住鮮人の特別教育用に 京都府協和会が新に編纂
 盲目の本島子弟が 自発的花まつり 領有以来の異風景 内台融和の結実
 松島善雄氏 中支で戦死
 支那人の靈性開発に 阿弥陀經図絵刊行 晋北日華仏教会に贈る
 北京だより 好村春基
 東宮大佐の追憶(中) 宮谷法含
 返還される舍利仏日蓮の遺骨 多年折衝・英印間に了解成る 印度の仏教運動に進展
 “日印親善は仏教から” 聖地に五重塔を 高見代議士の企て
 命を賭けて上海租界へ 目覚し金光教 宣撫班 小学校経営に活躍
 南京を中心に 仏教各宗の和合 日華仏連発会す
 東宮大佐の追憶(下) 宮谷法含
 戦跡供養行脚(1) 興亜仏徒会理事 吉永哲丈
 大蔵経を持参して 日華仏研訪華団 昨夜支那へ出発
 北滿開拓移民に 心の糧贈る 先づ宗教文庫数十冊 大谷派滿洲開教監督部 すわらじ劇団で 劇化の清水安三氏 五月下旬東京で公演
 支那開教視察 の浄宗調査団
 戦跡供養行脚(2) 興亜仏徒会理事 吉永哲丈
 太子の御精神に生く 重要視されてきた 隣邦児童愛育所 支那の要人達から助成金 軍当局も感謝の手紙寄す
 初めて見た 日本の風物に憧れ 多倫、

1939. 4. 28 皇寺のラマ僧 知恩院に留学熱望
 国都建設に調和せよ “早く建築に着
 手すべし”と 新京西本別院にお目玉
 4. 28 熱河討伐隊長から 経本下附の願ひ
 “一口の念仏に明日の命を” 東本願
 寺に申出る
 4. 28 邦人初の満人伝道 青年伝道者二名渡
 満 聖公会満洲教区
 4. 28 日蓮宗の皇軍 慰問映画日程
 4. 28 古義開教使 一行の入蒙
 4. 28 武漢三鎮の地に 妙心禪堂開單
 4. 29 重大地点 南支を辿る 金光邦三氏は
 語る 神戸中外倶楽部主催
 4. 29 両本願寺合同の 開教使養成講習所
 五月一日開所式挙行
 4. 29 将兵はどう視る？ 宗教家の現地旅行
 を そして銃後の活動を 元比叡山請
 願巡査の手紙
 4. 29 現地に興亜意識把握 「郷土軍慰問」
 布教使 西本山で勢揃ひ
 4. 29 留学生の視 察員を派遣
 4. 29 叡山留学の 満蒙僧ら 大東亜博見学
 4. 29 転向者の大陸進出 現地に連絡員置く
 大阪保護観察所
 4. 29 合宿所でも更に 支那語を叩き込む
 台宗の大陸戦士決定
 4. 29 日本聖公会の態度重大 朝鮮伝道権を
 我に与へ 満洲聖公会を樹立せよ 監
 督、名出保太郎氏の声明
 4. 29 山東省を中心に 東亜宗教団体連盟
 支那各宗教の団結成る
 4. 29 サハイ著 “印度” 読後感 戸田黎仙
 5. 2 北京だより 好村春基
 5. 2 抗日歌に代る賛美歌 日語教授だけで
 は駄目だ 天津組合教会の活躍 中華
 人指導
 5. 2 興亜の戦士養成に邁進 両派選出の開
 教使四十名 支那開教時局講習会始る
 東西本願寺合同主催
 5. 2 “海外神社研”を 講究所へ正式移管
 きのふ、総会で決定
 5. 2 真理運動が 興亜指導精神講座 大阪
 国民会館で
 5. 2 中支の派遣者 軍囑託となる
 5. 3 北京だより 好村春基
 5. 3 半島国防婦人 会員団体参拝 豊国神
 社の祈願祭風景
 5. 3 興亜教学資料 華文 “禅学読本”
 5. 3 比律賓学生 同志社訪問 歓迎午餐会
 5. 4 北京だより 好村春基
 5. 4 日印支の子供と 花まつりバザー 三
 国児童で舞踏劇
 5. 4 先生は支那僧 生徒は兵隊さん 漢口
 西本の北京語研究会 モリ上る興亜建
 設風景
 5. 4 小学生や女学生の 慰問文五千携へ
 皇軍慰問の旅へ
 5. 4 西本北支各地主任 初の会議開く 芝
 原新総監迎へ
 5. 4 大連の基教 本願寺目指す 組合中央
 教会献堂式 二葉学園の設置
 5. 5 在支宣教師の誤れる伝道は 我が基教
 の破滅を来す “協同体の精神を知れ”
 安村ミード社会館長談
 5. 5 満洲移民団の実情 一般に再認識を
 転向作家群の長期滞在
 5. 5 復旧した市街 日語学校や細民救済な
 ど 広東西本願寺の活躍
 5. 5 潘毓桂氏夫妻ら 法主裏方と歓談 桜
 下亭で抹茶接待 けふ、枳穀邸拝観
 5. 5 日本Y M C A同盟 東亜協力運動 駐
 在員派遣地決定
 5. 5 満洲留学生 たちも協力 西本満蒙開
 拓 幹部訓練所
 5. 5 興亜指導員 養成開所式
 5. 5 赤色ルートと回教徒 赤色援蔭ルート
 5. 5 回教徒との提携は 防共政策に焦眉の
 急 東方文化連盟主催 回教協会理事
 者招待会
 5. 5 金光中学に 支那語学科特設
 5. 6 対回教国政 策について
 5. 6 被擄取国印度 (英国の巧妙な手段一
 斑) ボース・ラスビハリ
 5. 6 特派通信 奉天から 高橋良和
 5. 6 比島各大学と 教授学生の交換 ヒリッ
 ピン学生歓迎会で 同志社総長が表明
 5. 6 台湾寺廟の龍華派 西本願寺に帰入
 道士が十名得度受ける 皇民化運動の
 徹底化
 5. 6 “道教と仏教習合” 智専出の吉田義
 豊氏 文部省留学生に
 5. 6 梶浦逸外氏更に 中南支へ
 5. 7 漢口より 米馬球道
 5. 7 故スワミ氏追善の 日印寮建設 ハド
 エ氏迎へた日印有志
 5. 7 大黄河畔 純朴其物 包頭西本願寺の
 藤谷義峻氏帰る
 5. 7 在阪神の民国人と 大派大阪が握手
 ◇…して仏教精神で興亜計る
 5. 7 杭州の宗教を観る 蘇州一旅舎にて
 志村卯三郎
 5. 7 何杭州市長のこと 従軍僧石川暮人
 5. 7 杭州の半日 在杭州 天津潤山
 5. 7 北京より開封へ 第三信 柴田玄風
 5. 7 “大陸の民以て同化すべし” 外つ民
 も神を拜す 居留地を氏子地域とする
 生田神社が示す実例
 5. 7 若き四学徒が 内蒙の奥地に 景教の
 秘庫を 探りに…勇躍文化の戦士出発
 5. 7 サハイ著 “印度” 読後感 戸田黎仙
 5. 9 満洲道教の話 民衆信仰 (上) 在満
 洲 五十嵐賢隆

1939. 5. 9 日本の立場を説く 真理運動大阪連合会の『興亜指導精神講座』盛況
5. 9 伝道報国に邁進 全鮮一体の基教連合成る
5. 9 皇軍将兵に贈る “精神鍛練の書” 大阪仏教文化協会
5. 9 童話講話遍路 郷土部隊慰問に 児童の作品持参
5. 9 飛行機を利用 縦横の活躍示す 支那現地特派の 西本願寺慰問布教使
5. 9 新秩序建設に 天理教伝道班出発 興亜の国策に沿ふ 事業計画の内容
5. 10 満洲道教の話 民衆信仰(下) 在満洲 五十嵐賢隆
5. 10 塘沽より 来馬琢道
5. 10 奉天から 特派通信 高橋良和
5. 10 支那孤児のため 小学校を設立 主事、森田湖広氏談
5. 10 僧の布施に課税 称して曰く「自由職業税」 但し満洲国での話
5. 10 医療で蒙古開発 満蒙育兒院の第一回出身者を奥地へ
5. 10 すわらじ劇園 京都、大阪でも公演 “清水氏劇化” の前人気
5. 10 排共思想の徹底と 仏教制度の更改対策 「満洲国仏教総会」結成 来る廿六日愈々発会式
5. 10 生長の家大陸教化部 東亞同和会発会 聖典の支那語訳完成
5. 10 満洲国の宗教事情 天主教の牧師が治める村落 信仰心の強い蒙古人 松浦喜三郎氏談
5. 11 満洲道教の話 廟会と道教諸神(上) 在満洲 五十嵐賢隆
5. 11 新京から 北京へ 高橋良和 特派通信
5. 11 日本仏教の施業に感激 仏教を通じ日華親善計る 江北京前市長を訪ふ
5. 11 張國務総理も参列 新京の中心街に竣工 満洲東別院慶讃法要
5. 11 蘇州の復興風景に 事業の点景添へる 日本YMCA同盟の方針
5. 11 大派台湾主事 佐藤氏赴任
5. 12 満洲道教の話 廟会と道教諸神(中) 在満洲 五十嵐賢隆
5. 12 对支布教使心得帳 天主教の宣教使を見習へ 戦線の一将校手記
5. 12 朝鮮に御因縁深き 御四柱を御祭神に 扶除官幣社を創建
5. 12 骨を支那に埋める 覚悟で開教せよ 西本、開教使講習会員招待
5. 13 満洲道教の話 廟会と道教諸神(下) 在満洲 五十嵐賢隆
5. 13 興亜と仏教語る 日華両要人の弁 伝道会社でも作り 一丸となれ 杉山北支最高司令官
- 同文同種より 同願で進め 夏蓮居士
5. 13 海南島の宗教 事情を語る
5. 13 日本基青同盟の 東亞協力の用語 英語を排し日支両語で
5. 13 竹津開教監督輔け 中南支開教に活動 南京を本拠として 大派藤井草宣氏 近く赴任
5. 13 基教の医療即伝道失敗 宗教家の宣撫諸事業は 宗教味が絶対に必要だ
5. 13 对支医療事業へ 全国YMCA医大連盟 七月中旬に出発
5. 13 興亜運動の 資料と意識充つ 西本特派現地慰問布教使
5. 13 “精神鍛練の書” 大陸に百万部 既に十万部は献納済み 大阪仏教文化協会の運動
5. 13 北京をちこち 特派通信 高橋良和
5. 13 印度の視察団 迎へ園遊会 大開会館で
5. 14 信徒の三分の一は 朝鮮人たること 教会新設に条件附す 天理教の半島人教化
5. 14 杭州の半日 在杭州 大津潤山
5. 16 東亞共同体の思想と 協同運命観(上) 三浦参玄洞
5. 16 満洲道教の話 道士と其生活(上) 在満洲 五十嵐賢隆
5. 16 交す親善の握手 林彦明氏らと仏教問答 王克敏氏と会見
5. 16 慰めなき敗戦国の 亡霊を弔ふ これも仏者の任務 三度従軍する独潭和尚
5. 16 北京をちこち 特派通信 高橋良和
5. 16 半島同胞の敬神 豊国廟の清掃奉仕 神棚奉斉も実施中
5. 16 来馬琢道氏 歓迎会盛ん
5. 16 東亞共同体の思想と 協同運命観(中) 三浦参玄洞
5. 16 新伝道計画を樹立か 組合教会の全信大会 既に朝鮮は募金を開始
5. 16 親善と我が現状の 正しき理解求む 印度通信の泰斗 シヤルマ氏来朝歓迎会
5. 17 満洲道教の話 道士と其生活(中) 在満洲 五十嵐賢隆
5. 17 僧衣・興亜の戦士 五宗派の行者養成所開く 松井大将諄々訓ゆ
5. 17 北京をちこち 特派通信 高橋良和
5. 17 石家荘から 支那僧が留学 西本願寺に
5. 17 明夏北京で開く二大会 東亞仏教大会と汎太仏青大会 近く具体的運動を開始
5. 17 お坊さんふり鮮か 西本に帰入の台湾本島人 寺廟の齋堂堂主たち
5. 18 東亞共同体の思想と 協同運命観(下)

1939. 5. 18 三浦参玄洞
満洲道教の話 道士と其生活(下)
在満洲 五十嵐賢隆
5. 18 東京日より・日印協会主催 日印親交
お茶会 古屋登代子
5. 18 北京から天津へ 特派通信 高橋良和
5. 18 “魂でプチあたれ” 大陸建設の人柱
出でよ 宣撫班の苦心語る 好村春基
氏 と一問一答
5. 18 創立一ケ年で 飛躍的發展遂ぐ “新
民仏教青年会” 記念式に気を吐く
5. 18 “北京の聖者” 語る その蔭に咲く花
清水郁子婦人
5. 19 わが任務 北支宣撫員 吉藤智水
5. 19 東亜共同体の実現に 熱意持つ支那イ
ンテリ 先づ租界問題解決が急務 立
命館大、田中直吉教授談
5. 19 咸興で盛大に 花まつり挙行
5. 19 日印協会が財団に 旗幟を新に使命達
成へ
5. 20 台湾基督教界が 初めて対支伝道 先づ
厦門に代表送る 事変を機に永久に
5. 20 広東語で支那民衆に 大乘仏教を説く
布教所と日語学校開設 東本願寺松
原開教使
広東と海南 島へ視察
5. 20 比律賓ダバオに 初の幼稚園開設
5. 20 満洲国その他から 助成金を下附 知
恩院ラマ僧に
5. 20 大陸に行くときは 仏教徒は団結せよ
内閣情報部 林郡喜大佐談
5. 21 杭日の半日 在杭州 大津潤山
5. 21 北京より開封への旅(第四信) 開封
にて 柴田玄鳳
5. 21 サハイ氏著「印度」を通じ 日印協力
運動へ ボース氏の病氣全快待ち い
よいよ近く着手
5. 21 続々大陸開発調査へ 京大農学部から
5. 21 二万人の難民救った 支那僧、西本願
寺に留学 冀南仏連副会長の趙了空氏
仏教精神で興亜促進語る
5. 21 興亜民族生活の研究 総合研究所具体
化す 戸田正三博士が初代所長
5. 21 天理教天津 日語塾改組 拡充決定す
5. 21 支那留学生に 大和奈良踏査
5. 23 天津から一 済南へ 特派通信 高橋
良和
5. 23 日支両国 慰霊法要 日華仏研が 済
南で厳修
5. 23 大陸派遣の開教使は 各宗とも厳選せ
よの声 現地地で起った不祥事に関連し
て 在留関係者間に漸く高し
5. 23 あくまで支那側 宗教の啓発に努力
全山東一丸にまで進む 「東亜宗連」
活動開始
5. 23 支那現地を聴く 宗研の意義深き集り
5. 24 済南 特派通信 高橋良和
5. 24 仏教総会で 記念講演 大谷瑩潤連枝
満洲で活躍
5. 24 克己日の収獲 北京社会事業に贈る
早川平安女校長渡支
5. 24 朝鮮全州の 雙全寺法要
5. 24 興亜開発の爲め 仏教音楽を制定 童
謡協会乗出す
5. 24 派別を越えて 日支親善に努力 日本
人組合協会に 中華牧師らを招き
5. 24 基教各派婦人 北京に参集 愛隣館献
堂式
5. 25 満ソ国境の 皇軍を慰問せよ 北海道
西本願寺代表の 河崎一英氏語る
5. 25 晋北仏学院 愈よ開校
5. 25 台湾楽生園に 教会会堂建設
5. 26 大同石仏に研究のメス 有給三千年の
秘庫開く 東西両帝大調査団
5. 26 迷夢なほ醒めぬ 太虚法師の所在 重
慶に生存判明
5. 26 半島婦人の接待で 遺家族招き追悼会
あす、梅津の協和会員
5. 26 膠濟線を走る 特派通信 高橋良和
5. 26 蔣も曾て北伐の際 武力で英租界を回
収 租界は単なる居留地だ 国際公法
の權威 末広重雄博士談
5. 26 ラマ教の加盟承認 けふ、愈よ結成式
挙げる 満洲国仏教総会
5. 26 天台・叡山両学会の 夏安居、朝鮮で
結集 仏教を通じて親善修行
5. 26 印度観光団の 日本視を聴く 東方文
化連盟
5. 26 興亜仏教音楽 の制定実動へ 中華小
学校視察
5. 26 日本の宗教団体に 華人の出入要望
青島の宗教調査完了 領事館当局は語
る 断然多い教会
5. 26 青島から
5. 27 青島にて 特派通信 高橋良和
5. 27 ラマ僧一行河 崎造船所見学
5. 27 シャム国が タイと改称
5. 27 中南支の宣撫工作には 欧米宣教師の
文化を保護 東洋精神を日華協力でと
り入れよ 三浦大阪基青総主事談
5. 27 西本支派遣 班布教使帰る
5. 27 組合協会の 朝鮮信徒大会 京都の出
席者
5. 28 南京に於る郷土〇 〇隊戦跡を巡りて
5. 28 武漢だより(上) 武漢東本願寺主任
水戸憲道
5. 28 上海へ 特派通信 高橋良和
5. 28 “東亜建設精神の 仏教的基調如何”
知恩院布教使会で協議
5. 28 中国幼児の爲にも 幼稚園を上げたい
太原西本の沢田氏談
5. 28 中華新民会 中央指導部 訪日団入洛

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1939. 5. 28 杭州の半日 在杭州 大津潤山
 5. 28 北京より開封への旅(第五信) 開封にて 柴田玄鳳
 5. 28 中華の孤児引取り 有為の中堅人物に 長崎仏連の時局運動
 5. 30 上海点描 高橋良和
 5. 30 日本M T Lの 中国癩へ関心 海南島へ 大風子栽培
 5. 30 中支宗教大同連盟に 未加盟の宗教は どうするか 積極的処置を要望さる
 5. 30 中国人の神道教師 養成まですむ 大陸進出の神道各派
 5. 30 支那代表と 立会演説会 日本の正義 岡明 ア博士渡米
 5. 30 日印学生の 共同野営 南河内の 桃花塾で
 5. 31 興亜再建には 先づ神祀奉斎 大陸経営に神主義成 海外神社奉仕員 養成所愈よ開く
 5. 31 上海点描 高橋良和
 5. 31 海越えて呼び合ふ 女学生の歓び 日華“お便り”交歓
 6. 1 小異をすて 大同へ! -中支宗連の問題-
 6. 1 美の国、精神の国 物質文化に汚されぬ国 印度人の日本観
 6. 1 印度独立へ 邁進誓ふ、神戸の日印懇談会盛況
 6. 1 両本願寺主催 支那開教使 養成所終る
 6. 1 一度から百度まで 北支派遣の西本願寺 皇軍慰問班帰る
 6. 1 大谷派台湾 開教監督部 特別伝道開始
 6. 2 鮮満支へ お伽の慰問 駒大教育部
 6. 2 米布の同胞を代表 曹洞の皇軍慰問磯部、戸田の両氏が
 6. 2 新東亜建設 促進叫ぶ 東亜親交会の けふ大講演会
 6. 2 興亜問題協る
 6. 2 中国の活動に比し 日本は衰微的傾向 幾多の原因挙げる 世界本部のデビス氏 YMCA
 6. 3 現地語る宗教戦士 まづ何より事業が第一だ 南京で座談会開催
 6. 3 立命館大学 東亜研究会 けふ発表
 6. 3 北中支に三部 大蔵経の贈呈先決る 福田宏一氏の遺業
 6. 3 南京日より 高橋良和
 6. 3 南京日華仏連の 陣容愈よ整ふ 中国各団体と提携
 6. 3 南京神社創建 二十万円で 近く着工
 6. 4 南京から蘇州へ 高橋良和
 6. 4 諸島に神社の創建統出 南洋庁が神社規定制定 立案準備に連香属官東上
 6. 4 北支で現地講習 今夏、京大学生ら三十名 北京師範で聴講
 6. 4 蘇州から留学僧 浄宗が二名招致 二ヶ年ミッチリ勉強
 6. 4 禪門独自の立場で 興亜の戦士養成 駒大の満支講座拡大
 6. 4 朝鮮と台湾に 宗立専門僧堂
 6. 4 妙心寺派が新たに 朝鮮人教会制度近く実施規則発布
 6. 4 坊子・益都に分会を 東亜仏教会の拡大強化 濰県東本願寺の加藤氏
 6. 4 敢て英との妥協を排す 蔣が死んでも決して 事変は解決せぬ 蘇峰翁の対支対英外交観
 6. 4 武漢日より(下) 武漢東本願寺主任 水戸憲道
 6. 4 華中漫談 横湯通之
 6. 6 興亜精神涵養へ 今夏滿蒙支に学生青年派遣
 6. 6 中国の仏学院に 聖徳太子奉安 各方面から注目
 6. 6 滿蒙開拓青 少年壮行会
 6. 6 興亜院の補助成り 愈よ活動開始 王一亭の孤児院も経営 中支宗教大同連盟
 6. 6 杭州にて 高橋良和
 6. 6 寺院の登録制採用 杭州八百の寺院調査 日華仏教会で着手
 6. 6 在東京半島 人の赤誠
 6. 6 “正法顕揚の秋” 民衆の安居楽業を求めて 上海で新仏教運動を提唱
 6. 6 岳陽城頭に 感激・宗祖誕生式 西本派遣中支班帰る 土岐慶静氏談
 6. 6 マドラス大会が 米教会に与へた影響 “民族心理等理解せよ” 各派外国伝道局の決議
 6. 7 東亜共同体の 理念と実践(上) -日本青交協会の座談 会を傍聴して- 三浦参玄洞
 6. 7 縁を捉へてまづ支那から そして世界に進め 日本仏教へ希望語る 上海市政府参議胡壽昌氏
 6. 7 回教民族対策 大講演会開く
 6. 7 南洋の神社問題と 奉仕員養成で 関係者が研究協議会
 6. 8 東亜共同体の 理念と実践(下) -日本青交協会の座談 会を傍聴して- 三浦参玄洞
 6. 8 燃える日本仏教研究熱 ビルマに仏教道場創設 青年僧の派遣求む
 6. 8 上海統点描 高橋良和
 6. 8 学童に自ら興亜魂 谷大興亜寮の訓練 付近住民から感謝の嵐
 6. 8 中国の幼童に 贈る…宣撫用カード 西本願寺で新案
 6. 8 東亜親交会 印度の独立 促進等決議
 6. 8 朝鮮で夏安居 天台・叡山両学会

1939. 6. 8 日本青年僧の中国移住 中国寺院の開拓に当る 宗教大同連が近く発表
6. 8 暑休を利用して 学徒・大陸に活躍 京大各学部の計画
同志社からも 北支勤労報国際並に独自の 現地講習団
6. 9 宣撫の旅から
6. 9 仏陀の慈光で 日華親善へ 大阪興亜会結成
6. 9 上海から内地へ 高橋良和
6. 9 僧侶出身の 兵隊さん慰めよ 西本願寺現地派遣僧 平山義仁氏の提唱
6. 9 組合協会朝鮮伝道拡大 教師後継者養成問題議す 朝鮮信徒大会で
6. 9 小林誠氏帰朝 現地実情報告
6. 10 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 久富保一
6. 10 中国と台湾の 土産話を聴く 中外読者倶楽部總會
6. 10 兄は中国に宣撫 寺は妹が引受ける 西本奈良県下の非常時風景
6. 10 中国仏連決然参加す 王克敏・王揖唐氏ら入会 日華仏研の積極的活動
6. 11 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 …(2)… 久富保一
6. 11 興亜促進運動 第一段完了 西本慰問隊 南支班帰る
6. 11 ラマ教改革の機運 統一して教団組織に進める 興安局愈よ乗出す
6. 11 大陸神社の 奉祀員養成 研究懇談会
6. 11 日本ナザレン教会も 中支に教会設置 日本人の手で基教地域を
6. 11 武漢だより(承前) 武漢東本願寺主任 水戸窓道
6. 11 外資を離れて独立 盛んな朝鮮基教会 内鮮一体の理想実現
6. 13 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 …(3)… 久富保一
6. 13 蒙疆へ来る者はまづ 回教徒の習俗を知れ 風俗無視の危険性から 厚和領事館が通告発す
6. 13 興亜建設達成に努め 皇恩に応へ奉れ 光暢法主の“親言” 大派宗議会開会式
大派の興亜予算 時局奨義費は廿九万円 開教費を現地費と改む 総額百九十万突破
6. 13 現地へ派遣する 当局の頭を改めよ 須賀隆賢氏帰朝談
6. 14 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 …(4)… 久富保一
6. 14 ビルマへ文化使節
6. 14 メッカを中心として デマ放送の支那回教徒 速に回教対策を樹てよ 回教民族対策講演会盛大
6. 14 “現前に示された 日支親和は 仏教 第一の妙境” 騎軍、英霊弔問行から 帰った 倉持智山派宗務長談
6. 14 日本YMCAの 中支難民医療班 メンバー決定
6. 14 海=外=神=社=問=題=の=重=要=課=題
満洲建国廟愈よ九月竣工 重大な御祭神問題
6. 14 南洋神社の 奉仕員養成
6. 14 大派宗議会 第一日
蘇州問題で 議員懇談会
蘇州問題は円満解決 第二日
6. 15 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 …(5)… 久富保一
6. 15 大衆葬儀場に “太子奉安は不可” 大連聖徳会から反省要求
6. 15 自ら舌を切って 血染の日の丸に敬書 中国僧、日華親善誓ふ 閩山東本慰問使の感激
6. 15 新京など五都市に 五ヶ寺を公認さる 仏立講の満洲教線活躍
6. 16 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 …(6)… 久富保一
6. 16 当局の牙城衝き 蘇州問題爆発す 一新会、共同作戦展開 大派宗議会第四日本会議
断じて闇に葬るな 蘇州問題の巨弾 藤津議員当局に肉迫
6. 16 西本満洲国 布教使大会
6. 16 大陸進出の 婦人の生活環境視察 池山薫女史派遣
6. 16 現地へ出発 天理教の 皇軍慰問班
6. 17 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 …(7)… 久富保一
6. 17 “上海は平穩だ” 大谷光瑞氏帰洛
6. 17 蘇州問題は何処へ? 特別調査員の比率問題でゴテル 大派宗議会第四日
6. 18 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 …(8)… 久富保一
6. 18 賀川豊彦氏の失言を 蔣が利用・悪宣伝 外務省が賀川氏を招致・詰問 愛国団体の蹴起!
6. 18 支那のデマ粉碎する 大阪YMCAの 事変版 各国から統々反響来る
6. 18 沙河口より 藤等影
6. 20 わが大陸政策に反映する 台湾植民 湾島管見 …(9)… 久富保一
6. 20 北辺防備急なる時 千島色丹開教に挺身 奥村円心の自筆本等復刻 大派教化研の事業
6. 20 新事態を認識 “日本語”の研究 朝鮮外人宣教師
6. 20 満蒙開拓への よき内助者養成 上宮教会が女子 拓務訓練所開設
6. 20 支那基教の欺瞞性 その宗教的謀略を 嚴重に批判検討せよ

1939. 6. 20 上海便り 福地定一
6. 21 北支の宗教工作で 軍や政府に進言
北京西本願寺費事長 光岡良雄氏談
6. 21 けふの本会議注目さる 一派奨義の欠
陥衝気 当局不信任案提出? 蘇州療
院問題の急展開 大派宗議會
6. 21 外人宣教師を通せず 日華カ教徒は直
接結べ 特に中支の經濟戦に 日本カ
教実業家期待
6. 21 興亞諸問題や 宗団法の大協議 珍ら
しく東京に開く 西本の全国管事会
6. 22 訪華談の報告により 積極的な対支仏
教親善策 今月末開く日華仏研幹事会
6. 22 日本人の奥床しき 西本願寺に参拝の
広東訪日婦女団の感想
6. 22 現地日本人は勿論 全国民緊禪一番せ
よ 満支人の尊敬を失ふな 聖公会、
安島八郎牧師談
6. 22 蘇州問題に関し 当局遺憾の意表明
奨義事務局拡張言明 不信任案不発に
終る 一午後本会議一
6. 22 満洲国境深く 西本願寺が初めて 移
民布教を敢行
6. 22 興亞精神 叩き込む 西本仏青の 指
導者訓練
6. 23 中支宗連の 陣容成る
6. 23 遼の壁画と都城研究 興安西省巴林左
翼旗へ 京大が研究団派遣
6. 24 マゴつく英人 痛快な天津租界 伊東
勝秀氏帰來談
6. 24 満洲国仏教 総会に語る (一) 在満
洲 五十嵐賢隆
6. 24 大陸視察の気炎拜聴
大物を要求する 宗教家よ頑張れ
その一 曉烏敏氏
内地宗教界の無力 現地で有力とな
れぬ その二 梶浦氏
6. 24 駒大のお伽 慰問班決る あす発表会
6. 24 大陸の宗教活動に 絶対的必要認め
政府が近く積極的対策確立 興亞院文
化部で調査開始
6. 24 ハルビン基育 日本見学団
6. 25 満洲国仏教 総会に語る (二) 在満
洲 五十嵐賢隆
6. 25 支那で使はれる カナモジ論語 稲垣
伊之助
6. 25 興亞宗教闘士養成に ひと肌脱ぐ財界
のお歴々 香港西本願寺留学生の 後
援運動を起す
6. 25 入蒙の英僧日持上人 遺跡顕彰運動
樺太上陸地発見を機に 国民精神総動
員に拍車
6. 25 王揖唐氏が主任で 故宮壇城を修復
同願会の密教昂揚運動
6. 25 北海道、樺太 に初の巡教 福原貫首
ら
6. 25 天津租界問題 を繞る諸動向
6. 25 蘇州病院について
6. 25 華語の興亞教授 英語・国漢専門別
に中等教員を対象 南浮智成氏の近業
6. 27 満洲国仏教 総会に語る (三) 在満
洲 五十嵐賢隆
6. 27 鉄路と文化 (満洲講演の旅より) (1)
満鉄巡回講師 甲斐静也
6. 27 大陸の癩患者は 将来日本が救済 歐
羅巴では既に絶滅 救癩の慈父 光田
愛生園長と語る
6. 27 日華兒童の 親善に貢献 贈った玩具
慰問の反響
6. 27 半島僧を通じ 内鮮融和図る 苦心経
營の半島僧布教所 安達氏の努力酬は
る
6. 27 内鮮一体は 神前結婚から 模擬結婚
式
6. 27 新菜 “曹洞禅丹” 中国難民へ施菜
6. 27 住職勇士へ 特別慰問 妙心寺派から
6. 27 「一致排撃共産党」の下 中国回教徒
の組織化 最近の調査で信徒五千万
6. 27 都市に農山漁村に 興亞促進対策決る
西本願寺の幹事会 東京開催有意義
に終る
6. 27 宗教を利用する 不真面目さは駄目
“人”を要求する満洲 田崎健作牧師
帰來談
6. 27 “印度を独立せしめよ” 打倒英国の
雰囲気の中に 大阪の支援大会頗る盛
況 宣言、決議を一致可決
6. 27 亞細亞の敵・英国 打倒に挺身誓ふ
青年亜細亞連盟の声明
6. 28 鉄路と文化 (満洲講演の旅より) (2)
満鉄巡回講師 甲斐静也
6. 28 興亞青年動 勞報國隊へ 駒大健児参
加
6. 28 中国開教費にと ポンと一万円 浄宗
一尼僧の献金
6. 28 新京都建設促進で 西本願寺叱らる
“別院建てぬなら 早く土地を返せ”
6. 28 抗日の具に利用した 蔣政府の曆を一
掃 中国新政府の依頼で 京大と東方
文化研で製作
6. 28 仏教美術の権威 小野玄妙氏急逝 四
庫全書の出版挫折
6. 28 大陸教化の 実行に 基教同志会 五
綱領決定
6. 28 阿知和朝鮮 山川龍頭山 宮司辞表提
出
6. 29 宣撫班従軍記 (1) 宣撫官 吉藤智
水
6. 29 新東亞の建設と インテリの問題 (上)
三浦参玄洞
6. 29 鉄路と文化 (満洲講演の旅より) (3)
満鉄巡回講師 甲斐静也

1939. 6. 29 天津租界問題の外交 交渉の要点は？
田中立命館大学教授談
6. 29 全教団あげての 興亜促進報国運動
多角的な講師出動 西本願寺の試み
興亜促進運動に 軍、政府も応援
九月一日より全国に
興亜運動と 標語中心の 大評定会
6. 29 内鮮融和の 中央協和会 昨日創立総
会
6. 30 新東亜の建設と インテリの問題(下)
三浦参玄洞
6. 30 鉄路と文化(満洲講演の旅より)(4)
満鉄巡回講師 甲斐静也
6. 30 英国に愚弄されるな 政府を鞭撻し徹
底的解決へ 天津租界問題東京交渉で
暁烏翁悲壮な決意語る
6. 30 宣撫教化用 “浄業日課” 各方面か
ら 施本申込み
6. 30 日華親和の 宗教闘士養成 西本願寺
で 実業家協議
6. 30 大同に“仏の家” 日宗の福島円明氏
妙法西漸へ
6. 30 半島人の 旧慣破り 福井西別院で
仏前結婚式
6. 30 大陸の神社問題で 興亜院が対策考慮
近く専任機関創設か
6. 30 神威冒涇の 現状に鑑み 北京神社の
創建延期
6. 30 漢口神社再建 来月中に竣工
6. 30 京大東亜研員 が宣撫応援
6. 30 日華仏教研の 大阪支部総会
6. 30 仏教徒が大多数 重大な動きを見せる
回教 内地宗教界の活動要望 蒙古の
宗教事情
7. 1 宣撫班従軍記(2) 宣撫官 吉藤智
水
7. 1 満洲国通遼県が 土地・建物を寄進
東本願寺を創設
7. 1 現地各宗派開教陣の “宗我” 意識薄
らぐ 岩倉隊長の現地報国
7. 1 北京党生女学校 公私立校長招待
7. 2 宣撫班従軍記(3) 宣撫官 吉藤智
水
7. 2 日本を誤認する米人 と支那人の悪宣
伝解剖 中村嘉壽氏本社で語る
7. 2 支那人も日本の 偉人を尊敬せよ 暁
烏翁氏の獅子吼
7. 2 興亜記念日を前に 宗門初の論功行賞
古義が事変関係活動者へ
7. 2 東亜の現事態に鑑み “宏謨翼賛” の
教書発示 百万門徒一斉起ち上れ! と
大派、光暢法主の歴史的宣言
7. 2 京城西別院 防衛団完備
7. 2 来れ、聴け、そして起て 反英大講演
会 各方面の愛国の士を網羅 来る五
日華頂会館で開催 本社主催
7. 2 天理青年会 興亜講習 中堅層集めて
7. 2 世界相手の思想戦 国民よ健全なる精
神を養へ 大道社林銃十郎大将の獅子
吼
7. 2 大陸に働く 邦人慰安 浄宗現地開教
使
7. 2 浄土宗北支 開教視察団 六日、宗務
所で 報告会開く
7. 2 上海より 福地定一
7. 4 宣撫班従軍記(4) 宣撫官 吉藤智
水
7. 4 戦地雑感 谷口達聞
7. 4 租界問題東京会談に “日本語を使用
せよ” 俄然、軍少壮部に起る
7. 4 興亜建設の大道は 攘夷に在り 印度
青年と意見交換 東洋精神研究会主催
7. 4 朝鮮西本願寺 開教主任会議
7. 4 新嘉坡以西に 英を駆逐すべし 頑英
折伏に各団体蹴起
7. 5 大陸の皇道 宣布拠点 皇典講究所
北京に分所
7. 6 大陸に神祇宣揚 先づ小学教育通じて
普及 神祇教育方針決る 師範特別学
級
7. 6 応召の覚悟で 基背同盟の大陸進出準
備 内地総主事も待機
7. 6 日本婦人矯風会 大陸進出の基地 新
京に婦人ホーム建設
7. 6 開設地は蕪湖 YMCA同盟学生 医
療班開設地決る
7. 6 欧米依存主義を排し 大陸独自の社会
事業建設 興亜院が調査団を派遣
7. 6 半島同胞学徒に 隣保事業「有隣学舎」
事業後援会成る
7. 6 満蒙国境事件で 西本願寺も緊張 十
余名内地より急派
7. 6 京城各宗仏連 事変記念日
7. 7 再び、新東亜の建設について(上)
三浦参玄洞
7. 7 信仰の復興と 宣撫工作 千家尊建
7. 7 老翁英国膺懲大講演会 果然国民大会
に展開 英租界即時回収せよと決議
国民的与論に舌端火を吐く 本社主催
襲撃の匪賊と戦ひつつ 研究のメス揮
ふ 東西両帝大の学徒達が 成文帝慈
母の古墳調査
7. 7 けふ、興亜記念日
7. 7 思ひは国境に 我々も通訳に出たい
甘爾廟出身ラマ僧語る
7. 7 天津問題の成行憂へ 政府鞭撻の猛運
動展開 反英運動の大衆化と併行
7. 7 切支丹と関係深い 比島の救難事業史
わが斯界に援助の声
7. 8 再び、新東亜の建設について(中)
三浦参玄洞
7. 8 宣撫工作の施策に 薬剤師会が横槍

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 品質裝備に不備多し 今後難しくなる？
1939. 7. 8 興亜の色彩濃く 京大の夏期講習会
七月三十一日から開始
7. 8 東洋精神を振興して イギリス文化の
追放だ 日印青年有志決議
7. 8 中日密教研 大同へ進出
7. 8 金光の大陸進出 対支活動の人材 全
教より広く募集
7. 8 興亜促進強調 統後教化に邁進 実行
委員会開かる 西本願寺安芸教区
7. 9 再び、新東亜の建設について (下)
三浦参玄洞
7. 9 北京緑蔭茶話 在北京 出雲路善尊
7. 9 けふ 英国全教会が 支那人の為祈る
“英国の対日認識不足振り かくの
如くに御座候”
7. 9 満蒙の新天地へ送る “土の戦士” 宗
教義勇軍 連門各派から一個連隊を
二千六百年記念 “日蓮村建設”
7. 9 興亜意識の体験を 内原訓練所出
西本学生義軍
7. 9 興亜院の命で 椎尾博士渡支
7. 9 老猶英国を膺懲せよ この意気この熱
弁士の獅子吼を聞け
日英同盟に於ける 日本の役割 社
大党市議 永井健
英国の対印製作 印度国民会議派日
本支部長 エ・エム・サハイ
支那事変と国民の覚悟 東方会府連
長 田中義男
対英決意と 国民の覚悟 民政党
代議士 福田関次郎
新東亜建設の大業 政友会 代議士
安藤正純
事変發生の元兇を衝け 厚生省 囑
託 曉島敏
松平康直を懐ふ 政友会 代議士
江羅直三郎
老來初めて渡鮮 谷本富
7. 9 皇民化問題は 結局どう徹底させるか
7. 11 社会事業の 大陸進出
7. 11 山本博士帰來談 中国人への 伝道に
つき
7. 11 大陸文化の再建は 先づ土民の教化
若き僧侶挺身隊五十名募る 中支宗教
大同連盟の新計画
7. 11 日本山妙法寺や 仏立講に退去命令
類似宗教も徹底的に排撃 福田仏教部
長談
7. 11 民衆教化には 学徳兼備の高僧を 帰
還の清水中将談
7. 11 中等教科書を中心に “文化史”の表
現を改革 支那文化輸入とは書けぬ
文部省が出版協会で言明
7. 11 得難き資料 “清朝実録講本” 遺言
により洋大図書館へ 小野博士記念会
- も計画
7. 11 外蒙ソ連当局 喇嘛教法要に弾圧 信
仰の自由叫び 外蒙民衆動揺す 阿穆
古朗
外蒙内部動 揺の鎮圧 ラマ僧を逮
捕
寺院破壊の暴挙に 蒙古人の激昂
7. 11 東京会談へ送る国民の要望 英国の世
界政策 訂正の神の聖業 組合教会牧
師 遠藤作衛氏談
7. 12 北京緑蔭茶話 在北京 出雲路善尊
7. 12 戦況に地図を按ずる 叡山留学の蒙古
学生ら 夏季休暇を利用して 昨十一
日夜帰国の途に
7. 12 日蓮村の建 設を待望
7. 12 東京会談へ送る国民の要望 天津問題
は常識 上海その他の租界問題も 現
地で積極的に所断せよ 同志社学長事
務取扱 牧野虎次郎氏談
7. 13 孔聖紙その他適当な 祭神を合祀する
要あり 大陸の神社祭神問題
7. 13 開教覚え書き (一) 在杭州 大津澗
山
7. 13 北京緑蔭茶話 在北京 出雲路善尊
7. 13 日華の美術提携 今秋、大都市を巡回
両国美術展を開催
7. 13 東京会談へ送る国民の要望 会談成立
の可能性 更にある日独軍事同盟 京
電常務 石川芳次郎氏談
7. 13 本島人教化に 大運動を起す 西本台
湾本島僧
7. 13 興亜仏教学建設へ 今秋の仏教学大会
で「大陸と仏教問題」を討議
7. 14 直ちに建設 に結びつく 一汪兆銘の
声明一
7. 14 開教覚え書き (二) 在杭州 大津澗
山
7. 14 大陸うら街道 (一) 落合かんも
7. 14 “生死の大事に就て” 光暢法主の教
を請ふ 太虚法師と並称される聞賢法
師 日華仏教提携の朗話題
7. 14 東京会談へ送る国民の要望 蔣政権を
交戦団体に 速に宣戦すべし 新中央
政府樹立の急務 末広重雄博士談
7. 14 燃える報国赤誠こめ 愛国志士養成の
道場 新教団の意識も熾んに 拓務省
後援で西本訓練所創立
7. 14 東方の日、華を照す 野人英仏に国を
譲るな 中国僧侶の示す反英意気 日
本仏教徒の向ふべき道
7. 14 宣撫メモ 一紙友近信一
7. 15 開教覚え書き (三) 在杭州 大津澗
山
7. 15 大陸うら街道 (二) 落合かんも
7. 15 中国人が十銭講組織 寺の維持に当る
楓涇海慧寺に塚田氏の教化

1939. 7. 15 満洲移民は融和の母 差別意識を全く
解消 物を言ふこの実例
7. 15 天津事件で印度人 日本の真意知る
愉快な土産話持って 瀧照道氏帰る
7. 15 “興亜再建も小国民から” 日満支防
共児童大会 今秋、大正大学で開催
7. 15 林大将も一席 海外祀官養成所
7. 15 東京会談へ送る国民の要望 英の屈服
は勿論だ 即時軍政を布け 立命館総
長中川小十郎氏談
7. 15 小学教育に主眼 教育復興に全力 中
国臨時政府の輝く業績 東亜共同体建
設に期待
7. 15 満支蒙疆にも パンフレット撒く 全
日本仏青連盟の 総会、大会迫る
7. 15 朝鮮で英人 神父の不穏言動
7. 15 満支大都市 在住邦人人数
7. 15 武勲に捧げる 軍国乙女の純情 駒沢
高女の追善部隊
7. 16 開教覚え書き(四) 在杭州 大津澗
山
7. 16 蘇嘉線より 福地定一
7. 16 京都女専生が 大陸に慰問行 夏休みの
勤勞奉仕
7. 16 東京会談へ送る国民の要望 一時的感情
でなく 具体的本質的に 政治意識
で突け 京都基青総主事 末包敏夫氏
談
7. 16 中英英教会は 維新政府に接近 華中
反英総会の決議
7. 16 愈よ東京会談 決裂か成立か? 断じ
て妥協は許されぬ 昨日から本会談に
入る
外務省卓上の山 此国民の与論に裏
切るな 各地からの宣言決議
7. 18 開教覚え書き(五) 在杭州 大津澗
山
7. 18 満支の大都市(上) 在南京 藤井草
宣
7. 18 蒙古、遼の墳墓の 壁画を模写に 京
大研究団に加はり 杉本哲郎画伯出発
7. 18 東京会談へ送る国民の要望 私達の兄
貫よ! 倒英は日本の聖務 徹底的に
確りやってくれ ポース・ビハリ氏
7. 18 日満兩軍に 感謝文 満洲仏教総会
宗教家の仮面に隠れ “諜報” 戦線に
暗躍 イギリス宣教師の 怪行動続々
暴露す
7. 18 渡御の列に 中国人も 大阪天神祭
日華共同で
7. 18 深草派教練 台湾に進展
7. 19 開教覚え書き(六) 在杭州 大津澗
山
7. 19 満支の大都市(下) 在南京 藤井草
宣
7. 19 微妙な点は何れ “大陸うら街道” で
落合かんも氏帰る
7. 19 東京会談へ送る国民の要望 中国とイ
ギリスは 性格的に類似の国 ただ実
力で彼らを制しうる 京大教授 牧健
二博士談
7. 19 世界仏教徒に与ふる書 仏徒の観た東
亜新秩序 ヤング・イーストで認識是
正
7. 20 開教覚え書き(七) 在杭州 大津澗
山
7. 20 大陸うら街道(四) 落合かんも
7. 20 移民村と国境線(1) 満洲講演の旅
より 満鉄巡回講師 甲斐静也
7. 20 南支厦門に 仏教復興の魁 月刊雑誌
“大乘” 創刊
7. 20 承徳東本願寺 孟蘭盆法要 英靈に感
謝
7. 20 奉天忠霊塔 孟蘭盆会
7. 20 東京会談へ送る国民の要望 中国租界
問題の 根本的解決の機 確信もって
強く当れ 立命館大学教授 太田義夫
氏談
7. 20 日満支共同体の 建設は[誠]で貫け
維新政府代表は叫ぶ 大阪の経済懇
談会席上
7. 21 満洲国宗教行政(1) その展望と研究及
対策 奉天 五十嵐賢隆
7. 21 移民村と国境線(2) 満洲講演の旅
より 満鉄巡回講師 甲斐静也
7. 21 大陸うら街道(五) 落合かんも
7. 21 日滿華救世軍の 独立が先決 興亜再
建の宗教工作 基教消息通が強調
7. 21 緑化成功のコツ 鎮江山臨濟寺創建者
細野南岳氏の弁 満洲国と植樹
7. 21 東京会談へ送る国民の要望 当然決裂
だ 印度は狂喜してゐる 東方文化連
盟 戸田芳助氏談
7. 21 東亜共同体研究 社会的基督教の 六
甲特別懇談会
7. 22 満洲国宗教行政(2) その展望と研究及
対策 奉天 五十嵐賢隆
7. 22 移民村と国境線(3) 満洲講演の旅
より 満鉄巡回講師 甲斐静也
7. 22 東京会談へ送る国民の要望 東亜の新
事態認識を 啓蒙するのが要点 ねば
り強く目的貫徹へ 法学博士 恒藤恭
氏談
7. 22 満蒙支開教への 基本的活動の為 政
策の行詰りではない 草摺総務は語る
7. 22 攘英東亜 民族大会
7. 22 挺身的青年僧 一千名を中国へ 興亜
の精神的礎石に 仏連、中支宗連に協
力
7. 22 大陸への神祇 宣揚策確立へ 講究所
が専務等派遣 興亜院へも具体案建議
7. 22 近く巢立つ 大陸向け僧侶 興亜行道

- 員養成終了式 八月、宣撫官を受験
 1939. 7. 23 満洲国宗教行政(3) その展望と研究及
 対策 奉天 五十嵐賢隆
7. 23 移民村と国境線(4) 満洲講演の旅
 より 満鉄巡回講師 甲斐静也
7. 23 内地で最初 内鮮一体の教会 日基加
 茂川教会が設立
7. 23 東京会談へ送る国民の要望 イギリス
 の全面的 東洋退去へ 日本人の英へ
 の買取り 根本的に是正すべき時 京
 大助教授 中村直勝氏談
7. 23 龍大教職員が 興亜促進運動
7. 23 “現地と内地に 距離なきやう” 天
 津の現状語る 満澤知恩院主任
7. 23 全面に盛り上る 興亜の意識 全日本
 仏青連盟 総会への提出議案
7. 23 童話家文学者待望の「パンチャタ
 ントラ」の邦訳成る 一宗茅生婦人の
 近業一 佐藤密雄
7. 25 満洲国宗教行政(4) その展望と研究及
 対策 奉天 五十嵐賢隆
7. 25 移民村と国境線(5) 満洲講演の旅
 より 満鉄巡回講師 甲斐静也
7. 25 大陸うら街道(六) 落合かんも
7. 25 仏青義勇軍を 満蒙支に派遣 西本仏
 青指導者 訓練所の協議会
7. 25 今後の回教 に重大協議 浄宗現地
 開教首脳部
7. 26 重慶政府の 和戦色分け
7. 26 全満洲国に 盛り上る興亜の気 西本
 満洲国開教総長 千葉康之氏談
7. 27 大陸うら街道(七) 落合かんも
7. 27 団扇太鼓を叩きつつ 亜細亜の為祈る
 “印度の父”ガンジー翁が 熱心な
 法華経信者に! 小笠原中將の 許へ
 齋す朗話
7. 27 日華両国浄土宗徒が 同じ日に念仏会
 営む
7. 27 農業集団移民を 更に日蓮宗各派が
 一般信徒に呼びかく
7. 27 義勇軍幹部ら 勇躍訓練所へ
7. 27 内原訓練所に 火の出る受訓
7. 27 大陸うら街道(八) 落合かんも
7. 27 黎明興亜仏 教市民講座 西大谷本廟
 で
7. 28 中国一の霊山五台山に 畏し竹田宮殿
 下御登山 注目すべき“漢蔵仏学院”
 日本仏教徒の援助を要望 福島中尉
 現地報告
7. 28 転向者を通じて 内鮮一体に努力 京
 城保護観察所が
7. 28 仏青の世界こそ 差別観念を止めよ
 半島青年仏徒の叫び
7. 28 興亜行道者 晴れの卒業
7. 29 日英会談原則協定位で 国民は安心す
 な 日ソ問題は極めて危険状態 北樺
- 太の不当圧迫に眼を注げ 山本美越乃
 氏談
7. 29 西本北海教区 興亜講習
7. 29 大陸の宗教政策樹立で 興亜院が宗教
 学者に調査委嘱 石橋、宇野博士等近
 く渡支
 常磐博士渡支 宗教調査行ふ
7. 30 大陸うら街道(九) 落合かんも
7. 30 大陸に呼吸す(上) 南紀 蘆葉
7. 30 杭州より(上) 第五信 福地生
7. 30 北京西本願寺が 正式「別院」に昇格
 内田公使時代の「北京のお寺」か
 ら卅五年目
7. 30 燈影座の 満洲公演
7. 30 戦場に読経しつつ
7. 30 椎尾先生を歓迎す 在北京 成田昌信
7. 30 “回教諸国を日本へ 親善協力せしめ
 よ” 宗教の理解を通じて
 有賀文八郎氏談
8. 1 われ大陸に聞く(1) 中田驛郎
8. 1 三億の回教諸民族に 文化、経済の働
 きかけ
 大日本回教協会が愈よ 今秋京都にも
 支部設立
8. 1 太子御造寺の聖業仰ぎ 新大陸と宗教
 経略樹立 西本願寺臨時集会に提案
8. 1 駒大の満華講座を 興亜修禅道場と改
 称 今秋九月より開設
 曹洞の思想戦士養成
8. 1 ハルピンや香港 満洲に興亜留学生
 西本願寺が募集
8. 2 満洲国宗教行政(5) その展望と研究
 及対策 奉天 五十嵐賢隆
8. 2 戦線 内地 半島 三つ結ぶ赤誠
 皇軍慰問繞り心の華咲く 内鮮融和の
 感激篇
8. 2 樺太の国際河川を涉り 日持上人の遺
 跡を探る 太鼓や題目の香を賄す
 キリヤーク族の宗教行事 第一報
8. 2 西本臨時集會
 法主代務者設定の 寺法改正案成る
 興亜事業予算も可決 会期一日で閉
 づ
 興亜費結構
 “興亜事業費”を 末寺に割当す
8. 3 満洲国宗教行政(5) その展望と研究
 及対策 奉天 五十嵐賢隆
8. 3 亜細亜民族の亜細亜 建設に協力期待
 アジア防共委員懇談会 十四ヶ国代
 表へ招請状 今秋東京で開く
8. 3 大谷尊由総裁逝去 蒙疆張家口旅宿に
 兩陛下の御見舞
8. 3 最近の張家口 一番悪い天候
8. 3 ラマ僧に鍼灸術 医療設備皆無の 滿
 蒙奥地に福音
8. 3 支那に始り 支那で近く台下 半生を

- 共にした 本多執行長の追憶
光明氏と泰子 夫人令嬢急行 喪主
元氏と本 多執行長も 遺骸北京に
遺骨で帰東 西本願寺の 元老等会
議 会社と本山 合同葬か 築地別院
で
1939. 8. 3 ビルマが送る話題二つ
仏教背景の日緬協会 英の手を離れ
て 日本と直接握手
ここにも英国の魔手 留学生に旅券
不許可 仏教国への留学空し
8. 3 大陸の宗教国策へ 文部省も調査員を
派遣 相原宗教局囑託近く出発
8. 3 “日蓮村”建設 の具体策協議
8. 3 興亜の児童養成に 愛国訓練を実施
知恩院社会課が
8. 3 朝鮮基教会 認可に慎重
8. 4 満洲国宗教行政(7) その展望と研究
及対策 奉天 五十嵐賢隆
8. 4 大陸うら街道(十) 落合かんも
8. 4 家畜減り物資も欠乏 言語に絶する民
衆の困窮! ソ連の弾圧に堪へかね
安住の地求め満洲国へ 外蒙近状を語
るラマ僧
8. 4 言葉の通ぜぬのが 一番もどかしい
中国女学生の訓育語る 平馬、浜岡兩
女史 北京覚生女
8. 4 石家荘の妙 心派教会所 水害で崩壊
8. 4 光明氏一行 北京に安着
8. 4 積極的に乗出す 金光教の宣撫工作
中北支布教監理所長に 金光三代太郎
氏任命
8. 4 半島仏青連盟 全国的に統合
8. 4 濟南西本願寺
8. 4 興亜局長
8. 4 興亜学術協会 今月末より 北京で開
催
8. 4 興亜に備へて 中国有為の青年を 僧
侶に養成せよ 大陸教化は医術兼業で
松本文三郎博士談
8. 5 満洲国宗教行政(8) その展望と研究
及対策 奉天 五十嵐賢隆
8. 5 北京覚生女学校御成り 中国女子教育
事業御奨励 陳校長等に握手を賜ふ
大陸御転戦の李王根殿下
8. 5 雲崗の石仏調査研究中 北魏文化の古
跡「方山」を発見 世紀の脚光浴びて
登場
8. 6 引続き招致する ラマ教青年僧 早く
も明年第二回迎ふ
8. 6 一万五千元を計上 青島神社二十周年
鎮座記念奉祝会举行
8. 6 満洲国宗教行政(9) その展望と研究
及対策 奉天 五十嵐賢隆
8. 6 大陸に呼吸す(下) 南紀 蘆葉
8. 6 支那仏教講話 野依秀市著
8. 6 北支の豪雨で 救援に努力 石家荘本
願寺
8. 8 満洲国宗教行政(10) その展望と研究
及対策 奉天 五十嵐賢隆
8. 8 日支仏教交渉上価値ある 武昌開賢の
質問(上) 在南京 藤井草宜
8. 8 大陸うら街道(十一) 落合かんも
8. 8 正信偈誦して死に直面 無人島に穴居
三年 真宗信仰に生きた新事実 白瀬
轟中尉の直話で判る 明治二十六年の
千島探検隊挿話
8. 8 大派土岐氏の渡島 探検隊に参加して
宣教師と曹洞宗僧侶
8. 8 “海神”も併祀か 南洋神社御祭神問
題 権威を委員に研究
8. 8 支那寺を修理 中国青年教化 大派、
長谷川氏
8. 8 尊由氏遺骨 空路帰東 北京の告別式
8. 8 今ぞ大陸に羽搏く 興亜行道者前線へ
晴れの終了式盛ん
8. 8 北海道及び 樺太へ飛躍 中根環堂氏
8. 8 鶴見高女で 興亜仏教 講座開く
8. 9 聖戦の意義を 徹底せしめよ 一事変
処理の唯一路—
8. 9 行動的知性の要求(中) 一東亜共同
体建設への一思案— 三浦参玄洞
8. 9 日支仏教交渉上価値ある 武昌開賢の
質問(下) 在南京 藤井草宜
8. 9 大谷尊由師を偲びて 甲斐和里子
8. 9 基督者の医療班ゆゑに 喜ぶ蕪湖の中
国窮民 学生医療班の第一信
8. 9 世界最古の木版 “陀羅尼經”を発見
印刷術発明の祖 五百年祭を前に
8. 9 哀し・声なき帰還 尊由氏遺骨築地別
院へ 連日湿かなお通夜
8. 9 興亜長期建設に対応 大派興亜事務局
成る 戦時中、満支開教事務も隸属
統後奉公の完璧を期す
8. 9 満支の開教費は 興亜事務局予算に包
含 安田宗務総長談
8. 9 花蓮港街に 大派布教所 アミ族皇民
化期待さる
8. 9 大派広東布 教所の活動
8. 10 行動的知性の要求(中) 一東亜共同
体建設への一思案— 三浦参玄洞
8. 10 尊由氏を憶ふ、松原到達
8. 10 中国僧やラマ僧も参列 古義の現地旧
盆法要 日程も愈よ本きまり 高岡管
長十八日出帆
8. 10 講究所と興亜院の 折衝に曙光見ず
講究所は北京に分所設置 大陸の神社
行政確定未だし
8. 10 愈よ29日に決った 日華両国の念仏会
広く全浄宗寺院が修行
8. 10 文化を通じ蒙古 開発教化に着手 民
政部の運動具体化

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1939. 8. 10 内鮮両基連が 協力覚書を手交 内鮮一致の具体化
8. 10 興亜行道の 宣撫官現地へ 昨夜発つ
8. 11 行動的知性の要求(下) - 東亜共同体建設への一思索 - 三浦参玄洞
8. 11 印度仏教復興の曙光 - 仏弟子の遺骨返還 - 来馬琢道
8. 11 大陸うら街道(十二) 落合かんも
8. 11 滿蒙開拓土慰問の 両嬢招き現地報告 丹波、出雲神社
8. 11 五族の純潔のため 新京に婦人矯風会館 建設手続き全くなる
8. 11 西本本山で 一座法要 尊由氏葬儀 当日同時に 台湾の追悼
8. 11 大洪水のため 馬車で強行軍 京大蒙古調査団
8. 11 中国四億の民衆は 如何なる宗教生活をするか 愈々興亜院の依頼うけてけふ、宇野博士ら調査に出発
8. 12 “大陸花嫁教室” 福井西別院に開設
8. 12 印度革命の烽火 急進党の結成急ぐ 壮年政治家ボース氏蹴起
8. 12 妙心漢口教会所 改修統務会議 現地から代表者出発
8. 12 大派滿洲開教監督に 大照氏を起用 今後の手腕期待する
8. 13 興亜宗教戦(1) - 特に若き宗務家に懇ふ - 柴田澄雄
8. 13 大陸うら街道(十三) 落合かんも
8. 13 滯鮮五日の成績 谷本富
8. 13 北樺太利権
8. 13 日本精神を海外に宣揚 「国体の本義」 海外版委員決る 文部省に 対外文化宣揚課(仮称) 設置
8. 13 大谷尊由氏葬儀 きのふ築地別院で 本山や各地一斉に
8. 13 華人の檀徒総代 徐州の曹洞宗布教所
8. 13 隣邦児童愛育所へ 畏し・お使御差遣 中国孤児の感激
8. 13 底力示す金光教 上海に宏大な教会所 本部に於て協議中
8. 13 北支で興亜 展覧会
8. 13 杭州より(下) 第五信 福地生
8. 15 興亜宗教戦(2) - 特に若き宗務家に懇ふ - 柴田澄雄
8. 15 断末魔の重慶政府 雲南を猶太人に解放声明 独系猶太人の狂奔
8. 15 曹洞完全書 滿洲国皇帝へ 献上の手續了す
8. 15 大陸開発の尊き人柱 大谷尊由氏の盛葬 宮家御代香を始め 会葬者無慮二万余
8. 15 内鮮仏教一体化に 興亜親善夏安居 朝鮮晋州での結衆 諸行事等決定さる
8. 15 法華八講等 朝鮮で最初
8. 15 部長更迭と 中国伝道 ナザレン教会
8. 15 “親子三人大陸で”と 荒鷲の父は語る 大派新滿洲監督大照氏
8. 15 近畿神連が皇 軍慰問団派遣
8. 16 興亜宗教戦(3) - 特に若き宗務家に懇ふ - 柴田澄雄
8. 16 神主さんの念願叶ふ 十五日附で従軍許可 従来の仮称 従軍教師 最初の従軍神職 藤井春雄氏
8. 16 教育者の中国視察 府教育会より六氏派遣
8. 16 寺廟整理や 本島人教化 西本全台湾 開教使協議
8. 16 興亜行道者養成所 今秋第二回開設 各宗へ参加勧誘
8. 17 此處も長期建設(上) 中支宗教大同連盟 結城瑞光
8. 17 興亜宗教戦(4) - 特に若き宗務家に懇ふ - 柴田澄雄
8. 17 張家口に 記念塔 尊由氏の分骨
8. 17 官社神職の従軍困難 軍と連絡なく 具体策無し 内務省神社局の弁
8. 17 曾ての反逆朝鮮人が 神宮参拝で完全に悔悟 彼等を中心に座談会を 朝鮮保護觀察所の新方針
8. 17 白衣の勇士が 法衣の戦士に 仏光寺派も 南京に進出
8. 17 村人と耕し談る 佳木斯の移民開教僧 西本願寺から派遣
8. 17 組織、陣容を改め 興亜の対策 時局活動に拍車 天理教で考究中
8. 17 滿洲・北中支に亘り 皇軍慰問団派遣 大谷派宗議会の杜挙
8. 17 駒大お伽班 台湾で放送
8. 17 大陸移住で 視察員派遣 中支融事協会 本年は廿名を
8. 18 當城子漢代壁画 …ワールマンハへの旅(1) 杉本哲郎
8. 18 此處も長期建設(下) 中支宗教大同連盟 結城瑞光
8. 18 「阿彌陀經繪図」一万部 五台山に納経、親善強調 晋北日華仏教連合会から 中国民衆の慰撫と福利計る
8. 18 興亜の礎に捧ぐ赤誠 上海西本願寺の盃灯
8. 18 事变下の“保護日” 保護機構の整備 拡充や 大陸進出の奨励
8. 19 われ大陸に聞く(2) …虚往実帰と 智境合一の心構へ… 中田驥郎
8. 19 窮した中国側 英米学界に哀願 日英会談中止に狂奔
8. 19 上海基青が中国 地方青年層へ接触 杭州の好成績に鑑み 南京に日語学校
8. 19 内地の事情に あまりにも疎い 半島人の青年学生達 大陸工作に示唆
8. 19 英霊奉祀の問題や 従軍神職の対策

1939. 8. 19 神社界有力者が 研究協議会計画
 応召・出征僧侶の 未教師取扱を協議
 仏立講教務会議
8. 19 戦線と読書(一) 北支にて 山口了
 一
8. 19 蘇州より 福地生
8. 19 二之部耀智氏 従軍僧に
8. 20 われ大陸に聞く(3) …虚往実帰と
 智境合一の心構へ… 中田驥郎
8. 20 菅城子漢代壁画 …ワールマンハへの
 旅(2) 杉本哲郎
8. 20 大陸うら街道(十四) 落合かかも
8. 20 仏跡へ捧ぐ 大灯籠 英の横槍と 事
 変のため 雨ざらし 日印親善に初志
 貫徹へ
8. 20 現地での医師は神様 骨身にしむ兵隊
 さんの親切 歯科医の目に映った戦線
 島博士談
8. 20 中日組合会が 蘇州に孤児院建立
 当局の認可を得
8. 20 対ラマ工作 緊切問題協議 善隣協会
 が 権威者集め
8. 20 満洲国主催全 国僧侶講習
8. 20 事変後激増した 中国のカ教洗礼者
 皇軍の理解ある処置と 宣教師の犠牲
 的活動
8. 20 広東に妙心 布教所設置 高林氏南支
 視察
8. 20 従軍神職問題 に一切触れず 京都府
 神の 時局対策委員
8. 20 龍江省民生庁 の僧侶講習会
8. 22 われ大陸に聞く(4) …虚往実帰と
 智境合一の心構へ… 中田驥郎
8. 22 旅順より奉天へ …ワールマンハへの
 旅(3) 杉本哲郎
8. 22 南都北嶺の学匠、僧侶 呉越同車で大
 陸へ 締めて六十名の交歓
8. 22 世界紅卍字会後援会 九月末発会式挙
 ぐ 教義を正しく理解して 彼我の親
 善に資す
8. 22 日滿仏教の一致は 読経の調和から
 先づ般若心経の読経法を 両国僧侶、
 相互に習得
8. 22 満洲開教の 発展物語る 西本間島の
 所属変更
8. 22 厦門特別市長等 西本願寺を訪問
8. 22 国境警備に咲く 傷痕軍人開拓士結婚
 相談部 開設早々の朗報 大派婦法会
 ハリキル
8. 22 グバオ西本 幼稚園実現
8. 22 東亜文化協議会 日本側提案決る
8. 23 われ大陸に聞く(5) …虚往実帰と
 智境合一の心構へ… 中田驥郎
8. 23 奉天の数日 …ワールマンハへの旅
 (4) 杉本哲郎
8. 23 日本の僧侶が開基した 中国観音の霊
 地 普陀山に村上独潭氏入島 宣撫工
 作に献身
8. 23 護国の經典誦し 結願に懋靈法要 杭
 州日華仏教会の 東亜和平祈祷、陣亡
 将士追悼
8. 23 大陸窮民に粟を 浄宗が社会事業期し
 献粟運動展開
8. 23 兵隊さんも参加 西本願寺の世話で
 広東の盆踊大会
8. 23 従軍神職に就いて 神社局は対策せず
 結局神職経験者採用か
8. 23 満蒙華を地盤に隠然 勢力を持つ“白
 卍字会” 日本僧侶の大陸移住計画
 中支宗大連に協力申込む
8. 23 興亜事務局次長に 恵美氏を起用 後
 任は植田恵明氏 大派
8. 23 中滿慰問行脚了へ 秋田仏連代表帰る
 炎熱下百日の行程
8. 23 釜山西本 暁天講座
8. 24 皇紀二千六百年記念に 大陸移民の訓
 練所開設 千葉県下の拓士を養成 安
 房神社の画期的試み 神社界で最初
8. 24 北京〇〇病院に 仏殿落成入仏式 西
 本願寺より本尊
8. 24 北滿青少年拓士に 某將軍の苦言 関
 係者の反省求む
8. 24 愈々興亜促進の 結論的陣容結成 西
 本の運動完成近し
8. 24 従軍神職は凡て 靖国神社職員に 新
 制度の合理的運用期し 注目すべき意
 見台頭
8. 24 南洋神社の 御祭神 庁の方針決る
8. 24 金光教の大陸行 希望者四十七名 近
 く指導者と渡支
8. 24 中国維新政府が 日語学校など制限?
 宗団経営の“教育事業条例”
8. 24 逐年減少する 東亜の外国宣教師 果
 して教会の独立 自治がその原因か
8. 24 “北京は如斯和平” お寺詣りの要望
 で 西本願寺別院開座
8. 25 天津水禍と 北京仏教界
8. 25 北京で開催される 東亜文化協議会
 仏教家として唯一人の 常磐大定博士
 渡支
8. 26 満洲国建国廟成り 最後の御祭神問題
 へ 講究所へ指導依頼
8. 26 官幣大社に御列格熱望 南方進出の精
 神的拠点 南洋神社の重要意義
8. 26 天津水禍に 救援の手 天理教徒活躍
8. 26 満蒙学徒建 設隊歓迎 臨濟学院
8. 26 興亜開土養成の新計画 西本願寺の新
 運動一部実動 後援会設立の趣旨成る
8. 27 北京覚生女校 創立に貢献 石田榮熊
 大佐
8. 27 天津水害救援に 内地仏教徒より起て
 北京仏教団の救済方針

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1939. 8. 27 支那現地に 皇軍慰問と 教況視察の
西本会衆団
8. 27 満洲国免囚保 護事業会設置
8. 27 天理教信者兵士が 医官の前で困った
話 誠に興味深き齒科医の見た現地の
実状 島善一郎博士は語る
8. 27 戦線と読書(二) 北支にて 山口了
一
8. 27 杭州の夜 福地生
8. 27 大乘精神を把握し 留日僧近く婦国
親善提携の意気に燃ゆ
8. 29 興亜の聖業完遂へ 恒久的教団の体制
整備 天理教が新に興亜局設く
8. 29 興亜奉公日や 天津水害見舞 仏立教
務会議
8. 29 満洲国開拓 殉職者弔ふ
8. 30 天津の水禍で 東本願寺活動
8. 30 怨親平等祈願 きのふ、北京、京都同
時に 興亜同願会
8. 30 従軍神職問題で 講究所が軍部に申入
れ 神職とは現任を 指すの原則堅持
8. 30 第三国とも連絡 日本基育同盟の
南支文化工作案
8. 31 婦人、女青会に指令 天津を病魔から
救へ 西本願寺の薬品募集
8. 31 天津西本願寺 避難者に開放
8. 31 満洲の朝鮮人訓練 官民協力の吉林省
密峰に 神社中心の収容道場
8. 31 婦国中の開教使従軍僧等に 現地帰還
を致命 大派興亜事務局ハリキル
8. 31 満洲の神社 行政拡充 駐満大使館に
神社課設置
8. 31 海外神社奉 仕員養成所 第一回修了
式
8. 31 朝鮮総督府が「皇国青年歌」制定
朝鮮青年歌は廃止
8. 31 指導原理を 明瞭にせよ ラマ教問題
で 当局に進言
9. 1 水禍の天津へ 曹洞慰問使を 越智幹
事出発
9. 1 天津に籠城 すわらじ劇団 三十名帰
洛
9. 1 移民と職業進出に 融事協会の更生訓
練 関東、関西に開設
9. 1 近く青島にも 宗教連盟結成 創設に
結城支 宗連主事を招聘
9. 2 中支宗連の実働要望 中国側仏徒から
起る 円瑛法師の抗日暗躍で 今後の
宗教工作強化期待 “中国仏教界の
動静監視せよ”
南洋等の華僑扇動 重慶政府に百万
元 抗日線上に暗躍
9. 2 日満両軍に感謝 盛大な戦勝祈願 パ
ルシャガル草原の蒙古人 博克因鄂博
祭を執行
9. 2 皇軍慰問の 大派宗議団 あす満支へ
9. 2 視察者も足入れぬ 辺疆の移民地慰問
トラックと徒歩で強行軍 大派満洲
開教監督部
9. 3 満洲国の楽 土を認識 外蒙の俘虏
9. 3 筏に乗って 避難者救済に努む 別館
を収容所に開放 大派天津別院活躍
9. 3 海外神社経営 にこの不祥事
9. 3 故尊由氏の 五七日忌
9. 3 天津救援に拍 車をかけよ
9. 3 開教東西譚(一) 在熱河大谷派 登
坂溪雪
9. 3 石家荘を中心に 宗教反共運動盛ん
日華宗教家が結成 河北省全体に実働
9. 3 興亜開発の 仏教音楽新定進む 歌曲
五十曲選定
9. 3 興亜線上に「踊る」大同仏教会の音
頭で新京 忠霊塔前に盆踊り
9. 3 問題の洛陽 基督教会 聖壇竣成す
9. 3 更に北支に 追悼の行脚 牧相円氏
9. 3 故大谷尊由氏 哀しき帰山 全行程決
定
9. 3 帰省中通訳に 叡中留学中の 蒙古青
年六名
9. 3 現状では自慰的工作 中国側に浸透力
なし 中国有力宗教者を加入せよ 中
支宗連への要望起る
9. 3 誠に区々たる 台湾の寺廟整理 地方
的神仏政策
9. 3 朝鮮救世軍の処置 釜山 岡本尚蔵
9. 3 東亜僧団創始者 向出哲堂和尚を偲ぶ
在杭州 天津潤山
9. 3 杉浦晴男著「東亜連盟建設綱 領」
を読む 三浦参玄洞
9. 3 戦線と読書(三) 北支にて 山口了
一
9. 3 従軍神職職の活用で 内務省が軍と協
議 現任神職以外採用せず
9. 3 ラマ僧の 美術講習 七十時間指導
9. 5 蒙疆にも 盆踊り 大同の晋北 仏教
学院生
9. 5 抗日教育の非悟り 親日へ急旋回 山
西の米人宣教師
9. 5 『金陵東文学堂』生残りの 中国要人
ら一斉に起つ 一致団結日華親善へ
四十年ぶりに実結ぶ 東本願寺対 支
文化事業
9. 5 京城でも交歓 大雄殿では大法要 内
鮮天台夏安居の 大多喜守忍氏一行
9. 6 東亜行動理論の再検討 一対支宗教工
作私見(上) 宗教問題研究所 伊
藤力甫
9. 6 天津の水禍救済 北京仏連の慰問使急
行 慰問品廿五箱配給 金光教の慰問
9. 6 興亜兵站基地の 朝鮮を興せ 西本の
基礎的運動
9. 6 中国現地に 視察員を派遣 日本宗教

- 連盟の計画
1939. 9. 7 東亜行動理論の再検討 一対支宗教工作私見(中)一 宗教問題研究所 伊藤力甫
9. 7 アジアに活躍 “源義経” 大林馨氏の 大野心作
9. 7 天津の水禍救済 芝原西本願寺総監慰問
更に第二次義 金を天津へ 大谷婦人法話会
京都市から 一万円支出
古義園宗より 義金を募集
9. 7 水害難民に 粟を施与 新郷合同慰霊祭
支那の古式で 孟蘭盆会執行 日華仏教同盟会
9. 7 日華連合のお盆 怨親平等の追悼会
濟南浄居寺で厳修
9. 7 日本は欧州大戦勃発で 文化方向を転換 東洋と南米へ主力
9. 8 東亜行動理論の再検討 一対支宗教工作私見(下)一
9. 8 十四年振りの 石家荘の水禍 西本願寺活動
9. 9 絶海の西沙群島 日本領土確認で けふ智積院で墓前報告祭
9. 9 “欧州戦争は 印度独立の好機” 在京印度人の決議
9. 10 大陸の宗教工作は? 北支に比し満洲・中支は遺憾 洋大原田幹事長の報告
9. 10 今次事変に戦没の 将兵の霊慰む ビルマ寄贈の仏像四体 築地本願寺に奉安
9. 10 興亜仏教の確立を 現地仏教学界代表も参加 日本仏教学大会
9. 10 日華百名の 青年僧訓練 北支同願会 仏学院開設
9. 10 ハルビンの 孔子廟改修
9. 10 大派皇軍慰問使 本田氏再渡支 彩管と数珠の旅
9. 10 “合掌” すると 万事解決! 支那宗教調査の 宇野円空博士語る
9. 10 開教東西譚(二) 在熱河大谷派 登坂溪雪
9. 10 杉浦晴男著「東亜連盟建設綱領」を読む(続) 三浦参玄洞
9. 10 戦線の追想 呉淞クリーク 高橋良和
9. 12 植民政策の一機関 英教会は神を冒瀆 何故、日本基督教徒は黙するか 在天津中村牧師の書信 宗団の宣撫 工作に示唆
9. 12 大陸へ行かぬものは 他の学校へ行け 学園を大陸色に塗りつぶす 中川立命館総長の抱負
9. 12 満洲開教陣の強化で 更に新人を求む 西本願寺盛んに動く
9. 12 神社界の諸問題対策 小笠原氏の大陸視察談兼ね 講究所関係首脳者ら協議 一切を博士に還元 神社行政も拡充 講究所は委員会を設け 具体的答申案作成 満洲建国廟 御祭神問題 神社局が近く 関係者へ通牒 従軍神職 制度運用
9. 12 浄宗満洲開区 二教会所新設
9. 12 慰問品を持参 現地に帰還 滝沢遼道氏
9. 12 臨済宗の 満蒙研究
9. 13 降雨で悩む ワールマンハの調査 本月末帰来の予定
9. 13 正義日本を高揚 ビルマ独立運動の熱血漢 逝くなったオツタマ比丘 小林義道氏の追憶談
9. 13 天津救援金と 北京妙心別院
9. 13 北京財界人が 大別院建立を叫ぶ 北京西本願寺別院 昇格記念式盛ん
9. 13 台宗開教師 支那語の現地訓練
9. 14 宗教工作につ いての些考
9. 14 正に仏国土の出現(蒙古連合自治政府 成立式典)
9. 14 常磐大定博士の主唱で 興亜文化提携の契り 王揖唐氏等要人参集 北京東本願寺の親善風景
9. 14 国境の空を睨み ラマ僧も執統訓練 知恩院訓育道場で実施
9. 14 満洲紅卍字会が 天津の水禍救済へ 満鉄も感激・運賃全免
9. 14 中支那宗教大同連盟の 前途は悲観的だ 北支も楽観はできない 上山弘済 会長語る
9. 13 満洲国道教 総会結成 準備委員会
9. 13 女教員団の 満洲移民視察
9. 15 満洲移民視察行(1) = 第一信 = 船中にて 武内了温
9. 15 総督府も力辯 朝鮮開教に長期建設 新方策の少年団運動 筒井氏談
9. 15 廬山に白蓮社復興 新二幼稚園を創設 南京知恩院の計画
9. 15 石川軍曹の 戦場談聴く
9. 15 朝鮮長老派40万教徒 精勤連盟に進んで加入 過去を精算し堂々の宣言
9. 15 満洲拓土の 慰霊法要
9. 15 満洲国行程 陛下に拝謁 大派本多開教使
9. 16 満洲移民視察行(2) = 第一信 = 船中にて 武内了温
9. 16 馬田行啓氏 満洲国へ 新京の日宗 経王寺落慶
9. 16 北支回教徒統一近し 日本に対する信頼 世界的に勃興の勢力
9. 16 英本国支援を ガンジー翁峻拒 り総監の要求一蹴
9. 17 満洲国建国廟と 祭神の問題

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1939. 9. 17 満洲移民視察行(3) = 第一信 = 船中にて 武内了温
9. 17 開教東西譚(三) 在熱河大谷派 登坂溪雪
9. 17 東亜僧園創始者 向出哲堂和尚を偲ぶ(中) 在杭州 天津瀾山
9. 17 日華兩國女性が 描く親善風景 北京大学農学院女生 京都女専で交歓
9. 17 印度知識階級 日本観光団 あす、入洛
9. 17 留学を了へて 支那僧故国へ 曹洞関係の五名
9. 17 満洲建国廟の御祭神は 龜く迄勲功者の英霊を 祭式は伝来の満洲国式で 我国神社界の主要意見
9. 17 台湾開教区確立 中野氏を総監に任命 深草派の教線進展
9. 17 杉浦晴男氏著「東亜建設綱領」の読後感 林虎雄
9. 19 日ソ停戦協定の成立
9. 19 満蒙の大陸偲ぶ 蒙古苞式宿舍 内原以外比疇見ぬ 本願寺沓掛訓練所参観
9. 19 満蒙開拓の 女子指導員 十月に渡満
9. 19 人材枯渇を打開せずば 大陸の宗教工作は困難 興亜院の委嘱で調査終る 石橋智信博士の視察談
9. 19 文部省も訓練に参加 内原訓練所にも入所 注目された浄宗信仰道場
9. 20 興亜の闘士は かくして生れん 西本願寺沓掛訓練所参観
9. 20 大連聖徳会 秋季大祭 殿額奉掲式
9. 20 従軍神職訓練所 講究所、全神中心に開設 軍と折衝実現期す 従軍神職訓練所要項案
9. 20 青島に隠れた聖者 日華親善に愛の学校 青島学院長吉利翁の半面
9. 20 支那奥地の生活 “日本”は上海の街の名か まだランプさへない
9. 20 北京基連の 天津水禍救済 内地基青も募金
9. 21 東西本願寺議員団 呉佩孚將軍に会見 儒・仏・道三教を語る 更に張家口へ慰問行
9. 21 洪水を越えて 蒙疆各地の旅 小牧博士帰來談
9. 21 朝鮮基督者が 純潔運動を起す 内地基督者の応援で
9. 22 全鮮思想報国連盟 京城に総会開催 内地転向者も応援に
9. 22 社会事業実施に伴ひ 拡大強化を画す 南京東本願寺の躍進 竹津中南支監督上洛
9. 22 優秀者五名選び 日本に留学僧 晋北仏教学院が 仏連に斡旋申込む
9. 22 豊山派の開教戦線確立 新京に新寺建立 急ぎ 蔵本氏を開教師長に
9. 23 軍属祭祀官設置を前提に 従軍神職制度対策決る 採用に厳選期し中央で統制 従軍神職訓練所 愈よ開設に決る “必携手帳”も急ぎ編纂 全神、講究所共同で
9. 23 中国婦女に職を与へる 物心両面から 日華親善強化 大派、竹津中南支監督談
9. 23 竹津中南支 監督に聴く 光暢法主夫妻
9. 23 引続き石油 漁業問題折衝 北樺太買収も討議? 東郷・モロトフ会談
9. 23 日華兒童が仲よく 机を並べて勉学に励む 隣邦兒童愛育所の学童 悉く付近学校に入学
9. 24 大陸宗教工作の方針確立に 各宗の事変対策を調査 興亜院華北連絡部の試み
9. 24 台湾開教区の 全島特別伝道 浄土宗が
9. 24 大陸伝道中心に 組合教会青年大会 洛陽教会に開催決る
9. 24 現地宗教家は 興亜院と連絡とれ 樟本北大教授談
9. 24 東亜僧園創始者 向出哲堂和尚を偲ぶ(下) 在杭州 天津瀾山
9. 24 満洲移民視察行(4) = 第三信 = 千振にて 武内了温
9. 24 戦線の追想 壟塚 高橋良和
9. 24 高岡古義管長ら 大陸の労苦を偲ぶ やつれた頬で帰朝
9. 26 在支宣教師と 日本基督者
9. 26 蒙古転生者四名 日本に留学 身延山と護国寺で研究 日蒙仏教親和会幹旋 ラシュート氏に 印度事情聴く 正大の研究
9. 26 杉本哲郎氏 帰朝歓迎会
9. 26 天理教の上海 兒童保育処 愈よ近く開処式
9. 26 今秋東京と大阪で 回教圏展覧会 回教国よりも代表來朝
9. 26 組合教会の 朝鮮進出 釜山教会に 海老沢氏
9. 26 呉佩孚將軍 との一時 一紙友近信一
9. 27 満洲移民視察行(5) = 第三信 = 千振にて 武内了温
9. 27 重慶政府に 最後の末路示す 気を吐く サハイ氏 上海から放送試む
9. 27 融和事業関係指導者は 是非、移民地に必要だ 龍瓜村の事実が証明 河上大阪府主事視察談
9. 27 日満高工の 新校舍落成 立大予科増築
9. 27 聖戦下の仏教学大会 北支同願会からの メッセージ要請

- 満支代表者に招聘状
“仏教と大陸問題”で 一大討論会
満支代表者も出席
1939. 9. 27 興亜仏教班員 第一回二十名 六日渡支
9. 28 満洲移民視察行(6) = 第四信 = 千振にて 武内了温
9. 28 天津水禍地の 宣撫用に「菜」を贈る
9. 28 興亜教育大会 教育祭当日大阪で開く 文部省も諮問案を提出
9. 28 満洲移住地視 察団の報告会
9. 28 初の興亜仏教班員 愈よ中支へ! 仏連幹旋の下に 十月六日神戸出帆
9. 29 満洲移民視察行(7) = 第五信 = 龍瓜にて 武内了温
9. 29 金光教が更に 上海に夜学校開設 一般支那民衆のため
9. 29 日本絶対支持こそ アジア解放の道だ “親日教印” 叫ぶ サバルカル氏の便り
9. 30 従軍神職対策案 愈よ軍との折衝へ 觸穢観はどうなる?
9. 30 大同府附近に残る 北魏、遼金の都市 その民族性に就て語る 京大教授、那波利貞博士
9. 30 南京に於て 戦捷祈願祭 十一月全神が
9. 30 拓務省試験に 二人とも見事パス 満蒙開拓義勇軍幹部 杏掛道場の喜び
9. 30 国民党三民主義を 全面的に否定す 占領地には軍政を布け 大日本生産党の決議
10. 1 興亜院は どうしてゐるか? 三浦参玄洞
10. 1 朝鮮儒林大会開き 時局覚醒運動へ 儒教思想の振起に立つ
10. 1 興亜仏教班 員を送る
10. 1 満洲に於ける 日本人の不自然生活 病院の完備は自慢ではない
10. 1 戦線の追想 負傷 高橋良和
10. 1 天津水害慰問 全国の神職 団体が拠金
10. 3 大陸進出の 若者養成 西本願寺に 興亜寮開設
10. 4 日華両国民親善の要諦 人並に面子認めよ 一灯園の合掌は爆弾以上 元天津警察局長閻氏談
10. 5 普陀山入島五十日 潜む匪賊や遊撃隊も 此処では善人に 宣撫のため永住を覚悟 村上獨潭氏帰還談
10. 5 十一月月上旬期し 南京で大祭典「全神」で正式決定 近く軍部当局と懇談
10. 5 戦線に『中外』を語る 紙芝居で皇軍将士慰問 志村卯三郎氏との奇遇 元本社員 沖田昌進氏発
10. 5 大陸の宗教工作は 目下その緒に着いた程度 内地教界の刷新と併行が緊要 相原宗務官の視察談
10. 5 閻潤春子さん 錦州女学校に 京女専大陸進出
10. 6 赤裸の現地宗教情勢聴く 全支に澎湃と漲る 反共和平の空気 悲観的な中支宗教大同連盟 ズバ抜けた天理教の活動
10. 6 生長の家東亜同和会 大陸教化の闘士 養成 大阪に学校設立
10. 6 中南支那の 西本布教陣 近来の大異動
10. 6 蒙疆への進出と 日独文化親善 天理外語に蒙古 独逸両科を新設
10. 7 真の親善は 日華民族性の相違 日本人の硬骨・中国人の軟骨 両民族混婚で中和が必要
10. 7 京大の梅原教授 南京で図書整理
10. 8 大陸の伝道は 青年の手で ハルピン伝道応援 第二期三年可決 組合男女青年全国大会
10. 8 新京経王護国 寺の落慶式
10. 8 日持上人遺跡 イランで発見 馬田部長顕彰
10. 8 杭州より 福地定一
10. 10 大陸仏教工作管見(1) 洋大 大倉山人
10. 10 朝鮮・台湾両方面へ 光暢法主代理二連枝 戦没者追弔会と病院慰問 本月中旬に出発
10. 10 東亜青年協力運動に 一兵卒として参加 末包京都基青主事
10. 10 神奈川県日華仏教会 会長以下役員も決り 来月十日発会式挙ぐ
10. 11 大陸仏教工作管見(2) 洋大 大倉山人
10. 11 杭州の慰霊塔と 南京忠霊塔の除幕式 神社局と全神共同で執行
10. 11 興亜保育 日満支提携 重要議案審議 全国保育大会終る
10. 11 オツタマ比丘と ゴツダード翁悼む 国際仏教協会の法要
10. 12 大陸仏教工作管見(3) 洋大 大倉山人
10. 12 エチオピア開発に 伊太利が花嫁政策 “女が不足してゐる”
10. 12 国旗に慰問文添へ 半島同胞から前線へ 慰問袋二千個贈る
10. 12 南洋パラオ寺 入仏落成式
10. 12 北京に於ける 稻荷神社創建成る 近く鎮座祭を執行
10. 12 従軍神職制対策決り 内務省近く 陸軍省へ回付
10. 12 仏学院日語 学校を開設 揚州西本願寺

1939. 10. 13 大陸仏教工作管見(4) 洋大 大倉山人
10. 13 支那開教に新生面 厚和市政府が西本願寺に勧め 大規模の宗教村建設
10. 13 晋北仏教学院生 厚和へ修学旅行
10. 13 興亜信念確立講演会 真理運動本部が
10. 13 銀貨鑄造や印刷施設 北支より一足お先に進む 蒙疆地方の文化建設
10. 13 大陸は招く 現地情報 どしどし渡航せよ そして産めよ殖せよ
10. 14 大陸仏教工作管見(5) 洋大 大倉山人
10. 14 仏教工作に対する 興亜院の希望
10. 14 現地の宣撫工作は 宗教家が全部引受けよ 軍人はその顧問だけでいい 鈴木一馬中將は語る
10. 14 宗教信念を涵養 更に大陸へ 中文文化工作に活躍の 音楽家榊氏が得度
10. 14 “鉄屑の寄贈歓迎” 日満高工の実習材料不足
10. 14 東亜各国の親善に 大亜細亞釈尊成道会 仏教四大学道友会が
10. 14 奉天仏青会の 第一回弁論大会
10. 15 満蒙移民と 宗教村建設
10. 15 大陸仏教工作管見(6) 洋大 大倉山人
10. 15 興亜の国策と歩む 第十二回仏教学大会開く
“仏教と大陸問題” 満洲国からも参加し 熱心に意見の交換
10. 15 大陸教化と仏教(特に日本山の立場から) 二之部躍智
10. 16 興亜学生挺身隊 興亜寮を中心に運動 学生と西本でプラン練る
10. 16 生長の家東亜同和会 紅卍字会との連絡図る 目下兩者間で準備中 今後の活動注目さる
10. 16 大陸と宗教問題の討議緊張 新東亜建設に参加の 仏教徒の時局観 根本方針確立叫ぶ
大陸の宗教工作には 先づ内地の仏教国策確立
支那人の人生観は仏教 思想戦はこの 仏教で勝て
東亜は東亜 人のものへ 宗教工作の要諦はこれ
支那と日本 仏教の相異点 一灯園式と不動明王の態度で
10. 16 満洲国婦団員 智子裏方と会談 十八日京都
10. 16 支那に於ける 仏教の民衆教化 大谷大学 道端良秀
10. 17 満洲国宗教行政は 今は整備時代だ 満洲国民政部礼教股 古海 焉氏談
10. 17 躍進途上の満洲国を 日本国民の認識へ 日満中央協会から 雑誌記者団を派遣
10. 17 大連一灯園生る 谷野捨三氏の托鉢
10. 17 陳省長の招請で 一族と共に大陸へ 興亜聖業達成に捨身 大谷派寺院住職が
10. 17 唐宋時代の 風を遺す 北京鼓楼 附近の料亭
10. 17 支那先覚仏者の 功績を讃仰せよ 大陸仏教工作の確立 鷲尾博士が学会へ提案 仏教学大会第二日の発表
10. 17 北京に実業 学校設立 日本基教派
10. 20 北支に於る内地仏教の 宗教工作方針 注目 支那人工作は軍より個人に 仏連は内地人に限る
10. 20 東亜の新情勢に即し 曹洞宗積極的に動く 先づ中北支方面に 布教総監任命せん
10. 20 上海より 福地定一
10. 22 入蒙の傑僧持尊 巡錫の遺跡“依蘭” 日宗の馬田教学部長 先徳の顕彰回向
10. 22 興亜院が同願会に 積極的支援 日本仏教界と切離す 大陸宗教工作の一助
10. 22 満洲国の現 状をきく会 東洋精神研究会
10. 23 北京、内地の財界人が 大西本願寺建立 積極的に運動起こす
10. 23 皇軍遺骨奉安 殿前で遥拜 北京西本願寺
10. 24 北支仏教工作 とその分担
10. 24 学徒の「興亜認識」 斯の如く確乎たり 満洲国官吏採用試験に 現はれた特異現象
10. 24 建国精神の発揚期し 全満洲の道教を一丸に 重陽節の佳き日をとし 道教総会の結成式挙ぐ
10. 24 宗教宣撫班の不評に 金光教、優秀者だけ送る 天津、青島に日語校増設 中国民衆に日本精神教授
10. 24 興亜青年養成に 優秀中国児童引取る 孤児教育は打切る 四天王寺悲田院が
10. 24 大陸に神祇思想宣布 興亜の戦士養成 国大に興亜専門部新設
10. 24 貧児教育の 知恩学園拡張
10. 25 官社への御列格熱望 南洋神社創建案成る 拓務省が内務省へ審議依頼
10. 25 支那在来寺廟に 日本仏教の逆輸入 興亜仏教班員の 中文新任地決る
10. 25 晋北大同から 三名の留学生 十一月下旬入洛 京都各山で修学
10. 25 宗教慰問使は断じて 現地で嫌忌されぬ 五台山で親鸞上人を説く 大派西部議員は語る
10. 27 赤魔駆逐の大旆の下に 防共集ふ盟邦代表 意義深き懇談会開く

1939. 10. 27 中支維新学院の 第二次訪日班来朝
建華興亜の大業協力へ
10. 27 曹洞宗中、北支 布教総監任命す 佐
川、河合の両氏を
10. 28 人類の公敵共産主義を 亜細亜の天地
より一掃 アジア復興の聖業に邁進
防共懇談会東京大会の宣言
総本部を日本に 参加各国に本部設
置 恒常的、国民国際協力機関 コン
ミュニケ発表
10. 28 台北、台南で 戦没者追悼会 大谷整
昭氏
10. 28 竈山神社神域拡張
台湾総督府から献木 けふ、奉納祭
10. 28 同願会が北支各地の 仏教会に呼びか
く きのふ、興亜同願念仏会 北京・
京都両知恩院
10. 28 十ヶ年計画で 興亜親日家養成 長崎
各宗寺院が 支那孤児を引取る
10. 28 妙心派開教 監督会議
10. 28 熱河省承德に『秋声学舎』成る 彩
管が築く幼稚園 東本願寺境内に竣工
10. 29 世界に誇る東洋の美術
燦然と輝く豪華版 支那三千年の文
化陣
10. 29 各界の一流人物を入れ 興亜の人物育
成 親日留学生は宗教の力で 西本願
寺の有志が大計画
10. 29 先生を招く大陸 維新政府の募集に
志願者殺到す 廿五名に千五百名
朝鮮から 六百名 内地で先生の
引っ張り合ひ
10. 29 光明寺派の松尾、 田村両氏来月渡支
10. 29 同願会の基礎確立 内地から興亜仏徒
採用 仏教文化建設に邁進
10. 29 北支宗教工作の円滑化期し 宗教懇談
会(仮称)設立 興亜院指導で準備
10. 29 呉佩孚將軍に 特製輪袈裟贈る き
のふ、西本願寺から
10. 30 支那孤児の宗教的 愛撫こそ興亜の礎
上海にて 河野武翁氏の報告
10. 30 満洲国の神社 制度拡充期し 大使館
に調査会新設
10. 31 明治神宮の聖火を 興亜の光として支
那へ 神徳と仏力とをもち 八紘一
宇の大精神宣布 村上独譚氏
10. 31 五台山の支那居士奮起 仏教通じて日
支親善へ皇軍の支援下に開始
11. 3 支那民衆の教化 救済目標に 青島宗
教連盟成る 興亜院も積極的支援
11. 3 教職を抛ち 大陸に進出 西谷巡警氏
11. 5 三百人中タツタ三人 日本ビルマ仏教
協会の留学生 英国の手を逃れコツ
リ 六月からの来朝が判明
11. 5 上海より 福地定一
11. 5 仏教を通じて 興亜に協力 横浜に日
- 華仏教会 結成して記念の催
11. 5 華中維新学院 校旗入魂式 長崎諏訪
神社で
11. 7 哀しき少年の日を カキ破って起つ
支那青年許君、きのふ、西本願寺の懐
へ
11. 7 畑陸相、組合教会幹部に要望 日本基
督教徒に告ぐ 内地を空つぽにしても
いい 事変処理、文化対策に当れ!
11. 7 印度の独立は 印度教・回教の協力に
あり ガンジー翁は叫ぶ
11. 7 興亜院の式の下に『北京興亜教育会』
成る 日支教育機関を総動員 文教局
に事務所を設置
11. 7 基教移民村の 実現に努力 基教連盟
が
11. 7 中国の開教で 浄宗開教協議
11. 10 日華仏教代表者が 膝を交へて興亜を
懇談 同願会主催の交歓会開く 日本
側代表は興亜院で詮衡
11. 10 中国人の国民性究め 布教方針を確立
せよ 現地各宗派は血みどろの活躍
武田興亜局調査官語る
11. 10 皇紀仏教大会に 江南代表も参加を
大津澗山氏、幹旋に帰朝
11. 11 大陸文化建設の 基本問題(一) …
支那人の風習とその原因… 金孝敬
11. 11 四天王寺と中国側の交渉 日華親善上
漸く頻繁 更に留学青年の指導要望
北京政府も援助惜しまぬ
11. 11 全鮮基教徒が 統後奉公の第一歩 国民
精神作興週間期し 長老会指令発す
興亜進出協る
11. 11 至る処遺跡、遺物 支那は学術的処女
地 東方文化研の水野氏 大同石仏調
査より帰来
11. 11 “日持精神” 顕彰会 宗派を超えて
結成? 小笠原氏再び遺跡踏査
11. 12 大陸文化建設の 基本問題(二) …
支那人の風習とその原因… 金孝敬
11. 12 戦線の追想 手紙 高橋良和
11. 12 新支那中央政權は 成立時期を急がぬ
政府万全の処置を協議
11. 13 日華仏徒代 表会議
11. 13 大陸文化建設の 基本問題(三) 支
那人の風習とその原因 金孝敬
11. 13 学界居士へも交渉 日華両国仏徒の親
善 同願会との懇談に
11. 13 国際 ソ連の印度南方方針 わが国策
と相容れず 東亜新秩序にも背反・革
新陣營の主張注目
11. 14 大陸文化建設の 基本問題(四) 支
那人の風習とその原因 金孝敬
11. 14 汪と英ソ 日本の八方睨み と理想と
□□ 千家尊建
11. 14 軍人ホームと 幼稚園を開設 浄宗蘇

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 州教会所成る
1939. 11. 14 在留邦人の総氏神 北京神社決る 竣工は四月三十日の見込
11. 14 日本人としての 半島人の誇り
11. 14 中支宗大連盟と皇紀仏教大会補助 仏連新規要求予算
11. 14 日、独、ソ何れの手で 印度の独立は成るか? 東亜新秩序の重大問題
11. 14 興亜の宗教闘士 香港留学生決す 西本が有力門徒の尽力で
11. 14 我が国寺院教団の 組織研究のため 満洲国が参事官派遣
11. 15 大陸文化建設の 基本問題(五) 支那人の風習とその原因 金孝敬
11. 15 復た出た英の甘言(上) …欧州戦争と印度 ポース・ラスビハリ
11. 15 興亜仏教を議す 仏連定期評議員会 昨、西本願寺に開く
11. 15 漢口本願寺 復興決定
11. 15 越智道順氏 大陸視察へ
11. 15 愈よ決定した 蒙古政府の新制 “黒衣”の官吏に 佐々木文城氏決る
11. 15 開教事務一元化 知恩院からはなれて 浄土宗務所が当る
11. 17 大陸の宗教 工作に就いて 四魂一道
11. 17 大陸文化建設の 基本問題(六) 支那人の風習とその原因 金孝敬
11. 17 復た出た英の甘言(中) …欧州戦争と印度 ポース・ラスビハリ
11. 17 興亜の大乗仏教語る 仁和寺に各宗派 管長ら会同 事変下第三回時局懇談会
11. 17 手始めに日校 次で託児所開設 興亜 仏教班員動く
11. 17 各国代表との交歓兼ね 商都大阪に回 教徒大会 大阪回教寺院の建立や 将来の布教その他協議
11. 17 神奈川県日華 仏教会結成さる 光暢 法主夫妻迎へ 興亜への協力誓ふ 日華婦人講 演会も盛況
11. 18 日本仏教婦人に寄す 東亜民族全体の 幸福への途 陳慧芝
11. 18 復た出た英の甘言(下) …欧州戦争と印度 ポース・ラスビハリ
11. 18 俄然問題化した 北京稻荷講社 奇怪なる行為が忌諱に触る 支那には一ヶ所も支部はない 全然無関係—と 稻荷神社当局は語る
11. 18 欧州動乱と広東基督教界 送金なく困憊の教会 日本基督の積極的活動 次第に初期効果挙ぐ
11. 18 海外発展事象結構だが 倭寇の名称を 禁止 国史教科書の教授上に 文部省から修正通牒
11. 18 中国仏教徒に贈る “提携親善の書” 全日本学生仏青の手で完成
11. 19 汪政権の旗は? 青天白日旗の上部に
- 反共和平の小旗掲ぐ
11. 19 東亜大陸旅日記(一) 扶桑丸にて 真溪特派員
11. 19 蒙疆神社創立決る 張家口神社を改称 拡大 小笠原氏等の奔走
11. 19 新東亜建設へ 貢献事業を協議 日華 仏教研究会
11. 19 妙心図書 開教運動
11. 19 華北教育行政 朝刊の訪日団 けふ入 浴
11. 19 満洲国初の 文官に十名 龍大生採用
11. 20 東亜大陸旅日記(二) 扶桑丸にて 真溪特派員
11. 20 東亜諸民族は残らず “新東亜曆”を 実施せよ 京大の一角から立春元旦説 荒木博士等も実現に拍車 宗教界にも一大運動起らん 新東亜曆実施に 宗教会で運動起せ 社寺の行事と完全に一致 山田新一郎翁談
11. 20 金光教中北支管理所 事務規定を制定 強化 布教、教育、文化等 在事業を 統制監督下へ
11. 20 華北教育長官 一行歓迎会
11. 20 青年も女性も 先づ大陸へ行け 紀元 二千六百年 仏青、女青、日校、少年 団研究会
11. 21 東亜大陸旅日記(三) 大連にて 真 溪特派員
11. 21 満洲に於ける神社行政 日本側から満 洲政府へ移管 重要問題として論議さ れん
11. 21 大陸の宗教家に 常識医学の知識を 三田谷博士が各教団や 興亜院にも進 言す
11. 22 東亜大陸旅日記(四) 旅順にて 真 溪特派員
11. 22 濟南南郊新市街に 濟南神社を造営 先づ五万円で仮殿建設
11. 22 蒙疆から留学生入浴 両本願寺、知恩 院に配属 微笑ましい親善風景
11. 22 誤れる対支態度の是正 —同願会顧問 の出発に慙して—
11. 22 日支両国仏 教徒懇談会 日本側出席 者
11. 22 晋北仏学院 第一回卒業式
11. 25 満洲に“興亜体” 本願寺村新設計画 新プランを建てた 西本願寺の運動
11. 25 陸々日本の力に縋り 清新な祖国再建 両政府並に日本要路に陳情 神戸に 留華僑起つ 支那から阿片を除け
11. 25 新東亜旅日記(五) 新京にて 真溪 特派員
11. 26 関東神宮の 創建進む 明秋十月上棟 式
11. 26 初の朝鮮人経営 江密峰神社 近く創

- 建・各方面に注目
1939. 11. 26 仏教革新と支那進出 (二) - 興亜僧の性格 - 本荘可宗
11. 26 満、支特別布教や一派布教陣の評定
西本布教調査会決る
11. 26 諏訪義讓氏の北中支観察談
11. 26 支那人伝道十年の体験
最も至難な外人伝道を天理教はやったのけた 得難い佐藤軍紀氏の苦心談
11. 26 新東亜旅日記 (六) 新京にて 真溪特派員
11. 26 天理教海外伝道に 替れの三教会 初の褒賞を受く
11. 27 仏教革新と支那進出 - 興亜僧の性格 - (四) 本荘可宗
11. 27 満鉄拓務科が双城堡に 移民村指導者養成所を設置 先づ試みに西本願寺にこれが経営を委嘱
11. 27 全鮮学生児童の手で 皇国臣民の誓詞柱 朝鮮神宮内に建立
11. 27 久邇宮殿下に 手つきの粟献上 大連聖徳会の江頭氏が 亡父母の遺訓偲び
11. 27 一般文化領域に 拡大強化の計画 日満文化協会の発展
11. 27 満洲国仏教総会が 明春仏学院開設 満人布教使五十名養成
11. 27 満洲国でも境内地問題 無償還付の運動起らん
11. 27 仏教留学生 蒙古と道教へ 二十名募集
11. 27 新東亜旅日記 (七) 新京にて 真溪特派員
11. 28 仏教革新と支那進出 - 興亜僧の性格 - (五) 本荘可宗
11. 28 東亜曆設定に就いて 山田新一郎
11. 28 北京神社御造営に 中国人袁氏の美挙 資材難たちまち解消 一意竣成に邁進
11. 28 中国僧と共同生活
五台山の僧侶を通じ 皇軍の真意を民衆へ 日本仏教顕揚資料求む 大派菊池宣正氏語る
11. 28 蒙古ラマ僧を更に 数名留学せしむ 日満蒙の紐帯はこれ 伯山正彦氏談
11. 28 東亜新秩序達成に 日独伊同盟説く 国際教会京都支部席上で 白鳥前駐伊大使
11. 28 基督教教育を通し 日華親善提携へ 留学生迎へ使節送る 基督教教育 同盟総会
11. 28 日華共同事業へ 新東亜建設に貢献 日華仏教研幹部会
11. 28 新東亜旅日記 (八) 新京にて 真溪特派員
11. 29 仏教革新と支那進出 - 興亜僧の性格 - 本荘可宗 (七) (八)
11. 29 皇道仏教清新に基く 内地式訓練清新
- 道場開く 本島在来宗教への対策 大谷派台湾開教監督部
11. 29 大陸への宗教進出問題 数字的成果を焦るな 長い歳月に待て 第三国教会の伝統に見よ 現地中村牧師の進言
11. 29 新東亜旅日記 (九) 新京にて 真溪特派員
11. 29 奉天仏教総会結成 明年は内地視察団も派遣 日満仏教親善に資す
12. 1 仏教革新と支那進出 - 興亜僧の性格 - 本荘可宗 (九)
12. 1 南京忠魂碑除幕式 慰霊祭愈よ決る 一行十一名八日神戸出帆
12. 1 北満に血の教化 戦士の苦勞談に聴く ハルピン初の神仏会同
12. 1 大陸進出に 未曾有の熱意 三日間練られた 一如会関係会議
12. 1 新東亜旅日記 (10) 新京にて 真溪特派員
12. 2 支那民衆の“心” 紅卍字会で修業終へた 今小路了円氏語る “興亜の大策はこれだ”
12. 2 英独の和蘭争覇が 蘭領印度の向背に 関係 日本にも至大な影響及す
12. 2 奉天神道連合会 近く協和会内に創設
12. 2 広東市に大 派布教所 きのふ告示
12. 2 新東亜旅日記 (11) 奉天にて 真溪特派員
12. 3 北京稻荷講社問題で 現地関係者憤慨 或は告訴状を提起か? 関係者側より詳報来る
12. 3 支那に還る 善導大師絵伝 日本仏教協力の親善譚 知恩院から 大谷派の菊 地氏に託す 五台山に贈る
12. 3 新東亜旅日記 (12) 奉天にて 真溪特派員
12. 3 戦線の追想 野戦病院 高橋良和
12. 3 大陸の宗教工作は 気短かでは駄目 今は支那の実体調査に専心 人物をもっと送れ
現地報告書 中支宗大連畑一氏語る
12. 3 活発となる 基教大陸伝道陣 東亜伝道会の発展
12. 4 大陸に於ける… 合作社運動への念願 (上) 在上海 中村遥
12. 4 東亜新秩序の建設は 新東洋曆実施から 欧米文化盲従時代は過ぎた 天文曆算研究室の提唱
12. 4 新東亜旅日記 (13) 山海関にて 真溪特派員
12. 4 興亜再渡航記 安藤慶爾
12. 4 東亜の新秩序建設に 日華仏教徒の固き握手 交歓親善の絵巻展開し 同願会第一次年会開く
12. 4 北支日本仏教の 大同団結前提に 北京仏連近く発会 規程原案成り興亜院

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- も補助
1939. 12. 4 男子の信仰数は 女子を遥かに凌駕
支那大衆の信仰統計 南京警察庁の調査
12. 4 臨黄各派の機関誌統一 対支工作に全
臨濟協力 合議所から妙心寺に提出
12. 5 大陸に於ける… 合作社運動への念願
(下) 在上海 中村遥
12. 5 新東亜旅日記(14) 天津にて 真溪特
派員
12. 5 大陸へ進出準備 生長の家東亜同和会
台北より
12. 6 紫禁城西苑、勤政殿に 日華仏教徒の
交歓和か 同願会第一次年会第一日
日本側代表の 歓迎懇談会 北京仏
教連合会主催
12. 6 皇民道を正しく 毎年内地修学旅行試
む 更生の台南家政高女
12. 6 “占領後の方がえらい” 銃後国民は
知ってほしい 金光教教師帰還兵の要
望
12. 6 あまりに無理解な！ 回々教団各国代
表者の 案内指導者に非難の声 “親
善なんて 糞食へ…だ”
12. 6 大陸の布教権獲得運動 現地の官民協
力して 種々工作を進む 新政府に折
衝準備
布教権獲得は 必ず実現させる 河
北連絡部武田調査官談
12. 6 北京在住の 僧侶選び 同願会が再教
育
12. 6 衰微の中国仏教を 此の世に浄土具現
望む 仏教同願会第一次年会 王副会
長日本代表歓迎詞
12. 6 北支日本基教連盟 北京にて組織発会
12. 8 朝鮮同胞の姿勢に横槍 国体明確に危
害 祖先崇拜の立場からも 独自性を
保護せよ
12. 8 インドは何国 が解放する 千家尊建
12. 8 事変処理と欧州戦争(上) ポース・
ラスビハリ
12. 8 本願寺母子寮に 描く“興亜明朗景”
拓土と収容女性が 満洲に雄々しく
生く
12. 8 学校と大陸進出 西本山立学校長会議
龍谷商議會終る
12. 8 新東亜旅日記(15) 北京にて 真溪特
派員
12. 9 事変処理と欧州戦争(下) ポース・
ラスビハリ
12. 9 写経に日を送って 菩薩の心境味ふ
家人を通じて救世の誠を披瀝死の直前
呉將軍邸訪ふ
12. 9 半島同胞百余名 上加茂神社の神苑清
掃 神主さんも感激参加
12. 9 北支仏教工作の方針決り 同願会第一
次年会閉づ 興亜院中心に顧問会組織
愈よ積極的活動を開始 日華交歓
12. 9 北支の仏教工作は 当分二頭立て 仏
学院で日支僧侶再教育 官制宗教官制
生れん
12. 9 興亜行動者 養成修了式
12. 9 ビルマ永住の 日本僧を希望
12. 10 同願会に於る 王副会長挨拶
12. 10 王克敏氏と会見
支那が輸出した仏教を 再び日本か
ら頂くべきだ 語る・日支親善の精神
的基礎
12. 10 日校に華僑児童も お仲間入りを 京
都仏教興亜会幹部が 東本願寺へ要望
12. 10 大陸宗教工作の困難さ 支那仏教界対
立反目 日本宗教界の認識不足
同願会に反対の支那僧 「中日仏教
連合総会」を設立 沢明、還真の二僧
侶語る
12. 10 同願会年次大会 王揖唐氏等と語る
北京にて 東亜大陸旅日記 真溪特派
員
12. 10 宣撫官の座談会 日本側仏教代表の
現地対策協議会
12. 10 興亜再渡航記 安藤慶爾
12. 11 日本仏教の宏大に驚く ビルマは日本
の真の友 仏教国日本に留学したい
前商工大臣マウイング氏談
12. 11 南京の難民児童に Xマスの贈物
12. 11 支那癩百万の内 九十万は浮浪患者
微々たる救癩機関 関係者の奮起要望
12. 12 大陸の息吹き二篇 東西本願寺の握手
支那人伝道に肩書は不要 天津本願
寺の桑野氏語る
同願会指導原理は 顧問会で協議
支那五日間の印象 大森亮順氏語る
12. 12 支那僧帯同 柴田玄鳳氏 十四日帰国
12. 12 宣撫官に 百パー採用 興亜行道者
養成所出身者
12. 13 印泰支の留学生に 伸べる暖い手 日
本理解の指導援助機関 日本青年文化
協会生る
12. 13 回教徒代表の 綴る感想
「民族の旗」の進路に 啓示受けた
喜び 日本の指導で独立運動
12. 15 埋没千六百年の 北魏の文化 再び興
亜の光 学会に問ふ 吉田俊逸氏帰来
談
12. 15 興亜を叫ぶ宗門 二千六百年布教等
西本布教調査会開く
12. 15 沈滞の内地宗教界を 大陸から革新せ
ん 東亜文化建設問題と宗教工作 萩
原青島特務機関長談
12. 15 対支宗教工作に 積極的活動開始 青
島宗教連盟結成
12. 15 日支親善など古い 「興亜同願」の新

- 指導 宇野円空博士語る
1939. 12. 15 支那も宗 団を作れ 大谷瑩潤氏談
12. 15 東亜大陸旅日記 北京にて 真溪特派員
12. 16 新戦場菊花台に匂ふ 不滅の武勲・表忠碑 南京陥落二周年を記念し 晴れの除幕式と招魂祭
12. 16 “象牙の塔” おん出で大陸へ 江元虎氏米朝に喜ぶ西谷龍大教授興亜行の秘された応援者
12. 16 蒙疆政府の 仏教宣撫熱 下川直秀氏談
12. 16 江南人材の養成機関 金陵東文学堂を説く 現地に学校を経営せよ 谷大謙訪教授の留学報告
12. 16 東亜大陸旅日記 北京にて 真溪特派員
12. 17 朝鮮開教再認識 東西本願寺先づ目ざめよ
12. 17 困難越えて芽ばゆ 東亜青年協力運動 日華青年涙の握手
12. 17 東亜大陸旅日記 北京にて 真溪特派員
12. 17 宗教的犯罪増加の 時代的傾向に鑑み 回教問題に当局注視
12. 17 大陸の司法保護事業 軍の絶対的支援得て 南京西本願寺が着手
12. 18 “宗我”を超越しない 宗門当局とは 断固抗争 戦後に於ける文化建設と大陸の宗教工作事業 青島宗教連盟の研究会談会
12. 19 東亜仏教会 華人農学校設立 大陸の農村指導
12. 19 思兼神は新聞 事業の神様だ 神道の大陸移植絶賛
12. 18 東亜大陸旅日記 北京にて 真溪特派員
12. 18 真溪特派員 十九日婦社 -南京便り-
12. 19 支那民衆の宣撫に 各種社会事業を始む 新天地開拓に踊り出した 京都市社会課の中村慶範氏
12. 19 献金箱のお金から 日華結ぶ“紙風船” 三条大谷健児の贈物に 支那児童の歎び
12. 19 尼僧学院開設 日華仏教連 南京総会
12. 19 現地の大陸 花嫁学校 青島西本願寺 開設を計画中
12. 19 朝鮮有志会
12. 20 時代と仏教運動を語る 時代は来るところまで来た もう仏教は独自の力を持って 友松・高神名コンビの放談
12. 20 ネパールは同じ仏教国 精神的には日本に近い ネ国王令甥・参謀総長殿下きのふ御微行で西本訪問
12. 20 統計は語る 中国人の信徒寥寥 日本
- 各宗の北支布教状況 興亜院華北連絡部の調査
12. 20 南京便り
12. 22 曾ての左傾右傾思想者 大陸進出後の成績良好 現地視察検察官の報告
12. 22 興亜財団の基金は 準宗費で徴収せよ 曹洞宗全国布教監理会議 当局の諮問に答申
12. 23 同願会日本代表の談と 食はざる晩餐会へ抗議 大陸で見る 二つの記事 従軍僧から慨嘆の書
12. 23 昨日は皇軍 けふは宣撫
12. 23 支那の基教をどうする? 将来欧米宣教師らの 支那伝道事業は困難だ 然し彼らを排斥するは不可 組合教会が当局の意向打診
12. 23 半島人協会規則で 全国的に統制する 妙心寺派宗会第八日
12. 23 曹洞大陸の 両総監語る 宗務当局と協議
12. 24 転向した半島青年に 許す・憧れの得度 東本願寺の温かき英断 蔭に小山・松山の両恩人
12. 24 支那小孩に 更に六十 万枚送る 非常な好反響 西本願寺のカード
12. 24 日満華蒙蔵の “仏徒提携親善書” 寺本婉雅教授指導の下に 華・蔵両文完成す
12. 25 大陸に神祇 宣揚の人物養成 興亜専門学校設立 文部省と講究所の折衝進む
12. 25 蘇州日語学校
12. 25 大陸文教に関し 年度末研究会談会 宗教問題研究所
12. 27 大陸工作と宣 教師の問題
12. 27 更に日満支に 同願念仏を高唱 浄宗の興亜運動
12. 27 南京宗団の再建 現在使用の建物は軍へ返還 新たに建立か借家へ引越し
12. 27 中支宗教大同連盟 福田、畑部長明春辞任 各方面で留任要望
12. 27 北支開教の躍進 妙心支那宣撫費成績
12. 28 満洲国の“開拓村”は 宗教的団結が必要 指導者不足に悩む 興安北省開拓庁長談
12. 28 一石二鳥狙ひ 大陸活動に起用 二世、三世の青年教師 金光教団認識改む
12. 28 ヒンバー大尉の霊に 捧ぐ・乙女の黒髪 近く盛大な慰霊祭 満洲東別院に安置
1940. 1. 1 日本仏教の対支協同 機関設立を要望す 馬田行啓
1. 1 大塚愛中校長 中支に転出 総監部主事
1. 5 “日蒙児童親善” 玩具と絵本を送り

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- ませう 仏童連盟が広く 全国から集める
1940. 1. 5 ビルマから 仏教僧留学
1. 6 太田覚眠氏 を慰める会
1. 6 一青年の眼に映る大陸事情 戦勝国の誇去れ 拳銃と刀を腰にブチ込んだ宣撫班に民心がなつく? 大陸の人物出でよ
1. 7 文化工作と二様の考へ方
1. 7 満洲国の宗教 松本定敏
1. 7 招致のラマ青年僧 最後の仕上げへ 愈よ五月に帰国 更に第二次を招く
1. 7 大陸にも漢字版 “中外” が必要だ 北京新民報責任者 箕白羊氏の激励
1. 7 工費四十万円投じ 天津に武徳殿 日本精神鍛練の 道場として建設
1. 9 大陸の宗教問題 (一) 椎尾辨匡
1. 9 北京から南京へ (一) 安藤正純
1. 9 満洲国の宗教 松本定敏
1. 9 寺廟の連絡なり 本島人僧侶活動 内地見学団も組織 深草派の台湾開教
1. 9 匪賊の襲撃を受けて 北満で悲壮、殉職 大谷派の真栗開教使
- 1.10 大陸の宗教問題 (二) 椎尾辨匡
- 1.10 北京から南京へ (二) 安藤正純
- 1.10 日本語と和服で 中国人が上演 若き興亜僧の努力 中支丹陽の親善譜 劇 “平和の神”
- 1.10 興亜道場 (仮称) 建設 満洲開拓戦士等に捧ぐ 氣比神宮の計画
- 1.10 新民会の協力の下に 施療宣撫事業展開 金光教青島施療班の報告
- 1.10 大連高女大発展 負債を片づけ更に 廿五万円で大増築
- 1.10 会員に白人も加る 広東の宗教連盟 日華提携で宗教工作 八雲義乗氏は語る
- 1.11 大陸の宗教問題 (三) 椎尾辨匡
- 1.11 北京から南京へ (三) 安藤正純
- 1.11 満洲国の聖公会に対して 日本聖公会内に二潮流 注目すべき其の動向
- 1.11 内山氏迎へて 支那語科講演 京都基督教で
- 1.11 興亜と真宗の 諸問題を討究 けふ大谷研究会
- 1.12 大陸の宗教問題 (四) 椎尾辨匡
- 1.12 聖戦第四年 (上) 藺田香黈
- 1.12 興亜の春を載せて 仏教国民唱歌集 江崎小秋氏苦心の結晶
- 1.12 中国の貧民救ふ 旧曆歳末同情運動 現地興亜院当局も列席 北京仏教連合会総会
- 1.12 医術と信念もって 今ぞ征く・満蒙拓士 西本願寺道場から巣立つ
- 1.12 北京ひのきしん隊結成 中国青年・婦人会の発会 天理華北伝道庁の新計画

- 伝道事業報告
- 1.13 戦争の国家 形態と民族連携 伊藤力甫
- 1.13 北京から南京へ (四) 安藤正純
- 1.13 聖戦第四年 (中) 藺田香黈
- 1.13 海南島へ伝道 政府と協力を目標に 金光教で計画中
- 1.13 旅順高校長に 川瀬光順氏
- 1.14 戦争の国家 形態と民族連携 伊藤力甫
- 1.14 古瓦から見た 日支文化の交渉 総合古瓦研究 石崎達二
- 1.14 北京から南京へ (五) 安藤正純
- 1.14 満洲国の宗教 松本定敏 第三節 道教 (一)
- 1.14 聖戦第四年 (下) 藺田香黈
- 1.14 朝鮮仏教団 生みの親 小林源六氏
- 1.14 日蓮教団の 海外進出に “立正興亜局” 設置 来宗会に 提案せん
- 1.14 大陸旅行の思出 (上) 真溪蒼空朗
- 1.14 満洲国への 図書文化の普及 資本金二百万円で 満配株式会社創立
- 1.16 戦争の国家 形態と民族連携 伊藤力甫
- 1.16 古瓦から見た 日支文化の交渉 総合古瓦研究 石崎達二
- 1.16 北京から南京へ (六) 安藤正純
- 1.16 支那の東方諸国と 文化使節の交換 機関誌発行等積極方針へ転換 東方文化連盟の躍進
- 1.16 病む勇士たちに ゆかしき “本尊” 北支〇〇隊に西本より下附
- 1.16 大陸伝道の指導原理 如何に確立するか 天理教現地の要望 全宗教の関心事
- 1.16 日宗の開教方針 実施方法決定す
- 1.17 戦争の国家 形態と民族連携 伊藤力甫
- 1.17 古瓦から見た 日支文化の交渉 総合古瓦研究 石崎達二
- 1.17 北京から南京へ (七) 安藤正純
- 1.17 現地に波打つ興亜の登音 基督教を通じ日支両国 青年の友情高む 南京青年層の動き 日本語を話す 先生は給料が高い 邦人小学校も新築 上海陸戦隊へ 病人運搬車献納 時局婦人会の活躍
- 1.17 日宗の開教方針 実施方法 (下)
- 1.17 福州黄檗山へ着眼 中国僧へ招致状を送る 財界の名士を背景に後援会 普陀山へも人をおくる黄檗
- 1.17 小林義道氏を 満蒙へ二月派遣 ラマ僧問題で現地で協議
- 1.18 北京から南京へ (八) 安藤正純
- 1.18 大陸計画や大学合併に 両本願寺は協

1940. 1. 18 力せよ それ为国家に忠なるもの 西本願寺全国勸定会の意見
1. 18 支那人孤児のため 全生涯を捧ぐ うら若き女性の決意
1. 18 大陸建設の中心に 達人長者を送れ 日本人の気短さで局部的 工作に焦るは大局を誤る 田崎博士談
1. 18 山東共生学院から 留学生五名派遣 商業部卒業生から選抜
1. 18 武昌東本願寺
1. 18 全鮮に奔騰する 曹洞興亜財団への熱
1. 19 対支宗教工 作と其難易
1. 19 北京から南京へ(九) 安藤正純
1. 19 日本に仏 教修業 蒙古ラマ僧来朝
1. 19 宗教宣撫の体得へ 青島宗連から従軍まづ自らが実践行
1. 19 興亜宗教工作問題 同願会顧問に報告 聴く 仏教徒時局同志会
1. 19 海外神社の発展と 神祇の大陸宣揚 講究所と外務省協議
1. 20 北京から南京へ(十) 安藤正純
1. 20 南洋神社創建進む 十月一日御鎮座祭の予定
1. 20 中国学生が 初めて拝む
1. 20 神社、神職の 大陸進出 再検討せよ
1. 20 大陸希望僧に 別科を開放 仏専で実施
1. 20 官中井伊谷宮 清水禰宣辞任
1. 20 晋北仏教学院 第二期入学式
1. 21 北京から南京へ(11) 安藤正純
1. 21 満洲国の宗教 松本定敏
1. 21 満洲国と協和会から 今春活仏を内地へ 交換に日本僧もラマ廟入り 内蒙駐在清水谷氏のたより
1. 21 大陸から阿片を駆逐 内地の禁酒禁煙運動と共に 基督教婦人矯風会の計画
1. 21 “反共宗教連盟は 民国人五万の同志” 石家荘の小原氏談
1. 21 中支宗教大同連盟幹部 二月一杯で総辞職決行 今後の発展期し改組論起る 神道部長後任は天理から選出
1. 21 大陸に活躍の 人材を養成 天津西本願寺が 超宗派的 道場建設
1. 21 大陸旅行の思出(下) 真溪蒼空朗
1. 21 上海通信 町田トシコ
1. 23 北京から南京へ(12) 安藤正純
1. 23 移民と共に入植 本願寺村も建てる 千葉西本満洲開教総長談
1. 23 在日本印 度国民会 独立デー
1. 23 大陸の神祇思想宣揚と 神社の正しき奉斎 内務、外務両省と 講究所等が協議
1. 23 北京稻荷社 再建を協議
1. 23 山海関神社竣工 御神体拝受に代表者帰還 外務省、神社局と協議
1. 24 北京から南京へ(13) 安藤正純
1. 24 駐日支那留学僧の眼に 映った仏教研究の印象 日本文化は仏教により一貫
1. 24 満洲国の祭祀を左右する 建国廟問題で態度決定 あす我が外務省が協議
1. 24 日支提携と 仏教文化 明治聖徳記念学会の後援会
1. 25 北京から南京へ(14) 安藤正純
1. 25 東亜新秩序の建設に 重要性加へる文化工作 “宗教界は挙げて国策に協力せよ” 陸軍省軍務課福山少佐談
1. 25 興亜宗教問題で 仏徒同志会の研究 教学綱領草案も審議
1. 26 日本をなめる英 新支那中央政府の樹立 支那人は支那人だ
1. 26 仏教界空前の 興亜大予算案 実に三百五十九万円 西本願寺集會に提案
1. 27 大陸宗教工作(上) (宗教的「日華」「合作」の貧困) 藤井草宣
1. 27 在京国家主義 印度人の決議 きふ、独立運動記念日
1. 27 亜細亞人に望む 印度独立連委員会の決議
1. 28 大陸宗教工作(下) (宗教的「日華」「合作」の貧困) 藤井草宣
1. 28 満洲国の宗教 松本定敏
1. 28 大陸仏教の 諸問題協議 興亜仏教会 愈よ重大化した満洲国 建国廟御祭神問題 我が一般神社界に正しき 奉斎期成機関組織されん
1. 28 二千六百年記念に 奉天に興亜神宮 東陵の近くへ建立
1. 28 興亜宗教工作に於ける 重要な研究対象 世界紅十字会 その現勢と発展の沿革
1. 28 南京通信(その一) 町田トシコ
1. 28 読書界 支那浄土教の研究 支那仏教史学特輯 興亜仏教 国民唱歌集
1. 30 二兄の病死よそに 宣撫官として挺身 興亜建設の人柱に…と 大谷派の富敬俊氏
1. 31 中国僧を派し 刑務教誨を実施 杭州日華仏教会活躍 仏教の為気を吐く
1. 31 東亜新秩序へ貢献 基督教女子青年会 二ヶ年の実行方針
2. 1 興亜の精神文化運動は ここから先づ 具体化へ 力強い各方面勢力圏の支持 東京会談の輝かしい成果!
2. 1 日本の基督教建設 朝鮮慶南基督教徒の声明
2. 2 興亜宗教工作懇談会に望む 信なきものは駄目 向ふの有力者と手を握れ 大島増上寺法主は語る
2. 3 夏蓮居氏ら代表十四名 答礼かねて三月来朝 仏教を通じての日華親善 興

1940. 2. 3 亜院で歓迎プラン作成
2. 3 日満不可分の根本 原則に立つべきもの 建国廟の御祭神問題
2. 3 興亞大陸仏教工作で 兩本願寺宗務現地幹部会同 あす第二回を京都で開く
2. 3 興亞仏教班員の 挺身の活動 社会的活動開始の 飯沢智隆氏
2. 3 興亞院の大陸精神工作 近く具体案発表されん
2. 3 大陸伝道者の 養成機関を設置 天理教校で授業
2. 4 宗教工作と 人物の問題
2. 4 満洲国の宗教 松本定敏
2. 4 朝鮮大阪基教会牧師 医療行為で検査さて教会の処分は
2. 4 西本願寺定期集会 血と汗で第一線に闘ふ 布教使慰安を叫ぶ 予算総会質問さかん 一第九日午後一
2. 4 興亞宗教懇談会 政府も軍部も宗教界も 真に協力してお役に立つべし 中外日報がその楔となれ!
2. 4 南京通信(その二) 町田トシコ
2. 6 普陀山匪賊に襲はる 聖火は無事 警備隊に奉遷 村上独潭氏ら難を免る
2. 6 伊人天主教大司教が 山西の和平運動に参加 旧正月十日に大綱撤
2. 6 西本願寺定期集会 支那事変費 委員に付託
2. 7 対支文化工作も協調 国策に順応して邁進 出先満支監督も加はり 東西兩本願寺の懇談会
2. 7 夏連居氏ら迎へ 追悼会と同願念仏会 日華仏教研で計画
2. 7 事変の責任者たる在支 欧米人は反省せよ 一部中国人に動く
2. 8 北支同願会代 表者の来朝
2. 8 大勢決した満洲国 建国廟の御祭神問題 奉斎の仕方・祭祀の形式 今後に残る問題は?
2. 8 龍藏一切經七千八百余卷 日華仏研に贈る 王克敏・夏連居両氏から 兩國仏教の親善に拍車
2. 8 基教の取持つ縁で 北京へYMCA 日華親善に創建計る
2. 9 中支九江にも 神社奉斎計画 現地から外務省に手続申請
2. 9 大陸の仏教工作案決定 政府当局に実現を建議 仏教徒時局同志会実践へ
2. 10 神祇の大陸 宣揚問題 全神の懇談会
2. 10 宗教中心に大 陸文化の研究
2. 11 満洲国の宗教 松本定敏
2. 11 勝った日本が あせてはいけない 上海最初の中外会
2. 11 十五年度大予算や 興亞の中心案議了 西本願寺集會終る 一最終日午後一
2. 11 事変関係の 三案を上程
2. 11 南京通信(その三) 町田トシコ
2. 11 日本仏教を中心に 海外人の集ひ 國際涅槃会と交歓会
2. 13 陸相の申入れに 聖公会、辞退 対支宗教宣撫工作
2. 13 対支精神文化工作語る 来る十七日懇談会開催 本社主催
2. 13 華北交通会社に 延びる生長の家 従業員 的精神指導 既成教団に反省資料
2. 13 東方文化連盟 現地事情聴く
2. 14 禅僧も金がなくては 開教は出来ない 外務省の布教権を上げよ 森妙心漢口主任は語る
2. 14 留学のラマ僧 憲兵志願を決意 蒙古に捧げる一石
2. 14 興亞の趙氏 西本で得度
2. 14 中国人の民俗 信仰の現状調査 大陸 仏教工作確立へ 淨宗調査課の計画
2. 14 満洲国に 新教線 西本願寺が
2. 14 北支方面の重 要要務で協議
2. 14 北京の女子 職業学校で 西本の協議
2. 15 南方英自治領は讃ふ 禅で世界を救へ 日本に於て実を結んだ 大乘仏教は 世界のもの
2. 15 統計が語る印度の横顔 仏教徒は二億五千万人 依然イギリスの搾取的
2. 15 対支工作の 諸問題研究 興亞仏教会
2. 15 梵巴藏漢四語 対照の仏典進歩 阿弥陀經四月に出版
2. 16 京城の回教徒に 理解ある保護を 小林由太郎氏談
2. 16 精神的な悩みを持たぬ 支那民族に宗教は駄目 宗教工作に反省の示唆 太田宣撫官の入洛談
2. 16 “対支宗教の宣撫工作に 聖公会は喜んで御奉公” 所謂“陸相の申入れ”に当局談
2. 16 “日支提携より途なし” 汪の信念に信頼せよ 和平は武力工作と並行 銃後活動は愈よ堅固に 中央新政府と 和平救国運動
2. 16 大陸に於ける 礼拝対象の統一 興亞 教学の確立期し 宗教問題研究所の研究協議
2. 16 満人仏徒達の 紀元節慶賀式
2. 17 東亞觀光團来朝 第二世に日本と大陸の認識を 布哇西別院の計画
2. 17 南京入城図 素描を前に 追憶に耽る 中島將軍 鹿子木画伯學生の作
2. 17 基督教精神による 日満一如の理想村 建設 五ヶ年に五十戸移民
2. 17 愈よ興亞大陸の 新計画へ邁進 本願寺が國家奉公の 全面目を發揮して
2. 17 現地訓練と 内地訓練 募集要旨
2. 17 住吉神社の 海外発展策
2. 17 優秀青年を 天理中学で薫育 大陸か

1940. 2. 17 ら留学生 建設工作に人材養成
興亜修禪道 場を巢立つ 曹洞の宗教戦士
2. 18 王揖唐氏の仁情 静岡大火に義金 日華親善殿の感激 美しい日華親善譜
2. 18 支那の布教権問題で 仏徒時局同志会が対策協議 宣言発表・実働期す
2. 18 小さい言葉使ひ一つにも 相手の気持を充分汲め 余りに支那を知らなすぎ 日華提携の根本を叫ぶ
2. 18 京城セ医専から 長老派手を退く 現敷地は朝鮮神宮へ 革新的プラン近く決定
2. 20 没法子的性情 と宗教工作
2. 20 対支宗教政策樹立と 再出発を要望 本社を通じて興亜院等へ 本社主催 座談会
2. 20 従軍僧、駐在ら二百名 前線から北京に召還 精神文化工作の連絡はかる 興亜院の政策一步前進
2. 20 “我等日本基督教徒は 何を為すべきか” 北支日本基督教職会
2. 20 華北仏教徒 訪日視察団日程 団長夏運居士は 病気で来朝不可能
2. 20 各方面の権威迎へ 興亜建設大講演会 三日間に亘る大論陣東本願寺の宗教報国
2. 20 “日華親善幼き握手” 映画化された 隣邦児童愛育所
2. 21 日支融合の 楔としての 同願念仏(上) 中井玄道
2. 21 大陸の実働へ 試金石 満蒙開拓の幹部養成 興味をもって見らる 本願寺 仏育の新登場
2. 21 亀山、岡本両氏が 互に出馬を譲る 古義朝鮮宗議選
2. 21 華北仏徒訪日団は望む 青年僧侶達の教育方針や 仏教主義社会事業の現状 日本で観察したい事項
2. 21 今では支那側にとり 貴重な資料 常磐博士の「支那文化史跡」 愈よ第七卷完成
2. 22 日支融合の 楔としての 同願念仏(下) 中井玄道
2. 22 大陸の仏教国策確立へ 興亜院に特別審議会設けよ 仏教徒時局同志会実働大綱
2. 22 中支宗教大同連盟 神道部長後任決る 天理教の佐治正嗣氏
2. 22 満鉄社員らの 精神道場和光寮開設 甲斐静也氏の念願
2. 23 “部隊長の命令だ” 中国人の仏教婦人会創れ 仏教が皇軍の正式御用に 興亜仏教工作方針 稲津氏の所見 太虚法師の実践した 仏教復興運動の再検討 日華の同系教義の提携
2. 23 東亞民俗永遠の幸福に 全仏教徒は起て 支那布教権獲得問題で 京都仏護団緊急理事会
2. 23 北支仏教徒を迎へ 日本仏徒代表と懇談 興亜院で協議会計画
2. 23 同願会顧問 協議会 興亜院文化部
2. 23 浄土宗北支 開教使会議
2. 23 豊山派が満洲 開教を積極化 更に五万円を追加計上 新京寺院の建設急ぐ
2. 23 けふ、在洛 華僑の集ひ 東本願寺に 日華親善譜
2. 23 “梵和大字典” 近く第一卷刊行 仏教研究の世界的資料 聖語学研究室の 労作
2. 24 印度は自由を要求す(1) 在神戸エ・エム・サハイ
2. 24 華北仏教団歓迎プラン 家庭や工場に於ける 日本仏教の特徴紹介 総ての世話は仏連で 怨親平等の追悼 十日、築地本願寺で
2. 24 愈よ日本文化の 最高峰に触れる 泰国の留学生進学
2. 24 事変処理に宗教活用 政界有志の彪大な計画 大陸の精神文化工作確立へ けふ、宗団側と懇談会開く
2. 24 郡内の各寺廟 浄土宗に帰属 台湾開教区企画部新設 本島人の皇民化に全力
2. 24 ベン光る 中華の布教権を望む
2. 25 仏教工作に関 する一論策
2. 25 印度は自由を要求す(2) 在神戸エ・エム・サハイ
2. 25 満洲国の宗教 松本定敏
2. 25 日本仏教宣揚に挺身の独潭和尚 不滅の靈燈護りつつ 軍へ烈々の上申書 普陀山の治安確保その他 当局の賛成で実行へ 仏教徒の奮起を促す
2. 25 本社主催 対支精神文化工作懇談会 興亜院へ先づ認識運動 布教権獲得が急務 いつも問題になる人と金
2. 25 一年間の成績良好 将来も継続 仏教各宗大学卒業生 喇嘛留學生募集
2. 27 印度は自由を要求す(3) 在神戸エ・エム・サハイ
2. 27 北京東別院本堂で 国際的仏前結婚 縁結びの名もうれし 出雲路さんの司婚で
2. 27 ビルマ留學生 タム氏葬儀
2. 27 右翼の諸勢力を糾合 東亜建設国民連盟結成 代表的人物を網羅
2. 27 東亜連盟協会関西支部 講演会と懇談会を開催 少壮教授十名現地派遣
2. 27 興亜費 十万円 金光議会議終る
2. 27 華北仏教徒 訪日団 京都日程決る
2. 28 大陸に乗出すべき 宗教の根本対 策

- を確立せよ(上) 岡田甚吉
1940. 2. 28 北米人に示す日本人の真情 国境・宗派を超えて 支那難民に愛の触手 桑港の金光教北米連合会の・“日支親善献金”運動
2. 28 神社仏閣、景観区の 根本案設定さる 満洲国國務院會議で
2. 28 明和会を改組し 興亜仏教会創立
2. 28 事変処理、革新問題 国論の帰趨混沌 文化運動の種々相 田中直吉氏談
2. 28 南支、山西を主に 鮎沢本社員特派 三月七日出帆渡支
2. 28 興亜少年義 勇軍の訓練 市社会課が 知恩院で開く
2. 29 大陸に乘出すべき 宗教の根本対 策を確立せよ(下) 岡田甚吉
2. 29 支那黄檗僧に 招致状を送る 厦門領事館を通じ 日支両黄檗の提携
2. 29 満洲国建国 記念の運動 あす東京で
2. 29 良質の青少年集め 蘇州日本基教会 躍進的發展遂ぐ
2. 29 満洲各神社で 献茶式も挙行 山辺女史けふ出発
3. 1 北支同願会 一行を迎ふ
3. 1 華北仏教訪日団 けふ、東本願寺で 信正院連枝らと歓談
3. 1 関心の深くなった 蒙古のラマ政策 ノモハン事件の寺廟修理 印務処をも 新設
3. 1 日滿支の社会家集め 大連で興亜社事 大会 今夏、六月十一、二、三の三日
3. 1 仏教の本義に基き 僧俗一体天業翼賛 興亜仏教会会則成る
3. 1 全鮮思想報告 連盟各支部に 氏創設 相談部
3. 1 アジャーナター とシギリヤ 立命館が 刊行
3. 2 華北仏教徒訪日 視察団入洛 日本仏 教徒と交歓 寺院や神社の 教化力に驚嘆 日本 の力に感謝 一行の感想談
3. 2 民衆指導系統の一元化に 新民会と宣 撫班合同 本格的活動を展開せん
3. 2 北京金光日語学院も 訪日見学団を組 織
3. 2 支那人がポッポッ 寄り出した 八年 ぶりて帰った梅原乘運氏談 香港西本 願寺
3. 2 滿支へ贈る 綜合日蓮読本 宗教問題 研究所
3. 2 内鮮融和に 緊張する大阪府 新に三 十万半島 同胞の渡来迎へて
3. 2 純本島人の寺も出現 開教使の方言研 究盛ん 浄宗台湾開教使
3. 3 満洲国の宗教 松本定敏
3. 3 援蔭ルートは内地にあり 石原莞爾將
- 軍の獅子吼 東亞連盟協会の講演会
3. 3 日滿犠牲者偲ぶ 高野山別院で追善法 要 遠藤柳作氏の仏心 満洲建国記念 日に
3. 3 教育機関を見学 けふ、雪の越路へ 華北仏教徒視察団
3. 3 待たれる 日本旅行 初めて見る夢の 国に心躍る 北京金光日語学園の姑娘
3. 3 新秩序建設 真の協力者 抗日陣営内 の青年層か 純朴な農村青少年
3. 3 黄檗僧招致と共に 管長級を支那に派 遣 黄檗宗の対支運動計画
3. 3 対支宗教工作指導 興亜院華北連絡部 が開く 北支神道連合会講習会
3. 5 興亜布教一考察(上) 桜井雄信
3. 5 “中外日報”こそ両国の 平和を結ぶ ものだ 日華提携に打込むポイント 華北仏教徒視察団来社
3. 5 内鮮融和に拍車 京城学園を開設
3. 5 上海にも姉妹団体 近く具体的運動を 開始 東亞連盟座談会
3. 6 興亜布教一考察(下) 桜井雄信
3. 6 明朗北支に 初の花嫁塾 濟南西本願 寺
3. 6 興亜親善児童大会 日、華、滿、蒙、 印代表ら参加 知恩院の国防記念日
3. 6 二億五千万の教徒持つ 印度教連盟から 宗教使節 英国の態度頗る注目さる サバルカル博士から便り
3. 6 戦没將兵の 遺家族のために 母子寮 を大陸に 大連西別院で開設
3. 6 御仏の前で 姓を付けて下さい 半島 同胞がお東へお願ひ
3. 6 中島中将が 南方を視察
3. 6 鮎沢本社特派員 愈よあす京都出発
3. 7 中央政權成立に当り 全日本仏徒の慶 祝使節派遣 対支応用教学の確立など 時局同志会総会での決議
3. 7 日華同願の建前で 布教体制の確立を 軍人会館で第一声
3. 7 挺身大陸へ 保母さん二人
3. 7 五宗派と兩本願寺 合流・提携ならん 興亜の宗教闘士養成
3. 7 中支に新設の 無錫西本願寺
3. 7 大連日滿実 業生入洛
3. 8 中支鎮江に 仏教合同の氣勢 金山寺 住職が主となって 松田知衡氏談
3. 8 第二世を再教育 第二世の教育へ 先 づ第一回の内地留学 大派ダバオ女学 院
3. 8 鮎沢特派員 勇躍出発
3. 8 中央政權に慶 祝使節を派遣 浄土宗 会-第二日-
3. 9 皇国国体史を 大陸の学校教育に持込 め 岡田甚吉
3. 9 大陸から招く 優秀少年留学生 毎年

1940. 3. 9 満支から五名宛 天理教四月より実施
 中国人の 施薬施療 宣撫班支援で
 天理昭心伝道所
3. 9 濟南神社 造営計画
3. 9 今年の聖嶽隊 七千余名を動員
3. 9 対支文化工作に 宗教団体を活用 貴
 族院で文相答弁
3. 10 支那を知る 必要と方法
3. 10 満洲国の宗教 松本定敏
3. 10 華北仏徒訪日団 暗れの帝都入り 宮
 城遥拝・明治神宮参拝 駅頭を埋む歓
 迎陣
3. 10 法衣を飾って帰満 満洲開拓村の村人
 に推されて 得度・宗教戦士の再教育
 日本人の仏心
3. 10 興亜結ぶ義侠心 山東共生学院から
 六名の留学生来朝
3. 10 訓練所の旧建物が 東本願寺になる
 第三次瑞穂村の 佐々木開教使語る
3. 10 西谷龍大教授 愈よ渡支決る 鮮満経
 由で北京へ
3. 10 やはり字は支那人だ 実にうまいもん
 だなァ と感心させた華北仏教団
3. 12 興亜精神文化の工作に 一大宗教連盟
 結成 政府当局も賛意表す
3. 12 新中央政府に 布教権確認求む 京都
 仏護団も起つ あす、緊急理事会
3. 12 満支蒙疆へ！ 雄飛の卒業生 谷大専
 門部
3. 13 興亜仏教会への 政府補助は架空 大
 森氏に鶴田興亜院調査官抗議
3. 13 新大陸に骨埋めん 龍大新卒業生満洲
 赴任の誓 けふ、血盟式挙行
3. 13 枯淡な浄斉に 洪茶の乾杯 劉団長の
 力強き答礼 仏連の歓迎懇談会 華北
 仏教徒 訪日視察団
3. 13 少年宣撫班員 劉君も卒業 大谷専修
 学院生 十一日本社見学
3. 14 新生大陸の息吹き 上海便り 鮎沢本
 社特派員発
3. 14 中支支那僧日本視察団 禪の専門道場
 にも参禅 興亜院の計画愈々実現
3. 14 中支宗教大同連盟 組織目的の根本改
 正 九日第二回総会で審議
3. 14 回教圏人と結ぶ親善 「日本・イエー
 メン協会」誕生 キ宗教大臣に“行貫”
3. 14 天津に日華共同の 綜合寺院建立運動
 興亜仏教連盟結成
3. 14 満洲開拓に 全力を注ぐ 千葉西本満
 洲開教総長談 宿題解決
3. 14 東西相呼応して対支 布教権問題で起
 つ 京都仏護団が緊急理事会で決る
3. 14 国民会議大会へ 成功祈る激励電報
 在日本印度独立連盟
3. 14 新郷の新都計画地に「大東本願寺」
 を建設 道教の行事を通じて 支那民
 衆教化に挺身
3. 14 日蓮宗海外 監督ら懇談
3. 16 大陸花嫁相談所等 皇紀記念に常置
 大派岐阜教区の活動
3. 16 全満主任布教使 ハルビンで大会 西
 本願寺満洲開教に再検討
3. 16 銭迪明嬢の「訪日遊記」
3. 17 汪精衛氏の 歴史的宣言
3. 17 満洲国の宗教 松本定敏
3. 17 救国には南京虫絶滅 ファッションある
 のみ 社員ら京都人ばかり招き 王長
 春氏、憂国の熱論 鮎沢特派員 上海
 通信
3. 17 勇む興亜仏教班員 現地実習訓練終へ
 実働へ 各地に仏教会館設置
3. 17 大陸に進出の知的女性養成機関 天理
 教女専設立認可せる 支那語科中心に
 四月開校
3. 17 日華仏徒合力で 広東に“仏学院”
 華南日華仏教協会 第二回大会で決議
3. 17 中支青年僧の 来朝日程決る
3. 17 支那留学僧に 日本理解の旅 お西の
 “親心”
3. 17 布哇、満支に散在の “関係学校” 統
 制 西本願寺法制局参与会
3. 17 大陸問題協議 興亜仏教会
3. 19 簇立する興 亜宗教連盟
3. 19 築く・興亜の新殿堂 東本・曹洞同時
 に宣言 新上海に豊をならべて 皇紀
 と新中国建設記念
 新東亜建 設の黎明
 開基七十年祭を前に お東の改築決
 定
 庭を持たぬ 子供達へ 竣工近き上
 海 身延の修改築
3. 19 失学児童救済 南支汕頭に小学校 先生
 は日支人たち
3. 19 満蒙の天地へ 雄飛 句仏前法主令息
3. 19 革新的経綸と気魄持つ 新指導層の出
 現望む 日満支に南洋を加へた 新秩
 序建設に進め
3. 19 法然主義携へて 満洲へ移民 浄宗で
 近く具体化 関係官民を招き研究会
3. 19 新中央政權に対する 仏教使節の派遣
 同志会・仏連に提議
3. 19 布教権確認要望 汪氏に激励電報 仏
 徒時局同志会講演会
 汪氏に向け 激励電報
3. 19 興亜仏教会へ 曹洞宗参加躊躇す 前
 途に一抹の暗影
3. 20 パール・パツ クの日支観
3. 20 伊予の洞宗一寺院が 独力で中国僧養
 成“早く送ってやりたい” 佐川布
 教総監着任
3. 20 上海の花まつり
3. 20 軍の援助で隣 接建物も一掃 四月入

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1940. 3. 20 仏式を 東本漢口布教所
成田山で新 東亜建設博
3. 20 ラマ留学生 視察旅行 日本の姿見せる
3. 20 宗教“工作”の言葉は不当 隣人愛が
宣撫の要諦 真摯率直に核心を衝く
本社主催・神道家懇談会
3. 21 支那基督教会の新傾向 教派の合同へ
着々邁進 注目すべき其の成行
3. 21 徐州神社の 造営進む
3. 21 印度駐在武官 手島少佐迎へ 日印協
会の懇談
3. 21 隣邦児童愛育所 視察を打止めに 華
北仏徒訪日視察団 愈よあす帰途につく
3. 21 貴族院予算総会に於る 宗教に関する
質疑応答 下村宏氏、外地の宗教対策
で 政府当局の答弁求む
3. 21 台湾に於ける 曹洞宗の現勢 高階総
務婦来談
3. 23 “汝等、審かれるゾ” 上海日本基督
教連盟が 米の宣教師大会に要請
3. 23 中支青年僧 訪日巡錫団 出発延期す
3. 23 外地の宗教対策で 政府当局の答弁求
む 貴族院予算総会に於る 宗教に関
する質疑応答 (承前)
3. 23 支那宗団は工作対象に 日本仏教のみ
で組織 中支宗大連の新規約
3. 23 教育局長候補 趙氏に就いて 福田開
正氏談
3. 23 中支大同連に 顧問をおく 廿日局議
で決定
3. 24 満洲国の宗教 松本定敏
3. 24 中央政權考試院長 王揖唐氏を語る 故
権田氏に灌頂うく
3. 24 平壤神学校 四月開校
3. 24 同志社神学科へ 中国人の入学 崇貞
女学校教師
3. 24 日基との 提携強化 台湾長老派大会
3. 26 首都南京に 新寺建立 曹洞の曹溪寺
3. 26 朝鮮西別院に「護国法友会」
3. 27 新政権の布教権確認で 京都の大講演
会 仏教護国団が主催
3. 27 印度連邦案可決 自治を要求 回教徒
大会で決議
3. 27 大陸社会事業 研究視察団 京阪神社
事家
3. 27 日滿支親善の 和平国榘大法会 けふ、
大連聖徳会で
3. 27 更生国民政府 成立記念座談会 華僑
の張則盛氏ら招き 宗教問題研の催し
3. 28 日華女学生の親善スクラム 薄幸な華
人女学生に 日本少女の温い同情 彩
る北京の純情譜
3. 28 華人女学生の彼岸詣 宗教教育を徐々
に実施 北京東別院の朗景
3. 28 新政府の承認により 招来するもの二
つ 成行き各方面で注意
3. 28 支那の人口は 果して幾億か? 支那
人口の変動性
3. 28 布教権確認へ 講演会に東京から 久
野芳隆氏参加
3. 28 難民救済の数字 上海の支那救世軍
二年間の総計は語る
3. 28 上海中日組合教会 小児園献堂式 施
療所も近く建築
3. 29 渡支不良分子を 断乎引戻すべし (上)
栗山耕三
3. 29 ハリキル女性軍 大陸への進軍譜 女
宗教学者 三重野女史ら 若いお嬢さ
ん達
3. 29 新中国での布教権は 文化協定に包含
か 新政府では行政院内政部に 民訓
局設置、処理せん
3. 29 布教権に就いては 決意と成算あり
大谷光瑞氏力強く表明 三教徒の懇談
会
3. 29 南京日華仏連 常任理事会開く
3. 29 仏教徒の慶祝使節 保留の名でお流れ
新大陸問題を中心に 相対立する二
潮流
3. 29 帰るラマ僧中 二名を選抜 引き続き
留学
3. 29 けふ、長崎上陸 中支青年僧訪日団
日程一部変更す
3. 30 渡支不良分子を 断乎引戻すべし (下)
栗山耕三
3. 30 満洲国皇帝 御来邦
3. 30 けふ、在洛華僑相集ひ 新中央政府成
立祝賀式典 興亜建設を誓ふ宣言、決
議 東本願寺に渦巻く歓呼
3. 30 南京遷都式 けふ、盛大に挙行 慶祝
典礼は来月廿五日
3. 30 神社に変わる 蘇州知恩院 目下土地物
色中
3. 30 日本語の海外紹介に 辞典・文典・読
本の編纂 国際文化振興会が研究 向
ふ七年間の予定で開始
3. 30 日本児童の 作品展 中支宗大連 神
道部の催
3. 30 中支に独特な使命で 愈よ社会事業初
む 事変の隠れたる奉公運動 西本願
寺の活躍
3. 30 汪氏の対宗教策に 意見書提出の準備
高雄の大醒法師
3. 30 中支警務部が 寺廟碑等調査
3. 30 安藤慶爾氏 転駐社行会 大醒法師ら
出席
3. 30 漢口神社の維持に 新年度から氏子組
織 奉斉会財団結成 四月一日成立奉
告祭
3. 30 支那に於ける 基教の現状 四十年間

- に五倍増加
1940. 3. 30 入廟喇嘛研究の 協和会留学生決る
いづれも武道の達人
3. 30 金光日語学院 の訪日視察団 八日本
社訪問
3. 30 在滿教務部 設置
3. 30 興正派大陸 進出の名物 菅野翁を失
ふ
3. 31 滿洲国の仏教 松本定敏
3. 31 教派神道各派の生きた事業 時代に役
立つ仕事は何か 各派の重鎮が集って
の座談会
3. 31 日支の共存共栄は 東洋精神の復古
東亜医学院に東洋医学を 宗教問題研
座談会 新政府成立記念
3. 31 新民会へお祝い 華文日蓮、神道教徒
両読本 各一千冊を贈る
3. 31 新政権へ 祝電 ポース氏から
3. 31 西本願寺が 汪氏へ祝電
3. 31 憧れの日本! 嬉しくて胸が一杯 北
京金光日語学院生来阪
3. 31 大陸に成功の ルンビニ学苑
3. 31 興隆日本と手を携へ 新政府の昌隆に
寄与 東本願寺に於ける祝典で 在洛
華僑の力強い宣言、決議
3. 31 けふ入洛する 中支仏教視察団 京都
歓迎会
3. 31 布教権要望講演会へ 更に大村、浜田
両氏参加 “時同” 全国的結成へ
3. 31 北支蒙疆の各宗開教使ら 興亜仏教講
習会 北支仏教連合会結成
3. 31 孤児も大喜び 隣邦児童愛育所 宮井
大佐が指導
4. 2 中支仏教青年僧 訪日視察団入洛 け
ふは比叡山へ
4. 2 大工業都市の 発展と同一歩調 奉天
西本願寺別院 新土地に移転地を獲得
4. 2 大同学院 視察団
4. 2 北支仏教連合 会結成さる 現地各宗
協力
4. 3 通州事件遭難者慰靈 殷汝耕氏が施主
で 増上寺で法要営む
4. 3 南支の抗日青年に 示す“鬼手仏心”
謬れる日本観の一例 大園氏の戦線
便り
4. 3 滿洲の神社行政 大使館から内閣へ移
管か
4. 3 恭しく宮城遙拝 感激に胸轟かす 金
光の北京学院一行 あす退京、伊勢へ
4. 3 日本人基督者の 雄飛を目指し 南洋
伝道関西折援会が 大活躍を開始す
4. 5 ソ満国境の寺に咲く 異風景・・宗教
的興亜型 牧師と新夫婦が仏前に 綏
芬河の椎野生家氏談
4. 5 新国民政府へ 日本仏教徒の名で メッ
セージを送る
4. 5 児玉達童氏 渡支送別会
4. 5 在滿内地人の 体位改善の急務 国立
食養研究機関必要 田村滿洲教育司長
談
4. 6 北支同願 会の奮起
4. 6 立花駒大学長 中北支視察
4. 6 日華仏教徒ら 歓談のひとつとき 中日
青年僧迎へて 華頂会館で歓迎会
4. 6 留学生を先生に 仏教華僑日校誕生
東本願寺が開設
4. 7 滿洲国の宗教 松本定敏
4. 7 危地から救はれた喜び 中支最西南の
第一線にて 鮎沢本社特派員発
黙々として続けられる 血みどろの
戦ひ
4. 7 文化日本の認識へ ラマ僧見学の旅
十八日京都発東上
4. 7 蒙古の最奥地に挺身 ラマ僧と如法の
生活 西藏・蒙古両語に精通の 谷大
出身六学徒出発
4. 7 新秩序建設に貢献せん 「北支日本仏
教連合会」結成
4. 7 新中央政府誕生の 慶びの声きつつ
北支蒙疆から参加二百名 興亜仏教
講習会終る
4. 7 全日本仏徒の名で 新政府激励 仏教
徒時局同志会が 慶祝の辞 立花俊道
氏に託す
4. 7 北支蒙古の 主任会議 西本願寺
4. 7 興亜奉公宗教 講演懇談会 文部省主
催
4. 7 中支の 春便り =季節の花・楽書=
高柳壽雄
4. 7 北京愛隣館 事業拡張 興亜院の補助
4. 9 大陸文化工作の諸問題 室伏高信 上
4. 9 北京金光日語学院 訪日団本社訪問
4. 9 中支青年僧 訪日団上京
4. 10 大陸文化工作の諸問題 室伏高信 中
4. 10 日本の真相に触れて 蘆溝橋事件発生
当時の 対日本観を是正 北京金光日
語学院訪日団 本社訪問・感激語る
4. 10 釈尊降誕の夕 日華仏教徒の交歓
4. 10 “信徒にして下さい” 華人全学生の
熱願 靈地に於ける感激!
4. 10 滿洲人に叫ぶ 第一回天理教講演会
在滿日本宗教団体の試み
4. 10 天に栄光=地に歓喜 白衣の勇士や印
度志士参列 皇紀輝く帝都の花まつり
中華僧も参列 代表献華拈香
印度教徒と 仏教徒合同 神戸の晩
餐会
4. 10 仏徒の慶祝の辞 直接汪氏へ手交 立
花俊道氏の壮行会
4. 11 大陸文化工作の諸問題 室伏高信 下
4. 11 劉將軍に説法 帰支する超君の話
“支那人に真宗の話 ワケはないです”

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1940. 4. 11 私設社事会最初の試み 帰還勇士の家族保護施設 診療所・託児所をも併設 四恩学園が五月早々着工
4. 11 金陵女子技芸学院 初代校長に孫氏 学童出身者が教育担当
4. 11 蒙古から 四名留学 比叡山中学
4. 11 滿蒙開拓に 新運動展開 西本願寺が実働の人求む
4. 11 日本仏教徒の確立した組織 一般社会の安定に驚く 中支青年僧訪日視察団 団長隆定法師は語る
4. 12 日華親善殿へ 外額等贈る 新政府要人連
4. 12 南京基教青年会 愈よ十四日に発会式 末包氏が産婆役
4. 13 印度の基督教は 続々印度教に復帰 米宣教師ガンヂー翁に抗議
4. 13 支那新政府への 慶祝と皇紀記念 大日本仏青連盟の協議
4. 14 滿洲国の宗教 松本定敏
4. 14 北京から華人女学生 “綜合大会”に 参加 姉妹校・光華高女の誕生で お東に描く＝興亜純情風景
4. 14 日支青年の興亜大業に協力する道は？ 両国学生・青年の 胸襟を披いての この懇談を聞け 本社主催の学生座談会
4. 14 日本の真相に触れて 興亜の感激愈よ 深し 隨所で受けた盟邦の親情！ 北京金光日語学院訪日 団の本社訪問の記録
4. 14 アッ・爆弾の洗礼 敵機盲爆の跡に慄然！ 無念無想・観念した瞬間 ○○にて 鮎沢特派員
4. 14 滿支から留学生 大谷大学へ四君 劉君は専門部入学 学園の興亜風景
4. 14 蒙古から更に お西へ留学生
4. 16 支那に何を与ふべきか（上）－大陸精神文化工作の一課題として－ 陸軍歩兵中佐 大久保弘一
4. 16 名も太子山と称し 山上に聖徳太子奉安 興亜の拓土養成の 西本願寺沓掛道場
4. 16 婦人矯風会 上海支部 新事業計画
4. 16 天理図書館 支那語展
4. 17 支那に何を与ふべきか（中）－大陸精神文化工作の一課題として－ 陸軍歩兵中佐 大久保弘一
4. 17 復興の漢口 神社大祭
4. 17 開拓に励む老住職二題 けふ先遣隊率る出発 分村四ヶ年計画へ 東本願寺の感激的風景 これは六十一 牡丹江で活躍
4. 17 新政権今後の政策に望む 和平建国の勝利には 農民救済よりない 事変処理の急務は脚下照顧 国内革新が焦眉
- の急
4. 17 滿洲国の帝国神社行政 関東局に在溝 教務部創設 勅令を以て官制公布さる
4. 17 愈よ帰国の ラマ青年僧
4. 17 曉烏敏氏ら 漢口に活躍
4. 18 支那に何を与ふべきか（下）－大陸精神文化工作の一課題として－ 陸軍歩兵中佐 大久保弘一
4. 18 大派の朝鮮全開教使 けふから医療を習得 先生は聖徳病院長ら 開教史上に一エポック
4. 18 一部日本人に頂門の一針 蔣の“無限の時” 来春までに欧州が晴れば 東洋は必然的に曇後雨
4. 18 大谷派朝鮮 開教団総会
4. 18 滿洲国からラマ僧 30名内地へ留学 興亜局が積極的支援 知恩院の事業認めらるる
4. 18 廃廟を善用し 台湾人教化道場に 新竹西本願寺の 台湾皇民化運動
4. 19 曉烏氏の漢口講演会 開会直前に突如 横槍 裏に飽なき宗派争ひ
4. 19 漢口神社維持費に 総指令部から一万円 奉斎会財産四万円余に
4. 19 遺族の涙も新た 股汝耕氏を施主に 通州殉難者の慰霊法要
4. 19 新中央政府成立に即応し 大陸の精神文化建設へ 本社主催・第二回東都の研究懇談会 廿六日山王ホテルに開催
4. 19 現地政策の明朗化と “一旗組”の利己的非難 文化政策は退去でない
4. 19 南京日本基育発会式 堀総領事の祝辞など 非常に盛会であった
4. 19 中支僧侶を選抜 黄蘗宗におくる 興亜院が人選に努め まづ第一回は五名位
4. 20 華北実業家が 帰郷式を受く お西の二上人法要に 咲いた興亜朗景
4. 20 “神風”本調子に吹くか？ 欧州動乱の發展次第 相当程度以上に 弱り込む重慶政府 新中央政権の前途に 輝きき未来を約束
4. 21 宗教家に告ぐ＝蒙疆に進め 先づ民心を掴め 外国系キリスト教の勢力 凌ぐ実力の扶植へ
4. 21 中支蚌埠に 中日仏連 結成さる
4. 21 南洋神社の造営進み 宮司・禰宜の陣容も内定
4. 21 滿洲国ラマ教宗団結成 查汗呼圖活仏を団長に 国内の推進力たらしめる まづその最初に 活仏ら日本視察寺院の運営等
4. 21 春雨衝いて ラマ僧入京 先づ宮城遥拝
4. 21 馬糞担ぐ連運枝 彌栄主義に盛る念仏

- 調 満蒙開拓訓練所を感動さす
1940. 4. 21 情勢の推移に政府の 措置を嚴重監視
政界の注目ここに集る 蘭印問題
有田外交鞭撻へ 実動開始の気運
問題の重大性痛感
4. 21 中国新政府へ 祝賀文を贈る
4. 21 汪精衛氏に メッセージ 西本願寺会
衆 訪華皇軍慰問
4. 21 大陸の神祇宣揚機関 講究所の北京分
所具体化 高階理事は現地に飛ぶ
4. 21 東福と建仁 慰問使派遣 廿三日出發
4. 21 朝鮮最初の 教化研究会 本願寺関係
者の 努力で五月発会
4. 21 亜細亞民族の親善に 歩んだ独自の二
十年 小林義道氏に聞く(一)
4. 21 此国家重大のとき 管長轡ならべて第
一線へ 管長が床の置物では祖師に相
すまぬ 日蓮宗管長望月日謙氏は斯く
語る
4. 21 南京より
4. 21 台湾教信
4. 23 日滿華親善 兒童大会
4. 23 蘭印を狙ふ米の魂胆 裏面で戦争遅延
策す
4. 23 台湾西別院に 八雲氏を挙用
4. 23 釜山共生背が 記念出版計画
4. 24 大陸の基督教 と仏教工作
4. 24 鮮仁協会三ヶ所千々和氏の下に活動
4. 24 京城基督厚生 運動講習会
4. 24 明年支那大陸に 興亞仏青大会開く
大日本仏青連盟で 与論喚起に努む
4. 24 新中央政權へ メッセージ 皇紀記念
大会 理事会で決る
4. 25 蘭印問題に関しては 政府自主的態度
を堅持 充分の用意と確信持つ
4. 25 南方地方の華僑 汪政權支持通告 日
本の態度に好感
4. 25 台湾高雄の 光瑞氏邸宅 五月開園式
4. 27 半島人教会四十三ヶ所 日基浪速中会
に合併 十七名の同教教師と共に
4. 27 布哇二世達 支那現地へ
4. 27 組合教会の 指導下に移る? アメリ
カン・ボード 南洋伝道団の傾向
4. 27 国策化しつつある 満洲食養運動 桜
沢氏を聘して 各地に指導講習
4. 27 学堂出身要人が幹部 金陵女子学院の
陣容 五月一日から愈よ開校 東本願
寺の中国婦女教育
4. 27 西本の梅原執行 満支視察へ
4. 28 対支精神文化工作語る 国家としての
対策は 如何すればよいか 本社主催・
第二回懇談会
4. 28 上海外国租界の虚勢も 底が見えて来
た 腰を据えて頑張れ
4. 28 蘇州日語学校に 興亞院から援助 仏
教関係では中支最初
4. 28 汪精衛氏の 姉兆娥氏を救うて
4. 28 在留邦人を圧迫 不可解な蘭印当局
4. 28 台湾開教監督を どうしてくれる 相
当の人物を任命せよ 代表東本願寺に
陳情
4. 28 仏教徒の慶祝施設 某宗派管長に交渉
愈よ実現を見るか
4. 28 白衣の勇士慰問と 銃後の固め促進に
大谷紆子裏方が 満洲朝鮮に飛錫
4. 28 亜細亞民族の親善に 歩んだ独自の二
十年 小林義道氏に聞く(二)
4. 28 支那の旅 賃潮風
4. 28 満洲国の宗教 松本定敏
4. 28 興亞行道者 養成所へ 大派から三君
5. 1 日本仏教各団体通じ 最初・海外の社
事 “南京に司法保護事業” 西本願
寺が愈よ開設
5. 1 全仏教徒の慶祝使節 大派光暢法主に
決定 仏連当局の交渉に対し 不日正
式受諾回答せん
5. 1 基督教伝道 義勇軍養成 伝道学社の
創設 各派の權威を講師に
5. 1 大陸に紙芝居 南京西本願寺の 谷口
氏携へて帰任
5. 1 東亞の精神文化確立へ 強力な中央機
関設立 六日各方面代表が準備会 運
動の具体案作成
5. 1 軍官民各方面の 強烈な要望 東亞精
神文化協会(仮称)生る 本社東京会
談の収穫
5. 1 東亞新文化建設に 日滿支教育家団結
東亞教育協会結成
5. 1 南京仏教總會 一周年記念式 一ヶ月
延期
5. 1 宗教団体法 実施に伴ふ収穫 解放さ
れた半島人教会 半島人の大なる喜び
5. 1 北京覚生女子 中学訪日団 明日東京
へ
5. 1 興亞行道者 養成所開設
5. 1 浄宗留学生 成田氏帰朝
5. 2 再び不良分子を支 那から引戻せ!
栗山耕三
“道義の東 亞連盟”
抗日意識は何処から生じたか
5. 2 大陸へ灸療行脚 開拓民の保護政策へ
駒井博士乗り出す
5. 2 ツカ・ガールと 日支歌の交歓 覚生
女学校生ら
5. 2 大陸では嚆矢 “興亞家庭塾” 天津
東別院で開校
5. 2 華園法主を迎へ 京城に咲く内鮮融和
珍らしい檀家総代
5. 2 大陸に於ける宗教活動 一宗一派を認
めず 軍慰靈祭に代表参拝も許さぬ
休息に結成準備へ 北支神道連合会
5. 2 東亞新秩序建設に 執るべき教育方策

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 教育共済組合への要望等 帝国教育
会年度総会
1940. 5. 3 宣撫工作と新政府の意向打診 文化工作の首脳者は“支那人”を希望 宣撫戦線に異状を来すか 政治的解決の結果重視
5. 3 三年間は準備 大陸進出の西谷順賢氏談
5. 3 日支精神的結合の楔 東京に“道慈研究院”設立 紅卍字会後援회가
5. 3 蘭印問題で 氣勢揚ぐ 祭政社主催
5. 3 日満文化 協議会 五日新京で 総会開く
5. 3 支那人の腹の真底は 民族建国が目的 日本との提携は手段 戦捷日本は如何する？
5. 4 “濁流のまま提携せよ 両足を突込むな” “江上のホテル”に支那を語る 宗匠使節・永田秀次郎氏
5. 4 幼稚園や日曜学校 中国人青年会結成 天理教華北伝道庁 新しい計画の数々
5. 4 南京西本願寺 中旬移転完了 修理工事進歩
5. 4 親交に露骨な達頼と 合流せよは不可解 “反英親華”の班禅ラマが 特務機関に斡旋陳情 新政府の善処要望
5. 4 両民族は仏教を通じ 永遠の平和を唄まん 立花駒大学長の間に答ふ 考試院長 王揖唐氏
5. 4 西本の台湾 教化陣強化
5. 4 東亜綜合の社会 事業工作进行を期待
5. 5 官民協力の興亜精神文化工作の完璧の道は？ 先づ真裸に一丸となれ 对支先進文化工作第二回 懇談会の幕は開いた 時 四月二十六日 午後六時から 所 東京赤差か山王下山王ホテルにて 主催 中外日報社
5. 5 華北総鎮守も創建 居留民待望の 北京神社近く鎮座祭 主任神職に有賀宮司内定
5. 5 食料と医療だけは 政府が絶対保証せよ 衣住は極度の制限うけても 耐へざるべからず 汪政権成立後の 内外諸情勢 に関し日本政 府当局に要む
5. 5 興亜と銘打つ運動は 宗派名を断然廃せ 大陸布教の改善策
5. 5 在留邦人の 精神的糾合で 特殊使命達成へ 山東祭政会の活躍
5. 5 興亜行道者養成所 第三回開設 東西両本願寺も新参加 風薫る武蔵野原頭
5. 7 内鮮一体の 花まつり
5. 8 機会さへあれば貴国に 諸大徳を訪ねたい 靳雲鵬氏と筆談問答 大派松本
- 興仁氏帰朝談
5. 8 長期建設に対応 統制経済の方向転換 その転換傾向は？
5. 8 日満支合同の 興亜社事大会 今夏八月、大連で
5. 8 広東に蠢く癩患者群 彼等を迷信から救ひ 治療機関設置が急務
5. 8 杉本哲郎画伯 印度風画展 大阪大丸で
5. 8 “正しき信仰を 本島人に与へよ” 台湾の寺廟整理で 森岡長官から闡明 地方長官会議
5. 8 東亜精神文化の確立へ 中央機関設立 準備進む 規約案成り来月発起人総会
5. 9 印度、ビルマ、泰国ら糾合 一大抗日 仏教運動を展開 蔣の使・太虚法師各国を歴訪し 巨額の現金薬品の募集に成功 重慶側土壇場の足掻き
5. 9 皇紀奉賛の至誠 覚生の華人女学生 あすから音楽コンクール 体育大会で活躍
5. 9 ラマ青年僧の 第一回修了式
5. 9 現地の実情に即した 海外開教線の刷新 皇紀奉賛法要を機に 大派、あすから監督会議
5. 9 大派台湾開教監督 深奥氏に決定
5. 9 満洲国開教に お西の拡張陣
5. 9 樺太にも拡大
- 5.10 太虚の妄動
- 5.10 大陸の 旅に拾ふ(上) 南京にて 松本興仁
- 5.10 御神徳大陸に輝く 民団の皇紀記念に 上海神社境域拡張 十五万円で今秋迄に完成 招魂社は護国神社に
- 5.10 南京神社・忠魂碑 敷地問題で行惱み 五台山に建設するには 新政府との交渉必要
- 5.10 半島の癩患者六千の 真心表はす銅像 爆弾三勇士の作者松尾薫氏が 一灯園で専念折作
- 5.10 岳麓に修養道場 日満文物心一如の確立へ 兼井鴻臣氏の計画
- 5.10 華人女学生が歌ふ 裏方作歌“同朋の歌” 奉賛音楽コンクール
- 5.10 支那派遣員の 報告を中心に討議 日本基青同盟が
- 5.10 覚生女学校の訪日感 李王殿下の御仁 慈 一代の幸福と感激
- 5.10 阿原局長も臨席 きふふラマ僧修了式
- 5.10 西本会衆訪華 中支班出発
- 5.10 天涯孤独の 碧眼僧 仏跡に骨埋む
- 5.10 興亜仏教会
- 5.11 新政府と文化 諸工作の問題
- 5.11 大陸の 旅に拾ふ(下) 南京にて 松本興仁

1940. 5. 11 全国私設社事大会 けふから三日間
提出議案決定す
5. 11 新東亜の天地を明朗に 犯罪防止と刑
余者保護 日滿支事業家の大同団結へ
保護協会の結成計画進む
5. 11 英の印度人迫害 文明世界の注意喚起
独立連盟日本本部の決議
5. 11 国家、宗教、歴史その他 興亜の指導
原理を討議 全国の関係学者、官吏達
が 日本語学振興学会で
5. 12 対支精神文化工作懇談会 紙上傍聴所
感(上) 中井玄道
5. 12 支那に於る 愛路工作 上海華中鉄道
会社 中村慶範
5. 12 三民主義とは 代議士 安藤正純
5. 12 支那雑感(一) 奥村洞麟
5. 12 大陸に延びよ宗教家! 日本に真の逆
賊なし 凡ては皇恩に一致する 一緑
芳ばしい初夏の夜を懐しむ欲談一
5. 12 日滿支社会事業協力し 聖戦目的の達
成期す 全国私設社事大会 第一日
5. 12 基督者滿洲移民村 三十家族を一団と
して 先づ牡丹江付近に建設
5. 12 新京の曹洞 別院落慶式
5. 12 思想国防の完璧陣 朝鮮人転向者も続々
陸軍兵特別志願
5. 12 覚生高女生 大阪の日程
5. 12 ラマ僧来社
5. 12 大阪興亜仏教会 本年度大会開く 将
来の日華親善協議
5. 14 対支精神文化工作懇談会 紙上傍聴所
感(下) 中井玄道
5. 14 紫金山の靈域化と 支那側供養塔建設
五千年先を考へる事が真の建国 忠
靈顕彰会 桜井大佐に聴く
5. 14 新中華の教育方針は 老子の精神を根
本とす 対神社観、忠靈塔観など 趙
正平教育部長と語る
5. 14 対支那人教化に 高野山療院を 教会
所開設を断念した 尾初瀬徐州駐在
5. 14 新京神社の 移転造営 実行委員会
近く第一回
5. 14 北京神社の 鎮座祭 来月六日執行
5. 14 汪精衛氏と会談・神尾東方文化連盟理
事 重慶の離間策警戒 出来た新秩序
の実験室的見本 工業化が今後の任務
5. 14 北京の同願会に呼応し 大阪に日華同
願会結成 華僑、邦人貿易商、仏教徒
が 新東亜建設に緊密な握手
5. 14 日滿支社事連盟 結成準備に着手 全
国私設社事大会 第二日
5. 14 京城西別院 護国法友会
5. 14 南京仏教会 釈尊降誕会 日華合同で
5. 15 支那インテリ層も 建設協力に傾く
デマ宣教師はミッション 本部から引
上を命ず
5. 15 “内鮮一体運動のため 積極的に働か
せて呉れ” 半島出身者の転向者は望
む 時局修養懇談会で
5. 15 ここにも入学難 蒙古の学校語る 厚
和の宗村芳英氏
5. 15 大陸の宗教工作懇談 兼井青島宗連理
事長迎へ 日本宗教連盟主催
5. 15 唐山東省長ら と財界人懇談
5. 15 日基大陸伝道 滿洲中会の発展 北支
中会設立目指す
5. 15 小泉孝三氏 北京国立師範 大学教授に
蘭
5. 16 蘭印問題 日英米仏四国の 不干涉協
定締結説台頭 政府の積極的行動要望
さる
5. 16 米海軍極秘裡に 比島方面に進出 今
後の成行重大視
5. 18 東亜建設の 指導原理 中根環道 一、
東洋思想の根拠
5. 18 日滿支から四百 五十名参加して 興
亜教育大会 一今夏東京で開く一
5. 18 今日の印度聴く 手島陸軍少佐に 東
洋精神研究会
5. 18 晋北仏教学院に 興亜院が助成 蒙疆
でただ一つ
5. 19 東亜建設の 指導原理 中根環道 二、
一体主義と我が国
5. 19 仏教徒代表使節に対し 現地日本大使
館の見解 宗教界は棄権と信ず 国民
の慶祝使命は既に完了 今更追ひうち
は変だ
5. 19 上海に童子軍結成 抗日を親日に塗り
潰す 金光教本部が準備
5. 19 光照法主の“陣中教諭” 聖地に誓ふ
報国の至誠 現地陸海兩司令官と法主
に感謝打電 西本願寺の全国門徒大会
5. 19 南京基督教会事情 末包敏夫氏の報告
5. 19 野依秀市氏 汪氏と会見
5. 19 今度は華人教師 訪日団、今秋来朝
金光上海忠信小学校の計画
5. 21 東亜建設の 指導原理 中根環道 三、
至公至大の 御仁慈(上)
5. 21 仏連のたち遅れ この機会に反省を要
望 ウッチャリになりさうな 仏教徒
慶祝使節の渡支行
5. 21 皇軍慰問使 大陸に散る 布哇二世
朝代さん
5. 21 日華同願会 南京寺で 今夜例会
5. 21 黄檗の対支事業 東亜僧団復活 中国
留学生収容 愈よ人を派遣す
5. 21 モットー“光は山東より” 東亜新秩
序建設に華人鞭撻 山東省の現状語る・
西田顧問
5. 21 亜細亜各国の 留学生軸心に 東亜学
生連盟結成 六月初旬に発会式
5. 22 東亜建設の 指導原理 中根環道 三、

1940. 5. 22 至公至大の 御仁慈(下)
 緬甸より喚び戻すべし 太虚法師を
 日本仏教連合会に寄する書 南京 藤
 井草宣
5. 22 南京仏教居士林長ら 日華両国から講
 師 異彩ある法話会設置 南京東本願
 寺の試み
5. 22 再度満洲に慰問行 大谷絰子裏方のプ
 ロ決る
5. 22 北中支蒙巡り 草繁全宜氏帰る 高野
 山で報告会
5. 23 東亜建設の 指導原理 中根環道 四、
 興亜建設と仁徳
5. 23 在支仏教団の信用失墜へ拍車 三派合
 同経営破る 皮肉! 表彰された蘇州仏
 教日語学校 補助金四千元返上か
5. 23 蘇州省立中学に 日語専修科開設 基
 督教と共に三校
5. 23 日本仏教の大陸布教は 先づ日本人から
 不良邦人の横行に悩む 暁鳥敏氏
 婦朝談
5. 23 大陸各地の 現地報告会を聴く あす、
 築地本願寺で 平等通昭氏婦朝
5. 24 東亜建設の 指導原理 中根環道 五、
 三民主義と滅私奉公 (上)
5. 24 中文の英 靈告別式
5. 24 全朝鮮に 特別布教
5. 24 大派開教人事
5. 24 華人小学校先生が 内地に見学旅行
 汕頭本願寺の斡旋で
5. 25 蘇州仏教日 語学校の内紛
5. 25 東亜建設の 指導原理 中根環道 五、
 三民主義と滅私奉公 (下)
5. 25 日滿保護事業 協定会案成り 新京で
 代表協議 東京に満人保護家養成所
5. 25 神社参拝反対の 不穩文書を発見 閉
 鎖後も地下で礼拝 平壤長老系聖經学
 校
5. 25 転向者の活動や 大陸の状況視察に
 観察所員を派遣せよ
5. 25 河北特務機関藤井晋氏報国 蒋介石も
 手を焼いた 秘密結社青幫の暗躍 仏
 教思想も流通する
5. 25 満洲基督教連 六月十日結成
5. 25 朝鮮基督教 連合会総会
5. 25 満洲の認識強化へ 満鉄が学生論文募
 集 入選者に視察旅行
5. 26 興亜精神の確立(上) 松本勝三郎
5. 26 かつての支那要人は 日支提携にかく
 叫ぶ: -これは僻目か認識か?-
5. 26 突如来社の股汝耕氏 仏教信仰の妙諦
 を説く
5. 26 中支近藤金光教専掌・北支森川東京高
 校教授語る
 中支 事業と布教を 区別して進み
 たい 宣伝を離れ日支間の 気持のつ
- なかりに重点
 北支 支那人に対する 温味の欠如
 5. 26 “興亜精神文化協会” 愈よ結成・実
 働へ 七日発起人会総会開く
5. 26 満洲国からラマ僧 留学に27名来朝
 興安局が選抜して
5. 26 次は英港湾徹底破壊か 意表衝く独の
 電撃作戦 蘭印現状維持の解釈が問題
5. 26 支那雜感(二) 奥村洞麟
5. 26 朝鮮人の来阪 増加の傾向
5. 26 興亜精神の確立(下) 松本勝三郎
5. 28 大陸に神徳洽し 北京神社 上海神社
 5. 28 蘇州仏教日語学校の内紛事件
 関係三宗派総監ら 近く現地で実情
 調査 或は某開教使に退去命令?
 不適任者には 転任や帰国を希望
 興亜院(上海)での話
5. 28 満洲国の日系要人は 今後平均二年の
 寿命 恐るべきその不健康状態 日本
 小学生も満人に劣る
5. 28 中国国民使館ら けふお東訪問 一山
 挙げて歓迎
5. 28 高野山漢口 布教所決定
5. 28 新東亜建設に 処するの途研究 上海
 経済研究所副所長に 着任した小岩井
 浄氏
5. 28 日滿のYM接近 近き将来具体化?
 積極的な日本人指導要望
5. 29 増えた日本留学希望 何れも日語会話
 本を手に 各旗でラマ僧の学校建設
5. 29 北京の名利広化寺を開放 五万坪の寺
 有地に社会施設 呉將軍未亡人も巨額
 の寄付
5. 29 ラマ僧二名 身延に留学
5. 29 新京忠霊塔 春季大祭
5. 29 答礼使節一行 東本願寺訪問 法城で
 親善風景
5. 29 絰子裏方の渡鮮で 全鮮婦人会拡大
 京城でお西が大会
5. 29 日本基青同盟の 大陸特派員継続 養
 成機関で充実
5. 29 曹洞の興亜講座 浅草の伝道会館で
 嬉し、日華戦没英霊に 明け暮れ捧ぐ
 追善回向 粟雜炊とマントウの 天津
 居士林の体験談
5. 30 再び、蘇州日 語校の問題
5. 30 国境線や北滿の開発に 必要な総合的
 計画 対岸に劣る種々の施設 作家富
 沢有為男氏の見聞録
5. 30 永遠の和平導くものは 両国仏教の交
 流だ 陳正使、堂々信念を吐露 東本
 願寺の日華親善絵巻
5. 30 川上曹源氏が 満鉄沿線を巡歴 満洲
 国軍をも慰問
5. 30 興安西省遺 跡保存館
5. 31 黄檗禪の逆輸入 留学生人選に着手

1940. 5. 31 米国の援荷行為是正に 使節を派遣せよ 学校の礼拝問題等議す 基督教教育同盟総会
5. 31 仏教徒の慶祝施設 派遣延期その他協議 仏連本部理事会
5. 31 満洲神職会 時局講習 今泉翁が出講
6. 1 四川の空に散る 若鷲 桑原准尉を憶ふ 江口堅次
6. 1 主要事務は興亜院で 中支宗連又も機構改革 殆ど有名無実化に縮小 自由競争時代に還元か
事実が証明する 無能力と無權威 当初の目的に反す
活動するものだけに 補助を与へる 文化局長談・・開教第一 佐治、平出両部長帰任
6. 1 印度僧ラ氏が JOAKアナウンサーに 海外放送に日本仏教紹介
6. 1 支那で持てるのは 一に医者、次は宗教家 宇佐博士の意味深き土産談
6. 1 日語習得熱旺盛で ここにも入学難 揚州興亜日語学校
6. 2 セイロン島の一大勢力 仏教靈智協会 創立六十年式 有田外相が仏教団体に 祝意表明を懇願
6. 2 詳細な報告待って善処 蘇州仏教日語学校問題で 浄土宗務所当局の談
6. 2 梅原真隆氏の 満支視察談
6. 2 新政府外務側より「布教権」許可の言明 藤野氏等の報国
6. 2 懇請もだし難く 北京大学日系首席教授に 山口察常博士就任
6. 2 信濃憂人氏訳編「支那民衆の告白」を読む 西田美美子
6. 2 支那を尊重せよ 藤田篤麿
6. 4 支那の人口抑止(支那人口の変動性) 野寺勇
6. 4 四川の空に散る 若鷲 桑原准尉を憶ふ 江口堅次
6. 4 日本仏教未進出地の 南市に日華寺建立 特務機関の指導援助で 宗派系統は宗連に直属
興亜仏教班員の 宗教工作奏効す 境域数千坪 付帯事業有望
6. 4 国民外交果して 西本願寺会衆中支班帰る
6. 4 “孔孟聖図鑑”公刊 興亜精神文化発揚と 日支の融和に資す
6. 4 皇紀法要 興亜花祭 吉林東本願寺
6. 4 中支基督教青年運動 更に徹底的完成へ 人的要素の充実
6. 4 日蓮側遂に離脱 二派で引続き開校 蘇州仏教日語学校
6. 5 四川の空に散る 若鷲 桑原准尉を憶ふ 江口堅次
6. 5 ペルシャの東方教会 日本へ亡命の噂
ソ連の圧迫に堪へず
6. 5 朝鮮にはもう 長ギセル風景なし 南鮮映画伝道の 池浦氏から便り
6. 5 蒙古から更に五名 七月上旬知恩院へ 青年僧留学に來朝
6. 5 汕頭小学校の先生六名 日本視察へ
6. 5 日本は型を脱せよ 澆刺さが中国人に劣る 自治は彼等の伝統力だ 西尾組合教会教師語る
6. 5 滿鮮へ白衣 勇士慰問行 大谷絃子裏方 きのふ出発
6. 6 仏教こそ日華を結ぶもの 日華仏研が 汪氏に祝賀文
6. 6 歌ふ“アジアの子供” 北京市内の全小学校 日本語学芸会の盛況
6. 6 新舞楽研究会 大連神社に創設 松岡洋右氏の発意で 九月、皇紀奉祝奉納
6. 6 海外神社と神官 その使命について語る
6. 6 南進国策に即応 テニアン本願寺の 岩佐昭雄氏活動
6. 6 荒んだ支那で 心慰める“中外” 上海の愛読者会
6. 6 蘇州仏教日語校 内紛問題を検討 大阪仏徒社事同盟
6. 7 前線将士の知的渴望 満たす・慰問講演 事変の推移と共に慰問の 方法に多大の示唆 志村氏の活躍
6. 7 日本留学への 懇願もだし難く 浄宗菱田、北川両氏が 個人で引きうく 奉天皇寺のラマ僧
6. 7 日本訪問の感銘 林柏生氏、南京で談る 東亞新秩序に邁進 日支両国民の心理 建設が何より大切
6. 7 神祇思想の大陸宣揚 講究所、外務省に陳情 谷次官も協力を約す
6. 8 要職に就き 活発に活動 帰寺したラマ僧の報告
6. 8 一応白紙に還元 末藤日宗監督と 現地三者の懇談 蘇州仏教日語学校問題
6. 9 支那雑感(二) 奥村洞麟
6. 9 上海印度人会 在住の二千人が結成 エ・エム・サハイ氏談
6. 9 難民収容所を其のまま 牧師たちの修養道場に 被収容者にも宣教師的訓練 上海基連が第二期計画へ
6. 11 対支文化工作と知性層
6. 11 関係宗派当局は事情訊し 一版に公表の義務あり 蘇州仏教日語学校の内紛を 大阪仏教社検討して決議
6. 11 山口村開発に 青年僧起つ 自ら拓士の募集
6. 11 兼井氏迎へ あす本社で 座談会開く
6. 11 渡支制限令と開教使 対支事業担当者には 殆ど無条件許可 邦人対手は厳重審査

- 今後は一定の養成機関 修了者のみに渡支許す リストを設けて厳重監督 但し興亜院中連の意向
 宗教家の渡支は 宗連を通すこと
 中支では対策なる
 布教監督なき 宗派は締め出し 満洲国の宗教政策
1940. 6. 11 西本願寺の北 支人事大異動
 6. 11 南京仏教総会 中支宗大連と 連絡を密にす
 6. 12 特色なき宗団 の興亜運動
 6. 12 支那問題を語る けふ、本社樓上で
 6. 12 童心通じて 日支の親善
 6. 12 組合基教会の 大陸伝道方針 常務理事会で決定
 6. 13 渡支制限令と 開教使の問題
 6. 13 支那の農業 人口について高橋梵仙
 6. 13 印度はどうなる？ あす、本社の座談会
 6. 13 民族の協和達成と 興亜精神の宣揚 “蒙疆借拓文化会”を結成
 6. 13 全満洲最初の 軍人遺家族母子寮 西本願寺関東別院に建設
 6. 13 日本學術協会 京成で大会
 6. 13 華北宗教界の現状と 宗教工作の重要性 一氏義良氏が“華北評論”で強調
 6. 13 興正派法主 自ら陣頭へ 朝鮮の教線大強拉化
 6. 13 大派宗議会議 前年度より 約一割の膨脹 満支開教も拡充強化 総額二百廿六万円余
 6. 13 “永い眼で 見てくれ” 中支宗大連 杉田書記談
 6. 14 支那の文化青年は 東洋民族的自覚へ 彼を深く理解せよ 支那問題語る座談会
 6. 15 太虚は才子ではあるが 自己の信仰持たず ◇…と喝破した印光法師 蘇州城外の山頂で修業
 6. 15 研究と体験から生む 華人用「日語教本」編纂 お西が全支教陣の統制
 6. 15 日本の印象は？ 北京金光日語学院生の 一つはらぬ感想
 6. 15 華人より先づ日本人 大陸の精神工作の 重点は 現地日本青年層に
 6. 15 妙心寺派の 新京別院 後任主任決定
 6. 15 中南支に 開教基地 満支開教方針
 6. 16 文化工作試考 上 三浦参玄洞
 6. 16 或る中尉の 戦闘手記 泉秀作
 6. 16 支那問題解決の鍵は？ お互の民族をよく理解せよ
 ー八十度の転回がお互ひに出来るかー
 ー真に東洋民族的自覚と結合へー
 6. 16 “内地に帰るナ”と セガむ華人の情熱 五原で夫に戦死された 白井未亡人は語る 日支親善解決の鍵
 6. 16 印度を生かすかどうか 千載一遇・然し困難 印度を語る・本社の座談会
 6. 16 黄檗で修業 する支那僧 今十六日出航
 6. 16 日支の文化提携が 何よりの急務 更に一段の努力を 横川良田氏ら帰る
 6. 16 三者握手 して散会 蘇州日語校問題
 6. 16 誠首を取消 中支宗連 紛争結末
 6. 18 文化工作試考 中 三浦参玄洞
 6. 18 仏教界の話題
 “増広四庫全書” 刊行・愈よ具体化 日支協力の文化事業
 南方仏教事情 最初の綜合紹介 国際仏教協会で編纂
 6. 18 看板あって実なし 日華仏連南京総会 に対し 西藏ラマ等から提議
 6. 18 社事にも進出せん 南京日本仏教会宣言 第二回総会並に大会
 6. 18 大派宗議会議 ー第四日ー 開教局を設置せよ
 6. 19 文化工作試考 下 三浦参玄洞
 6. 19 新大陸体験 今年も学徒が 勤労報国隊
 6. 20 インドシナへも加勢せよ 被圧迫有色民族のために 千家尊建
 6. 20 東亞連盟は一步進めて 亜細亞連盟に転回せよ 欧州時局の急転と 中川小十郎氏の所懐 事変処理の積極化
 6. 21 黄檗に中国僧 二名来山留学
 6. 21 けふ蒙古から ラマ僧来朝 知恩院招致
 6. 21 印度支那、インドネシヤ 独立の斡旋・日独に要望 在日印度独立連盟の決議
 6. 22 興亜学徒勤労 報国隊の派遣
 6. 22 今日の印度 手島少佐 語る
 果してその独立は可能か？ 微妙な国際状況の影響
 調べれば調べる程 見れば見る程複雑 表面の動きだけ見て 軽々に論ずるな
 6. 22 布哇西本婦人会 難民救済金贈る 新政府では直に施米
 6. 23 今日の印度 手島少佐 語る 2
 興味ある独立運動 現在では望み得ぬ 国民会議派と回教連盟
 6. 23 興亜仏教協会 七月二日創立総会挙ぐ
 6. 23 満洲国が思想対策協議 廿五日新京に実務家会同
 6. 23 徳富蘇峰翁著 満洲建国読本 増刷又増刷
 6. 23 欧州動乱の真只中に 印度は立上る？
 英国の為に印度人は参戦せず 独立し得る可能性は問題だ
 6. 25 満洲国皇帝陛下 奉迎国民歌
 6. 25 満洲の開拓地から 竈山神社に献穀

- 神饌田設けて謹作
1940. 6. 26 満洲国皇帝陛下を迎へ奉る
6. 26 今後の世界情勢とそれに処す日本の国策遂行上の態度
すぐ神社を建てる国民だが皇道宣布は困難 日本人は益々深く反省せよ 林銃十郎將軍強調
6. 26 今日の印度 手島少佐 語る 3
心底に知る日本の真意 印度人曰く “日印支が完全に 握手せば世界に恐い者なし”
6. 26 ガンヂー翁の 非暴力運動排す 印度独立運動に邁進 国民会議派の決議
6. 26 支那民衆の 土俗信仰 “道藏”の刊行図る 道教思想の基礎的研究懇懇
6. 26 道院信仰の理解通じ 興亜精神文化確立に寄与 世界紅卍字関係者大会 今秋東京で開催
6. 26 張満洲国宮相 熙侍従長を迎へ 紅卍字後援会が廿九日懇談会開く
6. 26 華人留学層 六名と決定 西本で教育
6. 27 第三国系教育施設視察 我が基督者も敵性認む “阿片対策は唯一の道だ” 小倉大阪基督主事語る
6. 27 英の嚴重監視を逃れ ビルマから留学生 外務省、國際仏協の委託で 初めて知恩院に来る
6. 27 北京の同願会に対し 中支に日華親善の僧團 金山寺仁山氏を中心に 泰印の仏徒をも参加さす
6. 27 躍進日本の姿 大谷紆子裏方 満鮮から帰る
6. 27 必ず坊さんが村長 融和問題解決の山口村 満洲移民の積極策
6. 27 基督者の移民村 計画全貌決定す 一斉に移住家族の 募集銓衡に着手
6. 28 半島人中学生の為 先輩が寄宿舎創設 勉学と実業の余力
6. 28 山西五台山の 六月大会復興 靈峰に集ひ東亜仏徒大会 中満蒙西から八万人
6. 28 中華僧訓育
6. 29 都会を初めてみる 中国小学児童らが 金光小学生らと交歓 華中鉄道愛路課の断で
6. 29 世界の唯一仏教国 泰国を何と見る？ 安易感は危険、正しい 認識こそ…と某外交官
6. 29 サイパン島に 司法保護機関 “大慈会” 生る 東本願寺も努力
6. 30 満洲国の産土神 鄭孝胥氏を祀る 来る 七月七日鎮座祭執行 太夷宮の創設 街行く姿も濃々しく 「中国童子軍」 生る 入学希望者も増えた 上海忠信小学校
6. 30 開教の要諦は人物如何 “僧心俗才”
- の渡支歓迎 大民会顧問の將軍と語る 藤井草宣氏
7. 2 満洲国皇帝陛下 愈よけふ御入洛 大宮御所に御滞在 神宮、山稜御参拝の御旅
7. 2 道院の信仰で日滿親善 張海鵬侍従武官長迎へ 我国関係者が懇談遂ぐ
7. 2 大陸各地に紅卍字会 後援会支部設く 内地に近く道慈院 松井中將抱負語る
7. 2 東亜モンロー主義と仏教 南方諸国との親善運動台頭 太虚法師の抗日仏教工作を克服せよ
7. 3 時に叫ぶ—(本社主催・於華頂会館)—講演会
維新運動とその 基本原理 (1)
速記録 中田驥郎
7. 3 蘭菊の契愈よ深し 満洲国皇帝陛下昨夕御入洛
7. 3 汕頭華人教員 けふ神戸入港
7. 3 北支宗教情勢の 新動向を語る 武田熙氏
7. 3 “皇道と紅卍字会” 家たる 張侍従武官長を囲み あす、本社主催の集ひ
7. 4 南方政策と 仏教徒
7. 4 時に叫ぶ—(本社主催・於華頂会館)—講演会
維新運動とその 基本原理 (2)
速記録 中田驥郎
7. 4 蘭印問題沸騰 開教使の責任重大 愆容たる邦人の態度必要 これを指導し信用固めよ
7. 4 満洲から 学童使節 神宮、山稜参拝
7. 4 紅卍字会を聴く 張侍従武官長進んで出席 今四日新島会館で
7. 4 大陸戦線にも 夏越祇形代送る 下鴨神社が慰問文と共に
7. 4 世界のテンポに先じ 民心をキャッチせよ 興亜仏教協会創立さる 宗教家に望む 外部の期待
7. 4 “印度人には印度語で” 彼らの国語統一の氣運汲み 日本の真情を通じさせよ
7. 4 印度国民会議派の 巨頭ボース氏逮捕 英官憲の弾圧発動
7. 5 時に叫ぶ—(本社主催・於華頂会館)—講演会
維新運動とその 基本原理 (3)
速記録 中田驥郎
7. 5 満洲国皇帝陛下 建国の聖地に 東亜建設を御祈念 畝傍陵と樞原神宮御参拝
7. 5 対支精神文化工作 宗団は素裸となり 重点主義をとれ 第三国の基督教は潰せぬ 陸軍情報部 鈴木少佐勸説
7. 5 事変解決は青年の手で 日支学生会議

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1940. 7. 5 提唱 反汪派をも相手に真実語る
ボース氏逮捕で 英国に抗議 在日本
印度独立連盟
独立運動が妻 僕と同郷の親戚 ポー
ス氏語るラ氏
7. 5 新秩序に教育的協力 東亜教育大会
中満蒙日から代表 四百五十名集る
7. 5 “印度の古壁画 探る” 出版記念
7. 5 亜細亞宗教事情の 認識深めむ 国際
仏協の講習会
7. 5 皇軍を驚かした 華人の先生たち 西
本願寺に参拝
7. 5 教界の名士集ひ 紅卍字会を聴く き
のふ、新島会館の盛況
7. 5 東亜建設国民連盟
7. 5 着々宣撫の 成果をさむ 金光青島班
7. 6 興亜仏教協 会に望む
7. 6 時に叫ぶ—(本社主催・於華頂会館)—
講演会
維新運動とその 基本原理(4)
速記録 中田隼郎
7. 6 満洲国皇帝陛下 日満協力の御誓 桃
山御陵に御参拝
7. 6 道をもって 世界和平招来 大抱負語
る張侍従武官長
7. 6 教団を相手とせず 紅卍字会に期待
大陸教化問題 善隣協会大島氏談
7. 6 日本の動きに敏感 南方の自由解放
運動一段と活発 回教圏を聴く
7. 6 広東YMの進出 中華牧師連も驚く
基督者兵士への感激新に
7. 6 富田、小倉両氏 満支視察報告 大阪
社事協会 暑さにめげず耳傾く聴衆
東亜新秩序建設と紅卍字会の経綸
7. 7 協会との腐れ縁を絶つ 肯ずば退去命
令も辞せず 新中国政府の教育法草案
7. 7 時に叫ぶ—(本社主催・於華頂会館)—
講演会
維新運動とその 基本原理(5)
速記録 中田隼郎
7. 7 龍樹と玄奘 上原芳太郎
7. 7 紅螺山資福寺行(上) 在北京 三上
諦聴
7. 7 「奥村五百子」映画観 内山憲尚
7. 7 満洲国皇帝陛下、きのふ御帰国の途に
7. 7 谷大稲葉教授 中華民国へ
7. 7 仏蘭両印度の招来 大島前駐独大使に
聴く 東方文化連盟主催
7. 7 興亜仏教協会と指導理念 語る・松村
興亜院文化部長と加藤大佐
自ら信念を確立せよ 松村興亜院文
化部長談
要は実行の問題だ 加藤海軍大佐
7. 7 満蒙移民の奨励と 時局対策の確立
十六項目に亘り協議 大派真身会の事
業計画
7. 9 ガンジー翁の 除名と印度
7. 9 わが宗教宣撫工策 古義真言宗興亜局
総監 草摺全宣
7. 9 華僑関係者に呼びかけ 紅卍字会後援
会の拡大 先づ神戸、大阪で懇談会
7. 9 日満童心の握手 綴方便節一行けふ入
洛 東本願寺で寛ぐ
7. 9 杉本画伯新著 記念懇親会 大阪印度
友の会
7. 10 東亜民族の血液関係 を書き併せて日
語の 普及徹底を切望す(1) 鳥義
武
7. 10 興亜の熱意に燃ゆ 三国教育者の精神
的契り固し 東亜教育大会始る
7. 10 東亜問題講習
7. 11 東亜民族の血液関係 を書き併せて日
語の 普及徹底を切望す(2) 鳥義
武
7. 11 興亜仏教協会の役員 銓衡で時局同志
会値る 此の際類似仏教各種団体は
一に帰し世人の輦塵招くな
7. 11 安価な優越感を除け 民衆宣撫の要諦
説く 面子を立てることが肝要
7. 11 開教使の母も南支で 軍国の母と慕は
る 女子実業学校も開設 汕頭東本願
寺の堀田母子
7. 11 興亜の息吹き 東亜教育大会進む
7. 11 海外神社制度 確立が何より緊要 幣
帛供進は便法を考慮
7. 11 民族と民族の接触は 高き教養と人格
を俟つ 技術や科学は第二段 深まる
上海日支人の協力
7. 12 東亜民族の血液関係 を書き併せて日
語の 普及徹底を切望す(3) 鳥義
武
7. 13 対支文化施設としての 阿片中毒者の
治療(上) 興亜院囑託 大庭吉良
7. 13 東亜民族の血液関係 を書き併せて日
語の 普及徹底を切望す(4) 鳥義
武
7. 13 巢立つ興亜の 若き思想戦士 蘭印へ
も二名進出
7. 13 興亜仏教協会 新陣容成る 軍・官の
要路招き 十七日懇談会開く
7. 13 興亜建設に協力 山東共生学院遂に
済南市に移管さる
7. 13 ハルピン基青 白色露人団 廿一日入
洛交歓
7. 14 対支文化施設としての 阿片中毒者の
治療(中) 興亜院囑託 大庭吉良
7. 14 東亜民族の血液関係 を書き併せて日
語の 普及徹底を切望す(5) 鳥義
武
7. 14 南洋へ商業移民 内ヶ原式訓練道場も
設け 移住者に宗教信念持たす
7. 14 外務省が留日印度学生を激励

1940. 7.14 泰国から 仏典贈る 善光寺に奉納
 7.14 新秋と共に開く 曹洞の興亜道場 有為の鉄漢打出を図る
 7.14 光暢法主夫妻は 十月三日頃南洋へ比律賓視察は未定
 7.14 大派開教監督 部に新に司計
 7.14 満洲支那に跨がる新興宗教 世界紅卍字運動と其信仰
 世界人類と喜び を共にしたい 満洲国皇帝陛下侍従武官長 張海鵬
 紅卍字の教を語る 世界紅卍字会宣監 金晋庸
 日本にある後援会とは 世界紅卍字会後援会主事 小田秀人
 世界紅卍字運動をもって 東洋平和に役立たしめよ
 世界紅卍字会の沿革 と活動状況
 7.16 対支文化施設としての 阿片中毒者の救療(下) 興亜院囑託 大庭吉良
 7.16 東亜民族の血液関係 を説き併せて日語の 普及徹底を切望す(6) 鳥義武
 7.16 泰に及ぶ米の力 文化工作は捨石が要る 焦り過ぎる日本 矢田元タイ国公使語る
 7.16 中国難民に 救済金贈る 布哇ヒロの仏婦会員が
 7.16 軍人法主戴き 肩身の広い思ひ 新大陸に文化面を視察 宇野西本審議局長談
 7.16 独の英本土攻撃と 日本の蘭印問題 新しき日独提携のチャンス
 7.16 蒙疆宣化城内 火神廟を修理 東本願寺開創
 7.16 仏教宣伝の専門放送局 上海外国租界内仏教徒から 中支宗連に開設協力方申込
 7.16 大西良慶氏 南洋へ 諸島巡錫と視察
 7.17 天照大神を奉祀の 建国神廟御創建 撰廟として英霊祀る 忠霊廟 満洲国の宗祀確立へ
 7.17 英語を全廃して 外国語は日本語のみ 北京国立師範大学
 7.17 千円以上の増改築は 宗教施設でも不可 漢口に制限令出づ
 7.17 同志社の興亜大計 東亜研究所を設立 今年度は十教授選抜
 7.18 蒙疆政府から 生長の家へ留学 谷口雅春氏のもとで研究
 7.18 国語の判る半島 同胞は十四パーセント 大正二年から廿二倍
 7.19 広東省政府の委嘱で 日本仏教を視察 華南日華仏教協会
 7.19 案ぜられた矢文 福州黄檗山に届く 興亜院厦門連絡部の 斡旋で両黄檗を結ぶ
 7.19 紅卍字会後援 会大阪懇談会
 7.19 ラマ教研究の 遅れてゐる日本 蒙古から蘭印迄の仏教圏をつくれ 蒙古研の吉田重成氏語る
 7.20 国民政府教育代表 載英夫氏ら一行 光暢法主と欲談
 7.20 対支文化事業 研究会
 7.21 燕京便 西谷順誓
 7.21 東亜教育大会の印象 東京にて出雲路善尊
 7.21 中央アジア横断 鉄道建設論を読んで 上原芳太郎
 7.21 紅螺山資福寺行(中) 在北京 三上諦聴
 7.21 故鄭孝胥先生を 太夷宮に奉斎趣旨
 7.21 俳人禪高僧 虛白禪師の研究完成 東福寺の高橋浩洲氏の努力報いられて
 7.21 中国黄檗留學生が 大阪に遊んだ級方 来てよかった日本 汕頭小学校華人先生ら 訪日視察終り語る
 7.23 我等は支那民族に非ず 本島人から抗議 右に対する文部省監修官の 見解は“民族上致し方なし”
 7.23 興亜仏教協会誕生 創立京都總會開く 天業眞贊を誓ふ
 7.23 鄭孝胥氏の遺徳慕ふ 太夷講員続々増加 太夷宮守る誠意の現れ
 7.23 新体制下の外交語る 不可避の日ソ関係 ロシヤ研究の必要 日本の中華民国への認識 不足により起った今事変
 7.23 半島人の国体観念 民暦を通じて養成
 7.24 大陸の文化工作と皇道 高島大佐や大久保中佐を中心に 紅卍字講演会の懇談会 紅卍字会の 国内体制確立 大阪に関西拠点獲得 松井中将来月三日西下 講演会の方針 聴取して懇談 興亜院関係官
 7.25 東亜の新秩序建設と 回々教への対策 我国体精神との関係につき 回教協会が研究発表
 7.25 南洋策戦に上る気焰 市民層に高まる革新熱 祭政社京都講演
 7.25 満洲国の建国神廟と 忠霊廟祭祀令の内容 最重要儀令式の制定
 7.25 大陸最初の試み 西別院が「野戦布教」 北京の街頭に展開
 7.25 中国人の不安な気分を 柔げる精神工作が必要 個々の宗団を持ち出す時でない 興亜院調査官堂脇光雄氏 対支民衆工作語る
 7.25 興亜神学院創設 大陸伝道者養成 今秋九月に開校
 7.26 愈よ漢方医学校実現 東邦医道協会設立 駒井博士の初志貫徹
 7.26 出来るだけ島々の 同胞を慰問したい

1940. 7. 26 大西氏けふ南洋へ
 1940. 7. 26 仏教主義による 半島同胞の訓育
 “大乘学舎” 生る
 7. 26 包頭神社の 御祭神決る 民会代表折衝 終へて帰任
 7. 26 柳川興亜院長官縦横談
 肇国の精神に還れ 皇道と宗教の一元化問題 宗教の本質に則れ 大陸に於る文化工作問題
 7. 26 各宗門立の大学には 精神文化工作の科置け 宣撫は戦の前に行ふもの 参謀本部が各宗に要望
 7. 26 ラマ教改善 委員会結成 若き僧侶の入満を求む
 7. 26 大阪基背の幹旋で 中国小学校に奉職 寺院出身の女性が
 7. 26 婦人の大陸進出 北京西本願寺の 日華学苑に見る
 7. 27 曹洞の中支 総監部成る 佐川総監東上
 7. 27 杭州の日語学校 大津氏の独立経営になる 仏教会の幹事も辞任
 7. 27 天理教学生 夏期修養会 興亜学徒錬成
 7. 28 人口問題解決の国 新興満洲は明朗だ 大日向村を視察 井上労働協大阪支所員談
 7. 28 靳雲鵬氏等が天津に 仏教大中小学校を創設 西谷順誓氏の努力により “他力信仰” の解った靳氏
 7. 28 興亜闘士 養成道場 天津に創める
 7. 28 国家の宗祀確立の今日 在満神社行政をどうする 勅令第二百六十二号の改正 対満事務局に今後の方針訊く
 7. 28 在満神社行政は 当分の間だけ 将来適切な対策が講ぜられん 対満事務局談
 7. 28 埋葬慣行の中国に 仏教火葬場開設 上海旧英租界法蔵寺に
 7. 28 西南亜細亜へ 基督教の教線拡張 蘭印に宣教師送る
 7. 30 東方文化連が 北京に支部を
 7. 30 大亜細亜主義 夏期講習会
 7. 30 知恩院社会課が 興亜訓練所開設
 7. 30 大陸の経営は 神道の抱擁性で 釈尊神社や孔子神社を建設 石橋北京観光局主事の提唱
 7. 30 牡丹溝建設線に 働く人々の困苦 大派正親氏の便り
 7. 30 中南支三開教使の 現地事情報告講演 けふ、東本願寺で
 7. 30 独逸占領地区から逃れ 猶太人の東亜移動 有史以来の大量で既に 千五百名を遥に越える
 7. 30 新プランを ウンと用意してる 西本願寺満洲開教総長 千葉康之氏帰来談
 7. 31 支那移住の ユダヤ対策 (1) 国際事情研究所理事 宿田倍達
 7. 31 印度の独立運動 愈よ会議派で決議 英はヒステリックに警戒
 7. 31 蘇州の知恩院 城内に移転 愈よ再出發
 8. 1 支那移住の ユダヤ対策 (2) 国際事情研究所理事 宿田倍達
 8. 1 北、南進策として 国旗を拝む (1) 国旗礼拝日を設定せよ 三好啓陽
 8. 1 北支に於る 日本宗教団体の 活動現況を 数字的に見る (1) 在北京 米川清吉
 8. 1 中国僧にも節米 大阪浄宗同願会要望 扁額“施行門” 拓本贈る
 8. 1 興亜の礎石 尊由氏偈ふ 大陸と内地で けふ一周忌
 8. 1 南方進出の統合に 国策調査会設置か 統合的国策会社設置もその一
 8. 1 クリスチャンは 一つの国語で 先づ 東亜ブロックを 日本語に統一、世界統一へ
 8. 1 海外への神職補任に 明朗性を齎す 内地・海外交流人事も考慮 某宮司の転出で当局言明
 8. 1 三派経営の 蘇州日語校 第三回終了式
 8. 2 支那移住の ユダヤ対策 (3) 国際事情研究所理事 宿田倍達
 8. 2 北、南進策として 国旗を拝む (2) 国旗礼拝日を設定せよ 三好啓陽
 8. 2 北支に於る 日本宗教団体の 活動現況を 数字的に見る (2) 在北京 米川清吉
 8. 2 灼熱の大陸に 興亜の礎石運ぶ 一愛路工作の一断面一 在上海 中村慶範
 8. 2 中支宗連神基両部で “興亜挺身隊” を募る 精神文化工作に積極性を発揮
 8. 2 建国神廟に 毎月御拝礼 満洲国皇帝陛下
 8. 2 訪日親善使 一行の日程 華南日華仏教会
 8. 2 海外臨済から 合同を叫ぶ
 8. 3 支那移住の ユダヤ対策 (4) 国際事情研究所理事 宿田倍達
 8. 3 北、南進策として 国旗を拝む (3) 国旗礼拝日を設定せよ 三好啓陽
 8. 3 北支に於る 日本宗教団体の 活動現況を 数字的に見る (3) 在北京 米川清吉
 8. 3 安徽大学に仏教講座 福田氏の幹旋で 教授を日本から
 8. 4 支那移住の ユダヤ対策 (5) 国際事情研究所理事 宿田倍達
 8. 4 北、南進策として 国旗を拝む (4) 国旗礼拝日を設定せよ 三好啓陽

1940. 8. 4 北支に於る 日本宗教団体の 活動現況を 数字的に見る(4) 在北京 米川清吉
8. 4 東亜教育大会の印象 出雲路善尊
8. 4 紅螺山資福寺行(下) 在北京 三上諦聴
8. 4 アジア民族の 貴重な時間
8. 4 紅卍字後援会 大阪で懇談会
8. 6 支那移住の ユダヤ対策(6) 国際事情研究所理事 宿田倍達
8. 6 北、南進策として 国旗を拝む(5) 国旗礼拝日を設定せよ 三好啓陽
8. 6 日本語の新教授法 支那大陸へ進出
8. 6 同志社牧野総長 台湾各地を巡回
8. 6 新大陸向の 人物養成等 西本の新計画
8. 6 支那に渡る “興亜読本”
8. 6 保護事業の日満共同体制 意見一致し近く文書交歓 十月、東京で発会式挙ぐ
8. 6 大陸に於ける 神社制度の確立 外務省近く調査会設置
8. 6 蒙疆のラマ 留学僧帰国
8. 7 支那移住の ユダヤ対策(7) 国際事情研究所理事 宿田倍達
8. 7 全国一丸となり 排英に邁進 大アジア新生の爲に
8. 7 印度独立連盟 日本本部決議
8. 7 山田将爲氏 通州入り
8. 7 点綴 南京日本基督 長江青年発行
8. 7 緊急の支那僧 教育費支出認む 黄榮対支文化事業
8. 8 カルカッタの日本研究熱 印度に取入る日本文化
8. 8 支那癩根絶に 各省は避癩所設けよ 光田愛生園長談る
8. 9 ロータリー倶楽部 日満連合総会延期 収拾困難を予想して
8. 9 半島に誇る霊場 慈雲山若草寺成る 今秋、落慶入仏式挙ぐ
8. 9 蘇州仏教日語学校 新学期から高等科を設置 興亜院の補助受く
8. 9 台湾本島人教化で 本島人僧養成機関 西本願寺で計画 台湾か内地で開設せん
8. 9 山西省の教育文化工作 省内全小学教員講習会 大谷学園・大谷寮開設
8. 11 印度の古壁画を探る 杉本哲郎著
8. 13 東亜文化協議会 九月北京で開催
8. 13 東京小石川に 東亜塾開設
8. 13 世界的情勢に応じ 東亜伝道会の蘭印布教 二十六日宮平牧師出発
8. 13 敵性国の保護を去れ 宗教に関する限り日本は 中国・印度と同列でよいか
8. 13 興亜仏青大会
8. 13 興亜仏教協会 京都側打合会
8. 13 仏教童話使節 蒙疆へ派遣計画 明春五月頃決行か
8. 15 “日華兩國は同種同文 一つにしている” 仏教使節の特別任務帯び 巨僧鐵禪法師入洛
8. 16 濃緑の林・深紅の花 パラオより 五明 大西良慶
8. 16 “日華兩國は同種同文 一つにしている” 仏教使節の特別任務帯び 巨僧鐵禪法師入洛
8. 16 商業資本主義の魔手で 中国の半植民地化へ邁進 欧米の対支文化工作を顧る
8. 17 日支交渉と 布教権問題 禿氏裕祥上
8. 17 中国人も益踊り 晋北仏教学院生の 怨親平等慰靈祭
8. 17 中国の民衆工作は 宗教的巨人の蹶起待つ 木屋彌助氏強調
8. 18 日支交渉と 布教権問題 禿氏裕祥中
8. 18 興亜仏教協会 京都側総会
8. 18 宗教家を知って貰ひたい 青年義勇隊の話
8. 20 日支交渉と 布教権問題 禿氏裕祥下
8. 20 五台仏教の三動向(上) 在北京 西谷順誓
8. 20 組合教会の 大陸政策 北支四教会 ルートを地盤に
8. 20 異郷に病む 老ロシア人援く 国際哀話 西本願寺など参加
8. 20 対中国人の開教には 各宗教共同で当れ 現実には“やらぬよりまし” 考へものの××仏教会員章 現地報告
8. 21 五台仏教の三動向(下) 在北京 西谷順誓
8. 21 苦力に日本精神と 職業をブチ込む 海州西本願寺の 特色ある活躍振り
8. 21 蒙古民族更生の爲 ラマ教の大改革 新宗団結成・総本山設立 満洲国政府が断行
8. 21 汪氏声援・百万人の署名 「新東亜大同義会」が贈る
8. 21 朝鮮聖公会の 五十年記念祭
8. 21 すわらじ劇団 朝鮮で公演
8. 21 開拓地児童家 族巡回慰問行
8. 22 今度は南京から 日華仏教親善使節 西本留学生と共に 古林寺の果言法師 光暢法主夫妻の 南洋巡錫延期か 南洋庁から府へ通知
8. 22 ラマ教大改革で 小林義道氏近く渡満 寺廟改善に指導員送る
8. 22 海南島に西本願寺
8. 22 対支文化事 業後援会 十月発会
8. 22 シオン連盟の生命に 極東の猶太人呼

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1940. 8. 23 応 俄然英国側にたつ
宗教の大陸進出よりも 国内刷新を期待 関心持たれぬは宗団が無能の爲 参謀本部 藤原大尉談
8. 23 古き日華の交流物語る 東洲至道創建の大覚寺 北京の廢墟に残存発見
8. 23 全台湾の 司保連盟 発会式決る
8. 23 華僧中央学院通学
8. 23 興亜仏教協会 東京理事会
8. 24 満人に“神道”導入で 仏前に“神鏡”安置 満洲大同仏教会で行ふ 日満精神合一運動
8. 24 中国児童愛護運動の「義援金」を設置 浄土宗各寺院が
8. 24 在支邦人青年たちの 肚を練る「尚膺会」 北京で日華人の融和運動
8. 24 台宗東亜開 教局参与会 新体制対策
8. 24 華北神道連合会 愈よ設立認可せる 今秋を期して発会式
8. 25 日本仏教に学び 中国仏教の改革 これが日華親善だ 果言律氏と西本留学生
8. 25 京都府融事機関 満洲に視察員派遣 廿七日、敦賀出帆
8. 27 大陸に最初に 散った三宮氏 一遭難 詳報一
8. 28 「日満司法保護共励会」内定 内地で訓練、大陸に進出 近藤亮雅氏視察帰京談
8. 28 皇軍の奮戦に じっとして居れぬ 在留朝鮮人の兵器献納 全国的にまき起す
8. 28 大阪啓明会が 鮮人アパート
8. 28 上海で異色の 興亜仏教講座 上海日本仏教団主催
8. 29 中支宗大連が 対支布教講習会 内地から代表招き ミッチリーケ月
8. 29 国内新体制問題と宗教 世界紅卍字後援会の懇談会 卅一日学士会館で開催
8. 29 大西良慶氏 今朝横浜入港
8. 29 満洲建国大学 地理学科整備
8. 30 蒙疆地区における 宗教の重要性痛感 ヒャットした匪賊の出現 谷大部隊の五君語る 興亜学生勤労報国隊に参加
8. 31 東亜共栄圏の確立に 学的根拠を与ふ 民族学者を総動員して 東亜諸民族の究明
8. 31 坊さんまで投獄さる 国民は日本の立場理解 ビルマ人が語る母国の姿
8. 31 まだ手のとどかぬ 開拓地児童慰問 野間修氏ら三名を選抜 お東が現地に派遣
8. 31 現地に日華仏教語学校 今年中に特別事業費拾万円獲得 興亜仏教協会予算決る
8. 31 インドネシヤ慣習法辞典 補足漸く成る 今秋一ぱいに上梓の予定 民族宗教学に誇る労作
9. 1 蘭印仏印へ働 きかけの弁
9. 1 南洋群島を語る 日本宗教何しとる 天主教まかせの島民教化 大西良慶氏談
9. 1 華人生と起居を共に 整備された新陣容 北京西本の職業学校
9. 3 皇紀二千六百年を慶祝 満洲国の国民動員大会 日華蒙泰の青年も参加
9. 3 仏教文化運動に盡くす ビルマ前商工相テイ氏の安否 今後留学生は送れぬ
9. 4 大陸の農民指導へ 金光教具体案研究中
9. 4 三班に分れて 開拓地児童慰問 大派野間氏等 きのふ出発
9. 4 点綴 満洲国特派伝道
9. 4 南方問題を協議 あす関係者会同
9. 5 新体制下、大教団に 燃える再生の息ぶき 飛躍する西本願寺の動き 興亜聖業に 派内の新人参画 拓省と興亜院の指導 本願寺興亜策励員 帝都にて新 体制大評定 東亜共栄圏から “人”を集め練る 興亜学院を開創
9. 5 鐵眼禪師の“施行門” 華僧に以外 的反響 杭州の隆定氏決意の書信
9. 5 皇民化運動を翼賛 台湾寺廟齋堂中心に 本島人開教に新体制
9. 6 台北と京都の二ヶ所に本島人僧養成機関設置 東本願寺の開教新体制
9. 6 全国に散在する 華人の墓詣り 大阪仏教同願会の発願 日華親善
9. 6 点綴 半島初の布教使
9. 6 孔子誕生慶祝採点 日本僧侶団も参拜 読経 華北に東洋道德復興
9. 6 満洲国民動員大会 への日本代表決る
9. 8 西本の興亜 学院開創
9. 8 ラマ教の改革へ挺身 全満唯一のラマ 仏教学院 東本願寺留學生が実現 時代遅れのラマ僧に 日本主義的教育 費用は官で負担
9. 8 曹洞京城別院 開教記念催し 高階管代渡島
9. 8 補給の途絶え どう進退すべきや 中支興亜仏教班員が 仏連に切々の伺書 提出
9. 10 南方問題横の 連絡中央機関 宗教中心に生れん
9. 10 東亜共栄圏確立と 神祇界担当の分野 全国神職会が懇談会
9. 10 山口博士を 北京に送る 成田昌信
9. 10 東亜共栄圏確立に 前衛的任務遂行 革新青年層の企つ 仏教教団再組織案
9. 10 明春四月南京に 東亜仏教大会開催

1940. 9. 10 今秋中日仏教徒代表会議
抗日教育の 喇教女学校 全生徒引受
く 覚生女子中学校
9. 11 満洲帝国承認 八周年記念祝典 日満
関係の重要性強調
9. 11 日満支高僧 居士墨跡展
9. 11 寺族あげて大陸へ 西本願寺の興亜策
動員 初の協議会終る
9. 12 日満共助会や 犯罪科学研設立 近く
全国司法保護事業 関係者大会開く
9. 13 興亜の戦士養成道場 天津の支那寺廟
を改修 日華両国青少年を錬成
9. 13 泰国仏教徒へ 仏連のメッセージ平等
通昭氏に託す
9. 15 支那良書の翻訳 中国国語辞典編纂
東亜文化協議会が
9. 15 丁社会部長等が中心に 中国仏教の復興・再編成を図る 釈可端法師等の積極的活動
大陸にも宗教新体制 儀礼執行は一ヶ所 事業は各派で分担
9. 15 中国僧に社会的 活動の途開け 日華
仏教提携の要諦 果言法師談
9. 15 現地開教使と協力 開拓地児童慰問行
危険冒して奥地へも
9. 17 中国仏教僧と 社会的活動
9. 17 各宗進出に就て 北京より 友松園諦
9. 17 五台印象 北京 三上諦聴
9. 17 興亜仏青 大会 プラン成る
9. 17 洞宗京城別院 皇紀・開教等 記念法
要
9. 17 青年に日本の信仰与へ 澆刺・天業翼
賛せしめよ 半島青年層の思想善導
真の内鮮一帯の具現化
9. 18 五台印象 北京 三上諦聴
9. 18 ラマ教改革の大評定 政府のラマ委員
五十余名 日本仏徒として小林氏出席
9. 18 皇化敵地に及ぶ 赤い姑娘と五支那僧
の話 光岡良雄氏帰来談
9. 18 満洲に真言村創設 土地開発会社 古
義新体制岩根委員案
9. 19 南支より 桃太郎の話 南支派遣 菟
田中尉
9. 19 日満支の 春聯交歓
9. 19 晋北一帯の文化施設 保存の完全期す
大同石仏保存会
9. 19 独立国民政府 即時樹立を要望 在留
印度独立連の決議
9. 19 興亜神学院 生徒募集 大陸伝道者養成
成
9. 20 南支より 消えざる墨 南支派遣 菟
田中尉
9. 20 南方国策に即応し 今度は馬來語講座
大派天満別院の報国運動 支那語で
は 六百名を社会へ
9. 20 精神界のリーダーへ 蒙古ラマ僧を錬
成 張家口に新僧院開設
9. 20 張家口に建つ 尊由氏の銅像
9. 21 山西に於る八路军の 赤色農民組織
山西汾陽にて 光岡良雄
9. 21 女性の拓土養成 知恩院を会場に開く
9. 21 南方対策の促進 けふ、使節激励大会
頭山満翁ら出席
9. 22 山西宗教大会 に出席して 山西汾陽
にて 光岡良雄
9. 25 朝鮮の不逞 基督教徒一掃
9. 25 開封本願寺へ 曼陀羅寄贈 真言宗各
派会
9. 26 皇国を中心とする 国土開発計画 日
満支を通ずる綜合 国力発展を目標に
9. 26 世界紅卍字会 大阪後援会 事務所開
設
9. 27 南支より 大陸の水 南支派遣 菟田
中尉
9. 27 大派青島別院 皇紀奉讃法要
9. 27 興亜聖業の支柱 台湾本島人寺廟僧を
西本願寺で錬成
9. 27 増田圓麿氏 北支巡回行
9. 28 南支より 支那の戦法と将棋 南支派
遣 菟田中尉
9. 28 大派野間修氏の 満洲開拓地慰問 教
育方針も研究
9. 28 京都の興亜少年教育に 志望者以外も
入所割当 国策的に断乎乗り出す
10. 1 南支より 全財産を身につけてゐる人々
南支派遣 菟田中尉
10. 1 愈よ京都と 台湾兩地で開設 西本台
湾の本島僧錬成所
10. 1 満洲に皇典研究会 奉天に事務所開設
10. 1 日華仏教提携語る 南京の果言法師来
社 涙骨社主と歓談の一とき
10. 2 南支より 広東神社 南支派遣 菟田
中尉
10. 2 西藏經典から蒙文經典に誘導 ラマ僧
の民族意識高調 喇嘛教の整備要綱成
る
10. 2 興亜仏教協会 新民会と提携なる
10. 3 印度の仏教美術 考古学資料出版 従
来にも増す広範、精密
10. 3 ラマ廟でも 同願念仏会 錦州省で修
業
10. 3 本願寺の僧侶に 台湾本島人僧入浴
10. 3 敵地の民衆まで参詣 五台山に五族共
和の姿
10. 4 南支より 路傍の白骨 南支派遣 菟
田中尉
10. 4 支那回教研究の課題 仏専教授 角野
達宣 一
10. 4 谷大・龍大の合同と 大陸開教統合実
現へ きのふ同学长両監督も会合 合
同推進への重大評定
10. 4 在住朝鮮同胞が 愛国機協和号献納

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1940. 10. 4 皇紀記念全国大会に献納式
半島人の思想信仰は 日本“古神道”
で指導 最も自然で且つ捷徑だ 三浦
一郎氏談
10. 4 満洲開教新体制の急務 河崎一英
10. 5 支那回教研究の課題 仏専教授 角野
達堂 二
10. 5 大谷・龍谷両大学と 支那開教合同問
題進む 直ちに調査研究に着手 東西
両本願寺の事業統合
10. 6 支那回教研究の課題 仏専教授 角野
達堂 三
10. 6 未だ見ぬ 北京へ 古屋登代子
10. 6 性格再建途上にある 北京大学の断面
成田昌信
10. 8 中国留学青年僧の 親睦のために 京
都に“教友会”生る
10. 9 民族解放と文化復興へ “東南アジア
同志会”結成 国際仏教協会の斡旋で
台湾西別院 皇紀法要 僧俗一丸の運
動
10. 9 三角貫思氏 在満皇軍慰問 ラマ廟見
学
10. 10 土掘らぬ蒙古人 井戸なく野菜なし
信仰で習性改善
10. 10 蔣政権、国宝を略奪 東亜文化擁護に
起て 支那考古学の権威一氏氏提唱
釜山東別院 本堂再建へ
10. 11 日支基督教文化展
10. 11 平等通昭氏 きふ赴任 日華文化研
究所長
10. 12 北支から阿片消える 根絶計画決定す
10. 12 日蒙親善に 蒙古留学生 心身を鍛ふ
10. 12 日華親善の機微理解へ 世界紅卍字会
後援会が 具体的事業計画を樹立
10. 13 同願会初の社会事業 工芸伝習所開く
北京雍和宮内に
10. 13 東南アジア同志会 愈よ近く発足
10. 15 女性に開拓精神振起 昨日から拓殖訓
練講習開く
10. 16 満支留学生も 拔穂行事法師 國中・
新田神社
10. 16 民国仏教徒待望の 日本学者“西谷順
誓氏” 杭州に仏大創設の基礎 先づ
日華仏教機関を
10. 17 アジア人自身の手で アジアの事件を
解決 日本よ、是非調停せよ “亜細
亜協会”乗出す タイ・仏印 国境の
争ひ
10. 17 李王殿下の台臨仰ぎ 賑かに蓋を開く
大阪の興亜厚生大会
10. 17 仏教国ビルマから 留学生遂に来らず
失望の日本仏教徒
10. 17 王揖唐氏歓迎 仏教界の準備
10. 20 朝鮮同胞の 修養道場に 平安神宮の
旧社務所が
10. 20 南京知恩院の建物 市政府へ返し移転
10. 22 南支より 南支派遣 菟田中尉 大い
なる愛
10. 22 満洲国基教再編成か 社会事業機関の
建直しも行ふ模様
10. 23 東亜共栄圏確立は 日華両民族の神に
捧げる心から 劉氏が大社教日華青年
団結成
10. 23 日満華の武道家提携 民族協和の推進
力と 東亜連盟の中核勢力
10. 23 北支の全開教使集り 興亜連盟講習会
北京で興亜院が開く
10. 23 東亜共栄圏確立と 人口問題の解決
第四回全国協議会開く
10. 24 大陸進出希望の 仏教青年を待つ 普
陀山は恰好の地
10. 24 内地と島内各地に 皇民化運動徹底
お西の台湾開教教務所
10. 24 本島人教化に 腰据ゑた三布教使 古
義が一廟一事業を目標に
10. 24 点綴 日華仏教研幹部会
10. 25 南支より 南支派遣 菟田中尉 高千
穂峰と 畝傍山
10. 25 満蒙国境守備の 皇軍に“慰問袋”を
湯川中尉は語る
10. 25 旧水雲教鮮人僧を 一ヶ年間再教育
半島同胞開教の試金石 朝鮮総督府で
も注目
10. 25 胸高鳴らし待つ海外同胞 迫る皇紀奉
祝東京大会 二世問題検討等成果を期
待
10. 25 日満華官民代表集り 興亜聖業完遂期
す 新東亜建設東京懇談会
10. 25 点綴 興亜同願後援会
10. 25 皇軍占拠地域外の 優秀青年を目標と
せよ 来阪した劉大福氏語る 中国人
への各種運動
10. 25 中国青年中心の 基教青年会結成 中
支蘇州で計画
10. 25 王揖唐氏迎へ 東京の歓迎会 同願会
顧問
10. 26 “明日の大東亜” ◇…昔の新聞から
(一) 十三条泰
10. 26 日本の絵本で 蒙古児童教育
10. 26 香港の物情騒然 西本願寺の什物引あ
げ 梅原主任は頑張る
10. 26 土暮民子弟の為に 大谷小学校で教育
大派京城別院の事業
10. 26 中国人に適した 布教の展開を 北支
日本仏教僧侶講習会
10. 26 曹洞の北支 布教師会
10. 26 太田覚眠氏 から祝電
10. 27 “特派員発至急報” ◇…昔の新聞か
ら (二) 十三条泰
10. 27 各地に勤労道場や 大陸事業を決定
基青会員部主事会議

1940. 10. 27 北京の秋に咲いた 日華女性の人情美談
10. 27 支那青年の 進むべき道 劉大福氏来社
10. 29 国民の意気見るべし ◇…昔の新聞から(三) 十三条泰
10. 29 大陸と学生 竹園賢了
10. 29 密教学者の 片鱗見せて 王揖唐氏を囲む 和かな日華仏教交歓
10. 29 血のニジむ 日語教科書 お西の中南支 布教総監部編
10. 29 北支基教会の 児童にXマスプレゼント 北支基連と日本基連が
10. 29 青島西本願寺 別院新築成る
10. 30 大陸と学生 竹園賢了
10. 30 日満華代表一千名会し 新東亜建設の懇談会 紀元二千六百年を記念し 輦轂の下東京市の主催
10. 30 南洋神社御神霊 十万同胞感激裡に御着
10. 30 日支民族の融和に 儀式や音楽の合作 華北事情案内所主事の提唱
10. 30 近藤金光専掌 ら満洲へ巡教
10. 30 北・支・那・宗・教・だ・よ・り 道教徒講習会 華北道教總會
10. 30 中国に支部設置と 青島の倭虚 法師を招致 日華仏研新事業
10. 30 王揖唐氏 と西本願寺
10. 30 中華児童へ向け 敦睦カード 曹洞宗興亜局で
10. 31 大陸と学生 竹園賢了
10. 31 留学僧を機縁に 日華寺の建立 名古屋華僑間に起る
10. 31 南洋神社 整備 東京府青年 勤勞奉仕
10. 31 東亜新秩序建設は 東亜地域新文化の創造によつて成る
10. 31 大派興亜局次長 恵美氏中支へ
11. 1 抗日支那の “銃後なき戦線” 陸軍中尉 菟田俊彦
11. 1 満洲国皇帝陛下 御宸翰奉掲式 五日総持寺で
11. 1 蒙古仏教の 伝統を重んじ 厚和に仏教学院開設
11. 2 仏教国との提携 の使命帯びて 小林義道氏 泰國に 知恩院から特派
11. 2 愈よ開かれる 興亜道場塾
11. 3 新中央政府外交部長 褚民誼氏の護法 南京 藤井草宣
11. 3 “国民の敢懐心” ◇…昔の新聞から(四) 十三条泰
11. 3 けふ明治節・午前九時国民遙拝 全国半島同胞に率先 大麻を全家庭に奉斉 生田神社中心に祭祀講習
11. 3 セイロン仏教界に好評 英文“仏教道德” 立花氏に深甚の敬意 朗かで嬉しい便り
11. 3 南方文化、宗教の 研究に乗出す 満鉄東亜經濟調査局中心に
11. 3 満洲国惠寧寺から 指導者を送れ 知恩院が現地寺廟の改善
11. 5 “軍事探偵” ◇…昔の新聞から(五) 十三条泰
11. 5 東亜青少年 大会開く
11. 6 日満華紅卍字会の協議 けふ京城で
11. 6 皇紀奉祝と 学生交歓 建国大学生初の来朝
11. 6 仏基が強調 興亜講習会 軍隊式指導
11. 6 全台湾仏教 各宗連合会 総督府に本部 新竹州仏連設立
11. 7 論説とニュース ◇…昔の新聞から(六) 十三条泰
11. 7 盟邦の名花李香蘭嬢が 東本願寺に帰依 愛弟妹の骨を須彌壇へ
11. 8 大陸に初の母子寮 新計画もウンとある 千葉康之氏婦朝談
11. 9 北支、蒙疆の 全西本願寺主任会議 北京別院で開く
11. 10 興亜の先覚者 石川舜台老師 頌徳記念会具体化
11. 10 日満華經濟建設は 財界前途を明瞭化 財界方面の意向聴く
11. 10 全国児童の一銭拠金で 大陸の要救護児童護る 三田谷博士の具体的計画 日華提携の根本に資す
11. 13 南支より 南支派遣 菟田中尉 中山家と孫文
11. 13 日華經濟提携の 要諦説く・蔡南京特別市長 新東亜建設東京懇談会
11. 13 本島人教師 養成に発足 東本願寺の皇民化運動
11. 13 初の入所生は 本島人廿六名
11. 14 北京へ 古屋登代子 海上の五日間
11. 14 世界平和の実現期し 全宗教の大同団 結図る 中国官民要人らの準備進む 来春、第一回世界総会開く
11. 14 現地仏教各派は 対支部門に合同実現 華北蒙疆の開教使が決議
11. 14 日満青少年交歓 “興亜の夕”
11. 15 淄川にモクモク “華北の聖者” 聖地 風井廟に半日学校 生涯を開教に捧ぐ・山下黙応氏
11. 15 日満華三国 墨蹟展開く
11. 15 大同の石仏など 天然記念物保護 蒙古政府保護会官制公布
11. 15 東亜共栄圏確立賛賀 ○○に開教使駐在 東本願寺更に数名派遣
11. 15 円山課長渡台 南方実情調査
11. 15 大同石仏の 謎解く 石窟中の創作
11. 15 日華提携の精神的楔 本格的に発足 世界紅卍字後援会

1940. 11. 16 “勝つ”あるのみ ◇…昔の新聞から
(七) 十三条泰
11. 16 “興亜”の資材へ 奉天大清真へ入山
道教の実体的研究
11. 16 興亜仏青大会 けふ、樞原聖地に開く
11. 16 京城西別院建 立建築期成会
11. 16 中支各地に 興亜仏教会館 支那寺院
に駐留の 興亜仏教班員ら頑張る
11. 16 対支布教者講 習修了者現地へ 神仏
基仲良く
11. 17 中国要人らの 宗教平和会議
11. 17 近代戦車戦の先駆(?) ◇…昔の新
聞から(八) 十三条泰
11. 17 舟山群島に明治神宮の聖火煌々 今日
渡御奉点の記念法要執行
11. 17 興亜先覚志士 慰霊祭
11. 17 錦織りなす歎傷山下に 興亜仏青大会
全国より七百名来会
11. 19 南支より 南支派遣 菟田中尉 玩具
なき世界
11. 19 杭州に仏教綜合学苑 愈よ明年度から
開設 西谷順誓氏の計画好転
11. 19 普陀山の村上独潭氏 記念法要を前に
敵遊撃隊に拉致さる?
11. 19 蒙古ラマ僧が 高らかに“君が代”
◇…奥地に微笑ましき朗景
11. 19 石川舜台老師 頌徳趣旨書
11. 19 中国の若き女性に 日本文学講ず 古
屋登代子女史の抱負
11. 19 興亜留日仏青 教友会結成さる 臨時
研究発表会や 見学を行って連絡
11. 19 東亜仏青連盟結成 第十回仏青総会終
る
11. 19 神学校の統合 牧師試験に日本学 基
教合同専門小委員会
11. 19 吳杭州市長 同志社講演
11. 20 塘沽から 北京へ 古屋登代子
11. 20 華北民衆の思想統一に 孔子教復興澎
湃と起る 聖教確立の対策に慎重要望
11. 21 異国風景 北京 古屋登代子
11. 21 新東亜の経済建設に “東亜経済研究
所” 生る 京大の二千六百年記念事業
11. 21 明年は一万人 満洲へ勤勞奉仕隊 食
料問題解決へ
11. 21 ビルマとの提携困難 泰国から留学生
招致 小林氏の派遣で実現か
11. 21 満洲側代表も参加 日満共助会近く正
式発会 保護事業大会
11. 22 満洲農民中堅層の 維持拡充の急務
新東亜建設の拠点
11. 23 大陸の断想 南支派遣 菟田中尉 東
洋の内乱
11. 23 奉天市長 鄭禹氏来社
11. 23 興亜奉公日は 神社参拝が最高 一日
は休日とするな
11. 26 舜台翁と梵行院 - 大谷派学徒洋行事
- 始序説一 大村曉春 上
11. 26 蒙古ラマ工 作に入廟の 研究生募る
本年度の新方針
11. 26 基督者第一開拓村 哈爾濱郊外に 馬
太村 順次福音村の建設
11. 27 舜台翁と梵行院 - 大谷派学徒洋行事
始序説一 大村曉春 中
11. 27 大谷尊由氏の 北京頌徳碑
11. 27 北支開教以来の 西本願寺 人事異動
11. 27 北京覚生女学校で 古屋女史講演
11. 28 支那国民の 心的性格の真相 金孝敬
11. 28 舜台翁と梵行院 - 大谷派学徒洋行事
始序説一 大村曉春 下
11. 28 共榮圏相互の認識に 外地に日本映画
会社設立 内閣情報部乗り出す
11. 28 “舜台翁と時代” けふ座談会と遺墨
展
11. 28 強い国家観念中心に 信仰に生きる
頼もし・外地の信徒達 金光の大陸進
出 田中氏の抱負
11. 29 支那国民の 心的性格の真相 金孝敬
11. 29 東亜共榮圏の確立に 宗教信仰は絶対
に必要 北京日本青年代表の体験談
11. 29 点綴 東亜同願特集号
11. 30 支那国民の 心的性格の真相 金孝敬
11. 30 句仏氏を米国に 何故やらなかったか
盛況の石川翁追悼講演会 金沢公会
堂の緊張
11. 30 台湾長老その他二団体 教派として連
盟加入
11. 30 大陸に精神基地 - 杭州綜合学苑が出
来る迄 - 西谷順誓氏語る
12. 1 支那国民の 心的性格の真相 金孝敬
12. 1 国語は国民の精神的血液 純潔保ち共
榮圏への普及に 文部省に国語課を新
設
12. 1 国民政府を正式承認 日支基本条約調
印さる
12. 1 興亜は百年事業 急務は日本人の教育
問題 価値の転換を前提 西田天香氏
談
12. 3 日支基本条 約の締結
12. 3 支那国民の 心的性格の真相 金孝敬
12. 3 北京より 古屋登代子
12. 3 新体制と新文化の建設 (傑僧石川舜
台先生を思ふ) 永井柳太郎
12. 3 東亜共榮圏内の 永務を国策に即応
お西に「興亜部」を新設
12. 3 逼迫する在満 外国系基督教社事 これ
を機に新編成へ乗出す 日本基督教の進
出予想
基督教の興亜伝道 外人系事業の後を
襲ふ
北京日本人 基督けふ発会
12. 3 ラマ教対策 善隣協会が 協議会開く
12. 3 晋北仏学院卒業式

1940. 12. 4 新体制と新文化の建設 (傑僧石川舜台先生を思ふ) 永井柳太郎
12. 4 日本の南進策は 経済的にして決定的日米戦は絶対でない 前アドバタイザ―社長談
12. 4 中国布教権問題 日華関係基本条約の“居住権”で解消?
12. 4 中支宗大連 年鑑を刊行
12. 5 新体制と新文化の建設 [承前] (傑僧石川舜台先生を思ふ) 永井柳太郎
12. 5 けふ回教圏 事情講演会
12. 5 鹿子木画伯の“南京入城図”
12. 5 蒙疆カ教大観 自治政府で刊行
12. 6 六榕寺と 蘇東坡 南支派遣 菟田俊彦
12. 6 日本南進の 基礎研究の旅 南北両アメリカから 鞍岡政雄氏帰る
12. 6 荻原博士の遺稿 梵和大辞典分冊刊行 編纂刊行会の苦心
12. 7 興亜の聖業と舜台翁 (一) 暁烏敏
12. 7 憂ふべき在満洲 日本青年達の行状 これは内地教育家の責任 教員の生活改造が急務だ 西田天香さん語る
12. 7 故陳覚生氏 あす三回忌 お東でも弔意
12. 7 満洲国の移民 布教に新計画 西本願寺が
12. 8 興亜の聖業と舜台翁 (二) 暁烏敏
12. 8 日本に好意を寄せる 四億の回教徒と結べ これこそ大東亜共栄圏 建設への重要な問題だ
12. 8 日華親善に投げる 仏光寺長崎別院 輪番ら惨殺事件
12. 8 石川舜台老師の “仏教社会観” 出づ 林大将も大に推奨
12. 8 宗教の大陸進出強化策 興亜院が宗門代表と懇談
12. 8 満洲ラマ教 宗団結成式
12. 10 六榕寺と 蘇東坡 南支派遣 菟田俊彦
12. 10 東亜新秩序を祈る 新堂建立の志願を抱き 南京に現はれた智鏡尼
12. 10 大陸布教に挺身誓ふ 大阪神道各派青年有志会談
12. 11 興亜の聖業と舜台翁 (三) 暁烏敏
12. 11 上層階級へは高僧 下層へは医師を各派当局と善隣協会懇談 ラマ教対策 村上独潭和尚は生存? 果して救出されるか
12. 11 中国青年層を対象に 漢口に青年訓練道場 東本願寺、一月から開所 領事も先生に
12. 11 曾ての闘士が 興亜の一翼に 神戸に “半島人のお寺”
12. 11 日清戦役従軍記や 音楽論もふくめて 岩井智海氏著 “道しるべ”
12. 11 釜山仏教奉公会 九日、結成総会挙ぐ
12. 12 興亜の聖業と舜台翁 (四) 暁烏敏
12. 12 仏印・泰両国の紛争に 躍り出た香大教とは? 宇野円空博士に訊く
12. 12 丹陽に残留 日語普及へ 藤本教随君
12. 12 華語無月謝 教授を計画 大阪同願会
12. 13 興亜の聖業と舜台翁 (五) 暁烏敏
12. 13 南進の先覚者 シャムで得度した日本人 十三条泰
12. 13 仁山法師の 南京講経 日華仏教連盟 南京総会理事長 藤井草宣 一
12. 13 朝鮮の基教 長老派批判 東洋精神研究会
12. 13 先づ国語の改訂 常用漢字五百字に制限 大政翼賛会が着手
12. 14 仁山法師の 南京講経 日華仏教連盟 南京総会理事長 藤井草宣 二
12. 14 カオダイズム (高大教) は 交趾支那の公認宗教 東亜経済調査局の古野囁託談
12. 14 声明作法も見事 本島人教師養成ぶり 大派円山教学課長視察談 皇国南進 策翼賛へ
12. 14 総督府文教局も 興味をもつて期待 台湾本島人僧侶養成所 津田西本願寺 録事談
12. 15 支那仏教 教団の特異性 (上) 龍池清
12. 15 興亜の聖業と舜台翁 (六) 暁烏敏
12. 15 仁山法師の 南京講経 日華仏教連盟 南京総会理事長 藤井草宣 三
12. 15 台湾南北宣教師 年内に引上げ
12. 17 支那仏教 教団の特異性 (中) 龍池清
12. 17 興亜の聖業と舜台翁 (七) 暁烏敏
12. 17 今頃知って驚く 宜昌陥落・重慶爆撃 中国人の日本書籍閲覧調査に見る
12. 17 満洲大同仏 教会を支援 有志の協議 台湾本島人を 積極的に活用 南方政策に一生面
12. 18 支那仏教 教団の特異性 (下) 龍池清
12. 18 興亜の聖業と舜台翁 (八) 暁烏敏
12. 18 朝鮮同胞の家庭に 残らず大麻奉安 二百五十戸主に 西方寺で頒布式
12. 18 『東洋文化研究所』新設 東亜文化工作の総合的研究
12. 18 南支に仏教提携 活躍の鐵眼和尚ら 広東国際仏協支部結成
12. 19 日滿社会事業 大会の諸問題 (上) 甲斐静也
12. 19 大陸断想 南支派遣 菟田俊彦 文化の使節
12. 19 犬の丸焼・蛇の御馳走 東西両本願寺が合体し 海南島の教化に挺身!
12. 19 日華親善の契り 王和成君と京娘の結

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1940. 12. 19 婚 師走、京都の朗読
大東亜協会 創立さる 大東亜誌発刊
12. 19 大東亜民族の文化向上に資す 満洲大同仏教会 日本側後援会結成
12. 20 大陸に於ける思想戦線
12. 20 日満社会事業 大会の諸問題（中）甲斐静也
12. 20 大東亜共栄圏賛賛 光暢法主南洋諸島巡教へ 蘭印でも宗教事情視察 明春二月渡航
12. 20 東亜経綫の基礎に 国民政府へ学術書を贈る 一役買ふ国際仏教協会
12. 20 民衆の厚生事業に迄 高める満洲の社事 協和会の下に一元化
12. 20 本島人僧侶養成 深草派が専門に
12. 20 満洲建国神廟の 意義を一段と昂揚 海外神社の諸問題で 東亜民族文化協会の協議
12. 20 我が南進策に順応 西本願寺の南方開拓計画進歩す
12. 20 東亜共栄圏へ 戦士養成 お西の洛西 興亜学院開く
12. 21 日満社会事業 大会の諸問題（下）甲斐静也
12. 21 三千名の苦学青年目標に 千早城下に訓練道場 朝鮮同胞の皇民化に拍車
12. 21 花嫁学校式を撤廃 皇国女性養成訓育 釜山大谷女専の革新
12. 21 樺太にも選 拳制施行か
12. 21 東南亜細亜 解放同盟生る
12. 22 厳寒の蒙古高原に “苞” 製靴の種々相調査 興亜民族生活の科学的研究 戸田京大教授ら
12. 22 小異を捨てて 大同に帰す 仏連と興亜仏教協会 進んで合同と決定
12. 24 日華僧堂の提唱（上）北京にて 河合真英
12. 24 大陸へ進出の教職員錬成 興亜院主催の講習会
12. 24 童子軍を組織 奉仕精神を養成 忠信職業中学校も開設 金光教中支の報告
12. 24 新体制に即応する 僧俗一致の宗団運動 けふから西本願寺布教調査会 興亜生活運動 五ヶ年計画第二次へ 大陸策に新天地
12. 25 日華僧堂の提唱（下）北京にて 河合真英
12. 25 情実や因縁のない 大陸では合同だ 両本願寺が支那開教で 興味ある展開を見せん
12. 25 ペン光る 大陸の思想工作
12. 27 自然に行はれた 日華財界人の協力 杭州仏教学院創設 西谷順誓氏発表
12. 27 支那の仏教界に贈る 望月博士の仏教大辞典 楊州西本願寺仏教研究院創設 七年計画で
12. 28 青年の指導者が重大 郷土愛で自然固まる 満洲国開拓事情を聴く 語る池田大佐
12. 28 現地青年 男女を鍛練 天津興亜家庭塾
12. 28 日本語の国際語化へ 基本語彙大辞典の編纂
12. 28 褚民誼大使ら 日華仏教家と別宴
12. 28 北京基青の 出発と陣容
12. 28 仏教界の中央 機関統一問題 興亜院で関係者協議 近く構想具体化されん
12. 28 旧弥陀教本部で 鮮人僧侶養成講習所 お東が本格的に実施
1941. 1. 1 北京隨筆 久富保一
1. 3 戦地の正月 朝倉駿一
1. 5 北京隨筆 久富保一 偶感
1. 5 泰国各大臣に面接 同国青年階級と仏教的協力を説く 小林義道氏の第一報
1. 7 “祖国日本の大理想は 共存共栄の新世界建設” 松岡外相、海外同胞に強調す
1. 7 北京隨筆 久富保一 北京飯店
1. 7 大陸の断想 ヤンチョー喜戯
1. 8 北京隨筆 久富保一 胡同（上）
1. 8 難民の中に 骨を埋める 松崎從軍僧
1. 8 大陸の開教整備と 宗団の南進策展開 西本願寺急速に実現せん
1. 8 伸びゆく天理教の 移民村に敬服 満洲国の宗団開拓語る 西本願寺の山本匠夫氏
1. 9 民族の表象 南支那派遣 菟田中尉 塔と鳥居
1. 9 北京隨筆 久富保一 胡同（下）
1. 9 南方進出の 先駆者を養成 祭政一致の鍛錬道場 きのふ、堺祭政社の鍬入式
1. 9 海南島の宗教的習俗 玉寶とはどんなものか 民族性語る興味深い一資料 金森重貫氏の手記
1. 9 内蒙最初のラマ旗 蒙古連合自治政府から認可 将来性注目さる
1. 9 華北居士林 図書館設置
1. 9 荒野に読む “中外” 満洲〇〇部隊 長 立神少佐
1. 9 広東から
1. 9 大陸の新情勢に対処 興亜各団体を統合 朝野の興亜理念を指導 当局近く具体案樹立
1. 10 北京隨筆 久富保一 門
1. 10 反響薄し・泰国の仏教工作 平等氏から初便り
1. 10 華文機関誌の 共同刊行を図る 国際仏教協華南支部分会す
1. 10 世紀の脚光浴びて 大同石仏保存協会 生る 日蒙支協力の大事業

1941. 1. 11 大陸の断想 食在広州 南支那派遣
菟田中尉
1. 11 北京隨筆 久富保一 街上散見
1. 11 “蒙古ラマ教史”刊行 外務省調査部
苦心の労作
1. 11 比島マニラに 高山右近の事跡 ラウ
レス氏らの調査
1. 11 杭州日華綜合学苑 最初の内地支部
芦屋に設立さる
1. 11 鄭孝胥氏を 日本の神と合祀
1. 12 神第一の活動により 本島人の魂をゆ
する 人為的作業では駄目だ 台湾皇
民化運動
1. 12 日韓合併の裏面史 村松梢風氏が執筆
武田範之和尚を顕彰
1. 12 汕頭の三派日 語学校連盟
1. 12 満洲人は宗教民族 神道類似のサーマ
ン 太田世雄氏語る
1. 12 李駐日満洲国大使 けふ入洛
1. 12 満蒙開拓の 認識強化へ お西が各学
校に 山本氏派遣
1. 12 英国に強力抗議 在日本印度独立連盟
の決議
1. 14 東亜教育とそ のスローガン
1. 14 主客一如 固し・日満心の契り 李駐
日大使と涙骨社主 都ホテルに型破り
の親善風景
1. 14 半島の神代 文化研究
1. 14 東亜共栄圏の 南方各地方へ 仏教視
察員の派遣愈よ決る
1. 14 興亜の宗教 戦士養成に 東亜学科を
正大に創設
1. 15 大陸の断想 各人各行 我不知 南支
那派遣 菟田中尉
1. 15 世界に誇る文化の宝典 完成近し・四
庫全書続修編纂 北京人文研究所の労
作
1. 15 “支那”の呼称廃止 日本尚友会の運
動
1. 16 経世家の思想教育に 高楠翁、アジア
精神説く 一般人によき仏教への手引
大蔵社で刊行
1. 17 日本語を共栄圏語に 国語対策審議会
で議す
1. 17 アジア民族解放へ 全国的運動の展開
1. 17 北支那の宗教事情 基督教最近の目覚
しい飛躍 活発な活動随一の天理教
1. 18 北京回想(一) 北京神社参拝 古屋
登代子
1. 18 興亜団体統合 思想団体のみ 翼賛会
で統合 事業団体は政府の手へ
1. 18 移民の父ら発起で 拓士会館建設実現
東本願寺に興亜朗景
1. 18 上海仏教団 理事長更代
1. 19 宜い哉興亜諸 団体の統制
1. 19 北京回想(二) 洋車 古屋登代子
1. 19 事態の真相について 国民は余り知ら
なすぎざる 支那事変中心の世界情勢
馬淵大本営陸軍報道部長談
1. 19 泰国から留学生招く 文化交流の積極
化
1. 19 内鮮人実業家達が 大徳寺で猛修業
長途視察旅行の一収穫
1. 19 西本願寺の 興亜協議会
1. 19 楮駐日大使 仏連で歓迎
1. 19 大東亜共栄圏内での 日本語教科書の
制定化 華北連絡部文化局員と 藤村
博士ら迎へて研究会
1. 19 華北日語教育研 大谷派の翼賛
1. 21 翼賛会東亜部と 興亜運動団体
1. 21 李大使の書信
1. 21 北京回想(三) 講演と仕舞 古屋登
代子
1. 21 西住憲三氏を 南洋方面に 西本願寺
が特派
1. 22 北京回想(四) 日華の契り 古屋登
代子
1. 22 日華相互に その長所を觀よ 東西兩
本願寺、浄土宗の 留日中国僧の会合
1. 22 亜細亞民族の 独立生存権擁護 在日
印度独立連決議
1. 23 百廿満蒙古民族に 贈る・文化の慈光
◇…留学ラマ派遣など
1. 23 神祇思想をどう 大陸に宣揚するか
南京神社の奉斎と共に 関係者が近く
懇談
1. 23 東京や京都は廢墟 デマ宣伝を粉碎
病母の棺を作って帰学 劉留学生お東
で語る
1. 23 南洋群島各地で 聖戦映画と講演の夕
大東亜共栄圏確立へ 大谷光暢法主
の翼賛行
1. 24 日滿華三国 青年運動に邁進 東亜大
同青年連設立
1. 24 興亜服の提唱
1. 24 満洲国の祭祀と宗教 諸問題の正しき
解決へ 石丸前同国侍従武官長の提案
で 権威者集め研究会開く
1. 24 興亜僧道の樹立 大派の宗門新体制同
盟 来月、一、二両日結成
1. 24 倭虚法師や 居士達も招く 訪華視察
団も派遣 “日華仏研”本年度の計画
1. 25 北京回想(五) 面子と商人気質 古
屋登代子
1. 25 その仏教的性格(上) 高楠博士の
「アジア 民族の中心思想」竹中信常
1. 25 頭山翁が 中国少年達に 孫文精神説
く 廿六日自邸に招いて
1. 25 新東亜建設 戦士養成の新型 “名を
成した人”迎へて
1. 25 内鮮問題解決に 殉国の覚悟で進め
大阪府当局の呼びかけ

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1941. 1. 25 興亜諸団体統合 愈よ折衝を開始 促進特別委員会設く
1. 25 日本語教授者 養成機関の設置 国語対策協議会の決議
1. 25 開封を凌ぐ 婦徳の発展 星子恵真氏談
1. 26 その仏教的性格(下) 高楠博士の「アジア 民族の中心思想」 竹中信常
1. 26 民族解放を宣言 東南アジア民族解放大会
1. 26 共栄圏民族 文献展覧会 天理図書館
1. 26 内地に初の杭州 仏教綜合学苑支部 西谷順誓氏後援団
1. 26 東洋道義と新原理で 東亜共栄圏を確立 東亜国民運動展開の基本観念
1. 26 全面的和平希望の 中国インテリ青年達 進む中日青年協力運動
1. 26 タイ国派遣の 大派藤波氏 教務所長辞任
1. 28 思想戦と儒教(上) 高木泰
1. 28 大陸現地人の目に 映る・宗派合同問題 全仏教家は一層団結せよ 天津淨宗開教主任談
1. 28 日華中学生の 文書交歓
1. 28 新前國務総理と提携 天津に綜合仏教殿堂建設 興亜仏教連の日華親善と大陸仏教活動統一注目さる
1. 28 北滿に樹てる“仏教村” 第一期目標二百戸計画 来月二日には勸奨講演会 宗教村は当局希望
1. 28 興亜学院を創設 馬來語の講習会 南方事情講演会も開催 増田円麿氏の計画
1. 28 “十姉妹”を例に 印度国民への激励 大阪商大田崎仁義博士
1. 28 完全独立達成へ 印度独立運動記念日に 在京印度人の決議
1. 29 北京回想(六) 慢々的風景 古屋登代子
1. 29 思想戦と儒教(下) 高木泰
1. 29 安南民族の生活浄化 先づ女性への教育普及 迷信打破にカ教徒活躍 新東亜共栄圏の 一環に独立望む
1. 29 憲兵禁酒団 北京に生る
1. 29 あす、光暢法主 南洋巡教の旅へ 大乘仏教精神を強調
1. 29 泰語の日本 紹介を刊行 日泰文化研
1. 29 壁画完成目指し 秋声画伯第六次征軍行 一部は既に献納終る
1. 29 朝鮮神宮から 赤誠の大太鼓
1. 29 満洲基督村 先遣隊出発
1. 30 北京回想(七) 北京官話の魅惑 古屋登代子
1. 30 泰國御皇室に 南伝大藏經献上 仏教使節に託して
1. 30 異邦の諸民族にも 大乘仏教の真髓説く 南進国策翼賛への信念 光暢法主 けふ南洋の旅へ
1. 30 日滿華宗教大会 陽春四月下旬に開く 福田支宗大連仏教部長 打合せ終へて帰任
1. 30 南洋群島各地で 報国法要と 開拓者追弔
1. 31 明烏不棲清朝地 南支那派遣 菟田俊彦
1. 31 光暢法主南洋巡教へ 智子裏方も決意を披瀝 きのふ盛んな歓送
1. 31 興亜青年懇談会 インドネシア留学生と語る 文化交流に尽力
1. 31 内地の協力求めて 中国教育部等問安 北支基督教会が
1. 31 基連時局奉仕会の 大陸殿堂補強案 代表的人物の派遣など
1. 31 泰國との文化的 親善に努めたい 藤波・山本兩使節出発
1. 31 小林義道氏 泰から帰る
2. 1 蘭印の宗教(1)
2. 1 日滿一体で 友邦の躍進讃ふ 日滿中央協会の慶祝行事 満洲帝国の建国十周年
2. 1 初施行の北支 日系官吏採用 龍大生 四人 美事にパス
2. 1 更に密教を研究 本格的にラマ改革 大派留学生加藤清氏語る
2. 1 満洲仏立村 近畿連盟が 援助を決議
2. 2 蘭印の宗教(2)
2. 2 北京回想(八) 興亜院博誠塾(上) 古屋登代子
2. 2 国民皆僧のタイ国 留学生も来朝に決る 帰朝した小林義道氏語る
2. 2 点綴 満洲開拓村入植
2. 4 蘭印の宗教(3)
2. 4 李王師団長殿下 成田山別院御成り 後裔に全山感激
2. 4 共栄圏翼賛の意気「実践」の二字に託す 智子裏方も感激を本社へ 大谷光暢法主 けふ、南洋へ 南島国威新 阿部随行長 感激を披瀝
2. 4 頭山翁の精神顕揚 けふから大阪で展覧会
2. 4 日滿仏教徒の 精神的結合愈よ固し 大同仏教会全滿大会
2. 4 総力を捧げて 教化に盡瘁せん 朝鮮平安仏教連合会結成
2. 4 朝鮮愛國護法会 六日、湖南支部結成
2. 5 蘭印の宗教(4)
2. 5 北京回想(九) 興亜院博誠塾(中) 古屋登代子
2. 5 太原で中国人教育 東西本願寺の提携 活躍する西念房の後裔 大派井上淳然氏談

1941. 2. 6 蘭印の宗教(5) る
2. 6 北京回想(十) 興亜院博誠塾(下) 古屋登代子 2.15 点綴 北京芸術訪日団 南洋伝道線聴く
2. 6 共栄圏に使用する 光暢法主夫妻を激励 東京の壮行会盛況 2.15 全鮮で最初 常会が仏教 講話を聴く
2. 6 広東大学で 日本文化講義 一段進む 文化交歓 2.15 華北神連の 第二回講習
2. 7 北京回想(十一) 乞食との日華親善 古屋登代子 2.15 南京に上海伝道庁出張所 天理教が設置
2. 7 共栄圏の確立に在外 華僑との連絡を工夫 外務、拓務、民間の協力図る 2.15 大派満洲監 督に大物を
2. 7 大派の台湾 開教団総会 2.16 杭州における仏教の現況 - 民国三〇年一月現在 - 新野修基
2. 7 興亜学院開院式 2.16 故有馬氏一家の犠牲を 犬死たらしめてはならぬ 長崎の日華親善悲劇に 興亜院当局慎重に考慮
2. 7 興亜院の肝煎で 大陸の宗教戦士錬成 行的訓練を主に 2.16 褚大使招き 歓迎茶話会
2. 7 南方拓士を募る 東京に拓南塾開設 2.16 故郷は大陸だ 僧侶の大陸大和一家
2. 7 中支宗連の推進力 東京宗連を母体に 新に“東京会”生る 2.16 蒙古留学生招 待懇親の集ひ 池上本門寺で
2. 8 海南島から宗派根性廃棄 東西本願寺 合同の“日華寺”新に建立さる 2.16 寺廟整理の現実情 台湾の宗教改革 安藤紫水
2. 8 中国基督者を慰め 協和への楔に 問 安使節派遣決る 2.18 北京回想(十三) 淨穢と諸境諸縁 古屋登代子
2. 8 広東政府の 養老院を経営 お西に委 託さる 2.18 金氏著“支那精神とその民族性”を華 語に 共栄圏内民族の相互研究 日華 兩國要人ら完成支援
2. 8 戦没将士の英霊を 現地神社摂社に奉 齊 華北蒙疆神職会成り 第一回総会 で建議 2.18 経済的触手を通じ 英の仏印、泰國策 動 メナム以西南確保に狂奔
2. 9 大谷光暢法主 南洋巡錫通信 阿部恵 水 2.18 光暢法主夫妻 更にダバオへ
2. 9 興亜宗教戦士錬成 興亜団体連合会 2.18 猶太的麻醉の印度人 赤ん坊にも阿片 禍! 民族的自覚が何より急務 高岡 氏談
- 2.11 満洲基督教拓士 第二陣の訓練 2.18 華北カ教徒 訪日団来朝
- 2.11 点綴 泰國へ黙想指導 2.18 広東中日 文化協会
- 2.13 杭州における仏教の現況 - 民国三〇 年一月現在 - 新野修基 2.19 杭州における仏教の現況 - 民国三〇 年一月現在 - 新野修基
- 2.13 内鮮一体となり 皇諷を翼賛し奉る 平安北道仏教連合会結成 2.19 ソ連は印度を狙ふか パミール横断路 の完成 だが印度常盤樹のため 秋が 来ても赤くなるまい
- 2.13 南島に輝く法悦 光暢法主夫妻に歓呼 阿部さんら頗る元気 2.19 南北支那の報告 重慶政府の信なく 英宣伝の逆効果 梅原乘運氏帰来談 最近の香港
- 2.14 杭州における仏教の現況 - 民国三〇 年一月現在 - 新野修基 2.19 日本人の発展に ハチ切れる天津 西 本願寺別院目指し新建築
- 2.14 中国青年の動向 欧米の皮相な模倣 末包氏談 2.20 杭州における仏教の現況 - 民国三〇 年一月現在 - 新野修基
- 2.14 蒙古の民族精神振興は その歴史“元 朝秘史”で 留日学生発奮して現代語 訳 2.20 望む・ビルマへの積極外交 日本との 提携に燃ゆ
- 2.14 漢方医学図書館 拓大に新設さる 2.20 蘭印の回教問題 明治聖徳学会研究発 表
- 2.15 杭州における仏教の現況 - 民国三〇 年一月現在 - 新野修基 2.20 泰派遣仏教使 節盤谷に安着
- 2.15 大朝奉齊大陸に激増 南京神社は月末 地鎮祭 2.20 普陀山の治安全し 邦人の独り歩きは 注意 村上氏の同志粟谷氏談
- 2.15 名古屋市から南京市へ 贈る・木彫立 像大観音 褚駐日大使ら下検分に西下 2.20 北支那宗教界の動き
- 2.15 北支に(仮称)興亜農民道場 中国民 衆の厚生と教化 天理教本部の準備進 む 2.20 ラマ教研究に拍車 “西藏文蒙古ラマ 教史” 三百部限定出版
- 2.15 基督教者の 満洲開拓村 講師講題決 る 2.20 光暢法主一行 英領タワオへ きのふ ダバオ発

1941. 2. 20 大陸と文化 溝通で協議 西本興亜部
 2. 21 大陸の雲 南支派遣 菟田俊彦
 2. 21 島民の無教育政策 日給は僅か十銭内外 大久保氏の語る南洋事情 重圧下の蘭印
 2. 21 大乘の精神により 日華両国の融合へ！ 抹茶に寛ぐ 褚新大使
 2. 22 普陀山の事情 少年僧 小林君は語る
 2. 22 拓南文庫 南方移民団の文化資材に開設 東亜文化協会が
 2. 22 南方諸国らと 学者交換 大日本仏教会興亜局の計画
 2. 22 南溟の日本語熱 ハイスクールに日本語科
 2. 23 仏印方面へ 仏教使節 宇津木氏語る
 2. 25 日本よ、真に 亜細亜の盟主たれ(一) エー、エム、サハイ
 2. 25 軌道に乗った 日本との文化交流 泰仏印の表情
 2. 25 国民会議派名譽秘書 ダース氏泰國へ 泰印文化協会と連絡 留学僧問題も協議
 2. 25 興亜の聖業勇士から 曠野の憂鬱除く お西が北滿移民村慰問
 2. 25 仏教華僑日校 等に関し協議 京都仏教興亜会
 2. 25 大東亜青年 懇談会生る
 2. 26 日本よ、真に 亜細亜の盟主たれ(二) エー、エム、サハイ
 2. 26 大東亜共榮圈確立の 重大意義を強調 熱論 太平洋問題の全貌説く 本社後援の公開時局講演 南洋を肢体とする 生命的存在なり 東亜共榮圈確立に 対米一戦決意せよ
 2. 26 小林義道氏 歓迎懇談会
 2. 26 杭州市の 日華文化
 2. 27 日本よ、真に 亜細亜の盟主たれ(三) エー、エム、サハイ
 2. 27 興亜の母として 大陸に骨を埋む 古屋女史壮行会
 2. 27 古義開教の南進 現地実情調査のため 麻生本部長らけふ出帆
 2. 28 日本よ、真に 亜細亜の盟主たれ(四) エー、エム、サハイ
 2. 28 独力で支へた収容所 中国難民百名護る 現地除隊兵の篤行 興亜の礎石！
 2. 28 総額の五分二が 大陸の興亜事業に 従事者は献身的奉仕 金光教議會和かに終る
 2. 28 印度から回教使節 初めて我国へ派遣
 2. 28 大東亜共榮圈内の 民族の躍動描く 綜合文化映画制作
 2. 28 大連各寺の事業合同 仏教奉公会生る 職奉公の赤誠誓ふ
 2. 28 中国へ大観音像 愈よけふ贈呈供養式
 褚民誼大使ら参列
 2. 28 印光法師 追悼特輯
 3. 1 日満一体で壽ぐ 滿洲建国記念日 けふ帝都その他の催し
 3. 1 中支杭州の 日華仏教会
 3. 1 上海の米人 宣教師引揚
 3. 2 東亜一体化説く 林広東大学長 王道最後の勝利 両国民の覚悟にまつ
 3. 2 米布、南洋の 開教使に善処 國際關係緊迫で 西本願寺が命令
 3. 4 パラオ公学校訪ひ 土人の子に童話 ◇…粟津費事の南洋便り
 3. 4 大酋長も帰依 パラオの婦敬式 光暢法主南洋巡教
 3. 4 華北天主教 訪日団入京
 3. 4 点綴 台湾の開教視察
 3. 5 大派法主 南洋巡錫紀行 松谷彰乗
 3. 5 大東亜共榮圈確立促進 光暢法主全國巡教を決意 各所で土人が敬意捧ぐ
 3. 5 拓南の尖兵 帝都を出発
 3. 5 北京金光日語 学院訪日団 来月四月入洛
 3. 5 東亜文化協議会 四月、日本で開催
 3. 6 大派法主 南洋巡錫紀行 松谷彰乗
 3. 6 日華親善に寄与 孔子廟参拝記刊行 菟田樞原神宮司
 3. 6 皇国南方の総鎮守 南洋神社に参拝 パラオの光暢法主一行
 3. 6 大陸の人種の偏見 本願寺法人問題等々 西本願寺集會第六日午後
 3. 6 半島経営に 一層の認識もて 盛んな皇民の行動 吉田貞治氏談
 3. 7 大派法主 南洋巡錫紀行 松谷彰乗
 3. 7 仏教図書館 広東に新設計画 日本教界の応援俟つ
 3. 7 生れる邦人主教 ハルピンで叙任式
 3. 8 南洋の旅語る 西本願寺の西住憲正氏
 3. 8 洋上遙かに 佳き日壽ぐ 大谷智子裏方 地久範
 3. 8 台湾伝道に 賀川氏起つ
 3. 8 中国人を教師に 正しい華語の普及 興亜院華中連絡部の企て
 3. 8 中国の名跡 古物保存 国府が新条例 中華人の渡日 増加の一途辿る
 3. 9 在中国神社規則改正 大陸の神祇宣揚 運動昂る 指導機関に講究所北京分所 不徹底な日本化 邦人主教、ハルピンでの 叙任は結局不可能？
 3. 11 大派法主 南洋巡錫紀行 松谷彰乗
 3. 11 東京会谈の成功で 南洋華僑に昂る親日熱 今後の連絡工作注目さる
 3. 11 日、タイ關係 一段と緊密深む 經濟的、文化的飛躍へ
 3. 11 ラマ僧訓育道場に 文化部を設置 對外通信の統一や 娯樂の指導行ふ
 3. 11 泰仏印調停解決に 松岡外相らの苦心

- 手も足も出なかった仏印
1941. 3. 11 観音さんに深む日華親善 今月末から一週間法要 南京側の勧請準備成る
3. 12 大派法主 南洋巡錫紀行 松谷彰乘
3. 12 包頭は極楽地 金崎晃宣氏談る
3. 12 頓に活発 上海の金光 忠信小学校
3. 13 大派法主 南洋巡錫紀行 松谷彰乘
3. 13 大陸の断想 広州と日本 菟田中尉
3. 13 ハルビンでの叙任 結局、拒絶されん 文部省は結社認可見合す
3. 13 南洋行の第二陣 大派、両宗議を特派 調査視察と邦人慰問
3. 14 大派法主 南洋巡錫紀行 松谷彰乘
3. 14 皇民化戦士の養成に 新展開 台湾西別院輪番八雲氏談
3. 14 南洋巡教の輝く成果 光暢法主ら帰るきのふ、横浜入港
3. 14 朝鮮濟州島に 結核療養所経営 賀川氏 五百町歩の提供うけて
3. 14 印光法師を偲ぶ 日華仏研は特輯号刊行 両国の仏徒が礼讃
3. 15 大派法主 南洋巡錫紀行 松谷彰乘
3. 15 北から南から 大陸の留学生 西本願寺に来る
3. 16 観音信仰と 日華親善
3. 16 興亜国民運動へ 友邦の運動に呼応指導
3. 16 大陸に雄飛の青年 指導に万全期す 活躍する基教青年会
3. 16 臨宗招集で 南洋行延期
3. 16 大派満洲開教監督 整潤連枝を希望 総会で満場一致決議
3. 18 満洲国宗教論 京大教授 西本願
3. 18 回教の特色は 其の世界性に
3. 18 “笑赴死地四十人” 第一回大陸宗教教師錬成 西本願寺代表の感想
3. 18 共栄圏の異民族に 皇道精神を享授 島民開教に全力尽したい 光暢法主帰山第一声
3. 18 真宗僧として大陸へ 支那留学生得度 内地寺院で当分実務訓練 昨、東本願寺で受式
3. 19 泰国の仏教 ▽泰國にて第二信▽ 藤波大円
3. 19 泰・仏印戦没者を弔ふ 日本仏徒が歴史的追悼法要
3. 19 点綴 晋北仏学院入式 訪華仏教団派遣
3. 20 余の東亞連盟論 中華東亞連盟協会会長 広東省教育庁長 林汝珩 鮑耀富(訳)
3. 20 光暢法主智子裏方の 南洋巡錫報告講演 大東亜共栄圏確立誓ふ
3. 20 在留同胞の祖国愛! “断じて頑張る” と叫ぶ 阿部随行長らの南洋談
3. 20 土人の児が歌ふ 裏方作詞 “同朋の歌”
- 二部合唱に胸迫る感激
3. 20 日本タイ文化の融合へ 泰國代表と懇談
3. 20 関東神宮御造営 近く外苑起工式挙行 梅津全権ら参列
3. 20 満語の標音仮名 実験の結果は良好
3. 20 浄宗台湾開教区 管代の特命布教
3. 20 仏立講の樺 太教線統合
3. 21 余の東亞連盟論 中華東亞連盟協会会長 広東省教育庁長 林汝珩 鮑耀富(訳)
3. 21 外南洋の旅 =大派法主南洋巡錫紀行= 松谷彰乘
3. 21 南方に転機
3. 21 満人再教育に カナモジを採用 教科書、公文書に振カナ 苦心の音標成る
3. 21 彌栄本願寺の感激譜 妙好人、猛虎を射止め 拓地の造寺に献ぐ 観音の化身と満人驚嘆
3. 23 支那奥地・成都、重慶の窮状 寺院はことごとく 兵舎に使用さる
3. 23 満洲を対象の 医療無料診療所 大同仏教会が新京に開設
3. 23 三千人感激の祈り 日本聖化教団が上海で 中国人伝道の成果
3. 23 満洲を対象の 医療無料診療所 大同仏教会が新京に開設
3. 25 外南洋の旅 =大派法主南洋巡錫紀行= 松谷彰乘
3. 25 余の東亞連盟論 中華東亞連盟協会会長 広東省教育庁長 林汝珩 鮑耀富(訳)
3. 26 余の東亞連盟論 中華東亞連盟協会会長 広東省教育庁長 林汝珩 鮑耀富(訳)
3. 26 沸きあがる 南への熱情 拓南青訓生
3. 26 満支の便り 中支戦線にも春 ○○にて 井上勝三
3. 26 満洲開拓団 学童慰問行 神根愷生
3. 27 仏印タイ蘭印の映画 京都芸術談話会が 廿九日丸物で開催
3. 27 基督村移民募る 第一次本隊渡満 満洲へ
3. 27 山崎精華氏 大陸進出
3. 27 日蒙提携の礎石に 一家挙げて厚和へ移住 高鍋日宗開教監督
3. 27 半島青年の 思想善導 大和塾拡充
3. 27 北京金光日語 学院訪日団 本部に入る
3. 27 上海南市に 火葬場竣工
3. 27 点綴 ラマ僧特別訓練
3. 27 仏教道場開く 興亜宗教戦士の錬成
3. 27 印度の学僧を迎へ 教学界代表と交歓 各大学等で研究講演会
3. 27 大同石仏より古い 太原西北方で発見

1941. 3. 28 比律賓を語る 比島人も華僑も絶対親日 開教廿年の原田氏 南進日本のパロメーター
3. 29 外南洋の旅 大派法主南洋巡錫紀行 松谷彰乗 十
3. 29 和かな日華交歓 大阪の北京金光 日語学院訪日団
3. 29 台湾本島人が後援 中華人が日語学校創設 汕頭の森賢城氏談
3. 29 日華仏研訪 文使節決定
3. 30 外南洋の旅 大派法主南洋巡錫紀行 松谷彰乗 十一
3. 30 大社教分院で 半島人集会
4. 1 現代支那仏教の 通俗的一考察 在天津 陸三洲
4. 2 外南洋の旅 大派法主南洋巡錫紀行 松谷彰乗 十二
4. 2 英靈奉安殿と 前線日本人の道場 徐州東本願寺が建設
4. 2 将兵と拓士の 慰安場建設
4. 2 北支、全滿 日本基連 各役員改選
4. 2 中文宗大連の 理事長ら更迭
4. 3 満洲の開拓移民を 紙芝居や童話で慰む 当局も拓士も宗教を理解
4. 3 汪首席から激励 西本願寺へ兩留学生
4. 3 タバオの華僑も 国共分裂騒ぎ 重藤廓亮氏帰來談
4. 3 支那杭州に於る 仏教教育機関(上)
4. 5 皇民意識に燃える 神戸の半島同胞 僧侶の托鉢に献金
4. 5 点綴 南方講演会開く
4. 5 支那杭州に於る 仏教教育機関(下)
4. 5 興亜教育の普及徹底 教育界方面に気運起る 国民的運動に迄展開
4. 5 大陸の門戸に聖徳太子を讃仰 一大運動を起す
4. 6 外南洋の旅 大派法主南洋巡錫紀行 松谷彰乗 十二
4. 6 東洋平和祈る 日華結ぶ共同ミサ
4. 6 興亜の意気 さながらに 北京金光日語学院一行 本社訪問・欲談のとき 愛国行進曲を斉唱
4. 6 本島人十八名 お東で得度
4. 6 大陸民衆へ科学する心 宗教医師を送る 西本願寺が開教にエポック
4. 6 心身の日華親善 本多執行長談
4. 6 僧侶の宣撫員を募る 但し加持に堪能なもの
4. 8 満洲建国史 飾る貴重な資料 “日露戦前秘史” 刊行 高橋神父の翻訳
4. 8 日比青年文化協会
4. 8 北京金光日語 学院の訪日団 昨、帰国の途へ
4. 8 僧俗和合の東 亜建設戦士 興亜学院開始
4. 9 外南洋の旅 大派法主南洋巡錫紀行 松谷彰乗 十三
4. 9 共栄圏確立に印度人は無理解 これが是正には日印両国の 精神文化に基いてのみ可能 ボン氏語る
4. 9 広東仏教図書館 愈創立発会す
4. 9 日華兩國学徒の集ひ 東亜文化協議会 文学部会 十一、二両日京大で開催
4. 9 朝鮮の深山に みそぎの道場
4. 9 石原將軍お西の 興亜学院で講義
4. 9 “大東亜建設と日本語” 國語教会が 顕彰論文募る
4. 9 けふ得度の 本島人達 昨、本社訪問
4. 9 最北端黒河から 武村開教使帰る
4. 10 外南洋の旅 大派法主南洋巡錫紀行 松谷彰乗 十三
4. 10 日華仏徒の団結 南京で東亜仏教大会
4. 10 宗教南進策で 更に八雲氏特派 西本願寺の活動
4. 10 印度教學者講演
4. 10 東亜諸団体 統合白紙へ
4. 11 青年僧よ助け南方へ 共栄圏確立の使命達成に 移住者養成のパーリ文化学院開設
4. 12 鑑真和尚の遺跡顕彰 同願会改組、生長の家進出等 北支那宗教界通信
4. 12 在日本印度 独立連決議
4. 12 ジャリンワラ・バツグ 殺戮事件を銘記せよ
4. 13 中支文化の交流 於南支 菟田俊彦 聖戦余香
4. 13 東亜新秩序の指導 原理としての皇道(一) 満洲帝国協和会中央本部囑託 依田孟
4. 13 まづ二世の思想対策 異郷に活躍の邦人と母国を結ぶ “海外同胞中央会” 創設
4. 13 外国系教育機関を 全部政府に接收 イラン国教育制度統一
4. 13 ボン氏歓迎茶会 國際文化振興会京都委員
4. 13 もっとしっかりした 先遣隊を送れ ソ満国境、第六次開拓団 大派木下開教使語る
4. 15 東亜共栄圏に於る 宗教国策(上) 京都帝国大学教授 西本願
4. 15 大陸の断想 こよみなき民族 一大陸と神社一 菟田俊彦
4. 15 東亜新秩序の指導 原理としての皇道(二) 満洲帝国協和会中央本部囑託 依田孟
4. 15 薬用資源確保に 天理教団も一役 全教会で朝鮮アサガホ栽培
4. 15 台湾仏教会 について 紫水生
4. 15 “アジア歴史叢書” 上梓
4. 16 東亜共栄圏に於る 宗教国策(中)

1941. 4. 16 京都帝国大学教授 西本顕
東亜新秩序の指導 原理としての皇道
(三) 満洲帝国協和会中央本部囑託
依田孟
4. 16 徳川義親侯を囲む宗教家座談会 四月
二日 於ミヤコ・ホテル
4. 16 “樹下石上” 大陸生活の管見 南支
派遣 菟田中尉
4. 17 東亜共栄圏に於る 宗教国策 (下)
京都帝国大学教授 西本顕
4. 17 東亜新秩序の指導 原理としての皇道
(四) 満洲帝国協和会中央本部囑託
依田孟
4. 17 八百年の霊山が 興亜青年道場に 名
利根来山 全山に開設
4. 17 満ソ国境綏芬河に 興亜聖業を御覧
聖徳太子 本願寺に奉安迄の感激談
4. 17 大陸帰農者に統一
4. 17 東亜経済論叢 京大東亜経研 創刊号
を發行
4. 18 東亜新秩序の指導 原理としての皇道
(五) 満洲帝国協和会中央本部囑託
依田孟
4. 18 北京 第一信 古屋登代子
4. 18 文化交流の基地に 印度寺建立 入洛
したボン氏の希望 帰国後も運動続く
4. 18 満洲の神社行政 近く画期的制度完成
4. 18 南洋各地に お西の教陣
4. 19 東亜新秩序の指導 原理としての皇道
(六) 満洲帝国協和会中央本部囑託
依田孟
4. 19 在日本印度国民会講演
4. 20 東亜新秩序の指導 原理としての皇道
(七) 満洲帝国協和会中央本部囑託
依田孟
4. 20 日華親善は留学生から 東亜学校の飛
躍に期待 教頭森川智徳氏抱負語る
4. 20 “留学生の家” 贈る 住居を通じて日
本精神涵養
4. 20 松岡外相の帰朝後 世界の視聴日本に
集中せん 南方対策に氣をやむ米国
4. 22 西湖畔の名勝杭州に 日華仏教綜合学
院開く 大東亜建設の戦士養成に
4. 23 中支宗連 部長決定
4. 23 大陸の仏教 親善の為に
4. 24 畏し・元神祭を御親祭 建国神廟祭祀
令等公布 建国祭と共に再重要祭祀
4. 24 印度風俗語る 芸術談話会
4. 25 在洛華僑児童の 光華国民学校開設
東本願寺で華僑会議
4. 25 仏立の大陸 移民壮行式 大阪府主催
4. 25 大陸の宗教 戦士錬成 近く第二回開
く
4. 27 英米人宣教師ら 朝鮮で反戦運動
“教化”に名を藉る第五列
4. 27 満洲国の留 学僧ら来る
4. 27 祥雲洪嗣氏 満洲国留学
4. 27 現地軍病院に修養道場 入仏慶讃法要
営む
4. 27 外地側と懇談 基督教時局 奉仕委員
会
4. 29 一訪日の感想—『興亜の日本』北京
金光学院生徒 孫経宙
4. 29 田舎の旅へ 盤谷にて 藤波大円 タ
イ特信
5. 1 大陸の断想 福如東海 南支派遣 菟
田中尉
5. 1 東亜共栄圏の確立へ 関係諸民族大会
開く 大政翼賛会で計画進む 今秋
5. 2 開教地回顧 (一) 南部日禾 序
5. 2 大陸の 敬神思想昂揚 師範学校の神
祇講座 担当者集めて協議
5. 2 機熟す・興亜団体の統合 考へられる
三つの方式
5. 3 開教地回顧 (二) 南部日禾 真宗の
開教使と 他の伝道師
5. 4 開教地回顧 (三) 南部日禾 移民地
の粉擾 (初期)
5. 4 本島僧侶を 更に大量養成 最初の
“女僧侶”も 西本願寺に留学
5. 4 世界的仏教遺跡研究の 蘊蓄をひっさ
げて来朝 仏印の考古学者ゴ博士 我
が国の学会と交歓
5. 4 外人も加へて 今夏、東亜共栄圏講座
5. 4 ニッポンゴ トクホンを読む 中井玄
道
5. 6 次代青年の養成 教育に重点の必要
満洲国建設今後の問題
5. 6 大陸の神祇宣揚策 海外神社問題に就
て 官民代表が懇談協議
5. 6 北京の尚齋会 古屋登代子
5. 7 “大陸の花嫁”錬成 お西の沓掛興亜
学院長 益永普行氏渡満
5. 7 興亜の宗教 戦士養成所
5. 7 共栄圏確立を 誓ふ若人と語る 留日
中華学生中心に 大政翼賛会が懇談
5. 7 在満教化指導監督者の 派遣、更迭に
はアグレマン要す 満洲国の開教監督
重視
5. 7 満洲国からの アグレマン到着 藤岡
了淳氏を上人 大派海外開教人事
5. 7 被圧迫民族と 南方進出 千葉尊建
5. 8 開教地回顧 (四) 南部日禾 移民地
の粉擾 (中期)
5. 8 日蒙兩國親善に 蒙古、西藏両語の
“波羅密經” 橋本光寶氏等の訳編
5. 8 日華戦没者 追悼法要 在洛華僑が
5. 8 イラク、英に宣戦 完全なる成功望む
在日本印度国民会長 エ・エム・サ
ハイ氏声明
5. 9 永井局長招請の 興亜団体
5. 9 英国のため戦ふ者は コーランを裏切

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1941. 5. 9 るもの 回教司教長・印度へ呼びかく
イラク支援要請 在日本印度独立連盟
決議
5. 9 仏立講満洲移民団 鐵嶺西方に六千町
歩 目下ハルビンで現地訓練
5. 9 日華両国の 戦没者追悼 在洛全華僑
参詣
5. 9 仏教史にも 東亜共栄圏反映 西本願
寺の特殊教科書 これも新体制
5. 10 北京生活の一日ちう(上) 古屋登代
子
5. 10 日華文化交流に 貢献した中国人追悼
会 大日本仏教会が
5. 10 中華側の手により 外苑(公園)を造
立 一周年迎へる北京神社
5. 10 大派重永朝鮮 開教監督発令
5. 11 北京生活の一日ちう(下) 古屋登代
子
5. 11 大陸の備へ お西の朝鮮 開教主任会
5. 11 日本国民の 印度理解に資す ガンジー
翁のよき理解者 カマラ・デヴィ女史
来朝
5. 11 南洋庁では 仏教徒に期待 大派藍川
氏語る
5. 13 東亜共栄圏確立の神祇活動 圏内各地
の現地神職懇談会
5. 13 半島同胞のみの 男女青年団結成 協
和会太秦支部会員たち 石原宣隆氏の
教化
5. 14 植物資源に重点 東亜共栄圏全体に対
する 国土計画の樹立が急務だ
5. 15 開教地回顧(五) 南部日禾 医薬と
魔法
5. 15 中国薦亡者追悼会 六月十五日に変更
英の衰亡を 世界の黎明に 来朝した
印度の指導者 カマラ・デヴィ女史叫
ぶ
5. 15 対日十ヶ条の法令で 在留同胞は締め
出し 比島の実状を知ってほしい 八
雲円成氏の帰来談
5. 15 仏印の華僑に 正確な日本認識を ◇…
ハノイ中心に文化対策
5. 16 仏教文化闡明の根本 梵和大辞典の編
纂進む 第二、第三巻続いて発刊
5. 16 精神的日華親善へ 支那浄土教の聖跡
復興中心に 芝原玄超氏内地の運動起
す
5. 16 朝鮮の三十本山統一 曹谿宗として管
長占拠
5. 16 イラクを救へ 中国回教徒も起つ
5. 16 仏教同願会 の改組協議 興亜院文化
部
5. 17 満洲国開教は 物凄い発展振り 河瀬
甚吉氏の土産話
5. 17 世界皇化の 思想戦展開せよ 建国会
東亜局に進言
5. 17 興亜の中核体結成 事変記念日に新発
足
5. 17 南方問題の 総合研究 南方研究会
東大に生る
5. 17 中南支監督は 藤井静宣氏決定 教化
研究院長に磯氏か 大派人事けふ発表?
5. 17 南方諸島と大陸に 精通の両氏急派
お西が新計画の基礎調査
5. 17 全印婦人会長 カ女史を迎へ 神戸で
お茶の会
5. 18 日本は亞細亜に於ける 唯一の強力
な指導者 早く日支問題を解決せよ
カラマ・デヴィ女史の期待
5. 18 在阪中華児童参加 日華親善児童大会
難波別院で開く
5. 18 大陸の山 菟田中尉
5. 18 北京同願会が 中国仏青設立
5. 18 南洋事情座談会 (大谷法主巡錫記念)
占領当時の南洋群島
群島に於ける 教育施設その他
5. 18 東亜共栄圏国家の 健全な興隆発展へ
“民族科学協会”の発足
5. 18 半島に初の 教会図書館
5. 20 共栄圏の尖兵 南方に学徒隊出動
5. 20 日本浄土教縁の地 太原の昔と今 -
予想される未発見の仏教美術-
5. 20 先づ内地浄土教学者の 調査団を結成
派遣せよ 北支山西省その他の遺跡地
へ
5. 20 同願会一行 内地見学団
5. 20 泰より仏教 使節帰る
5. 20 南京金光会館 盛大な開館式
5. 21 上海は中国基督教の総指令部 東亜青年
協力に努力
5. 21 海南島の 日華寺増強
5. 22 共栄圏建設の 指導精神徹底へ 翼賛
会が指導者養成
5. 22 対支文化工作の再吟味 必要な高度の
政治性
5. 23 李王妃殿下台臨 聖徳太子聖霊会 四
天王寺の舞楽大法要 鈴懸の修験も参
列
5. 23 鮮満の開教 事情視察へ 大派興亜局
仏教を通じて 共栄圏確立に協力 同
願会の年次大会 六月二日東京で開催
5. 23 内地留学から帰国の 續台君も教壇に
晋北仏教学院の近況
5. 23 朝鮮基連總會 新事業を協議
5. 23 華北中外紙友の集ひ 各界代表発表で
誕生 六月八日北京で
5. 24 東亜仏徒の連絡や 仏跡の保護など
◇…同願会年会の議案決る
5. 24 日語の習得 には学芸会 上海忠信校
最近の発展
5. 24 北京だより 訪日への憧憬 古屋登代
子

1941. 5. 25 あすの南方進出に備へ 皇道外交の尖鋭隊錬成 翼賛会が全国十一ヶ所で大東亜共栄圏講習会開く
5. 25 龍門石窟の研究書成る 東方文化研究所員の労作 我が国で初めての出版
5. 25 雲崗石仏に 研究のメス 水野氏渡支
5. 25 ミントル女学院生 母国訪問の旅
5. 25 タイの仏教 事情を聴く 仏教使節歓迎
5. 25 掴んだ冀北華人の仏心 廿一ヶ所に本尊を下附
5. 25 本島人の皇民化は錬成だ 宗教の重要視説く 堀田台湾彰化教育課長
5. 27 李王兩殿下 高山野御成
5. 27 共栄圏の尖兵50万突破 中国に活躍する邦人数 四月一日現在・外務省発表
5. 27 敦煌出土古写本 啓明会から正大に寄贈 仏教学新部門の資料
5. 27 大阪日華親善 小国民大会
5. 27 事変下に伸びる 中国天主教の実情 教育し切れぬ求道者
5. 28 点綴 支那人の赤裸々
5. 28 華北の宗教制度近く整備拡充 仏教僧侶の資格定む 内務総署で調査計画 興亜院武田調査官語る
5. 28 内地以上に緊張示す “国民総力朝鮮連盟” 結成
5. 28 大陸開教宣撫 一応拡充控ふ
5. 28 北支中華教会 問安氏の報告
5. 29 大陸の断想 南画風景 菟田中尉
5. 29 ミントル女学生 兩校と交歓
5. 29 大陸の宗教情勢を一目に 「華北宗教年鑑」 発行さる 武田調査官苦心の編纂
5. 29 仏教同願会を強化 我国にも講演会設立
5. 29 同願会の一行 昨朝永平寺へ
5. 29 基督教の大陸伝道 新教団の発足で一元化 各派伝道は中止
5. 30 母と子がガッチリと 南支開教に挺身 ◇…汕頭東本願寺の興亜譜
5. 30 点綴 上海曹洞禅盛ん
5. 30 漢代文化語る 貴重な資料 拓本特別陳列 京都博物館
5. 30 東亜伝道の 使命観を徹底 「東亜基督教研究会」 近く生る
5. 30 華僑は政府の痛！ 仏教を除いて文化工作不能 藤波、山本両使節歓迎会 泰を語る
5. 30 興亜仏教道 場開設延ぶ
5. 31 日泰親善の 先覚者を偲ぶ 物故者の追悼法要
5. 31 初めて見る祖国の勇士 南洋の同胞少女に応へ 白衣勇士に感激の嵐 連如上人劇の “劇中劇”
5. 31 デヴィ女史歓迎
6. 1 酋長も土地を提供 浄宗ヤップ島に新教線 内地学生招き宿泊に寺を開放
6. 1 南洋寺では 経営部開設 物産を分譲
6. 1 南京通信 宗教界の動きを中心に
6. 5 南洋事情 講習始る
6. 6 僧侶生活の刷新 宗教儀式の改革 イランを語る座談会
6. 6 東方文化連盟 女史講演
6. 6 鮮満急行記 第一信
6. 7 興亜団体統合・七月頃結成か 精神運動として 興亜理念の単一化を 各団体の事業とは切離す
6. 8 開教総監に 森田氏起用 天台宗人事
6. 8 日華仏研の 訪華団延期
6. 10 仏印、蘭印と睨み合せ 重要性持つ日泰親善 二見公使の使命重大 日泰親善工作 増進されん 二見公使赴任
6. 10 仏教には団結力がない 回教にはそれが強い 回教協会長 林銃十郎大将談
6. 10 イラク同志を激励 満洲回教協会が近く役員会開く
6. 11 大蔵経、五台山へ 全山の僧侶ら歡喜
6. 11 鮮満急行記 第二信
6. 12 「大日本興亜同盟」 結成 事変記念日に輝しく発足 事業団体も包容 永井東亜局長談
6. 12 鮮満急行記 第三信
6. 13 愛国心に燃ゆる イラン文化に注視 中山前駐イラン公使談
6. 14 鮮満急行記 第四信
6. 15 日華親善風景 点描
6. 15 戦場は僧堂の延長 この日本兵の精神力 雲水帰還兵座談会の記
6. 17 大東亜共栄圏建設の 基本精神 藤沢親雄
6. 17 中国薦亡者悼む 大阪の法要盛儀
6. 17 満鮮急行記 第五信
6. 18 大東亜共栄圏建設の 基本精神 藤沢親雄
6. 18 東亜の先覚、恩人に 汪精衛氏感謝の 建碑 鶴見総持寺の山頭に
6. 18 蒙古の活仏や日満志士 合作で珍しい新寺建立 千葉県松戸に “日満山真全寺”
6. 18 満鮮急行記 第六信
6. 19 北京と“中外” 古屋登代子
6. 19 戒律より観たる 中国の仏教徒 (上) 中支蘇州 一井宗元
6. 19 日支戦死者の霊慰む 戦場の血に滲む土で供養塔 大阪同願会同志の企て
6. 19 生仏様になった話 中南支から帰った 豊田西本願寺興亜部長談
6. 19 大谷派宗議会 一第五日一 宗門戦士養成の 士官学校的機関
6. 19 満鮮急行記 第七信 天理村

1941. 6. 20 戒律より観たる 中国の仏教徒 (中)
中支蘇州 一井宗元
6. 20 日泰文化興隆の先駆 先づタイ国から
留学生派遣 大日本仏教会の斡旋実る
6. 20 故福田氏ら日 華の志士偲ぶ 大阪有志が
6. 20 満僧と道士 訪日視察団 廿七日入洛
6. 20 朝鮮神宮神田
6. 20 満鮮急行記 第八信 牡丹江
6. 21 我が官民協力して 中国の経済発展実践
積極的自給自足へ邁進
6. 21 満鮮急行記 第九信 牡丹江
6. 21 健康と精神力 内地人の低下に比し
台湾、半島人の優秀さ 桜沢無双原理
講究所長叫ぶ
6. 22 戒律より観たる 中国の仏教徒 (下)
中支蘇州 一井宗元
6. 22 蒙古の奥に贈る日本医学 太田覚眠翁
畢生の事業
6. 22 第三次百五十戸の 移民計画樹つ 満
洲天理村開拓組合
6. 22 満洲移民へ 金光も進出
6. 24 戦時下、真言宗の新事業 「大日本密
教協会設立」 全アジア密教徒団結
赤魔への思想的防壁
6. 25 太田翁を懐しむ 哈満洲国理事官 仏
教外交 お西で
6. 25 汪精衛氏に 歓迎打電 華僑仏教興亜
会
6. 25 広東に禅風 妙心別院で 禅学講座を
6. 25 満鮮急行記 第十信
6. 26 日華共同声明 の発表
6. 26 ゴルーベフ博士に聴く 南方の仏教と
仏教美術
6. 27 地方文化の培養機関としての 支那カ
トリック教の 宣伝に就て (上) 沖
田勉
6. 27 遙かに二つの 死を哭す 古屋登代子
藤井照純師
6. 27 和平やうやく還つて 広東仏教居士林
来月十三日に発会式
6. 27 内地見学の 満洲僧一行 昨午後入洛
6. 27 北京の宗教界 短信一柬 日本宗教団
体定例会議
6. 27 朝鮮人の内地化は… 言語と礼法の実
践 協和会の入郷順則訓
6. 27 和田性海氏 朝鮮巡講
6. 28 地方文化の培養機関としての 支那カ
トリック教の 宣伝に就て (下) 沖
田勉
6. 28 半島同胞の 青年会発会 西京極西方
寺で
6. 28 円満解決見込み立たぬ 回教徒の大反
乱 奇襲部隊で猛撃 甘肅省
6. 28 親日家趙中 山県長暗殺
6. 28 北京の宗教界 短信一柬
- 訪日仏教同 願会一行歓 迎会 回々
教大講演会 中国仏教青年団 成立間
近し ラマ教僧團奮起
6. 28 満鮮急行記 第十一信
6. 29 生きてゐる満洲 (観相眼に映つた地
相) 千葉耕堂
6. 29 満鮮急行記 第十二信
7. 1 汪主席是民族的救星 南支派遣 菟田
中尉
7. 1 外交団、留日学生ら 五千人を招く
第一回南方仏陀祭
7. 2 日華仏教文化提携と 宣撫工作の推進
力 (上) 足立松陽
7. 2 満洲仏教総会 奉天省本部 役員改選
7. 2 寧波の伝教遺跡 一日本仏教会に贈る一
在寧波 新野修基
7. 3 日華仏教文化提携と 宣撫工作の推進
力 (下) 足立松陽
7. 3 ラマ教を改革して 蒙古民族の立て直
し 軍、政府当局と協力する 日本ラ
マ研究本部の政策
ラマ教徒の教導は 日本仏徒の使命
実施中の改革案 ラマの妻帯・勤勞
奨励その他
7. 3 半島夏期伝道 龍谷大学の 伝道報告
会
7. 3 奉天の太夷宮 年祭と講堂開き 川島
翁の靈地折念
7. 3 日華の僧侶の 相互慰靈法要
7. 3 大陸に進出する 開教使を根本的に鍊
成 満洲国の方策に沿って お西が公
主嶺に訓練所
開拓村に入植の 内地僧の素質向上
7. 3 在家の中堅層動員 西本願寺の興亜運
動に 新生面を与へる
7. 3 中国各地に 仏教図書館設置 仏書を
贈ってほしい 一仏書による親善運動一
7. 3 上海に道盤会
7. 6 朗に“日語学校”の授受 汕頭西本願
寺と日蓮宗 南支に誇る豊かな偕調
7. 6 安南人をも收容 拓南社の農民道場
皇民化運動に期待
7. 6 華北青年運動史に 誌す・画期的一頁
“北京興亜青年同盟”生る
7. 6 燃える北京の 日語研熱
7. 6 密教協会設立に本腰 真言宗興亜部長、
事情精査班ら入腹
7. 6 御鎮座一周年 北京神社拡張
7. 8 国際色豊かに 最初の南方仏陀祭
7. 8 外人に日本語教授の五十年 廃娼運動
にも示す貢献 松宮翁の古希祝ふ
7. 8 日華親善観音 護送代表帰滬
7. 8 興亜諸運動を統合 「大日本興亜同盟」
結成 大会で宣言、役員発表
7. 9 大陸皇化の基本策
先づ満鮮両民族発祥の地 長白山に

- 両民族の祖神祀れ 川島浪速氏事変記念日に発表
1941. 7. 9 信仰者の開拓村こそ満洲の基礎だ お西の門徒が念仏村建設
7. 9 蒙古の子供達と親善 玩具や絵本を贈って下さい
7. 9 中国から姑娘留学生 お西の日華親善実を結ぶ
7. 9 興亜青少年連絡会議 中国在住の青年参集
- 7.10 他宗派僧侶も収容する 満蒙開拓布教者訓練所 満洲国哈爾濱市に創設 東本願寺も興亜戦士錬成
- 7.10 山西の仏教復興 全仏教徒一丸となり 浄財で大文化運動
- 7.10 中国留学生の 朗な日華親善
- 7.10 わが私設社事連の幹旋で 中華社会事業協会生る 日満支社提携の一環 名誉理事に陳立法院長
- 7.11 松井大将と楮大使が 写経を奉納交換して慰霊 “東亜仏教圏お盆の夕”
- 7.11 点綴 ラマ研究生殉職 泰く事情を説く
- 7.11 南方開拓に示す 烈々たる気魄 “東半球協会”の活動
- 7.11 北京で神祇講座 九月華北総署で開設
- 7.12 興亜青年の訓練には 政治と宗教情操を養へ 天津代表の水上同志会長力説
- 7.12 在華日本人青年団 各地域に独自の運動 興亜青少年連絡会議開く
- 7.12 点綴 樺太開教三十年 天津別院入仏式
- 7.12 中国僧に 日語教授 日華親善に 藤井静宣氏
- 7.13 蒋介石の故郷寧波に 奏つ・日華合作の親善譜 談玄・牧田両氏の日語学校 中国仏教界の話題二つ
- 7.13 満洲開拓に 教学奉仕
- 7.13 更に飛躍的進出を期す 基督教開拓村の現地報告に聴く
医薬治療に 満人の尊敬信頼 日満人の融合親和
三万円の 会堂建設
- 7.13 落雀の漢口より
- 7.15 興亜院の絶対的協力で 厦門に仏教大学を開校 予科卒業者は日本へ留学
- 7.15 満洲基督教 神召会 全満議事会
- 7.15 満洲基教 長老大会
- 7.16 ここにも見る皇軍の恩威 全満華人に反響素晴し 五台山六月大会を語る 高原氏
- 7.16 中国僧の要望に応へ 宗制や宗団法を知らず あるがままの現状打破へ 日華仏教研究会が指導
- 7.17 北京からのお嬢さん 広島でお寺生活 神根氏の“日本のお父さん”振り
- 7.18 興亜同盟 愈よ活動開始
- 7.19 大陸の断想 護生の歌 在南支 菟田中尉
- 7.19 ダバオ二世嬢たち 人知れず献金の祖国愛 白衣勇士の慰問で皆泣く旭賢雄院長の感激談
- 7.19 初めて成る 蒙古人の蒙古史 源氏物語の蒙漢語訳
- 7.19 全国の半島 同胞だけで 信徒会結成 黄檗宗が
- 7.19 皇軍の最前線 宜昌探訪記 長谷川良信
- 7.19 蒙・疆・風・土・記 大同陸軍特務機関 岸融証
- 7.19 戦線の遺骨 朝倉駿一
- 7.19 タイ事情 講習会
- 7.20 北京各宗教団体が 興亜記念運動 我が指導精神の浸透に
- 7.20 全華北の基教 自立教会を一丸に 近く連絡機関に総会結成
- 7.20 東亜諸国民の納得する “皇道学”の体系化へ 裏付けに神代文化研究が必要
- 7.22 北京中外神 友会幹事会
- 7.22 大同仏教会後 援会設立協議
- 7.22 中国仏教会復活へ 仁山法師を擁して展開せん
- 7.22 新秋、中支に戦跡弔ふ 南京入城の松井大将
- 7.23 軍隊に神棚奉祀 戦場の祭祀確立など協議
- 7.23 難民救済に大童 範成法師“中支宗大連”と提携
- 7.23 日華神前の 素晴らしい御利益 南京毘盧寺観音像
- 7.23 ラマ僧夏期 錬成訓練
- 7.23 日華神前観音 護送代表帰寧
- 7.23 国民政府に宗教特官設置 中支仏教大会の決議実現を 藤井草宣氏、楮大使に懇請
- 7.23 女専生など混へ 満洲女性ら懇談 大同仏教会見学団
- 7.24 北京〇〇病院 の本尊入仏式
- 7.24 今夜大阪で 興亜の叫び
- 7.24 タイ語講習会 大阪大谷会館で
- 7.24 皇軍の最前線 宜昌探訪記 長谷川良信
- 7.25 真言宗初代の 満支開教監督 決定近く発令
- 7.25 南京仏学院の 第二回卒業式 日本留學生派遣
- 7.25 “仏教輯覧” 国際仏協華南 支部初出版
- 7.25 満洲大同仏教会の 社事見学団来朝 帝都仏教社事家と懇談
- 7.26 詔勅より拝したる 南洋問題(上)

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1941. 7. 26 森清人 泰曹洞宗管長 晴れの就任式
7. 26 天の進軍ラッパは高鳴る 大日本興亜同盟、関西の第一声 獅子吼する永井柳太郎氏
7. 26 中国民衆の信仰調査 中支宗大連が着手
7. 26 信愛学院を開設 中国の信者獲得 上海市の藤原氏
7. 26 中国児童ら 愈よ巣立つ 上海の神道関係小学校
7. 26 切迫する 東亜問題 林大将
7. 26 朝鮮総督府 祭務官任命
7. 26 曹洞宗が蕪湖に出張所
7. 27 詔勅より拝したる 南洋問題（下） 森清人
7. 27 日本人の足跡 蒙疆風土記 続 大同特務機関 岸融証
7. 29 仏印を語る 仏教使節 宇津木氏 英雄祀る“亭”の神前で 堂々行ふ、祭政一致
7. 29 満鮮巡礼記 新京とところどころ 千葉耕堂
7. 30 可愛い国際親善 泰国ラヂニー小学生と 植柳国民学校児童
7. 30 少年少女に 南方共栄圏の 知識与へる
7. 30 仲善く机並べ 日本語の勉強 東本願寺の 泰国留学生
7. 30 青少年達と 起居を共にし 日本精神の生活化 大陸への宗教工作の一面
7. 30 野原日海氏の 朝鮮教線視察
7. 30 熱望の祭祀場 桑久保真言宗従軍僧 兗州に日本寺院開創 井出部隊発表
7. 30 国民政府の肩入れ 敵も味方も生仏として敬服 杭州東亜仏学院の西谷氏
7. 30 満洲歌日記 隈江博司
7. 31 大陸開拓村に 盛り上った“お寺” 河村敬信氏婦来談
7. 31 僧一特務機関一魚屋 こんな具合で東亜建設の強化
7. 31 大派満洲開拓訓練所 十月一日より開所 興亜宗教戦士を募る
7. 31 満鮮巡礼記 『哈爾濱を中心に』 千葉耕堂
8. 1 大陸の宗教活動組織化 翼賛会と宗団代表の懇談
8. 1 満鮮巡礼記 『大日向村視察』 千葉耕堂
8. 2 戦時下、国民意識昂揚に 先覚の完遂した偉業を偲ぶ 元寇六六〇年記念事業 今秋九月、全国的に実施
8. 2 多忙で座る暇なし 支那兵舎跡で座禅 古川北支開教総監談
8. 2 蘇州の麗人 日本へ留学 巢鴨女子商業へ
8. 2 学資絶えたビルマ留学生に 知恩院が伸ばす国際救援の手 南方仏教徒との提携へ ここにも光る英国の監視の眼
8. 3 満鮮巡礼記 公主嶺から奉天へ 千葉耕堂
8. 3 満洲随想 隈部博司
8. 5 齋王の一族 齋蘇榮嬢 桜花高女留学
8. 5 日泰親善の誓ひ タイ国武官等招き 東本願寺の交歓会
8. 5 “仏印の仏教” 海外仏教事情 特輯号刊行
8. 6 釜山の寺院教会を 皇民錬成道場に総力運動の再出発
8. 6 ラマ事情調査 の入蒙は延期
8. 6 満鮮巡礼記 奉天城の内外 千葉耕堂
8. 6 日仏文化交歓や 仏様の廃物利用 宇津木二秀氏の 南方旅行のお土産
8. 6 広東に大派南支 開教監督部設置 初代監督に藤波大円氏
8. 7 太原の玄中寺中心に 支那浄土教の復興へ 大陸の陣容成り・内地に叫ぶ 三上氏帰朝談
8. 7 東亜の文教興す 日華綜合学会会議 内地評議員の渡支決る
8. 7 日本語教授に利用 “重要五百漢字とその熟字” 国際学友会の新辞典
8. 7 上海日系文化事業 忠信小学、同職業中学 出川学監の報告
8. 7 満洲開拓団随想 隈江博司
8. 7 労働者指導所も舌を巻く 仏立集団の満洲開拓
8. 8 覚生高女出の 娘さん二人 桜花高女に留学
8. 8 長期に亘る 興亜錬成会 天津東別院 広東を基地として 大派南方開教に挺身 木下興亜局長語る
8. 8 南方宗教事情 視察団をも派遣 南方仏教青年会生る
8. 8 サイパン神社へ 広島御神璽奉斉
8. 9 東亜輕繪と仏教の使命（上） - 此見地よりする全一仏教の使命 - 安藤正純
8. 9 満蒙青少年義勇軍に 贈る・激励のレコード 文化指導、開拓文庫も寄贈
8. 9 タゴール翁
8. 9 インテリ層も抗日の 無意義に目覚む 重慶の出店上海 末包氏談
8. 9 満洲神社規 則立案進む
8. 9 日本の女性は “世界の母だ” 日滿華三国の 女性中心の夕
8. 10 東亜輕繪と仏教の使命（下） - 此見地よりする全一仏教の使命 - 安藤正純
8. 10 南方仏教使節 歓迎会盛ん
8. 12 往年の経験を基礎に 満洲国の植林を強調 治水上からも百年後の大計樹て

- よ 南岳和尚が当局に進言
1941. 8. 12 タゴール翁 追悼会 印度国民会
8. 12 内地の良風 美俗を修得 半島同胞の青年
8. 12 蘭印の仏教語る
8. 12 満洲をちこち 隈江博司
8. 12 “承德の聖者” 迎へ 大陸伝道の指針研究
8. 13 点綴 中国革命追念碑
8. 13 東方諸民族の協力会議を開け 強靱な新秩序建設に 最も根本的で緊急事
8. 14 岐阜県仏教会が 北支皇軍慰問隊派遣 帰還勇士福島氏ら
8. 14 在外邦人教会の 統合強化に邁進 基督教団国外伝道局
8. 14 文化遺跡の保存・研究 東亜文化協議会の新事業 常磐大定博士に期待
8. 15 樺太開教十年を省て 青年仏徒に檄す 松本勝□
8. 15 宗教 蒙疆風土記 大同特務機関 岸融証
8. 15 仏教南進 ビルマの仏教 中島莞爾 ビルマ仏教の歴史的展開
8. 15 大陸に拾ふ 南支 菟田中尉
8. 15 時局に偲ぶ元寇の偉業 翼賛会の全国的記念事業 宮崎宮では厳肅な祭典
8. 15 タゴール翁追悼
8. 15 個我能義製 - タゴール翁の死 - 福永勇賢
8. 16 ビルマの仏教の現情(上) 中島莞爾
8. 16 皇化に浴せる “中国先賢顕彰譜” 編む 歴史的事実を宣揚して 日華の親善増進を図る
8. 16 興北十万の渴仰 絢爛の甘珠爾廟会 各種の時局工作 蒙古のお祭
8. 17 ビルマの仏教の現情(下) 中島莞爾
8. 17 観音さんの慈光を 全満洲に光被 張将軍らの発起で 造福観音寺を建立
8. 19 日華合同隣組
8. 19 広東の風物 笈潮風
8. 19 北京中外紙友会より
8. 19 共栄圏の現状 南方事情講演会 あすお東が公開
8. 20 日華合同隣組(承前) 古屋登代子
8. 20 教役者の再修所 飛行機献納運動 日本的に展開の 半島基督教長老会
8. 20 常磐博士の指導で “支那文化史跡” 完成 更に満蒙文化の統輯へ
8. 20 仏教の対支布教強化 政府の指導方策 決る 文部省から関係者へ通牒 統制、指導下に 各宗派協力一致し 東亜新秩序建設へ
8. 21 興亜の大業完遂に カナヅカイと漢字 整理 興亜院へ協力発言を要請 カナモジカイ建議
8. 21 南方レコード公開
8. 22 仏跡アンコール・ワット鳥瞰図 水戸彰考館で発見 日・仏印の友好物語る
8. 22 共栄圏確立に協力 宗教活動の組織化 宗教報国会が研究 興亜宗教大会開催も促進
8. 24 詩聖タゴールを憶ふ 古屋登代子
8. 24 少国民興亜訓練所 四年以上の学童を中心に
8. 24 南京に伝道 教会建設
8. 24 北京の宗教界
8. 24 日華仏教徒の美はしい親善 苦力から 救はれた臨濟寺の和尚 石門の臨濟布教所飛躍
8. 26 全島の各宗派を一丸に 「台湾仏教奉公会」を結成 南方共栄圏基地として飛躍
8. 26 台湾に浄宗の 報国運動展開 永田氏特派
8. 26 北支玄中寺の 復興運動活発
8. 27 南方共栄圏 建設の礎に 仏教信者の 坪上大使
8. 27 東亜共栄圏建 設の鐘も鳴る 震災記念法要
8. 27 留学の歎び 北京の娘さん 智子裏方 見
8. 27 点綴 安南語の講習所 南方の仏教事情
8. 27 現代支那傑僧と蒋介石 全面平和の もたらされた時 太虚ら再び我に随順せん 支那社事調査 長谷川良信氏の土産話(上)
8. 27 台湾本島人 僧侶養成所 浄宗台北に開設
8. 27 大陸方面への 進出で協議 西本願寺 翻訳課
8. 27 大派大同県に 口泉布教所
8. 28 第三国系社会事業は 戦前の五割ほど 復活 教会を背景とするもの 支那社事調査 長谷川良信氏の土産話(中)
8. 29 南十字星下に 日本寺院建つか 切なる 移民の宗教的求め 工藤義修氏の婦朝談
8. 29 半島人の墓地問題 内鮮融和のため 大社教が尽力
8. 29 …朝鮮神宮の… 神田設置費等 淨財 続々集る
8. 29 朝鮮神職会が 神宮大麻奉斎の パンフレット
8. 29 朝鮮総督府局 課長三十名が 朝鮮神宮で 禱修業
8. 29 開拓地と布教使の実相語る(1) 東宮少佐の念願で 拓地へ最初の慰問僧 入植當時を語る月輪輪番
8. 29 志願者が押すな押すな 南京金陵女子学院 考試院の汪氏が考試指導 東本願寺

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1941. 8. 29 蘇州から浄宗へ 二留学生
 8. 29 新政府の社会事業 邦人の事業警戒さ
 る 問題は第三国系のもの 支那社事
 調査 長谷川良信氏の土産話(下)
 8. 29 日華協力で 北支社事を包摂する 華
 北厚生協会 今年中に誕生
 8. 29 仏教北支進出 最近の造寺 大派の
 “新郷寺” 郭知事も寄進申出
 8. 29 宗教南進論を とく桜井大佐
 8. 29 蒙疆地区に 回民教育促 進会生まる
 8. 29 興亜部新設 西山布教調査会
 8. 30 ビルマ仏教徒と 今次世界戦(上)
 中島莞爾
 8. 30 胡同の囁き 古屋登代子
 8. 30 ハルピンより
 8. 30 開拓地と布教使の実相語る(2) 団が
 匪賊を追ッ払う 内地へ帰りながらぬ
 児童の健康状態内地以上
 8. 30 戦禍が生んだ 中国の孤児ら 大阪郊
 外で愛護教育 四天王寺悲田院育児所
 国家社会への奉仕知らぬ 徹底個人
 主義の血の流れ
 8. 30 「大陸の花嫁」 候補者講習会 高田東
 別院で
 8. 30 大同のこれから 蒙疆風土記(完)
 大同特務機関 岸融証
 8. 31 ビルマ仏教徒と 今次世界戦(中)
 中島莞爾
 8. 31 開拓地と布教使の実相語る(3) 弁理
 処長も勤める 絶対信頼の坊さん 拓
 地には“神仏論争”はない
 8. 31 戦禍が生んだ 中国の孤児ら 大阪郊
 外で愛護教育 四天王寺悲田院育児所
 親日家の警察局長 行方不明の愛児
 が判る
 8. 31 英ソ両国のイラン侵攻で 三億回教徒
 の動向 回教圏研究所に対策を聴く
 世界動乱と弦月旗
 諸国の回教政策 回教圏の現動向
 9. 2 ビルマ仏教徒と今次世界戦(下) 中
 島莞爾
 9. 2 北支、宗教秘密結社の 顔役に説く東
 亜新秩序建設理念 より高度の治安獲
 得を自発的に研究 興亜院華北連絡部
 の講習
 9. 2 海外の各開教地へ 教史教義を闡明
 宗制の規定を更に敷衍
 9. 2 北京に於る 神祇講座
 9. 2 点綴 北支の孟蘭盆会 北支神道理事
 長
 9. 3 上海の日華 僧侶の清庭 提携の起点
 9. 3 厦門“閩南仏学院” 大醒法師の努力
 で復興 学僧集結、予科開く
 9. 3 東亜共栄圏構成地域の 印度人に我が
 恩威知らせ 資産凍結に伸縮性とえよ
 日印協会が大蔵省へ陳情
 9. 3 骨を蒙疆に 埋める戦士養成 真言の
 派遣僧訓練
 9. 3 開拓地と開教使の実相語る 日本に宗
 教戦争? 白系露人と神仏論争
 9. 3 イラン文化の おもしろさ 徳沢龍潭
 9. 4 最近のビルマ事情語る ビルマ25万の
 僧侶達 有事の際は銃執る覚悟 僧正
 様は大眾活殺の鍵 在任十余年、大場
 氏の報告
 9. 4 ビルマ文献研究に 故畑中氏の功績
 天晴れ日本仏教徒
 9. 4 大陸の現地に 三教教師錬成
 9. 4 満洲に仏連村建設 全県下寺院に運動
 埼玉県仏連の機構改る
 9. 4 ここにも 朝鮮人墓地 大阪前田氏の
 計画
 9. 5 对支布教の強化統制 神道、基督教にも
 近く指示 但し統制機関は創設せず
 9. 5 宗教通じて 共栄圏の団結 張家口で
 宗教大会開く
 9. 5 満洲宗教問題考 宮村隆道
 9. 6 治強運動に起つ 華北宗教界の動き活
 発
 9. 6 太原玄中寺中心の 中国浄土宗復興議
 す 日本浄土教三派人の会合
 9. 6 常磐大定博士 半生の労作 支那文化
 史跡 汪首席に贈る
 9. 7 東亜新秩序の 建設に一肌ぬがす 先
 天道会の顔役に 興亜院 華北連絡部
 が講習会
 9. 7 興亜宗教叢書
 9. 9 皇民奉公に挺身 台湾仏教奉公団
 9. 11 半島同胞の 指導に積極的 大乘学寮
 を拡張
 9. 11 中南海へ荷灯三千 北京の日華治強戦
 士慰靈
 9. 11 点綴 華語講習女子部
 9. 11 大派パラオ主任 に北条氏が就任
 9. 12 皇国女性錬成のため 奥村五百子記念
 館建設 “愛婦” 発祥地仁川東別院に
 近く五百万会員に呼びかく
 9. 12 成吉思汗以後の “蒙古史”を編纂
 日蒙合作の正史
 9. 13 道義東亜之建設と 日華思想の反省(1)
 松本勝三郎
 9. 13 我が大陸国策の拠点 満洲国の重要性
 強調 東京で承認記念日に式典
 9. 13 市会議員等を抛ち 南方開教に挺身
 大派“血盟徴用”のハシリ
 9. 13 日本語も上達 けふ谷大留学 泰のサ
 チラ氏
 9. 13 南支で見た民族の祭典 菟田中尉
 9. 13 驢馬と宣教師 戦場の感覚 戸塚重基
 9. 14 道義東亜之建設と 日華思想の反省(2)
 松本勝三郎
 9. 14 日本仏教の実際を知った 円明、浩如

- 両留学僧帰国
1941. 9. 14 寄贈の仏教書 近く広東へ
9. 14 事変対処機関 興亜一心会 神理教が結成
9. 16 道義東亜之建設と 日華思想の反省(3) 松本勝三郎
9. 16 “示せ華人へお手本を” 現地若人から酒、煙草の追放
9. 16 矢原雲昇氏が 満洲国へ転出 曹洞人事異動
9. 16 大陸布教と 南進仏教 西本願寺が論文を募る
9. 16 皇軍の戦没 将兵慰霊祭 ポース氏が増上寺で営む
9. 17 道義東亜之建設と 日華思想の反省(4) 松本勝三郎
9. 17 東天を望んで 早天に祈る群 上海日本人教会
9. 17 井州浄土教遺跡の 日本研究調査団 愈よ来年三月出発 各方面の理解完全になる
9. 17 大派南京主任 北山氏を起用
9. 18 道義東亜之建設と 日華思想の反省(5) 松本勝三郎
9. 18 壮麗の雍和宮に 繰り展ぐ法筵絵巻 北京の連合息災法会
9. 18 大東亜共栄圏内の宗教 皇道の本領に則って 各国内各種信仰に自由認む 第三調査委員会の決定案
9. 18 対支事業を遂行 基教時局奉仕委員会 改組して新方針定む
9. 19 道義東亜之建設と 日華思想の反省(6) 松本勝三郎
9. 19 点綴 満洲事変記念日 京城薬専生練成
9. 19 治強色漲る華北一億の声 新民会全体連合協議会
9. 19 全蒙疆宗教 大会第一陣
9. 20 道義東亜之建設と 日華思想の反省(7) 松本勝三郎
9. 20 宣撫五年知る・支那民衆の心 元宣撫官、松林智翠氏談
9. 20 句仏氏令息 敵陣に突入 戦傷を負ふ
9. 20 引揚邦人の 慰問に活動
9. 20 中国革命同志 追悼会に特使 国民政府が派遣
9. 20 半島仏教瞥見(上) 龍大学三 藤田真祐 同予一 西原(韓)聖七
9. 21 満洲事変十周年と文化交流
9. 21 学童の友情 北京育成学堂 贈呈式行はる
9. 21 華人に女装させられ 匪賊の難を救はる 海野昇雄氏語る 中国人の良さ
9. 21 同願会の仏教 大会にも臨む 日華仏研の訪華団
9. 21 満蒙開拓布 教者訓練所 お東の入所
- 生
9. 21 半島仏教瞥見(下) 龍大学三 藤田真祐 同予一 西原(韓)聖七
9. 23 共栄圏の確立 と宗教政策
9. 23 皇道精神を中核に 大東亜百年の文化政策 翼賛会調査委員会の上申
9. 25 共栄圏確立と 宗教に就て懇談 興亜院松村文化部長中心に 大日本宗教報国会
9. 26 忌はし神職の不敬事件 新京神社主任を国外追放
9. 26 半島同胞の 黄檗信徒会 帰敬式を行ふ
9. 26 中日文化交流の 先覚者弘法慕ふ 楮駐日大使、長崎から 大師銅像を南京に勧請
9. 27 中国人の手で初の 明治維新史成る たかまる日本研究熱に先鞭
9. 27 共栄圏建設 今後に備ふ 留日学生と懇談
9. 27 大派満拓訓練所 来月二日開所式
9. 27 寺廟皆無の蚌埠で 中国人開教進展 東本願寺の太藤氏活躍
9. 27 厦門閩南仏学院も 太院院長迎へ復興 日本語に重点を置く
9. 28 翠色に映ゆる 革命追念碑 鶴見総持寺で除幕式
9. 28 日華精神提携へ 日本基教青年会が南京診療所を開設
9. 28 華僧のみならず 中国青年居士に働き かく 南京仏学院新発足
9. 28 東方文化連盟 南方事情聴く
9. 28 大連東別院輪番 高西賢正氏任命
9. 30 大陸に耕す 僧たち決る 西本願寺の第一回入滿者
9. 30 捕虜の霊にも 贈る、皇軍の温情 北京西郊に供養塔
9. 30 上海租界のモラル この旧体制の打破こそ 中国の再建東亜の解放
9. 30 不振の中国仏教 如何に打開するか 梵唄等を用ひよ 中国僧の教友会の意見
9. 30 仏教の真精神で 民族の親善友好を蒙疆仏教会発会す
9. 30 蒙古政府内に 回教委員会
10. 1 “高台教”の将来は? 創始者既に亡く二祖また拉致さる 最近帰朝の宇津木二秀氏談
10. 1 惟神大道を枢軸に 日華提携の興亜運動 講究所華北総署が道場建設
10. 2 東亜共栄の先覚 殉難志士の功績芳し 感慨深き“理念碑”除幕式
10. 3 真言の蒙疆派 遣僧道場開く
10. 3 共栄圏確立に 協力する宗教 興亜院松村文化部長談 思ふ存分の活動を期待する

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1941. 10. 3 興亜宗教対策の具現に 翼賛会が近く構想具体化 専門実行委員会組織されん
10. 3 対外宗教工作で 官民協力の委員会設置
10. 4 南進日本の御指導者 御由緒地の本尊讃仰運動
10. 4 大同の石仏も 石炭層上に安座 敬意表して採掘せぬ
10. 4 島民児童への慈愛 童心結ぶ「友」の歌 大谷智子南洋行へ “南進日本” 繞る朗篇
10. 4 対支布教権獲得 必ず実現せしめ度い 興亜院松村文化部長談
10. 5 日華思想と孔子 教への反省 (上) 豊島繩鋸
10. 5 大陸に拡まる日本語 国威の力強さをヒシヒシ感ず 第二世の教育を真剣に
10. 5 元寇六百六十年 龜山天皇報恩御法要 十一日より天龍寺で厳修
10. 5 華北の名刹 隆興寺の復興 王揖唐氏が委員長で
10. 5 大派宮島開教使 中支蕪湖で病没
10. 5 日本僧の講習 北京の日本人と中国僧に 興亜の精神を理解させる
10. 7 日華思想と孔子 教への反省 (下) 豊島繩鋸
10. 7 蒙疆神社御鎮座祭 厳肅に行はせらる
10. 7 中国における初の企 第一次華北宗教年鑑編纂 武田調査官苦心の労作成る
10. 8 印度志士への再認識 藤田義亮
10. 8 日、仏印の文化提携 日仏会館長ロングレ氏談
アンコール仏跡の 分割には不満
ハノイに日仏協会と会館
10. 8 “天眼”その他抹殺 高台教の総本山 壊滅 仏印当局が弾圧
10. 8 五台山に興亜の礎石を建設 東亜仏教徒の協力で実現を
10. 9 喇嘛教研究一端(1) 新教黄帽派喇嘛教本山 吐黙特左旗瑞應寺記 加藤清
10. 9 支那の先天道会(上) その顔役の武術大会を見る 古屋登代子
10. 9 興亜の宗教議す 翼賛会の第二回懇談
10. 9 先づ大陸在住の邦人鍊成 講究所華北総署道場開く
10. 10 喇嘛教研究一端(2) 新教黄帽派喇嘛教本山 吐黙特左旗瑞應寺記 加藤清
10. 10 支那の先天道会(中) その顔役の武術大会を見る 古屋登代子
10. 10 感謝報恩の心を以て 日本仏教徒は登山せよ 聖地五台山に華僧と住む 東本願寺菊池開教使談 大陸の話題
10. 10 皇国に生れた 有難さを思ふ 張家口岡田氏談
10. 10 進出を期待 山羊秀雄氏談
10. 10 興亜の先哲 佐藤信淵先生祀る “信淵神社”を創建
10. 10 日華仏教交渉史上に 北支から興味ある発見 西本願寺留学生小川貫弍氏の功績
10. 10 総領事を委員長に 濟南講演観音堂十八日の開眼供養に 大森浅草寺貫首渡支
10. 10 日華融合に孔子の教 “日本の孔子廟”を上梓 中国の知識階級大陸へ贈る
10. 10 共榮圏民族に我が 真義を諒得せしむ 天台宗の開教事業
10. 11 喇嘛教研究一端(3) 新教黄帽派喇嘛教本山 吐黙特左旗瑞應寺記 加藤清
10. 11 支那の先天道会(下) その顔役の武術大会を見る 古屋登代子
10. 11 敵性史物語る シンガポール西本願寺の 清水祐博氏帰る
10. 11 共榮圏宗教者団体の 連絡機関を設置 宗教国策等を協議 きのふ有力同志の懇話会
10. 11 現地活動の統一 問題等を中心に 興亜宗教工作の具体策 東亜局の官民協議会
10. 11 旅順の古墳発掘 支那大陸と関東州の文化交流の跡を見る
10. 12 喇嘛教研究一端(4) 新教黄帽派喇嘛教本山 吐黙特左旗瑞應寺記 加藤清
10. 12 大陸の断想 后土龍神 一大陸の死生観— 南支派遣 菟田中尉
10. 12 興亜・鉄石の決意を声明 三国主要都市で一斉に国民大会 日滿華共同宣言一周年
10. 12 編み直す世界史 大日本興亜同盟が
10. 12 台湾の寺廟 廃止と仏教
10. 12 方向別放逐を廃止 国際関係の微妙性に鑑み 海外放送編成その他改革
10. 12 滿人布教や 建国記念事業 全滿洲開教使会議
10. 14 興亜工作と 宗教活動
10. 14 喇嘛教研究一端(5) 新教黄帽派喇嘛教本山 吐黙特左旗瑞應寺記 加藤清
10. 14 眼のあたり 偲ぶ元寇 龜山天皇報恩御法要
10. 14 仏教同願会の 運営は僧が中心 夏運居居士理事長退く 会員大会決定す
10. 14 再び広東にて 笈潮風
10. 14 滿蒙開拓の 幹部訓練 山崎昭見
10. 14 “お互に悪口はやめませう” 民族協和に努む 松平俊子女史を中心に 大和報国婦人部を創設
10. 15 喇嘛教研究一端(6) 新教黄帽派喇嘛教本山 吐黙特左旗瑞應寺記 加藤清
10. 15 帰国する楮大使へ 深甚なる謝意 仏教会お別れの茶会
10. 15 基教青年会 南京診療所 具体準備進

- | | |
|---|---|
| <p>む</p> <p>1941. 10. 15 宗教国策の樹立で 建設的計画に期待
山岡、大谷、桜井の諸氏が中心で
共栄園の諸宗教団体動員 宗教懇和会
10. 16 開拓義勇軍へ レコード慰問 費用捻
出の 古盤回収進む
10. 16 時局の要請に適應する 宗教活動の方
策を討議 興亜宗教懇談会の成果
10. 16 興亜宗教活動に挺身 翼賛会内に促進
委員会本部設置 神仏基の申合せ
10. 16 亜細亜の各宗団と協力 興亜宗教会議
の実現期す
10. 17 仏教徒を見直さず 開拓団幹部に好反
響 三派の僧道修練道場閉づ
10. 17 日華文化提携の一翼に 両国合弁、初
の中学誕生す 高田儀光氏の努力実を
結ぶ
10. 17 “海を渡る” 禱修鍊 大政翼賛会で計
画
10. 17 半島同胞の 善導を要望 東亜建設と
一泡的気分
10. 17 北京を中心に神祇精神の昂揚 着々軌
道に乗る
10. 21 シンガポールを語る “日本語” の必
要を 痛感した敵性国英兵 清水祐博
氏の帰朝報告
10. 21 日・仏印交換教授決る カ教の田中耕
太郎博士と 東洋文化史のブーデ博士
旧殻を脱して 建設工作へ進出 在華
日本宗教界の新分野 仏教講習会の成
果
10. 21 泰國史刊行
10. 21 聖業達成に邁進 東条首相の第一声
10. 21 楽土華北の家族会議 廿日に開会、期
待される 新民会全体連合協議会
10. 22 新京護國榮 若寺を訪ふ 信楽真純
10. 22 全島要塞化 シンガポール 華僑も英
国人も “日本の東洋” を確認 滯洛
中の清水祐博氏談
10. 22 帰国する褚大使の 偉大な功績讃ふ
仏教徒の惜別茶会和か
10. 22 慶尚北道内鮮 仏連報国会
10. 22 杭州日華仏 教綜合学苑 大学認可さ
る
10. 22 日華仏研訪華団員決る 十一月十三日
に出発
10. 23 敵中突破の慰問行 最前線へも乗込む
腕章見て華人も歓呼 岐阜県仏教会
慰問隊帰る
10. 23 廿一年間の教壇生活から 大陸に飛躍
する女性 =揚州西本願寺に向ふ 鈴
木峰子さんの転身=
10. 23 北京短信 北京民会議案討議 新民会
「全連」の日程 日華語学の発表
10. 23 キリスト教学校を開放して 中華留学
生を招く議 日本キリスト教会に提起</p> | <p>さる</p> <p>10. 24 杉山元治郎氏視察談 海南島は有望な
宝庫 曠野千里のカンボチャ 大企業
の農業に最適地
10. 24 南方仏教青年会 近く京都でも結成
各大学、高専に呼びかく
10. 24 北京神社へ 御初穂奉納
10. 25 邦人も増加 非常な発展 認められた
東西本願寺 金森開教使の報告 海南
島の現情を語る
10. 25 日満支の権威者集ひ 龍大で開く全国
漢学大会
10. 26 “海外仏教事情” 蘭印特輯号
10. 26 台湾仏教奉公団に 各宗派熨斗園を要
望 連合として先例無き成功 深奥奉
公団理事長語る
10. 26 興亜宗教運動の具体策 第一回促進委
員会開く 翼賛会で基本方針立案
10. 27 台南州の新豊郡が お東に全部帰依
葬儀官營の新例も開く
10. 28 中井玄道氏送別会
10. 28 盤谷抗日華僑の巢窟で 日本僧侶の親
善 一切を抛つて挺身報國
10. 28 蒙疆厚和に 曹洞宗開教
10. 28 仏教興亜会 評議員会
10. 28 ベン光る 日本仏教徒 目下の使命
10. 29 日本の手を待つ ジャバ人の信仰
10. 30 広東離別 覓潮風
10. 30 働き忘れた中国婦人へ 勤勞の習慣植
ゑつける 天理教の農耕事業に期待
大陸伝道の基地設置
10. 30 大陸に惟神道頭揚 北京報國寺跡に鍊
成道場 来る五日開場式挙ぐ
10. 30 精神文化耕作の重要課題に 仏教の働
きかけを期待 南方華僑の信仰と仏教
工作語る
10. 30 仏教同願会の 大乘仏教弘化院開く
中堅僧百名、興亜事情も教ふ
10. 30 仏教同願会 大会日程決る
10. 30 東亜新秩序の 建設理念の了解へ 華
北の中堅道士再教育
10. 30 中国最初の 仏教大学 杭州から詳報
10. 30 満華両国人に 開教 華文日本仏教
お東で刊行
10. 30 内鮮一体の強化 先づ生活の改善から
強制でなく理解を
10. 31 今は生きた人間基督が 實際に死し証
立てる秋 ノモパンに散った神学生の
遺稿
10. 31 清正神社の創建 半島人の熱心な奉仕
10. 31 嚴重な取締と適当な指導で “生ける
防共の長城” に 北支の類似宗教団体
や 秘密結社の実態を調査
10. 31 高大の上田教授 タイ・仏印に留学
11. 1 内に外に奏つ、天理教の躍進譜 日支
両国汗の親善提携 十ヶ年完成・拓農</p> |
|---|---|

- 道場開設
1941. 11. 1 北支の神社制度確立 講究所華北総署の私案 政府に建議実現を
11. 1 満洲にも神祇 会支部を創設
11. 1 北支支の調査 大谷照乗連枝 高橋氏と渡支
11. 1 大派臨汾布教 所開設功勞者 藤本開教使帰る
11. 2 本島人の生活に飛込み 開教の尊い試験台 大派から第一回挺身隊出発 台湾仏教奉公団
11. 2 共栄圏確立に宗教の協力 興亜的機能の結集構想 第一回特別委員会で基本方針討議
11. 2 対支宗教工作で 興亜院 各教宗派代表と懇談
11. 5 北京より 信楽真純
11. 5 興亜運動の昂揚 日満華三国提盟記念日に 種々の計画進む
11. 5 新京市外の 西本願寺村 土地が決定 開拓村に 真宗寺院
11. 5 新興亜文化へ発足 けふ、「真宗同学会」生る きふ創立総会
11. 5 北支華字紙 記者団一行 けふお東へ
11. 5 官民權威者で最高機関を 日本宗教の興亜的使命指導 共栄圏内の宗教連盟結成か
11. 5 内地の神学生 と 朝鮮の神学生
11. 6 太平洋沿岸諸国の 留学生たちは叫ぶ！ 国際色豊かな座談会 お西の催
11. 6 基教大陸事業の 統一監督者を新設 阿部義宗氏が駐在
11. 7 南方仏教の 特別講座
11. 7 支那歴代絵画 古美術品展観 有鄰館特別展
11. 7 満蒙幹部訓練所で 日宗修練道場開く 臨戦体制強化の爲め 宗侶卅余名を選抜
11. 7 天津西別院の 入仏慶讃法要 大谷連枝迎へ
11. 8 愈よ防共宗教大会開催 各地宗団の特色活かす講演会や 宗教家の防共情報室設く
11. 8 伸びゆく民族の課題 在外子弟の教育を改善
11. 8 興亜精神鼓吹に “アジアの力” 発表
11. 8 将来の観音像奉安 名古屋に日華寺建立 篤志助成の遺志実を結ぶ
11. 8 共栄圏の確立に一役 支那省別全誌とビルマ誌編む
11. 8 宗教の興亜的使命遂行に 興亜宗教同盟 仮称 の結成 翼賛会の促進委員会で企画
11. 8 故小栗栖香頂の偉業蘇る 真宗を中国僧に弘通 慥ふ維新当時の対支開教
11. 8 南京に別院を お西の地元 門信徒運動
11. 9 共匪の暴戾、信仰を奪ふ 黎城の仏教信徒ら反撃 皇軍に救助求め避難
11. 9 “まごころ”で 中国農民を指導 天理拓農道場 語る・諸井華北伝道庁長
11. 11 仏教は 政治の内容となり 澆刺、興亜運動に進め 課題=東亜仏教徒提携の方法 日本仏教学大会座談会
11. 11 世界紅卍字会の 非常時活動聴く けふ、大阪神道各派青年会
11. 11 大同石仏を紹介 各地で展覧会開く
11. 11 興亜宗教活動の中核体 “興亜宗教同盟”組織案成る 陣容整備を待って結成式
11. 11 大東亜共栄圏確立に 宗教的協力の対策樹立 明春三月興亜宗教大会開く
11. 11 北京勤政殿に開く 同願会会員大会 綱領や宣言等決定 各地から続々集る 日本側顧問 十三日渡支
11. 11 黄葉興亜局 中国側招く
11. 12 大陸の父 旺んなこの意気！ 入浴の川島浪速翁と語る（上）
11. 12 興亜宗教戦士は認可制 興亜院が神仏基三教合併の 宗教教師要請機関を開設
11. 12 中支宗教大同連盟 多菊神道部長迎へ再検討 近く宗教連盟会議
11. 12 共栄圏各国に 仏青大会のメッセージ 中国とは写経の交換
11. 12 ラマ教研究座談会 高度方針と実際指導へ 真言宗研究所開設記念
11. 12 中国仏徒に講ず 宗団法と十七条憲法 日華仏研の講座
11. 13 大陸、南方文化工作等 重点主義の更生予算 追加、緊急合せ卅一万円 大谷派臨宗へ提出 けふ招集
11. 14 漢訳対照梵和辞典 興亜院の助成で第三巻贈る 東亜民族共同文化財の研究に貢献
11. 14 共栄圏確立と仏教 巴利語の使命重要 大辞典の編纂計画
11. 14 大陸に捧げ切った慈愛 語る・満洲建国の秘話 大陸の父、川島浪速翁（下）
11. 14 支那仮名の復興 弘法大師像南京に 褚新任外交部長談
11. 14 満蒙学徒最高の好み 万葉の歌人・山上憶良 日満一億一心と文化流入問題に示唆 宇野西本願寺満洲開教総長談
11. 14 仏教会結成誓ふ 日華僧侶の懇談会
11. 14 唐宋美術文化の 粹を蒐めた五朝絵画 けふから開く名画展覧
11. 15 北京育嬰堂訪問記 一音に聞く捨て子の家— 古屋登代子
11. 15 “亜細亞民族の永生の爲” 日本人の一大使命
11. 16 支那家屋の中に 放つ、茅茸の異彩

- “みそぎ”大陸に進出 道場開きは明
春一月
1941. 11. 16 興亜宗教活動の促進で 廿二日、官民
協議会開く 中核体の構想も正式に決
る
11. 16 民族協和へ 三本建て布教強化 満洲
建国十周年記念に 西本願寺の計画
11. 18 世界紅卍字会 の事務所移転
11. 21 商工業者の大陸帰農に 先鞭つけた本
門仏立講 満洲移民協会丸ノ内参事談
11. 22 日印支三国仏教の上に 更に英語仏教
の創立 北米とハワイとの話を聴く
11. 23 国旗が緑となって 半島青年、志願兵
に合格 社寺に旗贈る真木氏との佳話
11. 25 北満の果から 緊急下の報恩詣で 大
派満洲開教団代表入洛 北満の話題
ソ万国境で埋骨の覚悟 牧村開教使
11. 25 新留学生を 満支に派遣
11. 26 興亜宗教活動で 官民協力の懇談会
あす翼賛会で開催
11. 27 日満華学生 交歓大会 京都で開く
11. 27 防共宗教会議 ラマ僧も参加
11. 27 大派満洲開拓布 教者訓練所設置
11. 27 基督教の 中支伝道
11. 27 派遣布教使 の費用問題 倉富了矣
11. 28 華道も力学的に 日本芸術を科学する
張玄彦教授の研究
11. 28 ラマ僧にも度牒 少年は国民学校に強
制入学 橋爪義隆氏の報告
11. 28 日支親善に 仏書の輸送 郵便局の注
意
11. 28 信仰的に力強い安心を 在留華僑の為
考慮せよ
11. 28 興亜国民大会 日満華三国条約 締結
一周年記念
11. 28 東洋の悲劇 南塚昭純
11. 29 内蒙で開教の日を待つ 敵性国ABC
D線内の 南進日本仏教の被害は？
11. 28 来春元旦に 全島の宣誓式 カナカ族
が禁酒同盟参加
11. 29 今後のラマ僧招致に 新たな展開を計画
現地報告を得て 浄宗本山宗務の協
力量む
11. 29 東洋文化研究所 文部省が東大に設置
11. 29 興亜宗教活動の 官民懇談会延期
11. 29 蔵梵対照翻訳名義集 西蔵語索引 大
谷大学西尾教授編
11. 29 鮮満の旅から
11. 30 一日一題 台湾やつで
11. 30 鉄環の防共対策 三議題に建設的意見
開陳 防共宗教会議開く
11. 30 まごころの交換 中国の留学生両嬢が
果す 日華親善スクスク伸びる
11. 30 北京寸感
12. 2 総意を政府盟邦に伝達 滅共の常置委
員を設置 防共宗教会議
12. 2 国際文化団体の 理念と活動を統一
新体制期成同盟の発会
12. 2 徐州東本願寺に 英霊奉安殿竣工 一
万居留民の待望成る
12. 2 大陸教化部 陣容成る 生長の家
12. 2 ニコライ堂の 露語学院開設 各方面
の期待
12. 2 授荷新ルート西蔵語る 国際仏教協会
の座談会
12. 2 東亜の民心うるため “信”の一年を
貫くべし 日満華三国締盟一周年記念
国民大会で 本庄大将、興亜の理念説
く
12. 2 日満華三国締盟一周年 大阪国民大会
12. 3 蒋介石の非を説得する 一人の基督教
徒挺身者なきか 宗教教師養成に国家
試験を
12. 3 興亜宗教会議 開催控へ 連絡員を派
遣 共栄圏各国の決起促す
12. 3 全内地仏教の 連絡機関生れん 同願
会の会合を機に
12. 3 興亜宗教資料 翼賛会が蒐集
12. 4 東亜諸民族協和に 大和報国会婦人部
発足
12. 5 満洲国皇帝陛下から 建国功労章下賜
東本願寺藤永氏の光栄
12. 5 中国最初の 児童図書館生る 教界人
の支援を熱望
12. 5 台湾新竹市の 竹寿寺落慶式
12. 5 断乎黨進の一途あるのみ 南方問題の
解決こそ 絶対的、歴史的に要請だ
12. 5 明春五月、新京で開く 日満華三国仏
教協議大会 宗教による民族協和の実
を
12. 5 大菩提会大会へ 代表の渡印不能 論
文とメッセージ送る
12. 6 内蒙の王侯ら入洛
12. 9 中国人の見た蒙古の ラマ教及び基督
教(1) 大正大学講師 金山真瓜
12. 9 宮城前に誓捧ぐ 大和報国会婦人部
発足大会の盛況
満洲国大使も祝辞
12. 9 外務省の外郭団体として 太平洋出版
協会組織 国策国情を海外に識らす
12. 9 敦煌石室秘笈中の 歯と那羅正体の文
有鄰館に納る数々
12. 9 仏印への派遣教授中止 田中博士は断
はらる
12. 9 日華仏教の交歓
12. 9 点綴 イラク国の宗教
12. 9 大同石仏の 供養
12. 9 宣戦の詔勅下る 英米両国を断乎膺懲
対米英宣戦の大詔発布さる
12. 10 グラム島を脱んで起つ 南洋同胞の緊
張ぶり 酒、煙草も断ち国債消化へ
ポナベ東本願寺 大聖寺氏談

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1941. 12. 10 満洲の大陸は 宗教的戦士を要求 栗原宗務股長ら語る
12. 11 中国人の見た蒙古の ラマ教及び基督教(2) 大正大学講師 金山真瓜
12. 11 在阪華僑の 精神的中心に 紅卍字会道院寄修所設く
12. 12 中国人の見た蒙古の ラマ教及び基督教(3) 大正大学講師 金山真瓜
12. 12 あきれた米国土官 ミンタル女学院は 邦人検挙直前迄開校 ダバオ旭氏談
12. 12 興亜の暁鐘は鳴る 徳富蘇峰翁の大獅子吼
12. 12 決戦体制即応施設で 大派開教監督会議 三日間に亘り開催
12. 13 中国人の見た蒙古の ラマ教及び基督教(4) 大正大学講師 金山真瓜
12. 13 軍が破格待遇 大派蕪湖布教所 故宮島開教使に
12. 13 興亜宗教会議 既定方針で準備進む 会期は明春四月中旬
12. 14 支那事変をも含めて “大東亜戦争” と呼称
12. 14 この耳で聴いた！ 上海のあの一発 日華完全融和の理想郷等 感激を語る・大谷照乘氏
12. 14 モリ上る済南 の邦人の力 園田顕正氏談
12. 14 大派の南方 開教陣緊張
12. 16 東亜共栄圏の範囲？
12. 17 “極東”の語辞 今後は抹殺
12. 17 敬神崇祖の念こそ 東亜民族興隆の底力 皇軍大捷を祈念する 満洲国張大臣一家
12. 17 民国政府の要人も学者も総参加 杭州の仏教大学愈々開校 西谷順誓氏の帰来報告談
12. 17 断末魔の重慶側 上海では懸賞テロ 開戦で全面的に一掃
12. 17 在留同胞の感激 支那仏教徒と歓談 大派上野議長帰来談
12. 17 “日本の密教” 大陸文化工作に 真言宗が刊行
12. 18 生々しい現地報告に 在外同胞を激励 海外発展促進大会
12. 18 宣戦大詔渙発と共に 昂る・半島人の敬神観念 時局下内鮮一体を如実具現
12. 18 大派満拓訓練所生 涙ぐましい敢闘 骨折まで働きぬく
12. 19 敵前統下の 皇軍尊き姿 現地より宗教書の申込み
12. 19 満洲基督教開拓村の現況 宗教信念と医療を痛感 エルムの鐘響く興亜の炬火
12. 19 大東亜戦争 民族の黄白闘争だ 神意具現の国民的観と 中心帰一の全一主義宣布 中島將軍談
12. 19 三上諦聴氏 北京師大の 講師に抜擢
12. 19 大東亜共栄圏内の 青年は何を為すべきか 満洲国の青年自覚運動 東亜の全青年に呼びかく
12. 20 半島の国民総力運動 惟神道中心に展開 稔錬成採り上げらる 朝鮮神宮が教典編纂
12. 20 我等学生は 勅命のままに筆を投じ 征衣まとひて決戦聖戦へ 出征学生激励の留魂大会
12. 20 満蒙開拓士の 仏立三隊座談
12. 20 北支日本仏連の 石門支部を結成 興亜隊の仏教工作に応ふ
12. 20 日華仏研の 視察報告会
12. 20 開教地に最初の 宗教の贈講演 朝鮮西別院で成功
12. 20 香港の陥落を前に 『西遊日記』に偲ぶ 閑不徹
12. 21 中国に於る宗教 団体の取扱 中支宗教連盟発表
12. 23 共栄圏に於る 宗教工作考
12. 23 興亜青年Xマス 共栄圏の青年懇談 比島・ビルマ学生も既に新しい息吹き
12. 23 大東亜戦争に即応 汎太平洋開教協議会
12. 23 共栄圏諸民族に対し 仁愛と道義精神 忘るな 我が弱点を挙げて曾ての 恐英米病者痛撃、今後戒む 松井大將談
12. 23 北支仏教界の大物が 名誉会長を受諾 日華仏研支部北京に設置
12. 24 今後の豪州、印度の運命は？ 移民問題の将来を聴く 語る人・浜田海軍中將
12. 24 日泰 “宗教も握手” 国際仏教協会の計画
12. 24 宗教団体の 外地布教再検討 宗教戦士の錬成要請
12. 24 順調に進む 満洲仏立村の建設 来年度予算は百二十四万円
12. 24 新京神社の後 任神職銓衡
12. 25 南洋各地住民に 崇高な皇道精神を 南洋宣撫義勇軍派遣
12. 25 南方研究と人物
12. 25 この日を待ってゐた ダバオ在留邦人 完全占領に旭氏は語る
12. 25 宗門動員法を発動 興亜宗教戦士徴用 浄宗が時局の要請に備ふ
12. 25 泰国ピブン首相 に法主より祝電
12. 27 香港陥落！
12. 27 輝くマニラ赴任の決意 日本の宗教進出に努力 夫人をダバオに残して帰還 木原領事東本願寺で語る
12. 27 大英帝國崩壊の響き “世界地図” 改版に急ぐ 遂に香港百年の幕閉づ
12. 27 香港とお西
12. 27 海外布教再検討に 朝鮮の宗教活動貧困が問題

1941. 12. 27 日泰“仏教の握手” 国際仏協の計画
内容
12. 27 興亜宗教活動促進に “共栄圏仏教読
本” 編纂
12. 27 香港、星波、彼南、 蘭頁の回顧 藤
田義亮
12. 28 力強き日本礼讃 在日印度人の会合
12. 28 興亜宗教活動の根本策樹立に 先づ共
栄圏の宗教調査 総合研究機関の設置
提唱
12. 28 大東亜建設の 日華親善は軌道に乘れ
り 華人曰く“美英倒れたり” 西本
願寺津村北支総長談
1942. 1. 1 甦へるアジアに文化の巨弾を 国際文
化振興会、陣容を新に
1. 1 大東亜戦下 太平洋を繞る 宗教諸問
題議す 西本願寺の協議会
1. 1 我国独特の 武士道精神で 温情のあ
る処置 俘虜情報局設く
1. 1 俘虜の東洋人解放 大東亜戦争の建前
から
1. 3 莫妄想 長崎三菱 浜部寿次
1. 3 戒律主義の 支那仏教 一井元宗
1. 3 南方への進出相次ぐ
その一 仏印調査班派遣 天理教の南
方布教耕作
その二 南方派遣の 希望者統出 知
恩院報国際
その三 日本人の南方伝道 宮平夫妻
が初穂 基教南洋伝道団の計画
1. 3 対南方文教工作 文部省も近く着手
1. 3 南方諸国へ 関心を指示 真言宗戦時
事務局から
1. 6 比島独立運動家 リサール氏と末広鉄
腸氏の挿話
1. 6 高野山から 華北交通沿線へ 青年開
教使飛躍
1. 6 植場拓務次官と 木村香港領事 高規
宇野真慧
1. 7 ビルマの正月は四月 戒律厳しい比丘
生活 南方談叢
1. 7 南方派遣に待機の 五十名を選抜 浄
宗が講習会開催
1. 8 あくまで妨害を排し 大東亜建設天業
完遂 谷情報局総裁力説
1. 8 最名貴端溪硯 菟田中尉
1. 8 急激な文化の注入は 消化不良を来た
す アイヌの前例もある 南方談叢
1. 8 東亜仏教事情講座 仏教専門学校に開
設
1. 9 内地より 住みよい南洋 富士山連続
するジャバ 絶対温順の島民 南方談
叢
1. 9 宗教真髓 莫妄想 長崎三菱 浜部寿
次
1. 9 マニラ陥落を 豊太閤に奉告 呂宋へ
来貢勸告書 けふ、大阪で盛大に挙行
1. 10 日華提携の楔
1. 10 莫妄想 長崎三菱 浜部寿次
1. 10 阿修羅と帝釈天の戦ひ 教典に表れた
予言・大東亜戦争 南方談叢
1. 10 時局の要請に即応し 強力な興亜宗教
活動展開 興亜宗教同盟結成最後の仕
上げ
1. 10 大東亜文化の 新建設に邁進 日本仏
教総連会の 今後の事業その他決定
1. 10 南方華僑事 情座談会 横浜東別院で
1. 10 仏印資源調査 に三氏を派遣
1. 10 戒律主義の 支那仏教(二) 中支蘇
州 一井元宗
1. 11 河に捨てた梵鐘 地図もない海南島に
すでに米国の文化侵略 南方談叢
1. 11 台湾の工業化図る 南方基地としての
重要使命増大せん
1. 11 創設の痛快談 シンガポール西本願寺
桑野氏再び南方へ
1. 11 天理教ひのきしん隊 南方に進出の計
画進む
1. 11 満洲国新聞 新体制実施
1. 11 語学報国に拍車 マレー語講習会 大
派大阪円勝寺で
1. 11 興亜宗教活動の具体策 関係管長へ翼
賛会から上達 近く懇談会開催の形式
で
興亜宗教同盟 愈よ近く正式発会
1. 13 泰国と比島 谷本梨庵
1. 13 古代に於る日本と 大陸との関係示す
古文献諸方面に現る
1. 13 古来の宗教音楽通じ 共栄圏民族の親
和を 神道界の有志が首相に建白
1. 13 パラオ寺中心に 南方への計画進む
西山派報国会理事会
1. 13 古い習慣に生く 南洋回教徒の群 和
蘭も順応政策を採る 南方談叢
1. 13 美妙齋
1. 13 比島人に 宗教侵略
1. 14 鉄条網の下を潜り 光暢法主在留同胞
慰問 日本へ寄する親愛と尊敬 セレ
ベス島メナドの想出
1. 14 ジャバは世界の楽土 京都の土用より
爽快 華僑の統御が文化工作の重点
南方談叢
1. 14 南方共栄圏の 仏教事情聴く
1. 14 南方進出希望の 憂国の僧求む 西本
願寺興亜部で
1. 15 戒律主義の 支那仏教(三) 中支蘇
州 一井元宗
1. 15 医薬の施行で満人間に感謝 満洲大同
仏教会
1. 15 曇鸞大師千四百年の法要を 全支那の
大祭運動に 北支の玄中寺復興計画
1. 15 メナドのバスに ミス・ニッポン!

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- トモホンに唯一の邦人
1942. 1. 15 開拓村の戦士 に文化の糧
1. 15 満系回教徒ら 二千余円献金
1. 15 満洲協和会の 決戦国民大会 来月八、九両日
1. 15 南方宗教政策 真言宗で相談会
1. 15 印度青年が挺身隊結成 本格的な反英武力戦へ ダース氏らの一党活躍 各地で自主的実働展開
サハイ氏も呼応
1. 15 北支石門の中国側 宗教団体起つ 剿共滅蔣米英打倒へ
1. 15 日本精神錬成道場開設 石門の日本各宗僧侶
1. 15 事業を拡張 増資を計画 南方関係諸会社
1. 15 書評 沢村幸夫著 支那民間の神々
1. 16 戒律主義の 支那仏教 中支蘇州 一井宗元
1. 16 南方共栄の 指導者養成
1. 16 朔風吹く蒙古に 旧小学校教材送る 廃棄処分の教科書の更生に 知恩院訓育部の計画
1. 16 中国社会事業の再出発 欧米依存の風潮を払拭 北京連合義賑会に期待
1. 16 大いに祈れ、働け ビルマ仏教徒よ立上れ 日本仏教徒との握手を 南方談叢
1. 16 北京市各界連合 義賑会を結成 会長に鄭泉孫氏就任
1. 16 開教使達の 留守を慰む 西本願寺で開催
1. 16 比島基督教徒に告ぐ 皇軍は宗教を擁護する
1. 17 戒律主義の 支那仏教 中支蘇州 一井宗元
1. 17 大東亜諸民族に 神道精神説く 大社教大阪分院中心に 海外人補導部設立
1. 17 日本人の血を誇る 日本の定紋打った門 ビルマの奥地ケントン 南方談叢
1. 17 芸術で日泰親善 皇国芸術連盟の計画
1. 17 宗教の興亜活動強化 廿日頃翼賛会が政府と懇談
結成準備委員長に 林銑十郎大将を 今明日中に陣容整備 興亜宗教同盟 今月末結成
1. 17 天理外語に 安南語部
1. 17 書評 印度仏教の話
1. 18 戒律主義の 支那仏教 中支蘇州 一井宗元
1. 18 太平洋文化の創造 人類家族主義の理想実現 日本基督教の使命(上) 大東亜戦と 宗教の持場
1. 18 日本第五列の黒表に 挙げられ特別収容 ヒリッピン西本願寺の 三開教使の無事判明
1. 18 英仏租界の中国僧参加 上海租界仏教結成に成功 きのふ英租界王仏寺で会合
1. 18 中国仏教会復活へ 褚民誼氏の要望で 藤井静宣氏らが準備
1. 18 大陸の神祇昂揚 先づ神社制度の確立期し 華北総署で近く委員会結成
大陸民衆の 生活の神道化 思想対策委員会も結成
1. 18 勘定さん達も 南方進出説く お西の勘定会
1. 18 華人に大東亜 戦の意義徹底 天理華北伝道庁 華文小冊子配布
1. 20 南洋戦線を 偲ぶ旅の宿
1. 20 国際文化体制の急転換 共栄圏文化建設の線にそひ 各種国際親善団体を整理
1. 20 親日牧師の俘虜 志願して日本に来る
1. 20 印度解放問題で 教界の有志ら懇談 促進同志会結成か
1. 20 皇道家族主義は 基督教の人類家族主義 日本基督教の使命(下) 大東亜戦と 宗教の持場
1. 20 ○○部隊長 宗教工作 マニラのカ教 協力を表明
1. 20 大陸開教活動の強化へ 神仏基共同の人材養成に『対支布教師錬成会』を設立
興亜院の指導で 大陸開教宗教戦士養成
1. 20 最近の半島同胞の動き 愈よ昂る愛国熱 時局の深刻化と共に 更に敬愛し親切に輔導を
1. 20 新京神社後 任神職決る 宮司異動発令
1. 21 支那印象記 中井玄道
1. 21 全仏教に先じて南進『南方仏教学会』を設立 大東亜共栄圏確立の礎石
1. 21 模倣時代の形式を 蟬脱放棄が急務 基督教革新の最好機 大東亜戦と 宗教の持場
1. 21 信徒や教へ子の父兄 八名が不慮の最後 大派旭ダバオ主任痛憤談
1. 21 日比親善に協力 比島カ教団の申出
1. 21 印度独立日 在京阪印度人 二十六日開催
1. 21 現代西蔵語 一ヶ年講習
1. 21 興亜宗教会議 四月末開催の準備進む
1. 21 興亜宗教活動全面的に強化 近く現地関係代表招集 帝都で連絡協議会開く
1. 21 バトバッハ 皇軍進駐とお西の計画
1. 22 支那印象記 中井玄道
1. 22 既成宗派根性を捨て 日本精神持ち込め 民族の夢と宗教の役割 大東亜戦と 宗教の持場
1. 22 大東亜広域を宗教で結ぶ

- 興亜宗教同盟輝く発足 大政翼賛会
東亜局の計画
国民の質疑に応ふ、『大東亜事情相
談室』開設
1942. 1. 22 天津の米英 打倒大会 回教徒叫ぶ
1. 22 東京に世界総本部 大陸の精神文化工
作に 紅卍字会が設立運動
1. 22 翼同の南方経 営政策委員会
1. 22 南方共栄圏を語る ベン光る座談会
1. 23 対支布教師練 成会の設立
1. 23 西南洋の今昔 上原芳太郎
1. 23 支那印象記 中井玄道
1. 23 宗教家自身先づ 使命を自覚せよ 一
版の考へだけでは不満 大東亜戦と
宗教の持場
1. 23 ジョホール王宮
1. 23 独立実現へ 対日絶対協力 上海印度
人の決議 ダース氏と呼応・力強く実
働
1. 23 宗教も敵性勢力一掃 満洲基督教出直
す
1. 23 大東亜戦争に即応の 教育全般に就い
て考慮 南方住民の宗教、風習を尊重
共栄圏建設事業に協力させる 東条
首相答弁
1. 23 国字の整理進む “語字表記法” 決定
左書きか右書きも検討
1. 23 汕頭の朗景 森賢成氏談
1. 23 南方進出懇談 舟田六郎氏 天理教訪
問
1. 24 支那印象記 中井玄道
1. 24 仏教圏の思想的関連 わが国仏教の反
省 新戒律問題の台頭 大東亜戦と
宗教の持場
1. 24 南方共栄圏語る ベン光る座談会 来
会歓迎
1. 24 挺身隊の動員計画決る 知恩院報国挺
身隊
1. 24 南方神社問題や 人材の養成など 神
祇界の興亜活動強化策
1. 25 支那印象記 中井玄道
1. 25 ビルマ独立運動の鍵 “仏教徒の働き
に拠る外なし”
1. 25 形に表はれざる 惟神の道によって
各民族の宗教を指導せよ 大東亜戦と
宗教の持場
1. 25 南方仏教学会 三十一日に創立会
1. 25 五台山は 西藏蔵経の 宝庫的存在
我國に招来されぬ貴重本
1. 25 共栄圏の神祇宣揚で 東亞民族文化協
会から 翼賛会東亜局へ建言
1. 25 “転職”を聴く 踵に触れて鳴る大地
の声 屑鉄氏を訪ふ
1. 27 支那印象記 中井玄道
1. 27 日華親善の楔 南京の興亜観音 北京
では参禅熱熾ん 曹洞の森教学部長婦
来談
1. 27 挺身花と散った ダヴァオの両校長
生徒と共に勤行の本重氏
1. 27 大陸や南方の 宗教進出拠点に 山内
園子夫人が土地建物寄贈
1. 27 南方経営の 心理学的使命 一共栄圏
工作の基体として一 竹内信常
1. 27 支那印象記 中井玄道
1. 27 “アジア人のアジア” 建設轟ふ、民
族の祭典 大阪の全亜細亞民族大会
1. 27 興味津津の南洋 本社ベン光る座談会
1. 27 北京覚生学監へ 宝塚の先生 安藤氏
を任命
1. 28 由緒ある関係寺院で その顕彰を懇懇
せよ 真如法親王御事跡回顧 (上)
新村博士談
1. 28 強力な統制機関設け 重点的に対外文
化工作を 大東亜戦現地工作に国際文
化団体の 活用で議会分科会に意見書
大政翼賛会
1. 28 比島へ 親善使節 田口天主教司教の
活躍
1. 28 満洲建国十周年迎へ 新京で神社関係
大会 関東局、神祇会で計画進む
1. 28 ベン光る 仔慮の教化
1. 28 神戸印度人の集ひ 印度独立宣言記念
日
1. 28 大東亜国策に応じて 南方仏青事業拡
大 伝道会社の結成計画
1. 28 アジアの解放は 文化的解放の成就で
徹底 ボース氏強調す
1. 28 話題は重点に(2) 日本人と南方発
展策 本社ベン光る座談会
1. 29 南方経営の 心理学的使命 一共栄圏
工作の基体として一 竹内信常
1. 29 支那印象記 中井玄道
1. 29 由緒ある関係寺院で その顕彰を懇懇
せよ 真如法親王御事跡回顧 (下)
新村博士談
1. 29 真如法親王御追慕の法要 高野ではシ
ンガポール陥落の日に その他御由緒
寺院で謹修
1. 29 蒙古軍の忠霊廟 ラマ寺五塔寺を指定
靖国神社になぞらふ諸施設
1. 29 南洋文化政策論 産業、文化は並行し
て 南方共栄圏を語る ベン光る座談
会(3)
1. 30 南方経営の 心理学的使命 一共栄圏
工作の基体として一 竹内信常
1. 30 支那印象記 中井玄道
1. 30 真如法親王御事跡顕彰 真言宗が関係
者集めて協議 広く仏教界内外に呼び
かく
1. 30 蒙疆各地の 神社に供御する 神嘗祭
の献穀を斉耕 大陸にも斉田新設
1. 30 “良き強き妻”となり 蒙古回教婦人

1942. 1. 30 が協力 厚和イスラム婦女協会結成
大聖仏陀の精神もて 大東亜共栄圏確
立に邁進 ピン首相から「国際仏教」
へ書翰
1. 30 住民の心を 如何につかむか 南方共
栄圏を語る ベン光る座談会(4)
1. 31 南方経営の 心理学的使命 - 共栄圏
工作の基体として - 竹内信常
1. 31 上海市仏教会は 二月中旬発会式 中
国僧代表近く来朝
1. 31 本島人僧侶 初の従軍僧 お西の王兆
麟氏
1. 31 古き殻を捨てよ 先駆者を厚く遇せよ
南方共栄圏を語る ベン光る座談会
(5)
1. 31 共栄圏各地に 日本の大学を 許せば
老骨に鞭ちて立たん 中川立命館総長
談
1. 31 日蓮宗興亜局 陣容整へ新発足 運営
の衝には河田行誠氏
1. 31 南方文化工作 への先駆者 宇野博士
の存在 XYZ
2. 1 理念やスローガンでは駄目だ 中国人
の心を如何に掴むか
2. 1 一瞬に変わる上海の面貌 日本の戦捷映
画に対する 抗日中国人の心理の動き
末包氏談
2. 1 興亜宗教活動の具体策 意見一致し近
く実働へ 各関係官庁係官が協議
2. 1 南方文化工作 への先駆者 宇野博士
の存在 XYZ
2. 3 南方経営の 心理学的使命 - 共栄圏
工作の基体として - 竹内信常
2. 3 支那印象記 中井玄道
2. 3 中国民信仰の本山 五台山へ科学のメ
ス “資源科研”が調査団派遣
2. 3 新嘉坡陥落と共に 戦捷祝賀法要 真
如法親王追思会も
2. 3 南方共栄圏各地へ 惟神大道の顕揚策
講究所が七日緊急理事会を
2. 3 大東亜共栄圏内の 思想対策に万全
大審院の思想陣営強化
2. 3 要保護少年収容の 樺太学園設置を現
現 大派樺太別院内に併設
2. 3 大東亜運営の構想
2. 3 “ことば”の戦ひ 南塚昭純
2. 4 支那印象記 中井玄道
2. 4 巴利仏教民族の民心把握に 文化行動
の炬火点る 南方仏教会学会創設さる
2. 4 人間を喰ふのは信仰 南方原始住民の
特異性 宮武氏談
2. 4 ピン首相へ 日蓮の画像 妙法寺が
贈る
2. 4 印度王族を 迎へて懇談
2. 4 日華官民の心を一つに 中国社会事業
の再出発 北京市各界連合義賑会成る
2. 4 ビルマの仏教 M. T. ニョー
2. 5 真如法親王の奉賛事業 現地に神社と
寺院創建 関係当局に諮って進展せん
2. 5 宗教家に待望 統一した文化政策に
従って挺身せよ 恒藤恭博士談
2. 5 日泰学生交換
2. 5 現地忠霊塔に合祀 ダヴァオ同胞犠牲
者
2. 5 最後の日本船で慰問 タワオの感激と
印象 在留同胞権益死守を叫ぶ 東本
願寺光暢法主語る
2. 5 タイガーには 山内君在住 布教所設
立
2. 5 “流沙”は修辭の常套 マレーの虎害
は著名 真如法親王御事跡補足 新村
博士談
2. 5 新嘉坡陥落せば 宗団戦時中央連絡会
の催
2. 5 興亜宗教活動の具体案決る 十日、関
係者協議会で可決の上 興亜宗教同盟
結成式挙ぐ
2. 5 第二建国の誓ひ “瑞雲十字運動”提
唱 満洲建国精神作興週間
2. 6 大東亜共栄圏確立に協力する 宗教活
動の具体策中心に
各教宗派管長重役協議会
南方宗教事情調査機関設置も附議
2. 6 興亜学科を特設 谷大専門部機構改組
東本願寺で今春四月開校 “宗門士
官学校”
2. 7 熱血純情の青年中心に 示す・海外同
胞の意気と信念 山東祭政会飛躍への
宣言
2. 7 宗教家に待望 大地域指導の 大人物
の要請を 松本文三郎博士談
2. 7 南方へ要員派遣 文化、労務の両工作
に 天理教徒の挺身
2. 7 大東亜を包含する 一大教育使節を
拓土要請機関設置か
2. 7 昔の新嘉坡義勇兵が 共栄圏内で読経
行脚 川上さん得度、再び南方へ
2. 7 南方研究書 翻訳の計画 天理図書館
2. 7 異民族開教 重点に検討 西本願寺初
の開教総長会議
2. 7 中支宗教大同連盟 幹部の任期満了を
控へ 専任各部長の就任要請
2. 7 もっと拓地の 実情を説け 大派木下
氏談
2. 7 大東亜共栄圏内の 文化交流に就て
滝野市太郎
2. 8 共栄圏各民族代表集ひ
亜細亞民族の奉祝大会 紀元の佳節
神戸市で開催
2. 8 回教を聴く
2. 8 優秀な青少年育成に “興亜育英金庫”
の設立 翼同より決議案を提出か

1942. 2. 8 南方習俗と日本 ビッタリ結びついた
両者 柱本瑞俊氏談
2. 8 大陸異民族伝道を聴く 主催 ペン光
る会
2. 8 七十路閑談(上) 古希の天香さんを
訪ふ
2. 10 慈なれば則ち勝つ 大東亜戦争 渡瀬
常吉
2. 10 蒙古ラマ僧と医学 彼我の権威者中心
に 真言宗ラマ教の研究会
2. 10 比島宣撫に決意 国家の徴用を希望
日本聖公会の青年聖職達
2. 10 反乱兵を 一挙鎮圧 新嘉坡義勇兵思
ひ出を語る 川上豊昭氏
2. 10 太平洋民族と我が南方関係 旺んにな
り出した南方民族研究
2. 10 大陸異民族伝道を聴く 主催 ペン光
る会
2. 10 七十路閑談(下) 古希の天香さんを
訪ふ
2. 11 慈なれば則ち勝つ 大東亜戦争 渡瀬
常吉
2. 11 大東亜共栄圏建設と宗教問題 管長、
統理者ら宗団の重鎮が 胸襟開き関係
官庁と協議
2. 11 共栄圏内の聖地巡拝 大谷派宗務総長
の提唱
2. 11 近宗教の指導一元化 南方宗教工作も
対く方針を樹立 文部省宗教当局が言
明
2. 11 南方情勢懇談会
2. 11 中華青年団 けふ結成式
2. 11 真如法親王御遺跡 調査と御偉業の顕
彰 真言宗が帝國議會に請願
2. 11 輝く脚光浴びる 時の人・大谷光瑞氏
南方国策論と実践 広瀬了乘氏に聴
く
2. 11 極寒の北満を征く 本多静應
2. 13 慈なれば則ち勝つ 大東亜戦争 渡瀬
常吉
2. 13 千差万別の個々を活し 日本精神を育
成せよ “新南方開教”を語る 清水
祐博氏
2. 13 四十五年前のシ港 語る・佐々木千重
氏
2. 13 日本人を父の如く 慕ふダイヤ族 日
本仏教進出を念願
2. 13 日満一体、惟神神道宣布 満洲神化会
(仮称)を創立 太夷宮創建の目的拡
充に
2. 13 大陸青年運 動に専念か 京都基督の
末包総主事
2. 13 大谷派の吉田氏 満支皇軍慰問へ
2. 14 仏陀に誓ふ聖戦完遂 星港入城前日期
して 上海日本仏教団大会
2. 14 日本の基督教徒よ 外地伝道に勇敢なれ
天理教からの一言
2. 14 浄宗北京別院 西郊に土地購入 新に
文化施設
2. 14 中支に日華仏連 近く愈よ組織化
2. 14 上海総力報国会 神仏基委員
2. 14 進出邦人、住民に 皇道に帰一の興亜
教育を 大東亜教育体制確立の建議
2. 14 共栄圏の神祇昂揚 翼賛会東亜局で対
策
2. 14 満、支の代表者迎へ 道慈研究院正
式開設 紅十字会後援会の計画
2. 14 玄中寺の復興 漫々乎で行け 三上諦
聴氏談
2. 14 比島の新教徒ら 皇軍と協力宣誓
2. 15 慈なれば則ち勝つ 大東亜戦争 渡瀬
常吉
2. 15 満洲建国神廟暨 軍隊、学校等に頒授
2. 15 共栄圏文化先遣隊と 満華泰仏印の巡
回展
2. 15 南方要員募集 天理教の実動
要員を錬成
2. 15 大東亜戦争こそは アジアのルネッサ
ンス 勝利は東亜民族の上に サテエ
ラ氏叫ぶ
2. 15 蘭印ビルマの 宗教に就て 金谷哲磨
氏談
2. 15 真如法親王の尊霊を 新嘉坡に奉祀の
建議案 衆議院に於て採択さる
2. 15 仏教による精神的融和 共栄圏各地へ
使節派遣 泰國総本山に曼陀羅贈る
法華宗の南方進出
2. 15 新嘉坡陥落 と南方経営
2. 15 共栄圏文化指導に 日本音楽の確立
南方民謡と日本民謡
2. 15 大東亜の正法治国 宮本正尊氏の「不
動心と仏教」に就て 奥田宏雲
2. 17 新嘉坡陥落
2. 17 英国東亜侵略拠点・シンガポール陥つ
皇威燦としてかがやき 米英撃滅の
基礎成る 必勝の誓ひ更に新たに固し
大平大本営陸軍報道部長談
2. 17 慈なれば則ち勝つ 大東亜戦争 渡瀬
常吉
2. 17 回教の本義とその現勢 斯界の権威、
回教圏研究所長 大久保幸次氏に聴く
日本のアジア的反省 歪れている回
教認識
2. 17 海南島民七百年來の鎮護仏 普庵仏の
霊鳥島へ還る大塔を再建してお東へ
日華親善佳話
2. 17 新嘉坡陥落法要と奉告祭
2. 17 満洲の雪原に 芽萌え出る宗教 “和
の開拓村” 芭連村 横山諦観氏語る
2. 17 中国人伝道の苦心 佐藤軍紀氏囲む座
談会
2. 17 大東亜の正法治国 宮本正尊氏の「不

1942. 2. 17 動心と仏教」に就て 奥田宏雲
遂に降せり英の牙城新嘉坡 一億国民
の覚悟・奥村情報局長放送
大御稜威の栄光燦たり アジアのア
ジア復興へ 新に百戦敢闘の決意を
アジアの解放は 断じて英米的な
秩序の再現を許さず
戦いの前途は遼遠
2. 17 大東亜経営に 華僑の対策重視
2. 17 大東亜建設の 中堅指導者錬成 各地
の適格者に南方事情講習
2. 17 恐日病の濠州民 盛んな日本語研究熱
自業自得、脅迫観念
2. 17 皇道大亜細亜 建設に挺身 大八洲会
新綱領
2. 18 日本精神の本体（上）（新嘉坡陥落の
感激に寄せて） 徳重浅吉
2. 18 怒なれば則ち勝つ 大東亜戦争 渡瀬
常吉
2. 18 高岳親王の尊霊を奉祀 南方同胞讃仰
の聖地に 内藤建議委員長の報告内容
2. 18 真如法親王奉賛法要 シ港陥落、真義
一入深し 更に恒久的奉賛事業を
2. 18 回教の本義と現勢 大久保幸次氏に聴
く
南洋問題との関連 甘肅、新疆の教
徒と我国
2. 18 重慶政府の 致命傷 釈宏寛氏談
2. 18 南方宗教活動の対策 関係官庁が連絡
会議開き 文部省近く具体方針定む
2. 18 大派徳英氏 開拓団長に
2. 18 鮮満地方の 学校に視学
2. 18 中国人伝道を語る 支那の変動期に
行き会はせた喜び ベン光る座談会(1)
2. 18 大東亜の正法治国 宮本正尊氏の「不
動心と仏教」に就て 奥田宏雲
2. 19 昭南の深義 復興アジアの大原則
2. 19 昭南島 日本精神の本体（中）（新嘉
坡陥落の感激に寄せて） 徳重浅吉
2. 19 教祖としての本質 メッカ時代十三年
間に 培ひ育てられた 回教の本義と
現勢 大久保幸次氏に聴く
2. 19 轟く東亜十億民族の万歳 きのふ、戦
捷第一次祝賀式
2. 19 頼しい皇民の自覚 大東亜戦争の台湾
本島人に与へた反響
2. 19 大派チチハルに 満人教化道場
2. 19 今こそ宿志貫徹の秋！ 東条声明に在
日印度人蹴起 ボース氏代表に強力運
動起す 印度独立
2. 19 印度語の注釈 スリー・クリシュナ
2. 19 印度人七十六名 指定外国人より除外
2. 19 大東亜共栄圏内の 各種住民開教問題
けふ、お西の開教総長会議
2. 19 素質の向上と 中国民衆の教化 北京
で神道教師講習会
2. 19 中国人伝道を語る（2） 悩んだ布教
権問題 ベン光る座談会
2. 20 昭南島 日本精神の本体（下）（新嘉
坡陥落の感激に寄せて） 徳重浅吉
2. 20 南十字座の下に 陸軍中尉 菟田俊彦
2. 20 イスラムとは 平和と帰依だ 回教の
本義と現勢 大久保幸次氏に聴く
2. 20 日比学生会議 再開の準備進む
2. 20 仏印と文化交流 教授交換に始まり 今
度は図書交換
2. 20 高岳親王奉賛事業強化で 関係代議士
や学界人懇談 真言宗が第一回の催開
く
2. 20 中国人伝道を語る（3） 貧民窟に道
通ず 現協会の基礎となる ベン光る
座談会
2. 21 アラーは人類の為の一神 産まず、生
れず 無始無終の靈格 回教の本義と
現勢 大久保幸次氏に聴く
2. 21 “新旧南洋の实情” 南方圏研究会の
講演
2. 21 光照法主も参加 回教諸問題を審議
西本願寺の総長会議
2. 21 東亜の諸宗教が一丸に 大東亜共栄圏
確立に協力 五月、興亜宗教会議開く
2. 21 愈よ発足する 興亜宗教同盟 三月一
日盛大に結成式挙ぐ
2. 21 大東亜共栄圏 宗教問題調査会設置
浄宗が今日第一回準備会
2. 21 中国人伝道を語る（4） 支那の再認
識 ベン光る座談会
2. 22 昭南島生る
2. 22 大東亜共栄圏内 基督教人の啓蒙に
“クリスチャンクオタリー”再編成
2. 22 “メッカ”への憧れ 全回教徒結束の
楔 回教の本義と現勢 大久保幸次氏
に聴く
2. 22 象牙の塔から時流に投せん 京大に南
方文化研創立
2. 22 東亜仏教徒 の感謝大会 上海日本仏
教団
2. 22 支那寺も校舎提供 上海東本願寺が
日語学校を復活
2. 22 上海神道関係 各小学校児童 童子軍
祝賀行進
2. 22 先づ日本宗教の一元化 大東亜戦の宗
教対策
2. 22 興亜宗盟の結成で 改組論も起る 中
支宗連の理事長問題 東京で関係団体
協議
2. 22 華北の新教打って一丸 華北中国基督
教団設立 七月一日、結成式を挙行
2. 22 ストーブなしに 空屋で冬籠り 馬占
山討滅のあと 海倫の中村開教使談
2. 22 中国人伝道を語る（5） 自分を捨て
切れ 神様は必ず助けてくれる ベン

- 光る座談会
1942. 2. 24 南方仏教を素描する 龍山章真
2. 24 一日一題 太虚神明
2. 24 誤れる一夫多妻の観念 正しくはコーランに視よ 回教の本義と現勢 大久保幸次氏に聴く
2. 24 常磐博士中心に「日本教学院」設立 興亜人材の鍛成目的に 顧問に大谷、安藤、正力三氏
2. 24 拓地の妙好伝秘めた 光榮の虎供養
2. 24 新興亜学院 南方講演会
2. 24 南方共栄圏の 宗教対策 基督教側でも 研究機関設立
2. 24 開教に新方策 西本願寺
2. 24 大陸の基教 対策に渡支 阿部義宗氏
2. 24 中国人伝道を語る (5) 精神的苦しみに堪へ 内助にいそしむ 佐藤婦人、血と涙の苦闘 ベン光る座談会
2. 24 近く遷仏する 海南島守護仏 通称“普庵仏”とは何か 常磐博士の研究に訊く
2. 25 南方仏教を素描する 龍山章真
2. 25 世界太古文化の謎解き 惟神の大東亜文化建設「南方遺跡調査団」派遣計画
2. 25 大東亜共栄圏の 宗教活動に備ふ、浄宗に調査会創設 事情研究と要員養成始む
2. 25 蒙疆派遣僧 訓練終了 真言道場閉つ 回教徒団結の現代的意義 婦人解放はヴェール除去から
2. 25 日滿両国民精神的結合の楔 実生活に即し信仰に基く 司法保護事業の計画 積極的具体的な活動起す
2. 25 殆ど全部が 共栄圏開教 西本願寺宗会
2. 25 ビルマの兵隊、巡査は 五河地方の印度人 即ち“仁王”と同種族 ランゲーン回想
2. 25 中国人伝道を語る (7) 中国人になり切る 婦人伝道の必要 ベン光る座談会
2. 26 クオタリー誌 の再編成
2. 26 南方仏教を素描する 龍山章真
2. 26 豊太閣の大亜細亜政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
2. 26 過去の経済学や国際公法 これを離脱せねば大東亜建設は不可能 南方圏研究会 竹井十郎氏談
2. 26 満洲建国十周年を祝し 新京に神社関係大会開く 日滿両国官民団体共催 慶祝使節を派遣
2. 26 大東亜共栄圏は音楽も全く共通 藤井制心氏の興味ある研究
2. 26 日本に信頼し アラビア独立へ “アジア回教徒の父” 起つ
2. 26 興亜宗教同盟 結成式延びる 関係諸方面の諒解深め 明朗力強き発足を
2. 26 南方進出に集中 等三回集會終る 天理教
2. 26 中国人伝道を語る (8) 外地固有の宗教と 如何に折合ふか ベン光る座談会
2. 27 インド独立 と大東亜戦
2. 27 大東亜のみそぎ 大久保弘一
2. 27 豊太閣の大亜細亜政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
2. 27 惟神道一本槍で 異教徒の教化に当れ
2. 27 南方民族は大和民族と共に 世界最高文化もつ民族 南方圏研究会 竹井一郎氏談
2. 27 日華青年層が 東亜的協力へ出発 上基海青の新計画
2. 27 日比親善の効果 マニラで米比軍に囚はれた 山ノ内秀雄氏から初報告
2. 27 中国人伝道を語る (9) 中国人に解せぬ “犠牲” の精神 ベン光る座談会
2. 28 南方仏教を素描する 龍山章真
2. 28 豊太閣の大亜細亜政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
2. 28 子供の弄ぶ鏡で危く大殺戮 開戦、監禁、皇軍入城まで マニラ西本願寺の座談会
2. 28 真如法親王法要 御開基の如法寺で
2. 28 新嘉坡陥落 感謝の法会 日滿仏教徒合同で
2. 28 朝鮮断想 芦田青溪 (上)
2. 28 中支宗連の理 事長問題懇談
3. 1 満洲建国十周年記念日
3. 1 豊太閣の大亜細亜政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 1 南方進出に備ふ、金光教本部に機関設置
3. 1 蘭印の悪法去勢裁判 ヒリッピン人は東洋人の誇持ため
3. 1 朝鮮断想 芦田青溪 (下)
3. 3 豊太閣の大亜細亜政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 3 大東亜戦勃発で 一変した中国教会 上海森牧師は語る
3. 3 日本教派神道を 華人間に浸透 日華信徒一堂に 東亜同信会第一回総會
3. 3 南京伝道庁 解説認可 天理教大陸伝道を強化
3. 3 中山管長渡支
3. 4 豊太閣の大亜細亜政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 4 楽土ジャバの住民 日本人信頼の主因は 先覚者の功勞による
3. 4 軍国乙女の花まつり 共栄圏諸国の参加者に 可愛い日本人形を贈る

1942. 3. 4 南方鎮護の神として 呂宋その他に鎮祭せよ 吉田豊国神社宮司が提唱 豊太閣の神霊
3. 4 満洲国基青の 再組織具体化
3. 4 上海東本願寺で 支那式の大法要 日華仏教信者の握手
3. 4 ジャバを語る 皇軍敵前上陸の地
3. 4 マニラ通信
3. 6 豊太閣の大亜細亞政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 5 南方文化の総合的解説 宇野博士を中心に権威者を網羅し 南方文化叢書の編纂計画
3. 5 印度解放の時來る 祖国へ呼びかく 在欧洲のボース氏
3. 5 在阪神印度人慰む けふ、東方文化連盟が
3. 5 仏立講有貫主 朝鮮九州巡錫 軍機献納式
3. 5 海南島に教会 仏立講の進出
3. 5 豊太閣の神霊 マニラへ前進 豊公会呼びかく
3. 6 日宗興亜局 の陣容決定
3. 7 豊太閣の大亜細亞政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 7 宗教の正しき 進展と活動推進 あらゆる問題を研鑽 東亜宗教懇談会生る
3. 7 元イラン公使 鈴木氏中心に 南方宗教問題研究
3. 7 皇国民の 赤誠に燃える 戦士の育成へ 西本願寺興亜学院 根本的に改革 拡大
3. 7 南だ、男の征く所 大阪外語、南方諸語部の 飛躍的志願者数に見る
3. 7 新時代は大東亜革新の 大宗教を要求してゐる 大東亜宗教大学創立を提唱
3. 7 南文における日本基督教の現状 本格的活動は今後に
3. 7 日本仏教徒として 印度民衆へメッセージ 仏教会理事会で決る
3. 8 南方への宗教工作 宇野円空
3. 8 元就の故事を例に 印度人の結束要望 在留印度人慰安招待会
3. 8 豊太閣の大亜細亞政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 10 南方への宗教工作 宇野円空
3. 10 満洲神化会運動 朝野の賛助で発足 安東市に約一万坪の道場
3. 10 米英のお先棒的存在から 中国人の正しい基督教へ 全華北各派連合大祈祷会
3. 10 印度よ何処へ行く(上) 英、印、蔣軍事同盟成立を嘆き仏教徒の大奮起を望む 川上賢叟
3. 10 豊太閣の大亜細亞政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 10 極寒の北滿を征く 在佳木斯 本多静
3. 10 山西の共匪蠢く地に 驚くべき支那念仏復興 玄中寺中心に涌き上る 高原、藤谷氏らの大計画
3. 10 充分な諒解と 意見の一致見ず 興亜宗教同盟発足遅る
3. 11 師範大陸科卒業生に 判任待遇の神職資格 神祇院から校長へ通牒
3. 12 南方への宗教工作 宇野円空
3. 12 印度よ何処へ行く(下) 英、印、蔣軍事同盟成立を嘆き 仏教徒の大奮起を望む 川上賢叟
3. 12 豊太閣の大亜細亞政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 12 千万言の布教より一握の砂 中国民衆と御同朋実践 漢口西本願寺が農園経営
3. 12 大東亜建設と国語問題 日本諸学振興委員会 国語国文学特別学会
3. 13 豊太閣の大亜細亞政策 別格官幣社豊国神社宮司 吉田貞治
3. 13 鬱勃たる膨脹力 南方社会建設に向けよ 大阪基青の三浦総主事談る
3. 13 高岳親王の御事跡顕彰は 全国民挙げての運動に 倉持真言宗務長所信を披瀝
3. 14 開校以来の記録 京都女専の入学希望者 中国から公式留学生
3. 14 満華留学生 懇談会 東亜振興会が
3. 14 開拓士と花嫁 仏立講の募集
3. 14 マライシヤ民族研究で 宇野博士に輝く恩賜賞
3. 14 蘭印の基督教事情
3. 14 フィリピン国民よ 名実共に敢然独立せよ 老言語学者が呼びかく
3. 14 東亜事情調査の 独立機関を設置 専任者置き天理教の対策
3. 15 南方民族と回教 松島肇氏迎へて 京都都ホテルで懇談会
3. 15 盟邦満洲国建国十周年 豊麗な芸術に盛る 日本側の慶祝案決定
3. 15 印度独立に邁進 在独・在日両ボース氏放送
アジアの印度 実現を要望 大東亜代表
3. 17 日滿文化の交流 日本からの輸入が九割を占める読書
3. 17 “共榮圈内仏徒の協力で 世界全人類は救はれる” 駐日各国使臣達と懇談
3. 17 内外宗教行政の拡充強化へ 外地の宗教行政官会議 二十七日文部省で開く
3. 17 中支宗連重役問題 中央側の意向決る 理事長に阿部義宗氏推す
3. 17 大派教化研究院 戦時布教講習
3. 18 宗門中等学校に於ける 支那語教育に就いて(一) 牛場真玄

1942. 3. 18 大日本興亜同盟の整備統一 加盟の思想団体を改編 単一組織として発展
3. 18 東印度回教徒起つ 皇軍へ積極的協力
3. 18 外地宗教行政官と懇談 中央連絡委員会
3. 18 マレー、スマトラ島に “真如”の御名を附せ 真言宗有志、首相らに請願
3. 19 宗門中等学校に於ける 支那語教育に就いて(二) 牛場真玄
3. 19 宗教対策の成否が 南方経営自体を左右 特に回教問題の重要性 笠間梶雄氏談
3. 19 ボース氏ら招き 独立運動を激励 あす、上野精養軒で
3. 19 留日の功成り て蘇州に帰る 華僧許徹君
3. 19 大東亜共栄圏朝野の各層に日本仏教徒檄す 精神的結合のもと大乗の完成へ
3. 19 二百三十億貯蓄や 外地布教問題議す 宗団中央連絡委員総会開く
3. 20 宗門中等学校に於ける 支那語教育に就いて(三) 牛場真玄
3. 20 天理華中伝 道庁開庁式 中山管長迎へ
3. 20 大東亜の教育には 先づ日本語を教へよ 審議会員、平生元文相談
3. 20 上海市仏教会成り 西笠寺で結成式 上海日華仏教会も
3. 20 日満高工の昇格 立命館の学則改正
3. 21 宗門中等学校に於ける 支那語教育に就いて(四) 牛場真玄
3. 21 大東亜建設の 宗教文化の戦士 西本願寺が養成 中央学院と龍大に新設
3. 21 菩薩大悲の霊徳を仰ぎ 友邦の興隆と福祉祈る 日本仏教会が張大使へ観音像贈る
3. 21 回教協会京都支部設立 松島理事長迎へ 京都懇談会
京都と回教古い因縁 新村出土語語る
3. 21 西山派南洋 開教使派遣
3. 21 興亜同盟統合と 当路者の苦心
3. 21 満支紅卍字会代表招き 興亜宗教問題を懇談協議 小田、呉両氏連絡に渡支
3. 21 大東亜仏教諸民族の 結束に乗り出す 第二次招致ラマ僧五月帰国 華頂興学済世会
3. 24 首相宣言をかへりみて(1) 江口鑿次
3. 24 宗門中等学校に於ける 支那語教育に就いて(五) 牛場真玄
3. 24 南方講演 と映画会
3. 24 比島の祝日に わが四大節加ふ
3. 24 巡礼者と 大東亜建設
3. 24 南方線に浮ぶ 琉球文化会
3. 24 曹洞樺太総監
3. 24 印度独立の宿志貫徹へ 目前の利害感情打破 困難に耐へ・好期逸すな 意義深きボース激励の会
四億の民衆、決死 祖国のため働くボース氏決意を語る
3. 24 東条声明に好意 香港インド独連総裁来朝
3. 24 回教問題の重要性 松島肇氏談(上)
3. 25 首相宣言をかへりみて(2) 江口鑿次
3. 25 抗日区域に 大東亜建設の 正しき理解と解とふ、日華両国僧の運動
3. 25 英霊に捧げる 大東亜建設の聖画 “南京西別院”の壁画
3. 25 南京市政府主催で 東来観音の法要 周市長日華仏連総裁に
3. 25 北京各派基督教会の 資産、無条件譲渡さる 米英から完全に離脱す
3. 25 朝鮮基督教 連合会総会
3. 25 回教問題の重要性 松島肇氏談(下)
3. 26 首相宣言をかへりみて(3) 江口鑿次
3. 26 宗門中等学校に於ける 支那語教育に就いて(六) 牛場真玄
3. 26 グラム島語る 垂髪猛雄氏
3. 26 大東亜建設へ 一如運動の展開 一如会最初の協力会議
3. 26 共栄圏の宗教調査と対策 大東亜宗教調査室 愈よ浄土宗に開設
3. 26 “日本医道医学と外教” 仏、儒、基の三教を取上ぐ 日満支学徒集ふ医学総会で
3. 26 日華仏研幹部会
3. 26 回・教・断・想(1) 海軍中佐 早川成治氏談
3. 26 アタルの悲劇(上) 西川軍二
3. 27 首相宣言をかへりみて(4) 江口鑿次
3. 27 宗門中等学校に於ける 支那語教育に就いて(七) 牛場真玄
3. 27 朝鮮生れの 西本願寺僧
3. 27 回・教・断・想(2) 海軍中佐 早川成治氏談
3. 27 アタルの悲劇(下) 西川軍二
3. 27 上海のきよめ、聖教 両会一つに還り 内地の両部に影響甚大
3. 27 中支宗教大同 連盟問題中心に 興亜院佐野調査官迎へ 神仏基代表者懇談
3. 27 外地の宗教 行政官迎へ 宗団代表懇談
3. 28 首相宣言をかへりみて(5) 江口鑿次
3. 28 宗門中等学校に於ける 支那語教育に就いて(八) 牛場真玄
3. 28 徒らな便乗主義では 仏教徒の面子丸つぶれ 共栄圏仏教徒団結が目標 大

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 派藤波南方監督の現地談
1942. 3. 28 天理教本部に愈よ 南方研究機関設置
企画、研究、事務の三部
3. 28 南方住民の 指導と精神教育 天理教
が日語学校設置
3. 28 龍大所蔵の 南方宗教資料 久々御用
回・教・断・想(3) 海軍中佐 早川
成治氏談
3. 29 大東亜建設の基礎は北に在り 大久保
弘一
3. 29 宗門中等学校に於ける 支那語教育に
就いて(九) 牛場真玄
3. 29 仏教南方活動の基本 南方諸語による
共通仏典刊行 国際仏教協会の労作成
る
3. 29 蒙古自治政府の 追悼法要盛儀 きの
ふお東で
3. 29 中国人を対象 妙心寺学園 漢口に創
設
3. 29 共栄圏建設に即応し 内外呼応、宗教
工作確立へ 内外地宗教事務連絡協議
会
3. 29 大東亜戦争 完遂の宗教活動 情報局
と宗団代表懇談
3. 29 参戦には絶対反対 ガンジー、クリッ
プスに回答
3. 29 回教徒の動向微妙
3. 29 橋樑氏を囲む座談会 宗教と職域奉公
3. 31 東亜共栄圏内の 宗教対策(上) 高
島米峰
3. 31 曇鸞の著述 支那は勿論、南洋 蘭印
の華僑に贈る 一千四百年の記念計画
3. 31 印度独立連盟の動き活発 東西両ポー
ス氏を正副総裁に 祖国完全独立運動
に アジア人の血を自覚 廿年蟄居の
印度人モデイ氏
3. 31 海外布教再検と建設策 二百三十億貯
蓄協力等 政府関係官と宗団側協議
3. 31 興亜宗教同盟愈よ発足 二日、大東亜
会館で結成式
3. 31 大日本神祇会 朝鮮本部設立
3. 31 橋樑氏を囲む座談会 日本民族の墮落
すべてがバラバラ
4. 1 大東亜戦争の究極 大久保弘一
4. 1 東亜共栄圏内の 宗教対策(下) 高
島米峰
4. 1 純粹中国人の教会へ 華北の米英教
会整理経過 ◇…内務総署王礼俗局長
の放送
4. 1 華北基督教連合会 愈よ十八日発会式
4. 1 橋樑氏を囲む座談会 宗教家や官僚は
国家の大切な要素 大いに反省が必
要
4. 2 支那叢林に於ける 食作法に就いて
(上) 中支蘇州 一井宗元
4. 2 共栄圏の盟主日本 東亜民族分布図
- 宇野博士の主任で完成
4. 2 印度四志士のため 大追弔法要営む
築地で頭山翁らの発起
4. 2 英は何れ衰退するが 印度自身の革新
が必要 ガンジー翁の思想で統一
4. 2 日本と提携・敢然独立へ 印度独立連
盟東京で決議
4. 2 橋樑氏を囲む座談会 宗教は砥石だ
宗教家は自分の職域に 自主性を考へ
よ
4. 3 四志士を懇ろに追悼 印度志士らお西
で歓談
毛綱の如き結束で 印度四億は立た
ねばならぬ
4. 3 印度民衆よ起て 独立に日本は絶対協
力 ◇…吉積情報局第二部長放送
4. 3 関西日印協会 でも追悼法要
4. 3 真如法親王 讚仰法要
4. 3 華北各地基督教起つ 自主、自伝、自養
を標榜 基督教連合促進会結成
4. 3 日連宗興亜科を 立正大学に新設 ビ
ルマ語科も併設
4. 3 比島ルソン島の バギオ西本願寺 立
花氏からの初消息
4. 3 橋樑氏を囲む座談会 国体の精華
4. 5 支那叢林に於ける 食作法に就いて
(下) 中支蘇州 一井宗元
4. 5 日本人から尊敬さるべく “独立の為
に身命を捧ぐ” 固く誓った印度志士
の感激 都ホテルで本社の対談会
宗教としてより アジア人としての
結合
皇軍英靈に 心から焼香 印度志士
ら 京都奈良観光
4. 5 仏跡顕彰の報告法要 大東亜共栄圏内
の 全仏教徒に呼びかける
4. 5 インドネシア語講習
4. 5 皇国宗教文化を創建し 大東亜建設の
精神的基礎に 興亜宗教同盟結成式挙
ぐ
4. 5 日本語教育の普及 南方への教育担当
者 適材を選抜、逐次派遣
4. 5 八紘為宇の大御心に ヒマラヤ山も靡
く 大谷光瑞氏所懐を披瀝
4. 5 日華基督教の協力 南京日語基督教連盟創
立
4. 5 ポース氏激励会
4. 5 天理教の南方 労務工作員締切
4. 5 橋樑氏を囲む座談会 国体明徴と聖徳
太子への感謝
4. 7 “印度独立へ援助誓ふ” 東条首相の追
悼辞 東西で遭難志士慰霊祭
4. 7 橋樑氏を囲む座談会 宗教家の無力
政治力を与へよ
4. 7 褚外交部長校董 新前総理も参加 杭
州仏教大学の新門出

1942. 4. 7 満文新聞統制 康德新聞刊行
 4. 8 全仏徒決起印度独立祈れ 各界の有力者発起の下に “印度独立後援仏教枢軸” 結成
 4. 8 首相、帝国の真意闡明 英の羈絆を破碎 印度人の印度実現へ 四億民衆を敵とせず
 4. 8 日語学校生 仏青を組織 蘇州三宗派提携
 4. 8 学界の権威者招き 事業の促進計る 東京で発起人会開く 高岳法親王奉賛
 4. 8 『神制大東亜協会』結成 産業と宗教の勇氣的協力で 大東亜新地圏の対策確立に
 4. 8 宣戦後の北 支情況聴く 京都基青が
 4. 8 芳沢大使に 仏印を聴く 東京基青午餐会
 4. 8 南方事情講演 と映画の夕べ 大派九州各地で
 4. 8 日本仏教研究の 心構へを説く 日泰親善のひと時 光照法主と泰国留学生 橋樑氏を囲む座談会 新戒律運動の提唱
 4. 9 南方熱に浮かされるナ 各種講習会の主催者 受講者に軍の戒告
 4. 9 満拓布教者訓練 宗教学科講習会
 4. 9 太原の翼賛 宗連結成進む 中国側の出席も勧誘
 4. 9 南方飛躍の 人材養成 西本願寺が東京で新方法
 4. 9 橋樑氏を囲む座談会 職業意識に 捐まっては駄目
 4. 9 支那語教育 論を読み 大島仲太郎(上)
 4. 10 中華少年少女の為 授産場を建設 天津東本願寺の計画
 4. 10 東亜異民族の 関心集む 満洲国の姿
 4. 10 留学のラマ僧 各地見学へ
 4. 10 橋樑氏を囲む座談会 宗派合同について
 4. 10 支那語教育 論を読み 大島仲太郎(下)
 4. 11 躍進する満洲 開拓仏立集団
 4. 11 真如法親王の奉賛 愈よ国民運動に展開 新村出博士ら中心に協議
 4. 11 在満十五教派も合同 「満洲基督教会」結成さる
 4. 11 興亜宗教会議 可及的に開催 興亜宗教同盟準備急ぐ
 4. 11 台湾を聴く 杉浦亮蔵
 4. 12 大陸の断想
 4. 12 ビルマ独立運動繞る朗話 故オットマ比丘の写真掲げ 独立を祈る日本女性！ 感激する檉尾空覚女史
 4. 12 バンコックの華僑が 泰本願寺建立願ひ 東本願寺興亜局張切る 日本仏教 進出の序曲
 4. 12 南京英靈奉安所に壁画 築地本願寺で作品献納式
 4. 12 神宮に伝承する神曲を宣布 東亜民族の融合統整に 礼楽当地を有志が提唱
 4. 12 高岳にあらず “高丘” 親王が正し 但し奈良時代より混同 新村出博士談る
 4. 12 極寒の北滿を征く 在住木斯 本多静応
 4. 12 印度宗教図
 4. 14 印度後援仏教 枢軸の結成
 4. 14 産業人や半島人の 鍊成に寺院開放 報国道場を開設 寛永寺山内見明院の試み
 4. 14 ラマ僧の現地道場 奉天に満蒙会館 知恩院から中田氏派遣
 4. 14 日華両国民の要望で 安新神社奉斎 神社中心に水田耕作
 4. 14 “国生み” の精神こそ 大東亜共栄圏 建設への 精神的基調たるべきだ
 4. 14 中日文化協会 近く全国大会開く
 4. 15 日華の和平祈る 会員の誠で建つ 道院済南母院の辰光閣
 4. 15 熾烈な三A運動 東印度に登場する
 4. 15 満洲国教育使節 整備教化案成る
 4. 16 私の立場から 「支那語教育論をよみて」に答ふ (1) 牛場真玄
 4. 16 仰ぐ九軍神遺品の謹展 満支泰各大使館も協賛出陳 東本願寺に開く大東亜展 共栄圏事情の全貌と 日本仏教の真価顕現
 4. 16 運動は軌道に乗る 印度の完全独立へ邁進 ポース氏激励の会
 4. 16 印度の指導者は 一致団結を自覚 ◇…クリップス英卿帰着
 4. 16 念仏の祖廟 玄中寺に詣つ(上) 井上淳念
 4. 17 私の立場から 「支那語教育論をよみて」に答ふ (2) 牛場真玄
 4. 17 高岳親王御事跡奉賛 国民運動に燃え上がる 関西側でも氣勢をあぐ
 4. 17 道行く住民の子も 歌ふ “愛国行進曲” 北条開教使南方の便り
 4. 17 神職の社会的活動期し 神祇院が最初の長期鍊成 内原訓練所にも入所実習
 4. 17 泰国への交 換学生募集
 4. 17 念仏の祖廟 玄中寺に詣つ(下) 井上淳念
 4. 18 私の立場から 「支那語教育論をよみて」に答ふ (3) 牛場真玄
 4. 18 大東亜建設の一翼に 西本願寺が大陸に社会事業 名勝の地に綜合社事 中華福樹院乗り出す その一 仏の慈悲で更生 大東亜建設の礎石

1942. 4. 18 に 西本願寺中支興亜寮 その二
 大東亜新文化建設に 蒙古の積極的協
 力 先づ自己文化の再批判
4. 18 事変前の20倍 半島同胞の大麻搾受激
 増
4. 18 新生の華北 基教会へ応援隊 近く五
 名を派遣
4. 18 北京華文学院 新陣容成る
4. 18 日滿支綜合計 画樹立の要 産業統制
 会
4. 19 大陸も南方も 全部集めて 国際日校
 開く
4. 19 大東亜戦下 心頼もし 朝鮮の赤誠
4. 19 朝鮮基教連合会 連合強化を協議
4. 19 天理教外地 伝道の強化
 満洲講習所 台湾講習所
4. 21 私の立場から「支那語教育論をよみ
 て」に答ふ(4) 牛場真玄
4. 21 中国に文化使節 両国の提携強化に
 佐多博士近く出発
4. 21 中文宗連の 機構拡充等 宗教連盟の
 総会開く
4. 22 私の立場から「支那語教育論をよみ
 て」に答ふ(5) 牛場真玄
4. 22 神に祈る兵營生活 特異な回教徒部隊
4. 22 ジャバの初等学校 再開準備成る オ
 ランダ系は全部閉鎖
4. 22 大陸の神祇活動強化に 華北蒙疆神職
 総会開く 内地神祇会に呼応、組織拡
 充
 華中에서도神祇 団体を結成 近く構
 想具体化
4. 22 予算編成会議に 中央代表の派遣要望
 中文宗教連盟総会開く
4. 22 満洲協和会 会員大会
 全連刷新案
4. 22 慣習を尊重して 家族制度を採用 満
 洲国の 親屬継承 法要綱
4. 23 私の立場から「支那語教育論をよみ
 て」に答ふ(6) 牛場真玄
4. 23 埋骨の覚悟なくば 南方民族開教は困
 難 大派深奥台湾監督婦来談
4. 23 ナチール氏快諾 龍大興亜科開講
4. 23 媽祖廟等を改修 三ヶ所に東本願寺建
 立 本島人皇民鍛成に協力
4. 23 半島婦人に授く 皇国民の作法 石原
 宣隆氏の教化
4. 24 南方二世と 交歓研究会
4. 24 愈よ支那唯一の 仏教大学開始 杭州
 に西谷氏の努力
4. 24 石門日本仏連 釈尊生誕祭 日華両民
 衆参集
4. 24 対外宣伝映画 特別映写会
4. 24 北京華文学院
4. 24 ラマ対策に 中村真言宗 興亜部長渡
 蒙
4. 25 盟邦泰国の使節迎へ 築地本願寺で戰
 捷祈願法要 国際仏教協会、仏教会の
 共催
4. 25 大日本拓土塾
4. 25 南進の先駆者 菅沼貞風顕彰大会
4. 25 南方宗教対策の確立に 総合研究所の
 設置要望 文部省の構想も着々具体化
4. 25 新蒙古の教育を 烈々燃ゆる祖国愛
 来朝の志士一行語る
4. 25 比島完全占領を 豊国廟で奉告祭
4. 28 宗教・伝説に育まる 情趣豊かな郷土劇
 琉球人十五万の活素
4. 28 杭州西本願寺の 入仏式と慰霊祭
4. 28 東亜寮を開く お東の贈物
4. 28 京大文学部内に 南方文化研究会
4. 28 中国人教会に 我教会の温情
4. 28 次の世界 の 支配者
4. 29 世界的貧民窟たる 北京天橋の貧民調
 べ 華北社事協議会で完成
4. 29 出たぞ、北満の虎 必勝信念の一標本
 お東の大東亜展
4. 29 “歡喜の鐘は高鳴る” 泰国使節歡迎
 歌 千代田聖歌隊の海外放送
4. 29 蒙古ラマ僧 日宗と懇談
4. 29 皇国宗教の諸問題や 泰国の現代文化
 明治聖徳学会の研究発表
4. 29 知恩院ラマ僧 第二回卒業式
5. 1 南方の宗教政策・田崎博士談 先づ祖
 先崇拜に重点 其他の宗教的問題では
 積極的な証文を与へな
5. 1 春雨の宵和かに 南方事情の研究座談
 交歓
5. 1 ラマ僧学生来社
5. 1 国魂神の本質について「海外神協」
 の御祭神論を駁す 猿渡宮司の所論注
 目さる
5. 1 東印度各地に 旺盛な日本語熱 臨機
 に日本語講座開く
5. 1 仏印との文化交流 日本で仏印美術展
 や 武道選手や学生団を派遣
5. 1 大陸仏徒の歩み “風井学校”を観る
 三上諦聴
5. 2 大東亜戦争下の 父、母、子 安積得
 也
5. 2 支那文化の復興運動に 華北基教の独
 立注目さる 促進会の構想着々具体化
5. 2 一部中国人に 知らしめよ ユダヤの
 謀略 住友本社の後藤基次氏談
5. 2 南方対策は 産業と宗教の 有機的結
 合で けふ神制大東亜協会結成
5. 2 ラマ僧帰国
5. 2 大陸宗教活動の重要性 内地宗団当局
 は認識不足 武田調査官が宗教界へ要
 望
5. 2 南方民族問題に 科学のメス入れる
 「民族科学研究所」近く成立

1942. 5. 2 大陸仏徒の歩み “風井学校”を觀る
三上諦聰
5. 3 大東亞戦争下の 父、母、子 安積得也
5. 3 華北の日華宗団一九九に 境内地を農園
化し食料増産 北支重要問題解決に協
力
5. 3 印度ネシヤ人に 高潮する親日熱 旧
蘭領内の敵性策動根絶
5. 3 仏印独立の志士 陳東風氏の靈慰む
5. 3 華北諸般の整備に 資す、綜合調査研
究所 大東亞共榮圏の一環として
5. 3 華北政務委員会に 諮詢會議設置
5. 3 本島人教師 お東で得度
5. 5 大東亞戦争下の 父、母、子 安積得
也
5. 5 一躍、大天理村の誕生 満洲開拓農場
法の実施に伴ふ 行政区画の編成替へ
から
5. 5 日本語使用の徹底と 信仰に立脚した
教化 半島同胞の布教に必要
5. 5 聖なる目標に邁進 太原翼賛宗教連盟
結成
5. 6 大東亞戦争下の 父、母、子 安積得
也
5. 6 ビルマの文化工作に 宗教家の準備を
期待 京都貿易振興館長 大場忠氏談
5. 6 泰國使節迎へ 感激の國際法要 実況
は海外へ放送
5. 6 蒙古ラマ僧入洛 お東でお扉拝礼
5. 7 大東亞戦争下の 父、母、子 安積得
也
5. 7 蚌埠の日華仏連は 自給自足してゐる
太藤大派開教使語る
5. 7 大東亞建設講座 大阪市で一ヶ月間開
催
5. 8 大東亞戦争下の 父、母、子 安積得
也
5. 8 大東亞の建設といふ 救済を日本は完
遂する 仏教教義の飛躍的实现 西本
願寺で談る蒙古ラマ僧
5. 8 バタン戦線に散華 壮烈貫く戦陣訓
知立神社社掌西原氏
5. 8 共榮圏の若人招き 興亞國民動員大会
新京に派遣の我代表決る
5. 8 紅卍字後援会 活動方針協議
5. 9 大東亞戦争下の 父、母、子 安積得
也
5. 9 比島大司教も行脚 皇軍の真意説く
カ教通じ日比の固き提携
5. 9 ラマ僧視察団 きのふ比敬へ
5. 9 本島人僧侶ら 昨神宮参拝
5. 9 京阪神三都一齊に 大東亞建設講座開
設 全亞細亞各般に亘る 最も正しき
認識を
5. 9 日華提携も展開 上海中華福壽院 院
長主事等陣容決定
5. 10 大東亞戦争下の 父、母、子 安積得
也
5. 10 凶南完遂豊太閤に奉告 七卿八十年法
要 洛東妙法院門跡で営む
5. 10 大渡洋作戦に参加 重油の海を泳ぐ
天理教愛国少年団 南方に元気に御奉
公
5. 10 蒙古僧一行と 西本願寺懇談 桜井大
佐全参加
5. 10 比島裁定成り 大慰靈祭執行
5. 10 ラマ僧迎へて 新義州で交歓会
5. 10 半島出身幹部招き 内鮮一体化懇談
大派真身会が兵庫で
5. 10 「開拓奉仕隊」編成 天理村で現地練
成
5. 10 東方文化研の 大同雲崗調査 今年で
五ヶ年目
5. 10 上海にも拓農道場
5. 11 天皇様の御聖徳ラマ僧達に徹底させる
太田覚眠翁の精神工作
5. 11 紅卍字活動の世界的本部 ハルビンに
“世界渡化応元宗壇” 二千万円の巨
費投じて近く着工
5. 11 日本に於ける 道院建設の計画 満洲
本部も積極的支援
5. 11 民衆感謝的 施療者二万人を突破
青島王台鎮興亜診療所
5. 11 パボン使節に 歓迎の辞 京都仏青か
ら
5. 12 東亞の宗教的聖地化 大同石仏を信仰
対象へ 歴史的な奉賛大法要を 共榮
圏確立・蒙古隆昌も祈願
両華嚴寺の宣揚 仏教図書館設立計
画 松井曹洞大同主任語る
5. 12 アジア人として 大東亞戦争の進展に
期待 イランの真相語る 市河公使
5. 12 大東亞經綸に 參画の人材養成 日大
に“南方開發講座”
5. 12 初級中学新設 天理教の上海華越小学
校
5. 12 実施期早む 半島義務教育制
5. 13 仮にも輕薄な心持つな 大南洋経営の
心構へ
5. 13 大東亞共榮圏建設は 日支の握手提携
から 先覚者松下見林の業績 新人の
弁 今井啓一氏
5. 13 北京に流行禪鍊成 講究所道場は連日
開設
5. 13 日蒙華の僧侶出勤 大同石仏奉賛法要
と その主要行事決る
5. 13 大東亞の天地晋く 仏光に照耀せん
泰寄贈の仏舎利安置する 京都仏青よ
りメツセージ
5. 13 華北の神社制度確立 官民有力者を委
員に網羅 「制度調査会」近く結成

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1942. 5. 13 満洲布教に新発足 曹洞全満開教師大会
5. 13 北支蒙疆の 神職会強化 総会で決議
5. 14 満華泰仏印 巡回展 東京内示会
5. 14 台湾寺廟の 道士や齊士転向 内地仏教宗派の教師資格 皇民化運動に難問
5. 14 大東亜建設 宗教協力会議開く 大東亜宗教調査会の設置 興亜宗教同盟第一次計画
5. 14 馬來の根本調査 綜合研究所設立
5. 14 “大陸の断層” 愈よ近く出版
5. 15 高岳親王奉賛運動の強化 細川侯中心に計画進む 帝国ホテルで発起人会開く
5. 16 仏教徒だけで 印度独立を支援 枢軸結成打合せ
5. 16 女性、閩南の魁 新生ダバオの建設に重藤夫人は征く
5. 16 新京市民の 赤誠 氏子負担金制確立 新京神社
5. 16 大東亜の指導原理 と仏教の立場 増永靈鳳 (一) 上
5. 16 谷大の興亜科の 校舎増築へ
5. 16 大東亜戦争 東丘社展
5. 16 不良ラマは 還俗せよ ラマ改革への一手
5. 16 二見公使招き 泰国中心の宗教事情研究
5. 16 汕頭に日華 仏教会創立
5. 17 大東亜の指導原理 と仏教の立場 増永靈鳳 (一) 下
5. 17 南方の宗教対策と仏教 下手すると仏教は減ぶ 高橋博士の警告的意見
5. 17 閩南攘夷完遂の法要 三十三間堂へ千一個の献灯 けふ妙法院で閉白
5. 17 近づく娘々祭 民衆へ時局認識の徹底
5. 17 ラマ僧訓育で 橋爪氏満洲国要人と懇談 満蒙会館を整備
5. 17 内地側神仏基 代表の派遣決る 中支宗教大同連盟総会
5. 17 建国十周年記念の 全満仏教大会 愈よ今秋九月開催 張特派大使も頗る満悦
5. 17 藤田玖平氏 北支へ漫遊
5. 19 大東亜の指導原理 と仏教の立場 増永靈鳳 (二) の上
5. 19 皇道精神の徹底へ 在満日系学校長会議
5. 19 大東亜建設の宗教協力会議 開催方法の具体化中心に 関係官庁と連絡会議開く
5. 19 中支宗連総会 廿五日に開催 内地代表派遣来月に延期
5. 19 四十名のラ マ僧を選抜 現地で訓練
5. 19 本島人伝道 天理の強化
5. 19 上海の共同 祖界へ進出 同成日語学
- 校
5. 20 インド独立後 援枢軸に就て
5. 20 大東亜の指導原理 と仏教の立場 増永靈鳳 (二) 下
5. 20 奉天撫順神社 で児童朝詣会
5. 20 満洲吉林省の 教化西本願寺
5. 20 原住民へ日本語普及 活字による共栄圏文化工作 大東亜出版文化会近く創立
5. 20 大東亜宗教調査会設立 共栄圏各地の宗教界報道者の提携 興亜宗教同盟で構想具体化
5. 21 大東亜の指導原理 と仏教の立場 増永靈鳳 (三) 上
5. 21 肇国の理想達成に対し 真に大なる氣宇を持って 世界を統べる凡ゆる要素に恵まれる日本への感謝と誇 小牧博士談
5. 21 ガンジーの対英 警告が契機で ヒンズー・回教兩教徒握手
5. 21 大陸の新鸞 上人誕生会 中国要人ら三千人招待
5. 21 南京に西別院 落成入仏式・英靈追弔会 大規模の記念の催
5. 21 西藏仏教講演
5. 21 文部省の南方宗教対策 構想成り予算捻出に奔走 宗団活動の指導方針近く指示
5. 21 民族研究所 民族の根本台帳 準備委員発令さる 南方にも設立
5. 22 南方の好意を牢記せよ
5. 22 大東亜の指導原理 と仏教の立場 増永靈鳳 (三) 下
5. 22 対外文化事業の 拡大強化へ実動 第一回委員会で規約決定
5. 22 大連忠靈塔の春季大祭
5. 23 大東亜建設の基本国策成る 教育内容の刷新 南方占領地の文教政策 鈴木幹事長談
5. 23 興亜宗教同盟事業計画 更に検討して再出発 近く緊急理事会を開く
5. 24 聖人教育南方講座 文部省と東大の共催
5. 24 ただ泣かされる、この精進 荊棘と血涙の道歩む十年 半島人布教=金光柴島教会を訪ふ
5. 24 在洛華僑の 子供招いて けふ花まつり
5. 24 建国十年迎へた 満洲国の宗教 古海-昱焉氏語る
5. 24 満洲の神社関 係大会延期
5. 24 在満鮮系 僧侶養成
5. 26 大陸に実績をあげ 光照法主をまつ 上海福壽院の創立進む
5. 26 金閣寺の雅室に ビルマ独立志士の遺

- 墨を 不似合ながらこれも時局
 1942. 5. 26 仏教総会で講習所 在満半島系僧侶修
 鍊 龍井の河野開教使語る
 5. 26 “中外日報”を通じ 日華魂の結びを
 兩國相互の観光視察は 都市のみに
 終るな 棲霞県知事 白書晋氏を訪ふ
 5. 26 日華を結ぶ 愛の事業 北京愛隣館
 後援会生る
 5. 27 今後の南方諸民族の指導は 文化創造
 力の養成に 関大教授小松堅太郎博士
 強調
 5. 27 台宗が大東亜各地に留学生を派遣 戦
 時事務局評議員会で決る
 5. 27 大同仏教図書館へ 曹洞宗が大蔵経寄
 贈 東京仏教団は南伝蔵経を
 5. 27 故鄭総理の 令孫ら来社
 5. 27 建国十周年の 日満武道大会
 5. 27 鄭奉天市長 泰国公使に特命
 5. 27 “母と子”で結ぶ 日華親日機関設置
 を 華僑連合会がお西に交渉
 5. 28 南方の宗教対策実施 成案得て目下財
 源考慮中 文部省阿原宗教局長語る
 5. 28 ガンヂーと老子(3) 高田、桜沢両氏
 を囲む ベン光る大阪座談会
 5. 29 地名の呼称改めよ 宇野博士 大東亜
 共栄圏へ提案
 5. 29 更に宗教、言語中心に 東亜の文化諸
 問題図集 帝国学士院で近く完成
 5. 29 東亜諸民族調査室 文部省の研究所へ
 吸収か
 5. 29 中支宗大連 理事長迎へ 内地代表懇
 談
 5. 29 大派興亜部長 山口氏を任命
 5. 30 武力なき印度の 聖戦主義 木村日記
 (一)
 5. 30 中国人のための 愛の奉仕者を 南京
 基背のお医者探し
 5. 30 馬來の土産話 少年層に日本流の教育
 徳川軍政顧問帰る
 5. 30 蘇州に中日仏教会 同願念仏会を修行
 5. 30 仏印へ交換教授
 5. 31 武力なき印度の 聖戦主義 木村日記
 (二)
 5. 31 元寇の偉人 時宗神社の建設 明年の
 百年忌期して きのふ発企人会開く
 5. 31 印度独立支援 あす、都ホテルで協議
 仏教枢軸本部の運動
 5. 31 南方へ手紙や 雑誌が送れます
 5. 31 上海福壽院 愈よ開設 医療と教化
 6. 1 南方宗教対策 に関して
 6. 1 マニラで病む 木村毅
 6. 1 満洲建国十周年 忠霊廟の臨時大祭
 6. 1 マニラ従軍中心に 木村毅氏囲む座談
 会 最近の掘出し物 “涙骨社主”
 6. 1 現世に悪業を犯せ 未来で他人種に生
 れ替る バリ島住民の信仰
 6. 1 印度独立後援 仏教枢軸懇談
 6. 2 宗教教化団体一九の 満洲国の教化活
 動 民生部から「教化通信」創刊
 6. 2 外国語地名等の呼称統一 近く文部省
 に協議会を設置
 6. 2 最近の中国事情 佐多国民文化使節に
 聴く 近く答礼使も来朝
 6. 2 米英依存から脱した 大陸教育再建に
 協力 基督教教育同盟から 教育使節
 を派遣
 6. 3 イランの実情 市河前公使に聴く
 6. 3 仏教革新と南進政策 本荘可宗
 6. 3 武力なき印度の 聖戦主義 木村日記
 6. 3 仏教で提携出来る印度 羽溪博士、座
 談会で声明
 6. 3 開教使夫人の殉教 主任のあと護って
 布教 遂に異境に散る
 6. 3 灸 日華親善に一役 お西の開教に初
 の登場
 6. 3 共栄圏内の 開教問題議す お西が大
 陸に開教総長会議
 6. 3 民国小孩たちに 西本願寺が“童話集”
 を こどもを通して日華親善
 6. 3 日本の南方進出史(1) 木村毅氏を囲
 む座談会
 6. 4 仏教革新と南進政策 本荘可宗
 6. 4 武力なき印度の 聖戦主義 木村日記
 6. 4 褚中国特使へ 曹洞宗全書贈る
 6. 4 満洲拓土慰問 石川県宗団 連合会か
 ら
 6. 4 中支宗連の予算案と 布教方策を協議
 阿部理事長を迎へ けふ三教代表会
 同
 6. 4 日本の南方進出史(2) 木村毅氏を囲
 む座談会
 6. 4 共栄圏内児童の 教育に関して 三田
 谷啓
 6. 5 仏教革新と南進政策 本荘可宗
 6. 5 武力なき印度の 聖戦主義 木村日記
 6. 5 勢力争ひに終始する 日本宗教家の信
 念の不足 文化協会は何を實踐するか
 京都師団報道部長 楡山成敏中佐談
 6. 5 内地の引移しは駄目 満洲国仏立講の
 布教改革
 6. 5 日華提携の 宗教工作が急務 機構改
 組は第二 中支の宗教事情語る 阿部
 理事長
 6. 5 大東亜建設の礎石 織・豊二巨人を偲
 ぶ建勲・豊国神社宮司等迎へて
 6. 6 仏教革新と南進政策 本荘可宗
 6. 6 大東亜戦争の戦果と 支那民衆への宣
 伝 海の説明に報道班の苦心
 6. 6 熱帯病と闘ふ 神戸熱帯病研究所の
 桂田博士の研究
 6. 6 大同石仏法要に 日本仏教の資料展
 塚本善隆氏が参列

1942. 6. 6 楮民誼大使に “浄宗大年表”
 6. 6 昭南島に再生 西本願寺活躍
 6. 6 南方発展事情 早わかり
 6. 6 開拓民の追悼会
 6. 6 南方宗教事情 連続講座を開設 京都
 仏教文協の計画
 6. 6 信長公の顕彰運動起せ 偉大な信長公
 の文化摂受 本社主催…両公を語る会
 盛況
 6. 6 満洲国勤労奉公制 愈よ明年度から実
 施
 6. 6 浄宗北京別院 納骨堂竣成
 6. 7 大東亜新秩序の 建設と宗教 (1)
 井上哲次郎
 6. 7 武力なき印度の 聖戦主義 木村日記
 6. 7 真如親王の 御事跡発表
 6. 7 ラマ留学生 の話を聴く 京都実業協
 会
 6. 7 半島僧侶ら お東で得度
 6. 7 中国人布教者の 輔導に全力注ぐ 従
 来の内方的方針一擲 中文宗連、明年
 度予算増額
 6. 9 回教国に対す る施策に就て
 6. 9 大東亜新秩序の 建設と宗教 (2)
 井上哲次郎
 6. 9 大東亜建設と織・豊両公語る(1)
 凡てを生かす大気宇 マニラに豊太
 閣祀れ 飛離れてハイカラな信長公
 6. 9 多田等観著『チベット』 中井玄道
 6. 10 大東亜新秩序の 建設と宗教 (3)
 井上哲次郎
 6. 10 大東亜建設と織・豊両公語る(2) 生
 死□如・電撃作戦 信長公とコンクリ
 ート 敬神尊皇は織田家の伝統
 6. 10 故オッタマ比丘の遺志 今に生きてあ
 り 知人により追慕の計画
 6. 10 主に知識層を対象に 南方新地域の文
 化工作 国際文化振興会に「工策委員
 会」設置
 6. 10 第一語学は 華語と南方語に 谷大興
 亜科の新陣容
 6. 10 カトリック教の 南方講座受講者
 6. 10 ラマ寺で施業 太田氏の事業
 6. 10 豊太閣閩南の 記念の茶室 文如上人
 忌
 6. 10 ベン光る 日蓮寺の改名
 6. 11 大東亜新秩序の 建設と宗教 (4)
 井上哲次郎
 6. 11 長嶺子に聖嶽振ふ神の子 満洲基督教
 拓村の生活点描
 聖ヶ丘の協同生活
 6. 11 大東亜建設と織・豊両公語る 豊國神
 社が施主で 大政所の靈慰む 有名な
 秀吉公の祈願文
 6. 11 義に篤い南方原始民族 道義的に指導
 せよ 宮武辰夫氏談
 6. 11 海外神社問題の根幹 “国魂神”の御
 本質闡明 傾聴すべき座田宮司の所論
 6. 11 半島少年に宗教教育 池田市仏教会の
 試み
 6. 11 朝鮮仏教曹溪禅の 法脈問題で飛檄
 宗団法実施を前にして
 6. 11 南方過剰資源活用に 特別委員会設く
 6. 11 大陸の雲水が 西本願寺僧に
 6. 11 本紙連載 「豊太閣の大 亜細亜政策」
 豊國神社で刊行
 6. 12 大東亜新秩序の 建設と宗教 (5)
 井上哲次郎
 6. 12 東亜的基督教のために 利根川東洋
 6. 12 旺盛な華僑の民族意識 南方共栄圏内
 一千万の 華僑対策こそ日支提携の楔
 6. 12 大東亜建設と織・豊両公語る 豊公会
 と呼応 信長公顕彰運動起せ 徳川最
 盛期に“猶秘録”
 6. 12 仏印事情聴く
 6. 13 中国人布教者の 輔導に就て
 6. 13 大東亜新秩序の 建設と宗教 (6)
 井上哲次郎
 6. 13 支那事変の意義強調 大東亜戦下初の
 記念日
 6. 13 大東亜建設と織・豊両公語る 信長公
 と朝鮮政策 韓国府復活を企図 豊公
 の眼は天汗までも
 6. 13 中島裁之、泉道 雄両氏の追悼会
 6. 13 印度解放の機いまこそ至る 全東亜各
 地在留の志士集り 十五日から盤谷で
 独立大会
 6. 13 満洲建国十周年 神戸の記念講演
 6. 13 新京で宗教大会 関係官庁と折衝の上
 6. 13 日華文化を語る 東方文化連盟で
 6. 14 南方宗教工作に於る 巴利語の地位
 (一) 佐藤良智
 6. 14 大東亜建設と織・豊両公語る 現代人
 に類型なし 信長公と寺内大将 ヒ総
 督に日本的性格を！
 6. 14 宮崎神宮参拝記 小川勇
 半島と時局
 6. 16 半島少年に 宗教教育
 6. 16 南方宗教工作に於る 巴利語の地位
 (二) 佐藤良智
 6. 16 日華文化と戦果の影響 日独文化親交
 で枢軸成る 佐多文化使節らの報告
 6. 16 大東亜建設と織・豊両公語る 織豊両
 公をして 現代に在らしめば 偉大な
 らしむる要素
 6. 16 古代満洲文化の逸品 今秋=上野で美
 術展開く
 6. 17 世界に誇る文化的戦果 “龍門石窟の
 研究” その他三労作表彰
 6. 17 大東亜建設と織・豊両公語る 明治維
 新への先駆 この飛石を忘れるな 宮
 廷文化と武家文化

1942. 6. 17 ビルマや印度へも 日本の經典の進出を 經典出版で文協側と懇談
6. 17 教育勅語を基に 半島同胞の教化 “日本精神鍊成会” 創設
6. 17 内鮮融和は言葉から 半島人のお母さん学校
6. 17 印度の完全独立 対英関係即時断絶 磐谷大会総会で採択 最後は武器とて起つ 在独ボース氏 メッセージ寄す
6. 17 印度独立後援 仏教枢軸解消
6. 18 信仰の自由を享受 軍政部宗教班の活動に 比島カ教関係者の感謝
6. 18 大東亜建設と織・豊両公語る 諸大名を集めて 皇室への忠誠誓はず 織豊時代現出の必然性
6. 18 印度の独立を 仏教問題から検討 国際仏教協会の計画
6. 18 沢木興道氏 満洲行脚
6. 19 ビルマ仏運結成 全土の代表者参列
6. 19 洗足池畔に “海舟寺” を建立 興亜問題研究と海事思想の普及 清明会日蓮宗へ移管
6. 19 標準漢字本極り 一般使用略字も発表
6. 19 真言宗ヘラマ僧
6. 20 印度独立を促進 法華宗九州報国会の運動
6. 20 殷汝耕氏来社
6. 20 南方事情の 調査機関設置 臨濟調査会が希望
6. 20 日本精神に基く 東洋人教育を 比島の有力教育者と懇談
6. 20 曹洞朝鮮管内 布教師大会
6. 20 華僑の仏教興 亜会評議員会
6. 20 網田連盟書記長 大派満洲録事へ
6. 20 河村千秋氏著 歌集 “南方” 書評
6. 21 四十年の桎梏脱し 比島教会に世紀の鐘 新教班の手で教会連盟生る
6. 21 日華提携論や 精神教育一くさり 中川総長の民族比較論 殷汝耕氏 立命館訪問
6. 21 大同石仏法要に 月輪賢隆氏派遣
6. 21 お西の連枝一家が 北満の開拓村へ ◇…朗かな佳話を伝へて
6. 21 支那で拾った話
6. 21 インドネシア 中心の講話
6. 21 惟神大道の宣揚と 排共運動の徹底 満洲国教派神道総会結成
6. 23 マニラの大聖堂で 皇軍戦没将士慰霊祭 日本天主公教の荘厳な催し
6. 23 華僑との連絡提携を 紅卍字講演会の活動近く具体化
6. 23 「共栄圏内各民族 婦人共通の服を」
6. 23 ミントル女学院生 皇軍慰問の赤誠 義人小田ちり子女史 暴虐米軍の魔手より救出
6. 23 満洲と札幌で宗教大会 懸賞論文募集や時局講演 宗団中央委員会事業計画
6. 23 華北政務委員会の 宗教視察員来朝 宗教制度の確立と 共栄圏建設に協力
6. 23 鮮台内地の 教誨師異動 西本願寺系
6. 23 ラマ僧招致 満洲側決定 現地訓練開始
6. 24 南方宗教工作に於る 巴利語の地位 (三) 佐藤良智
6. 24 日本仏教徒に 南方進出の手引 「南方仏教聖典」第一集成
6. 24 満華泰留学生達に 華道通じ日本精神を 東本願寺興亜局の試み
6. 24 半島同胞の 感謝と決意
6. 24 回教研究の行き過ぎ 宗教的宣伝に注意せよ 内地人への一般化は危険
6. 24 大和魂学びに 全アジア宗教大会へ 比島のゲレロ大司祭来朝
6. 24 対支伝道の統一強化 基教関係団体で協議
6. 24 曹洞宗朝鮮 開教師大会
6. 25 南方宗教工作に於る 巴利語の地位 (四) 佐藤良智
6. 25 徴兵合格者に 語学講習の餞別 京都新興亜学院の試み
6. 25 大陸や南方の 宗教・思想問題聴く 宇野、飯島博士等の発表 明治聖徳記念学会
6. 25 神戸の満洲 開拓十周年 記念慶祝展
6. 25 回教問題は対外的 内地人の信仰は具体的に不能 大日本回教協会 匠瑛常任理事談
6. 25 大南洋風俗 を聴くの会 風俗研六月例会
6. 25 大派満拓事 情報国講演
6. 25 山東文化史跡調査に凱歌 六朝摩崖石経や危山石窟仏 その他を学界に初めて紹介
6. 25 印度 回教 両教徒の団結 合同会議で宣言
6. 25 大陸の神社制度 確立へ調査会組織 華北蒙疆神職会の活動
6. 25 大派樺太監督更迭
6. 25 北支の旅から 予想外の収穫
6. 26 祝詞の精神から すべて明快に解説 海外神社と国魂神の御本質
6. 26 香港西本願寺
6. 27 天理教満洲 開拓奉仕団 愈よ出発迫る
6. 27 閉された米英系教会 中国信徒に解放 新生の鐘鳴る青島教会
6. 27 満洲建国十周年記念し 仏教総会が協議大会開く 日満華提携の仏教活動を 慶祝使節を派遣 神仏基の代表者
6. 28 教義が社会機構 南方回教圏の諸問題 (一) 匠瑛少佐に聴く

1942. 6. 28 北支に於ける 基督教独立運動 華北
 基教連促進会
6. 28 新京で大東亜 操觚者大会
6. 28 興亜院の対支布教 進出計画決り 今
 秋五十名の布教師錬成
6. 28 外国語の地名人名 どう書くか 年内
 に決定 約四万語を統一、実施
6. 28 在華の西蔵經典調査 月輪賢隆氏の渡
 支決る
6. 28 禍根を未然に防ぐ 開教の公認問題に
 関し 各関係当局に反対を具申
6. 28 南方派遣員錬成 内閣直属の訓練所設
 置 今秋開所の予定
6. 28 満語仏教聖典や 讚仏歌の制定 満洲
 仏教総会で編纂
6. 28 回教だけ独立は痛 南方回教圏の諸問
 題(二) 匠堯少佐に聴く
6. 28 「大東亜共栄圏と宗教論」 宗団中央委
 員会が懸賞論文
6. 28 比島共産党転向
6. 28 朝鮮の米英系宗団 敵産管理令の適用
6. 28 現地報国 公主嶺訓練所 山本匡夫
6. 30 「未開人」の精神と 日本精神(1) -
 「未開人」の精神地理学- 櫻澤如一
6. 30 回教問題の重要性 現地民族の中に
 指導対策を錬れ 中川裕氏談
6. 30 愈よ治療事業を 上海福壽院本格的に
 開始
6. 30 日本から贈った 經典の入山式 多彩
 な大同石仏奉賛法要 愈よ七月から開
 始
6. 30 南方宗教工作の適材者 浄土宗が全僧
 侶を調査
6. 30 大連でお西の 開教総長会議
6. 30 現地報告 公主嶺訓練所 山本匡夫
7. 1 国内に於る回教対策 (対策理念転換
 の急務) 山下彬磨
7. 1 「未開人」の精神と 日本精神(2) -
 「未開人」の精神地理学- 櫻澤如一
7. 1 共栄圏各地に進出の 婦人指導者養成
 矯風会、大阪で講習
7. 2 再び開教施策 について
7. 2 「未開人」の精神と 日本精神(3) -
 「未開人」の精神地理学- 櫻澤如一
7. 2 大東亜建設の指導者たる 信念と迫力
 のある人材養成 壮年団が全国に翼賛
 塾開設
7. 2 黄檗に中国僧十二名留学 興亜学院で
 勉学
7. 2 上海居留民に 仏教を講ず 和田性海
 氏
7. 2 大派朝鮮の 開教使異動
7. 3 「未開人」の精神と 日本精神(4) -
 「未開人」の精神地理学- 櫻澤如一
7. 3 大東亜進軍の蔭に咲く花一輪 “抗日
 救国”も昔の夢! 若き女性が輸血を
- 申出で 日本人所長の一命を助く
7. 3 広告和讃と 太平洋讃歌 讚仏協会
 第一回発表
7. 3 文部省の南方宗教工作 各省との連絡
 成り近く具体化
7. 3 大陸の関門護る 関東州仏教総会発会
 式
7. 4 「未開人」の精神と 日本精神(5) -
 「未開人」の精神地理学 櫻澤如一
7. 4 満洲国に万靈供養塔 釈尊仏舍利塔と
 共に建設
7. 4 南方進出に備ふ、「神戸回南会」結成
7. 4 米英依存を精算 新中国建設思想運動
 展開
7. 4 岐阜東別院が 支那語講習
7. 4 中支宗教事情 甘城氏に聴く
7. 4 中支の支那僧 昨日黄檗へ
7. 4 南方派遣の 官吏銜
7. 4 満洲遺跡調査
7. 5 総工費百五十万円を投じ ジャバに大
 忠霊塔建立 住民も赤誠込めて一銭献
 金
7. 5 建国十周年期し 満洲開拓奉仕隊出動
 拓土感謝勤勞と現地修練 東本願寺
7. 5 共栄圏の観光団に「国体」と「日本
 精神」
7. 5 南方の宗教行政確立に 現地へ専門係
 官を派遣 村上宗務官等六氏発令さる
7. 5 宗団法実施後の状況や 南方宗教対策
 で 文部省委員会の初会議
7. 5 ビルマの戒律を大乗的に パ・モ博士
 の進歩的仏教改革論
7. 7 中外戦線 回教民族 の結合 古野清
 人
7. 7 中国の若き学徒に 太子十七条憲法を
 講義 感激語る 杭州仏大の西谷順誓氏
7. 7 南方の指導者養ふ、サイゴンに「南洋
 学院」開設
7. 7 印度独立の可能は? 分裂政策の惰性
 脱し団結の急務
7. 7 ガンヂー・会議派の決意 回教諸国の
 民族運動熾烈
7. 7 大東亜建設の宗教活動根本策 教界内
 外の権威者を網羅 翼賛会が「調査会」
 を組織
7. 7 宗務官として南方へ 大谷演慧准連枝
 大派宗務総長の御曹司
7. 7 兄弟は家族に発展 四海同胞は親子の
 関係
7. 7 宗教の南方進出
7. 7 大東亜文化工作研究会 曹洞宗に設置
 さる
7. 8 中国青年の 思想的覚醒
7. 8 北支那建設の奉公 橋樑
7. 8 南方建設と 宗教問題語る 林大將を
 中心に

1942. 7. 8 奉天忠霊塔 盆まつり
7. 8 留学生に贈る“志士の家” 大東亜留
学生会結成
7. 8 留学生教育の徹底 天理教が寮を特設・
指導
7. 8 菅沼貞風讃ふ
7. 8 “支那時報” 廃刊
7. 8 関東州仏教総会 華々しく発会
7. 8 南方に研究開拓のメス 学界の権威者
を派遣
7. 8 南方要員錬成に 政府、翼政会協力し
て促進
7. 8 南方進出者の 適格証明制度
7. 8 黄檗興亜院 きふ始業式
7. 9 共栄圏の米、豆を 神饌田に播種 ○
○船が広田神社へ奉獻
7. 10 暑休に京大科学陣出勤 大陸の調査研
究と勤勞
7. 10 宗教的「志士の家」運動 大東亜共栄
圏内の留学生 中心に西本願寺の計画
7. 10 青年南方文化協会 あす発会式挙ぐ
7. 10 日本とビルマに道場を 両国仏教徒の
握手に建設
7. 10 大阪大東亜同願会 馬來語第二期講習
7. 10 ボース氏著 印度を語る 書評
7. 11 我国が初めて接する回教民族 理解は
必要・下手な対策禁物 元公使、笠間
泉雄氏語る
諸外国も屢々失敗 我国の方針に好
き参考
南方経営と回教 彼等の生活習俗に
通ぜよ
東洋本来の精神 宗教復活育成に心
がくべし
7. 11 満洲建国十周年 慶祝仏教徒大会 日
程、記念事業決る
7. 11 アメリカ文化駆逐 南京中央大学の
新粧
7. 11 ビルマ仏教 轉換期の前夜 僧侶が転
業を出願
7. 12 畏し北白川宮様の御仁慈 大東亜仏教
圏のお盆まつり 井野拓相も部下英靈
に拈香
7. 14 宗教工作員囑託 中支宗教大同連盟
7. 15 中外戦線 南方仏教の更新 増永靈鳳
7. 15 共栄圏内各民族が 共に祈る大東亜戦
争の完遂 今秋、北京紫金城で執行
7. 15 日本の仏教美術通じ 一段と親日感を
増強 ハノイ仏教総会長のメッセージ
7. 15 現住民は歌ふ「愛国行進曲」、「曉に
祈る」 新生比島を語る 片山正見氏
7. 15 怨親平等の 追悼法要 華僑仏教興亜
会
7. 15 軍部代表を中心に 諸問題を論議した
南方文化工作座談会 貴重な指針と
示唆とを提供 本社主催
7. 15 全アラビア回教徒 の宿願達成を約す
ム首相、フッセーニ師へ
7. 15 満蒙開拓地の 布教者訓練
7. 16 ビルマ僧の生活革新
7. 16 満洲建国十周年を祝ふ 宗教使節の派
遣陣容内定
7. 16 芸文報国へ邁進 満洲国十周年慶祝
「芸文週刊」の行事決る
7. 16 ジャバに神社 忠霊塔をも建立
7. 16 泰へ親善使節僧 日泰寺から特派
7. 16 奉天忠霊塔 お盆賑ふ
7. 16 支那大陸の神制確立 先づ大使館で基
本調査
7. 16 『大東亜建設と宗教』 文部大臣賞懸け
て 宗団中央委員会が募集
7. 16 本願寺興亜 学院を語る 益永普行
7. 17 漢字制限の本旨に則り 宣伝文も平易
な日本語で 大東亜宣伝連、委員会
で対策
7. 17 南京西別院 入仏式盛大
7. 17 満洲建国神廟 新たに御造営の御沙汰
7. 17 本願寺興亜 学院を語る 益永普行
7. 18 光榮に輝く從軍宗教家 西本願寺南京
別院横湯輪番 畏し、勲六等瑞宝章を
賜ふ
7. 18 北京、八峰山上に 忠霊塔近く竣工
7. 18 拓土に寺を建つ 北滿に曹洞宗が
7. 18 桑原少佐に 南方を聴く 京都府仏教
会
7. 18 盛んな朝鮮基督教 日本の性格に更生
牧野同志社社長視察談
7. 18 名も中国救世軍 北京を本部に新発足
7. 18 初等教育普及と 実業教育の振興 比
島の市立学校開く
7. 18 南方への拠点に 近く天理教香港進出
か 華南伝道庁の準備
7. 18 東黒馬劉で勤勞奉仕 更に拓地感謝慰
問 お東の奉仕隊日程決る
7. 18 アジア問題 研究講習会 常磐博士渡
支
7. 19 大陸神社制度 の確立に就いて
7. 19 大陸その他の要地へ 若き三連枝送る
宗務官・開教使晴れの壮図
7. 19 仏教徒代表決る 満洲建国十周年記念
大会派遣
7. 21 南方仏教諸国二千年来の行事 仏陀祭、
日本でも営む 大東亜戦争下意義一入
深く
7. 21 訓練所も満人教化も 政府理解のもと
に 豊田西本願寺興亜部長談
7. 21 大東亜思想圏の確立 ありのままの水
であれ 參謀本部桑原少佐信念を吐露
7. 21 パーリ文化 研究のゆくて 東元多郎
7. 22 地下水の囁き(上) (満洲より帰って)
西田天香
7. 22 昭南神社と忠霊塔 聖地拡張の第二次

1942. 7. 22 計画成る
 7. 22 東=亜=教=育=大=会 満洲建国十周年記念 今廿二日から新京で
 7. 22 大同は石仏一色 に塗りつぶさる 谷大道端氏語る
 7. 22 満洲建国十周年祝し 神社界からも使節を派遣 現地で神祇講演会も開催
 7. 22 海南島の 本願寺 寄合世帯は駄目
 7. 22 パーリ文化 研究のゆくて 東元多郎
 7. 23 地下水の囁き(中) (満洲より帰りて) 西田天香
 7. 23 米英權益処理と 宗教及び思想工作について 藤井静宣
 7. 23 日本中心の新世界観 文部省編纂「大東亜史」 斯学専攻の学者三十余名に依頼
 7. 23 詔勅精神振興会 鮮満に講座
 7. 24 地下水の囁き(下) (満洲より帰りて) 西田天香
 7. 24 東亜留日学生会 関西に支部
 7. 24 諸方面待望下に躍進する 池田市仏教会の 朝鮮人教化運動
 7. 24 日蓮宗の行軌 半島同胞鍊成 寺院住職の鍊成続く
 7. 24 政教兩頭主義の「アラブ」国家建設 西亜大同団結の機運
 7. 24 西本願寺開教史に 画期的具体案 異民族開教で近く答申
 7. 24 南方の宗教行政に専任する 民間側採用係官も発令
 7. 24 関東州仏教 総会の結成
 7. 24 パーリ文化 研究のゆくて 東元多郎
 7. 25 日本民族と共栄圏 小野寺輝夫
 7. 25 一日一語 漢人
 7. 25 東方協会本部を 日本に置くべし 世界政策からも重要
 7. 25 正しき奉斉と 行政の単一統制 海外神社課の創設を提唱 外地神社
 7. 25 入植当時の英霊弔ふ 星深き夜の感激 東本満洲奉仕隊便り
 7. 26 南方文化工作の 理念と軍の態度 南方文化工作座談会(一) 本社主催
 7. 26 日本民族と共栄圏 小野寺輝夫
 7. 27 パラオからモシモシ お東さんの喜びのふ、朝の六分間
 7. 27 公文書は日本語と タガログ語と決定 比島軍政部で公表
 7. 27 満洲建国十周年と西本願寺
 7. 27 黄檗興亜局 支那語講座
 7. 28 南方文化工作の 理念と軍の態度 南方文化工作座談会(二) 本社主催
 7. 28 大陸事業部を拡充 大東亜部設置か 基青同盟近く総会で協議
 7. 28 『大東亜と音楽』 音楽は神からの与へもの
 7. 29 南方文化工作の 理念と軍の態度 南方文化工作座談会(三) 本社主催
 7. 29 大陸進出の 宗教戦士養成 今秋、興亜院の指導で
 7. 29 偲ばれる豪華絵巻 満洲建国十周年を祝ふ 新京に基督教大会
 7. 29 教派神道も 満洲大会
 7. 30 南方文化工作の 理念と軍の態度 南方文化工作座談会(四) 本社主催
 7. 30 満洲建国 十周年慶祝 宗教使節決る “興同” 自主的に 強力な実践運動 枢要都市に支部設置
 7. 30 西藏留学やめて 日本へ留学を 満蒙奥地から帰った 橋爪義隆氏語る
 7. 30 台湾基督教団体一九に 基督教公会結成 八月七日発会式挙ぐ
 7. 31 南方文化工作の 理念と軍の態度 南方文化工作座談会(五) 本社主催
 7. 31 共栄圏共通の理念に 教育勸語を奉戴 東亜教育大会の成果
 7. 31 振袖も支那服も 日華盆おどり 天津東本願寺の賑ひ
 7. 31 華僧や居士と 共に日華親善 渡辺徹然氏談
 7. 31 中国基督教の 転身を機に 大陸伝道の再建論起る 東亜伝道会の去就注目さる
 7. 31 南方夏期大学 大阪南方学院が開く
 8. 1 日本民族と共栄圏 小野寺輝夫
 8. 1 南方文化工作の 理念と軍の態度 南方文化工作座談会(六) 本社主催
 8. 1 昭南神社上棟式
 8. 1 日満華軍官民参列 済南神社鎮座祭 更に第二期工事に着手
 8. 1 日本語、日本史を正科に 毎年五百名の留日学生送る 新生ビルマの文化建設
 8. 2 南方文化工作の 理念と軍の態度 南方文化工作座談会(七) 本社主催
 8. 2 中外戦線 民族の夢 上泉秀信
 8. 2 胎教で半島同胞教化 皇国民としての魂持たす
 8. 2 入植以来初めて 聴く読経に感激 東本願寺満洲奉仕隊便り
 8. 2 支那大陸の新伝道地 興亜院より正式に認可
 8. 4 東亜教育大会の成果
 8. 4 南方文化工作の 理念と軍の態度 南方文化工作座談会(八) 本社主催
 8. 4 満洲国派遣 未だ脱けぬ拜欧思想 東京音楽学校演奏団の 指揮者に外人とは何だ
 8. 4 拓地から馬で 死者の法名貰ひに 大派満洲奉仕隊便り
 8. 4 正論吐く・米国評論家 東亜に新しい世界 最近の同方面旅行印象記
 8. 5 南方文化工作の 理念と軍の態度 南

1942. 8. 5 方文化工作座談会(九) 本社主催
 南方文化工作 個人的色彩を離れて
 あくまで国家的立場で 仏舎利安置に
 慎重論起る
8. 5 泰国大使館内に 仏舎利安置所建立
8. 5 日・仏印の 古美術交歓 萌黄緘の鎧
 等贈る
8. 5 得難き逸品ばかり “天下第一”の未
 刊書その他 帝都に展く絢爛満洲国宝
 展
8. 5 トラピスチン外人修女 経営を邦人に
 譲り 仏印に新修院開設
8. 5 中国人開教への試み 北京大広場で伝
 道 西本願寺北支開教総長 津村雅量
 氏談
8. 5 探し当てた次代の活仏 満洲国内蒙古
 民族の大満悦
8. 5 絶対崇拜の活仏 転生の思想を語る
8. 5 変り種留学生 お西に登場
8. 5 興亜宗教調査会の 組織・人選も成案
 常任理事会で正式決定
8. 5 拓南錬成所 下旬に開所
8. 5 満洲から 青年仏徒
8. 6 南方文化工作の 理念と軍の態度 南
 方文化工作座談会(10) 本社主催
8. 6 世界に紹介する 南方の仏教事情 独
 仏英文で編纂 国際仏教協会から刊行
8. 6 南へ送れ、古雑誌 読物に飢ゑる皇軍
 将兵
8. 6 全鮮に未曾有の皇民運動 内地、朝鮮
 各仏教と総督府の結合
8. 6 日華要人を訪ね 仏教徒の提携懇談
 褚外交部長の歓迎 渡支した日華仏研
 一行
8. 6 朝鮮寺院の籍変へ
8. 7 タイ国仏教に 対する文化工作 津田
 敬武
8. 7 南方文化工作の 理念と軍の態度 南
 方文化工作座談会(11) 本社主催
8. 7 仏教による南方文化工作 政府は計画
 の一元化を 仏舎利安置問題愈よ重視
 泰国民の“心”を伝ふ 仏舎利捧持、
 外相近く来朝 仏教会が奉迎、安置策
 練る
8. 8 タイ国仏教に 対する文化工作 津田
 敬武
8. 8 南方文化工作の 理念と軍の態度 南
 方文化工作座談会(12) 本社主催
8. 8 ポロブドル 再興につき 仏教家に訴
 ふ 関昌祐
8. 8 帰満してからの 成績がよくない 日
 本留学僧の反省期 満洲留学生語る
8. 8 日華親和に また紅一点
8. 8 米英の皮囊を打破 日本精神愛を注入
 基青同盟大東亜部を設置
8. 9 タイ国仏教に 対する文化工作 津田
- 敬武
8. 9 南方文化工作の 理念と軍の態度 南
 方文化工作座談会(13) 本社主催
8. 9 日本語による 満洲国新国家 十周年
 式典前後に完成
8. 9 国宝や代表美術をグラフに 国際仏協
 がビルマ語で編纂 仏教美術による文
 化工作を
8. 9 日本留学僧の 反省期に入る 満洲留
 学生語る
8. 9 仏舎利安置に慎重論
8. 9 基督教教育同盟の 中国派遣者決る
 代表は二名共関西側
8. 9 印度展と宗教部
8. 9 満洲国土開発に 打込む感激の鉄 天
 理教開拓奉仕団通信
8. 11 タイ国仏教に 対する文化工作 津田
 敬武
8. 11 南方文化工作の 理念と軍の態度 南
 方文化工作座談会(14) 本社主催
8. 11 中外戦線 解放途上 の印度 古野清
 人
8. 11 一日一語 清朝 本田□軒
8. 11 日泰国民の心の結びへ 光栄と歓喜も
 て仏舎利奉迎
8. 11 満洲国開拓村 お西の入植者
8. 11 満華泰仏印 巡回美術展 京都内示展
8. 11 中国教界の情勢に即し 三事業を開拓
 阿部中支宗連理事長の談
8. 11 最初の中華人 宗教教師の錬成 仏教
 に次いで基督も開催 中支宗教大同連
 盟が
8. 11 各地へ留学僧派遣 具体化して募集開
 始 台宗の大東亜共栄圏
8. 11 濟南祭政会 活躍注目さる
8. 11 法衣姿の高岳親王尊像奉祀 御造営中
 の昭南神社に
8. 12 タイ国仏教に 対する文化工作 津田
 敬武
8. 12 南方文化工作の 理念と軍の態度 南
 方文化工作座談会(15) 本社主催
8. 12 南方大学移動講座 宗教家の応募期待
 印度ネシア協会
8. 12 石沢氏の遺骨 二十五日帰還
8. 12 華北に新教団の結成 中文に日華連合
 会組織 中国基督教界頓に活発化
8. 12 満洲肯定の遠祖 聖宗と日本漂流人
 三百年前の深い関係
8. 12 日華“和ぎの心” 古典特使を派遣
8. 13 タイ国仏教に 対する文化工作 津田
 敬武
8. 13 満洲国も神麻奉斎 惟神の道に国本を
 奠む
8. 13 大東亜同願会 馬來語部会
8. 14 満洲留学生婦 国後の成績
8. 14 四億中国民衆の 偽らざる告白 常磐

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1942. 8. 14 博士上海講習の反響
内地全勢力を 満洲国弘立村へ 是非
僧侶指導員を送れ
8. 14 “満洲開拓の菩薩” 分骨を戦死者墓
地へ
8. 14 窓
8. 14 満洲の惟神道場宣揚に 日満神社行政
の一元化を 現地神職等が当局に要望
8. 14 北京の華人女学生 光華高女へ留学
8. 15 抗日意識絶滅
8. 15 南方文化工作座 談会速記録正誤
8. 15 現地の部隊長が 部下を布教使に 西
本願寺へ推薦
8. 16 台所を失った五台山 復興には基本的
調査が緊要 古川大航氏北京で語る
8. 16 全国引揚者の生活調査 京大建築学教
室で開始 南方の体験活用
8. 16 天理教満洲開 拓奉仕団便り
8. 18 中外戦線 原住民族 の擬態 古野清
人
8. 18 日支文化交歓に功績あった 来朝儒者
と高僧の顕彰 国際文化振興会で計画
進む
8. 18 巡回コース最北端へ もの凄い大草原
往く 大派満洲勤労奉仕隊だより
8. 18 浄土宗全満 開教使会議
8. 18 満洲の神祇問題 正しき進展に寄与を
皇典講究所で研究計画
8. 18 仏立開拓団の 総本部を新京に置き
講政会議に提案
8. 19 満洲開拓国民運動 全国的にまき起す
聖蹟十周年記念に
8. 19 満拓青年義勇隊 嫩江大訓練所を訪ふ
8. 19 拓南錬成所、神戸に設置
8. 19 開教文化の総合研究 ジャバに図書館
と研究所 回教徒間に好反響起す
8. 19 新比島の精神的 基礎を確立せよ 喪
はれた文化の救済 本間声明にサ博士
答ふ
8. 19 大東亞同願会集會
8. 19 興亞宗教活動促進に 報道陣営も協力
翼賛会に興亞宗教記者会
8. 20 対外宗教思想戦実行概要(上) 代議
士 高見之通
8. 20 蒙古に起る文化の嵐 草原から文盲一
掃へ 先づ「識千字運動」展開
8. 20 興亞宗教運動の促進へ 興亞宗教記者
会結成
8. 20 華北 新民精神を基調に 東亞解放の
新国民運動
8. 20 満拓青年義勇隊 嫩江大訓練所を訪ふ
8. 20 西藏版の蔵経 知恩院満蒙会館へ 錦
州省恵寧寺から寄贈
8. 20 満洲風物展
8. 20 巴利文化学院 第四期生募集
8. 20 南方の日本語教育 文部省に普及協議
会設置 教科書編纂・教員も派遣 閣
議で決定
会話書・辞書も編纂
8. 20 輝く昭南島に “日本” を学ぶ お西
の日本語学校
8. 21 対外宗教思想戦実行概要(下) 代議
士 高見之通
8. 21 教界内外の識者を動員 大東亞の宗教
問題研究 興亞宗教同盟が調査会結成
百万会員目指し 興亞同盟の積極活
動 大東亞各地に支部を
8. 21 仏舍利恭迎準備成る 答礼使節も派遣
仏教会評議員会で決定
8. 21 本格的となった 日華仏教の交流 藤
實正憲氏談
8. 21 監禁中のガンチー印度民衆の信仰 理
論を超えた至上命令
8. 21 満洲の基督教開拓村 第二次二百戸入植
都市転業者も歓迎
8. 21 西藏蔵経の翻訳や ラマ中学の建設
現地のラマ革新事業 知恩院
8. 21 支那、印度に告ぐ 古い文化の自惚れ
を捨てて 大東亞文化共栄圏に挺身せ
よ
8. 21 満洲開拓第二期計 画の答申案決定す
8. 22 ビルマ再建の鍵は 先づ女性の自覚か
ら 日本へ女学生を招致せよ
8. 22 大谷家より離脱し 日泰親善に晩年捧
ぐ 泰國に骨埋む句仏前門主
8. 22 南方圏研究会 積極的活動へ
8. 22 日華聖書協会の提携 案外早急に実現
か 日本側近く代表を派遣
8. 22 重慶対支那回教軍 一戦交へるか 西
北中央化問題紛糾
8. 23 国民政府樹立には 如何なる宗派とも
協力 インド回教徒連の言明
8. 23 大陸に連絡所設け 興亞事業の統制強
化 大日本仏教会興亞局が 内外呼応
して進展を
8. 23 中文の宗教対策強化 神仏基代表を派
遣 現地で大同連盟と協議
8. 23 法律と「みのり」 - 「未開人」の精
神地理学 櫻澤如一
8. 23 米英に代る輸血は無用 中国教会の自
給達成は 全て中国人に一任せよ 清
水安三氏談
8. 23 蒙疆にも惟神道 雲王神社創建 自治
政府に委員会組織
8. 23 北京の聖者に聴く
8. 23 仏印からセデス氏 大日本仏教会の招
聘で 十月来朝と決定
8. 23 日華親善の礎石に
8. 23 民族学協会発会式
8. 23 大東亞資源館発 起人会で協議
8. 25 興亞宗教記者会 帝国ホテルで発会式
8. 25 民族と経済

1942. 8. 26 興亜宗教同盟に与ふ
8. 26 諸般の構想全く成り 愈よ活発な実働に入る 高岳親王奉賛会会則決る 文部省も積極的に支援 当局の方針を当事者に指示
8. 26 曹洞満洲開教の功勞者表彰 建国十年に当り
8. 26 専門機関を設置し 蒙疆の宗教行政を確立 ラマ教近く教団として出発
8. 26 晋北民衆に示す 結婚年齢は満十五歳以上 回教徒が率先実施
8. 26 回、印教徒は団結決起し 压制者、英を放逐せよ フッセイニ大法官、印度へ叫ぶ
8. 26 支那の性格を知れ 東京基督青年會で支那を語る清水氏
8. 27 東本願寺の画期的壮挙 南方美術史跡調査隊 アンコールワット中心に泰・仏印に派遣 学界注視・成果刮目さる 調査隊顧問に 松本、天沼博士等推戴
8. 27 現地日本語生の劇で “日本” の理解を 昭南島西本願寺の活動
8. 27 南方の宗教工作に 具体的な方針を示せ 責任ある機関の確立要望さる
8. 27 対外諸伝道団を統合 興亜局を設置せよ 日基に国外伝道再検討論
8. 27 大東亜の歴史を再検討 新秩序建設の観点から 「東亜史概説」 具体案進む
8. 28 中外戦線 国語政策と英国 本荘可宗
8. 28 日滿兩國は同甘同苦 相携へ一億一心の實を 日本仏教使節団一行 今次訪滿に際して声明 訪滿仏教使 節団の顔触
8. 28 南方の適正なる認識を 保護事業関係者の講習
8. 28 濟南西本願寺 本堂工事完成
8. 28 神社尊崇にやや遺憾 開拓団員に反省求む 大派満洲奉仕隊隊長談
8. 28 南方建設と 宗教問題 林大将を中心に
8. 29 林総裁他幹部異動し 興亜宗同陣容整備 宗教協力会議の準備も進む
8. 29 主事級を現地派遣し 大東亜青年を建設 基育の南方進出第一歩
8. 29 奉天教派神道 總會支部結成
8. 30 大東亜戦下使命達成 建国十周年慶祝 仏教大会 國都に展く三日間の盛儀
8. 30 高岳親王奉賛 陣容近く決定 二日発起人会
8. 30 回教問題講習 奉天回教研で開催
8. 30 支那を語る 清水安三
9. 1 「東亜史概説」の編纂
9. 1 中外戦線 印度のイスラム問題 古野清人
9. 1 “興亜記者会” 生る 八日、大詔奉戴日に発会式
9. 1 漢口西本願寺に 大仏具等を下附
9. 1 蒙古深く老翁病む 日蒙親善の太田翁
9. 1 同信同願の青年仏徒が 共榮團確立の協力策を 興亜仏青會議の提唱起る
9. 1 常磐博士北支へ
9. 1 夏日本社員ら 一路新京へ
9. 1 支那を語る 清水安三
9. 2 元寇の偉業憶ふ 祖元禪師や時宗卿に感謝の法楽捧ぐ
9. 2 学術文献蒐集と 南方文化の調査に 学術調査団第一班先発
9. 2 新生途上のマニラで 天主教の折念祝典 信徒運動廿五年の業績
9. 2 コ島を慰問 タバオ旭氏
9. 2 興亜宗教運動の根本策確立に 学界総動員の調査会組織 けふ、常任理事会で構想決る
9. 2 興亜宗教協力會議 明春に延期、慎重な準備 滿支連絡員の折衝進む
9. 2 学術文化通じ 日華の親善 東亜文化協議会
9. 2 金陵女子技芸学院 学監に沢井竜雄
9. 2 支那を語る 清水安三
9. 3 南方で邪魔になる 「文化工作意識」
9. 3 大東亜の建設と 基本語の一本建て -アイウエオを伝えてゐる印度- (一) 日本大学講師 高橋善中
9. 3 マレーから印度へ轉轉 二百余日の抑留生活! 今懐しの祖国への船路 曹洞の堀江開教使帰る
9. 3 昭南島の土と化した 同胞苦悶の数々 ◇…西有寺開創の縁起に見る
9. 3 共榮團各民族と折る 興亜の大祭典 華北の計画進む
9. 3 開拓民30万戸に 応へる仏立講開拓団
9. 3 支那稀覯書 立命館図書館へ
9. 3 英靈に感謝 日滿盆踊り
9. 3 名手日本の指導下に 育てよう “強き国” 蒙古 成吉思汗精神に徹せよ 新生蒙古に強き国民運動
9. 3 開拓地最初 の寺号公称 埼玉村に蘭香寺
9. 3 支那を語る 清水安三
9. 4 大東亜の建設と 基本語の一本建て -アイウエオを伝えてゐる印度- (二) 日本大学講師 高橋善中
9. 4 満洲建国十周年に 日本宗教代表招く 朝倉(仏教)、真鍋(基教)両氏
9. 4 大東亜の文芸復興諮る 明治節に共榮團文学者會議
9. 4 満洲国宝 綴れ織の新発見 縦糸の謎を解く
9. 4 大東亜一民族の構成 小松堅太郎氏の興味ある示唆
9. 4 玄中寺調査団 龍大側派遣員

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1942. 9. 4 若人に南方 基礎知識を
 9. 5 大東亜の建設と 基本語の一本建て
 -アイウエオを伝えてゐる印度-
 (三) 日本大学講師 高橋善中
 9. 5 霊地、五台山の秘庫を探る 西藏蔵經
 の学的調査 月輪龍大教授の帰朝談
 完備したのが 完全に保存さる 明
 確に実証した数々
 ラマ僧の不行跡は誤り 五台山は飽
 く迄支那 四億民衆崇敬の霊地
 9. 5 「大東亜博物館」 文部省で設立を研究
 9. 5 五台山の基本調査必要 六系統の仏教
 とラマ教 東方文研 塚本善隆氏の報
 告
 9. 5 故永久王殿下の御英霊に 蒙疆の現地
 にて御回向 輪王寺門跡長沢大僧正
 恐懼感激の極み 御霊薬まで賜る
 長沢徳玄大僧正講話
 9. 5 大東亜宗教協力会議 共栄圏内各地代
 表と予備会議 興宗同盟が新京で開く
 9. 5 満洲建国十周年 慶祝仏教大会終る
 9. 5 日華基督教連合会結成 中文教会の合同
 目ざし
 9. 5 高岳親王奉賛 会慎重を持す
 9. 6 大東亜の建設と 基本語の一本建て
 -アイウエオを伝えてゐる印度-
 (四) 日本大学講師 高橋善中
 9. 6 高山右近の聖祭 由縁も深いマニラで
 9. 6 仏印仏教の智的総覧 漢、安南語によ
 る仏典略編 「国際仏教」苦心の編纂
 成る
 9. 6 初の日本人会員に 仏印の仏教総会が
 元総領事長田氏を推す
 9. 8 中外戦線 民族博物 館の建設 古野
 清人
 9. 8 大東亜の建設と 基本語の一本建て
 -アイウエオを伝えてゐる印度-
 (五) 日本大学講師 高橋善中
 9. 8 日・仏印の文化交歓 仏印から代表的
 仏教書 国際仏協へ到着
 9. 8 半島同胞の赤誠 献納陸軍機二六二台
 9. 8 中国僧光松君本葬
 9. 8 満洲建国十周年慶祝 張総理も参列・
 仏教大会 国都に渦巻く “瑞雲十字章”
 第一日 一国を一信に連ねて 興亜
 の聖談に貢献 張國務総理信念を説く
 第二日 殉国英霊追悼会 大醒法師
 ら満華僧も出座
 第三日 国本奠定詔書の聖旨恭戴
 世界新秩序建設の礎石に 関東軍・國
 務総理等に感謝状 単なる依存は不可
 俱に協力促進へ 満洲仏教の活動展
 開
 9. 8 日華満より南方へ 大東亜仏教徒協会
 大醒法師結成を要望す
 9. 8 教団章程案成り 中国基督教新教団
 結成準備大会開く
 9. 9 中外戦線 大東亜の 宗教方策 増永
 靈鳳
 9. 9 仏縁に結ぶ朗景 大醒、皓如法師と再
 会 慶祝仏教大会に拾ふ
 9. 9 流刑の地比島の聖堂で 祖国の交流を
 祈念 右近のマニラ生活記発見
 9. 9 日仏文化の交換と 南方仏教の紹介
 セデス遠東学院長の日程
 9. 9 中文の宗教活動強化 現地で内外代表
 者会議
 9. 9 南方国策の 完遂に協力 仏教翼賛講
 演
 9. 10 中外戦線 大東亜博物 館の礎石 赤
 神良護
 9. 10 回教と提携し 支那古刹の復興 北支
 濟寧に描く 西本願寺中心の大東亜調
 9. 10 金光教日語学院 南京・北京の活躍
 9. 11 共栄圏に於ける 民族指導の問題 高
 階省三 一 二
 9. 11 南方宗教工作事項も 「大東亜省」内
 に移管か 文部省教化指針発表を保留
 9. 12 共栄圏に於ける 民族指導の問題 高
 階省三 三
 9. 12 中外戦線 ガンジー運動 の宗教的意
 義 倉田百三
 9. 12 海外放送でも堂々進攻 敵国側も權威
 を以つて迎ふ 鎬を削る電波戦に聴く
 9. 12 この目で見た 豊富な南方資源 現地
 から帰った登坂氏談
 9. 12 天理教対支 派遣布教師 鍊成会延期
 9. 12 日華仏教研究会
 9. 12 釜山西別院に 思想保護所
 9. 12 高階越山貫 主朝鮮巡錫
 9. 13 共栄圏に於ける 民族指導の問題 高
 階省三 四
 9. 13 ラマ教改革の具体策 内外蒙古に大蒙
 帝国建設
 9. 13 皇民鍊成に拍車 朝鮮天主教会の活動
 9. 13 対支布教師 鍊成会決る 十一月五日
 から
 9. 13 華北蒙疆神職会が 現地神職養成に
 皇学館、国大に留学生派遣
 9. 13 支那浄土教發生地 玄中寺の日華合同
 曇鸞大師大法要日程決る
 9. 13 華北神連 布教師講習
 9. 13 「耳」と「眼」で融合 興亜運動の目
 的達成へ
 9. 13 中国青年僧の鍊成会 中支蘇州 一井
 宗元 (上)
 9. 13 撫順から
 9. 15 満洲建国十周 年と諸大会
 9. 15 共栄圏に於ける 民族指導の問題 高
 階省三 五
 9. 15 中外戦線 南方圏の 倫理性 古野清
 人

1942. 9. 15 国都新京に多彩な慶祝調 けふ、満洲
建国十周年記念式典
9. 15 忠霊廟の勤勞奉仕 満洲国教派神道総
会 慶祝大会の盛況
9. 15 皇帝陛下率先敬神御垂範 橋本祭祀府
総裁と語る 建国神廟御遷座後一般参
拝を許可
9. 15 在支神社制度の確立 土田参事官を委
員長に 華北蒙疆神職会で調査
9. 15 中国青年僧の鍊成会 中支蘇州 一井
宗元 (下)
9. 15 満鮮から
9. 16 教益を求め日本へ (泰国赴任の感想)
満洲国 鄭禹
9. 16 印度の過去 現在を闡明
9. 16 哈爾濱通信
露語留学生らの基地 東本願寺別院
両烈士遺骨祀る
9. 16 曠野に鋏を振ふ 妙興禅林奉仕隊 成
果をおさめて帰国
9. 16 中国人に愛のメス 基青 南京に診療
所開設
9. 16 満人のみの天理教会 婦人の満系教師
もゐる
9. 17 われらは皇国の使節 “海外同胞訓”
と“誓” 制定 毎日電波に乗せ呼びか
く
9. 17 神道家の挺身報国誓ふ 満洲国教派神
道総会と慶祝大会
日系全家庭に 神棚奉斎運動 盛ん
な臨時大会
9. 17 満洲基教の慶祝大会
9. 17 建国忠霊廟 勤勞奉仕
9. 17 興南鍊成院 十月一日開院
9. 17 布教監督設置 開教使の徵用 臨濟教
務所長会
9. 17 沙河口神社の 儀式殿上棟祭
9. 17 “蘭香寺”を創建 大派拓地開教に一
エポック
9. 18 民心の把握は教育と宗教 中支北支は
基督教の持場 事変完遂の要諦 牧野
氏談
9. 18 浄土宗台湾 開教監督 吉永氏起用
9. 19 無我的国家日本 或満系学生との問答
(上) 伊藤證信
9. 19 哈爾濱通信 國際都市にワッショ ワッ
ショ 豪快な神輿渡御
9. 19 開拓の英靈と戦士に 贈る“土を拝む”
お東から全開拓団へ
9. 19 開拓奉仕の 感激を語る 天理教奉仕
団 土佐断腸ら來社
9. 19 印度を語る
9. 19 大東亜戦下 半島の皇民徹底運動 総
督府と三十本山 内地各宗の総参加
9. 19 三笠開拓団で 大派現地訓練
9. 19 満洲建国の理想に鑑み 開教を如何に
すべきか 仏立講が新京で代表協議会
9. 19 京城西別院の 龍谷女塾開校
9. 20 無我的国家日本 或満系学生との問答
(中) 伊藤證信
9. 20 大東亜仏育大会 明春五月東京で開く
大日本仏育理事会で協議
9. 20 華北政務委員会内に 宗制討論会を設
置 北支宗団法準備のため
9. 20 中国宗教官庁 の人事異動
9. 20 北支玄中寺に於ける 曇鸞遠忌を迎へ
て 菅原惠慶 (上)
9. 22 中外戦線 植民文学 について 古野
清人
9. 22 無我的国家日本 或満系学生との問答
(下) 伊藤證信
9. 22 高岳親王奉賛会 愈よ廿八日発会式
9. 22 華北との連絡に 北京に連絡委員会設
置 安田大日本仏教会副会長談
9. 22 大東亜理念に基づく 新神学樹立を哺
育 北文内務総署講座
9. 22 大東亜共榮圏は 先づ母の力から 日
緬文化協会結成
9. 22 建国神廟を拝す 万代揺かぬ聖域 東
洋美術の精聚む忠霊廟
9. 22 北支玄中寺に於ける 曇鸞遠忌を迎へ
て 菅原惠慶 (下)
9. 23 華北新教団の一翼 山東諸教派合同
日基教団の指導を要望
9. 23 半島同胞の各戸に 仏壇安置運動 独
力、協和夜間学院も開設 大派大聖寺
教区
9. 23 日、仏印学生交換 来春より愈よ実施
9. 23 東本願寺が 香港に開教 松本開教使
着任
9. 24 当時の日華 交流を物語る 僻遠の余
姚になほ残る櫻樹 卅年前水野氏が植
樹 朱舜水の遺跡に香る
9. 24 赤道直下の奇遇 “御連枝”さんがと
りもつ 世界的画伯と従軍画家
9. 24 興亜教育実践の体験談 各府県代表が
発表報告 帝国教育会本年度の教育祭
全国初の試み
9. 24 全東亜諸民族に 日本の母の力を同化
先づ日満の家族的共同体から
9. 24 大派天津別院 創立四十周年 記念法
要管む
9. 24 日本人の再日本人化 急務を説く独逸
哲学者 亜細亜の為の亜細亜音楽の創
造へ
9. 24 神戸に南方医専 設立計画進めらる
9. 24 大東亜文化講座 京都宗教文化連盟
9. 26 遐想 “アンコール・ワット” 角田
素江 一
9. 26 建国の元勳鄭孝胥翁祀る 大夷宮の十
周年奉祝祭 感慨深く鄭駐泰大使も参
列

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1942. 9. 26 満洲神化会 記念奉告祭
 9. 26 興亜宗教会議打合せに 満洲国と現地
 会談 各宗団欣然参加を表明
 9. 26 神道と道教は同宗旨だ 満洲道教の総
 本山太清宮 岳監院らと語る
 9. 26 泰語講習会
 9. 26 満洲建国十年 お祭り参列記 落合か
 んも (上)
 9. 27 瞑想 “アンコール・ワット” 角田
 素江 二
 9. 27 呼び戻す “日本の母” の心 天津西
 別院西脇輪番談
 9. 27 ポナベ西本願寺 正式に認可さる
 9. 27 満洲建国十年 お祭り参列記 落合か
 んも (下)
 9. 29 内鮮一体の聖地扶蘇山に 扶餘神宮御
 造営進む 朝鮮総督府当局に聴く
 国交華やかかなりし頃の 聖地扶蘇山
 に鎮座 河村総督府理事官講話
 御神域となる 扶餘市街移転
 扶蘇山の城址に 大伽藍址を発掘
 9. 29 共栄圏の親善へ 僕等も私達も一役を
 9. 29 半島だけの教会 既に二十ヶ所 教師
 も続々養成中 天理教朝鮮布教の現況
 9. 29 天理教華中伝 道庁長ら異動
 9. 30 瞑想 “アンコール・ワット” 角田
 素江 三
 9. 30 外国使臣の眼驚かす 新京の大神幸祭
 新京神社に詣づる記
 9. 30 南方共栄圏各地域の 皇軍慰問と現地
 視察 大派木下前参謀帰来談
 9. 30 全満開拓村の 拓導士を再教育 西本
 願寺最初の試み
 9. 30 新中国青少年の育成 金光教の上海忠
 信小学校 創立三周年式典
 9. 30 高岳親王 御事跡を顕彰 昭南に“真
 如会館”を建設 奉讃会発起人総会で
 決る
 高岳親王奉讃 会事務所開設
 9. 30 満洲国正史編纂 東西両大学で上梓
 9. 30 フレーヌ博士 北京に向ふ
 10. 1 瞑想 “アンコール・ワット” 角田
 素江 四
 10. 1 恰ら世界宗教展 まとめあげた総会九
 つ 民生部質的向上へ 満洲寺廟巡礼
 (1)
 10. 2 瞑想 “アンコール・ワット” 角田
 素江 五
 10. 2 三千年前、殷時代の 木鋤を用ふ農民
 支那農民研究=野中氏談
 10. 2 現地に呼応し 疊鸞大師法要 知恩院
 で営む
 10. 2 護国般若寺に 方丈善果法師訪ふ 華
 麗な葬送列に驚く 満洲寺廟巡礼(2)
 10. 2 朝鮮の大法要 大傳寺と若芦寺
 10. 3 昭南より 大久保弘一
 10. 3 十一月に落成入仏式 南京名物の偉容
 西別院の建築進む
 10. 3 満洲国が「勤勞奉公制」を提案 国
 兵関係者除く廿万壮丁招集
 10. 3 南方の宗教対策強化 宗教関係者の司
 政官発令
 10. 3 南方文化の建設 挺身報道要員募る
 10. 4 瀋陽萬壽寺詣で 布袋然たる省縁さん
 男人禁制の尼寺も 満洲寺廟巡礼(3)
 10. 4 半島人門徒中心に 十三末寺を創建
 鮮満国境に珍しい真宗教団
 10. 4 愈よ軌道に乗る 比島軍宗教部の新編
 成
 10. 6 印度独立運動と 国民の宗教的教養
 宮地廓慧 一
 10. 6 “支那基督教の研究” 相次ぐ学界へ
 の貢献 佐伯博士=多年研鑽の結晶
 10. 6 五台山方面中心に 山西學術調査団の
 成果聴く 神戸市民科学講座
 10. 7 台湾本島子弟の中学校 西本願寺が
 苗栗に創設
 10. 7 愈よ本格的開始 大陸進出の社会事業
 西本願寺上海福壽院診療部
 10. 7 現地関係者と会同 布教方策を協議
 三教代表者らの現地便り
 10. 8 光る仏立講 の満洲開拓
 10. 8 李王殿下の御心奉戴し 物質の都に精
 神の女性道場 大阪の中心に“大暉塾”
 創設
 10. 8 疊鸞大師遠忌 昨日知恩院で
 10. 8 満洲の仏教居士林「惜字会」居士林
 を訪ふ 大醒、如蓮法師らと語る 満
 洲寺廟巡礼(4)
 10. 9 満洲国と教派神道 満洲国建国十周年
 祝典参列より帰て 芳村忠明
 10. 9 六朝摩崖仏の発見 山西省中北部仏跡
 調査 道端谷大教授学界へ報告
 10. 9 満僧に興亜教育 日満華の団契風景
 「惜字会」居士林を訪ふ 満洲寺廟巡
 礼(5)
 10. 10 満洲国と教派神道 満洲国建国十周年
 祝典参列より帰て 芳村忠明
 10. 10 大派天津別院 開教四十周年 記念法
 要盛儀
 10. 11 南方進出と 銃後の問題
 10. 10 京大科学陣が 大挙共栄圏へ 専門研
 究を展開
 京大南方科 学研新発足
 10. 11 ヒンドゥ・マハサ バと仏教(上)
 田中於菟彌
 10. 11 宗教を通じて 防疫、医療、宣撫を
 天理教が蚌埠、懷遠に病院開設
 10. 11 仏陀祭の反響 南方諸国から感謝 更
 に仏教親善の強化要望
 10. 11 林宣伝部長の要望で 国民政府へ仏教
 書 国際仏協が日華親善に贈る

1942. 10. 11 在留邦人の 思想精神の指導 山東祭
政会が北支の 治安強化に活動
10. 11 大東亜共栄圏 確立に協力する 宗教
学の諸問題中心に 第七回宗教学大会
- 10.11 紅卍字会活動 作田代議士等視察
10. 11 満洲仏教を独立 仏教大会の意義と影
響 満洲寺廟巡礼(6)
10. 13 ヒンドゥ・マハサ バと仏教(下)
田中於菟彌
10. 13 太夷宮参詣記(上) 夏目隆文
10. 13 中国民衆と 共にある 濟寧本願寺
池尻糸導氏談
10. 13 興亜理念の共同意志結集 愈よけふか
ら東京に開く 日滿華興亜団体初会合
10. 13 国民学校女教員興 亜問題研究会結成
10. 13 八紘為宇を世界に顕現 仏、カ、回三
教を通じて 高見代議士の=宗教思想
戦進歩
10. 13 中日仏教学界を復活 常磐博士の渡支
を機に 江朝宗氏等の発起
10. 13 中国宗教界革命に 見事金字塔を樹立
華北基督教=新教団を結成
10. 14 南方は日本人に好適地 南方呆けも=
心構へ如何で解消 原住民への考へ方
を改めよ 竹井南洋協会主幹談
10. 14 太夷宮参詣記(中) 夏目隆文
10. 14 満洲回教協会本部 新京清真寺を訪ふ
きびしい戒律語る沐浴室 満洲寺廟
巡礼(7)
10. 15 共栄圏文化の確立へ 「日仏印交歓学
生協定」発効 明春から実施の要綱決
る
10. 15 南方開教に 特別監督 お西の活動
10. 15 朝鮮神宮で 献詠披露式
10. 16 太夷宮参詣記(下) 夏目隆文
10. 16 ただ誠の心を以て 日滿泰親善に盡す
是非仏教を学びたい 鄭禹氏赴任の
決意語る
10. 16 回教寺院を見学 回教協会京都支部
10. 16 ヒンディー文学の九寶(上) 辻直四
郎
10. 16 太夷宮参詣記(補遺) 夏目隆文
10. 16 満洲開拓少年戦士の 寮母さん達を鍊
成 自然に要求する宗教 瀧川隊長は
語る
10. 16 座禅鍊成しつつ 南方思想講習会 相
国寺の方丈で計画
10. 16 鄭公使一行 賑やかに東上
10. 16 日本最初の回教団 西南亜語辞典編纂
10. 16 大東亜共栄圏に協力する 青年仏徒の
使命完遂に 共栄圏仏青代表会議の開
催
10. 16 蒙疆治安圏の強化 地籍、民籍の整備
地方自治の確立へ
10. 16 徴兵制実施に伴ひ 身が入る国語学習
半島同胞の嬉しい現象
10. 20 ヒンディー文学の九寶(中) 辻直四
郎
10. 20 大東亜建設に 協力する神祇活動 具
体策樹立の関係者会議に 内相も激励
の訓示
10. 20 全西亜、印度の 回教徒大同団結 反
英運動を策す
10. 20 満洲一の道教叢林 太清宫を巡礼 無
欲恬淡な道士生活 満洲寺廟巡礼(8)
10. 21 ヒンディー文学の九寶(下) 辻直四
郎
10. 21 中外戦線 海外伝道の問題 古野清人
南方の青少年に 贈る英文訳尊伝 西
本願寺翻訳課から
10. 21 菊薫る明治の佳節中心に 東亜の文芸
復興期す 「大東亜文学者大会」開く
10. 21 興亜学院入所式
10. 21 道院と世界紅卍字会 満洲国総会訪ふ
特別厚意で「扶乩」拝観 満洲寺廟
巡礼(9)
10. 22 日泰親善の楔 守護神に聖徳太子尊像
ピブン首相に報親会から贈る
10. 22 大東亜精神建設の 誓ひもかたく 北
支玄中寺で盛大に 日華合同の大遠忌
10. 22 仏教同願会日本で年会 北京全朗法師
らけふ来朝
10. 22 五族が共に祈る 大東亜聖戦の完遂
北京で一大祈願祭執行
10. 22 日華文化の交流で 日本仏教各宗派代
表と懇談
10. 22 半島同胞の皇国臣民化へ 国民総力運
動の実績 全鮮に四十万の愛国班 鳥
川朝鮮連盟総務部長談
10. 23 丸腰組の頑張り秋 日宗河田行誠氏の
滿蒙支宗教視察談
10. 23 朝鮮基督新教 大合同への準備 聖公
会も参加せん
10. 23 太田美代治 氏を悼む 古川大航
10. 24 国語の海外進出(上) 関為之祐
10. 24 光暢法主が激励の贈り 東本願寺の南
方美術調査隊壮図へ 絵画を泰、仏両
国政府へ贈進
10. 24 米英的神学を払拭し 東亜基督教を樹
立せよ 華北教界事情語る=石橋博士
10. 24 呂祖像の左右に 孝子と母の像祀る
満系巡査も通訳に一役 満洲寺廟巡礼
(10)
10. 25 国語の海外進出(中) 関為之祐
10. 25 中国人学徒に日本語で 太子十七条憲
法を講義 中支杭州仏教大学の興亜調
10. 25 天台宗、浄土宗では 満蒙系青年教育
真言宗では古義系が多い 満洲寺廟
巡礼(11)
10. 27 国語の海外進出(下) 関為之祐
10. 27 華僑の動向に心せよ 宗教家は百年の
大計を 二出防疫協会長囲む座談会

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1942. 10. 27 授乳機能を失った島人 マレー人種の撲滅図る 人道の敵=英の残虐振り暴露
10. 27 惟神の道を国本とする 満洲の神祇問題解決は急務 大麻と神璽の関係はどうなるか 満洲神職界の元老山内氏談
10. 27 海外の神社は 大東亜省管下へ 待望の制度確立実現か 一方、神社行政の一元化要望
10. 27 中国史上画期的な第一歩 華北基督教団の新生 結成式当日の豪華絵巻
新教団に贈る道標 王政務委員長の訓詞
10. 27 開教草分は西本願寺 教勢伸ぶ東本願寺 国都に築く日本仏教の殿堂 満洲寺廟巡礼(12)
10. 28 中外戦線 原住民族の運命 古野清人
10. 28 新生比島協会から 賀川さんを招聘 真正の基督教樹立に努力
10. 28 北満へ半島人を 五万戸入植を目標に 満洲国開拓第二期五ヶ年計画
10. 28 玄中寺法会に詣つ 菅原恵慶
10. 28 北支の太田美 代治君を悼む 丸山義淵(上)
10. 29 大東亜共栄圏内に 人物養成の機関 西本願寺と 有力檀家の運動
10. 29 大東亜共栄圏の 建設挺身者錬成
10. 29 異彩ある満洲靈廟活発な旧仏立講系 兵隊坊さん開基の興正寺
10. 29 北支の太田美 代治君を悼む 丸山義淵(下)
10. 30 日華仏教の 連絡提携方策 同願会訪日団員と 仏教会の協議懇談会
10. 30 書評 高楠順次郎博士著 大東亜海の文化
10. 31 文化交流に多彩な活躍 東京と磐谷に「日泰文化会館」
10. 31 文化人で中華人の魂を! 福田氏ら三居士の遺志生せ
10. 31 文化、経済、物資の 総合研究所設置 北京燕京大学中心に
10. 31 興亜同盟機構縮小は不可 新指導者を据えて再進発
11. 1 南方の大戦果 と必勝信念
11. 1 印度支那指して 角田素江
11. 1 北魏仏教の全貌 「支那仏教史の研究」塚本善隆氏が刊行
11. 1 日本の宗教家は挙って 共産匪の真只中へ入れ 真の宣撫はこれ以外不可能 加藤内原訓練所長叫ぶ
11. 1 回教に理解と好遇 日本の動向語る 帰国した回教大学教授
11. 1 南方工作に従事する 女性要員を養成 文部省で錬成を企図
11. 1 陣容整った 南方思想講座 相国寺維摩会
11. 1 全朗法師ら入京
11. 3 米英勢力の駆逐一掃で 半島の教化力大に神道 この際永遠の計を樹てよ 朝鮮緑旗連盟津田主幹語る
11. 3 謬られた豊太閣 本来“征伐”の意志なし 森田氏談
11. 3 大東亜省愈よ発足 戦争政治体制確立す 初代大臣に青木国務相
11. 3 共栄圏内の各語に翻訳 中臣稔を原住民に理解 神職界某有力者は語る
11. 3 蔣時代の諸法令一擲 宗教の保護育成に 華北宗制討論会の設定
11. 3 現代に生きる中国人に 新しき精神内容与へよ 華北教界に教学刷新の機運 武田調査官談
11. 3 現地各宗団内に 中国宗教研究会 近く文化建設連盟組織
11. 3 在支各宗派布教師の 痛いところを突く 来朝の仏教同願会視察団 日本仏教徒と懇談
11. 3 南方が慕ふ日本精神 ラングーンに研究所設立
11. 5 回教研究に 総力結集を要望 近く具体化せん
11. 5 錦州高野山 阜新寺落慶
11. 5 日華教育の提携に 現地に専任顧問 佛教教育同盟が近く派遣
11. 5 北支仏教同願会の 東京年会終る 宣講団組織その他決定
11. 6 日華仏教徒懇談 会に就て
11. 6 ビルマ戦線の華 木村、柴田氏ら悼む 日蓮宗興亜局主催
11. 6 仏教同願会員の 旅情慰める 藤井有隣館で
11. 6 昔の京城の癌 土幕民が 臣民の誓に結ぶ平和村 東本願寺十年の苦心結実
11. 6 大東亜建設と宗教学 適切な恒久的施設と 研究者の養成が肝要
11. 6 大陸に祈る(1) 正しい神社の認識は 即ち“日本”の認識 海外神社奉仕の精神的拠点
11. 7 日泰文化交流 への瑣言
11. 7 南方宗教工作に挺身 女性要員の錬成 十一日から文部省で開設
11. 7 南方最前線慰問
11. 7 大東亜建設 戦士を育成 龍大に専門程度の 興亜科創設
11. 7 大陸に祈る(2) 哈爾濱神社創建当時は 教派神道教師が奉仕 神速忽ち成る 御造営
11. 8 大東亜文学者 大会を評す
11. 8 大阪に中国学生 連盟結成の企て 東亜新興会等乗出す
11. 8 ポナベ仏教会 三派合同で創立
11. 10 中外戦線 大東亜文 学者大会 に就

- いて 倉田百三
1942. 11. 10 日滿座談会 仏教同願会員 昨有隣館訪問
11. 10 日本仏教徒の時局奉公 今後の方策に万全期す 大日本仏教会が興亜関係各係官と忌憚なき懇談
各宗派が統一ある 興亜活動を展開 大日本仏教会各宗代表招く
11. 10 同願会と同じ組織 基教、回教にも望む 在京七日 武田調査官の感想
11. 10 曹洞朝鮮総監に 伊東泰邦氏
11. 10 談玄法師を偲ぶ 牧田諦亮
11. 11 華北教団の誕生機に「東亜伝道会」の大英断 同地方の教会を新教団に提供
11. 11 仏の道で 魂の結束を ビルマのサヤドウ大僧正に 日本仏教会が黄衣贈る 興亜宗教協力会議 明春開催を目指して準備
11. 11 談玄法師を偲ぶ 牧田諦亮
11. 12 人種と国籍を問はず 行旅病者等に治療奉仕 京城仏教各宗連合の“慈濟院” 鮮語で読誦 “浄土和讃”
11. 12 正しき日本語と大和心で 南方に挺身 聖女文化部隊
11. 12 大東亜戦完遂祈る 華北民族の共同祭典 祭主に高山昇翁渡支
11. 12 高岳親王奉賛会
11. 12 惟神の大道を顕揚実践 大東亜共栄圏の建設を 東条首相 神祇協力会議で強調
11. 12 満洲仏立開拓集団 統制拡充の審議 仏立講政会議始る
11. 12 近く中文に 留学生派遣 天台宗戦時事務局活動
11. 12 大陸に祈る(3) 五千の居留民が 赤誠築く吉林神社
11. 12 談玄法師を偲ぶ 牧田諦亮
11. 13 中外戦線 上海茶話会 本荘可宗
11. 13 盟邦泰国へ水害慰問 仏教学徒の 報国精神昂揚大会 大日本仏教会で決議
11. 13 度やかな黒衣に 燃える愛国熱 南に行く乙女等の鍊成会
11. 13 南方雄飛志す 思想戦士鍊成 巴利文化学院
11. 13 鮮系仏徒得道のため 間島省に特殊寺廟 創立計画着々進む
11. 13 談玄法師を偲ぶ 牧田諦亮
11. 14 北京仏教界の素描(一) 竹田淳照
11. 14 仏教による 南方文化対策 国際仏教協が成案 大東亜省に実現を建議 仏教書交驛 安南から二回分着 泰国要人に 水害見舞国際仏教が
11. 15 北京仏教界の素描(二) 竹田淳照
11. 15 南支の皇軍治下に 打建つ真言密教の法幢 日華親善に 戸川開教師の献身
- 的奮闘
11. 15 敬愛の念もち 中国人に接せよ 西本願寺全北支開教使会議
11. 15 南方の宗教対策具体案 大東亜省中心に各省連絡で決める 文部省成案の実施は中止
関係官庁と 宗団の連絡 文部省が幹旋
大陸へ進出の 宗教家の証明 今後は大東亜省で
11. 15 南方の回教徒 に就いて聴く
11. 15 大陸に祈る(4) 舞楽の大陸進出 善美を盡した殿堂 一流官社に比肩の大連神社
11. 17 北京仏教界の素描(三) 竹田淳照
11. 17 神祇科目を師範 本科の必須科目に 大陸科廃止に伴ひ 神祇諸団体に対策協議
11. 17 大陸に祈る(5) 関東神宮御造営工事 本殿等殆ど竣功 忠霊仰く白玉山納骨祠
11. 18 中外戦線 周困民族の 言語研究 古野清人
11. 18 北京仏教界の素描(四) 竹田淳照
11. 18 統制部の飛躍 満洲開拓仏立集団
11. 18 国士の土の戦士を 基隆に農業奉公隊結成
11. 19 北京仏教界の素描(五) 竹田淳照
11. 19 南方美術調査隊 サイゴン到着 愈よ調査第一歩印す
11. 19 興亜宗教家として 実践力の涵養に 大東亜省の指導で明日開く 対支布教師鍊成会
11. 19 汗の奉仕を通じ 建国魂の鍊成 “満洲国民勤勞奉公法” 公布
11. 19 戸川開教師 に報告聴く
11. 19 大陸に祈る(6) 秋祭に描く興亜調
11. 20 北京仏教界の素描(六) 竹田淳照
11. 20 大東亜文学者 大会の意義 新宅博雄 興亜宗教運動の 強化促進を期す 興亜宗教記者大会開く
11. 21 ビルマの大僧正から 贈られた仏舍利を奉安 瑞雲山大東亜寺を建立 桜井ビルマ軍政顧問の発願
11. 21 満洲国開拓村の 入植僧侶鍊成 公主嶺訓練所山本匡夫氏
11. 21 “閻取引” 絶滅へ 満洲の宗教団体起つ
11. 21 共栄圏の芸能樹立 けふ「大東亜文化協会」発会式
11. 22 建国十周年と 開教四十年記念 画期的大事業を 宇野西本願寺総長談
11. 22 “伝道戦の糧” 聖書も 中国人自らの手で 中華聖書協会の再出発
11. 22 親和と日本語習得の 一石二鳥の名案 日華両文聖書の刊行

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1942. 11. 22 海外神社問題解決と 神祇昂揚の対策
大東亜省を中心に 官民の総力結集
されん
11. 25 バリ島の民族信仰(1) 竹中信常
11. 25 半島同胞の敬神熱徹底へ 稻荷神社の
御創建と半島の関係 正村氏の研究注
目さる
11. 25 台湾神社参拝記 角田茂
11. 26 バリ島の民族信仰(2) 竹中信常
11. 26 南洋華僑の性格(1) 金孝敬
11. 26 仏塔の下 大東亜建設の誓は固い ビ
ルマの仏教 有馬暉雄氏の報告
11. 26 学界に初めて紹介 山西南部仏跡調査
資料 岩洞内に唐代石経等発見
11. 27 バリ島の民族信仰(3) 竹中信常
11. 27 南洋華僑の性格(2) 金孝敬
11. 27 同甘同苦の誠意を 泰国の水害に 大
日本仏教会の飛檄
11. 27 世界的な金版蔵経を 第八路軍が悉く
略奪 道端谷大教授山西調査終る
古跡保存会設置を 軍当局へ建言
寺廟の修理復興も
11. 27 廣蟲姫の仁愛精神 南方文化工作に生
かす 護王神社が具体策考究
11. 27 大陸に祈る(7) 暴戻支那軍のドテッ
腹に 神幸行列の強襲 重軽傷に屈せ
ず奉仕敢行
11. 28 バリ島の民族信仰(4) 竹中信常
11. 28 南洋華僑の性格(3) 金孝敬
11. 29 バリ島の民族信仰(5) 竹中信常
11. 29 南洋華僑の性格(4) 金孝敬
11. 29 アジア民族の解放と 新文化建設に挺
身せよ 永井柳太郎氏の講演要旨
11. 29 大陸に祈る(8) 満洲にも朝鮮にも
国魂大神を祭れ 領事館奉建の京城神
社
12. 1 南洋華僑の性格(5) 金孝敬
12. 1 新文化創造のために 「華北古蹟古物
綜録」成る 興亜宗教協会の努力
12. 1 大東亜戦一周年迎へ 興亜宗教記者大
会 宗教の興亜活動促進期す
12. 1 満鉄各義勇隊に お東が仏壇贈る
12. 1 指導者現地派遣と 日華交歓教授の計
画 基督教教育同盟の対支方針
12. 1 大陸に祈る(9) 総督も嚴重に参籠し
潔斎で内地に垂範 半島総鎮守朝鮮
神宮
12. 2 南洋華僑の性格(6) 金孝敬
12. 2 南方文化の建設には 宗教方策の樹立
が急務 調査書基礎に、近く大綱を作
成
12. 2 人材養成のため 大東亜教学研究調査
室 天台宗が新に設置
12. 2 大陸に祈る(完) 気候風土も顧慮
外地神社制度を確立せよ
12. 3 南洋華僑の性格(7) 金孝敬
12. 3 開拓村に寺院を配給 北海道農法と満
洲農法 そして寺院の研究調査
12. 3 台湾新竹神 社小社に
12. 4 南洋華僑の性格(8) 金孝敬
12. 4 興亜宗教協力会議 開催に多大の関心
宗教問題研の希望
12. 4 青年仏教徒の 提携で大東亜建設 大
東亜仏青会議 開催準備局成る
12. 4 童心の結ぶ 日華提携
12. 5 南洋華僑の性格(9) 金孝敬
12. 5 興亜の先覚者 故南条博士建碑式 九
日浅草本願寺で挙行
12. 5 蔵文国境で殉教 能海寛の追遠式 け
ふ縁りの浄蓮寺で
12. 5 東本願寺満洲 別院庫裏完成
12. 5 日泰青年仏教徒の 結盟第一陣成る
成果収めた全連の催
12. 5 漢口西本願寺移転 別院昇格の基底な
る
12. 5 医療報国へ 南方医学研究
12. 6 南洋華僑の性格(10) 金孝敬
12. 8 中支杭州西湖の名勝 「湖心亭」を復
興 隆定法師畢生の努力
12. 8 支那台湾に大 派布教所増設
12. 9 南方建設の 英霊に感謝 比島派遣軍
の 戦没者忠魂祭
12. 9 李王妃殿下お成り 東京基督教女青の光
栄
12. 9 南方宗教対策の確立や 国内宗教活動
の整備強化 文相官邸の懇談会で強調
12. 9 南仏印に勢力持つ “高台教” の研究
紅卍字講演会で開催
12. 10 南方の宗教問題の重要性強調 但し工
作的態度は改めよ 文相官邸の懇談会
に建設意見
12. 11 「支那派遣将兵 に与ふる書」
12. 11 神性の自覚 一 大東亜宗教の建設一
堀一郎 一ノ上
12. 11 馬來をマライ バタビヤはジャカルタ
に
12. 12 神性の自覚 一 大東亜宗教の建設一
堀一郎 一ノ下
12. 12 仏印へ第一歩 南方美術調査隊より
一第一信一 角田素江
12. 12 釜山西別院の婦 人会が重機献納
12. 12 大東亜建設に活現される 明治時代の
南方との仏教交驩 由緒深き “シャム”
皇室の仏像奉安
12. 12 台湾本島人教化陣に 本島人僧侶を鍊
成 一西本願寺台湾別院で一
12. 13 神性の自覚 一 大東亜宗教の建設一
堀一郎 二ノ上
12. 15 スクールに視く 南方美術調査隊より
一第二信一 角田素江
12. 15 神性の自覚 一 大東亜宗教の建設一
堀一郎 二ノ下

1942. 12. 15 アンコールの奇縁 南方美術調査隊より
—第三信— 角田素江
12. 15 大東亜青年仏徒一堂に会し 興亜の聖業完遂を期す “大東亜仏青大会”の開催決る
12. 15 多量の学的収穫 大東亜仏教調査会を設けよ 小笠原龍大教授談
12. 16 神性の自覚 —大東亜宗教の建設— 堀一郎 三
12. 16 東洋における巴里 南方美術調査隊より
—第四信— 角田素江
12. 16 驚くべき神がかり現象 ビルマの親日運動の根本 特別任務の某軍属の報告
12. 16 高岳親王奉讃の夕 あす、九段軍人会館で
12. 16 涙ぐましき半島 同胞、報国の熱意 “国内これ戦場”の精神昂揚
12. 16 学的にも権威づけた 共栄圏の宗教調査 西本願寺が
12. 16 南方宗教事情研究 興亜宗教記者会で開催
12. 17 共栄圏留日学生招き 興亜親善の集ひ 東京基督会の催し
12. 17 仏印の美術学校 南方美術調査隊より
—第五信— 角田素江
12. 17 王揖唐氏代香派遣 多数華人の焼香 故田中氏の国際的本葬
12. 17 大東亜圏の経済調査 “神戸商大興亜経済研”新発足
12. 17 海外同胞中央会 神戸支部誕生
12. 18 華北各種宗教団体が 必勝精神の昂揚運動 全北支に積極的展開
12. 18 南洋学院 生徒募集
12. 19 傷病将士へ尊き血の奉仕 二年間に捧ぐ三万五千グラム 北支、天理教赤誠会の赤心
12. 19 南方書の問題
12. 20 今後は真如親王と奉称 文部省から非公式に指示
12. 20 大東亜建設に 先づ「人」の育成 西本願寺に大規模な 共栄圏留学生後援団体結成
12. 20 相互の理解と親善を基に 日本宗団そのままの進出は不可 南方宗教対策の根本
12. 20 華北教会の躍進に呼応 華中にも合同機運濃化 中国基督の自主自養運動
12. 22 “共栄圏宗教 政策の重要性”
12. 22 日泰攻守同盟締結一周年 泰仏像前に聖職完遂祈念祭 駐日大使に聖観音像贈る きのふ、国際仏教会員が
12. 22 宗教が協力する興亜活動強化 「大東亜宗教文化研」創設 官民各方面に要望昂まる
12. 23 神意のまにまに働け 大東亜建設問題の解決に ズバ抜けた宗教家の挺身を
12. 23 写経一千余巻で 大陸に回向塔建立 ◇…三井銀行の日笠有二氏
12. 23 貧しい中国の病者に 愛とメスの奉仕 坂口女医の献身で療院開設
12. 23 政府の南方宗教対策 明春から具体化されん 大東亜省でも資料蒐集
12. 23 対外伝道一本建論と 東亜伝道会の去就 理論と並行せぬ資金が悩み
12. 23 日泰文化協定成立と宗教 文部書記官 吉田孝一
12. 23 宗教家の活動に期待 日、タイ文化協定効力発生
12. 24 『金陵東文学堂』 敵産小学校を校舎に お東が四十年振りに復興
12. 24 使節の交馳や調査研究中心に 宗団進出、布教は許されぬ 文部省が日泰宗教親善を指導
12. 24 京都女専に“東亜科” 大東亜留学生対策 お西の龍谷商議會
12. 24 仏教を通じて共に 大東亜の建設に ビルマ週刊英字紙発刊で 国際仏協が 同国仏教徒にメッセージ
12. 25 南方仏教と戒律 水野弘元
12. 25 新站東本願寺の 一周年記念行事
12. 25 南洋コロールから
12. 27 南方仏教と戒律 水野弘元
12. 27 日泰文化協定 結成記念に 仏教国泰にお祝ひの辞 大日本仏教会安田副会長の海外放送
12. 27 板垣朝鮮軍司令官 朝鮮神宮へ神馬献進 半島産の若駒 “瑞雲号”
12. 27 泰国外相から 謝電 “国際仏協へ”
12. 27 大東亜宗教 事情調査会 関西分室協議会
12. 27 大東亜仏教研 研究員銓衡終る
12. 29 南方仏教と戒律 水野弘元
12. 29 内地教会の 手を離れ 自給独立へ 満洲国聖公教会
1943. 1. 1 南方仏教と戒律(後篇) 水野弘元
1. 1 大東亜建設と日本文化 小野清一郎
1. 1 大東亜宗教の建設 藤原了然
1. 1 神社と神物各派 “仲よく” 雅楽会 国際都市ハルピンの朗話
1. 1 天理教 泰国を中心に 南方調査隊を派遣
1. 1 湄公河溯行記(上) …西貢より東東塞の首都 プノンペンまで… 角田素江
1. 1 大陸を見る目(上) 矢野旭香
1. 3 真如親王の 御命日について(上) 杉本直治郎
1. 3 戦ひの中にこの建設 比島教界に新生の鐘 新宗教教班員の 語る比島の姿 東亜唯一の基督教 新教の新興勢力 皇軍将士も驚く アメリカ的基督教 日本語教育の将来

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1943. 1. 3 大東亜建設の一翼に「亜細亜文化研究所」天理教に近く結成
1. 3 “葉”を仏様から頂く 蒙古陣の生活を語る藤井氏
1. 3 大陸を見る目(下) 矢野旭香
1. 5 アンコール・ワットの仏前に 真如親王御遺跡追慕 南方美術調査隊の画期的法要
1. 5 昭南神社の初代 神職に中村祭務官 今春拝する御鎮座の盛儀
1. 5 朝鮮開教に 一転機 皇民化運動にお西の用意
1. 6 真如親王の 御命日について(下) 杉本直治郎
1. 6 山東祭政会いよいよ 本格的実働に入る 新春より機関誌発刊
1. 7 共栄圏の宗 教事情調査 臨濟宗報国会
1. 8 半島出身者の 文化指導に 大阪市、積極的
1. 9 七十七老僧が団長で 大陸開拓に起つ 満洲への分村に一大暗示 熊本県砥用郷建設
1. 10 本年から四ヶ年計画の 天理村開拓移民団 先遣隊五十名三月に渡満
1. 10 陸士満華蒙の留学生 知恩院に参拝 郁芳管長の法話を聞く
1. 10 印度語講習会 十六日より神戸で
1. 10 満洲基督教 開拓団活躍
1. 12 真如法親王薨去の年時に関して 高楠順次郎
1. 12 南方仏教と戒律 水野弘元
1. 12 国民政府の参戦宣言で 開教寺院教会の問題は? -租界の土地と物件整理は必然-
1. 12 ワンワイ殿下より 水害見舞謝状 国際仏教協会へ
1. 12 泰国の水害へ 兵庫仏連見舞
1. 13 真如法親王薨去の年時に関して 高楠順次郎
1. 13 南方仏教と戒律 水野弘元
1. 13 中国参戦による 敵産物件整理と 開教寺院の問題
1. 13 愈々本調子に乗る 大東亜宗教協力会議 興亜宗教同盟主催で
1. 13 病める中国婦女子ら に愛とメスの福音を 池永女医に代る第二の献身者
1. 14 真如法親王薨去の年時に関して 高楠順次郎
1. 14 南方仏教と戒律 水野弘元
1. 14 大東亜文化の建設と 神社問題の懇談 関係権威者参集して 東亜民族文化協会主催
1. 14 中華民国と開 教陣の善処方 西本願寺の指令
1. 14 雄大なる海洋政策が根幹 八紘為宇実
- 現は 藤森少将等再び実働を始む
1. 14 中支一帯に亘る 基督教工作を強化 中支宗教連基教部の新方針
1. 15 真如法親王薨去の年時に関して 高楠順次郎
1. 15 南方仏教と戒律 水野弘元
1. 15 シ港陥落記念日をとし 昭南神社鎮座祭
1. 15 予算二十六万円を計上 準備局を設く 大東亜宗教協力会議
1. 16 決起する七 十七老僧
1. 16 真如法親王薨去の年時に関して 高楠順次郎
1. 16 禊の民族(上) カムボヂヤ人の生活 角田茂
1. 17 禊の民族(下) カムボヂヤ人の生活 角田茂
1. 17 大東亜戦の 報恩講 西六条総会所で 中国人の初布教
1. 17 皇軍の温き庇護に 伸びる比律賓の宗教 帰還宗教班の総合報告
1. 17 中国のお百姓対象に 奨農運動を 北支宗教報国団の事業
1. 19 南方宗教工作と みいくさの原理(上) 角田茂
1. 19 開教圏展 けふから丸物で
1. 19 日泰文化協定と仏教 坪上大使、柳沢謙氏ら中心に “国際仏教”が懇談会開く
1. 19 南方事情講演会
1. 20 南方宗教工作と みいくさの原理(下) 角田茂
1. 20 民族研究所開く 初代所長に高田保馬博士
1. 20 中支武漢地区の 基督教各派が合同 華中教団結成への一石
1. 20 大東亜文化の 建設と神社問題 国魂神の御本質論で賑ふ、東亜民族文協懇談会
1. 20 南方諸語の 講座開く 大東亜仏教研
1. 20 中支宗連有田 神道部長上京
1. 20 中支宗連基教部 宗教工作班陣容
1. 21 回教や紅卍字会と提携し 大東亜文化の建設に協力 中支宗教大同連盟の新計画
1. 21 南支へ 密教重興会の招聘で 仏教親善使節
1. 21 アンコールワット中心に 周辺ジャングル内遺跡探検 クメール民族万霊追悼法要
1. 23 興亜教育事業 団体を統合
1. 23 巴利文化学院の業績 多数南方に挺身活躍 少数精鋭主義で練成
1. 23 大東亜建設と 神社問題解決に 海外神社協会を整備拡充
1. 24 興亜教育を統一 近く事業団体協力会

1943. 1. 24 結成 仏教親善使節派遣 日泰文化協定締結記念に 大日本仏教会の計画
1. 24 香港の景勝の地にお東が本堂建立計画 敵産建物で常葉幼稚園
1. 26 大東亜戦完遂と回教民族 四天王延孝氏語る
1. 26 日泰文化協定締結記念に 東京に仏教大会開催 二月二十日、築地本願寺で
1. 27 会館を鍊成道場に 南へゆく乙女らのために 矯風会が恒久的講座開設
1. 29 華北建設に宗教家も一役 大使館で二日間協議
1. 29 逞しき生活設計者 鎌の聖家族鍊成 満洲基教開拓村の発展
1. 30 在満神社神職 候補者の鍊成
1. 31 香港に神社造営 神祇院から角南技師派遣
1. 31 大東亜仏青協議会開催に 全仏教界が協力誓ふ 連絡会議で文部省も支持声明
1. 31 日華文化の交流縮図 「日本文化興中国先賢」成る
1. 31 南方仏教に就て
1. 31 田村敏雄氏著 満洲と満洲国
2. 2 満洲国新設 思想視察 保護制度
2. 2 クメール文化の 偉大な夢の跡偲ぶ 東本願寺南方美術調査隊 目的達成現地調査終る
2. 3 共栄圏各民族が 拝める神社を 信仰の強制は不可 “大東亜文化と神社” 懇談会
2. 3 華北日本宗教報国団結成 決戦下の食料増産 既に集動指導者を講習
2. 4 南方宗教対策に 関する一示唆 (一) 久野芳隆
2. 4 「南方仏教 の様態」 泉芳環
2. 4 カムボチャ歌稿 角田素江
2. 5 南方宗教対策に 関する一示唆 (二) 久野芳隆
2. 5 東亜の道義確立へ 華北宗教刷新令公布 宗政討論会も結成
2. 6 南方宗教対策に 関する一示唆 (三) 久野芳隆
2. 7 南方宗教対策に 関する一示唆 (四) 久野芳隆
2. 7 昭南神社鎮座祭
2. 7 大東亜要員 鍊成要綱
2. 7 支那仏教史研究 (北魏篇) を読む (上) 大谷大学教授 野上俊静
2. 7 アンコール偶感 角田素江
2. 9 南方宗教対策に 関する一示唆 (五) 久野芳隆
2. 9 内外仏教文化の交換 親善使節派遣や興亜仏教読本制定 大日本仏教会興亜局の事業
2. 10 南方宗教対策に 関する一示唆 (六) 久野芳隆
2. 10 同生同死の血盟の下に 日泰仏徒の総進軍 文化協定成立を記念し 親善仏教徒大会開く
2. 11 世紀の道場 (一) - 北辺の征旅にありて- 永島純一
2. 11 米英の圧迫から 回教徒を解放 谷外相帝国の決意闡明
2. 11 南方宗教対策に 関する一示唆 (七) 久野芳隆
2. 13 世紀の道場 (二) - 北辺の征旅にありて- 永島純一
2. 13 大東亜共栄圏の 青年仏教徒一丸に 聖戦目的完遂に挺身 大東亜仏青大会要綱決る
2. 13 南方諸地域一帯へ 真如親王の御事跡放送 シンガポール陥落の当夜
2. 13 中支基督教 教育の新生へ 指導者の来援希求 教育同盟の緩慢さに焦慮の色
2. 14 世紀の道場 (三) - 北辺の征旅にありて- 永島純一
2. 14 日、仏印文化交驛に貢献 安南仏教経典の総目録成る 「国際仏教協会」から公刊
2. 14 玄奘三蔵の舍利発見 仏教史の世界的功労者 精神文化にも皇軍の巧妙赫々
2. 14 奉天神社鍊成道場
2. 14 参戦華北の実態に即応 日常生活の生産化へ 北支日本宗教報国団の宣言
2. 14 満洲と華北に 共栄仏青運動を起す
2. 14 支那仏教史研究 (北魏篇) を読む (下) 大谷大学教授 野上俊静
2. 16 世紀の道場 (四) - 北辺の征旅にありて- 永島純一
2. 18 大東亜仏青 大会の開催
2. 18 世紀の道場 (五) - 北辺の征旅にありて- 永島純一
2. 18 北京の敬天
2. 18 基教文化の交流に 日華の良書交換 聖書協会の共同経営は将来に
2. 18 ビルマの坊さん
2. 19 世紀の道場 (六) - 北辺の征旅にありて- 永島純一
2. 20 北支宗教報国 団の宣言
2. 20 大東亜諸地域の 宗教の実相把握へ 文部省が「宗教文化叢書」編む
2. 20 世界仏典大系近く完備 未刊の「越南大藏経」出版 国際仏教協会の五ヶ年計画開始
2. 20 南支へ、“如来の使者” 佐々木教純氏巡錫 成果挙る密教重興会
2. 21 高丘親王の御遺跡調査 顕彰具体化に慎重 政府、小高議員等に答弁書
2. 21 全世界の回教徒対策 四王天代議士の

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

- 質問書に答へ 外務、大東亜両相から
明示
1943. 2. 21 兄も地下で感激せん オツタマ比丘令
妹との奇遇 大阪商船 北野茂雄氏語
る
2. 21 天理外語馬來 語部を増加
2. 21 大派大阪大谷氏 中支監督部へ
2. 23 大東亜の新しい信(上) バンコック
で拝んだ観音様 上村真肇
2. 24 京城帝国大学に 神道講座開設を 天
晴会より総督に建議す(上) 川村五
峰
2. 23 大東亜建設を表徴 上海に四十間四方
の 西本願寺別院を建立
2. 23 ガンジー翁へ “延命の祈り” 送る
けふ、全仏教徒の名で
2. 24 大東亜の新しい信(下) バンコック
で拝んだ観音様 上村真肇
2. 24 京城帝国大学に 神道講座開設を 天
晴会より総督に建議す(下) 川村五
峰
2. 24 百年の米英性格払拭 香港華人教会の
新生 各派合同・東亜基督教樹立
2. 25 仏教による 東亜永遠の楔 仏舍利総
持寺へ奉安
2. 25 大東亜圏内の回教徒 と共存共栄のため
に 相互理解深化へ
2. 25 華北日本宗教の 総力結集 一元的報
国運動を展開 聖戦完遂の使命負荷
2. 25 パゴダ
2. 26 南方進出の臆け・僧籍復帰 臨濟宗が
後藤亮一氏に
2. 27 クメールの文化(上) -カンボチア
雑感 在仏印 角田素江
2. 27 日滿支文化 交流の研究 細川侯を会
長に
2. 27 興亜を高らかに謳ふ “大東亜仏教聖
歌集”
2. 28 対支宗教文化工作 津田敬武
2. 28 印度人に対し 敵国人扱ひせぬ
2. 28 クメールの文化(下) -カンボチア
雑感 在仏印 角田素江
2. 28 同教同願の決意に燃ゆ 両国親善の増
進に最善の努力捧げ 大東亜新文化の
建設に寄与誓ふ きのみ、日泰親善仏
教大会
2. 28 開拓地や南洋からも 大谷派の建艦献
金へ
2. 28 水原堯栄氏謹稿 真如親王御伝 書評
3. 2 対支宗教文化工作 津田敬武
3. 2 アンコール鳥瞰 在仏印 角田素江
3. 2 仏教こそは日泰を 結ぶ強靱な紐帯
青木大東亜相強調
3. 3 対支宗教文化工作 津田敬武
3. 3 高丘親王奉讃歌 昨日の法廷で発表
3. 3 滿洲名流夫人 東本願寺訪問
3. 3 保定神社の大前で 中国参戦奉告祭
省政府主催で執行
3. 4 対支宗教文化工作 津田敬武
3. 4 仏印より泰へ(上) 角田素江
3. 4 共栄圏一体を 大東亜開教区に 中国
は南京に監督部を設置 浄土宗
3. 4 玄中寺を顕彰
3. 4 南支で活躍の 宇津木氏帰る
3. 4 日本音楽の南方及び 印度進出の一考
察(上) 副島八十六
3. 5 対支宗教文化工作 津田敬武
3. 5 仏印より泰へ(下) 角田素江
3. 5 ガンジーを殺す勿れ 印度を即時救へ!
3. 5 英軍パゴダ盲爆 国際仏協が管理者へ
打電 ビルマで仏教徒慰問
3. 5 滿洲建国犠牲 者の追弔法要
3. 6 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
訳
3. 6 対支宗教文化工作 津田敬武
3. 6 香港で華 人と共に 宇津木二秀氏談
3. 7 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
訳
3. 7 天理教開拓団 先遣隊壮行会
3. 7 印度民衆を激励 昨夜、大阪で救援関
西大会
3. 7 日本音楽の南方及び 印度進出の一考
察(下) 副島八十六
3. 9 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
訳
3. 9 日滿支通ずる 思想工作 実務者懇談会
近く開催
3. 9 滿洲国齊々哈爾の 宗教団体大同団結
近く各宗綜合大寺院建立
3. 10 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
訳
3. 11 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
訳
3. 11 世界道義確立に 鮮満一如の具現 張
將軍を迎へ朝鮮の開壇 半島の紅卍字
運動に期待
3. 11 大陸に惟神道宣揚 北支蒙疆の神職一
丸 華北蒙疆神祇会設立
3. 11 米英臭を一擲 東亜基督教を樹立 華中
にも近く新教団誕生
3. 12 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
訳
3. 12 大陸の神社行政整備 最高の監督は大
東亜省で 海外神社制度確立も近し
3. 12 筆の戦士を講師に 南方共栄圏講座
3. 13 未開拓の新天地に 天理教の新布石
本年度大陸活動の具体案決定
3. 14 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
訳
3. 14 今後の大陸宗教行政は? 治外法権撤
廃後に於ける 日本宗教の進出方針注
目さる
3. 14 中国人信徒の教化普導 華北天理教の

- | | | | |
|-------|--|--|-------|
| | 講習会 | | 渋谷鷺舟訳 |
| 1943. | 3.14 支那の宗教に就て 一津田敬武氏に
北村尋宗 | 3.24 仏印より泰へ 角田素江 | |
| | 3.14 紅卍字会朝鮮主会 開壇式に列して | 3.24 日滿支仏教 大会を協議 | |
| | 3.16 大東亜意識 を昂揚せよ | 3.24 ダバオ在留同胞 犠牲者合同告別法要
廿七日東本願寺で厳修 | |
| | 3.16 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
渋谷鷺舟訳 | 3.24 ラマ僧来社 | |
| | 3.16 ダバオで散華した 在留同胞四十三柱
遺骨 けふ帰還 東本願寺で慰霊法要 | 3.24 “蒙古の夕” | |
| | 3.16 満洲開拓展 神戸三越に開く | 3.25 建艦献金運動 半島人布教所の熱意
京城東別院呼びかく | |
| | 3.17 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
渋谷鷺舟訳 | 3.25 京大を中心に 仏印學術調査団 今秋
結成、出発か | |
| | 3.17 中支宗大連の 機構陣容強化 宗教連
盟近く 具体策を協議 | 3.25 胎動の華中教会に魁け 南京に独立教
団生る 参戦に即応 中国基督教の樹立
へ | |
| | 3.18 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
渋谷鷺舟訳 | 3.25 南方要員を訓育 浄土宗が待機せしむ | |
| | 3.18 鬼畜米兵の機銃に 無念散った在留同
胞 ◇…ダバオ広幡開教使談 | 3.25 敵米英撃滅へ 満洲回々教徒の新たな決
意
聖戦完遂へ 満洲干少戴氏
日本と共に 中国強国禎氏 | |
| | 3.18 半島の先覚者 祀る神社創建 総督府
等で真剣に考慮 | 3.26 半島青年僧めぐる朗話 | |
| | 3.18 日滿華の若人ら 三十日南京で交歓 | 3.27 天理教愈よ 香港に進出 出張所設く | |
| | 3.18 世界紅卍字会朝鮮主会 開壇式に列し
て | 3.27 蒙古の有力 ラマ僧来朝 | |
| | 3.19 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
渋谷鷺舟訳 | 3.28 東印度諸島に対 する宗教工作 (一)
津田敬武 | |
| | 3.19 クメール文化資料を土産に 東本願寺
南方美術調査隊帰る | 3.28 ダバオ在留同胞 犠牲者合同追悼会 | |
| | 3.19 感激・半島同胞の献金熱 各宗布教使
が報国常会結成 神戸、尼崎に五日間
托鉢を | 3.28 日緬仏教徒手を握り 聖戦完遂へ邁進
誓ふ 全日本仏教徒代表ら パーモ長
官と交歓 | |
| | 3.19 京都女專の 東亜科認可 | 3.28 浄土宗中国開教総監 林彦明氏起用・
渡支愈よ実現 | |
| | 3.19 参戦中国事情講演 | 3.30 東印度諸島に対 する宗教工作 (二)
津田敬武 | |
| | 3.20 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
渋谷鷺舟訳 | 3.31 東印度諸島に対 する宗教工作 (三)
津田敬武 | |
| | 3.20 真言教学興 亜部を新設 | 4. 1 東印度諸島に対 する宗教工作 (四)
津田敬武 | |
| | 3.20 “僧侶は前へ出る” 一人犠牲となっ
て敵地を転々 広幡開教使の悲憤談 | 4. 1 京城曹谿寺 大梵鐘献納 | |
| | 3.20 三たび目の春迎へ 伸張する開拓村
満洲基教村・第一次入植完了 | 4. 2 東印度諸島に対 する宗教工作 (五)
津田敬武 | |
| | 3.21 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ
渋谷鷺舟訳 | 4. 3 巫女舞に似た モロ族の踊り 比島○
○部隊松島氏の便り | |
| | 3.21 僻地中国民衆に 皇国文化の光を 天
理教の大陸活動進歩 | 4. 3 馬來ペラ州より | |
| | 3.21 比島の治安確立は 国家、教会の共同
目的 ラウレル内務長官教会に飛檄 | 4. 3 今夏も派遣 天理教満洲 開拓奉仕団 | |
| | 3.21 大東亜共栄圏 諸民族に贈る “日本
仏教の綱要” 大日本仏教会で編纂刊
行 | 4. 3 山東祭政会 の機構成る | |
| | 3.21 大東亜省との諒解進む 大東亜仏青会
議六月開催 | 4. 3 草山学寮で 支那語講座 | |
| | 3.22 指導階級を招き 内地甘藷所で講演
満洲国建国節記念に | 4. 6 仏印仏教文化の研究 日仏印仏教徒の
交歓 大日本仏教会から留学生派遣
立花団長ほか六名ちかく出発 | |
| | 3.22 中支宗連理事長 | 4. 7 大東亜仏青会議 十日、準備委員総会
開く | |
| | 3.22 ラマ僧十三名 知恩院で訓育 | 4. 7 大東亜の花まつり 共栄圏のお友達を
招き 十一日、日比谷音楽堂で | |
| | 3.23 仏印より泰へ 角田素江 | 4. 8 南方地史の好資料 「仏跡遍歴遺著」
出版 故オックマ比丘も助力 | |
| | 3.23 ビルマの仏教 テイ・アール・シンファ | 4. 8 大東亜建設の一翼 「粵日辞典」の編
纂 宇津木二秀氏の討画 | |

1943. 4. 8 蒙古ラマ僧参詣
 4. 8 アリユシヤンの 皇軍に真綿
 4. 8 本紙が取持つた オツタマ追慕者
 4. 9 現地顧問を派遣 中国基督教教育を輔導
 基督教教育同盟の計画実現
 4. 11 印度支那へ(一) 立花俊道
 4. 13 印度支那へ(二) 立花俊道
 4. 15 印度支那へ(三) 立花俊道
 4. 15 南京名物となる 西本願寺の別院
 4. 15 南方の宗教政策 郡司司政長官中心に
 研究
 4. 15 ラマ教を中心に 蒙古の宗教対策 真
 言の神島氏、現地で指導
 4. 15 支那国家と農村社会 農村の実相を把
 握し 農本政治に徹せよ 村落共同体
 の農業 宗教の認識を要望
 4. 16 印度支那へ(四) 立花俊道
 4. 17 印度支那へ(五) 立花俊道
 4. 17 語る・日緬仏教徒の提携 京都のパー
 モ長官一行
 4. 18 皇国基督教の樹立目ざし 朝鮮教会の歴
 史的躍進 各派合同、二新教団樹立
 4. 18 同じ信仰もて 日比親善に挺身 ◇…
 女子宗教戦士の第一信
 4. 18 泰文化研究会
 4. 20 安南仏教の価値 (龍山章真氏の所論
 に関連して) 鈴木宗憲
 4. 21 東亜和平の礎に 玄奘三蔵の骨塔再建
 褚民誼氏から経過報国
 4. 22 原住民への信仰強制は禁物 宗教的親
 善策は民間で積極的に 郡司陸軍司政
 長官の談
 4. 22 仏印政府当局の 温い援助に感謝 杉
 本南方美術調査隊長談
 4. 22 オツタマ比丘 の顕彰座談会
 4. 22 「ニュギニヤ血戦記」筆者の父 岡田
 播磨翁訪ふ、南尾亮雄
 4. 24 日満華が一丸 第二回興亜団体懇談会
 今夏、新京で開催
 4. 24 玄奘三蔵遺跡 顕彰と日本仏徒 一褚
 民誼氏の壮挙を讃すー 来馬琢道
 4. 24 京大印度仏教学会
 4. 27 若人の築く アジアの力 あやめ咲く
 五月の帝都に 共栄園留日学徒の集ひ
 4. 28 佐々木教純氏 渡支壮行会
 4. 29 オツタマ比丘 追悼と座談会
 4. 29 米英的色彩払拭後の 華中教会の新し
 き相貌 華北に次ぎ新教団を結成
 4. 29 受難の中国聖公会 日本同系教会の責
 任は大 小崎氏の中国宗教事情談
 4. 29 南方諸民族を 日本精神の理解に導く
 文部省の図書編纂計画終る
 5. 2 大御陵威に感激 汪首席の新国民運動
 井上定次郎氏の視察談
 5. 2 興亜異人種観と 宗教的情操の涵養
 興亜教育大会の課題
 5. 2 大東亜建設の先覚者 ビルマの英雄僧
 侶ぶ ウ・オタマ比丘を顕彰
 5. 2 日華精神文化協会 華北天津で近く発
 会 大東亜綜合文化の確立へ
 5. 5 ウ・オタマ比丘顕彰運動 第一回関西
 準備委員会
 5. 6 宗教文化学界への貢献 十数年に亘る
 努力結実 佐伯博士の“支那基督教史”
 完成
 宗教の政治性と 思想謀略の危険
 抱負語る佐伯博士
 5. 6 今後浄宗で 経営する 蘇州日語学校
 5. 6 旧来の伝道理念一新 教会戦時活動強
 化 日基督教団に興亜部設置論起る
 5. 7 日本仏教徒の同情に感謝 泰国ピブン
 首相から謝状
 5. 8 日華精神文化 協会の結成
 5. 8 ウ・オタマ比丘の 伝記や著作の邦訳
 顕彰委員会で協議
 5. 9 狼英の奸策に抗して 起ち上った印度
 民族 独立の鍵は回・印両教の団結
 本間中将談
 5. 9 印度本来の姿に いまこそ宿願達成の
 秋
 5. 9 ラマ研究に 長尾雅人氏派遣
 5. 11 南方と取組む 青年の養成に
 5. 12 真如親王の御事跡顕彰 関西で初の公
 開講演
 5. 13 満洲国の花祭 市民慶讃法要
 5. 14 日満一体の要請で 高く禅風を昂揚
 曹洞開教陣果敢な実践へ
 5. 14 ウ・オタマ比丘の顕彰 史料や思想を
 各角度から研究
 5. 16 共栄園仏徒と必勝祈願 南方の仏陀祭
 をそのままに 満月の夜を徹して パー
 リ經典読誦
 5. 16 転換期の泰国 仏教の動向に注目 ワ
 ナラート管長の選化で
 5. 18 島民も献金参加 “サイパン号” 献納
 に 大派小林氏の活躍
 5. 18 大黒様も南進 陸軍省へ献納
 5. 19 南方政策で 興亜同盟と 仏教会懇談
 5. 19 新東亜民族学の台頭 盛んな興亜宗教
 研究
 5. 19 共栄園文化の建設指導 “日記”が各
 地に基地獲得
 5. 19 共栄園建設 戦士錬成所 神戸に開設
 5. 19 第二回満洲奉仕隊 東本願寺から派遣
 5. 20 鎮江山の開祖 安東州五万市民から
 感謝浴びる南岳和尚
 5. 20 武漢大乘仏学院開く 精進する中国の
 難僧
 5. 20 ラマ僧訓育 知恩院から 宗務に移る
 5. 20 支那派遣仏教 教師特別錬成
 5. 20 仏印派遣留 学生壮行会
 5. 20 扶餘の史跡と内鮮 一体の史実を刊行

1943. 5. 20 興亜運動の一元的強化 大日本興亜同盟は発展的解消 翼賛会に中枢機関設置
5. 20 中支宗教大同連盟 仏教部の活動報告
5. 20 共栄圏内の基督者に 大東亜建設理念を 日基督教団・懸賞論文募集
5. 21 共栄圏学徒交換と 大東亜信徒大会 カトリック親善会の計画
5. 21 ウ・オタマの 忌日判る
5. 22 大派朝鮮の 開教団総会
5. 22 漢口西本願寺 別院に昇格か
5. 22 日滿華仏教大 会の企画進む
5. 23 新民族学の 台頭に因む
5. 23 山本連合艦隊司令長官 南方最前線で戦死
5. 25 大東亜民族の繋り 南方民族研究進む マオリ族の相似性の問題
5. 25 目的地は錦州省盤山 けふ、愈よ壮図へ 大派滿洲作業奉仕隊
5. 28 大政翼賛会に 興亜総本部
5. 28 日華僧俗の提携 上海に大東亜仏教総会結成
5. 29 従軍宗教家の連絡を密に 聖戦完遂に挺身 興亜宗教同盟で 第一回懇談会
5. 29 共栄圏各地の留日学生も参加し 東都三千五百の青年仏教徒集り 大東亜建設学徒大会開く
5. 30 生きてゐた独潭氏 本紙の報道確実となる
5. 30 滿洲国全土に 神化運動を
5. 30 高階永平寺貫首迎へ 華北に禪風挙揚 曹洞の兩本山別院竣成
5. 30 大派朝鮮開教使 時局布教鍊成会
5. 30 ラマ研究本部 真言宗の活動
6. 1 大東亜共栄圏文化建設に 先づ南方、支那向辞典編纂
6. 1 黒ダイヤ地帯に 第二のメッカ建設 華北の回教勞工部隊入滿
6. 2 ビスマルク群島の 民族と宗教(1) 竹中信常
6. 2 共栄圏各地の宗教青年ら 互に誓ふ大東亜の建設「興亜宗同」の懇談会盛況
6. 2 大東亜宗教 青年協力会結成 中国の聶連增君の提唱で 近く準備委員会組織
6. 3 ビスマルク群島の 民族と宗教(2) 竹中信常
6. 3 アツツ島守 備隊の玉砕 角田素江
6. 3 一身を犠牲に婦女子を救ひ 高らかに唱題、波に消ゆ 日宗の岡田台湾開教監督殉職 敵襲受けた高千穂丸遭難當時の詳細
6. 3 少年少女の胸に 燃える新比島建設 バギオの日語生が 京のお友達に寄せた手紙
6. 3 華北更生の礎は 黄河流域平原の水田化 生江翁の現地調査報告
6. 3 満僧特別訓育
6. 4 ビスマルク群島の 民族と宗教(3) 竹中信常
6. 5 ビスマルク群島の 民族と宗教(4) 竹中信常
6. 5 比島へ文化調査使節派遣 日比協会の本年度事業決る
6. 8 大陸の神社制度確立 大使館で基本調査進む
6. 9 泰仏教教団唯一の管長 ワラナート大長老追悼 国際仏協がけふ、明照会館で
6. 11 危篤の母の激励に 滿洲開拓に献身 灰皿を香炉に涙の追弔
6. 12 大東亜諸民族を 観音信仰に結ぶ 大東亜三十三靈場を選定 けふ、讃仰会発会式
6. 13 大東亜建設に 協力する宗教活動 神仏基回教の関係者協議
6. 13 日華基督教文化協会が 理事・顧問を交換 大東亜文化の建設に協力
6. 13 ハノイ文化会 館長と打合せ 立花仏教派遣団長
6. 15 日華の文化交流(一) 親善の旅・北京-開封-南京- 上野修躋
6. 15 お多賀さんに参籠 中国官吏視察団が 稜 神垣に結ぶ日華親善
6. 15 浄土宗滿洲 開教総監に 福田氏起用 中国は林彦明氏
6. 15 日韓合邦功 労者の慰靈
6. 16 日華の文化交流(二) 観音の旅・北京-開封-南京- 上野修躋
6. 16 北京に指導力もつ 仏教研究院創立 史跡研究等華々しく 大東亜圏の宗教研究
6. 16 ウ・オタマ比丘の 顕彰運動進む
6. 17 日華の文化交流(三) 観音の旅・北京-開封-南京- 上野修躋
6. 17 盟邦泰国の仏舍利贈呈式に 仏教親善使節を派遣 木田孝慈男近く訪泰の途に
6. 17 華文仏教童話 西本願寺が 支那へ送る
6. 17 音楽で興亜理念の徹底 「宗教音楽協力会」愈よ発足
6. 17 中国僧の二君 日本見学の旅
6. 17 戦場の体験活し宗教報國 神仏基回の関係者を一丸に 総裁に永井氏、従軍宗教報國會発足
6. 18 汪主席と常盤博士 (日華の文化交流 四) 上野修躋
6. 18 愈よ世に出る 三語併訳の仏教原典 西本願寺の二千六百年記念事業
6. 19 汪主席と常盤博士 (日華の文化交流

- 五) 上野修躋
1943. 6. 19 日泰文化会館近く着工 盤谷に一きわ目立つ仏教館 その一
6. 19 泰国寄贈の仏像奉讃 タイ仏七個所指定
6. 19 宗教協力会議 へ北支代表
6. 20 汪主席と常盤博士 (日華の文化交流六) 上野修躋
6. 20 大東亜建設に挺身 共栄圏内各教が一丸に 興亜宗教青年会を結成
6. 20 黙々、成績あげる 中国唯一の日本宗教社事 上海福寿院の現況
6. 22 真如親王を偲ぶ 多くの材料を得たい 史跡調査団の熱意
6. 23 印度の独立は 印度人の手で
6. 23 日華親善使節への贈 両国の提携促進 大東亜建設の聖業に寄与 文部次官 菊池豊三郎
6. 23 終局の勝利へ 日泰一層の緊密化 泰国民に訴ふ・日本仏教徒使節団
6. 23 東亜十億の魂に 奏でる“文化建設” 興亜宗教音楽協会生る
6. 23 仏教行事に課税 上海特別市政府が 迷信事業税を新設
6. 24 東亜仏教大会に望む 藤波大円
6. 24 親善使節の将来する 仏舍利 日本仏教徒挙げて恭迎 七月十日、増上寺で盟邦の熱意に応ふ
6. 24 盛り上がる喜び 比島の大東亜建設熱 木曾諦道氏の帰朝談
6. 24 高階永平貫首 北支巡錫終る
6. 24 日泰親善使節への贈 日泰を結ぶ仏教 精神的文化的紐帯 大東亜次官 山本熊一
6. 24 共栄圏の仏教徒に 見せる我が教化活動 学生と坊さん総動員で
6. 24 興亜宗教協力会議決る 駐日共栄圏代表参加
6. 24 満洲建国の精神に帰一する 各宗教の 大同団結体制 構想近く具体化されん
6. 24 工場に鉱山に農村に 満洲でも特別布教 官民一体の宣化運動
6. 24 日本最初の半島 同胞の母親学校 神戸に一日から開設
6. 24 現地に観た 大陸仏教事情 (上) 宮崎乗雄
6. 25 南方雑筆 安南仏教に 就ての管見 (上) 角田素江
6. 25 大東亜仏青大会に観ふ 白井諄一
6. 25 大東亜共栄圏の宗教観で 世界に宣言、実現期す「興亜宗教協力会議」の重点
6. 26 南方雑筆 安南仏教に 就ての管見 (下) 角田素江
6. 27 聖戦完遂を祈祷 皇軍へ協力 スマトラ七百万回教徒の決議
6. 27 武漢三鎮の 回教徒協力
6. 27 満洲開拓村 最初の寺院 広島村に設立
6. 27 増産の鍛打ち込む 満洲基教開拓村 今年の水田開発に着手
6. 27 オタマ顕彰
6. 27 綜合委員会設置 大陸伝道策を樹立 日基国外伝道局の新方針
6. 27 中文宗連の 理事長決る
6. 27 現地に観た 大陸仏教事情 (下) 宮崎乗雄
6. 27 旅順低徊
6. 29 訪泰紀行 (一) 遺泰日本仏教派遣使節団員 森大器
6. 29 華南仏教代表入洛
6. 30 訪泰紀行 (二) 遺泰日本仏教派遣使節団員 森大器
6. 30 烈々、教家の熱情を凝集 大東亜建設の具体的協力策議す 興亜宗教協力会議開く
- アジア解放へ 全宗教打って一丸 堂々、総進軍誓ふ 永井会長の獅子吼
7. 1 訪泰紀行 (三) 遺泰日本仏教派遣使節団員 森大器
7. 1 日本仏教美術の真髓 南方共栄圏に紹介 先づタイ語・ビルマ語版完成
7. 1 ビルマ訪日団迎へ けふ歓迎午餐会 仏教会京都出張所が
7. 1 金朝時代の一品も応召 天津東別院秘蔵の大梵鐘
7. 1 現段階に処する 宗教界の決意表明 具体的実践要項を決定 興亜宗教協力会議終る
7. 1 海外の代表六十余名 大東亜仏青大会 関西側協議
7. 2 スマトラに初 の回教徒大会
7. 2 ビルマ訪日団一行と 各宗代表の交歓きのふ・東本願寺で
7. 2 共栄圏基教徒へ 衷情を吐露 日基教団が書簡募る
7. 3 エメラルド仏陀の前で 仏舍利を贈呈 日泰親善
7. 3 興味深き印度展 神戸三越で開催中
7. 3 ボルネオ、ジャワ の近情を聴くの会
7. 4 中国孤児のその後 皇土の慈愛にスクスク成育 成人の後はどうするか 華僑の活躍舞台南方地域へ
7. 4 奉仕隊に感激 開拓団が敷地寄進 東本願寺で花嫁の世話
7. 4 泰文化研究会
7. 4 仏教は国家、社会 人民との関係深し 中国仏教会結成式の宣言
7. 6 仏教に結ぶ共栄圏の青年 聖戦完遂に挺身誓ふ スパス・ボース氏もメッセージ 大東亜仏青大会開かる
7. 7 仏陀の精神に結びつき 印度独立に強

- 力な援助を 両ボース氏仏青大会に挨拶送る
 印度独立運動を激励 大東亜仏青大会が決議
 東亜の仏徒携へて 天業恢弘に貢献 大東亜建設仏教宣言
1943. 7. 7 共栄圏内に 観音霊場 三十三ヶ所設定
7. 8 大東亜仏青大会 今後共栄圏各地で開催 中核体の陣容逐次整備
7. 8 台湾西本願寺 の開教使会議
7. 8 ボース氏激励 向日町仏教団から
7. 8 仏舍利授受式を聞いて (日泰仏教関係の今昔を語る) 来馬琢道
7. 8 日満人に亘り 建艦献金二千元
7. 9 珍税はアッ気なく廃止 上海の“迷信事業物品税” 大東亜仏教総会の初手柄
7. 9 決死彩管報国へ 画人として一代の光栄 ビルマ行前に小早川画伯談
7. 10 南方へ文化読本を 先づ日本のことば、完成
7. 10 民族・文化運動など 最近の実状紹介 全国で開くタイ国展
7. 11 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (一) (二) (三) (四)
7. 11 大派満拓奉仕隊
7. 11 北京覚生女中 第三回卒業式
7. 11 仏舍利捧持 親善の使命果し 木辺使節ら帰る
7. 11 西本願寺の 北支総長に 玉川義隆氏 海外代表を歓迎 大東亜仏青大会 けふ、知恩院で開く
7. 11 朝鮮基督教各派の合同問題一頓挫か 長老・監理兩派の合一が先決
7. 13 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (五) (六)
7. 13 集ふ学徒一万 大東亜仏青海外代表 京都の歓迎大会
7. 13 大陸と南方への 文化工作を重点に 内地では生産面へ “日本文化中連” の新運動
7. 13 中華学生団の訪日 南京基督教青年会の 斡旋 見学のほか修練も希望
7. 14 訪泰紀行 (四) 遺泰日本仏教派遣使節団員 森大器
7. 14 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (七) (八)
7. 14 セレベス唯一の 本尊と僧侶
7. 15 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (九) (十)
7. 16 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (十一) (十二)
7. 16 流浪無職の徒防ぐ ラマ廟に授産所 還俗者も厳正に検討
7. 16 半島同胞残らず 大麻奉斎の美挙 護王神社で厨子等修葺
7. 16 大東亜仏青 大会解散式
7. 17 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (十三)
7. 17 “ニッポンのをばちゃん”と 慕ふ中国子女 ◇…南京朝天医院の親善風景
7. 18 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (十四)
7. 20 タイ国宗教、教学の現勢より 日本を顧みて (上) 在バンコック越田清七 仏舍利恭迎式 日泰親善に一層の契深む
7. 21 タイ国宗教、教学の現勢より 日本を顧みて (下) 在バンコック越田清七
7. 21 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (十五)
7. 21 訪泰紀行 (五) 遺泰日本仏教派遣使節団員 森大器
7. 22 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (十六)
7. 22 大東亜の宗教問題や 国内の宗教政策など 宗教審議会の構想進む
7. 22 世界最高の癲病窟 大東亜三百万の患者 長島愛生園光田園長談
7. 22 日本仏教徒の 積極的協力求む 日泰文化会館建設で
7. 22 大東亜仏教講座開く
7. 23 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (十七)
7. 23 南方雜筆 安南の黎明期 角田素江
7. 24 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信常
7. 24 訪泰紀行 (六) 遺泰日本仏教派遣使節団員 森大器
7. 22 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (十八) (十九)
7. 23 満洲国の観音讃仰運動
 大東亜全域に 観音霊場を
7. 25 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信常
7. 25 宗教事情を中心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (二十)
7. 25 共栄圏宗教講座 天理教亜細亜文化研が開く
7. 25 開拓教化員訓練所と 大陸鍊成道場設立 満洲における曹洞の施設
7. 27 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信常
7. 27 宗教事情を衷心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (二十二) (二十三)
7. 27 南方住宅建築の資料に 新島襄氏旧邸を科学研究
7. 28 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信常
7. 28 宗教事情を衷心に =ビル=マ=雑=記= 高橋照空 (二十四)
7. 28 訪泰紀行 (七) 遺泰日本仏教 親善

1943. 7. 28 使節隊員 森大器
大陸布教に関し 大東亜省から方針指示 けふ、宗教団戦時委員会
7. 28 “南枝仏”を安置し 日緬寺の建立 結城瑞光氏の近業
7. 28 蒙古で逝った 木戸氏追悼会
7. 29 蒙疆西藏をも包含 仏教圏協会の新道場要綱
7. 29 絶対親日の諸州 泰国新領土ケントン、モンバン 寛清澄氏談
7. 30 訪泰紀行(八) 遣泰日本仏教 親善使節隊員 森大器
7. 30 現状に遺憾多し 大陸布教は再出発 大東亜省が教界に警告
7. 31 訪泰紀行(九) 遣泰日本仏教 親善使節隊員 森大器
7. 31 日本より一步先に 満洲国が青年禁酒 近く法制化を実現
7. 31 華中基督教団誕生 困難な諸事情克服 今秋九月歴史的発足
7. 31 僧侶専門の 日本語学校 ビルマに設立
8. 1 訪泰紀行(十) 遣泰日本仏教 親善使節隊員 森大器
8. 1 中国留学生も 夏休みを返上 戦ふ日本の息吹を体験
8. 1 仏教書をどしどし 満華仏教界へ 大阪仏青の具体的運動
8. 1 泰の仏教事情聴く
8. 3 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信常
8. 3 訪泰紀行(11) 遣泰日本仏教 親善使節隊員 森大器
8. 3 ビルマの独立実現す 同時に米英に宣戦を布告
8. 4 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信常
8. 4 訪泰紀行(12) 遣泰日本仏教 親善使節隊員 森大器
8. 5 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信常
8. 5 訪泰紀行(13) 遣泰日本仏教 親善使節隊員 森大器
8. 5 南海から
8. 5 上海を中心とする 華中基督教団結成
8. 6 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信常
8. 6 泰国外相 仏教会訪ひ 仏舍利礼拝
8. 7 仏教を通じての 日泰文化交流語る 非常なる成果収めて 本社講演懇談会盛ん
8. 8 昭南島に支部を 真如親王御遺徳御事跡 顕彰要綱きまる
8. 8 回教の公認問題 微妙な民族関係と睨合せ 政府・慎重に対策考慮
8. 8 大東亜戦下世に出た 古事記の漢訳
8. 10 王陽明に会った日僧(上) (木辺訪泰使節の帰朝に因み) 来馬琢道
8. 10 訪日タイ国外相 舍利殿に踞跪合掌 交歓午餐会で木辺男挨拶
8. 10 ビルマ事情 懇談会開く
8. 10 泰外相敏 迎晩餐会
8. 10 中華僧、宏寛氏 西本で得度
8. 10 中華蔡大使 中心に懇談
8. 10 南京中等学生 内地所感
8. 11 王陽明に会った日僧(下) (木辺訪泰使節の帰朝に因み) 来馬琢道
8. 12 マライ教信 イポー市外 温泉寺 岡教選
8. 13 仏教を通じての 日泰文化交流語る (1) 時…八月四日・処…芝三縁亭 本社主催
8. 14 仏教を通じての 日泰文化交流語る (2) 時…八月四日・処…芝三縁亭 本社主催
8. 14 次の仏青大会は 新生ビルマで! トン・ミョウ夫人の手紙
8. 14 興亜宗教 文化叢書 第一巻近く完成
8. 15 仏教を通じての 日泰文化交流語る (3) 時…八月四日・処…芝三縁亭 本社主催
8. 15 反英闘争の ウ僧正銅像建立 ビルマ傑僧につづけ
8. 15 オッタマ顕彰会 発起人会
8. 15 神徳南方に輝く ビルマに吉備津神社 ジャワにゆかりの橋
8. 15 在緬三十年の 福島弘氏を中心に ビルマ事情聴く 宗教問題研究所の催し
8. 15 ウ泰外相主催 お茶の会
8. 15 カ教中外親善会 比島留學生を招待
8. 15 タイ外相の 旅情を慰む
8. 17 仏教を通じての 日泰文化交流語る (4) 時…八月四日・処…芝三縁亭 本社主催
8. 17 華中合同新教団 日本の指導も協力し 九月に誕生の運び
8. 17 在緬三十年の一 福島弘氏を中心に ビルマ事情聴く 宗教問題研究所の催し
8. 17 満洲道教総会派遣の 道士、初の留學生に 本社を来訪 尼僧を交へた留日仏道学徒
8. 18 仏教を通じての 日泰文化交流語る (5) 時…八月四日・処…芝三縁亭 本社主催
8. 18 在緬三十年の一 福島弘氏を中心に ビルマ事情聴く 宗教問題研究所の催し
8. 19 仏教を通じての 日泰文化交流語る (6) 時…八月四日・処…芝三縁亭 本社主催
8. 19 八紘為宇の実現に 満洲次郎育成が肝

1943. 8. 19 要 泰やビルマは三郎・四郎
興亞意識に燃ゆる 高野山の諸運動
南方に大護摩を焚く
8. 19 大東亞基督教団の確立へ 共栄圏各国
に呼びかけて 近く興亞基教同盟結成
か
8. 19 全島各派合同による 台湾基教団誕生
島内聖公会も積極的参加
8. 20 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(7) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 20 第東亞戦の完勝を 次・は南京で 興
亞団体会合閉づ
8. 20 道士の防空服制定等 満洲道教の戦時
体制 新京の分会長会議で議決
8. 21 マライ半島 未開種族の宗教 竹中信
常
8. 21 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(8) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 21 租界返還と布教権 この際是非解決を一
現地経験者から近く当局へ進言
8. 21 報国運動 紅卍字満洲国総会の 第二
期教化工作 于静仁会長指揮で実施
8. 22 サカイ族の宗教 マライ半島 未開種
族の宗教 竹中信常
8. 22 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(9) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 22 タイ国議会 回教の多妻 不容認決議
九月十日、五周忌を期し 発会式と追
悼法要 オツタマ比丘顕彰会実働へ
8. 24 サカイ族の宗教 マライ半島 未開種
族の宗教 竹中信常
8. 24 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(10) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 24 六十年間を一貫して 皇国の正義宣揚
オツタマの偉大な足跡
8. 24 北支の古跡調査 学界五権威来月出
発
8. 25 サカイ族の宗教 マライ半島 未開種
族の宗教 竹中信常
8. 25 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(11) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 25 更に大陸で陣頭指揮 満支で開教使視
閲 東本願寺の光暢法主
8. 25 六十年間を一貫して 皇国の正義宣揚
オツタマの偉大な足跡
8. 26 サカイ族の宗教 マライ半島 未開種
族の宗教 竹中信常
8. 26 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(12) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 26 日本を知らぬ原住民 彼等に直接する
日本人の“人”の問題
8. 26 日本基督の現地 (香港) 活動成功
8. 27 サカイ族の宗教 マライ半島 未開種
族の宗教 竹中信常
8. 27 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(13) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 28 サカイ族の宗教 マライ半島 未開種
族の宗教 竹中信常
8. 28 泰国外相 “国際仏協” の 名誉会
員に
8. 28 半島の二青年敬神家 内地聖跡巡拝
感激語る
8. 29 サカイ族の宗教 マライ半島 未開種
族の宗教 竹中信常
8. 29 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(14) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 29 了庵に影響を受けた 王陽明の禪 井
上哲次郎
8. 29 上海西本願寺 英靈奉安 所定礎式
8. 29 満洲国首都、大同広場に 慈眼視衆生
の造福大観音像竣る ちかく開眼式
張國務総理の奉建縁起
8. 29 “大東亞寮” 完成 南方特別留学生を
鍊成
8. 29 真如親王の御事跡を 各国語で決戦下
の世界に “国際仏協” 十周年記念事
業
8. 29 満洲国白參事官 “惟神の道” 完成
8. 29 大東亞文学 者大会終る
8. 29 満系般若寺と 語学交敬教授 東本満
洲別院
8. 29 書評 高楠順次郎博士著 アジア民族
の 中心思想
8. 31 サカイ族の宗教 マライ半島 未開種
族の宗教 竹中信常
8. 31 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(15) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
8. 31 大東亞並に世界を 指導すべき曆法 一
立春元日論— 千家尊建
8. 31 安南の宗教
9. 1 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(16) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
9. 1 日本とタイ、そして満洲 泰の仏教語
る 鄭禹公使
9. 2 仏教を通じての 日泰文化交流語る
(17) 時…八月四日・処…芝三縁亭
本社主催
9. 2 漢口西本願寺 孤児養育事業
9. 2 西本中支留學生
9. 3 神宮神部署 香港海南島方面へ 既に
大麻○○○体頒布 澎湃たる現地同
胞の赤誠
9. 3 光暢法主夫妻 鮮満支巡教 来廿四日

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1943. 9. 3 発途 駐泰満洲国公使 鄭氏に物を聴く
 9. 5 仏教を通じての 日泰文化交流語る (18) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 5 南支汕頭の 森氏活躍
 9. 5 泰国を語る 泰国駐劄満洲国公 使鄭禹氏を中心に
 9. 5 南方共栄圏建設と 原住民の教化に 天主教団教師の挺身
 9. 5 日華仏教研究会 財団組織に
 9. 7 仏教を通じての 日泰文化交流語る (19) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 7 オットマ比丘 顕彰会 十日輝かしき 発足
 9. 7 内鮮一体一心目ざし 鮮語に訳して 神拝行事 車折神社清原書院で指導
 9. 8 仏教を通じての 日泰文化交流語る (20) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 8 泰国を語る 泰国駐劄満洲国公 使鄭禹氏を中心に (承前)
 9. 9 仏教を通じての 日泰文化交流語る (21) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 9 南方文化建設と 現地住民教化に 関西学院鮫島教授社途へ
 9. 9 泰国を語る 泰国駐劄満洲国公 使鄭禹氏を中心に (承前)
 9. 9 大東亞理念に基づく カトリック建設へ 蒙疆に自主的教団誕生
 9. 10 仏教を通じての 日泰文化交流語る (22) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 10 中国道義青年会結成 仏教信仰で共栄圏建設に
 9. 10 泰国を語る 泰国駐劄満洲国公 使鄭禹氏を中心に (承前)
 9. 11 チャクン族の宗教 (マライ未開種族の宗教) 竹中信常
 9. 11 オットマの年代に就て (上) 山形英応
 9. 11 仏教を通じての 日泰文化交流語る (23) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 11 泰国を語る 泰国駐劄満洲国公 使鄭禹氏を中心に (承前)
 9. 11 全仏教徒の 印度独立運動に対し 支援運動組織化 第一回準備協議会開く
 9. 11 西本願寺の仏前に ソロモン第一線部隊長から
 9. 12 チャクン族の宗教 (マライ未開種族の宗教) 竹中信常
 9. 12 オットマの年代に就て (中) 山形英応
 9. 12 仏教を通じての 日泰文化交流語る (24) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 12 またオットマを語る 仏跡巡記現はる
 9. 12 ジャワの回 教二団体に 正式認可
 9. 12 中国人と眞の提携を 大陸の布教現況批判に対し 現地側関係者の熱望
 9. 12 泰国を語る 泰国駐劄満洲国公 使鄭禹氏を中心に (承前)
 9. 14 チャクン族の宗教 (マライ未開種族の宗教) 竹中信常
 9. 14 仏教を通じての 日泰文化交流語る (25) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 14 オットマの年代に就て (下) 山形英応
 9. 14 日本神、仏、基代表を招き 華北宗教刷新に関する懇談会
 9. 14 仏教発祥の地印度を教へ 支援の基本方針決る
 9. 15 仏教を通じての 日泰文化交流語る (26) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 15 印度独立支援で 東京仏教各 種団体動く
 9. 16 仏教を通じての 日泰文化交流語る (27) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 17 仏教を通じての 日泰文化交流語る (28) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 17 泰国を語る 泰国駐劄満洲国公 使鄭禹氏を中心に (承前)
 9. 18 興亞宗教音楽 大会に期待
 9. 18 仏教を通じての 日泰文化交流語る (29) 時…八月四日・処…芝三緑亭 本社主催
 9. 19 泰国を語る 泰国駐劄満洲国公 使鄭禹氏を中心に (承前)
 9. 23 東洋人の自覚へ 比島人を指導せよ
 9. 30 喇嘛を訪ねて (上) 長尾雅人
 9. 30 印度民族決起の秋 ガンヂーを語る 詩人野口翁
 9. 30 中国基督教青年会 六年ぶり復興
 10. 1 喇嘛を訪ねて (中) 長尾雅人
 10. 1 南方へ 日基督教師社途へ
 10. 2 喇嘛を訪ねて (下) 長尾雅人
 10. 2 日華仏教の提携強化で 聖戦完遂に一段の協力 華北共同協議会で協議
 10. 3 印度独立を支援 皇国仏徒の運動組織化 十日第二回協議会開く
 10. 3 中支の基督教諸派も統合 総力を東亞建設に結集
 10. 3 艱苦を克服して 自主自養に邁進 南京の基督教界事情 木本氏談
 10. 6 信仰と科学の握手 ビルマ“医僧”の

1943. 10. 8 偉功 ランゲーンの便り
中国知識階級の新傾向 真に日本を知る
のため 神祇精神の研究熱旺盛
10. 8 華北基督教団が 所属神学校を設立
真使命を帯びて発足
10. 8 天津に日華精神文化協会 先づユダヤ
研究講座開く
10. 8 日本基督教女青 上海に支部
10. 8 上海玉仏寺で 大東亜慰靈法要
10. 9 大東亜の宗教教学確立 華北各教に研
究機関設く 彼我当局も積極的に支援
10. 9 “中国文化 建設会”結成
10. 11 ジャワ回教団体認可 江口鑿次 (一)
10. 12 ジャワ回教団体認可 江口鑿次 (二)
10. 12 時局の脚光浴びる 日支交渉史の先覚
松下見林の壽像菩提寺に納る
10. 12 純朝鮮様式の 真西本願寺 仁川松島
布教所
10. 12 南京神社 三日、鎮座祭
10. 13 ジャワ回教団体認可 江口鑿次 (三)
10. 13 中国知性層と 神祇研究熱
10. 14 ジャワ回教団体認可 江口鑿次 (四)
10. 14 樺太、多蘭泊に アイヌの「真宗村」
故津田住職の献身美談
10. 15 ジャワ回教団体認可 江口鑿次 (五)
10. 15 中支に神祇会
10. 16 ビルマの留学生 ら仏舎利参拝
10. 16 中国児童に勤勞精神を 杭州天理教、
鈴木女史の挺身
10. 16 光暢法主の直修で 建国忠靈追悼会
裏方は全満婦人に放送
10. 16 蒙疆回教徒 婦女視察団
10. 19 ジャワ回教団体認可 江口鑿次 (六)
10. 19 満洲国の識字運動 最小限百字は誰で
も 読み書き出来るやう
10. 19 玄奘三蔵法師の 頂骨安置の造塔地
南京、臥龍山と決る
10. 19 紅卍字会の 哈爾濱宗壇 大殿は年内
完成
10. 19 興亜宗教言論 報国会結成へ 興亜宗
教記者会
10. 21 日本を心から憧れてゐる 奥蒙古のラ
マ・長尾婦朝氏談
10. 22 大谷光暢法主 天津北京巡錫
10. 23 交趾支那 寺院参観(上) 南方便
立花俊
10. 24 交趾支那 寺院参観(下) 南方便
立花俊
10. 24 日本人のための イスラム教伝道所
大阪蛸ヶ池に初めて設立
10. 24 「共栄圏仏教」を討議 中京で日本仏
教学協会大会
10. 26 学界權威の智囊を凝集 興亜宗教問題
を討議 興亜審議会総会開く
10. 27 華北瞥見 池田信吉
10. 28 松井大将発願の 興亜観音大陸へ 盛
んな遷座恭送法要 大東亜共栄圏の達成
祈る
10. 28 在支日本人の再教育 長兄的自覚によ
る 暖かい指導が必要
10. 29 上海忠信中小 校長一行入洛
10. 30 “大東亜十億総決起”の決議 大成果
を収めて臨時議會終る
10. 30 大陸の日本人と 内地の日本人と違ふ
忠信中学蔡校長談
10. 31 共栄圏の基教工作 自ら敵米英の 第
五列強成の愚 小牧博士談
10. 31 東亜全土に宗教的 人物網を布け そ
れが思想戦力の増強へ
10. 31 支那側宗教連盟 青島で結成を急ぐ
11. 1 重慶よ、迷夢を払い 本来の面目に目
覚めよ 先年来朝の戴天仇の叫びに還
れ
11. 1 真如親王の御持仏 果して天平期の作
新納忠之助氏の断案
11. 1 ビルマ戦線 の散華弔ふ 日緬婦人会
11. 3 満洲国観音靈 場創設進歩す
11. 5 在支日本人の 再教育に就て
11. 5 南方色盛る展観と講演 真如親王奉賛
大藏会
11. 6 生かす観音信仰 華北に卅三靈場選定
11. 7 重慶へ文化弾丸 天理教蚌埠医院の活
躍 中華民衆へ慈愛の手
11. 7 京城護国神社 廿日、鎮座祭
11. 7 大東亜建設の基本方策 各代表の意見
一致 共栄圏民族結集の 画期的大会
議終る
11. 7 印度仮政府激励
11. 7 南方より 泉原浩
11. 9 大東亜会議 の真義
11. 11 大東亜の文化 -伝統と創造-
11. 11 国家と宗教 宗教文化学会研究発表梗
概
国家と宗教の態度 早稻田高等学院
教授 小山甫文
11. 12 国家と宗教 宗教文化学会研究発表梗
概
国家総力戦と宗教心 日基督教団東部
神学校教授 宮本武之助
11. 12 半島同胞も本島人も 皆征く・決戦場
へ 龍大留学生の赤誠
11. 12 北支仏教の現状聴く
11. 13 国家と宗教 宗教文化学会研究発表梗
概
国家の理念と宗教の理念 駒沢大学
教授 岡本素光
11. 14 華北仏教復興に 挺身奮ふ 濱田本悠
氏
11. 14 大陸に相次ぐ新協会 天理教の宗教工
作結実
11. 16 皇軍は神軍なり(上) 矢野豁
11. 16 国家と宗教 宗教文化学会研究発表梗

- | | | | | | | |
|---|--|---|-----------------------------------|---------------------------------|---|---|
| 概 | 日本精神と仏教一考察 立正大学教授 稲葉文海 | 11. 17 | 皇軍は神軍なり(下) 矢野龍 | 11. 17 | 国家と宗教 宗教文化学会研究発表梗概 | |
| | 真宗の世界観 日本教学研究所研究員 千代田女専教授 大原性実 | 11. 17 | 満・華青年層の 最近の思想動向 | 11. 18 | 国家と宗教 宗教文化学会研究発表梗概 | |
| | 「国家と宗教」梗概 神道学院講師 安津素彦 | 11. 18 | 語学による親善を 南京基青の日本語講座 | 11. 19 | 国家と宗教 宗教文化学会研究発表梗概 | |
| | 国家と宗教 天理教 諸井慶徳 | 11. 19 | 天主教と半島同胞 信仰を通じて融和 日本人的自覚へ | 11. 19 | 支那四億の民心に 心打つ大東亜法要 上海玉仏寺の盛儀 | |
| | 各宗教団体が 奉天に糾合 銃後報国大会 | 11. 20 | ラングーン寸感 小早川秋声 | 11. 20 | 国家と宗教 宗教文化学会研究発表梗概 | |
| | 臨済禅の日本的展開 伊藤古□ | 11. 20 | 強力な教化実践 奉天に宗教教化団体 連合会生る | 11. 21 | ラングーン寸感 小早川秋声 | |
| | 民族の興隆と仏教 大谷大学助教授 龍山章真 | 11. 21 | 大東亜新聞協議会成る 大東亜新聞大会終る 日本新聞協会 発展的解消 | 11. 21 | 興亜宗教審議會 宗教教学と宗教国策 第一部会 大東亜諸宗教 興隆方策審議 第二部会 | |
| | 大東亜建設と漢訳仏教 京都帝国大学文学部講師 東方文化研究所研究員 塚本善隆 | 11. 23 | 閑院宮殿下の御筆筆 「東亜鎮護」安置 大連神社の奉掲奉告祭 | 11. 25 | 大東亜新聞大 会の宣言を読む | |
| | 日本仏教と南方仏教 東京帝大講師 山本快龍 | 11. 25 | 共栄圏全土へ 文学史で皇国 精神の真髄を | 11. 25 | 東亜民族の 和合強化 南大将ら獅子 | |
| | 吼 | 11. 26 | 遠東学院を紹介す 仏印派遣仏教団長 立花俊道 | 11. 27 | 遠東学院を紹介す 仏印派遣仏教団長 立花俊道 | |
| | 在外皇民興亜団体と 初の連絡協議会 明年一月東京で開催 | 11. 28 | 二千年前の 前漢文化偲ぶ 大同石窟 初期の着色や 陽高古城村の墳墓 | 11. 28 | “金剛石”を唱和 純日本式の卒業式 比島の日本語学校 | |
| | 正しい泰国 文化を紹介 平等氏の講座 | 11. 28 | ピ泰国大使 来朝歓迎会 | 11. 28 | 中国財界有志の後援で 文化事業に新 展開 大派山口興亜部長語る | |
| | 北支仏教文化 の報告講演会 | 11. 30 | 南支の日華仏徒協力 大東亜建設陣没 将兵 □□者の大法要 | 11. 30 | 隣家の全焼で 上海東別院御難 | |
| | No.13282~13330まで欠号 | | S18. 11. 30~S19. 1. 31 | 1944. 2. 1 | 大陸の文化政策(華北に於る三つの講演) 浜田本悠 | |
| | 2. 2 | 国家的布施行 華北に於る三つの講演 浜田本悠(二) | 2. 3 | 仏教事情を中心とする ビルマ雜記 高橋照空(一)(二) | 2. 3 | 国家的布施行 華北に於る三つの講演 浜田本悠(三) |
| | 2. 3 | 神社を中心し 中国農村を刷新 殷汝 耕氏、北支に計画 | 2. 4 | 仏教事情を中心とする ビルマ雜記 高橋照空(三) | 2. 4 | 天下の公敵は誰ぞ 華北に於る三つの 講演 浜田本悠 |
| | 2. 4 | 戦局急迫、前線の死闘を体し一億捨身 になれ 大東亜共栄圏への 我国宗教の進出 政府「方策委員会」へ諮問 | 2. 4 | 大東亜派遣の 教職養成機関 天主教団が | 2. 4 | 日華精神文協 必勝文化講座 |
| | 2. 4 | 印度の芸術に關 する研究発表 | 2. 5 | 天下の公敵は誰ぞ 華北に於る三つの 講演 浜田本悠 | 2. 5 | 仏教事情を中心とする ビルマ雜記 高橋照空(四) |
| | 2. 5 | 複合民族の魂の家 ハルピン郊外に建設中 紅卍字会の聖場 | 2. 5 | 大派滿洲開教監督に 某連枝の出馬を 特請 北滿開教使代表本山へ | 2. 5 | 日本仏教紹介の 写真展盤谷と河内で 開く 北支へは留学僧派遣 興亜仏教 読本を共栄圏へ |

1944. 2. 6 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (五)ノ下
2. 6 大東亜戦 争美術展 を観る
2. 8 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (六)ノ上
2. 8 模倣文化を放擲 純日本文化の紹介
大東亜共栄圏指導の要点
2. 8 “第二の神国に” 満洲国に神道精神
の鼓吹
2. 9 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (六)ノ下
2. 9 蒙疆に文教を 日本仏教の視察に 徳
王の令息ら西本願寺訪問
2. 10 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (七)
2. 10 日蒙は同信提携 入洛した蒙古の都王
談
2. 11 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (八)ノ上
2. 13 高倉会館だ 満洲を語る
2. 15 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (八)ノ下
2. 16 “純日本文化の 紹介” に就て
2. 16 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (九)ノ上
2. 16 大東亜諸民族の為の 日本事業出版
京都ローマ字会で原稿作製
2. 16 南方祝祭日 海軍民政府公報
2. 16 中国から二名 留日文学者
2. 18 満洲開教監督を 夾輔大谷連枝、当局
に一任 大派上局会議で慎重審議
2. 19 日滿華を通じて 改暦運動高まる 直
接増産にも影響
2. 19 大日本仏教会 日泰会館建設へ協力
戦時僧侶勤労働員その他 緊急協議会
開く
2. 19 日華の精神交流 北京仏学院と同願会
が
2. 20 南方事情の権威 磯部博士を偲ぶ
2. 20 大谷連枝の 大陸駐錫 光暢法主の
帰山後決定せん
2. 20 西本願寺北 支人事異動
2. 20 各宗派の興亜 首脳会議開く
2. 22 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空
2. 22 従軍僧に初の光栄 支那事変陸海軍部
外者ら行賞
2. 23 支那仏教史 跡館と霊友 (上) 常磐
大定
2. 24 支那仏教史 跡館と霊友 (中) 常磐
大定
2. 25 支那仏教史 跡館と霊友 (下) 常磐
大定
2. 26 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十)
2. 26 日泰文化会館の 建設で協力求む
2. 27 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十一)上
2. 27 比島マニラに 西本願寺別院創設 米
国通が集り特殊活動起す ラ大統領も
参拝
2. 27 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十一)下
2. 27 大東亜の基督教 信徒に贈る書翰 け
ふ賞金贈呈式
2. 27 大東亜文化講座
2. 29 比島回教徒の協力 海外宗教事情
2. 29 “入竺比丘尼”上梓 村上妙清尼十七
年の苦心
3. 1 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十二)
3. 2 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十三)ノ上
3. 2 比島バギオに 神社建立
3. 2 インドネシア向 映画“日本回教徒”
3. 3 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十三)ノ中
3. 4 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十三)ノ下
3. 4 山東伝道会活躍
3. 4 日緬仏教語る テイモン大使と 高階
曹洞宗管長
3. 5 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十四)
3. 5 米英の非人道摘発 ビルマ宣伝相声明
夾輔の開教総長を撤回 大派満洲開教
問題遂に解決
3. 5 日泰文化会 館建設資金 浄宗は六万
五千円
3. 5 比島「国家祈願日」
3. 5 米化した比島人を 相手には打つてつ
け マニラ西本願寺陣容
3. 5 カ教マニラ 教区長会議
3. 5 共栄圏文化の建設 報国団で大東亜建
設協議会
3. 7 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十五)ノ上
3. 8 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十五)ノ下
3. 10 仏教事情を中心とする ビルマ雑記
高橋照空 (十六)
3. 11 基督教満洲 開拓村拡張
3. 12 ヴアルガス 大使歓迎 基連連合会
3. 17 法泉寺を訪ふ 一太田覚眠師のこゝろ
尾瀬敬止 一
3. 17 半島同胞の教化 寺院自らの差別是正
3. 18 法泉寺を訪ふ 一太田覚眠師のこゝろ
尾瀬敬止 二
3. 19 法泉寺を訪ふ 一太田覚眠師のこゝろ
尾瀬敬止 三
3. 19 伸びる皇民化教育 建設に勤勞奉仕に
挺身 南方フロレス島原住民 軍政の

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1944. 3. 19 浸透 戦乱のマニラに 最後まで何故 踏み止つたか ヴアルガス駐日大使談
3. 19 高野と知恩院 ラマ僧交歓
3. 21 比律賓の南方 基地的機能整備に 基教各派が万幅の支持
3. 21 決戦開教指標成る 曹洞の満洲国開教陣 矢原氏隘路打開に努む
3. 21 セラム回教徒 挺身隊を結成 皇軍に“翼”の献金
3. 21 共栄圏文化の建設に 南方仏教との交流先覚者鑽ふ 国際仏教協会が運動展開
3. 21 音楽に結ぶ 日泰両国
3. 21 “満洲仏教号” 軍機献納運動
3. 23 法泉寺を訪ふ 一太田覚眼師のこと一 尾瀬敬止 四
3. 24 国策遂行に挺身 紅卍字会の教化連絡会
3. 26 仏印（東京雲南の国境なる老開町）立花俊道 一、老開町
3. 26 六十の坂越した 老人組も続々参加 サマル島全回教徒が「強制農耕令」に決起 南方の朗話
3. 26 満洲ラマ教徒へ 西藏語の国民訓 大東亜の宗教民族に 与へる意義深し
3. 26 昭南特別市に 情報宣伝委員会 現地各民族、宗教家を網羅
3. 26 “日本の高僧来る” 南京に於る林彦明氏 松村大使館参与官絶讃
3. 26 大派満洲監督 本明氏正式任命
3. 28 仏印（東京雲南の国境なる老開町）立花俊道 二、国境を越えて 買物に来る
3. 29 共栄圏域に回 教徒の協力
3. 29 仏印（東京雲南の国境なる老開町）立花俊道 三、新寺の建立
3. 29 印度独立政府 樹立を激励
3. 30 仏印（東京雲南の国境なる老開町）立花俊道 四、元寇猛将の祠
3. 30 贈る 勝利の象徴 ビルマのバゴダ奉還式
3. 30 開教民族の大 同団結を強調
3. 31 満ソ国境の志士(1) 一甘露寺アレクセイの思想・序詞(上)一 在満洲国〇〇部隊 永島純一
3. 31 仏印（東京雲南の国境なる老開町）立花俊道 五、安南在家の祭壇
3. 31 ラマ僧の交歓
- 欠号
5. 2 モロ族回教徒の反響 在日教区長の声明に
5. 2 思想謀略の基地一 支那協会学校潰ゆ
5. 3 印度独立運動支援を 仏陀の宝前に誓ふ 六千万仏徒総決起を宣言 仏教各派管長会議
5. 5 ーイスラム教の動向ー 天竺に暴英を討つ 世界史的情景
5. 5 興蒙興亜に挺身 帰蒙した青年ラマの決意
5. 5 比島新教団統一成る
5. 6 バンコックの図書館(上) 上村真肇
5. 6 晴耕雨読の建前で 満洲の勤勞奉仕文化に渴する満系青年
5. 7 バンコックの図書館(下) 上村真肇
5. 7 日比親善に挺身 好評の派遣修道女 アキノ氏カ教に謝意
5. 9 動向を重視される ベンガールの回教徒 分離政策の弊も解消
5. 9 ビルマ尼僧の活躍は 日本仏教女性を刺激 「入竺比丘尼」出版記念会
5. 10 ビルマ政府と 仏教徒の謝状 国際仏協へ
5. 10 ガンヂー翁 夫人追悼会
5. 11 武蔵大宮参 拝と開教記(上) 千家尊建
5. 11 満洲国の使命達成に 第二の神国化を 古神道研究に没頭の 白文会氏の抱負に聴く
5. 11 半島同胞の勤勞と 寺院宿舍管理に重点 第二回勤勞指導講習決る
5. 12 武蔵大宮参 拝と開教記(下) 千家尊建
5. 13 回教を如何に観る(上) 千家尊建
5. 13 商業から生産面へ 華僑の軍政協力 印度作戦の兵站基地馬來 森脇司政官 婦朝談
5. 14 回教を如何に観る(下) 千家尊建
5. 14 ビルマから仏舍利 パハン博士ら捧持して けふ、羽田空港へ 日緬の団結 固し
5. 14 回教徒の決戦構へ指導
5. 16 回教公認問題は 次回の方策委員会に提出
5. 17 南方原住民 の宗教対策
5. 17 ビルマから寄遷の 仏舍利恭迎式
5. 18 玄中寺の叢(上) 菅原惠慶
5. 18 ダバオ聖書学 校生も増産へ
5. 19 玄中寺の叢(下) 菅原惠慶
5. 19 日華僧侶の常会 疊巒大師法要が縁で 仏舍利恭迎 式を前に
5. 21 支那を知り 日本を知らしめる 共栄圏の為に
5. 23 大東亜文化研 西本願寺に創設
5. 23 セレバスの基 教連合会拡充
5. 24 決戦教化隊編成 協和政治の面に進出 満洲の宗教教化団体
5. 24 満洲開拓の 画機脚本 京都府府が募集
5. 24 =仏=塔=東=遷= 仏舍利恭迎歌

1944. 5. 28 ビルマ民衆に医薬を ラングーンに診療所開設 仏教團協会の準備成る
5. 30 日華仏教文化交流に就て(上) 丸山義淵
5. 30 内鮮一体化に “朝鮮の風俗と習慣” 刊行 特性をつかめ
5. 30 蒋介石の心臓杭州に 日華の誓ひ固し 西谷氏の仏大に名僧参画
5. 31 日華仏教文化交流に就て(中) 丸山義淵
5. 31 敵撃滅の決意固く 仏舎利恭迎式 日緬両国結ぶ精神的楔
5. 31 満洲国曹洞宗の 故古賀元帥追悼
6. 1 日華仏教文化交流に就て(下) 丸山義淵
6. 1 日滿華三国人 謝恩の寿像応召 立たぬ銅像由来記
6. 2 病苦と生計 中国民衆救ふ 上海で製菓 西本願寺福寿院に創設
6. 2 ビルマ寄遷の仏舎利迎ふ
6. 2 テイ・モン大使 高野山登嶺
6. 2 泰の守護仏奉遷
6. 3 半島同胞の 鉞員を感化 大派探掘部隊
6. 4 共榮圏各国大使に 必勝観音像を贈る 大東亜各国の戦没者慰霊
6. 6 仏印仏教文化語る 立花団長の帰朝報告
6. 6 日州の勸農開拓 満洲布教実働へ 佳木斯に連絡事務所
6. 6 南方仏陀祭
6. 8 黄衣の国タイ 民生を律する仏教(上)
6. 8 満洲一千万のラマ僧 採炭報国に決起
6. 8 半島同胞の教化 京都府仏教会と協和会 関係者ら具体策を協議
6. 8 大東亜仏教親 善協会発会式
6. 9 黄衣の国タイ 民生を律する仏教(下)
6. 9 日泰緬文化研究会
6. 10 泰国に仏教中心都建設
6. 10 高野山に舍利塔
6. 10 ビルマ僧侶 敵撃滅に決起
6. 10 見事任務果し 修道女婦る
6. 10 支那大陸宗教 戦士特別錬成
6. 10 蒙疆回教徒 綜合調査実施
6. 11 ガンジー翁の釈放と 印度回教徒の動向
6. 11 共榮圏各地へ進出の カ教教師要員の強化 養成機関の設立急ぐ
6. 11 シベリヤ出征繞る書簡奇譚 廿七年目に大谷宗務総長再会
6. 14 大東亜文化の基地 洛陽研究 西本願寺大東亜圏文化研が
6. 14 泰国留学生ら 仏舎利参拝
6. 16 拈華微笑妙見真如 汪首席の揮毫を刻む 福岡の大悲閣
6. 17 “アンコール・ワット 拓本集”
6. 17 戦局に応へ朝鮮京畿道で 宗教各派紛決起
6. 18 支那派遣教師 特別錬成会
6. 18 大東亜基督連盟の 結成目指して進展 日本基督の大東亜事業
6. 18 台湾基督教団成立
6. 20 南方の宗教官 中心に懇談会
6. 22 大東亜寺の 仮堂近く竣工 ビルマ寄進の 仏舎利安置
6. 23 南方の宗教事情 新婦朝の関係者と 文部当局の懇談会
6. 23 国力増強で 全朝鮮に国語普及運動 西本願寺の開教に一転機
6. 23 駐比島大使 宗教部隊歓迎
6. 24 現地民の感謝 金光教北支の施療
6. 25 南京日本仏教会成立す 在南京 林彦明
6. 27 アチエの回教問題(上) 一回教と政治の混淆事情— 塚原嘉平次
6. 27 大東亜地区 古代美術 写真と絵画資料
6. 28 アチエの回教問題(中) 一回教と政治の混淆事情— 塚原嘉平次
6. 28 法華宗興亜局長 に野原日海氏
6. 29 アチエの回教問題(下) 一回教と政治の混淆事情— 塚原嘉平次
6. 30 支那青年層の動向 一紅卍字会等の近情—
6. 30 奥丹行脚 十八年の回顧(上) 高橋浩洲
6. 30 日華宗教人の 共同錬成
6. 30 日華宗教連 絡強化提議
- 13456~13479欠号
(1944年7月1日~7月30日)
8. 1 ガンジーの逮捕と 釈放繞る諸問題(5) 鈴木隆三郎
8. 1 ラマ廟法会 愈よけふから厳修
8. 1 ラマ廟法会 愈よけふから厳修
8. 1 南ボルネオで 牧師伝道士講習
8. 2 留学生に日 本芸能講習
8. 4 蒙疆回教の実相 岩村民族研究所員談
8. 5 泰緬両大使らに 日本仏教を講ず 毎週一回 長井博士
8. 6 サイパンの悲憤を 皇国学童に打込む 無名人が全霊こめる国民塾
8. 8 皇軍将士と 米鬼の相遠 道義の団結で 断固鬼畜を撃滅 バタアンの感激語る 木曾氏
8. 8 洛陽の名刹 白馬寺訪問 玉川西本願寺 北支開教総長
8. 9 対支文化工作 不振の報告
8. 11 阿部朝鮮総督の決意 空襲時に腰を抜かず 僧侶 閩管長の政治談
8. 12 蒙古の僻地に 神社中心の神国 外地

- に青年神職の活躍
1944. 8. 13 全華北キリスト教 団、米国へ嚴重抗議
8. 15 華北文化運動積極推進
8. 16 チョクト・オボ祭
8. 18 ハルピンより 田村敏雄
8. 19 大東亞戦争下の 輝しき學術研究 台灣総督府が刊行 “東印度の仏教文化”
8. 22 日本と安南の 仏教親善風景
8. 22 南方仏教の法悦に浸る 泰国大使の持戒僧供養
8. 22 大東亞建設 と神社問題 東亞民族文協が研究
8. 26 共栄圏文化確立に 内外神祇行政の一元化 各方面に強力な要望
8. 26 大陸の神社奉仕に 優秀神職の進出を 相良外務事務官から要請
8. 26 南方の宗教現状 自然宗教を基礎の混合色 内藤博士帰朝談
8. 26 大陸の厚生事業に 精神的裏付けが緊要
8. 29 半島 全体に鎮守の社 一面一神祠建立運動進む
9. 2 在満神社の飛躍時代近し (上) 新京神社 糸井新
9. 3 在満神社の飛躍時代近し (下) 新京神社 糸井新
9. 4 日泰文化会館 と仏教会懇談
9. 5 大ビルマ連盟に 回教徒協力
9. 5 ロンボック 回教師会議
9. 9 原住民に憤激の嵐 南ボルネオ基督教徒対米抗議
9. 10 衡陽 (上) 常磐大定
9. 12 衡陽 (下) 常磐大定
9. 12 印度カスト論 考の研究発表
9. 15 日緬親善なくして ビルマの独立なし オッタマ僧正六周忌の感激 ランゲーンより
9. 19 ビルマ仏教から 仏像と一切経 上田教授通じ高野山へ
9. 20 共栄圏建設の礎石 大東亞仏教青年会を財団に 興亜仏教文化 研究所開設 青年仏徒総決起運動 大東亞仏青の決戦要綱決る
9. 20 スマトラ原住民の喜び 回教最長老語る
9. 20 泰国大使ら 仏舍利参拝
9. 20 回教徒感激の 勤勞奉仕
9. 23 印回回教徒の和協問題 (上) 印度内部反響と英の観測
9. 26 印回回教徒の和協問題 (中) 印度内部反響と英の観測
9. 27 印回回教徒の和協問題 (下) 印度内部反響と英の観測
9. 29 ラマ教復興会議
9. 30 仏舍利を安置 十一月八日入仏法要 大東亞寺
9. 30 支那の祭政一致
- 13527~13563欠号 (1944年10月1日~11月30日)
12. 1 アッサム地方の歴史と宗教 上
12. 2 アッサム地方の歴史と宗教 下
12. 5 太田覚眠翁
12. 8 杭州に新仏教大学 中国人達の懇望で 帰還出来ぬ西谷顔誓氏
12. 8 宗教家に凱歌上る 半島人工の管理 半島青年の勤務満点
12. 9 ビルマ渡来の仏舍利 恭迎法要は無期延期
12. 12 東洋精神に還れ (1) (中国大学青年に与へし講演手記) 友松圓諦
12. 15 嗚呼太田覚眠師 高島米峰
12. 15 百の説法に増し 尊い一の垂範 内鮮父子美談の主を訪ふ
12. 16 東洋精神に還れ (2) (中国大学青年に与へし講演手記) 友松圓諦
12. 17 東洋精神に還れ (3) (中国大学青年に与へし講演手記) 友松圓諦
12. 17 朝鮮の全宗教一丸 宗教報国会を結成
12. 19 東洋精神に還れ (4) (中国大学青年に与へし講演手記) 友松圓諦
12. 20 東洋精神に還れ (5) (中国大学青年に与へし講演手記) 友松圓諦
12. 20 敵国降伏祈願の 立札に現れた神異 半島の古社龍頭神社
12. 20 中国人に深まる 神社の認識
12. 22 戦争と民族 特にスラブ民族について 尾瀬敬止 一
12. 23 戦争と民族 特にスラブ民族について 尾瀬敬止 二
12. 23 戦争協力への決意示す マライ回教徒中央懇談会 マライに回 教会議設立 回教徒青年 挺身隊結成
12. 24 戦争と民族 特にスラブ民族について 尾瀬敬止 三
12. 27 楮民誼氏と蔡大使から “叢寺”の揮毫を贈る 親善の実結ぶ玄中寺の叢
12. 28 戦争と民族 特にスラブ民族について 尾瀬敬止 四
12. 29 嗚呼太田覚眠師 紫安新九郎
12. 29 朝鮮仏教の 活動に敬服 足山臨濟宗 務総長談
12. 29 戦争と民族 特にスラブ民族について 尾瀬敬止 五
1. 3 中国基督教青年会の 中国化への示唆 西洋崇拜から離脱
1. 3 満人尼僧の誠忠 日本仏教に触れ軍機献納 大陸宗教に新記録

1945. 1. 3 満洲の惟神道と吉岡将軍 新京神社
糸永新
1. 5 何物かを加はへよ 中国人に対する
日本人の刺激
1. 6 高麗版大蔵経と 満洲皇帝陛下 徳富
蘇峰翁は説く
1. 7 東亜地域の事業と 伝道に進出企つ
日本基督教団東亜局
1. 7 曹洞宗布教 総監の更迭
- 1.10 一人の僧も居ぬ本山 共栄圏留学生懇
談会
- 1.12 “飛機さへあ らば”の切齒 比島決
戦展開す
- 1.12 故汪首席 追悼法会
- 1.12 南京基督教の動静
- 1.12 在濠州抑留者に 羅馬法王見舞金
- 1.19 泰国仏教の現状 平等通昭
- 1.20 泰国仏教の現状 平等通昭
- 1.20 日滿華三国 戦勝祈願会
- 1.21 泰国仏教の現状 平等通昭
- 1.21 中国青少年が 神社奉仕見習
- 1.21 興亜観音追悼会
- 1.23 泰国仏教の現状 平等通昭
- 1.24 泰国仏教の現状 平等通昭
- 1.24 故太田覚眠翁 に続く者要望 嗣子宏
宣氏談
- 1.24 ビハリ・ボース氏
- 1.24 半島同胞の 飯場に本尊
- 1.24 満洲開拓教化員の 徴用十箇年計画
大派満洲開教監督部起つ
- 1.26 耐乏の精神 中国人の魂を打つ 金光
教 興亜事業 対外文化事業に示唆
- 1.28 読書傾向を通した 中国人の知日慾
断然多い日本語熱
- 1.30 満洲の惟神道 (吉岡将軍の惟神観)
新京神社 糸永新
- 1.31 半島人教化を積極的に 「宗報」新年
度の一事業
- 1.31 日華文化の交流促進 文化資料編纂館
設置
- 1.31 満洲の惟神道 (吉岡将軍の惟神観)
新京神社 糸永新
2. 2 ボース氏葬儀
2. 2 満洲の惟神道 (吉岡将軍の惟神観)
新京神社 糸永新
2. 3 満洲の惟神道 (吉岡将軍の惟神観)
新京神社 糸永新
2. 3 青島神社に類いて 神助を感謝・范局
長 事変を彩る日華親善佳話
2. 4 満洲の惟神道 (吉岡将軍の惟神観)
新京神社 糸永新
2. 7 金光経華北 報国会献翼
- 2.10 興亜宗教同盟が 興亜総本部へ合流
近く解散式を挙行
- 2.10 中国会衆に 人気呼ぶ 賀川豊彦氏
- 2.16 泰国の大学と学生 (上) 平等通昭
- 2.16 比島断じて守れ 大陸防衛論を排す
- 2.18 群を抜く紅卍字会 最近の蒙疆事情を
語る
- 2.20 泰国の大学と学生 (下) 平等通昭
- 2.24 日華交歓 驚異的な奇進 黄檗の蔵経
刊行運動
- 2.28 支那派遣仏教教師錬成会 一日一人一
講主義で二週間
3. 2 天皇親政の御顕現 晩晴草堂に蘇峰先
生を訪ふ (一)
3. 2 真言満洲開教 師連盟充実
3. 3 天皇親政の御顕現 晩晴草堂に蘇峰先
生を訪ふ (二)
3. 3 大東亜共栄圏各国 青少年をも錬成
大日本青少年団神都道場
3. 4 所謂新党結成問題に就て 晩晴草堂に
蘇峰先生を訪ふ (三)
3. 4 大東亜共栄圏の象徴 上海西別院完成
一億二千万円の巨費で
3. 6 国民思想の指導と国史 晩晴草堂に蘇
峰先生を訪ふ (四)
3. 7 宗教家の戦時活動に望む 晩晴草堂に
蘇峰先生を訪ふ (五)
3. 9 必勝の信念と征戦の完遂 晩晴草堂に
蘇峰先生を訪ふ (六)
3. 9 日華要人を顧問に 曇鸞大師奉賛会
教学研究所も設立する
- 3.10 最後の勝利断じて我に在り 晩晴草堂
に蘇峰先生を訪ふ (七)
- 3.13 安南帝国独立を宣言 仏の羈絆脱し日
本に協力
- 3.13 満洲開拓に貢献 大東亜相から天理教
表彰
- 3.13 硫黄島将士の叫び 神州不滅を確信
死すとも永へに皇土守護
- 3.14 日泰両長老 追悼大法要
- 3.16 河口慧海師 追想録 (一) 浅田一
- 3.16 呂宋来貨勧告の 豊太閣の雄図偲び
比島滅敵の熱情続く
- 3.17 河口慧海師 追想録 (二) 浅田一
- 3.18 泰国民の国民性 (上) 平等通昭
- 3.18 河口慧海師 追想録 (三) 浅田一
- 3.18 曹洞満洲布教 総監に山田氏
- 3.20 泰国民の国民性 (中) 平等通昭
- 3.20 河口慧海師 追想録 (四) 浅田一
- 3.21 泰国民の国民性 (下) 平等通昭
- 3.21 河口慧海師 追想録 (五) 浅田一
- 3.21 中国に伝へん神宮の姿 盟邦の放送関
係留学生帰国
- 3.24 河口慧海師 追想録 (六) 浅田一
- 3.25 神忠運動に 二万円納献 樺太から参
宮
- 3.25 全鮮の皇民化 運動成果挙ぐ 浜口大
声氏談
- 3.25 曹洞満洲布監部 禪道報国綱領
- 3.30 河口慧海師 追想録 (六) 浅田一

「中外日報」紙のアジア関係記事目録

1945. 3. 31 河口慧海師 追想録(六) 浅田一
 3. 31 海を渡る太子像 炭坑撫順で開眼式
 3. 31 罹災檀信徒を率ひ 満蒙開拓の実践
 法華宗が救済策に大童
 4. 1 安南人を描く 立花俊道
 4. 3 安南人を描く 立花俊道
 4. 10 安南人を描く 立花俊道
 4. 10 新機構で運営 満洲天理村躍進
 4. 11 安南人を描く 立花俊道
 4. 13 安南人を描く 立花俊道
 4. 14 愈よ国策病院に 中支蚌埠の大和医院
 躍進 新生中国の心の友
 4. 15 蒙古仏教の復興(上) 春日禮智
 4. 15 半島労働者の教化 日蓮宗と天理教へ
 軍需省から委嘱
 4. 17 蒙古仏教の復興(中) 春日禮智
 4. 18 蒙古仏教の復興(下) 春日禮智
 4. 18 大派本明満洲 開教監督辞表
 4. 18 十九年度の 入植を完了 満洲天理村
 4. 20 半島婦人教化の陶化厚生塾 新に義勇
 隊組織へ
 4. 25 人種平等、不侵略 世界新秩序の指導
 原則闡明 東京で大東亜大使会議
 4. 25 戦災のどん底に貫く 日華親善の悲願
 大派官原氏
 4. 28 開教区から罹 災寺院住職へ
 5. 1 大東亜民族大会 あす九段軍人会館で
 5. 18 国際仏教協会主催 第五回南方仏陀祭
 5. 19 教団と満洲 移民事業
 5. 19 満洲に念仏村 西本願寺が戦災対処
 5. 25 大東亜共栄圏へ 日本仏教の宣言
 5. 25 断じて皇土護らん 光暢法主烈々の垂
 示
 戦災寺院布教使を 満洲開拓に
 5. 30 北京より 安溪美美子
 6. 2 北京より厚和へ 安溪美美子
 6. 5 北支文化事業に 感激の献金
 6. 5 東方文化講座
 6. 9 大東亜護国神社 の建設 中川與之助
 6. 26 戦災者も交り 満洲天理村へ
 6. 29 日泰親善の象徴 仏舍利恭迎慶讃法要
 7. 3 日泰の血盟固く 仏舍利慶讃の集ひ
 7. 4 高楠順次郎博士を偲ぶ 鷹谷俊之
 7. 6 高楠順次郎博士を偲ぶ(上) 武邑尚
 邦
 7. 7 高楠順次郎博士を偲ぶ(下) 武邑尚
 邦
 7. 10 常磐博士 を偲ぶ(上) 菅原惠慶
 7. 11 常磐博士 を偲ぶ(中) 菅原惠慶
 7. 13 常磐博士 を偲ぶ(下) 菅原惠慶
 7. 24 高楠博士盛葬
 7. 24 大東亜宣言発表 八月一日宗報仏教局
 で 圈内大使等招き
 7. 27 半島人信者の愛国心 斯く教団を動か
 す “仏立決死祈願隊”
 7. 28 中華留学生が茶華道精進
 8. 1 宗報で 海外宗教情報の 戦時委員会
 設置
 8. 1 事業着々進歩の 日泰文化会館
 8. 4 山西天理日語 表彰さる
 8. 10 北支済南 神社近況
 8. 11 大規模に活動を展開する 海外宗教情
 報委員会
 8. 11 大東亜宣言発表式 仏教各種団体の総
 意を以て
 8. 17 聖断下る、承諾必謹 大御心に帰一、
 内閣告諭発す